昭和十一年一月一日印刷
昭和十一年一月五日發行

（普及版古事類苑　全六十册）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一〇五四番　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）

編修顧問　從三位文學博士　本居豐穎

編修顧問　從五位文學博士　木村正辭

編修顧問兼校勘　從五位文學博士　井上賴圀

編修總裁　從二位文學博士男爵　細川潤次郎
編修長　正七位文學博士　佐藤誠實
編修副長兼校訂長　從六位文學博士　松本愛重
編修　正七位　廣池千九郎
編修兼校訂　加藤才次郎
編修兼校訂　山本信哉
編修兼校訂　村尾節三
編修　從六位　佐伯有義
編修兼校訂　三浦千畝
校訂　竹島寛
校合員　齋藤松太郎
校合員　平川清水

トシケル程ニ、瀧ノミナギルヨリ猶劣シク、只一度ニ、タヽヘ水、巨木ヲ流シ出シケリ、〇中略

黒田長政ハ、關ケ原ノ賞トシテ大國ヲ賜ハリシカバ、其神恩ニ報ゼントテ、日光山ヘ石ノ大華表ヲ建立スベシトテ、筑前ヨリ大石數多運送スル、此事今マデ例ナキ事故、石工等モウケガハズ、マシテ町人ノ請合ト云事モナキ時節ユヘ、家臣等モイカヾアラント衆議決セズ、長政聞テ、オロカ成ル事ヲ申物哉、江戸ヨリハ石一本ヲ船一艘ニ乘セ、左右ニ大綱ヲ付、虚船コギナラベ、陸地ニハ修羅ヲ以テ牛數多カケテ勞レザル様ニヒカスベシ、日光路ハ黒土故、修羅メイリテ通ルマジクレバ、其料ニハ厚板ヲ用意シテ、二町計リモ敷セテ、段々ニクリ越シナバ、サノミ難儀モ有ベカラズ、其板共ハ鳥居立ル時ノ足代ニ用ユベシト也、〇中略長政ノ工夫ノトフリ、少シモ違ヒナク、古川迄川船ニテ送リ、夫ヨリ修羅ヲ用ヒ、橋々ハ別ニカケ渡シ、日光ニテハ千人ノ人夫ニテ引上シト也、

雜載

一同國都賀郡越名河岸より三分也、
一同國板戸河岸より五分九厘也
一同國安久津河岸より六分也
右は延石壹石ニ付御運賃被下候、但米大豆は同様、荏は壹石五斗ニ付、米壹石之御運賃被下之也、
然共近年御運賃御減少有之當時之儀は不存事故略之、

五里之外駄賃之事

一御城米積所迄、付出道法五里迄は、百姓役ニ而馬附ニ致候御定法也、五里之外は、其里數に隨ひ、
御米壹駄、一里錢貳拾四文ツヽ被下候なり、

〔明良洪範二〕寛文頃、車力重右衛門ト云世ニ聞ヘシ者、先御代ヨリ器量勝レシユヘ、其コロ川村瑞軒ト號シケルガ、(中略)箱根ノ奥ニ、ケヤ木多ク見ユルニ付テ此大木共切取良材トナシナバ、守護ノ德有ノミニアラズ、所ノウルホヒ成ベシト申ケル、家士等是ヲ聞テ、アザ笑ヒテ、車力ガ何ヲ申トモ、箱根ハ深山ニシテ、出スベキ道ナシ、運送自由ナラズ、是ヲ以テ先代ヨリ捨置モノ也ト申セシ所ニ、川村聞テ少シモ苦シカラズ、切テ出ス事ハ某ニマカサレヨ、御損ハナキ事トテ、マヅ運上以下ヲ奉ルベシトテ、其秋ヨリ段々杣ヲ入テ伐セケルニ、皆々不審シ、イカヾシテ山出シスルゾト見ル所ニ十月半ヨリ又人足ヲ入テ、峯ニ降ツモリテ雪共ヲ其邊ノ深キ谷ヘ、毎日カヽセテ落シ入ケル程ニ、谷モ尾モミナ白妙ニ成テ、谷ハ雪水氷ノヒヾキモ果ケル、臘月ニ及ビ玄冬素雪ノ究年、多クノ人夫ヲ出シ、彼切集メタル大木共ヲバ、谷底ヘコロバシ入ルニ、雪氷タルナダレヘオロス故ニ、力ヲモ入ズシテ悉ク落シ入テ後、深谷ノソコハ氷ル上ニ大木カサナリ、其上ニ又峯ノ雪ヲ有ダケカキ落シタレバ、谷モ峯モヒトシク成タル時ニ、谷口ニ提ヲキヅキテ、水ヲモラサズタヽヘタリ、扨來春ニ成、温暖ノ時ニ至リテ、ユキ氷トモニ解流ルヽ最中ニ成、急ニ此堤ヲ切テオ

は猶更、獻上之外は御定賃錢ニ而可繼立筋に無之、既に甲州之内、田安殿御領地産物之荷迄獻上、幷御扣之外は、相對賃錢ニ而繼立相成候積り、去々酉年御評議濟も有之、殊紀伊殿國元ゟ繼立に無之、全其所ニ而買上品と相聞候間、御同人用物ニ候とも、藤次郎分一同、相對賃錢之積拂戻相成可然、依之御城附江之御挨拶付札振、幷次郎伺書江御下知振とも取調相伺申候、

亥十月〇嘉永四年

御城附書面江御付札振

書面之趣、都而國産幷食用之品は、獻上物之外、御定賃錢を以可繼立筋に無之候間、紀伊殿用物に候とも、藤次郎分とも一同、相對賃錢之積、內藤新宿江掛合之上、拂戻方被取計候樣有之候、尤其段同宿支配御代官勝田次郎ゟ宿方江申渡置候、

亥十月

〔地方落穗集八〕所々川岸より淺草御藏前迄御運賃之事

一武州足立郡平方川岸より淺草御藏前迄、御運賃貳分也、
一同國埼玉郡權現堂河岸より貳分四厘
一同國多摩郡高麗比企郡新河岸より貳分八厘
一上州邑樂郡早川田河岸より三分貳厘
一同國同郡古川河岸より三分貳厘
一同國同郡川俣河岸より貳分九厘
一同國山田郡猿田川岸より四分也
一野州足利郡猿田河岸より四分也
一同國安蘇郡奥戸河岸より三分九厘也、

一右同所銚子入、內川江戶廻、

冬ノ分　金拾七兩三分、永九拾貳文五分、

春ノ分　金拾七兩、永八拾八文五分、

右之直段を以船可差出候、但船は六寸足之積候、前々江戶雇方ニ差加へ候者ハ、自分廻船之外、脇問屋船々雇候分も、肩金問料取候得共、此度雇方ニ差加へ候伊兵衞藤五郎兩人は、自分廻船之儀は格別、脇問屋船によりて、肩金問料一切不取筈ニ候、右之通ニ候得ば、船手失却も無之候間、廻船無滯可差出候、若廻船於滯者、吟味之上、急度可申付候條、其旨可相心得者也、

八月

右之通、町中不殘可相觸候、右船雇方之儀は、奧州東大窪村善左衞門、江戶東湊町小泉伊兵衞、深川蛤町五味藤五郎三人、案內次第船差出可申候、以上、

〔寶曆集成絲綸錄二十二〕寶曆九卯年十二月

御勘定奉行江

宗對馬守領分、對州府中家屋敷數多燒失付、米壹万石被下候、於大坂御藏相渡候、右運賃金五百兩、大坂御金藏より相渡筈に候條、被得其意、彼地町奉行可被談候、尤對馬守江も、何茂江可承合旨申渡候間、可被談候、

〔道中秘書五〕獻上之外、國產幷食用之品、相對賃錢之事、

書面紀伊殿用物之由を以、同家家來寺田藤次郎、蒲萄荷物五駄、甲州道中勝沼宿ゟ差立、同道中內藤新宿迄繼來候處、同宿役人共、右荷物紛敷見受、藤次郎家來掛合之上、支配御代官勝田次郎江申立、同人江相伺候ニ付、右御城附江御掛合相成候處、全賃錢拂方不都合迄之義ニ而、御吟味物ニ可相成程之品ニ無之趣を以、松井助左衞門ゟ當掛江書類引渡候間取調候處、都而國產幷食用之品

入多、前貸三分一許ニ而ハ仕出難成、近年別而銀子調兼、及難儀候ニ付、出船之節、差支成候分、差配人相調遣候得共、船々不殘調遣候儀ハいたしがたく、出船之支ニも成、及難儀候儀無紛相聞候間、願之通運高之内半分宛、前貸と著船之上と、兩度ニ相渡可然旨被申聞候、此方にても遂吟味候處、前方ハ運賃高之内半分宛、前貸と著船之上と、兩度ニ相渡候處、願ニ而三ヶ所渡りに相成候、其外差障り候儀無之候間、舟問屋とも、幷宮屋久兵衛願之通、向後運賃高之内、半分爲前貸其地ニ而相渡、殘半分之内三分一積所ニ而渡、殘三分二之分、著船之上相渡候樣可被申付候、尤右渡方之趣、北國出羽御代官預り所役人江も申渡候、

一右運賃半分相渡候而も、空船之節ハ、只今迄之通三分一御損失之積り候間、此度願ニ而、於其地増渡り之分ハ、返納之積り可被心得候、其外破船之節之儀、有來定法之通可被心得候、

一右運賃渡方之儀、先達而請負人差出置候、請負證文と事違候間、此度申付候渡方之趣、請負人幷舟問屋ども江急度證文被申付、此方江可被差越候、尤其方ニ而も可被取置候、以上、

丑十二月

〔享保集成絲綸錄 四十二〕元文五申年八月

一奥州福島領、羽州米澤領御年貢米、東海廻り廻船差配人、奥州東大窪村善左衛門ニ、江戸廻船問屋小泉伊兵衛、五味藤五郎と申者、當申年より船雇方之爲差加江、船々案内雇之積申付候、右之者共案内次第、新造より七年迄、丈夫成船可差出候、

一奥州荒濱積、外海江戸廻、

米百石ニ付

冬雇 金拾五兩貳分、永百四拾八文七分七厘、

春雇 金拾五兩、永五拾七文貳分五厘、

伊豆國
一三津　宇久須
　松崎　子浦　浦
　　江戸江海上五拾八里より七拾三里迄
三津　運賃米百石ニ付四石五斗
宇久津　運賃米百石ニ付四石三斗
松崎　運賃米百石ニ付四石貳斗
子浦　運賃米百石ニ付四石壹斗　〇中略

上總國
一木佐良津河岸　江戸江海上九里　運賃米百石ニ付壹石壹斗　〇中略

右之通、海上川通運賃米積、書面之通相極候、
　午四月

享保十八丑年
　北國筋廻米運賃前貸之儀ニ付書付

廻船運賃渡方之儀、越後、越前、能登、出羽、前々ハ運賃金高之内、三分一前貸、大阪ニ而舟改相濟候上、舟割御代官相渡、三分一ハ積所ニ而渡、殘而三分一ハ江戸大阪著船之上相渡候處、享保十八丑年十二月、廻船問屋幷請負人相願候ニ付、御勘定奉行吟味役評議之上、左之通大阪舟改御代官江申渡候、

一越後、越前、能登、出羽國、大阪廻船運賃銀渡方之儀、只今まではハ前貸三分一、其表におゐて相渡、中貸三分一、積所におゐて相渡、後貸三分一、著船之上相渡來候、然處此度其表諸國舟問屋とも願出候ハ、大阪に而出船之節ハ、舟道具加子賃銀米代等之諸入用多候處、近年銀子調兼及難儀候ニ付、今年より運賃銀之内、前貸三分一と、積所渡三分一之半分、其表おゐて爲前貸請取、積所ニ而ハ三分一之半分請取、殘三分一、著船之節請取度由願出候付、被遂吟味候處、其表出船之節、物

〔京都御役所向大概覺書三〕大坂より伏見過書船之事〇中略

條々〇中略

一奉公人之舟には運賃不可取之、但商賣物於積は堅可相改、材木於積來者奉公人屋敷之内江直ニ可上之、材木屋江遣間敷事、

一貳拾石船之運賃銀子五貫目宛可取之、船大小雖有之、運賃者右之貳拾石船に應じ可取之事、

一鹽肴之運賃、右同前之事、

一くだり船之上米者、貳わり取て下可申事、〇中略

右條々被定置訖、若此外船持對商人非分於申掛者、可被加御成敗者也、

慶長八年十月二日　河村與三右衛門

木村宗右衛門

御朱印　過書中

〔京都御役所向大概覺書二〕京都牛數車數并拜借之事〇中略

一二條御城詰米之儀者、前々者大津馬借相勤、米壹石ニ付、駄賃米四升五合宛被下相勤來候處、宮崎若狭守、雨宮對馬守在役之砌、始而被仰付、車壹輛ニ付米三石五斗積、駄賃米九升三合宛被下、于今相勤申候、〇中略

一車力之定、大津ゟ京迄、米三石五斗積、九升三合宛、但買人之俵物者、京著所々遠近により、車力相對ニ而取申候、〇中略

〔德川禁令考五十三廻漕令條〕元祿三午年四月

關八州伊豆駿河國廻米津出湊浦々河岸之道法幷運賃書付

一駿河國鹽久津浦　江戸江海上七拾五里　運賃米百石ニ付四石七斗、

運賃

所付
何之誰手代
何之誰殿

〔運歩色葉集 字〕運賃（ウンチン）

〔東大寺造立供養記〕建久七年、中門石獅々、堂内石脇士、同四天像、宋人字六郎等四人造之、若日本國石難造、遣價直於大唐所買來也、運賃雜用等、凡三千餘石也、

〔東寺百合古文書 十四〕廿一口評定引付（應永卅一甲辰）

五月十三日（運署除之）

一今度田所上洛間事

田所今日始上洛、其子細者、去年ハ、大野庄年貢、於地下市沽却之時、馬一駄ニ六拾文宛夫賃立散用狀ニ立申畢、次去年冬田所上洛之時、矢野和市之事、石別一貫三百五十文分申定、及請文下向畢、然今度散用狀、被披見之處、上使下向已前九百五十文、和市立申畢、此等之條々以外相違候間、田所被召上、被加問答畢、種々歎申畢、雖然不可叶之由衆議畢、

〔東寺百合古文書 三十二〕東寺領遠江國原田庄細谷郷領家代管職事、所被宛行也、毎年京進拾玖貫文、（但此内十貫文者、六月中、九貫文者、十一月中、除運賃雜用庄立用等、）无懈怠可有其沙汰之由所候也、仍執達如件、

永享七年七月四日　公文法眼判

寶勝院

年預法印權大僧都判

歡喜寺

慶朗藏主禪師

年預重賢　公文越後法眼賢増

此運賃金何十何兩永何十何文
内 何兩永何拾何文三分一何湊渡シ 何拾兩三分二江戸渡シ

外

一米何俵 但シ何斗入 上乗船頭水主粮米

一船 何年造 船頭水主五人乘

一檣杉 桁檜 楫白樫 帆十七反木綿

一鐵碇七頭之内 七十貫目六十五貫目六十貫目五十五貫目、五十貫目四十五貫目四十貫目

一綱二十二房の内 苧弐房市皮弐房檜四房藁四房

一端舟一艘、此外走り道具附、

一船足四寸、但シ極印限、

一寛文十三年被仰出候御條目寫　一通

一船中日記帳　一通

一浦觸狀　一通

右は何國何郡、去る何の御年貢米の内、江戸御城米何國於何湊、何國何郡何村何右衞門船に積立、船足相改、出船申付候、書面の通り無相違候はゞ御受取、殘運賃御渡可被成候、爲其送狀仍如件、

何國何湊舟積出役

何之誰手代

何之誰印

年號月日

類船頭何國何村

誰　印

藍摺淮布卅反　代六十文
紺布二反 無文　代四十文
牽駄二疋　代四十二文
持者七人　代五十二文二丈
例進長鮑千百五拾帖
移花十五枚
染革二十枚
右付二夫領助弘一運上如レ件
　建久三年十二月廿日　半御料

〔東寺百合古文書 百六十七〕運上
　弓削島御年貢大俵鹽幷雜物等送文事
　合
御年貢大俵鹽貳佰貳拾俵〇中略
右附二梶取左近次郎宗秀一運上如レ件
　延慶二年十月十五日　預所法橋　榮實花押

〔地方落穗集 八〕御城米送り狀認方の事
　積送申江戸御廻米送狀之事
△印何年御年貢米
一米合何千何百俵 但シ何斗入
　此石何百何十何石
何國何郡何村
直乗船頭　何右衛門
何國何郡同村
上乗　何兵衛

乍恐以書付奉申上候

一御當所〇函館之儀、秋味幷〆粕類、江戸表、其外上方邊運賃送之節、積高を以、送狀相添、無事著之上、約定之通り用捨等水主共へ相渡候上は、途中海難等有之候とも、船中へ可遣用捨も無御座候へども、猶場所表積入、船中用捨等、積石之內、約定候丈ケ渡濟之荷物ハ、海難有之候とも、右用捨引戻シ候義も無御座候間、其分ハ全く荷主損ニ罷成候より外、致方無之振合ニ御座候間、乍恐此段書付を以、奉申上候、以上、

子 二月九日　　御產物會所付　問屋

和賀屋　宇右衛門

濱田屋　兵右衛門

佐藤半兵衛

〔庭訓往來〕租穀租米送狀

〔吾妻鏡十二〕建久三年十二月廿日戊午、澁谷黨者、偏備勇敢、尤相叶御意之間、爲慰公事勤役、以彼等領所相模國吉田庄地頭、被申請領家圓滿院、爲請所、御倉納物、所被賦其乃貢也、

前右大將家政所

運上　相模國吉田御庄御年貢送文事

合准布陸佰七拾肆段貳丈內 加二六十一反先分料一

見布貳佰陸拾柒段

染衣五切　　代百文 各廿文

上品八丈絹六疋　　代百廿文 各廿文

納布九反內 上二反 中七反　　代

〔御觸書集覽一〕天保十三寅年六月廿四日

御當地商人ども、上方表より積取候注文荷物、於海上難破船之節、是迄注文主之損失に相成候由之處、向後御當地大坂兩損之積相極、送り荷之儀は、積送り之案内有之候分は、是又御當地引合候商人共兩損相心得、全送り先目當無之積來、船頭相對にて、夫々賣捌候品は、其荷主損失之積、且難船之節、今切を境、兩地にて改候儀は、是迄之通被居置候間得其意、仕入注文等無油斷申遣、御當地諸品潤澤いたし候樣、厚心懸可申候、若注文等等閑にいたし、品拂底之趣を以、直段引上賣買いたすにおゐては、吟味之上、嚴重之咎可申付候、

右之通、町中不洩樣、早々可相觸候、

寅六月

右之通、從町御奉行所被仰渡候間、町中家持借家裏々迄、不洩樣入念早々可相觸候、

寅六月廿四日　町年寄役所

〔幕令拔抄八〕大坂より江戸積荷、於海上難破船之節は、以來江戸大坂兩損之積相極、送り荷物之義は、積送之義案内致置候分は、是亦江戸表引合候商人とも、兩損に相心得、全送り先目當無之積來船頭相對にて、夫々賣捌候品は、其荷主之損失に取極、難船之節、遠州今切を堺、兩地にて改候義は是迄之通据置候樣、江戸表より被仰下候間、積廻方致出精、御府内諸色及潤澤候樣、厚心掛可申候、若積廻方等閑致、直段引上げ候樣之義於有之は、吟味之上、急度可及沙汰候、江戸積致候者は、何れにても右同樣可相心得候、

右之通、三鄉町中可觸知者也、

天保十三寅年七月六日

〔問屋諸用留〕文久甲子年〇元治元年

者、岩巖石有之、登船ニ者、何ニ而も積候義難成、川水多少有之候而も、船上下難成候由、嵯峨より至川上登り船ニ定之運賃者無之、

一丹波之内ニ而烏羽宇津根舟者、壹艘ニ付、貳拾石餘、保津迄積下り申候、此外所々ニ任之候舟者、拾二三石目迄積下り申候、但渇水之節積高減申候、

一嵯峨より下鳥羽迄四里、下り船壹艘ニ付、米貳斗四升、〇中略

但壹艘ニ 下り舟拾壹貳石積 登り舟七八石積 干水之節者川上川下共積高減申候、

〔御作事方定法〕船積

一修經舟壹艘ニ付 小角貳拾五本ヅヽ、大角拾五本ヅヽ、

一六尋船壹艘ニ付 土瓦大小五百枚ヅヽ、

但舟賃增雇候得ば、大小貳千枚迄は積候由、

一前同斷 尺角廻三本より貳本半迄ヅヽ、飛驒榑木貳百五拾挺ヅヽ、懸塚榑木千挺ヅヽ、屋根板貳百箇ヅヽ、小買物類、織物五百貫目ヅヽ、諸色貫目物貳百貫目より三百貫目迄、

〔幕令抜抄二〕薩州ゟ當表へ差登候荷物之分、定も有之、彼地役人改印形之送り狀を以當表へ差登、定問屋へ着候上、尙又改受候處、近年當表之者共薩州へ罷越、彼地之町人申談候處、不知唐物買取、外荷物之體ニ拵、津口改所等僞、當表へ積登賣捌候ニ付、不正之唐物賣買有之、不屆之至り候、依之此度吟味之上、夫々御仕置申付候間、以來用向有之、薩州隅州等へ罷越候者有之バ、居町年寄へ相屆、〇中略立歸り候節も又相屆、萬一於彼國無據譯有之、賣掛等之代り、唐物類受取候儀有之バ、罷歸候上、其段總年寄共へ可相斷候、〇中略

右之通、大坂三郷町中末々迄、不洩樣可觸知者也、

安永八年亥九月

支無之樣可被取計候、
右之趣被仰渡承知奉畏候、以上、

戌正月廿二日　池田仙九郎〇出羽代官手代

高橋文左衛門印

支配人 角倉與一

〔京都御役所向大概覺書三〕賀茂川高瀨船但京より伏見迄之事

一高瀨船數百八拾八艘　有船

但船長七間 胴幅六尺六寸五分 但船番附有之

登り舟壹艘ニ荷物拾五石積 但川水少キ節者、積足減申候、

船賃壹艘ニ付

伏見より京二條迄拾四匁八分

伏見より同七條迄拾三匁八分

但舟賃之儀、諸色直段應高下、舟賃も高下有之、

下り船壹艘ニ荷物七石五斗積 但川水少キ節者、積足減申候、

船賃壹艘ニ付 京二條より伏見迄 銀七匁

右同斷、但道法貳里半餘、

嵯峨川高瀨船之事 〇中略

丹波世木より嵯峨迄、川筋道程八里八町之内、高瀨船下り運賃覺、

一丹波國世木ヨリ嵯峨迄　道法八里餘、此運賃壹石ニ付米八升宛、〇中略

但石積り之運賃所ニより壹艘ニ拾石餘、貳拾石迄下り船積申候、保津より嵯峨迄三里之間

但破船無之濡米之分、正米ニ引替相納候上ハ、運賃不殘可相渡事、

右之通相極候間、村々江も可被相觸候事、

丑六月

〔牧民金鑑 七〕天明八申年八月

北國筋御廻米之儀、最寄湊々之廻船を所雇にいたし候得ば、八十八夜過には、直に北國湊出帆も相成、大坂表より空船差向候と違ひ、格別辨利違可有之候處、北國筋地船之分は、五百石積位之船に而、御廻米可積受廻船ニ無之、其上御料作德米、幷私領米其外產物、大坂江積送り候交易を、次第ニ相稼候間、右廻船之分、御廻船方江引上ゲ候得ば、北國筋商方薄く相成、地直段にも相響き可申哉ニ被申上候衆も有之候得共、廻船差配人より差向候空船難船破船等ニ而替積、湊江延着いたし候時は、御廻米積後れに相成候間、地船相雇、大坂迄も相廻し候外は有之間敷、右樣之節、如何被取計候積りに有之候哉、心得無之候而は差支に相成候間、當撿見として被罷越候はゞ、其筋相糺得と勘辨いたし委細可被申聞候、

寛政二戌年正月

御年貢御廻米船中欠受負廻之儀、郡中糺之上、以來相止、定例廻之積り可被取計旨、去酉年中申渡候趣を以、郡中被相糺候處、欠請負相止候而は、郡中難儀之由を以、是迄之通居置候樣被致度段追追被申立候、然處先達而申渡候通、御廻米船一統御直雇ニ相成、諸國運賃直段とも相減候故、請負ニ有之候而は、右欠請負之場所は、國々湊々、幷支配所限りニ而、此上運賃直段増方無之候而は、舟雇立難相調申、廻船御用達之者共、相對を以取極候仕法ニ付、今般右欠請負ニ付、增運賃從公儀可被下置筋ニ無之間、船中欠請負廻之儀は不及沙汰、定例廻之積り可被相心得候、併年來仕來候欠請負廻之儀ニ付、右之趣得と村方江被申聞候上、欠請負廻相屆候筋ニ候はゞ、右之趣被相心得、差

九月

享保十四酉年八月

江戸表諸問屋江上方ゟ商賣諸荷物、廻船ニ而積下シ候節、難風ニ逢、荷物刎捨、其向寄浦方江乘込候時、其浦之役人立合、荷物改方之儀、唯今迄は改樣色々有之候處、今度諸問屋共願ニよつて、自今は其浦之役人立合、船中殘り荷物引ならし不申、其儘ニ而捨、小口江繩張致封印、問屋又は荷主參候內、番人附置可申候、右改方之儀、先達而浦々相尋候處、右之通ニ相成、障候儀無之旨ニ候間、自今書面之通、浦方一統之改ニ可被申付候、以上、

八月

右書付、從品川遠州今切迄、浦々有之面々江觸之、

〔德川禁令考運漕令五十三條〕享保十八丑年

關東筋御年貢米積候川舟破船濡米等有之節定書

一關東筋御年貢米積候川舟之儀、海上と違、破船ハ無之事候得共、萬一破船濡米ニ成候時ハ、吟味之上、譯立候破船ハ、其所ニ而拂立候直段を以、金納可申付候、若譯難立破船ニ候はゞ、爲致買納ニ、金納願候ハゞ、濡御張紙直段を以可爲相納事、

但破船之船中ニ而濡米ニ成候分、百姓正米引替可相納候、

一川舟之儀ハ、海上と違、如何程之大風ニ而も、早速河岸江船懸り候儀自由ニ候得バ、打米可致樣無之候、左候得バ捨米ハ無之筈ニ候得共、萬一上乘り船頭不心懸ニ而捨米候ハゞ、百姓可爲辨納事、

一破船運賃之儀、譯不立破船ニ而、捨リ米ハ勿論、濡米之分共、運賃不殘相渡間敷候、譯立候破船濡米其所ニ而拂立直段を以致金納候分之運賃ハ、半分之前貸ハ可相渡事

何れにも手廻しよく、早速通達有之趣に兼て申合す也、一概に心得へからす、時宜によるへし、

廻船請負人敷金之事

一往古は落札の國米高を積立、其御運賃金三分一敷金、御取立有之候事、

一中古は御米一萬石に付、百兩宛御取立之事、

當時は米一萬石に付、六十兩宛、尤家賃も御取被成候事、

〔大成令八十〕享保五子年九月

一北國出羽奥州、當子御城米東海江戸廻之儀、筑前屋作右衛門支配申付候間、書面之直段を以、作右衛門案内次第、廻船無滯可差出候、尤新造ゟ七年造迄、丈夫成舟可差出候、

越後越前能登出羽御米百石ニ付　金拾九兩

是は來丑正月ゟ三月十五日迄舟改之分

同斷　金拾八兩

是は來丑三月十六日ゟ四月中旬迄船改之分

奥州羽州米澤領米荒濱積御米百石ニ付　金貳拾兩

是は當十月ゟ來丑三月廿日迄船改之分

同斷　金拾壹兩貳分

是は來丑三月廿一日ゟ四月迄船改之分

奥州常州米小名濱九面一作平潟湊積御米　金九兩貳分

是は當十月ゟ來丑三月迄船改之分

右之直段を以船可差出候、船足之儀者、六寸、八寸、可爲勝手次第、若廻船於滯者、吟味之上、急度可申付候條、此旨可相心得者也、

何之誰樣御役所

御廻米出船注進書認方之事

覺

一米何千石

何國何村

直乘船頭誰

右は何國何郡、去何之御年貢江戸御城米、於何國何湊に積立、今幾日何之刻、日和能當湊出船申付候間、爲注進如此御座候、以上、

何

何月幾日

何國何湊船積出役

何之誰印

何之誰殿

右之通相認、早速飛脚を以て江戸留守居手代の方へ遣し、江戸にて右注進之趣を受、早速勘定所へ出帆注進致候也、尤積所河岸より御代官陣屋江も注進する也、

右は陣屋詰御代官之形也、在府なれば其意得を以、認方には、少々違べし、

右御廻米之儀、初發御廻米積船請負人之方へ船催促致し、請負人方より何國何村直乘誰船とか、又は誰船沖船頭誰、何百石積、何年造、船具、何之船頭水主何人乘と申儀、書付差出候上、右差船江戸より積湊へ遣す船ならば、江戸にて船撿見、其外吟味等、手代元船へ差越相改、極印を打遣、極印は五六寸四方之板へ燒印を居へ持參、船緣より定法の寸を六寸なり曲尺ざしにてさし、右板之燒印を上端と、寸の留りと、摺拂に釘にて四方打付る也、又陣屋最寄より出候船ならば、陣屋手代、右改に出る事もあり、右差船江戸川口幾日出船と申儀を定め、早速陣屋へ申遣、陣屋より積所へも通達するなり、江戸改めなれば、其旨陣屋へ申遣す上、陣屋よりも積所へ申遣す也、積所之場所により、

一此度江戸御廻米、何國何湊ニ而積渡候ニ付、寛文十三丑年被仰出候御條目寫相渡候間、艫之間ニ張置、船頭、水主、炊、上乘之者、堅相守可申事、

一御城米送狀船積、手代より相渡候書面之通無相違樣、江戸著次第早速納手代方江可屆之候、著岸水揚之節、俵物相違、又は俵印無之御米、其外甘俵鼠喰等有之ば、船頭辨米可申付事、

附、無謂格別甘俵有之内拵之節飛差有之ば、不足之分辨米可申付事、

一潮掛り日和待之節、浦々ニ而送狀見之、入津出帆滯留之子細、手代より渡置候日記帳案文之通、浦々庄屋共爲認、印形取之、江戸江至り、右日記帳送狀相添、納手代方へ可差出候、勿論日和能候はヾ、片時成共湊逗留爲仕間敷事、

一著船之浦々ニ而、諸荷物一切積申間敷候、調候はで不叶品有之ば、上乘之者江申達、差圖を請、水主炊之内壹人陸江上り、調爲仕舟乘可申事、

一船頭、水主、炊、前々不屆之儀有之候而も、大勢之儀故難防、上乘之者、其分ニ致置候樣相聞候、以後不埒之儀有之ば不及用捨、江戸著之節、有體ニ可申聞事、

右之條々、急度可相守もの也、

年號月日

御代官　何誰ノ印

右之通被仰渡承知仕奉畏候、若相背候はヾ、何分之越度にも可被仰付候、爲其連印差上申所仍如件、

年號月日

何國何郡何浦何船

沖船頭　誰印

水主頭　誰印

炊　誰印

丑二月　御勘定奉行

〔地方落穂集 八〕御廻米積船御定書之事

定

一於船中ニ御城米無作法仕間敷候、万一納米を澤手欠米等准之、少シニ而も隠取候はゞ、後日聞候と云共、御穿鑿之上、船頭水主之儀は不及申、品により諸親類共ニ可被行罪科事、

附、船中之火之用心堅相守、諸勝負一切仕間敷事、

一御城米船積之節、楫、櫓、綱、碇、粮米、薪、諸道具ニ至迄、海中ニ而可入分不殘積之、若日和無之永逗留致し、粮米不足之時は、於何れの浦も相調、其趣所之者より證文可取也、自然粮米に准じ賣買於積者、急度曲事可申付事、

一遭難風、打米不仕して不叶時は、粮米不殘捨之、其上御城米捨之可申候、自分之穀類殘置ニおゐては可召上事、〇中略

一澤手米有之候はゞ可干立、附り海中ニ而、船道具類不足に於は、着船之湊ニ而可相調事、

一於江戸御城米不相渡以前、粮米餘分、無斷して陸江上ゲ申間敷事

右之條々相守可申事、若相背者於有之は、則訴人に出べし、縦同類たり共其科をゆるし、御褒美可被下候、且又仇を不成様ニ可被仰付候、自然隠置、脇より相聞候はゞ、船頭は勿論、水主炊ニ至迄、悉く可被行罪科者也、

寛文十三丑年〇延寶元年二月日　奉行

右御條目之趣、堅可相守之候、以上、

年號月日　御代官　何之誰

御廻米船積船頭水主炊等江申渡趣并請書之事

兵衞、佐野平兵衞被仰付候間、（當時ハ、其向々御代官ニ而取捌申候、）兼而被仰付候趣堅相守之、不作法無之樣入念可申付候、自然風波之節、浦邊之者早速出合、御城米船不破損樣、御米不濡勿論、紛失無之樣情を入べし、浦役有之湊たりといふ共、御城米船之儀候間不可取之、總而何方より相廻り候御城米なりといふ共、難風又は船破損之節は、情を入候樣可申付候事、

一御城米船之儀に付、不依何事用所出來候歟、又は船破損有之節は、兼而浦邊江被仰付候五ケ條寫之差遣候間、其趣を以萬端可申付候事、

一御城米船、若遭難風、海中ニ御米捨候はゞ、隨分取揚之、於其所入札を以御爲宜樣に相拂、代金之儀は、江戸江相屆、御勘定所より差圖を請、何方江成共可相渡之候、船中にて濡候御城米之分は、縱大濡たりといふ共爲干之、不濡俵江しめり不移樣仕、江戸江可積屆之旨、船頭に可申付候、勿論船破損、或は捨米、或は濡米有之におゐては、見分之趣、委細浦手形ニ書載之、船頭に可相渡之、上乘船頭水主等まで銘々遂穿鑿、口書爲致、浦手形繼添、表に致押切印判、如前々可差越、右口書之內、風雨之樣子、其外申口あやしき儀、又は相違之事有之ば、其子細浦手形に可書載之、浦手形を以證據に立來候間、不念之儀候歟、自然上乘、船頭、水主頭に被賴、其所之者、僞申儀有之候はゞ、後日相聞候共、急度穿鑿可有之候間、能々念を入、有體に可沙汰之、又破損船修復可成體候哉、不及繕候哉、其段をも浦手形ニ具ニ可書載事、

一御城米船、於諸浦米に而賣買物、從跡々如御觸可爲停止、若猥之儀於有之は、早速御勘定所迄可致注進事、

一御城米船出船より江戸著迄、自今以後は、白地之四半に大成朱丸有之舟印立置候樣申觸候間、若舟印違候歟、又は印不立御城米船有之候はゞ、誰御代官所之御城米船頭誰と承屆、穿鑿之節、有體ニ可申上事、

御城米廻船之儀ニ付御書付

一御城米相廻候時送狀、御城米員數之儀ハ不及申、糠米并船頭水主何人乘、何之年造之船、有增之船道具俵口合紋等可書付、御城米之外、少々之物成共、積合之荷物停止可被申付事、

一日和待、汐かゝりの浦々にて、送狀披見之上、滯留之子細、帳に記置候樣にと、浦々江觸候間、其旨可被申渡之、總而俵物に而賣買物、仕間敷候旨、堅可申付事、

一上乘に差越候輩は、詮議之上、慥成者可乘之、船足輕く仕度存、少々風をも、大成難風之樣に水主等迄上乘に申掠、俵物刎候事可有之、少成共疑敷儀有之而、俵物刎捨候はゝ、穿鑿之上、上乘船頭水主共迄、曲事可申付候間、能々可被入念事、

一總而船足入過候に付、難風之時分惡敷候由、其聞江有之間、能々可有吟味、八寸足宜由に候間、左候はゝ、船足八寸より多不入樣可被申付之、雖然綱碇船よりおろし、船足究候而は無詮候間、綱碇以下船に乘せ、其上に而船足可相究、勿論改に遣候手代等に誓詞申付、正路にいたし候樣に可被申付事、

朱書船足之儀、當時ハ中國西國筋ハ四寸足、北國東國筋ハ六寸足ニ相極り申候、

一御城米船印之儀、布に而成共、木綿に而成とも、白四半に大成朱之丸を付、其脇に面々苗字名書付之、出船より江戶着迄立置候樣可被申付之候、諸浦江も其通申觸候間、自然船印違ひ候歟、又は船印不立置舟有之ば、浦々より注進申來筈候條、不相違樣可被申付事、

右之通入念被申付、不屆之儀無之樣尤候、以上、

丑二月

御城米廻船ニ付江戶より大坂迄浦々江觸書

一羽州漆山、延澤、大山、丸岡、由利御料米、爲御城米江戶御藏江相廻候儀、向後酒井左衛門尉、松平清

逕江都、凡海船起運、則荒濱務場人役、卽便開具、船頭某領認船隻、某日時起發、差脚力飛報平形務場、以次遞報各務場、令盤驗督察、各船旣受實惠、衆心欣戴、鼓舞之下、無不效力、故漕運無稽遲之累、愼守官物、不毫有所違犯、秋七月、悉達江都交卸、唦海路一千五百、風濤之險、不爲不遠、而無升斗之闕焉、大事之濟、神速如斯、未之前聞、較其工費、大減於舊時、自是而後、漕政一新、而歸便捷、堂老特加嘉奬、厥後令福島官吏、每歲照依瑞賢法制、漕運官糧、尋有北運之命、壬子歲、○寛文十二年又起羽州漕事、瑞賢謂、羽州在東北隅、最爲邊遠、其漕道涉北海、轉過迫門裏、經南海、達于江都、迂回遙遠八千餘里、環六十州邊海、殆一周矣、其間歷險冒危、不知幾所、漕運之策、不可不深長思也、乃遣人備讃等州、訪問傍海居民、至漁戶鹽丁、其漕道利害、島嶼險艱、港灣便要、徧探窮搜、遂・開寫回報、又遣人羽州酒田、驗袖浦形勢、是乃海船始發之港口、而區畫措置、宜預講之處也、因將各處遞報、參伍料理、而經略處分、悉有條理、遂呈議、○中略先是、最上郡官糧、以河船漕最上河、至酒田、儲商民場屋收貯、再分載小舟撑出河口、接裝海船、其河船脚價、派徵所在納戶、民苦重課、乞一切免之、○中略酒田是係酒井左衛門尉領內、故將官糧寄頓起發於此之間、官命左衛門尉管護、及分載出河口、又令發丁夫船隻挽引護送、其勞費居多、領內吏民甚困、乞自今而後、官給脚價、海船自袖浦開洋、各給官糧等項、並如東海運船事例、○中略伏乞准議施行、國家可其議、悉從之、○中略春三月、瑞賢發江都、到酒田、運船亦不後期、悉會袖浦、乃督發人役、時最上郡官糧、節次河運、出積酒田、轉搬袖浦、裝載海船、凡若干石、限夏五月、次第起運、○中略秋七月運船鱗次相匯、而達于江都交卸、曾無隻船斗糧覆敗沈溺焉、東海北海、自古以漕運梗難爲申者、於是乎開通、漕政清肅、宿弊盡革、豈唯足供給於一時、復將濟國計於無窮、瑞賢雨沐風梳、足迹殆遍四裔、爲國家盡赤心、以建大計、可謂忠矣、國家特慰勞之、賜以三千金、嗣是之後、奥羽二州運糧、分委官吏管掌、一皆照依瑞賢置立法制、永爲定規、

〔德川禁令考五十三漕運令條〕寛文十三丑年○延寶元年

磯島嶼曲折極多、習熟經涉者蓋鮮矣、雲氣風候、一失占視、覆敗隨之、人穀俱沒、或雖船僅存、穀已投棄、其所亡失固多矣、或廻避風濤之險、所在棲泊稽延、經年而始達者、上漏下濕穀已浥爛、不堪以充官倉之儲蓄、此不啻闕取給於東北之便、傷人毀船、累年沈沒之費、不可勝算、深爲國家之患、寛文十年庚戌之冬、募求能習海運堪使掌漕事者、都下有河村瑞賢、以智略明敏爲衆所推、國家簡命瑞賢掌海運事、先令漕奥州信夫郡桑折柳川及福島等處官糧數萬石、以試其方略如何、〇中略 瑞賢先遣手下一有才幹者、起自江都、踏視通運海道、泊舟港灣、至于荒濱、而巡撿官倉所在水次遠近、逐一畫圖貼說具冊報知、於是地域體勢、漕道便要、及轉搬發運之方略、坐而得之、遂條上建議曰、凡漕運船隻須還僦商船各給官幟表之、不必造官船、運夫須雇强幹精練能慣漕道者、不必差發官丁、如信夫郡官糧、自阿武隈河、以河船裝運百八十里、至于荒濱、此係松平陸奥守封內、自荒濱接兌海船起運、向西南往抵房州、自房州不由故道、折轉直南、趨相州三崎豆州下田等港、又候西南風、然後回船首、以入江都海灣、其途程有奥州平形、常州中湊、下總州銚子口、房州古湊等處、爲運船必經之港次、此等處所並當立務場、令査驗各船觀運遲速、漕夫勤惰、倘或覆溺破損等船隻、急行驗撿、勘窮情僞、或奸徒在停泊處所私買糧米貨物、搭載以圖交易之利者、拏問痛懲、運船若在中途暴遇風濤沈沒官糧、就告隨近務場者、火速徵發本地丁男、其可撈而出者、悉力出之、沾溼浥腐者、即就地糶散、具數遞報、各船所豎標幟海隅僻遠之民、恐不遽得識認、乞下行諭告河道并沿海地方官民通知、若有緩急、令速來戮力救護、伏乞准議施行、國家可其議、悉從之、〇中略 既而瑞賢差手下人役于平形、中湊、銚子口、古湊等處、雇募伊勢尾張紀伊等州商船以充公用、此等商船、常載私貨、往來貿易、故打造不惜工費、堅完堪用、其船夫慣知海道、能諳風候、觀使精練、不敢侵險行危、船與人皆非他州之所能比矣、〇中略 明年辛亥春、差發各船、總至奥州荒濱、二月瑞賢去荒濱、躬自董督、將信夫郡糧米起發、下河道停積荒濱水次、海船亦會集荒濱、不敢後期、乃節級裝載海船、而候風汛順和、出洋發運、五月、瑞賢發荒濱、按視運船該經沿海一帶建置務場港次等處、行

勿論、中合儀悉可被行死罪事、

一湊に長く船を掛置儀あらば、其子細を所之者相尋、日和次第出船いたさすべし、其上にも令難澁者、何方之船と承屆之、其浦々地頭代官江急度可申達事、

一御城米廻之刻、舟具水主不足之惡船に不可積之、并、和能節、於令船破損者、舟主沖之船頭可爲曲事、總而理不盡之義申かけ、又は私曲於有之者可申出之、たとひ雖爲同類、其科はゆるし、御褒美可被下之、且又あだを不成樣に可被仰付事、

一自然寄船、并荷物流木におゐては可揚置之、半年過迄、荷主於無之は、揚置輩可取之、若令之日數過、荷主雖爲出來不可返之、雖然其所之地頭代官可受指圖事、

一博奕總而賭之諸勝負、彌堅可爲停止事、

右條々可相守此旨、若惡事仕におゐては申出べし、急度御褒美可被下之、科人は罪之輕重にしたがひ可爲御沙汰者也

寛永七年閏二月十八日

〔奧羽海運記〕江都形勝、東南瀕海、沃野彌望、關塞之固、河渠之利、天造地設、故西南諸道、漕轉絡繹、舳艫相銜、未嘗有阻滯之患矣、第奧羽二州、在東北邊要、稻粱之蓄、爲天下饒、而陸路脩曠、已不可轉輸、海運亦迂遠、不能徑達于江都、蓋海路未習、濟策有遺、故功力雖勞、倉儲無益、奧州形勢、接界常野、邐迤北去、以面東洋、羽州接其背、以抱北海、遙與朝鮮對、故奧州運道經東海、羽州運道涉北海、其經東海者、漕下總州銚子口、自銚子口用河船、裝運入利根河、抵關宿、下行德漕渠、以達于江都、其涉北海者、漕至越前州敦賀津、自敦賀駄運山中七十里、出江州鹽津海津、又舟運湖上、以至大津、然而河漕陸運、備極艱辛、勞費最多、而濟利未廣、近世運道、奧船經上下總邊海、折而抵房海、以達于江都、羽船涉北陸、山陰、山陽等道邊海、至長州、折轉經淡路迫門或阿波鳴門、又出南海、抵伊豆、以達于江都、放洋萬里、波濤險惡、石

十三年〇中略、慶長、營大佛殿于洛東、大木巨材、甚勞挽牽、了以請循河而運之、乃聽之、於是自伏見里浮之河、泝而挙焉、了以見伏見地卑於大佛殿基可六丈、卽壞其高爲堤於卑處、若曲處置轆轤引起復浮水、水平如地、先是呼許呼邪者、五丁憂之万牛難之、於是水運不勞力、不日材木悉達、人皆奇之、

〔日向記十三〕祐慶主薩州越山付大佛材木の事

慶長十六年八月十一日、祐慶主隣國の好をなさんがため、薩州鹿兒島へ越山、島津殿へ參會、馳走宛も目を驚かせり、又能興行有て歸城に及ぶ、洛陽大佛殿は、去天正十六年、秀吉公南都の舊例を摸して經營し玉ひけるに、慶長元年七月十二日、大地震にて佛像破裂す、其再興をなし玉はんため、佛像を鑄らる所に、鐵火胴胎に入て火災の媒となり、佛殿燒失す、然るに去ぬる慶長十四年再興事始て、佛殿の良木を賣人に便を求らる、今慶長十六年に、飫肥領北河内鵜河内に於て、大棟木松丸太(長十四間あり)同年四月廿日より杣人入て、同六月晦日、障子ヶ島に引出す、人夫七千人、卅七組にして川出ししけるとかや、同七月三日、龍穴を出船して、同月大坂に著船し、請元の賣人岸部屋三郞右衞門、金屋了圓手代廿五人來て請取、平川分右衞門、壹岐彥左衞門、松浦久兵衞尉に談じて、代銀九十貫目に賣渡し、其外六七八九間の末口物餘多、銀子十六貫目に賣渡しぬ、

〔御當家令條十九〕條々

一公儀之舟は不及申、諸廻船共に、遭難風候時は助舟を出し、舟不破損樣に成程可精入事、

一船破損之時は、於船主賴者、其所近き浦之者精入、荷物舟道具等取揚べし、其場所之荷物之內、浮荷物ハ廿步一、沈荷物ハ十步一、川船ハ浮荷三拾步一、沈荷物は廿步一、取揚し者に可遣事、

一沖にて荷物はぬる時は、著舟之湊におゐて、其所之代官、下代、庄屋出合遂穿鑿、船に相殘荷物舟具等之分、可出證文事、

附、船頭浦々之者と申合、荷物盜取、はねたる由僞申におゐては、後日に聞といふとも、船頭は

江丸事、淤河上諸關無其煩勘過之處、限今春兵庫兩關號新國料、過分之關役申懸、剰以前無爲之役錢共仁責執之條、言語道斷之次第也、所詮應永八年以來之任御教書等旨、被役錢等被糺返、於國料船者、無其煩可有勘過旨、嚴密之被成下御成敗者、可爲御祈禱之專一也、仍粗言上如件、

長祿四年卯月日

〔黒田家譜三〕同年〇天正十四年十二月朔日より秀吉公幕下の諸將及諸國江觸給ひけるは、來年三月朔日筑紫爲征伐發向すべし、〇中略士卒三十万人の兵粮、馬二万疋の飼料、數月の用意をなして、諸軍江下行すべきよし命せられ、諸國の浦舟を寄られ、先兵粮米拾万石、長州の下の關江運送せられける、

〔御手傳覺書朝野舊聞裒藁所引〕慶長十乙巳年十月、江戸御城御普請御手傳被仰付、同十一丙午年、人數分伊豆國江遣、石船拾艘ニ而、從伊豆國漕廻し門奈助左衛門、今泉九左衛門方江渡之、其後鎌倉腰越より石船貳拾艘ニ而漕廻シ、伊奈備前守江渡之、

〔慶長見聞集九〕唐船作らしめ給ふ事

見しは昔、慶長年中、家康公唐船を作らしめ給ひ、淺草川の入江につながせ給ふ、〇中略先年江戸御城石垣をつかせらるゝによつて、伊豆の國にて大石を大船につむを見しに、海中へ石にて島をつき出し、水底深き岸に舟を付、陸と舟との間に柱を打渡し、舟をうごかさず、平地のごとく道をつくり、石をば臺にのせ、舟のうちにまき車を仕付て綱を引、陸にては手子ばうを持て石をおしやり舟にのする、舟中にまき車の工み奇特也、〇中略當代には大名衆、西國の大石を大舟につみ、江戸へ持來て、千人引は扨をき、三千人五千人引の石を幾千とも數しらず引給ふ事おびたゞしかりけり

〔羅山文集碑誌四十三〕吉田了以碑銘

水運

長二間　壹尺角一本　拾人持

但板貫等、長短大小平均尺〆にして、壹本拾人持之積に人足掛り積るべし、是は欅栂等重き材木之積り也、松、杉、雜木之輕き木は、人足掛り減る、船積りし時は、壹本貫目米壹石積にして、船積木數積るべし、尤壹石四拾貫目之積り也、

〔御作事方定法〕人足積（大八車壹輛、新規代金貳兩貳分、）

車積大八車三人引壹輛ニ付

一尺角貳本　一四五寸廻竹貳百本　一月役八百枚　一挽板百枚

一挫竹三拾坪　一大內竹六百本　一杉丸太拾本　一靑石八本

一銅貳拾四貫目　一多賀石貳拾本　一箱下水拾三本　一貳間編莨簀五拾枚

一古井ケ輪壹ケ輪　一六尺井ケ輪貳ケ輪ニ而四人引壹輛

一土砂（六尺五寸六面壹坪樽數百石數四拾貳）石三斗六升貳合七勺

一土砂壹坪ニ付（大八車三人引ニ而貳拾貳輛同四人引ニ而拾六輛四斗樽ニ而百貳拾樽巾太人足ニ而百三拾七荷）

一土船壹艘分　貳合五勺　是は（大八車四人引ニ而四輛巾太人足ニ而拾六荷）

一砂利立坪壹坪（大八車三人引ニ而三拾三輛同四人引ニ而貳拾四輛巾太人足ニ而百三拾三荷四斗樽ニ而百拾貳樽〇中略）

一大坂瓦（廣同物平瓦壹荷ニ拾四枚同斷丸瓦壹荷ニ貳拾四枚）

天明八申年、芝本堂〇増上寺屋根修復之節、大八車四人引壹輛百貳拾枚、

但平瓦道具物共平均

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年八月廿七日甲戌、申剋以後風雨、入夜大風、由比浦船舶沒、被死人寄河、彼是不可勝計、又鎭西乃貢運送船六十一艘、於伊豆海、同時漂海云云、

〔六波羅密寺古文書〕崇德院御影堂禪衆等謹言上、右當院領讚岐國北山本新庄、年貢運送料船號ニ

次第、兩所蓄米高之儀は申合入念取調候樣可被致候、併此上御廻米相增候歟、又は車數相減、增銀被下候節に到り候はゞ、右御手當渡方之儀は、內藤重三郎、小堀縫殿、御預り銀之內を以相渡候積り、下野守伊勢守江申遣候間、是又差支無之樣可被取計候、

十一月

〔德川禁令考四十九罰輕輕〕慶應二寅年十月十二日

荷物運送之ため馬車御免御觸書

大目付江

江戶市中幷五街道宿驛荷物爲運送、馬車相用候儀被成御免候間、江戶表ハ、牛車通路振合を以通行路取極置、不都合無之樣可取計候、

右之通、去朔日於京都道中奉行町奉行被相達候間、向々江可相觸候、

十月

〔地方凡例錄九〕一材木持運人足定法

長九尺より一丈一尺迄

末口貳寸　三本　壹人持〇中略

同壹尺五寸　壹本　十人〇中略

但持運人足、一日往返六里步行定法也、一里之處は三歸持、壹人壹本持之木は、一日ニ壹人ニ而三本持積也、右杉、松、雜木之人足掛り、槻、樫、欅等之重メある木は壹本壹人五分の割合に積るべし、凡末口物長六尺より一丈一尺迄、丸太元末平均尺〆にして、壹寸才壹人、拾才持貳間半より三間半迄、一人七才持、四間より以上壹人五才持、六間以上之木は、右に准じ人足掛り積るべし、

一角物持運人足定法

京三條　四條　荒神　今出川　壇

右之牛車役義は、二條御藏詰之節、江州御代官所御城米積送候、依之大津著之商人俵物之内六分は大津馬、四分は京車に積來候處、寶永元申年、伏見車と大津馬借之者と、俵物積送之儀に付及訴論、大津米問屋京車之者共詮議之上、前々より伏見車大津著之俵物積送候儀無之段、大津米問屋共申之候、京車之者共申候者、大津著之俵物、伏見車も積候由、京伏見車之者一同に申之候に付、京車積合候四分之俵物、向後伏見車と打込に可積送旨、其節被申付候由、

〔牧民金鑑七〕寛政四子年三月廿四日、石原清左衛門〇大津代官小堀主税等江申渡、

二條御藏詰年貢米運送いたし候、鳥羽伏見車持ども困究におよび、御廻米運送難相勤由に而、品品難儀之趣申立候に付、先達而吟味之上、増賃米を相伺候へ共、前々より差定り候賃米増方之儀は、外々江も相響、不容易筋に付、不及沙汰段其節申渡候、然共實に及難儀、御廻米は勿論、諸荷物運送差支候樣にも候はゞ、此儀は別段之趣意之事に付、京都町奉行所におゐて吟味有之、品々評議之上、去亥年御廻米、鳥羽著米壹萬四千六百石餘、車有高七拾五輛を以運送いたし、此車數三千六百五拾輛餘に相成、壹輛に付、四拾遍餘に相當り、伏見之儀も著米高壹萬貳千石餘、有車九拾三輛を以運送いたし、此車數三千四百貳拾八輛、壹輛に付、三拾五遍牽に相當り、雙方共江此上著米高相増候而は、運送差支候段申立候に付、以來は鳥羽車壹輛に付五拾遍、伏見車四拾遍と相定め置、其餘遍數多く相當り候はゞ、車壹輛に付銀貳匁三分ツヽ、別段御手當被下可然哉之段、今般菅沼下野守、三浦伊勢守〇二人並京都町奉行より申來候に付、一同評議之上、其段越中守殿江〇老中松平定信相伺候處、右伺之通被仰渡候間、可得其意候、尤車有高之儀は、町奉行所に於而嚴重に相糺し候筈に付、鳥羽伏見著米高之儀は、各一同申談合、其年之車有高を以割合、雙方共過不足無之樣可被取計候、勿論當時兩所之車有高を以、二條納割減高割合候へば、増銀被下候に不及割合に付、以來割賦高取極

作毛不熟ナレバ、糧粟ニ乏キ故、兵糧ヲ立花ニ乞、道雪ヨリ兵糧數百石、小荷駄數百疋ニ付サセテ、原田源右衛門ヲ奉行トシテ鷹取ノ城ニ送ル、

〔武將感狀記二〕相模ノ小田原ノ役ニ、堀左衛門督秀政、先人ヲ遣テ、伊豆、相模、駿河、遠江ニテ牛數十頭買置タリ、秀吉箱根ノ嶮路ニカヽルトキ、秀政牛ヲ以テ糧ヲ運ブ、他ノ軍ハ是ニ迷惑スレドモ、秀政ヒトリ豫備ヘタルガユヘニ患ナシ、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一反米者、其年より則可運上、又次年より、有樣之貢物可運上、何も公領也、〇中略

右條々於國中、自今以往可爲龜鑑之條、貴賤共令信用、全可相守、若一言於相背者、忽可處嚴科者也、依所定如件、

慶長貳年三月廿四日　盛親在判
元親在判

〔京都御役所向大概覺書二〕京都牛數車數幷拜借之事〇中略

一先年大坂御陣之節、御陣道具品々御用相勤、御歸陣已後、車所々往返之御證文、板倉伊賀守殿より車持共江被下候、右御證文左ニ記、

京都、嵯峨、伏見、上鳥羽、下鳥羽、たんの上、せり川、中島、塔森、横大路車共、大津其外何方にて荷物積申候共、違亂申間敷候、若難澀申者於有之者、此方へ召連可參者也、

寅〇寛永三年極月七日　板伊賀判

右車連

〔京都御役所向大概覺書七〕同所〇大津町大馬借牛車之事〇中略

一大津江俵物積ニ入來候牛車出所之事

文治三年十月日

〔吾妻鏡九〕文治五年六月十八日丙午、中納言法橋觀性歸洛、龍蹄幷金銀已下重寶云云、唱導布施云云、後日贈物、不知其數、運送疋夫、列長途云云、

〔吾妻鏡十〕文治六年○建久元年十二月十二日癸巳、當時御車有三兩、毛車被立置于六波羅御亭、二兩者今日爲行政奉行、被下關東、佐々木左衞門尉定綱請取之、以近江國疋夫送之云云、

〔壬生家文書一〕一可同令停止除佃所當運上外京幷木津越夫馬事

右京上幷木津越夫馬事、至于地頭佃所當者、百姓可勤其役、於此外者、守巡役、壹年壹度可勤仕、將又以當所之夫馬、於運送他所物於京都者、頗爲非法歟、但可依先例也、○中略

承元元年十二月日　　惟宗花押○以下人名略

〔吾妻鏡三十七〕寬元四年二月廿八日癸丑、重經○紀伊七郎左衞門尉丹後國所領、德分物、運送疋夫、去比負荷、負財盡逐電訖、

〔集古文書注進三十七〕

從御料所丹波國、美濃國保、幷棚野河內村、年中運送供御米以下注文者別紙封裏事、以伊勢守代印、諸關渡上下、向後每度、无其煩可勤過之由所被仰下者、仍下知如件、

文明五年九月

和泉前司淸原眞人

河內前司藤原朝臣

丹後前司平朝臣

〔宗像軍記〕宗像ノ家臣ト立花ノ家臣ト鞍手郡稻光小金原合戰ノ事

爰ニ鷹取ノ城主毛利鎮實ハ、無二ノ大友方ナレバ、立花ノ道雪ト親交淺カラズ、近年鎮實ノ領地

古事類苑

政治部一百

下編

運送

鎌倉幕府以降ニ於テモ、陸路貨物ヲ運送スルコト、略ヽ往昔ト同ジ、水運ニ就テハ、德川幕府ノ時、奥羽二國ハ邊陬ニシテ、陸路轉送スベカラズ、故ニ奥州ハ東海ヲ過ギ、羽州ハ北海ヲ涉リ、其航路迂遠ニシテ、徑ニ江戸ニ達スル能ハズ、且ツ船ノ沈沒シ、又ハ官物ノ欠損スルコト多カリシガ、寛文年中河村瑞賢ノ畫策ヲ用キテ、其患ナキニ至レリ、

名稱

〔運歩色葉集 字〕運送 運上

〔易林本節用集 言辭〕運送

〔書言字考節用集 八言辭〕運漕 文選註、引ㇾ水、轉ㇾ轂曰ㇾ漕、 運載、運送、

輸送

〔吾妻鏡 七〕文治三年十月一日戊辰、法皇御灌頂御訪用途事、雖ㇾ被ㇾ仰ㇾ下、他事計會之間、于ㇾ今無ㇾ沙汰、於ㇾ御入壇者、去八月廿二日、令ㇾ遂ㇾ御訖、然而所ㇾ調ㇾ置之貢物、不ㇾ可ㇾ默止、所ㇾ運ㇾ送京都ㇾ給之雜色六人相副之、

解文書樣

進上

紺絹百切 上品絹百疋 國絹百疋 藍摺百疋 色革百枚

右進上如件

〔倭訓栞中編四〕かうし　驛馬に二人騎を二本かうし、三人のるを三本かうじといふは、其左右格子あれば也、其格子をやぐらとも、こじともいへり、

間、其旨可ㇾ存者也、

天明四辰年六月　　久〇世久豊後守〇勘定奉行、以下三人略、

〔驛肝錄〕文政六未年七月

一諸向杖拂之儀に付、品川板橋千住內藤新宿役人請證文、

差上申一札之事

一御用往來之內、御朱印御證文等に而御通行之御方樣、其外共杖拂差出來候處、重御方御家來、又は寺院社人迄も、聊子細有ㇾ之候分は、右同樣に候故、自然杖拂之もの多相成、老人或は幼年之ものの、又は如何敷風俗之もの等差出候樣成行、往來之もの制事を不ㇾ相ㇾ用趣入ㇾ御聞、右は前々差出來候分差止候筋にも無ㇾ之候得共、御朱印に而通行之面々江は、別而制方行屆候ものを撰、老人幼年、又は如何敷風俗之もの不ㇾ差出ㇾ可ㇾ仕旨被ㇾ仰渡、承知奉ㇾ畏候、尤右之趣、私共ゟ先宿々江急度可ㇾ申通ㇾ段被ㇾ仰渡、是又承知奉ㇾ畏候、仍御請證文差上申處如ㇾ件、

文政六未年七月九日

元大貫次右衛門御代官所　東海道品川宿役人總代
年寄　伊左衛門印

日光道中千住宿役人總代
年寄　久藏印

平岩大膳御代官所　中山道板橋宿役人總代
問屋　市右衛門印

甲州道中內藤新宿役人總代
問屋　勝之助印

道中御奉行所

道中川筋出水に而、川留有之節、前後宿々逗留之面々川明候得ば一統落合、越立方差急候故及混雜品に寄候而は不束之儀等も有之間敷とも難申、左候而は各不安心之事に有之、及混雜候得ば、却而越立方等も及延引候、畢竟先を爭候故之儀にて、如何之事に候、既に享保年中相觸候通り、參勤交替之面々、一日三人程ツヽ不落合樣可致旅行事に候得共、川場之儀は、別而其心得可有之儀に候條、以來御用道中之外は、彌前宿泊到着順を以、川役人取計、越立有之候樣申渡候間、其旨相心得、銘々家來下々に至迄、心得違無之樣、堅可申付候、尤爲改其所之支配々々より出役之もの差出、改可有之候、猶心得方之儀は、道中奉行江可相談候、

右之通可被相觸候、

寬保三亥年三月

〔五驛便覽〕川々留明之事

一六郷川

右ハ滿水ニ而、歩行船渡留候得バ、何樣之急御用ニ而も、通路仕候儀曾而無之、落水ニ罷成、川役人共瀨踏致し候而、一番船ニ越候由、

一馬入川

右ハ出水ニ而、船渡留候得バ、人馬共一同留り、明も同斷ニ付、人計渡不申儀無之、勿論川留ニ候得バ、急御用ニ而も相渡不申候由、

〔御觸并御書付留〕五一出立刻限は朝七ツ時ゟ、泊は夜五ツ時迄限、往來有之、宿々泊之儀も、無據子細有之、繰替候儀は各別、爲差儀も無之に、兼而定置候宿、猥に繰替之儀被致間敷候、可成丈夜通之乘脚差立候儀は相止可被申事、〇中略

右之趣、向後急度可相守候、假令組中支配并家來之不法有之候共、其番頭其役人之越度に相也候

候條、以來右體之儀致間敷候、〇中略

右之趣於相背者、可為曲事もの也、

未六月十二日

主水〇道中奉行石川

伊豫〇同岩瀨

日光奥州水戸道中
岩槻佐倉道中
右宿々
年寄
問屋
同之村々
名主
組頭

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年六月廿六日丙戌、醫師時長歸洛、自中將家〇源賴家馬五疋旅粮雜事、送夫二十人、國雜色二人、幷兵士給之、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一御上使幷御下代御下國之時、馳走之儀可竭精魂、御振舞、送馬其外念を入、令奔走、於抽余仁者可加褒美、付其時案內者、相添者、申次第可氣遣事、〇中略

一於國中奉行等使、路次にて、馬人夫以下、事狀次第可馳走、无事狀者、不可氣遣事、〇中略

右條々於國中自今以往可為龜鑑之條、貴賤共令信用、全可相守、若一言於相背者、忽可處嚴科者也、

依所定如件、

慶長二年三月廿四日

盛親在判

元親在判

〔御觸幷御書付留五〕道中奉行江

伊豫〇道中奉行桑原
東海道品川宿より守口迄佐屋路本坂越但助郷村々とも
右宿村々
問屋
年寄
名主
組頭〇他宿道同文

〇按ズルニ、官名ヲ詐稱シ、宿驛ヲシテ人馬ヲ出サシメ、或ハ事ニ托シテ、賄賂ヲ出サシムル事ハ、法律部下編詐僞篇ニ載ス、

〔御觸幷御書付留　五〕當夏以來奥州道中往來繁、宿驛及難儀候間、自今御用に而往來之面々、成丈雇人馬相減、御朱印人馬多とも、猥に大勢出候はゝ差止候樣可被致候、且又旅宿に而も馳走ケ間敷儀は不及申、一汁一菜之外、酒食等一切不相好、總而難儀に不相成樣、手輕に可有旅行候、勿論召仕下々之者、決而非法不申掛候樣、精々可被申付候、

右之通、奥州道中旅行いたし候面々江可被相達候事、

文化四卯年十二月

〔驛肝錄〕文政六未年六月

一並木之儀、幷旅人駄賃帳を馬士江渡、馬遣候積帳面江記候事、〇中略

觸書〇中略

一旅人所持之駄賃帳を馬士江相渡、夫より問屋江持參、賃馬遣立候積帳面江記貫、內實馬は不差出、問屋江は刎錢而已相渡族有之趣相聞、右體不正之取計いたし候とも、問屋ども可及斷筋に

伊豫（道中奉行○桑原）

東海道品川宿より大津宿迄伏見宿より守口宿迄但佐谷路共

右宿々

問屋

年寄（○略下）

〔道中秘書十〕道中奉行家來と僞りねだり等いたし候もの、儀ニ付觸書、

天明八申年、桑原伊豫守道中奉行被仰付候節、五海道宿々江觸書差出候砌、觸書之振合を以取調、寛政八辰年八月伺之上、左之通觸書差出、尤助鄕村々江も相觸、

追而此觸書早々相廻し、宿村承知之旨、別紙受書相添、留り之村より宿村繼を以、肥前（○道中奉行根岸）

御役所江可相返候、

近頃自分共家來之由ニ而繪符を指、又ハ駄賃帳抔取拵、名前を記し、宿々在々江罷越、無賃之人馬爲差出、或ハ止宿之儀等申談、ねだりヶ間鋪儀申懸候もの有之趣相聞候、若右體之もの徘徊いたすにおゐては、宿方并助鄕村々とも、見當次第其所ニ捕置、其段宿村送りを以注進いたし、宿役人村方ハ其村役人差添、宿村送りを以、肥前御役所江可差出候、遠國宿村之分ハ、最寄御代官陣屋江召連可出候、且用向ニ付自分共家來差出候節ハ、兼而宿方江印鑑渡し置候事ニ付、引合候ため印形書付、右家來ニ爲持置候間、其旨可相心得候、萬一右之ものたりとも、不埒之義有之ハ、其所ニ留置、其段早々宿村送りを以可申越候、

右之趣、小前之もの共江も得と爲申聞、心得候樣可致もの也、

辰八月　　　　　肥前（○道中奉行根岸）

右體之者嚴敷御仕置被仰付候間、其者名前、次宿之役人共江申達候而も、又は御料は御代官役所、私領は領主地頭役人江申出候共、道中奉行江訴候出とも可致候、

一東海道筋宿々之內、祝儀取と唱、江戸京大坂より持出候通日雇人足より酒代をねだり取候由、通日雇人足共も、若途中に而病氣等之節は、右祝儀取とも致世話候故、常々酒代等遣し置候儀も有之趣相聞、不筋之事に候、通日雇稱之者ども、若道中に而病氣等之節は、問屋役人江申聞候得ば、差支之儀無之候條、以來祝儀取と唱候所行不致樣に急度申付候間、酒代等遣候儀致間敷候、

一右通日雇人足共儀、宿々に而品々不法不束之儀も有之趣相聞、不屆に候、以來右體之儀於有之は、當人は勿論、受負候者迄可為曲事候條、急度可相愼候、

右之趣、在町とも、御料は御代官、私領は領主地頭より、不洩樣可被相觸候、

右之通、可被相觸候

寛政元酉年三月

〔德川禁令考五十二法制禁令〕寛政元酉年四月三日

道中筋小揚所通日雇等之儀ニ付觸

一道中筋小揚所之內、惡黨共申合、旅人江對し賃錢等ねだり、或は及狼藉候由に付、前々も右體之者共、其所ニ而召捕可申出旨觸置候處、又々近年五海道共、小揚取無宿體之者立交り通日雇之者より金銀ねだり候趣相聞候、甚敷致し方、其上喧嘩等を仕掛、又者泊宿旅籠江土足ニ而踏込、礫を打、燈火を消、勘定帳面等を引破、或は野間山中ニ多人數致待伏、荷物ニ突當り及狼藉旨、通日雇受負之者共より申立候間、前々觸書之趣相守、右體之者は其所ニ而召捕、早々可申出、若此上致見通役於及露顯者、宿役人共不念ニ候條可相守候、○中略

寛政元酉年四月三日　肥前例○道中奉行根岸

手代之姓名をも認、書付差出候類も有之よし、右手代ハ右大名通行ニ付、依願可被差出趣ニ者有之間敷、大造ニ付人馬繼立、在方其外不埒之趣者、手代共存罷在候儀、畢竟手代ども等閑ニ相心得候より事起り、宿方不埒も出來候儀と相聞候間、前書之趣被得其意、以來右通之節ハ勿論、平日共ニ折々宿方へ手代相廻し、人馬繼立方被相糺、滯候宿も有之候ハヽ、其度々可被申聞候、尤手代どもヽ等閑之取計無之樣、是又可被申付候、

安永九子年八月

道中往來之面々、於宿々不法之儀無之樣可被致旨、先年より度々相觸候處、近年猥に相成、道中宿々御定之外、人馬多爲差出、其外旅人不法之儀共有之、宿々助郷村々迄及難儀候由相聞候間、先年より度々被仰出候御書付之趣彌相守、以來諸荷物貫目は御定通急度申付、何人持共銘々附札差出可被申候事、

一向後宿駕籠長持等持人足、御定之通急度不相減、人馬賃錢旅籠代等迄無相違相拂、陸尺幷通人足宰領之ものに至迄、急度申付、自分に可持道具は人足に爲持、其身は無賃之馬駕籠に乘候儀不致、金錢ねだり取儀は勿論、人足共ゟ酒代取之候儀、決而致間敷段、召連候家來幷受負人等迄、急度可相守候條、其旨可被相心得事、

右之趣、向後急度可相守候、假令組中支配幷家來之不法有之候共、其番頭其役人之越度に相成候間、其旨可存者也、

天明四辰年六月　　久〇世久豊後守〇道中勘定奉行、以下三人略、

都而道中致往來候者、宿々江對がさつ成儀不致、荷物貫目も彌改所におひて相改候間、御定之通相守可申候、〇中略

一宿々馬士人足等旅人江對、定賃錢之外、酒代等ねだり、旅人難儀いたし候由相聞、不埒に候、以來

速可訴出之、見遁しに仕、後日ニ相知候はゞ可爲曲事者也、

申四月

伊勢行○（道中奉、伊勢）
石見行○（道中奉、松平）

〔寶暦集成綸錄二十〕延享二丑年六月

道中宿々之儀、往來之者ニ紛れ、無宿體之もの集候ても、難改筋も可有之事ニ候、左候へバ、右之內ニハ、盜賊火付等之惡黨者も可有之候得共、宿中より召捕訴出候事、殊外稀成事ニ候、是ハ惡黨を捕へ、御代官へ差出候而も、吟味付宿中度々呼出され、若ハ江戸までも召呼れ、逗留雜用錢等相懸候儀を難儀存、召捕候儀ハ一向不心掛、盜人追拂候得バ、事濟候樣心得候由相聞候、向後ハ其所代官役所ニ而、吟味手間不取樣取計ひ、宿中困窮不相成樣可致旨、御代官へ申渡候事候間、怪敷もの及見及聞候ハヾ早々召捕、其所御代官役所へ可訴出候、尤捕違等在之分ハ、少も不苦候間、得其意召捕可差出候、如此相觸候上に、宿中物入等をいとひ、追拂事濟候體之儀有之、追而相知候バ可爲曲事候、

右之通、寄々可被相達候、

六月

〔御觸并御書付留五〕都而道中筋諸往來之節、於宿々人馬滯、別而大名通行之砌、宿方ニ而先觸追人馬不差出候節も、早速ニ者不差出、又ハ問屋場を明、宿役人ニも不被出候ニ付、無致方人馬割之家來ゟ其所之者へ相願ミ、相雇呉候樣申候節ハ、相對之事、御定賃錢ニ而者人馬共ニ難差出よし申、手間取候ニ付、任其意望之追賃錢相渡候得者人馬差出、左候得者人馬一向無之儀とも不相聞、全餘計之賃錢爲可取、右體之手段いたし候由、取沙汰も相聞候、且大名通行之節、支配限宿入口問屋場等へ手代罷出居、大名家來ニハ手代多人數罷出候趣ニ申聞、不被出

中山道筋ニ而荷物附替候節、人馬無レ之由を申、問屋場ニ而留置、駄賃錢之外ニ庭錢と申、臨時之賃錢取候所も有レ之由不屆ニ候、畢竟賃錢可レ取たくみに、人馬爲レ滯候様ニ相聞候、當日附替候荷物之分は、商人之荷物ニ而も庭錢取候事、向後堅可レ爲二停止一事、

一右荷物送り候節、人馬差支無レ之時も、庭錢等爲レ可レ取、荷物留置候様成義、堅仕間敷候事、

右之趣可二相心得一、若此上にも駄賃之外庭錢を取、或は滯間敷人馬爲二相滯一候由於二相聞一者、其宿問屋年寄可レ爲二曲事一者也、

正德二辰四月十六日　大隅〈○道中奉行大久保〉
石見〈○道中奉行松平〉

中山道下板橋ゟ守山宿迄

道中奉行へ

正德六申年四月

道中筋において、ごまのはい、くもすけなど申もの有レ之、往來のかろきものゝために難儀之由風聞候處に、此度中島村において切殺され候者も、彼類の者の由に候、總じて此等の類は、宿々の者共見知らざる事にも有べからず候へども、其餘黨のために恨を報せられ候所を憚り候故に、其通りに仕さし置候事と相見え候、自今以後、此等之者之ために難儀し候もの相聞候はゞ、其所前後宿々、急度其沙汰に行はるべき事候間、宿々の役人共、常々に油斷なく心をつけ候て、見合次第にからめ出し、往來之難儀無レ之様に可レ仕候旨可レ被二申付一候、以上、

正德六年申四月

右ハ此度東海道藤澤宿平塚宿之間、於二中島村一盜賊體之者を旅人切殺候ニ付、如レ此被二仰出一候間、宿宿ハ不レ及レ申、中間之村ニ迄も、右御書付之趣急度相守、若疑敷者於レ致二徘徊一者召捕、様子承屆候上、早

もと軍國の用に備らる、所なれば、かゝる所尤大なり、早々沙汰有て、實に其力たらざらん所々には、其料をかし下さる、にしくべからず候と申事ども、七條をしるして參らす、（此議草も猶今にあるなり）

此年壬辰（正德二年）の二月、先かの宿役人のことをとゞめられ、其後道中の事ども御沙汰有て、奉行の人々望請如くに、寄騎同心等の者共つけられき、八月に至て、奉行所より奉りしものを、某にかし賜ひしを見るに、去年御朱印を給りて海道を過し人々の爲に、五十三驛の間、其役にしたがひし役夫二十三萬五百五十八人、驛馬四萬千二百三十四匹、今年道中のこと御沙汰有しより此かた、役夫十萬七千五百五十一人、駄馬三萬六千四百十一匹にして、役夫十二萬二千五百八十九人、駄馬二千八百二十三匹を減じぬと申す、（我奉りし事宜七條のうち、其節目數十事ありし、其中はじめ奉行の人々、道中上下の者共不法の事は、いかにとも制すべきやう非ずと申せし事を議せしは、是は爰にも京大坂にも、上下の者どもと申て、東西往來の人の、道のほどやとひて召僕する者なり、かれら不法のことゝいふは、たとへば行勞れたるとて、馬を出させ駕籠を出させ打のりて、おのがもつべき物をば、役夫にもたせて行つゝ、おのれら早く家に歸らんとおもはゞ免すべしとて錢おし取て返し、又宿々の者をにくしと思ふ事あれば、黨の者共に相告て、終に其恨みを報ゆべきほどの事をなしぬれば、是らが事につけては、宿々の者どもいかにともいふ事なし、もとよりそれらの事なせし者もいかなるものとも知るべからざれば、奉行も又其沙汰に及難きよし也、某此事を承りて、是を制止せん事いと易きほどの事也、爰にも大坂京にも、彼等が事を取計ふものあり、是を日雇の者の宿とも、上下の宿とも申す也、彼等やとふべきとおもふ人は、其宿の者どもの許にいひつかはしね、されば彼等も其の宿のもの、心に違ひぬれば、立所に世渡る業をうしなひ、妾子養ふべき事もかなはざれば、是を恐れ敬ふ事、主人に相同じ、彼等若不法の事あらんには、其宿たらん者、其罪に行ふべき、此の法嚴ならんには、其等は改りぬべしと申たりき、其法を立られしかば、果して是らの事はやみぬ、又奉行の人々、寄騎同心の事を望み申せしをば、然るべからざる事三條をしるして爭ひ申けれど、其望に任ぜられんこと然るべしと申されし人々有しかば、終に其望に任せられき、御他界の後に至りて、日光山御法會の時に、宿々の役助くべき人馬の事につきて、かの宿役人の前の如くなりし事ども出來り、又山道の宿の者の事につきて、奉行所より沙汰せし事ども、其領主は心得ぬ事に思ひしことも有き、是ら果して其爭ひ申せしことの如くなりき、此外某が議し申せし事共の、其時にあげ行はれざりし事どもも有て、いくほどなくて、かくれさせ給ひて、[illegible]今も〳〵との儘なる事どもゝ多かり、舍を道傍につくるのたへ、おもひ合せしことにぞありつる、）と此時の事ども、別に錄せしものあれば、爰には只其一二をのみ記しぬ、

〔享保集成絲綸錄二十二〕正德二辰年四月

のどもは、たゞ其人數のすくなからん事をうれへとす、其役をたすくる所々のものどもは、たゞに人馬のつかれくるしむのみにあらず、其罪を贖ふために、財力すでにつきはてぬれば、宿々をさる事五里十里がほどに所領ある人々、其稅年々に減じて、いかにもせんすべあらず、また公事によりて往來する人々の召供のものども、おのれらを迎へ送らむために人馬の多くあつまれるを見ては、なにをくるしみてか、みづから重き物を負ひ、遠き道をもゆくべき、おの〳〵その人馬を取用ひて我勞にかふるは、下賤の情しからざる事を得ず、すべてこれらの舊弊を除かれんには、まづ宿役人といふものを停廢せらるゝにしくはあらず、次に近年以來、荒居の險をさくるがために、海道山道ふたつながら其生をやすくせざる由、これたゞ其一つをしりてその餘をばしらざるなり、前代の御時、海道の宿々望請ふによりて、その駄賃等をます事共ゆるされし所々あり、是より此かた、貴賤往來の旅費を省かむ爲に、山道に赴くもの多くなれり、某御使を奉りて海道を上下せし時、本坂の道を通らん事を勸むる事あり、其事に隨がはずして荒井を渡るに、畏るべきの途にあらず、奉行の人々海道往來の人多からんことを思はゞ、宿々人馬の賃錢の法、古にかへされん事を議し申にしくべからず、往來の人々、山道を經ん事をとゞめられん事然るべからず、又道中宿々人馬の料、長く諸國の役に課せられんこと、前代の御時、東大寺大佛殿造立の爲、及び富士山の燒けし灰除かれん爲に、諸國に役をかけらる、是らは只臨時の役なりといへども、世の人申事もありき、ましてや諸國年々の役として、道中宿々人馬の料を召さるべき事、尤然るべからず、海道宿々の役夫百人駄馬百匹、山道の宿々は役夫五十人駄馬五十匹、是古來の定數なり、凡そ往來の人々召供すべき者ども、此人馬の數によりて、斟酌すべき由仰下され、又宿々に於ても、所役の外に一人一匹といふとも、其人馬の催促に隨ふまじき由を仰下されば、其役を助くる所も自ら其數を減ずべし、但當時は宿々の人馬定まれる數にみちしところ多からず、此事

に松平石見守、大久保大隅守、仰下されし事ありしより此かた、其人々議し申す事多かる中に、其大要は、道中の宿々年に隨ひて貧しくくるしめり、其故も端多けれど、中にも近年以來、公家武家の人々召供すものゝ數多くなり來て、宿々の人馬其數にみたず、其役たすくる所々に至るまで、こと〳〵に皆くるしみ窮れり、玄かのみならず、荒居の渡改りしのちは、海道往來の貴賤、多くは山道をすぎぬれば、海道の宿々は產業をうしなひ、山道の宿々は、人馬つがず、されば國々の役に課せて、諸道宿々の人馬を增し置くべきほどの料をめされて、人馬の數を增れて、後にちかきほどよりより、其役をたすくる事を免除せられば、宿々のものどもいふに及ばず、其役たすくるものども、共に愁苦をまぬかるべし、次に近年山道を經て往還する人々を禁せられば、海道山道の宿々、おの〳〵其生を遂ぐべし、これらの事を始て、すべて道中のものども疾苦の事ども、身みづから其所に至らざれば、いまだ詳なる所をしらず、ねがはくは時々使して、其事を問はしむべきものを、奉行所に屬し給はるべき等の事、前後數十條におよべり、その、ち某にも議せしめられしかば、しるし奉れる事共多かる中に、某御使を奉りて、海道を經過して、身みづから其事を見るにおよべり、往還の人々、召供のものども其數多きがごときは、宿々のもの、うれへにあらず、たゞその役をたすくる近きほとりのもの、うれへなり、其故は前代〇德川綱吉の御時に、宿役人といふものを始め置れて、御料の宿々には御代官所の手代といふもの、其宿々のことをつかさどれり、公役などによりて經過る人々ある時は、宿々のものども、彼役人と心をあはせて、實に用ゆべき人馬の數に倍して、此役をたすくべき所々に催促して、其役にしたがふべき人馬を以て公役の事に應じ、宿宿の人馬をしては往還の旅人を送り迎へて、其賃錢を私にしまた其役たすくべき所々より來れる人馬、わづかも其數にみたざれば緩怠の罪をおほせ、その代りとしては金錢をはたりとりて私にす、されば往還の人々召供のもの多きにあらざれば、その得る所すくなければ、宿々のも

有二其心得一事、〇中略

一江戸、京、大坂其外國々より、町人請負にて令二往來一候御用之諸荷物、近年貫目も重く、荷數も多く、道中人馬大分相立、其上御用之儀を申立、人馬賃錢不足に相拂ひ、其外不埒之仕方ども有レ之由相聞候、向後御定之外、貫目重く不レ仕、尤荷數貫目にしたがひ、相定候人馬賃錢無二相違一拂レ之、少も非分之儀仕間敷旨、其御用達之面々より念を入被二申付一、向後右之類之儀無レ之樣に可レ被二申渡一候、道中にても改レ之、若貫目重く候歟、又は猥に荷數多く不審之義も候はゞ、たとひ御用之荷物之由申とも繼送らず、其所に留置、早速道中奉行江可レ訴レ之、詮議之上、荷物宰領は不レ及レ申、請負人迄可レ爲二曲事一旨申渡候間、可レ有二其心得一事、

一道中宿々之ものども不埒之義有レ之候節は、旅人により其所之問屋年寄等、二日路三日路も召呼び、又は訴訟のために付添ひ參候義も有レ之由相聞候、たとひ宿々のもの不屆之仕方有レ之候共、問屋年寄召呼び候ては、其宿人少ニ成、御用も差支申事に候間、向後は問屋年寄等召呼ひ候儀は不レ及レ申、訴訟のため付添ひ參候事も相止させ、其趣をば道中奉行江被二申達一、奉行所より詮議之上に、急度可二申付一候、可レ有二其心得一事、

右之條々、近年道中之宿々、御定之外ニ人馬多くかゝり、其外旅人不法之事ども有レ之、宿々は不レ及レ申、助鄕村々迄も及二困窮一候由相訴候付、委細穿鑿之上を以被二仰出一候、向後書面之趣、急度可レ被二相守一之候、たとひ組中支配并家來之不法有レ之候とも、其番頭役所主人之越度に可二罷成一候間、其旨を可レ被二相心得一者也、

正德二辰年三月

〔折たく柴の記〕中略此年〇正德二年の三月、道中の事ども御沙汰ありけれ、これは去年二月、我〇新井君美京より歸りし後に、海道の事ども申せしによりて、その三月、朝鮮の聘事に事よせ給ひ、道中の奉行

いたすの由相聞候間、其所支配之問屋名主年寄、堅吟味可仕事、

一所々海道筋において、商人之荷物附送之時分、宿々に有之馬を隱置、馬無之と僞、荷物留置、賃錢取候由相聞候、自今以後、左樣之義於有之は、問屋年寄幷肝煎可爲曲事事、○中略

右之通堅可相守之、總而前方相觸候通、輕き旅人に至迄無滯樣に仕、御用之義は勿論輕き下々迄附送り繼合候節問屋年寄共其外之役人、急度立合裁配可仕候、帳付肝煎等計に任せ置間敷候、此廻狀披見之上、宿付之所々問屋壹人致印判、順々遣之、留之宿より宿次を以可相返候已上、

貞享三年十二月廿八日　　高伊勢○道中奉行高木伊勢守在判

品川　川崎　守口

右宿々　問屋

年寄

〔寬保集成綠綸錄二十三〕正德二辰年三月

定

一往來之面々、其家來幷末々雇之通人足、近來は主人之權威を以、道中ニ而非分之仕方等有之、或は下々可持道具をも人足に持せ、其ものは馬駕籠に乘り、或は賃錢をも不拂ものども有之由相聞候、向後は右之類之不屆無之樣に、雇人足は不及申、其請負之もの迄、急度申付可召連候、自今以後、不法之族も於有之は、道中宿々にて改之、家來幷雇之ものたり共、其所に留置、早速道中奉行江相訴候樣に申渡候間、其旨を可被存事、

一往來之面々、家來幷雇之者に至るまで、駄賃旅籠錢等、無相違樣拂候樣に急度可被申付候、旅籠錢等、或は不相應に催じ候て相渡し、或は無相違請取候由證文仕らせ、相拂はざる輩も有之由相聞候、向後右之通之義ども於有之は、是又早速道中奉行江可申訴之由、宿々江申渡候之間、可

一道中宿々ニ而、高木伊勢守〇道中奉行ものと申輩於有之はとらへ置、此方江可申越候、伊勢守ものにて候はゞ死罪可申付候、他所之者僞にて伊勢守者と申候はゞ、従公儀急度可被仰付候間、何時も左樣ニ相心得、とらへ置可致注進之事、

一如東海道、遊女博奕御停止之旨堅被申付、彌五人組致判形置可申旨、庄屋問屋可被申付事、

右之通、中山道宿々江被申渡、書留させ可被申候、以上、

寛文五年十一月

〔教令類纂初集九十五〕天和元辛酉年三月

一道中江大名衆幷在番衆之飛脚之由假名を申、罷通候もの有之由、穿鑿之上於相知者、當人は不及申、江戸宿有之べく間、可為同罪候、以上、

三月

〔御當家令條二十〕覺

一最前も相觸候通り、くもすけ堅吟味可仕候、于今宿々に相見え之由、其聞え有之候、假脇々之者たりといふとも、出所相知れ候者は、日傭人足等にも可用候、何方之者とも慥に不知もの、其宿へ集り候日傭人足に可罷出と申候共、問屋年寄幷肝煎細に致吟味、宿々に徘徊一切いたさせ間敷事、

一江戸より目明し折々遣し、且又御代官幷領主よりも、まへ方致悪事、唯今くもすけに成、渡世おくり候者共捕へ候筈に候、一夜宛之宿はくるしからずと存、くもすけとまれ候ものとゞめおき申候義可有之候、其宿度々往行いたし候者、はやく心付ぎんみ可仕候、若乍存知一夜之宿は不苦存、相對にて差置、以來穿鑿之上、其者致白狀於相知は、當人は勿論、問屋年寄可為越度事、

一宿はづれの茶屋、或駕籠舁、其外かろき者ども罷在候所にて、くもすけ類疑敷ものに構なく宿

〔問屋諸用留〕文久甲子年〔〇元治元年、元治四年、元〕

乍レ恐以二書付一御屆奉二申上一候

一此度私儀、鍋屋吉郎兵衛小宿株式、親類熟談ノ上ニテ、當子年ヨリ向午年年迄、九七ケ年借受、小宿家業仕度奉レ存候間、乍レ恐此段以二書付一御屆奉二申上一候、以上、

子二月七日

借主　辨天町　德藏
株主　鍋屋　吉郎兵衛
小宿世話役　鍋屋　吉右衛門
問屋頭取　濱田屋　兵右衛門
佐藤半兵衛

御奉行樣　壹枚
沖ノ口御番所樣　壹枚

前書之通屆出、候間、奧印仕候、以上、

蛯子友輔

道中不法取締

〔享保集成綠綸錄二〕寛文元丑年

定

一往〇還〇之〇輩、高札之面を相背、理不盡之儀不レ可二申懸一、又往還之輩ニ對シ、非分申におひては可レ爲二曲事一事、

右之條々可二相守一此旨者也、仍下知如レ件、

寛文元年

〔享保集成綠綸錄二十二〕寛文五巳年十一月

中山道傳馬宿申渡〇中略

者、御評定所幷公事方御勘定御奉行所江、非常之節駈付相勤來候處、天保十三寅年中、駈付ニ不及旨被仰渡候、三拾軒百姓宿者、關東御代官附本所牢御屋敷江、非常之節駈付相勤來候處、御改革後も御差止御沙汰無之、其儘ニ相心得罷在候、

右三組、御改革以前、家業筋稼方旅人宿共、旅人引人差出、手廣之稼方仕、八拾貳軒、三拾軒兩百姓宿者、寺社物詣通懸り之旅人者、止宿不爲致候家業振ニ御座候處、去ル丑年以來、手廣御沙汰相成候ニ付、旅人宿百姓宿も一體之稼方ニ相成差別無御座候、

右御尋ニ付、御改革前後之差別、幷株御停止之節、御勘定御奉行所、寺社御奉行所江旅人宿百姓宿共より差上候御受書寫相添、此段奉申上候、以上、

亥〇嘉永四年十一月　　村松町 名主 源六

〔旅人宿舊記〕

馬喰町四丁目金左衛門店
拾三軒組百姓宿
伊勢屋久次郎 外九人

此もの共儀、百姓宿渡世致方之儀、遂吟味候處、拾三軒組と相唱、百姓宿渡世いたし、當時拾軒有之候處、此度三十軒組之もの共相對之上、右明株より組入いたし、旅人引受方之儀も、組合仕來之通致候筈に相極候旨申候、如何之筋も無之間、已來組合一同是迄仕來之通相守、心得違無之樣可致候、

右之通、被仰渡奉畏候、爲後日仍如件、

寅〇安政元年三月六日　　伊勢屋久次郎 外九人

右之通、御裁許被仰渡候間、以後者被仰渡候趣、少茂違亂無之相守可申事、

音開帳、并京都本圀寺釋迦如來、下總國成田不動尊、御當地江出開帳有之候に付、參詣之旅人可有之處、他商賣ニ而、旅人を留候儀難相成段、御觸も有之候處、親類所緣之由申之、平日差留候者多有之、仲間渡世手薄ニ相成候ニ付、先規御觸場所、本所德右衛門町外三十九ヶ所江差加へ、都合三百十ヶ所、右町々ニおゐて、他商賣之者、旅人差留不申樣、同年二月中、根岸肥前守樣御番所江御願奉申上候處、追々御糺之上、御府內町々江右參詣之旅人ハ、當仲間內ニ限リ、外町々ニ而旅人差留不申樣、御觸渡被成下置候、依之此段舊記江記置候事、

〔諸問屋再興調ニ〕上

馬喰町組小傳馬町組旅人宿、八拾貳軒組百姓宿、三拾軒組百姓宿、右三組旅籠屋共、去ル丑年御改革以後之唱方、并旅人宿百姓宿、御奉行所最寄出火之節駈付相勤、其外仕來之廉々、御改革前後之差別御尋ニ御座候、

御改革後者、馬喰町小傳馬町旅人宿、八拾貳軒百姓宿、三拾軒百姓宿と三組共組銘相除、行事相止メ、總代と唱、家業筋御用之節罷出御用辨いたし來候、

旅人宿御改革以前者、兩御番所樣在方之もの御呼出御差紙、旅人宿ニ限り行事江御渡被遊候處、仲間御停止以來者、三組ニて順番相立、壹人宛御用伺ニ罷出、當番之もの江御渡被遊候、

寺社御奉行所在方御呼出御差紙ハ、御出入之もの有之御渡被遊候所、御出入宿御差止已後者、三組ニて順番相立、壹人宛御用伺ニ罷出、當番之もの江御渡被遊候、

御勘定御奉行所江者、三組之ものより順番を以、行事壹人宛御用伺ニ罷出、當番之もの江在方御呼出御差紙御渡被遊候所、御改革後も同樣ニ御座候、

兩御番所樣御掛り在方御預之者、飯料出方無之分者、旅人宿仲間入用を以相賄度段、明和元申年中、願之通被仰付候處、天保十五辰年以來、御預ヶもの飯料被下置候、八十貳軒百姓宿御改革以前

右之通、山田伊豆守樣江願上候處、喜多村御役所ニ而御糺之上、同年七月十八日、御內寄合相延、翌十九日、能勢肥後守樣御內寄合江可罷出旨、奈良屋御役所より兩名主へ被仰聞、罷出候、被仰渡之趣、左之通、

御觸場所淺草觀音前より龜戸出村町迄凡二十七丁

其方共願之趣者、淺草邊、上野、湯島、神田、所々茶屋饂飩屋ニ而旅人引留、難儀ニ罷成候ニ付、十七年之已前卯年、大岡越前守勤役之節相願、其後十二年已前申年、水野備前守勤役之節相願候處、石河土佐守內寄合ニ而、所々茶屋饂飩屋之者、旅人不相留樣、町年寄申渡候處、近年猥に成候ニ付、此度相願候處、願之通町觸申付候、其通可相心得候、

未七月十九日　月行事　前名之通り

右之通、能勢肥後守樣於御內寄合山田伊豆守樣御懸りニ而被仰渡候、

一近年所々ニ而猥りニ旅人差留幷ニ山手、麴町、本郷、本所、芝邊にて、是迄夥敷旅人差留、公事宿之由ニ而夥敷出來いたし、前々より當仲ケ間江尋來候得意之旅人も、右之者共方より止宿仕候儀も御座候故、家業ニ差障り、右體旅人散亂罷在候而者、御尋者等被仰付候節行屆兼、殊ニ家業薄罷成難儀仕候間、寶曆十二午年十月中、土屋越前守樣御番所江旅人留方之儀、品々申立、御訴訟申上候處、小石川春日町百姓宿家主大黑屋長右衞門外八十壹人、馬喰町四丁目與兵衞店三十軒組百姓宿中村屋茂左衞門外拾九人、同所金左衞門店拾三軒組百姓宿伊勢屋久次郎外九人被召出、再應御吟味之上、牧野大隅守樣御掛ニ相成、猶又御吟味之上、明和七寅年三月六日、同御奉行所樣御內寄合ニをゐて、銘々御裁許被仰渡、○下略

〔旅人宿舊記〕文化七午年、山城國嵯峨釋迦如來、御當地へ出開帳有之節、先年之御觸場所江神田鎌倉町外三十四ケ所差加、御觸渡之儀、根岸肥前守樣御番所江奉願上、猶亦文化十一戌年、淺草觀世

一諸勝負ヶ間敷儀、決而爲致申間敷候事、

一往來之旅人、互ニ論合、奪取申間敷候、旅人留方之儀者、仲間仕法之通可致候事、

一仲間之內、不埒成宿等も有之候ハヽ、密々爲御知可申候事、

右前々より被仰渡之趣致承知候、隨分相互ニ仲ヶ間申合せ、御用向等者不及申上、諸事不埒無之樣大切ニ可仕候、萬一未熟成宿等も有之候ハヽ、何樣ニも可被仰立候、其節一言之儀申上間敷候、爲後證旅人宿仲ヶ間總連判、仍如件、

但壹人ものたり共、國所慥ニ而、緣有方より差圖ニ付、來り候旅人、且訴訟公事合、幷御地頭用ニて其宿江來候者之分者格別、馴染ニ而も無之、無緣之壹人者は、前文之通宿仕間敷候事、

乍恐以書付奉願上候

一馬喰町小傳馬町旅籠屋共申上候、十七年巳前、享保二十卯年、大岡越前守樣御勤役之節、近年所所江外商賣體之者、私共同樣旅人引留候ニ付、以之外障ニ相成、及困窮候旨奉願上候處、被聞召上、別紙ニ書上候、茶屋饂飩屋有之候町々之名主家主方江、他商賣之者、自今旅人差留申間敷樣被仰渡、難有奉存候處、其後又々旅人相留候ニ付、十二年巳前、元文五申年、水野備前守樣御勤役之砌、御訴訟申上候へハ、石河土佐守樣御內寄合江書上候場所名主月行事被召出、先年被仰渡候通、向後可相愼樣被仰渡候處、近年猥ニ罷成候樣相見江候間、前書申上候通、旅籠一式ニ而渡世仕候私共難儀至極ニ奉存候、以御慈悲外商賣人共方ニ而旅人差留不申候樣被爲仰付被下置候ハヽ、難有奉存候、已上、

寬延四未年五月

馬喰町壹丁目　江戸屋
仁右衛門
月行事　外七人

御奉行所樣

〔旅人宿舊記〕旅人宿渡世致方之定

一御入國已來之旅籠屋ニ而、訴訟公事人、幷堂社物詣旅人差留、御江戶口々江引人差出、都而御當地江入込候旅人引受宿仕來候、依之御評定所、兩御番所樣〇南北町奉行所より、御預ケ者御尋者御用被仰付候ニ付、壹ケ町ニ貳人宛月行事相立、右御用大切ニ相勤可申候事、

一御公儀樣御法度之儀、堅相守可申候、幷不意之旅人差留候ハヽ、國所得と聞屆ケ、胡亂ケ間敷者差留申間敷候、勿論家業致方ニ付、壹ケ年ニ兩度、名主江連印致置候趣、左之通、

證文之事

一從御公儀樣前々被仰渡候通、壹人者、一切差留申間敷候事、

一連有之旅人たり共、怪敷體之者一切差留申間敷候事、

一諸用向等之趣意得と承り屆、不束成荷物等有之候ものは心附、密々御知らせ可申候事、

一不相應ニ金子等取扱候者、密々爲御知可申候事、

一旅人之儀、諸用向相濟申候ハヽ、早速相立候樣可仕候、偏々と差置申間敷候事、

一諸御役所樣より、諸出入ニ付御預ケ者有之候ハヽ、急度爲相愼、大切ニ仕可申候、御呼出等之節、自身差添罷出可申候事、

但御預ニ而無之候共、御役所向江百姓等罷出候節者、宿差添罷出可申候、尤御呼出刻限等無遲滯召連罷出可申候事、

一諸御役所樣より、在方百姓呼出シ有之候節、御差紙御渡被遊候ハヽ、隨分大切ニ仕、早速相屆候樣可仕候事、

一公事合ニ參リ候旅人等、荷擔候儀一切致間敷候事、

旅人宿

〔牧民金鑑十八〕嘉永四亥年二月

諸大名休泊之ため、本陣相續いたし居候故、諸大名休泊も出來之事ニ付、中古本陣を取極被置候得共、一體本陣と申は、其時限、諸大名御役人大身小身に不拘、先本陣を取候處、旅籠屋、平百姓、商家、寺院等ニ而も、則其者本陣に有之、譬ば大身之者先約有之候とも、未不相越以前本陣明有之、其所江止宿之御用家、諸大名共罷越候時は、一泊は勿論、御用筋又は譯有之逗留いたし候處江、先約之大身來り候迚、明渡候譯には無之、其筋御差支候はゞ寺院或は可成丈大家ニ而宿を引請可然、則其所其人之本陣に有之候、然者本陣は中古ゟ取極候名目ニ而、宿々ニ寄、一軒も無之場所も有之候得共、只今以聞濟候事に候間、是は臨機應變、其時々公事厚薄に寄、身分上下に拘り候事には無之、其等之事は向々之心得も可有之、第一宿役人共之差働心配可致筋ニ而、兼而心懸置可申事に候、其上御用家旅行諸家共に、不都合之始末有之候向々も有之候はゞ、其節之仕儀、道中奉行所江不捨置伺出、又は御屆いたし候樣、以後心得可申事、

二月十日

〔牧民金鑑十八〕貞享四卯年七月

道中筋におゐて、壹人旅人には宿貸不申由相聞、不詮議ニ候、壹人旅人江宿貸、自然と六ヶ敷儀も候得ば如何と存、おしなべて壹人旅人ニ宿貸不申樣ニ相聞、不屆ニ候、自今以後、不審成ものニ而無之候はゞ、壹人旅人たりといふとも、一夜泊は宿可仕候、急候用有之、かろくいたし旅行可仕ものも普く可有之候、道連も有之重き旅人ゟ、壹人旅人は一入心を添、不自由無之樣可致事ニ候、自分之六ヶ敷儀を厭ひ、往還差支候儀無構、右之仕方不屆千萬ニ候、諸事少々之儀ニ而も相聞候間、不依何事旅人不自由成樣子令露顯者、可為曲事候、勿論宿々旅籠屋共、銘々呼寄可申渡候、

七月　　高伊勢印〇高木伊勢守道中奉行

〔牧民金鑑十八〕明和七寅年十月

近年道中宿々本陣役之もの共、爲差申立も無、困窮一通りを申立、修覆拜借相願候儀粗有之候、都而宿々本陣類燒等之節は、吟味伺之上、輕重に隨、拜借をも申付候事ニ付、修覆等之儀は、如何樣にも自力を以可致處、小破之内、手入等も不致差置候儀故、おのづから難及自力樣に相成候、右は畢竟平生修覆等閑いたし置候ゆへの儀と相聞、不埒之至に候、其上大破におよび、拜借相願候得ば、被仰付事と而已相心得、種々難儀之趣、大造に申立、拜借相願候段、甚心得違之至に候、右拜借之儀は、其村々吟味伺之上申付候義ニ付、甚重き事に候、以來は類燒亦は水難等ニ而、吟味之上、難儀之段相違も無之候はゞ格別、左も無之困窮之申立ニ而は、容易に拜借難申付間、向後本陣役之ものども江右之趣不忘却、小破之内、何分にも自力を以修覆可致候、

右之趣、宿々江被申渡、其方共にも右之心得を以取扱候樣可被致候、以上、

寅十月

右之通、寅十月廿一日、道中方ニ而御書付を以、御代官、御呼出之上、根岸九郎右衛門、原彌一郎申渡候、

〔道中秘書十二〕本陣一統苗字名乘、脇本陣を支配致度由之願、

天明四辰年、道中八十五番中山道守山宿外宿々一件、

當宿之儀、先達而人馬賃錢貳割増被仰付候内、壹割剰錢御貸附利足金宿場江被下置候、右之内貳分通り本陣奉請取候儀、總代を以、飯塚伊兵衛樣御役所江罷出、受取候樣仕度、且宿々本陣一統苗字相名乘、脇本陣を支配に被仰付度旨奉願候處、總代を以、御金受取候儀は、勝手次第之義ニ御座候得共、苗字を名乘、脇本陣を支配いたし度由は、新規之儀に付難被仰付、願之趣御取上無之旨被仰渡奉畏候、若相背候はゞ御科可被仰付候、仍如件、

又江戸ハ先年ヨリ今ニ至リ、市中辻番人、一事一往來ノ使ヲ爲ス者多シ、

〔糊帖縮圖　原紙半切紙三ツ切竪五寸二分横七寸〕

覺

御府内四里四方　町飛脚定直段

一日本橋ゟ芝大門迄　上ヶ置代二十四文

一淺草芝居町迄

一芝大門ゟ品川迄　上ヶ置代三十二文

一山谷ゟ千住迄

一かうじ町ゟ新宿迄

一本郷ゟ板橋迄　返事取代五拾文

一淺草田町ゟ吉原迄

御屋鋪樣方　近所代五拾文　遠方代百文

一諸國代參仕立飛脚　近國壹里ニ付代百文之割　遠國同代百廿四文之割

右之通リ直段ニ而、御用向之節者、よし町ちりん〳〵の町飛脚、立花屋まで御遣し可被下候、以上、

但し高金之品者御斷申上候

〔天保十一年武鑑〕東海道宿々御本陣○○

本陣　脇本陣

品川宿　鶴岡市郎右衛門　同名○缺　同名○缺

川崎宿　田中兵庫　同　佐藤總左衛門

町飛脚

〔百練抄十五後嵯峨〕仁治三年正月廿日、踐祚、御年廿三今月九日以後空位十二ケ日、被待關東飛脚之間也、

〔建治三年記〕建治三年六月八日、宰府脚力參著、宋朝滅亡、蒙古統領之間、今春渡宋之商船等、不及交易走還云々、

〔一代要記後宇多九〕弘安四年六月一日、申刻異國兵船五百艘計、襲來對馬之澳之由、自宰府飛脚到來、

〔總見記十四〕遠州高天神城後詰事

同年〇天正九年五月三日、甲州ノ武田勝頼、又大軍ヲ將テ遠州ヘ出張シ、城飼郡ヘ働キ、高天神ノ城ヲ圍ム、城主小笠原與八郎氏助、脚力ヲ三州ヘ馳テ德川殿ヘ後詰ヲ請フ、

〔太閤記十五〕三奉行諸勢を引連都へ入事

秀家、右筆にて侍る檜村監物をして、注進狀をかゝしむ、

卒以飛力致言上候、一昨日朔日、漢南勢百萬騎、至于當表令出張、擣破小西攝津守要害、既都近邊進來、輝元立花等挑合戰、任勝負區也、〇中略

正月〇文祿二年廿七日　備前宰相豐臣朝臣秀家

安威攝津守殿

〔守貞漫稿五生業〕町飛脚或ハ町小使ト云テ、從來三都トモ有之、蓋定額無之、小民私ニ招牌ヲ出シ、本業ノ間ニ兼之コトナリシカ、

江戸ニテ嘉永中以來、常ニ桂庵ト稱シ、奉公夫ノ口入ヲ業トスル者、芳町ニ五六戸アリ、其一戸及ビ花川戸又芝ト三所ノ者相議シテ行之、夫ヨリ前ハ殊ニ小行ナレバ、一事ヲ以テ一往來ス、故ニ雇錢准之、今數事ヲ集メテ一往來ス、故ニ賃錢下記ニ及ブ、其扮狹宮形ノ張籠ヲ澀墨ニ塗リ、町飛脚、及所名家號ヲ朱漆ニ書キテ是ヲ背ニシ、棒ノ一端前ノ方等ニ、一風鈴ヲ垂レテ、往來呼ズシテ衆人ニ報告ス、是ヲ以テ下ニモ云如ク、チリン〱ノ町飛脚等異名ス、

飛脚例

に御座候、然處其後東海道筋人馬賃錢追々割增申付、當時は右宿々大凡五割に相成、仕法帳取極候節とは、定飛脚問屋共引合不申、連々及困窮候ニ付、右道中五割增中は、仕法帳之內、是迄壹割增請取候分、猶壹割相增、都合定直段ニ貳割增請取度旨、今般右問屋共より願出、取調候處、去る寅年、仕法帳相仕立候節は、前書問屋共申立候通、東海道筋人馬賃錢貳割增中ニ付、右割增中は、仕立飛脚賃銀之分相除、其餘之口々定直段ニ壹割增請取候筈之取極ニ有之候處、東海道筋追々割增申付、當時右宿々之內、先年之通貳割增之分は、品川宿外七ヶ宿のみにて、其外之宿々は不殘五割增申付候儀故、此度壹割相增、都合貳割增請取度旨之願、右道中貳割增中、壹割增請取候割合に見合、不相當之義にも無之、實々不引合、及難儀候段無相違相聞申候間、割增之義、願之通承屆候樣可仕と奉存候、右は先年仕法帳取極候節申上候儀ニ御座候間、猶又此段申上置候、以上、

丑四月〇文化十四年

〔吾妻鏡四〕元曆二年〇文治元年正月六日庚寅、爲追討平家、在西海之東士等、無船粮絕、而失合戰術之由、有其聞之間日來有沙汰、用意船、可送兵粮米之旨、所被仰付東國也、以其趣欲被仰遣西海之處、參河守範賴、〇去年九月二日出京赴西海去年十一月十四日飛脚、今日參著、〇中略就此申狀、聊雖散御不審、猶被下遣雜色定遠、信方、宗光等、但定遠信方者在京都、可相具之旨被仰含于宗光、宗光帶委細御書、是於鎭西、可有沙汰條々也、其狀云、

十一月十四日御文、正月六日到來、今日從是脚力を立とこそ候つる程に、此脚力到來、仰遣たるむね委承候畢、〇中略

正月六日

蒲殿〇源範賴

〔吾妻鏡十〕文治六年正月三日戊午、九郎藤次爲飛脚上洛、是鷲羽一櫃所被進仙洞也、

一同松坂迄六日限幸便御狀壹通　賃銀五匁

但　右同斷

一同山田迄同御狀壹通　賃銀九匁

但　右同斷

一同津迄八日限幸便御狀壹通　賃銀壹匁五分

但　掛日拾日迄、其餘拾日ニ付賃銀四分之割合、

一同松坂迄同御狀壹通　賃銀壹匁五分

但　右同斷

一同山田迄同御狀壹通　賃銀貳匁五分

但　右同斷〇中略

右者今般御公儀樣江家業體、諸仕法幷賃銀等之儀、奉願上候處、以御慈悲願之通被為仰渡候間、此段御承知可被成下候、以上、

文化三丙寅年四月日　定飛脚問屋六軒仲間判

〔道中秘書六〕定飛脚問屋賃銀割增幷賃銀附を板行にいたし武家其外江配る事

定飛脚問屋共賃銀割增願之儀に付申上候書付

御當地定飛脚問屋共儀、飛脚幷諸荷書狀等、京大坂其外江屆賃銀之儀、仲間內區々儀も有之間、不取締不相成候樣申合、夫々品を分け、定直段を仕法帳板行摺ニ仕立、武家幷町方江配置、渡世いたし度段、去る寅年願出、其節東海道筋人馬賃錢貳割增中ニ付、右割增年限中は、定直段に壹割增請取度旨申立、日々直段相應吟味之上、不相當之儀も無御座候間、同年願之趣承屆、右割增之義も書加、仕法帳板行摺にいたし、武家幷町方江配置、以來區々に不相成樣可致旨申渡、其段申上置候儀

但
同參兩餘五兩迄　賃銀八分
同五兩餘七兩迄　賃銀壹匁八分
同七兩餘拾兩迄
其餘拾兩已上百兩迄之割合　賃銀壹匁壹分

一同貳朱判百兩　賃銀貳拾貳匁
但
貳朱判壹片ゟ壹兩迄　賃銀八分
同壹兩餘三兩迄　賃銀壹匁
同三兩餘五兩迄　賃銀壹匁五分
同五兩餘七兩迄　賃銀壹匁八分
同七兩餘拾兩迄
其餘拾兩以上百兩迄之割合　賃銀貳匁貳分

一同 同丁銀壹貫目　賃銀七匁
但小玉銀五拾目迄賃銀六分、其餘五百目迄百目ニ付賃銀壹匁之割、夫ゟ以上貫目之割合、

一同 同御荷物壹貫目　賃銀六匁五分
但掛目百目迄賃銀七分、其餘五百目迄百目ニ付賃銀七分之割、夫より以上貫目之割合、
尤勢州津、松坂、山田迄之御荷物は、壹貫目ニ付賃銀五分御増申受候、

一同 御狀壹通　賃銀貳分
但掛目拾目迄、其餘拾目ニ付賃銀壹分之割合

一京都大坂迄 步行御荷物壹人持　賃銀百匁
但掛目五貫目限、其餘壹貫目ニ付賃銀拾匁之割合、尤道中割增不ニ申請ニ候、

一勢州神戸迄 五日限幸便御狀壹通　賃銀壹匁五分
但掛目拾目迄、其餘拾目ニ付賃銀五分之割合、

一同白子迄 同御狀壹通　賃銀貳匁
但右同斷

一同津迄 同御狀壹通　賃銀三匁
但右同斷

一同　同御荷物壹貫目　賃銀貳拾五匁

但　掛目五百目迄御状之割、夫ゟ以上貫目之割合、

一同　同御状壹通　賃銀六分

但　掛目拾目迄、其余拾目ニ付賃銀三分之割合、

一同　十日限幸便金百両　賃銀拾五匁

金壹歩方壹両迄　賃銀八分

同壹両余三両迄　賃銀壹匁

但

同三両余五両迄　賃銀壹匁貳分

同五両余七両迄　賃銀壹匁四分

同七両余拾両迄　賃銀貳匁

其余拾両以上百両之割合

一同　同貳朱判百両　賃銀貳拾八匁

貳朱判壹片方壹両迄　賃銀壹匁

同壹両余三両迄　賃銀壹匁貳分

但

同三両余五両迄　賃銀壹匁五分

同五両余七両迄　賃銀貳匁

同七両余拾両迄　賃銀三匁

其余拾両以上百両之割合

一同　同丁銀壹貫目　賃銀拾匁

但　小玉銀五拾目迄賃銀壹匁、其余五百目迄百目ニ付賃銀貳匁之割、夫ゟ巳上貫目之割合、

一同　同御荷物壹貫目　賃銀拾匁

但　掛目五百目迄御状之割、夫より以上貫目之割合、

一同　同御状壹通　賃銀四分

但　掛目拾目迄、其余拾目ニ付賃銀壹分五厘之割合、

京都大坂并道中筋共

一、並幸便金百両　賃銀拾壹匁

金壹歩方壹両迄　賃銀六分

同壹両余参両迄　賃銀七分

一同　同御狀壹通　貫銀壹匁
　但、掛目拾目迄、其餘拾目ニ付貫銀五分之割合、

一京都大坂迄　七日限幸便金百兩　貫銀四拾五匁
　但、
　貳朱判壹片ゟ金壹兩迄　貫銀貳匁五分
　同壹兩餘三兩迄　貫銀三匁
　同三兩餘五兩迄　貫銀三匁五分
　同五兩餘七兩迄　貫銀四匁
　同七兩餘拾兩迄　貫銀四匁五分
　其餘拾兩以上百兩之割合、尤亂し金ニ而被ニ仰付ニ可ㇾ被ㇾ下候、

一同　同丁銀壹貫目　貫銀四拾五匁
　但、小玉銀五拾目迄貫銀貳匁五分、其餘五百目迄百目ニ付貫銀五匁之割、夫より以上貫目之割合、

一同　同御荷物壹貫目　貫銀三拾五匁
　但、掛目五百目迄御狀之割、夫より以上貫目之割合、

一同　同御狀壹通　貫銀八分
　但、掛目拾目迄、其餘拾目ニ付貫銀四分之割合、

一同　八日限幸便金百兩　貫銀三拾五匁
　但、
　貳朱判壹片ゟ金壹兩迄　貫銀壹匁五分
　同壹兩餘三兩迄　貫銀貳匁
　同三兩餘五兩迄　貫銀貳匁五分
　同五兩餘七兩迄　貫銀三匁
　同七兩餘拾兩迄　貫銀三匁五分
　其餘拾兩以上百兩之割合、尤亂し金ニ而被ニ仰付ニ可ㇾ被ㇾ下候、

一同　同丁銀壹貫目　貫銀參拾五匁
　但、小玉銀五拾目迄貫銀貳匁、其餘五百目迄百目ニ付貫銀四匁之割、夫より以上貫目之割合、

同三百匁より五百匁迄　同四分貳ハ五分位

同五百匁より八百匁迄　同六分貳七分位

同八百匁より壹貫目餘迄　同八分九分貳一匁位

〔仕法帳〕賃金定

一京都大坂迄四日限仕立　賃金四兩貳歩

但御状壹通ゟ掛目三百目迄ニ限り、其餘百目ニ付賃銀五匁之割合、尤東海道筋江被仰付候節者、壹里ニ付賃銀貳匁之割合、

一同五日限仕立　賃金三兩

但御状壹通ゟ掛目三百目迄ニ限り、其餘百目ニ付賃銀五匁之割合、尤五日限仕立之儀者、江州大津宿ゟ京都大坂迄ニ限り、道中筋之儀は御請負不仕候、

一中山道ゟ京都大坂迄六日限仕立　賃金六兩

但御状壹通ゟ掛目三百目迄ニ限り、其餘百目ニ付賃銀五匁之割合、尤道中筋江被仰付候節は、壹里ニ付賃銀三匁之割合、都而仕立飛脚之儀者、刻廻しを以差立候ニ付、出刻未刻ゟ亥の刻迄ニ相限申候、且又仕立賃金之儀は、道中ニ割増不申請候、

一京都大坂并道中筋共六日限幸便金百兩　賃銀五拾五匁

但貳朱判壹片ゟ金壹兩迄　賃銀三匁五分

同壹兩餘三兩迄　賃銀四匁

同參兩餘五兩迄　賃銀四匁五分

同五兩餘七兩迄　賃銀五匁

同七兩餘拾兩迄　賃銀五匁五分

其餘拾兩以上百兩之割合、尤亂金ニ而被仰付可被下候、

一同　同丁銀壹貫目　賃銀五拾五匁

但小玉銀五拾目迄賃銀三匁、其餘五百目迄百目ニ付賃銀六匁之割、夫ゟ以上貫目之割合、

一同　同御荷物壹貫目　賃銀四拾五匁

但掛目五百目迄御状之割、夫ゟ以上貫目之割合、

十九日　廿一日　廿二日　廿四日　廿六日　廿八日　廿九日

但正月者、二日ゟ差立、十六日相休、十七日早便並便とも差立申候、

五月者、是迄六日相休、七日ニ差立候處、以來六日ニ早便並便共差立申候、

七月者、十二日早便計差立、十六日相休、十七日ニ早便並便共差立申候、

上方筋盆前著之並便者、六月廿九日出限リニ御座候、

九月者、九日相休、十日ニ早便並便とも差立申候、

十二月者、並便廿四日出限ニ相休申候、上方筋年內著之並便者、十六日出限リ、早便之儀者、小月廿八日出限差立、尤每月三五七十之日、休日ニ御座候得共、御用多之節者、臨時ニ差立候儀も御座候、〇中略

右者今般御公儀樣江家業體諸仕法、幷賃銀等之儀委、願上候處、以御慈悲願之通被爲仰渡候間、此段御承知可被成下候、以上、

文化三丙寅年四月日　　定飛脚問屋　六軒仲間判

〔國花萬葉記六之二攝津〕江戸六日本飛脚出日

二日　五日　八日　十二日　十五日　十八日　廿二日　廿五日　廿八日　三度間

同六日飛脚之出日

朔日　四日　七日　十一日　十四日　十七日　廿一日　廿四日　廿七日　每月九十人

〔國花萬葉記六之二攝津〕大坂より諸國飛脚宿

同京〇上リ駄賃之定

書狀一通　片便十匁ツヽ、返事取十五匁、　狀箱　大小見合

荷物重目百匁より三百匁迄　駄賃二分五リ或ハ三分位

一急御用三拾四時程　中急御用四日程
一常體五日程
京都ゟ江戸迄諸役人御用狀問屋賄
一大急御用五日程　中急御用六日程
一常體七日程
大坂ゟ江戸迄御證文付御狀箱刻限付
一急御用三拾六七時
右は御證文に刻限有之、又は御文言之内に、何日迄に可繼送旨書入有之候儀に御座候、且又品川宿之儀は、名主方に而取計、直に御老中方江差出候、此儀次飛脚与相唱、
一中急御用四日程
右は大坂繼所ゟ、平生ゟは急御用之由被仰出候よし添書致し、差送候儀ニ御座候、
一常體五日程
右は繼飛脚のもの持送候分
大坂ゟ江戸迄御用狀問屋賄
一大急御用狀五日半程　中急御用狀六日半程
一常體八日程
右は諸御役人御用狀之儀は、宿々問屋方に而取計、問屋賄与唱候、
右は寶暦十三未年、品川宿相糺候處、右之通書付差出ス、

飛脚早便定日

〔仕法帳〕上方筋早幸便並幸便飛脚定日
每月
朔日　二日　四日　六日　八日　九日　十一日　十二日　十四日　十六日　十八日

一一切金子入封物等は、御銘々様ゟ直ニ私方江御差出之分は、御面前相對と可相心得旨、

右被仰渡候趣、一々承知奉畏候、仍御請證文差上之處如件、

文久元酉年十月廿三日

大町壹丁目
定飛脚問屋島屋佐右衛門代
彦助印

同町
名主
伊兵衛印

御奉行所

前書被仰渡候趣、私共儀も罷出承知仕候間、奥書印形仕候、以上、

町年寄
西村治兵衛印

覺

一馬壹疋

右御用物無遲滯繼送、至江戸瀬戸物町定飛脚問屋佐右衛門江可相屆もの也

月日　奉行衆
御名御印

南部領佐井其外番所之場所ゟ
奥州道中筋日光道中千住宿迄
右宿村役人中

飛脚行程日數及刻限

〔吾妻鏡 六〕文治二年十月十六日己丑、丑刻雜色鶴次郎爲御使上洛、是木工頭範季朝臣、同意伊豫守義行事、殊可訴申之旨、被仰北條兵衛尉、行程被定三箇日也、

〔吾妻鏡 七〕文治三年十二月二日己巳、被進飛脚於京都、行程被定七箇日、是來十一日、法皇熊野御參詣之間、依被進砂金也、

〔驛肝錄〕京大坂宿繼御用狀繼送之事

京都ゟ江戸迄御證文附御狀箱刻限

酉十月廿三日、伊賀守殿於白洲被仰渡、

差上申一札之事

江戸表江數月御差立相成候馬便御用物之儀、以來私方江引受奉願上候處、願之通被仰付候ニ付、左之通被仰渡候、

一御用物幷御奉行樣御始メ御役々樣御在住共、御屆物御役所御渡之節は品書幷道中筋御觸書一同被成御渡候はゝ、荷物等入念大切ニ取扱差立可申、尤渡海之儀は、是迄之御振合を以、其都度都度、御役所ゟ御用船方江御沙汰被成下、右運賃差出候ニ及不申候旨、

一沖之口御番所出判之儀、兼而御沙汰被下置候間、其時頂戴可仕、尤御用物有無ニ不拘、月々六度分者、御役錢御免除被成下候旨、

一御荷物著次第、當所は御役所、江戸表は御會所江早速御屆申上、御觸書返上可仕旨、

一馬便之儀、毎月二日之内、御都合ニ寄御差立可有之旨、

一右馬便之儀、一ヶ月貳疋迄は無賃、若三疋御差立相成候節は、壹疋分は御定賃錢を以御差立相成候間、右賃錢金壹兩貳分貳朱は私方ニ而仕拂置、壹ヶ年分取纏御下ゲ奉願べく、尤其節駄賃帳御渡可被下旨、

一馬壹疋分、貫目三拾貫目之積御渡可被成下候間、私方ゟ江戸表出店迄、往復之品差込候而も不苦、尤御定ゟ過貫目ニ不相成樣嚴重可取計旨、

一荷物葛籠琉球縄筵等之儀は、都而私方ニ而取賄候積、兼而申上候通可相心得旨、

一御荷物之儀江戸表箱館とも、都而無賃ニ而私方ゟ御屆仕候積、尤江戸表御差立相成候、御役々樣幷御在住之内、蝦夷地御詰合、且近在御在住之分は、御役所江差立候間、御用便御差立可被下旨、

中、通帳〆高江壹割宛、御増賃銀申請候事、〇中略

右者今般御公儀樣江家業體諸仕法幷賃銀等之儀奉願上候處、以御慈悲願之通被爲仰渡候間、此段御承知可被成下候、以上、

文化三丙寅年四月日

定飛脚問屋
六軒仲間判

〔御用留〕江戸表馬便差立方賃銀之儀ニ付伺書

酉十一月十七日御小印

印 河津三郎太郎〇以下三人箱館奉行支配組頭

印 伊賀守

同 井上元七郎

同 勘兵衛

同 鈴木尙太郎

村上愛助 印〇箱館奉行調役、以下十三人略、

御勘定方

御目付方

江戸表江馬便差立方之儀、島屋佐右衛門代彥助江被仰付候ニ付、江戸表御評議濟ニ基キ、以來奉行衆始、役々在住之分とも、金子入ニ限、直ニ銘々ゟ同人方江爲差出、其餘は是迄之通御役所ニ而取纏メ、壹駄分凡三拾貫目ヲ限リ、右差立候節は、佐右衛門代之もの御役所江呼出し、添觸一同請書取之相渡、尤當地馬便差立之儀、是迄月々馬貳疋分ニ而相濟候間、別段賃錢取集不申、尤入記扣江は、各之貫目爲相記、前書貫目壹駄分相渡積、右ニ付而は、殊ニ寄三疋ニ相成候哉も難計候間、先五七ケ月も相試候上、不都合之儀も有之候はゞ、其節猶取調相伺候樣可仕、且又沖之口出判役錢之儀は、御用物有無ニ不拘、月々六度分は免除相成可然哉、依之御請證文案、其外取調書類相添、此段相伺申候、

酉九月〇文久元年

御増賃銀壹匁宛申受候事

一都而御大切之御品々、無銘ニ而被仰付候儀も御座候處、荷物造り立候節、取扱方乍行屆兼、長途馬荷之事故、破損等致出來、申譯難相立儀有之候ニ付、以來御上書ニ同品と委敷御書記被仰付可被下候、若無銘ニ而被仰付、萬々一無調法ニ而破損致出來候共、辨金不仕候事、

一長尺嵩高物、水氣鹽物、手薄成箱物類、都而右御品々、以來定賃銀之外ニ、三割御増賃銀申請候事、

一鎧甲類、塗物、瀬戸物、硝子類、右御品々之儀、於道中破損致出來、申譯難相立儀有之、難澀仕候ニ付、以來馬便ニ者御請負不仕候事、

一仕切状と唱、壹ヶ年賃銀何程宛と見積り御請負仕候儀も有之候處、先年從御公儀樣御吟味之筋御座候而、諸帳面取調被為仰付候處、右仕切状之分者、帳面江相記置不申候ニ付、不埒之段奉請御呵、重々奉恐入候、依之以來仕切状之儀者、御請負不仕候事、

一飛脚出日之節、諸用向請取人相廻し候御店も御座候處、夜分及深更、大金銀、亦者御大切成御品品多分遠方持廻り候事故、盗難等之儀、甚心痛仕候間、以來諸用向御持參可被下候、乍併大金銀、或者嵩高成御荷物為御登御座候節者、晝之内御通達被下候旨、早速罷出可申候、自今出日定式ニ請取人相廻し不申候事、

一飛脚出立刻限之儀、是迄甚及遲刻候處、東海道筋御關所并川々越立、都合惡敷罷成、自然と日限致延引候ニ付、以來夜五ツ時限、諸用向御持參可被下候、右刻限過候而御持參被下候分者、次之出日江相廻候間、當日出之間ニ合不申候事、

一都而御請負申上候御品々、萬々一不相屆儀御座候而、取調被仰付候儀も御座候ハヽ、以來三ヶ年限被仰聞可被下候、右年限過候而者、諸帳面取崩候ニ付、取調出來不仕候事、

一去未年ゟ來ル辰年迄、十ヶ年之間、東海道筋江貳割増被為仰付候ニ付、以來定賃銀之外、右年限

筋御差支ニ相成候儀者勿論、其外都而一體之諸用向不辨相成候故、是迄種々手段仕候得共、近來諸海道筋驛々困窮之由ニ而、人馬繼立方自然と延引ニ罷成、誠ニ家業體等閑之勤方仕候樣思召之程、何共心痛仕候、乍併私共難及自力ニ奉存候間、不得止事、乍恐今般御公儀樣江、東海道筋人馬繼立方遲滯不仕候樣、御觸流被下置度段奉願上、猶又私共家業體取締之諸仕法箇條相立以來、永久之規矩ニ相定置申度旨御訴訟仕候處、御吟味之上、以御慈悲願之通被爲仰渡、重々難有仕合奉存候、依之諸仕法左ニ申上候、

一賃銀之儀、是迄不同高下之御請負致候處、不正之段、諸御得意樣方ゟ每度請御察答、申譯難相立候間、此度賃銀可相成丈下直ニ積り立、已來相改、不同高下無之樣、平均之賃銀ニ取極候事、

一京都大坂、幷東海筋江被仰付候御品々賃銀、屆先ニ而請取候樣被仰付候儀も御座候處、度々間違等有之、甚難儀仕候間、以來御當地ニ而賃銀直ニ御拂可被下候事、

一飛脚諸用向、私共御請負仕候儀者、東海道筋、京都大坂迄ニ限り候處、諸國在々江入込候諸用向之分屆。賃。銀。御當地ニ而請取候樣被仰聞候儀も御座候得共、諸國在々夥敷儀故、里數等寀𪜈難相分場所多分御座候ニ付、東海道ゟ脇道江入込候歟、又者京都大坂ゟ在々江入込、屆賃銀難相分場所者、以來先方ニ而御拂可被下候事、

一御狀之類江御上書、金子入𪜈計御書記御持參被下候儀も有之候處、萬々一火盜水難等致出來候節、辨金仕候儀も御座候に付、自今金子何程入𪜈員數御書記被仰付可被下候、以來金子員數御書記無之分者、辨金不仕候事、

一金銀御狀類者勿論、其外何品不寄、御封印被成被仰付可被下候、萬一御封印無之御品者、以來決而御請負不仕候事、

一爲替手形入御狀之儀度々間違御座候而、難澀仕候儀有之候ニ付、以來定賃銀之外ニ、手形入之

一御屋鋪様、幷町方得意方之外、不時ニ被仰付候大金銀荷物、過分ニ御渡被成候節者、其御方之御仕所相札、御請取可申事、

一金銀之儀、封印無之品、決而請取申間敷候、

但金銀荷物書狀等、不寄何層先御尋之儀者、五ヶ年を限るべし、諸用混雜之儀に候得者、五ヶ年相立候上之儀は取調べ出來兼候事、

一金銀之儀者、急飛脚ニ一切爲持申間敷事、

一古來より銘々相勤來諸御屋鋪、幷町方得意方、相互にせり取申間鋪事、

一宰領之者共、於道中不法無之樣急度可申渡事、

右之條々、急度相守可申候、萬一相背候者有之候者、仲間仕法之通相計可申候、依而如件、

寅（○天明二年）十一月　飛脚屋問屋中

一從寬永年中致相續來候處、近年道中人馬差支、家業相障候ニ付、去安永元年巳ノ十一月十七日、道中御奉行安藤彈正少弼樣相願候處、追々御吟味之上、就相違無之、御跡役於桑原伊豫守樣御役所、此度定飛脚問屋名目蒙御免、上下飛脚宿と紛不申候樣、見世先掛看板內掛板、致置候樣被仰渡候、

天明貳年壬寅十一月六日

京屋　伏見屋　木津屋　山田屋　山城屋

嶋屋　大坂屋　和泉屋　十七屋

〔仕法帳〕以書付奉申上候

一諸國飛脚御用向、舊來不相替被仰付、以御慈家業體相續仕、千萬忝仕合奉存候、隨而申上候、近來都而飛脚諸用向、日限及延引候間、定而諸向御差支可有之哉と御察申上候、尤私共家業體之儀者、京都大坂御城內、其外遠國御役先御用、幷御大小名樣御知行所御用奉相勤候間、諸向之御用

〔驛肝錄〕文政四巳年七月、小笠原大膳大夫家來問合挨拶之內、

一飛脚之もの、道中夜通繼之儀、公邊江拘候儀、又者實に不得止事儀は格別、前廉ゟ壹ヶ月に壹兩度と取極、夜通之別觸差出、飛脚往來爲致候儀は難成候事、

〔驛肝錄〕文政四巳年十二月、寺西重次郎江下知書之內、

一奧州桑折、其外陣屋ゟ、江戶表江差出候御年貢金、幷諸荷物等、宿々繼立之儀、陣屋元町方之者へ、賃馬添輸相渡候儀は相止メ、去々卯年、宿々江相渡候由之鑑札江引合、人馬切手宰領之者江相渡、

〔驛肝錄〕午〇文政五年十月二日、御印狀を以被仰渡、

一一體夜通之飛脚ハ、差急之用向ニ而、荷物も輕く無之候而者、自然途中手間取候事ニ付、本馬ニいたし候は稀之儀に可有之、是又小附等之差略を以、輕尻貳疋ニ爲致候樣取計、若又荷造ニ寄、右體ニ難成、たとへ途中手間取候而も、本馬ニ而繼立度旨申候は、勝手次第之事ニ候得共、夜通し繼輕尻を本馬賃錢相拂候儀者、寬政五巳年、御觸有之、本馬を夜通し繼之節、賃錢取極無之候得共、本馬之貫目者、輕尻之一倍ニ付右賃錢之違貳ッ分、本馬之賃錢江不加候而者、不相當ニ候間、たとへば本馬之賃錢四拾八文ニ而、輕尻賃錢三拾貳文候ハヽ、右差引拾六文之違、貳ッ分三拾貳文を前書本馬之賃錢四拾八文江加へ、本馬夜通し繼賃錢之積り相心得可申旨被仰越候事、

〔定飛脚問屋仲間定法帳〕定

一御公儀樣御法度之趣、堅相守可申事、

一荷物貫目之儀者、御定法を相守、私ニ貫目重く仕間鋪事、

附、賃銀之儀者、相互ニ申合、高下仕間敷候、

其段爲御心得、御先役方江御達申置候迄ニ而、渡世ニ付御願筋、其外人數增減等、都而拙者どもに而取扱來候儀ニ付、今般仲間組合復古相成候ニ付而は、前々之通、問屋名目再興可申付見込には候得ども、當時取調中ニ而、治定致し兼候間、追而否可及御達候、此段及御挨拶候、以上、

子〇嘉永五年二月

深谷遠江守

池田播磨守〇二人並道中奉行

〔諸問屋再興調三〕子〇嘉永五年十一月廿五日、安井錦作を以御渡、

播磨守殿〇町奉行へ相談もの

町奉行衆

深谷遠江守

本多加賀守〇二人並道中奉行

室町二丁目久兵衛地借
京屋彌兵衛京都住宅ニ付支配人
吉助

同人方同居
山田屋八左衛門

瀬戸物町地借
島屋佐右衛門

佐内町地借
和泉屋甚兵衛

本石町四丁目金藏店
江戸屋仁三郎

右之者共儀、此度吟味伺之上、伊勢守殿〇老中阿部依御差圖、京大坂定飛脚問屋ニ申付、見世先懸看板も差免し申候、依之御達申候、以上、

子十一月

〔驛肝錄〕寬保三亥年御觸

一飛脚屋共届早飛脚荷物江は、少しに而も金子入間敷事、

（ゝ付）書面定飛脚問屋起立之義は、道中奉行所ニ而申渡有之候義ニ付、於御役所再興可被仰付ものには有之間敷旨、町年寄ゟ申上候趣も御座候間、取調候處、是迄名前帳差出不申由ニ候得共、起立以來道中筋觸流も有之、取締無之候而は、難相成業體ニ付、道中奉行衆江一應御懸合之上、外問屋同樣再興被仰付可然哉に奉存候、依之御懸合書案相添、此段申上候、以上、

亥十一月　谷村源左衛門 〇以下三人略

（隣付）書面定飛脚問屋再興之義、御向方類役ども申上候通、御取扱方ニ相成可然哉ニ奉存候、

亥十一月　仁杉八右衛門 〇以下三人略

道中奉行衆　遠山左衛門尉
井戸對馬守 〇町奉行二人連

諸問屋組合、都而文化以前之通再興被仰出候ニ付、追々取調中之處、定飛脚屋問屋之儀は、安永二巳年、御先役安藤彈正少弼方江取締向願出、天明二寅年、桑原伊豫守、大屋遠江守勤役中、願之通問屋名目差免、宿々觸流有之、冥加金上納いたし候處、去ル寅年六月、跡部甲斐守御先役之節、問屋仲間組合等之儀停止被仰出候ニ付、冥加金不及上納、尤是迄之通、正路ニ渡世可致旨申渡有之、其後去ル午年、呉服町利右衛門地借仁三郎、本石町四丁目住宅ニ付、店預り人淺七儀、新規定飛脚屋相始度旨、御先役久須美佐渡守方江願出、聞屆相成、當時現在人數五人ニ而家業いたし罷在、年來問屋名目相立候段無相違相聞候間、今般再興名前帳、町年寄共江爲差出、以後人數增減代替等可願出旨申渡候見込ニ候得共、元來起立問屋名目差免之儀、御先役方取扱ニ付、御存寄之趣承知致し度、此段及御懸合候、

亥十一月

（下ヶ札）御書面之趣致承知、定飛脚屋共之儀被御申聞候通、天明度先役共伺之上、問屋名目其外とも差免、

一定飛脚問屋

前々ゟ渡世　四人

丑年後新規同業相始候者　壹人

〆五人

右家業體之義は、年久敷相營、安永二巳年、道中御奉行安藤彈正少弼江取締向願出、追々御調之上、天明二寅年、桑原伊豫守殿、大屋遠江守殿御勤役中、願之通問屋名目御免、宿々御觸被仰付、冥加金初百兩、翌年ゟ金五拾兩ツヽ上納仕、渡世相續仕候處、去ル寅年六月、同御奉行跡部能登守殿御勤役中、問屋仲間組合等之儀御停止、冥加金不及上納旨被仰渡、渡世業體之義は、是迄之通正路に可致旨被仰渡候段、前來家業之者共申之候、

但其後同渡世壹人、去ル午年、道中御奉行久須美佐渡守殿御勤役中、新規相始、定飛脚屋仕來之通仕候趣訴出、翌未年六月、願之通被御聞置候旨被仰渡、同年十一月中、開店仕候旨申之候、

右取調候處、書面之通御座候、年久敷組合相立候ものに付、名主共取調、名前印鑑帳差出候得共、起立問屋名目之義、道中奉行衆ニおいて、御免相成候上は、此度町方御役所ニ而、再興可被仰付者には有之間敷哉、印鑑帳差戻可申哉共奉存候得共、素々御支配町人問屋組合之義ニ付、一應道中奉行衆御見込をも御打合之上、御下知可被成下哉、御賢慮奉伺候、依之先ツ差出し候名前帳、幷新古帳面貳冊相添此段申上候、以上、

亥十月

館　市右衛門

喜多村彥右衛門

樽　藤左衛門

黨者多、難儀仕候ニ付宿々御觸御座候樣仕度段、依田和泉守樣江願書差上候處、當御奉行江可ㇾ奉ㇾ願旨被ㇾ仰渡ㇾ候間、右願書差上候ニ付、被ㇾ爲ㇾ遂ㇾ御吟味ㇾ候處、先年も右體之儀有ㇾ之、願之上、延享二丑年、道中御奉行所より東海道宿々御觸有ㇾ之候處、又候東海道は勿論、中山道、甲州道中、奥州日光道中共ニ、無宿體之もの徘徊仕候旨申上候ニ付、請負有ㇾ之通リ人足道中筋ニ而賃錢等も不ㇾ拂、不埒有ㇾ之趣品々相認、五十三繼と記候御箱訴有ㇾ之、右宿々御糺明之上、御箱訴狀之趣相違無ㇾ御座ㇾ候ニ付、去ル寅年、諸向御觸御座候得共、私ども請負之人足宰領之者共、於ㇾ道中ㇾ不埒有ㇾ之儀を御吟味之處、飛脚屋仲ヶ間請負之內、若賃錢等不ㇾ相拂ㇾもの御座候はゞ申越候積、宿々江書狀遣置、承知之印形も取置候處、是迄右體之不埒有ㇾ之趣、宿々より申越候儀無ㇾ御座ㇾ候、飛脚屋之外、通人足請負之者、凡三百人餘も在ㇾ之由御座候得ば、若右之內ニ而不埒有ㇾ之哉と奉ㇾ存候旨申ㇾ上之、私共請負人足道中筋ニ而不埒は無ㇾ之趣ニ付、願之通五海道宿々小揚等、無宿體之もの惡事不ㇾ仕樣御觸可ㇾ被ㇾ成ㇾ下ㇾ間、猶又飛脚屋仲間請負之通人足、道中筋ニ而不埒無ㇾ之樣可ㇾ仕旨被ㇾ仰渡、一同奉ㇾ畏候、若相背候はゞ、御科可ㇾ被ㇾ仰付ㇾ候、仍御請證文差上申處如ㇾ件、

上下飛脚屋六組年番行事
日本橋通壹丁目三郎治店
[illegible]屋 八兵衛
外十六人名前略ㇾ之

寶暦十辰年七月廿九日

道中御奉行所

亥〇嘉永四年 十一月八日來ル、同十二日ヒレ付致し返却、
左衛門尉殿〇町奉行遠山 江相談もの
定飛脚問屋之儀取調申上候書付

町年寄

（朱書）是は寛政元酉年、山村信濃守殿〇町奉行御勤役中、仲間御定被下候趣、仲間古帳面扣有之、其後文政六未年、筒井紀伊守殿御勤役中、仲間取締方相願、御調之上、願之通被仰渡、其砌より名前帳、町年寄江差出、進退仕候處、去ル丑年御改革之砌御差止、

右之通御座候、依之此度名主共書上候、現在渡世罷在候もの共、組合再興被仰付可被下哉、名前帳之儀は、兼而被仰渡候通、私ども方江取置、以後加入讓替等、組合差添可願出段申渡、其刻々御内寄合ニ而、伺之通進退可仕候、則差出候名前帳壹冊奉差上、此段申上候、以上、

亥〇嘉永四年七月

館　市右衛門

喜多村彦右衛門

樽　藤左衛門

（下ケ札）本文名前帳、町年寄江差出候は、文政年間ニ御座候得共、御雙方樣ノ御懸リ分ケ、問屋銘書ノ内ニ有之、且寛政度起元も御座候間取調申上候、

（ヒレ付）書面六組飛脚屋起立之儀は、年古き儀ニ可有之哉、寶暦十辰年七月、道中筋惡黨もの多、難儀致し候由を以、宿々御觸渡之儀、願之通道中奉行衆ニ而被仰渡候節、上下飛脚屋六組、年番行事日本橋通壹丁目三郎治店越前屋八兵衛、其外之者共連名ニ而差出候受證文寫、別紙之通撰要集ニ書留有之、其頃より組合相立居候儀と相聞候間、文化以前之通再興被仰付、名前帳爲差出候儀等、總而町年寄伺之通被仰渡可然哉ニ奉存候、

亥七月　　再興掛り

飛脚屋行事共受證文

差上申一札之事

私共六組飛脚屋之儀、道國御役人樣、御在番樣方、其外御大名方、道中通日雇受負仕候處、道中筋惡

飛脚問屋組合

仁右衛門追放國々構覺

駿河　遠江　武藏　相模　伊豆　甲斐　安房　上總　下總　常陸

〔享保集成絲綸錄二十二〕寛保三亥年八月

總飛脚屋
七人

當閏四月九日之夜、繼早飛脚之荷物、芝宇田川町ニ而被奪取候旨、先達而飛脚屋共一同ニ訴出候ニ付遂吟味、右荷物奪取候者兩人召捕、此度御仕置申付候、右屆繼早飛脚之荷物江者、少ニ而も金子入申間敷旨、其方共仲ヶ間申合ニ候處、此度飛脚屋惣左衛門手代作兵衛取計ニ而、金子入レ遣候段不埒ニ付、飛脚屋奉公相構、主人より暇出候樣申付候、繼飛脚荷物、たとへ金子入不申候共、御用之帳面證文等も入有之儀候、第一飛脚は遠國通用之事ニ候得者、大切之儀ニ候處、當閏四月九日之夜ニ、飛脚權六壹人ニ爲持、品川宿迄遣候段、是迄致來候とは乍申、麁末之仕形、畢竟此儀者、飛脚屋共一同之不念ニ候、向後仲ヶ間申合候而、麁末無之樣ニ致、夜中は別而危事無之樣ニ入念可申合候、屆繼飛脚之義は、向々より請取候節、大切成物は此飛脚ニは難遣旨相斷、夫共不苦急ぎ候由申候はゞ、可差遣候、御用書物等、重而紛失有之候はゞ、仲ヶ間一同可爲不念候事、

〔諸問屋再興調三〕再興六組飛脚屋之儀取調申上候書付

町年寄

此度問屋組合之義、文化以前之通再興被仰付、現在人數を以、追々取調之内、左ニ申上候、

一六組飛脚屋　　前々より渡世相續　百九十八人

但、人數定無之、組合日本橋組、京橋組、芝口組、大芝組、神田組、山手組、　　丑年以後新規渡世相始候もの　拾人

〆現在人數二百八人

道中御奉行所

前書被仰渡之趣、私共義も罷出承知仕候、依之奥書印形差上申候、以上、

右

家主

五人組

右願之通、御聞濟之旨、上野八太郎申渡、證文取之、

（科條類典下七）享保四亥年二月十二日御仕置申渡

駿府兩替町五町目

三右衛門

右三右衛門儀、享保三戌年十二月八日、江戸飛脚宿駿河屋八大夫方ゟ、當所在番松平駿河守組御番衆留守よりの金子入書狀幷當所町人共方江金子壹兩入書狀相渡、右三右衛門請取候而罷登候處、右書狀共、先々江相屆候哉之旨、駿河屋八大夫方ゟ、當所飛脚宿之者江申越候ニ付、飛脚宿之者共致吟味候處、右三右衛門申候は、道中にて痛所出來、歩行難仕、路金差詰候ニ付、無是非町人方江之書狀切解、金子取出遣イ申候、早速其段相辨可申處、貧敷キ者故、金子不相調候付及延引候、御番衆ゟ之書狀は、金子入ニ而候哉、痛所有之、日數遲く仕候故差急候間、道中ニ而取落候哉覺無之旨申之、及出訴候故、三右衛門召呼、吟味之上、牢舍申付置、段々遂吟味候内、御番衆紛失之書狀も、爲差用事ニも無之、金子二兩之儀ニ而候處、無滯致辨濟候旨、番頭松平駿河守方ゟ申越候ニ付吟味之上追放申付候、

京師

大坂三度飛脚屋　船越町　尾張屋惣右衛門　尾張屋吉兵衛　江戸屋平右衛門　津ノ國屋十右衛門

江戸同　佐内町　和泉屋甚兵衛　瀬戸物町　島屋佐右衛門　室町　京屋彌兵衛　西川岸町　大坂屋茂兵衛

右ノ大坂屋茂兵衛、天保中屆金數千兩ヲ遣ヒ、入牢シテ死ス、家モ欠所ニナリ、其後呉服町ニ江戸屋仁三郎開店ス、

右三度ノ外、大坂ニハ西方諸國、及ビ北國、京都、堺、奈良等各別ニ飛脚屋アリト雖ドモ盛ナラズ、皆小行也、」

江戸ニモ關八州等、及奥羽ノ飛脚ヤアリ、東海道ノ間ハ、三都トモニ三度ニ付ス、

〔道中秘書六〕飛脚渡世讓渡之願

差上申一札之事

道中飛脚屋仲間、大芝組品川四丁目喜兵衛店信濃屋文四郎儀病身ニ付、渡世難二相成一候間、右文四郎實甥、赤坂田町五丁目彌右衛門店米澤屋孫太郎江相讓、相續爲レ仕度奉レ願候、右願之通御聞濟被二下置一候はゞ、先達而奉二請取置一候御鑑札之名前、御書替被レ下置候帳面名前印形懸紙仕差上、道々宿宿江は是迄之通、私共ゟ相二達之一、帳面名前印形も懸紙可レ仕旨申上候處、願之通御聞濟被二成下一候旨被二仰渡一、難レ有承知奉レ畏候、仍御請證文差上申處如レ件、

道中飛脚屋大芝組年行事

芝西應寺町源次郎店

金五郎

寛政十午年十月九日

駿河町

備前屋與三兵衛するが丁　　木津や六左衛門同所　　山田屋八右衛門同所

大坂や茂兵衛萬町　　角兵衛新橋南一丁目　　與左衛門同丁

和泉や甚兵衛左内丁

〔守貞漫稿五生業〕飛脚屋

京坂ヨリ江戸ニ往來スルヲ第一トス、號テ三度飛脚ト云、是モ亦京坂ヲ元トシ、江戸ヲ末トス、京坂ヨリ江戸ニ往キ、江戸ヨリ大坂ニ歸ル日數ニ差アリ、大概三十日許ニテ、一往スルヲ並便リト云、是ハ雇錢賤キ故ニ、驛馬ノ閑暇ヲ待テ雇之用フ、故ニ日數定ナシ、

次ニ十日限ト號ケ、或ハ一往或ハ一來十日ヲ限ル、然モ出納ノ日アル故ニ、大略發日ヨリ十二日ニテ達ス、賃錢並便ヨリ貴シ、

六日限ヲ早便リト云、發日ノ時刻ニヨリ七日ニ達ス、然レドモ近年十日限、六日限トモニ、二三日延日スルコト多シ、故ニ特ニ正六日限ト云テ、天保初以來行之、六日限ハ十日限ヨリ賃貴ク、正六日ハ六日限ヨリ又貴シ、正六日出納ノ日トモニ七十二時ニヲ達之、〇中略

右ノ並便以下宰領ト云テ、一夫ヲ馬四五駄ニ附シ、途中掌之テ往來スル也、數駄ノ中一駄乘、カラ尻ト云テ荷ヲ輕クシ、宰領其上ニ乘ル、

並便ハ晝往キ、夜ハ必ラズ宿ス、十日限以下ハ晝夜往テ宿スルコト無之、又特ニ火急ヲ報ズ書簡ニハ、四日限仕立飛脚ト云アリ、是ハ常無之、三都トモ二需ニ應テ發之、大概賃金四兩計也、此仕立ニハ宰領ヲ附セズ、放チ贈リ兼テ毎驛ニ得意ノ者アリテ掌之、毎驛夫ヲ代ヘ續テ遣之、發日ヨリ必ラズ四十八時ニテ達之、

又差込ト云アリ、右ノ仕立アル時、其幸便ニ付スヲ云、賃大略金二三分也、

大津飛脚宿　近江屋太右衛門

右之外諸國之飛脚は、其問屋々々ニ著、

〔國花萬葉記六之二攝津〕江。戸。繼。飛。脚。

本堺町石橋　長兵衛　　同町大和や　孫右衛門

同町豐島や　庄兵衛　　同町布や　伊右衛門

御城中大坂〇御用聞　　同本飛脚宿

こんや丁谷町より西ふく田や　七兵衛　　らうそく丁天神橋筋江戸や　久兵衛

近江町天神町筋西京や　佐兵衛　　瓦町西横ほり二丁ひがし、かみや　六兵衛

舟町天まや　吉右衛門

長崎飛脚宿

白子町小萬物や　喜兵衛　　舟町小倉や　善右衛門

江戸飛脚宿

瀬兵衛丁一丁メふちや　市兵衛　　かこや町二丁目なだや　長兵衛

谷町ほりの備江戸や　半兵衛　　内あはぢ町一丁メ中島や　門右衛門〇中略

大坂より諸國飛脚宿

尾張飛脚宿　　御はらひ筋こんや町京や　庄兵衛

呉服飛脚宿　　四軒町　九郎兵衛

ごふく町　庄兵衛　　同町　太兵衛　　同町　吉兵衛

〔國花萬葉記七下武藏〕上。下。飛。脚。宿。

新橋南一丁メ　同二丁メ　糀町　日本橋南一丁メ新道　石町三丁メ

宮

右拾參ヶ所に差置申候

〔新編相模國風土記稿二十四足柄下郡〕小田原宿

御用物繼所　萬町ニ紀。伊。殿。[illegible]。所。アリ、俗ニ七。里。役。所。ト云、海道筋七里毎ニ設置レ、江戸ヨリ和歌山ヘノ急便ニ備ヘラル所ナリ、

飛脚屋

〔國花萬葉記一上山城〕諸。國。飛。脚。宿。

江戸飛脚　伏見や御幸町竹や町上

大黒屋庄二郎高倉御池上　江戸や吉兵衛錦小路烏丸東

右之外所々ニ數多有之、諸人所知也、

長崎飛脚宿　長崎や五兵衛姉小路新町ひがし

加賀飛脚宿　富小路三條下町

仙臺北國飛脚宿　柳馬場姉小路上町

越前飛脚宿　ゐの熊中立賣下町

大坂より船荷上乘飛脚　堺町錦小路上町

近江や五兵衛柳馬場押小路下　栗山や六兵衛富小路三條上

丹後飛脚宿　松屋權左衛門六角ほれや町

播磨飛脚宿　表ぐや庄左衛門同町

因幡飛脚宿　茂兵衛御池室町西

大坂飛脚宿　十八や庄兵衛衣棚姉小路上

近江や半左衛門柳ばゝ錦上

奈良飛脚宿

し候もの誰に候哉、右飛脚は、時々交代申付候哉、飛脚之もの差置候宅借地に候哉、是等之儀、委敷御承知有之度旨、先達而御申聞御座候、右起立之儀、寛永年中之儀と相見候得共、年古キ儀ニ付難ㇾ相分ㇾ候、右七里之もの締方之儀に付、安永十丑年、〇天明元年御申聞之品有ㇾ之節、相糺候得共、起立之儀難ㇾ分、其段御答申達候、右七里之もの尾張殿中間より、別紙之宿々に両人ツヽ相詰させ、支配は中間頭に而、交代は壹ヶ所壹年ツヽ差置、追々繰替、四ヶ所爲ㇾ相勤候上、五ヶ年目に引拂申候、居所はいづれも借宅に御座候、此等之趣及ㇾ御答ㇾ候樣役人共申候、

十一月

七里飛脚差置候宿々

六郷新町　藤澤　大磯　小田原　箱根　三島　元吉原　由比　小吉田　岡部　金谷　掛川
見付　蒲原　二川　法藏寺　池鯉鮒

紀伊殿御城附挨拶

東海道宿々之内ニ、紀伊殿用向飛脚相勤候者共罷在、右宅を七里継宿と唱候旨、〇中略右は往古より之儀に而、起立等之儀難ㇾ相分ㇾ候、既ニ安永十丑年〇天明元年にも、右等之趣御尋候に付相糺候得共、年久鋪儀に而難ㇾ相分ㇾ候に付、其段御答申達候事に候、右七里之もの、左之宿々に両人ツヽ相詰させ、何れも紀伊殿中間に而有ㇾ之、支配は中間頭に而有ㇾ之候、交代之儀は五ヶ年目に引替申候、尤五ヶ年之内、壹ヶ所に同人差置候儀には無ㇾ之、一ヶ年切に勤、場所之内を繰合相勤させ、一ヶ年に而繰替差支候場所は、二三年も其儘に差置候儀も有ㇾ之候、居所はいづれも借宅に而御座候、依ㇾ之此旨御答候樣に與役人共申候、

七里飛脚差置候宿々

神奈川　小和田　小田原　箱根　沼津　由比　丸子　金谷　見附　新庄　御油　大濱村

繼飛脚

七里飛脚

同斷、東海道佐屋路宿々江觸流、

一紀伊殿月並定飛脚荷物之儀、尾張殿同様之事、

寛政八辰年觸流

一一橋殿月並定飛脚荷物駄數之極無之處、以來一ヶ月上下六度程、壹度三駄限り候間、御定賃錢可受取旨、東海道中山道江も觸流、

〔驛肝錄〕文政五午年十二月廿日、御勘定奉行觸流、定飛脚島屋佐右衛門繼立之事、

一江戸ゟ奥州仙臺迄、毎月三度ツヽ差立ル飛脚、以來定飛脚と認ル會符を差、宰領之もの江も同様認メ候燒印札を爲持、其宿村江も右札を渡置、引合宿村定之賃錢急度相拂、往返可致旨、今般申渡候間、印札無相違分者、是迄之分ハ定之賃錢受取、御用物者勿論、其外之荷物迚も、宿村著到之順ニ可繼立旨、日光道中千住宿ゟ、水戸道中松戸宿迄、夫ゟ水戸往還筋、奥州仙臺迄之宿村觸流有之候事、

〔享保集成絲綸錄十三〕寛永十酉年三月

一次飛脚之儀付而、從江戸大坂迄、宿々の者共江米五千俵被下之事、

一常之宿次、乘物八人、幷御いそぎのり物拾六人之事、〇中略

右之四ヶ條、酒井雅樂頭中屋敷江、年寄中、町奉行寄合、未下刻被申渡之也、

〔道中秘書六〕尾州紀州七里飛脚之事

尾張殿御城附挨拶

東海道宿々之内、尾張殿用向飛脚相勤候者共罷在、右宅を七里繼宿と唱候由、右七里繼被差置候と申儀起立之節、公儀江被申立候哉、左候はヽ、右年月御下知有之度、且當時何宿々々に七里宿有之、何人ツヽ罷在候哉、飛脚相勤候者、尾張殿家來に而、格式何程之ものと申儀、幷支配いた

不受様堅可申付、

〔諸問屋再興調三〕嘉永元申年定飛脚屋共書上之内

京屋彌兵衛　山城屋宗左衛門　木津六左衛門　山田屋八左衛門　伏見屋五衛門

島屋佐右衛門　大坂屋茂兵衛　和泉屋甚兵衛　十七屋孫兵衛

右之もの共儀、近年三度飛脚荷物継立相滯段申達候ニ付、吟味之上、今般京大坂定飛脚問屋ニ申付、見せ先懸看板も差免間、以來荷物江は定飛脚と認候會符を差、宰領之者江も定飛脚と認候燒印札を爲持、宿々江も合札致し置引合、宿場定賃錢急度相拂、往返可致旨申渡間、其旨相心得、右燒印札請取置引合、無相違分は定之賃錢請取、尤御用物は勿論、其外之荷物は宿場到著之順次第不留置、宿人馬に限らす、助郷に而も早速継送り可申もの也、

寅二〇天明十一月五日　伊豫〇道中奉行桑原　御判

遠江〇道中奉行大屋　御判

右宿々　東海道品川ゟ守口迄但佐屋路共

問屋

年寄

川役人共

右同様之御文ニ而、中山道、日光道中、奥州筋宿々江御觸有之候、

〔道中秘書六〕尾州紀州一橋定飛脚之事

寛政元酉年、東海道并美濃路宿々江觸流、

一尾張殿月並定飛脚荷物之義、壹度に七駄を限り、時に寄貳三駄ゟ四五駄位之義も可有之、尤逃貫目無之筈に候事、

延享二年　賃銀改正

定飛脚
三度飛脚

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一定。飛。脚事、其在所之庄屋遠近可召遣、急用之時者、聊遲々仕候者、忽可斬頸事、〇中略

右條々於國中、自今以往可爲龜鑑之條、貴賤共令信用、全可相守、若一言於相背者、忽可處嚴科者也、

依所定如件、

慶長二年三月廿四日　盛親在判
元親在判

〔享保集成絲綸錄二十二〕正德二辰年三月

定

一京、大坂、駿府三。度。飛。脚、近年は貫目重き荷物等有之、其上猥に夜中も相通り、不埒之儀共有之由ニ候、向後在番之面々荷物之外、商人等之荷物堅まじえさるやうに仕り、無據子細有之、夜通しの飛脚差出候はゞ、番頭之證文を以通すべき候、此旨所々の飛脚請負人に申渡、晝夜共に人馬賃錢等、定之通無相違相拂候樣ニ可有之候、道中宿々にても改之者貫目重き荷物有之歟、又は證文無之夜通しの飛脚相通り候はゞ、其所に留置、早速道中奉行江可訴之旨申渡候間、詮議之上、飛脚宰領は不及申、請負人迄可爲曲事事、〇中略

右條々、其所々奉行所幷支配支配より、請負人共江急度可被申付者也、

正德二辰年三月

〔道中秘書六〕京大坂三度飛脚商人荷物差出間鋪事

延享四卯年御觸

一京大坂三度飛脚荷物、貫目重く嵩高成荷物夜通し往來之由、飛脚受負之もの、其外商人之荷物

シテ、西府ノ下知ニ隨ハズト申タリ、〇中略同十七日、伊豫國ヨリ飛脚アリテ、六波羅ニ著、狀ヲ披テ云、當國ノ住人河野介通清、去年ノ冬ノ比ヨリ、謀反ヲ發テ、道前道後ノ境、高縄ノ城ニ引籠ル、

〔愚管抄六〕カクテ京ヘカ。ク。リ。キ。ノボセテ、千萬御前元服セサセテ、實朝ト云名モ京ヨリ給リテ、建仁三年十二月八日、ヤガテ將軍宣旨申下シテ、〇下略

〔太閤記十三〕就高麗陣掟條々

一一里々々に、は。や。み。ち。二人づゝおき候て、名護屋と大坂との用所、早速相叶やうに可有之、

右條々、堅可相守此旨、若違背之義あらば、奉行人迄、告知せ可申者也、

〔太閤記十四〕就于可相責木曾城御書評議之事

如水軒彈正少弼、某之地參陣之由、三奉行之衆承及、以。飛。力。今度御渡海之義、苦辛勞力之由申入侍るなり、

〔京都御役所向大概覺書二〕京都馬借馬持人數次飛脚并拜借之事

御次飛脚之譯

一京馬借ゟ次飛脚人足出候儀、以前者板倉周防守殿時分之もの、大津迄持參候得共、寛永九申年馬替リニ人足可出旨被申付候由、其後板倉內膳正殿時分、寛文九酉年、南都江は伏見迄、大坂は四塚町迄、丹州江は中堂寺村迄、御次飛脚人足可出旨被申付候ニ付、馬借江狀箱請取、上包之儀入念、右所々江遣之、

飛脚沿革

年	事項
元和元年（四百六十二）	三都定。飛。脚。濫觴
寛文十一年（六百）	手板組濫觴（金。飛。脚。）
正德五年（七百八十七）	歩。行。飛。脚。ノ始
寛保三年（八百九十二）	早。繼。飛。脚。ヲ停ム
寛文三年（五百六十八）	町。飛。脚。ヲ開ク
元祿十一年（六百八十）	順番仲間濫觴
寛保元年（八百八十七）	飛脚商早。便。遞送ヲ規定ス
延享元年（八百九十六）	急。便。

飛脚名稱

分有レ之間、所詮雖レ號二早馬一、不レ帶二過書一者不レ可二許容一、若不レ拘二制法一者、可レ召二捕其身一之狀如レ件、

元弘三年八月九日　　　　尊氏在判

〔太平記十四〕諸國朝敵蜂起事

四夷八蠻起リ合テ、急ヲ告ル事、隙ナカリケレバ、匹他九郎ヲ勅使ニシテ、新田義貞猶道ニテ敵ヲ支ントテ、尾張國ニ居ラレタリケルヲ、急ギ先上洛スベシトゾ召レケル、匹他九郎龍馬ヲ賜リテ早馬ニ打ケルガ、此馬ニテハ、四五日ノ道ヲモ、一日ニハ輙ク打歸ンズラント思ヒケルニ合テ、ゲニモ十二月十九日辰剋ニ京ヲ立テ、其日午剋ニ近江國愛智川宿ニゾ著タリケル、彼龍馬俄ニ病出シテ、斃テ死ケルコソ不思議ナレ、匹他乘替々々、日ヲ經テ尾張國ニ下著シ、此子細ヲ左兵衞督ニ申ケレバ、先京都ヘ引返シ、宇治勢多ヲ支テコソ合戰ヲ致サメトテ、勅使ニ打連テゾ上ラレケル、

〔正慶亂離志〕正慶二年三月廿二日、自二鎭西一關東ニ上ル早馬、雜色ノ五郎三郎下著、金剛山ハイマダ不レ被レ破、赤松入道可レ打二入京一之由披露云々、

〔常樂記〕嘉曆元年十月卅日、土御門將軍入道殿、薨御之由早打、十一月七日下著、

〔下學集下態藝〕飛脚ヒキヤク。脚急カクキヤク。脚力

〔運歩色葉集比〕飛脚

〔倭訓栞中編二十一〕ひきやく　善隣國寶記に古記を引く、筑紫飛脚來、注に、急事使者曰二飛脚一と見えたり、續日本紀に脚夫とも見えたり、健歩といひ、又急足といふ、

〔源平盛衰記二十六〕宇佐公通脚力附伊豫國飛脚事

同十三日、〇治承五年二月宇佐大宮司公通ガ脚力トテ、六波羅ニ著、狀ヲ披クニ云、〇中略九國住人菊池次郎高直、原田太夫種直、緒方三郎惟義、臼杵、部槻、松浦黨ヲ始トシテ、併謀反ヲ發シ、東國賴朝ニ與力

被定云云、

〔吾妻鏡三十三〕暦仁二年（○延應元年）五月廿三日壬辰、申刻赤木左衛門尉平忠光、爲六波羅飛脚參著、廿日未刻出京、四箇日馳付、殆如飛鳥、即於前武州庭上下馬云云、

〔帝王編年記二十五後深草〕寶治元年六月六日、關東飛驛參著、是若狹守平泰村（義村二男）舍弟前能登守光村入道已下數百人、謀反發覺之間、自加誅之由也、

〔吾妻鏡五十〕文應二年（○弘長元年）二月廿九日辛酉、關東祗候諸人家屋之營作、出仕之行粧以下事、可令停止過差之由被定之云云、此外嚴制數箇條也、後藤壹岐前司基政、小野澤左近大夫入道光蓮等爲奉行、（○中略）

一早馬事

有變急々時爲聞達也、而近代雖非大事、以早速爲其詮、頗爲人馬之煩、然者自今以後、非殊重事之外、可止急速儀之由、可被仰六波羅矣、

〔帝王編年記二十六龜山〕文永十一年十月十七日、自九國早馬到來六波羅、是去三日蒙古賊人、於對馬島合戰云々、

〔新編追加雜事〕一宿々早馬事

右巡役當番之輩、宿所遼遠之時、急事御使、遂行向其所、加催之間、依歷時刻不慮延引云々、於自今以後者、可儲置宿中也、且可存其旨之由、可被下知宿々也、

〔北條九代記下〕元弘元年四月廿九日、京都飛驛下著、主上（○後醍醐）令亂世給、俊基朝臣張行之由、吉田一品定房內々被申云々、

〔三島社文書〕禁制　海道路次幷宿々狼藉事

或號早馬御持、或稱方々使者、奪取旅人幷在地人牛馬、於宿々宛課雜事、寄事於左右、致種々狼藉之

古事類苑

政治部九十九

下編

驛傳下

〔吾妻鏡 三〕壽永三年〇元暦元年五月十五日壬寅、申剋伊勢國馳驛參著申云、去四日波多野三郎、大井兵衞次郎實春、山内瀧口三郎、幷大内右衞門尉惟義家人等、於當國羽取山、與志太三郎先生義廣合戰、殆及終日爭雌雄、然而遂獲義廣之首云云、

〔古今著聞集 十一好色〕同〇仁治三年正月九日、四條天皇十二歳、禁中にして崩御の事あるよし、のゝしりけれぱ、〇中略同十九日、關東より城介義景早打にのぼりて、ひそかに承明門院へ參て、御位は阿波院の宮〇後嵯峨と定申侍也、公家にはいかゞ御はからひも侍らんと申て、やがて法性寺殿一條大相國へも申入てくだりぬ、

〔吾妻鏡 十七〕正治三年〇建仁元年四月二日辛巳、越後國馳驛參申云、城小太郎資盛、城太郎助永男、長用甥、於當國招北國之輩、擬企叛逆、佐渡越後兩國軍兵雖襲之、資盛振猛威之間、敢不能破陣云云、

〔吾妻鏡脱漏〕安貞元年六月十四日辛酉、六波羅馳驛下著申云、去七日辰剋、於鷹司油小路大炊助入道後見肥後房之宅、菅十郎左衞門尉周則、欲虜二位法印尊長之處、忽企自殺、未死終之間、所襲到之勇士二人爲彼被疵、

〔吾妻鏡 三十〕文暦二年〇嘉禎元年七月廿三日甲申、被仰六波羅條々事、〇中略都鄙之間、有急事之時、相互所立之飛脚、爲早速取路次往返之馬騎用之條、人之所愁也、向後可構乘馬以下事於驛々之由、今日

道中諸入用人馬賃錢、其外被下方の儀は伺可相達、其餘都て別紙の通相心得、向後御供並遠國御用罷越候面々は、諸入用人馬數取調べ、御勘定奉行へ斷書差出候樣可被致候、尤も當十一月より書面の通可被心得候、

右之通、向々へ可被達候、

御役高分限に應じ

一五千石高、上下十六人分の道中諸入用、乘馬一疋の飼料、人足七人分の賃錢、馬三疋の賃錢、○中略

一二十俵以下、同一人五割増同斷、人足一人半分同斷、

但持高場所の者は、御役席同等の者へ引付被下候積、

右之通被下候、尤も御供等にて彼地着の上は、御賄不被下、道中並に御用中諸入用、一日一人永二百文宛、馬飼料永二百五十文宛被下、馬持人足は不被下候、

周防守殿〇松平渡書付　五街道宿々、連々及困窮候折柄、近年物價騰貴、所詮是迄之姿にては、相續難相成趣相聞候に付、今般夫々仕法改正の上、右宿々人馬賃錢、是迄追々割增申渡置候處、右に不拘、當卯十二月より元賃錢の上へ六倍五割增、並東海道の內、今切熱田渡船賃は三倍五割增、其餘五街道船渡川場の分は、都て二倍割增を當分の內御定賃錢可申付、新規高札相渡し、其通り可請取旨申渡候間、可被得其意候、

右之趣、向々へ可被相觸候、

慶應三年九月、御用旅行無賃ノ人馬ヲ止ム、

周防守殿〇老中松平渡書付　五街道筋宿々、連々及困窮候折柄、物價騰貴に付ては、彌疲弊の切迫に付、向後無賃被下人馬御差止相成、御用旅行の面々、分限に應じ、人馬賃錢被下候間、繼人馬並渡船川越等、一般御定の賃錢相拂可致旅行旨仰出さる、畢竟御用途多の折柄、右體仰出され候は、專ら宿驛の疲弊を被爲救候御趣意の程厚く相辨へ、尤も被下人馬高、是迄より御減可相成候、勿論前々度々相觸候次第も有之候へば、彌簡易旅行致し、宿驛難儀不相成樣可致候、且御用物の儀も、同樣向々へ賃錢可相渡候間、荷數等取調べ、其時々可申立候、尤當十一月より、書面の通可被心得候、

右之通、萬石以下の面々へ可相觸候、

役高分限ニ仍テ、人馬賃錢ヲ下ス、

周防守殿〇老中松平渡書付　御上洛御供、並に遠國御用等被差遣候諸役人御番方其外へ、是迄日割御手當等被下候處、當今不容易御用途多の折柄に付、以來別紙の通諸入用被下、且道中被下人馬の儀、近來宿驛疲弊の折柄に付、是迄の往返の人馬賃錢被下之候、尤御朱印並御證文御用柄に寄被下候條、可被得其意候、且御供交代品々御警衛相越候武役の向、隊伍を組罷越候節は、

本馬壹疋貳百文、輕尻壹疋百四拾八文、人足壹人百文に候得は、

平常之夜通繼は

本馬壹疋　三百文　輕尻壹疋　貳百文（本馬之賃錢に成）

人足壹人　（貳人割）貳百文

但夜五ツ時ゟ曉七ツ時迄

晝之早追繼は

本馬と輕尻之違丈貳ツ分增

本馬壹疋　三百文　輕尻壹疋　貳百文（本馬之賃錢に成）

人足壹人　（壹人七分五厘割）百七拾貳文

但曉七ツ時ゟ夜五ツ時迄

夜之早追繼は

本馬壹疋　四百文　輕尻壹疋　三百文

人足壹人　（貳人半割）貳百四拾八文

但夜五ツ時ゟ曉七ツ時迄

右之通相心得、餘計に賃錢請取候儀は勿論、人馬遲滯不致、御差支之儀等無之樣、精々心付取計尤前書之割合を以、賃錢御拂方未御心得無之御飛脚には、無禮之義等無之樣、宿役人共ゟ申立候賃錢可請取旨被仰渡、一同承知奉畏候、且先宿々江は私共ゟ可申通段被仰渡、是又承知奉畏候、仍御受證文差上申處如件、

文政七申年十一月　　出口四ヶ所宿役人總代

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年九月、五街道人馬賃錢六倍五割ヲ增ス、

文政五午年七月、所司代江之御狀案、

當春參向之公家衆、其外地下官人等之內、東海道旅行之節、荷物過貫目、又は過荷物有之、御朱印幷證文人馬に而不足いたし、右之外賃錢可相渡處、歸京之上可相渡由を以、家來ゟ宿方江書付相渡、又は其儘旅行之向も有之由に候、歸京之節は、別段之譯を以、當年限御朱印證文之外、增人足相渡候處、人足不足に而、賃錢拂之分、是又前書同樣之取計にいたし候向も有之哉に相聞候、尤右賃錢拂之分、歸京之上、早速夫々宿方江可相渡儀には可有之候得共、右樣之取計に而は、宿方取締にも相拘り、且は禁裏御所方ゟ伊勢江奉幣使を始、攝家宮門跡方御使に而旅行之面々も、人馬賃錢可拂立分、歸京之上可相渡由に而、拂方滯候類も有之、參向之公家衆取計に泥み候哉にも相聞候間、右は全家來共之取計にも可有之候得共、道中宿々取締に付而は、先達而相達候趣も有之事に候間、以來右樣之儀無之樣可致旨可被申達候、委細之儀は、道中奉行ゟ御附之もの江申達に而可有之候、以上、

七月　　連名

松平和泉守殿

(公裁日記二)一御用之外、諸向ゟ夜通繼人馬賃錢請取方、出口四ヶ所江申渡候請證文、

差上申一札之事

都而御用之外、諸御向ゟ御差急之御飛脚中、御往返有之候砌、夜通繼人馬賃錢受取方之儀、當七月中被仰渡、御請證文差上候處、猶又御取調之上、晝幷夜之、早追繼は、左之割合を以、賃錢可請取旨被仰渡候、

縱令ば

御定賃錢

一諸家樣方御通行之節、繼人馬之義、廿五人廿五疋迄は御定賃錢請取之、其餘御相對雇に相成候義に而、尤御高之御多少によらず、右御定人馬高は御同樣之事、

但格別之譯柄有之、御奉行所に而御聞濟之上、廿五人廿五疋ゟ餘計之人馬に而も、御定賃錢に而繼立之義、先觸有之候御向も可有之哉に付、其節は御先觸通り繼立、其段日〆帳に相認置可申候、御家來衆は貳拾五人廿五疋に候得共、是又前同樣相心得可申候、

一御大家樣方御名代等は格別、其餘御用に付御通行之御方々樣、繼人馬之儀、百人百疋位、右之御家中引越等は、五拾人五拾疋迄は御定賃錢請取之、其餘御入用之分、御相對雇に相成候事、

右之通相心得、人馬割當いたし、尤日〆帳は勿論、御通行之御向々江差出候人馬賃錢請取書江も、間違無之樣相認可申、尤乘物山駕籠等は、事馴候もの差出候而も、荷物同樣には難成間、賃錢御拂立之人數相減之義致間敷、前書之趣、先宿々江も可申通段被仰渡、承知奉畏候、仍如件、

大貫次右衛門御代官所
東海道品川宿
役人總代
問屋　市右衛門
年寄　市郎左衛門

文政五午年三月九日

道中御奉行所

右之通、板橋、千住、内藤新宿役人共江も申渡、同文言に付略之、尤千住宿請文には、但奥州道中、水戸道中、例幣使道、壬生道、岩槻道とも可申通旨之文段有之候事、

（道中秘書二）參向之公家衆、其外增人馬賃錢、歸京之上可相渡由に而、拂方滯候義無之樣所司代江之御狀案、

上申達候心得に御座候、無程參勤交代之時節にも罷成候間、此段奉伺候、

〔道中秘書二〕諸荷物人足掛之義に付四ヶ宿請證文

差上申一札之事

御旅行之御向々、御繼立いたし候荷物人足掛之義、强弱に寄、賃錢御拂之人數ゟ相減、又は相增候とも、都而賃錢は貫目次第之義に而、人數之多少に拘り候筋に無之段、今般御向々江御達被遊候間、其旨相心得、懸人數相減御繼立いたし候節は、大丈夫之人相撰差出、於途中御差支等に不相成樣取計可申、右に付而は、宿々日〆帳認方に寄、自然助鄕村々往々疑惑も可生哉に付、右認方幷諸家樣方御通行之節、人馬之義とも、左之通被仰渡候、

一長持壹棹三拾貫目　人足六人
　此懸人足何人　此賃錢何程

一具足櫃壹荷拾貫目　同貳人
　此懸人足何人　此賃錢何程

一兩懸挾箱壹荷九貫目　同壹人八分
　此懸人足何人　此賃錢何程

一合羽籠壹荷七貫目　同壹人七分
　此懸人足何人　此賃錢何程

一竹馬壹荷四貫目　同壹人
　此懸人足何人　此賃錢何程

一挑灯籠壹荷三貫目　同壹人
　此懸人足何人　此賃錢何程

候由、

東海道宿々本馬駄賃覺

	元駄賃	二割増
一品川	百拾三文	百三拾六文
六郷川	拾五文	拾八文

略○下

道中筋於宿々繼立候諸荷物人足掛之儀ニ付、申上候書付、

〔驛肝錄〕文政五午年閏正月十六日、出羽守殿〇水野老中江青木忠左衞門を以上ル、

舊臘道中筋御取締ニ付、御觸御座候內、荷物貫目御定之通相心得、其荷物江貫目書記候木札を付差立可申、其上貫目改所ニ而、猶相改候事ニ御座候、縱令ば長持貫目有之候へ者、人足九人懸り之御定ニ相當申候、步行持之品、右之通貫目ニ應じ、人足相懸り候而者、殊外繼立多人數ニ相成、寄人足馬等之見込も不相知、兼而之御手當も差支可申候、素々之心得方も、四拾五貫目之荷物ニ而も、宿人足等之强勢之荷物は、貳三人ニ而も持送り候儀ニ有之、又在方虛弱之人足共者、貳拾貫目四人持之長持をば、八九人ニ而持送候者も有之候、是者其人足之强弱ニ任せ、人數多少を旅人より論候譯ニは無之、賃錢は貫目次第に相拂、强き人足者貳人ニ而三人分之賃錢も請取、弱き人足は壹人分之賃錢を兩三人ニ而分チ取候事に御座候、右は兼而より之心得に御座候、併旅人方ニ而者、不案內之向も可有之候間、賃錢を拂候而者、其賃錢丈之人足相懸り不申候而者賃錢相拂候委も不相見候間、是非相懸候樣可申談候、其節一通り尤之儀故、問屋役人共取扱兼可申候、左候はゞ差掛り殊之外難澀仕、且者不穩次第出來可仕哉に奉存候、既に此度新井渡場御普請差遣候者共より、風聞書差出候趣に而も、宿役人心得方も居り不申、怪踏罷在候儀に御座候間、旅人方心得之儀者、私共ゟ夫々申達候樣可仕哉に奉存候、左候得者、堂上方其外諸侯方江も申達候儀御座候間、此段御內慮奉伺候、尤差懸り候而、御用之向江者、無急度心得方申談置可申と奉存候、其餘は伺之

一荷なし〆高
錢壹貫貳文　内百六拾四文 右同斷

一人足壹人〆高
錢七百五拾九文　内百貳拾五文 右同斷

〃

一日光坊中より壬生通、岩槻通り江戸迄、道法合三拾五里半貳拾間　但馬繼十九宿

一本荷駄賃〆高
錢壹貫五百文　内貳百五拾文 二割まし

一荷なし〆高
錢九百九拾四文　内百六拾四文 右同斷

一人足壹人〆高
錢七百五拾壹文　内百三拾三文 右同斷

〃

一甲州道信州諏訪迄道法合五拾三里貳町貳拾三間　但馬繼四十四宿

一本荷駄賃〆高
錢貳貫五百七拾八文　内四百三拾壹文 二割まし

一荷なし駄賃〆高
錢壹貫七百文　内貳百七拾九文 右同斷

一人足賃〆高
錢壹貫貳百九拾七文　内貳百拾六文 右同斷

〔御觸并御書付留　五〕一人馬賃錢、宿繼を以先達而拂置、通行いたし候面々も有之候得ども、右之内には賃錢不足いたし、先宿迄不行屆義も有之由相聞候間、向後右體之儀無之樣取計、萬一不足之節は、通行之當日急度相拂候樣可被申付事、〇中略

右之趣、向後急度可相守候、假令組中支配并家來之不法有之候共、其番頭其役人之越度に相成候間、其旨可存者也、

天明四辰年六月　久〇久世豐後守〇以下三人略、

〔驛肝錄〕文化十三子年二月、秋月勇之進ゟ、守屋權之丞、輕部七藏 〔江〕並勘定奉行、相尋候處、附札に而來ル、

東海道宿々本馬駄賃、并川越賃錢書付、伏見渡船之賃錢等は、道中方取扱に無之、角倉與市方取計

一江戸より草津迄道法合百貳拾九里拾五町五拾三間　但馬繼五十七宿

人足壹人ニ付
錢五拾七文　內拾貳文右同斷

一本荷壹駄〆高
錢五貫九百四拾八文　內壹貫文三割まし

一同荷なし駄賃〆高
錢三貫九百壹文　內六百五拾壹文右同斷

一人足賃〆高
錢貳貫九百七拾九文　內五百文右同斷

〻

佐屋路道法合九里船路共　馬繼四宿

一登り本荷壹荷
錢貳百四拾貳文　內三拾九文右同斷

一同荷なし同斷
錢百五拾八文　內貳拾六文右同斷

一人足賃同斷
錢百貳拾三文　內貳拾貳文右同斷

〻

右之外佐屋より桑名之船賃

一背物壹駄
錢三拾貳文　內五文三割まし

一馬壹疋口付共
錢四拾貳文　內七文右同斷

一人足壹人
錢拾七文　內三文右同斷

〻

一水戸より佐倉へ道　水戸佐倉道宿々ニハ助郷村ハ無之、水戸殿御通之節計引付ニ而人足馬出候由ニ而、助郷と定候村ハ無之、尤御證文も無之由、享保六丑年十二月御目付壹岐守殿御掛りニ而、道中方へ承り候處、右之通申來、

一江戸より千住通、宇都宮通日光坊中迄馬繼、道法合三拾六里拾貳町貳拾間　但馬繼二十宿

一本壹駄〆高
錢壹貫五百拾五文　內貳百五拾文二割まし

(地方落穂集十)品川附出荷物貫目御定書之事

一江戸より大坂迄　道法百三拾七里四町壹間　但馬継五拾六宿外人足改壹宿

但寶永四亥年十月、地震ニ付道付替、此度十三町增、

一登り本荷駄賃〆高錢七貫七拾三文　内壹貫六百四拾貳文此度三割まし

一同荷なし駄賃〆高錢四貫六百七拾五文　内壹貫七拾五文右同斷

一同人足賃〆高錢三貫五百文　内八百文右同斷

一下り本荷駄賃〆高錢六貫九百四拾文　内壹貫貳百五拾九文右同斷

一同荷なし駄賃〆高錢四貫五百五拾九文　内壹貫貳拾七文右同斷

一同人足賃〆高錢三貫四百四拾五文　内七百六拾七文右同斷

一江戸より京迄　道法百貳拾六里六町壹間　但馬継五拾三宿

一登り本荷駄賃錢六貫六百七拾文　内壹貫五百三拾三文右同斷

一同荷なし駄賃〆高錢三貫七拾文　内壹貫拾文右同斷

一同人足賃〆高錢三貫貳百七拾五文　内七百五拾七文右同斷

一下り本荷駄賃〆高錢六貫四百七拾五文　内壹貫百六拾八文右同斷

一同荷なし駄賃〆高錢四貫三百七拾四文　内九百六拾六文右同斷

一同人足錢三貫貳百貳拾五文　内七百貳拾五文右同斷

右〆高之外

荒井桑名舟賃兩割合

荷物壹駄〆高錢百四拾六文　内三拾壹文此度三割增

馬壹疋口附共錢百四拾五文　内三拾壹文右同斷

文、上高井戸江壹駄に付百三拾五文、乘懸荷は人共に同前、荷なしに乘は八拾七文、人足賃は六拾六文可ㇾ取ㇾ之、

但泊々に而木賃、主人壹人貳拾七文、召仕一人拾三文可ㇾ取ㇾ之、馬一疋に貳拾七文可ㇾ取ㇾ之者也、

元祿三年五月　　奉行

元祿五申年十一月

輕井澤宿札場に建置候高札

一坂本輕井澤之間難所故、人馬共に令ㇾ困窮に付、輕井澤ゟ坂本江本荷壹駄拾九文、荷なしは拾三文、人足賃は拾文、向後增ㇾ之者也、

申十一月日

寶永四亥年七月

覺

一近年道中宿々令ㇾ困窮ニ付而、此度駄賃錢、東海道は三割、脇之宿々は二割增之間、江戸より品川へ駄賃錢壹駄ニ付九拾四文、乘懸荷は人共に同前、荷なしに令ㇾ乘は六拾壹文、人足賃は一人ニ而四拾七文、千住へ壹駄ニ付九拾壹文、乘懸荷は人共に同前、荷なしに乘は六拾文、人足賃は四拾六文、川口へ壹駄ニ付百四拾文、乘懸荷は人共に同前、荷なしに乘は九拾文、人足賃は六拾七文、板橋へ一駄ニ付九拾四文、乘懸荷は人共に同前、荷なしに乘は六拾壹文、人足賃は四拾七文、內藤新宿へ一駄ニ付六拾七文、乘懸荷は人共に同前、荷なしに乘は四拾四文、人足賃は三拾四文可ㇾ取ㇾ之、但泊ニ而木賃主人壹人三拾五文、召仕壹人拾七文可ㇾ取ㇾ之、馬壹疋ニも三拾五文可ㇾ取ㇾ之者也、

寶永四年亥七月　　奉行

一本錢ニ貳割增の駄賃錢取候義は、先達而從此方申遣候事、〇中略

右之通、中仙道宿々江被申渡、書留させ可被申候、以上、

寛文五年十一月

〔教令類纂初集九十五〕天和元辛酉年三月

東海道宿々二割增之覺

一江戶より品川江　貳里

本駄賃　百四文　から尻賃　六拾四文　人足賃　四拾八文〇中山道、日光道中、甲州海道亦同、故略、

當年道中就困窮、右之通駄賃人足賃とも增候間、當酉三月十五日より同十月晦日迄、如書面取之、十一月朔日よりは、延寶三年卯正月可爲相定通候、以上、

三月

右之通、道中筋駄賃人足賃貳割增ニ被仰付候間、此旨相守可申候、若違背仕候はゞ、可爲曲事もの也、

三月

〔享保集成絲綸錄二十〕元祿三午年五月

一近年道中宿々令困窮に付而、今度駄賃錢、東海道は壹割半、脇之宿々は一割增之間、江戶ゟ品川江駄賃錢、一駄に付七十二文、乘懸荷は人共に同前、荷なしに合乘は四拾七文、人足賃は一人に而三十六文、千住江壹駄に付七十六文、乘懸荷は人共に同前、荷なしに乘は五十文、人足賃は三十八文、川口江一駄に付百拾七文、乘懸は人共に同前、荷なしに乘は七十五文、人足賃は五十六文、板橋江一駄に付七十八文、乘宿荷は人共に同前、荷なしに乘は五十一文、人足賃は三十九文、下高井戶江壹駄に付百貳拾五文、乘掛荷は人共に同前、荷なしに乘は八拾文、人足賃は六拾壹

ちりふより鳴海へ二里半十町七十文 四十七文　鳴海よりみやへ一里半三十一文 廿五文

みやより桑名へ七里ふなわたし一駄荷五十七文 のりかけ人共に五十七文

のり合一人廿四文　六人かご一貫四百廿四文　五人かご一貫二百廿四文

四人かご一貫文　三人かご八百文

又下り駄ちんの事

のりかけ人共に七十二文　一人のりあひ廿八文　六人かご一貫五百四十三文

五人かご一貫三百六十四文　四人かご一貫百六十四文　三人かご九百八十五文

桑名より四日市迄三里八町八十三文 五十四文　四日市より石藥しへ二里半七町七十文 四十五文

石藥しより庄野へ廿五町十九文 廿三文　庄野より龜山へ二里四十九文 三十三文

龜山より關へ一里半三十九文 二十五文　關より坂の下へ一里半六町四十八文 三十一文

坂の下よりつち山へ二里半七十九文 四十九文　土山より水口へ二里半七町七十文 四十五文

みな口より石邊へ三里半八十文 五十二文　石べより草津へ二里十六町七十三文 四十八文

草津より大津へ三里半六町九十二文 五十二文　大津より京へ三里九十三文 六十文

右江戸より京までの行程合百廿六里四町、江戸より京までの駄賃合三貫八百六十四文、

〔享保集成絲綸錄二十二〕寛文五巳年十一月

中仙道傳馬宿申渡

一乘物六人之賃を取可ㇾ申事

一山乘物は四人之賃同斷○中略

一五貫目迄は、からじり同前に駄賃錢取可ㇾ申候、それより重荷物は本駄賃同前たるべき事、

一夜はからじり馬は、本駄賃同前可ㇾ取ㇾ之事、

江戸日本橋より品川まで二里　本駄ちん五十三文　中だちん三十四文

品川より河崎へ二里半　六十三文　四十二文

金川よりほどがやへ一里　二十五文　十七文

戸塚より藤澤へ二里　四十九文　三十三文

ひらつかより大磯へ廿町　十九文　十三文

小田原より箱根へ四里　二百十九文　百三十八文

三島より沼津へ一里半　卅八文　廿五文

原より吉原へ二里半　六十二文　四十文

かん原より由井へ一里　二十五文　十七文

興津より江尻へ一里二町　廿七文　十八文

府中よりまりこへ一里半　四十七文　廿九文

岡べより藤江田へ一里廿六町　四十五文　廿九文

島田よりかなやへ一里　四十五文　廿七文

西坂より懸川へ一里廿九町　四十七文　三十文

袋井よりみつけへ一里半　三十九文　廿五文

濱松より舞坂へ一里十町　六十九文　四十五文

あち井より白須賀へ一里十町　卅二文　廿二文

ふた川より吉田へ一里半四町　六十五文　四十三文

ごゆよりあか坂へ十六町　十三文　八文

ふぢ川より岡崎へ一里七町　四十四文　廿九文

河崎より金川へ二里半　六十三文　四十二文

程谷よりと塚へ二里　五十六文　三十七文

藤澤より平塚へ三里　八十八文　五十七文

大磯より小田原へ四里　百五文　六十八文

箱根より三島へ三里廿八町　百九十四文　百廿五文

沼津より原へ一里半　卅八文　廿五文

吉原よりかんばらへ三里　八十九文　五十四文

由井より興津へ二里　七十三文　卅九文

江尻よりふちうへ二里廿町　六十七文　四十三文

まりこより岡邊へ二里　七十文　四十三文

藤枝より島田へ二里　七十文　四十三文

かなやより西坂へ一里廿四町　五十九文　卅七文

かけ川より袋井へ二里十六町　六十二文　四十文

みつけより濱松へ三里七町　百十文　六十五文

舞坂より舟渡廿三町　百三十文一人へ四文　乗掛共に十五文

白須賀より二川へ二里六町　五十二文　三十五文

吉田よりごゆへ二里半四町　六十五文　四十三文

赤坂よりふじ河へ二里九町　五十八文　三十八文

岡崎よりちりふへ三里八町　七十八文　五十文

一品川より江戸迄駄賃錢壹駄ニ付四十二文荷物なくして令乘ば貳拾七文川崎江五十文荷物なしにのらば三拾三文歸馬駄賃も同前たるべし但夜通し急相通る輩計は荷物なしに乘るといへ共夜の分は壹駄荷の積りに駄賃錢可取之事〇中略

右可相守此旨者也仍執達如件

萬治元年十一月　　奉行

〔牧民金鑑十八〕萬治三年十一月八日

定

一從江戸品川迄駄賃錢一駄ニ付五拾三文乘掛荷物は人共に同前荷物なくして令乘者三拾四文人足は壹人ニ而廿七文千住江五拾八文荷なし乘は三拾八文人足賃は廿九文板橋江六拾文荷物無之時は三拾九文人足賃は三拾文下高井土江九拾三文荷物なくして乘ば六拾貳文人足賃は四拾七文但夜通し兼相通候輩は荷なしに乘といふとも夜分は壹駄之積駄賃錢可出事

附五貫目迄之乘掛荷物は荷なしに乘駄賃錢同前たるべく夫より重き荷物は本駄賃錢可取事

一人馬之儀御定之外增錢を取もの有之ば可爲籠舍幷其町之問屋年寄爲過料鳥目五貫文宛人馬之役之者は家一軒より百文宛可取事〇中略

萬治三年十一月八日

下枝忠兵衞殿

落合三郎左衞門殿

〔東海道名所記一〕東海道駄賃付

右條々堅相定訖、若於違背之輩は、速可處嚴科者也、如件、

慶長十六年亥七月日　　伊賀守

清右衛門

石見守

定

一御傳馬并駄賃之荷物、壹駄ニ付、四拾貫目之事、

一江戶より品川迄上下之荷物、壹駄ニ付錢三拾四文、板橋江三拾九文、歸馬之駄賃右同斷、

附人足賃は、馬之半分たるべき事、

一御定之外、增錢取もの有之ば五十日可爲籠舍、并其町之年寄過料として五貫文、其外家壹間ゟ百文宛可出事、○中略

右可相守此旨者也、仍執達如件、

寬永二年八月廿七日

〔享保集成絲綸錄二〕寬永十酉年七月

定○中略

一御定之外增錢取候者有之ば三十日牢舍、并其町々年寄爲過料五貫文、其外家壹軒より百文宛可出之事、○中略

右可相守此旨者也、仍執達如件、

寬永十年七月八日　　奉行

萬治元戌年十一月

定

定路次中駄賃之覺

一新居より白須加まで、荷物壹駄四拾貫目ニ付びた錢廿四文、同新居より前坂へ之船賃、壹駄ニ拾八文、のりかけニ拾文之事、但一人ニびた六文ツヽ舟せん也、

一乘尻一人は拾八貫目ニ定候、幷少シのりかゝり荷物成共はかりにかけ、右之積を以、無遲々樣早々付送可被申事、

一びた錢は、永樂ニ六文立に取引可被成事

右之條々、御奉行所より被仰付候間、如此書付置申候者也、如件、

慶長七年六月十日

ならや
市右衛門花押

樽や
三四郎花押〇江戸町年寄二人迄

新井町中

裏書ニ

伊奈備前黒印〇關東郡代

板倉四郎右衛門黒印〇江戸町奉行

加藤喜左衛門黒印

大久保十兵衛黒印

〔新編相模國風土記稿高座郡六十〕藤澤宿　問屋場二〇中略

慶長年間、當所ヨリ直ニ武州橘樹郡程谷宿へ繼送リシ事、同所民濟兵衛所藏文書ニ見エタリ、〈中略〉

一通日、路次中駄賃之覺、ホドガヤヨリ藤澤迄、荷物壹駄四拾貫目ニ付永樂拾八文云々、慶長七年六月十日、ホドガヤ町中、奈良屋市右衛門、タル屋三四郎各奉押アリ、

〔御當家令條二十〕定

一從江戸品川迄上下駄賃、荷物壹駄四拾五貫夕ニ付京錢廿六文、同板橋迄三拾文たるべき事、

附、人足賃は、馬の半分たるべき事、〇中略

人馬賃錢

〔昆陽漫錄〕驛馬

豐臣秀次の朱印にてみれば、驛馬の價、京より西は一里十錢なり、本錢小錢に委しくのす先年相州より出だせる書にてみれば、關東は一里一錢とみえたり、この錢はびた錢にてなく、精錢一錢なるべし、その文左の如し、この書年號なけれども、この印は北條の印と云へば、天正の比の書なるべし、

傳馬參疋可出之上妙之鑄物師之下可除一里一錢者也、仍如件、

自小田原西上州迄宿下

宿中

戌三月廿日〇印影略

さて先年三州藤川驛の問屋三左衛門が出だせる書にてみれば、慶長の比、藤川邊は驛馬一里、京錢八文なり、その文左の如し、

以上

急度申越候、沙路次中人足壹人に付、京錢八文宛取可申候、但馬半分之積り也、

酉二月十六日
按するに、この酉は慶長二年なるべし、

村　茂介印
安　帶刀印
成　隼人印
升　志摩印
本　上野印

藤川
傳馬衆

〔徵古文書乙集遠江國〕遠州新居町文書敷知郡新居町役場藏

路次駄賃定書慶長七年

寛政元酉年願之通被仰渡候、江戸通日雇受負仲間六組九拾四人（〇九拾四人、前文作二百九拾四人）手先之もの共、道中筋に而之取計方不宜趣、五海道宿々本陣共總代追々御訴申上候ニ付、六組行事共被召出、逃去候儀は取留候義無之間、不被及御沙汰、宿方日雇共渡世は互之儀、取締方得と及示談、取極申上候樣被仰渡、依之熟談之上、議定書付取極、御伺奉申上候處、書面之趣御聞屆被置候間、右書付拾壹通相認、雙方致連印、五海道　壹通ツヽ、六組行事方（江）壹通ツヽ受取置、宿々幷日雇方仲ケ間共も銘々寫いたし、永久違失無之樣、時々披見之上相守可申段被仰渡、承知奉畏候、通日雇仲ケ間九拾四人（江）御鑑札之儀願之通御燒印可被下置候間、木札相仕立差上可申旨被仰渡、是又承知奉畏候、且又宿間之村々に而、旅人休泊致間敷旨、正德年中御觸之趣、五海道（江）再御觸御座候樣宿方ゟ奉願候處、幸御用序御座候ニ付、右之趣も願之通此度御觸可被成間、諸事猥成義無之樣、互に申合可仕段被仰渡、一同承知奉畏候、仍如件、

江戸六組通日雇仲ケ間

日本橋組	東海道宿々	芝口組	美濃路佐夜路共
大芝組	中山道宿々	神田組	甲州道中
京橋	日光道中	山之手組	奧州道中水戸佐倉道

右文化二丑年、道中方貳拾六番、是は東海道筋本陣總代品川宿本陣市郞右衞門外壹人、六組通日雇仲間取計方之儀ニ付願、

〔道中秘書　六〕通日雇取締方幷請負人等之事

文政四巳年四月九日、左之趣請證文取置、

一六組通日雇受負人儀、諸家方道中通日雇受負いたし候節々、右諸家姓名幷發駕日限受負候もの名住所等、都度々々年行事ゟ可屆置事、

可差出候、以上、

〔道中秘書 六〕通日雇取締方幷請負人等之事

寛政元酉年取締一件留之內

一通日雇等請負候もの共も、宿方江對し不法之儀共有之趣相聞に付、吟味之上、道中日雇請負之仲間組合申付、銘々町所名前記候鑑札、右之もの共ゟ宿々江差遣置、日雇には包札爲致候筈、尤金錢等ねだり取、又は不法がさつ成儀いたし候儀有之候はゞ、名前所糺、其請負之もの江も申達、其後道中奉行江も相屆、右雇之もの病人等有之節は、宿役人世話いたし、無差支樣可致事、

右同斷、六組日雇請負人總代共ゟ差出候證文之內、

通日雇請負人百九拾四人仲間相極、上下日雇受負候節不埒之もの不雇入、道中筋に而不法がさつ無之樣申付、壹人每に受負之もの印鑑相渡、宿々江も印鑑壹枚ツヽ相渡置、尤賃錢等高直に無之樣入札等いたし、仲間外之もの、通日雇受負候もの有之候とも不差障、且渡世相止候程休候節は、其度々相屆讓渡又は新規加入之ものも有之候はゞ、可受差圖候、組合定候迚、權威ケ間鋪儀致間敷候事、

右同斷、取締之內、

一通日雇之義、江戸表百九拾四人江申付候段相觸置候處、京大坂伏見三ヶ所に而も、爲取締上下通日雇受負仲間組合申付、江戸表同樣可致段申渡有之、(中略)

寛政二戌五年街道觸流

一道中筋通し日雇之儀、伏見表ニ而仲間拾武人江拾人新規加入申付候間、諸事先達而觸置候通可相心得事、

〔道中秘書 六〕通日雇取締之事

通日雇并請負人

り添書相渡候筋は無之候間、其心得を以取計可有之候、

（德川禁令考法制禁令五十二）寛政元酉年四月三日

道中筋小揚所通日雇等之儀ニ付觸書

一通日雇受負候者共之宿方江對し、不法之儀有之趣相聞候間、此度吟味之上別紙名前之者共、道中上下通日雇受負仲間組合申付、銘々町所名前記候鑑札、右之者共より宿々江差遣置、日雇ニハ爲致提札候筈ニ候、武家其外往來之面々上下雇之者、諸事宿方江對し不埒之儀無之、立場茶屋等も重頭不爲致、旅籠錢も食札渡置引替ニ致し、萬一金錢等ねだり取候日雇之者共有之ハ、宿方共申出次第、其受負人より金錢相辨差出候筈申渡置候間、其旨相心得、猶又右雇之者共、被雇候主人之權威を以、重頭ケ間敷儀歟、又は金錢ねだり取、旅籠錢其外等不相拂もの江も申達、宿送りを以道中奉行江可相屆、且右雇之者病人等有之候節は、其宿方江懸合候筈ニ付、宿役人世話致し、往來不差支様可致もの也、

寛政元酉年四月三日

肥前（道中奉行○根岸）
伊豫（道中奉行○桑原）

東海道品川宿より大津宿迄、伏見宿より守口宿迄、但シ佐谷路共
右宿々
問屋
年寄
上下飛脚屋六組仲間
百九十四人
右町所名前

追而此觸書無滯相廻シ、留り宿より以宿送肥前御役所江可相返候、尤銘々承知之旨受書相添

一御定人馬之外、相對雇いたし候節は、本陣又は宿方住居之者等江、兼而申談被置、宿方并近在之全く稼人馬を相雇可被申候事、

一相對雇之人馬賃錢は、御定賃錢不拘儀に付、雇賃錢員數對談次第之事、

一相對雇之人馬は、跡居に不及候事、

一御定人馬丈ケ之先觸を差出候分、差懸り人馬入用に候共、立人馬之內被申付候には無之、相對雇に可被致候、宿駕籠等は、右世話人より問屋場江相對に而借受相用候とも、又は世話人ゟ出候共可被致候事、

一御定高ゟ內端に人馬先觸被差出候分は、差懸り人馬入用に候はゞ、御定高迄は問屋江申渡、御定賃錢に而被申付不苦、其餘人馬入用之節、相對雇に可被致候、尤先觸外之俄雇之分は、其子細屆之節可被申聞候、先觸差出候分は勿論之事に候事、

一御定高より內端に而人馬問屋江被申付候分は、病人足痛等之樣子に寄、兩三日も引續相雇候次第に候はゞ、追先觸差出可申候、無左候而は宿に差支可申候事、

一御主人荷物并御家來等通行之節も、只今迄之人馬數に而候間、御定半減迄は、俄雇之分は問屋場江被申付不苦候、其餘人馬入用之節は、相對雇に可被致候事、

一相對雇之分は、宿々日〆帳江書記不致候事に候、

御廻米納名主、道中往返之節、人馬遣方之事、

文政五午年十二月、戸田采女正家來問合挨拶、

書面御廻米納名主共儀、御用狀其外書物類持之往返いたし候ニ付、道中筋人馬添書之儀被申聞候得共、若異變有之節之爲、納名主ニ無相違旨之書付被相渡候は格別、御用狀其外持參候共、御預所役人とは譯違、人馬入用之節は、相對雇ニ可致身分之ものニ付、人馬遣高等之儀ニ付、御預所よ

岩槻道

右同斷

右は文政五午年四月二日、於主水正〇道中奉行石川宅、臨時道中方寄合之節、伊豫守〇道中奉行岩瀨出席、評議相決候事、

一御三家方家來旅行之節、宿人馬遣方之事、

〔驛肝錄〕文政六未年五月、主水正〇道中奉行石川宅ニ而是迄取計、左之通、

是は萬石以下之家來は、諸大名家來に准じ、萬石以上は、其節問合之趣に隨ひ、可ㇾ及ㇾ挨拶ㇾ候事、

九月、松平丹波守御預所役人伺ㇾ江下知之內、

攝家、宮方、門跡方、公家衆家來遣人馬數之事、

書面攝家方、宮方、門跡方、公家衆家來旅行之節は、主人之用向に候ヽ、諸家之家來同樣、拾三人拾三疋遣之積、其餘入用に候はヾ、相對雇に可ㇾ致旨可ㇾ被ㇾ申達ㇾ候、

〔驛肝錄〕享保十巳年御觸之內

一諸大名其外往來之もの人用之人馬は、先觸之外、差掛り入用之節は、相對雇之事、

寬政十二申年閏四月、松平大膳大夫家來ゟ問合挨拶之內、

一江戶出立之節、品川板橋千住等ゟ人馬呼寄候儀は、江戶表馬差共ゟ相雇は格別宿方と相對には難ㇾ成候、且持出し賃錢、御用之外は相對雇ニ付、御定無ㇾ之事、

文政四巳年十一月十九日

東海道中山道見廻りのものへ、爲ㇾ心得ㇾ主水正殿御渡之書付寫、

相對雇之儀に付問合有ㇾ之節挨拶振、左之通、

一相對雇人馬之儀は、宿助鄕人馬寄置候內、相雇候儀に而は無ㇾ之候事、

是は別段之譯を以、御内慮に而も相伺可申事、

松平越前守

是は中山道旅行に而も、不順路に無之候間、當日幷前後二日ツヽ、都合五日、貳拾五人貳拾五疋、

拾萬石以上

當日幷前後一日ツヽ都合三日、廿五人廿五疋、但前同斷、

五萬石以上

當日幷前後之内一日、都合兩日、廿五人廿五疋ツヽ、但前同斷、

日光
奥州道中

貳拾萬石以上

當日幷前後二日ツヽ、都合五日、廿五人廿五疋、但前同斷、

拾萬石以上

當日幷前後一日ツヽ、都合三日、廿五人廿五疋、但前同斷、

五萬石以上

當日幷前後之内一日、都合兩日、廿五人廿五疋ツヽ、但前同斷、

水戸道中

五萬石以上

右同斷、但同斷、

甲州道中

五萬石以上無之

印鑑江認入申受、右印鑑、差遣し、宿方江渡置候印鑑引合、馬駕籠人足等爲差出、跡ゟ出立いたし候賄方之家來、右印鑑取上、賃錢急度相拂候樣可被申付候、尤右之趣、宿々江も道中奉行ゟ申渡置候間、其旨相心得候而、往來之度々無間違樣可被申付事、〇中略

右之趣、向後急度可相守候、假令組中支配幷家來之不法有之候共、其番頭其役人之越度に相成候間、其旨可存者也、

天明四辰年六月

久〇世久豐後守
赤〇井赤豐前守
松〇本松伊豆守
桑〇原桑伊豫守〇四人連勘定奉行

〔驛肝錄〕諸家旅行に付人馬遣高問合之筋心得

但不伺

東海道

貳拾萬石以上

當日幷前後一日ツヽ、都合三日、五拾人五拾疋宛、但前後之儀は、不隔日候はゞ、勝手次第之事、

松平備前守松平肥前守は、御用も有之候に付、

當日は百人百疋、前後兩日五拾人五拾疋、但前同斷、

拾萬石以上

當日幷前後之內一日、都合兩日、五拾人五拾疋、但前同斷、

中山道

松平加賀守

正德二辰年三月

正德二辰年三月

定

一公家衆門跡方道中往來之時は、人足三十二人、馬三十疋ニ相限り候處、近年は御定人馬之外、添人馬多く相立候故、宿々幷助人足出候、在々迄困窮に及ぶよし相聞候、向後たとひ宿々馳走として人馬差出し候とも、御定之員數馳走の人馬共、都合五拾人、三拾五疋之外は、一切差出すべからざる事、〇中略

右條々、幷前々定之通、堅可相守之、若此等之趣相背、向後宿々又は加宿助郷等、難義之由申訴候はば可爲越度者也、

正德二辰年三月

〔御觸幷御書付留五〕御用ニ而往來之面々、末々之家來雇之者心得違、無賃之手代り人足駕籠等爲差出候段、人馬相增、又者折々口論等も有之間、以來旅行之節、先觸ニ添、重立候家來之印鑑渡置、先觸之外、人馬入用之節ハ、馬何疋、人足何人と相認、右家來印鑑之書付可相渡間、印鑑ニ引合人馬差出、印鑑と引替賃錢受取、縱家來之内ゟ申付候共、印鑑無之人馬ハ差出ス間敷旨、松平右京大夫殿〇老中へ伺之上、書面之通被仰渡候、

右之通、向々へ可被相觸候、

安永九子年六月

一繼人馬之儀は、前日か前々日に而も、宿割之家來差出、宿々江印鑑壹枚ツヽ渡置、先觸外之馬駕籠人足等、右印鑑無之ものエは、決而差出間敷旨申渡置、召連候家來雇之者エも、其旨兼而申聞置、通行之節、差掛病氣又は痛所等に而、馬駕籠人足等入用候はゞ、役人エ申達シ、馬駕籠等之役、

一諸侯旅行は同　　右同斷

一同家中は同　　拾三人拾三疋

右之通定之事

〔享保集成絲綸錄二〕天和二年戌五月

定

一御朱印傳馬人足之員數、御書付之外、多く不可出事、

一道中次人足次馬之員數、縱國持大名たりといふとも、家中共に、東海道は一日に五拾人五拾疋に過べからず、此外之傳馬道は貳拾五人貳拾五疋に限るべし、但江戶、京、大坂は各別たるべし、勿論道中に而人馬共追通べからず事、

但泊々にて木賃主人壹人は拾貳文、召仕之者壹人は六文可出之、馬一疋も拾貳文たるべき事、

右之條々、可相守此旨、若於相背は、速可被處罪科者也、仍下知如件、

天和二年五月

〔享保集成絲綸錄二十二〕正德二辰年三月

定

一御用ニ付て往來之面々、或は在番、或は諸大名、總而道中往來之輩、人馬割之役人可有之事候間、御朱印人馬、幷賃人馬可入程相立させ、賃人馬之分は、賃錢無相違拂ひ候樣ニ、人馬割役之者問屋場相殘し、委細遂吟味候樣ニ可被申付候、其外之家來又は雇之もの共、私に人馬駕籠出し候樣に申掛候共、役人之斷無之候は、一切差出間敷由、宿々問屋場ニ而相斷候樣に可被申付候、道中のものにも、右之通可心得旨申渡候事、〇中略

人馬雇法

事ニ候、右樣ニ候而は、宿助郷等令難澁候事ニ付、以來は改所ニ不限、宿々ニ而も過貫目見請候分は宿役人相改、貫目ニ應、增賃錢可請取旨申渡候間、御朱印幷證文を以繼立之分、貫目改方は是迄之通居置、其餘御用旅行ニ候共、前同樣可取計候、其節不法之儀無之樣、家來江可被申付、且又宿次荷物之儀、何人持、又は本馬輕尻附等、其荷品江木札を附差出候樣、文政度相觸候處、近來次第ニ相絕、右木札無之荷物往來致し候由相聞候、向後無札ニ而差出候分は、決而繼立間敷段、貫目改所江申渡候間、其旨相心得可被申者也、

右之通、諸大名、諸役人、御旗本、御家人之面々江可被相觸候、

七月

〔驛肝錄〕於道中筋御用旅行其外諸家人馬遣高取極之事

日〆帳御糺候節、御取極有之旨、吉見儀助申聞ル、

東海道

一御用旅行は　百人百疋

一御三家方家中は一日分　五拾人五拾疋

一諸侯旅行は　右同斷

一同家中は　貳拾五人貳拾五疋

其外街道

一御用旅行は　百人百疋

朱書

此御用旅行は、五拾人五拾疋打込遣之積、午三月、出羽守殿江青木忠左衞門を以申上候處、御聞被置候由ニ付、如斯朱書認置候、

一御三家家中は一日分　貳拾五人貳拾五疋

一諸家出立刻限、明六時前出立之趣に候はゞ、當日罷越、其以前出立之趣にも候はゞ、前日罷越候樣可仕候、且又若夜に入通行に而、御方手間取候はゞ、翌朝引拂候樣可仕候、

此儀は被相越候節々可及差圖候、可成丈不致一宿候樣取計可被申候、

右之通、相心得候樣可仕候、以上、

午(文政五年)五月

此伺書、御用旅行貫目改之義、奉行衆伺濟に齟齬いたし候間、是以主水正殿江申上候處、手心は此書面之通相心得候而宜候旨被仰聞候、

〔驛肝錄〕文政五午年六月草津宿取計石原淸左衞門(大津代官)届

一(禁裏仙洞)兩御所御擔物通行之節、秋葉山里坊役人、井口貞助、市橋五郎作、并御擔物執奏油小路家家來柳澤爲藏差添、午六月五日、草津宿泊ニ付、貫目改方之儀、并先拂人、足不差出儀、同宿役人より、右附添之者江申談候處、御擔物は前々より改請不申、先拂人足不差出儀、附添之者了簡ニ而難承置、歸參之上可申談旨ニ而、御擔物其外荷物江貞助附添、同宿ニ逗留致、五郎作爲藏歸參いたし、其後草津宿役人、京都町奉行所江呼出之尋有之候間、委細申立候處、御掟目之通相改候樣申渡有之、同月十五日、爲藏事民部、五郎作、草津宿江罷越、御擔物は手人ニ而持送り候間、其餘荷物は改可申、先拂人足不差出儀も承知いたし候旨申聞候ニ付、御擔物之外は、貫目相改、并先拂人足も不差出、繼立相濟候段、淸左衞門より屆書差出す、

但御擔物ニ而も、宿繼の節は貫目相改候事

〔牧民金鑑(十八)〕天保十四年七月廿八日水野越前守殿(老中)御渡

道中往來諸荷物之內、過貫目之分は、貫目改所江不掛以前は、荷たし小附其外相減、或は手人持之由申成、本荷物改濟之上、途中又は休泊ニ而、右分荷差足、過貫目荷物爲繼立候旅人有之趣、不埒之

一貫目改方之儀、御朱印御證文之御用旅行之分は格別、逃貫目と見受候分計、掛目九貫九百目迄は壹人、拾貫目ゟ拾四貫九百目迄は貳人持之積、相心得可申候、

一在番之大御番、其外御用ニ而旅行いたし候分は、御朱印御證文無之賃錢拂之分に而も、前書之趣に相心得可申候、

但長持乘物人足數之義も、妄には不相改積、相含可罷在候、

貳ヶ條幷但書與も、可爲伺之通候、

一公家衆、幷宮門跡方、其外寺社之分は、御朱印御證文之分に而も、諸向通行之向同樣に、壹人五貫持之積に而、過貫目之分は取計、人馬打込遣ひ之積、相心得可申候、

書面貫目持之義、初ヶ條之通取計、人馬打込遣ひ之積、可被心得候、

一御用旅行之分は、人馬打込遣之儀、其外は人馬打込遣ひ不相成積、相心得可申候

書面可爲伺之通候

一相對に而相雇候人馬之分も、萬石以上以下、賣荷之分其外とも廉立候向、貫目相改候積相心得、人馬雇高をも相糺申上候樣可仕候、

書面廉立候分に不限、改候義と可被心得候、

一諸家家來之內、出役手代、宿役人等ゟ見合候趣意等不承受向も有之候節、詰所江呼寄對談仕、其上にも不承知之ものも有之候はゞ、時宜に應じ、右始末幷名前等承糺し置、引拂之上、申上候樣可仕候、

一諸家江戸出立に付、出役被仰渡、貫目改所江罷越候はゞ、其向々荷物は勿論、其以前都而通行有之候とも、人馬遣高見屆、其外廉立候義も有之候はゞ相糺、引拂之上、委細申上候樣可仕候、

貳ヶ條伺之通可被心得候

荷物附送り候も有之旨相聞候、依之右道中筋江も、東海道之通、武州千住、野州宇都宮宿におゐて、荷物貫目相改候筈ニ候間、可被得其意候、

八月

〔御觸并御書付留 五〕一諸荷物貫目之儀、御定之通無相違樣可被申付候、尤荷物貫目於改所、若御定より重き荷物有之ニおいては、貫目ニ應じ賃錢相增候か、又者荷物作替候共、改所之御定を守可申、若及異議候ハヽ訴出候筈ニ候、改所外宿々へも申渡置候旨も有之候間、其心得可有之候、○中略

右之趣、諸大名、諸役人、御旗本、御家人之面々江可被相觸候、

寬政元酉年三月

〔道中秘書 二〕大通行之節貫目改所取扱振之事

文政四巳年伺濟之內

大通行之節は荷數も多候處、一度ニ繼來候節、混雜いたし、一々秤に掛改候而は、繼立等後れ難行屆趣ニ付、天明四辰年之御觸に准じ、荷每に目方、并何人持本馬輕尻附と、夫々木札を附差出、右之內出役之もの見計を以、拔々ニ秤江掛相改、右之內過貫目之分は先荷ニ候とも、跡荷著いたし候迄改所に殘置、跡荷之內ニも過貫目尤相見候分を掛改、同樣取計、子細無之分は速ニ爲繼立、過貫目之分は宰領のもの江申談、造直し候とも、又は過貫目丈の增賃錢相拂候とも、勝手次第ニ爲致、增賃錢相拂候心得に候はヾ、過貫目增賃錢之譯、賃錢受取帳江相記、荷物江札を附、爲繼出候積り之事、

〔道中秘書 二〕貫目改所出役心得方

道中方

品川板橋千住宿貫目改所江出役仕候節、心得方之義左に申上候、

タリシ時、東海道ノ内、當宿及草津府中ノ三所ニ建ラレ、行李ノ貫目ヲ改シム、然ルニ文政四年、道中改革ノ後ハ、御代官ノ手代役ニ居住シテ輕重ヲ量ラシム、公家衆參向、諸侯ノ參勤ナド往來繁キ時ハ、御勘定御普請役等ノ人々モ來リテ其事ニ預ル、改所ノ費用ハ、年毎ニ金三十二兩二歩ヲクダシタマヘリ、

〔五驛便覽〕荷物貫目改所之事

東海道
品川
駿府
草津

一金六拾五兩宛　亥年(享保四年)ゟ三拾貳兩貳分ツヽ

中山道
板橋
洗馬

一金五拾兩宛　同貳拾五兩ツヽ

右旅人荷物貫目不法之儀無之樣、貫目改之場所可申付旨、正德二辰年、御老中御列座ニ而、秋元但馬守殿、〇老中　松平石見守殿、大久保大隅守殿〇二人並道中奉行江被仰渡、爲諸入用右之通被下之、〇享保四亥年金銀吹替ニ付、右金半減ニ成、

日光道中
千住
宇都宮

一金貳拾五兩

右貳ヶ所貫目改所者、寛保三亥年、稻生下野守、水野但馬守〇二人並道中奉行勤役之節、松平左近將監殿江伺之上被下之、

〔牧民金鑑十八〕寛保三亥年八月十二日御書付

總テ道中往來之面々諸荷物定之外重き荷物附、通り不申筈ニ候處、日光道中、奥州道中、往來之諸

貫目改所

申分は、貳拾貫目迄輕尻ニ相立、

一あふ付は輕尻と同斷

但內藤新宿高札ニ有之

一乘掛　　貳拾貫目

但蒲團中敷小附等ニ而、三四貫目迄增候分は不苦、

一人足壹人持　　五貫目

但貫目多分は、右割合を以增賃錢爲受取、御用往來之分は、格別貫目重く不相見分は掛改不致、尤七八貫目位迄は用捨之積り、

一長持壹棹　　三拾貫目

但人足六人掛り、貫目多候得ば、右割合ヲ以增賃錢爲受取、御用往來之分は前同斷、

一人足持之荷物は、人足之强弱ニ寄、人數增減いたし候儀は、問屋之差略次第爲致、賃錢は貫目次第爲受取、人數之多少に不拘事、

一乘物壹挺　　六人掛

一山駕籠壹挺　　四人掛

但引戶ニ無之あをりの分は貳人掛り、又は引戶と申迄ニ而、あをりも同樣の手輕き分は見計三人掛、

乘物同樣之駕籠をあをりにいたし、手道具等多分取入候はゞ、何故あをりにいたし候哉相尋、勝手を以右體にいたし候趣ニ候はゞ、素々引戶駕籠ニ付、四人掛之賃錢爲受取、

〔新編武藏風土記稿五十四荏原郡〕南品川宿

貫目改所 官ヨリ修理ヲ加ヘラル、建坪三十五坪二合五勺、元ハ南北品川ノ二所ニアリ、文政六年、問屋ノ後、北品川ノ方ハ廢セリ、正德二年、松平石見守乘宗、大久保大隅守忠香、道中奉行

〔享保集成絲綸錄 二〕天和二年戌五月

定

一御傳馬幷駄賃之荷物は壹駄四拾貫目、人足之荷物は壹人に付而五貫目に可限事、

一乘物一挺に次人足六人、山乘物四人にて、御定之人足賃取之可相送之、長棹壹棹三拾貫目ヲ可限、夫ゟ重き荷物は不可持運、人足一人に五〆目の荷積に而、三拾〆目は六人、夫ゟ輕き荷物は貫目にしたがひ人數減少すべし、此外は何れの荷物も可准之事、

右之條々可相守此旨、若於相背は、速可被處嚴科者也、仍下知如件、

天和二年五月

〔享保集成絲綸錄 二十二〕正德三巳年九月

一乘懸下貫目之儀、下荷貳拾貫目相極、外ニ蒲團跡付中敷小付一式、不殘三四貫目迄は令用捨、及五貫目候はゞ急度相斷、傳馬町ゟ附出間敷候、就夫あ　つけ輕尻之儀、五貫目と相定有之ニ付、蒲團跡付中敷小付等、乘掛下ニ准じ、此貫目五貫目迄は令用捨候得ば、都合拾貫目定之一倍にも成候間、輕尻下ニも五貫目、外ニ蒲團跡付中敷小付一式、都合ニ而二三貫目迄相定候、右之通南傳馬町幷品川町之者共江申渡候間、此旨町中不殘可觸知者也、

九月

〔驛肝錄〕文政五午年伺濟之內

覺

一駄荷　四拾貫目

一輕尻　五貫目

但蒲團中敷小附ニ而、貳三貫目迄増候分は不苦、跡付有之乘下ニ候得ば本馬ニ成、尤人乘不

事、

一人足之荷物、壹人ニ付五貫目を可レ限、夫より重き荷物は荷主江斷レ之秤ニ掛、重き分可二相除一之、自然除間敷と申においては、如二先條一たるべし、人足賃は馬之半分たるべく候、○中略

右可レ相二守此旨一者也、仍執達如レ件、

萬治元年十一月　　奉行

〔御當家令條二十〕條々

一長櫃壹棹三拾貫目を限べし、夫よりおもき荷物は持はこぶべからず、人足壹人五貫目之荷積ニ而、三拾貫目は人足六人、夫よりかろき荷物は、貫匁に隨ひ人數減少すべし、此外何れの荷物も可レ准レ之事、

一壹駄荷之重目不レ可レ過二四拾貫目に一、乘掛之荷物五貫目迄は、荷なしに乘駄賃錢同前たるべし、夫より重き荷物は、本駄賃錢可レ取事、

右條々可レ相二守之一、若違背之族於レ有レ之は、縱雖二後日一相聞糺、咎之輕重、或死罪籠舍、或可レ爲二過料一者也、仍如レ件、

萬治三年十月日

〔享保集成絲綸錄二十二〕寛文五巳年十一月

中仙道傳馬宿申渡

一歩行荷壹人五貫目迄持送り可レ申事

一長持拾貫目は貳人、貳拾貫目は四人、三拾貫目は六人、それより重荷物は持送り仕間敷事、○中略

右之通中仙道宿々江被二申渡一、書留させ可レ被二申候一、以上、

寛文五年十一月

人馬貫掛量

右問屋　年寄
名主　組頭

差上申一札之事

東海道品川宿之儀、御用向并御狀箱附御用物は外御番衆樣方、御繼狀幷道中通り物等繼合、又は御先觸無之御繼立之ため、貳拾疋三拾人宿人馬圍置、其餘之人馬遣切候得ば、助鄕江觸當候處、助鄕村々之もの共、紛敷樣疑候趣ニ相聞候旨、宿役人共申立候ニ付被仰渡候は、寶曆八寅年御吟味之上、品川宿ニ不限、都而東海道宿々御觸無之不時往來之ため、宿人馬百疋百人之內、貳拾疋三拾人圍置、右之內五人五疋は御用のため急度相圍ひ、右貳拾疋三拾人之外、宿人馬遣切候はゞ、助鄕江觸當可申旨、被仰付候儀ニ而、右貳拾疋三拾人は、宿方勝手ニ圍ひ置候筋ニ無之間、其旨可相心得旨被仰渡承知奉畏候、依而御受證文差上申處如件、

宿助鄕連印

朱書 但安永四未年七月、道中七十一番、東海道品川宿役人申立、圍人馬宿人馬之儀ニ付吟味有之

〔御當家令條二十〕定

一御傳馬幷駄賃之荷物、壹駄ニ付四拾貫目之事、○中略

右可相守此旨者也、仍執達如件、

〃寬永二年八月廿七日

〔享保集成絲綸錄二〕萬治元戌年十一月

定

一御傳馬幷駄賃之荷物、壹駄四拾貫たるべし、但四拾貫目重き荷物は秤に掛け、重き分可除之旨、荷主江可申斷、若除間敷と申輩あらば幾度も申斷、其上にも承引無之においては馬を不可出

被在儀ニ而、過半致不足候と申は、全く風聞而已ニ而難取用、秣飼料等之不足成宿場は、最寄村方江宿馬等を圍置候類も有之由ニ候間、右體之儀を以、過半ニ不足之由、致風聞候義ニ可有之、併大津宿岡崎宿之義、出精いたし候故歟、人馬共ニ澤山ニ立置候由、去々未年御褒美被下候趣意も相立、尤之事ニ候、以來は御代官領主役人々、時々手代家來差出、步行役之分は、名前年付等相改、馬役之分は、持主名前、馬之毛色等相糺筈ニ候間、馬飼料ニ差支、近村ニ立馬いたし候宿方之分共、宿助郷諸事和融いたし、御定之通、人馬立揃、繼合等差支無之樣可致候、增駄賃之義も、往來之難儀ニ有之、殊ニ中山道も增、駄賃年季中ニ候得共、東海道は川支之難儀も有之故、旅人多分中山道廻り候樣ニ相成候而は、彌東海道衰微に候間、來卯年年季明ニ至候而は、早速增駄賃御差止可有之間、兼而得其意、右年季中致出精、壹人壹疋も不足無之樣、人馬持立候樣可被致候、

四月三日

〔道中秘書　一〕東海道圍人馬之事附往還皇木

東海道筋宿々圍人馬之義、安永四未年、品川宿より申立候趣、糺之上三拾人貳拾疋之積申付、其段同宿より先々可申通旨申渡候處、大津宿迄相違、伏見宿より守口宿迄不相違趣に付、一同三〆人二拾疋は圍人馬之積心得、尤人馬不遣切內は、助鄉人馬遣ひ來候段、決而致間敷候、〇中略

文化八〇文化八恐文政六誤未年正月廿六日

主水〇道中奉行石川

伊豫〇道中奉行岩瀨

東海道

品川宿より守口宿迄

美濃路佐屋路共

日光　甲州
一奥州　例幣　貳拾五疋貳拾五人
御成　佐屋

但中山道之内、木曾路宿は貳拾五疋貳拾五人、日光は千住より越谷宿迄勤來ニ而五拾疋五十人、宇都宮は百人百疋、

〔新編武藏風土記稿 五十四荏原郡〕品川宿

慶長六年正月、彦坂小刑部元正、大久保十兵衛長安、伊奈備前守忠次等、東海道巡見ノ時、驛場ニ定メラレ、驛馬三十六疋ヲ定額トシ、五千坪ノ地子ヲ免許セラル、此時歩行人夫ノ數モ定メラレシナルベケレド、詳ナラズ、○中略 同○寛永十七年、曾根源左衛門吉次、伊奈半十郎忠常巡見ノ時、傳馬數ヲ増テ百匹ト定メ、地子免許ノ地ヲモ加ヘラレ、都テ一萬五千坪トナル、又歩行人夫百人ト定メラレシ年代詳ナラザレド、寛永十年ノ頃ナラント云リ、今傳馬百疋ハ南北品川宿ヨリ出シ、人夫百人ハ南北兩宿、及歩行新宿、南品川ノ内、海晏、海雲、品川、長德等四寺ノ門前町ヨリ出セリ、

〔新編武藏風土記稿 百三十六足立郡〕千住宿

今役夫驛馬共ニ五拾出スヲモテ日々ノ定數トス、其備ノ爲ニ傳馬屋敷一萬七千七百七十一坪ノ内、二千四百八十九坪ハ地子免許セラルト云、

〔牧民金鑑 十八〕寛政元酉年四月

東海道宿々之義、百人百疋人馬御定ニ而、御用囲人馬之外、往還稼も致、候得ば助成も可相成處、過半立人馬致不足候風聞も有之、尤宿々之義、火災其外異變有之場所は、其度々御手當も有之、一體御手馬役地も被下候上、相應之宿、助成金之御手當も有之、尙又近年宿助鄕困窮之譯を以、駄賃之義御手當も被下候、右割増者、宿助鄕助成ニ付、莫大之御手當ニ候間、宿人馬之義は、御定通持立可

人馬定數

遣す也、十六日之馬入用之馬觸遣シ候節は、十五日傳馬町江申遣ス也、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年二月廿五日丁巳、海道驛馬御物送夫事、御使上下向、每度依犯定數、爲土民及旅人之愁之由、頻達上聽之間、今日所被仰六波羅也、其狀云、

早馬事

宿々被定置二疋之處、雖非急事、近年連々下向之輩、或三四疋、或四五疋、申載著帳、煩役所、於路次致狼藉之由有其聞、尤不便、自今以後、非殊率爾事之外、可任先例之狀、依仰執達如件、

文應二年二月廿五日　　武藏守

相模守

陸奧左近大夫將監殿

京下御物送夫事

京下御物送夫、任雜掌申請、无左右依令下知、人夫多々之間、民之煩尤不便、自今以後、申請人夫之時、令見知御物多少、定人數、可載長帳也、且於私物送夫者、一向可令停止也、兼又夫役寄事於左右、於路次不可致狼藉之由、可被加下知之狀、依仰執達如件、

文應二年二月廿五日　　武藏守

相模守

陸奧左近大夫將監殿

〔道中秘書一〕五街道御定人馬幷里數合宿等之事

一東海道　　百疋百人

一中山道
美濃路　　五十疋五十人

右是は正德四年午三月十五日、町御奉行中山出雲守樣江、兩傳馬町名主共被召出、道中御奉行樣方より、被遣候御書付御渡被成、向後此趣相心得可申段被仰付候、

一此間能登守殿より以書狀被仰聞候、大坂奉行衆江之御狀、遠州新坂宿ニ而紛失之譯、昨日私共寄合江、右宿々之者召呼遂詮儀、爲以來過怠申付候、

一總而京大坂江各より被遣候書狀狀箱等、唯今迄は傳馬町名主共より品川宿迄致添狀、夫より宿繼ニ相屆候樣相聞候、右之段前々より其格も有之、傳馬町之者ニ御申付被遣候儀ニ候哉、左候はゞ爲心得其子細承り置申度候、

一向後は右之類急御用ニ而、狀箱等被遣候節は、私共方江其譯被仰聞候得ば無滯屆申儀ニ御座候、總而宿々ニ而何方より斷有之候共、御老中御證文歟、私共觸狀無之分は、宿繼ニ而は相送り不申筈ニ道中宿々之者共江申渡置事ニ候間、是又爲以來右之通申達置候、以上、〇中略

文化十二亥年十一月

大傳馬町御傳馬役　馬込勘解由印
南傳馬町同　高野新右衞門印
同　小宮善右衞門印

〔地方落穗集〕十傳馬町江人馬申遣す次第之事

上十五日　京橋傳馬町　吉澤主計
下十五日　大傳馬町　馬込勘解由

右之通、上下十五日宛、兩方へ馬觸申遣ス儀也、駄賃之儀は馬に而人足申付る也、

一御朱印被下候節は、人馬共申越候、馬多候得ば、馬壹疋を人足貳人に引替候事も有之、但上十五日京橋ニ而駄賃相勤候時は、御朱印人馬傳馬町ニ而相勤、下十五日傳馬町ニ而駄賃人馬相勤候節も右同斷、此心得を以觸遣す也、且又朔日に入用之馬は、晦日ニ申遣候節、觸狀は京橋江申

大傳馬町　高野新右衛門
　　　　　馬込孫兵衛
　　　　　佐久間善八

御奉行所

如表書之書付差上候間、於駄賃取候ニは、兩傳馬町より駄賃取、壹ヶ年ニ壹疋宛可出之旨承應二年巳十月六日申付候所、今度訴訟申ニ付、當年より兩傳馬町江壹ヶ年ニ三疋宛駄賃を取可出之、幷ニ傳馬町ニ而鞍判をいたさせ取候而、傳馬町之下知を可請、若於無同心方々ニ而駄賃取候儀可爲無用者也、

午八月六日　長門印〇以下五人略

覺

江戸廻近在所々より、江戸表江出稼致候駄賃馬之儀、傳馬町ニ而鞍判を請、壹ヶ年ニ助馬三疋宛駄賃取出之傳馬町下知を可請、若無同心においては、江戸表ニ而駄賃取候儀、可爲無用旨、萬治年中御觸有之候處、近頃は鞍判も不取、猥ニ江戸表江罷出、口々江附出馬請負、幷御當地ニ而駄賃取候もの多有之由ニ候、此以後は古來御定之通、壹ヶ年ニ駄賃馬壹疋ニ付、助馬三疋宛、三傳馬町江急度差出、鞍判請可申候、若鞍判不取候而、江戸町々江出、駄賃取候歟、助馬難澁いたし候者有之ば、馬持當人は不及申、其所之名主年寄五人組迄、急度曲事可申付候、尤右之趣、江戸三傳馬町之者共江改申付置、違背之者有之ば召捕、月番之町奉行所江訴出候筈ニ申付候間、此旨急度可相守者也、

享保十四己酉年三月　越前印〇以下九人略

右御連判、享保十四年酉四月二日、於御評定所被下置候、〇中略

一封狀取繼申間鋪被仰渡之事

一御扶持方米頂戴仕候事

右是は御傳馬御用相勤候ニ付、御入國之節より、武州豐島郡高田村ニ而、御米拾貳石三斗六升、毎年兩傳馬町江被下置、御代官江私共請取手形差出、左之通御書付を以、高田村村役人御米持參仕候儀格別ニ而、御代官御替り被成候而も、右村方より請取來り申候、

覺

一米拾貳石三斗六升

武州豐島郡之內
高田村

右者、兩傳馬町當何御繼飛脚扶持米、書面之通其村置米、馬込勘解由、高野新右衛門、小宮善右衛門、斷次第相渡、同年勘定拂ニ可立候、仍如件、

年號月日　何誰印

高田村
名主

一寛永年中、肥前國島原表騷動仕候節、御傳馬人馬大御用相勤候爲御褒美、大傳馬町江は、四ッ谷ニ而明地大繩七百四拾間、南傳馬町江は、赤坂ニ而明地大繩七百六拾壹間被下置、町家ニ取立、四ッ谷傳馬町、赤坂傳馬町と相唱、御傳馬御役馬相勤申候、

但右場所下名主共之儀は、御傳馬役三人之者、由緒書ニ申上候、

一賃人足御免之事

右是は明曆元未年九月廿二日、於御評定所、松平伊豆守樣御出座ニ而御免被仰付候、

一被判御觸之事

一鳥越町　野村藤左衛門殿御代官所　名主　勘解由

一上野町　月行事　忠兵衛　〇中略

萬治三年庚子八月五日

南傳馬町
吉澤主計

〔政談 四〕遊行上人ニ傳馬ヲ下サルヽコトハ、各別ノコト也、

〔三聽秘錄 七〕一寬政六甲寅年六月、道中御掛り大目付桑原伊豫守樣へ御問合、〆

遊行上人巡行之節、若狹守領分內晝休會有之、人馬繼立之趣申來候はヾ、人馬繼候義難相成斷申筋ニ御座候哉、又は驛場ニ無之候而も、右體之節は、雇候而も人馬共差出候義も御座候哉、相心得罷在度之由、在所役人共より申越候ニ付、此段御內々御問合申上候、已上、

六月九日　間部若狹守家來　臼井儀大夫

御答書

遊行上人巡行之時分、人馬無遲滯差出候樣御朱印持參いたし候義、驛場無之候而も、領主ニ而人馬等は手當被成候而差出候方と存候、

但道中筋ニ無之故、附札は致不申、脇道ニ付支配違に存候、

〔天保十一年武鑑〕道中御傳馬役

上十五日御證文人馬當番　下十五日賃傳馬當　大傳馬丁二丁メ　馬込勘ヶ由

上十五日賃傳馬當番　下十五日證文人馬當番　南てんま丁二丁メ　高野新右衛門　南傳馬丁三丁メ　小宮善右衛門

江戸御傳馬役　小傳馬丁二丁メ　宮邊又四郎

〔撰要集〕大傳馬町南傳馬町御傳馬役起立書

一兩傳馬町、御國役御傳馬御用之儀、天正十八寅年、御入國之砌、御城下寶田村ニ而、御傳馬相勤申候處、慶長十一午年、御造營有之、江戸町割之節、右村之儀、所替ニ相成、其節より當場所江引移り、追々町家ニ罷成、御傳馬之御役相勤候ニ付、村名相改、大傳馬町、南傳馬町と相唱來り候旨申傳候、

但寶田村立跡之儀は、當時吳服橋御門內之邊と申傳候、

一大坂駿府加番
一日光例幣使
一大坂堺御鐵砲幷御入用
一美濃紙御用紙
一御代官往來
一遠國奉行幷御用に而罷越候御役人
一公家衆御門跡方御使
一上州ゟ麻売灰
一越前御用紙

右は御朱印幷御老中、所司代、御城代、駿府御城代、御勘定奉行證文に而道中往來、且又道中奉行觸書差出候分、其外通貨傳馬に而往來、書面之通御座候、以上、

卯(○享保八年)七月
彦坂壹岐守
寛　播磨守(○二人並道中奉行)

〔光臺一覽〕一當月(○四月)上旬之内、關東へ年頭之御禮として、勅使を被差下、勅使は武家傳奏兩人、院使は院傳奏、法皇使、女院使、東宮使、女御准后使等、御所方有合次第大方は兼合、公家衆五人計參府有、此外五攝家、親王家四軒、清花九軒、宮門跡攝家門跡等之者代之使者諸大夫、坊家十九軒之昵近衆之家司、尤武家傳奏の雜掌四人供奉す、其外地下被番之内、御禮勤來りし族は、右之堂上方の馬下に付などして參府す、禁中方より被進物、家々格式之進物、御朱印箱に押續き、道巾狹しと荷ひ出、尤道中は御傳馬にて十三日、春永日の頃には、半慰なる驛路也、城下城下にては、勅使の御參府とて、掃除自身番非常を戒め、領境より領境迄、露拂の足輕爲案内先驅す、桑名は時之城主の御馳走船被出之、宮は名護屋より被出て、何れも使者一札之往返有、荒井の今切は天下の御船出るなり、宿次は泊り〳〵休迄、問屋馬借立傳ひ、怪我過ちのなきやうに、大切に送り迎し奉る、(○中略)例幣使一人之下行現米二百石、地下は別に下行有、道中御傳馬御朱印旅籠代は路物とて、御代官所より沙汰之上、一人八十文、下一人六十文御當家の舊例也、

從長崎高木作左衞門先觸

一鳥獸

下總國上飯田村谷本善九郎村送り

一柑子

道中奉行證文に而賃なし人馬爲差出通り候者は無之候、左之通宿繼に而差出申候、

一毎年冬ニ至リ、火之元之儀、且御條目之趣、無斷絕相守、總而不埒之儀無之様相觸候、

一道中奉行被仰付候節、御老中御證文江添書致し相觸、且又宿々江遣置候、先役判鑑取戻、當役判鑑差遣候、

一公家衆御門跡方、其外本坂通旅行可有之旨、御老中御斷之節は、本坂通江相觸申候、

一二條大坂御番衆、東海道旅行差湊中山道通之節者相觸申候、

一遠國奉行其外御用に而遠國江參居候面々江急に申達候御用向有之候節之狀箱、觸書を以差出ス、

一爲替御用達往來之節は、品川より賃人馬無滯様相觸申候、

一朝鮮、松前、日光ゟ御鷹參候節、無滯様相觸申候、

右之外御用物等往來に付、宿々無滯様に可申觸旨御斷有之候得は、早速相觸、其外道中筋江觸知せ可然儀、又は不時に宿送りにて、觸書差出候儀御座候、

御用に而賃傳馬之分

一京都御名代之大名　　一所司代

一大坂御城代同御城番　　一御三家江之上使

一駿府御城代　　一二條大坂駿府在番

一佐州より御金荷物

一上州太田金山松茸

一諸國囚人幷御仕置物

京都所司代證文分

一御狀箱御用物

一京町奉行ゟ御勘定奉行江狀箱幷玉虫左兵衛手代下り候節長持、

一二條御城御藏奉行長持

一近衛殿使者右同斷

一醍醐山右同斷

一八幡山豐藏坊右同斷

一日光例幣使右同斷

一阿蘭陀人右同斷

一知恩院使是は船川渡之所々無滯通之御證文

一黃檗山右同斷

一八幡山善法寺右同斷

一西八條大通寺右同斷

一上賀茂獻上之御葵右同斷

一土御門治部卿巳之日之祓

大坂御城代證文之分

一御狀箱其外御用物品々

一大坂御藏奉行長持

駿府御城代證文

一御狀箱幷熟瓜、茄子、白瓜、竹子、株香、山椒、

御勘定奉行證文之分

一御上鳥幷御鷹匠御用

一御藥草國々見分幷持送御用

一日光ゟ參候御巣鷹御用

一日光今市、房州峯岡山、下總國佐倉小金御馬御用、

一御猪狩御用

一所々川々御普請幷見分御用

一日光御名代　一金地院京都江往來
一品川東海寺輪番　一三州瀧山寺
一京都知恩院　一増上寺ゟ知恩院江使僧
一相州藤澤遊行上人　一備後御疊表
一野馬御用　一御鷹御用
一御籠御用

御老中方證文之分

一御用箱御用物品々
京　大坂　長崎　駿府　勢州　尾州　紀州　堺　相州　豆州　日光　佐州
一國々御達書御用物　一尾州鮎御鮨
一三州海鼠腸　一和州ゟ葛
一石州ゟ蜜　一駿州德音寺長持
一勢州御代參之節御箱　一京都江上使之節長持
一京都江進獻物御用　一日光御名代之節御樽御箱
一水戸殿鷹野之節上使御箱　一房州野馬御用
一日光御神服御用　一同所江御疊表
一越後并會津蠟荷物　一遠國見分御用
一仙臺南部ゟ參候御馬御用　一遠國御普請御用長持
一松前ゟ參候御鷹御用　一所々江參候盜賊改方同心
一京都智積院是は船川渡之所々無滯旨之御證文　一初瀬小池坊是は右同斷

覺

一御傳馬御朱印、如二前々一於二宿々一致二拜見一、人馬無レ滯樣可レ出之事、

慶安四年卯八月八日

〔享保集成絲綸錄 二〕寛文元丑年

定

一人馬之御朱印を傳馬次之所々におひて致二拜見一、御書付之外壹疋壹人も多不レ可レ出之事、〇中略

一御傳馬駄賃之荷物、馬を持次第可レ出レ之、但駄賃馬多入時は、其町ゟ在々所々江雇、荷物遲々無レ之樣に、雨風之時も可レ出之事、〇中略

右之條々、可レ相二守此旨一者也、仍下知如レ件、

寛文元年

〔驛肝錄〕享保八卯年七月十二日、加納遠江守江上ル五驛之內、

御朱印幷御證文其外御用通貨傳馬に而往來候分書付

御朱印之分

一公家衆　　一御門跡方

一京都江御使　　一勢州江御代參

一大坂御城代替リ之節引渡　　一大坂御目付

一駿府御目付　　一宇治御茶御用

一二條大坂御藏奉行假役　　一國々城引渡幷巡見御用

一諸國川々其外御普請等見分御用

一日光御門跡幷役者醫師日光江往來、但御門跡ゟ京都江之御使、

右條々堅相定訖、若於違背之輩は、速可處嚴科者也、仍如件、

慶長十六年亥七月日

伊賀守〇板倉
清右衞門〇米津
石見守〇大久保

定

一夜通し立る人馬之儀、奉行所々手形無之においては、一切不可相立事、

附御手馬之駄賃荷物は、馬持次第たるべき事、

一駄賃馬多入候時は、其町より所々在々へやとひ、荷物遲く無之樣に風雨之時も可出事、

右可相守此旨者也、仍執達如件、

寛永二年八月廿七日

〔享保集成絲綸錄二十二〕正保三戌年十一月

一本傳馬百疋幷助馬出拂、馬無之時は、其所之庄屋問屋、往還之面々江其趣可申斷、然上は往還之輩互ニ申合、前後之人馬不滯樣ニ日限時刻定、段々ニ可相通ル、若又馬有之を隱置僞申においては、庄屋問屋可爲曲事、馬無之時分、むりに可通由申掛る輩あらば幾度も可申斷、幷鳥目金子壹兩ニ四貫文、壹分ニ壹貫文之賣買たるべき旨、此巳前より雖相定、去年當年江戸火事之節、錢燒失たるの間、新錢不鑄出内は、其時々之相場次第賣買すべし、若押而壹分ニ壹貫文之積、買べきよし申族雖有之承引すべからず、勿論相場より高く賣買致においては、賣主は不及沙汰、其所之庄屋問屋可被行曲事者也、

戌十一月　奉行

慶安四卯年八月

一三拾六疋ニ相定之事

一上口ハ興津、下ハ蒲原迄之事、

一右之馬數壹疋分ニ、居やしき卅坪宛被下候事、

一坪合千八拾坪、居やしきを以可被引取事、

一荷積は壹疋ニ卅貫目之外被申間敷候、其積は秤次第たるべき事、

右條々相定上、相違有間敷者也、

慶長六年　　伊奈備前黒印

丑正月　　彦坂小刑部黒印

大久保十兵衛黒印

由比

百姓年寄中

〔歷代參考 六〕賴房公〇相頁 御母公了心禪尼、爲證人、慶長七年壬寅御上洛、〇中略 翌八年癸卯、江戸御下向〇八年錄二相頁文書、九年記 此時御朱印傳馬二十疋、人夫三拾人被下之、

〔御當家令條 二十〕定

一馬番を定、荷物をつくる事、一切停止たるべし、馬はやく出次第荷物付べき事、

一驛之所々、馬遲く出すにおいては、右之荷付馬直に通し、先の駄賃定の如く出すべし、日暮泊に付而者、荷主より馬方ニ旅籠錢を出すべき事、

一歸馬に荷物つくる事、荷主馬かた相對次第たるべし、難澁申者於有之者、其町之年寄可爲曲事事、

一通荷物之事、御上洛之節者、何方之馬も不改附通すべし、常に通馬可相留事、

一駿河堺ヨリ遠江迄　　中村式部少輔○中略

以上

右之通、淺野彈正少弼一左右次第日限を極相待、人足傳馬不ㇾ相滯樣ニ申付可ㇾ送屆候也、

慶長貳年六月十五日　　朱印○豐臣秀吉

〔徵古文書乙集駿河國〕仁藤文書靜岡市仁藤廷吉藏

横田村詮傳馬定書慶長五年

定　　岡部新宿

一當宿傳馬之事、我等手かた無ㇾ之者、自然かりことを云、傳馬出し候へと申者於ㇾ在ㇾ之は、町中いであい、搦捕可ㇾ相越候、然上肝煎內々を以などわきわきへ、傳馬をあてかし候事、縱後日ニ聞屆共、第一そのきも入可ㇾ爲ㇾ曲事ㇾ之事、

一丸子、藤枝ヨリ東西への駄賃馬之事、自ㇾ先年ㇾ如ㇾ相定、岡部にてつけかへべき事、

一當町之傳馬數、前々より貳拾壹疋ニ相定上、今以無ㇾ相違ㇾ候間、得ㇾ其意ㇾ傳馬役可ㇾ相勤ㇾ之事、

右之條々、少も相違の輩於ㇾ在ㇾ之は、則相搦、卽刻注進可ㇾ仕者也、

慶長五年子二月廿日　　內膳正

村詮花押

岡部問屋

仁藤

由比文書廬原郡由比町由比左右衞門藏

伊奈備前等傳馬定書慶長六年

御傳馬之定

持富五疋一疋上自食同
岩室五疋先例ナシト申テ不ㇾ出ㇾ之
小南五疋一疋上馬、名主實乘和尙ノヲル、カ、樣ヘハ不ㇾ出、
八鉤八疋先例ナキ■シ、起請ヲ出スニヨリテ聞ㇾ之、
南喜殿五疋不ㇾ上ㇾ之

巳上六疋在ㇾ之內、諸進、蓮勝房一人ハ、闕如之間、馬モ不ㇾ入、公文、予、後見明最房、巳上三人ハ公人也、余二疋ヲ加、持衆上ヨリ支配之、仍呪師丈ト寶覺房丈ト懸リ、

永和二年十一月、柚殿庄大成名一丁三反之內、一丁ハ山林也、此庄ヲ十市ヘ守護シテ給候ヘト云テ、多年六石、每年渡之外人夫傳馬ヲツカハス、

〔眞本細々要記 二〕康永四年七月十九日、諸國庄園傳馬等召之內、予モ一疋アタテ乘也、

〔武德編年集成 三十九〕天正十八年八月朔日、秀吉神君ノ麾下松平康貞ニ書ヲ投ゼラル、

佐竹義重幷妻子、令ㇾ上洛ㇾ候條、傳馬百疋、人足三十人申ㇾ付領分中、慥可ㇾ送屆ㇾ候、宿等入念可ㇾ令ㇾ馳走ㇾ候也、

天正十八年八月朔日　秀吉

松平新六郞殿

〔徵古文書 乙集 甲斐國〕善光寺文書 西山梨郡里垣村

善光寺如來遷座路次傳馬朱印 慶長二年

善光寺如來之儀、御靈夢之子細在ㇾ之而、大佛殿江遷座事被ㇾ仰出ㇾ候、然者從ㇾ甲斐國ㇾ大佛殿迄路次中人足五百人、傳馬貳百卅六疋宛可ㇾ申ㇾ付次第事、

一甲州より駿河堺迄

淺野彈正少弼

〔吾妻鏡五〕元暦二年○文治元年十一月廿九日戊申、今日二品○源頼朝被定驛路之法、依此間重事、上洛御使雜色等、伊豆駿河以西、迄近江國、不論權門庄々所、傳馬可騎用之、且於到來所、可沙汰其糧之由云云、

〔吾妻鏡十四〕建久五年十二月十五日辛未、御堂供養導師、近日可令下著之由、先使到來之間、爲其迎可被遣御家人等、又所被宛催傳馬以下也、三浦介五疋、和田左衛門尉四疋、梶原平三二疋、中村壯司五疋、小早河彌太郎五疋、澀谷壯司五疋、曾我太郎二疋、原宗三郎一疋云云、此外所々驛家雜事云云、

〔吾妻鏡三十〕文暦二年○嘉禎元年七月廿三日甲申、都鄙之間、有急事之時、相互所立之飛脚、爲早速、取路次往返之馬騎用之條、人之所愁也、向後可構乘馬以下事於驛々之由、今日被定云云、

〔太平記二〕三人僧徒關東下向事

文觀僧正、忠圓僧正ニハ、相隨フモノ一人モナクテ、怪ゲナル店。馬。ニ載セラレテ、見馴ヌ武士ニ打圍レ、マダ夜深キニ、鳥ガ啼東ノ旅ニ出玉フ、

〔太平記三〕後醍醐天皇御沒落笠置附光嚴院踐祚事

此時此彼ニテ生捕レ給ヒケル人々ニハ、○中略都合六十一人、○中略或ハ籠輿ニ召レ、或ハ傳馬ニ乘ラレテ、白晝ニ京都ヘ入給、

〔建武年間記〕大番條々建武二三一

一町別錢貨人夫傳馬事

　稱先例、被□百姓之條不可然、向後以撫民之儀、可爲領主之所役、

〔異本細々要記五〕貞治五年七月二十八日

今度傳馬召庄々任正應之跡、但其時ハ、庄々多シ、今度ハ、不知行ナバ除テ、下文ヲナス、

柚殿十疋四疋上、但此内一疋ハ六日ヨリ上、八間五疋アタルト申、上ヨリヤシナフ

山上四疋一疋上自食也、十日ヨリ十三日マデ、

〔驛肝錄〕文政五午年閏正月

松平阿波守家來問合挨拶之内

一朝夕繼は難相成、御定人馬之外は、都而稼人馬を相對雇可致事、

　但享保二戌年、御書取を以被仰渡候節、朝夕或は兩日に割合、繼出し候樣及挨拶、追々減少之儀申達置候事、

〔道中秘書五〕尾張殿家來荷物と諸家家來荷物落合候節繼立方之事

文政六未年、松平丹波守御預所役人伺下知之内、

書面尾張殿家來旅行之節、諸家之家來落合候砌、繼立方之儀者御家柄之義ニも有之候間、御用旅行之外は、尾張殿家來荷物繼立、諸家荷物順々可繼立筋ニ候得共、譯立格別差急之分ハ、人馬繰合不後樣取計候儀ハ、諸事見計取計べき儀ニ而、兼面差極置候樣ニハ難成筋も可有之間、其心得を以可取計候、

〔地方落穗集五〕道中宿繼心得之事

一道中筋は勿論、在々村々共ニ、支配所の外手代〇代官所より無賃の宿繼出候事不成事也、但御用ニ付罷通候節、馬觸の宿繼は格別、其外宿繼出し候には、江戸表役所より陣屋迄の里數に隨ひ、御定の人足賃錢宿々請取帳を相添、宿繼狀箱を遣す也、宿々にて右帳面に人足賃錢請取印形して、先々へ右狀共に繼送也、但夜は人足貳人に立る也、

一宿繼無賃にて繼送事、御證文を以繼送也、此宿繼御證文は、御老中、京都所司代、大坂御城代、駿府御城代、町奉行の外は不成例のよし、先年坪内能登守より、東海道日坂宿への呼出し狀、傳馬町馬込勘解由方へ相渡、勘解由方より日坂宿まで宿繼にて遣候處、此儀後日相聞へ、能登守不念に成候よし申傳なり、

覺

一頃日道中ニ而、旅人或物參相煩、旅行難成旨申者有之候得ば、宿。送。りにいたし候由、たとひ其身望申共、向後此方へ一往屆無之、送り申間敷事、

一旅人之病人有之候はゞ、隨分入念藥等用させ、其者之國所親類緣者委細書付、早々我等方へ宿次ニ而可致注進候、其上にて此方より可致指圖候、若指圖無之內、病氣得快氣、獨旅行罷成ほどに候はゞ、心次第何方へ成共遣可申候、左候はゞ、其所罷立候刻、其者ニ爲致證文、親類國所を書付させ、早速宿次にて可申越事、

一自然指圖無之內、右之病人相果候はゞ、御代官所は手代、私領は其所之役人を招、問屋年寄立合、死體相改、其上にて埋置、雜物等書付、此方江注進之義、宿次にては無用、其所之御代官、或地頭より此方江相達候樣に可仕事、〇中略

元祿元年辰十月九日　高伊勢〇道中奉行高木伊勢守在判

品川より守口佐屋道中宿々問屋名主

〔香取神宮古文書集十六〕覺

一御朱印人足三人、馬三疋、　片山三七郎

一同馬貳疋內壹疋ハ人足ニテ出シ可申候、　依田藤右衞門

一同馬三疋　棟梁三人

合人足五人、馬七疋、

右之通、木おろし通り宿次、御觸可有之候、以上、

三月四日

香取村問屋中

同所問屋　次郎左衛門

土屋相模守殿より宿次之證文、并御老中江之狀箱相添、京染五荷被差越之處、當月四日、右宿次證文并狀箱計、先達而御老中江品川町より致持參、京染は暫跡より參着候、就夫宿次證文并狀箱と京染、別々に參候段、爲可承屆、我等方より穿鑿之廻狀指遣候處、程ヶ谷町ニ而別々ニ罷成と相聞候、依之戶塚町ほどがや町問屋并帳付のもの段々遂僉義候得ば、最前程ヶ谷町より戶塚町へ、右之品品請取候段、致壹枚手形、戶塚町へ遣候、神奈川へは兩度に、程ヶ谷町より送屆候付、貳枚手形にいたし、神奈川町より、程ヶ谷町へ指遣候、然處我等方より遣候穿鑿之廻狀、程ヶ谷町ニ而披見之上驚き、帳付九兵衛、戶塚町帳付伊兵衛方江參りたばかり、最前之壹枚手形を貳枚手形に取替、其身あやまりを戶塚町江ぬり可申たくみ無紛相聞候、因玆九兵衛義、關東八州追放之上、田畑家并諸道具闕所申付候、問屋次郎左衛門義、其日當番之處、持病指發、右之時節出會不申候、左候へば相問屋方へ申達、左樣之砌は助合可申筈之處ニ、相問屋へもとゞけ不申、尤相問屋召寄遂穿鑿候處、其日少まへ迄は相勤罷在候由煩之段曾而不存候旨申候、然者不斷帳付計に左樣之指引仕せ候故、右之通不念も有之と相聞、不屆之仕方候、依之程ヶ谷町廿里四方追放之上、田畑家者闕所申付候事、

右之通堅可相守之、總而前方相觸候通、輕き旅人に至迄無滯樣ニ仕、御用之義は勿論、輕き下々迄、附送り繼合之節、問屋年寄共其外之役人、急度立合、裁配可仕候、帳付肝煎等計に任せ置間敷候、此廻狀披見之上、宿付之所々問屋壹人致印判、順々遣之、留之宿より宿次を以可相返候、已上、

貞享三年十二月廿八日　高伊勢 ○道中奉行高木伊勢守在判

品川 ○中略 川崎　守口

右宿々　問屋　年寄　江

一傳馬宿送の儀、此御判を以可持送候、其外一切有之間敷事、

以上

右條々、觸下肝煎百姓等に堅爲申聞、一在所へ一ツ宛書寫し可相渡者也、

慶長九年閏八月二日　山城守（○直江兼續）

〔享保集成絲綸錄十三〕寛永十酉年三月

一常之宿次乘物八人、幷御いそぎのり物拾六人之事、（○中略）

右之四ヶ條、酒井雅樂頭中屋敷江、年寄中町奉行寄合、末下判被申渡之也、

〔享保集成絲綸錄二十二〕慶安卯年八月

覺

一道中宿次之手形、御老中判形之外、

京都よりは　板倉周防守

大坂よりは　兩町奉行幷御城番

駿河よりは　兩町奉行幷大久保玄蕃、井戸新右衞門、

右之外、何事によらず、自餘之宿次、以手形一切相通間敷由、從江戸上方迄、宿々問屋町江可被申渡事、

慶安四年卯八月八日

〔御當家令條二十〕覺（○中略）

一今度於程ヶ谷町、宿次之御用候荷物、宿繼之證文と歩行持之荷物、別々ニ成致江戸著候付、穿鑿之上、御仕置申付候趣、宿之者爲意得、左ニ記之、

程ヶ谷町帳付　九兵衞

池殿ノ侍丹波藤三國弘ト名乘テ、鎌倉ヘ參タリシカバ、我〇源頼朝モ尋度思ツレ共、公私ノ忩劇ニ思忘、今ニ無沙汰也トテ卽對面シ、只今納殿ニアラン物、皆取出ヨト下知シ給ケレバ、金銀絹布色々ノ物共ヲ、山ノ如クニ積上タリ、是ハ先時ニ取ナノ引出物ゾ、庄ハ無カト問給ヘバ、丹波國細野ト申所ハ、相傳ノ私領ニテ侍ル由申セバ、軈テ御下文給テケリ、財寶ヲナミ次ニ送トテ、都迄ゾ持送ケル、

○按ズルニ、ナミ次ヲ參考平治物語ニハ岡崎本ニ依リテ、宿次トセリ、

〔吾妻鏡十三〕建久四年三月十五日壬午、近日依可有那須野御狩所被構藍澤之屋形等、以宿次人夫壞渡下野國云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年正月十六日壬寅、眞如院僧正眞圓被歸洛、宿次、傳馬、送夫等事、爲三浦介義澄民部丞盛時等奉行支配云云、

〔吾妻鏡十九〕承元三年十月十七日丁丑、權僧正歸洛、而時節屬寒天、殊可有遠路煩之間、將軍家〇源實朝頻雖令拘留給、依可爲長講堂供養導師被急歸寺云云、相州大官令已下至諸御家人、餞送物及數百種、剩可獻宿繼兵士之由、觸仰相模國以西守護人等云云、

〔梅花無盡藏三上〕七日出上田山大義禪寺

吟出上田雲一灣、石高十五里餘間、悉驛男女負裝什、行路無茶脚尾聞、

凡驛男女負什物、此地之風俗也、號曰宿送也、

〔武德編年集成三十二〕天正十二年二月廿六日、夜中秀吉自筆ノ回簡驛次ヲ以テ到來シ、神君ノ御許容アル事ヲ欣然ノ上、羽柴勝雅、天野雄光ハ、清洲ヘ歸リ、織田源五、淺野彌兵衞、濱松ニ至テ、德川家歸城ノ刻、早速結納ノ使節ヲ差登セ、玉フヤウニ、洩達スベキ由ヲ諭サルト云々、

〔上杉編年文書三十二〕掟

より宰領之者江掛合、眞僞相改、紛敷荷物者留置、早々所司代江申立、道中奉行江相屆事、

但品川宿者、所司代江之御狀之内ニ有之、并草津宿ニ而も繪符荷物相改候事、

〔道中秘書五〕諸家會符認方

一五街道類寄、文政五午年三月、相馬長門守問合、

一長門守家來、道中會符認來候處、以來朱書之通認度由、

朱書

相馬家中　何之誰	相馬長門守内　何之誰

右之通有之候處、相馬と申儀、往古地名ニハ無之候處、下總國より下向後、當領之地名ニ相成、承應二巳年、元祿十三辰年、領分之山境論之節、兩度共ニ、從公儀被仰渡候御書付へハ、相馬領主と有之、當時地名と罷成候間、以來右之通相認度由、

道中會符認方之義、是迄相馬長門守内何之誰と相認、累年濟來候儀ニ有之、一體書替之義ハ、不容易筋ニ候間、是迄之通相認候樣及挨拶候事、

文政六未年六月、井伊右京亮問合、

一右京亮家來旅行之砌、會符肩書之儀、寶永年中、掛川城主迄ハ、在所之地名を相認候處、其後無城ニ被仰付候以來、中絶ニハ候得共、又々城主格ニ被仰出、既ニ今度初而在所へ之御暇被下置、入部いたし候儀ニ付、以前城主時分之以先格、與板家中と肩書相認可申、併格別年數相隔候事故、爲念一應問合候由、右挨拶、

家中旅行之節、會符肩書へ地名認候儀ハ、宿々ニ而混雜いたし、紛敷義ニも有之、殊ニ中絶之上ハ、旁名前認候方と存候旨及挨拶候事、

〔平治物語三〕賴朝事、義兵、平家退治事

〔御觸幷御書付留　五〕一百姓町人賣荷之分、宮門跡方、堂上方、其外重き家柄之會符、手寄を以借受、往來いたし候分も有之趣相聞候、以來は宿々江役人差出相改、若紛敷會符荷物は留置、奉行所におひて嚴敷可令吟味候、紛敷會符、決而相用申間敷候、〇中略

右之趣、在町とも、御料は御代官、私領は領主地頭ゟ、不洩樣可被相觸候、

右之通可被相觸候

寛政元酉年三月

〔五驛便覽〕江州大津宿諸家會符異僞改方、幷同國草津宿諸荷物貫目改手代爲立會候之儀ニ付被仰渡書、

近來宮門跡方、御三家方、其外諸家之會符掛候而、道中筋往來致し候諸荷物數多有之、右之内ニは、町人等賣荷之分江も、家柄之會符を立、繼立等權威之儀申掛、或は賃錢拂方不宜趣も相聞候、依之以來大津宿問屋場江手代壹人ツヽ差出、京都より附出之分、假令重き家柄之會符ニ候共、宰領之者江掛合、異僞相改、若紛敷會符荷物と相見候分は留置、早々諸司代江可被申立候、尤右之趣、宮門跡方、其外諸向江、此度御觸御達等有之候、〇中略

右之趣伺之上、松越中守殿〇老中松平定信依御差圖申達候、以上、

四月〇寛政元年三日

根岸肥前守印

桑原伊豫守印〇二人道中奉行

石原清左衛門殿〇大津代官

〔驛肝錄〕寛政元酉年、道中奉行ゟ石原清左衛門江〇大津代官申達候趣、文政五午年奥書いたし相伺、下知有之候廉、

一宮門跡方、御三家方、其外諸家之繪符ニ而、異體之荷物と相見候分、大津宿問屋場江出役之手代

〔公務手書向扱方〕同年〇慶應元年通行之節川留ニテ追觸寫

覺

藪内於菟太郎
上下三人

一人足　　四人

一馬　　貳疋

右は我等出府之處、奥州衣川出水、通行止ニ而、仙臺領前澤宿滯留罷在候處、明十九日六ッ時、爰許出立、其筋致通行候條、得其意、書面之人馬無遲滯差出之、賃錢旅籠代、幷渡船川越等有之場所、前先觸面之通、都而無差支樣可取計候、且又休泊之儀、別紙〇別紙略之通相心得、宿壹軒ッヽ可致用意候、此追觸早々繼送り、千住宿ニ至り、江戸本郷御弓町内藤肥後守内能勢房五郎宅江可相屆候、以上、

丑七月十八日

箱館奉行支配定役
藪内於菟太郎印

仙臺領前澤宿より奥州道中日光道中千住宿迄
右宿村
役人中

〔御觸幷御書付留　五〕一以來町人江會符貸渡、公家衆、門跡方、幷武家之荷物に爲致候儀、急度相止可被申事、〇中略

右之趣、向後急度可相守候、假令組中支配、幷家來之不法有之候共、其番頭其役人之越度に相成候間、其旨可存者也、

天明四辰年六月

久〇久世豐後守〇勘定奉行、以下三人略、

〔驛肝錄〕天明四辰年六月觸流之内

一淸水殿與服物用達五人、壹駄一ヶ年四度之積、都合貳拾駄ニ限り、淸水殿繪符を以繼立候間、貫目御定之通、四拾貫目之積を以、御定賃錢可受取旨、東海道江觸流す、

内譯

引戸駕籠　壹挺

此人足三人

具足櫃　壹荷

此人足壹人

兩掛　壹荷

此人足壹人

一本馬　壹疋

右者我等箱館表江引越候ニ付、明十一日曉六時江戸出立、其筋通行致候條、得其意、書面之人馬差出之、御定之賃錢請取之、無遲滯繼送、渡船川越等之場所は、前後宿村申合、都而無差支樣取計、且泊上壹人錢貳百文、帶刀以上錢百五拾文、下百貳拾五文壹賄は半旅籠之積相心得、一汁一菜之外、馳走ヶ間敷儀致間敷、休泊之儀は、別紙之通相心得、宿壹軒ヅヽ用意可致候、此先觸早々繼立、於箱館御役所江可差出候、以上、

亥　十一月九日

箱館奉行支配定役出役
藪內於菟太郎印

日光道中千住宿ゟ奥州道中筋佐井濱夫ゟ箱館迄
右宿村
役人

休　泊

月日附

千住　草加

粕壁　幸手○中略

右之通

京都ヨリ江戸迄

駄賃次

年寄

遠州荒井 肝煎 年寄

池田 肝煎 萬五郎

駿河大井川 肝煎 年寄

同藤川 肝煎 年寄

相州馬乳 肝煎 年寄

右船頭中

〔公務手當向扱方〕文久元辛酉年手扣

本文 上包

西ノ内二ッ折　同断、白木箱入、眞田紐中結、寫上書共圖ノ如シ、

中殿目附役所押切印

箱館奉行支配定役出役

先觸　藪内於菟太郎

御用

覺

一人足五人　上下三人

〔御觸并御書付留 五〕東海道往來之輩、桑名宿を追越、熱田より四日市江直に渡海有之分、以來は上下とも、其譯先觸江書載可申旨、寶曆十二午年、道中奉行ゟ諸向江令通達候處、其譯無之、先觸之分も直渡海候旨相聞候、直渡海之分は、其わけ急度先觸江書のせ可申候、直に渡海之譯無之先觸差出候分は、登り下りとも、急度桑名宿に而継合可申候、

右之趣、可被相觸候、

安永五申年十二月

〔天保集成絲綸錄 八十二〕享和二戌年十一月

五海道人馬先觸之儀、一二ヶ月程宛溜置、道中奉行江被差出候樣、寶曆年中相達置候處、近來不被差出向多く候、以後參勤御暇之節は勿論、家中往來共、不洩樣可被差出候、尤家中往來ニ而も、多人馬被繼度候節は、前廉被聞合候樣可被致候、

一諸家中往來之節、先觸差出し候面々、泊附無之趣ニ相見候、右に付旅行之日割難相知候ニ付、先觸差出候日限を目的ニいたし、宿々人馬寄置候由之處、右日限之通旅行無之、自から人馬差支候儀有之哉ニ候、以來先觸泊附書入可被差出候、其上川支等有之日割相違之節は、猶追先觸可被差出候、都而役人共、又は馬士人足等不束之儀も有之節は、其段道中奉行へ可被申聞候事、

〔古文書類纂 上過所〕德川幕府所司代先觸 京都洛北大德寺塔頭眞珠院所藏

已上

此紫野春岳和尚、江戸へ御下候間、馬次定之ごとく駄賃を取、舟渡共に遲々不申樣ニ馳走可申候、爲其如此候、以上、

但上下共ニ

午
十月十八日　板伊賀 黒印

先觸

同壹ヶ宿地子代米貳拾石宛年々被下候

同貳町八反壹畝廿三歩枚方宿繼飛脚改

○按ズルニ、本書、此餘佐屋路、中山道、美濃路、日光道中、水戸佐倉道、奥州道中、甲州道中等ノ宿驛ノ地子免許ノ事アリ、今皆之ヲ略ス、

〔吾妻鏡十五〕建久六年二月八日甲子、雜色足立新三郎清經爲御使上洛、是近日依可有御上洛、海道驛家等雜事、渡船橋用意等、先爲令相觸之也、

〔五驛便覽〕五海道宿々人馬先觸之儀ニ付申上候書付

伺之通可仕旨、被仰渡承畏候、

曲淵豐後守
菅沼下野守〇二人並道中奉行

先達而、五海道宿々人馬遣方之儀ニ付、相伺候之通御下知相濟、宿々幷助鄕村々江も相觸候ニ付、當時宿々村々ゟ願等之薄く相成候得共、宿々ゟ助鄕村々江、兎角過人馬觸當候段申出、宿々ゟは當時觸當候通無之候而は、差支申候旨申ニ付、再應吟味仕候處、宿々之もの申立には、先觸無之往來有之候も御座候間、右用意ニ過人馬觸置候由、往來之儀は、先觸無之候はヾ、御用物は格別、外往來之儀は、先觸可仕儀ニ御座候間、御三家方を初、諸大名共、唯今迄人馬先觸不差出面々も有之候得者、私共ゟ其面々江申談、人馬先觸爲差出候樣ニ可仕事存候、尤御三家方之儀は、自餘之往來共驛遣可申哉ニ候得共、先觸無之候而者、無益之人馬當置申候間、先觸人馬高ニ准じ、過人馬觸當候へば、助鄕村々無滯相勤可申候、依之御三家方を初、諸大名又は在番其外御用ニ而往來共ニ、一同人馬先觸宿々江差出、私共方江も銘々先觸寫差越候樣、御三家方御城附、其外諸大名家來、並御用ニ而往來仕候面々江、右之趣可申談候哉、奉伺候、以上、

寶〇寶曆八年七月

免地子

計、貸附利金之儀も取立渡候故、元金高宿方にては不存、利金請取方不分明心得候宿方も有之、如何候、勿論貸附高勘定合等之儀、是迄も年々御勘定所江被差出候へ共、以來は取立方渡方宿々之請印相添、御勘定所江被差出、都而東海道筋御代官役所取計、區々ニ不相成樣可被致候、〇中略

酉四月

〔地方凡例錄五〕一三役之事

一御傳馬宿入用は、寶永四亥年より被仰出、高百石に米六升ツヽ納む、是は五海道問屋本陣給米、其外宿方御入用ニ成故、石代金納ニ成リ道中方御除金之内江相納る事也、

〔驛肝錄〕享保六丑年申上

一困窮之宿々、度々及類燒候節ハ御料私領共、家作拜借、伺之上申付候事、

〔五驛便覽〕五海道地子免許之事

東海道

一地子壹萬五千坪　品川宿

一同　壹萬坪　川崎宿〇中略

一地子免許無之、地子代米貳拾石宛年々被下、　熱田宿〇中略

一地子壹萬坪　枚方宿

一同貳町八反壹畝廿三步　同宿繼飛脚改

一同五千坪　守口宿

朱書東海道品川宿より守口宿迄五拾七ヶ宿

地子八拾三萬三千四百八拾三坪貳合貳勺　五拾五ヶ宿

同免許無之宿貳ヶ宿

拾人程にいたし置候儀は勝手次第に候、春三ヶ月、秋三ヶ月、參勤交代ニ而往來多時は、病人病馬を除、百疋百人御定之人馬、急度爲持揃可申候、尤末々に至り、右元金減候とも、此上救之儀は無之候間、此已後願ヶ間敷儀仕間敷候、火事幷借之儀は、前々之通御貸可被成候、依之別紙之通證文被差出可申候、右之段心得無之宿者、御金被下間敷候、御定之人馬持立可申候、其上難澁に候はゞ、問屋年寄急度可被仰付候、

一右貸方金御料ハ御代官、私領は年々役人遂吟味、不埒無之樣可致候、

一前々之通、無賃之人馬ハ不揃、宿人馬ニ而可相勤候、貸錢取候人馬之儀、先觸等ニ而集置候節ハ、助鄕之人馬繼立仕舞候上ニ而、宿人馬差出可申候、

一人馬仕拂之儀、案文之通宿々ニ而毎日附置、以來助鄕ゟ人馬割方之出入有之節ハ、右帳面を以可遂吟味候間、於帳面ニ不埒者、問屋越度ニ可成候、右之帳面不時ニ取寄改候儀も可有之候間、此旨申渡、折々帳面附方等も可致吟味候、

右之通申渡、證文取之差出可申候、以上、

享保十巳年

北條安房守
稻生下野守〇二人道中奉行

〔道中秘書九〕人馬爲持立東海道宿々江被下金之事

寛政元酉年

一東海道宿々人馬爲持立、御料は一宿江金五拾兩、私領は三拾兩ヅヽ被下之、

〔五驛便覽〕寛政元酉年四月

東海道宿々助成金渡方幷御手當被下人馬持立之儀ニ付被仰渡書

東海道宿々助成金之儀、年々無相違請取候段申立候宿々も有之候得共、中ニは支配役所ニ而取

本莊安藝守〇以下大名十二人略

東海道御傳馬宿、御料江鳥目八百貫文宛拜借被仰付候、私領之分は御料に准拜借之趣、不限金銀相應に從其領主可被申付候、以上、

三月

中山道之面々

酒井雅樂頭〇以下大名十人略

中山道御傳馬宿、御料江鳥目三百貫文充拜借被仰付、私領之分は御料ニ准拜借之趣、不限金銀相應ニ從其領主可被申付候、以上、

三月

〇按ズルニ、本書日光海道ノ諸大名ニ令スル所、亦本文ニ同ジ、故ニ略ス、

〔驛肝錄〕享保六丑年申上

一御料所宿々出火有之、人馬役之者類燒いたし候得ば、問屋幷馬役之者壹人へ金三兩、人足役壹人へ壹兩貳分ヅヽ、古來より拜借申付る、

〔道中秘書九〕〇〇〇宿々扶助金貸附方起發之事

一東海道一宿ニ人足百人馬百疋、佐屋路一宿ニ人足五拾人馬五拾疋ヅヽ持候而、往來人馬繼立、宿人馬ニ而不足分、助鄕江割懸爲差出筈ニ候處、今度長谷川庄五郎迄吟味處、困窮之由ニ而、御定人馬持揃不申、助鄕村々江猥ニ人馬割懸候段不届ニ候、然共此儀ハ被差免不及其沙汰候間、來ル二月迄ニ、御定之人馬急度可持立候、依之馬買代金、幷往還少キ節之飼料金、人足扶持とも、年々有之積を以、宿々江金何程可被下候間、永々元金不減樣ニ預置、右利金を以、御定人馬持立候樣可申渡候、然共平生人馬難揃置儀も可有之候條、三ヶ年之間、參勤交代無之時ハ、八拾疋八

橋本守口貳ヶ所四百貫文宛、舟越六ヶ所同斷、川越貳ヶ所百貫文宛、

右錢高合六萬千四百貫文、東海道分、〇中略

右是は今度所々道中江拜借就被仰付候、相渡申候、但返納之義は、金壹兩に付四貫文替之積、金子を以、來巳年より寅年迄、拾ヶ年之內、一ヶ年金貳千九百拾七兩貳分宛、每年上納仕筈被仰付候、拜借之證文は御金奉行衆江相渡申筈御座候、

江戸傳馬町江渡分

一錢壹萬貫文　大傳馬町

一錢壹萬貫文　南傳馬町

一錢五千貫文　小傳馬町

合貳萬五千貫文

此金六千貳百五拾兩但壹兩四貫文替

右是は今度傳馬町三ヶ所江拜借就被仰付候、但返納之義者、來卯ノ年より金六百廿五兩宛、每年御金奉行衆江上納仕筈被仰付候、

右貳口錢渡

合拾四萬千七百貫文

此金三萬五千四百貳拾五兩、右同直段、

延寶二年寅五月　岡上次郎兵衛

御勘定所

〔享保集成絲綸錄二十二〕寶永元申年三月

東海道之面々

是者右同斷〇下略

〔徵古文書乙集駿河國〕由比文書庵原郡由比町由比左右衛門藏

覺

駿州蒲原　同油井　同岡部　同藤枝

右四宿、公儀御用相違候間屋肝煎中江、一宿ニ付八木七石宛、當巳年より毎年被下候間、其方御代官所ゟ相渡、手形取之、勘定ニ可被相立候、以上、

十月十五日　高　伊勢守印

妻彦右衛門印

岡　豐前守印

井出藤右衛門殿

右寛文五巳年、四宿問屋肝煎被下米御證文、今度就所替蒲原町江預ヶ置候、依之致寫渡置候者也、

元祿五申八月　井出治左衛門黒印

油比町

問屋

肝煎中

〔御當家令條二十〕傳馬宿拜借錢覺

東海道

品川〇中略　枚方

合六拾六ヶ所

内五拾五ヶ所、壹ヶ所千貫文宛、由比町三千貫文、

〔五驛便覽〕宿々被下米并御扶持米之事

一米三百俵　　東海道相州　小田原宿

一同　　同豆州　三島宿

一米百五拾俵　　中山道上州　坂本宿

一同　　同信州　輕井澤宿

右宿々之儀、難所を繼送、馬繼も遠く、人馬共相疲れ入用等も多分、及難儀旨達上聞、爲御救米被下之旨、正德二辰年十月、秋元但馬守殿〇老中御書付を以被仰渡候、

一米三百俵　　東海道　箱根宿

右者町並居屋敷之外田畑無之、無。高。之。場。所。に而困窮之宿方に付、三島小田原宿並、御救米被下置候樣、享保六丑年、戸田山城守殿〇老中江、彥坂壹岐守、筧播磨守〇二人並道中奉行相伺候處、伺之通被下置旨、御同人被仰渡被下之、

一米百九拾八石　　同　日坂宿

一米貳百拾七石　　同　袋井宿

石者爲助成米先年ゟ被下來り、年々御物成米を以相渡、〇中略

佐屋路熱田、萬場、岩塚、神守佐屋

一米三拾石　　東海道　地子代米〇中略

一米百貳拾五石餘　　東海道　小田原宿

是者寬文九酉年ゟ、傳馬役、人足役之者江年々被下之、

但右百貳拾五石餘被下候爲御料、小田原領主拜領高之外、相州ニ而七ヶ村高、合五百九拾四石餘、其節之領主稻葉美濃守御老中御證文を以相渡、今以領主ゟ取立、年々相渡申候、

一米百貳拾五石餘　　東海道　三島宿

扶助

仕候樣ニと被仰渡、只今組與力同心御用相勤候、

〔驛肝錄〕享保六丑年申上

五街道問屋幷繼飛脚給米被下方

一東海道一宿問屋給米七石程宛、寛文年中より年々被下之、

同次飛脚給米、一宿江拾五六石より七八拾石迄、寛永年中より年々被下之、

美濃路宿々は、問屋給米無之、次飛脚給米計被下之、

中山道、日光道中、甲州道中、奥州道中宿々は、問屋給米、次飛脚給米共不被下、

但右之内日光鉢石町問屋計、正德五未年より、給米七石ツヽ被下之、

佐屋路四ケ宿江は、問屋給米、次飛脚給米共、正德五未年より被下之

〔道中秘書〕一地子免許幷人馬御定之儀に付、東海道四日市に有之候證文寫、

一米貳拾四石八斗六升八合、京升、是は御傳馬人足幷次飛脚御用のために、四日市傳馬中江、當酉之年より每年被下候間、右町々年寄手形を取被相渡、重而可有勘定候、以上、

寛永十酉年三月廿七日

杉田九郎兵衛印
武藤理兵衛印
曾根源左衛門印
井上新左衛門印

花房志摩守殿

〔新編武藏風土記稿五十四荏原郡〕品川宿

寛永十年ヨリ、東海道五十三驛ニ傳馬人夫及繼飛脚等給米トシテ、每年米千七百六十四石八斗九升五合ヲ賜フ、南北兩宿及步行新宿分、一年二十六石九斗ナリ、

天明二寅年道中方

差上申一札之事

東海道品川宿名主問屋共儀、御奉行所江罷出候節は、上下着用いたし來候處、千住板橋內藤新宿名主問屋共、羽織袴に而罷出候得共、江戸出口之宿々は、品川宿與も同樣之義に御座候間、當三ヶ宿名主問屋共も、以來上下着用仕罷出候樣致度旨奉願候に付、願之通御奉行所江罷出候節は、上下着用可致旨被仰渡、難有奉畏候、仍如件、

伊奈半左衛門御代官所　日光道中千住宿　同名主問屋　總代　庄左衛門

天明二寅年十一月廿九日

飯塚伊兵衛御代官所　中山道板橋宿　同名主問屋　總代　市左衛門

甲州道中內藤新宿　同名主問屋　總代　喜六

道中御奉行所

〔道中秘書十四〕道中方勤方申上

加役道中奉行勤方之儀申上候書付

松平石見守〇寶永五年爲道中奉行

伊勢伊勢守〇享保元年爲道中奉行

一御料所宿々之儀、寶永四亥年、宿手代被申付置、其所之御代官支配仕、公儀ゟ御扶持給米被下、上役下役一宿ニ兩人ヅヽ罷出、往來御用、其外宿助鄕村々人馬取捌仕候處、勤方不宜筋ニ而、正德二辰年、宿手代不殘被差止、道中奉行壹人ニ與力二騎同心十人ヅヽ御預相成、道中方宿々吟味

一奢たる儀、又は費成事、及ニ心之一程慎可レ申事、
右之條々於ニ相背一者
但神おろしは式目のごとく

何町
問屋
庄屋
組頭
定使

一誓詞は壹宿切ニ爲レ仕、助馬所は村切に可レ被ニ申付一候、
一宛所は、其所之御代官衆名付ニ可レ仕候、
一血判は、手代に見せ可レ申候、
右誓詞被ニ申付一候はゞ、其樣子早々可レ被ニ申越一候、以上、

起請文前書

一何町江助馬之儀被ニ仰付一候、少も我儘なる儀不レ仕、何町より觸次第、馬急度出し可レ申事、
一人通多き時分、馬をかくし申間敷事、
右之條々於ニ相背一者
但神おろしは式目のごとく

助馬村
庄屋
組頭
定使

〔道中秘書十二〕中山道板橋宿外貳ヶ宿役人上下著用之事

一助馬之村々庄屋、問屋、組頭、定。使。誓詞右同斷、
一壹宿ニ御傳馬百疋充持候樣ニ前廉被仰付候、百疋之内不足仕候宿も有之由、退轉仕候馬之儀、何樣之子細ニ而退轉仕候哉、壹人切ニ銘々書立、退轉仕候儀、道理につまり候哉、又奢りたる儀歟、豊なる義仕、退轉仕候哉、其子細書立可被差越候、扨又退轉馬仕立候義、考候而可申越事、
一跡々宿々人馬追通し不申樣に、堅可被申付事、
一參勤又は御番替之時分、其外人通多き時は、人馬滯候節者、御代官衆折々町江見廻り差引可有之候、但御納所時分、其外公儀御用之節は手代を付置、町人百姓我まゝ成儀不仕候樣に、又往還之衆無理成儀於有之は、御法度之趣可被申渡候事、
右之ヶ條、無油斷急度可申付候、以上、

萬治元年戌十二月廿八日

曾　源左衛門
村　治左衛門
井　筑後

起。請。文。前書

一跡々より傳馬宿江被仰出候御法度之通、相守可申事、
一御武家方は不申、町人百姓等に至迄、往還之面々江無理成義申掛間敷事、
一人通り多き時分、馬を隱置、馬無之などとて、通り候衆江僞を申、商人ニ付能荷物計を付申間敷事、
一助馬出し候村之馬に、付にくき荷物を付させ、付能荷物は我等共町々馬に計付申間敷候、或は不入馬を觸よりよび寄、或は用なくして日暮迄も置候儀仕間敷候、總而不寄何事、助馬之方江非儀申掛間敷候、勿論助馬の者の方より、金子預り馬請負申間敷候事、

宿役人

ノ繼場喩遠ナルヲ以テ、百二十五石七斗四升七合、寛文九年ヨリ賜フ、（領主ヨリ與ヘ、宿中ヘ配賦ス、）此外御救米ト稱シ、百五石、正德二年ヨリ賜ヘリ、（韮山貢稅ノ内ニテ賜ヘリ、人馬ノ役チ勤ムルモノニ割與フ、）

〔驛肝錄〕文政四巳年

一東海道、中山道宿々、人馬江可レ割二渡賃錢之內、刎錢ト唱、少々ヅヽ引取、問屋場入用にいたし候儀不二相成一、

但、三街道は別段之趣意有レ之、是迄之通、少々宛之刎錢、差免候積伺中、

〔折たく柴の記中〕前代（綱吉○德川）の御時に宿役人といふものを始て置れて、御料の宿々には、御代官所の手代といふもの、其宿々のことをつかさどれり、

〔新編相模國風土記稿鎌倉郡九十九〕戶塚宿

問屋場二　一ハ中宿一ハ吉田町（略○）註ニアリ、每月朔ヨリ十一日迄吉田町、十一日夜ヨリ月盡迄中宿ニテ事ヲ執ル、（問屋役四人、年寄七人、帳付十人、人馬指十二人、此事ニ預レリ、）

〔新編相模國風土記稿足柄下郡二十四〕小田原宿

問屋場二　問屋給米七石（數內、問屋二人ヘ四石九斗、人足肝煎二人ヘ二石一斗宛頒配ス、）

〔享保集成絲綸錄二十二〕萬治元戌年十二月

覺

一道中宿々、萬事作法能樣に今度被レ仰付レ候間、難レ有可レ被レ存候、彌入念、御代官所傳馬宿々者、公儀御法度を不レ背、奢たる儀無レ之、又費なる儀不レ仕樣に急度可レ被二申付一事、

一道中町々御制札改、御書直被レ遣候間、彌御制札之趣、能々可レ被二申付一事、

一御傳馬宿庄屋、問屋、組頭、馬借、誓詞書遣候間末々迄猥ニ無レ之樣ニ可レ被二申付一、但只今誓詞仕候もの相果候はヾ、其跡目のもの、右之誓詞仕候樣ニ可レ被二申付一事、

百姓等有其煩、一向被止之處、鎌倉祗候之御家人等、還又可有其愁、自今以後、充給日食、可召仕之矣、

〔新編武藏風土記稿 荏原郡五十四〕南品川宿

問屋場 改所(貫目改所)ニ續ケリ、屋敷二十六坪餘、川崎驛迄二里半、江戸日本橋ヨリ二里中、人馬ノ繼立テ勤ム、又千住板橋ノ二驛ニ繼送ルコトモアリ、ヨリテ百匹百人ノ人馬ヲ置、一高七千四百十四石ノ定助郷、三千三十九石ノ加助郷ヲ宛ラル、元ハ南北品川ノ二所ニアリシガ、改所同時ニ北品川ノ方ハ廢セリ、寛文五年、高木伊勢守守久、妻木彦右衛門頼熊、岡田豐前守善政等指揮シ、問屋給米七石ヲ賜ヒシヨリ、今ニ至テ貫米ノ内ニテ宿役人等ニ宛行ハル、又享保中、長谷川庄五郎命ヲ奉リ、人馬ノ扶助金四百七十二両二分ヲ賜ヒ、其金ハ郡代役所ノ進退トシテ貸シ、利息子ヲ以傳馬役夫ニ給ス、又安永年間、夫馬ノ賃銀三割増ヲ命セラレシ、其餘財ヲ積テ五百七十七両ヲ得、亦貸附トシ、息子ノ八分ヲ前ト同ジク傳馬夫役ノ用ニ充テ、二分ハ本陣脇本陣ノ費用ニ賜フ、サレド宿内次第ニ窮困ニ及ビシニヨリ、外ニ貯金千三百両ヲモ、寛政中願上テ貸附ニ加ヘ、是ヨリ年々ニ息利ヲ得テ、其不足ヲオギナフトイフ、

〔新編相模國風土記稿 鎌倉郡九十九〕戸塚宿

問屋場二 一ハ中宿、一ハ吉田町(略)○註ニアリ、毎月朔ヨリ十一日迄吉田町、十一日夜ヨリ月盡迄中宿ニテ事ヲ執ル、(略)○註又月次、當宿十九日、吉田町七日、矢部町四日ト割定メ、東海道ハ西方藤澤宿(高座郡ノ驛)ヘ二里、東方保土ヶ谷宿(武州橘樹郡ノ驛)ヘ二里九町ノ人馬ヲ繼ギ、又鎌倉雪ノ下迄、二里九町ノ脇道ヲ繼送レリ、(略)○中寛文五年十二月ヨリ、問屋給米トシテ七石ヲ賜フ、(内六斗六升六合當宿分、餘ハ吉田矢部兩町分)

〔新編相模國風土記稿 足柄下郡二十四〕小田原宿

問屋場二 一ハ中宿町ニ在、上ト唱フ、(間口五間)一ハ高梨町ニ在、下ト云、(間口六間)旬ヲ期トシテ相代リ勤ム、東海道西ノ方ハ箱根宿マデ四里八町、驛馬ヲ繼ギ、豆州三島驛マデ八里、人夫ヲ繼立リ、(箱根驛ハ山中ニ在テ、人夫ニ乏シキガ故ナリ、)東方ハ淘綾郡大磯宿ヘ四里、人馬ヲ繼、熱海道ハ官事ヲ帶テ往來スレバ、土肥吉濱村ヘ人馬ヲ繼、其道程四里、私事ノ往來ハ、豆州熱海村マデ人馬ヲ繼送レリ、行程七里、甲州道モ官事ハ多古村ヘ一里、私事ハ塚原村マデ二里ノ人馬ヲ繼立リ、又箱根温泉、湯本塔之澤各二里、宮ノ下三里半、堂ヶ島底倉各四里、木賀四里半、蘆ノ湯ヘ四里十一町ノ人馬ヲ繼送レリ、(略)○中又當宿ヨリ

共、差掛り病氣ニ而御届をも差出候間、自分方江も申聞、無ㇾ據儀ニ有ㇾ之候、併蒲原宿役人共申立之趣、無ㇾ謂儀にも無ㇾ之間、以來は右場所にも不ㇾ限、縱令川端迄臨み候とも、渡舟川越等留り、其所間之村方に候はゞ前宿江立戻、全體川明注進、醍と承屆候上に而、泊宿出立候樣、心得方可ㇾ達置、然れ共都而旅行之向、行掛り病氣之節は、間之村たり共、止宿逗留等無ㇾ據儀ニ付、左候節は、右村方者勿論宿方ゟも、其始末書付ニ認、宿繼を以奉行所江可ㇾ申立ㇾ旨、其方御代官所內、宿々幷間之村々江可ㇾ申渡ㇾ候、

未五月

〔平治物語二〕義朝靑墓落著事

義朝ハ兎角シテ、美濃國靑墓ノ宿ニ著給、〻長者大炊カ娘延壽ト申ハ、頭殿御志不ㇾ淺シテ、女子一人御座ケリ、

〔平家物語十〕海道くだり

去程に本三位の中將しげひらの卿、〇中略同じき元曆元年三月十日の日、かぢ原平三かげ時にぐせられて、關東へこそ下られけれ、〇中略池田の宿にも著給ひぬ、かの宿の長者、ゆやがむすめじゞうがもとに、其夜は三位宿せられけり、

〔曾我物語四〕おほいそのとら思ひそむる事

されば、しうれんのせいつきずして、おほいそのちやうじやのむすめとらといひて、十七さいになりけるけいせいをすけなり〇曾我のとしごろおもひそめて、ひそかに三とせかよひける、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年關東祗候諸人、家屋之營作、出仕之行粧以下事、可ㇾ令ㇾ停ㇾ止過差ㇾ之由、被ㇾ定之云云、此外嚴制數箇條也、後藤壹岐前司基政、小野澤左近大夫入道光蓮等爲ㇾ奉行、〇中略

一長者事

傳馬宿之外、間之村々煮賣茶屋ニ而、猥ニ旅人泊休之宿いたし、又は茶立女等差置、旅籠等も仕興、近在之駄賃馬等雇、荷物附送いたし候所も有之、本宿之障ニ成候段相聞候間、向後子細有之は格別、輕き旅人たりといふとも、猥成儀有之においては、宿致し候者は不及申、其所之名主年寄迄可爲曲事趣、正德五未年、享保八卯年、相觸候處、近來猥相成、諸家通行にも、間之村々において、休引受候も有之哉に相聞候、立場は人足休息迄之儀に付、旅人食事等之休は、間之村々ニ而可引請筋に無之條、間之村方休之積、若先觸ニ有之候節は、前後宿方之內、最寄之方に極置、其宿より前日通行之向江可申立候、尤行掛りの旅人たりとも、右ニ准可相心得候、〇中略

右之趣相觸候條可守之候、若相背もの有之においては、吟味之上、急度咎可申付もの也、

丑七月　左近〇道中奉行

美濃〇道中奉行

東海道品川宿より守口宿迄
佐屋路共宿々

右間之村々

本陣

問屋

年寄

名主

組頭

右道中奉行觸書、中山道、日光道中、奥州道中、甲州道中共、同文言、

〔驛肝錄〕文政六未年五月

一前書松平安藝守岩淵村止宿之儀ニ付江川太郎左衛門伺書江差圖之事

書面松平安藝守旅行之節、岩淵村止宿之儀は間之村方之儀ニ付、兼而御觸之趣心得も有之候得

閲行

四　三月

〔道中秘書　四〕助郷免除休役願等吟味心得方

一外休役に而人足相懸候はゝ、道中方に而頓着難成、重に難義にも候はゝ、減之義、支配領主地頭へ可申立事、

一村柄札に而見極無之候而者、奥書難成、印形難澀之節不穩事、

一助郷勤高と有人馬、助郷勤人馬次男等にも人數突合、壹人之百姓江幾日目に當候哉札、且割付札之上、拾ヶ年平均、永引三分以下は、先ツは休役難成、尤三分以下に而も村柄次第之事、

　但助郷は村々組合罷在候に者無之、困窮之麁略不同害に付、村々一同可願筋に無之、麁略之願方ニ付、願之趣實事と者難取用趣意、利害之事、

一百石に付、家數拾軒之村方は相應也、

一助郷勤續年限札之事

一關東之分、年々納辻永壹貫文に付、米貳石五斗代、

一奥書振合

前書之通、願書差出候に付、被仰聞候者、右申立之趣を以、助郷休役之義は、自餘之障に相成候間、依願御沙汰可被及筋に無之間、御吟味受、可申立樣無御座候、依之奥書を以申上候、

一請證文振合

當村之義、宿助郷村に有之候處、品々困窮申立、助郷御免除相願候得共、右申立之趣、外村とも同樣之義に而、自餘之障に相成、殊に右は依願可被及御沙汰筋に無之間願書御取上無之旨被仰渡、承知奉畏候、仍如件、

〔牧民金鑑十八〕文化二丑年七月

ケ年休役之義願出、困窮之趣は無相違相聞候得共、依願可及沙汰筋に無之、自餘之差障に相成候段、再應利害申聞候を納得いたし、願下度段、尙又願出、願之通下ゲ遣、今般外御用序、御代官比留間助左衛門、上野四郎三郎兩人之手代差遣、差村一同村柄爲相糺候處、いづれも困窮之趣無相違、助郷難相勤體に相見、其外同助郷村方之內、最寄若松橫落兩宿之儀も同樣水難に而人馬役可相勤村柄に無之段、右手代共申立候に付、猶又一同呼出吟味仕候處、場所に寄、水難之多少も御座候間、夫々引分之步合等糺之上、山畑橫落貳ケ村は助郷勤高之內三分二、蘆園、鷲田、岩堀、永井、高力、若松六ケ村は同半高、上地、坂崎、高須、土呂四ケ村は三分一、何れも拾ケ年之間休役爲致、差村之內、橫須賀外九ケ村江代助郷申付候積、割合取調候趣申上候、〇中略

右之通割合候積、橫須賀村外九ケ村吟味仕候處、是又困窮之段申立、下青野村之儀は、往古ゟ御朱印之由申傳候書物所持いたし候、諸役免除之村方故、助郷難相勤旨申立候得共、右者年貢納方、其外夫人等之儀を認候書面に而、諸役免除之文段認無之、外村之儀も困窮申立は一同之義に付、代助郷難相勤旨之申分難立段、吟味詰候處、可申立樣無之由申上候、

右吟味仕候趣、書面之通御座候、山畑村外拾壹ケ村困窮之段、無相違相聞候間、前書割合之通、夫々休役、并代助郷とも可申付候哉、伊豆守殿〇老中松平信明領分村々加り候願に付、此段奉伺候、以上、

亥三月

(道中秘書四)增助郷繼年季願御代官ゟ伺下知

文化十酉年三月十九日、多羅尾四郎兵衛出、東海道庄野宿助郷增助郷繼年季願伺、

書面箕田村外拾ケ村增助郷、并國府村外拾壹ケ村代助郷之義、當三月年季明に候處、困窮に候迚、繼年季いたし度との義は、續休役にも准じ、自餘之障に相成候間、依願可及沙汰筋に無之間、無取上段申渡、願書可差戾候、以上、

聞上者、是亦不埒之仕形に候、たとへ類燒候迚、人馬差出之儀、殊に御料所之分者、火事拜借も申付、私領之儀者、領主地頭々相應之手當も可有之儀に候へ者、令類燒家作致し候內、助鄕人馬計に而難立候儀者有之間敷事に候、內々者不宜取遣りも有之趣に相聞、甚不埒之事に而、以來右體之儀於有之者、急度可咎候、其旨可相心得候、

寶曆八年寅四月　下野〇道中奉行稻生
豐後〇道中奉行曲淵

中山道關ヶ原より守山迄右宿々助鄕村々
名主
組頭

東海道、中山道、日光道中、奧州道中、甲州道中、宿々助鄕高

一高壹萬七千六百六拾七石　品川宿

一高壹萬七千三百九拾九石　川崎宿

一高壹萬千百三拾九石　神奈川宿〇下略

(道中秘書四)助。鄕。休。役。願。伺物振合

享和三亥、道中留、

東海道藤川宿助鄕、三州山畑村拾壹ヶ村、休役願之義に付申上候書付、

書面伺之通可仕旨被仰渡、奉承知候、

亥三月廿六日　井上美濃守
石川左近將監〇道中奉行二人連署

東海道藤川宿助鄕、三州山畑村外拾壹ヶ村、連々困窮之上、去戌年逢水難、助鄕難相勤由を以、拾五

正徳度書上留と、標題を以唱來候義と相聞候事、

(五驛便覽)宿助鄕江申渡

一宿々人馬遣高之儀者、可成丈宿人馬に而繼立、不足之分、助鄕村々江可觸當筈之處、近來宿々ゟ助鄕村々江、多分餘慶之人馬觸當候之儀と相聞、助鄕村々難儀之段、毎度出訴およひ、免除亦者休年等願出候村々數多有之、畢竟宿場取計方不宜處、右體之願有之儀と相聞宿役人共一同不埒之至候、依之已來者、不時に宿々日〆帳取上相改、不相當之過人馬相見候はゝ、大名幷在番之面々、或者御用に而往來之輩ゟ先觸書付取之、日〆帳江引合令吟味、間、大名幷在番或御用に而往來之諸役人、末々陪臣たり共、先觸有之分、誰先觸、人足何人、馬何疋と相記、勿論右人馬割之役人姓名共、委細に日〆帳江書記し可申候、且助鄕村々ゟも總代之もの貳三人問屋場江爲立會、日〆帳江賃錢請拂之儀相認、問屋年寄、右總代之もの印形調候樣可致候、尤右先觸に而助鄕村村江人馬觸當候節者、銘々先觸寫相廻し、人馬觸可申候、勿論助鄕村々ゟも遲參不參不致、人數を合候ため、老人若輩者不用立者不差出、宿場ゟ觸出し候通、人馬無相違差出、總代之者貳三人、問屋場に而立會、日〆帳江印形調候樣、助鄕村々江も相觸候間、聊以右之趣不致違失、正路に宿役可相勤候、且亦前々ゟ、無賃之人馬者、助鄕江觸當不申、宿人馬に而繼立可申筈之處、是亦近來者無賃之人馬助鄕江觸當、賃人馬者宿方に而繼立候趣相聞、不埒至極に候、向後者無賃之人馬、決而助鄕江不觸當、宿方人馬に而繼立可申候、勿論無賃之人馬助鄕江觸當候歟、又者格別餘慶之人馬相觸候はゝ、早速道中奉行江可訴出旨、是亦助鄕村々江相觸候間、其旨を彌急度嚴重に可取計候、

一宿場類燒致し候得者、都而宿役人馬者不差出、不殘助鄕村々江計觸當候宿々も有之趣相聞、甚以不埒之至に候、尤宿助鄕村相對之上、類燒一兩日之內繰合、追而仕埋遣候と申筋に者無之相

一助郷人足遣方之儀、宿人馬不揃相立、不時之時は定助郷村々江相觸差出させ、定助村々ニ而も不足ニ候得者、大助村々ゟ差出させ申儀ニ御座候、

一東海道之内、箱根宿、油比宿、伏見に者、助郷無御座候、〇相宿〇江人足計相勤、馬は前後之宿ゟ追通申候、

但助郷村々江人馬之當り員數、定は無御座候得共、大概百石ニ付馬三匹迄、人足五六人迄は、定助郷計ニ而相濟、夫より多入時は、大助村々江相觸申儀に御座候、尤宿に寄、助郷ニ當候人馬數、一同に御座候、

此大助郷、享保十巳年、長谷川庄五郎宿々吟味之節相止、打込定助郷と相定候、〇此一行後人加筆

一道中助郷人馬懸り候儀、御料も私領も差別無御座候、助郷高百石ニ付、馬何疋人足何人と高割を以當申候、

一東海道岡崎宿ゟ大坂迄之宿々、并中山道、日光道中は、定助と申は無御座、大助郷計に而、定助同前に相勤申候、

當時は何れも定助郷と成ル〇此一條後人加筆

一奥州海道、甲州道中は、定り候助郷は無御座、大通之節は、古來之引附を以、近在村々ゟ人馬雇相賄申候、

但古來ゟ大通り之節、人馬出し來候村々相滯らせ、宿より訴出候得者、吟味之上、前々之通人馬差出候樣申付候、

石之通、道中人馬勤方等、書面之通御座候、以上、

丑〇享保六年十一月廿日　筧播磨守〇道中奉行

右正德度書上留內と有之候得共、年中不突合候は、右書上留之末江、享保度書上をも足し候義故、

組頭　藤兵衛

山本丹蔵　下山富五郎　酒井清兵衛　太田林　知行

同郡小谷村總代

名主　文右衛門

組頭　八郎右衛門

百姓代　伊兵衛

道中御奉行所

前書被仰渡之趣、私共儀も罷出、一同承知奉畏候、依之奥書印形差上申候、以上、

中山道鴻巣宿

役人總代

〔道中秘書十四〕道中宿々并助郷人馬勤方之儀ニ付申上候事

正徳度書上留之内

道中宿々并助郷人馬勤方之儀書付

覚　播磨守〇道中奉行

一宿々助郷之儀、先年は定り候助郷と申もの無御座候、宿人馬ニ而不足之時は、古來之引付を以、宿近在村々ゟ人馬雇継送り候處、段々通りも多手支候ニ付、宿々ゟ多少又は遠近も御座候ニ付、貳拾八年以前、元祿七戌年、宿々助郷割合相極申候、

但宿江近き村々に而罷在、遠き助郷村ゟ引替之儀願出候得共、宿江之道法程、雙方立會撿地申付、吟味之上割替申候、

人足のみだし、壹人にて可持をも兩三人掛る樣に成行、自然と人馬高も相增、村々の困窮云計なし、依之時之役人心を用ひ、國々助鄕之人馬減方、勘辨有之度事ども也、

〔道中秘書 四〕助鄕免除代助鄕申付候手續

差上申一札之事

武州寺谷村之儀、先達而品々困窮申立、差村いたし、中山道鴻巢宿助鄕御免除奉願候得共、依細御取上被遊候筋ニ無之段相辨、願書御下ゲ奉願候處、願之通御下ゲ被成候、今般外御用序、比留間助左衛門樣、上野四郎三郎樣御手代中被差遣、差村一同村柄御糺有之、猶又當御奉行所江被召出、再應御吟味之上、左之通被仰渡候、

一助鄕高四百四拾七石　武州足立郡 寺谷村

內 貳百貳拾三石五斗　是迄之通助鄕可相勤分

貳百貳拾三石五斗　御免許被仰付候分

右代り

一高八百七拾貳石餘　同郡 小谷村

內 貳百貳拾三石五斗　寺谷村代助鄕可相勤分

右之通、當(ヘ)十一月ゟ御免除、幷代助鄕被仰付候間、老人若輩弱馬等不差出、宿方ゟ觸當次第、人馬遲參不參不致、正路ニ可相勤旨被仰渡、一同承知奉畏候、若相背候はゞ、御科可被仰付候、仍御受證文差上申處如件、

享保二戌年十月九日

永田松次郎
島田良次郎 知行

武州足立郡寺谷村總代
名主 直右衛門

も、格別之譯有て、彌大役にて助郷勤がたければ相除く、定式外之役に而は、差たる事になければ、役村には不立なり、

一近年次第に助郷人馬多く當り、村々及困窮、驛場之勤は一日なれ共、二里三里もある遠所は、前日晝よりも村方を出、其夜宿へ着、翌日勤め、夕方迄にも役仕廻は夜通にも歸れども、繼場遠き宿、夕七ツ半時より繼送り、夜に入宿場へ歸れば、其夜は村方へ難歸、又致止宿、一日之勤に前後三日之日を潰し、農業にも後れ、剰へ二夜泊り食物之費多く、其上終日折返等に違るゝ故、途中に而も食事等致、遣錢もかゝり、其日取たる人馬賃錢は少も不殘、都て足錢入り、村々之痛不大形、殊更二里餘も有村方は、正人馬出しては右之費有之、三日も農業に後るゝゆへ、名主村役人とも緣を求め、問屋共へ對談にて、當り人馬を代錢ニ而差出す、此夫錢の疊り夥敷事にて、村入用多く掛る、右差出たる金錢は、問屋役人、馬差、物書等、呑喰之費用に費ひ捨、又は私用にも遣ひ、人馬は近里之村村、正人馬を餘計に遣ふ故、取譯驛場近き助郷村々は難義におよび、剰近年は別而、宿役人ども宿人足と馴合、御定通りの宿人馬不差出、賃荷等賃錢相對ニ而、利潤多き荷物を宿人馬には附送らせ、御傳馬人馬は助郷のみ重に遣ふ故、一入村々人足多く、自分田畑も荒し作に成、及困窮、潰百姓等出來、公儀地頭の不益も不少事なり、去る比、中山道新町、倉ケ野、高崎、安中、板鼻宿、助郷人馬之出方、享保年中より天明迄、凡六十年餘、年々之遣高、宿々より爲書出、引比べし所、假ば享保年中、高百石に五十人當りたるは、安永天明に至ゝては、三四百人之當に成、斯て八増倍程之遣ひ高、誠に大造成違ひ也、近年諸家其外通行多きとて、夫程には不違筈也、畢竟六七十年以前迄は往古之遺風有之質朴ゆへ、宿方の費用も薄く、宿人馬も實體に勤め、役人共も廉直に有之、人馬之遣ひ方正直成ゆへ、自然と入用少く、近年に至ては、上下交奢侈の風俗に移り、宿入用等相嵩み、右に記すごとく、遠所之助郷人馬賃等は無益に遣ひ捨、其人足だけ近村々より差出樣になれば、自然老幼之弱

京都御名代　日光御門主京都御通行

堂上方大勢通行　御三家方公家衆通行、外ニ大名旅行落合候節、

〔地方凡例錄六〕一定助鄕大助鄕之事付り加宿之事

前々は定助鄕、大助鄕と云て、中山道、日光道中等之內には、定助鄕と云は稀に有之、東海道之內にも定助鄕無き驛場も有之たる由、其比定助鄕は、高百石に付馬貳疋、人足貳人位之當りを以て宿場へ差出し置相勤る故、高掛り物御免、大助鄕は諸侯方參勤交代、御番衆通行等、其外共大通有之時、百石に凡貳疋貳人位之當りを以、觸出し召仕ふ、通行少き時は不出、仍て高掛り物も納むる處、四五十年以來、年增に諸家之通行多く、古來と違ひ、夥敷人馬入用に付、百疋百人之驛場、又は中山道、日光道中、水戶海道抔之類、五拾疋五十人之所に而も、宿人馬之上百石二疋二人位に而は不足に付、ことごとく人馬多く差出し、定助鄕村々勤りがたく成行人馬之遲滯多く、通行差支に成、宿方村方より追々道中奉行所へ願ひ出、御吟味之上、其後定助大助之名目相止、古來極りたる定助之上に、宿場最寄之村に差村いたし願出候を御糺明、當時は五海道共、東海道中山道、甲州道中、日光道中、水戶海道、都て助鄕相增、不殘定助鄕に成故、定之字を拔、助鄕と唱、三役之高掛り物御免也、大助鄕之儀は、日光御法會、あるひは朝鮮人琉球人來朝、其外にも稀成大事有之、助鄕人馬計にては難勤節、驛場より四五里位有之村方、時に望、御糺之上、大助鄕人馬差出す、常には大助鄕と云事今はなし助鄕村々之義は、五海道之外、國々脇往還にも極り有之也、

一助。鄕。高、何宿は高何萬何千石と極り、助鄕帳と申帳面有之、奉行所へも差出し、驛場へも致所持、人馬割觸致す事也、助鄕村は、其驛より里數近き村方重に相勤む、併村により役村とて、何ぞ御地頭用村用之外、公儀へ拘り定式之外に役を勤る村有り、是等は助鄕勤ては二重役に成ゆへ、宿場近村たり共、前々助鄕不勤村もあり、勿論差村に成、增助鄕吟味有之節、種々の役を申立といへど

四月

加宿

〔地方凡例錄 六〕一定助鄕大助鄕之事付り加宿之事

一加宿と云は、縱何宿と云名目有之處、人家少く、百疋百人、五拾疋五拾人之宿人馬難差出ニ付、宿場續之村方を加宿と極め、一ヶ村に而も二ヶ村にても驛場に加へ置、二ヶ村三ヶ村之高を以、一ヶ宿之役を勤る、是を加宿と云、加宿村は助鄕は不相勤、又驛場町、幷に他村有之町續旅宿屋等もあり、宿役人も有て、二ヶ村三ヶ村にても一宿立たる驛場有り、是は加宿にはなく本宿也、ヶ樣之宿場は所々に多し、

〔驛肝錄〕文政五午年閏正月

千人頭問合ニ付、挨拶之內、

一八王子八木宿は加宿ニ付、休泊可引受筋ニ無之事、

助鄕

〔五驛便覽〕宿々助鄕割極之事

一先年は定候助鄕無之宿人馬に而不足之時は、宿近在村々より人馬雇繼送候處、通りも多、手支ニ付、宿々願出、元祿七戌年宿々助鄕割合相極、

但先年は定助大助と相分候て、定助村々にて不足之時は、大助江觸當候處、享保十巳年、右大助名目相止、村々打込定助に定候、

〔驛肝錄〕享保六丑年

一東海道定助鄕、御料所は諸役高掛り物差免、定助大助と分り有之所は、大助江は諸役高掛り物不差免、定助無之大助計有之所は、定助同然諸高掛り物差免、

〔道中秘書 五〕大通行ニ而增助鄕觸書可差出分之事

一東海道、中山道、大通行之節、增助鄕觸書出候分左之通、

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年六月廿七日甲寅、御上洛之間、驛家御雜事等、被ㇾ加ㇾ下知ㇾ云云、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年三月十九日癸卯、今曉、三品親王關東御下向也、〇中略午剋著ㇾ御于野路驛、〇中略入ㇾ夜著ㇾ御于鏡宿、佐々木壹岐前司泰綱備ㇾ雜事ㇾ云云、

〔新編相模國風土記稿二十七足柄下郡〕箱根宿

江戸ヨリ行程二十四里、東海道五十三驛ノ一ナリ、〇中略相傳フ、此地宿驛ヲ置レシハ元和以後ノ事ナリ、關西ノ諸侯朝覲往還ノ時、箱根山ノ嶮峻ニシテ、且鄰驛路遠ク越易カラザルヲ以テ、元和四年、松平右衞門大夫正綱仰ヲ奉リ、山野ヲ闢キ、三島豆州ノ屬小田原兩驛ノ民ヲ遷サレ、此地ニ新驛ヲ置ル、

〔享保集成絲綸錄二十二〕享保三戌年十月

内藤新宿之儀、甲州江計之道筋ニ而、旅人もすくなく、新宿儀に候間、向後古來之通、宿場相止、家居等も常之百姓町屋にいたし、商賣物にて渡世致させ可ㇾ申候、尤自今猶以猥成義無ㇾ之樣に入念可ㇾ申付ㇾ候、右宿場相止候ニ付而、馬次之儀も、古來のごとく日本橋より高井土宿馬次に可ㇾ申付ㇾ候、新宿運上金不納、拜借金之義は、追而可ㇾ被ㇾ伺候、

一右新宿之旅籠屋共、二階座敷之分は、不ㇾ殘取拂はせ可ㇾ申付ㇾ候、

以上

十月

〔天明集成絲綸錄三十三〕明和九辰年四月

甲州道中は、江戸高井戸宿と人馬繼來候處、内藤新宿繼場に相成、當月十四日ゟ、登りは江戸、内藤新宿、高井戸宿、下りは高井戸宿、内藤新宿、江戸と、人馬繼立候間、可ㇾ得ㇾ其意ㇾ者也、

右之趣、向々江可ㇾ被ㇾ相觸ㇾ候、

等、多以對捍之間、召在廳等、注進狀被下之、

〔吾妻鏡九〕文治五年十月五日辛卯、有手越平太家綱之者、征伐之間候御共、募其功可被行賞之由言上、且賜駿河國麻利子一邑、招居浪人、建立驛家云云、仍任申請之旨被仰下、爲散位親能奉行、早可充行之趣、下知內屋沙汰人等云云

〔吾妻鏡十二〕建久三年十一月二日辛未、海道驛家事、國々被差定奉行、足柄山越兵士沼田太郎、波多野五郎、河村三郎、豐田太郎、工藤介等可沙汰之由被仰含云云、

〔吾妻鏡十三〕建久四年十月三日丙申、御堂供養導師下向之間、海道驛家雜事送夫等事、被支配御家人等、今日付雜色等所被遣也、來廿日比可令出京云云、仲業行政賴平等奉行之云云、

〔吾妻鏡十四〕建久五年十一月八日乙未、早馬上下向幷御物疋者、被支配海道驛々、大宿分八人、小宿分二人云云、是日者雖被沙汰置之、新宿加增之間、重及此儀云云、

〔吾妻鏡十八〕建永二年〇承元元年六月廿四日丙戌、和泉紀伊兩國守護者、佐原十郎左衛門尉義連職也、義連卒去之後、未被補其替、向後兩國爲院御熊野詣驛家雜事、自今以後、无指事外不可置守護人、就之諸事可爲仙洞御計之由被定之、仍義連代早可召上之由、所被遣御書於猪部入道寂忍之許也、廣元朝臣奉行之、

〔吾妻鏡十九〕承元四年六月十二日戊辰、御臺所御方女房丹後局、自京都參著、於駿河國宇都山、爲群盜等所持財寶幷自坊門殿被整下御裝束等、悉被盜取之由申之、十三日己巳、駿河國以西海道驛家等、結番夜行番衆、殊可致旅人警固、五年〇建曆元年六月廿六日丙午、海道可建立新宿事、度々雖有其沙汰、未令進行之由、依有其聞、今日重被仰守護地頭等云云、

〔北條九代記上〕貞永元年十一月十三日、依今年飢饉、美濃國高城西郡千餘町乃貢、傳進濟之儀、於當國株河驛、被施于往反浪人等、於上下向輩者、勘行程日數可與旅粮、

傳馬、賃傳馬アリ、朱印傳馬ハ無賃ニシテ、賃傳馬ハ規定ノ賃銀ヲ出スナリ、若シ先觸以外ノ人馬ヲ要スルトキハ、相對雇トス、又人夫ニ通日雇(トホシニヤトヒ)ト稱スルアリ、旅行ノ間、人足ヲ換ヘズシテ、常ニ雇フヲ云フ、人馬ノ負擔ニ貫目ノ制アリ、本馬一匹四十貫目、輕尻(カルジリ)一匹五貫目、人夫一人五貫目ト爲ス、輕尻トハ、荷物ヲ載セタル外ニ、人ノ騎乘スルコトヲ得ルモノニシテ、若シ騎乘セザルトキハ、二十貫目マデノ荷物ヲ負載セシムルコトヲ得ルナリ、而シテ荷物ノ貫目ハ、東海道ハ品川、府中、草津ノ三驛ニ各、貫目改所ヲ置キテ、其貫目ヲ檢定シ、之ヲ以テ準則ト爲シテ前途ニ遞送セシム、此他中山道、奥州道中ニモ亦各、貫目改所アリ、本陣ハ大名及ビ公武役人等ノ旅館ニシテ、又休憩ニ供スル所ナリ、亦脇本陣アリ、

王朝ノ時ノ飛驛ノ稱ハ、鎌倉幕府ノ時ニモ猶ホ存シタレドモ、或ハ之ヲ早馬、又ハ早打(ハヤウチ)トモ云ヘリ、又人夫ヲ馳セテ急ヲ告ゲ、或ハ馬ニ駄シテ、物品書狀等ヲ遞送スルヲ飛脚ト云フ、鎌倉幕府以降豐臣氏ノ時ニ於テハ、一ニ脚力、早道、飛力等ノ數稱アリキ、而シテ德川幕府ノ時、私人ノ業トスル者ヲ飛脚屋ト稱ス、

〔平治物語〕二義朝青墓落著事

兵衛佐賴朝、○中略鏡宿ヲモ過シカバ、不破關ハ敵堅メタリトテ、小關ニ懸テ、小野ノ宿ヨリ、海道ヲバ妻手ニナシテ落給ヘバ、○下略

〔源平盛衰記〕四十五内大臣京上被斬附重衡向南都被斬幷大地震事

前内大臣父子、○平宗盛、淸宗、幷三位中將重衡、去九日義經ニ相具シテ、上洛セラレケリ、○中略國々宿々モ過ヌ、○中略同廿日、近江國篠原宿ニ著ス、

〔吾妻鏡〕七文治三年三月三日乙巳、美濃國守護人相模守惟義申、當國路驛可加新宿所之事、有其沙汰、早可依請之由、今日所被仰遣也、　四月廿九日丙申、三日公卿勅使驛家雜事、伊勢國地頭、御家人

古事類苑

政治部九十八

下編

驛傳上

鎌倉幕府ノ時、京都鎌倉間ノ往來頻繁ナルヲ以テ、驛外ニ更ニ驛ヲ設ケテ之ニ便ズ、而シテ驛ヲ稱シテ又宿ト云フ、止宿ノ用ニ供スルヲ以テナリ、驛ニ長者アリ、蓋シ古ノ驛長ノ遺制ナラン、足利幕府ノ時、京都ヨリ鎌倉ニ至ル東海道ヲ六十三宿ト爲シ、且ツ其里數ヲ定メタリ、徳川幕府ニ至リテハ、驛ハ專ラ宿ト稱ス、或ハ宿場又宿驛等ノ稱モアリキ、〔宿驛ノ在所及ビ其里程ノ事ハ、地部道路篇ニ載セタリ、〕宿ニ若シ人家少ク、規定ノ人馬ヲ出スコト能ハザルモノアレバ、近隣ノ兩三村ヲ加ヘテ、一宿ノ役ニ從ハシム、是ヲ加宿ト云フ、又間村(アヒノムラ)アリ、間宿(アヒノシユク)トモ云フ、兩驛ノ間ニ在リテ、旅人ノ休憩ニ便ズルモノナルニ、宿泊セシムル等ノ事モアリテ、宿驛ノ盛衰ニ關スルヲ以テ、幕府ハ屢〻之ヲ禁ジタリ、宿驛ニハ傳馬及ビ人夫ヲ備フ、其人馬ニテ足ラザル時ハ、近隣ノ郷村ヨリ人馬ヲ徴シテ、之ヲ補フコトアリ、其郷村ヲ助郷ト云フ、助郷ニハ定助郷、代助郷アリ、定助郷ハ定リテ助郷村トナルヲ云ヒ、代助郷ハ定助郷ノ不足ヲ補フヲ云フ、又宿驛ニハ問屋場アリ、宿役人之ヲ管シ、專ラ人馬差發ノ事ヲ掌ル、先觸ハ公事等ヲ以テ旅行スルモノ、其道中ニ於テ要スル所ノ人馬ノ數ヲ錄シタルモノニシテ、發程ニ先チテ、傳馬役ヲシテ宿驛ニ傳告スルモノヲ云フ、建久六年源頼朝ノ上洛ニ先ダチ、人ヲシテ東海道諸驛ノ雜事、及ビ渡船橋梁等ノ事ヲ準備セシメシハ、是レ後世謂ユル先觸ノ權輿ナラン、傳馬ニ朱印

般若閘　在₂岩手村₁長十八間、横二間、高一間、雖₃在₂岩手₁、然古來呼爲₂般若閘₁、慶長年中、伊奈備前守、撿₂尾州土地₁時、始造₂此閘₁與₂小田井二閘₁、

〔新編相模國風土記稿十九足柄上郡〕班目村　二水門堰　北方文命堤ニ水門ヲ設ケ、酒匂川ノ水ヲ堰入、副三間村内ニテ二條トナリ、各東南ニ達ス、流末組合十一ヶ村ノ用水トナル、

〔新編武藏風土記稿二十葛飾郡〕島川　利根川滿水ノ時ハ逆流シテ、羽生領ノ村々動モスレバ水溢ノ患₁アリシユヘ、寶曆九年關七郎右衞門、岩松直右衞門等ガ計ニテ、當郡高柳村ト對岸埼玉郡北大桑村ニ堤ヲ築キ、門樋ト云モノヲ設ケテ、水流通塞ノ自在ヲナセリ、

〔新編相模國風土記稿（十二足柄上郡）〕瀨戶堰（勢止世儀）　都夫良野村字下瀨戶ニテ酒匂川ヲ堰入、山腹ヲ鑿空シテ水ヲ通シ、川村山北ニ至テ皆瀨川ニ掛。樋。ヲ設ケ、（長二十八間、高五丈四尺、）同村卑沼ノ地ニテモ又掛樋ヲ置（長二十四間、高一丈三尺、）テコレヲ通ジ、同村及川村、岸川村向原等ノ用水トス、故ニ或ハ川村用水トモ云リ、

〔江戶名所圖會一〕水道橋　小川町より小石川への出口神田川の流に架す、此橋の少し下の方に神田上水の懸。樋。あり、故に號とす、

〔地方凡例錄九〕一閘枠

是は筧の短く橫の廣き樣成ものなり、用水井路分水等之處に懸け、貳枚開戶にして、水を計り引分る所に用ゆる、此外門樋抔とて、堰用水門の樣にして、落蓋等之樋もあり、其處の有來りに隨ひ可積、切組方品々あり、京大坂江戶樋屋ありて仕立方功者也、

〔和漢三才圖會五十七水〕水閘（音智、みのくち）〇中略

三才圖會云、水閘開閉水門也、〇中略

按如値洪水溢田圃、則開閘去水、然大抵有所定法、卑田先開閘、待水略減時可開其次閘、

〔張州府志十一春日井郡〕備前閘　在下小田井村、俗謂之二閘、慶長中、伊奈備前守、奉神祖（〇德川家康）命來撿尾州田地、此時尾州民、未知造閘、水潦泛溢、備前守敎民造閘、一宮梓人某、赴播磨傳造閘之法、始作此閘與般若閘、其后諸村落皆倣之、

〔張州府志十五丹羽郡〕入鹿閘　在入鹿村、寛永中、敬公（〇德川義直）命從入鹿村、以其地築大塘、貯水漑田、連亘數里、殆若大湖、水滿則逐天沃日、其閘有十三扉、製造甚奇、竪閘長十八間、幅二間、高五尺、橫閘長五十四間、幅二間、高一間、其狀如龍骨車而異也、閘西有大堤、曰河內屋堤、闊七十五間、東西九十二間、昔有河內屋、始製此閘、因築堤故名、其西岩壁屹立、水深不可測、最爲壯觀、

〔地方凡例錄 九〕一。緣樋。

是は溜池之堤に伏込、用水を引樋也、松木凡長サ三間、末口壹尺四五寸位の大木を、片平引落、其片平大成方小口壹方殘し、中を八寸四方程に緣貫挽落て、蓋ニ元之樣に合せ、四方皆折釘に而打付ル、長は堤の數に應じ、二繼三繼にして、（繼手壹尺づゝ繼込ニ繼也）、小口一方緣殘したる方に穴を明け、穴の方を上になし、溜池之方にして伏込、樋頭之方穴の左右に鳥居柱を堀込、立栓木を笠木に通し、用水入用之時、栓を拔けば、樋に水通り、井路筋へ落ル、不用之節は栓を留置て、又蓋を釘付に不致、樋に輪を入る如く竹の輪に而〆るもあり、入用道具捨土臺緣樋之下積之間に送り、貳本位敷、其上に緣樋を不動樣に切組乘ル、鳥居柱樋口穴の左右堀込に立ル、笠木鳥居柱の上に蒋入柱木を通す、樋穴栓栗之木を用ゆる、是は大用水には不用、田地水懸り反別少き小用水に仕立る事也、

〔地方凡例錄 九〕掛渡井（筧ともいふ）

是は用水井路筋川之上を横に懸け越にして、用水を通す、甲蓋なしの樋也、筧の幅に准じ、柱貳本並にも三本並にもして、川幅次第三四ケ所も柱を建、下梁木を柱每に引、桁木を引、其上に筧を乘する道具、建柱、是は川中に立ル下梁木柱の上に横に渡す、蒋入貫木柱へ通す、桁木、下梁之上に三本に而も貳本に而も、筧幅に應じ引く、枕土臺、前後に貳本行桁の跡先を仕込む、上梁木筧の上に引、下梁之上梁に而筧を狹み、筧の外に短木を建、上梁下梁へ蒋入れ、敷板横板に遣ひ、兩側竪板に遣ふ、內短木、筧內之方兩側に立、側板縫付ル、土金板、筧前後枕土臺と筧の間にはめる、鋼板兩爪筧の左右土留ニ遣、抱杭、かせ留梁木より短木建柱より梁木、桁より敷梁へ鉌（ハリガネ）に而繋ぐ、又小懸け渡井、幅壹貳尺位川幅狹く、間數も短ければ、川中に柱貳本並に建、梁を引、柱に蒋入にして、行桁なしに懸渡、井を乘せ建柱に而挾み、柱の頭に上梁を引、懸樋を留ル、前後枕土臺は引く、敷兩側共布板に遣、內短木に打付る外道具はなし、

也、道具横土臺埋樋下捨土臺埋樋の間數に應じ、間に送り、貳本遣、敷板兩側板布板遣ふ、甲蓋板横板に遣ふ、布甲蓋、是は溜池之方竪樋を仕込ミ小口を塞ぐ甲蓋也、尺八板、竪樋の板也、竪板に而差廻しにする、鳥居柱、竪樋左右に堀込ニ建、笠木を仕込、桁木笠木、兩側に蒂入、元の方かせ留下扣木、鳥居柱に蒂入、元の方かせ留也、かせ留、杭桁木、扣木を挾み留杭を打、

〔紀侯言行錄中〕赤坂御中屋敷水道埋樋の事

江戸之赤坂中屋敷へ玉川の水を埋、樋ニ而取廻されけるニ、水おもふ樣ニ不來、奉行役人色々仕けれ共、快水不來けるを、賴宣君聞召、御好ニ而樋を曲尺ニ而倣して續せられければ、水ことの外快來りける、其圖ニ、

樋

此所ニ而五六寸餘シ據、故ニ水せきかへり、殊之外流れ來ル也、是水ニ勢を付たるものなり、

〔甲斐國志山川二十四〕近津渠　三川會同ノ處ニ陰溝アリ、九村ノ用水ヲ引ク、內河トモ云、石和宿內ヲ經テ南流ス、

〔甲斐國志山川三十一〕一德島渠　武川筋上條南割ヨリ有野ニ至ル、御勅使ノ河灘大約壹里餘ノ間陰溝ヲ通ズ、砂石ノ厚キ所ニテハ、深貳三丈ニ及ブト云、飯野ヲ逕テ曲輪田ニ終ル、下流ヲ黑岩川ト云、高室川ニ接ス、

〔新編相模國風土記稿愛甲郡五十四〕田村用水　厚木村ニテ小鮎川ヲ堰入、恩名船子二村ヲ流レ、船子村ト大住郡岡田村ノ界ニテ、恩蘇川ニ伏越樋ヲ設ケ其水ヲ通ジ、同郡酒井村ニ入、彼郡內六村ノ水田ニ沃ギ、流末田村ニ至ルヲ以テ名トス、

一三本　長三間半貳尺五寸壹尺貳寸尺〆拾五本七分五厘　代金八百五拾八兩五分　但尺〆壹本に付、金五拾四匁貳分

一五本　長三間壹尺八寸九寸尺〆拾貳本壹分五厘

代金貳百貳拾四兩三分、永貳拾五文、

但尺〆壹本に付金拾八匁貳分

一八本　長貳間半壹尺八寸角尺〆三拾貳本四分

代金八拾九兩、永百文、　但尺〆壹本に付金貳拾七匁貳分

合本數拾六本　尺〆六拾本三分

代金千百七拾貳兩壹分

但尺〆壹本に付金拾九兩壹分、永百九拾文貳分五厘九毛、

〔新編武藏風土記稿二十葛飾郡〕東葛西用水　松伏領松伏村ニテ、松伏溜井ニ二ノ圦樋ヲ設テ分水シ、二郷半領本田方ノ地ヲ南ニ直流シ、同領戸ケ崎村ヨリ小合溜井ニ落シ、小合溜井ノ南岸東葛西領下小合村内ニ又圦樋ヲ設ケ、夫ヨリ南流ノ堀ヲ通シ、又數多ノ枝流ヲ作テ、領中ノ諸村ニ注ゲリ、又此用水專ラ東葛西ノ地ノ爲ニ引來ルトイヘド、二郷半領本田方ハ水路ニ邊セル故、此水ヲ分テ用水トセリ

〔地方凡例錄九〕一埋。樋。竪。樋。　竪横を尺八樋とも云

是は內法八九寸四方、仕立方常々の圦樋之通り、溜池の堤に伏せ、樋頭溜池の方に而、竪樋內法八九寸四方、埋樋に仕込、埋樋は土中横に成、竪樋ハ竪に成、竪樋に三四寸程之穴、四ッ五ッ明け、栗木に而栓を打、穴數多く彫は、溜池之水多き時は、上の穴栓を拔キ、水を引及渴水程、下タの栓を拔く、又水淨山に入用之時は、一圍に穴二ッも三ッも明け、水を取ため水通しの穴四ッ五ッも明ル事

但土臺木扇板之儀者、右同斷、

一扒樋横内法 七尺 七尺五寸 八尺 八尺五寸
敷板 厚貳寸 甲蓋板 同四寸 側板 同三寸
[illegible]木類 六寸角、七寸角、 土金土抱 厚二寸 戸前柱 八寸角
樋尻柱 七寸角 笠木類 長は柱外へ六寸づゝ出る 幅九寸厚七寸
戸貳枚
竿四本

但土臺木扇板之儀、前同斷、

一扒樋横内法 九尺 九尺五寸
敷板 厚貳寸 甲蓋板 同四寸 側板 同三寸
短桁 六寸七寸角 土金土抱 厚貳寸 戸前柱 九寸角
樋尻柱 八寸角 笠木 長は柱外へ九寸づゝ出る 幅一尺厚[illegible]寸

但土臺扇板之儀は、右同斷、

一扒樋横内法貳間
敷板 厚貳寸＝貳寸五分 甲蓋板 同四寸五分 側板 同三寸五
短桁 六寸七寸角 土金土抱 厚貳寸 戸前柱 九寸角
笠木 長は柱の外へ壹尺づゝ出る 幅一尺一寸厚九寸 戸四枚 竿八本

但土臺扇板之儀は、右同斷

右板角寸法之儀は、新規に伏候節は、目當に而御座候、尤堤大小に寄、扒道りも大小有之儀に而、

一同には難相極御座候、且又御修復等は、有之板角厚角物寸法尺之通り仕候儀に付、書面之法には拘り不申候儀に御座候、

一高役人足之儀は、高百石五拾人迄は百姓役、其餘は壹人米七合五勺御扶持方被下候、百石百人餘は、壹人米壹升七合づゝ、賃米被下之、直段之儀は、春御普請人足は、前年十月之相場最寄市場上申下米直段平均相用申候、

一尺〆貳本八厘六毛 丸木壹本 長五間 末口三尺

右仕様末口三尺江長壹間に付太り壹寸づゝ、長五間に而五寸入元口三尺五寸と成、元口三尺五寸江末口三尺を入六尺五寸、是を平均三尺貳寸五分を掛け合、是江圓法七九を懸け、長五間をかけ、又長貳間に而割也、

不ㇾ掛樣可ㇾ有ㇾ勘辨ㇾ候、

一圦樋關枠水門、其外橋々土留等、向後挽木角物之上木一切不ㇾ相用、栗丸太杉丸太等、其所に而入札申付、買上仕立可ㇾ申候、角物取受不ㇾ遣候而は難ㇾ成場所者、委細其趣を以、別紙に可ㇾ被ㇾ相伺ㇾ候、評議之上可ㇾ及ㇾ差圖ㇾ候、尤御林有ㇾ之場所は、可ㇾ成丈御林木遣可ㇾ申候、

一圦樋之類之儀は、堤之處より格別長く堤内外江、餘計之間數伏込有ㇾ之場所も間々有ㇾ之、是等之類は、全先格に泥み、見分吟味にも不ㇾ及伏込候趣相聞、不埒に候、向後右體之場所、伏替之節、遂ㇾ一吟味いたし、不益之御入用不ㇾ懸樣可ㇾ有ㇾ吟味ㇾ候、勿論以來共目論見帳に、伏込候場所堤敷等、無ㇾ相違ㇾ樣相糺可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、○中略

一圦樋伏替橋懸替等之人足之儀は、只今迄之通可ㇾ爲ㇾ村役ㇾ候、關東大川通、其餘諸國共同樣に可ㇾ被ㇾ相心得ㇾ候、右之通り相極候間、可ㇾ被ㇾ得ㇾ其意ㇾ候、春積定式御普請被ㇾ相伺ㇾ候節、萬一右村役に可ㇾ成分、御入用積込、縱御普請出來候共、請帳に而吟味いたし、御入用には相立間敷候間、不ㇾ紛樣入念吟味可ㇾ有ㇾ之候、此外之儀者、享保十七年申渡候可ㇾ爲ㇾ書付之通ㇾ候、尤村役に差出候品之儀は、在々江も猶又可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、

〔刑錢須知 七〕四川用水方 新規切組候圦樋道具

寸法大概定法

一圦樋横内法

壹尺　壹尺五寸　貳尺　貳尺五寸

敷板厚二寸　甲壹板　同貳寸五分　側板　同貳寸五分　短板

貳寸五分角、三寸角、土金物　厚貳寸　笠木

戸前板　五寸角、樋尻四寸角、

六寸、厚四寸、戸壹枚　竿貳本　長は柱の外へ五寸づゝ出る、幅

但土臺土抱板扇板等は、地所に寄見合目論見申候、定法に難ㇾ相立ㇾ御座候、

一圦樋貫内法

三尺　三尺五寸　四尺　四尺五寸

敷板厚貳寸　甲壹板　同三寸五分　側板　同三寸

短木五寸角　土金物　厚貳寸　戸前柱　六寸角

樋尻柱五寸角　笠木　長は柱外へ六寸出る　厚幅五寸七寸

九坪七合三勺四才　長貳間横平均壹丈四尺六寸ヅヽ　前後扇板坪　新板

壹坪九合五勺六才　長壹丈七尺六寸ヅヽ高貳尺　手元壹丈壹尺六寸手先壹丈七尺六寸　同扇板先土臺下土金板坪　古板

一關東流扒樋長拾壹間　内法横六尺高三尺　新規伏込壹ヶ所

此板坪四拾貳坪九勺　皆新板坪

内

拾壹坪九合壹勺七才　長拾壹間横六尺五寸　敷板坪

拾壹坪　長拾壹間高三尺ヅヽ　兩側板坪

拾坪八合三勺三才　長拾間横六尺五寸　甲蓋板坪

壹坪四合四勺四才　長六尺高四尺五寸ヅヽ　前後樋上土抱板坪

三合九勺六才　長三尺幅壹尺五寸五分　前後左右鎧留板坪

六坪五合　長九尺高平均六尺五寸ヅヽ　表高七尺裏高六尺　前後左右土持板坪

〔刑錢須知 七〕寛保三亥年

諸色之内、村役ニ申付候儀ニ付書付

一扒樋類破損之儀、可成丈不及伏替、修復ニ積、見分之節、篤與吟味可有之候、且又少々之破損にも、江戸扒樋屋より、木取いたし下拵いたし、相廻候所も、不益之御入用相掛り不埒に候、輕き修復者、所に有合古木、又者最寄御普請有之場所之古木等に而、村役に取繕候樣可被申付候、又者御入用相立候程之修復に而も、有合木品に而繕候得者、不益之御入用不相掛候ヶ樣之儀、向後心を付、得と可被致吟味候、

但扒樋伏替人足村役に可出儀勿論に候、材木之儀は、可成丈御林木に而所切組申付、御入用

樋前後柱の內の方へ遣、兩袖土抱板、前後其樋の左右土持に遣、抱杭、兩袖土抱板を打附る杭也、同扣木、抱杭之頭切組、跡之方かせ杭に而留ル、かせ留杭、大扣木之元の方兩方より狹み、中に小貫を逓留ル杭也、略○註 土金板、前後枕土臺下之土留、館留板とも云、抱へ杭、土金板之留杭也、右仕立四寸五寸六寸、皆打釘を遣ひ、（皆打釘と云は平め廣大釘の頭、打釘之樣に曲ケたるものなり、）右は內法横六尺、高四五尺位之入樋の道具也、小キ樋は材木寸間釘の寸等少きまで、道具にはさして替る事なし、乍去板之遣ひ方竪横も違ひ等有り、中桁中短木等も不入、其外の道具にも少しは省略あり、樋橋之類は、雛形に無して は、道具遣ひ方等難書取、板材木尺〆に而積り立ル、堀割り伏込方等難書取、伏替には、堀埋坪人足懸りに樋坪倍引と云事有、總て、土坪之內より扒樋外法りの坪を倍にして引キ、其殘りに土取人足を懸る、是は堀埋とも、扒樋之坪丈ケは土無之故也、新規之所へ伏込には、樋坪計り引キ倍には不引、是は堀には人足手間懸り、埋坪には樋丈ケ土不入故也、委しくは用水普請格式帳を不見して は分りがたし、

（隄防橋梁積方大概）紀州流

一扒樋　長拾貳間　內法（高四尺五寸　横壹丈）　新規伏込壹ヶ所

此板坪九拾壹坪三合三勺四才　內（七拾壹坪六勺八才　新板坪　貳拾坪貳合六勺六才　古板坪）

內

四拾貳坪四合（長拾貳間　横壹丈六寸ヅヽ）　敷甲蓋板坪　新板

拾八坪（長貳間　高四尺五寸ヅヽ）　兩側板坪　同

貳坪七合貳勺（長五尺　高四尺九寸ヅヽ）　前後兩袖土金板坪　古板

拾坪六合六勺八才（長貳間　高八尺ヅヽ）　同左右土抱板坪　新板

貳坪三合五勺六才（長壹丈　高四尺六寸ヅヽ）　前後樋上同板坪　古板

三坪五合（長貳丈　高三尺　壹尺ヅヽ）　前後土臺下土金板坪　同

所瀬となりて、流支へ堀末は細くも行わたらず、よき田地の旱損に及事、曲の害ある故也、相州足柄郡儘下村用水堀替福寺といへる寺の地所さし出て、爰にて堀筋がのたをり流の障と成けるを、住僧智宗是を憂ひ、頓て境内を堀らせ、堀筋直に成川水行事矢のごとく引にのらざる所なく、水末の地主悦合る事限りなかりけり、堺内は蟻にもさゝせじと構へたる世の中に、水末の憂を忍びかねて、水引の爲に大切成境内を堀らせられし、此一事にて住持の德感ずるに餘りあり、境内すらゝ如斯、況や百姓地を堀筋堀替の時難澁すべからず、

〔地方凡例錄九〕一圦樋

是は川ゟ井路筋へ用水引入れ、又惡水落し、堤より川への落口に板に而差込、堤に伏込戸を明ケ立致す物也、是に紀州流關東流圦樋之仕立方、道具之遣方名目等少々違ひ有り、仕立方は御普請御定法書に委し、大キ成樋は貳枚戸三枚戸にいたす、材木は大概欅樅等を用ゆ、土臺杭木は松を用ユ、道具の名目凡に記レ之、枕土臺は長土臺の前後に壹本ヅヽ大木を遣ひ、長土臺竪ニ三本引、跡先枕土臺に仕込、大圦樋は四本も遣ひ、横土臺は横に遣ひ、長土臺に枘入、戸前柱是は樋前之方枕土臺仕込、戸を引柱へ、笠木戸前柱の上に仕込、戸竿を通す、戸板横板に矧ぐ、戸竿是は戸板を打付ケ、笠木に通す、竪棧也、小笠木、戸竿の笠木を云、小貫、是は戸竿笠木の下方に通す貫也、敷板圦樋の底板横に遣ひ、尤內法壹尺四方位之小キ樋は、布板にて竪に遣ふもあり、兩側板、樋之兩側竪橫に遣ふ、兩側短木、樋之內に立上下枘入れ、兩側板を打付る、中短木、是は小さき樋にはなし、內法四尺以上之樋に、眞中に短木を立、下は地覆に仕込、上は中桁ニ枘入、甲蓋を持する、中桁木、中短木之頭を仕込、眞中に竪に引、甲蓋板、樋の上蓋也、横板に遣ふ、是も小キ樋は竪樋ニも遣ふ、敷樋、兩側板、甲蓋板に而四角に差込、中地覆、是は樋之內敷板之上、眞ニ中竪に引キ、中短木を仕込、樋尻柱、後の方に立、枕土臺に仕込、同笠木、樋尻柱の笠木也、樋上土抱へ板、是は樋を仕込、上に土手を築立ル、土留板、

全ノ道ヲ得ルコト能ハズ、若術アラバ願クハ是ヲ施シ玉フベシ、素ヨリ願フ所ナリト云、退テ互ニ其成スベカラザルヲ嘲リタリ、元來石那田ノ田面ハ、土地至テ卑下ナリ、唯分水口ノ傍ノ田地三反歩、高地ニシテ水利ニ便ナラズ、故ニ堰高カラザレバ、此田ニ灌グコトアタハズ、堰ノ高ガ爲ニ屢破レテ保タズ、是ヲ以テ德次郎村年々渇水ニ及リ、且石那田ノ地ニ水ヲ引時ハ、土地卑下ナルガ故ニ、忽チ水落テ德次郎村ニ至ラズ、其難場ナルコト斯ノ如シ、先生此事實ヲ以テ縣令ニ達シ、然後土功ヲ起シ、自ラ指揮シテ力ヲ盡セリ、先ヅ堰ヲ立ルニ石枠ヲ三段ニ据エ、如何ナル洪水トイヘドモ、破損ノ憂ヒナカラシメ、次ニ德次郎用水口ニ、石ノ水門ヲ居エ、出水ノ節トイヘドモ、流水限リアリテ、用水路破壞ノ害ナカラシメ、次ニ石那田ノ分水、口ヲモ石垣ヲ以テシ、分水限リアラシメ、高地ノ田地三反歩ノ土ヲ他ニ運搬シテ、是ヲ卑下ナラシムルコト、或ハ三尺ヨリ二尺一尺ニ及ベリ、故ニ舊來ノ堰ノ高キヲ減ズルコト三尺ニシテ順水セシム、數日ニシテ全ク功ヲ成ス、於是用水兩邑ニ餘リアリ、下流他村ニ潤澤ス、兩村男女共ニ先生ノ深知ヲ感ジ、永世不朽ノ實ヲ得タリト大ニ悅ビ、年來ノ爭論忿心一時ニ解散セリ、

〔百姓往來〕水損旱損之手當者、池溜井河筋者、堤を築、筧(かけひ)、埋樋(うめとひ)、圦(いり)、土手、堰(かはよけ)、[illegible](ひ)、[illegible](がひ)、閘板(せきいた)、羽口(はねくち)、柵(しがらみ)迄、逐一日論見帳を以、年々村方之物入、可分別者也、

〔倭訓栞前編三〕いり。。　樋をいふなり、いひの轉語、圦もまた俗字、

〔續農家貫行六〕圦樋

水門圦樋は小破の修理を加へずして、用水時大破に及びては、俄に修復成難し、大切の場所なれば、村役人は常に心を付、少の破損は領主の手をまたず、取繕て滯なく水を引べし、用水は樋壹尺四方にて、水は百町の田を養ふといへり、堰の堀は勾配に少し無理有ても、堀筋直に引る・樣肝要なり、堀といへども、川となれば水行曲りたがり、嘗て堀筋曲り有所は、水淀み土留りて草滋り、其

堰ヨリ分水ス、年々用水足ラズシテ互ニ爭ヒ、德次郎ヘ順水セシムル時ハ、石那田ヨリ是ヲ破リ水ヲ引、德次郎ヨリ又石那田ノ用水ヲ塞ギ、四五月ノ節ニ至テハ、毎夜之ガ爲ニ家々安眠スルコトヲ得ズ、兩村仇讎ノ思ヒヲナシ、爭論止マズ、加之一邑中ニ於テ、互ニ水ヲ爭ヒ、或ハ他ノ用水ヲ塞ギ己ノ田ニ注ギ、彼又來テ是ヲ破リ、近隣怨恨忿怒ヲ懐キ、家業ヲ怠リ、衰弱困苦ニ陷リ、平年飢渇ヲ免レズ、而シテ訴訟爭論益甚シ、縣令之ヲ憂ヒ、屢此堰ヲ見分ストイヘドモ、一邑ヲシテ便ナラシムル時ハ、一村稼穡ノ道ヲ失フ、是ヲ以テ至當ノ處置ヲ下スコト能ズ、縣令先生ニ問テ曰、兩村ヲシテ爭論ヲ止メ、平穩ニ歸セシムルノ道アラン歟、先生曰、兩村ノ患其本田水ノ不足ニ在リ、苟モ田水餘リアルトキハ、制セズト雖モ、必平穩ニ歸セン、豈惟平穩ノミナラン、兩邑ノ廢衰モ亦是ニ由テ再興ス可シト、令大ニ悅テ、此事ヲ先生ニ委ス、於是先生、德次郎石那田ニ至テ、水理ヲ熟見シ、堰ノ高低ヲ量リ、邑ノ父老ヲ招キ、古來ノ事ヲ尋問シ、深ク思慮ヲ廻ラシ、兩全ノ道ヲ施ントシ、兩村ノ民ニ諭シテ曰、數年水ヲ爭ヒ、隣村ノ敵讎ノ如クナルハ、汝等ノ心ニ於テ豈快トセンヤ、我今此用水ヲシテ十分ナラシムルノ道アリ、然レドモ我ガ處置ニ任セズンバ成スコトアタハズ、汝等是ヲ欲スルカ、又從來ノ如ク互ニ相爭フコトヲ欲スルカ、若汝等永安ノ道ヲ求メ、互ニ十分ノ水ヲ得テ、兄弟ノ如ク交ランコトヲ欲セバ大幸ナルベシ、若我處置ニ從ハズ、如是ニシテ年ヲ經バ、連年衰廢ニ歸シ、終ニ兩村ノ亡滅ニ至ランコト疑ヒナシ、故ニ官我ヲシテ此憂ヲ除カシメントス、汝等ノ心ニ於テ如何、兩村ノ民答テ曰、積年用水不足シテ耕耘ノ力ヲ盡スコトヲ得ズ、是ヲ以如是困窮ニ陷タリ、水ヲ爭ヒ忿恨ヲ懷タモノ、何ゾ某等ノ欲スル所ナランヤ、然トイヘドモ爭ハザレバ忽チ一滴ノ水ヲモ不得、直ニ飢亡ニ及ンコトヲ歎キ、已コトヲ得ズシテ多年ノ爭論ニ及ベリ、今兩村ヲシテ用水十分ナラシムルノ道ヲ成シ玉ハヾ、何ノ幸カ是ニ如ンヤ、然レドモ舊來如此ノ堰ニシテ、一方ノ田地ヲ利セントスレバ、忽チ一方ノ田地水ヲ得ル所ナク、積年兩

作リ之ヲ葺ベシト、衆人何ノ故ヲ知ラズ、水上ニ屋ヲ作リテ堰ヲ作ラズ、亦異ナラズヤト私カニ笑フモノアリ、水上ノ屋既ニ成ル、先生曰、誰カ屋上ニ登リ、繋ク所ノ繩ヲ伐リ水中ニ落ス可シト、衆皆驚愕、一人敢テ應ズルモノナシ、先生曰、何ヲ憚テ上ラザルヤ、衆同音答テ曰、川上ノ屋、繩ヲ以テ繋ゲリ、今之ヲ斷ゼバ、屋ト共ニ川中ニ陥リ、死生計ルベカラズト、先生怫然トシテ曰、汝等危トセバ、我上テ之ヲ斷ゼントト、直ニ屋上ニ登リ、刀ヲ振テ數所ノ繩ヲ斷ズ、其迅速飛ガ如シ、屋一震水中ニ落ツ、衆皆愕然、先生屋上ニ立テ曰ク、汝等之ヲ危殆トス、我何ゾ汝等ニ危事ヲ命ゼンヤト、衆皆其過チヲ謝シ、益先生ノ神知測ルベカラザルヲ感ズ、先生曰、汝等速ニ兩岸ノ木石ヲ屋上ニ投ゼヨト、衆協力大石大木ヲ投ジ畢ル、然シテ後工匠ヲシテ其上ニ堰ヲ作ラシム、大小二ツノ水門ヲ設ケ、小水ニハ小門ヲ開キ大水ニハ兩ツナガラ開キテ、以テ洪水ノ憂ヒ無カラシム、茅屋ヲ以テ兩岸水底ノ細砂ヲ閉塞スルガ故ニ、水更ニ漏洩セズ、古來如此ノ堰ヲ不見、遠近來集シ、大ニ其奇巧且神速成功ヲ驚歎シ、凡智ノ不及ル處ヲ稱ス、初衆皆謂ク、此役五旬ニアラザレバ功ヲ竣ルコト能ハズト、然ルニ事ヲ擧ルヨリ僅ニ旬日ニシテ全ク成ル、故ニ往年百餘金ニアラザレバ成スコト能ハザルヲ、今用費其半ヲ不費シテ堅固無比、爾來數十年屢洪水アリト雖モ、些モ不動、或先生ニ問曰、古今闔國ノ用水堰、其數幾千萬、未聞屋根ヲ作リ水ヲ防グモノヲ、夫レ何ノ故ゾヤ、先生曰、川底兩岸皆細沙、元ヨリ木石ノ保ツ能ハザル所也、夫レ水ヲ防ントシテ隄防ヲ築クモ、蟻穴猶破壞スルニ足ル、我思フニ、茅屋雨水ヲ防ギテ不洩、何ゾ流水ヲ防ガザランヤ、是此堰ヲ作ル所以ナリト、

〔報德記八〕先生野州石那田村ノ堰ヲ堅築ス

野州河内郡石那田村ハ公料ニシテ、隣村德次郎村ハ宇都宮領ナリ、某年ニ至テ、德次郎村モ公料トナル、同村ノ用水ハ、石那田村ノ地ニ於テ、川ヲ堰、水ヲ引、以テ田ニ灌ゲリ、石那田村用水モ、亦此

再興ノ幸福ヲ得ルニ至ラバ、永年ノ安堵何事カ是ニ如ンヤ、方法中ノ難苦何ンノ堪ヘ難キコトカ之有ン、願クハ邑中ノ困苦ヲ憐ミ、再復ノ方法ヲ施行シ玉ヘト懇請息マズ、先生曰ク、邑中ノ田盡ク荒ス、是ヲ開カズンバ、何ヲ以テ衣食ヲ得ン、汝等之ヲ開拓スルコトヲ得ルヤ否ヤ、若シ邑中憤發開墾スル時ハ、我モ亦力ヲ盡シテ、難場ノ堰ヲ堅築シ、田水十分ナラシムベシト、於是里正其他大ニ悦ビ、開拓ノ難キニアラズ、惟用水ナキヲ憂フル而已、先生ノ深慮ヲ以、彼ノ廢堰成就スルコトアラバ、速カニ斯ニ從事セント、踊躍シテ邑ニ歸リ、此事ヲ告グ、男女老幼皆歡喜、直ニ開田ニ勉勵シ、數月ナラズシテ、累年ノ荒蕪大半ヲ開墾セリ、於是先生始テ青木村ニ至リ、毎戸ノ勤惰風俗ヲ察シ、開田ノ成ルヲ見テ曰、開拓ノ速ナル、實ニ邑中ノ憤發ニ由レリ、前日ノ懶惰モ汝等ナリ、今日ノ勉強モ汝等ナリ、一人ニシテ其勤惰相反スル、黑白ノ如キモノハ、勤ルト惰ルトノ二ツニアリ、善惡貧富盛衰存亡、皆如是ナラザルモノナシ、故ニ富道ヲ行ヘバ必ズ富ミ、貧道ヲ行ヘバ必ズ貧、唯邑民ノ行ニ由テ、禍福吉凶ノ差アリ、今舊來ノ懶惰ヲ改メ、如斯盡力シ、永ク勤勵ヲ不失レバ、邑ノ再興何ノ難キコトカアランヤ、我前日ノ約ノ如ク、難場ノ堰ヲ築キ、十分ノ田水ヲ此開田ニ漑ギ與フ可シト、里正村民雀躍欣喜、其高恩ヲ謝ス、先生邑ノ水理ヲ熟見シ、櫻川ノ水勢ヲ察シ、然ル後東山ニ登リ、山ノ中央ヲ穿チ岩石ヲ得タリ、直ニ邑民隣邑ノ者ヲ集メ、遠ニ木石ヲ運搬セシム、役夫ニ諭シテ曰、建築迅速ナラザレバ、出水計リ難シ、若シ半途ニシテ出水ノ爲ニ流失セバ、前功忽チ水泡ニ歸スベシ、故ニ非常ノ盡力ニ非ザレバ成スベカラズ、役夫ノ雇錢一日米一升二合錢二百ヲ常トス、今日ノ役ハ常時ト異ナリ、故ニ一日金貳朱ヲ與フベシ、力足ラザル者ハ半日ノ働キヲ以テ一朱ヲ與フ、若シ懶惰ニシテ不勤ルモノアレバ勤勵者ノ妨害タリ、即時之ヲ退カシムベシ、半日ノ働モ爲シ難キモノハ、役夫ニ加フ可カラズト、衆皆悦ンデ指揮ニ隨ヒ大ニ勉勵、東山ヨリ岩石材木ヲ櫻川ノ兩岸ニ運搬シ、不日ニシテ達ス、先生又命ジテ曰川幅ニ應ジ茅屋ヲ

里、故ニ先生（〇二宮金次郎）ノ良法三邑再興ノ事業ヲ聞キ、（〇中略）直ニ出府、此條ヲ川副某ヘ具陳ス、川副氏大ニ悅ビ、時ノ用役並木柳助ニ命ジ、直書ヲ以テ依賴セシム、柳助勘右衛門村民ヲ率テ櫻町ニ至リ、一邑再興ノ方法ヲ請フ、時ニ天保三年ナリ、先生暇ナキヲ以テ之ヲ辭ス、邑民屢請テ止マズ、（〇中略）先生曰、汝等衰村ヲ興サンコトハ甚難シ、目今其易キ事ヲモ爲サズシテ其難キコトヲ爲ントスルハ惑ニアラズヤ、今其易キ者ヲ示サン、汝邑民目下ノ良田蕪莱シ、葭茅茂盛、冬ニ至レバ野火茅ヲ燒キ、是ガ爲ニ民家ノ燒亡スルモノ數々ナリト聞ク、假令開田耕耘ノ力足ラズト雖モ、此茅ヲ刈ル何ノ難コトカアラン、而シテ是ヲ刈ラズ、家ヲモ灰燼トナシ、他邦ニ流離ス、何ゾ愚ノ甚キヤ、一邑再興ノ事ハ暫ク措キ、先ヅ火災ノ本タル茅ヲ刈ルベシ、刈リ畢ラバ我レ用ヒ所アリ、至當ノ代價ヲ以テ之ヲ買ベシ、汝能スルヤ否ヤ、於是邑民悅ンデ歸村シ、男女老若皆未明ヨリ出テ、不日ニ千七百七十八駄ヲ刈リ終リ、之ヲ先生ニ告グ、先生人ヲシテ其數ヲ點撿セシメ、其價ヲ常價ヨリ增シテ之ヲ與フ、民許多ノ錢ヲ得テ大ニ悅ビ、從來之ヲ不刈燒亡ニ歸シ、且火災ニ罹メタルコトヲ悔ユ、先生曰ク、民ノ家屋ヲ全クシテ雨漏アルナキヤ、答曰、戸々絕窮、今日ノ衣食ヲモ支フラズ、何ヲ以家屋ヲ修葺スル事ヲ得ンヤ、故ニ戸々ノ破漏甚シ、降雨ノ時ハ晝夜安ズル能ハズ、先生曰、吾今民屋ノ雨漏ヲ除キ與フベシ、村社堂寺ハ如何ン、答曰、家々如是、何ノ餘力カ斯ニ及バン、破漏特ニ甚シ、先生曰、村社堂寺ハ一邑保護ノ神佛安置スル所也、然ルニ此ノ如クナラバ、邑民何ヲ以テ繁榮スルノ道アラン、速カニ屋敷ヲ細記シテ來ル可シト、民唯々トシテ退キ、家屋ノ調ベヲ持シテ來ル、先生物井ノ里正其他ニ命ジ、行テ速カニ修葺セシム、數日ニシテ社寺家屋盡ク新葺畢レリ、近隣ノ邑民往來ノ者ニ至ルマデ目ヲ驚スニ至ル、靑木ノ里正村民、意外ノ恩惠ヲ悅ビ、櫻町ニ來リテ其恩ヲ謝ス、先生曰、邑中社寺民屋悉ク新葺、雨漏ノ憂ナク、且火災ヲ免レ安居ヲ得タリ、我ガ方法ノ如キハ、汝等ノ行ヒ得ベキニ非ズ必ズ止ムベシト、村民答曰、廢亡ニ等シキ難村、

百貳拾八間　是は四間籠ニシテ三拾貳本、内貳拾四本は敷、貳本宛、壹本は籠ニ遣、八本は壹本宛八間押籠、

此石六拾壹坪八合

唐竹貳千八百拾六本　但四五寸廻り、籠壹間四本作り、

人足三百九拾七人　内貳百四拾七人石取壹町壹坪四人、百四拾七人籠作壹人五間

〔江戸名所圖會十二〕大洗堰　目白の涯下にあり、承應年間嚴命により、當國多摩郡牟禮邑井頭の池水をして、江戸大城の下に通せしむ、其頃此池に堰を築せられ、其上水の餘水を分らるゝ、天明六年丙午の洪水に堰崩れたり、こゝに於て再び堅固に築せられ、古より壹尺ばかり其高さを減ず、故に水嵩時は、其上を越て流れ落る、故に損ずる患なしといへり、

〔報德記二〕川副氏采邑青木邑ノ衰廢ヲ興ス

常陸國眞壁郡靑木村、高八百五十石餘、幕府ノ旗下川副某ノ采邑ナリ、往時公料ニシテ、野州芳賀郡眞岡縣令ノ管轄ニ屬ス、元祿度民家百三十戸、頗ル繁殖富饒ト稱ス、寬永年中ニ至テ川副氏ノ采邑トナル、邑ノ西北川アリ櫻川ト云、此川ヲ堰キ靑木高森二邑ノ田水トナス、此堰ノ左右水底皆細砂灰ノ如クニシテ、更ニ岩石無シ、故ニ木石ヲ遠所ヨリ運搬シ、縱橫大木ヲ用テ建築スト雖モ、大雨洪水至レバ、忽焉細砂ト共ニ流失シ、田水枯渴耕耘ヲ得ズ、公料ノ時ニ當テハ、破壞每ニ役夫三千餘人ヲ諸村ニ課シ、入費數百金ヲ以テ造築セリ、寬永度以來ハ、一邑ノ民力之ヲ修築スルニ能ハズ、耕田ノ道ヲ失ヒ民心放肆、良田蕪萊、怠情博奕ヲ常トシ、戸々絕窮、遂ニ四方ニ離散スルニ至リ、民屋切近ノ田ト雖モ、茫々タル原野ニ歸シ、腹茅荻萩繁茂、狐兎斯ニ住ス、天明度野火茅ヲ燒キ延テ民屋ニ及ビ、之ガ爲ニ三十一戸灰燼トナル、於是益窮シ、僅ニ二十九戸ヲ存ス、是モ亦貧困支フ可ラズ、○中略邑ノ里正ヲ舘野勘右衛門ト云、性廉直篤實ニシテ、大ニ衰邑亡地ニ至ランコトヲ憂ヒ、再復ノ事ヲ謀ルト雖モ、貧村ノ力如何トモ爲スベカラズ、櫻町陣屋ヲ去ルコト僅ニ三

野壹百五拾六束　四尺打違五尺繩貳人〆　敷萱　葉直竹四万四千四百六拾本　棚

竹

是者洗横拾參間之處、棚數九拾九棚、壹間百八拾本ツヽ、壹棚貳千三百四拾本、

同竹六千八拾四本　縦竹

是は洗横同斷、棚數拾九棚、打通七棚、合貳拾六棚、壹間拾八本立、壹棚貳百參拾四本ツ

葉唐竹五百八拾五本　折通竹

是は洗横右同斷、上折通壹棚、壹間三拾五本立、

同竹百五拾六本　縦竹

是は洗横同斷、留縦貳通、壹間六本立、壹通七拾八本、

轉木拾貳本　長貳間壹尺　轉木

是は洗横右同斷、羽口下三尺も除之、六本繼貳通分、

縫杭四拾八本　長五尺　鎹木

是は洗横右同斷、轉木鎹木壹通り貳拾四本づヽ、

人足五百貳拾人　但地形平均棚處縫仕立共、壹坪五人、○中略

館林領洗堰仕様

一洗堰　川口三拾貳間　流六間

此入用

籠長延七百八間　但差渡貳尺

間

五百七拾六間　是は六間籠ニシテ三拾貳本、内貳拾四本は敷、貳本留、壹本繼ニ遣、八本は壹本立八分押籠、

云は、大川をせき切、堰水深く流れ、早川にて杭もうたれず、近邊に大石なき所は、土俵にてせく也、簗圍といふは杭を打簗をかきせき立るなり、土負木圍と云は、材木を重ね上てせく也、簗圍といふは、材木を重ね上てせく也、

材木圍といふは、材木を重ね上てせく也、簗圍といふは杭を打簗をかきせき立るなり、土負木圍と云は、大木を川端に横へ、其内へ小石を取掛せき上るなり、材木圍、簗圍、土負木圍、石籠圍杯は大堰にあらず、

〔治水要辨〕井堰の辨

一用水入口の井堰は、其川々の大小強弱に隨ひ、石川砂利川の地理を察し、仕方品々有、總而大川を堰入る〆切は、一文字に〆切てよし、山川の小川は箕の手に〆切べし、砂川は袋堰をよしとす、如何となれば、大川の堀是川幅廣く、水の泥多き故、先手を川上へ堰上る時は、水先用水口へ突向、出水の度毎に、土石を押懸て堀口を埋み、其上に水先をするどくして、堰の破るゝに及て、到而深く堀込也、俵之修復殊之外六ヶ敷手間取故に、用水の用を欠事あり、一文字に〆切洗ひ堰にする時は、水先をやわらげ、水勢おのづから靜にして、出水の時も堰を一流に水越故、大破無之者也、たとへ破損有ても、修復いたし安し、小川の堰は水の手少く水勢弱き故、先を其の手に堰上ざれば、水載りあしきもの也、縱出水ありても破損する事又輕し、砂川の堰は常のごとく堰入るゝ時は、ふだん砂井筋へ流れ込て、堀敷埋るのみならず、又田地へ砂流れ入て、年を經て幾代出來する物也、袋堰にする時は、砂は自然と袋に溜り、上水計用水へ入故に其害なし、出水の度毎に堰の内一二ヶ所ヅヽ押切、袋の砂を拂ふやうに計らふべし出水落次第修復の入用は輕くして、ふだん埋る所の砂浚へは重き事也、又沼川の堰は、下向の堅め第一也、堰は總じて出水計にて破るゝものにもあらず、瀨うなぎの穴よりも破るゝ事あり、地形を能堅めて其難を防べし、

〔刑錢須知七〕四川用水方〔川除、水門、圦樋、閘枠、土橋、〕仕様之定法

一洗堰〔水流入間、横拾三間〕　壹ヶ所　此平坪百四坪

後分水を引候樣被仰付被下置度奉願候、

相手方源左衛門外四人呼出相糺候處、訴訟方勇右衛門外壹人之田地江掛り候用水は、宮塞分水を以、先規より用水引來候得共、宮之後分水爲引候而は、私共田地江用水堰込候に、難堰止難儀仕候間、訴訟方之者共、先規之通、宮塞用水を引候樣、被仰付被下度旨申之候、尤水澤山成年は、私共田地江堰込候餘水多御座候得ば、訴訟方地所之儀は、流末より自然與順水仕候得共、當年之儀は悉水拂底に御座候間、末地迄は水難遣候、左候得ば訴訟方にては先規之通、宮塞之分水を相用可申儀と奉存候旨申之候、

右雙方及爭論候間、利害申聞候趣左之通、

右用水之儀は、來春に至り致出訴、苗代水之間に合候得ば宜き事に候、當時御年貢取立最中、右體可申出樣無之候、何れに茂當村用水之儀は、湖水自木共、先達及爭論、公儀御裁斷所に於て、三奉行方御書下シ之御裁許狀を以、御裏判有之候通、無甲乙分水可致旨之御裁許狀所持仕ながら及爭論、甚不埒至極に候、畢竟當時御年貢取立方を妨、不納可致巧を以、右體之時節不相應なる出訴致哉と存候、且論水之義は、就中御定例之有之事にて、其方共强て相願候得ば、一領吟味之事故、若吟味請度存候ば、來春に至り江戸表江罷出可申候、其節奉行所江も伺可遂吟味、利害申含候處、雙方引退和融内濟仕候、

○按ズルニ、用水ノ訴訟ニ關スル事ハ、尙ホ法律部下編訴訟篇土地用水訴訟條ニ在リ、

〔地方役人四〕用水普請之事

一堰は石關、土俵關、材木關、簀關、土負木關、石籠關抔と品々あり、石關と云は、根より大石を並べせく也、船往來の川筋は、眞中に澪を拔置、用水の内は是を塞ぎ、用水被遣て後、澪を明て船を通す也、石關は每春に水節を塞ぐ計の普請にて造作もなく、永代損せざる故に是をよしとす、土俵關と

〔例書五〕一駿州駿東郡貳拾九ヶ村水論有之、去酉年奉行所御裁許有之候は、雙方用水無甲乙引取候樣にと有之御裁許にて候、相手方源良村關元にて、下郷より訴上候は、箱根湖水井自水を引候用水也、源良村にて自水と申候は、是迄源良村計にて引候湖水を、分水之積に源良村にて相心得罷在、右自水湖水源良村にて用水に遣ひ、殘之餘水を下郷江遣候積り心得罷在候處、下郷より願出、御裁許には、自水湖水共無甲乙、雙方水配致候樣、酉春書下し御裁許狀也、依之奉行所にて給給之地頭役人江無甲乙水を引候樣、證文可取旨被仰付候哉、但不被仰付儀に候ば、證文取候儀に不及候、右之通被仰付候上は、給々役人より雙方江證文申付候事に候、然る處證文印形取掛り、源良村印形難澀致候由にて、翌戌年水配り時節、給々役人用水見分之上、印形可取趣にて、酉年より打捨置、戌年五月上旬に至り、定年番添年番申合せ之上、添年番より申來候は左之通、

右用水配り見分之儀、時節後れ也、苗代水通し仕付水而已也、於然は見分致候に不及候、且奉行所御裁許有之候用水出入之儀、奉行所より御下知無之事に、給々江印形取候に不及候、但無甲乙願水致候樣、印形書付取可申旨被仰付候而、書付に印形取掛り候處、印形難澀致候は、如何樣之譯にて、右書付に印形難澀仕候趣に奥書印形取之、其節之奉行所江申立、源良村を奉行所江被召呼候て、奉行所にて印形被仰付候樣可致事に候、翌戌年迄差延置候事には無之候、尤定年番添年番有之、其上村方に水配り役人有之候得ば、給々より役人見分には不及事に候、

〔例書六〕一駿州源良村百姓勇右衛門外壹人申立候は、當村用水は自水箱根湖水兩用水大筋にて、源良村地內所々江分水仕候處、右分水之內、宮之後分水筋與宮塞分水筋御座候、私共田地は右兩分水流末にて、先規より宮之後分水を引來候處、相手方之者ども申候は、其方共は先規より宮塞分水を引來候段申之、宮之後用水を爲引不申、相手方五人之者共、地所は私共所持之地處より用水上にて、用水時節水一滴も不遣難儀仕候間、當年田方苗代水養水迄難儀不仕樣、先規之通、宮之

處、三藏御答申上候通相違無之旨申之、勿論村役人共も糺候處、相違無之段申之、仍村役人共江、右晝右衛門、三郎兵衛兩人之内、孫市所持之田場江惡水を吐、孫市田場用水に致方詮議候上、孫市雖儀に不成樣可取計旨申渡、右三藏勝手作也、

〔例書五〕一武州二合半領蓮沼村訴出候は松伏領より田方用水路二合半領葛西領一圓に掛り來り、前々より申台にて、右用水路に破損所有之候得ば組合村々申台取繕來候、勿論大破之節は奉願、御入用を以御普請相願候儀にて此度之御普請所之儀は、聊少分成普請所之儀故、村々出錢仕候處、右用水流末之村々之内、葛西領新宿にて、右出錢不差出候間、度々及催促候得共、一向挨拶に及不申、甚迷惑仕候、御慈悲を以、右村御吟味之上、出錢仕候樣被仰付被下度奉願候段申出ル、相手方新宿役人共呼出し尋候處、先年私共於村方、右用水路破損御座候節、普請入用出錢不仕、其砌より段々及催促候得共、今以相濟不申、其後四分三分出錢仕、四分一之分今以出錢不仕、其後度々催促仕候得共、一向不相濟候、然處私共普請入用可差出分打捨置、蓮沼村用水路普請入用少々相滯候迚、右之通出訴可仕筈無之段申立に付、新宿之者共相答候は、相違無之哉之旨、蓮沼村江尋候處、答候は、新宿之儀は水戸海道宿場にて、大鄕故人數多、田方用水之外、呑水江多分相用候得共、大切成る田方江相用候水之儀、無益に呑。水。に相用候ては、畢竟新宿之者共渴不仕候爲、組合村々より出錢仕候樣相成、困窮之百姓共にて甚難儀仕候、御田地江懸候用水故、御入用を以て、先年より用水路御立被置候事にて、呑水に致候樣にと申、村々組合を御附用水路御立被置候事にては無之義と奉存候、尤呑水に引候と申證據は、宿中を無謂晝間程に堀候て、惡水を通、呑水自由仕候、左候得ば呑水迄右宿江出錢致候は、渴も無之儀と奉存候段申之に付、新宿江右之趣相尋候處、相違無之由申之候、依之用水路之水は、是迄之通分水致、呑水宿中江引候呑水之分は遣し申間敷、組合村村立會、右呑水之元を留め候樣申付、早速内濟致候て、濟口證文差出ス、

れ共、心當の人もなし、其間に奉行中裁許は、いか様渠が申通、用水は私の事に非ず、田地は何れも同事なれば、向後互に云ひ合せ、兎角作物損せざる様こそ肝要なれ、其趣を以用水等分にわけ可申旨に相濟、保末の者共大に理運して歸りしと也、

〔例書四〕一下總國行德村、葛飾郡行德村百姓三藏義、田方所持仕候處、訴訟人孫市所持之田は、右三藏所持之田より下之方に有之、訴訟人所持之田、天水場同様にて、右之三藏之所持之田は、惡水に致し來候、然處右三藏義所持之田方、年に寄畑物を仕付、私田方之妨を致し、三藏方にても畑物を仕付候得者、右同人方にて悉損毛可有之之義に御座候處、右體態と私田方耕作難致樣取計、其度度無和利相願候得共、承知不致、私所持之田に用水を引可申手段無之、甚難儀仕候段訴之、依之申聞候者、其方田場江三藏田面より用水を引候は、三藏田場之惡水を、其方用水に致候は、其方勝手向にて候、然處三藏所持之田方水不足歟、或は故障有之年に寄、畑物仕付間敷物にも有之間敷候、左候得ば、御取箇は其年之上立毛に請候事に候、是を以勝手作と申候、右體之作は、都而田主之心次第仕付候而、公納は上立毛之御取箇にて上納致候得者、畑物は仕付候得共、田方之御取箇附に致し、御年貢上納爲仕候、内々は畑物仕付候ても、田方立毛通之御年貢上納仕候得者、御役所向にては、田方御取箇附にて候、若三藏所持之田場田畑成に相成候は、其方田面は何方より之水を引候哉、其方田方之勝手に不宜迚、外々迄手前宜様可致と申候は、我儘なる願方にて、不屆至極に候、三藏田場に不限、其方右所持之田場近所に、外之者所持之田方は無之哉、其村天水場同様とは乍申、溜井にても無之哉之旨尋候所、溜井貳ヶ所有之、村中を用水路通じ候得共、私田場江は餘程隔り、分水成兼候場所に御座候、且右三藏所持之田方を除、斎右衛門、三郎兵衛兩人之田場有之候得共、是を用不申、先祖より三藏田場用水之惡水を、私所持之田場用水に仕候間、右之通御願申上候義に御座候旨申之、依之相手取候三藏呼出し尋候は、訴訟方孫市願出候趣、書面之通逐一相尋候

之候御普請は難被仰付候、其上下畑二畝歩之御年貢を潰し、溜井を築候義、是以難被仰付候旨被申渡、承知無之に付、此方より申候は、右下畑二畝歩は右村之高場に有之、右下畑貳畝歩を潰し、溜井敷に仕候得ば、夫より低み場田方水掛り宜敷相成候に付、右潰し候下畑二畝歩丈の御取箇は被相増候に付、右畑を溜井に築候て、下之田方水掛り宜く仕度、村方の願に候、尤下畠二畝歩を潰し、溜井築候得ば、下之田方にて二畝歩丈の御取箇増候等之申上に候得共、水掛宜く相成候得ば、二畝歩の御年貢三割も五割も相増候段申答候得ば、源内被申聞候は、御代官方幷手代之儀は、不依何事候其場所々々江罷越見分申上候得ば、如何樣了簡附能候得共、此方共右之趣奉行所江御達申候得ば、疊之上之吟味に逢候得ば、唯今其方より承候處、尤至極呑込候得共、我等共は疊之上之吟味に預り候に付、我等ども疊之上之吟味不致候得ば、吟味不行屆樣相成、無是非如斯に候旨被申候、依之右の下畑二畝歩自普請に致し、溜井築き右の御年貢米丈ケ、水代米村方より爲出相納候樣、水代米伺差出し、鄉帳外書物に付、下御勘定所中之間伺方江伺書差出、

〔翁草　五〕常州保末村水論之事

先年常陸國筑波郡に水論有子細は用水の爲に、小貝川を堰上ゲて、上の鄉七ケ村と、下鄉保末村等へ掛る事也、此儀公事に成て裁許の趣は、堰上ゲ水を先上鄉へとり、其後下鄉へとるべき也、然るに其年旱損渴水する故に、下鄉保末村の者共、密に夜の中に堰口を切て、下鄉へ水をとりとり、上の鄉より大に怒り、御裁許破也と罵て再び爭論起り、評定所へ出て對決に及ぶ、元來上の鄉の理運明白なれば、保末村の者共、一言の申譯なく、裁許破の科を蒙らんとする時、名主の後ロに藤八といふ組頭居たりしが、此義先達而御裁許有と雖、其節あれなる殿樣の中より被仰候は、若夫ともに旱損渴水の節は止事を得ざる事なれば、堰口を切るべきよし仰られ候と高々と云を、奉行中聞て、其殿樣と云は此列座の内誰成やと問るれども不見知、奉行中も互に顏を見合せらる

〔鹿苑日錄〕慶長十年六月十八日、自朝晴天、午時於林水之口論ニテ、養木害人、其身亦截腹ト云云、古今奇異至、絕言語而已

〔嚴有院殿御實紀五十九〕延寶七年七月廿五日、伊勢國鈴鹿郡津領古馬屋村と、同郡龜山領木崎村と灌川通堰水訴論の裁斷、勘定所より下さしむ、堰所分明ならざるにより、近地の代官に命せられ、代官彼地にいたり撿察せしに、木崎村の堰は百間餘川下のかたにあるよし、古馬屋の人いふといへども、古馬屋の樋口、木崎の二の樋口と相對し、木崎一の樋田畝九十間餘上にあり、ことに古馬屋の堰水みな木崎の河原を穿て水を導時は、村境より上のかたに堰を設けしその謂れなし、鈴鹿川ならびに新所村の餘流、木崎の田畝に及ぶ由いへども、鈴鹿山の谷水は加太川と合流し、堰の通りへながれ出るに、この川を鈴鹿川と呼び來るよし、川筋二十七ヶ村の古證狀まぎれなし、古馬屋いふところの鈴鹿川に深からず細流にて、木崎の用水になしがたければ、古馬屋村うつたふるところ、いよ〳〵用ひがたし、しかれば木崎はさき〳〵のごとく、新所村三千坊堰の下のかたに關臺の堰を製し、古馬屋は前年新所村とりかはせし證狀のごとく、三千坊樋の下より、井手をもて雨水を導べし、今よりのち新堰新溝一切すべからず、よりて後鑑のために、地圖に堰ならびに井手の地をかき寫し、裁斷の旨を紙背に注記し、雙方へ下さるれば、この旨を背べからずとなり、〔令條記〕

〔例書二〕一延享年中之比、武州兒玉郡沼和田村ニ、新規溜井築申度願書差出致吟味候處、其村は高き場所に溜井を築候得ば、一村場末迄水掛り宜相成候間、此上御取箇も悉進申候段申之候、乍然田畠二畝歩之處潰れ、右溜井築候得ば、右下畑貳畝歩を高內引に致し、溜井は御入用御普請を以仕立候樣相願候に付、仕來は無御座候得共、御普請を以、溜井被仰付被下度、右溜井場下畑二畝歩の場所高內引に致候得共、御取箇悉進候段伺書差出候處、御勘定宮川源內被申聞候者、仕來り無

用水併新田新堤川除等出入之事

當八月相伺候節御下知之御文言

○一諸國村々用水井新田新堤或川除等、他領に×極懸り合候出入訴出候時は、御料ハ御代官、私領ハ地頭家來呼出、雙方障無之樣に致、熟談可相濟旨申聞、訴狀相渡、其上不相濟段、雙方役人申出候ハバ、其子細承糺、取上可致吟味事、

掛紙

先達而御下知之趣奉承知、評定所一座評議仕候處、惡水も同樣之儀ニ御座候間、惡水之儀書入可然奉存候付、掛紙之通猶又奉伺候、

用水惡水井新田新堤川除等出入之事

極

一諸國村々用水惡水新田新堤或川除事論儀に×

右元文五申年十一月七日伺之通御下知本文極ル

（例書四）一用水出入之事、奉行評議之上、相對濟致候樣可申渡、是は出入に付吟味相詰候得ば、御裁許有之候、左候得ば、一方用水難儀致し、御年貢收納に相障候に付、再往得心致候樣、割を附、利解申聞、其上雙方得心不致候得者、見分遣候事、

（張紙留）惡水出入熟談之節、御老中方諸司代、大坂御城代、若年寄、御側衆三奉行家來、出席之有無區分も有之候間、以來熟談之節は、右家來出席之積、且裁許濟口之節、是迄之通、家來出席無之可致通達事、

安永六酉年五月十一日、評議極ル、

覺

一在々用水掛引井路之儀、川中に井堰を立、水を引わけ候處、堰之仕方により、川下之井水令不足にも無構、手前勝手之宜様にのみ仕候故及爭論、或兩類に井口有之場所、片類の井口付替候時雙方不申合、一方之自由に任せ仕替候故令出訴候類有之候、自今右體之儀、雙方致相對普請仕候節は、立會無障様に可致候、若滯儀有之歟、又は不法之事仕候時は、其節より十二ヶ月を限、於訴出者可有裁斷、右期月過令出訴候はゞ不取上候事、○中略

閏四月

〔德川禁令考後聚九法曹事務〕用水出入取捌之事

●ナ一御料私領共ニ、用水出入訴出候節、御料ハ御代官手代、私領ハ地頭家來呼出、用水不滯様ニ申談可相濟旨申聞、訴狀相渡、其上不相濟段、雙方役人申出候ハヾ、其子細承糺取上可致吟味事、

△●

此度相伺候掛紙

用水井新田新堤出入之事

ナ御料私領共ニ用水井新田新堤出入訴出候節、御料ハ御代官、私領ハ地頭家來雙方呼出、用水之儀ハ不滯様ニ取計、新田新堤も障無之様ニ申談可■

御掛紙

△

用水井新田新堤川除等出入之事

一ヲ諸國村々用水新田新堤或川除等、他領に掛り合候出入訴出候時ハ、御料ハ御代官、私領ハ地頭家來呼出、雙方障無之様ニ致熟談可□

右同月廿八日、御掛紙之通承知可仕旨御下知、

元文五申年十月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

慶長十四酉年二月二日

〔台徳院殿御實紀 五十四〕元和七年二月二日、郷中の百姓山水の訴論により、弓銃を以て喧嘩する時は其郷中悉く誅伐すべし、井堤修築の役夫は父老はからひ、郷中ことごとく傭ひ用ゆべし、税額不足の地は、先に査檢せし者、幷大久保石見守長安が所屬の者をさしそへ、水張を以て坪入をなし、不足の地は引おとして、現額を定むべしとなり、東武實錄

〔教令類纂 初集八十八〕寛文六丙午年十一月十一日御勘定所下知狀

定〇中略

一水論幷野山境目に付、出入有レ之ば則可二申來一之、私に喧嘩仕間敷事、〇中略

右之條々、堅可二相守一之、若令二違背一輩於レ有レ之は、或死罪、或籠舍過料、隨二科之輕重一急度可二申付一者也、

寛文六午年十一月十一日

〔御定書百箇條〕用水惡水幷新田新堤川除等出入之事

享保五年 元文五年極

一諸國村々用水惡水幷新田新堤、或は川除等、他領に懸合候出入訴出候時は、御料は御代官、私領は地頭家來呼出、雙方障り無レ之樣致二熟談一可二相濟一旨申聞、訴狀相渡、其上不二相濟一段、雙方役人申出候はゞ、其子細承糺、取上可レ致二吟味一事、

〔地方要集錄〕一用水又は惡水之儀に付出入は、御料私領とも、役人立會隨分可レ成程は內分にて埒明候て、奉行所江不二罷出一樣に、近年被二仰出一候、今ほどは奉行所江訴出候て、右之旨申渡候、實に內分にて不二事濟一候得ば、取上裁斷有レ之候、

〔享保集成絲綸錄 二十四〕享保九辰年閏四月

詳ナ然レバ當時ハ、此水ヲ彼村ニテモ灌漑セシト見エタリ、

〔碧山日錄〕長祿四年〇寛正元年五月八日甲申、紀州根來寺之管內有河水、民導以爲沃壤之澤、前年寺僧與民相爭、故拆其河堤而爲害也、是以田疇乾枯、民欠賦稅、太守畠山公〇義就使其家臣遊佐某、神保某、木澤某說於寺僧、復其河水、又有寺僧與亡臣某爲儲者、三使者令寺僧擯之、其衆聚群著甲冑、還攻三使者、乃敗之、三使者不得逃、割其腹死、餘兵北走、欲渡紀河、時連日霖雨、雨水放注、溺死中流者、一千二十餘人也、木澤某南伯之俗兄、與余面數矣、其爲人敦實、辨而智、故畠山公悉舉國事委之、莫不人惜之、

〔駒井日記〕文祿三年四月廿六日

一其村と大門井水出入之儀、去年奉行を遣相濟候處、又當年新儀に溝を立、わきへ切落候者沙汰之限候、則春日九兵衞方より被相屆候へば、先々より有來候由申付候、左樣候へば、去年之出入之時、何と而先々より得井水無之由者申理候哉、新儀成事を申懸候者可爲曲事、去年奉行被遣相去候通に可仕候也、

四月廿六日

益庵

駒井

愛智川總中

〔明應六年記〕六月廿二日、河內國ニハ、遊佐ト譽田ト內々宿意子細有之處、於橘島用水相論ニ、譽田方者兩度マデ打負之間、率勢之折節ニ、屋形ノ女中御產ニ、遊佐申在所爲佳例出給、ソレニヤガテ屋形ニ見書子モ、遊佐在所へ被出之間、彌譽田令立腹云々、依之兩方へ軍勢令充滿云々、

〔敎令類纂〕初集八十七慶長十四己酉年二月二日

覺〇中略

一鄉中にて百姓等、山問答水問答に付、弓鐵炮に而互に致喧嘩候者あらば、其一鄉可致成敗事、〇中

〔甲斐國志三十山川〕一德島渠　上圖井村ニテ釜無川ノ水ヲ引キ入レ、南流スルコト四里八町、入戸野村ヨリ西郡筋曲輪田村ニ至ル貳拾貳村ニ灌漑ス、寬文五年、甲府殿領知ノ時、江戸ヨリ德島屋兵左衞門ト云者來テ經營スル所ナリ、每年四月辰日ニ水ヲ引入レ、八月彼岸マデ灌漑ス、五月中ヨリ彼岸マデノ間ハ、御普請役本村ニ至テ、分水工役ノ事ヲ司ル、近年ハ支配御代官ヨリ人ヲ遣リテ之ヲ務メシム、其止宿ノ館ヲ本村ニ置ケリ、其殷引ノ所ハ、長貳間ノ石籠ヲ堅ニ二行ニ並ブル者百步許、釜無川ヲ塞過シテ水ヲ入レ、其下流ハ川澤ニ値ヘバ、掛樋埋樋ヲ作テ之ヲ通ス、其外所所ノ水門等大造ナル普請ナリ、川筋帳云、自上圖井村至西郷筋桃園村、渠長百五十三町四拾間餘、水門九所、掛樋四所、長四拾六間、埋樋貳拾貳所、長六百四間、川澤ヲ越ルコト貳拾餘所、田ニ漑グコト貳百六拾四町八段餘、村數貳拾貳、

〔甲斐國志二十四山川〕宮渠　上黑駒ニテ金川ノ水ヲ引ク、末木村ノ北ニテ御手洗川ニ入ル、昔ハ鹽田川ト云シニ、天和中ヨリ宮渠ト稱スト、下流拾壹村（市藏、門前、狐新居、新卷、上塚、神澤、一宮、北都塚、本都塚、末木、鹽田、）ノ用水ナリ、五月中十日目ヨリ、番水トテ時刻ヲ定メ、上四村晝水、下七村ハ夜水ヲ引ク、

〔新編相模國風土記稿五十七愛甲郡〕川入村

覺園寺雜掌中申、當寺領相模國散田郷用水事、爲同國河入郷之流末之間、可致井料沙汰之旨、就成煩有其沙汰、去九年十月廿六日成敗分明之處、動及催促云々、所詮且任先落居旨、且守舊例停止永彼違亂、可令全寺家所務之狀如件、應永二十六年六月三日、持氏花押、

〔新編相模國風土記稿五十四愛甲郡〕川入用水　下川入郷半繩、八菅二村犬牙ノ地ニテ、中津川ヲ堰入、兩村及川入、熊坂、棚澤、都テ郷中五村（此村々圖村ノ用水トスルニアラズ、川入百石、棚澤七十石、熊坂半繩合百石、八菅三十石ノ田地ニ灌漑セリ、）ノ用水トナレリ、流末川入村ニ至リ善明堀ニ入、（幅七尺）按ズルニ、鎌倉覺園寺所藏、應永二十六年、嘉吉三年等ノ文書ニ、郡中三田村ノ用水河入郷ノ流末タルニヨリ、每度爭論ニ及シ由見ユ（事ハ川入村ニ

見沼代用水

是は組合四拾七ヶ村、用水差引之儀、往古は見沼、黒沼、笠原村高沼水引來候處、享保十三申年、右沼之新開被仰付、代用水井筋出來いたし、右御普請用水差引共、伊澤彌惣兵衞掛り御普請役相勤候處、享保十六亥年、大川通御普請役掛りニ而、用水差引いたし、延享三寅年、四川用水方御普請役定掛ッ場に被仰付、今以年々御普請役、用水配相勤申候、

葛西用水

是は組合三百ヶ村、用水差引之儀、往古支配御代官に而用水配いたし候處、享保十六亥年より、大川通御普請役掛に而、用水差引いたし、延享三寅年右同斷、

鬼怒川通（中居、指、本宗道、原、三坂、）用水

是は組合五拾四ヶ村、用水差引之儀、往古は支配御代官掛に而差引仕來候處、享保十六亥年より、大川通御普請役掛りに被仰付、延享三寅年、中川用水方定掛場に被仰付、今以年々用水配相勤來申候、

（吉田江連）用水

是は組合百三拾七ヶ村、用水之儀、往古は平沼、砂沼、段沼、江村沼水を引來候處、右沼々新開被仰付候に付、享保十一午年より、伊澤彌惣兵衞掛りに而、用水差引仕來候處、延享四卯年、四川用水方定掛り場に被仰渡、其節より、外並之通り、新規伺之上、書面之通り、組合村々今以年々用水配相勤來候、

右之通、館林領羽生、騎西川、小貝川三堰鬼怒川通四ヶ所用水、羽子野堰、見沼、葛西用水差引之儀は、前書之通、延享三寅年、定掛り場に被仰付、只今迄書面之通り、場所用水差引御普請役相勤來り申候、

不申節は、其場所より申越次第、元〆申立候に付、又其趣御廻し出候事、尤出立之節は、御取替金相渡候事も有之候、古來より之趣左之通り、

館林領用水

是は組合百九拾壹ヶ村、用水差引之儀、貞享年中より年久敷儀に而、年暦相知不申、水方役拾貳人、同下役貳人、掛陣屋に住居いたし、用惡水御普請、并引差とも相勤候處、享保十三申年より、大川通御普請と役名唱可申旨被仰渡候、四川奉行掛に而相勤、同十六亥年より四川奉行相止み、御代官懸りニ被仰付相勤候處、御人減等有之、延享三寅年、四川用水方御普請役定懸り場ニ被仰付、陣屋住居之者ニ不限、御普請役打込に、年々用水配相勤來り申候、

羽生領四用水

是は組合百三拾六ヶ村、用水差引之儀、元祿十五午年より、水方役人、同下役拾人、町場村水源村詰所ニ住居いたし、用水惡水御普請并差引共相勤候處、享保十三申年、同十六亥年、延享三寅年共、右同斷、今以引續、年々用水差引仕來申候、

小貝川福岡岡堰、伊丹、用水

是者福岡伊丹用水組合七拾ヶ村用水差引之儀、岡堰用水組合三拾貳ヶ村、用水差引、往古は、支配御代官懸りに而、用水差引いたし候處、享保十三申年より、四川奉行懸り、大川通り御普請役懸りに而、御普請仕立、用水差引仕來候處、享保十六亥年、延享三寅年、右同斷、

豐田羽子野堰用水

是は組合貳拾六ヶ村、水差引之儀、往古は御代官掛に而、用水差引いたし候處、享保十三申年より、四川奉行掛り大川通御普請役掛に而御普請立、用水差引共仕來候處、享保十六亥年、延享三寅年、共に右同斷、

分水

村落ト呼ブ、平沼吉川關川富川野等ノ惡水ナリ、此二流木買新田ト中島小於川二村ノ間ニテ一流トナリ、夫ヨリ牛田村ニ至テ、前ノ四ケ村落ト合シテ一流トナレリ、始ハ茂田井村内ヨリ江戶川ニ注ギシガ、後年改テ丹後大膳高須ト次第ニ下流ヨリ落セシニ、猶水利ノ不便ナルヲモテ、寬政四年德島村內ニテ〆キリノ堤ヲ築ギ、下新田村ヨリ戶ケ崎マデ新ニ疏通シテ、古利根川ニ合流スル事トハナレリ、故ニ下新田以下ヲ新大場川トトナヘ、〆切堤下ノ古流高須村マデヲ古大場川ト呼ビ、年ヲ追テ新開ノ水田トス、又後谷小谷堀ノ二村ニ傍テ古流ノ跡アリ、是ヲモ古大場川ト稱ス、

〔新編武藏風土記稿足立郡一百三十五〕芝川　郡ノ中央ヨリ少ク東ニヨレリ、昔見沼地ヲ埋メザリシ頃ハ、池ノ東邊五萬石餘ノ地ハ、皆彼池水ヲ引取テ用水トセリ、其頃ハ此川ロノ用水ノ餘水ヲ注ギシ淸渠ニテ、川ト云ホドノコトハアラデ、俗ニ惡水堀ト云モノナリシガ、享保十三年、見沼地ヲ埋ミテ新田ヲ開カルヽニ及テ、此堀幅ヲ廣ゲラレ池水ヲ疏通セリ、ユヘニ今ハ川幅七八間トナレリ、サレバ水原ハ鴻巢領ノ惡水ヲハジメトシテ、見沼新田ノ中ヲ流レ來ル故ニ、彼新田ノ村々ニテハ見沼中惡水堀トモ、又ハ略シテ中落トモ呼ベリ、大間木村ヨリ下流ヲ芝川トハヨベリ、川路スベテ三里ニシテ、元鄕村ト川口村トノ間ニテ荒川ニ入、又冬ニ至レバ見沼代用水用ナケレバ、上下山口新田ニテ用水ノ流ヲ立切テ、水ヲ此川ニソヽギテ、江戶ヘノ通船ニ便ス、此事明和年間ヨリハジマリシトナリ、

〔刑錢須知七四〕川用水方定掛御用水配普請仕來書

一用水方定掛場用水配之事

是者左之場所々々、每年用水配御普請役手分いたし被遣候に付、元〆より御人割組頭衆江申上候、夫より御評議之上、人足數相極御廻しに出、諸入用は定法振に有之候通、出立儀、手足

水堀無之所は可訴出候、

右之通、關東筋御料は御代官、私領は地頭幷寺社方支配限り、在々入念可被申付候、以上、

十月

〔地方凡例錄六〕一惡水落口代之事

是は惡水落口筋を立る時、他村之地面を不堀通して不叶時は、高内之田畑は勿論、高外之地所たり共、村方相對之上、地子年貢を遣し堀通す也、用惡水之違までにて、井料米水代米同樣なり、若數ヶ村に懸る大造之惡水落等にて、多分之潰地等有之節は、公儀地頭へ相願度數地年貢引方被下儀も有之也、

〔桃源遺事四〕西山公〇源光圀御隱居後、那珂川幷仙波池水まし候節、御城下侍屋敷迄水あがり候處あり、勿論村々難義におもひ申所御座候に付、其所支配の役人共もいろ／＼工夫いたし候へ共、前前より水ぬきのいたしかたこれなく候處に、御思案あそばされ新堀を兩所に御ほらせなされ候、よつて其後は水はやくおちて、前々のやうなる水難これなく候、これさき御治世の節も、民のたすけの爲、所々に溜水を仰付られ、ひでりの時の用水になされ候、又水のともしき田御座候處は、遠き川より水を御まはさせ候、

〔新編武藏風土記稿二十葛飾郡〕不動堀　二郷半領二十七ケ村惡水落ノ堀ナリ、延寶二年新ニ疏通シ幸房村ヨリ大場川ノ東ニ並ビ、南ノ方高須村ニ達シ、同村ヨリ江戸川ニ落セシガ、水路不便ナリトテ、寛政四年更ニ下新田村ヨリ戸ケ崎村マデ、今ノ如ク堀通シ、同村ニテ古利根川ニ注グ、故ニ下新田村以下ヲ新不動堀ト云、幅二三間、

〔新編武藏風土記稿二十葛飾郡〕大場川　延寶三年新ニ堀割シ二郷半領惡水落ノ川ナリ、水元三派アリ、一ハ四ケ村落ト稱ス、上笹塚會野谷關新田吉屋等ノ村々ヨリ出ル惡水ノ餘流ナリ、二ハ五ケ

排除惡水

〔張州府志 八 愛智郡〕融傳泉　在鳴海村山中、此地無泉、暑月行人苦渴、而不得一滴、祐福寺僧融傳、毎詣熱田、必歷此路、一日禱神、以杖穿地、泉卽涌出、因名、後人有碑、其銘曰、愛智東麓、有毖彼泉、神所助焉、民受賜焉、剛山標異、卓地稱實、吾師不愧、猶漑耕田、

〔鶴峯文集 四 記〕土浦城下善應寺涌泉記

常陸國新治郡眞鍋邑者、屬土浦城、寬文己酉 九年〇 之夏、今執政從四品但州太守土屋君數直、新賜土浦城、仲秋就封、巡見屬邑、畢事而歸江府、一日語余曰、眞鍋邑有寺曰善應、寺有井、井有涌泉、〇中略行人旅客過而息、汲飮之而慰渇、或以湘茶滌煩、或以煎藥療病、加之餘流漑而施澤於溝洫、養成租稅五六百頃、

〔伊豫國順廻記 一 周敷郡〕玉之江村

當村を玉之江村と云、其說を聞へども詳ならず、私に考ふるに此村泉多し、六七拾間より貳參拾間迄の泉八ヶ所にあり、東宮北泉、馬淵泉、二ヶ所、東宮間泉、東宮下泉、正德寺新地泉、二ヶ所、八ヶ所之泉、當村及び小松領今在家村等の稻田に澆ぎ、美穀を生ず

〔評定書定書〕享保十一午年

關東筋惡水堀浚方之儀に付御觸書

惡水不滯用水引渡儀、在方肝要之儀に候處、惡水川用水堀小溝等迄堀浚不仕、剩雙方よりせばめ、或は竹木はへ出、水道差支候所々有之由相聞候、當年は此節、自今は年々三四月之內、隣鄕申合、村限り堀浚、竹木伐拂、水草は根共堀取、又は度々苅捨可申候、土砂埋り多、堀幅せばめ候所々は、二三年之內、段々以前之通、堀立可申候、右之通申付候上、若堀浚不仕村方有之、隣村江相障候はゞ、堀浚仕候村方より、其旨可訴出候、吟味之上、急度可申付候、

附水上之村惡水堀有之候處、水下村に惡水堀埋潰し候所々有之由にて、以前之通堀立、勿論惡

引湧泉灌田

內ヨリ上利根川ヲ分水シ、堀幅二間ノ直流ヲ疏通シテ、當郡八甫村邊ヨリ古利根川ニ注ギテ、近鄕ノ用水トセシカド、猶其水ノ不足ナルヲモテ、享保四年、伊奈半左衛門、石川傳兵衛等奉リテ、埼玉郡上川俣村內ニ圦樋ヲ作リテ助水トナシ、此溜井ニ湛ヘテ、埼玉郡新方領、八條領、足立郡淵江領、谷古田領、及當郡幸手松伏二鄕半葛西等十ケ領ノ用水トセリ、

松伏溜井　當郡松伏村ト埼玉郡增林村トノ間ニテ、古利根川ニ堰枠ヲ設ケ、上流八町目村ト埼玉郡粕壁宿ノ邊マデ凡一里餘ノ間ヲ松伏溜井トイヘリ、松伏村ノ邊ニテハ、幅八九十間モアルベシ、コレ前ニ出セル琵琶溜井ノミニテハ、猶用水ノ不足ナレバトテ、享保十五年、伊澤彌惣兵衛ガ計ヒニテ作リシト云、此溜井成シヨリ後ハ、二鄕半葛西ノ用水爰ニ圦樋ヲ設テ引沃ゲリ、

小合溜井　下小合村ト高須村トノ間、及猿ケ又村ト戸ケ崎村トノ間二所ニ、シメキリノ堤ヲ築キ、其間ナル古利根川ヲ其マヽ溜井トナシタルナリ、小合村ノ地ニ多クカヽルヲモテ名トス、是モ伊澤彌惣兵衛ガ計ヒニテ、享保十四年作レリ、二鄕半領ノ方ヨリ來ル用水ノ下流ヲ湛ヘテ、葛西領中ニ注グ爲ノ設ナリ、

〔伊豫國順廻記四新居郡〕永見村

切川蝮谷の新池　此池三方は山也、天保三辰年より御普請始り、北の方へ堤を築き、溪水を蓄、池となす、其水の及ぶ處凡十町四段餘也と云、舊は旱畠にて、禾黍の類も十分には出來ざりしが、此池を築きしより、稻田となり水澤に霑ふ、池周圍二百十六間、土手長サ四十二間、

〔攝津志七豐島郡〕垂水泉在垂水神社前、其泉湧如沸、灌漑之利太溥、又社側有一清泉、灌漑不竭、　辨慶泉在今在家村、其味冷甘、園村所汲、流灌田畝數百頃、俗傳、辨慶止渴于此、　走井走井村、流灌田畝、人頼其利、

〔攝津志八河邊郡〕藤井其水湧出、灌溉田畝、俱在小坂田村、　春日清水在久代村、灌溉田畝數頃、民以爲利、側有春日祠、因名、　怒久共在中村、灌下田畝頃、

〔攝津志十二矢田部郡〕梅雨泉在原野村栗花落氏宅東、每歳夏至前後、泉必湧溢、灌溉田畝數頃

二里餘ノ水路ヲ穿チ、大谷川ノ水ヲ引キ、之ヲ數邑ニ注ギ、若干ノ荒蕪ヲ墾シ、之ヲ民ニ與フ、民大ニ喜ブ、諸村之ヲ聞見シ、競テ新用水開鑿ヲ請求ス、其需求ノ先後ニ由テ、數箇所ノ溝洫落成ス、或ハ三千間或ハ二千間、難易長短同ジカラズト雖モ、能ク地ノ利ヲ測リ、其宜キヲ得ルガ為ニ、一モ成功アラザルモノナシ、

〔新編相模國風土記稿 四十二 大住郡〕大用水　愛甲郡恩名村(田村用水ト呼)ヨリ、本郡上下岡田村ニ沃ギ、戸田、大神田等、都テ五村ノ用水トシ、流末相模川ニ入ル、水路二里半、(幅四間許)堤アリ、

〔古今類聚越前國誌 二 坂井郡〕大井口堰　鳴鹿村ノ西ニ在、黒龍川ヲ塞ギテ水ヲ金屋川ニ分ツ所ナリ、([illegible]爪川トモ云フ)是公領及福井丸岡高柳ノ三領ヨリ役夫ヲ出シ、毎年三月ヲ期トシテ堤ヲ築ク、不時ノ洪水アレバ、役夫勞ハカルベカラズ、

〔攝津志 七 豐島郡〕新池(在親見村、廣二百七十畝、天正十三年、堀秀政浚修、書翰猶在、)

〔多聞院日記略〕天正十七年九月廿六日、此間於岩淵谷井出ヲ上池水用意、為旱魃ノ時也、大納言殿○(羽柴秀長)衆自身山ニ小屋ヲ立、與力衆自身普請、樋ハ大ノ木熊野エ被仰付則出了云々、永々ノ興隆也、則方々ニ池用意云々、珍重之事也、

〔攝津志 十二 矢田部郡〕大池(在車村、廣三百畝許、村有慶長初攝津守安威氏作池碑役丁記、)

〔張州府志 八 愛智郡〕牧大池　在高針村南、此村昔年旱則木苗焦枯、民憂有菜色、勝野某為村令、日、愍然恤之、乃計穿此池貯山間引流、漑數頃田、稲粱為之油々、民至于今懐其德、口嘖々不止、且毎歳新穀登時、供穀其墓前、以報其功云

〔新編武藏風土記稿 二十 葛飾郡〕琵琶溜井　當郡幸手領上高野村ト埼玉郡トノ間ニアリ、其形琵琶ニ似タルユヘニ名トスト云、此溜井、元古利根川ノ流ナリシニ、萬治三年、伊奈半十郎指揮シテ、郡中高柳村ト埼玉郡間口村トノ間ニテ、古利根川ノ上流ヲ、堤モテ支ヘ、別ニ埼玉郡羽生領本川俣村

里をたまはりしをり、そのつかうまつり人の平松氏なるが水を治るのわさにたけて、たかき所をば、いしきり、つるのはしもてほりうがち、ひきゝ所はふたすぢの堤をつきて、中を溝にしつゝ、さて三年經て後、その堤をつきかためて、いさをゝばとげたりとか、

〔事實文編附錄十四〕作州堀坂村新渠成功之碑　大窪詩佛

土浦侯封邑之別、在作州者曰掘坂村、村在加茂川東、其北有一小山、於山背急湍之處、築堤激流以漑稻田、每夏月遇霖雨不已、水處痕日長、或大雨驟至、群流暴漲、則水勢衝堤、爲之壞者無歲無之、其修之待水少退而後、大木梗之大石桿之、若工經日則種植後候西我無收、不啻村民失業、亦公業家歲修土木之費不知凡幾、於是司農官龜田守彝、其屬官伊庭元清與鄉故老相謀、與穿山引水之議、以文政五年正月起事、至十二月訖功、實口方六尺、長五十三間四尺、用石工三千九百九十人、役夫二千九百三十八人、一切費用工食流鄉定堅者給之、其他隣里有志之徒、各出錢損穀而助之、然成功之後、皆有定期、而公家償之、自是長無水旱之患、民賴其利、公府所收歲額五百四十四石五斗三升四合也、七年甲申春、質詩佛老人大窪行記其事、嗚呼二君之功不可磨滅、勒諸貞石以垂不朽、其經承吏屬及庄頭石工等姓名、別刻之碑陰云、文政九年歲在丙戌春二月、常陸大窪行撰幷題額、

〔報德記八〕先生、〈○二宮金次郎〉衆民ヲ教諭シ、新溝渠ヲ開キ、開墾撫恤ノ實業ヲ行フ、

日光山神領、往古ヨリ水田ヲ開カズ、獨リ圃ヲ耕シテ以テ活計ヲ爲ス、漸三十年以來、邑々些少ノ水田ヲ開クト云、是故ニ邑民雜穀ヲ以テ常食ト爲ス、稻粱ノ如キハ、疾病ノ者アルニ至リテ、僅ニ之ヲ購ヒ得テ以テ之ヲ與ヘ、醫藥ニ換フト、其衣食ニ窮乏ナルコト、推テ知ル可シ、先生民ノ艱難ヲ憫ミ、地ノ理ヲ察シテ曰ク、此地西北ニ高山アル故ニ、平地ト雖モ、自然ニ西方高クシテ、東方低キシ、而シテ大谷川郡邑ノ中央ヲ東流ス、此川ノ左右ニ溝渠ヲ鑿チ、之ヲ諸村ニ漑ガバ、順流至ラザル所ナク、村落ノ潤澤擧テ數フ可カラズト、於是野口村ヨリ平ケ崎千本木村ニ至ルマデ、サ

地勢ヲ撿察スルニ、其二水ノ相隔ルコト二百間餘、其間ニ岩石盤屈スル一山アリ、中々手ヲ下シ難キ勢ヒナリケレドモ、忠寄意ヲ鋭クシテ精神ヲ勵マシ、コヽカシコノ峯ニ登リ、谷ニ下リテ其遠近高低ヲ精算シ、備ニ地形ヲ圖シテ伺ヒ出ヅ、其事高大ニシテ荒誕ニ似タルヲ以テ、群議大ニ之ヲ難ジ、同意スル者ナシ、獨善政忠寄ガ才能ヲ信ジテ疑ハズ、速ニ命ジテ役ヲ起サシム、其策ハ二水ヲ隔ル石山ヲ、裏表兩方ヨリ堀拔キ、隧道ヲ作テ水ヲ通ゼントセリ、忠寄自ラ山中ニ起臥シテ、人夫ヲ督勵シ、金堀夫ヲ雇テ、其岩石ヲ切穿タシム、役ヲ起スコト四年、規畫既ニ定リ、功將ニ成ルニナン／＼トセシニ、寛政十一年十一月七日、俄ニ中風ニカヽリテ急死ス〇中略扨又飯豊ノ穴堰ハ、忠寄死シテ後其事ニ任ズル人ナク、又善政モ間ナク沒シケル故、殆ド止ミ廢セントス、善政ノ子政以、忠寄ノ功ノ終ヘザルコトヲ悼ミ衆議ヲ排シテ再ビ其役ヲ起セシガ、此又未ダ全カラザル内ニ卒ス、大石左膳之ニ繼デ力行スルコト數年ニシテ、遂ニ其功ヲ全セリ、前後二十年ヲ經テ終ニ其功ヲ全セリ、初メ人々爭テ申ス、飯豊山ハ無雙ノ高岳ニシテ寒冷甚シク、工ヲナスコト僅ニ八月ノ節三四十日ノ間ノミ、且ツ磐石甚堅クシテ一日ノ堀ル處、兩方各數尺ニ過ギズ、又一厚山ヲ裏表ヨリ堀合ハスルコトハ尤難キコトニテ、必シモ喰ヒチガハザルヲ保スベカラズ、黒井ガ精算ト雖甚危シトテ、異議紛々タリシガ、功成ルニ及デ、兩穴相符合シテ、隧道頗ル回曲スレドモ大齟齬ナシ、只僅ニ川上ノ方四五尺ホド高ク拔タリ、是ニテ却テ水勢ヲ激迸ズル利トナレリトゾ、是總テ忠寄カ成算ニ出デ、率ネ其素定ニ誤ラザリシカバ、人々始テ驚嘆シテ、黒井ハ神ノ如シト言ヒシトナン、此堰一タビ成テ、此ヲ白川ヘ合注スルニ、イカナル大旱ト雖、暑氣甚ケレバ雪益解ルヲ以テ、河水常ニ泓洋トシテ涸ルヽコトナシ、

〔相馬日記一〕とかくして、野火留の里の菅谷正々(マサタヾ)が家にたどりつく、〇中略家のうしろに玉川用水ながれて水音いとさやけし、〇中略この用水といふは、むかし吉田の城主の君、おほやけよりこの

テ分テ二岐トナシ、一ハ以テ赤湯等諸村ニ注ギ、一ハ梨郷諸村ニ注グ、是ヲ上渠ト云フ、凡ソ其諸村皆北條鄕ニ管ス、北條鄕ノ民於是始テ大ニ水利ヲ得テ、相共ニ抃舞歡呼シ、再生ヲ得タリト稱ス、忠寄已ニ功ヲ竣テ、其由奏シ奉リケレバ、公ノ御感悅限リナク、同年六月祿五十石ヲ加增シ、且ツ特意ノ上意ヲ以テ之褒揚シ玉フ、且又忠寄ガ苗氏ニ因テ名ヲ黑井堰ト賜ヒ、以テ後世ヲシテ永ク忠寄ガ功ヲ忘レザラシム、闔國之ヲ榮トセザルハナシ、同八年、忠寄又一大渠ヲ糠野目鶴卷潭ニ穿チ、崖ニ沿テ斜ニ注ギ、以テ宮崎以北ノ諸村ニ漑グ、之ヲ下渠ト名ヅク、此渠ノ長袤深廣亦上渠ト相等シ、此邊ノ諸地殊ニ水脈不便ニシテ曠田莽野尤多ク、民耕種スル能ハザルコト久シカリシガ、是ヨリ始テ播種スルコトヲ得テ、良田歲ニ起ル、是歲公及治廣公親ク此諸渠ヲ御巡覽マシマシテ、益忠寄ガ功ヲ感ジ玉ヒ、治廣公ヨリ重キ上意ヲ以テ、特異ノ御賞物ヲ賜ヒ、及ビ諸ノ事ニ與カル役人ヘ、御賞賜ハルコト差アリ、公亦召シ玉ヘル御羽織ヲ脫ギ玉ヒテ、御手ヅカラ忠寄ニ賜ヘリ、〇中略是役ヤ鍜冶川ヲ注ヌ藤泉ニ至ルマデ一里餘、千眼寺ヨリ赤湯ニ至ルマデ四里餘、又鶴卷潭ヨリ梨鄕マデ三里餘、凡ソ槽ヲ架スル處三十餘處、人夫ヲ用ユルコト十萬六千六百二十五人、工匠一萬二百人、其渠ノ漑グ處ノ諸村凡ソ三十三村、其遠近ニ從テ皆澤ヲ被ムルト云、

黑井碑文、蘆鳴隨記、

（鷹山公偉蹟錄九）黑井忠寄ガ事

忠寄、又飯豐山ハ我四境第一ノ高山ニシテ雪アリ、夏月酷暑ニ至レバ溪流益漲ル、其流ノ大ナル者二川アリ、一ヲ白川ト云、我國ニ流ル、一ヲ玉川ト云、越後ニ流ル、白川ハ水寡クシテ大利ヲ爲サズ、忠寄因テ曰、此玉川ヲ決シテ白川ニ合セ、以テ中郡諸村ノ水ニ乏キ處ニ漑ギナバ、久來草莽ノ荒地皆變ジテ肥沃ノ良田トナリ、永世莫大ノ御國利タルベシト此事ノ起リシハ、飯豐山下岩倉ノ農師六藏ト云者、鳳山中ヲ經歷シテ申出タルニ起レリト云フ、於是忠寄子弟ノ算術ニ達シタル者ヲ從ヒ、數日ノ糧ヲ負テ深ク山中ニ分登リ、

漕ニ便ニス、米百俵積ノ舟二艘行違テ障ラズトナリ、頗ル奇想ニシテ末代迄ノ永用タリトゾ、大小ハトモアレ、時ヲ得レバカヽル功モ成就スル者也ト語レリ、

（鷹山公偉蹟録九）黒井忠寄ガ事

忠寄諸般ノ功績多シト雖、就中北條郷ノ大渠ヲ築クヲ尤大功トス、抑北條郷ハ土地甚肥沃ナリト雖、水利ニ乏ク、古ヨリ恒ニ涸渇ヲ苦ム、故ニ其諸村ノ民甚貧困ニシテ、良田荒蕪スル者挙テ数フベカラズ、古ヘ大ニ堤ヲ築テ灌漑ヲ利セントセシ者アリシガ、中頃廢シテ成ラズ、僅ニ其跡ヲ遺セシノミナリキ、公(治憲○上杉)常ニ之ヲ嘆キ玉ヒ、民事ヲ議シ玉フ毎ニ、北條郷ノ涸旱ヲ救ヒ玉フコトニ及バザルハナカリシカドモ、其人其策ナキヲ以テ、手ヲ下シ玉フコト能ハズ、於是忠寄進テ請テ曰、臣ニ愚計アリ、願クハ犬馬ノ力ヲ盡シテ、聊カ君ノ赤子ヲ恤ミ玉フ御仁慮ヲ慰メ奉ルベシ、但速ニ成ルコトヲ責メ玉ハズ、少シノ仕損ジヲ糺シ玉ハズ、臣ガ處分ニ御任セ下サレナバ為スベキナリト、其策松川ヲ堰上テ、長渠ヲ連ネ、以テ灌ク北條郷ニ致スニアリ、其規畫宏大ナリケレバ、公及ビ執政始ハ愕然トシテ怪ミ玉ヒシガ、既ニシテ大ニ悦ビ玉ヒ、乃チ其請ヲ允サレテ、一切忠寄ニ任セ玉フ、於是忠寄ハ自ラ事ニ堪ユル吏古藤知宣、西忠宣ヲ擇テ、之ヲ請テ己ガ輔トナシ、又一良工農次郎ト云者ヲシテ、水平ヲ測ラシメ、急ニ其役ヲ起ス、寛政六年先渠ヲ穿チ、鍛冶川ヲ北郭ニ涸シテ西ノ方鹽野川ニ合セ、以テ藤泉ノ古渠ニ達シ、鹽野小瀬等數村ノ舃鹵ノ地ニ沃ギ、良田ヲ起スコト數町、同七年又大ニ松川ヲ窪田千眼寺ノ下ヨリ堰上ゲ長渠ヲ作ル、其渠廣サ一丈二尺、深サ七尺、連綿屈曲シテ引テ之ヲ糠野目ニ達シ、直ニ大樋ヲ以テ松川ヲ横絶シテ水ヲ行ル、其樋廣サ七尺深サ三尺空ニ架スルコト六十歩、堤ニ架スルコト七十歩、夫ヨリ瀰澤ヲ左ニシテ以テ古ノ築キタル遺渠ノ跡ニ達シテ、更ニ長堤ヲ増築ス、其堤高キ者ハ二丈餘、卑キ者ハ六七尺、各地勢ニ因テ工ヲ施ス、其水ヲ通ズル樋、或ハ石或ハ木、各廣サ五尺深サ三尺、北ノ方ニ至

山三百間、及小山十所合四百間、引淺尾堰之水、名穂坂堰、取諸庄名云三村之井、止得貢飲水於村內、亦墾稻田若干頃、感戴洪恩、請勒于石、因記、享保三年戊戌三月起工、九月吉成、

〔新編武藏風土記稿一百三十五足立郡〕三沼代用水（或ハ見沼）　郡中ノ村々及ビ埼玉郡ノ中スベテ三百四十七村、高十三萬石餘ノ水田ニソヽグ用水ナリ、古ハ埼玉郡ニ黑沼、笠原沼、本郡ニ見沼、高沼等ノ沼地アリテ、用水ヲ取リテ耕セシガ、享保十三年、是等ノ沼ヲ埋ミテ墾闢セラレシヨリ、代用水ヲバ開カレシナリ、此水上ハ埼玉郡下蓮田村ニテ、綾瀨川ニ掛樋ヲ設ケテ引來リ、本郡上瓦葺村ニテ二分シ、其一ヲ西緣ト呼ビ、郡ノ南ノ方ニテ用水トス、其一ハ東緣ト呼テ、東方ノ村々ニテ分チソソゲリ、

〔新編武藏風土記稿一百九十九埼玉郡〕三沼代用水　下中條村ニテ利根川ヲ分水シ、郡中及ビ足立郡ノ村々ニ灑グ、此代用水ト號スルハ、古本郡ニ黑沼笠原沼足立郡三沼等、或ハ綾瀨川元荒川星川ヨリ用水ヲ引シガ、享保年中、井澤彌惣兵衛、命ヲ蒙テ是等ノ沼ヲ埋ミ、許多ノ新田ヲ開墾セシ後、此用水ヲ掘ム、幅八間、水源ハ下中條村ヨリ南ノ方ヘ流レテ星川ニ入、上大崎村ニ至テ二流トナリ、一ハ笠原用水ト號ス、一ハ南流シテ又三沼代用水ト唱ヘ、柴山村ニテ伏越樋ヲ設ケ、瓦葺村ニ至テ二分シ、東西村々ノ用水トナル、分水口ヨリ足立郡ノ流末マデ、十三里ニ及ブトイヘリ、

〔甲子夜話六十九〕武州足立郡南部領ニ瓦葺村ト云アリ、都下ヨリ行程九里計リ、家祖ノ弟彌一郎信澄、薙髮後永喜ト稱シ、兄弟同ク仕ヘシガ、慶長十七年、瓦葺村五百五十石ノ地ヲ賜フト見ユルハ、則當村ノ事ナリ、（此家後ニ斷絕ス）コノ處ニ綾瀨川ト云アリ、コノ邊モトハ用水不便ニシテ、近キアタリノ池沼、或ハ溜井ヨリ水ヲ引テ田畝ニ灌ギシヲ、享保十三年、井澤彌惣兵衛命ヲ奉ジテ、池沼溜井ヲ埋テ新田トシ、下蓮田村ヨリ三沼代用水ヲ引入レ、此村ニ至リ、東西ノ二派ニ分チ、埼玉足立兩郡ノ内三百四拾六村ノ用水トス、掛樋ノ長二十八間、高六尺、横四間、冬春ノ間ハ舟ヲ通ジテ運

ス、領主松平甲斐守之ヲ聞キ、有司ニ命ジテ此渠ヲ開ク、其制淺尾渠ヲ廣ムルコト貳尺、風越山（小笠原三藏ノ關ニアリ）三百間餘、其他小山數所ヲ鑿テ淺尾渠ノ尾ニ接シテ、其餘水ヲ引キ以テ三村ニ及バシムト云、三村總高千四百四拾石七斗壹升五合ノ内、水田高百五拾石八斗七升九合（貳拾四町貳段貳畝貳拾五步）渠道長八千八百七拾壹間、（淺尾村小柚穴ヨリ三澤至ル）廣四五尺ヨリ六尺ニ至ル、分水役人小屋宮久保村ニ在リ、初此役ヲ興ス時、團子新居六郎右衛門、元祿十六（癸未）年ヨリ楯無渠修治ヲ司リ、水理ニ熟スルヲ以テ其事ヲ議ラシム、三年ノ勞ヲ積テ遂ニ成就ス、費用金八百貳拾兩、（五百七拾兩ハ領主ヨリ給ヒ、貳百五拾兩ハ三村ヨリ出スト云リ、）乃六郎右衛門ノ功ヲ賞シテ、宮久保村鳥居原ニテ屋敷地三段ヲ賜フ、享保九辰年二月、福井穗左衛門、山口八兵衛、連署ニテ、右ノ地所年貢諸役免許、且向後三村ト申合セ渠道修理スベキ旨ヲ命ズル印書アリ、其後孫今ニ至マデ三渠修治ノ事ヲ司ル、（三堰ハ穗坂、楯無、逸見篇ノ淺尾ナリ、）風越山ノ南麓ニテ三藏村境大穴口ノ側ニ碑アリ、名勝志云、伊藤仁齋門人渡邊子固所作也、（全文附錄ニ載ス）按ニ穗坂諸村ハ、土地高燥ニシテ涓滴ナシ、纔ニ一二ノ泉アリテ擧村賴之、或溪流如泉ナルヲ引テ井ニ貯ルノミ、若旱シテ水涸レバ、鹽川、旬川、荒川等ノ水ヲ負荷シ、來テ飯炊ノ用ニ充ツ、是ヲ以テ古ヨリ水田ナシ、武田信玄ノ時、牧場ノ故地ヲ新墾シテ、龍地今井等數村ヲ建テ、慶長元和ノ頃ヨリ新溝渠ヲ通ジテ稻田ヲ開ケリ、實ニ萬世ノ功ト謂ベシ、拾餘村ノ民永世其德澤ヲ被ムレリ、雖然渠ヲ開クコト極テ難シ、其地理水勢ヲ熟知スル者ニ非ズンバ、安ゾ能ク其任ニ堪ンヤ、數里ノ間山蛭ノ曲折ニ隨ヒ逶迤蜿蜒シ、斷岸絕壁ニ過ヘバ、或樋筒ヲ架シ、或ハ山腹ヲ穿チ以テ通ズ、其功擧テ記スベカラズ、

（甲斐國志附錄百二十）穗坂堰穴口碑銘

三之藏、宮久保、三津澤、村民千餘口、古來無水、卯賴雨水、晴日過旬、則踰峻險、牛馬運溪水、國主憫、天下易得者莫如水、而此村獨不得其易得者、命臣山口八兵衛源政俊、救其艱苦、隄於野長八千間、穿風越

門、享保十二年歳次丁未七月二日、病卒于家、伯牧王父也、伯牧名潤宜、亦襲父祖之號、稱八兵衞、雙號山人

集初編

床島堰碑

樺島石梁

此堰者、正德二年壬辰、梅巖公時之所造也、初我御井郡後〇缺諸村、土美而憂在少水、稻數村庄屋清右衞門、及八重龜村庄屋新左衞門、鏡村庄屋六右衞門、皆慷慨有智數、嘗相與議後河之可堰以引水、規畫在意、然以洪流巨浸事係非常、默止有年、一日扼腕相謂曰、昭明々在上、百世之功、萬姓之利、時可失哉、議合乃狀方略白官長、官長傳而上之、公英明聰精治道、一覽壯之、卽命野村宗之丞、草野又六率役、清右衞門等三人副之、他奉職者家老總奉行以下大小有科、又六名實秋、亦久朶頤河堰、爲人俊偉、膽量超倫、又能商功、用其爲國辟上起利、前後許多、蓋嘗此時、諸承任者、率皆倜儻、妙選得人、及命下衆氣投合、奮起從事、乃大募役丁、因前所上狀、鑿長渠于床島村、樹石立堰以壅河流、於是河水洶沸、怒而西注者數百千間、勢如漸上、而渠腹所受、騰駛有餘矣、又就渠首疏地、鋪石以導河餘流路、峻岸峭奔瀉數曲留之、如降龍而行舟之鱗而落于本河者、斗折一瞬、飄飛可觀、是稱舟通、蓋爲堰大小凡四、而衆稱之、爲渠一面下流萬派、崇庳曲直、權衡得宜、蓄洩之機、旱潦之度、天造而地設、其巧雄奇、而毫不愆于素、功始于正月二十一日、而畢于四月十三日、爲日僅八旬餘、用夫凡二十餘萬人、用錢凡五百餘萬文、嘗其塡築時、小石會而苞之、苞凡五十餘萬、大石不知其幾萬億、皆以二月晦、一時下手有負、而投之者有并船而沈之者、斯日人徒雲集、而行步進退、節制前定、賞隨其勞、過者有罪、於是乎人氣十倍、一投一沈、奮厲之壯、殆欲與河水爭勇、觀者魂褫云、功成地之富于水者凡四十餘村、得良田一千五百餘町矣、抑正德距今百餘年、星霜非淺、而渠下之民、到于今鼓腹樂業、不勞而飽、皆拜以爲神賜、後世可知也、嗚呼數子之有功于國于民可謂大矣、文化十四年三月、

〔甲斐國志二十山川〕一種坂渠　享保元丙申年大旱ス、三澤、宮久保、逸見筋三箇三村水涸ヲ、居民大ニ窘迫

沼、曰野高谷、曰道場宿、曰氷室、曰打越也、宇都城北可二里、而在水、東岸者爲版戶、版戶之津以爲渠口、以注刈沼以下云、宗山君將發表也、慮土地之可否水道之利害、而欲陽計之、則恐五邑圖有害于各地、也、亦各生民必爭之朝、是以犯更而出、達暗而止、月餘而得里數遠近以圖狀、亦窮日之力而後成、議諸他鄉里鄉黨及受水道諸邑、並無害矣、終以開、有司相商議曰、案其地與距版戶之津二里、而邇然高於此復二丈餘、激而迸之、豈能可使在山哉、其勢則然也、若强而行之、則多役民力、而其極終無功矣、如事浚無功則非汝特獲罪于朝臣等、亦不能免無狀之責也、與其發事而獲罪于朝、不如于無爲保其身矣、宗山君叩頭謝罪而曰、地形實高於版戶、然徵諸他州郡導水道者、其地過於二三里、則一二丈高疏而無不至也、且事不成、小人伏罪素其所也、亦誰怨執事、若爲功于國、以其事不覺、爲奉職無狀而嚴譴切至、至沒官所逐、小人雖不肖、豈敢如越人視秦人之肥瘠其然哉、冀君只謀生民之患難、有司義其言而奏之、朝以先封起功之故、轉覆劾刈沼以下五邑、僉曰、廣渠口倍水勢並無所害矣、乃及撿其地、宗山君便從役曳柴徵其處、寶永四年丁亥春王正月導水之命下焉、國臣山室杉右衞門者與焉、大爲徒役、役夫皆閱宇都封內戶籍而召之、渠口依前道而決、自刈沼神祠西而分流、經刈沼野高谷道場宿、凡一千二百餘步、廣狹淺深悵其水勢、圃囿𢿨畝係水道者、盡沒爲渠身、一代之以他地、過此以往經三百六十步而會三沼、其間郊原隆然如伏堆、高數仞、雖有五丁力、孰得而鑿之、至此計窮力竭、有採金于東奧牟田山者、召以訪之、乃約汝能爲之、則吾保養汝終身、採金者二人乃許諾應請、夜以繼日、堀作洞道、以通小澤口、工積歲以至行水、諸有司視事、皆感歎其功績、宗山君舉觴汲于水道、以祭昊天后土云、得水道之利者、三沼支邑泉午新田船戶大和田民戶貢稅三百石、無大旱望雲之患、有農時勝食之喜、宗山君之功實不在禹下也、績用既成、國君賜書賞其勞、後宇都縣移封、君侯屢替采地、亦從而所削、是以三沼轉爲結城別邑、享保十九年甲寅九月、結城侯使司農員酒井某等三人勞前功、又命再修之事云、予應伯我氏請、署其概略以贈之、所言里數乃從近時之側計之、宗山君諱直消、稱八兵衞、後改曰與左衞

用水トス、境村ヨリ水路八里餘、南品川宿ニテ目黒川ニ沃グ、水路ヲ疏鑿セラルヽ時、御靈屋料及ビ私領ノ廢地トナリシヲバ、官ヨリ其代地ヲ出サレ、スベテ五條ノ分流ヲ穿チ、水路ニ添シ境下仙川烏山廻リ澤世田ケ谷新町ノ五村ニ高札ヲ建ラレ、又境村及下仙川粕谷船橋廻リ澤ノ四村ニ惡水ヲ通ズル圦樋ヲ伏ラレ、當領上蛇窪大井二村ノ地ニ圦樋ヲ造ラシム、今ニ至ル迄、スベテ官ヨリ修理ヲ加ヘラレ、人夫ハ組合ノ村々ヨリ出セリ、

〔事實文編附錄九〕水沼岡田宗山導水勳績記　諸葛蠡

凡天下之圖作疇之候、牧播種耕稼之業、非決川注之、公田則汚潦潤水以待時雨之化、皆塗足盡力於溝洫、稍致其巧者不亦勞乎、其導水通法有二也、疏淪川澤以涯之、土俗謂之用水、用河水于田疇之義也、假雖十日無一雨、亦不害于嘉穀、若夫山澗之田、不便于控河澤者、栽得行源以濟其用焉、然田有陵夷、土有凹凸、高者雖躍使過顙、不得以灌之下者、欲疏而通之、洿而不流、況源淺涸寡、七八月之間、旱則涸乾而端芥、爲之舟膠而不得行也、非沛然下雨、不能物起矣、土俗名之曰天水、言待天陰雨作功也、然則決水之用、比諸待陰雨、則其功亦幾何、三沼村在絹河之東（村西有小澤、徑三百歩、其中有三沼、曰琵琶沼、曰壺沼、曰大沼、因名村、今轉呼水沼、）屬下毛芳賀郡、其民居東北者、受五行江流、坦然如砥、故灌畎澮以注居田、無大旱水災之患、居西南者、毎々田原其地汚隆、未由導水、何以能作稼穡之事乎、天明丁未年〇七之秋、予訪岡伯哉、蓋其里豪富者也、嘗請予面曰、我一鄕右絹河左五行、相距各數里、有山谷原野之阻隘、以不便水道、唯以村西小澤在時注之田畝、若有十日不雨、則乾涸而苗枯矣、先大夫宗山府君、不忍視民如轍鮒矣、告之國君、繇役以作土功、爾來殆八十年、無以乾涸之患、先大夫功不亦大乎、請君爲吾記、貽勳于後昆、死者若有知則忻然于九泉之下焉、因按圖狀、其地古屬宇都封內、福山侯先阿部四品兼對馬守藤正邦、曾食邑于宇都宮、寶永三年丙戌秋八月、宗山君奉表以言水道之利、先是桑海侯先從四位侍從下總守源忠弘亦食邑于宇都也、絹河東北之民乏水道者、上流以開河道之事、朝廷相議、而溝渠以注下者凡五邑、曰刈

幸倍給倍止、此河邊乃此堰乃利乎受多留蒼生等我、敬禮留事乎、狹男鹿乃八耳乎振立氏聞食志、給倍止、謹美
謹美惶毛恐美毛駒牽立氏申止啓須、

（豫陽古跡俗談下周布郡）切拔井手　志川村に有、長七拾三間あり、之内拾四間の間は、高七尺幅四尺
計、岩を堀通せり、

此所、以前は志之川の水を、權現山を組を懸樋にて湯屋口村の井手下を廻らし、漸く志川村平地
寺田へ掛しに、寛文五巳年岩山を掘拔、水を志之川より直に通せしにより、志川村畑所と、ことご
とく上田となりしよし、

（甲斐國志山川二十）一楯無渠　寛文六丙午年、江戸ノ人野村宗貞始テ開ク所ナリ、故ニ宗貞渠トモ云、然
ドモ漏水多クシテ、下流ノ田ニ漑ギ難キ故ニ、其翌未申兩年ニ、有司令ノ渠道ヲ通ズト云、渠首ハ
逸見筋小笠原ニ在リ、鹽川ノ水ヲ引ク、同筋三藏、岩下、當筋宮久保、上野山、宇津谷、岩森、菖蒲澤、團子
新居、大垈、龍地、十村總高四千四百九拾五石壹斗三升五合ノ内、水田高四百五拾六石貳斗貳升九
合、六拾貳町三段六步渠道長八千四百五拾六間、廣六尺許、流末龍地村ニテ句川ニ入ル、分水ノ役人小屋團
子新居ニ在リ、

（鵞峯文集四）見禰山廟記

良嗣拾遺兼筑前權守正經、孝思之餘、不堪哀慕、而議謚號土津神、營構新社於墳前二百三十步之地、
以敬崇之、〇中略良嗣猶有慊於心、遂執政而命家臣、促役夫八萬人、北尋檜原河流、鑿山穿巖、西通數十
里、注磨上原、新墾畎畝、以爲封戸也、可謂至孝之志、爲後世恩之深也、

（東海道名所記三）島田が原　今は新田になりて、大炊川の水を堰入て耕作をつとむ、

（新編武藏風土記稿在原郡三十九）品川用水　元祿四年評定所ニテ命ゼラレ、多摩郡境村ニテ多摩川ヲ
分水シ、郡内品川領南北品川、上下大崎、上下蛇窪、桐ケ谷、戸越、居木橋、大井、二日五日市等、十一村ノ

を害にせざるが故に、水流るゝに堪ざるやといはれけれど、おどろくけしきもなし、三年といふ秋大雨のありける後に、雷の鳴るごとく水音おびたゞしくとゞろきて、この溝にあふれみちて、平地をも水行ばかりに、六七寸ばかりある鮎の魚の流れくる事おびたゞしく、只一時に十六里がほどにながれわたりて、新河岸の川に流れ入てけり去程に田地もひらけて、野火留二百石の地、たちまちに二千石の地となりぬ、豆州安松をめして此年ごろ我主の德分に汝をせめたりけるに、終に驚くことなく、かさねて溝を潰しなんともせざりし事、神妙に覺ゆるものかなとて、一倍の祿給はりて、三百五十石になされたり、其後次第にへあがりて、たかき職をも司どれり、

〔野中記事上〕野中良繼傳

國內有二鉅野、曰香香美、曰山田、其土雖沃、而野高川卑、故振古不能灌漑焉、良繼與其官屬小倉氏協謀發民鑿溝引水、昔者秦氏之有斯國也、鄕士百餘員、頗號勇悍、秦氏滅後、其子若孫、或爲農民焉、或爲商賈焉、良繼白于太守、募國中得凡百人、使其自開墾之、人給百畝餘而爲永業、猶秦氏時之例云、是鄕士逐年繼出者、殆及千員、又疏高岡弘岡之大澮、以爲農民之助、決中野日出野之二川、而爲船漕之便、其間穿山嶽、摧巖石、勞費不貲、然向之磽野、郤爲沃野、瘠田遂爲良田、民到于今稱之、其施設登細故哉、

〔野中記事中〕野中傳右衞門良繼靈、明和八年吾川郡八田村之內勸請之時祝詞、

戸部良熙

謹美謹美恐禮惶毛禮美新祠乃靈神乃廣前爾申須、今茲明和八年辛卯□□□□之晩宣以、土左國吾川郡八田村宣永代乃好宮地止定給底、野中良繼之靈宣大渠乃神止倶仁齋禮坐志氏万代迄賣此大河邊大堰乃守護止成互世給止倍、土地宣清女神籬宣建氏、御號乎春野明神止稱辭竟奉利、榊葉爾白木綿取垂氏警蹕比招禱奉留事乎平久介聞食氏常磐堅磐爾鎭利定利坐波志底厚廣貴神德乎以、寶祚盛天壤止無窮、我遠依別乃土左乃國風波事無爾、五穀豐熟志久、邦君万歲乃榮乎受介、國安穩爾、諸守利

治ノ頃、本所ノ上水及ビ八條領ノ用水ナリシガ、本所ノ方ハ廢シテ、今ハ前ニ載ル八條及ビ足立葛飾二郡ノ水田ニ沃グリ、此水流水源ヨリ東葛西流末マデ十三里餘ニ及ベリ、

〔老談一言記三〕一松平豆州信綱代官に、安松金右衛門といふ有り、豆州の領分野火留といふ所に、多摩川の流れを引たらんには、開發の田地もあるべきやいなやと、議せられしに、いかにもよろしかるべき由を申す、凡そ黃金三千兩を費すべきにやと有しかば、豆州聞て、我此所を領すとも、又いづかたへ移りなんもしらず、私三千兩の黃金を費して、永く此地の利あらん事、且は公儀への奉公の一つなりとて、安松に命じて、多摩川の水をひかんとて、十六里がほど溝洫をうがちて、新河岸といふにいたりたり、かくて水流れ入るかと待に、更に水來らずして、一年を經たりけり、豆州安松をよんで、いかで水はいらざるぞと有しに、いかにも水は入るべきにて侍る、なにさまにも故ありぬと存ずといふ、其故いかにと有しかば、いまだ其よしをば心得侍らずと答へたり、又の年にも水入らず、又安松をよんで尋ね問れしに、さりとては水は入るべきものに候へども、かくのみ侍る事返す〴〵不審に候、たゞし此地は武藏野にて侍れば、およそ川越の城下の人家、常には疊の上に柿紙などを敷て、客來ればこれを卷て、さて請じ侍る、これは地かわきてしかも風常にあれば、忽に座中ちりあくたにうづもれ侍るが故也、しかるに今年は城下のちりあくた、むかしの樣に侍らず、殊に武藏野にうへ侍りしはたけもの、ことし程ゆたかに候事終ゐに覺へ侍らず、多摩川より此溝に流れ入る水を廣き野に引侍る故に、いまだ流れ來るほどの事は侍らぬにや、此水廣野にみちみちたらん後は、かならず流れ來るべきものをと存ずと答ふ、羽生又右衛門といふ代官、こゝらをつかさどりければ、やがてめしたづねられしに、さればことしほど、野にうへし万のもののゆたかなる事は覺へ侍らずと申せしかば、豆州又のたまふ事もなし、またの年にも水來らず、此とき安松をめして尋ねられしかど、こぞの如く答へてければ、汝が地の高下

トナシ、田間ニ沃ゲリ、是ハ寛永二乙丑年六月、始テ設ケシ故、此名アリト云フ、
〔甲斐國志山川二十九〕淺尾渠　江草村八卷ヨリ引ク、淺尾村小袖林マデ長六千三百四十五間、廣三尺ヨリ六尺ニ至ル、寛永十六年、上神取村百姓十右衛門、當筋大八田村肝主奥石土佐家譜ニハ、村山東割ノ村民ト云ヘリ、清右衛門二人、淺尾村ノ野ヲ墾辟シ、又自普請ニテ此渠ヲ鑿リ、慶安元年ニ至テ成就ス、淺尾、同新田土手村ノ内、永井組ノ田ニ漑グ、水掛高六百六拾五石九斗八升六合、
〔新編武藏風土記稿埼玉郡一百九十九〕北河原用水附稻子用水　忍羽生領四十六村ノ用水ナリ、正保元年、伊奈半十郎北河原村内ニテ福川ヲ堰入、此時ヨリ北河原用水ト唱ヘシガ、寛文六年、此邊甲府殿領知トナリシ頃、北ノ方水流乏キニヨリ、カク領内稻子村ニ杁樋ヲ設ケ、別ニ利根川ヲ分水シテ、此邊諸村ノ助水トナセリ、サレド年ヘテ又水利ノ分派不便ニ至リシ故、享保十三年、井澤彌惣兵衛上中條村ヘ圦樋ヲ移セリ、カクテモ唱ヘハ元ノ如シト云、水路ハ小須賀村ヲ過テ、後南北二派トナリ、南方ノ一派ハ羽生領南邊ノ村々ニ灌グ、北ノ一派ハ同領ノ北邊ヘ通ゼリ、
葛西用水　本川俣村ニテ利根川ヲ分チ、羽生領北篠崎村ニテ會ノ川ニ合シ川口村ニ至テ三分シ、其一條ハ東南ノ方葛飾郡幸手領ノ水田ニ沃ギ、二條ハ共ニ南流シテ、本郡栗原村ト葛飾郡上高野村ノ界ヲ流ルヽ、古利根川ニ設ケシ琵琶溜井ニ入リ、夫ヨリ東南ノ方ヘ流レ、流末松伏溜井ニ至リ、本流ノ左右別ニ東西ニ分流ス、其一ハ葛飾郡松伏村ヘ圦樋ヲ設ケ引入、同郡諸村ノ用水トス、其一ハ郡内増林村ノ内ヘ引入、元荒川ノ流末ニ設タル瓦曾根村溜井ニ沃ギ、八條領ト足立郡谷古田淵江二領、及ビ葛飾郡西葛西領、總テ三百餘村ノ用水トセリ、抑此用水路ハ、初メ萬治三年、伊奈半十郎命ヲ奉テ疏通シ、幸手領ノミノ用水トシ、其餘元荒川古利根川ノ諸水ヲ引テ耕種セシニ、享保四年、伊奈半左衛門、石川傳兵衛等、本川俣村ノ分水口ヲ切潰ケ、又別ニ上川俣村ニ水口ヲ設ケテ其助水トセシニ、水カサ多ヲモテ、程ナク寶曆年間廢セラレタリ、又瓦曾根溜井ハ萬

處あるべし、希くは監吏の臨驗を請はんと、最上家其忠義を嘉みして其請に任せ、監使拼久莊兵衞、乙阪六左衞門、大津藤右衞門をして命を傳へしめて曰く、役夫工費幾十萬を要し、何十年を經るとも、一に之を汝に委ぬと、茲に於て大學大に感激し、日夜工事を董督し、三年にして卒に功を成したり、此より水利大に開け、居民始めて饑寒の患を免るゝに至る、最上家其功を賞し、褒狀を大學に與ふ、其文に曰く、

今度其方一命に掛け、大分の普請申立る處、見立ての通り成就、大分に水寄り候由、扨々其方手柄、殊に末代領分の長寶に候、右の爲ニ褒賞、以來此用水にて出來申新田何万石出候とも、其方知行にむすび可ㇾ爲ㇾ取事、

大學の恩澤は百世の下に流れ、居民皆其德を仰ぎ、祠を狩川村八幡社内に建てゝ、歲時に祭を致して怠らず、子孫酒井氏に仕へ、其後裔今尙鶴岡に存すといふ、(山形縣報告)

〔新編相模國風土記稿 十二 足柄上郡〕酒匂堰(佐可和世儀)(土俗用水ヲ堰ト書シ、勢儀ト稱セリ、)金手村ニテ酒匂川ヲ堰分ケ、上下西大井三村ノ用水トナシ、下大井村ヨリ足柄下郡東大友村ニ沃ギ、彼郡十四村(東大友、西大友、永塚、千代、高田、別堀、下堀、中里、矢作、酒匂、小八幡、國府津、前川、田島等ナリ、)ノ用水トナル、水路一里八町餘、(閒編 四)慶長年中疏鑿セラレシト云、

〔新編武藏風土記稿 三十九 荏原郡〕六鄉用水　土人或ハ次大夫堀トイヘリ、慶長ノ頃小泉次大夫吉次ト云シ人仰ヲウケテ堀ラシメシカバ、カク呼ベリト云、水源ハ多摩郡和泉村ヨリ多摩川ヲ分水シ、同郡ノ内五六ケ村ヲヘテ、岡本村ニカヽリ、ソレヨリ當郡瀨田村ニ入、上野毛、下野毛、等々力、小山、上沼部、下沼部、峯、鵜ノ木村ニ至リ、分流シテ二條トナリ、一スヂハ久ケ原德持ノ二村ヲ歷テ堤方ニ至リ、一スヂハ矢口安方道塚ニ至リテ數條トナリ、其分流六鄉領ノ田地ニ沃ゲリ、

〔新編相模國風土記稿 六十九 鎌倉郡〕丑堰(宇之世儀)岡本村東方ニテ、戸部川ヲ堰入、岡本、植木、關谷、三村ノ用水

郡三村、本郡ノ内四村ノ用水トス、玉井村ニテ預ルヲ以テ玉井堰ノ名アリ、此用水ハ慶長七年ニ初テ堀リ、享保年中ヨリ修造ノ時ハ、此邊ノ領主阿部家ニテ指揮スベキヨシ命アリシヨリ、今ハ修造ノ度毎ニ、家人ヲ出シテ掌ラシムト云、

奈良堰　コレモ大里郡河原明戸村ニテ荒川ヲ分派セリ、則本郡十ケ村ノ用水ナリ、コレモ下奈良村ニテ預レバ、奈良堰ノ名アリ、慶長七年ノ堀割ナリ、

〔甲斐國志二十山川〕大垈渠　慶長十七年公命アリテ、大垈村ヲ今ノ地ニ移シ、新町ヲ建テ、龜澤村ヨリ清澤川水ヲ引ク龜澤牛句、大久保、大垈四村組合ナリ、渠道長貳里餘、高四百石壹斗三升四合ノ田ニ漑グ、元和三巳年、日向半兵衛ヨリ與フル所、大垈村屋敷指置ノ印書ヲ藏ム其時御代官田中孫兵衛開渠ノ事ヲ司リテ功勞アリト云、大垈村ニ至リテ楯無渠ニ合ス、

〔農商工公報十一〕北館堰の來由　山形縣東田川郡北館堰は、狩川村に在り、其渠の長さ西北六里、西南三里にして、六十餘村の田面四千百八十餘町歩に灌漑する所なり、當時最上義光の臣に北館大學といふものあり、狩川、清川、立谷澤の諸邑を知行したりしが、此地水利に乏く、天少く旱するときには、田地龜裂して稻苗は皆枯槁するを常とし、住民の難澀少なからず、大學深く之を憂ひ、堰を清川の山麓に設け、立谷川を引て灌漑の利を起さんと欲し、其計畫既に熟せしをもて、狀を具へてこれを最上家に請ひたり、最上にては工師若狹といへるものをして實驗を卒へしめ、卽ち大學に命じて事に從はしむ、故に慶長十七年丙子三月五日、始めて土工を起したり、玆にまた酒田の城主志村伊豆、大山の城主下次右衛門などをして、大學を輔けしめたるに、伊豆は門閥最高きを恃み、大學に降ることを屑とせず、且其功を妬みて、恣に約束を易ふる等の事あり、大學は事の成らざるを怒り、之を訴へ且曰く、君已に臣が請を許したる以上は、臣に假すに全權を以てせよ、三歲にして功を奏せずんば、臣は當さに屠腹して以て謝する

ざれば、水乾て保がたし、或曰、溜井を仕立に埴土と馬糞を半分づゝ切交、是を面に塗て乾固、圯坼(ヒワレ)れば復塗置ば、寒中も凍坼(イテワレ)ずしてよく保なり、又曰寒に入て三日の内雨ふらざれば、翌年旱にて植付成がたし、かゝる時に新しき溜井は、水保がたし、天水場ならば、かねて溜井をこしらへ置、常に修理すべし、溜井もなく水乏き所は、したゝり水なりとも、いかにもして引取て、五歩十歩の所にても水田となすべし、 凡旱損の所は溜池を掘り築くべし、其地燥土にて水を乾て、池に水たまらざることあり、其場には堀に杉又は柳の木を植て置ば、一兩年も過て、水おのづから溜るなり、又沼田の水損多き所は、田へ常に水たまるゆへ、田の中に堀を掘、水を其湾池(タメイケ)に引すべし、さすれば田に濁水淀まず、穗(ホス)に便あり

(吾妻鏡 三十四)仁治二年十二月廿四日丁丑、堀通多磨河、堰上其流、出武藏野、可開水田之事、施行既訖、柏間左衞門尉、多賀谷兵衞尉、恒富兵衞尉等爲奉行、今日所下向彼國也、〇又見北條九代記

(甲斐國志 山川 二十)上條渠、牛句ノ村上ヨリ龜澤川ヲ引ク、元龜三年壬申三月、上條渠破損セシニ因テ、牛句鄕中下條鄕、下方鄕、大下條鄕、天狗澤鄕、宮地鄕ニ再興ヲ命ズル武田家印書アリ、中下條村左源太之ヲ藏ム、

(梵舜日記)天正十二年七月十五日、日損ニテ、淨土寺へ水所望シ、大堵ノ田地へ入了也、

(譜牒餘錄)平野三郎右衞門書上

曾祖父平野三郎右衞門繁定、遠州豐田郡寺谷寺之井せき、伊奈備前守ニ立會見分仕候趣、備前守言上仕候處ニ見分之通申付候樣にと、天正十六年戊子年、奉行被仰付、畑方之所を井水仕掛候而、高貳万石餘田方に仕立申候、

(梵舜日記)慶長二年七月十七日、大堵ノ田地江白川之水合所望、荷田源助へ申遣、

(新編武藏風土記稿 二百二十六 幡羅郡)玉井堰 大里郡川原明戸村ニテ荒川ヲ分水シ、大里郡二村、埼玉

〔川々御普請定法帳〕紀州流新溜池築立之事○圖略

一新溜池長貳拾間　平均深六尺横十間　廾坪貳百坪　人足六百人　但溜土新堤江持縄壹坪三人

溜井縁堤前通はて出四百延長六拾間　法高貳間半厚三尺

此土坪七拾五坪　人足八百廿五人　但れり立手間共、土取五町壹坪拾壹人、

是は溜池地形堀平均前通堤築立、右池廻りはせねり土手土性宜き眞土を以、水を入ねり立、土癖荒打の如く、ねり塀など同前、厚二三尺も築立候得ば、水持宜池之地形人足千足築杯にて、踏堅メ候事、上方に有之、右體溜井有之まゝに而築立見候處、水持惡敷、夏之内は一向水無之、天水之面地用水及難儀候場所に而用之、

右溜池仕方は知る人稀なり、能々可考もの也○又見堤防書講要綱

〔堤防溝洫志四〕溜池

溜池ハ土地高クシテ、川水ヲ用水ニ引上ケ難キ所ニテ之ヲ設ク、之ヲ仕立ルニハ、先能ク谷川清水等ノ有ル場處ヲ考ヘ、其山ノ形狀ニ隨ヒ、三方二方、或ハ一方、又ハ丸堤ヲ築テ、山水ノ漏瀝ヲ蓄ヘ、以テ灌漑ニ供シ、田地ヲ養フ者也、其築造法種々アリ、堤ノ大小ハ溜池ノ廣狹ニ準ズ可シ、勾配ハ内法七寸五分勾配外法五寸勾配ヲ常トス、堤ノ内腹ハ、ハセネリトテ、土性宜キ眞土ヲ煉立テ、土藏ノ下塗練塀等ノ如ク、厚サ二三尺許ニ塗立テ乾固メ、皸裂ヲ生ジタル所ハ、又ハセ土ヲ塗込デ塗立テ、地形モ平均五本突ニシテ、下地ヲ能ク突堅ムレバ、水ノ漏ルコト無シ、而シテ尺八樋ヲ伏セ、冬ノ内ハ根水ト天水ヲ溜テ、夏ニ至リ用水ニ引キ田地ヘ灌グ也、尤モ池水湧出ル場處ハ、池ノ内ヘ井ヲ堀モ佳シ

〔成形圖說農事十二〕水溜

溜井は山を片取て堤を築く、水氣薄き所は中に井を堀て水を吹あげさせて、溜り水の水勢を助

町の田へ引べき水五百坪、平均深サ三寸懸りと見へたり、溜井は山を片取て堤を築、水氣薄き所は、中に井を堀て、水を吹あげさせ、溜り水の水勢を増ざれば水乾て保難し、先成難きもの也、或人云、溜井を仕立るに、へな土と馬糞を半分づゝ切交、是を一面に塗て干堅め、圯(ヒビ)わるれば又塗置ば、寒中凛割(ヒワレ)ずしてよく保也、或大家に一町餘の泉水を造られしに、水保たざりけるを、此方を以成就し、今は常に舟を浮といふ、又房州なる老農云、寒に入三日の内雨ふらざれば、翌年旱にて植付成難しと、例し見るに、いかにも寒中雨雪降ざれば必旱也、かゝる時、溜井なければ、天水場はいかん共する事なし、新なる溜井は水保ち難し、昔よりの溜井は村方の大ひなる福也、常に見廻りて土井の崩れ、戸前の損じあらば修理すべし、溜井なく水なき所は、したたり清水涌水ならば、いか樣にもして引取、たとひ五歩十歩の所也とも、田となし、永久の實を求むべし、枝川などの水細く、源の遠しとて、あだなるものとせず、流さへ絶ざらば、堀を當百間毎に引とれば、水法に少し無理有ても、引とる水のかへる事なし、相州足柄郡雨壺村に廿町餘の畑有、先年富士の降砂にて悉く埋り、三十年來荒地と成、村中作場を失ひ、困窮に及びけり、名主の治左衛門深く歎き、水筋を考へ、元文年中の事なりし、堀筋御普請を願、後の山より付廻し、谷川の水引取、さしもうづみし降砂殘なく押流し、如元なる古畑と成しかば、種々作りもの絶たる貢物納奉り、多の百姓二度福を得て悦ぶ事限なし、予此注進を聞て行て見るに、あらたに開きたる地と見へず、古への畑に立歸る目出度さに、かちよりぞ田作る業を來て見ればこゝもこはたの里といふらん、といひければ、治左衛門袖かき合て、こはづくろひして扣たりし、勇々敷面目哉と人いへり、心を盡せば水なき所も、流れ來るものと見へたり、昔西の國の事成とかや、獨の盲法師ありけり、其村の水なきを憂ひ、とし頃水筋をはかり、地を堀らせて池になし、萬石の用水を引、數十ヶ所村相續に及ぬれば、後彼盲人を祭りて其德を稱し、夫より盲人をいたわりしと也、

五斗を十倍にシテ、地代五石地主へ被下、壹割之利米にて他江貸付置候得ば、毎年利米五斗づゝ取候付、地には離れ候ても、作徳は有來り通り取候心に成候との事に御座候、

〔地方凡例錄 六〕一井料米水代米之事

是は他村之田地を、此方用水之爲、相對を以堀割井筋堰溝等を立、潰地に成たる節、潰地相應程地代として、年々米にても、金錢にても、相對次第先村へ渡し遣す、是を井料米共、水代米とも云、又新田等出來爲用水、古田之内潰地に成たる分は、公儀地頭ゟ米金にて被下、又は相應之代地渡事もあり、或は古田の用水、百姓勝手を以願出、潰地に成たる分は、村方より代米金差出す事なり、

開渠法

〔地方役人 四〕用水普請之事

一用水普請は、水旱二つの患ひ、田畑を安からしめ、地の　を極る事肝要也、總而普請所は多の中に見分して、其入用の品を積りて調へ置て、正月中旬より始りて、三月中旬に終る樣にすべし、四月に入ては農事に障るなり、見分は大節なる事にて、惡敷見損ずれば、莫大の金銀人足を費し、剰末々迄害に成事多し、先川の見分は川筋直にするを第一とす、然れ共川通にする事は成難し、せめて水行の通りに流るゝ樣に、川除を工夫有べし、水當りの所を見究め、先づ石川ならば、籠出し蛇牛、笈牛、尺木垣、大籠出、大聖牛、大枠出し、棚牛等を以て防ぐべし、又砂川泥川ならば、杭出し、鹿朶波口萱出し等に而防ぐべし、其川の模樣に寄て、川除の仕形も品々有べし、川床柔かなる所は川除も又柔かにせざれば、一日も保難し、川床强なるに川除柔なるは、暫時も保がたし、何れの仕方にても、功者なる普請請負のものを、吟味して差圖爲致べき事肝要なり、

溜渠法

〔續農家貫行 六〕溜井

一用水、二種物、三介錯、此三ツ一ツも欠ては田地ならず、第一用水也、諺に五日乾は三割違ひ、十日干は五割損といへり、是に依て川水引難き所は、溜井の水を以田地の養とする也、○中略 水斗に十

之任自由仕替候故、及訴出候類有之、右體之儀、雙方致相對普請仕立候節、立會無障樣に可致、若又滯儀有之候歟、不法之事有之は、其節ゟ十二ヶ月を限、於訴出は、裁斷有之、期月過於訴出は、取上無之、

一御料私領之組合普請、私領之分計自普請於願は免之、

一當時用水不引といへども、古來ゟ之組合離候事禁之

一往還橋普請組合、新規申付例有之、

一用水人足諸色、組合總而割、

一用水は、田反別多少に應可爲割合、水門寸法定べし、

一一領之時、水代不出といへども、於他領分新規出之、

一用水論は、容易不取上、雙方之役人立會に而無滯樣爲濟之、

但十二ヶ月を過、於訴出無沙汰、

一畑成用水、於支障は禁之、

一新田新堤雙方役人立會、障無之可仕堤重畳、障有之おゐては禁之、

一用水引水證據障無之、溜井廻り其村田地取廻有之地内地元たる上は、田高に應、新規にも用水引之、

〔會計秘錄三〕關東新井筋等之潰地之地代積仕方覺

たとへば

一上田壹反歩

此取米拾ヶ年を平均壹ヶ年　取米五斗に當り候場所は　地代米五石地主江被下候

右者上田壹反歩之取米平均五斗を、五分々々之取と見、作德も平均壹ヶ年五斗有之積に而、右之

御代官中

〔享保集成絲綸錄二十四〕當時村方五人組帳差上申一札之事○中略

一在々に而用水掛引井堀之儀川中に堰を張、水を引分け候仕方之儀、川下之用水不足にも無構、手前勝手に宜様に仕、或は両側に井口有之場所、片側之井口附替候時、雙方不申合、一方之勝手にまかせ仕直候故、及出入候、右之類雙方致相對立合、普請可仕旨、被仰渡奉畏候事、

〔享保集成絲綸錄二十四〕享保十一年午年十月

惡水不滯、用水引渡す儀、在方肝要之儀に候處、惡水川用水小溝等迄堀さらへ不仕、剰雙方よりせばめ、或竹木はへ出水道差支候所々有之由相聞候、當年は此節自今其年の三四月之內、隣鄉申合、村限堀さらへ、竹木伐拂、水草は根共堀取、又は度々苅捨可申候、土砂埋多堀、幅せばめ候所々は、二三年之內、段々以前之通堀立可申候、右之通申付候上、若堀浚不仕村方有之、隣村江相障候はゞ、堀浚仕候村方より、其旨可訴出候、吟味之上、急度可申付候、

附水上之村、惡水堀有之候處、水下村之惡水堀埋潰シ候所々も有之由に候、以前之通堀立、勿論惡水堀無之所は可訴出候、

右之通、關東筋、御料は御代官、私領は城主地頭、幷寺社方支配限り、在々江入念可被申付候、以上、

十月

〔大坂要用錄一〕堰井堰用水之論

一私領ゟ新田新開取立ル事、雙方地頭相對之上之儀に付、障無之様に申合べき旨申談、願不取上、子細有之難相濟格別、

一用水懸引井路之儀、川中に井堰を立、水を引分候所、堰之仕方に寄川下之井水不足にも不構、手前勝手宜敷而已、仕形及爭論、或は両側之井口有之場所、片側之井口付替候處、雙方不申合、一方

條々〇中略

一御料所之堤川除井堰圦樋橋等、其外在々御普請之場所、年々の御入用、是又古來に引合候に、其數倍々を增し候事は、近年にいたつて、御城下の町人、在々の名主庄屋、并に商賈人等之類、御普請を受負候に就て、此等之輩、或は其地之案內をしらず、或は其身の利德を相謀り、御普請之仕方不堅固の事共多く候得共、御代官所之手代役人等も、或は贔屓につき、あるひは賄賂により、委細之吟味におよばず候を以て、所々年々の御普請斷絕無之由相聞へ候、自今巳後は御普請請負の輩、一切に是を停止し、御代官中、其支配所之地に御普請場有之面々は、常々其場所共見分之上、其邊之もの共召集め、古來より之樣子次第をも委細に相尋ね、御普請之仕方いかにも堅固を本として、みだりなる御費無之樣に考質、破損修復等有之候時にいたつては其仕樣帳を相したゝめ御勘定所江差出し、差圖を得られ、御普請之事は御物入之米金を以、其地大小之百姓共に申付られ、御普請出來候時、其仕樣帳之面に引合、委細吟味之上相違無之におゐては、其由を以て御勘定所江被達べし、若御普請之樣子により、請負のもの申付ずして難叶子細も有之においては、是又御勘定所に達し差圖を得らるべし、若又早速御普請無之しては難叶子細も有之においては、先御普請の事は申付られ、其子細を以御勘定所江被達べし、惣じて在々御普請之場所、小破之時修補をくわへ候而、大破に及ばざる樣に、常に油斷あるまじき事、

附御料の地、普請有之候場、古來は或は其村役、或は百姓自分普請に仕立候處も、近年巳來、多分は御入用普請に被仕、又は御料之時、御入用普請の場も私領に渡り候後は、其村々百姓自分普請に仕立候所も多候由相聞へ候、修復の所は不及申、直し候程の普請之事も、古來よりの次第を委細穿鑿之上、なるべき程は、百姓共自分普請に可被申付事、〇中略

正德三癸巳年四月廿三日

寛永二十一年甲申正月日

上方御代官衆中

關東御代官衆中

慶安二己丑年二月廿六日

撿地掟〇中略

一郷中先高之内にても、隣郷江入郷境論と存候所は、近郷之繩打衆と致談合、究可申事、

付井堀つゝみにいたし度と申場候はゞ、見分之上、致僉議可被申付、〇中略

右之分、堅可被相守事、

年號月日

〔御當家令條二十三〕御勘定所下知狀

定〇中略

一堤幷水留之所、猥に切落切掛申間敷候、落し候はで不叶所は、達役人得差圖落し候共、跡丈夫に可築之、杁之儀、前々之如く、面々請取之所江入用之道具寄置、洪水之時立明可入念、若令油斷押切候處遲く、明田地於水損者、郷中之者可爲曲事、次にかけ堀落堀堤川除之際に成候殺生仕間敷事、〇中略

右條々堅可相守之、若令違背輩於有之者、或死罪或牢舍過料、隨咎之輕重急度可申付者也、

寛文六年午十一月十一日

〔郷中御掟書〕元祿十四巳十月用水川除溜池普請等之事

一古溜池取立可然分、幷新溜池各了簡之上、取立可然分は、可申出旨達之事、

〔牧令類纂御集八十八〕正德三癸巳年四月

しかるに水よけをなす事あらば、本川をながるゝのやうに是をなすべし、又川むかひの地ぬしも同然たるべきなり、

一みづいさかひの事、用水のはうにまかすべし、然るにもんだうに及び、人をちやうちやくせしむるともがらはおちどたるべし、人をころすにいたつては是非に及ばず、其成敗有べき者也、

〇中略

天文五年丙申孟夏十四日　　金澤 上總守宗朝〇以下十人略

〔教令類纂初集八十七〕慶長十四年己酉年二月二日

覺〇中略

一井堰築候人足之儀、手寄次第何も郷中不レ殘雇候而、つかせ可レ申事、〇中略

慶長十四年酉二月二日

寛永十九壬午年七月廿九日

覺〇中略

一井水かゝり候場末までも斷絶なく水引候樣に可レ仕候、用水あまり候所は、前々不二遣來一候共、不足之所より水乞候はゞ、當年は可レ遣之候、以來例にはいたさせ間敷事、

以上

壬午年七月廿九日

正保元甲申年正月

覺〇中略

一堤井堀川除之儀、毎年正月十一日より普請申二付之一、旱損之所は水のかゝり候樣にいたし、勿論水かゝり田畑損毛之地は、水はきのおとし堀、入念可レ被二申付一事、〇中略

一用水に付てせきをあげ、つゝみをつくのとき、せんく〳〵とほり候みぞほりかひ、くづれなどしてたいてんのとき、ならびの在家の内に江ほりをたて、よう水をとほすところに、くだんの地とうひやくしやう、いらんにおよぶべからず、せきせんのありなしは、せんれゐにまかせべきなり、

一せんく〳〵のせきは、あるひはふかき淵となり、あるひはくわうやとなり、じゆりたいとたるのうへ、たいてんのときちきやうのこしらへやすきたよりに付て、川かみにても河下にても、せきばをあらたむる事、一がうのうちたらば、ぜひのいらんにおよぶべからず、もしたがふにいたつては、事のしさいをひろう致べし、其上をもつてそのさた有べきなり、

一ばんにんののみ水として、ながれをくみもちゆるのところに河かみの人けからはしき物をながし、ふじやうをおこなふ事あるべからず、次に一人のために、其人の在所へせき入、ながれをとゞめ、のみ水にうゑさする事、ざいくわたるべし、

一用水のために、つゝみをつくのところにれんく〳〵水まし、人の領分、このつゝみゆゑにあれ地となる、仍かの地ぬしいらんにおよぶ、そのいはれなきにあらず、しからばこれをあいやめべきなり、たゞし用水は、ばんみんのたすけなり、一人のそんまうにより、これをやめん事、すこぶるたみをはごくむだうりにかなはざるもの也、せんずるところは、あれつべきぶんざいかんぢやうをとげ、さうたうのねんぐをくだんの地主へはたらかせ、こしらへかたむべきなり、

一せんく〳〵よりありきたるつゝみ、しゆりをなさずして、たいてんのとき、くはうやうとなる、しかるをそうりやうしきとなすら、へ、ほしひまゝにかうさくばとなす事有べからず、せいばいあるべきなり、

一河のほとりのしよたいの事、おしきりは本地に付べし、川くづれはおし付次第たるべきなり、

りて陰氣のつよき田は、水を落す手立もなくて叶はぬ事なり、　凡深田の分は、かりそめにも大陽をかり用るとて、春耕するより干田になるべきは云に及ばず、始終日にあつる心得、是第一肝要の事なり、水深くして熱氣下までとをらざれば、苗さかへぬものなり、然る故に井手かゝりなど水の自由なる田は、隨分淺くして、底まで熱氣のとをる工夫をなすべし、高田うへ付てより半日にも水なくては、忽苗痛むものなり、當時痛ざる樣なれども、實りかならずあしく、されど後に刈しほ前よりは水をはづし、稻の根をさらし堅めをき、青穗少もなくなり、能熟するを待て、日和を考へて刈べし、根の土堅ければ實も堅くなる物なり、

〔成形圖說農事十二〕水留古事記

農の謐に、一用水、二種物、三介錯、この三、一も欠ては田地ならず、又五日乾は三割違ひ、十日乾は五割損と云、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一井普請之事、在所井奉行并爲庄屋無退轉樣堅可申付、若及大破其井懸者にて不叶時者、奉行中泣達、理在所中相催可申付事、○中略

慶長貳年三月廿四日　盛親在判
元親在判

〔塵芥集〕一よう水の事、せんきまかせたるべし、然にせん〳〵さだまり候せきぐちをあらため、みづかみの人、是をとほすまじきのよし、いらんにおよぶ事、可爲越度、又河下の人、せんきまかせにとをすべきのよし申、川かみの人はせんきよりとはさゞるよし申、もんだうのぎあらんに、相互に支證なきのうへ、理ひけつしがたきにいたつては、萬民をはごくむのゆゑ、彼用水をとほすべきなり、

所モ、湖差入テ岸高ク用水ニハ成シ難シ、　筑後國ノ用水堀ハ、幅ノ廣キハ拾間餘、狹キハ五六間許、長サハ一里ヨリ二里ニ至ル、村中縱横ニ幾條モ堀穿テ、他村ノ堀ニ連綴ス、其毎田ノ田頭ニ附タル分ヲ、田主ノ持分ニシテ設ケ置キ、一斗六七升許ヲ容ル、薄キ板ニテ、口ノ開キテ底ノ小サキ桶ヲ造リ、口ト底ノ兩端ニ繩二條ヲ著ケ二人水口ノ左右ヘ立分レ此桶ヲ投込デハ田地ヘ刎上テ灌漑ス、仕馴ザレバ出來難キ業也、土用前ニハ、夜子刻頃ヨリ起テ、日ノ出ル頃迄汲上ル也、潟水ニ成レバ岸ヨリ水面迄一丈餘ニモ至ル有リ、夫ヲ田一反ニ三百桶モ汲上ル事ニテ、甚ダ難行也、夫ヨリ朝飯ヲ喰テ田草ヲ取リ、午後一時許リ休ミ、又夕方迄水ヲ汲ム也、肥前ニモ斯ノ如キ場處多ク有リ、上方中國筋ハ田地際ニ井戸多クアレドモ、之ハ畑ヘ漑グ爲ニシテ、田地ノ用水ニハ非ズ、中國ノ中ニモ用水ニ乏シキ處ニテハ、堀水ヲ汲上ルニ踏車ヲ用フ、此踏車ハ人夫ヲ省キ便利ナル由ニテ、先年久留米侯ヨリ其事ニ馴タル中國浪人ヲ召抱ヘ、領主入用ヲ以テ、車ヲ數多村々ヘ交付シ、踏方ハ右ノ者廻村シテ教授致シ、田毎ニ用ヒタレドモ、例ノ桶ニテ汲上ルヨリ遙ニ劣リ、盡ク田方潟水ニ及ビ、旱損致スニ因テ百姓共擧テ踏車停止願ヒ、元ノ如ク汲上水ニ成シタリ、

〔本朝食鑑 一穀〕稻〇中略

種後經四五日、燒田之四境、細察苗之不足而補之、多以分之、或覘苗之顚倒横斜而整之、種後至八九日、田水在苗之半爲宜、淺則苗瘦、深則苗腐、過八九日、苗美葉鮮青、則田水宜淺、而水淺見底土亦惡、凡田之引水冷、則實而不秀、故種後二三日候水口之冷、而幾度可換移于水口、水之冷煖可據土地之性、故農家以田水爲先務、或至生穗時、而不察引水淺深之度、則秕多實少、或田之畔塍有蟹蚯蚓土龍之穴、則漏田水、能察穴之淺深廣狹、而可苦塞之、苦塞而後可引水、

〔農業全書 二〕水のかけ引の事、雨年は淺く旱年は深く、高田は少深く、泥田深田はむ々水を落して、苗は痛ざる程にして、苗の根に熱氣のとをる心得する事も、年によりては指引あるべし、所によ

益之爲に非ず、土地は天下の至寶たる上、人民の愁苦を憐み、仁術之至り也、此理を辨へ、川除用水等之修理に心を用ひ、大切にすべき事也、

〔隄防溝洫志〕一〕凡ソ地方普請ハ、防隄並ビニ堰洗ヒ、堰杭出土、出籠、出拵、片タ拵、沈拵、其外諸牛シ等ノ水刎、川除ニ限ラズ、溜池、井路、埋樋、圦樋、掛ケ渡井樋等ノ溝洫ヲモ心ヲ盡シテ仕立ベシ、所謂ル溝洫ハ、稲田ニ用水ヲ灌漑グ井路ナレバ、別シテ精密ニセズンバアルベカラズ、稲ハ片時モ水ニ渇スレバ即チ傷ム、假令バ五日ヤ七日ハ水ニ渇シタリト雖ドモ、葉ノ色ハ變ズルコトハナキ者ナレドモ、實入リニ至テ格別ニ差ヲ生ズ、一段ノ籾ハ三石モ其餘モ有ルベケレドモ、此ヲ摺テ見ルトキハ、五斗モ六斗モ米ノ少キコト有リ、僅カ一段田ニテ米五斗モ不足スルトキハ、一村一郷ノ上ニテハ、頗ル廣大ナル損失ナリ、況ヤ大國ノ上ニ於テヲヤ、

〔隄防溝洫志〕四〕用水諸樋、橋普請等目論見ノ事

用水ハ川々ヲ、堰上ゲテ、井路筋ヘ引入レ、其井路筋ヨリ又支堰ヲ設ケ、各村ヘ引分ル者也、之ヲ引ニ古來ヨリノ仕來リ有リ、若其仕來リニ違ヘ、末水ノ村方ヘ水ノ屆カザルコト有レバ、動モスレバ輙チ口論ニ暨ブベシ、故ニ往古ヨリノ引付ヲ守ルコト肝要也、又地高ノ場ニテ、田地ヘ用水ニ引ク可キ川之レ無キ處ハ、溜池ヲ設ケテ丘岡ヨリ滴瀝スル水ヲ蓄ヘ、（是チ根水ト云）圦樋、尺八樋、緣、樋等ヲ以テ水ヲ引キ、用水ニスル所アリ、或ハ土地ニ因テ、最モ用水ニ乏シク、僅ニ田頭ニ堀ヲ設ケ、持主ヲ定メ、釣瓶ニテ汲上ゲ、用水ニ供スル場所モアリ、或ハ田頭ニ凡幅一間、長一間半カ二間許ノ井戸ヲ堀リ、其井水ヲ用水ト爲ス所モアリ、江州ノ邊ニハ、稀ニ井戸一箇ヲ百姓何人モ持合ニシテ、田地ヘ灌漑ス、斯ノ如ク用水ニ乏シキ土地ハ、田作ハ甚ダ艱難ナルガ故ニ、大抵畑作ヲ多シトス、就中筑後國上妻郡高十五萬石ノ地、一圓ノ平地ニテ、山坂阜丘ハ勿論、草刈場處モ無ク、平田一面ニテ、畑ハ屋敷内ニ瓜茄子等ヲ作ル、雜事畑少ク有ルノミ、用水ニ引ベキ小川モ無ク、偶川有ル

水の年大きに水損有、此郡或は三ヶ二或は窪き田地、皆不納も年度々ありと云、

〔地方凡例錄九〕一堤川除用水道橋等を修補するは、國の大本にして、等閑之事に非ず、○中略國政に預り人心をゆだね、其任に堪たる者を撰び邑里に出して豫め用水、川除、道橋之普請、辨利得失を考へ、溝洫堤塘を修理せしめ、土地不減田圃の損廢もなく、用水巡流し、耕作之時を不失樣にして、上國に益し、下は民の愁苦を助る事、吏事之肝要也、周禮に洫の深廣各八尺溝半之とあり、時世萬里を隔て尺も異なるといへども、聖人の規矩深廣、凡ハ是萬世不易之定數也、洫は大井路、溝は洫より引分る小井路也、井路を井堰と云處もあり、堰と計唱る處もあり、都而用水路の事也、元來堰と云は、川を塞留メ又は大用水路より、方々へ引分る小用水之取上ゲ口、石或は土俵杭籓等を以、水を關留而分水致す爲、關留たる處を堰と云、堰は剗關也、水之通流する溝は堰にはあらず、井筋、井路、非堰抔、何にも井の字を不付しては字義には當らざれ共、都而關東に而は大概用水堀筋を堰筋と唱る里語也、上州に而は分水いたす堰上ゲ口を小田と云、近世溝洫共淺、其外修造に不盡力を疎に致す故、水上は水流れ及、水腐、水下は水致らず旱魃に劣す、又川除水刎等も費用を厭ひ、修復略儀なる故、少しの洪水にも切所、欠所等出來て水溢れ、自ちなせる災多し、堯に九年の洪水、湯に三年の旱の天災は、聖人も難免といへども、人力之及ぶべき事は、吏之勤辨と民の精力に而、水旱之災害を遁るゝ儀可有之事也、用水は耕作之第一なれば不及云、川除は洪水之防可欠事に非ず、然るに薄田瘠圃等租稅も疎と不納地所を惜み川除等之修理に貨財を費すは無益也と等閑に心得、租稅の納りと修覆の費と比べ、得失を論じ當前之利に走り、土地を捨るは有間敷事也、貨財之利益而已に心を用ゐは、商賣之業にして、政務に預る者之心に非ず、加之國主にては猶之土地の潰れなれ共、其地主若潰れたる地所のみ所持之民は、家業に放れ身代を潰し、増て居屋敷等欠崩しては、下民居所亭宅に迷ひ、寔に不仁是より甚敷はなし、古人の土地を惜み給ふは、聊利

洪水の時、度々せき切て、普請に人力を費す、又用水なき所は、野山にても堤をつき水をため、植代より此水を水門にて少宛ぬき取、田へ當る、然共川の用水と違、堤水にて植る所は、第一不足するものなれば、植付前、田へ雨をため、うるおひの時、田をこなす事吉、常の當水と違、植田の時は、水三倍も入増ものなる闕、此江下水門より常に水多取事、堅禁法仕もの也、依之用水水門より當る水の分木有、次には所々池を堀、ため水をして、其水を加へて當る所、成程百姓人力費也、江州五畿内邊にては、加様に堀をこしらへ、たまり水を離でし、又ははねつるべにて水をかへたるといへり、然共此圖實○加には不用、爰に用る所のはねつるべは、たゞ桶の小きを手を切、口に横木を入、底によこ木を入、雙方より横木を能からげ、口とそこの方に二ッくりの縄、一方に八尺或は一丈、畔高き所は二間の縄など付て、水をかへるを、はねつるべと云、

一堤地一圖無之所、又用水の手無之所は、空待田と、天水までにて植代幷夏水を入る、さやうの所に二色あり、一ッは第一沼田吉、かた田の水かわく地形は、卯月初雨をかふ、植代の時分且雨ふらざれば、植付旬より數延て殊の外出來惡し、總じて水は稻の本也、

一地方用水品々、大方右に記す、予諸國の用水を見るに、其損益甚あり、先其郡地形、山ぎはより海端まで一里二里、又は三里共有之地形、山ぎわより海端迄段々地形に向倍在る所は、用水の當り吉、或は一里二里の所、其田地眞平成所迄は、用水筋是あるといへども、水足おそく、それゆへ田へ當る用水入事遲し、初に云地形段々ひきく水足はやし、或は百石の田地へ一時に當るに、平成田地は二時三時にて當る、其上加様の所大川ありて湊へ水落るに、水足遲き所必ず川のりなき所なれば、洪水の時水上より水押込、或は水戸口より水込上り、其田地十日廿日水付有ゆへに、耕作損じ免引と成、越前に舟橋川より北を十八萬石を川北郡と云、此郡右に云損地也、嗁鹿邊より金津或は三國の邊まで平成地形ゆへ、舟橋川西に是ありて、三國の湊水足遲く水引かぬる故、洪

の巧みを盡して、旱の難をのがるべし、天水ばかりを守りて、他の手立もなちざる所には、旱稻を作るべし、此ごときの地に、しいて水稻を作る事は、其苦勞空しくするのみならず、損亡する事しげきゆへ、糞養の手入も漸々に疎かになる物なれば、肥田も後は瘠てあれすさむものなり、損徳をよく了簡して、旱稻其外畠物の類にて、利分のまされる物を作るべし、世上此あやまりを改めかねて、水がゝりのあしき田に、年々妄りに水稻を作る人のために、此旨をのべて、得失をさとすものなり、　又畠のわきにも小池を堀、井をかまへて、旱のそなへとすべし、木綿藍其外菜の類にも極熱の中は、畦の溝に折々水をそゝぎ引てうるほすべし、たとひ枯痛まずといへども、亢陽にて久しくうるほひ絶れば、必陰氣ぬけ實りよからぬ物なり、時々しばらく水をそゝぎて、引て陰氣をやしなふべし、其上糞しを多くしをきても見合せ時々水を引ざれば、糞のきくべき時分に其力及びかぬるものなり、　又高田に水をそゝぎ水田に日を當る事、是農事の肝要なり、喩ば人の血氣のごとし、一方不足すればかならず病を生ず、土地も其ごとく、燥濕の程らひよからざれば、もし日に痛まざれば必水に痛む、農事にかぎらず、よろづの事よき程らひをはかるは天道也陰陽の消長互に其根と成て、かたおちなき理りなれば、一偏にかたよりたるは天の心にあらず、いかほど糞培を盡しても、乾濕のほどらひあしければ其功空しき事なれば、農夫たる者、先水利のかけ引のそなへをよくはかり譜て、其後種蒔の品をゑらびて作るべし、穀物の多少則此に有としるべし、然れ共水は陰なり、陽氣の過たるをうるほす助けとはなるべし、少にても過すべからず、かならず災となる物也、

〔耕稼春秋四〕用水

一田は第一用水を本とす、是によつて向倍よき川より用水を建て、一二里、或は三里其水を通し、道々にて小用水を立、村々へ登りて當る用水は上也、大河を大きにせき立取入る所は、出水又は

古事類苑

政治部九十七

下編

灌漑

溝渠ヲ穿チ、池塘ヲ築キテ、田圃ニ灌漑スルコトハ、上古以來既ニ開ケタレド、德川幕府時代ニ至リテハ益〻進歩シ、新ニ其業ヲ起シヽモノ枚擧ニ遑アラズ、隨テ開溝築塘ノ方法モ亦漸ク精巧ヲ加ヘ、或ハ巨巖大石ヲ穿チ、或ハ陰渠懸樋ヲ設ケテ、溪谷ノ水ヲ引キテ丘陵ニ致シ、茫々タル曠野ヲ變ジテ、沃田良土ト爲シタルモノ幾何ナルヲ知ラズ、凡ソ灌漑ハ、農業上ニ關スル影響尤モ大ナルヲ以テ、其利害ニ關シテ紛爭ヲ起スコト少カラズ、故ニ特ニ溝渠ヲ掌ル吏員ヲ設ケテ之ヲ管理セシメ、農時ニハ水量ヲ計リテ其爭ヲ防ギタリ、

〔農業全書 一〕水利

田に水をそヽぎ引事は、川より溝洫などして、段々其田の廣き狹きにしたがひて、其井手溝の大小、或八尺、或四尺二尺、それ〳〵に應じて旱に絕ず水を引、洪水の時は又わきへ落し去べし、若川なき所は塘を築、閘をふせ、或筧にてとり、又高き所に汲上るは、桔槹又龍骨車の類にて水をとるべし、此外色々の巧み手立を盡し、晝夜となく苗の枯ざる計あるべし、稍は太陰の精、水なくては半日の間にも痛む物なれば、旱魃のあらん事をつねにおもんはかりて、霖雨の中も忘るべからず、池塘の通塞、しがらみ堰の破損など、勞心を用ひて、水を米穀のごとく思ひ、不意の旱にも水の絕ざる計をなすべし、又池川もなくひとへに雨水ばかりを守る平地の田地は、井を堀、其外用水

御評定所

百姓代
半之助印

書御覧被成候處、二ヶ村より地所借候上は、通例之文言に被思召之趣、御吟味之上、御尤至極に奉存候旨、口書差上之候、北栗林村二子村は、向後川除等村切に普請致様に申之候へ共、是又無謂義に候、依之被仰渡候は、去年雙方役人立會、不障場所相極め候上は、笹部村より、北栗林村二子村へ下書之通證文出之、川除普請致之、相障候節雙方相談之上、場所引替候樣に可致之、且北栗林村と笹部村人會野へ、十一間程川除出し致候處も、地元北栗林村に無紛上は、是又笹部村より證文差出し前々之通可致之、北栗林村三ノ宮前柳野之義、笹部村より相論候に付、北栗林村差出帳御改被成候處に、名所反別は無御座候へ共、為野役籾六斗五升宛年々相納候わけ、役人印形之書物有之、其上笹部村舊年其分に差置、今更相願候儀無念之段、御吟味之上は、御尤至極奉存候旨、是又口上書差上之候、然る上は右柳野も有來通差置、向後仕出し申儀堅く不仕、雙方共和談之上、新規之義曾て不仕候樣に被仰付奉畏候、若相背重て出入ヶ間敷儀申出候はゞ、何分之曲事にも可被仰付候、為後證連判證文差上申處、仍如件、

享保元年申七月

笹部村名主　喜四郎印
與頭　源七印
長百姓　伴助印
北栗林村名主　彌右衛門印
與頭　勘四郎印
年寄　新助印
二子村名主　勘五郎印
與頭　久之丞印
同　平兵衛印

對を以、川除出し仕候處、右入會野へ出し候分十一間程、北栗林之者取崩申候、右川除出しは、地頭入用を以仕候處に、理不盡成仕方迷惑奉存候、向後共に相對を以仕候樣奉願候旨申之、北栗林村二子村答候は、木曾川通り川除等之儀、何れ之村々にても、勝手次第致來候由、笹部村申上候得共、備に御座候、先年御同領之節も相互に存分成所　ては爲致不申候、雙方障に不成場所、役人中見分之上仕來申候、此度笹部村より相望候場所に、川除瀬違爲致候ては、二ヶ村地内眞直に川瀬突當候故、罷成間敷旨申候處、笹部村之者、地頭役人へ願出候由にて、地所見合障に不罷成場所にて普請爲致候樣に被申渡候、何れの場所にても、地所貸し候て不障所は、無御座候得共、地頭役人被申付候儀、無是非御請申、則御役人中御立會之上、雙方障不成場所貸申筈に相極め、以來之ため證文差出候樣に申候へば、高サ間數幷文言之内不得心之由、我儘成儀申懸迷惑奉存候、以來持切之地内にて、川除等仕候樣に奉願候、笹部村地内切に致候ても、如何樣にも丈夫に普請罷成申候處に、拙者共二ヶ村地所借り、後年に至川原地所爭可申巧みと奉存候、且又北栗林村三ノ宮兩柳之野義、新規之柳野と笹部村申上候得ども、百年以來有之、爲野役籾六斗五升宛、年々御地頭へ相納申候、同村地内より北栗林村と笹部村入會野之内へ、十一間程出し置候川除出し、理不盡に取崩候樣に申候へ共、右入會野も地元は北栗林村にて御座候、此所へ十一間程出張候所も、去六月滿水之節、地境杭押流候得者、笹部村地内之樣に申地所紛らは敷申候故、再三同村へ申斷候得者、取崩候儀勝手次第と申候故、取崩申候、只今さへ地境杭間原に罷成候へば、地所押領可致巧どもに仕候間、向後川除出し等村切に仕候樣に奉願候旨申之、及爭論候に付、雙方被召出、數度御吟味之上、さゝ部之者先規より致來候處にて、川除普請仕度旨申之候得共、前々定置候證據等も無之、其上地元村にて相障候へば、相談之上場所引替可申儀、殊に去年中雙方役人立會、相互に不障場所相究、二ヶ村より場所借し申筈候所に、證文文言等に相かゝはり候義、無筋候樣に被思召、右證文下

當村に水當り弱く候故、欠込不申、當村に附寄に不罷成様奉存候、普請所上之方江寄候様被仰付被下度出訴致、相手方呼出し令吟味候處、答候は、右之所江普請不仕候得ば、悉私共村方迄過半水入に罷成、手前田畑亡所に罷成候、畢竟當村右普請處之儀は、此度訴上候向村之川上にて普請嚴敷仕候故、其水當り私共此度御願申上候普請所江突當り、書面に申上候通、右之場所江普請不仕候ては、私村内一面之水に罷成、甚難儀仕候段答候、依之上之向村普請川下之水當り弱〻相成候様、普請致直し、且又川中江幷杭振込、水を防可申候、但船通用之場所に候は、船通行之邪魔に不成様、幷杭可打旨申渡、證文取之、

〔信府統記二十四〕享保元丙申年、芬地笹部村と島立與北栗林村出川村と二子村と川除場論に付取替證文、

取替證文之事

信州筑摩郡笹部村百姓訴上候は、木曾川之儀大川にて、本村は地窪成る土地に御座候付、先年より川除瀬違共に水野出羽守様御同領之節は、北栗林村二子村地内に段々致來候處、去午三月御芬地に罷成候より以來、右二ヶ村之者、有來川除等相障候付て、去未六月滿水之節、笹部村田地へ押掛、必至と難儀候に付、出羽守様御役人中へ致通達、北栗林村二子村地内借り、川除瀬違等致し申筈に、雙方役人中、場所見分之上相極候處、高サ間數等二ヶ村存分に相極、其上難致文言にて證文仕候様に、難題成儀申に付、無是非御訴申上候、惣て木曾川通川除等候儀、何れの村々に不限、欠入候場所にて、相互に致來候處、二ヶ村之者相障候ては、笹部村田畑亡所可罷成候間、前々之通二ヶ村地内川除等仕候様に奉願候、且又北栗林村地内三之宮前と申處、實生柳御座候處、近年段々茂り候に隨ひ、右場所へ突當候水不殘笹部村へ押掛り、是又難儀仕候、北栗林村の者伐拂、前々之通、川幅廣く罷成候様に仕度候、笹部村地内より北栗林村と笹部村入會野之内に、去年八月中相

加可申候、尤目通尺〆之儀も、右割合を以細りを引候積、其餘は右に准シ可申事、
但右尺〆何本何歩何厘何毛限にて、五夕六入之積、壹本當りを仕出し、總本數を懸ケ候事、
右之通、改て相違候上は、手附手代共江も不洩樣申渡、向後區々之儀無之樣可被致候、
右被仰渡之趣、銘々御代官江可申聞旨、奉承知候、以上、

午(弘化三年)五月廿一日

大熊善太郎手附
加藤幸右衞門印
外出役一同連印

〔集義外書十三經理〕一或問、數百歳後の事は、違きはかりごとにて、吾人共に知べからず、さしむたりて山家水邊ともに、安堵すべき權道あらんや、　云、一の治水の道あり、古歌に古川のへとよみたるにて心付、西國にて人に敎へてなさしめたり、いひしことを半用ひて半用ひず、されども大を助て小のこれり、まつたく用ひなば、水損もあるべからず、今山城津國河内の水損を留むべき事は易かるべし、淀の大橋のむかふ山崎邊より、あ。ら。て。こ。し。といふことをなし、すて堤をつき、あらて川は〻二三町にして、洪水のとき兩川となすべし、かつら川は淀までをとしつけず、半よりあまる水をあらて川へこさする筋も有るべし、しからば鳥羽伏見邊津國河内の水損やむべし、あらてこしの田地のつぶれ高二千石ばかりならんか、助かる地は高十五万石も有べし、十五万石より二千石をおき、ながく免にして、一二分なるべし、堤の間の田地はそのまゝ田作すべし、五七年に一度當毛の損は有べけれ共、明年はこやしなく共大に豐熟すべし、五七年に一度の損毛は、水損やみたる地よりつかはすとも少しの事なるべし、其外諸國の水損、其地形を見ばよき道有べし、是大道行はれ、天下長久の基本立、業を始、統をたれ、川々むかしのごとくふかくなるまでの補ひとはなるべきか、

〔例書六〕一川除普請處向村方にて、先規より普請致來候ては可有之候得共、右普請所有之候ては、

上、人足遣方も致し、縦ば金三萬兩之目論見高には、其村其處へ落る金高は、五萬兩も落る樣に成、誠之御救ニ而、甚村方潤に成たり、然るに廿四五年以前より、御手傳御普請目論見立、御入用御普請同樣、公儀御役人計ニ而仕立、御普請金も御金藏ゟ御取替ニ而、懸り御代官へ渡り、御金渡場出張役所ニ而、御普請役御代官手代立合追々相渡、皆出來之上、小屋場極り元小屋計建、私領役人兩三人罷越、三四日も逗留、殘金を御代官御普請役立合ニ而、村方へ相渡、御金藏ゟ御取替之分、追而御手傳方ゟ上納ニ成相濟ム、目論見金高少も不相增、御手傳方爲には至極宜けれ共、村々御救ニ成儀、以前と違ひ甚少し、

但御手傳御普請目論見方は、御普請役ニ而積り立る故、御代官方ニ而は悉く難知、諸侯方高壹萬石に、御手傳金凡三千兩程之當りニ而、御手傳高極る由也、

〔地方落穗集 普請部拾集〕私領にて國役御普請願出金割合之事

私領知行大川付にて、田畑へ欠込亡所致候地頭の力に難及普請之節、公儀へ相願、國役御普請に加り候樣仕度旨相願候へば、品に寄、御普請被仰付候也、乍併前々國役金入候例無之候ては、先づは難相濟候へ共、地頭自力に難叶、捨置候ては一村亡所に可及も難計程の儀に候はゞ、御吟味の上御普請可被仰付、左候時は、其村の有高へ相掛り、高百石に付金拾兩宛の割にて、掛り御代官へ地頭出金相納る、其餘の分は御入用國役へ入候事なり、

〔代官屆留 四〕諸國村々用惡水樋橋川除御普請御遣方相成候丸太〆之儀、壹間以上壹寸太り之割を以指加、三尺は太り不加樣可致旨、文化四卯年申達置候處、區々之仕出方も相見、不都合に候間、以來文化度申達候通、都て長三尺は太り不加積尺〆仕出方、左之通可被相心得候、

丸太尺〆仕方之儀、長壹間以下は不指加、壹間より壹丈壹尺九寸迄壹寸太り、貳間より壹丈壹尺九寸迄貳寸太り、三間より貳丈三尺九寸迄三寸太り、四間より貳丈九尺九寸迄四寸太のを

村高百石拾兩當り　五拾兩　私領出金
殘金五拾兩之壹分通　五兩　公儀御入用
同斷九分通　四拾五兩　國役割

右普請金國役割可成分共、先金藏ゟ御取替ニ而追々相渡り、追て普請皆出來勘定相濟たる上、國役割に成ル、尤私領出金之分は、御取替無之、領主地頭ゟ差出共、又は村方ゟ差出共、御金渡之度々差出す、領主地頭之願ニ而、御取替に成たる例者無之、前書之通、其村高百石拾兩は出金有之事故、大郷ニ而村高多く、普請金少き時は、其村當り之多分に成、居村之普請金高ゟ出金之方多く成、國役普請に加り、却て致迷惑事あり、就之私領ゟ國役普請願ふには、村高金高と見合、勘辨いたし願はざれば、及難儀事也、

一御入用御普請、國役割普請共、金子渡り方は、御普請取懸り注進有之時、金高貳分通相渡り、普請五分通出來之節注進申出、又六七分通相渡、九分通出來之上皆渡に成、尤少々端金等相殘し、皆出來之上ならでは渡らざる事なり、御普請役ニ付添居る御普請は、村役人請取手形に懸り、御普請役奥印致し、御金渡しの御代官役所、又は金渡場出張有之て、出張場所へ村役人手形持參受取べし、又御普請役不相懸支配限手代附添有之御普請は、村役人手形に懸り、手代奥印にて、支配役所へ持參、村役人請取事なり、

一御手傳御普請積り方、人足扶持米は無之、竹木諸色人足共、都て代永付にして積る、竹木諸色は定直段無之、其時々入札を以相定り、人足は壹人永拾七匁五分ツヽ之賃、永定直段なり、勿論御入用幷國役普請と違ひ、仕立方竹木諸色入用遣方も潤澤に目論む事也、入用金高之內、十分一者公儀御入用被下、九分通御手傳方ゟ出金也、都て諸侯方御手傳と申は、其村其場所百姓爲御救被仰付事ニ而、近頃迄は御手傳場所之內、元小屋相懸り外にも所々小屋有之、私領役人相談、諸色共買

右之通、被仰付候間、甲州御代官共江可被申渡候、

未四月　　増田太兵衛
　　　　　山田次右衛門
　　　　　大久保內藏助

甲州御代官

〔刑錢須知十〕寶暦十二午年六月十一日、松平右近將監殿、御勘定奉行同吟味役江御渡候御書付、

川除普請御入用七千兩定之事

御勘定奉行江

一在方御普請并御手當御普請、向後金高七千兩限り、國役普請も五畿內之外、十分一御入用金七千兩に限り可被取計候、尤金高之內をも可成丈ケ相減候樣勘辨可有之候、

六月

天明七未年十二月廿五日伺濟

川除普請御入用金六千兩ニ定候事

御儉約被仰出候ニ付、於御勘定所取扱候御定高申上候箇所之事、〇中略

今般相極候御定高
一金六千兩　關東四川、東海道筋四川、其外川除定式御普請御入用、

〔地方凡例錄九〕一國役普請出金割方目論見金高之內、普請願ふ村方之高百石に金拾兩之當りは、私領出金殘金之內壹分通公儀御入用被下、九分通國役割に成る、たとへば、

村高五百石　　私領普請願之村方

一普請金百兩

此譯

亥十月

（享保集成絲綸錄二十四）元文二巳年二月

一甲州只今迄、郡中割差出候村々江、向後郡中割金高百石に四兩づゝ可差出候、其餘は公儀御入用ニ而、普請被仰付候間、右百石四兩ツヽは、毎年差出候筈に候事、

一川通之村々大水之節、大破に可及所は、公儀より郡中割出金を以、御普請可被仰付候、大破に及間敷普請所は、向後村普請に勝手能樣に普請可仕候、右村普請之場所は、其村々より可出、郡中割金自今令用捨候事、

一村普請之村々之內、只今迄郡中割從來候所も有之候得共、自普請之儀候間、村中一同に普請可相勤事、

以上

二月

右之通、甲州巨摩郡、八代郡、山梨郡村々江可被相觸候、

（牧民金鑑十）元文四未年四月廿七日

一甲州川々普請之儀、唯今迄通ニ而は、郡中割村々人々難儀候間、其年々之普請入用高、郡中割ニ而差出度旨、村々願候由、依之向後は壹ヶ年普請入用高百石に金六兩迄に、郡中割に爲差出、其餘は公儀御入用普請に可申付旨、御代官より村々江申渡、爲相尋候處、村方一統に、右之通相願候由ニ付、向後右之積相極、年々郡中割出金無滯差出旨、證文取置可申候、

一去ル辰年〇元文元年極候村普請之場所は、唯今迄之通、年々無懈怠、村普請に可爲致候、

一去ル申亥兩年郡中割普請入用金御取替金に成候處、今以返納無之分、當年より三拾ヶ年賦取立、返納可有之候、

五畿內大川通國役御普請村懸り之儀ニ付書付

一五畿內大川通國役御普請は、享保六丑年迄は役高相極、高役人足差出、御扶持方五合宛被下、其餘は賃人足ニ而仕立、不ㇾ殘御入用罷成候處、享保六丑年、荻原源左衛門見分吟味之上相伺、翌寅年より御入用高之內十分一は從二公儀一出、九分は五畿內國役に割合取立申候、

一右國役割合之次第、五畿內大川八川之入用壹萬兩に及候年は、五畿內總國高江割懸、壹萬兩內之年は、川筋を分ケ、其最寄之國郡江割懸ケ候積り、其節相極候川分左之通、

城州（桂川　木津川　宇治川）　河州（淀川）　攝州（神崎川　中津川）

此六川の村懸り
高百拾四萬七千三百石餘（城州一國　和州之內拾壹郡　攝州一國　河州之內九郡）

普請入用金五千五百兩にして、高百石ニ付、金壹分銀拾貳匁餘、

河州（石川　大和川）

此二川之村懸り
高三拾六萬八千石餘（河州之內七郡　和州之內四郡　泉州一國）

普請入用金千五百兩にして、高百石ニ付、金壹分銀八匁八分餘、

右之通、川筋最寄次第郡寄ニ相極り申候、

一右八筋之川々普請入用壹萬兩に及候節は、五畿內總國役懸りに相極、但御料所村々定式之高懸り役之儀は、免除之筈に御座候、

一享保十六亥年、本多筑後守申聞候は、近來石川大和川之方は、普請入用減候故、右書面之積より懸り少ク罷成候ニ付、隣郷ニ而も淀川木津川等之六筋之川方江付候村々は、掛り多不同有ㇾ之候由、然上は壹萬兩內之年ニ而も、向後年々之割合五畿內總國役に仕、尤壹萬兩に不ㇾ及節は、御料村村定式之掛り物も取立候積被二仰付一候、

御代官陣屋ニ而元〆手代可ㇾ爲ニ相渡ㇾ事、

但御普請役仕立候御普請之儀も、御勘定帳は御代官ニ而可ㇾ仕事、

右之通此度相極候間、總而御普請之儀、右之趣に准じ、人足諸色石土取場人足、步懸竹木等遣方、前前仕癖に不ㇾ拘、諸事費無ㇾ之樣、勿論在々江も可ニ申渡ㇾ候、

子
六月

〔會計秘錄 一〕田畑破損之圍に川除普請仕候儀は、人足多少によらず御扶持方被ㇾ下候、樋橋等之入用之金銀之分は、從ニ公儀ㇾ被ㇾ下來候、但御料私領入組候て、前々より高割を以致來候分は、唯今迄之通たるべし、在鄉にても、所役難ㇾ成入用は被ㇾ下之候、

〔會計秘錄 二〕川除普請人足之事

一土取人足壹丁に貳人懸り、外壹人加へ三人積、たとへば拾丁には貳拾壹人之積申付也、

但土取人足は、百六步行積り定法也、

一土取人足壹丁に三人懸り、外一人加へ四人如ㇾ右、

一船越人足壹丁に壹人　一藤蛇籠長貳間、方法八七七、又八七八七共、

一杭打壹人に貳拾五本　一土坪壹坪

一蛇籠長貳間　竹わり巾貳寸五分 籠目五寸

濃州圖法

一杭木五本、人足壹人に積、　一蛇籠壹坪、人足拾五人に積、

一蛇籠長貳拾間　此坪　一同組坪、二尺に三一六を乘、六にて除、長を乘、組坪を得、

一長四拾六間半　巾壹間半 高四尺　此土四拾六坪五合　此人足四百拾八人半　但壹坪九人、土取四町、

〔德川禁令考 五十九 堤川除〕年號闕亥十月

之積り代銀を以可相渡候、直段之儀者、春普請者前年十月之相場、夏普請者其年正月之相場、秋普請は四月の相場、多普請者七月之相場ニ而、四季共に國限直段を以可相渡事、

一右相場之儀、御代官所國限、市町之相場、市町無之所者、米賣買有之時之相場書取之、兼而御勘定所江可差出置候、尤御普請有之所も無之處も無差別、御代官所國限、右月々朔日之相場書可差出置事、

一用水惡水堀浚等之內、幷普請之大工手傳人足等、村役あるひは組合ニ而村役仕來候分、前々之通たるべし、總而村役自普請に仕來候、不紛樣可相心得事、

但右溜井堀浚新溜池等御入用に可仕分、人足遣方外普請之通り、村役人足扶持方人足、或は可為賃人足事、

一夏秋中、堤川除圦樋井筋往還道橋等破損出來、難差延急繕ひ普請いたし候所に、村役に仕來候所は、先格之通りたるべし、其外從公儀被仰付候分者、人足賃銀扶持方定之通り可被下候、翌年春普請いたし候所々には、村役人足扶持方人足夫々可召仕事

一圦樋筧橋木等之材木、御林有之所々、幷山方ニ而材木有之所々には、可伐出持運、人足、壹人七合五夕ヅヽ可被下候、材木無之所は、直段吟味之上、御勘定所江相達可為御買上、鐵物類右同斷御勘定所江相達可為御買上候、

一古來杭木唐竹茅籠朶明俵菰等之品々、所役に差出候所は、前々之通、村役に可相心得事、

一總而人足者不申及、村役人足共、自今未明に御普請場江罷出、役人差圖之通、極晩近相詰、不働之人足出不申樣可致事、

一諸色賃銀幷扶持米渡方之儀、村々名主組頭幷御普請請負之者、手形御普請役之者、加印仕可相渡候、又者御普請役不被越、御代官ニ而普請いたし候場所は、御普請所に詰候手代加印いたし、

大井川御普請、此度被仰付候間、常々心を附、小破之所々不捨置、早速修覆申付、尤出水之時分、無油斷精出し防候樣に可仕候、此以後金貳百七拾兩餘迄之小破入用は、御料私領川通、幷右川より用水引取候井組村々江割賦ヶ可爲差出候、但宿場幷定助大助の村々は半金、其外之村々は本金割合たるべく候、人用多村役計に而難成節は、其餘は公儀より足御普請可被仰付候、小破も無之普請料不入節は勿論、村役金不及差出候、折々見分も可被遣候間、小破之所捨置、修覆懈り候におゐては、役人中可爲不念候、此旨能々可被相心得候、以上、

右は水和泉守殿被仰渡、如此候、以上、

三月

（刑錢須知七）享保十七子年

堤川除御普請に用候諸色之内、正德三巳年相改、今以村役に申付候分左之通、

一長九尺末口貳三寸迄之杭木　一直竹小唐竹　一繩莚之類

一用水溜池浚井路浚人足　一橋掛直手傳人足

右六品之分所役に差出候

一土取人足壹町貳人より三人迄　一土取人足壹町三人より四人迄

但難所又者渡船等之場所者、吟味之上、右之定より相增、在々御普請高割人足賃、人足扶持方等之儀、享保十七子年評議之上極候書付、

一村役人足、高百石ニ付五拾人宛可相勤候事、

一右村役人足之外、高百石ニ付五拾人宛者、御扶持方壹人ニ七合五夕宛可被下候事、

一堤川除用水惡水等之御普請之儀、組合に而勤來候分、幷組合無之壹ヶ村ニ而仕候御普請共、右村役人足百石ニ付五拾人、御扶持方人足五拾人之外差出候人足者、壹人ニ付米壹升七合ツヽ、

右國役相懸候國　越後　此高八拾萬八千石餘

右川々御普請、一川に而も六川に而も、金高貳千兩迄は、國役に懸り不ㇾ申、貳千兩以上は右國江懸候、

但貳千五百兩以上は、出羽國高九拾貳萬石餘を可ニ差加一候、

右國役相懸り候國々　美濃　近江

美濃 木曾川 郡上川 長良川

右國々に而　高合百七萬三千石餘

右川々御普請、一川に而も二川に而も貳千兩迄は國役に懸り不ㇾ申、貳千兩以上は國役に懸ル、但貳千兩以上ゟ四千兩迄は、美濃國江計割合、四千兩餘に及候得ば、近江を差加候事、

但四千五百兩以上は、越前國高三拾七萬四千石餘を可ニ差加一候、

以上

辰 五月

右之通、享保十六亥年迄、御料私領國役普請有ㇾ之、同十七子年、國役普請被ニ差止一之旨、被ニ仰渡一候趣、左之通、

今年西國中國邊作毛夥敷虫付候ニ付而、御料は夫食、私領江も拜借等被ニ仰付、旁以御入用多候條、御料私領共に、國役普請一兩年は御沙汰及間敷候間、堤川除修復等之儀及候程は、自分に而普請可ㇾ被ニ申付一候得ば、此以後國役金差出に不ㇾ及候、然共只今迄普請出來候入用金之內、割殘之分は、割合可ニ取立一事、

子 十一月

〔享保集成絲綸錄二十四〕享保九辰年三月

國役金割合川々定

武州　利根川　荒川　烏川　神流川

總州　小貝川　鬼怒川　江戸川

右國役相懸候國々　武藏　下總　常陸　上野

右國々に而高合貳百八拾八萬千石餘

右川々御普請、一川に而も七川に而も、金高三千兩迄は國役に懸り不申、三千兩以上に候得ば、右四ヶ國江懸候、

但三千五百兩以上は、右四ヶ國江安房上總に而高四拾八萬四千石餘之分を可差加候、

野州　稻荷川　大谷川　竹鼻川　渡良瀬川

右國役相懸候國　下野國　此高六拾六萬七千石餘

右川々御普請、一川に而も四川に而も、金高貳千兩迄は國役に懸り不申、貳千兩以上に候得ば、下野國江國役に懸り候、

但貳千五百兩以上は、陸奥國高百拾萬千石餘を可差加候、

駿州 富士川 安倍川　遠州 大井川 天龍川　信州 千曲川 犀川

右國役相懸ヶ候國々　駿河　遠江　三河　信濃　甲斐郡內領

右國々に而　高合百五拾九萬石餘

右川々御普請、一川に而も六川に而も、金高五千兩迄は國役懸ヶ不申、五千兩以上は、右五ヶ國江割懸候、

但五千五百兩以上は、伊勢伊豆に而高三拾七萬四千石可差加候、

越後 關川 信濃川 阿賀野川 保倉川 魚野川 飯野川

普請、又は田畑損亡之様子、家來幷見分之ものへも承屆、其品に應じ可相伺事、

但小給所之分は、知行之場所狹く候間、家來へ相尋候に不及、見分之もの承屆、其品に應じ可相伺事、

一貳拾萬石以上之領知之内は、其領主に而普請いたし候故、國役割合も懸ヶ不申候事、

但國つゞきにて無之、貳拾萬石以上之領分離候而有之分は、貳拾萬石以下之私領に准じ、願有之候得ば、國役普請に成候、依之右はなれ候領知江は、其領知之内普請無之候共、國役割合相懸ヶ候事、

一國役高極候事、正月ゟ十二月迄、國役に可成川々御普請濟帳出候内に而、春之國普請、又は四川之ごとく、御料私領定例割合有之分を相除、殘金高國役に可成高に及候得ば、翌年之春國役割合候事、

但秋之出水に而、普請所出來、右之內、水留等之普請に、御金請取、其年仕立候といふとも、殘普請翌春仕立、濟帳差出候得ば、右水留之分も、翌年之國役江可割合候事、

一國役懸り之事、村高百石に金貳兩餘懸り候時は、兩年に可取立事、

一國役金高壹萬兩餘に及候時は、右懸り候國々之分、御藏前入用御傳馬宿六尺給米之懸り物可差免候、其年之國役兩年に懸り候時は、右懸り物兩年可差免事、

一末に記候武州利根川ゟ、美濃國郡上川迄之内、但書に有之、何程以上は何國をも差加候と有之候得ども、右定高に少々之過は、外國を不可加、其入用高に而百石當り之出金を考、外國可差加事、

一國役割合定例之川々之外に而も、大分之御普請有之時は國役之儀可相伺事、

右者前方伺相濟候書付を以、猶又此度委く相談之上相極候事、

無差別も不殘御入用普請に成候時は、定例之割合并村高百石に付拾兩之割も不取立、總御入用高之内、拾分一引之、殘り之分國役に可割合、是は常々組合有之川々は、普請區々に而は難成川筋故、御料私領組合定例之懸り物有之故、稀々に相願候私領普請とは違候故、右之節不殘御入用普請に成、私領ゟ高役金不差出事、

一私領ゟ國役普請願有之節、入用遂吟味、村高百石拾兩之内普請は勿論、拾兩餘に而も、其地頭分限高に應じ、自力ニ可成普請は、公儀ゟ御普請無之筈に、去ル子年、諸向江相渡候御書付之趣を以相極ル、且又一村之内相給有之、入用高百石拾兩餘に而も壹人は地頭分限に而、自力に普請成、壹人は自力ニ難計候はゞ、右難叶ものに准じ、其村は國役普請に可致事、
是は輕き普請は、村役にいたし、村役に難成分は、地頭分限に應じ普請いたし、自力に難叶時は、國役普請に可成積、并相給有之村方普請所不相分候ニ付、入用其村之高割にいたし候故如斯、

一一村之内相給人有之、一人は國役普請に願、壹人は不相願候共、其村國役普請に成候時は、たとへ願無之、相給川通に知行無之候とも、村高百石拾兩之割可爲差出事、

一私領ゟ願無之場所、此方ゟ見分遣し普請いたし候節は、村高百石に拾兩之割合不申立之、國役懸り有之節、割合可申事、
但是は又其品にもより可申儀に候間、此分は其節可及相談事、

一地頭自力に可成金高分限、百石に付拾兩之積り、たとへば其村之普請入用三拾六兩入候時、地頭分限高三百石にては、國役普請に不成積に候事、
（朱書）此ヶ條分限高百石に付五兩之積、たとへば其村之普請入用拾五兩入候時、地頭分限高三百石に而は、國役普請ニ不成積り、享保十四酉年ゟ相極ル、

一高石以上國役普請願候節は、其入用分限高に而可成分は、願場所之外領分にても普請其外城

高は國役に不相加候、水損等に而臨時之普請出來、末に記し候金高ニ及候時は、國役に成候、

但用水圦樋等之普請入用は、國役相除候事、

一末に記候國役に可成國々大川之分れにても、名目有之候川は、國役に不割入、名目無之候はゞ本川に准じ、國役に可割入事、

但私領ゟ願ニ付、國役普請ニ成候時は、川之差別なく、國役に可成近邊之川々江入用差加へ可割合候、尤其年近邊之川々國役割合無之候はゞ、私領之分入用記置、何れ之年成共、其國に國役懸り有之節、差加可割合事、

一國役割合候節、御料之入用高は、拾分一公儀御入用に相立、其跡を國役に極、私領願候て普請有之候分は、村高百石ニ付拾兩宛爲差出、總入用高之內右之分引之、殘高之內拾分一は公儀御入用に相立、其殘を國役高に可相極事、

但御足高有之面々は、御足高之分は、高百石に付金五兩宛可爲差出候、是は百石拾兩之內、五兩は地頭、五兩は百姓差出候積り之事故書面之通ニ候、且又國役金村懸り之儀、組合普請有之川々年々私領ゟ割金出し候村々、又は願に而百石に付拾兩差出候村方も、其差別なく國役割合可相懸事、

一國役に可成川々之外小川之分、年々御料私領組合普請仕來り候分は、有來候通に仕、國役には不割合事、

譬ば、鬼怒川、小貝川、江戸川、利根川之四川之類普請仕立、右入用如例年、私領ゟ高割合取立候分は、其普請之外たりと云共、國役割合可除之、是は其入用御料私領無差別割合、或は村役に出し來候品有之、年々定例に候條、國役割合には除き、春普請出來以後、御普請有之候得ば、其入用私領へは不割懸候ニ付、此分國役に可致、且又大水損等有之、定例之高割無之、春普請之

此高拾九石八斗貳升（但壹反六斗宛定免三ッ五分）

右作場年々流失、去ル午年見取米貳斗九升四合上納、

總高合貳百九拾五石壹斗八升七合

此取米六拾八石四斗壹升七合九勺（正德四午年納、此代銀拾貳貫六百拾六匁餘、但五ッ內三分一直段を以皆銀納、）

右賀茂川筋兩組川方之支配ニ而有之候處、寶永七寅年ゟ、角倉平次江被仰付候、且又同所御修復料も、小堀仁右衞門支配いたし候得共、右同年ゟ平次支配に罷成、其後正德四午年ゟ角倉甚平相勤候、

〔刑錢須知七〕享和八卯年

堤川除御普請御入用米金之儀ニ付御書付

堤川除圦樋橋用水、在々御普請御入用金銀米錢、并奉行扶持共に、享保七寅年迄、御代官所御物成に而相渡、地方拂に相立候、享保八卯年より、米者地方御物成米を以相渡、地方拂に相立、金銀者御金藏より相渡候筈相極候趣、左之通、

一只今迄御代官所最寄所々御普請、又者道橋川除御普請等御入用金、御代官所御物成金之內に而相渡來候得共、去寅歲よりは右之類御入用金、御金藏より相渡候筈に候間、其趣可相心得由、被仰渡候事、

卯四月

〔勘定所條例二〕國役普請之儀、享保五子年被仰出候、國わけ川々金高割合定法左之通、

一國役懸り之儀、御料私領共之入用に而も、或は御料、或は私領計に而も、川々之入用、末々記し候定之金高に及候得ば、國役に割合候事、

但御料所之內、年々春定例に而、田畑圍ひ普請に、堤上敷腹付、或は出し等損候分繕候類、此金

右者御堤之下畑　小山村

一高三拾四石九斗七升貳合　荒砂入

内四石四斗三升六合

殘三拾石五斗三升六合　堤下畑

一高四拾石貳升九合　鞍馬口

右御堤之下畑

一高拾参石五升貳合　荒神口下ル所屋舗地

但定成すくみに上納仕

一高拾貳石六斗八升五合　徳屋町法林寺前茶屋孫橋町　屋敷地

但定成すくみに上納仕

高合貳百貳拾四石三斗五升七合

右納り米六拾七石四斗三升四合九勺

正徳四午年上納　但五歳内三分一直段ヲ以皆銀納

一高四拾四石三斗七升壹合四勺　二條口ゟ上九條殿下屋敷南境迄東側川表流作場

右作開場年々流失仕候而、二條上ル所見取場、去ル午年米五斗上納、

元祿十二卯開發
一高六石六斗四升　九條殿下屋敷南境ゟ上今出川口迄東側川表流作場

内六石壹斗　年々川成

殘五斗四升　作地畑

右之場ニ而去ル午年壹斗八升九合　上納

一反三町三反拾歩　高野川落合ゟ上賀茂境迄東側川原流作場

人成は參拾人程爲出之候由ニ候事、

一同斷知行方さほど大分之普請無之候而も、自分之人足計に而不成時は、國役御普請ニ成候付、近年は高百石ニ付百人宛之積り申付、人足分計總高江かけ候得ば、纔之儀に候故、國中之甘に罷成候付、其通申付候由之事、

一國役成候而も、又自分之高に應じ、百石ニ付百人宛出之、其外計國役ニ申付候而も、御扶持方は公儀より被下候間、公儀御爲には相替儀無之由之事、

亥八月

〔京都御役所向大概覺書三〕賀茂川御修復料高之事但正德五未年改

角倉甚平支配

一高五拾壹石壹斗五升九合　西賀茂村

内五石三斗二升七合ハ　年々荒砂入

殘四拾五石八斗貳升貳合　作地田畑

一高五拾三石九斗四升五合　上賀茂村

右者、賀茂川之端通柊野ゟ本鄕井口迄、幷大宮渡下ル所ゟ東側上賀茂下鴨境迄、

内三拾三石四斗六升三合　年々川成

殘貳拾四石四斗八升貳合　作地田畑

一高四石六斗五升五合　随念寺
南新開

右者御堤之下畑

一高拾三石八斗六升　同所

内壹石壹斗四升九合　荒分
五斗九升　御用水溝成

殘拾貳石壹斗貳升壹合　作地

賞賜

〔厳有院殿御實紀 二十二〕寛文元年七月十二日、五畿内隄防成功によて、奉行せし大番近藤助右衛門政勝、金時服羽織給ふ、日記 十八日、大番花井治左衛門定義、山城國桂川隄防修築成功せしによて、金時服羽織をたまふ、

〔厳有院殿御實紀 二十九〕寛文四年十二月十四日、飯田町遊渠の經營奉行せし小姓組土屋權十郎重吉、書院番大岡彌右衛門忠孝、成功によて金時服羽織を給ふ、

〔相馬日記 一〕享保十三年といふとし、やんごとなきおほせありて、井澤のぬし〔爲永〕三瀦をさくりながし、新田をひらかれしをり、その新田にひかんれうに、埼玉郡の中條の里より、足立郡の川口のむまやまで、十あまり六里が間に、新川をつくり、利根川の水をせき入られしが、今の三瀦川也、この時おのれ〔○高田與淸〕がとほつおや高田友淸翁、おとうとの鈴木胤秀のぬしと、ともにたかきいさをありて、舟めぐらすつかさをばうけ給はりしられし也、

〔代官觸留 四〕金貳百疋宛　栗田普之丞江〇〇〇〇陸方役見習共拾五人

濃州勢州川々定式御普請之儀、當年は平年と違ひ、御普請所々多々有之候處、仕立中骨折相勤に付被下之、

己酉〇嘉永二年四月十三日

用途

〔泰平年表 四篤六〕萬延二年〇文久元年正月十五日、大竹伊兵衛へ金二枚、時服二、右者濃州、勢州、尾州、井東海道川々御普請爲ニ御用被相越候に付被下之、

〔德川禁令考 五十九 堤川除〕元祿八亥年

美濃國堤川除普請之事

一濃州壹萬石以下私領方堤川除破損之時、手前普請難叶所は、公儀江相願、國役御普請被仰付來候、其領分は不及申、水下之分は、高百石ニ付人足百人、水下之外又は遠所方之分は、或は貳拾五

相州酒匂川といふは、名におふ荒磯にして、水勢甚强く、いかなる堤を築ても、一夜の中に押流す、其防難儀成所也、世々の老臣、智化の奉行、是に胸をくだくといへども、是を治る事不叶、萬民の愁とするは是也、井澤彌惣兵衛といふ川方御普請、功者の御勘定吟味役せし、彼井澤手際にて治らぬ此酒匂川なり、依之大岡へ鈞命ありて、酒匂川の水防の事被仰付、忠相色々工夫致されしかども成就せず、今日防の堤出來候といへども、明日をまたずして夜の間におし流す、大岡大に肺肝をなやまされけり、爰に東海道川崎の問屋場に、田中丘隅といふものあり、此者問屋馬さしの下郎匹夫たりといへども、幼少よりして文學を好み算勘に達し、儒業は徂來先生の門下に遊び、名をも丘隅と付たり、黄鳥止丘隅といふ語より附たり、此者働ある事越前守能知て、則田中を呼出、其方才覺を以て、酒匂川の水防留る法もあらば工夫仕、御普請可仕旨被仰渡ける、爰に於て田中承て、工夫して辨慶土俵といふ事を拵へ、ごろた石を俵に入て、酒匂川の內壹俵づゝ、數多堤入させ、酒匂川の邊妙蓮寺といふ日蓮宗の寺へ參詣し、鎭守鬼子母神へ立願せしめ、上人を呼て祈禱をたのみ、御普請成就の事頼み上候とて、御布施金拾五兩納めたり、爰に於て住持僧侶を大勢連出て、件の俵一俵へ法花の陀羅尼品一卷づゝ讀入て、俵を投込々々しければ、經力驗有て、一萬俵入て酒匂川水忽に止り、堤思ひのまゝに成就せり、陀羅尼一萬卷の經力にて成就せし故、法施堤とも陀羅尼堤とも名付けるとなり、扨其所に丘隅石碑を建たり、唐土禹王三年洪水を治め給ふにならひし大丈夫の男也、依之大岡大に悦び、將軍家へ申上、直參に被召出、御取立有之、御代官被仰付、五萬石の支配を預る支配勘定格にて務、大岡越前守支配たりしが、間もなく御代官格となり、御老中支配御勘定奉行觸下となり、翌年評定所にて頓死しけり、其子田中休藏とて家督仰付られ、御旗本となる、

丘隅事のちは丘隅右衛門と稱せり、今の吉藏奥御祐筆が家也、予別に略傳を記し置たり、野木瓜亭

同十四日ノ記ニ、去十日、大坂川通見分被仰付候、先年大坂川通御普請川村平大夫被仰付候、其後此度被仰付候ニヨリ、見分被遣之由、

〔窓の須佐美二〕延寶の頃にや、隨軒が知惠と云事世に稱して、人力に及ばざる事を、隨軒にても叶まじといひふらしける、○中略元祿のころ、開田水利の御用を承り、後は御直參に參り徘徊するを予○松崎堯臣も見及びし、但京大坂の水難は、この人のなせるとも云なる、隨軒常に藝ある人を賞翫して、數人はごくみ置けり、學者をも多く養ひ置、書籍も多く所持し、自身學問するにてはなけれ共、水利などの事は地理の上且歷史など、學士に講讀せしめて、委しく論じ尋て置ける、これをもつて異國の水利田圖などの事、こまかに吟味して心得居しとぞ、

〔有德院殿御實紀附錄九〕河渠の事にも、ふかく御心をもちひたまひしかば、大島近江守以興奉りて、勘定の奉行または關東郡代伊奈半左衞門忠逵をはじめ、地理の事に練たる代官等に、しばしば尋問事多かり井澤彌惣兵衞正房といへるもの、河渠浚利のことよく辨へしものなりしかば、紀藩より召れ、其事つかさどらしめたまひ、次第に登庸ありて、後には布衣の列に加へ玉ひぬ、ここに川崎の驛長田中休愚右衞門喜古といへる者あり、地理はさらなり驛馬脚夫の事にも熟し、みづから近世の得失を論じ、民間省要十六卷をあらはしけるに、成島道筑信遍たよりを得て、うちうち御覽に備へければ、御心に應じ、まづ彼がなす所を試らるべしとて、武藏國埼玉郡の河渠を治むべしと仰下され、後また相模國酒匂川の水害の時も、かれに任せられければ、辨慶土俵といへるものをこしらへ、俵の中に五郎太石をいれ、○中略一萬ほどの俵を時の間に投入れて、水をさゝへしかば、先々にも越てよく修治とゝのひ、今に至るまで萬卷堤とも陀羅尼堤ともいふは、此處の事なりとぞ、かゝりしかば御感淺からず、次第にすゝめられて、代官にまでなりのぼれり、

〔一話一言二十四〕田中丘隅酒匂川の事

御普請之儀は、右立會のもの不差違積に付、御普請向指心得候手附手代共之内、場所之廣狹により、手廻り候程人數指出、場所付切爲相仕立候樣可被致候、尤於出來形之儀は、御用序を以、御勘定方并改正懸り之もの見屆候筈に付、其段兼て相心得、改正之御趣意行屆候樣可被取計候、

右は奉行衆被仰渡候

〔地方凡例錄九〕一美濃國笠松に堤方と云地役人有り、從公儀扶持切米を取、笠松御郡代支配を請、手代之次席ニ而、勤方は御普請役同樣也、木曾川、揖斐川、長良川等之大河普請、其外用水普請等に相懸ル、然所前々堤方ニ而用ゆる間竿は、壹間六尺五寸を以間數を積る舊例也、如何成故と云事を不知、今更六尺竿に可致にあらざれば、當時も六尺五寸を壹間とする事なり、

〔嚴有院殿御實紀五〕承應二年二月十一日、關東郡代伊奈半十郎忠治は、玉川水道奉行を命せらる、

〔瀨田問答〕一川村瑞賢川々ノ水ヲ治メシ事、人皆知處ナリ、何年頃ニ候哉、

答　川村瑞賢ハ、材木ヲ賣テ渡世セシ商人ナリ、自ラ入道シテ川村瑞賢ト名付、悉才アル者ニテ、元祿十一年三月七日、新規被召出、高百五十俵被下、若年寄支配被仰付、大坂表川々御普請被仰付候、後又歸俗シテ川村平大夫ト云、

覃後按、天和二年癸亥二月、稻葉石見守、彥坂壹岐守、大岡備前守、畿內ノ河道ヲ巡察シ、勘定官三人伊奈半十郎手下ノ吏二人、幷郡下ニ住ル川村瑞賢ナル者ヲ遣シ、便宜ヲ計ラシメ、貞享四年丁卯五月迄、都合五年ニシテ川々ノ事成就セシ由、瑞賢ガ畿內治河記ニ見エタリ、又瑞賢ガ著ス所、漢家歷代治河ノ事一卷アリ、名付テ疏瀹提要ト云、又本朝六國史ノ內、水利ノ事ヲ集テ一卷トシ、名付テ本朝河功記ト云、後其功ニヨリ召出サレシト見エタリ、右二部ノ書家ニ藏ス、又奧羽海運記一卷アリ、又湯原氏日記ニ、元祿十一寅年四月十日、大坂表川通見分被仰付之、

御小性組松平備前守組　永井喜右衛門　御目付　中山半右衛門　瑞賢事　川村平大夫

元文二巳年十月、左之通相極ル、

一荒川　鬼怒川　小貝川　新利根川和田吉野川星川共　元荒川　松岡佐渡守掛

一下利根川　渡良瀬川　神谷志摩守掛

一上利根川　烏川　神奈川　河野豊前守掛

一江戸川　吉野川　綾瀬川　神尾五郎三郎掛

〔徳川禁令考二十二河川修補〕寛保二戌年十月

御勘定組頭 八木宇兵衛　同 青木次郎九郎　同 堀江荒四郎　同 斎藤又五郎　同 伴十郎右衛門

御勘定 伊藤覺左衛門　同 斎藤新八郎　同 本多角十郎　支配勘定 野田次郎右衛門　同 山口仙右衛門

右ハ先達ニ而川々手分ニ而見分候間、右手分ケ川限ニ此度も二三度も見廻り、前方破損之様子、御普請之仕方出來方等引合、且又此度川通御普請之儀は、右之者共一同ニ懸りに仕、諸勘定取〆り共可遂吟味候、

〔刑錢須知七〕關東川々支配分之儀御書付〇中略

朱書 寛政五丑年十月、松平伊豆守殿御直御渡、

佐久間甚八江

定川掛り其方壹人引請相成候處、廣大之場所ニ付、此度三場所川分東海道筋、佐橋長門守、關東筋其外甲州川々は、其所御代官手限定掛り被仰付候間、可被得其意候、

〔代官觸留三〕申渡

山本大膳

外關東御代官方

關東筋川々年限御普請所之儀、是又仕立中立會として、御普請役之者等被差遣來候處、來寅定式

御勘定奉行江○中略

一木津川、桂川、賀茂川は、京都町奉行支配たるべく候、淀川筋は、淀小橋より下山城國之内は、京都町奉行、淀川攝州河州之分は大坂町奉行、尤此堺目上下、兩所之町奉行申談、構無之樣に可申付候、中津川、神崎川、十三間川之儀も、大坂町奉行可爲支配事、

但淀小橋より上、并宇治川は、伏見奉行、大和川石川は、堺奉行支配たるべく候、

一稻葉内匠頭持分は、長齋口計に候得共、山城木津川は、淀より川上木津郷迄、宇治川は豐後橋より下の方、桂川は下鳥羽邊より此川之筋、下は枚方邊迄之間小堀仁右衛門、攝河堤奉行兩人と川支配限に、稻葉内匠頭家來立合致吟味、普請之節も、相談之上普請有之可然事、

〔刑錢須知 七〕關東川々支配分之儀御書付

一享保十七年以來、關八州、甲斐、信濃、越後、伊豆、駿河、三河、遠江拾五ヶ國御代官所、御預所并澤彌惣兵衛掛り御普請役ニ而、普請仕立候樣、享保十六亥年十二月廿六日被仰渡候、

右國々之内、町奉行支配、御代官所并伊奈半左衛門御代官所は、自分ニ而御普請仕立候積り、

御勘定奉行江被仰渡候、

一四川通御普請所之分、前々は御代官掛ニ而御座候處、享保十巳年より同十六亥年迄、四川奉行掛にて仕立、同十七子年ゟ御勘定奉行五人に引分、灑り限可申旨被仰渡候、川分左之通り、

一江戸川　古利根川　綾瀬川　　駒木根肥後守掛

一鬼怒川　小貝川　新利根川　　筧播磨守掛

一下利根川　渡良瀬川　　松波筑後守掛

一荒川 和田吉野川 元荒川 星川共　　松岡佐渡守掛

一上利根川　烏川　神奈川　　細田丹後守掛

右條々雖爲一事於違犯者 神文

正德四甲午年三月晦日 角倉甚平

松平紀伊守殿

山口安房守殿

蒔田讃岐守殿

松平萬右衛門殿

〔川筋御手覺〕享保三戊戌年七月、御奉書を以、宇治川木津川、淀川、大和川之川筋、唯今迄大坂町奉行致支配候得共、向後左之通被仰出候

宇治川淀小橋迄 木津川淀大橋迄 伏見奉行

淀川大坂川口迄 大坂町奉行

大和川新大和川石川共 堺奉行

右之通、御支配分被仰付候事、

〔四川用水難用渡方〕四川奉行

小貝川 與力より 吉川三郎右衛門

下利根川 御徒より 高田太左衛門

江戸川 御勘定より 島田平助

鬼怒川 與力より 戸倉新十郎

右四川奉行、享保十巳年三月十二日被仰付、同十六亥年迄にて、翌子年より御勘定奉行五人に川川引分け、縣限に可勤旨被仰渡、

〔享保集成絲綸錄二十四〕元文二巳年六月

此分両側堤延長貳里拾貳町餘之所、御料私領共、竹木幷御扶持方被下御普請申付候、但八幡山崎神領之分は、御入用を以被仰付候、

右山城木津川、宇治川、賀茂川、桂川、淀川筋両側、延長四拾里餘、幷大池表御料私領共、往古者所司代板倉伊賀守殿、其後板倉周防守殿支配、堤川除、御普請被仰付、其次寛永年中大猷院様〇徳川家光御上洛之節、二條於御城、五味備前守江、右大川筋大池表支配之儀、御直被仰付候旨、其後段々跡役當仁右衛門迄相續、前々よりの引付を以、御料私領共、御普請有之節者、仁右衛門方ゟ下奉行之者共、所所に附置申付候、且又洪水之節は、晝夜に不限、方々川々江元〆幷役人共大勢差遣シ、大水ニ而有之候得ば、仁右衛門儀も罷出防を申候、尤堤切樋橋流失仕候得ば、御料私領共、見分之上、下奉行附置、御普請等申付候、

〔京都御役所向大概覺書〕三起請文前書〇中略

一今度賀茂川筋堤奉行、幷同所御修復料支配可仕之旨被仰付候、諸事入念重公儀、御爲第一奉存、聊以御後闇儀仕間敷候事、

一堤川除石垣破損御普請有之節は、場所見分入念、御入用幷人足等費無之、尤末々不致難義候様可仕候、總而川筋之義、不任自分之了簡、諸事相窺可申候事、

一川表堤内藪垣荒不申、或竹木を植、或指木、其外御爲に可罷成義、伺之可申付候事、

一右御修復料請拂仕候事、地方は年々撿見仕、入念御收納不拔様に可申付候、幷町屋敷地子米代、先々之通引付を以取立、御勘定仕上ゲ可申事、

一御威光を以、奢たる儀不仕、對町人百姓非義申掛間敷候、尤堤方之儀ニ付、不依何方金銀米錢衣類諸道具等之音物、一切申請間敷候事、

附、手代召仕之者迄、何にても一切受用不仕様に、爲致誓詞、諸事急度可申付候事、

内

壹里半餘　宇治橋の下手ゟ、豊後橋之上向島村領境迄、

此分、両側堤延長三里餘之所、御料私領共毎年修理、御普請所竹木并人足御扶持方被下、申付候、大破之節は、日用御普請に被仰付候、

壹里餘　下三栖村領ゟ淀小橋迄

此分往還堤水下人足無之付、前々ゟ春修理御普請共日用人足を以被仰付候、

一宇治川大池表貳拾五町餘　向島村領境ゟ小倉橋迄

此分大和海道往還堤、毎年御扶持方普請に被仰付、大破之節は、入札を以、日用御普請被仰付候、

一賀茂川筋壹里貳拾六町餘　上鳥羽村竹田村ゟ下鳥羽村領桂川落合迄、

此分両側堤延長三里半餘之處、水下人足を以御扶持方、尤竹木被下之、御普請申付候、

一桂川筋五里餘

内

壹里六町　丹波保津川境ゟ嵯峨天龍寺前迄

此分山間に而御普請無御座候

四里程　嵯峨天龍寺前ゟ淀川落合迄

此分両側堤延長八里程之所、御料私領共毎年水下人足御扶持方、竹木被下、御普請申付候、大破之節者日用御普請被仰付候、右之内天龍寺前并納所村、品森村、横大路村往還堤筋、赤井村前は前々ゟ御料私領共、日用御普請被仰付候、

一淀川筋壹里六町餘　桂川宇治川落合之所ゟ河内攝津國境迄

支配并諸役人

〔天明集成絲綸錄三十五〕明和五子年七月

御勘定奉行江

三州矢作川通御普請所見分として、御勘定吟味方改役目下役差遣候に付、右之序、三州擧母內藤山城守領分并本多備後守知行國役御普請所江も、爲見分差遣候樣申渡候間、可被得其意候、

〔京都御役所向大概覺書三〕山城大川筋之事

木津川筋
一拾貳里餘

內

五里半餘　　笠置領ゟ鹿背山領迄

此分大破有之候得者、御入用を以御普請被仰付、仁右衞門方ゟ申付候、

六里半餘　　鹿背山領ゟ淀大橋迄

此分所々堤延長拾三里餘之所、每年見分仕、山城國役高六萬三千七百九拾石餘之人足爲賦、堤川除樋橋修理御普請、御料私領共、竹木并人足壹人五合宛御扶持方米被下之、仁右衞門方ゟ下奉行所々に附置申付候、但洪水ニ而堤切大破仕候得者、入札申付不殘御入用を以被仰付候、

宇治川筋
一貳里程

此分御牧鄉村々前々ゟ、木津川筋右同前に國役御普請被仰付候、

右木津川宇治川國役御普請、每年積帳出來之上、江戶江相窺、御下知次第仁右衞門ゟ申來候付、右國役御料私領之村々江、兩奉行所ゟ觸狀相認、仁右衞門方ニ差遣申候、仁右衞門ゟも廻狀相添、御牧鄕役人江古例ニ而相渡、段々笠置邊迄、川筋并山方村々共持廻り申候、

桂川筋
一貳里半餘

支配　小堀仁右衞門

小幡又十郎

右両人江御徒目付貳人、御小人目付四人ツヽ差添可被遣候、川々見分之節、右之者共召連候に不及候、御徒目付之者共も、方角を分候而、御普請所不絶相廻り候様可被致候、委細之儀は、神尾若狭守、堀江荒四郎、井澤彌惣兵衛可被談候、

右之通申渡候間、可被得其意候、

寶暦七丑年六月

一色周防守
細田丹波守　江

川々御普請御用被仰付候付、此節彼地江被相越候ニハ不及候、於當地右御用取扱可被申候、

一御目付御勘定吟味役両人宛、二手ニ分り致見分、早速御普請取掛り宜敷場所ハ、御代官御勘定方附置、以御入用御普請可申付候、

一右御普請第一下々御救之儀候間、早々遂見分取懸候様可被致候、

右之通可被得其意候、

六月

京極兵部　松平藤九郎　細井九助　青山三右衛門江

川々御普請所、其方共両人ツヽ二手ニ分り致見分、早速御普請取懸宜場所は、御代官御勘定方附置、御入用を以、御普請可被申付候、

一右御普請第一下々御救之儀候間、早々遂見分、取掛候様可被致候、

右之通可被得其意候、

六月

巡覽

一北割下水御普請小屋、今日取拂申候、正月十九日

（常憲院殿御實紀七）天和三年二月十八日、臨時朝會あり、小老稻葉石見守正休、攝河兩國の水路巡見命せられ、御手づから羽織下され暇玉ふ、大目付彥坂壹岐守正紹、勘定頭大岡備前守淸重並に屬吏も同じ、

（大坂町觸）天和三亥年

一川筋御見分之御衆中御登ニ付、訴訟人之事、三月廿八日

（常憲院殿御實紀七）天和三年閏五月廿五日、少老稻葉石見守正休、和攝河江のあたり、水路巡察はてゝかへり謁す、廿八日、大目付彥坂壹岐守重紹、勘定頭大岡備前守淸重、攝河のあたり水路巡察はてゝかへり謁す、勘定の徒も同じ、六月廿三日川村瑞軒義通といへるは、寬文の頃より奧羽の米運漕の事などつかふまつりしものなるが、こたび山城河內のあたり水路巡察命せられ遣はさる、日記家譜

（常憲院殿御實紀四十九）寶永元年六月廿八日、美濃郡代辻六郞左衞門守參その地の河功巡察を命せられ、いとま給ふ、

（常憲院殿御實紀五十）寶永元年七月廿二日、秋元但馬守喬知、官船に乘て猿俣隄防を巡視す、日記

廿五日、少老稻葉對馬守重富、本所堤防の巡視にまかる、日記

（有德院殿御實紀五十六）寬保二年八月廿三日、勘定の徒に命せられ、關東の國々水災の地、河渠堤防の破れ、及び田畝のさまを巡察せしめらる、日記

（寶曆集成綸錄二十二）延享四卯年十二月

御勘定奉行江　細井佐次右衞門

候處、肥後守様被成御意候は、入札取候儀、町年寄江申渡、町觸致候はゞ、所々様子呑込不申者も、入札致可申候間、所之様子存知候者共計申付可然旨被仰候間、勘七、喜兵衛、米澤町喜左衛門、橋番請負人四郎兵衛、幷先年南割下水浚請負候惣七抔江申通し、仕様帳寫させ、入札致させ可申由、被仰渡候に付、來る十三日鯨船鞘番所に而札開き可致旨、幸右衛門殿、善兵衛江被仰渡候、

一六月十三日南割下水浚御普請入札、今日開キニ付、御上役御兩所幷御下役御出、道役兩人罷出候、則入札被候處、左之通、

一金七拾七兩貳分　六間堀町家持 大塚屋惣左衛門

一　大川町 四郎兵衛

一　藤代町 惣七

一　白子屋勘七

一　菱木屋喜兵衛

右之通ニ御座候、貳番札以下者入札御返し被成候、御書上出來いたし候、○中略

寶暦二申年正月十八日

一今日伊豆守様、南割下水御見分可被遊由、北割下水浚土敷平均得而出來兼候由、昨夕御下役方御屆有之候、何故出來不申哉と、幸右衛門殿より八郎兵衛ゟ御尋被成候に付、今日御出來御見分首尾能相濟、幷北割下水道浚土得与片付敷平均可申候、尤御普請掛り御四人之下役方、日々御見廻り不殘出來之上、御屆ヶ可有之由、御下役方江幸右衛門殿被仰渡候、

一右御見分に付、名主庄左衛門、善右衛門、庄八、重兵衛、次助、新右衛門御出迎申候、

一右御見分相濟、請負人惣左衛門儀、兩御番所江御禮に遣し候、善兵衛儀は、御上役御兩所、御下役方八人御禮に相廻り申候、

延寶六年三月八日　　何町月行事　誰印
　　　　　　　　　　名主　誰印

山本茂右衛門殿
滿田三左衛門殿

右者、下水御改ニ付、不掃除之町々より、右之通一札御取ニ成、御尤、右之趣之手形、奈良屋ども差出候、

下水御改役　八丁堀　本庄
山本茂右衛門殿　小倉七左衛門殿　松本市右衛門殿
滿田三右衛門殿　同　土谷覺大夫殿　新井藤八一殿

〔埋樋水門板橋御修覆留書〕

（讃岐守殿御掛　一下水埋樋新規）　壹ヶ所

此入用金五兩貳分

是者、中之鄕出村町道下埋樋、長四間、太サ內法壹尺六寸四方、川口兩方長延ヲ拾八間、幅高サ五尺、川端打廻シ長九尺、高六尺羽口、〇中略

右五ヶ所、亥〇寬文十一年事、十月十八日、御內寄合ニ而窺相濟、同十一月二日より取付修覆申付候、繪圖五枚幷ニ請負證文寫壹通有、

〔埋樋水門御修覆書留〕寬延四未年本所東中割下水東北割下水浚御普請一件拔書　山田伊豆守樣御掛り

五月十三日

一當月七日浚之儀願出候ニ付、貳ヶ所割下水爲見分、本所方御出有之候、

六月六日

一今日御內寄合御內座に而、兩割下水浚之儀、御伺被成候處、伊豆守樣被成御意候は、內積下直には可有之候得共、入札に而も取不申候而者、吟味屆き不申樣相聞候、一通り入札取可申旨被仰

下水

二厘、五拾萬石以上百石に付銀八厘六毛六糸六忽六微、

〔享保集成絲綸錄四十二〕寛文元丑年五月

　覺〇中略

一下水道、其邊之面々月番役にいたし、切々浚候樣に可被申渡事、〇中略

　五月

〔信綱記〕一先年江戸旅籠町之下水道水違三筋在之所を、地築を惜み、二筋塞ぎ、一筋に仕度旨、其所之名主を始罷出候而、信綱公へ申上候へば、鼻を塞候へと被仰候に付、任御意塞申候、片鼻宛手を放させ、兩方の手を放たる時之息つきは如何と御尋候へば、右之者共奉感止訴訟、大雨洪水之時、水吐自由自在成事、年月を重申程感入候て、其通に仕候由、其所之者共、信綱公御遠行以後申出候由、御物語被成候御方有之候而、承書載之申也、

　御一門之御方より書記來

〔正寶錄四〕寛文六丙午年

　覺

一從當年下水奉行衆は、御付不被成候間、右樣に相心得可申候、若下水埋候所有之候はゞ、御訴訟可申上候、其節當坐之奉行被仰付、爲御掃可被成事、

　右者午正月晦日御觸

〔正寶錄六〕延寶六戊午年

　差上申手形之事

一今度下水御改ニ付、私等共町内之下水不掃除ニ有之候間、急度掃除仕、下水不滯樣可仕旨被仰付、奉畏候、自今以後、不掃除有之候はゞ、如何樣にも可被仰付候、爲後日一札差上申候、仍如件、

高五千石
一合銀六拾八匁三分　遠山左衛門尉組與力貳拾五人但壹人貳百石宛

高五千石
一合銀六拾八匁三分　右同人組同心百人但壹人五拾石宛之積

石高合貳萬石
合銀貳百七拾三匁二分　此金四兩貳分銀三匁貳分　但銀座常是包

右之通相納申處、仍如件、

當申年番町奉行　鍋島内匠頭組與力
嘉永元申年五月　谷村源左衛門
都筑十左衛門

〔青標紙〕一上水御普請金　神田玉川兩上水御普請金は、其年御普請有之候分之御組合入用總高金を、翌年春に至り、兩上水歩割を以引分取集に成候間、年々百石當り之出銀は不同に候事、

出銀割合高、武家は居屋敷本高、中下屋敷は半高、相對替屋敷は先主之引付高、先主高增に候得ば、當主之本高、萬石以上之半高并居屋敷中下屋敷上水附に無之候得ば、相對替小屋敷にても本高、都而何れ之屋敷にても、一ヶ所上水附屋敷に候得ば、本高且申立之品に寄、御評議有之、出銀高極り候儀も有之候、町方は小間二間百石、新規升願濟は半減四間百石、

水。銀。

一神田玉川兩上水年々水銀取集　水銀納方、武家は右御普請金高之通、町方は玉川之方、小間壹間に付錢拾壹文ヅヽ、神田之方は小間二間百石、新規升は半減、十萬石迄、百石に付銀二分二厘ヅッ、十萬石ゟ三十萬石迄、百石に付銀一分五厘三毛三糸、三拾萬石ゟ五拾萬石迄、百石に付銀一分

り、

くみそめし泉とゝもにいさをしのその名もつきず世々につたへむ

文化三年二月日　安藝守藤原正養誌

屋代太郎源弘賢書并題額

〔德川禁令考 十六 普請奉行〕文政十一戊子年四月十二日

水道堀浚ニ付、停水ノ趣、市中へ申渡方通知書

町奉行衆　　御普請奉行

神田上水向堀通藻刈、井所々出洲浚いたし候ニ付、明後十四日より日數二日、明ケ六時より暮六時迄致水留候、尤夜水者相掛、雨天者日送り御取有之候得者、是又日送り之積り、此段牢屋敷井水下町々年番名主共江も、其御役所より御申渡有之候樣存候、依之御達申候、以上、

四月十二日

〔雜件錄 四〕嘉永元申年五月

玉川上水御組合普請金去未年分出銀納帳

町奉行鍋島内匠頭組與力

谷村源左衛門

都筑十左衛門

水元 江戸内 共御普請金　高五千石

一合銀六拾八匁三分　鍋島内匠頭組與力貳拾五人但壹人貳百石宛

高五千石

一合銀六拾八匁三分　右同人組同心百人但壹人五拾石宛之積

十一月

〔天保集成絲綸錄八十三〕寛政三亥年十一月

大目付江

神田玉川両上水組合出金之儀、只今迄月番之御普請奉行江相納來候得共、以來組合有之分は、組合年番に而取集、御普請奉行月番江可差出候、勿論銘々出金遲滯無之樣可被致候、尤組合無之面々之出金は、是迄之通相心得可申候、

右之趣、向々江可被相達候、

十一月

〔視聽草初集二〕富山泉碑

梓弓やしまのほかもてらします御代の光りは、いたらぬくまなく、蝦夷の島人をさへ、なでやすんせらるべきよし、きこえさせ給へるにつきて、享和二とせ、箱館にはじめて政所をまうけられ、筑前守藤原安倫朝臣と正養とをして、かはるがはるにこを守らせらる、かくて政所より諸士の官舎にいたるまで、ことごとく日に造營なりて、のち井をほらんとするに、こゝは海岸にそびへたる山かげなれば、いはほおほひにして、うがつべきなく、からうじてひとつほりえつれども、あまたの官舍に用るにたらず、これぞ上下のうれひなりける、しかるに被接の官人おほきなかに、富山元十郎保高といへるが、わきてこれをうれふる事せちなりしほどに、ある日蝦夷の山あひより清水流れいづるをとめいで、ゝとみになめこゝろみしに、その性清淨にして、あぢはひもまた甘美なり、つゐに岩間をうがちて、あまたの筧してこれをひくに、政所をはじめ、もろもろの官舍にひきても猶あまりあり、いでや水は五行のひとつにして、しばらくもかくべからざるものなり、そも保高が功おほひなりといふべし、かるがゆへに此みなもとを富山泉となづくるものな

御造營ノ頃ノ事ナルベシ、享保ノ頃、御殿ヲ廢セラレシ後ハ、品川領村々ノ用水ニ賜フ、

〔憲教類典 五ノ八 上水〕元文四己未年八月三日

玉川上水請負人
玉川庄右衞門
玉川清右衞門

右之者共、上水請負罷在候處、年々相滯り、諸人及難儀、此段は畢竟不情成ゆへ之儀に候、依之閉門被仰付候由、

一玉川上水、神田上水之儀、向後町奉行之支配被仰付、旨、松波筑後守、石河土佐守被申渡候、

○按ズルニ、此兩人翌月更ニ追放ニ處セラレタリ、

〔憲教類典 五ノ八 上水〕元文四己未年八月

彌左衞門町名主　長谷川伊左衞門
大鋸町名主　茂兵衞

右兩人江、向後上水御用可相勤旨、尤町年寄三人之差圖ヲ請、玉川上水相違無之樣ニ可仕旨被仰付候、右は清左衞門庄左衞門代と相聞候由、

右之通、玉川上水、町奉行所之支配被仰付候ニ付、町年寄三人、以來上水支配可相勤旨、依之御扶持方七人分ヅヽ被下置候、右爲御禮、若年寄中相廻候樣被仰付候由、

〔德川禁令考 十六 普請奉行〕寬延二己巳年十一月

神田上水沿路費給割合方

神田上水大洗堰より、三河町一丁目河岸石垣幷木樋等、從古來公儀御入用を以て、御修復有之候得共、當七月晦日以來、玉川之通、御組合普請ニ相成候間、自今新規修復共、町方ハ小間貳間ニ付、高百石之積り割合出銀有之事ニ候、尤武家方江も、此度右之趣申渡候條、此旨可被相心得候、

七月

享保七寅年八月

千川上水之儀、中興よりかゝり候事に候故、自今相止候間、其段向々江可被申達候、來ル十月より上水取不申筈に候間、可被得其意候、

八月

享保七寅年九月

青山三田兩所上水之儀、中興かゝり候事に候故、自今相止候間、其段向々江可被申達候、來ル十月より上水取不申筈候條、可被得其意候、以上、

九月

享保七寅年九月

本所上水之儀、中興よりかゝり候儀に候、殊水も不參候故、自今は彌相止候間、可被得其意候、以上、

九月

〔武江年表 四〕享保七年壬寅十月、千川上水青山三田の上水を止らる（安永九年のころ、千川上水再度起りしが、水掛り宜しからざりしかば、天明六年にいたり止む、）

〔新編武藏風土記稿 九豐島郡〕青山上水跡　玉川上水ヲ四ツ谷大木戸邊ニテ分水シ、南流シテ青山邊ヨリ赤坂一ツ木町、龍土町、六本木町、及市兵衛町等ヲ經テ、飯倉町ニ掛リ末ハ芝新堀ニ至ル、此上水萬治三年始テ造立アリシガ、享保七年停止セラル、

〔新編武藏風土記稿 九豐島郡〕三田上水跡　玉川ノ分水ニテ、白金御殿ヘ掛リシ上水ナリ、郡中代代木村ヨリ澀谷村、荏原郡目黒村、白金村ニ至リ、再ビ本郡豐澤村ヨリ麻布邊ニ掛リシト云、今モ件ノ村々ニ上水跡ト傳ルモノ所々ニアリ、起立ノ年代ハ傳ヘザレド、元祿十一年白金御殿

一此上水道に於て魚鳥をとり、水をくび、ちりあくたをすて、物をあらふべからざる事、

一上水道の兩ヶ輪三間通、有來下草苗木一切きりとるまじき事、

一兩ヶ輪三間通の內、人馬通るまじき事、

右條々於㆓相背㆒者、曲事たるべき者也、

月日

一（朱書）千川上水道、小石川御殿懸り溜堀、巢鴨溜堀、同吐水門、同築土手、瀧川一里塚、金井久保橋際、板橋御林橋際、長崎築土手、以上八ヶ所、

一（同）神田上水道、金杉橋際、金剛寺坂下、大六天前、小日向村、服部坂下、音羽町橋際、關口村大洗關、同所曾我周防守屋敷前高田橋際下、落合村、橋際戶塚村橋際、以上十ヶ所、

定

此上水道において、魚鳥をとり、水をあび、ちりあくたを捨る輩あらば、曲事たるべき者也、

月日

〔享保集成絲綸錄二十九〕享保四亥年七月

一本所深川邊上水下水定浚扒樋修復、其外樋之戶明ケ立見廻り等之儀、只今迄は本所奉行請負之者に申付、本所筋所々にて、明キ屋敷之內拜領地申付候、其屋敷之助成を以、右之修復道橋見廻り等迄、自分入用にて相勤候、然ル所此度本所奉行相止、町人拜借屋敷も上り候に付、向後右之場所町奉行可㆓致㆒支配㆒旨被㆓仰出㆒候右修復入用之儀は只今迄之町人拜借屋、敷は上り候得共、右之屋敷致㆓借地㆒候者茂可㆓有㆒之候間、地代宿代何茂方江相納させ、其料を以修復等可㆓被㆒申付事、

〇中略

右之通可㆓被㆒得㆓其意㆒候、御勘定奉行江可㆓被㆒談候、

一百石より九千九百石迄　高百石に付六分五厘四毛
一壹萬石より九萬九千石迄　高百石に付五分二厘三毛
一拾萬石より拾九萬九千九百石迄　高百石に付四分一厘八毛
一貳拾萬石より貳拾九萬九千九百石迄　高百石に付三分三厘五毛
一三拾萬石以上　高百石に付貳分七厘四毛
右入用割合、前々より如此之割付之由、道奉行より申來候、以上、
亥六月

〔教令類纂初集五十七〕正德三癸巳年八月
本所上水小梅村
定
此水道に而水をあび、又は魚鳥をとり、ちりあくたをすて、高札のつくらひをそこなふ輩あらば、曲事たるべきもの也、
月日〇中略
玉川上水道、天龍寺、千駄ヶ谷、四ッ谷大木戸極限より赤坂溜池廻り紀伊國坂迄十一ヶ所、
定
此上水道に於て、魚鳥をとり、水をあび、ちりあくたをすて、物をあらふ輩あらば、曲事たるべきもの也、
月日
玉川上水道、代々木村より高井戸まで六ヶ所、
定

セシト世ニ傳ルハ誤ニテ、此時ノ事ナルベシ、

〔正寶錄八〕元祿六癸酉年

覺

一神田上水道水けがれ候間、水切きよめ、今七ツ時より仕掛候間、右之内之水は、穢候水ニナ候間、町人之內御用達候もの共、右之通相心得可申旨、町中不殘可被相觸候、少之由斷有間敷候、已上、

三月十八日　町年寄　三人

〔享保集成絲綸錄二十九〕元祿六酉年七月

一神田上水道、玉川上水道、兩水道とも道奉行衆御支配に被仰付候間、向後水道之儀に付、御訴訟仕候儀有之候はゞ、道奉行衆江申達、御差圖を請可申候、此旨町中不殘可被相觸候、以上、

七月

〔德川禁令考諸法度四十七〕元祿八亥年

玉川上水道普請入用高割付書付

玉川上水道

是は赤坂紀伊國坂大戶樋、溜池端石垣戶樋溜池廻り大戶樋修復、幷竹簀蓋普請入用、

金八百三拾兩餘

金七百七拾八兩餘拾四分　諸大名旗本より出ル

此銀四拾八貫四百目餘　但兩替六拾二匁二分

金五拾五兩餘壹ツ分　町方より出ル

此銀三貫四百目餘　但兩替右同斷

此割付

不レ命、汝姑待レ之、既而我納言公聞レ之、爲賦二七言近體詩一、公未三嘗就二閾親至二其地一、而詩中能盡二水道本末一、而有下于レ今猶浴二先君德一之句上、因取二其語一賜二名浴德泉一、公之貴介弟景山公子、善二八分一、爲書二其三大字一、以授二一正一、俾レ獲レ到二之題額一、○中略 文政九年、歲在二丙戌一夏五月、彰考館國史總裁藤田一正記、

〔德川禁令考十六普請奉行〕寛文六丙午年正月

上水奉行達書

神田水所 兩上水奉行

但上水御用之儀候ハヽ、兩人江可レ參事、

遠木與次右衛門
芦原十兵衛

玉川上水奉行

奥津孫助
永居喜大夫

右同斷

〔正寶錄四〕寛文六丙午年

覺

一神田上水總拂有レ之候間、明朔日明六ツ時ニ、其町々之月行事衆、杭木貳本宛かけ物共に持參いたし、水上江參り、丁場請取ニ可レ被レ參、若雨降候はゞ、次々之日に請取可レ被二申候一、少も由斷有間敷候、以上、

六月晦日　町年寄 三人

〔嚴有院殿御實紀四十〕寛文十年五月廿五日、玉川水道狹により三間ひろめ、水の兩岸堤を築き、樹木を列ね植べきむね、歩行目付藤井善右衛門、江守傳左衛門、その奉行を命せらる、成功の後は、町年寄等水道を所管すべしとなり、日記、年錄、

〔甲子夜話四十六〕林語ニ、寛文十年五月ノ記ニ、玉川ノ水道狹ニヨリ、三間堀弘メ、兩岸ニ隄ヲ築キ、樹木ヲ植ヘシメラル、徒目付兩人其事ノ奉行命ゼラレシコト見ユ、小金井ノ櫻花ヲ享保中新栽

御請仕、三分二の割にて相勤候由申候、

〔厳有院殿御實紀十一〕明暦元年七月二日、麴町より上水を二丸庭内へ引せらる、紀伊記

〔事實文編附錄十四〕浴德泉記　藤田幽谷

浴德泉者、其源出于水戶城南有田郷笠原不動坂下、有銅龍受其潺水、水自龍口吐、坂之左右、有泉四穴、匯而會於一、爲匽溝而導之、水由地中行、逶迤東北暗流、徧于城東十街之市、所在爲井、可用汲、萬口之民、朝夕資以飯食焉、昔我先君威公〇德川賴房始封水戶、水戶之爲城、南抱仙湖、北臨珂江、左濱田右常盤、其地勢西高而東下、寬永中、大修郛郭、增廣規制、遷瘞濱田之田、以開廛里、徙商賈之民在西城者以實焉、謂之田町、民無遠近、顯藏其市者日衆、紅塵四合、烟火比屋、而獨患土薄水濁、其味苦惡、不可以飲、或嘗引吉田之池水、以甘民食、而所及不廣、及義公〇德川光圀襲封、考遺訓、咨故實、大行仁政、寬文三年、始就國、命爲新井、時有下總人平賀保秀者、善天文地理之學、威公聘之、未及命職而公薨、於是使保秀專掌其工役、乃相笠原之地、有洌寒泉、其甘如醴、疏鑿以利其水道、其導之也、善因地勢、審曲直、量高折、大要傍林薄翁鬱而爲陰溝、其下故水氣常潤、旱歲不涸、或以石爲甃、或以木爲械、謹其蓋藏、通其壅塞、故不使濁流汙穢入焉、至於紺屋七軒兩街之間、跨仙湖下流之處、則特設銅匽以架之、如棟之隆、其長六丈有六尺、蓋泉水發源笠原、東過米澤、折而北、又轉而東至藤柄東北、至紺屋街、踰七軒街、又東北流至新町而止、其水道凡三千七百九十有五步、而斷流旁出則不與、用夫二萬六千人、費金僅五百五十餘兩而工役告成、蓋所謂因民之所利而利之、惠不費者也歟、其後公屢至笠原、親其泉、泉之左爲激石所、時或小隊出游、觴詠其側、人或有請伐笠原之木以開新田者、公慮其害水原、不許、百年之後、其言眞不皆驗、嗚呼仁君之澤遠矣、東市父老謹守其故迹、至今猶能言其詳、而加藤堅安者、最好事愛文雅、欲記其由來、勒石以傳久遠、享和中、嘗與衆謀、因司市之吏以請、既蒙俞允、而記事之文不獲所託、是以不果、一日請之藤田一正、曰小人磨礱貞石以待者二十餘年、願先生有記、一正曰諾哉、然斯泉無名、不可以

中に分水して日用とす、赤坂御門外玉川稻荷社は、この玉川庄右衞門勸請するところなり、

〔瀬田問答上〕一玉川上水出來タルハ、大猷公〔○徳川家光〕ノ頃ロヨリト申傳ヘ候、年月何頃ノ事ニ候哉、

答　東日記曰、承應四年ノ條下ニ、江戸ノ西ニ清冷水アリ、是武藏ノ名所ナリ、北ニ流ル水ヲ江戸ヘ引渡シテ、諸民ノ渇ヲ助サセ給フ、鈞命ニテ山ヲ崩シ岩ヲウガチ、若干ノ田畑ヲ費シ、多クノ年月ヲ經テ、今年中ニ成就シ、長流城下ニ來ルト云々、是玉川上水ナリ、如此侍レバ、大猷公ノ御代ニ起リテ、嚴有公〔○徳川家綱〕ノ御代ニ漸ク成就セシ事ト見ヘタリ、

〔嬉遊笑覽十下〕寛永江戸圖に、溜池を江戸水道のみなかみとあり、又昌平橋外御茶水の名あり、其外連雀町、龜井町、竪大工町、御水やしきの井など古跡、江戸砂子に載たり、玉川上水は古き日記に、玉川淸左衞門、庄左衞門親代六十三年以前、承應元辰年、武州羽村と申所より、玉川口を見立、御當地迄道法十三里程之所口仕、御上水に可被成段、御評定所へ御訴訟申上、牧野織部殿、八木勘十郎殿、伊奈半左衞門殿、右御三人場所御見分之上、願之通被仰付、御公儀より御金六千兩御渡被遊、翌年四月より水道堀初む、同年十一月、四谷大木戸迄堀渡申候、右入用金六千兩は、高井戸邊迄に拂仕、殘金子不足仕候段申上候處、虎の御門迄手前入用にて堀候樣被仰付、庄左衞門、淸左衞門、自分金五千兩程出し、虎御門迄堀渡申候、上水見立之通無滯出來候、爲御褒美御切米二百石分金子にて被下置、四ケ年頂戴仕候、則町御奉行樣御支配にて、兩御組より年寄同心衆壹人宛、三年宛之定役にて、水道奉行被仰付候、右二百石にては役儀勤り不申候段御訴訟仕候に付、玉川上水掛り候武家方町方共、水上修覆料銀請取可申旨、其節之町御奉行神尾備前守樣、村越長門守樣被仰渡、御割符被下候に付、御切米貳百石分差上申候、其以後渡部大隅守樣町御奉行之節、右割符之修覆料半分を以相勤申度旨、訴訟の者有之、其者に可被仰付旨に付、玉川上水堀立申候段申上候へば、御上へ御伺の事に候故難被成候、即最初御割付之高三分一減、三分二にて相勤候樣にと被仰付候故、

領本田筋ノ用水ニノミ引沃グ、コハ水ノ掛リアシキユヘトモ、又ハ本所井水多ク出來シユヘトモ云、

〔嚴有院殿御實紀五〕承應二年正月十三日、麹町芝口の市人等、八王子玉川の水を府内にひかんことをはかりて、うたへ出しをゆるされ、費用とて金七千五百兩給ふ、

〔一話一言二十四〕たば川水道

御城帳承應二年正月十三日

一八王子たば川より、江戸中へ水道取候御訴訟、當町人共二三年申上候處、今日相濟、明日御金七千五百兩被下候由、御沙汰に候、

〔嚴有院殿御實紀七〕承應三年六月廿日、この日去年命せられし玉川上水成功せしにより、其事奉はりし市人へ褒金三百兩下さる、日記、紀伊記、公儀日記、

〔嚴有院殿御實紀附錄下〕府内の水利も、おほくこの御代にはじまりしなり、承應二年正月、市人の請により、八王子玉川の水を府内に引事をゆるされ、同三年六月成功せしかば、市人に褒金下さる、

〔武江年表二〕承應二年癸巳

今年玉川の上水を都下に通じて、衆庶の用に充しめ給ふ、

玉川上水は遠く西の方甲州丹波山の幽谷に發し、同國丹波村を過て、武州多摩郡に至る、甲州一の瀬より留津浦村迄七里餘、夫より羽村まで十三里、夫より六合迄十六里計にして、羽田浦より海に會す、凡四十餘里、承應元年の春、玉川庄右衛門并清左衛門といへるもの承りて、羽村より江戸までの水道を尋へ、同十一月上水道堀割の儀を命せられければ、翌巳年初夏より仲冬に至り、羽村より四谷大木戸迄堀渡し、虎御門まで玉川の水を掛られしとぞ、其後諸方武家方市

〔新編武藏風土記稿九 豐島郡〕千川上水跡 新座郡保谷村ヨリ、玉川上水ヲ分チ、本郡巣鴨村マデ行程六里餘堀割アリテ、巣鴨庚申塚邊ヨリ本鄕湯島淺草邊ニ通セリ、是元祿九年起立アリシ所ニシテ、小石川御殿、湯島聖堂、東叡山、淺草御殿等ヘ掛リシ上水ナリ、多摩郡仙川村百姓太兵衞、德兵衞ト云モノ、台命ニ依テ此事ヲ奉ズ、故ニカノ村名ヲ以テ名トシ、文字ヲバ千川ト改メ、事ヲ奉ゼシ村民二人ノ氏ニ賜リ、且江府ニテ屋敷地ヲ賜フト、此上水、享保七年廢セラレテ最寄村々ノ用水ニ賜フ、又事跡合考ニ、千川上水ハ、常憲院殿ノ御代、板橋ノ西、練馬ノ南、石神井池ヨリ、本鄕及柳原筋ニ引レシ水流ナリシガ、文昭院殿ノ御代停止セラルト見エタリ、(石神井池ヨリ引シト云ハ誤ニテ、助水ニ用ヒシモノナラン、)然ルニ明和六年再ビ此擧ヲ起シ、安永年中落成シテ、庚申塚ヨリ駒込本鄕湯島下谷淺草邊マデ掛リシガ、便ナラザルヲ以テ、天明六年又廢セラル、今多摩郡關前新田ノ邊ヨリ、當郡關村、中村、中荒井村、下板橋宿、瀧野川村等ニ其堀殘レリ、流末ハ瀧野川村ニテ石神井川ニ入、其間近鄕用水ノ助水トナレリ、堀幅四五尺、或ハ廣キ所モ九尺ニ過ズ、

〔新編武藏風土記稿二十 葛飾郡〕古上水堀 幅二間許、一名小梅古上水又白堀上水トモ云、埼玉郡八條領瓦曾根溜井ヨリ堀通シ、同郡及足立郡數村ヲ歷テ、郡內龜有村ニ入、夫ヨリ上千葉、寶木塚、篠原、四ツ木、澀江、木ノ下、寺島、請地ヲ通シ、小梅村ニ至リ、法恩寺橋ノ東マデ堀續キタリ、當時本所ノ邊井水ナキユヘ、カク遠ク上水ヲ引シメラレシト云、事跡合考ニ、本所ノ北ノ方綾瀨川ノ水流ヲ業平橋筋ニヒキテ、本所中ニカケラレシヲ白堀上水トイヘリ、是モ常憲院殿ノ御代ニ至リテトヾメラルトアリ、綾瀨川ノ水ヲ引シト云ハ誤ナリ、彼川ヲ横ニサヘギリ引來リシユヘ、カク記セシナラン、又常憲院殿ノ御代ニ成シト云モ誤レリ、現ニ延寶八年梓行ノ江戸安見圖ニ、此上水ヲ載タリ、想ニ、是モ竪川横川ナドヽ同ク、萬治寬文ノ頃作ラシメラレシナルベシ、其後享保七年、業平橋東ヨリ南ヲ埋メラレ、横川ニ圦樋ヲ設テ、彼川ニ合流シ、今ハタヾ西葛西

官府より井頭の水道を開かせられ、初て神田に引たまふ、

〔武江年表 二〕承應二年癸巳

神田上水を開れし事は、其始慥ならず、武德編年集成に、大久保某、天正中に台命を受て、水道を考へしより、多摩川の清泉を小石川より引しめられしといへるは、則神田上水の事なるべし、沽涼が說には、江戶繁昌につき、此池水ばかりにては不足なる故、承應に至り玉川を助水にかけられしか、といへり、中古神田上水御再修のとき、藤堂家より御手傳として、松尾忠左衞門一說甚七郎ともあり、俳諧芭蕉翁の事也、堀わりの普請奉行たりしといへり、俳家奇人談には、此時傭夫となりしと云、又堰より少し上の方に龍隱庵といへる庵室ありしも、芭蕉翁此地を愛して舊址をとゞむるといへり、此事世上に傳ふるをもて按るに、翁は寛文十二年九月始て東武に下るといひ、又薙髮したるは、一年置て延寶二年なりと、されば翁が俗體にて江戶にありしは、僅に一年の餘也、此頃御普請の事行れしなるべし、

神田上水は、井の頭の池に發し、多摩郡牟禮村善福寺池、同郡麻ゝの舊跡也妙正寺池同郡多摩川の分水等の諸流、牟禮中荒井村の末に至り、合して神田上水の助水となる、今其地を落合村といふ、水流落合ふ故の名なり牟禮村より落合迄十二村を經て、高田村に至り、目白臺の下にて二ツに分れ、一流は餘水にして大洗堰より江戶川に落ち、一流は上水にして小日向を廻り、水府様御館の中を東流す、すべて牟禮村より爰に至るの間、樋なくして流るゝを白堀と號す、其水流御茶水掛樋を傳ひ、小川町を經て神田に至る、故に神田上水の名あり、又一筋は神田橋うち龍閑橋より、本銀町本町邊、南は京橋迄、東は本材木町通、兩國の邊、濱町等に至る、町數凡二百七十町程に及ぶ、

兩上水○玉川、神田、專用せざる前は、赤坂溜池の水を引、其餘所々の水溜の池水を、こゝかしこに引て、用水としたりしかば、殊に不自由なりしに、此上水の出來て、万民恣に汲んで、快樂の思ひをなす事、誠に御恩澤仰ぎても猶あまりありとやいはむ、

郷および柳原筋にいけられし水流を千川上水といふ、これ文昭公〔徳川家宣〕御代以來停止せらる、又本庄北のかた綾瀬川といふ水流を、業平橋筋に引て、また本庄中に懸られしを、白堀上水といふ、これも常憲公御代被仰付て在しが、文昭公の御代に停止せらる、その上水の川筋、今も業平橋の東北の方の橋際より、葛西領世継村のかたへ通りて、小川一流あり、これすなはちその白堀上水といふ水筋なり、いまは樋の造作なきゆへ汐などさし引これあり、よのつねの川水なり、

〔江戸名所圖會七〕溜池　赤坂御門の外より山王宮の麓を東南へ繞る、昔神田玉川の兩上水いまだ江城の御もとへ引せ給はざりし其以前は、此池水を上水に用られしとなり、〔寛永明暦等の江戸の圖に、赤坂溜池に江戸水道の水源と記してあり、〕

〔新編武藏風土記稿九豐島郡〕玉川上水　荏原郡代田村ヨリ郡中幡ケ谷村ニ入、東流シテ代代木村ニ至テ分水シ、角筈村十二所權現ノ側ヲ經テ、神田上水ノ助水トナリ、本流ハ猶東流シテ、千駄ケ谷村内藤新宿ノ間ヨリ、内藤大和守別業ニ入、四ッ谷大木戸ヨリ御府内ニ入レリ、

〔江戸砂子四〕牛込

上水　水原は猪頭池より落る、至て清潔にして、旱魃にも涸事なし、承應年中江府上水にかゝる、又玉川もかゝる、これは助水なり、

〔江戸名所圖會十一〕井頭池　神田上水の源なり、長さは西北より東南へ曲りて三百歩ばかり幅は百歩あまりあり、池中に清泉涌出する所七所ありて、旱魃にも涸る事なし、故に世に七井の池とも稱ふ、相傳ふ、慶長十一年、大神君〔徳川家康〕適こゝに至らせ給ひ、池水清冷にして味ひの甘美なるを賞揚し給ひ、御茶の水に汲せらる、又寛永六年、大將軍家〔徳川家光〕こゝに渡御なし給ひ、深く此池水を愛させられ、大城の御許に引せらるべき旨鈞命ありて、御手自池の傍なる辛夷の樹に御小柄をもて、井頭と彫付たまふ、是より後此池の名とす、〔其辛夷の木は大盛寺に收藏す〕承應年間、

豐さし入、萬民是をなげくと君聞召、民をあはれみ給ひ、神田明神山岸の水を、北東の町へながし、山王山本の流を西南の町へながし、此二水を江戸町へあまねくあたへ給ふ、此水をあぢはふるに、たゞ是薬のいづみなれや、五味百味を具足せり、色にそみてよし、身にふれてよし、飯をかしひでよし、酒茶によし、それ世間の水は必犬海に入、一切の善は必法性に歸すと云々、此水大海へいらずして、悉く人中に潜入、元來此水は明神山上の御方便にて、氏人をあはれみわき出し給ふといへども、人是をしらず、其上此流の中間に惡水有て、流をけがすにより、徒に水朽ぬ、然に今相がたき君の御めぐみにより、中間の濁水をのぞき去て、清水を萬人にあたへ給ふ、古歌にせんきうの水淸けれども、山からす流をけがすと云々、

〔甲子夜話七十一〕史記ノ河渠書ニ云、民願穿洛以溉重泉注曰、洛漆沮水也、括地志云、重泉故城、在同州蒲城縣東南四十五里、以東萬餘頃、故鹵地、誠得水、可令畝十石、於是發卒萬餘人穿渠、自徵引洛水至商顏下、岸善崩、注曰、徵在馮翊、按商顏山名也、又曰、徵是縣名也、岸洛水岸、又曰、商顏之崖岸、土性疏、故善崩毀、乃鑿井深者四十餘丈、往々爲井、井下相通行水、水頹以絕商顏東至山嶺十餘里間、井渠之生自此始、注曰、下流曰顏、

コレ今都下上水ノ權輿トスベシ、

〔事蹟合考四〕上水之事

一江城下上水は、神君御代御吟味ありて、當世御菓子師の先祖大久保藤十郎に被仰付、水脈考へ注進せしめ、江戸御城内のこらず、ならびに日本橋より金杉橋を限り、木挽町及び築地に多摩川の水をかけらるゝは、正保年中に始るなり、此節は日本橋京橋を限るなり、芝口邊木挽町にかゝるは、それより後明暦元年のころなり、又江城西北落合中野等の西北猪頭の辨天の池水を引て、小石川水戸家の本館にかゝり、水通路の北河岸を限り、兩國橋の内をひろく廻らす、これを小石川上水といふ、また常憲公綱吉〇徳川の御代のころ板橋の西方練馬の南の方石神の地の方より、本

右之通ニ而日々三艘ヅヽ定浚船差出、此内貳艘は日本橋川筋、壹艘は本材木町川筋浚方仕、尤毎年三月大汐底入之節、澪通御見分奉ㇾ願上、口口より浮泥澪通ヱ流垂込候埋等箇所御見留書上仕置浚方仕、十一月大汐底入之節、流垂土浚出來形御見分請候樣奉ㇾ願上候、且又年柄に寄、川上幷大川筋出水等に而、浮泥澪筋ヱ込入候節、又は下水吐口泥押出等之分は、臨時御見分奉ㇾ願上候而、御差圖請可ㇾ申候、日本橋川筋は、御船御用船等御通船繫場所に付、差障不ㇾ相成樣見計目當船數操替差出候樣可ㇾ仕候、此外浚方之儀、一ヶ年御請船數を以、御差圖請御辨利之浚方可ㇾ仕候、

一浚土之儀は、望之者相對取捨候樣可ㇾ仕候、

右之通、定浚御請仕、私御請負地上り候高之內、一ヶ年金百五拾兩定浚入用ヱ御下ゲ被ㇾ下置候得ば、諸掛りは省略仕、浚船手厚に可ㇾ仕候、猶右仕樣之外、相決兼候儀は、御伺之上御差圖請取計可ㇾ申候、以上、

嘉永元申年十一月

新肴場町 本材木町三丁目 利兵衛地借 請負人　三郎兵衛

旅行ニ付代　利助印

同町貳丁目喜太郎地借 證人　甚兵衛印

同町與助地借 證人　吉兵衛印

本材木町名主新助後見　新右衛門印

〔見聞集六〕江戸町水道の事

見しは昔、江戸町の跡は今大名町になり、今の江戸町は十二年以前まで大海原なりしを、當君の御成勢にて、南海をうめ陸地となし、町を立給ふ、然に町ゆたかにさかふるといへども、井の水へ

後見分之節に合町無ㇾ之、拙者組年番與力并付見分等相勤候處、御組之もの立合無ㇾ之候而は不相當に付、都度々々立合見分之樣、雙方年番與力江申渡候間可然と存候、依ㇾ之右申渡案共相添、此段及₂御相談₁也、

申十一月　遠山左衛門尉

下ケ札
御書面之趣、致₂承知₁候、拙者儀何之存寄無₂御座₁候、依ㇾ之別紙書類返却、此段及₂御挨拶₁候、

申十一月　鍋島内匠頭

日本橋川筋本材木町川筋定浚仕様書上

日本橋川筋一石橋より豐海橋迄　澪幅拾五間大汐底入水下三尺五寸

一土坪貳百四拾坪　一ヶ年定浚坪

但此船數七百貳拾艘、壹坪に付三艘積、壹艘に付三合三勺餘、

此賃銀五貫七百六拾匁

本材木町川筋江戸橋蔵屋舗角より宗印屋敷角迄　澪幅六間大汐底入水下三尺

一土坪百貳拾坪　一ヶ年定浚坪

但此船數三百六拾艘、壹坪に付三艘積、壹艘三合三勺餘、

此賃銀貳貫八百八拾匁

一通小船共外諸色小道具御用印幟挑灯共入用銀三百六拾匁

但一ヶ月銀三拾匁掛り

三口

合銀九貫匁

爲₂金百五拾両₁

海邊壹貳丁も淩掛り申候、先川淩之出立には、町々之印幟りさしもの吹流しを建、人足は日々五百人程も、上町千葉堂島中之島など、方八九町位を一日に定め、各對之半天も、引手拭等にて、其樣祭禮に殊ならず、又は羅紗赤黄など之半天も有之、餘りりつばの節は、掛りより咎も有之由、場所に新山を砂にて築、天保山と號し、町々の印を山之いたゞきに建つらね、太鼓鐘打交、五六町手前より人足之砂持運之聲きこへ、偏に江都火事場之如く、又祭禮の如く、あしく申さば、古之源平など八島之戰ひもかくあらんと存る位、實に夥敷事は申盡し難し、見物は老若男女之わかちなく、遊里之太夫天神女郎藝子、各船よそひして出る、又陸を行かよふ人は川口よりゑい〳〵と押行程也、此節川々舟ぎれにて、五月前も申込候はねば、舟を得る事尤難し、安治川堤の數町より海邊迄寸地もなく、茶屋又は料理屋建並べ申候、人足食事休之節は、みな〳〵手おどり致し、又は曲もちなど致し、御用をなぐさみに致し候體、川上には樓舟に藝子之三味太鼓の聲かまびすしくきこへ申、實に三都之内にも珍敷事哉に奉存候、乍去始め之内は面白き事におもひ、人足も小踊りして可出候得共、永き事故、末はつゞき中間敷と皆々申あへり、町之印はひとへに馬印之如く、又はまんどふの如きも御座候、北内見事は、新町之人足に御座候、私など四月十六日十七日とつゞけて見物に罷越候、見物之次第有之まゝ申上候、○中略

右は見聞之儀、荒々奉申上候、御笑種に可被成候、頓首、

四月十八日　　在坂　由利兼次郎

〔川筋定淩〕嘉永元申年十一月

新肴場三郎兵衞受負地上納金、幷日本橋材木町川筋定淩之儀御相談濟、伊勢守殿江相伺候處、此程別紙御書取寫之通被仰渡候に付、淩方仕樣被調、別紙案之通、受負人江可申渡と存候、就而は先前石問屋幷土船渡世之者共爲冥加、日本橋川筋定淩申付候初發、雙方年番與力立合見分取計、其

船込之場所故、混雑等可致間、定浚御用と相記候小幟、夜中は同様相記候挑灯相用度旨相願、且此末右船江土取揚商致候者は、仲間江加入致し、仲間に漏之者は土取揚商不致様、町々江申渡有之様致度、尤加入之儀は、何人に而も人數に無構加入爲致、手狹に無之様可致、仲間爲取締、鑑札壹枚宛受取度旨相願、尤外川浚之場所に而土取揚、又ハ定浚請負之者取上ゲ、其外御堀浚且川中に而も、外川浚受負之者有之、土取揚、夫々捨場江相運び、又は相對に而勝手之場所江差遣候儀は、其方共一向差構無之旨申之、土取揚商候者共に限り、土商株之儀相願候に付、願之通申付候間、町年寄喜多村彥右衛門方江株帳差出置、加入之度每申立增減相記候様可致、鑑札之儀も願之通渡遣、町町江も年番名主肝煎名主共を以、申渡置間、浚方麁末之儀無之様致、且御用と記候幟挑灯相用候上ハ、權威ヶ間敷儀無之様、水主共江能々可申付置候、

年番 名主
肝煎 名主

右之通、問屋共幷土取商之者共江申渡間、町々に而も心得違無之様、不洩様可申通候、

右 町役人

右之通申渡間、其旨可存、

右之通、今日肥前守様御番所に而被仰渡候、

申二月廿五日

〔視聽草九集八〕天保辛卯大坂川浚

一今度大坂總川々大浚之儀、往古より無之事之由、然ル處當三月上旬より始り、安治川之末海邊より、所々枝川幷川口邊木津中津川十三間長柄道頓ぼり長堀東西横堀末は、淀川又は御城東沼川共大浚有之、凡拾ヶ年も相掛り可申、いづれも町中掛りて、天滿組與力同心等掛り也、此節追々

之通定浚引請申付、鑑札之儀も浚遣、町々江も年番名主肝煎名主共を以申渡置候間、向後浚方等、
等閑之儀無之樣可致、

豐島町貳丁目彌兵衞店
金兵衞
同町長三郎店
吉兵衞

其方共儀、前書問屋共相願候通之仕法に而、本所竪川通壹之橋より、逆井出口迄之内、永々浚方一式引請、○中略竪川通之内、相對に而町方地面借請、會所壹ヶ所取建、且船込之場所に而、混雜可致候間、爲目印浚之節計、定浚御用と申小幟相立、右川筋御成之節は、御前日御當日共罷出、芥等取片付、夜中は定浚御用と記候挑燈をも相用度旨、相願候ニ付、願之通申付間、浚方麁末之儀無之樣致し、勿論御用と記候幟挑燈等相用候事故、浚中其外權威ヶ間敷儀不致樣、水主共江も、能々申聞置候樣可致、

土船乘土商之者共

其方共願出候は、土船乘土商ひ渡世之儀、京橋組、靈岸島町組、中橋組、數寄屋橋組、芝口組、築地組、深川組、本銀町組と都合八組之者共、明和七寅年、御普請奉行江願之上、飯田町汐留より、數寄屋橋御門際迄、御堀內深通り土浚取商ひ候に付、右爲冥加土百俵分代銀五百目宛、御普請方役所江相納、其後土取稼之者相減、納銀減少相願候處、當時は右八組之外本所組、神田組、芝金杉組、土取稼之者出來、都合拾壹組之者共、土取商致し、五年以前辰年も、日本橋川筋御入用を以、浚被仰付、船稼之者共一統通船之都合も宜候得共、其儘差置候而は、連々押埋可申、御國恩を以渡世相續仕來候爲冥加、江戸橋より大川出口迄之間、永々定浚致し、右浚方之儀は、壹ヶ年船六百艘宛差出、晴天貳百日と見積り、一日船三艘宛之積り、勿論差圖次第、右六百艘之內を以、何艘に而も差出、其外浚方麁末之儀無之樣、行事壹人宛見廻り候樣致し、右川筋御成之節は、御前日御當日は召出、芥等取片付可申、

ヲモ播除ス、拜領セシヤシキノ處ハ、栢原侯ノ邸〔織田雲州〕向フ、松前氏ノ隣卽ソノ賜地ナリ、奥行廿二間、間口二十二間ニシテ方形ナリ、今ハ小島町ト云フ商工ノ屋ノミアリ、

〔德川禁令考〔四十七諸法度〕〕文化九申年

本所竪川通幷江戸橋より大川出口迄定浚之儀申渡

板材木類炭薪諸組
問屋共

其方共渡世之品ハ、船積又ハ筏ニ而、諸國より相送候品に付、江戸川内江乘込候節、縄藤蔓等に至迄、都而川内江芥等捨不申樣、兼而召仕又は水主其外在方より參候者共江も、精々申聞置候得共、多人數之儀難行屆、殊ニ筏乘は、本所竪川通重に乘入候事故、川埋候而は渡世之差支ニ相成難儀可致處、五年以前辰年中御入用を以、浚被仰付、當時ハ、聊差支無之渡世之品、運送之都合も宜候得共、浚後其儘差置候はゞ、横川幷兩縁より泥砂等流入、芥も流寄、年數相立候に隨ひ、追々押埋り候而は、御入用を以浚被渡付候詮も無之、且は船業之者は、一統難儀可仕儀に付、此度一同申合御國恩を以、古來より渡世相續仕來候爲冥加、竪川壹之橋より、逆井出口迄之内、定浚仕度旨相願、右浚方之儀は壹箇年船、貳千艘宛、永々差出、尤晴天貳百日と見積り、一日船拾艘宛之極ニ而差圖次第日々差出、浚取候土は、深川洲崎久右衛門町立跡浚除地低之場所、其外佃島築地邊差支無之場所之者共江、相對之上取捨尤武家方幷町方近在共、土望之者共江は、差遣候積致シ、永々定浚致度旨相願、其方共問。屋。株。之儀は、古來より株。式。に而、前々相願、兩番所言上帳記有之趣、相互に堅相守、爭論等致間敷旨申之、猶又以後仲間取締之ため、問屋名目之鑑札壹枚宛、人別に請取度旨相願、浚之儀も仲間多人數申合不行屆儀有之候而は、恐入候旨申之、依而豊島町貳丁目彌兵衛店金兵衛、同町長三郎店吉兵衛兩人江爲引受、問屋共申合、浚方見廻り、麁末之儀無之樣可致旨、相願候に付、願

近年御新政ニテ、新規運上事ハ、往々免許在セラレ、萬民大ニ肩ヲ息ルコトニ成タレドモ、數十年來ノ分ニハ、其儘成顆ヒ多シ、是又一事ヲ擧テ云ハヾ、今ノ川。浚。金。抔是也、元來是ハ往歲質家ノ座潰亂セシヨリ、幾程ナク其運上金轉ジテ此川浚金トナリ、府下止コトヲ得ズシテ命ヲ奉ジ、年々萬金ニ勞輸シテ差出スコトヽ聞、寛永御上洛ノ時、府下ノ地子錢ヲ恩免在セラレ、府民一統ニ感戴抃舞シテ、其拜謝ノ爲ニ鐘町ノ時ノ鐘ヲ鑄テ獻ジタルコト、其鐘ノ銘ニ見エタリ、右ノ地子錢ニテ抃舞セシコトナレバ、今ハ過倍ノ川浚金ニテ感戴スルハ知ベキノミ、尤是府下富民ト立タル分ヨリ出ルコトニテ、貧民ニハ預ルコトナキ様ナレドモ、役割ヲ以家並ニ出レバ、小富ノ家ヲ持タル者迷惑ス、大中富モ夫故家ヲ買フコトヲ好マズシテ、家ヲ賣リ度思フ者多ク、家ノ價減ズルコト、先年トハ大違ヒナリ、

〔甲子夜話十〕天澤子曰、淺草新堀ノ内、僅計ノ間ヲ、役者大夫ノ觀世ヨリ常浚スルコトノ由、ソノ土人ヨツテ其所ヲ觀世川ト云、コレハ役者ハモト穢多ユヱニ、如此衛役ヲ勤ル格ヲ僅ニテモ殘サレタルモノナルベシ、其徒ハ樣々ヨキ方ニオモ向ケ云ヒ成スベケレドモ、ソノ法ノ本ハ、穢多ノ趣意ヲ立ラレタルニ違ハザルベシ、コレラ後ハ人モ知ラヌ樣ニナリヌベシ、以上ノ言カクモ有ベキカ、役者ハモト穢多ト云シコト、何ニ據ルナラン、又僅計ノ間ヲ觀世川ト云コトモ土人不知、因テ新堀ノコトヲ鳥越ノ名主永野又次郎ニ問ニ、今ニ觀世大夫新堀川定浚ハ引請テアリ、觀世川ト唱ルコトハ不知ト、入川浚ニ就、觀世拜領ノ町屋敷アリ、或ハ聞ク、新堀川ハ天和二年ノ頃、始テ堀タリト云、又カノ市邸ハ一年ノ地子凡百餘ヲ得ベシト、コノ市邸享和前ハ、町ノ名主預リ居テ川浚モ亦名主ノ掌リシガ、其二年ニ觀世大夫先規ニ回ランコトヲ願請シテ、復コレヲ允サル、ソノ浚處ハ門跡前ヨリ御藏前ノ橋内不殘ナリト、然レバ其始モ觀世ノ爲セシ所ナリ、又彼邊ニ居ル醫生ノ云シハ、觀世ヨリ川ヲ掃除スルコト、今ニ時々日雇ノ者一二人來リ、川畔ノ塵芥其外

〔草茅危言三〕水利之事

一大坂ノ淀河筋ハ、琵琶湖ノ流水、鴨川桂川ノ合流ヲ受ル故、至極ノ清水ニテ、又宇治ヨリ以西、聯モ山壑磐石ノ阻隘ナク、地形モ平カナレバ至極ノ緩流ニテ、甚無事ナル河ナルニ、淀城ノ西ニテ木津川南ヨリ流入テ、土砂ヲ多ク出ス故、年中淀川ニテ土砂込入ナリ、緩流故、是ヲ急ニ突流スベキ勢ナク、段々游滓イサリツキ川床次第ニ高クナリ、川筋ニ洲嶼多クナリ、通船ノ障リトナル、常平ニテ、年來官ヨリモ色々手當ヲ以テ、川浚アレドモ隨テ浚フレバ隨テ湮マリ、卒ニ痛快疎通ノ日ナシ、往歳執政西尾源公巡視ノ節、旗ヲ浪華ニ駐メサセラレシトキ、感〇中井積善ノ虚名ヲ以テ、謬テ翹車ノ招ヲ辱フシ、　夕席ヲ前メテ顧問ヲ呪ヒシ時、淀川ノ事ヲ仰出サレ、此川ハムツカシキ川ニテ、通船甚ダ滯ル由聞及ビタリ、如何ト垂問有シ故、對テ申スニ、凡天下ノ山川、其地ニ隨ヒ其性有、是ヲ治ルニ其性ニ隨ヘバ功ヲ成シ易ク、其性ニ逆ヘバ功ヲナシ難シ、是禹功ノ遺意ナルベシ、流レ緩シテ能湮ルハ淀川ノ性ナリトテ、上文ニ述シ趣ヲ陳ベ、且曰、土佐日記ニ紀氏ノ土佐ノ任ハテヽ、歸京ノ時ニ、浪華ノ川尻淺クシテ舟登リ惱ミタルコト見エタリ、紀氏ヨリ今ニ至リ凡千年ニ及ベドモ、其後歷代ノ內ニ此川尻格別深クナリシコトモ曾テ聞エズ、千年マデモ右ノ如ク淺キコトナレバ、追々湮リハテヽ、川筋今ハ外ヘ續キ、此地ハ桑田トモ成ベキニ、左モナク今ニ同ジ姿ナリ、始メテ原ネテ終リニ及セバ、此後又千年ヲ經ルトモ、猶又同ジ姿ナル可シ、故ニ官ヨリ何程力ヲ盡サセラレテモ、跡ヨリ追々來ル土砂ナレバ、所詮十分ノ疏瀹ハ出來ズ、又捨置セラレテモ、一雨每ニ其土砂ヲ川口ニ送リ出セハ、湮滅スル患ハナシ、因テ此川筋ニ、強テ賢慮ヲ煩セラルヽニ及バズ、唯目前通行舟ノ碍ル所ヲカキノケ堀アゲ、可ナリニ舟ヲ通シテヤムト云位ノコトニテ濟ムベキコト也、是大略ナリト申上シカバ、嘉納アラセラレシ樣ニ見エシ、

物價之事

石三錢の税いだすべし、つめる物なき船は、其事まうしことはり、錢いだすに及ばずとなり、また大坂ならびに傳法川を往來する船は、其船主よりすぐに税錢を出すべし、大坂に米廩あ（？）る邸は、その船の税錢はそのことうくる市人より出すべし、又定りたる米廩なく、俵物類大坂にいたる時、其地の倉かりてたくはへ置、其事さだまりてうくべき市人もなきは、其船の石錢は荷物所管の市人より出すべし、又米貯ふる倉なき國々の船は、其船あづかれる家より税いだすべし、あづかれる家なく、船宿につける船は、その船やどより出すべし、公納米つめる船は、同じく出すべし、武家の手船も荷物積時は税錢出すべし、このこと行ふべきため、三鄕の年寄の內にて各一人、廻船の年寄にて二人、その年番をさだめ、諸船出入のたび〳〵、證文をそへてとり行ふべし、こたび川口浚堅し、諸船の出入澁滯なく調ふべければ、この後はこれをもて常法となすべきにより、國船もたる者にふれしらせらるゝとなり、

〔經世秘策後篇〕第二小急務三條

第二、阿部熊川といふは、奧州會津道中勢至堂峠といふ所の南奧山より出で同白川に到り、夫より岡仙臺石卷の港に到るなり、行程凡七十餘里あり、然るに此川所々に大岩石あつて堰となり、其堰皆大瀧となりて通船ならず、故に國民皆困窮なり、〇中略阿部熊川通り所々にある大岩を焰硝仕掛の地雷火を用反割て、川船石卷港へ通行するに於ては、會津長沼白川邊所々より、石卷まで七十餘里川兩緣數里の國產、河船にて石卷へ出て、夫より江戸に達する樣にならば、農民蘇生の心地すべし、阿部熊川中第一の瀧を、三條目の瀧といふ、此瀧の外難所はなし、其外の瀧は皆小なる岩のみなれば、如何樣にもなるべし、三十年許以前に、桑折の者に、通船のことを目論見、既に江戸に到り、其向の尹に訴訟し、七八ケ年も江戸に滯留せしが、明和の大火に燒死して後、其跡を繼ぎ業を再興せん人も出來せず、

ケ所屋敷永々被下置候に付、右之場所先達而御吟味之上指上候仕様注文之通、此度浚仕、已後常浚をも仕、土砂押出し埋候はゞ、大浚可仕候、若浚方不埒ニ候はゞ、被下置候地面不殘被取上候共、其節一言之儀申上間敷候、仍而證文如件、

寛延三午年五月十九日

永代橋掛り
名主　石尾助之丞印　○以下名主六人略

寶暦四戌年九月十三日　病死ニ付消之

柳原餌鳥屋敷鹽屋
受負人　清五郎印

深川黒江町駿河屋
請負人　新兵衛印

新大橋掛り
名主　彌兵衛印
同　八郎左衛門印
同　八左衛門印

深川森下町家持
請負人　半七印

〔大坂町觸〕寶暦五亥年
十二月廿三日
一大坂兩川口あさく成候に付、諸船出入之石錢を以、水尾さらへ候儀申付候事、

〔惇信院殿御實紀二十三〕寶暦六年二月十四日、令せらるゝは、大坂木津安治兩川口、年々にふさがり、船の往來たよりよからざれば、此度諸國運船の大小により、錢を出さしめ、それもて水尾をさらへしめらる、すべて大坂にいたる船は、つめる荷物の多寡にかゝはらず、船の石數によりて、一

和泉守高敏、松下豊後守實俊は、人夫出すべしと命せらる、日記

〔文昭院殿御實紀五〕寶永七年二月廿六日、相模國河渠の浚利によて、安部攝津守信賓、堀田伊豆守正虎、諏訪安藝守忠虎助役を命せらる、日記

〔大坂町觸〕享保六丑年

一十月兩川口沖浚一兩年相止ニ付、石錢不取集之事、

享保十五戌年

一四月十五日水道浚之事○中略

一五月安治川口水尾浚候ニ付、石錢之義、幷町々出銀之事、

〔甲陽隨筆二〕富士川通船之事

一富士川通船の事は百年餘も以前に、奥州阿武隈川と云所の高瀨の船頭甲州に來り富士川の船乘始、是より駿河へ通路宜相成よし、○中略又右川道に天神が瀧、鼠石、小豆石、本谷銚子の口、駱が瀧と云舟路難所にて、毎度船乘損乘人幷荷物等多く損失在之處、西川内領鉄富村の古屋彌次右衛門と云者、自分物入に而、右難所の石を切平川筋不難にして、近年は破舟も少く、流死も無之末、右之難石少々有之を彌次右衛門と唱候よし、

〔三橋川々定浚受負人幷永代橋掛名主代替書面〕去巳八月、神田川出水に付、江戸川神田川筋土砂押出し埋り候に付、柳橋入口より牛込御門下迄三拾四町、舟河原橋より關口大洗堰迄拾五町、都合四拾九町之場所川浚之儀、柳橋より牛込御門下迄は、永代橋掛、舟河原橋より大洗堰迄江戸川筋は、新大橋掛之者共相願、橋渡錢永々被仰付、外引當助成地永代橋掛り候者、只今迄常浚屋敷之内、相生町三丁目、芝口壹丁目西側、貳ヶ所に而千三百坪、相生町四丁目三百坪之屋敷都合三ヶ所、大橋掛之者、大橋渡錢幷且北東廣小路千四百坪町屋に被仰付、相生町四丁目に而貳百坪、都合貳

可₌申付₋候事、

一以₌御威光₋奢たる儀不ㇾ仕、物毎正路に沙汰可ㇾ仕候、勿論非儀申掛間敷候事、

右條々雖ㇾ爲₌一事₋、於ㇾ致₌違背₋者、神文

元祿十一年戊寅六月十五日　金丸又左衛門

小野宇之助

松平紀伊守殿

水野備前守殿

安藤駿河守殿

永井采女殿

土屋甚助殿

〔常憲院殿御實紀四十九〕寶永元年四月朔日、松平左兵衛〃直常、九鬼大和守隆方、岡部美濃守長泰、大和川浚利の助役を仰付らる、六月廿八日、植村右衛門佐家敬、織田山城守信休は、大和川浚治の助役命せらる、

〔常憲院殿御實紀五十〕寶永元年十月廿一日、松平土佐守豐房、佐竹源次郎義格、松平隼人正近朝、相良志摩守頼福、利根荒川の浚利に人夫出すべしと命せらる、日記

〔新編相模國風土記稿四十二大住郡〕玉川　寶永四年十一月、富士山燔燒シ、其焦土此邊ノ江河ヲ埋ミシヲ以テ、五年四月、松平伊豫守、六年七月、松平豐後守宗俊、七年二月、藤堂和泉守此時宗俊病其事ニ預リシナリ等命ヲ奉テ郡中ノ川十二條相模川ハ其數ニアラズノ泥土ヲ浚ヒ、堤防ヲ修理ス

〔文昭院殿御實紀三〕寶永六年七月廿一日駿相の河渠浚利の事仰出さる、勘定奉行中山出雲守時春、萩原近江守重秀、目付河野勘右衛門通重、代官伊奈半左衛門忠順以下の輩、その事を奉る、藤堂

銀をあてらる、これこの輩參覲就封の船路たるがゆへなり、日記

〔大坂町觸〕延寶六午年正月十一日
一町々水道浚之事

〔敎令類纂初集七十五〕元祿九丙子年三月
一今度永代島上總澪通定浚之義、龜井町新五兵衛、小傳馬町甚兵衛、此兩人請負申候、就夫江戸總町中芥之義、只今迄取らせ候直段、壹町ニ付壹ヶ月銀壹匁ヅヽ引ごみ取候而、其捨芥にて新田取立可申由申候、依之右兩人之者町々へ廻可申候間、相對仕ごみ爲取可申事、
一芥取候船は、借不申由相聞候、向後は相對次第無異義船賃可申事、
一町々にて船致所持族捨候分は、只今迄之通可仕候、是又可致相對候、ごみ捨候場所之義は、右兩人之者に承、差圖請捨可申候、猥ニ捨申間敷事、
右之通可相觸候者也、
三月

〔京都御役所向大概覺書三〕起請文前書
一今度江州勢田川浚見分被仰付候、彌重公儀御爲第一奉存、聊以御後闇儀仕間敷候、惣而御一門方諸大名、幷諸傍輩と奉對御爲、以惡心申合、一味同心仕間敷候、若御隱密之儀承候共、他言仕間敷候、右御用ニ付被仰渡候趣、急度相守、相役と申談、心之及程、諸事入念無油斷相勤可申事、
一川浚之儀、場所致見分念を入相改可申候、縱親子兄弟縁者知音之好、又は中惡敷輩たりといふとも、無依怙贔屓、不殘心底存寄之通、萬御入用積り等吟味可仕候、且又此御用ニ付、地頭方幷百姓諸賣人々、金銀米錢衣類諸道具、何ニ而茂禮物一切受用仕間敷事、
附先條之趣、手代等ニも堅相守候樣ニ、誓詞申付、召仕のもの共迄、諸事違背不仕候樣ニ、急度

安南國へ通船し、同十年また仰をうけ、丹波國桑田村より深津嵯峨大井川まで山間三里があいだ、川中に大石多ありて、往古より通船なりがたきを切ひらき、翌る午年八月より高瀬舟通行す、

〔東照宮御實紀附錄二十一〕又十二年、〇慶長光好〇吉田了以仰を承り、駿河の富士河を堀ひろげ、高瀬船を通じ、同國岩淵より甲州に運漕し、國民をして便利を得せしむ、同年又信濃國諏訪より遠江の掛塚までを浚治して、天龍川の通船をして便よからしむ

〔一話一言二十三〕角倉了以

慶長十二年また命により、富士川へ高瀬船を入れ、駿州岩淵甲府まで通船し、十三年また仰により、信州諏訪遠州掛塚まで通船なす、よりて書を給ふ、

權現樣

自信州至遠州懸塚舟路見立候付而、船役之儀被仰付候也、

慶長十二年六月廿日 御朱印　　角倉了意

台德院樣

從信州至遠州懸塚依舟路見立、船役如口被仰付、不可有相違者也、

御朱印 慶長十二年七月十一日　　角倉了意

〔玉露叢十八〕一寬文七年三月上旬ニ、大坂ノ川筋ノゴミヲサラヘケル處ニ、天滿橋ノ中ポトヨリ少シ下ニシテ、黃金十七枚ト、金ノナガシ拾ト、金ノ薄板二枚堀出ス

〔嚴有院殿御實紀三十八〕寬文九年二月十三日、西國中國四國邊一万石以上の輩に、淀川浚利のう

浚渫

〔羅山文集碑銘四十三〕吉田了以碑銘

古云、舟楫之利、以濟不通、嘗聞其語矣、今有其人也、了以豈其人歟、了以姓源氏、其先佐々木支族、號吉田者、宇多帝之後也云爾、世住江州、五代祖德春來城州嵯峨、因家焉、其所居乃角藏地也、洛四隅各有官倉、在西曰角藏、語在沙門石夢窻天龍寺記中、德春子宗林、宗林子宗忠、皆潤屋也、而仕室町將家宗忠子宗桂、中略〇娶中村氏、以天文二十三年甲寅某月某日生了以、諱光好、小字與七、後改名了以、性嗜工役、嘗雖志筮仕、而未肯事信長秀吉矣、及于前大相國源君〇德川家康之治世也、而初出奉拜謁焉、慶長九年甲辰、了以往作州和計河、見艜船、以爲凡百川皆可以通船、乃歸嵯峨泝大井川、至丹波保津、見其路、自謂、雖多湍石、而可行舟、翌年乙巳、〇十年遣其子玄之于東武以請之、台命謂自古所未通舟、今欲開通、是二州之幸也、宜早爲之、丙午〇十一年春三月、了以初浚大井河、其所有大石、以轆轤索牽之、石在水中、則構浮樓、以鐵棒鋭頭長三尺、周三尺柄長二丈許、繫縄使數十餘人扛挽而徑投下之、石悉碎散、石出水面、則烈火燒碎焉、河廣而淺者、帖石而狹其河、深其水、又所有瀑者、鑿其上、與下流準平之、逮秋八月役功成、先是編筏纔流而已、於是自丹波世喜邑到嵯峨、舟初通、五穀、鹽、鐵、材石等多載、濟民得其利、

〔東照宮御實紀附錄二十一〕河渠運輸の事にも御心を用ひられしと見えて、その頃京に住せし角倉了以光好、その子與市郎玄德は家代々豪富にして、水利に熟せしよし聞し召およばれ、慶長十年春の頃、光好に命じて、丹波の世木庄殿田村より保津をへて大井河に至るまでの水路、岩石おほくして通船なり難ければ、光好父子に命じて新に水路を堀通さしめ、八月に至て成功し、近境大にその利を得たり、

〔一話一言二十五〕角倉了以

一角倉與七光好は、宇多源氏の末流、吉田意庵法印宗桂が惣領なれども、水理を好み醫師を好まず、弟に家をゆづり、のち了以とあらたむ、年月しれず、東照宮にまみえ奉り、慶長八年上意をうけ

二年必奏其成效、爾後就浚川之功、〇中略

一防隄浚川所用雜費銀、其數固難預量、而笇度億計不無過不及之差、然今料其槩略、條列于左、

初年

一銀壹貫貳百錢、　水畔或山邊度便宜設草舍二三所、而限年之間、當以宿止于其處、而此爲其建設之費、

一同六貫錢　草苞五萬枚價

一同三貫八百錢　泥柱及欄竹栗稗價

一同七貫七百錢　每日雇夫三千人價

一同九百錢　一年間諸雜費

第二年

一銀拾八貫四百錢　同前、但除設草舍費、兩年費總銀三拾八貫錢、此係至隄砂功完日諸雜費積數、

〇中略

一右所條別五年間雜費總銀三百八十八貫錢者、見其防隄浚治功成利見之後、臣欲與大阪三鄕及沿水諸村民相議、令其各應分限年出銀以償其所費、然如未其成功之前、彼其或懷疑不服、是以臣願請先借公庫以使其費用、如或無有所妨、則上命大阪三鄕及沿水諸村民分賦出其費可也、願賜我斷、如以得永除隄沙之弊、以得浚治之功、則鴻大恩惠之所及、而萬民被其慶者、其豈可限量乎、臣今年五十六歲、欲無能而以歿、倘或蒙採納、則所謂死且不朽、豈敢不勵力乎、且臣此書所言、或有負冒欺上之弊乎、願處以極刑、又凡所條列費用銀、亦當分稟官上、願分日給賜、臣當詳載以上其簿籍、而其使用出費之時、並請賜吏臺檢、臣不勝惶懼屛營之至、

山城紀伊郡東九條村處士山梨稻佐

松前伊豆守殿

〔川筋御手覺〕文政十二己丑年より始

一大和川流末水行土砂防御手當御貸附銀之儀、右利銀之內壹ヶ年凡銀拾貳貫目之御見込を以、年々土砂浚被仰付、則去巳年御貸附高、

一銀百七拾三貫五百貳拾目四分二厘九毛

〔淇園文集十二雜書〕擬浚澱水上疏

夫攝大阪、其地據海陸運輸之便宜、居萬貨轉易之樞區、寔爲關西第一大都會、而諸國米穀並皆視於此地價之高下、則諸國民俗之盛衰、固當與大阪之盛衰相因關焉、然而大阪利便之所專要、其最在澱水、而澱水一帶、歲益爲土砂壅淤、海船載米者、近來不能入於海門、其勢不得不入兵庫、至如水涸之時、其水本道及東西港、無船路可通、雖輸載小舟、往々或致數日之濡滯、此或致大阪衰微之漸、不可不慮、今縣官時時命浚除其土砂、然其壅淤之害、原自上流、而晝夜無息、則其事亦唯不過是爲一朝一夕之防者也已、○中略

一臣嘗竊觀水道所由、諸村患水者甚多、而私心欲待時上言防砂浚川之便宜者有年矣、是以凡諸山溪澗之流、委其尾於木津水澱水者、臣嘗深留心焉、乃率皆或親討、或審叩、以具識之、凡其砂土隤陁之山、或夏秋雨頹、或冬春凍坼、其山膚不復能含潤、是以又不能生草木、乃致其陁墮滋廣而砂漲益多、此爲二水致壅淤之原、如未知用嚴防於此者、雖浚之於其末、必鮮有其益矣、防之之術、莫如用米苞草席若莎土柴欄以障遏之、令其土因得含雨露之潤澤、而時撒之以粟稗、及得鳥雀來啄之、則其糞溷自能滋養其粟稗使發生、又或得雜生小木、可以永絕隤陁之患矣、

一防沙隤之術、所宜施用者、其地非一、而功涉數州、其事勢廣大、似非易措置者、然誠令臣得撰擇良勳之夫數人、以備手足之用、如家僕奴、而日夜與之俱巡視於其地方、而其事之如於家園之山者、則庶幾

河内　澁川、八上、若江、錦部郡　岡部美濃守　河内　交野、讃良、茨田郡　永井伊豆守
攝津　住吉郡
山城　乙訓郡　永井文九郎　大和　高市、忍海、葛上郡　植村右衛門佐
攝津　島上島下郡　河内　高安、河内郡　片桐石見守
河内　古市、志紀郡　渡邊備中守　河内　丹南、丹北郡　高木主水正

右攝河兩國者、大坂町奉行所ニ而致吟味候、

一元祿二巳年四月、於江戸御列座前田安藝守、小田切土佐守江被仰渡候ニ付、御料私領川筋山々木草之根掘取候儀、堅御停止ニ候、川上左右山方ニ木苗植付可申候、取分ケ攝河兩國之内、場所多ク有之候、木苗はえ付不申所は、芝根竹葭何ニ而も植付候様に被仰付候、尤大坂町與力相廻シ可申候、右兩國之土砂留役人大坂奉行所江諸事相窺候、（所司内藤大和守殿時分）

山城大和近江三ケ國之給所砂留役人者、京都奉行所江相窺候、

一元祿八亥年四月、御老中ゟ御奉書を以、松前伊豆守江被仰下候ニ付、同六月御代官中江相觸、私領方江者家來呼寄申渡候事、

（右御奉書之寫）
攝津河内兩國川筋土砂留之儀、從前々被仰付候得共、攝河之内討ニ而防候而は留兼候旨、加藤大和守、松下玄蕃頭申候間、五畿内川上土砂留見分可被申付候、委細大坂町奉行と被相談、宜様ニ可被申付候、以上、

四月十八日　土　相模守
戸　山城守
阿　豐後守
大　加賀守

高合拾一萬二千八百五十一石八升六合

内

四萬八千八百十一石七斗四升四合　郡山領

一（河内）大縣郡　高四千四百三石四斗一升五合九夕七才

一安宿部郡　高二千三百十六石二斗一升七合

高合六千七百十九石六斗一升二合九夕七才

高都合拾壹萬石九千五百七十石一升八合九夕七才

〔京都御役所向大概覺書 三〕五畿内川筋土砂留之事

一（所司板倉内膳正殿時分）山川淀之儀、從先年雖被仰出、猶又爲見分、寛文九酉年、永井右衛門、岡部主税、藤掛監物被遣之、彌堅被仰付候、

一（所司戸田越前守殿時分）右之通被仰付、其後改之奉行無之故、疎略ニ相聞候間、急度申觸候樣にと、延寶四辰年、御老中より申來候ニ付、山城近江丹波御料私領江、前田安藝守ゟ申觸之候、

一（所司稻葉丹後守殿時分）淀川大和川江落合候川筋山々土砂留、貞享元子年、又候被仰出、井上志摩守方ニ而吟味之上、銘銘御代官幷私領方見分、向寄繪圖書付相認差上候樣に、私領方には御老中ゟ被仰渡、御代官中には於京都相觸候、右川筋近國之大名拾壹人江被仰付候、

一（貞享元子六月）砂留給所方江被仰付候川筋向寄

山城　相樂郡
大和　添上、式上、山邊、十市、廣瀬、式下郡
藤堂和泉守

大和　添下、平群、葛下郡
河内　大縣、安宿部郡
本多信濃守

山城　綴喜、紀伊、久世、宇治郡
近江　栗太郡
松平丹波守

近江　栗太、滋賀郡
河内　石川郡
本多下總守

留洗沙

〔堤防溝洫志 一〕凡ソ用水ヲ堰上グル川ハ其川筋ノ水上ヲ精ク探リテ、水源ハ河ニモセヨ沼ニモセヨ、其近邊ノ森林ハ嚴シク木ヲ伐ルコトヲ禁ズベシ、若シ其水上ノ繁茂タル林木ヲ伐リ拂フトキハ、必ズ夏ニ至リテ水枯テ不足スル者ナリ、總テ樹木森々トシテ蓊鬱タル山ハ、自然ニ水氣ノ蒸騰ル勢ヒアリテ、雲ヲ興シ夕立チヲ催ス者ナリ、右樣ノ森林ヲ伐拂フトキハ、地氣變ジテ乾燥シ、必ズ雨ノ降ルコト少シ、凡ソ雲興ル樹木ノ蕭蔚山ニハ往々神靈坐テ雨ヲ降ラス者ナルヲ以テ、夏ハ此ヲ祭ル、是ヲ雩祭ト名ク、○中略又川上ナル山ノ森林ヲ伐リ拂フトキハ、山崩レテ土砂ヲ押シ出シ、川床漸々高ク成リテ、大雨ノ降ル毎ニ河水必ズ溢溢テ、田畑ヲ害スル者ナリ、此等ノコトハ迂遠ナル說ノ如シト雖ドモ、地方役人ノ心得居ベキ事ナリ、

〔堤堰秘書〕砂留之法

仕方色々有ㇾ之、古堤石堤簓堤に如ㇾ此仕る事も有、山砂之押出より、五間三間之間に致候而は、用立べからず、二十間も三十間も引上ゲに堤を築くべし、先初には、低く川表一倍、川裏二倍程可ㇾ築、年月を經て、逹々腹村笠置をすべし、上水は爲ㇾ越候而、砂利は堤の内に留り候やうに可ㇾ心得ㇾ也、

〔武家嚴制錄 三十五〕一大和河內砂留見分書立

大和河內砂留見分、日向守請取之場所、

一添下郡和州　一平群郡同國　一葛下郡同國　一大縣郡河內　一安宿部郡同國　以上

大和河內砂留見分場所

一添下郡內和州高三萬九千九百五十一石三斗四升一合二萬三千六百五十三石一斗九升は郡山領

一平群郡內高二萬九千七百九十七石二合七千百四石一斗九升は郡山領

一葛下郡內高四萬三千百二石七斗七升三合一萬八千五十四石三斗六升四合は郡山領

八月

藤堂和泉守　松平日向守　石川主殿頭　本多隱岐守　永井日向守　植村右衞門佐
永井伊賀守　渡邊半次郎　高木大學　片洞主膳正　岡部內膳正

〔甲斐國志二十山川〕一笛吹川○中略寬保三亥年、貳拾壹村ノ里正連名ニテ、御代官齋藤新八郎ニ出セル訴狀案ヲ撿スルニ、天正十一未年大水アリ、差出ノ堤決シテ、貳拾壹村ノ田畠今、高壹萬石餘盡ク流亡シ、水奔テ府中ニ及バントス、是ニ因テ一ノ出シ堤ヨリ瀰股マデ、高壹丈八尺、基拾八間ノ堤ヲ築キ、許多ノ田地ヲ廢シテ御林トナシ、厚ク衞護ヲ命ゼラレシヲ以テ、正保元申年ノ水患ヲ免レタリ、延寶二寅年、同四辰年、元祿二巳年、共ニ洪水ニ由テ一ノ出シ堤決ス、正德三巳年二ノ出シ堤決スト雖ドモ、林木漸ク長ジタルガ故ニ、甚シキ禍ニ至ラズ、享保九辰年御料所ニナリシ以來、時々御用木ヲ命ゼラル、コトヲ歎訴セル趣ナリ、爾シテヨリ今ニ至ル、斧斤ヲ入レズ、竹樹密茂ス、是ヲ萬力御林ト云、永世ノ防護ト謂ベシ、

〔五人組帳〕一村々入會、幷百姓立林ニ大木等生茂リ、村內幷近村之用水潤澤いたし候處、右大材等伐出後用水不足いたし、致ニ難儀一候趣粗相聞、山林生茂リ有レ之バ、自然ニ用水潤澤いたし、川々江土砂石押出さず、水旱之憂無レ之趣、自今以後、右體之於ニ山林一、材木伐出し候ハヾ、村役人共用水潤澤差支有無糺之上訴出、差圖請伐取可レ申事、○中略

天保十二辛丑年三月　　御領知方御役所

〔太平年表四篇七〕文久元年八月十五日、尾張殿家老より差出候書付寫、今般美濃國御料所、安藤對馬守殿領知之內村替被ニ仰出候ニ付、御島地可ニ相成一村々御吟味之處、鳳聞有レ之候、然ル處同國土岐郡之義者、尾州地續にて、土岐川と唱候川筋、尾州庄內川へ流出、春日郡瀬戸村におゐて數百年燒立來候陶器燒物之義由緒有レ之候に付、土岐郡より燒出し候陶器者、右藏物附屬之一手之諸を以、三郡を始諸國爲ニ積送一、工商永續筋取計候規定有レ之、其上右川筋連々砂高相成、出水有レ之節者、耕地へ溢、又者國堤切御國害不少候ニ付、尾州地水深山にて者、年來右砂留普請取計、樹木不ニ伐取一樣留山申付、苗木植方山育生育、郡中御料所は御島地へ御構之義、被ニ相除一候樣被レ致度、被レ存候、此段厚御評議被ニ成下一候樣可ニ申上一旨、

〔嚴有院殿御實紀三十九〕寛文九年十月廿九日、京邊堤坊の竹林を、淀川過書支配角倉與一玄起にあづけらる、この後官用の外伐取しむべからずと命せらる、日記

〔享保集成絲綸錄二十四〕貞享元子年三月

覺

一山城、大和、攝津、河內、近江、御料私領之山々木草之根、連々依堀取、風雨之時分、川筋江土砂流出、水行滯候之間、自今以後、木草之根堀取儀可爲停止事、

一川筋左右之山方木立無之、所々土砂流出候之間、從當春木苗芝之根を植立、川江土砂不流落樣に可仕事、

一前々々の川筋山畑河原等に有之新田畑は不及申、縱古田畑にて高之內たりといふとも、川筋へ砂流出所は荒之、其跡江木苗竹木葭萱芝等可植立、勿論川端川中へ新規に築出儀、一切仕まじき事、

附山中燒畑切畑新規に仕間敷事

右條々、御料私領ともに、堅相守之段、當春年々木苗芝の根を植立、川筋へ土砂不流落樣に可仕、其筋々江奉行被差遣、若違背之輩於有之は、詮議之上、急度曲事に可申付者也、

貞享元年三月

〔教令類纂初集八十八〕貞享元甲子年八月

覺

淀川、大和川江落合候川上之山々、開畑山畑停止、向後林に被仰付候、領內又は其近邊御料私領ともに、手より次第一ヶ年二三度宛、家來差遣無油斷林仕立候樣に可被申付候、山割幷奉公人申付樣等は、御勘定頭中江可被相伺候、以上、

島村地内より畑村地内迄、林播磨守、千二百間餘、畑村地内より見川村地内海面迄、黒田甲斐守、右御用掛御老中水野越前守、町奉行鳥居甲斐守、御勘定奉行梶野土佐守、御目付戸田寛十郎、御勘定吟味役篠田藤四郎等出、閏九月十日、酒井左衛門尉黒田甲斐守へ、印旛沼御普請、其方共持場格別出精ニ付、追々掘取候趣相聞、一段之事候、此段可ニ申聞ー旨、御沙汰に候、閏九月廿三日に至、思召有之、印旛沼御普請役御手傳御免、公儀御入用御普請被ニ仰出ー候間、出金高井家来引拂等之儀は、梶野土佐守へ可ニ承合ー旨仰ニ渡之ー、[illegible]十九年夏に至、御手傳之五家并ニ家士之輩へ時服を被レ下、卯年八月十一日、印旛沼御普請場繪圖、御手傳之名前板行に致、市中賣歩行候者有レ之、御咎板木取上に成ル、

〔利根川圖志 二〕堀割　關宿の邊は、卑溼にして水患多し、故に嘉永の初、領主より命じて、城東なる桐ヶ作、木間ヶ瀨、舟形、木崎等の村々六里の間に、水道を作り、水堀より利根川に落し、永く水患無からしむ、民甚これに頼る、

〔教令類纂 初集八十八〕寛文六丙午年二月二日

山林掟之覺

近來は山々草木之根迄堀取候故、風雨之時分川筋江土砂流出、水行滯候間、自今以後、草木之根堀取候儀、可レ爲ニ停止ー事、

一川上左右之山方木立無レ之所々は、當春より木苗を植付、土砂不ニ流落ー樣可レ仕事、

一前々より之川筋河原等に新規之田畑起候儀、或竹木葭葦を仕立、新規之築出致、迫ニ川筋ー申間敷事、

但山中燒畑新規ニ仕間敷事

右條々堅可ニ相守ー之、來年御撿使被レ遣、掟之趣違背無レ之哉、可レ爲ニ見分ー之旨、御代官中に可ニ相觸ーもの也

午二月二日

久　大和守
稻　美濃守
阿　豐後守
酒　雅樂頭

一右百文錢之一件も、若御採用に難相成候はゞ、此上之再考は、農商豪富之内、此度印幡之役に志望ある者を撰挙して、可被仰付候儀に可有之候得ども、是は孔子曰、己所不欲勿施人之意を以推恕し給へば、公儀御藏金を猥りに御用に無之儀も、亦農商之私財を惜み候情も、其理一ッなれば、右之者共少も損失に不相成候之様、最初より其願筋各々好所に應じ御聞届無之候而者、是亦御不德にも相成、一切行れ難き道理と奉存候、〇中略今や國家豪富之者乏き時にも非ざるに、若微臣を挙て此役に與らしめ給ふとも、去ル亥年二十万金の上金仕候後は、私初役人共に至る迄、家財も乏敷相成、貯金等甚手薄之折柄に候得ば、迚も一己に而可相勤餘力は素より無之、然れども重而是非一計を可廻との御沙汰に被及候はゞ、伏而願くは、當時之御金改職は、兒子弘三郎江被命、別に微臣を起して、元祖庄三郎光次以來之御由緒を思召被為下、御目見以上相應之格式に登用拔擢を蒙り、御場所仕法之儀は、万端御差圖を請、此役之總頭取職として、下吏を總屬指揮之任被命下候はゞ、金主共之儀は、微臣御恩光を身に荷ひ、先實家兄弟共を初、其外御府内遠國豪富之もの共相撰、乍恐私悉く御證人に相立、金主共江は、聊御不實に不相成候樣、最初より各々願之筋は御聞屆被遣候積を以、夫々遂内談、御用途御金高凡拾五萬兩程相備、乍不及忠誠を抽んで、此御大業を諧成仕度存念に御座候、〇中略

右二ヶ條奉建白候内に而、乍恐御處置御座候はゞ、聊一點之御心障無之、全民事を勤めらるゝの御仁德御意表に溢れ、屋漏にも愧させられず候間、縱令此御事業万一成就不仕候共、天地鬼神之咎も御座有間敷候得ば、世之謗議何ぞ傷むに不足儀と奉存候、〇中略

卯五月　　後藤三右衛門

〔續泰平年表 十一〕天保十四年六月十日、利根川分水路下總國印幡沼古堀筋御普請御手傳被仰出、四千四百両餘、神ノ村手戸村地先より横戸村地内迄、水野出羽守、千百両餘、横戸村地内より柏井村地内迄、酒井左衛門尉、六百両餘、柏井村地内より花島村地内迄、松平因幡守、二千二百両餘、花

兩山ノ下ハ皆泥土ニシテ限リナク、人力ノ及ブ所ニ非ルニ似タリ、諸吏各思慮ヲ盡シ、數十日ニシテ見分測量畢リ、江都ニ歸リ、彼ノ地ノ事業且用財ノ多少、成功ノ目途、年數等ヲ言上セリ、

〔吹塵錄七治水〕朱書天保十四卯五月八日、御勘定奉行梶野土佐守江差出候書面扣、

下總印幡郡之大沼、并撿見川筋堀割、利根川水行直之御費用勘辨仕、可レ奉二申上一旨蒙二御內命一、奉二敬承一候、右は國體變化に拘り不二容易一御大業に付、微臣無二腹臓一直言を奉二申上一候、○中略總州印幡沼之儀は、上世以來淵底も難二測知一大池にて、其廣漠なること數十里に渉り、土人は其土に產する魚鼈鳬雁、及蘆荻之利を逐ひて生產之資となし、夏秋の交に至りては、四方の水潦落合汎溢して、方十餘里に波及し、稼穡の利を漂沒するに至る由、故に安永天明年間建白する者ありて此沼を割り悉く其水を流し除く時は、良田を得ること十餘萬石にも至り、且每歲關八州之水害も永く除くことなれば、豈國家永久之福にあらずやと、官乃チ才幹の吏を撰び給ひ、其術を施さしむるに、偶々事の障あるによりて、其功終に遂させられず、然るに當今君明臣良、四民太平之德化に沐浴するの時に遭て、再び數十年前之議を建白して、國家永久之利を起さんと議し給ふ、微臣未其地之險易淺深は一見不レ仕候得共、謹デ是を料るに、此議は所レ謂私智を以、造化自然之勢を奪ふものと奉レ存候、○中略然れども官之令下り、事既に斯に及び、最早御差止に難二相成一儀に御座候はゞ、微臣乍レ恐愚案を可レ奉二言上一候、○中略若國家の御藏金をば、其儘被二積置一、偏に諸侯之御手傳、及農商之膏血を絞り、右等の財寶を以、此費に可レ被レ充との御評議ならば、禹王之處置とは些と相違致し、恐くは天變地妖不時に出來可レ仕哉も難レ計候得ば、其成功も往々無二覺束一儀と、乍レ恐奉レ存上候、去れ共時之御評議、孰れにも御藏金を以御用途には難二相成一御治定に至り候はゞ、是亦是非も無レ之儀に付、此上之愚考は、此節百文錢を別段に被二吹立一、此御益金拾五萬兩相備、是を以右之費用に被レ行候はゞ、公儀御藏金にも不二相響一、又諸侯及農商之痛にも不二相成一、是則兩全之術と奉レ存候、○中略

大海ニ達シ、刀根川ノ分流ト爲シ、通船ノ便利ヲ開カントス、水理ニ達スル輩ヲシテ、其成功ノ策ヲ建言セシム、抑此事ノ源因ヲ尋ルニ、刀根川洪水ノ時ニ當テハ、防堤ヲ破リ、田圃ヲ流亡シ、水邊ノ村々、是レガ爲メニ水害ヲ被ルコト少カラズ、手賀沼ヨリ印旛沼ニ堀切、又南方馬加村ノ海邊ニ堀割、蒼海ニ達スル時ハ、流水新川ニ分流シ、水害ノ患ヲ除キ、且奥州ノ通船、常ニ房總ノ大海ヲ渡リ、浦賀港ニ入リ、然後江都ニ達ス、房州ノ海中難所アリテ、暴風波ノ爲ニ破船シ、米穀ヲ失ヒ、往往覆溺ノ殃ニ罹ルモノ少カラズ、然ルニ刀根川ヨリ直ニ内海ニ達シ、江都ニ至ルコトヲ得ル時ハ、里數ヲ減ズルコト多クシテ、覆没ヲ免レ、且軍用ノ便宜アリトイヘリ、往年某年此役ヲ起シ、數十萬ノ財ヲ散ジ、穿チタリトイヘドモ、終ニ事不成シテ廢セリ、故ニ今復此業ヲ遂、不朽ノ大益ヲ開キ、衆民ノ水害ヲ救ハントノ深慮ナリト云、同年十月、官先生ヲシテ、彼地ニ至リ土地ノ高低難易ヲ量リ、成不成ヲ察シ、其思慮スルトコロヲ言上セヨト命ズ、先生命ヲ受、退キ歎ジテ曰、此事下民ヲ恤ミ、國家ノ大益ヲ擧ントノ賢慮ナリトイヘドモ容易ノ事ニアラズ、萬事ノ成不成、自カラ時アリ、又事業ニ先後アリ、我假令彼ノ地ニ臨、見分スルモ、其益ナカルベシ、然レドモ君命辭スルノ道ナシト、於是江都ヲ發シ、下總國ニ至リ、諸有司ト共ニ、日々廻歩シテ、其地勢高低難易ヲ熟見シ、成不成ヲ考フ、手賀沼ヨリ印旛沼ノ間、道程二里印旛沼ヨリ南ノ方馬加村ノ海邊マデ四里、合シテ六里、新ニ水路ヲ開キ通船セ　トス、實ニ大業トイフベシ、中間ニ高臺ト名ヅクルトコロアリ、高サ數丈ニシテ岩山ナリ、是ヲ穿ツニ堅石ヲ穿ヨリモ勞セリ、下海邊ヲ去ルコト數百間ニシテ天神山ト唱ル小山アリ、兩山ノ間土地低クシテ、泥土ノ深サ測ルベカラズ、是ヲ浚ルニ幾萬ノ畚ヲ擧ルトイヘドモ、泥土元ノ如ク涌キ出シ、更ニ尺寸ヲ不減、往年ノ役ニ車器械ヲ設ケ、此土泥ヲ海邊ニ卷出シタル時ハ、海濱之ガ爲ニ埋マリ、數十間ノ平地ヲ成ストイヘドモ、天神山高サヲ減ズルコト三尺餘ニシテ、泥土元ノ如クニ涌出シ、依然トシテ寸モ卑キヲナサズト傳ヘタリ、實ニ

り、○中略湖水の落口、只一口にて常に溜水吐兼て、周廻の谷々へ溢れ溯り、古田水腐すること夥し、吐口一ケ所のみに非、吐口の前後左右皆岩石の山々のみなれば、永世不動に吐口の變化すべき様絶へてなし、左すれば村々永世水腐の憂を脱去し、安堵をすべき様なし、故に江州獅子飛の如く地雷を用て反割する仕方の如くすれば、落口ひろく底も低くなるべし、其仕方異に當ば、湖水皆吐拂て、湖水四里四方、周廻四十八谷の村々水腐場沼までも、悉皆殺岡となるべし、

〔甲子夜話六十九〕林曰、辛未年西行ノトキ、下關ニ抵リテ、モシ此間ノ地續キテアラバ、サゾ海運不便利ナルベキ者ヲト倩思フニ、今一ケ所東西ニ通ズル運輸アラバ、本邦ノ富庶幾倍ナルベキヤト考フルヨリ、琵琶湖ノ西方越前若狹ノ地尻ニテ、其高低ヲ計リ運河ヲ新鑿シ、中間ノ高ミハ舟ノ通フベキナラネド、其間ハ山越ニ馬荷ヲ通ジ、湖邊ニテ荷物ヲ積替、湖中ヲ水運シ、鹿飛ニテ再荷物ヲ陸送シ、淀ノ河船ニ移シ、大坂川口ヨリ又海船ニ轉ゼバ、運輸ノ自在ナルコト是ニ過グ可カラズ、中々新田類ヨリハ百倍ノ國利ヲ起スベシト思案シキ、扨公事訖リテ歸路ニ、京兆ニ逗留セシ折シモ、小濱侯(酒井若狹守忠進)所司代タレバ、其事ヲ密ニ面議シヌ、幾程モ無ク小濱侯召レテ臺閣ニ入ル、其老臣歸鄕ノ序ニ其事ヲ謀リ、土地ノ詮索アリテ、兼テヨリ若州ノ小湊ヲ川上ヘ餘程堀リ上ゲシカバ、夫ヲ聞テ大坂ノ豪富共爭テ出金シ、其費ニ當テント云フ者アリシトゾ、然ルニ其川上ヨリ江州ニ赴ク場所、他領ノ入合多クシテ、色々ノ指支ヲ云ヒ、竟ニ其事成ラズシテ止ノ諄諄モ惜ムベキコトナリ、若シ時ヲ得テ官命モアラバ此事成ルベシ、彌々成就ニ於テハ、百世ノ利足ルベシトナリ、小白評ス、桑田ノ變圖リ難シ、況ヤ時運ノ移ル天道アリ、人力ノ施ス蓋シ日アラン、然ル時ハ林子出言ノ功前上處トセンカ、或又伍胥ノ眼ヲ假テ、東門ノ上ニ懸ケ觀ン、

〔報德記七〕先生下總國印幡沼堀割見分ノ命ヲ受、彼地ニ至ル、

于時天保十三壬寅年、幕府命ヲ下シテ下總國手賀沼ヨリ新川ヲ穿チ、印幡沼ニ注ギ、印幡沼ヨリ

村々、自然に救助を蒙り、湖水周回村々も水腐に遇の憂なく、美濃越前迄の川船運送便利を得のみに非、大造なる新田獨出來して、農平の災害を救助し、國務の本意に協ひ、水腐なく年々豊作して、大造の米穀出來、新田よりも莫大なる米穀出來、上下萬民相倶に大益を得べきは獅子飛を反掛にあるなり、故に小三急務の第一とす。〇中略

第三小急務三條

第二、越後州海邊に、鎧潟、大潟、田潟、三潟一ヶ所にありといふは、此三潟の西に砂山あり、西海迄の打越延間僅に一千五百間あれども、砂山が堰となりて、溜水則三潟となりたるなり、其周廻に御料私領百三十三ヶ村の惡水落溜、則三潟なり、長凡十里餘、幅七八里の內に、此三潟と沼とにて、其溜水は北方へ一里計りも流行き、信濃川へ落會、夫より僅流行新潟港へ到り、則大海なり、此信濃川(信州より流來る、彼國にて千曲川と云、)は大川にて、滿水すれば忽溢溯り、三潟へ逆水すること莫大なり、故に三潟も亦滿水して、周廻の村々へ又あふれさかのぼり、古田畑も水腐すること夥し、信濃川より漸々土砂を吐出し、近年新潟港の川床高くなり、累年水腐增殖して、百姓立がたく、漸々退轉し、東都を始諸國に住居すること夥し、周廻百三十三ヶ村に殘たる百姓ども、年々の水腐にて立がたき旨を以、彼砂山の堀割手段委細にしたゝめ記し、時の尹に訴訟すれども、埒明ざるゆへ百三十三ヶ村の百姓ども、十五才より六十才迄の老若男女數千人出會し、私。堀。にせむとて、既に堀始、餘程堀わりたるが、領主々々より有司を出し令命いまだ下らざる旨を以停止せり、不便といふも餘あり。〇中略於是英雄ありて、領主地頭の貪慾の根葉を推伐打越、一千五百町を掘わり、三潟の溜水を西海へ吐拂ば、盆水の覆するが如く、其跡忽殺岡となり、新良田となり、高凡十二三萬石の土地となるべし、剩に其餘澤を蒙て周廻百三十三ヶ村も、永久水腐の憂もなくならん。〇中略

第三奥州會津の湖水を猪苗代といふ、山中の湖水にして、縦横の徑凡四里四方、其周圍に谷々あ

彦根の城との外堀を圍取て要害となすべし、竹生島の外圍に堤を築き、舊蹟の名目を失ざる樣すべし、湖水の眞中に親川を設、大坂迄の船往來と爲べし、周回の子川は皆親川へ通じ、田畑の用水及小舟運送の便利よろしくすべし、江州湖周回凡四十里、此坪數五億九千〇五十八萬二千二百七十八坪、此內親川子川兩所の城外堀竹生島溜池の潰地凡二割を減少し、餘四億七千二百四十六萬五千八百廿二坪四合、又この內作場道神社役所其外種々潰地凡二割を減少し、餘三億七千七百九十七萬二千六百五十七坪九合二勺、反別十〇萬四千九百九十二町四反一十七歩九合二勺、凡平均盛十六と見切、高一百六十七萬九千八百七十八石四斗五升七合四勺四才、免三つ五分と見切米五十八萬七千九百五十七石四斗六升、是租稅の全き取米なり、此取米はいかにも大益なれども、まづ第一淀川兩緣の水腐村々の水害を救助せざれば農民立難く、是を救助せんに外に良策もなし、捨置ば村々追々退轉せん歟、是を救助するは國君の天職なれば、捨置難き故に哉榎並八ケ庄村々の水腐餘の手當に哉惡水拔の新規堀割の企あれども、たとへ堀割出來たればとて、榎並八ケ庄のみの手當にて、外水腐村々の恨悔の種を儲のみにて益あるはなし、剩に幅三十間餘、長五千間餘の良田畑を敷潰し、此地主百姓の永歎をのこすとは、大なる僻が事の頂上なるべし、其川敷潰地高反別五千町歩、賣買價銀一千貫目、金換一萬六千六百六十六兩となる、此金子を給るとも、金の働は商賣の利倍せん心より實とせん歟、農民に於は金子一千兩より田地一反步をたからとするなれば、たとへ相當の價金を納るとも、君子に於決てせざる所なり、況其他は論べき樣なし、物每に見切といひ、決斷といひ、是がなければ常に妄言に惑て、大益の獨到來するをも取ことを得ず、大損の獨到來することのみを取て、後悔するとも其詮あることなし、依て獅子飛を焰硝仕掛の地雷を以て反割ば、獅子飛の川床丈餘も低くなるゆへ、是非とも大坂川口まで丈餘も堀下げざれば川船通用ならざるゆへ、於是大浚獨出來して、淀川兩緣の水腐に過

い、火道を慥にすべし、兩線二本、中通一本、都合三本に口藥込の樋竹を拵、其樋大竹の節を拔去、繼立、外を綿に包、其上を木綿に卷、其上を蕨縄にて卷立べし、其中央に螺旋柱を建立するなり、此螺旋柱長三間許、周四五尺程、何木にても圖の如く、○圖略螺旋溝を深四五寸幅四五寸に掘穿、火道縄を卷入爲に設るなり、其火縄に製作する物は、布を焔硝に煮染、能干て、又酒にて口藥を引こと數篇引べし、後干揚、是又火移を試例すべし、利鈍を知り程能を求得、其後又口藥を含め入り縄になひ火を點じ、燃の遲速時刻を試例し、一時の內に長何程もゆる歟を慥に極め、螺旋柱に卷附、火縄の總長何程あるゆへ、時刻凡何程の內に燃施、術筒に火うつる迄の時刻大概を量知るべし、扨柱の外油紙に包柱の頂より前後の右へ、針銅の扣を張て、倒れざる樣に堅固にし、其上雨覆小屋を掛べし、九穴の袋口と樋竹との火移宜くすべし、若し九穴の火移不同ありては、不都合の基本なれば、念入火移を製作すべし、扨一穴三石づめとすれば廿七石、又四石詰とすれば三十六石、又五石づめとすれば四十五石、只一息一秒の間に忽炎火移り亘り、地雷となりて、烈反嚴剛、其勢たとへべきものなく、岩石の如く堅強なる者に觸ば、猶猛勢となり、岩石數十間四方、只二三息の內に皆虛空へ飛びのぼれば、其跡忽ち深淵となるなり、其周廻十餘町程の生類、其響の音にふれて即死する故、前廣に觸を出し、村里の庶民獅子飛周廻凡一里程へ立よるべからざる旨避退べし、其期日の早朝、壯健の馬に乘、火指役の者到、螺旋柱の頭より紐火縄を設置たるに火を移し、よくもゆるを視留、頂上へ燃つきたる時、則馬に鞭を打、逃去ること一里程の內に、螺旋の焔硝、縄皆燃絕、火道筒に移るとひとしく、炎火猛勢馳走電の如く九穴に到り、大雷の如く山谷に響きわたり、被盤石微塵に碎散、虛空をさして反昇り高五六十町も飛のぼれば、運旋天の內へ飛入故に、岩石その處へは墮降ることなく、日本を離れ西土へ雨の如く降なり、さすれば獅子飛の岩石跡形もなく飛失、其跡大淵となるは慥なり、さあれば五々の瀨も勢多の橋も毀岡となるべし、勝所の城と

井ノ餘水巽ニ流レ、郡中高見村ニ入、是ヨリ大抵東流シ、松山町ノ北ニ至リテ北ニワレ、又東ニ曲リテ横見郡トノ郡界ヲヘテ、島羽井新田ノ北ニ至リ、猶東流ス、コヽヨリハ泥川トナリテ、イヨイヨ郡界ニソイ、小見野郷十ケ村ノ地ニ至リテ荒川ニ入川幅十間程、此川昔ハ島羽井新田ノ北ヨリ艮ノ方横見郡ノ地ヘ流レシヲ、享保八年、井澤彌惣兵衛鈞命ヲ受テ、今ノゴトク郡界ヘ新川ヲ穿シヨリ、水流カハリシト云、故ニ今島羽井新田ヨリ下流ハ新市ノ川ト呼ベリ、

〔武江年表 四〕享保十三年十二月、御茶水川端廣がる、當秋小石川小日向邊大水の節、水はき自由ならぬゆへなり、

〔惇信院殿御實紀 二十九〕寶暦九年三月十二日、越後國阿賀野川新鑿の事あり、代官及目付の下吏いとまくだされて其地に赴く、日記

〔經世秘策 後篇〕第二小急務三條

第一淀川、第二阿部熊川、第三千曲川の三河なり第一淀川といふは、江州の湖水の落口を字獅子飛といふ、此一口の外に落口なし、其落口の幅僅に五七間、殊に異石の一枚盤なれば、大古より大堰となつて、湖水常に吐寫滿淀り、故に大雨降る毎に、周廻四十里の古畑田へ溢溯、水腐すること夥きことなり、○中略今この時に當て一策あり、曰獅子飛の兩緣と中通りとに、九ヶ所程に、徑三尺深五六丈許に、石工に命じ石井を掘穿べし、中通の石穴は、水除を井戸側の如く雜桶をこしらへ、桶と磐石との合目は漆石灰にて洩水を止防ぎ、桶內の水を汲取、石工其內へ這入、石穴を掘穿べし、兩緣の石穴も上土にて、下石歟、上石にて下土歟、下石のみを掘穿べし、又皆土のみの所は掘穿ことなく、皆石のみを掘穿なり、石井の懐內へ泄水する所あらば、漆石灰を用て嚴防留、少も水氣なくすべし、其後焰硝を調合せんに、鐵炮藥の如く、九二一の割合を以製法すべし、灰山鄙國を用べし、一穴に焰硝三四石歟、四五石歟、各布袋に入るべし、其袋の口を長く拵、口藥を仕込み、繩にな

貞享丁卯、〇四年夏五月也、

〔集義外書十三水理〕問云、江州湖水の邊、近年水こみて田作ならず、高廿四五万石程水底に成ぬ、勢田の下しゝが瀬の岩を少打かけば、水落て作つくと申侍り、是もとりかへされぬ惡敷事や侍らん、

云、大に惡敷事出來なん、湖水のごみといふは、一朝一夕のゆへにあらず、しゝが瀬は天地自然のてうしの口なり、しかるにしゝが瀬の岩を切なば、湖水急にをちて淀川の水たぎり、湖水ほどなく落なば、淀川あさく成て、今の舟の通ひやむべし、彼是にあしき事多出來ぬべし、惟といふ共甲斐あるまじ、〇中略天氣つゞきて能時分、水ひ落て作毛付、淀川の水も能程をつもり、それより高き水はおつる樣に、北國の方へ池水のあらてのやうに、水はきを付る事はくるしかるまじきか、

〔江戸名所圖會一〕今川橋　本銀町の大通より元乘物町へ渡橋を云、此堀を神田堀と號く、元祿四年辛未、堀割たりとぞ、其頃此地の里正を今川某と云ければ、直に橋の號に呼けると云、

〔常憲院殿御實紀三十七〕元祿十一年四月廿八日、此日、先年通鑒ありし京淀川の新流を安治川と稱すべし、今度市井になされし堀江は、堀江町と唱ふべしと仰出さる、年錄、坂上池院日記、人見私記、

〔大坂町觸〕元祿十一寅年

六月五日

一新川之名安治川と御改、幷町之名安治川町と改り之事、

〔攝津名所圖會四下大坂〕安治川大川筋の末をいふ、貞享年中、川村瑞見安治といふ人、水道の地理に鑑撫し、此川筋を撫たり、因之安治を賢に呼て安治川といふ、洪水の時に通流止って、衣島舊嶺島、市岡新田、泉尾新田等の田園大に墾て、民庶安堵す、公務への勤功と謂つべし。

瑞見山、安治川の末にあり、瑞賢此川筋を開し時、土砂をこゝに上げしめ、川口を助く、故に名によぶ、本名波除山といふ、洪水の時高潮をこゝにて塞除るよりの名なるべし、

〔泰平年表常憲院〕寶永元年三月朔日より、泉州河州の間亘四里廿八町の新川を掘渡、播州姫路城主本多政武奉行たり、今新大和川と云、古の大和川は、大坂の後より淀川に流入る也、今は昔の通ひなし、跡のみ殘れり、

〔新編武藏風土記稿一百八十六比企郡〕市ノ川　郡ノ中央ヨリ北ニヨリテアリ、水源ハ男衾郡無礙村宿

根崎河、俱流過福島、於九條島東頭、又合、三派均注、則足以分折洶湧之勢、頃年水直下土佐渠、而堂島會根崎二流、梗澀而水既乾涸、故先開掘撈濬會根崎河、長七百二十餘丈、〇中略 又中島北渚、因堂島河堙廢、沙土已凝、久成陸地、乞丐無依之徒、侵占群居、自作席舍、殆成聚落、今一掃撤之、鑿開濬挑三百五十丈、又自福島至百石島、開濬河岸、四百餘丈、其間六軒屋、及蓋船廠二所、並撤去之、又福島前有豬島、在中流、而河身迫阸者、長一百五十丈、復鑿去之、于是江都召瑞賢、秋八月、與監督加藤生助等同發大坂、還江都、上陳已治未完河道處所、堂老復遣瑞賢、往率餘工、從是不遂遣監督官、冬十一月、瑞賢至大坂、疏濬障排、督役略成、明年貞享乙丑春正月、還江都、繪圖以上、條呈治河之工、猶有未周備者、於是堂老覆議、復委瑞賢、往任其所為、以成巨績、冬十一月、發江都至京師、謁所司代土屋相模守、稟後興役、十二月、到大坂起役、堂島河下流有洲沙、積如丘陵、河特堙廢不通勺水、鑿開之三百丈、〇中略 於是大坂河下流稍治矣、諸水之最多患者、莫若大和河、是須次而治焉、越丙寅〇貞享三年春三月、又興工、從事于大和河、自石河而下、塡淤成洲、曲岸礙流者、咸濬而疏之、或鑿而通之、大和河分派、至森河內前、又併合為一、水勢衝抗、每致上流壅滯、於此樹樁、一百五十丈、分導河流、使無相逼也、自此而下、河道狹隘、暴水易溢、故南岸起森河內、經鴫野、至定番官別館處所、鑿岸拓廣河道、計一千三百丈、其間有房屋田圃、迫河道者、並撤去之、北岸起蒲生村、至片町之下、與淀河合去處、亦拓廣河道、〇中略 自京橋而下、兩河已合、流每過雨水、淀河水直抵南岸、大和河為之所衝、水勢相捍、俱致泛溢、此由近世北岸川崎天滿侵築河岸、以開街衢、起邸舍、迫阸河道也、故川崎官木廠前一大洲、延袤二百餘丈者、先鑿開之、其岸受河水衝浸處、用石包砌、二百五十餘丈、又起官木廠處所、蓋天滿岸、撤去邸舍市廛、以鑿開其岸、長七百餘丈、且濬淺淤、令河道大深濶、〇中略 凡大小幹河支河、隄防通計、十萬餘丈之間、田圃廬舍、侵占河岸者、今悉撤去之、又隄旁隄內、所生之蘆葦竹樹、令該管官民悉芟除之、秋夏芟除、以四次為恒例、於是河道隄岸、界限明白、而杜奸民侵塡之萌矣、其餘出奇應變、除害興利、籌算效績、難悉記、自役興已五載、河功完成、還江都、具狀告成、實

今而後、既藥者不可復、所不毛者宜令植樹、于是堂議遂定、如治河之事、宜令河村瑞賢一切委之、盡其籌策、如諸水發源處所山林、則不論公私、仰該管官民承行、越秋九月五日、壹岐守、備前守、相會於石見守邸、召瑞賢、委專治河之事、且賜驛符及吏胥月糧、以加藤兵助、堀八郎右衛門、猪子佐大夫監督之、令往、冬十二月、遂發江都、明年貞享甲子〇元年 春正月、至京師、謁所司代稻葉丹後守、稟奉命往興役、其月至大坂、審河勢、相地形、而其施工之先後緩急、斷然有所見矣、蓋大坂河將入海、有九條島當之、河爲島所扼、漩流而入海、此上流之泛溢、淤沙之壅塞、所由致也、故二月十一日、先於九條島起役、直鑿島中、以開一道新河、自九條及福島、袤約一千丈廣三千餘丈、使河流直達于海、此昔治水始於冀兗之遺意也、畿內之民、久望此舉、不翅雲霓、一聞官家興工治河、以救民之疾苦、騰懽相賀、四方子來、不論地之遠近、奔馳以應募者日以萬數、於是分隊立部、各置首領、統攝驗勘以就役、畚鍤鱗集、不待督責、用力自勤、乃二旬而新河成、初瑞賢招致各國水工精練者、博取諸人、以裨其策略、預聚巨材、鋸作木板數萬、作轆車數百、又作萬餘木梯、編竹爲簀、縮貼一邊、縛住使牢、以其三件具、堆積於九條島如山、觀者愕然、不知其爲何用、至二月起役、先於該鑿河道正中、濶五丈掘深渠、留上下兩頭及中間而不掘徹、作土障以限渠、上以防河水衝入、下以防海潮侵還、竊計、河道生地、左右皆舊河、而土薄泉淺至稍鑿、必見水而施工不易、故設渠、使地中水溜下會于此、既而鑿新河、鍤鑁纔下、雖果見水即潛泄歸渠、因於兩頭及中間土障處、左右橫開渠、並置轆車、以衆力轉斡、撤去渠中水、加以戽桶并手抒去、夜以繼日不少休歇、於是生地蓄水漸盡、不致泥淖、尤易爲工、及新河稍深、以木梯密倚兩岸、竹簀仰承人趾、不致踏脫、且透漏泥水、使人不滑倒、甚便升降、所挑泥土、衆人搬去、往來蹂躪、泥淖塗地、故於路上鱗布木板、畚者趾不陷沒、行步如飛、其器械預備者、皆有所施、而成功之速實此多、於是人服其先計、逮新河道既鑿訖、兩岸俱砌以石、撤兩頭土障、以烽火爲號、齊力一時決去、放河水達于海、流勢一道隱如長虹、〇中略 茲復淀河自長柄分爲大坂中津二河、〇中略 大坂河、又自中島東頭分而爲二、南爲土佐渠、北爲堂島河、堂島河、又分爲曾

知所歸、今大君綱吉〇徳川紹續丕基、光昭前烈、文武並行、萬方莫不循軌、風化一新、群動莫不被澤、盛德之興、山高日昇、萬福是膺、獨於畿內之民、豈可令墊溺、於是誕垂嘉惠、博施洪恩、將救治水患、今玆春二月、遂命稻葉石見守、及彥坂壹岐守、大岡備前守、往巡察畿內河道處所、揮勘定官三人伊奈半十郎手下吏二人可任役事者從之、都下有河村瑞賢、亦差遣從行、以計便宜、越三月、石見守及壹岐守、備前守、至京師、督同州縣當該官吏人瑞賢等、先行賀茂河及白河、將求桂河上流、以其路絕險不可涉、西攀老坂、自丹之保津、舟行下嵯峨、至淀島羽、由伏見浮淀河、以達大坂、視河口、東傍大和河、至龜瀨、經廻深野新開、復踰淸瀧山、歷視其東北朱山、灑灌皆沙土、而且其沙每崩下、流入溪澗、復沿天野河而下、至其股合淀河之處、復西南循攝之郡邑、要水害之地、行視德菴溝、（深野新開、比近田間諸水行之、至今福村南、入大和河、）鯰江河、（河西攝東郡邑、狹溢之水、多置閘於今福村、以洩于此、流過備前島片町之際、至京橋下流、入大坂河、）及備前島、片町、京橋等處所、復緣平野河、（攝河東南、山際高阜涓流、及引狹山池、以灌溉田土之水、又置大閘於弓削村、引大和河以備蓄洩之溝、皆歸之、至京橋上流、入大和河、）過猪甘小橋（仁德天皇十四年、爲橋於猪甘津、即號其處曰小橋、）等處、廻狹山池、（聖武天皇天平四年、築狹山下池、）巡相阿部、瓜破、及依網池、（推古天皇十五年、作依網池、）手水橋、（在攝津與住吉浦之間、）向欲開鑿之地方、往反數四、左右旁求、審詳治水患、實在海口而不可別開河溝、大和河、說者之計不足信用焉、復迴中津河、（淀河支流、自長柄村西分、至傳法口、入于海、）自神崎河、（淀河支流、自江口村西分、至尼崎入于海、）西出尼崎、復遵海浮舟、南循行堺津住吉浦等處、熟視大坂河口、沿海斥鹵之地、蘆葦鋪生、日以蕃苞、令河水失宜洩于海之便、兼之近年就其地開田築堤、下流益爲壅塞、斯治水之最所可急也、故先指畫廢其新田、壞其堤防、芟其蘆葦、令海口開豁寬廣、自是每歲夏秋之間、官令土人芟除蘆葦、四次以爲恆例、凡在大坂往來相度者久之、於是發大坂道石河、詣其上流赤坂、再歷龜瀨、至生駒、躋初瀨、取途於奈良、沿木津河而下、由宇治抵鹿飛、過供御瀨、窮石山、出勢多、（鹿飛、供御瀨、石山、勢多、皆在自宇治迄琵琶湖口之間、）踰險涉水、限極河水源委、具圖方略、以歸京、仍令瑞賢陳其所見、故造圖以告治水之便利、石見守領之曰可也、越夏閏五月、石見守及壹岐守、備前守還江都、以條上治河之策、因諸水發源處所、斫損林木、山禿土穿、遇雨易崩、下流淤塞、職此之由也、山林必須鬱茂、而勿濫採伐、自

根川トモ稱ス、又掘開カレシ後、今ニ至リテ土人多ク異名ニ新堀川ト呼ビ、上流ヲ古川トモ云、

〔嚴有院殿御實紀五十三〕延寶四年十二月廿五日、芝金杉新渠成功により、奉行岡田將監善次金五枚、時服三、羽織を給ふ、賤吏にも賜物あり、

〔新編武藏風土記稿比企郡一百八十六〕入間川　水源ハ入間郡福田横沼二村ノ間ヨリ出、本郡伊草宿ノ南ニヨリ、入間郡ト本郡ノ堺ヲ東流シ、川口村ノ南ニテ北ヘヲレ、郡中ヲ貫キ下老袋ト出丸中郷トノ間ニテ荒川ニ合ス、水源ヨリコヽニ至ルマデ三里餘、川幅大抵三十間ホド、此川中古迄ハ總說ニ荒増辨ゼシゴトク、郡首老袋村マデ郡界ヲ流レシカド、延寶八年、時ノ領主松平伊豆守信輝新川ヲ疏通シ、堤ヲ築テ、水脈ヲ北ヘ轉ゼシヨリ此カタ、川口村ヨリ下ハ纔ニ川ノカタチヲ存セリ、

〔江戶砂子一〕神田

神田堀　銀町堀と云、かまくらがしより濱町堀へつゞく、銀町の土手そひての堀也、天和年中にほらる、

〔畿內治河記〕天和三年癸亥、國家有議、大興畿內治河之役、蓋水之爲患、所在有之、而源遠流悍者、其患大矣、衆流相湊、併歸一道、以達於海者、其患最大矣、水患之最大而難治者、無若攝之大坂河、大坂河、卽淀河也、其源江州琵琶湖、流出宇治、由伏見經淀城、至大坂入于海、其間五畿及比近州縣諸水來會甚衆、而大和河、木津河、加茂河、桂河、其最大者也、〇中略淀河實納四大河之流、其上流自湖口至宇治、曲折山間、兩岸皆高巖石麓、水流其中、不能爲患、自宇治而下、始出險而更平地、特以隄防爲之限、河流緩而餘沙停積、加之大和河、木津河、桂河、並挾泥沙趨之、壅塞河道、河身日淤、船隻阻滯、一遇霖潦、則泛漲溢溢、其勢不可得而制、重以百川灌集之威、衝蕩潰決、敗壞縣邑、淹沒田廬、畿內之民被其害者、歲以萬數、嗷嗷咨嗟、已數十年矣、〇中略施及寬延之變、河道益淤、水害益暴、流亡漂溺之災、無歲無之、瀕河人民、不

ナキニシモ有ズ、古ノ御定メニ、堀ハ東國大名、石垣ハ西國大名トコレ有ルヲヤ、光政ハ異母ノ兄ノ家也ト雖、近ク天樹院ノ御聟也、光仲ハ神君ノ御玄孫也、然ニ右兩家ノ掘鑿シ堀ヲ外ヘ仰付ラレナバ、右兩家ヘ耻辱ヲ與ヘラルヽ同然也、近年凶作打續キテ、下民困窮スル故、其困窮ヲ救ハン爲ニ仰付ラレシ堀ナレバ、其源ハ撫育ヨリ出タリ、サレバコソ聞屆難キ筋モ協ヒタレバ、堀ノ義ハ只御普請方ニ仰付ラレ、大名ノ手傳ナク出來センコソ然ベケレト申サレシカバ、其義ニ定リ、公儀ノ御普請ト成ケリ、此御普請ニ、町宅シテ居ル浪人、面ヲ隱シ人足ニ雜リテ出ル由聞召レ、夜普請ヲ仰出サレタリ、亥ノ時迄遣ヒテ兩日分ノ賃錢ヲ取セ、子丑ノ時迄遣ヘバ、三人分ノ賃錢ヲ取セケル、御仁政ノ程コソ有難ケレ、

〔嚴有院殿御實紀三十五〕寛文七年八月九日、松平新太郎光政、松平相模守光仲に、明年二月より麻布三田新渠疏鑿の事仰付らる、又貝役園部五郎左衛門、太鼓役近藤太郎兵衛に下谷淺草溝渠の奉行命せらる、

〔嚴有院殿御實紀三十六〕寛文八年二月五日、今年しば〳〵の大火により、麻布新渠疏鑿の事停廢あるべしとのむねを、松平新太郎光政、松平相模守光仲をめして仰下さる、

〔新編武藏風土記稿九豐島郡〕澀谷川　内藤新宿ノ東南四谷大木戸ノ邊ニテ、玉川上水ノ餘水枝流トナリ、千駄ケ谷、原宿、穩田、澀谷、豐澤等ノ村々ヲ東流シ、下流本郡〇豐島郡ト荏原ノ郡堺ヲ延亘シ、同郡白金村ノ地先ヲ流レ、三田村ニ至ル、此川古ハ三田村ノ邊ニテ二派トナリ、〇中略一ハ三田村ノ界ヲ過テ、今ノ如ク再ビ郡中ニ入リ、芝赤羽根芝金杉等ヲ經テ海ニ入、水源ヨリ川路凡三里、幅不同ニシテ廣キ所ニテ二十間ニモ及ベリ、古ハ總テ細流ナリシガ、延寶三年ノ頃、台命ニ依テ芝金杉ヨリ今ノ麻布十番ノ邊マデ堀開カレ今ノ麻布四ノ橋ノ邊迄汐入トナレリト、此川澀谷村ニ多ク掛ルヲ以テ、澀谷川ト唱ヘリ、又一ニ下流芝赤羽根ニ至ルヲ以テ、其邊及上流ニテ、或ハ赤羽

の地を鑿りて、新川を十六島に達す、この時開かれし村々、印旛沼北畔に於て地を賜はる、今これを野原新田と云ふ、かくて布佐の高臺と布川の間に、堤して川を塞ぎ、今もこの處をメキリといふ水を新川に入る、寛文六丙午年に落成す、然れども太直にして水渴き易く、舟行に便ならざるを以て、同九己酉年塞を去り、新利根川の口を塞ぎ、別に羽根野に水門を開き、蠶養川の水をせき入れ、用水の便とす、明る十庚戌年功畢る、

〔野木瓜亭隨筆抄〕一寛文四年四月五日、鷹匠町筋飯田町下御堀、舟入に相成候、奉行土屋權十郞、同年御臺所町の御堀普請出來、

〔明良洪範四〕寛文中、芝新堀御普請御手傳ヒ、備前少將光政、松平少輔光仲兩家ヘ仰付ラレケルニ、兩家共如何ナル故ニヤ、堀牢バニテ御手傳ヒ仕難キ由御斷申上ル、此事評議ニ及ブ時、兩人ヲ召ニ御城ヘ召ベキヤ酒井雅樂頭宅ヘ召ベキヤ決定セザル時、稻葉美濃守正則申サレケルハ、金銀不如意也トテ、御手傳ノ儀ヲ御斷リ申上ル事、上意ニ背ク所ナレバ、外々ノ大名ナラバ、仰付ラレ方モ有ベキナレ共先祖關ケ原以來忠戰ト云、御緣者旁タ、宥免有テノ仰渡サレナレ共、御叱リ心ナレバ、御城ニテハ如何也、又雅樂頭宅モ然ベカラズ、評定所コソ然ベケレ、カノ兩人誠ノ不如意ナラバ、早速罷出ベシ、左ナクバ病氣ナド申立テ延引スベシ、サレバ右兩樣ヲ試ラルヽ爲、又ハ御受ノ品ニヨリテハ、直ニ御預ケニモ仰付ラレ間敷ニモ非ズ、彼是評定所然ベシト申サレシカバ、何レモ尤也トテ、夫ニ定マル、サテ兩池田ヲ評定所ヘ召レン御沙汰也、是迄大小名ノ身トシテ、評定所ヘ召ルヽ者無事ナルハナシトテ、光政ニ相談有シ所、兎モ角モ出ラルベシ、御斷リ申上ルカラハ、身ノ上ノ事ハ覺悟ノ事也、然レ共嫡子共ヲ召レネバ、先安堵有ベシト答ラレシ、流石ハ光政學者程有テ、肝要ノ所ニ心付シ故、兩家ノ人々安心シケルト也、評定所ニ於テ、御叱ノ上閉門仰付ラレシ其後、御手傳ヲ島津少將光久ニ仰付ラルベキヤト御沙汰有シ時、久世廣之申サルヽハ、兩池田僅ナル堀ヲ掘得ザル事ハ有間敷事也、是迄他ノ御率公モ之無キ身ニテ、御斷リ申上ハ不審

治二年、徳山五兵衛、山崎四郎左衛門等、本所築立ノ奉行ヲ命ゼラレ、江戸横山町ト東葛西逆井渡頭トニ狼烟ヲ揚ゲテ標準ヲ定メ、幅二十間、深一丈四尺ノ川路ヲ堀割シト云、

〔瀬田問答〕一神田川何頃出來候哉

答　神田川堀切被仰付候ハ、萬治三庚子年二月十日、松平陸奥守綱宗へ被仰付、同年三月四日一鍬初ニテ、二三ケ年モ懸リ出來申候、此御用最中、綱宗遊宴ニ長ジ、三浦屋二代目高尾ヲ手討ニヤテ被致、隠居閉門被仰付、右ノ堀切子息龜千代へ被仰付候、

御日記面左ノ通

萬治三年二月十日 牛込ヨリ和泉橋迄船入　松平陸奥守

堀切御普請被仰付候

同年七月十六日 通塞被仰付、堀切御用ハ可相勤旨、　同人

同日 上使太田攝津守ヲ以、閉門被仰付之　同人

同年八月廿八日 隠居被仰付、猶又閉門可罷在旨、　同人

同日 家督無相違被下置、神田川堀切被仰付候、　松平龜千代

〔昔々物語〕一昔は牛込船入無之、萬治の比松平陸奥守へ被仰付、大川より柳原堀通し、牛込へ船入様に成る、此土を以小日向の築地出來たり、是までは赤城明神より目白まで住家一軒もなし、畑計なりしよし、堀通し三年に成就したるよし、

〔厳有院殿御實紀二十一〕寛文元年四月十一日、松平龜千代奉はりし、筋違橋より牛込迄の通溝成功により、その家士片倉小十郎、茂庭周防はじめ銀時服若干給ふ、日記、御側日記、　六月六日、本所新渠成功により、深川の番所を移して中川口に建らる、

〔利根川圖志三〕新利根川　寛文二壬寅年、押付松木行徳、今この二村廢して、押付村持添に、松木分行徳分の名を存せり、中田切等

〔落穗集追加二〕江戸町方普請の事

一問曰、關東御入國後町方の普請之義、何れの所より始て被仰付るゝや、答曰、右長崎小木曾抔常に申は、只今の日本橋筋より三河町川岸通りの竪堀の掘るゝが初めにて、夫より段々と竪堀横堀共に出來、〇下略

〔攝津志四西成郡〕左門渠自佃島北、疏引神崎川、西流達于尼崎、元和中尼崎城主戸田左門開之、以利居民、故名、

〔愛媛面影四伊豫郡〕重信川

今出川の川上を重信と云、加藤嘉明朝臣松前城に在し時、家臣足立半右衛門重信と云人、水流を付直し、土堤を築しより、しか名づくとぞ、又左馬助殿堤とて今に殘れり、上森松川と云、其源は砥部十六谷の水流出て、水無月の頃も涸る事なし、尤大河なり、

〔三州志鞬櫜餘考十七〕金城引巽水

寛永九年、今年夏、金城ノ水道ヲ疏鑿シ、犀川ノ上流巽山巽山ハ作辰巳ノ水ヲ引ク、小松町人板屋兵四郎、算道ニ通ズルヲ以テ、之ニ命セラルト也、

〔新編武藏風土記稿一百九十九埼玉郡〕利根川　郡ノ北ノ方上野國ノ境ニアリ、水元ハ西ノ方幡羅郡俵瀨村ト上野國邑樂郡瀨戸井村ノ間ヨリ入國、郡ノ境ヲ流レテ、本郡上下外野村ト飯積村トノ間ヨリ、古河川邊向川邊二領ノ中間ヲ過テ、葛飾郡栗橋宿ト下總國葛飾郡中田新田ノ間ニ入リ、二分シテ赤堀川又權現堂川ト呼ベリ、此二ケ領ヲ過ル所ハ、寛永十九年伊奈半十郎新ニ鑿通セシ所ニテ其後寛永二年佐竹源三郎相良志摩守松平隼人正命ヲ蒙リテ、川幅ヲ切廣ゲタリ、此川寛永十九年以前ハ川瀨南ノ方ニアリテ、今ノ向川邊領ト羽生領トノ界ヲ流レシト云、

〔新編武藏風土記稿二十葛飾郡〕竪川　淺草川ノ枝流ナリ、本所一ノ橋ヨリ逆井渡マデ一里八町餘、直流シテ中川ニ達ス、此川ハ萬治年中、本所地割ノ時、德山五兵衛重政奉テ疏通セシト云、一說ニ萬

〔國師日記〕元和二年五月廿一日、細越中殿江返書遣ス、案左ニ有レ之、○中略
一駿府より參上被レ申候衆、何も御屋敷可レ被レ下ニ付而、神田のだい川を吉祥寺のきわへ掘替、玄番殿立左近殿などのうしろのつゝみをならし、皆々屋敷ニ可レ被レ成樣にさた御座候、○中略

五月廿一日　　金地院崇傳

羽越州樣人々御中○中略

一六月十一日、細越中殿江遣ス、案左ニ有、○中略
一駿府より參加之諸侍衆御屋敷可レ被レ下旨に而、神田之川を掘替、御普請被レ仰付レ候、關八州之手夫にて被レ仰付レ候由に候、○中略

六月十一日　　金地院

細越州樣人々御中

〔野木瓜亭隨筆抄〕一年錄云、元和二年九月、駿河衆駿府より引越被レ參候はゞ、屋敷などもせばく可レ有レ之由にて、江戶川を北東へすぐに堀廻し、其中をひろげ屋敷割可レ被レ仰付レよし、初は吉祥寺の後より本鄉臺を掘ぬき可レ然と評定候へども、後は樣子かはりて、吉祥寺の前を掘通し、田安御門の北東の方を引ならし、神田其外萬隨意(號二新知恩寺一)已下を先へ送り、明神は神田の臺へ移し、御臺所より御建立、萬隨意は下谷へ御移し、本明寺其外小石川方々へ移し、御堀の土を引ならし、屋敷構被レ仰付レ、一說云、明神は駿河臺今松平彈正忠屋敷なり、

〔台德院殿御實紀五十三〕元和六年九月廿八日、此秋はじめより、神田臺の下に堀をうがち、隄を築かしめらる、堀の方は松平右衞門大夫正綱奉行し、隄は阿部四郞五郞正之奉行す、(寬永系圖、家譜、寬政重修譜、元和年錄、)

〔宇和郡舊記 貞〕一塩成堀切の事

富田信濃守當領主の時、慶長十五年より初り、同十七年まで三ケ年の間、十万石の浦里より人夫よび集られ候て、普請被致候由、

堀切の長サ塩成の方ふりより三机の方こふりまで三百四拾間也、高サ貳間より拾貳間迄也、同底はゞ、塩成の方に貳拾四間、三机の方は四拾間同峠の中上口のはゞ三拾壹間、富田信濃殿改易之時は、此普請も七ケ條之内之由申傳也、

〔愛媛面影 五〕塩成堀切

磯崎より三崎の端まで、さし出る事凡拾七里、是に遮へられて、上方への通路甚難し、富田信濃守領主の時、船の便利を得ん爲、慶長十五年より十七年まで三箇年、拾万石の浦里より人夫を出して掘けるに、其功竣らずして改易せらる、實に惜むべし、

堀切長　塩成の方より三机の方まで三百四拾間　同高　貳間より拾貳間まで　同底幅

塩成の方廿四間、三机の方四拾間、　同峠の中　上口の幅三拾壹間

按後來富田氏の志を繼ぎ、一簣の功を竣ん者あらば、海路運漕の便利を得て、其功德萬世朽ざるべし、俗に富田侯の除邑は觀音の祟なりと云、是愚人の說、固りいはれなし、觀音は衆生を濟度するを以誓願とすといへり、然るを豈祟を爲べきことわりあらむや、

〔台德院殿御實紀 二十七〕慶長十九年七月十二日、この日角倉了以光好沒す、○中略今年富士川壅塞しければ、疏鑿の事を命せられしに、光好重病にそみてたえがたしとて、その子與一玄之にかはりて、そのことを勤めしめしが、光好はその病いえずして、けふ六十一歲にてうせぬるなり、

〔羅山文集 四十三 碑銘〕吉田了以碑銘

十九年、○慶長富士河壅噎、舟不能行、鈞命召了以、有病玄之代行治水、又能通舟、三月始役、七月成之、○下略

〔當代記 三〕慶長十年七月廿二三日頃ヨリ三州矢作川ヲ可被通トテ、米津〇碧海郡ニ堀ヲホラル、是右府家康公ノ依仰也、彼國ノ知行役、幷其知行百姓人足令普請、士ハ百石ニ二人、百姓ハ百斛ニ一人也、

〔三河國郡村誌 碧海郡〕矢作川〇中略古老ノ傳フル所ニヨル、古昔本川大小七八叢流、數條ノ水間洲島アリ、後世小堤ヲ封ジテ、其横流ヲ止メ、合シテ一川トナシ、餘ハ皆田圃トナスモノヽ如シ、慶長十年七月、德川氏參河士庶ヲ課シテ河ヲ濬フ、其心ヲ用ル如此ト雖モ、沿河ノ諸山伐木及采石節制ヲ設ケズ、水源霖雨遮蔽スル所ナク、毎雨沙土ヲ瀉出シ、河水爲メニ塡グ、隨テ隄防ヲ高クス、徒其末ヲ務メテ、其本ヲ制セズ、二百餘年ノ久キ、以テ今日布帆ヲ屋上ニ仰グニ至ル、

〔武德編年集成 五十三〕慶長十二年七月十三日彼五百石夫ヲ以テ、駿州淸水ヨリ沓谷筋ヘ船入ノ隍ヲ鑿セラル、所ニ、水出ルコト乏シキ故、一日ニシテ其コトヲ止メラル

〔一話一言 二十五〕角倉了以

慶長十三年、京都大佛殿御造營に付、大材木牛馬の運送なりがたく、了以光好に命ぜられ、京都加茂川の水を堰分け、新川をつけ、右の材木を引上る、よりて十六年より伏見より二條まで高瀨船通行す、

〔羅山文集 四十三 碑銘〕吉田了以碑銘

十三年、〇慶長又命了以、試自信州諏訪到遠州掛塚、可通舟天龍河否、了以難、即淸發、然無所用、故至今舟少、方是之時、營大佛殿于洛東、大木巨材甚勞挽牽、了以請循河而運之、乃聽之、於是自伏見里浮之河、泝而挐焉、了以見伏見地卑於大佛殿基可六丈、即壞其高、爲堤於卑處、若河曲處置轆轤引起、復浮水、水平如地、先是呼許呼邪者、五丁憂之、万牛難之、於是水運不勞力、不日材木悉達、人皆奇之、十六年、了以請行舟鴨河、乃聽之、因自伏見河濬鴨、遡上流達于二條、至今有數百艘、遂構家河傍、使玄之居之、

捨るものニ而候、殊神右衛門合點申間敷候、蓮池〇肥前佐賀郡めい島ニ千間堀はらせ候樣ニと被仰付候、訴訟人ども千間堀を掘申候由、

〔中野三代集 天〕中野神右衛門淸明、法名照眞院淨通、一代御奉公之荒增聞書、

中野氏は、元來武雄後藤氏ノ分リニテ候、〇中略中野右衛門助忠明ノ二男中野神右衛門淸明ニナ候、初ノ名ハ式部ト申候、弘治元年出生、〇中略四十九歲、慶長八年霜月、生三御與内相良次右衛門朝早天、生三御方へ被罷出候處、生三門之柱ニはさみ狀をし付有之を、次右衛門見付候て、生三ニハ見せ不申、右之狀、神右衛門所へ持參候而、相渡被申候、披見候へば、神右衛門代官所神埼郡詫田大庄屋井人數廿人許ニ而、下代八並善左衛門と申者ノ事を、書立仕たるはさみ狀ニ而候故、則次右衛門同道ニて、神右衛門義、生三へ罷出、被相究被下候樣ニと申候、生三殊外御立腹ニ而、其時分ノ御横目綾部吉兵衛、南里助左衛門、右は蓮池ニ被罷居候、幷又、今泉吉左衛門、是ハ佐嘉ニ居被申候を、生三ゟ蓮池へ御よび候而、右御横目三人ニ而被相究候處、無殘所不實之義計を、はさみ狀仕候付、綾部吉兵衛所ニ而、右之人數繩下ニ成申候、其節神右衛門ゟ、八並善左衛門ニ、與力田代九郎右衛門相付差出申候、究下り之時、吉兵衛、九郎右衛門へ目やり被仕候付、大庄屋對馬を、九郎右衛門ふみたをし繩かけ申候、左候而不殘籠舍仕候、其上ニ而、はた物壹十三本、吉左衛門所に而出來、直茂樣、勝茂樣へ生三御披露被成候處、直茂樣被成御意候は、はつ付は人間も草木もくさりすたる物に而候、殊神右衛門合點申間敷候、蓮池めい島之出口に、千間堀はらせ候樣にと被仰出候、其節御前に而、誰やら被申上候は、千間堀は、過分に田畠つへ申事候由被申候處、田畠何程つへ候ても、ほり候へと被仰出候、又其人被申候は、大分之人手間に而候と被申候處、人手間ははさみ狀仕候者共に申付、日料に而はらせ候樣にと被仰出、慶長八年霜月、千間堀被仰付、右之人數之者共、身ヲリ、子ヲリたほれ申候由、

古事類苑

政治部九十六

下編

水利下

〔攝津志四西成郡〕東横堀自二雑波橋東一引二大河一南流、天正十三年開鑿、至二末吉橋一西折曰二長堀一、寛永二年開鑿、至二大和橋一西折曰二道頓堀一、慶長十九年道頓者開鑿、下流倶入二大河一、

〔事蹟合考二〕行徳鹽路之事

一神君天正十八年御入國被レ遊候、不日に行徳の鹽路濱へ船路の通路早速被二仰付一、堀通し可レ申旨たちまち船路出來いたし申、これ今の高橋通りなり、これは甲州武田信玄、動もすれば小田原より鹽留に逢ひて、國中上下ともに難儀いたし候をもつて、神君迅速に、行徳の鹽、江戸入候よしをなさしめ給ふ、

〔新編武藏風土記稿二十葛飾郡〕小名木川　慶長年中疏通セシ川ニテ、當時小名木四郎兵衞ト云者、其事ニ預リシ故名ヅクト云、按ニ事蹟合考ニ、天正十八年八月御入國ノ後、不日ニ命アリテ、行徳ノ鹽濱マデ船路ヲ疏通セシメラル、今ノ高橋通是ナリト云、サレバ慶長ヨリ前既ニ出來シニヤ、淺草川ヨリ深川ヲ東西直流ニ通ジ、中川番所前マデ長一里十町餘アリ、川幅ハ二十間許ナリ、正保ノ國圖ニハウナキサヤ堀ト記ス、

〔攝津志四西成郡〕堀奴渠(ホリカハ)在二天滿町一引二大河一、慶長三年開鑿、

〔葉隱聞書三〕慶長八年十一月、中野神右衞門代官所之百姓共下代八並善左衞門と申者之事を、生三郎〇鍋島元茂方へはさみ状仕、御改之上無實ニ付、磔と被二申上一候處、直茂公、磔は蓍木も人間もくさり

又は石拔付裏砂利ト石トノ境江入、吸拔ヲ留ル時ハ、志戸持木不ﾉ用、書面之積方ニ而、形大キク不辨ニ候得ば、長壹間、中三尺位ニモ拵候而遣ひ候、

〔名家略傳 二〕那珂宗助

羽州秋田の家士にて、那珂宗助といふ人あり、水利に熟して、常に封内の川普請を掌り、その人の工夫によりて川を浚へる器數多製作したり、山を毀つに水車の如くなるものにて、水の流れにこれをかけて、めぐらすに隨て自然と土を掘り穿つやうにせしものあり、又筵一枚を樹にかけて、激流にひたしおけば、その筵の何となく動くにしたがひて、溝渠の泥沙を拂ひ除くやうにせしこともありとかや、かゝるやうのことくさ〴〵の器をたくみ出し、今なほその製をつたへて、治水の具として便利を得ること多しとぞ、ある年所任といふところの川普請をせしことのありしに、銅山の麓にて深山なれば、そこの谷あひに在るところの藤かづらを多く伐りとりて、蛇籠に造るに、そのをりしもふぢ色の木綿十反急用のよし國衙へ申つかはしければ、諸司のおもふに、川普請には無用のものなり、いかゞなど申あへりけれど、水利の事はすべてかの宗助に打任せられたることなれば、いひ出たるまゝに調て遣しける、その後宗助水邊なる村民の子どもを集めて、河原にて日々相撲をとらせ、戯としける、その中にて力量あるものを賞して、かの藤色木綿を一幅づゝ、犢鼻褌にとらせたれば、いよ〳〵よろこびて、わが力を自讃するものあれば、やがてその兒童に課せて、日々河原の小石を運ばせて、蛇籠に結せけるほどに、おの〳〵あらそひ我劣らじと自勵みはたらくことなれば、日ならずして幾ばくの雜費もなく、數十里の蛇籠成就せしといへり、この後宗助もとめざるに、河原にて龍の形勢あらはれたる青石を得たり、かくて件の石を龍神に祀りしとかや、その神祠は城下より八ヶ崎といふ湊へ通ふ道なる枯葉山の頂に在て、土俗は龍神堂といへりとぞ、

〔隄防橋梁積方大概 一〕一、志戸賓壹枚　長貳間　巾六尺

是は瀬廻〆切牛水留等ニ遣、又ハ新堤前緣枠裏江入、吸拔水ヲ防ぐニ能シ、但新堤緣枠裏江用、

上は九本竪に造るべし、近年大方七本竪に造る多し、七本竪は竹入用格別減じ、下直に上る故保ち難し石を詰るに大方ひしげて、出水等にあひ早速にもみ切れるもの也、九本竪は籠目龜甲形にゐまりよく、石を詰るに丈夫也、水にあふても保ち格別强きものなり、古來は蛇籠の積りは、何程の籠立間に竹何本作りと積りし事也、近年多くは金壹兩ニ付蛇籠何拾何間遣とする事故、九本竪に造るべしと、石蛇籠は七本竪に造る事と成こそ是非なけれ、是等の事第一に心を付べき事なり、

〔京都御役所向大概覺書三〕賀茂川堤石垣間數幷所々川幅之事

一西堤根之蛇籠長延ヲ

三千九百八拾七間半　六尺杖

右蛇籠之間數を以、三重水刎、又は堤根ニ貳つ伏せ疊つ伏せ三籠有之、

一大聖寺殿堤根之蛇籠長延ヲ

百五拾間　六尺杖

右同斷

一東堤蛇籠長延ヲ　但此堤腰と堤と相見申ニ而は無之候、川筋之節道不崩樣に蛇籠伏せ候、乍去前々より東堤と申也、

六百七拾八間　六尺杖

右者上賀茂柊野堤御修復料田畑圍蛇籠、幷今出川口上ル田中領犬馬場塵捨場堤圍蛇籠、二條上ル東側塵捨場圍蛇籠間數之儀、不相定候、水當りニより了簡之上伏之候ニ付、年々增減有之、今程有之間數如此

〔張州府志十七葉栗郡〕山川　鹿子島石籠　在鹿子島村、其長千間、名曰千間猿尾、我國俗謂石籠爲猿尾、

宮田石籠　在宮田村、其長八百五十間、其餘諸村亦有之、然其長不及、故不載、

是は前辨慶枠ニ準

一合掌枠長拾間　內法高五尺、上横壹尺、下横七尺、　此石五坪五合

是は石積根圍ニ築込、或は瀨違〆切水刎井土砂留等ニ遣、

一續枠　長拾間　內法高四尺三寸、横壹間、　此石七坪貳合

此は堤欠所岸圍欠留ニ遣、

一片枠　長拾間

是は欠留ニ遣之、枠內石或は砂利ニ而埋立可致、

〔隄防橋梁積方大概〕一蛇籠壹本　長五間　差渡壹尺七寸　此詰石三合壹夕七才　坪詰算法差渡ヲ自乘シ、長ヲ乘シ圓法ヲ乘シ詰石坪ヲ得ル、

是は大河ニ用

一蛇籠壹本　長五間　差渡壹尺五寸　此詰石貳合四夕七才

是は中河以下ニ用

〔治水要辨〕蛇籠の辨

蛇籠は、往昔より用ゐ來る具也といへども、是を造るに功者不功者ある事也、籠造の人足は、短き竹を竪に遣ひ、長き竹を横竹に遣ふ事を好む、たま〳〵長竹をば短く切て竪に遣ひたがるもの也、是は竪竹の長きは、造るに手廻し不自由にて、捗取らぬ故、短くして手廻し能樣之時は、捗取によれば也、竪竹には隨分長きを撰み用ゆべし、いかにとなれば、竪籠又は布敷等に遣ひ候而も、短竹を竪竹に造る籠は、石を詰重りにひかるれば、出水の時に繼手離れ易く、竪竹の長きは、繼手の離れて切々になる事なき故、保事格別强し、蛇籠は其川々の石の大小に依て、籠も亦大小有べし、大概差渡し壹尺貳寸より貳尺餘にも造る、一尺貳寸より三四寸迄は七本竪に造る、壹尺五寸以

是は谷川下ニ伏越用水等有之場所、谷川洲留、或は山添用水、井路緣築立等ニ遣、

一笈牛　壹組　重り籠、九尺籠三本、

是は菱牛同様之用方、切所水切洲為置候場所、或は用水井堰等何レモ小川江用之、

〔堤防橋梁積方大概〕一大川倉　壹組　重り籠、貳間籠五本、　急流之場所は、尻押、九尺籠貳本、

是は中以下之川急流之場所江用之、且瀬〆切等、水切ニ用而可也、

一沈枠　壹組　内法高四尺三寸、壹丈壹尺四方、　此石貳坪四合

是は石砂利川堤切所築留、或は籠出水中地形緣枠、井溜筋附寄候堤根園ニ相用、尤地形不陸之所ハ、枠柱長短取交組立申候、

一中枠　壹組　内法高四尺三寸、長壹丈壹尺、横八尺四寸、　此石壹坪八合

是は堤切所欠所緣枠籠出緣等ニ用之、水中地形ニも用、

一辨慶枠　壹組　内法高七尺、上横壹丈五寸、下横壹丈三尺五寸、　此石四坪七合

鳥居枠トモ云

是は欠留或は水刎出類ニモ用、蛇籠ヨリ朽無之保方宜し、小石之場所ニ而は其能無之、

〔治水要辨〕辨慶枠の辨

往古より枠の類數品有といへども多くは底のなき類多して、居候處は丈夫に見ゆれ共、滿水の節根を堀時は、詰石下へぬけ崩れ流るゝ也、予建定〇森田が製する辨慶枠は、根の堀るゝに従ひて沈む故に、流るゝ事なし、略〇中石川の荒き川を防ぐ第一の用具也、砂利川沙川にても、大川の水當り強く、外の品にて防難き所には用べし、詰石石川にては大石詰、又砂利川にては矢來の內へ竹簀を當て、砂利を詰て可也、

〔堤防橋梁積方大概〕一鳥居枠　内法高四尺三寸、長壹丈壹尺五寸、　上横六尺貳寸、下横八尺貳寸、　此石壹坪六合五夕

是は用方大菱牛ニ準、水勢強寛見計可有、

一菱牛。　壹組　重り貳間籠三本

是は大菱牛之所に如言、寛急見計可用、小川本瀬〆切等ニ相用可申候、

一尺木垣。　長拾間　根堅〆籠壹本、通貳繼、

是は谷川小川寛流水刎ニ用之、甲州ニ多分用之、

一尺木牛。　長三間　但拾組、九小間、　舗籠三本、並六本、

是は尺木垣ト用方同様也

〔地方凡例錄九〕一尺木牛

これは甲州にて用ゆる、餘國には少し、谷澤小川ニ而、大道具難遣、棚牛、笈牛、菱牛等難用場所ニ仕立、能く水を刎、淵ヲ附るに甚益有、大河ニ而ハ難用立、仕立方ハ、蛇籠長四間、差渡壹尺七寸、籠三本並ニして、合掌木間ニ送り、四本長六尺末口貳寸五分籠ニ通し、貳本宛組合せ、上を拵竹ニ而結る、通し木長六尺、末口壹寸五分、貳間ニ三本ヅヽ、蛇籠横ニ通す、右之割合ニ而長何間ニ而も籠續合せ、合掌木の上棟竹壹本渡し、合掌木毎ニ結付る、棟挾竹貳本、釣緣竹貳本、合掌木之內之方ニ結付る、

一尺木組。

是は右同斷、至極小川堀用水同然之處、欠所水刎抔ニ用ひて、下タニ五間籠一本置、長六尺、末口貳寸五分位之杭木間ニ送り、四本ヅヽ、籠の目ニ通し籠の上三尺程出し打込、石を詰メ横ニ貳タ通り竹緣ヲ當テ、拵竹ニ而結付る、石川ニ而杭根入無之杭箭難仕立處水刎川除ニ用る、杭箭の丈夫成るもの也、

〔隄防橋梁積方大概〕一胴木牛。　壹組　但長貳間 高五尺 横貳尺五寸　此石七合

是は砂石川ニ用ゆる水除也、枝瀬本瀬共水請惡くては破損早し、外の水刎と違ひ、横に水を異直に請てよし、よつて堤根より川中へ異直に懸る、棚牛の埀は能保てば地形へめり下り洲を下へ置、川地形高くなり、自然と川瀬向へ替る、功者ニ伏込ずしては出來ず、甲州釜無川、笛吹川、駿州富士川、安倍川、由比川、興津川、藁科川、朝比奈川、瀬戸川、遠州天龍川、谷川、相州酒勾川、上州上利根川、其外國々石川に用ゆる、元來棚牛、大聖牛、尺木牛、棚木牛、菱牛、尺木垣等は、甲斐國に古へより有之、信玄工夫之川除之由、享保年中以前は、餘國になかりしに、享保以來國々に右類之川除を用る樣ニ成たり、棚牛之仕立方ハ、切破風家根ヲ見る樣成者也、合掌木長貳間、末口四寸位之雜木を貳本ヅツ組合せ、凡四尺小間位ニして、幾組も立る、牛長は其川々の場所ニ應じ無極、棟木長貳間、末口四寸、合掌木之棟木小間ニ壹本ヅヽ引也、梁木同寸間、合掌壹組ニ壹本ヅヽ、桁木同寸間壹小間ニ壹本ヅヽ、砂拂木長貳間、末口三寸、壹小間ニ壹本ヅヽ、棚釣木、長八尺、末口貳寸五分、合掌一組ニ壹本ヅヽ、釣木、貫長六尺、末口壹寸五分、貳組ニ壹本ヅヽ、棚敷木、長壹丈、末口貳寸五分、壹小間ニ五本ヅツ棟挾竹、七寸廻りの唐竹貳本宛、棟木之兩脇合掌木の下を挾ム、右道具を拵結竹（六寸廻りの唐竹六ツ割、より廿の樣にして遣ふ、）ニて入念結立る、拵竹ハ細かニ割て遣ふ程堅りよし、水深ければ、合掌木貳間半にも三間ニもいたし、棚ヲ高く釣る、棚敷木之上に重り籠壹小間ニ蛇籠貳本、差渡壹尺七寸、長貳間にして横ニ置、大川ニて棚牛横幅廣ければ、材木も長尺にして、重り籠も貳尺籠、三間ニも四間ニも致ス也、組立方入方共、人足功者ならでは不出來事也、

〈堤防橋梁積方大概〉一大菱牛　壹組　重り（上棚貳間籠五本、又ハ三本、下棚九尺籠七本、）

是は中聖牛等相用候より少ク水勢寛歟、或は小砂利之場所川除水刎等ニ相用候、菱牛は四本足故、横ニ水を受候而も、保方能有之、

一中菱牛　壹組　重り（上棚貳間籠三本、下棚九尺籠七本、）

〔隄防溝洫志 一〕又大籠出シ、大。聖。牛。ト云フ川除アリ、此ハ甲州釜無川、笛吹川、駿州富士川、遠州大井川、天龍川等ニ在テ、頗ル大造ナル川除アリ、其外上方關東ノ國々大河アリト雖ドモ、大聖牛ヲ用ヒタル有ルヲ見ズ、(近來武州ノ多摩川ニモ此牛ヲ用タル處アリ、)然レバ富士川、大井河、天龍川等ノ達瀬ハ、大聖牛ヲ用ヒザルトキハ、其他ノ水刎ニテ絶テ保ツコト能ハザルコトヲ察スベシ、抑ソモ此ノ大聖リハ、彼ノ元淨法師ノ傳授セル八頭牛ヲ省略シタル者ニテ、川ノ瀬ヲ變ズルニ靈妙ナル者ナリ、凡ソ達瀬ノ右ノ方ニ衝羅(フキカヽリキタリ)來テ崩壊スル處ニ、大小聖牛ヲ居(スユ)ルトキハ、其瀬忽チ變リ、左ニ向ヒテ斜走シ、一夕ノ間ニ向ノ岸ヲ衝キ崩スニ至ル、容易ナラザル者ナリ、既ニ省略シタル大聖牛スラ、其利害ナルコト斯ノ如シ、然ルヲ況ンヤ八頭牛ニ於テオヤ、然レバ皇國ニハ八頭牛ヲ用フベキ程ノ大河ノ無キヲ以テ、世ニ此物ヲ用ルコト無ク、人ニモ知ラレザルナリ、先年出羽ノ國雄勝郡柳田村ノ川岸仙北河ノ横溢ニテ、田畑流沒スルコト多シ、我ガ祖父元庵翁八頭牛ヲ製シ、此ヲ關處ニ居ケレバ、其年七月秋雨ノ降ルコト甚シク、大水出テ川ノ瀬忽チ變ジ、向フ岸ナル開澤村ノ白子森ノ神祠及ビ野原等一夜ノ中ニ川ト爲レリト云フ、故ニ八頭牛九頭牛ハ甚ダ畏ルベキ水刎ニテ、能ク此ヲ用ルトキハ、九州筑後川、奥州北上河、出羽國最上川等、其他諸國ノ大河ニモ、八頭九頭ヲ亦用フベキ場處多シ、上州厩橋ノ虎ガ淵ノ如キ川上ニ、九頭牛ヲ居ヘ置クトキハ、人力ヲ勞セズシテ、利根川ヲ一里モ西ニ移スベシ、隄防製造法ノ世ニ明カナラザル、厩橋城郭マデ淵ト爲ルニ至レリ、浩歎スベキ哉、又其略シタル大聖ト雖ドモ、能ク古來ヨリ居テ、功德ノ有ル場所ト馴レタル仕方トヲ觀テ、自ラモ工夫シ、且ツ自身ニモ仕習ヒテ精ク鍛錬スベシ、

〔隄防橋梁積方大概〕一棚。牛。　拾組　但(四尺小間、九小間、)　重籠、貳間籠拾八本、　但壹小間貳本ヅヽ、

是は砂深ク石砂利、川堤園水刎ニ相用、何組ニ而も一繼ニ結立遣申候、洲ヲ寄セ候器ニ有之候、

〔地方凡例錄 九〕一棚牛

是は勾倍卑キ大川ニ而、砂石押流シ候程之水勢有之場所、籠出前圍、其外水刎瀬違等之場所、富士川、大井川等ニ相用、右兩川ヱ准シ候川々ヱ用ひ、或は堤切所川瀬強押入、容易築留不成場所等ヱ建入、水勢ヲ碎候器ニ有之、

一中聖牛　壹組　重り籠、貳間半籠八本、　尻押、貳間籠三本、

是は用方大聖牛同樣ニ而、其場所水勢強弱見計相用候、

〔地方凡例錄九〕一大聖牛

此川除ハ、上方關東遠國共、餘國ニハなし、駿州富士川、遠州大井川、天龍川にあり、甲州之内ニも、釜無川之流、富士川の上ニあり、至て荒川大石流るゝ程の石川ニて、本瀬一圖ニ突當り、堤石出、籠出等難保場所、川上ニて荒水を切、或は籠出之前圍、本瀬第一之川除也、大造成もの故ニ、通例之川ニハ用ひがたし、信玄公時代より初りし川除、元ハ甲州之大河ニ計用ひたるよし、享保之比より大井川、天龍川の川上ニ用て、悉く利益あり、又大々聖牛とて、大道具より格別之大木ヲ以て仕立、夥敷入用相懸る故、大々聖牛ハ容易ニ不仕立、先ヅハ大聖牛ニ而難保程之場所もなし、大聖牛之形前廣く、跡之方細く低くして、三角成形のものなり、壹組牛長五間、前合掌木梁木砂拂木長三間、末口五寸、中合掌木前立木長貳間半、末口五寸、跡合掌木長貳間末口五寸、棚敷木水切木釣木長貳間半、末口五寸、棟木長五間、末口六寸、桁木長五間、末口五寸、都て材木ハ松ニ而も雜木ニ而も用ゆ、合掌木壹組宛、前中跡三組建、棟挾竹八寸廻り拚竹結付、六寸廻り重り籠長三間、差渡壹尺七寸拾貳本、合掌木之間ニ六本ヅヽ、貳ヶ所横ニ置、尻押へ籠貳間半、差渡壹尺七寸三本、棟木桁木壹ヶ所ニ詰寄せたる上に横ニ懸る、尻之方堤岸通りニして、前之方川中ニ成る樣ニ出す、大場ニハ二組も懸る川除第一番の大道具也、大聖牛ハ餘國に無之普請故、切組大工、拚竹結立方川入共、職人幷人足宰領共、仕馴功者成るものニ無之而は、決而出來ざる普請也、

タルコト也、

〔甲斐國志山川二十〕一荒川　金峯ノ東三繋ノ南ヨリ發源ス、〇中略武田氏ノ時、大ニ防河ノ役ヲ興シテ、構流ヲ治ム、荒川第一堤ハ、信虎、信玄ノ所築ト云傳フ、神明、御崎ノ兩社ヲ置テ、堤防ノ堅牢ヲ祈ル、

〔新編相模國風土記稿足柄上郡十九〕班目村

文命社　西境怒田村ノ地ニアリ、享保十一年四月、文命堤修堤ノ時、鎭護ノ爲神禹ヲ祀ル處ナリ、時ニ官ヨリモ百金ヲ賜ヒテ祭祀ノ費用ニ充ラル事ハ、碑銘ニ詳ナリ、圓石一顆長四寸五分、黑赤色、ヲ神體トス、別當ハ千津島村寶生院兼帶セリ、當村及ビ千津島、岡野、壗下、竹松、和田河原、總テ六村ノ鎭守トス、例祭四月朔日、護摩ヲ修行ス、領主ヨリ神酒ヲ奠ス、是日社頭ヨリ根叉堰水門ノ邊、及ビ堤上ニ農具ヲ排列シテ鬻グヲ例トス、拜殿アリ、

〔新編相模國風土記稿足柄上郡十六〕川村岸　文命社、石祠ナリ、水大土禹神文命宮、享保十一年丙午夏四月、奉ニ官命一田中丘隅欽立ト彫レリ、傍ニ一碑ヲ建ツ、標シテ文命西堤碑ト云文曰、故岩流瀬大口堤、今改レ名曰ニ文命堤一、丘隅欽ニ街官命一、來修レ之、遂建ニ神禹祠一、因以名レ之、事詳ニ東碑一、其賜ニ官庫金二十兩一、其事載ニ桃李一、其餘植ニ栗栗一、以爲ニ歳時祭祀資一也、乃命曰、百爾子弟、擔レ土運レ石、歳以爲レ例、補ニ壩潰一而塞レ神、勉レ勞勿レ怠、鑑勒レ石、置ニ傍一諸千歳、享保十一年丙午夏五月二十五日、武藏國川崎田中丘隅立、

〔新編相模國風土記稿足柄上郡十三〕吉田島村

水神社　酒匂川堤上ニアリ、石ヲ疊テ建ツ、文化中新造スル所ナリ、水災鎭護ノタメ、毎年二月十五日、川施餓鬼ヲ修行シ、大般若經ヲ轉讀ス、

〔伊豆日記上〕かどのはらより谷川にくだりいとおほきなる丸木橋をわたれば田澤の里也、のぼりゆく道のかたはらなる木深き所に禹廟たてり、こは此かはのみかさまさるをり、やまぎはの田はたくづれ、この橋をしもながす事のをば〳〵ありければ、さと人の愛にいはへるとなむ、

〔堤防橋梁積方大概〕一大聖牛壹組　重り蛇籠、三間籠拾貳本、　尻押貳間半籠三本、

堤防祭禳

〔石川正西聞見集乾〕やはぎ川海邊迄四里計ながれ候、前の堤に昔は何もなく候所に、兵部殿柳をさゝせ、是も毎年々々茂り候まゝ、枝をかり堤につみおき、壟木にも又は里々へも賣申候、

〔桃源遺事五〕一水戸城邊の仙波の池は、湖水ともいふべきほどの池也、其中に堤あり、長サ廿八町此堤を行かふ人多し、されば炎天に木蔭なく、行人の暑にくるしまんことをおぼしめし、又其景色のために、西湖の蘇堤になぞらへ、兩岸に楊柳をひしと御植させ、やなぎがつゝみと御名付らる、それよりして、夏日のあつき日も柳陰つらなり、かげ涼しく、堤にいかふもの多く、四時の景色又ことなり、○下略

〔江戸名所圖會一〕柳原封疆　筋違橋より淺草橋へ續く、其間長凡十町計あり、享保年間此所の堤に悉く柳を栽させらる、寛永十一年の江戸繪圖には、柳堤とあり、堤の外は神田川なり、

〔雍州府志二神社〕夏禹王廟、○愛宕郡　相傳、人王八十五代後堀河院安貞二年、大風雨鴨河洪水泛濫、使勢多判官爲兼防河水、爲兼茫然失所計、于時異僧忽然來告爲兼曰、欲防此水、則於鴨河東岸、南建夏禹廟、北建辨財天社、須祭之、言終異僧入寺不見、寺今目疾地藏堂也、其時在四條河原東田間、故世謂畔地藏、然則異僧地藏之現身乎、爲兼爲奇異之思、於茲建兩社而祈之、水忽乾、夏禹廟今不知其處、或說四條南鴨河西中島、至近世有稱晴明塚者、此邊有夏禹廟也、未知然否、辨財天社始在大和橋北、今絶、斯堤上未有家居時、有大苦楝樹、則此處也、爾後民家並樣、苦楝樹亦爲烏有、然到今斯處謂辨財天町、

〔草茅危言三〕水利之事

一京都加茂川ハ、往古ハ漲溢甚シク、都人昏墊ノ害舊記ニ多見エタリ、夫故色々手當有テ、防鴨河使等ノ官モ設セラレ、又四條通ノ東岸ニハ、夏禹王ノ廟等建テ祀ラレタリ、然ルニ後世イカ成故ニヤ、右水害大ニ消歇シ、防鴨河使モ一向ノ閑散ト成、武門ヨリ其代リノ職司抔モナク、禹廟ハ今ニ存スレドモ、俗ニ目病ノ地藏ト呼テ、像モ少シ作リ替タル樣ニ見エテ、昔トハ大ニサマカハリ

堤防樹竹木

先堤にか丶はりなき町々の者へ諭しけるに、素より明君の御仁德を仰ぎ奉る折節なれば、草の風に靡くがごとし、況や村々におゐてをや、庶民子の如く信伏し奉りたるは、有難かりし事どもなり、此に政府へ願ひ奉り、同年拾二月四日を、大野木堤御冥加自普請の鍬初とぞ定ける、かくて其日に至れば、町在とも銘々其所の印を付たる幟をたて、此日集る所の人數貳千餘人、自普請の事なれば、町の者はけやりをうたひ、在の者は長持歌をうたひ川を浚らへ土砂を運び、數百の幟風にひるがへり、其聲遠村迄も響き渡り目ざましかりける有さまなり、〇中略扱押切は、志水甲州侯の御領所にて、大助は庄屋なれば、鍬初四日に可ㇾ致事つぶさに上達しければ、いしくも出かしたりとて大に稱譽し給ひ、侯も場所へ御出張あらせられ、御冥加に寄集りたる庶民に奇特の旨仰給ひ、赤飯長持十二棹を下し給ふ、〇中略御大夫樣方を初め奉り、御國町兩御奉行樣方、其外官士之御方々樣、折々場所へ被ㇾ爲ㇾ入、御稱詞被㆓下置㆒ける、猶も町方御役所において、御國御奉行所樣御立合被ㇾ遊、格別の御稱詞を以、御酒御肴等被㆓下置㆒ぬ、かく難ㇾ有御事は折々にて、其一二をぞ誌し奉りおき侍る

〔續農家貫行二〕堤植物

川除堤區等の自普請は、正月二月の隙ある内の仕事也、彼岸よりは農業始り、外の事にか丶りては、耕作のさはりとなれば、古より春のわざとはなしおけり、堤には刺柳薄葭を仕立べし、細葉柳は堤の腹へさし、堤根へは丸葉楊よし、柳の枝一二尺を伐、寒中水にひたして、立春の後さしてよし、根を張て生付に、柳は土を〆るものにて、土堅まりいつく也、薄は八九月頃六尺四方の内⁙の目に植て、根を張合也、薄は土を砂にするものにて、根かぶ大に成て、堤〆まり、風吹ても土砂を吹立ず、葭は五月節葉付の根を植ては、勿論節を殘しては、蛇籠の間へさして生付る也、葭は根深〻〆げりて、增水の川除となれば、堤根には極てうふるなり、

り、斯てこそ如何成大雨にも水溢れずして、川添の里人も夜を安く寐、おもふ儘に農業を營みたり、さればこの堤を築くとて、親勝晝夜馳廻りて下知をなし、かの門を過ていらずといへるさまなりければ、民も喜び勇て、頓て頌を作りて、口々に諷ひ〳〵土石を運ぶ、爰に伊形庄助名は質、字は大素とて、高名の詩作り有り、是を聞て詩經の雅頌の類也とて、韻語に寫して、湯々九章どす、既に樂洋集に入て世に梓行せしかば、今爰に洩しつ、

〔御冥加普請之記〕今茲天明三卯の年の秋、大雨しきりに降續、庄内の川洪水して、枇杷島の川上大野木村の堤大に崩れ落て、危きこと咫尺にあり、○中略此よし言上し給ひければ、明君○徳川宗睦御諡源明公是を聞せ給ひ、國内の災厄、寡人不德の罪なりとて、大に歎かせ給ひ、熱田の太神宮へ雨晴の祈誓をかけよと命せられ、官士早馬にてかしこに馳付給ひ、神職をして幣物をそなへさせられ、明君の御旨趣を祈願したまひけるに、國主の至誠靈神納受し給ひけん、俄に神風吹起り、忽雨止空晴けることそ、不思議といふも愚なれ、○中略去ほどに明君樣熱田太神宮へ晴雨を祈誓し給ひける事を、堤下村々の人民傳へ聞ていひけるは、若風雨止ずば、防留る事あたはず、終には切入、田畑人家ともに、水底のみくずとなり、人の命にもかゝはるべきに、神明の御德によりて、風雨のやみしは、寔に難有御事ならずや、是則明君樣下民を愛させ給ふ御仁德による事なれば、恐れながらも此御禮事申上たしとさゝやきける、○中略

爰に押切の庄屋大助といふ者あり、此事を聞て同所の利助に言けるは、○中略先づ其根元を尋ぬるに、大野木の難場より起りし事なれば、其堤へ出て一鍬宛にても川の砂を取りて、丈夫附の自普請せば、おのづから御禮の志にあたらんか、たとへ一鍬にても浚らへば、川は深くなり、堤は夫だけの丈夫なり、則下村々の爲也、是を御冥加に致すべしと欬議せん事、いかゞあらんと言ひければ、大助手をうちて、是こそ究竟の事也、御禮馬に勝れりとて、夫より兩人示し合、此事を發起し、

テ、日々土ヲ運ビ、堤ヲ築シメラル、窮民ドモ大ニ悦ビ、程ナク普請出來立、田畠舊ニ復シケルト也、其節窮民ノ中、誰トハ不レ知歌ヲ作リ、土ヲ運ブ者ナメテ謡ヒケルハ、稻津彌右衛門ハ神カ佛カ死ヌル命ヲ助ケヤルト、某〇龜井道載十九ノ時、彼地ニ遊ビシニ、肥後ヨリ島原ノ方ニ赴クヲ、彼地ノ醫者何某一里餘リ送リシガ、其路ニテ右ノ唄ヲ無拍子ナル田舍曲(ブシ)ニテ歌ヒシヲ聞ケリ、

〇按ズルニ、此俗謠、銀臺遺事ニハ、あのやいなつ樣は佛か神かしぬる命をたすけさすニ作ル、

〔銀臺遺事〕一寶曆五年、當國〇肥後の洪水こそ夥しかりつる事なれ、〇中略やうやう水は落たれども、渺々たる曠原と成て、またも雨降水かさまさらば、八代一郡の者もみな魚の餌となりぬべくぞ覺へける、されば此堤速かに築ずんば有べからずとて、老臣評議す、扨もこの川は木綿葉川とて、世に聞えたる大河なるが、しかも球磨の高山より落ちて、流の急なる事矢を射るがごとく、萩原の堤はその的になぞらへたれば、是を築き留ん事又なき大事なり、前國主加藤肥後守忠廣朝臣の時、加藤右馬允正方とて、文武兼備の老臣心力を盡して築立たり、今の世には正方程の者あるべくもなし、いかゞはせんと案じ煩ひたるに、稻津彌右衛門頼勝とて、郡目付なりけるもの進み出て、その正方とてもよも鬼神にては候まじ、同じ人ならんには、それが仕たらん程の事、何條得せぬ事候べきやといふ、實にもこの男は飼にはちまじきものなりとて、其由君に告奉りければ、則頼勝に任じ給ふ、頼勝承りて、凡男女年十五以上土を運び、石を負ん者には、みな錢を取らすべきよし郡中に申觸、其強弱を六品に分つ、たとへば、

男上百五銅　中八十四銅　下七十銅

女上八十四銅　中七十銅　下五十六銅

右の定にて、日毎にあなへければ、我もわもときおひ集る男女數萬人なり、頼勝遊廬をめぐらし、水際より三十丈四十丈程此方に、本の廣さ二十餘丈いたゞき四丈五尺程の堤を數十町築きた

甲州蓬澤、西高橋兩村、受濁川剩水、而大半作沼數十年、隣近七邑亦同、兩村爲甚、天雨則非船不可行、民荷擔而立、河魚之疾、與溺死俱焉、禾黍不實、饑莩盈野、將爲不毛之地、元祿甲戌、〇七年櫻井孫兵衛源政能、爲郡到于邑、民庶涕泣、請潴治之計、政能諾、明年乙亥、〇八年歸愬老臣、其事甚勤、國君恤之、明年丙子、〇九年新命政能、撿地鳩功、自西高橋至落合村、堤凡二千一百餘間、開泆決塞、濁川導流、遂合笛吹川而止、於是土地沃燥、稼穡蕃蕪、民可以居、租可以入、政能之死久、而兩村之民、愈不能忘、乃奉政能、爲地鎭、建祠、每歲祀之、嗚乎生益於人、則死祀之、古之典也、余恐後來失其所由、遂書勤石云爾、元文戊午七月齋藤六左衛門藤正辰、

〔享保集成絲綸錄二十四〕寶永元申年八月

覺

今度洪水ニ付所々堤破損之所、私領方之分、地頭より普請申付來候所ハ、無油斷修復可被申付候、且又百姓夫食無之候はゞ、不氣橾ニ地頭より救可有之候、以上、

八月

〔肥後物語〕稻津彌右衛門水損ヲ救ヒシ事

稻津彌右衛門ト云人ハ、誠實ニテ智略アリ、文官ニテ無事ナリケル由、當侯〇細川重賢入部ノ初、郡方總率行仰付ラレ、納方便利ニテ、農家殊ニ感服セリ、其頃玖磨川大水ニテ堤決シ、民家田畠夥ク破損セシニ、普請役ノ面々追々遣ハサレ、種々世話シケレドモ、民ノ難儀彌增ニシテ已ニ餓死ニ及バントシケル故、彌右衛門ニ仰付ラレ、其方一存ニテイカ樣ニモ取計フベシト有リシニ、彌右衛門畏リ其里ニ罷越シ、大簀小簀夥ク作リ、右破損シケル處ノ百姓共ヲ呼集メ、此節水損ニ付、其方ドモ危難ニ及ブ段、御上不淺不便ニ思召ス條、公儀ヨリ食物ヲ與ヘラレ、賃錢ヲ以テ雇ヒ玉フニ付、隨分出精致スベキ由申付、大簀ハ何程小簀ハ何程ト賃錢ヲ極メ、男女老若押ナメ相應ノ簀ニ

〔加越能山川記〕千保川

千保川は礪波郡にあり、此川は庄川の枝川也、○中略此川庄岩辨才天の南北江分て流る、東庄川大門川江流行、南は千保川高岡南橋を流れて、守護町村の向にて、小矢部川へ落る、同所木町の西に渉る舟は、氷見伏木浦江の往還也、川上庄村より千保川の流る間、川筋五里餘也、正保、慶安の頃、太田村の下柳瀬村にて、年々大分川除普請有といへども、水千保川江六七歩流る故、大分田地水損有り、其上西江水過半流行時は、高岡瑞龍寺境内危故、小松より御下知有之、材木切石等を以て、夥く防せらる、奉行役人請て普請有といへども、水多く流行事不止故、折々老中も出て下知せらる、是を柳瀬普請と云、其後寛文十年川除奉行、喜多岡氏、安見氏、馬淵村、田中村、大場等古よりなき庄川と、無二無三にせき切、東大門川江水又六七歩流行、其後延寶貞享の頃より東庄川江流行、

〔甲斐國志山川部二十七〕一濁川　上流ハ萬力筋ニ詳ナリ、立河郷六箇村渠、遠光寺村三水門ノ下流等相加ハル、此川國玉、里吉村ノ界ヲ南流シ、蓬澤ヲ歷テ、增坪村北横手堤ニ抵リ、一曲シテ東へ向ヒ、西高橋村ノ南ニテ笛吹川ニ入リシカド、笛吹川瀬高ニナリ、河尻壅塞シテ、平常水患ヲ被ル者凡九村、就中蓬澤、西高橋尤甚シトス、田園過半沼池トナリ、鮒魚多ク生ズ、當昔物産ノ一品ナリシト云、元祿七年、文昭廟○徳川家宣本州御領國タリシ時、代官櫻井孫兵衛源政能、民患ヲ覩ルニ忍ズ、努力シテ濬治ノ計ヲナシ、翌年其事ヲ以聞ス、同九年政能ニ命ジテ、西高橋ヨリ南ノ方笛吹川ノ隄後ニ沿テ、增坪、上村、西油川、落合、小曲、西下條村境ニ致ルマデ、新ニ渠道ヲ通ジ、土堤ヲ築クコト凡貳千百五拾間、廣四五間ヨリ六七間ニ至ル、以テ濁川ヲ導カシム、渟水一旦ニ泄テ、田園盡ク舊ニ復セリ、民其洪恩ヲ感戴シ、乃政能ノ生祠ヲ立テ祀之、蓬澤村庄塚ニ在リ今ニ至ルマデ歳時懈ルコトナシ、元文三年孟秋、從子齋藤六左衛門正辰祗役シテ此ニ至リ、石ヲ祠前ニ樹テ、地鎮銘ヲ勒セリ、

〔甲斐國志附錄百二十〕地鎮銘

約シテ新田ト爲シタリ、享保中ニ至テ、三河笛吹、釜無、荒川ニ括ノ堤ヲ築キテ、釜無川モ龍王ヨリ今福新田ニ至ル一道ノ流レトナレリトゾ、古老ノ說ニ、雁行ニ差次シテ重複セル堤ハ甚ダ利益アリ、其故如何トナレバ、河邊ニ棄地アレバ、洪水ノ時自由ニ流テ激怒セズ、堤防壞決ノ患ナシ、水漸々ニ耕地ニ入レドモ、敢テ秋稼ヲ害スルニ至ラズ、砂石モ從テ流レ、河底ニ滯ルコトナシ、若一堤決崩ストモ、次堤相支テ大破ニ至ラズ、今ノ堤ノ一所決潰スレバ、砂石ハ數村ノ田圃ヲ埋メ、數年荒廢ノ地トナルガ如キニハ非ズ、本州三郡ノ諸水、皆大山高嶽ノ溜ニシテ、洪水アル每ニ砂石ヲ押出スコト夥シ、下流ハ富士川一道ニ歸シテ、河內ノ隘口ニ入リ、拾八里ヲ經テ駿海ニ注ゲバ、砂石ヲ流去ルコト能ハズ、特ニ中郡ハ卑地ニシテ、上古ノ湖心トモ謂ベキ處ナレバ、河身ヲ約シ堤ヲ一道ニ築ケル以來、未許多ノ年曆ナラザレドモ、砂石河底ヲ塡メテ、平地ヨリ高キコト丈ヲ以テ計ルベシ、洪水ノ時ハ每ニ堤上ヨリ溢レテ災害ヲ來セリ、山嶽ノ押出ス砂石ハ無限、堤ヲ築ク人力ハ有限、堤ヲ高スレバ河愈高クナリ、後世終ニ修築シ難カランコトヲ恐ルト云リ、

〔江戶名所圖會十九〕隅田河堤　深堀橋にはじまり熊谷に至る、行程凡拾六里、是を熊谷堤と云、天正二年、小田原北條氏これを築たりといへり、

〔新編武藏風土記稿二十葛飾郡〕總說

利根川舊權現堂川江戶川　國界ヲ流ル、水元上野國利根郡ヨリ出ルヲ以テ此名アリ、○中略此川北ノ方埼玉郡中新井村ト下總國葛飾郡中田宿トノ間ニテ、上利根川ト渡瀨川合流セル所ヨリ以下、當郡ニ係リ、ソレヨリ栗橋關所房川渡ヲ南流シ、幾許モナク二派ニ分レ、東ノ方下總國中ヘ流ルヽヲ赤堀川ト呼ビ、其下流中利根下利根等ノ名アリテ、常陸國銚子浦ニ達ス、一派ハ猶國界ヲ南流シ、權現堂村ニ傍テ東南ニ屈曲スル故、此邊ヲ權現川ト呼ブ、其灣曲ノ所水勢勵シ、故ニ大堤ヲ築テ防禦ス、長五百間、高一丈八尺、最堅固ニ造ル、是天正四年始テ築ク所ナリト云、

宮ノ川ヨケヲ被成、其上彌三郎殿御意ヲ以テ、宮林ノ木ヲ祝師衆マヽニ被成、小林尾張殿親〇貞享行ニテ宮林ヲ伐リ、フダヲ立被納候、然者小林和泉殿宮林ヲ爲伐間敷由、二三度押被申候へ共、祝師衆皆々不用シテ、彌三郎殿御下知ニテ、用ノ程伐候而、宮ノ致川ヨケ申候、

〔甲斐國志山川二十〕一赤巖村龍王　又高巖トモ云、〇中略南方壁絶ル所ヲ龍王鼻ト云、深淵瀰漫タリ、是ヨリ河灘東南ヘ向ヘリ、府南中郡百數村ハ、皆水下ニ在リ、或時ハ荒川ニ會シ、或時ハ笛吹川ヲ衝突シ、亂流極マリ無シ、八代郡石和、二宮ノ邊ニ奔溢セシト云、武田氏ノ時、治水ノ役ヲ興シ、御勅使川ノ水ヲ激シテ赤巖ヘ向ケ、十六石ヲ置テ水勢ヲ殺ギ、釜無川ト順流セシメ、又赤巖一ノ堤防千有餘間ヲ築ク、其上ハ巨木欝蒼タリ、命ジテ公林トシ、敢テ斧斤ヲ入レシメズ、實ニ無窮ノ功ト謂フベシ、河流ノ間ニ民居ヲ移シ、龍王河原宿ト唱フ、永祿三申八月ノ印書ニ、於龍王川除作家令居住者、棟別役錢可免許トアリ、是時ヨリ龍王ヲ祀ルガ故ニ、村名ト爲リシナランカ、今其祠ナシ、〇中略古時本州治水ノ難場ト稱セシハ、龍王、指出、近津ノ三所ナリト今ニ語リ傳フ、西八幡村モ防河ノ爲ニ半役貳百八拾四石九合古高ノ折中ナリヲ免許セラル、公林貳拾七町餘、今過半流亡ス堤長千百餘間アリ、古堤ヲ信玄堤ト云、

〔甲斐國志山川二十八〕信玄堤　一ハ玉川村ノ北ヨリ起リ、築地新居ニ至ル、一ハ築地新居ヨリ起リ飯喰ニ至ル、一ハ飯喰村ノ北ヨリ起リ河西村ニ至ル、一ハ河西村ノ西ヨリ起リ山ノ神村ノ西ヘ續ク、其下ハ今ノ括堤トナル、一ハ布施村大安寺古寺家ノ邊ヨリ起リ西花輪ノ城内ヘ連ナル、其下ハ今龍ノ内堤ナリ、又布施村ノ東ニテ東花輪村ノ西ノ宅地田間ニ堤ノ形間存ス、皆歴行ニ差次シテ重複セリ、本州處々ニテ信玄堤ト稱スルハ、皆武田氏領國ノ時所築ト云、就中此筋ハ古ヨリ水菑多キ故ニ、堤防完固ナリケン、今ニ其形存シ、其名ヲ傳ヘダル所少ナカラズ、皆今ノ川除堤ヨリ東ヘ距ルコト拾餘町許ニシテ、中間ハ砂地ナリ、然ルニ承應、慶安ノ頃ヨリ、州中ニ新田五六萬石ヲ開キ、此邊モ河身ヲ

去亥年東海道筋天龍川、大井川、安倍川、富士川、相模川井信州千曲川、犀川通御普請ニ付、此入用ハ、伊勢、三河、遠江、駿河、伊豆、相模、信濃國甲州郡內領江、高百石ニ付銀貳拾九匁九分ツヽ、國役掛リ候筈ニ候、

一右同斷關東筋利根川、江戶川、小貝川、鬼怒川、荒川、烏川、神流川、通御普請ニ付、此入用ハ、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野國江、高百石ニ付、銀貳拾九匁九分ツヽ、國役掛り候筈ニ候、

一右同斷下野國稻荷川、大谷川、竹鼻川、渡良瀨川通御普請ニ付、此入用ハ、下野國江高百石ニ付、銀貳拾九匁九分ツヽ、國役掛り候筈ニ候、

一右同斷越後國保倉川、關川、阿賀野川、魚野川、飯田川、信濃川通御普請ニ付、御入用ハ、越後、出羽國江高百石ニ付、銀貳拾九匁九分ツヽ、國役掛り候筈ニ候、

右入用金、公儀御取替金を以相仕立、十分一ハ從公儀被差加之、其餘ハ右國々御料私領寺社領共、前書之通、當子年國役金村々より取立之、同十月中迄ニ、御代官小笠原甫三郎、中山誠一郎兩人之內江案文御聞合、同十一月晦日限、右同人方江御納可有之候事、

一寺社領之分、御料近所ハ、其支配之御代官江取集候間、私領近所ハ、其所之地頭取集、是又右同人方江御納可有之候事、

一拜領高井込高ハ勿論、都而其村々有高江掛り候筈ニ候、右掛り高金納相濟候ハヽ、銘々知行高別紙案文之通、美濃紙帳面ニ相認、尤寺社領之儀も、最寄ニ而取集候分、是又外書之通書加、御代官請取手形相添、大手御番所後御勘定所江御差出可有之候事

子九月　　　御勘定所

〔妙法寺記下〕永祿二己未正月申日、雪水出候而、悉田地家村ヲ流シ候、就中此年二月信州へノ番手ヲユルシ候而、又谷村御屋敷普請、同ツボノ木又サイカチ公事ナドヲモ、祝師衆計不致、ユルシ候而、

一高拾六石　本松寺妙善寺領

上總國山邊郡貳ヶ村

此高役銀四匁六分八厘八毛　但右斷

總高合六千八拾石三斗八升五合四夕四才

此高役銀壹貫七百八拾壹匁五分五厘三毛、但後藤常是包、

此金貳拾九兩貳分、銀拾壹匁五分五厘三毛、

右者去丑年關東筋利根川、江戸川、小貝川、鬼怒川、荒川、烏川、神流川通御普請ニ付、上總國高役金給知村々并最寄寺領之分共當寅年納分、書面之通取立之、御代官野村彥右衛門方江相納申候、以上、

天保十三寅年十一月

鳥居甲斐守組與力　吉田百助　〇以下二人略

遠山左衛門尉組與力　赤門丈右衛門　〇以下一人略

御勘定所

〔太平年表 四篇 七〕文久元年九月廿六日、御勘定奉行松平出雲守より達書付、川々御普請に付、國役金當酉年取立候間、別書付弐通相遣申候、右國々之内御領分有之候は、高役金可被相納候事、右内藤紀伊守殿へ伺之上申達候事、　去る申年東海道筋天龍川、大井川、安部川、富士川、相模川、[illegible]信州千曲川、犀川通御普請に付、此入用者、伊勢、三河、遠江、駿河、伊豆、相模、信濃國、甲州領之内へ高百石に付、鐚廿九匁づゝ、國役懸り候普請に御座候事、　右國々關東筋利根川、江戸川、小貝川、鬼怒川、荒川、神流川通御普請に付、此入用者武藏、安房、上總、下總、常陸、上野國へ高百石に付、鐚廿九匁九分づゝ國役金懸り候普請に御座候事、右同斷下野國[illegible]箒川、大谷川、竹鼻川、右之川々御普請、且巴波川、小川、其外に渡良瀬川通御普請に付、此入用には下野國へ高百石に付、鐚十九匁九分づゝ、國役金懸り候普請に御座候事、　右同斷[illegible]候關保倉川、鯖川、阿賀川、魚野川、[illegible]田川、信濃川通御普請に付、此入用者越後國出羽國へ、高百石に付、鐚廿九匁九分づゝ國役金懸り候普請に御座候事、　右入用金公儀御取替を以相仕立、十分一公儀より被差加之、其餘は右國々御料私領寺社領共割賦之通、當酉年賦役金村々より取立候間、當十月中迄に御代官へ清水孫大郎、安藤傳藏兩人之内へ[illegible]文御間合十一月三十日限り右同人方へ御納可被成候事、

〔德川禁令考 後集 五十九〕元治元子年九月

川々御普請ニ付國役金書付

(雜件錄四)川々御普請ニ付國役金納目錄

覺

拜領高五千石

一高四千三百四拾五石七斗四升九合四夕四才　上總國山邊郡拾八ヶ村

但拜領高幷込高改出新田共

一高九百五拾石六斗七升貳合七夕　下總國香取郡六ヶ村

但右同斷

一高百拾四石九斗四升七合八夕　下總國匝瑳郡壹ヶ村

但拜領高幷込高改出新田共

一高貳百石三升三合五夕　同國埴生郡貳ヶ村

但右同斷

一高四百貳拾六石九斗八升貳合　同國千葉郡壹ヶ村

但拜領高幷改出新田共

一高貳拾六石　同國葛飾郡壹ヶ村

但拜領高

高合六千六拾四石三斗八升五合四夕四才

此高役銀壹貫七百七拾八匁八分六厘五毛、但高百石ニ付銀貳拾九匁三分、兩替六拾目、

此金貳拾九兩貳分、銀六匁八分六厘五毛、

外

御朱印地

右國役掛候國々　武藏、安房、上總、下總、常陸、上野國、

高合三百六拾九萬百五拾八石餘

越後出羽川々國役普請

右國役掛候國々　越後出羽國

高合貳百六萬九千六百四拾六石餘

下野國川々國役普請

右國役掛候國　下野國

高合七拾五萬七百拾三石餘

（去ル亥年取立不足　去寅年御普請金）

一金八萬貳千百三兩、永五拾文、

内（金八千貳百拾兩壹分、永五拾五文三分、　十分一御入用）

（〇金七萬三千八百九拾貳兩二分、永貳百四拾七文七分、　九分國役割）

去寅年御定金不足

一〇金五千貳百三拾八兩壹分、永百八十貳文四分、

〔　〕印貳口　合金七萬九千百三拾壹兩、永百八拾文壹分、（國役割當時難出可取立分）

右國役掛候國々　總高合九百萬七千九百八拾九石餘、但（高百石に付銀五拾貳匁七分）

右は東海道筋、關東筋井越後、出羽、下野國川々御普請御入用國役割、御料井萬石以上以下寺社領共、一統觸出、當卯十一月晦日限、御代官安藤傳藏山田佐金二兩人之内江相納候樣、相違候積御座候、且御朱印地除地寺社領高役金之儀、御料近所は最寄御代官江取集、私領近所は其所之領主地頭江取集納來候分、是迄之通相納候樣、向々江申達候樣可仕と奉存候、依之此段申上候、以上、

卯九月

國民を役して營上より一分通りの費用を賜る、

〔幕制彙纂六〕一天明七未年二月五日、御用番水野出羽守樣江、領分大水にて、浪除押切村々難儀候種夫食不殘流失、田畑及亡所、山崩等有之に付、國役普請願出る、

但文言略之

土屋能登守

〔川筋御手鑑〕卯九月廿日周防守殿江　京阿彌を以上ル、跡御廻し、同廿二日濟、

小印　清水熊之助

川々國役掛

周防守殿

川々御普請に付、國役金取立之儀、申上候書付、

御屆

小印　小栗上野介

同　小出大和守

同　織田和泉守

同　小野友五郎

同　御勘定方

當月十一日伺之通被仰渡候、東海道筋、關東筋、并越後出羽下野國川々御普請に付、御入用金高之內國役割當、卯年取立候分、左に申上候、

東海道川々國役普請

右國役掛候國々　伊勢、三河、遠江、駿河、伊豆、相模、信濃、甲州郡內領、

高合貳百四拾九萬七千四百七拾貳石餘

關東筋川々國役普請

〔續太平年表十二〕弘化四年五月十七日、關東川々御普請ニ付、立花左近將監、松平備後守、龜井隱岐守、九鬼長門守、木下左衞門佐、小笠原土用太丸、鍋島紀伊守、松平近江守、佐野壹岐守、細川豐前守、右御手傳被仰付、道て諸家拜領物被下物は如例

〔武德編年集成五十五〕慶長十四年二月四日、今日命令アリ、尾州ノ川除堤、去年大水ヲ以テ破壞ス、美濃國ノ給人ハ百石ニ人夫一人ノ積ニ是ヲ出、民役ハ高百石人夫一人ノツモリニ是ヲ出シ、築立べキ由令ヲ下シ玉フ、駿府ノ近臣ハ其役夫免許ト云、

〔甲斐國志山川二十四〕一近津堤　河中島ノ東北ニ在リ、笛吹川、重川、三日川會同シテ一流トナル、其南畔ニアル堤ナリ、昔ハ笛吹川此處ヨリ南流シテ金川ニ合シ、石和川ト呼シト云、何頃ヨリカ、築堤轉流、笛吹川ト改稱ス、石和川ノ古道ハ鵜飼田ト爲レリ石和川田ノ間ヲ流レテ山梨、八代ノ郡界ヲ爲ス、相傳云、萬力筋ノ差出、北山筋ノ龍王、大石和筋ノ近津ハ三箇ノ大難場、國役御普請所ナリ、水下貳拾村アリ、所謂八田、市部、下平井、窪中島、四日市場、廣瀨、唐柏、小石和、東高橋、河內、今井、砂原、井戶、東油川、大間田、増利、大坪、白井河原、上曾根、下曾根是ナリ、上野左近家記云、元祿二年己巳、同九年丙子、近津堤一國御普請アリ、大概金貳千兩餘ト聞ク、

〔德川禁令考五十九堤川除〕享保五子年

川除御普請國役ニ可申付由、被仰出候儀ニ付御書付、

今度日光大谷川、竹ヶ鼻川川除御普請御入用之事、下野國中國役に可申付候、但右入用高五分一ハ御入用ニ相立、殘分ハ御料私領寺社領百姓ニ可申付候、依之總テ向後國々川除御普請御入用之儀、五分一ハ御入用ニ相立、寬年より拾分一公儀御入用ニ成殘分爲國役御料私領寺社領百姓役ニ割掛可申候、若入用大分之時ハ、一國ニ不限、隣國迄も割合可申候、

子五月

〔嶺尻四十一〕此春享保七年坂東鬼怒川、小貝川、利根川等の塘を修築せしめ玉ふ、武。州。常。州。上。野。の國

美濃國川々　　丹羽若狹守

右之通、御普請御手傳被仰付候、承合有之候はゞ可被談候、尤堀江荒四郎、井澤彌惣兵衛相談可被勤候、其方儀は彼地江罷越不及候、右ニ付相伺候儀は、雅樂頭江可申聞旨、御手傳之面々江申渡候間、可被得其意候、

堀江荒四郎
井澤彌惣兵衛江

大井川　　松平土佐守
天龍川 舞坂宿預除共 富士川 安倍川 酒匂川 原吉原道作り共　　黑田甲斐守
　　有馬中務大輔
甲州川々　　松平勝五郎
　　中川修理大夫
美濃國川々　　丹羽若狹守

右之通、御普請御手傳被仰付候、承合有之候はゞ可被談候、尤神尾若狹守相談可被勤候、且又右ニ付相向候儀は雅樂頭江可被申聞旨、御手傳之面々江申渡候間、可被得其意候、

〔天明集成絲綸錄三十五〕明和三戌年二月

小野日向守　室賀源七郎　石野八太夫　古坂與七郎　川井次郎兵衛江

此度濃州、勢州、甲州川々御普請御手傳ニ付、於小屋場役人江料理又は菓子酒等出し、其上音物等有之間敷事ニ候條、右體之儀無之樣相心得、家來江も其段急度可申付旨、御手傳之面々江申渡候間、御修復中、右之趣一切受用仕候儀、堅無之樣可被心得候、尤支配之者共江も其段可被申渡候、

二月

命諸侯修築

〔前田家譜〕文祿三年十月、利長豐太閤ノ命ヲ受ケ、新タニ宇治川ノ堤防ヲ造ル、

〔拾遺都名所圖會　四〕淀堤淀小橋の北爪より伏見三栖に至る道なり、行程一里、秀吉公の御時作れる也、

〔享保集成絲綸錄　二十五〕寬保二戌年十月

松平大炊頭〇備前岡山　松平大膳大夫〇長門萩　吉川左京〇周防岩國　細川越中守〇肥後熊本　藤堂和泉守〇伊勢津　阿部伊勢守〇備後福山　仙石越前守〇但馬出石　京極佐渡守〇讃岐丸龜　伊東熊太郎〇日向飫肥　稻葉萬次郎〇豐後臼杵　間部若狹守〇越前鯖江

右之面々、關東筋川々御料私領共、御普請所御手傳被仰付候間、可被得其意候、尤承合等有之候はば可被談候、

〔寬の須佐美　二〕寬保二年壬戌八月、大風大雨東北より發りて、武藏、下總、下野、上野、信濃、五州とも大水にて、朝間山崩れぬとか、松城、小諸、忍、河越、岩附、古河、關宿の城皆大破し、殊に松城小諸は甚だしとぞ、下谷、淺草、千住まで平地水一丈に越、本庄は東より海の如く、東北三里が間、溺死のものかぎりなかりし、〇中略東北の地堤こと〲く破れて、川と平地と一つになりしかば、大名十一人に仰付られて、堤を築事年年あまりにしてやみぬ、

〔寶曆集成絲綸錄　二十二〕延享四卯年十一月

大井川　神尾若狹守江

天龍川舞坂宿瀬除共　松平土佐守

富士川安倍川酒匂川原吉原道作共　黑田甲斐守

有馬中務大輔

松平勝五郎

甲州川々　中川修理大夫

一字長池堤切所長百三十間　元形高一丈五尺、馬踏二間、
平均高七尺五寸、中馬踏三丈四尺五寸、敷五丈七尺、
一字久崎脇堤切所長百五十間　元形高一丈五尺、馬踏九尺、
平均高七尺五寸、中馬踏三丈一尺五寸、敷五丈四尺、
一字松山道堤切所長三十六間　元形高一丈三尺、馬踏九尺、
平均高六尺五寸、中馬踏二丈八尺五寸、敷四丈八尺、

諸色人足寄

永三百八十三貫七十二文　諸色代永
人足四萬八千五百人四分　但一人永十七文
此賃永八百二十四貫五百六十八文
合金千二百七兩二分、永八十三文八分、　熊谷地内入用
二口合金二千八百三十七兩一分、永二百四十七文三分、
右堤防修築地元村々仕立人無之、本川俣村萩之助相雇ひ、諸色代へ組合せ、村々より金二百兩足金致し相賴み、普請仕立、九月十日夜鍬入、同月廿六日大口合せ、十月廿三日皆出來、右にて急場普請相濟み、翌申春本普請、是又皆御入用普請成就せり、

申春本普請

凡金八百兩也　熊谷宿三ヶ所
凡金千四百兩也　久下村五ヶ所

急場普請より本普請まで、凡金五千三十兩餘、皆御入用分凡金八百兩なり、熊谷宿地内百間出し普請入用、但し此分地元入用にて仕立のよし、

倹約相用、銘々自國之備筋行屆候樣厚く可取計旨、向々ェ寄々可被達候、

七月

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年七月廿五日、熊谷宿及ヒ久下村ノ堤防ヲ修築ス、

御勘定露木兵助、同吟味下役榎本吉藏、御普請役坂臺三郎、同安藤三之丞、右各出役、八月廿三日出張いたし、熊谷宿旅宿に於て、目論見皆御入用御普請御仕立になる、

一字大曲り堤切所長廿八間　元形高一丈六尺、馬踏三間、

平均高八尺、中馬踏四丈二尺、敷六丈六尺、

一字八軒茶屋堤切所長十四間　元形高一丈四尺、馬踏三間、

平均高七尺、中馬踏三丈九尺、敷六尺、

一同所　堤切所長廿三間　元形高一丈五尺、馬踏三間、

平均高七尺五寸、中馬踏四丈五尺、敷六丈三尺、

一字南裏　堤切長十七間　元形高一丈三尺、馬踏二間、

平均六尺五寸、中馬踏三丈一尺五寸、敷五丈一尺、

一字東竹院脇堤切所長二百七十五間　元形高一丈七尺、馬踏二間、

平均高八尺五寸、中馬踏三丈三尺二寸、敷五丈四尺五寸、

右諸色人足寄

永二百五十三貫百十五文八分　諸色代永

人足八萬九百八十八人一分　但一人十七文

此賃永千三百七十六貫七百九十七文七分

合金千六百二十九兩三分、永百六十三文五分、　久下村地内入用

當年秋中、諸國度々之風雨、別而關東東海道筋等川々出水、其外高浪荒所多分有之、御收納甚減候上、急夫食等御入用も不少、右川々御普請御入用も、大造之儀、年年之損所ニも不相劣程之事ニ付、御手傳ニも可被仰付候得共、近年打續御手傳度々被仰付候上之儀、右體非常之御入用御備向之ため、兼々御儉約被仰付候儀ニ付、此度以思召、右川々御普請皆御入用と被仰付、御手傳幷御普請御用等、被仰付間敷旨被仰出候、必竟右之御趣意相届候儀も、近年諸向取締宜、御儉約も相立候故と、御機嫌ニ思召候、此趣御入用等ニ相携候向々江は、申聞候樣ニと御沙汰ニ而候、此上猶更御儉約ニ出精可被心配候、

別紙被仰出候趣、向々江達之儀、御入用江携候向も有之、聊ニ而も失費等無之は、御儉約之御趣意相立候事ニ付、多少之譯ニも無之候、左候得ば、先は諸役不洩樣ニ申通候樣可被致事ニ候、

一萬石以上之面々江も、御禮後などに、無急度爲心得、廉限に寫壹通宛被爲見候樣ニ可被致候、幷御三家御城附江も同樣可被致事、

嘉永四亥年七月六日

川々御普請御手傳御免之事

大目付江

伊勢守殿御渡

近年相續御普請御修復所御廉多く、其外臨時之御用途筋多分ニ候處、此度濃州勢州尾州川々御普請御入用も、是又不少儀ニ付、御手傳をも可被仰出候處、打續御手傳被仰付候上之事ニも有之、殊ニ近來類燒幷領分損毛等之向も多分に有之、其上海岸防禦筋之儀、追々厚御世話も有之候ニ付而は、銘々自國之備方、無油斷取計候趣ニ御聞、是以費用も不少、彼是ニ付今般右川々御普請之儀は、思召を以皆御入用ニ被仰付、御手傳は有間敷旨被仰出候付而は、猶又無益之入用相省、質素

（天明集成絲綸錄三十五）明和三戌年八月

尾州、勢州、甲州川々御普請被仰付候ニ付、領知之內、御普請有之候面々、爲御禮老中支配之分ハ老中江可相越候、若年寄支配之分は、右近將監若年寄中江可相越候、病氣幼少之分者名代、在邑は飛札可差越候、

右之通可被相達候

八月

明和五子年五月

今般尾州、濃州、勢州川々御普請之儀、去冬見分之者差遣候節、目論見候外者、御普請追願增願等不相成、縱願出候而も不取上筈、懸り御勘定奉行江申渡候間、其旨相心得、追願增願等不致候樣、村々江御料は御代官、私領は領主地頭ゟ可被申渡候、

四月

右之通可被相觸候

安永六酉年正月

寺社奉行江

先達而被申聞候、信州水內郡長沼上町西厳寺相願候千曲川通川除普請之儀、願之通被仰付候間、其段可被申渡候、尤御勘定奉行可被談候、

正月

（德川禁令考二十三河川修補）寛政三亥年十二月

御普請役手傳被仰付間敷旨之御書付

大目付江

カバ、永ク此水災ヲ防禦セン事ヲ思慮セシカドモ遂ニ果サズ、寶永五年ノ洪水ニ又崩壞シテ、民屋流失ニ及ビ、村民等屢愁訴スルコト年アリ、享保中ニ至リ、大岡越前守忠相、更ニ公命ヲ奉ジ、心ヲ勞セシカドモ猶功ナラズ、然ルニ武州ノ川崎宿ニ田中丘隅ト云者アリ、略〇中物茂卿ニ就テ學ビ、頗古史ニ涉リ、才力世ニ超タリト聞、忠相議シテ堤防經營ノ事ヲ委ヌ、丘隅是ヨリ新ニ辨慶土俵ト云モノヲ巧ミ、略〇中不日ニシテ功ヲ終タリキ、因テ堤防鎮護ノ爲、神禹ノ祠ヲ堤上ニ建ツ、略〇中傍ニ丘隅自撰ノ碑ヲ建テ、事ノ次第ヲ詳悉ス、様シテ文。命。東。堤。碑。ト云、高六尺五寸、幅三尺二寸、厚一尺二寸五分、銘曰、相之酒勾川、會同百川、東入于海、富士高嶽鎮其南、大嶽丹山連其北、實關中之襟帶、海東之咽喉也、寶永丁亥之冬、富士山東南之隅、土中發火、沙石飛數百里、蓋硫黃之氣云、其災傷之所及、關東八州之地、不見青草者數百里、深者踰丈、淺者盈尺、武相之間最甚、酒勾川遂壅、其後年大水、堤防悉決、以故居民流亡者、二十有載于此、朝廷方求治水者、以欲爲生民興利除害、享保丙午春二月、丘隅欽命、來鞍于此、乃大興人徒、以築土、因地勢、疏水、循水性、導河既平、可藝、又始地著、乃告成功、雖然不有神佑、安能保不壞于永久、徵諸按甞、安貞二年、勢田判官爲頼、奉勅治水、建神禹祠于鴨河、舊章可據、故今累石設神座于堤上、鑑四月朔、四方堤庶、傳聞其事、不期雲集、膜拜者弗已、其時土功未全竣、關揭香幣、以擬禁祀、丘隅乃與民約曰、謹自今歲、以遂永々、每値四月朔、爾之老幼男女、徵神之惠、來拜者、各運土石、以爲神事、其讓後、乃降賜于下民、於穩弗已、則水不失其常、地平天成、穀登歲豐、乃納而貢賦、仰供公役、育而父母妻孥、俯全私恩、像而孝悌、和而鄉里、訟獄不興、盜賊悉戢、疾疫弗行、災傷永弭、皆神之惠也、伏惟神禹治水、墾于陰山、辛壬癸甲、啓呱々而泣、弗子、八年於外、三過其門而不入、股無胈、脛無毛、是獨何心耶、以治水安民爲其心也、故今而望運土石以奠隄、[illegible]弗[illegible]餘、夫神配諸后土、與天地、雖萬世尚新、故神配后土之神也、威靈甚大、而望凡有疾患、求故、減慶禱之、必有効驗、則各盡其力、貢上眞隄、歷而固之、以褒神功、勿使隄樹、勿動堤土、寧埤一塊、勿損一毫、凡節豐務、所以營隄防者、皆神之所悦也、神登食楽盛乎、亦唯而豐之誠耳、聞者悦而訊、已卒聞、敢曰、可、賜金百兩爲其費、乃付諸治隄之民、俾永弗忘其事、且植桃李栗翠于上、以爲蓋實於獻、聖代親民如子、則神之心卽朝廷之心也、因名其隄以文命、勒石以詔後世、時享保丙午夏五月二十五日、武州橘樹郡川崎冠帶老人田中丘隅徵識、東都徂徠先生來敍、剛遜、門人平[illegible]賢子彬書、

〔有德院殿御實紀附錄四〕寛保二年八月、風雨はげしく、そのうへ信濃國淺間山、武藏國秩父三國峠より、山水多く湧出て、關八州水害おびたゞしく、わきて絹川利根川あふれ出、江府近き葛西のあたりも民屋流失し、溺死するもの少からざりしかば、略〇中四十萬兩の府金を出して、水殃にかゝりし國々の河渠を浚利し、堤防を修築ありしかば、窮民その役をつとめて錢穀を得、みな飢寒をまぬがれける。仰高錄、享保盛典、

川の功費は、近き年ごろためしすくなきほどの事なりしとぞ、まづ勘定吟味役萩原源左衛門美雅を、御藻鑒にて總督とせらる、其のち御前にて水利の議ありしに、源左衛門申けるは、すべて君の御側を離れ、遠きさかひにゆき、事をはからふに、一々御旨をうかゞふ時は、月日を費し機會を失ひ、事と、のひがたし、大意はこゝにて定めおかるゝとも、其地にいたり事にのぞみ候ては、かねて思ひ構へしとかはりたる事多きものなりと申けるに、ことはりと聞召し、源左衛門へ御委任ある上は、彼地より申送る事あらん時は、少しもとゞこほらず其まゝにはからふべきよし、勘定所へ仰下されぬ、かくて源左衛門はかしこに赴きしに、河すぢ思ふにこえて埋り、堤も崩し所多く、これを修築せんには費用おもひしよりはるかに多きがゆゑに、私にはからひがたく、用費をくはしく書し地圖にそへて府に奉りしかば、御覽ありて、申所みなことはりなり、速に功に就べし、去かし堤防河渠の事に於ては、時の利害を考へ、心のまゝに沙汰すべきよし、兼て定めたるを、猶も人の猜疑をはゞかりて、かく進言せしならん、今より後はこれらのたぐひ、別に申すに及ばずとて、進呈せし書も地圖も、其まゝかへし玉ひしが、いくほどなく功成てかへり來りしとぞ、

(新編相模國風土記稿 十六 足柄上郡)川村岸

文命堤　酒匂川ニアリ、舊ハ岩流瀨大口堤ト云、享保十一年、酒匂川水防ノタメ、田中丘隅右衞門ガ官命ヲ奉ジテ築ク所ナリ、(馬踏十二間、高二丈、敷十五間、)二堤上ニ禹王ノ廟ヲ建、故ニ文命ト名ヅク、當村ナルヲ西堤ト號シ、對岸班目村ナルヲ東堤ト號ス、(事ハ班目村ノ條ニ詳ナリ)其他二所ニ石堤ヲ築ク、一ハ字田濁、一ハ小名日向ニアリ、(高一丈、馬踏五間、敷八間、)

(新編相模國風土記稿 十九 足柄上郡)班目村

文命堤　酒匂川ノ水溢ニ備フ、(高二丈、馬踏十八間、敷凡廿五間、)舊ハ大口堤トテ尋常ノ堤ナリシガ、洪水ノタメニ屢崩壞シテ、里民ノ憂多カリケレバ、元祿中井澤彌惣兵衞正房(時ニ御勘定吟味役)水利ノ事ニ鍛錬ナリシ

一西堤貳千四百八拾八間　六尺杖

根置拾貳間程　馬踏六間程　高サ貳間程

右之堤者、大宮之渡りより荒神口迄に有之候、此外に大聖寺殿堤、大宮之渡り之上手に有之候、

此間數三百貳拾間、　六尺杖

百拾五間程古堤　根置六間程　馬踏三間程　高サ壹間中程

内

貳百五間程新堤　根置三間程　馬踏壹間程　高サ五尺程

元祿十一寅年、西賀茂村池田井口より山之森迄、新堤四百五拾間出來、但破損修復之儀は、村中として向後致シ候筈也。　六尺杖　根置三間　馬踏壹間　高平均壹間

同年上賀茂村毛穴井口より、本鄕井口迄新堤六百三拾壹間、半木ノ森前中村井手口より下鴨領

境迄、新堤四百四拾貳間出來、　六尺杖　根置三間　馬踏壹間　高平均壹間

但破損修復之儀は、上賀茂社家井百姓共向後いたし候筈也。

右新堤出來候所は、板倉内膳正殿在京之時分、東西ニ堤出來候處、延寶二寅年、同四辰年兩年之洪水ニ致流失候跡江、右之通再興有之候、右新堤内之分百五石餘、田畑開發堤御修復料之内江入、

〔常憲院殿御實紀五十〕寶永元年七月十一日、勘定奉行荻原近江守重秀、伊勢平八郎貞數、關東郡代伊奈半左衛門忠順、幷に本所奉行二人に、本所堤防の修築を命せらる、

〔有德院殿御實紀附錄四〕諸國の水利は、年ごとに絶ず行はれし事なりしが、享保七年春遠州大井

金地院崇傳

右之本文は久右衛門手前に有之〇中略

一同十四日、小堀遠州へ狀遣す、堤築御普請に付て、河內兩寺之門前之人足は、守護不入之旨、相國樣御判頂戴候間、如去年用捨候樣にと申遣す、右之狀久右衛門に遣す、〇中略

一小堀遠州、正月十四日返書來、眞觀寺常光寺兩門前守護不入能存との書中也、堤築之人足出す間敷との書中也、

〔東武實錄四十一〕寬永九年、是年美濃國洪水シテ、堤大ニ崩レ損ズ、依テ鈞命ヲ奉テ、船越三郎四郎、高木權右衛門、同藤兵衛、同次郎兵衛、妻木權左衛門等、奉行トシ、是ヲ築カシム、

〔平安落穗集一〕方境之事

鴨川堤の事、荒神口より大宮の渡りまで西堤長さ貳千九百九拾四間、此內荒神口より今出川堤根石垣有、夫より北貳千間は石垣なし、但し根置馬踏の事、

大宮渡りより俵屋口迄根置九間拾間、馬踏四間にて俵屋口より鞍馬口迄根置拾貳間、高サ壹丈、馬踏六間

移野より二條口迄長サ六十八町、間數四千百三拾間、五拾間

大宮より荒神口迄公儀御修覆なり、荒神口より二條口迄、町人受取場なり、また二條より五條まで東西石垣は、板倉內膳正京所司代の時築し殘候、

〔京都御役所向大概覺書三〕賀茂川堤石垣間數幷所々川幅之事〇中略

一車坂ゟ五條之橋迄

五千五百五拾間　　六尺杖

但町ニシテ九拾貳町三拾間　六拾間壹町

此道法貳里貳拾町三拾間　三拾六町壹里〇中略

取、

文祿三卯廿五日

〔梵舜日記〕慶長十一年正月十八日丁亥、淀ヨリ伏見迄ニ堤ヲツカレ候付、富森ト兩郷申談、堤之内橋カケラレ候也、片桐市正ヘ孫七差下、折紙相添申付遣之也、廿一日庚寅、板伊州ヘ淀堤橋之事ニ付催、

〔慶長日件錄〕慶長十一年正月廿二日、早朝板倉伊賀守ヘ、予知行所人足爲公儀淀之塘之普請ニ罷出由承屆候、然者予也手前屋敷相替ニ付、屋作普請人足無之間、被用捨樣ニト申遣處、則同心也、仍人足召遣畢、

〔台德院殿御實紀四十五〕元和三年正月十三日、山城河內邊堤防を築かしむ、金地院寺領の農民等は、先代免除の御印書顯然たるをもて、此役をのぞかる、國師日記

〔國師日記〕元和三年正月十三日

一書令啓上候、山城堤築之御普請に付て、拙者知行所之人足も被仰觸由候、如御存知不混自餘人足等爲守護不入旨、相國樣御判頂戴仕候、此中も貴樣爲御心得御用捨之由滿足仕候、當年之儀も如此中御用捨可辱存候、尙久右可得御意候、恐惶謹言、

五月十三日　金地院

板伊州樣人々御中〇中略

一貴札拜見仕候、山城堤普請人足之儀被仰越、此以前我等御代官仕候剋何も相觸申候、付てそのごとく申付候、最前も御理在之所は、不罷出候間、先々其通可被仰付候、尙樣子久右江申入候、不能詳候、恐惶謹言

五月十三日　板伊賀守在判

三月廿四日

一北方堤水よけ御材木、民法印江申渡候へ共、末伐之所々折紙不相究候之間、早々相究、従是持遣可遣之候條、被成其御心得、可被仰上候、恐々謹言、

亥刻　三月廿三日　　田兵太

駒井少殿　御返報〇中略

一尾州堤築給人方無沙汰之由、徳法印より申來候付而得御諚、徳法印迄成御朱印、

三月廿五日

一北方堤川よけ御材木之儀、民法より稲葉右近兩遠藤方江、折紙來候間、則須賀勝右衛門、坪内平右衛門方へ遣候由、田兵太書狀到來、前徳法印江遣、

三月廿六日

一尾州之内愛智郡堤築奉行山田平市郎帳面上、同智多郡奉行平野左三郎右同前、

四月九日

一三位法印様、幷徳永法印より尾州堤川よけの儀、去六日より申付、月合に可出來候由申來、

四月廿四日

一尾州海東郡堤築之奉行田中角助、奥代藤兵衛、岡本次郎右衛門、大島又右衛門、堤間數八萬五千六拾八間、日數廿日に出來之由、右之外丹羽郡堤川よけ仕由、堤壹人に付而九間半宛割付之由、

一大閤様爲御見廻、西尾豊後守、明朝より被遣、

四月廿五日

一尾州中島郡堤築之奉行津田四郎兵衛、豊川十兵衛、上奉行は如此、田兵太請取分也、堤間數五萬七千八百五拾五間之由、右給人百姓堤築之人數六千九拾人、壹人に付而九間半割之由帳面請

合千百八拾八人
右最前被遣候御普請衆開前に、御割符可有之旨被仰出候、巳上、
正月廿二日　　　　　　　　　　　　　駒井
德永式部卿法印　田中兵部大輔殿　吉田修理亮殿　原隱岐守殿　不破壹岐守殿　田中角介殿　須賀勝右衞門殿　山田平一郞殿　津田四郞兵衞殿
此外御奉行御小姓衆中
右早道遣
二月四日
一尾州堤普請御軍役衆築分、在々百姓築江、何も別々に札を立分可被置之由、總御奉行衆井小奉行衆江爲御諚申遣、
二月十二日
一尾州堤之儀、重而爲御諚德永法印、田兵太、吉修、厚隱岐、兩四人へ書狀遣早道也、
二月廿三日
一愛智川筋南北堤之事、神崎郡中人足申付、兩人奉行以、堤之樣子見計、大破之所江者、人足數相加、丈夫に可申付候、雖爲誰々代官所、給人之村壓並に人足可出者也、
德永法印
駒井中務
文祿三年三月十日
一尾州堤水よけに、竹木數多入申候由、去七日書狀、德永原より到來、壹人持之材木四千四五百本、智多郡にて伐申度由申來、

可被下事、

三年正月廿二日

一尾州堤普請之儀、總奉行幷御馬廻組頭衆へ重而申達、

爲御掟令啓達候　早道遣

一其國中堤普請之事、はや割符以下被相究、堤普請仕被懸候哉、被聞召度思召候事、

一來五月之節、大閤様其國被成御成、堤普請之體、能々可被成御覽之旨被仰出候、彌被得其意、丈夫ニ無殘處可被仰付之旨上意候、若悪鋪所も候而、御機嫌悪候はゞ、勿論四人不屆ニ可思召候、其上大閤様江も兩四人總奉行之通被仰上候事、

一御軍役御普請衆爲增瀧善太郎組、安孫子善十郎組、重而被指遣候條、面別紙之通ニ候事、

一三位法印様御人數之儀も、割符に入、則普請所儘ニ可被引渡候間、被仰出候事、

一國中堤普請に出有之百姓事、自最前如被仰出、飯米被入御念可被遣事、

一今度被遣候御軍役之儀、各御手前をはじめ役儀被入御情被遣様ニと上意候事

一此中も其國堤之儀及度々、従大閤様被仰遣候間、少も御由斷御如在あるべからず旨御諚候、以上、

正月廿二日　駒井

德永式部法印　田中兵部大輔殿　吉田修理殿　原隱岐守殿

人々御中

尾州堤普請衆重て被遣覺

一九百三拾七人　御馬廻　安孫子善十郎組

一貳百五拾壹人　同　瀧善太郎組

長五尺、末口三寸間に造り、三本宛内外より狹み打し、丸太土臺に致す事もあり、地形を平均し、土臺に不平無キ樣能く居へ、其上に石垣を致す、表石は表壹尺五寸、扣貳尺五寸、平壹坪に拾六本宛表通に積み、内之方割石石垣裏胴かいばり裏込に遣ふ、小割石小石取交、間に壹坪宛裏込石にして、其内の方砂利詰間に五合宛、石垣裏埋立土に而築立る、石垣は人足計に而は不出來、石工を入、功者成人足手傳に而仕立る凡石工平壹坪三人懸り、土產は大工に而切組、至て荒波當り之場所は、石垣之外面、長貳間半三間位、末口六七寸の大杭間に送り、三四本宛、浪除杭も打、尤切石之石垣は石代石工手間等致、間數等長ければ大造之入用に付、容易に出來る事にあらず、誠に至て大切之場所に、無據事あれば仕立る、先づは石積り亂杭等を丈夫にして、浪除にいたす事なり、

〔成形圖說農事十二〕荒癈。

むかし大坂川中の兩岸に、出張石堤を砌て、水勢をして自疾からしめつゝ、所謂借水攻水の策を設けたり元祿中故ありて、其横堤を盡く除き撤て其跡を新開としたるに、田穀數千石を得て、土民之を利とすること三十餘年なり、しかるに其水源大和諸所の水田に、年々淤泥せめ倦て、終に沃壤の水田三萬餘石淪沒となりて、復治むべからざるに至れりと云、是元來は水勢を疾して、泥沙の壅塞ことなく、悉海へ導くの永圖を處置しを、其水勢の爲に、兩岸を浸し潰すを患て、其出堤を廢ける故、水勢緩くなりて、泥沙を流すに力なく、漸々水上に淤滯て、田地を浸漬せしなり、

〔駒井日記〕文祿二年十二月十四日

一尾州之御帳面御條數、彼是民部法印を以重て被仰出、

御諚覺〇中略

一高頭之知行取者、來年正月より、在尾州仕堤之際に、小屋をかけ有之ば堤之普請可仕候事、

一百姓も正月五日より、其月中に堤つくべし、割符を請取、精を出し普請可仕、則百姓には兵糧を

りにて羽口抜出て、忽ち土出し、大崩れに成、其上手際悉く見苦敷、埋坪には山萱を用ゆ、壹坪五尺繩〆拾束ツヽ、羽口は野萱壹坪に七束づヽ、二三寸廻りの葉唐竹、埋壹坪四十貳本、葉直竹三十本、繋竹拾貳本、羽口壹坪葉唐竹拾貳本、葉直竹貳十本宛、繩埋壹坪に貳房宛に積る、龜朶羽口も積方同然也、是又羽口壹坪、松龜朶五尺繩〆七束宛に積る、龜朶羽口は萱羽口より入用餘慶懸れ共、水當り強き場所、或は川瀬之突當り等、萱羽口に而は難保場所を、龜朶羽口に致す、萱龜朶共羽口は別而上手ならでは難出來、仍て羽口普請仕付たる村方にては、常州下總邊羽口仕立方功者成ものを雇ひいたせる事なり、

〔堤防橋梁積方大概〕一籠。洗。　長五間　巾拾間　是は用水之餘水を吐落す爲に設之、

洗籠間ニ三本、並貳繼、　枕籠貳本、壹本貳重貳繼、　緣籠壹本、通三重壹繼ツヽ　兩緣分、　〆籠四拾貳本

〔地方凡例錄九〕一立竹

。立。竹は、海口等之沼除に用ゆる水刎なり、五六寸廻りの唐竹葉付にして、元の方切尖し、平壹坪ニ三十四五本ツヽ、五ツの目に立、薮の積にして、浪除水刎に致す、泥川にても、川上には無之事なり、砂川泥川共に小川に致す、立竹は同じ名目に而も、仕立方大に違ひ、前條に記ごとく、根杭の内之方岸囲之ため、凡壹間ニ壹本宛杭を建、葉唐竹を垣根之様に建、上下貳ケ所横に押緣を當、杭に結付、川除にもなる、岸崩込たる地留にも致す、杭際に而は難保場所の川除也、

一、浪。除。石。垣。

是は海邊浪當り強く、岸崩有之町屋敷之裏通其外、濱通り之田畑浪欠強き場所、亂杭等に而は難保海表之分、又は船入波戸場等石垣に仕立る事あり、長高は其場所に隨ひ、高く壹間にも貳間にも致す、仕立方は土臺松木長壹丈三尺、幅壹尺、厚六寸、繼手壹尺宛入違繼にして、大栓留狭杭栗丸太、

及び高ヲ乘ジ、爾率ヲ以テ三度除之而坪ヲ得ル

水中萱埋立長七間四尺五寸　平均（横拾五間深六尺）

此土坪百拾六坪貳合

合土坪貳百四坪貳合內（百拾六坪貳合萱埋坪貳拾壹坪羽口坪）

〔地方凡例錄九〕一土出シ幷羽口

土出シは、關東第一之水刎にて、下利根川、戸田川、江戸川、中川、小貝川、鬼怒川等之泥川に仕立る、餘國にも泥川には有り、泥川は近邊に石無之故、蛇籠普請等出來ず、土杭出に而水刎を致す、土出シ仕立方、水深之處は下埋を屏風返（屏風返之仕方は、前條ニ記スニ付略之、）にて埋立、其上に土を持丸く出し、川表之方三方は、萱羽口に而包む、出シの幅長は、川の大小水當りの場所ニより仕立る事故極りなし、大概大出シは根方ニ而幅拾貳三間、長拾五六間、其餘にも致す、併土出シは、籠出シ石出シ抔之様、三十間にも四十間にも長く致す事はなし、多くは竪横丸く出る様に致さねば損ジ早し、尤出シの根方兩脇は、岸園に羽口を致さねば、出し元切之する事あり、都て羽口の表には、間に送り三本位ニ並杭を打、是は鉢卷には不及、並杭なければ羽口のり出す事あり、一羽口は萱に而も龜朶に而も、水際より屋根を葺様に、厚壹尺餘宛、一平萱を置並べ、葉直竹元之方切尖し、壹間に六本ツヽ立並べ、萱本末にねぢり組違ひ、順々に送り、跡にも一通り、跡先貳ほこに縫立る、尤一平毎に込土を側、隨分踏堅メ、込土之仕方惡ければ、羽口割れ下る、又其上に一平ツヽ萱を置縫立、段々上迄縫上ゲ、上葺は稜を並べ留縫を致す、羽口土際より凡壹尺貳三寸位外へ出す、不殘仕立上ゲ、小口は鎌にて苅揃る、縫竹壹間間にいたし、壹ケ所ツヽ跡へ葉唐竹にて繫ぎを取り、羽口乘り出ざる様にする、繫ぎ取方惡ければ、羽口割下り、又は乘出る事あり、縫方功者口傳あり、度々仕馴たる者に非ずしては不出來、不鍛錬之人足に敎へ縫せては、甚ダ保あしく、水當

而鉢巻竹掛ざるもあり、或は小川抔には、屛風出とて杭を間に迭り、三四本長は川の様子に随ひ、川下へなぞひに打、根笧を掻き水刎にも岸圍にも致す、併泥川の大河は、都て岸圍は、萱羽口麁朶羽口等に而致たる方能けれ共、里數有る處は不殘羽口にはならず、尤羽口の留りにも根杭を打然て肝要水當り強き場所は、羽口に致し、其餘は亂杭は打岸圍にいたす、小川の砂川等蛇籠を遣ふには其近邊に石無之土砂川に、羽口は難成、無據杭出シにいたす、砂川は根入あしく難保けれ共、川際水刎の仕方無之故、杭出に致す事なり、石川に　決而杭出シは難成、

一杭笧と云は、長六七尺位之小杭間に迭り、三四本根入貳尺程打込、葉唐竹に而杭より杭組違に笧を掻、高は三尺にても四尺留ても、水當りに應じ仕立る、用水堀等岸圍之笧は、長四五尺の小杭に笧高貳尺程、唐竹を二ッ割にして掻く、小川之〆切等を杭笧に而〆切にもいたす事也、

一根杭並杭

根杭も並杭も一事兩名也、堤切所欠所岸圍間に、迭り三四本ヅヽ、岸の方に付て打並べる、尤水當り強き所は、二通り三通りも打事あり、小杭には根笧掻か、又大杭に而笧難掻は、鉢巻懸ル事もあり、或は根杭內之方立竹を致すもあり、是は立竹抔之杭を壹間に壹本づヽ建てかへ、根之様に葉唐竹を立、上下貳ッ通り程押縁をあて、立竹持杭にからみ付、岸圍に致すも有り、立竹を矢來竹とも云、又大河大杭等は、打放しに致す也、

（隄防橋梁積方大槪）上長貳丈八尺九寸　下長六間　上横五丈四尺八寸　下横拾壹間半

一土出長平均三丈貳尺四寸　平均横六丈壹尺九寸　高壹丈貳尺

打廻長拾八間　高七尺　麁朶羽口

此土坪八拾八坪　內貳拾壹坪　羽口坪

是は砂泥川屈曲水當強、杭出等に而難凌、水嵩候場所水刎に用之、土坪算當長横相乘、圓實率

〔地方凡例錄 九〕枠出シ

是は重に甲州ニ而用る川除也、堤欠所前又は水刎ニ仕立る石出シ之様成もの也、詰石は成丈大石を用ひ、枠根掘る處は蛇籠を川表に引く、隨分地形を堀すへて仕立べし、谷川水當り强き所に用ひて悉く利益有り仕立方は常の枠同様にして、木道具寸間違ふ計也、枠長三間、横貳間、高四尺五寸、竪横共壹間に枠柱長六尺、末口一尺、竪横貫木末口五寸、大石を遣ふに付、敷成木口三寸、立成木貳寸より貳寸五分迄、都て大材木を遣ふ〆切等に致す枠は、續枠宜敷、横貳間高サ六尺、長は貳拾間に而も三拾間に而も、川幅〆切之長に准じ仕立る、又小川枝川等〆切笈牛に而難保場所は、横壹間、高壹間之續枠を用る、枠壹間四方に枠柱四本、立貫穴彫貫四方上下貳通柱へ彫込、下貫之上に敷成木を並べ、四方に立成木を建、上下共貫繩に而搦付る、切組は大工を遣ふ、材木は松に而も雜木に而もよし、續枠川除岸圍にも用ゆる、岸圍は多分片。枠。に致す片枠は三方計貫を入、成木を建、裏一方は岸を用ひ、石を詰る柱は裏表共、壹間間に壹本宛建、壹間毎に中貫を通す、又横三尺位に而杭圍同前に致す、岸圍方枠は、裏には一間間に柱を不建、續枠三十間も有之、岸圍は五六間に裏之柱一本ヅヽ繋ぎ建、中貫を通す、其外は中貫無之岸より川表之柱之頭に扣木をあて、岸之方は掘込繫に致し、材木致省略もあり、○中略

一杭出并杭圍

杭。出。は亂。杭。とも云、沼川に用る水刎也、石川に而根入惡敷て難成、横の並びは五七本に而も三四本に而も、長は間に送り、四五本にして、長サも川に應じ、五ツの目に打並、水に逆てば惡し、川下の方へなぞひに打、鉢卷竹を竪横に總而鉢卷にも狹かけ、鎖り懸ケとて二様あり、狹かけは杭の頭を兩方より唐竹に而狹み、扮竹に而結付る、鎖り懸けは唐竹を四ツ割にして、杭より杭々と互違に、鎖の様にからみ付、扮竹の端を直竹に而卷留る、又末口七八寸も有る大杭根入深きは、打放に

籠。と云は、下地を石積にして、長籠に而横に一本宛並べ巻たる様にいたす、是も河原抔に仕立るは、下地を土出シにして巻籠に致すもあり、何れ川々の大小水勢の强弱に寄る事なり、石出シに巻籠したるは至て丈夫成川除也、

一大籠出シ

是は駿州富士川、安倍川、遠州大井に仕立る水刎也、長貳三十間より、段々其場所により何程も長く出す、尤川下へなぞひ、水に不逆様に仕立る大出シ也右川々は大河に而水勢强く、一通り之籠出シ等に而は、決而保がたし、此大籠出シの仕方は、水中沈枠を地形に入、堤付候根方は、土出シにして、根籠を丈夫に引き、先キを本出シに致す、大出シより横へ長三四間宛も、水請前圍籠出シ三四ケ所、其外に棚牛を出シの間數に随ひ、壹ケ所も二ケ所も懸る、水請前圍の仕形色々功者有て、至て大造成普請也、地形沈枠は水深之處故、岡に而組立、石を入る計にして、川上より水中へ浮べ、出シの地形に成る處へ繋置、枠四方の柱に、笹竹を結付、岡より石を打込、又は岡を放れ有之處は、舟ニ石を積投込、若し水勢早ければ枠流るゝ故、川上河原の内に、蛇籠か大杭に綱を付、地形の所へ居る程に枠を結付流して枠を居へ、石を入る、右入方は、水練の人足を入て見すべし、出シ敷差渡壹尺七寸、籠拾貳本ならば、地形枠横四間餘にいたすに付、貳間枠貳組並べに而よし、長は大出シの間數に應じ、幾組も可入、岡と逆ひ續き枠（續き枠と云は、根壹間にして、長サは五間に而も十間に而も、一續に組立、高表と兩小口計立成木を建、中は表の柱より裏の柱へ貫を通し、石を積るを續き枠と云、）には難成、水中に壹組ツゝ入る故、枠と枠との間透所は、落し籠に而取合す、帶籠襟籠土出シの根籠等、通例之通り也、此普請餘川には無之人足不馴に而は曾ては出來ず、村役人人足奉行人共功者ならでは不出來事也、上方に而も木曾川抔に大出シあり、仕形大概同樣なれ共、其圖々の仕來にて少々違ふ事もあり、

〔堤防橋梁積方大概〕一枠出。　長五間　是は、石川之水刎川除に用る、

石無之所は籠出しに致す、出し場所深ければ、下に二間續き、沈枠出シの間數に應じ入る事也、沈枠と云は、高壹間横貳間四方、壹間程三本づゝ建、上下二通り貫を彫込、眞中にも柱壹本建、十文字貫を入、敷成木を敷、立成木を四方ニ建、貫木に掻付、水中へ沈め石を詰る、格別深ければ二つも重ル、又横間數も出石の幅に隨ひ、二間半にも九尺にも壹間にも致す、地形枠は出シの敷より外へ、兩方貳尺づゝも廣くせねば、石出シ崩レ落る、出シの幅長其川其場所に隨ひ仕立る、勿論石出シ岸根より川中へ眞直に仕出シては、流水に逆して難保、水流れに隨ひ、川下の方へなぞひに、水に不逆樣に仕出也、

〔堤防橋梁積方大概〕一籠出　長七間　數八本 留四本　五重壹繼四本

是は水中深キ所之石川　〃籠三間籠貳本

水刎川除に用之　　　　　楪籠同籠壹本

右地形水中　　　　　　　〆籠數四拾三本八分

〔地方凡例錄九〕一蛇籠出シ

是も石川砂川の水刎也、地形不陸なき所は、直に五間籠二繼に而も三繼に而も、間數に應じ仕立、又地形不平ならば、平均籠とて、二間籠三間籠其處に應じ、小籠大籠取交、地形を均し平らかにして、其上に籠出し仕立る、至て深場なれば、地形籠とて出し、敷の籠數に准じ、貳間籠に而も三間籠に而も、横に地形籠を二重にも三重にも並べ、其上に出し籠を仕立る、是又川底不陸ならば、二ツ重る所もあり、又三重に致す處もありて、何レ出しの下タ平らかなる樣にして仕立る也、尤敷差渡一尺七寸籠七本ならべならば、地形籠長二間半にして、出シより地形少し廣くする也、籠出シ堤の取付の所、横に壹本引くを楪籠と云、繼手に二本ヅヽ引を帶籠とも〆籠とも云、蛇籠は出シの大小に應じ、差渡貳尺籠ニも、壹尺五寸籠ニも致す、長サは何れも壹本五間ヅヽなり、又出シ巻

然共柳うつぎ等なければ無拠、外之麁朶を用ゆる、是は根付之事はなけれ共、砂堤は麁朶を一筋宛敷ては、築立々々致さねば築上る内に崩るゝ也、土堤は築立済て縄を張、足の埋る丈土を切明ケ小口へ芝を入る、筋芝筋麁朶とも、筋之間壹尺何寸と、堤之法高に應じ極め置、縄を張ざれば、筋ゆるみも附、筋と筋との間不揃に成事也、又堤之法疊芝とて、往古丈夫を重もに致すときは、土之不出様芝に而疊上たる堤もあり、當世には上方關東とも、扒樋の前後出拖板之上など、或は、城壘等之土手抔は、疊芝に致せども、外之堤ニは曾てなし、〇中略

一石堤の仕形も土堤に替る事なし、併右之積り方不功者に而は、石疊むこともあり、又一ッ二ッ宛抜出て、其所より及大破、石堤は石之表を並能置き、奥入に深く成様にして、表石の奥の方を外の石に而〆る様に扣石を置積立ねば、崩れ安し、角々には大石を遣ふべし、

石堤は別て人足仕馴功者ならでは、石積成りがたし、石堤は何れ根籠引ざれば崩るゝもの也、

一石積と云水刎あり、河原又は岸上等に堤のごとく、石を川形りに長く積立る、是は堤と違ひ、法りもなく、五十間三十間宛、大水之節水溢レ、岸可崩場所に積事也、是迚も石の積様は、石堤に同然なり、

〔成形圖説農事十二〕堤破損の時腹付上置春は川裏を専腹付にいたすべし、〔子細は、草の根はゑ繁て堤丈夫なればなり〕夏秋は堤裏を築べし、總じて多築たる土手は、夏秋に至り土肥草茂れり、夏築たるは秋冬になりて土痩て崩安し、

〔地方凡例録九〕一石。出。し。

是は、石川の荒川に仕立る水刎也、小石にては不保、大石をもつて仕立る、石の積方は石堤石積に同じ、法り五分の物なれ共、二三分の法りに而よし、水中より積上ゲて、鼻より兩脇根籠を、二重も三重も出しに應じて引也、大河至て水勢強き所は、畚。籠。とて石出しを蛇籠にて不殘包もあり、大

ク、表裏トモ同ク一割勾倍ニ積ルコト、爲レリ、且ツ又元淨法師ノ古法ニ、蒲。矛。形。ト云フ仕方アリ、馬踏モ勾倍少シク丸身ヲ像テ、蒲矛ノ像ノ如ク築キ立タル者ナリ此モ保方ニ至テ丈夫ナル者ナレドモ、土坪ノ積リ方六ケ敷ク、御入用ノ掛ルモ多キガ故ニ、今ハ右樣ノ叮嚀ナル仕方ハ知ル人モ無キニ至レリ、按ズルニ、今モ江戸淺草ノ日本堤ハ、最初蒲矛形ニ仕立タル普請ナリ、其後多年ノ間ニ修理ヲ經タルコト有リト見エテ、少シク變リタル樣ナレドモ、熟視スルトキハ尚蒲矛ノ形ノ遺ルコト有リ、故ニ彼ノ堤ハ極テ堅固ナリ、

(堤堰秘書)石。堤。ハ川表一倍五割川裏二倍五割か三倍か、先低く築て、後に川上より砂來て、石の間間へも入て堅まり候時、次第々々に上置腹付をすべし、石は堤近所に而は取候はぬよし、三十四五間も遠くにて可取之、

石堤は馬踏敷共に廣はどよし、

一土。堤。は、何時も芝を付べし、水早き川は川表芝串を差べし、總て土堤石堤共に、人懸りを能考、非道無之樣肝要也、人足を無理に減候而は、必麁相に仕べし、但人足を遊ばせ候はぬ樣に、率行を付置、人足の費不成やう可積、

一堤根を水洗候節、又は出し先を水の掘候時、亂杭を打、蒔石捨籠を仕事古法也、

(地方凡例錄九)一土堤は法り高壹間ニ送り五筋程ヅヽ、筋芝を引、馬踏ニ綠り芝を引く、芝切人足は土取人足之丁數に積り込、併別段大造之堤近邊に芝無之遙遠方より芝を運ぶには、土取人足に積り入難し、是は芝の員數を積り、道法之遠近に應じ、芝切持運之定法を以、芝切人足別段に立る、芝は長貳尺幅五寸厚貳寸にして、壹坪に八拾枚、是を堤之法高間數幾筋引として、總坪數何拾何坪と積る、砂堤は筋麁朶を引く、芝ニ而は不根付、先にこけ落て不用立、筋麁朶は柳うつぎの類を、長壹尺餘に伐小口へ少し出し敷込ム、柳うつぎは一雨二雨に而直に根付、堤丈夫に堅まる也、

ノ隄ノ築キ方定法改リテ土隄ハ片法リ一割増シ、砂隄ハ一割半、石隄ノ片法五分ト成レナ、古法ノ如ク製シタル土積ハ、極テ堅固ナルコトアレドモ、坪數モ多ク人足多分ニ掛ルヲ以テ、今ハ大抵新法ヲ積ルコト、成レリ、然レドモ大河ノ大堤一割ノ法ニテハ、土隄ト雖ドモ洪水出テ水勢ノ強キトキハ、甚ダ危シト知ルベシ、故ニ成ルベキコトナラバ、一割半ニモ築キ立ベシ、實ニ國家萬民ノ爲メニ、後ノ患ヲ防グノ大事也、又古堤ノ築キ足シハ、高サ馬踏ヲ法トスル事ナレドモ、古堤ニ准ジ積ルベシ。〇中略

提防ヲ新ニ築クノ繩張ハ、川筋ニ水繩ヲ張リ、堤ノ曲屈ニ丁張ヲ爲シ、其形ヲ取ルベシ、丁。張。ト云フハ、堤ノ形ヲ繩ニテ張ルコトナリ、其法竹四本ヲ立テ、堤ノ形ヲ作シ、其竹四本ノ内二本ハ、堤敷ノ兩端ニ立テ、二本ハ馬踏ノ幅ノ兩角ニ立ツ、假令バ馬踏ノ幅一間ニテ、堤ノ高サ二間ト定メ、其勾倍一割半ナレバ、高サ二間ニ一割半ヲ乘（カケ）レバ、片法三間ト爲リ、表裏ヲ合テ六間、此レニ馬踏ノ幅一間ヲ加フレバ、七間ノ地敷ナリ、其地敷ノ兩端ニ竹一本ヲ建テ、又其中央ノ馬踏一間ノ兩角ニ竹一本ヅヽ建テ、地敷ノ兩端ニ立テタル竹ノ土際ニ、繩ヲ結ビ付テ、其繩ヲ馬踏ノ角ドニ建テタル竹ノ、高サ二間ノ處ニ繫（カラ）ミテ、其繩ヲ川表ノ地敷ニ立テタル根足竹ニ紮付テ、丁張ト名ク、其堤ミ像既ニ出來タル上ニテ、川表ノ根足竹ニ水繩ヲ結ビテ、其水繩ヲ引キ張リ、川形ノ進ミ行ギ川ノ屈アレバ、其曲リニ從ヒ、曲リ每、丁張ヲ致シテ、其繩ニ効ヒ土ヲ持運テ堤ヲ築キ立ルナリ、是ヲ元淨傳ノ古法トス、又紀。州。流。ノ築キ方ハ、小堤ノ勾倍川表一割川裏一割三分、大堤川表一割二分、川裏一割五分トス、此モ亦保方ヲ肝要トセリ、所謂ル紀。州。流。ハ、彼國ニテ古來川普請ニ用タル法ナルヲ、有德院樣〇德川吉宗御持參アリシコト、聞キ及ベリ、然レドモ今ハ唯眼前ノ御入用少シヲモ減少スルヲ手柄トシテ、保方ノ丈夫不丈夫ニハ拘ルコト無ク、且ツ目論見議定モ無造作ニシテ、帳面ヲ仕立ルモ、手廻シノ能キヲ以テ、遂ニ紀州流ニ目論見スルコトヲ廢シテ用ルコト無

兩名之唱多るべし、又大籠出大聖牛と云川除、甲州釜無川留吹川の流、富士川之末遠州大井川天龍川等にあり、至て大造成川除也、大體之大河は、上方に而も淀川、宇治川、木津川、關東之利根川、荒川、海道筋の矢矧川、吉田川、奥州に而は阿武隈川、羽州之最上川、信州筑摩川、犀川、越後之信濃川、九州筑後川等、日本に響たる大河、何れも上は石川、中は砂川之遲瀬、其外國々に而も大體之大河あれ共、大聖牛は上方關東遠國共、餘國にはなし、又大井川天龍川富士川之遲瀬、大聖牛を不用して、外之川除川刎に而は難保、然れば其國々其處々に而仕來之普請、往古ゟ驗し置たる事に付、一概に心得、其處に而不仕付普請いたしては、大に間違ふ、此所の勘辨は、數年國々の普請を見聞し、又は自身にも仕立、功者之入事也、勿論水當りを考へ、常水と出水にて、水の當り處大に間違ふ、年々目論見は渴水之節いたす事故、平水の流を見て、川除水刎等仕立ては、大水之砌一向不用立事多し、夫故功者成もの之水刎仕立たるは、大水に而破損強く、不功者之普請は大水に一向不堪、仕立之儘にて、川除之多足にはならず、却て外之所及大破、是は平水之水行にならひての故に、普請仕立、大水之水行を不知、不鍛錬故の事也、右の趣に而川除之仕方色々あれ共、其荒増を揚て左に記す、尤目論見方之仕法は、公儀の御定書、并用水川除普請格式帳等に有之、入用竹木人足懸り等の儀は、事長ければ、右の書籍に預け略之、

〔堤防溝洫志二〕堤防製法凡十一條

新規　堤防ヲ築キ立ルニハ、先ヅ馬踏ノ間尺ヲ極メベシ、馬踏トハ堤上人馬通行ノ道路ヲ云フ、元淨法師ノ古法ハ、土堤ナレバ、其高サ一間ヨリ二三間以上ニ至ル迄、片法一割半、一間位ノ堤ハ片法一割増ニテモ宜シ、若シ土性ノ柔軟キ處カ、或ハ砂地等ハ其高ニ應シ川表ヲ二割増シ、川裏一割七八分ニ積リ、且水當テノ強キ場處ハ、表片法三割、裏ヲ二割半ニモ致シ、或ハ海表波除ノ堤等ニ至テハ、三割半四割ニモ積リ、石堤ニテモ一割ニ積リタル者ナリ、然ルニ近來ニ至リ、關東流

れも杭出シ根杭等也、夫も餘國之杭出シとは仕立方違ひ、三角に杭を打、梁木を引、其中ニ大木ニ面牛ヲ引、家組に仕立、大成杭出シは杭木に穴を彫、貫ヲ通ス、關東抔ニ無之杭出シなり、勿論近所に石澤山に有之川は、泥川たり共、蛇籠普請に仕立れば丈夫成れ共、泥川には兎角近所に石無之物也、蛇籠普請難成に付、土出シ杭出シ等色々にして水を防事也、上方關東奥羽越後甲信、海道筋中國西國、其處々ニ而之仕方不知しては、普請功者とは立難し、杭出シ立竹等の仕方も、川に寄色色あり、杭出シは五つめ打鉢卷竹懸るもあり、又小川の杭出シは、屏風出しと云ふて杭を四五本、間ニ送り三本位に並て打、柵をかき水除に致もあり、立竹も岸圍ニ根杭之内側に立、竹持之杭に上下押椽を當て、立竹を垣根之様に結び付るもあり、是は小川小堤にて大水たり共、水當り薄き川の岸圍也大河には難用、又江戸川中川邊の立竹は、大竹を葉付にして切尖らせ、壹坪ニ三四十本程泥中に五つ目に差込、叢の様にいたし岸圍に致すもあり、尤是は海口汐除ニ用る、上川には無之事也、汐除邊も磯邊岩石等有之汐之差引強く當る所には不用、遠淺にて、大汐之節とても、和らかに汐之當る場所に用る川除用水共、名目之唱は同様にても、仕立方には川々に應じ、品々違ひ有、既に上州烏川に結倉と云普請あり、笈牛に似たる物にて、川底水不通ゟ切等には利方之普請成り共、餘國之川々に曾て無之、大川之ゟ切等、笈牛に而難保は、都て枠を用る、結倉は枠を省略したる様成物也、烏川付之村々は、結倉之外笈牛棚牛等之普請を不知、又同川用水所上ゲ口に、月。之。輪。と云普請、前々仕來り有り、又土俵を以川を瀬切湛水有之ば、鎚蓏等を張、用水に水を引入る、外々にて用る洗堰也、尤少々仕立方は違へ共、先は洗堰之事也、上方關東遠國共、月之輪と唱る普請所之名目を不聞、筑後國に而は、堤を土居と唱へ、石出し籠出を荒籠と云、在方普請奉行の役名を、荒籠奉行と云、肥後國にては、堤を塘と云、在方普請奉行を塘奉行と唱、堤塘ともいふ、つゝみなれ共、餘國に而塘と云所を不聞、高崎に而云堰奉行之事也、海內廣き事なれば、普請之名目等、一事

といふ事の如く、定れる形なし、淵瀬交々等事無常、曲て水勢を引事なかれ、其川の滿水の程を考へ、水當りを察して其用を備る時は、不中といふ事なし、○中略

總而堤は六寸勾倍位よりして、勾倍早きは、水防等の節催走不自由也、併水表へ蛇籠を立、或は櫓枠を立る所は、表八寸勾倍、裏六寸勾倍に築べし、表の勾倍ぬるきは、蛇籠櫓枠等を立て、滿水のせつ根を堀るに隨ひ下り候時、走り惡敷破る事有、大川の堤は馬踏の外二三尺下り犬走り付べし、水防の便りよし又堤厚くして保つもの也堤には裏表共に竹木を植べし、表の方は大木にする事あしく、二三年乱か隔年に伐取、根を繁らせ、株を大きにするをよしとす、如何にとなれば、滿水のせつ大木へは流木芥流れ掛り堰と成、水中にて根ゆるみたる折節なれば、押倒し根返りとなる時、其跡より崩るゝ事顯然也、根をまがらせ株茂りてよ水にさからはず、地形を堅る故崩れず、水除となる也、堤裏は大木になる程よし、大水のせつ堤を水越候而も、大木にて根を〆洗ひ崩る事なし、又水防の流れ等に枝付の大きなるを伐縣防に便りあり、大用の備となる竹木の植付がたき所は、葭萱篠竹等植て可也、堤に作付する事甚あしく、土ゆるみ雨の度毎に洗流し、堤やせるのみならず、滿水のせつ防べき便りなし、禁ずべし、

〔地方凡例録九〕一堤川除用水道橋等普請之儀、其年夏秋出水之樣子に隨ひ、季秋に至り、其場所之破損之輕重を令見分、村々より〻ヶ所附ヲ以願出たる時、役人差出、巨細に見分致吟味、目論見すべし川除之儀、大川小川石川砂川泥川谷川、或は川幅之廣狹、川瀨之遲速、川勢之强弱、川上之山澤嶮岨等考へ、夫に應じ普請之仕形勘辨有り、又前々其國其川々之仕來り有て同じ石川砂川に而も、水刎川除之仕方違あり、同樣之石川なれども、上州上利根川烏川抔と、甲州駿遠之川筋、水刎岸圍地留之仕立大に違ひ有、泥川に而も、縱ば關東之川々は、土出萱羽口等に而、水刎岸圍仕立、越後國信濃川も泥川に而、川幅河之摸樣も、大概下利根川同樣之物なれ共、是には土出し萱羽口等なし、何

十分に下り不參候得ば、滿水の時川上の堤に難所出る物也、○圖略

一堤築候土取場之事、堤の裏にては不取もの也、川之方に而可取也、但堤なりには不取也、堤より拾間も拾五間も除て丸く堀る可然也、則坪。掘。と而古法也、若土不足ならば川の方へ長へ掘て可取之、川表に空地無之時は、堤の內より取事あり、左候はゞ間を二三拾間も置て可取之、畑方多き所ならば、畑の上土を可取也、其跡則田に成候樣に、平に可取之若上は異土にて、底は赤土野土砂利に而惡敷土ならば、先々上の土をば側へ刎置、件の惡土を堤江運せ、扨刎置候土を平に埋め、田所を損さらざる樣に可然也、○中略

一堤腹付を仕に必入あり、春は川表に仕て吉、春は芝草早生じ茂候故堤の爲に吉、夏秋堤の裏を可仕は則古法也、若堤に竹抔有之、腹付致にくゝ候はゞ、竹を結び分て築べし、竹を切候へば、以後竹不生、殊に竹の根腐、堤の弱く成る也、結び分て築候へば、少し土の中へ埋候而も、後には竹必ず生ずる也、鼠穴蛇穴抔有之堤は、猶以春の中に川表を專要に築可堅也、滿水之時水洩候に付、川表八九合之水出には、手を可付樣も無之、又川裏よりは諸も安きもの也、又堤の中濕地有、涌水有之由候はゞ、逐詮議上懸摺付に腹付仕、或は腰懸ケをすべし、涌水の處は置土を仕べし、扨水引て後川表に腹付可仕、堤之儀は纔の小穴一ツより洩シ初め、穴連々大に成り、切所となるもの也、

〔治水要辨〕堤の辨

一堤を築事、第一其川の滿水の分量を考へ、川幅之廣狹に隨ひ築べし、切所等築立る事、多くは切所堀れて水深きもの故、後へ寄て築立る事多し、是等の義、專地の利による事なれば、見立所要也、川幅廣き所の堤をうしろへ寄候程、河原は水影になり、洲を置、高くなる也、古堤敷の水深なる所へ、水先押向、岸を離れざるゆへ、滿水のせつ保ち難し、堤は表へ押出して功ある所も有、後ロへ引て功有所もあり、一偏に論じ難し、其川々の分量に隨ひ計ひあるべき事也、水は方圓の器に隨ふ

高低をも大細をも見合、川上の山々江違法を考、滿水之節、堤何台之水に候半か分別可築立之、總而堤出し猿尾等は、水に不逆樣に少引除而短く仕事古法也、其底意は以來堤外に洲を置せ度時に、籠出し石出し亂杭猿尾等に、伐可仕時に、川幅狹く候而は、自由難致故也、總而堤高下厚薄等は川の合恰により、又は野水等のすべに依べし、

一堤の法は川に寄、段々可有之、大法は川表一倍五割川裏二倍に仕事有之、是則常之法也、或は川表一倍川裏一倍五割に仕事も有之に、何などは今少し急に仕事も有、上に犬走を附事尤吉、若堤の根へ河瀨屢々闕落候處は川表の堤の下を、堤のなりに四五尺も掘崩し、萱端口に築立る事もあり、新堤築候も此心也、法は川表一倍五割川裏二倍、或川表一倍にも仕也、芝を附候事古法なり、越水之爲、又萱無之處に而は川表之堤根に石籠を堅にならべ、籠腹付に仕事もあり若竹石不自由之所、間拔籠とて、籠の間二尺程宛も明け、其明けたる所は石計を拾ひ付置事もあり、是も出さす籠とて有來ル法也、又萱竹一切無之所に而は、亂杭を打、其杭を力に致し、石計拾付て石腹付にもする也、堤の馬踏はひろく築く、常に人馬を通し爲踏付、堤を堅メ候事吉、勿論滿水之節、洩水涌水越水等有之時、可防之爲を兼て令丁簡、竹木芝くれそだ木筵とも、心當土取石取場以下之事心付、急之時に事を不欠樣に可致事也、

一堤の後に沼池等あるは、大切之場也、是は堤の根方に亂杭を打、浚除を可致置、又柵に仕事もあり、波にて堤崩るゝ故如斯、

一堤に芝附樣は、木口繼にひかへ有之樣に可附也、堤の形には惡し、堤の兩面に柳をさし、笹竹などを植る事在大なる竹木は惡し、柳は二三年宛にて苅取べし、總て上へ高き木葉の茂りたるは惡し、柳は根ざし多き木故、堤の爲不害、

但川表に竹木植候事、向の堤と此間の堤間之狹き川にては惡也、川水下へ流るゝに障り候、水

淀川江切れ込、城内江水入、八幡堤切込、河内國中一面水入申候、

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年七月廿五日、大風雨利根川荒川堤決ル、江戸近國所々洪水數ヶ所と雖も、見聞する處を茲に記するに、七月廿四日より同夜翌廿五日迄大風雨、利根川、荒川滿水、利根川堤は武州忍領の河原村にて、八百四五十間切れ所出來、荒川堤は同領久下村にて五ヶ所合て三百五十七間餘切れ所、及び熊谷池内三ヶ所三百十七間切れ所出來、其餘越切の場所石原邊數ヶ所、且熊谷南裏百間出しと唱ふる水除堤、凡二百間餘押流し、水一時に押入り、○中略又八月十三日に至り、大風雨二番水にて、大に難澀せり、其餘雨降の度毎に、荒川の水七分通り流水入り、麥作根入り差支へ、領主松平下總守普請自力に及び難く、公邊へ申立て、急水留普御入用仰付らる、

〔關東筋川々御普請立合御用留〕關東筋東海道甲州其外川々川除御普請之品覺

一新堤　但貝形といふもあり、かまぼこ形といふもあり、丁張に寄、

一堤欠所　但下埋水中もあり、ほれ所もあり、

一堤減所　但欠不切所なり

一堤洩所　但ひくゝなりたる所也

一引堤　但前に古堤有之候得共、川欠等にて如元築立がたき所をいふ也、

〔堤堰秘書〕一堤川除は、少物入多候共、丈夫に仕、已來之爲能樣に致事尤也、總て水の早き川よりは、水の緩々と流候處の堤痛物也、堤の上に大木有之は、風雨滿水の節、堤の爲惡く候、鼠ムダロの穴、蛇の穴等も見へ候はぬ樣に、竹木植込、川幅を狹候は惡し、不斷川表川裏共に遂見分、堤に穴抔無之樣に可心懸也、

一堤を築立候場所色々可有了簡、第一川向川上川下を得と令見分、河瀬之廣狹等、又は近邊古堤

寛保二年壬戌八月朔日大風雨洪水記之、古より百年來無例大變云々、同四日又大雨大水、滿事十餘日、

八月朔

霖雨之中、至今曉而大雨、密雲暮々焉、風發寅卯、未剋洪雨東篠、風打樹幹、酉剋闇夜昏然、風烈雨頻、殿屋屏墻、轉倒擾亂矣、○中略

此時利根川、荒川、兩川混交、而大水切堤數十ヶ所、怒水洪波、一時深流于葛西龜井戸本所、其餘到于淺草今戸、猶觀海涯、因地高低、水深六尺、亦九尺、或一丈、又二間云々、本所殊卑下而深焉、武商俱遇危急困厄矣、千住大橋兩國橋共流墮、新大橋中間斷、永代橋拔柵三四而流失焉、其水落于海濱、音如怒雷、響於三十町、市中監吏石河土佐守、島長門守、與力士十人、同心師五十人、催市町於丁男、而防流橋、且放助舟、令本所救於溺死、大水滿七日也、

〔視聽草六集十〕天明六丙午年七月江戸中所々出水之書留

堤押切又は切落候場所

一日本堤の末土手の道哲の寺より浮切、淺草御門之外へ水押入、

一本所小梅へ入候三巡りの手前、本多彈正少弼下屋敷末樋押切、大川へ水落候、

一三圍稻荷の西の方土手七八間切れ、水は大川へ落候、

一其外本所邊小松川葛西の所々堤押切れ候場多在之候よし、其委細不相知候、

〔視聽草四集九〕享和二壬戌年七月高水

上方筋出水、六月廿八日朝より大雨降り續き、廿九日七月朔日逐々出水致し、伊勢路鈴鹿山邊水海の如くになり、近江路草津河上にて切れ込、宵之内餘程流れ、京都東川筋定杭より水五六尺相增し、淀川、桂川、木津川、高水、伏見高橋邊、家之棟江水越、到來橋、豐後橋、大橋落、宇治橋大損じ、高槻邊

ニ、友田左近右衞門ト云者、主ノ供シテ來居シヲ御覽ジテ、アノ者吾合肩ニヨカランナテ召レ、人夫ト同樣ニ左近右衞門ヲ合肩ニ土ヲ運バセ給フ、之ニ依テ諸侯大夫ヲ始、供奉ノ人々ハ申ニ及ズ、近郷近里ノ老若男女僧侶ニ至ル迄、我モ我モト土ヲ運ビ、石ヲ引シケル故、半日計ノ間ニ堤ノ切所悉ク出來シテ、大水ヲ防ギ止ケル、數萬人ノ中ニテ、友田左近右衞門御目ニ付、忝クモ太閤ト合肩セシコソ冥加ナレト、人々云レシト也、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月十日この七月廿七八兩日の大風雨にて、畿内所々堤崩れ水おしあげ、八月十二日風雨に、長崎天草の海濱潮入て民家を流し其外九州田畝損害し、十六日の風雨に、播州石州始中國邊損害する所多し、廿九日より九月二日迄の霖雨に、攝州南北中島堤くづれ、山城淀河内堤みな破れ、江州も田園多く損じ、勢州四日市、神戶、庄野、三重、鈴鹿、川林の郡堤崩れ、民家人畜損害少からず、

〔嚴有院殿御實紀五〕承應二年六月廿一日、此六日大風雨にて、紀州熊野浦にかゝりし貢米の船五艘その外浦々の船二百五十艘やぶれ、材木六萬千八百本流失し、紀勢兩州民家千五百三十崩れ、每川出水し、堤防四千五百五十間壞れ、男女二十七人溺死せし注進あり、三家記、紀伊記、水戶記、

〔玉露叢十八〕寬文五年七月十六日、尾州御領强雨ニテ、田畑損亡夥シ、同廿八日廿九日又同大雨ニテ、所々ノ川水出申候、取分ケ庄內川大水ナリ、八月一日ニ、木曾川筋ノ增水ニテ、堀川除大分破損アリ、

〔玉露叢二十一〕寬文九年六月十七日ニ、松平出羽守領內雲州ニ於テ大雨也、依テ水損夥シ、川除井關堤トモニ、九百四十五ケ所ナリ、此切口ノ間數都テ二萬三千五百間餘、但シ道程ニシテ十里三十一町餘也、本田新田トモニ水入高三萬六千五百石餘、內千九百五十石餘ハ砂入、

〔視聽草五集七〕寬保洪水記

堤防
堤防破壊

に相成候間、向後百石當不取極、前年普請入用、翌年限り取立候積り、就ては是迄御取替金相成居候分も、年々割合差加へ可取立筈の處、當年の儀は諸作不熟、又は水難にて可爲難儀候間、追て年柄見計ひ差加へ取立可申候、且是川々定式普請人足扶持米、並に國役普請貸米の分、最寄所相場穀代を以て被下、臨時御普請の節は、人足一人永十七文被下候處、定式並に國役普請は、來卯の春より江戸張紙直段の割合を以て、石代被下候筈に付、其旨可相心得候、

右之趣、伊勢、三河、遠江、駿河、甲斐郡內領、伊豆、相模、武藏、安房、上總、常陸、上野、下野、越後、出羽國、御料は御代官、私領は領主地頭より、不洩樣可被觸候、

〔例書一〕一御料所の堤川除井堰圦樋橋之類、都而在々御普請之場所、近年に及び御普請受負仕事出來、自前々百姓自普請之場所、近年に及び、公儀御入用を以仕候處も、多分出來仕候處に、被受負之輩は、當時之利德有之所を專にし、無程破損可有之を不顧候所、諸事之仕方粗略多く、堅固ならず、依て年々所々の御普請絕る事無之候、自今以後は、御普請受負之事、一切被爲停止、其村々之百姓受に申付、若百姓共難及自力所々は、其支配御代官吟味有之、公儀御物入之米金等百姓共に被下、御普請可被申付候、總而普請有之場所、公儀自分之譯隔なく、其所の諸百姓力を合候て、小破の時に取繕、大破に不及樣有之ば宜敷候、若亦御普請之奉行役人以下、諸事之仕方粗略にして、堅固不成樣有之は不及言、公儀の御物入之事猥に多く、或者百姓共江被下之米金等押而留、都而是等の類私之事共於有之は、早速御代官江可申聞事、

〔明良洪範入〕秀吉公ノ時、洪水ニテ淀川ノ堤切レテ人民難儀スト聞給ヒ、自ラ見分ニ出給ヒケレバ、諸侯大夫小身ノ士迄皆供奉ス、秀吉公御覽ジテ、此儘ニテハ山城大和ノ二國モ湖水ト成ベシ、土俵何程有バ防ギ止ベキヤト仰セラルヽ、地方ノ者申ケルハ、四五萬俵モ有バ防ギ止ベシト申上ル、秀吉公聞召レ、易キ事也、俵ヲ在々所々へ觸テ受寄セ、土俵ヲ拵ヘサセル、宮部善祥房ガ家來

取繕容易に御普請は相願間敷筈之處、近年は聊成破損をも御普請願出、見分罷越候者も、御普請所自普請所之吟味も不致、村方申立に泥み、手重なる積方いたし、或は用水溜井用惡水路浚等、外御普請一同江組入御普請之義被相伺候向も有之、如何之事に候、此度御勝手向御改正被仰出候に付ては、猶更御普請所自普請所とも、大破不及樣、平常自普請爲差加、御普請願出候はゝ、前々仕來井寶暦度迄之證據書物をも相糺し、御普請所にても、自普請爲致可然程之場所は、理解申諭相省き、無據箇所而已、其場所々々に應じ、保方勘辨いたし、可成丈手輕に積立、仕立方之儀も手拔無之樣入念、是迄之御普請金高に見合、向後際立御入用御出方相減候樣可被致候、右は前々より被仰渡并申渡置候趣別紙書拔相添申渡候間、得與相心得、手附手代并其筋掛之者江も急度申渡、以來無違失、精々遂吟味可被相伺候、以上、

辰〇弘化元年　正月

〔嘉永明治年間錄一〕嘉永五年正月八日、諸國川々土木國役金ヲ、萬石以上ニ課スル事ヲ舊ニ復ス、

諸國川々普請國役金、萬石以上之分ハ、暫の間被及御沙汰間敷旨、文政七申年相觸候處、尚又當子年より、前々之通、萬石以上の分も、一統國役普請被仰出候、尤一國一圓二十萬石以上之面々は、可爲唯今迄之通、其以下自普請難成、捨置候ては亡所可成程之儀にて、領主之力にも難及大なる普請に候はゝ、其所御料私領之無差別、國役割にて出來、公儀より右入用金御下げ可有之候間、自普請難成節は、其段可被申出候、委細之儀は、御勘定奉行へ可承合候、但二十萬石以上にても、高之內國を隔、少分之領知離候場所は、二十萬石以下同然たるべく候、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年九月、川々普請國役金ノ法ヲ改ム、

周防守殿渡書付　諸國川々國役普請全國役割の儀、是迄高百石に付銀卅兩を限り取立來り候處、近年川々破損多く、其上米價並に諸色共高直に付、國役割御取替金相嵩み、年々取立不足

候共、力之及丈け自普請をも差加へ、小破之内無油斷、丈夫に村繕をも可致は勿論之事、御入用を以御普請被仰付候節は、殊更精を入可申候、急度可被申渡候、

右之趣、手附手代共幷村方之もの共江も可被申渡候、且御普請所村々立會として差出候、高持身元幷人物共宜もの相撰、名前書早々可被差出候、

（朱書）明樂飛驒守殿申渡、田口五郎左衛門殿立會、差引中島平四郎、

以一紙致啓上候、然者昨廿三日拙者共、御殿江呼出に付罷出候處、川々御普請之儀ニ付、別紙之通、飛驒守殿被仰渡、各樣江御通達可及旨御達有之候間、委細右書物にて御承知、一紙早々御順達、留りの御方より、半左衛門方江御返却可被下候、以上、

十月〇（天保七年）廿四日

羽倉外記

伊奈半左衛門

〔代官觸書 三〕利根川、江戸川、鬼怒川、小貝川、多摩川、其外川通附洲、連々洲高に相成、葭萱竹木等生茂り、且本堤外畑圍小土手等猥に築立、水開きを狹め出水之節水捌不宜趣に相聞候間、自今已後幾之小土手にても、本堤外江築立候儀は、決て致間敷候、若無據子細有之ば、奉行所江申立、可受指圖候、尤是迄有來候堤にても、場所に寄爲取拂候儀も可有之間、兼て其旨可相心得、葭萱竹木之儀は、年々出水之頃合見計、其以前無油斷急度苅拂候樣可致候、

右之趣、關東筋川通、御料私領寺社領共、不洩樣可觸知者也、

二月十〇（天保三年）

右之通可被相觸候

〔代官觸留 四〕申渡

諸國川々堤川除用惡水樋類御普請所之儀、前々申渡置候通、水下組合又は其地方にて、小破之內

外出役連印

加賀守殿
周防守殿江田中龍之助ヲ以上ル

（御勘定所掛取扱御用向書付）天保五午年五月晦日

御取箇方掛御用向取扱廉書

御普請方

年々諸國用悪水圦樋橋堤川除等御普請之儀は、定式前年之冬、關東東海道甲州川々定掛り場之分は、御普請役目論見仕上、御代官御預所手限場之分は、目論見帳を以相伺、

（代官觸留ニ）今般川々御普請之儀に付、加賀守殿御沙汰之次第も有之候間、別紙之趣、御普請役共江も嚴敷申渡候、附ては其方共手附手代共儀も、手限御普請向に付ては、不埒之取計いたし候族も有之趣相聞候、以來は格別に人物相撰御用向申付、身分謹愼は勿論、川除類保方は不及申、御入用不當樣萬事正路に可取計旨、嚴敷可申渡候、

一川々御普請向之儀、總代請負人等に不申付、縱令不便利之事有之共、其村方之もの江申付、不器用にて不便利之儀等、精々教諭を加へ、御普請出來候樣可致旨、手附手代共幷村役人共江可申渡候、

一都て川々御普請之儀、目論見仕立共村役人幷高持身元宜者共江申付、一同罷出、請負ケ間敷者不相交、正路に取計、人足遣方金錢請取渡勘定等、夫々村役人幷高持身元宜もの共立會見屆候て、総て小前之もの迄疑念無之樣可致旨申渡、尤支配限村々身元宜もの名前相糺、兼て被申聞、急度罷出立會候樣、可被取計候、

一村方之もの共川々御普請之儀は、一村之安危存亡に拘候大切之儀にて、御普請被成下候儀は、御救筋に候處、自己之利欲に心得を違、永年之難儀を不存、請負人等江任、仕立方疎にいたし候、あるひは勝手儘之御普請相願、水難不通村々も有之趣に相聞、不埒之至に候、たとへ御普請所

十二月

天保二卯年十二月

御勘定奉行江

利根川江戸川小貝川荒川、總而川通り堤外百姓家建候儀、御停止之處、段々屋敷を築立、百姓居住之所々有之、出水之障に成り候間、取崩され候儀も可有之候、自今新屋敷拵ル儀は勿論、小家に而も作ル儀并破損修復等も堅仕間敷候、此旨關八州川通在々、御料は御代官、私領は地頭より、急度可申付候、以上、

六月

右之通、享保十二未年相觸候處、川通堤外江百姓家建候も有之趣相聞、若家作いたし置候も有之候はゞ、為取拂候儀も可有之候、自今川通之内江新屋鋪取立候儀は勿論、小家に而も一切作出て申間敷候、

右之趣、關東筋川通り、御料私領寺社領共、不洩樣可觸知候也、

卯十二月

右之趣可被相觸候

（代官觸留ニ）堤川除用惡水樋類、御普請之儀、自普請に紛敷分は、糺之上證據書物有之候得ば、御普請被仰付候處、以來寶暦之度之證據分明に候はゞ、御普請被仰付、其後年近き書物にては、御普請不被仰付、自普請之積相心得可申候、

右之通、去ル申年被仰渡候處、其後も證據不分明之場所目論見被相伺候向も有之候間、前書被仰渡、無遺失取調可被相伺候、

辰〇天保三年十二月十六日

中西藤太手附

横山勝藏印

仕方悪敷候歟、此等之吟味別而心を附可然候事、

右之通、普請之儀相心得取計可被申候、尤所々之様子次第、其趣により了簡可有之候、

七月

〔天保集成絲綸錄九十八〕寛政三亥年九月

大目付江

近年打續諸國大水有之、年々御普請御入用多分に相掛り候處、此度關東川々大水に而、定式御普請所大破に付、御料村方に而も、同普請所私領寺社領共舊儀等申立、依願一統御普請被仰付候筋に無之、見分之上、大川通格別之大破村方、自力難及或は領主地頭之手當行屆がたく、御領所江も可差障場所は、糺之上品に寄、御普請等被仰付候儀も可有之候、左迄も無之破損所、或は内郷堤往還道橋樋類等破損之分、猥に御普請等村方願出ル共、不取上筈に候間、決而願出間敷候、右之通御料私領寺社領共、御代官領主地頭より不洩様可申渡候、

右之趣、向々江可被相觸候、

九月

文政四巳年正月

大目付江〇中略

一諸國川々國役普請之儀、容易に相願間敷旨、去ル未年相觸候處、一旦國役普請被仰付候場所は、自普請無益之様心得候向も有之哉に相聞、聊なる破損をも申立候様成行候段、右様には有之間敷事に候、堤川除及大破捨置候而は、亡所にも可相成程之儀に而、領主地頭之力に難及類之外は、可為自普請事候條、猥に國役普請相願間敷候、

右之通可被相觸候

申儀に候、其内不殘崩候堤、元之所に築立候よりは、場所を替可然所も可有之哉、彌場所替可然候はゞ、繪圖を以、相伺可申上事、

一築地に成り、只今迄之所には、堤築立がたき所は格別、左も無之に少々之利害を申立、堤場所を替、或堀割川違等、大造之御普請申付候而も、如今年大水には無益之事に成候間、堤八九合迄之出水に能持堪候評儀可然事、

〔享保集成絲綸錄二十四〕寛保三亥年七月

一淀川筋年々水損に付、城州攝州河州村々之者、水損相止候御普請之儀、前々より度々願出申事に候、夫に付吟味之次第心得可有之事に候、先川縁を、村之者共は他之障にも不構、其村之圍を專一に可申候、扨又御普請被仰付候得者、縱令水防之益には成不申候とも、其村々潤にも可相成候間、大造成川浚等、百姓共好み可申事候、

一先年と違ひ、近年は次第に水損增候との事可申立候、是は何れの川も年數重り候程、宜敷は成不申、少々充も川床は埋り申事に候、總而川筋に不限、堂社之破損も、最初出來立候初は、何之構も入不申候得共、年を經候に隨ひて、漸破損出來候、如元直し候得ば能候處、役人之不作略成は、修復之致方も麁相に而、堅固之所迄都而動し、夫故至近年破損多き儀も難計候、殊更川普請には、右之趣目前に有之樣に人々申事に候、

一土砂留之事、尤可然儀に候、然共洪水に而、山々より流出候濁水滯り、皆置洲に可相成候、洪水之節之土砂は難留候半歟、川々强く埋り候は、大水之節之樣に相見候、山を伐荒さず、林をそだて候儀は、何れにも益可有之哉之事、

右水損百姓共願に付而、夫々取合致吟味候而は、川浚か堤之かさ置歟不申付しては、不叶樣に可相聞候條、其根元を正し可有了簡候、若其所之役人、平日破損之構不沙汰故歟、又は水刎川除等之

候得共、可成程は證據を立可承候、たとへ證據無之候とも、道理に相當り候義は可承屆候、右品品により御代官存寄之趣尤に相聞候はゞ、御普請被仰付義も可有之候間、面々別々に存寄申越有之樣可申達事、

元文二巳年六月

御勘定奉行江

淀川　木津川　賀茂川　桂川　宇治川　中津川　神崎川　石川　大和川　十三間川

一京大坂に而、井堰除普請取扱之儀、先日御勘定奉行より伺之上相極候通、京大坂江書付遣し、於當地向後如此取扱候間、此趣に取計候而可然との段、所司代御城代より、伏見奉行、京大坂町奉行、堺奉行江申渡候樣に可致事、

一川筋にて新規普請は、百兩以上、修復は五百兩以上、江戸江伺可然事、〇中略

一京都町奉行只今迄普請入用之高計は承、仕樣書繪圖等を取、吟味仕候趣には不相聞候、大坂町奉行は、新規之普請水行之障計吟味、總而普請之儀は、不相構趣に候、向後は京大坂町奉行共に、仕樣書并繪圖をも取候而、吟味仕可然事、

一伏見奉行、京大坂町奉行、堺奉行吟味之筋は勿論、所司代御城代江相伺可然事、

一右川々大堤切候之節、又は新規之普請江戸江伺候程之儀は、其掛り之奉行見分候而普請申付、出來之上、猶又見分可有事、

六月

右之趣、所司代、御城代、且稲葉内匠頭江も相達候條、可被得其意候、

〔享保集成絲綸錄二十五〕寬保二戌年九月

一今度關東國々大水に而川々堤損毛修復之事、堤不殘押崩候所、或欠損候所、何も如元堤築立可

所々有之、出水之障りに成候間、取崩され候儀も可有之候、自今新屋敷拵候儀は勿論、小家に而も作候儀、幷破損修復等も、堅く仕間敷候、此旨關八州川通在々、御料は御代官、私領は地頭より急度可申付候、以上、

六月

〔享保集成絲綸錄二十四〕當時村方五人組帳差上申一札之事〇中略

一堤川除井堰御普請仕候人足賃錢、幷御扶持方等被下候通、當座に小百姓江割渡帳面江印形取置可申候、總而御公儀樣より被下候賃銀御扶持方之儀、諸色納物之替り繼合勘定仕間敷候事、

〔會計秘錄一〕一在々堤川除等之御普請等、往古は町人百姓等に請負に申付候儀も有之候處、近年御停止に候、〇中略

一川附寄次第と申儀、大川自然と大水にて、川瀨違附寄に成候得ば、附寄次第に地所付之方江取候へ共、人力手段を以、川除等之仕形にて、川瀨違候樣にいたし候而川通を違わせ、手立を以附寄出來候は、見分吟味之上、右之定法之裁判に不能成候儀も可有之事にて候、依之平常川筋之內にて、大之新堤又は水除之大築出し等、川中へ仕出候儀は制禁にて候事、

〔享保集成絲綸錄二十四〕元文元辰年九月

一甲州御代官村々百姓共、古來より川普請之義、幷近來度々大御普請有之候得共、大破に及候譯承り、いよ〱總兵衞江も心得にも可成義は可申達候、幷右百姓之申合承候上、御代官存寄をも加可申越候事、

一百姓共自分勝手能樣に、御普請之仕方等申義も可有之候間、了簡致可承事、

一先年櫻田御領之節は、小給之輩之知行も交り有之由に候、其節如近年大普請は難成可有之候、如何いたし相濟候哉、數十年來滿水無之候哉、不審に候、ケ樣之所、右年久敷義書留も有之間敷

一諸廻船之掃除仕候節、其外之節も、舟之塵芥川江捨候付而、川口埋候間、向後は川江捨不申、傳馬船ニ而、永代島御定之ごみ捨場江遣捨可申候、并御船手衆よりも、右之通申渡可有之候、是又左様に舟頭共にも可申渡候、

右之通、諸問屋中江申渡者也、

一舟之ごみ川江捨申ニ付而、川口埋り候間、向後永代島御定之ごみ捨場江遣捨可申候、川内ニ而一切捨申間敷候、此旨川舟持候者ども為申聞、急度相守可申候

右之通、町中不残相觸、舟持有之町々名主月行事、今日中ニ樽屋所江印判持参可申候、以上、

十月

〔享保集成絲綸録二十四〕享保五子年五月

覺

諸國堤川除或旱損所等之普請之儀、一國一圓又は廿萬石以上之面々は、只今迄之通たるべく候、其以下自普請に難成、打捨置候而は亡所に可成程之儀に而、其領主之力にも難及、大き成普請に候ハヾ、其所御料私領之無差別國役割合にて出來、尤公儀よりも右入用被加ニ而可有之候間、自分普請に難成節は、其段可被申出候、委細御勘定奉行江承合可被申候、

但貳拾萬石以上に而も、高之内國を隔て、小分之領知はなれ候場所は、貳拾萬石以下同前たるべく候、

以上

九月

享保十二未年六月

利根川、江戸川、小貝川、荒川總而川通堤外、百姓家建候儀御停止之處、段々屋敷を築立、百姓居住之

寛永六己巳年四月

覺

一御代官所中、切々見廻り堤川除等無油斷可被申付之、永荒川成地不足過分有之由、郷帳ニ仕上候御代官衆數多有之候、御奉行被遣撿地可被仰付候間、兼而其吟味無之、百姓任申旨、地不足ニ相兼置候面々は、可爲越度事、〇中略

四月

〔德川禁令考四十七法度部〕寛文十一亥年十一月五日

淺草川大水之節取計并川端家作之事

一淺草川大水出候節、兩國橋船掛候はゝ從公儀引除させ、其人足共に可被下候、若引除候儀は不及申、其外橋々川上有之船は、致油斷橋々江不流樣ニ、常々堅可申付候、〇中略將又川端之家作之事、兼ても停止無仰付候得共、頃日は所ニ寄川端家作り出候と相見へ候間相改、川之障ニ可成所は、只今有來候家作共、御詮議之上崩させ申ニ而可有之間、此段銘々申斷、重而被申越候川端并堤外に家作り候事は、淺草川に不限、在々所々何方も同意候間、可被得其意候、以上、

十一月五日

〔教令類纂初集八十八〕延寶八庚申年閏八月三日

條々〇中略

一堤川除道橋等、其外諸事常々心にかけ、物ごと不及大破時、支配所江達し、可被加修理、〇中略

右之條々、堅可被相守もの也、

延寶八申年閏八月三日　備中印

〔享保集成絲綸錄四十二〕天和元酉年十月

種ノ方法ヲ案出シ、紀州流、甲州流等ノ流派ヲ生ズルニ至レリ、

凡ソ修築ノ用途ハ、河川ノ大小、工事ノ輕重ニ由リテ其所ヲ異ニシ、幕府ノ費ヲ以テ辨ズルモノヲ、公儀御普請ト云ヒ、諸侯ニ命ジテ助力セシムルモノヲ、御手傳普請ト云フ、又領主ノ獨力ヲ以テ支辨スルニ由ナク、一國或ハ數國ニ命ジテ修築セシムルモノアリ、是ヲ國役普請ト云フ、其他通常ノ小破ハ、慣例ニ隨ヒ、領主地頭、或ハ居村ノ民ヲシテ、之ヲ修理セシム、

河川ヲ疏浚シテ、舟楫運輸ノ便ヲ開キシモノ、慶長ニ吉田了以アリ、徳川家康ニ請ヒテ、先ヅ丹波ノ保津川ヲ浚渫シテ、數里ノ間舟楫ヲ通ジ、尋イデ大佛殿造營ノ用材ヲ運ブタメニ、高瀬川ヲ穿チテ、大ニ民力ヲ省ケリ、其他元和中神田川ヲ疏鑿シ、天和中神田堀ヲ疏鑿セシヲ始メ、新ニ疏鑿シ或ハ浚渫シテ、運輸ノ便ヲ開キタルモノ少カラズ、

又飮料ニ供スルガ爲ニ、溝渠ヲ穿チテ、河水ヲ導キシモノ少カラズ、之ヲ名ケテ上水ト云フ其最モ世ニ聞エタルハ、玉川上水、神田上水ナリ、元來江戸ノ地タル甚ダ良水ニ乏シク、士民皆飮料ニ窮セシヲ以テ、幕府ヨリ費用ヲ出シテ、先ヅ神田上水ヲ引キ、尋イデ玉川上水ヲ引キ、市内一般ニ流通セシメシヨリ、遂ニ其憂ヲ免ルヽニ至レリ、

制度

〔教令類纂初集八十七〕慶長十七壬子年十月十六日

覺 略○中

一堤等之芝切はぎ候事、一切無用可被成候、馬さくり候處江は、土を敷、かたくふみつけ候樣、可被申付候、略○中

慶長十七年子十月十六日

青　圖書
安　對馬
土　大炊

古事類苑

政治部九十五

下編

水利上

鎌倉及ビ足利幕府時代ニ於ケル水利ノ業、見ルベキモノ甚ダ少カリシガ、德川幕府ノ天下ヲ一統スルニ至リテ、大ニ意ヲ此ニ用キ、或ハ治水ノタメニ巨堤ヲ修築シ、或ハ運輸ノタメニ河川ヲ疏浚シテ害ヲ除キ利ヲ興シタルモノ甚ダ多シ、元來我ガ邦ハ河川甚ダ多ク、之ガタメ灌漑運輸ノ利ヲ得ルモノ多シト雖モ、毎歳害ヲ受クルコト亦頗多ク、就中其尤モ甚シキモノ、畿內ニ於テハ淀川、大和川ヲ最トシ、東海道ニ於テハ富士、天龍、酒勾、利根等ノ諸川、東山道ニ於テハ、木曾、信濃等ノ諸川ヲ最トス、淀川ノ汎濫ハ、上古以來常ニ國ノ患トナリシガ、世ヲ經、年ヲ累ヌルニ隨ヒテ、河身益、埋沒シ、慶長以來幕府ニ於テ心ヲ勞スルコト少カラザリシガ、天和中河村瑞賢ニ命ジテ、大ニ治水ノ業ヲ起シ、下流ヲ穿チ新川ヲ作ルコト一千丈、其他新ニ溝渠ヲ穿チ、浚渫ヲ行ヒ、土ヲ盛リ石ヲ疊ミテ、修築スル所甚ダ多ク、貞享四年ニ至リテ成功ス、今ノ安治川卽チ是ナリ、其後寶永元年、河內和泉ノ間、四里二十八町ヲ疏鑿シテ、大和川ヲ順流セシム、新大和川卽チ是ナリ、利根川ノ汎濫モ亦毎歳ニシテ、損害少カラザルヲ以テ、寛文中新ニ一川ヲ穿チテ順流セシム、之ヲ新利根川ト云フ、富士、天龍等ノ諸川モ亦年々巨害ヲ爲シ、一堤ヲ破壞スルトキハ、忽チニシテ幾萬ノ良田ヲ埋沒スルヲ以テ、鉅萬ノ金ヲ投ジ、專任ノ吏員ヲ設ケテ、修築ニ從ハシム、隨ヒテ修築ノ方法ニ就キテモ、苦心慘澹、種

散日衆、膏腴之土棄於山林、而無知墾之也、習以爲常、不知重末忽本之爲非也、閭境之民、見上之所重在彼、而所忽在此也、乃日捨其末、破其機、厭其田野、而樂其都邑、側肩躡足、有如流水、競殖錢幣、遊手而食、情之所常、無知背本趨末之爲非也、是以其末之勢日益厚、而其本之勢日益薄、國內之仰哺而資給者日益多、則督責剝括者日益急、削其根抵而滋其枝葉、根抵之力居其十二、枝葉之力居其十八、假量海內一歲之所生、纔足以資海內一歲之給、不幸有水旱凶荒以加之、其何以備之、然而猶恬然以謂、黃白圓方之幣、皆我所作、大買膏脊之庫、皆我外府、穀粟之乏不必憂也、布帛之匱不必恤也、噫彼庫中物雖千億乎、不過貿衣食之具耳、一鄉之凶、一國之飢、猶可諉曰難於外、當夫海內之田荒、而海內之廩竭、菜色塡野、道殣相望之時也、其煌如鱗、如箱溢而貫朽者、不足以飽於一日、不足以暖於片時、欲持焉以貿焉、何從取之、根斯蹷、枝葉能獨不枯哉、

〔豐前覺書〕天正十五丁亥六月廿一日二日、總御陣中御覽被成候て、町人浦々さいゐん、其外御陣廻りの作物損申候由、いかゞ仕申候て、此中より言上不申候哉と、箱崎さやの辻と申所へ御馬を被召据、豐前守被召寄、直に被仰候へども、何とてとかくの御返事可申上候や、雅樂助殿みだりに候はゞ自今申上候へと被仰候時、畏候由御返事申上候、此時御あらまきと申候道具、御馬の左右に貳十丁づゝ御もたせ被成候、其內豐前守被召出候時は仰天其中々覺不申候得共、結句村之ために成申儀被仰渡候故、宿へ歸り候てより、箱崎中之者あつまり、御酒被下候て祝申事不淺候、右箱崎御陣中之事、大かた書驗申候、

テモスムベシ、常ニ百姓ニ利ヲ付テ上席ニ置、工商ニハ損ヲツケテ下席ニ置ベシ、農ト商トノ論アラバ、農ニハ二三分ノ勝ヲ付ベシ、工商ハ民ヲ奢サントス、必驕奢ノ物ハ禁ズベシ、下人ノ内ナリトモ正業ノ者ヲ上トシ、游民ハ下タルベシ、淫民ハ亦ソノ下タルベシ、農人ハ一人ニテモ増コトヲハカルベシ、商人ハ一人ニテモ減ント欲スベシ、マタ百姓ニ工商ヲ禁ズベシ、コレ國ヲ富スノ要法、

〔新策五〕務農勸耕

一農捨末、海內將有受其飢者、一婦破機、海內將有受其寒者、況十國中之籍、末其八、而本其一乎、農夫織婦國之根也、士與商工國之葉也、葉之茂、人能見之、根之深、人或不見之、其所見而重之、其所不見而忽之、是世之常習也、背其所忽、嚮其所重、是人之常情也、變其習而回其情、以富其國、非有識者、其孰能之、有識者之所以爲富、無識者之所以爲貧也、無識者之所以爲富、有識者之所以爲貧也、有識者之所以爲富如何、誘天下之民、而使其自嚮田野、苟可以殖稻粱之與桑麻、則寸地不遺也、苟可以課耕耘之與操織、則一人不置也、稱爲賈者、取於其足以通有無、而都無冗賈、稱爲工者、取於其足以給與作、而邑無冗工、衣食之數、多於貿衣食之具、生衣食之人、多於資衣食之人、而受其治者、多於施其治者、故見其都邑索如也、見其田野鬱如也、而無識者見其末焉、而不見其本焉、則其貧之也亦宜、無識者之所以爲富如何、誘天下之民、而使其自聚於都邑、苟可以置肆店之與器材、則寸地不遺也、苟可以執牙籌之與錐刀、則一人不置也、稱爲農夫者、取於其足以責租稅、而田無餘農、稱爲織婦者、取於其足以供文采、而野無餘婦、貿衣食之具、多於衣食之數、資衣食之人、多於生衣食之人、而施其治者、多於受其治者、故見其田野索如也、見其都邑鬱如也、而有識者置其末焉、而察其本焉、則其貧之也不亦宜矣哉、然而彼無識者、猶不察之也、見其鬱如者謂國之富在此也、保護之、其索如者則不知恤焉、抑制禁防之政、不敢無故而加、賈豎之巧術日長、輕重之權操於市井、而無知奪之也、鐲租減額之典、不敢無故而擧、農民之耗

〔林子平上書〕地利之事

一地は土地利は人の利用と成物の事にて御座候、地利を盡すとは、土地より生じて人の利用と成物ども、不遺取用る事にて御座候、然るに不術にては右の地利を盡し候事不相成物にて御座候、先ヅ地より生じ候て人の利用と成候物は、穀類より大なるは無之候故、人々新田を開き候事をば心得候へども、田畠の外に利のあるもの、土地を不存して罷在候、當時御國中を見候に、地利を捨物にして被差置候處、數多に相見へ申候、地利は御國政の重き事にて有之候得ば、ゆるかせに可仕事にては無御座候、能地利を取立候得ば、大に國の富と成事にて御座候、當時能地利を盡候國は薩州と相見へ申候、琉球表黒砂糖は、日本中へ薩州より廻申候、此外にて布類瀬戸物類草木抔夥しく出し申候、又備前備中の瀬戸物疊表、四國鯨藍玉、肥前の櫨の木干鰯、上總下總の木綿琉球芋、紀州遠州の蜜柑、南部の牛馬會津米澤の蠟燭抔は、皆其土地相應の物を仕立たる事にて有之候得共、地利を盡したるにて御座候、

一江の島出島の近邊に、人も住居不仕、無用にて有之候島共夥多相見へ申候、此島ども捨置候べき土地には無御座候、桑并かうず抔御植立可被成候、右の如く被成置候て、其上に初に申上候通、牛馬を御仕置被成置候はゞ、綿紙蠟漆牛馬、此六品は夥く產し候て、大に御利用と可被成事存候、此下にも色々の事共相雜へ候て、地利并產物の仕立樣抔相記申候、○中略

一海濱の沙土江椶櫚を御植立可被成候、毛も葉も籌に相成候故、是も利物にて御座候、

〔由女農志路〕五農ヲスヽメ商ヲ退クベシ、市中豪富ノ者ハ諸侯ヘ館入シ、或ハ公役ヲツトメ、中分ノ者トテモ、平生美食ヲ喰ヒ、美服ヲキテ、安逸ニ身ヲ過ス、百姓ハ日々ニ土ヲホリ糞ニ觸レ、麁服粗食ニシテ、草鞋ヲハキテ市中ニ來レバ、自然ト下ニ見ラルヽニヨリテ、ツイニハ市人ニハイツクバフヤウニナルナリ、夫百姓ハ國ノ本也、生民ノ首タリ、百姓ナクバアルベカラズ、工商ハナク

而、御救等行屆不申候へば、乍恐御上を怨望仕、陰口にはあしざまにのみ申、扨又隣國には、小國といへども下方へ手當て厚き所も御座候へば、只今は我國之民、却て他國を羨み慕ふ様子に罷成居申候、此上又凶年等御座候はゞ、一揆騷動等之變難計、誠に憂へ恐るべき御時節と奉存候、御上諸役人御心付不申ニ而は有御座間敷候得ども、下方之成行委細に知し召さぬ事故、指而御取向方も無御座義と奉存候、古へより明君賢相は、稼穡の艱難を知り、下民の疾苦を察して政事を取行ひ玉ふ故に、民服し國治り候、總而下情に達するは、政事の第一ニ而御座候得共、只今の政務は、皆世家世祿の御大臣方なる故に、才智御座候而も、地方之事、下民の情狀を委敷知玉はざる故、其施し行ひ玉ふも、兎角行屆兼候哉と奉存候、御上にも御仁惠之心被為有、下方困窮之事を思召候にや、儉約之義等、嚴敷被仰出候へ共、時勢行直り不申候様子、孟子の所謂仁心仁聞有て、民其澤をかふむらずと云に同じく、御手段付不申候而は、行屆不申義と奉存候、私事先祖以來御領分御百姓ニ而御座候ニ付、地方之御法、百姓之成行之義、委細見聞仕罷在候、得度相考候に、今窮民を救ひ、國を富し、兵を強く仕候事も、御取向次第ニ而出來可申義と奉存候、下賤不肖之私共、不入申條ニ而御座候へ共、數代御下に住居仕、蒙御國恩居申義、此上も末長く御領分に安堵仕度奉存候處、只今之御時節扱ニ而は、御百姓一等相續仕不申勢ひ、甚以恐入奉存候ニ付、存付候儀書認め申候、若御政務に御心有御人御座候而、御取用ひも被為有候はゞ、千慮之一得、御益にも相立候事も可有御座と、僭越の罪を不顧陳說仕候、大學に財を成に大道あり、これを生ずる者多く、是を食ふ者少し、是を作る者疾く、これを用る者舒き時は、財恒に足ると御座候、困窮の本は、田地取實少きにより、田地取實少きは百姓の力弱りたるにより申儀、上に申ごとく、百姓勢ひ強く、多〻米穀を作り出し候て、游食之者少く相成候へば、國豐かにして、御上諸家中迄富有なるは、必然之御義と奉存候、

ゐ、民の手足は胼胝し、膏雨の下る間を一睡の休みとは成す也、文政十一子の歳は、旱魃殊に甚だしかりしを、一村のもの泉頭に立ち、足も腐る計りにして、數十日挹み續け、毛見受にも不レ至りしとて、御賞賚あることと如レ左、左の御文言にて、水利あしく、闔村難儀成る事を知るべし、

一米三拾俵　周敷村　百姓共

周敷村之儀は、他領入交り候場所に候處、兼々雙方相互に睦敷一和いたし候故、指縫ケ間敷事も無レ之、大郷の所百姓少く、田地は在所より程遠く、作勝手惡しく、剩井手掛り之用水聊にて、多分池水に而作毛を養ひ、旱之節に至て骨折、肥修理等も能行屆、去年は別て植付之頃より天氣打續き、格段水之手に骨折、足立之者は不レ殘相懸り候而、足も水に腐候者も、間々有レ之候得共、潤雨迄は汲續け可レ申と申合、右之痛所にも杖を突罷出相勵、毛見請にも不レ至、苅取候との品、地方役人より申達之趣、具達二御聽一、〇伊豫西條藩主候處、右は兼々心得方よろしき故と奇特之儀ニ被レ爲二思召一候、依レ之米取らせ候樣との御事に候、

八月五日　文政十二丑歳也

〔勸農策上〕農民は國の本にて、本手强ければ枝葉榮へ申道理にて、農民數多くして勢よく御座候へば、米數澤山に作り出し、國家豐饒にして武運長久に御座候、又百姓困窮仕候而は、散田多く物成減少仕候樣成行候へば、御上諸家中迄御難澀に相成、武備もおとろへ候義と奉レ存候、書經にも民は是國の本、本固ければ邦寧しとあり、又四海困窮せば、天祿長く終らんと御座候、今御國〇備前は中國之善地ニ而、山海の利も御座候、其上御先代樣御善政により、兵强く民富み、他邦よりも我國を欽羨仕居申候處、近頃二十年來、凶年多御座候ニ付、御百姓一統困窮仕、散田相增、御毛見多相成候故、御物成り之納り減少仕候而、御作廻御手詰ニ付、諸家中御減祿被レ爲レ成候御時節柄、誠に上下之困窮と恐入奉レ存候、別而無知の小民共は困窮之上、村役人共も歎き願候へども、御時節柄ニ

細川侯、舊來本末ノ圭角怨望、先生〇二宮尊德ノ教ニ依テ一時ニ解散シ、初テ親族ノ好ミヲ厚クシ心意快然、彌先生ノ高德ヲ信ジ、懇切ノ手書ヲ以テ、領民撫育、上下ノ艱難ヲ除キ、富國安民ノ仕法ヲ先生ニ請フ、中村玄順其命ヲ奉ジテ櫻町ニ至リ、主君ノ自書ヲ出シ、其懇切ノ命ヲ演舌ス、〇中略於是先生已事ヲ得ズ、櫻町撫育ノ餘財數千金ヲ贈リ、數年隨身修行ノ大島某ナルモノヲシテ、役夫數十人ヲ率キ、常州谷田部、野州茂木兩所ニ行シメ、廢亡ノ地ヲ擧ゲ、用水路ヲ堀リ、冷水堀ヲ鑿チ、乾地ヲ卑クシ、濕地ヲ高クシ、其土地ノ宜キニ隨ヒ、或ハ水田トナシ、或ハ白田トナシ、大ニ仁術ヲ布キ、窮民ヲ惠ミ、善者ヲ賞シ、惡人ヲ導キ善ニ歸セシメ、勸農ヲ賞譽シ、惰農ヲ振起シ、邑民ノ負債ヲ償ヒ、大破ノ居宅ヲ修復シ、或ハ新家ヲ與ヘ、衣食ヲ與ヘ、農具種穀ヲ與ヘ、凡民ノ安ズル所以ヲ盡シ、再興ノ道ヲ行フ、民大ニ悅ビ、其仁澤ニ感ジ、溜染ノ汚俗ヲ改メ、大ニ勸農ニ趨キ、數百町ノ開田ヲナシ、興復ノ用財タル分度外ノ米粟千五百苞ヲ出セリ、是ヲ以彌開田撫育ノ道ヲ行ヒ、積年ノ負債ヲ贖フコト數萬、隣國其仁政ヲ歎賞スルニ至レリ、兩君歡悅、益先生ノ德ヲ仰ギ給フ、中村玄順ヲ召シテ曰、余ガ數年ノ志願、二宮良法ニ依テ成就センコト疑ヒアルベカラズ、其初メ汝ノ忠義ニ起レリ、醫ニシテ國家再興ノ道ヲ勸ン事、其職ニアラズ、今ヨリ醫業ヲ廢シ、中村勸農衛ト名ヲ改メ此道ヲ勵ムベシ、今汝ノ勤勞ヲ賞シ、祿百石ヲ與ヘ、用人職ヲ命ズルナリト宣ブ、玄順大ニ悅ビ、其君恩ヲ謝シ、直ニ歸俗シテ衣服ヲ改メ、細川家ノ用人トナリ、威權ヲ握リ其勢ヒ大夫ニ勝レリ、

〔伊豫國順廻記三周敷郡〕周敷村

用水　當村井手懸りあしく、泉三拾餘ケ所にあれ共、長二三拾間より四五拾間位にて、百間に餘りたるは、わづか三四ケ所に有るのみにて、三拾餘の內、半は四坪五坪位なる小泉なり、然かも湧勢強からざれば、炎旱には確舂桔槔を用ふる事、石田村に倍蓰せり、晝夜の分ちなく挹み取るゆ

衛門通秋、相模は堀三郎右衛門長任、下枝忠兵衛正忠、上野下野は庵原八兵衛正成、小林淸左衛門重堅、下總常陸は谷庄兵衛某、戸田十郎右衛門重正、上總安房は鈴木太兵衛某、山本九兵衛正重命せられていとま給ふ、

〔毘沙門堂〕一公〇上杉治憲初て入部ましませし年より、民の辛苦を知し召す爲、亦は早つゞきには、田畠御覽の爲に鐵砲爲持、鳥打御野遊の御唱にて、度々野間へ出て耕作の辛苦を見給ひ、或は民家に休らひ、何かれ御物語抔し給ひて通らせ給ひしは常の事也、安永六年九月十九日の事也、御城の北門へ老たる嫗來りて御臺所へ通るといふ、故を問へば、約束しまいらせし刈納(カリアゲ)餅（かりあげ餅とは、農家にて稻を刈仕廻たる祝とて、九月廿九日に、戸每に餅つきてくらふをいふなり、）を獻ずると云、されば御門々滯りなく通り、御臺所へ出て、福田餅（かりあげ餅をまろめたるもの、名づけてフクタアモチといふ、福田の略語にて祝たる名なり、）一苞に大豆粉一包をそへて出しぬ、故を問へば、御門々々にて答、云かく〳〵のごとし、各あやしみ思ひながら、其よし言上に及ければ、扨は殊勝の事也、疾く披露せよとの御意にて御取上あり、飯酒の御手當より金子など給はり、厚く謝して歸し給ひけり、其の故を推尋るに、御野間の時、夕つかたの事也、老たる嫗がいそがしく稻取仕廻居たるを御覽じ、御家中諸士のふりして、御みづから持運び取仕廻手傳はせ給ひて、此稻は何米也と問はせ給ひしに、餅米と答へ奉りしより、斯手傳たればさぞかりあげ餅をばくれるにこそと戲れ宜ひし事のありしを、公と知まいらせしなるべし、

〔米澤侯賢行錄〕侍組より扶持方の輩に至る迄願出て、御手傳を仕度とて、人々蓑笠にて鋤鍬を持て山野に趣き、多年荒田に成し地を開發す、一年にして城下五六里四面に荒田一ケ所もなく興し返しける、此時大臣も蓑笠にて耕作場巡見あり、大臣手酌にて酒を犒らひ、君〇上杉治憲も巡見に出させられ、酒樽のかゞみを長刀の石突にて突破りて酌出し、耕作の諸士に賜ひしとなり、

〔報德記五〕細川侯ノ領邑ヲ再復シ負債ヲ償フ

ニシ、桑蠶桌麻績織染色スルコトヨリ、狩獵シテ狐狸ヲ取リテ、公私ノ用ニ供シ、其他公室ノ諸役ヲ勤仕シ、私家ノ破損ヲ葺治スルコトマデヲ、悉ク幹旋タルナリ、故ニ田畯等、日夜農民ト雜リ居テ、其貧窶ナル者ヲ察シ、其窮ヲ救ヒ、或ハ其善ヲ賞シ惡ヲ警テ彝倫ヲ守ラシメ、至誠ヲ盡シテ勸導セシヲ以テ、習ヨリ馴ト云フ諺ノ如ク、多年ヲ累ルノ間ニ、農夫等漸ク田畯ノ敎ニ化シテ、國君ノ恩ニ懷キ、境內擧テ稼穡ニ精細ヲ盡セシガ故ニ、家々富貴シ、人々皆淳朴ナルコト、七月ノ詩ニ詠ズルガ如ク、純正ナル美俗ヲ成スニ至レリ、故ニ澆季ノ世ト雖モ、國君及ビ諸大夫至誠心ヲ以テ農政ニ善ヲ盡シ、百姓ヲ濟ンコトヲ欲セバ、田畯ヲ置ヨリ良ナルハ無シ、○中略愚老遊歷ヲ好ミ、足迹天下ニ遍シ、故ニ列國ノ農務精粗、風俗勤惰、悉ク觀察セザルコト無シ、此五六年來、諸國不作ニテ、往々饑殍算ヲ亂セリ、殊ニ貴國ハ別シテ凶荒甚シク、野ニ靑草無シ、然ルニ君侯御若年ナレドモ、百姓ヲ恤ムコト厚ク、每日麥ヲ齎シテ、村里ヲ奔走シ、周ク貧窮ヲ救給シ、國內ニ飢民ナカラシム、我聞ク君侯御位以來十年許ノ間、屢暴風ノ穀類ヲ損害スル災ニ罹リ、百姓ノ飢餓ニ迫ランコトヲ患テ、一日モ心ヲ安ズルコト無シト、其仁心ノ渥キ、方今ノ人君比類アルコト鮮シ、又初メ愚老貴國ニ遊歷セシ時ニ、鈴木大夫予ガ農政ヲ講ズルヲ聞テ、尊敬スルコト嚴師父ノ如ク、乃チ請テ領內ヲ撿閱セシメ、作物耕種ノ法ヲ問フコト甚ダ勤タリ、又佐藤大夫モ極テ農事ニ懇誠ヲ盡シ、曾テ溝洫術理ノ時ニ、家人ヲ將テ其事ニ會シ、下民ニ先ダチ土塊ヲ背擔ス、其他川澄大夫、眞木小川等ノ諸士、農事ヲ講明スルコトヲ好ム、君臣能ク國政ヲ勉勵スルコト斯ノ如キハ、卽公劉ノ治ナリ、是ヲ常務トシテ永ク倦ムコト無ク、田畯ヲ置テ百姓ヲ敎育セバ、農政登善ヲ盡サンコト疑フベキモノ無シ、

〔大猷院殿御實紀五十三〕寛永廿年五月廿日、國廻目付を關東の國々につかはされ、農耕のさまを巡視せしめらる、武藏は小笠原左衛門貞正、隱岐五郎右衛門重世、神谷助左衛門忠榮、落合三郎右

申事に候、萬一手代共之內、不直成取扱、其外等閑に心得候ものも有之候はゞ、吟味之上、然と申付振も可有之候、譯而相違候次第には無之候得共、尙更其趣相心得可取扱事、

一此上田畠麁抹に仕付置候者有之候はゞ、其田主之名前、銘々吟味之上、書付ニ而指出候樣、村役人勸農兼職之者共江も可被申付置事、

一各々も麥作見分大撿見之外に、了簡之上、不時にも致口出、諸事心を付可致順見事、

一

勸農改役江

此度勸農改役被仰付候に付、時々村々江出張、勸農之勸筋取扱專用之事、

一四郡共に大山守山横目共江、勸農兼職申付置、村役人一同、農業之儀、心を付相勸候樣、尤其方共江も諸事指圖を請相勤候樣、御郡奉行相達候間、右之心得にて可相勤事、

一其方共、御郡奉行指引之儀に候得ば、不依何事、致熟談取計可申事、

一近來荒地等多相成候へば、人別も減候故之儀も相見候得ば、人別段々相過、此上荒地等立歸候樣取計、工夫專一、厚き御世話被爲在此度勸農之役筋をも被仰付候得ば、諸事格別驗顯候樣出精可致事、

〔田畯年中行事序〕田原侯〈三河、三宅康直〉百姓ヲ慈愛スルコト篤ク、農政ニ力ヲ用ヒ給フコト、固ヨリ他邦ノ比スベキニ非ズ、近來益其善ヲ盡サンコトヲ欲シ、田畯官〈○○○〉ヲ置テ農民ヲ敎育セシメ、將ニ耕種培養ニ精細ヲ極メシメントス、此ニ因テ華山大夫予〈○佐藤信淵〉ニ田畯ノ職掌ヲ詳ニセンコトヲ請フ、愚老答テ曰ク、田畯ハ昔在公劉豳國ヲ治　時、始テ此ノ官ヲ置テ、稼穡ヲ敎ヘシメタル農師ナリ、所謂ル公劉ハ、堯ノ時ニ后稷タリ　姫棄カ曾孫ナリ、〈○中略〉抑此ノ田畯ナル者ハ、彼ノ公劉ガ工夫ニテ建タル農務ノ世話人ニシテ、彼レガ一族家人ノ中ヨリ溫和慈惠ニシテ、稼穡ニ老練シタル者ヲ選テ此官ヲ命ジ、己レニ代テ百姓ヲ撫御セシメ、精細ヲ盡シ、百穀百菓、蔬菜薪炭ヲ豐饒

試ミラレ、目合トシテ三手扶持方ヨリ五人被命、其後伊兵衛病死シテ、其子業ヲ繼グコト能ハザリケレバ、家屋敷御買上ニテ、御上染物役場トナル、其後藍作リ益繁昌シケレバ、上ノ御益モ亦從テ大ナリ、畢竟次助ガ功ナリトテ、三人扶持賜ル、且新ニ藍役場ヲ開カレ、頻ニ御世話アラセラレシガ、天明七年御大儉ニ付、次助ヲ本國ニ返サレ、藍役場及其役人モ休メラル、然レドモ國中ノ作ル者衰ヘズ、遂ニ永ク御國產トナレリ、(水府志料、庚子筆叢)

〔鄉中御掟書〕勸農改役御立之事

一 安永六酉八月

御郡奉行中江

此度勸農改役被仰付候ニ付、平手代之內壹人宛人物撰之上加役申付、爲御加恩金壹兩貳分宛被下置候條、右役申合、萬端精密相勤候樣可申渡もの也、

一同

御郡奉行中

此度四郡〇常陸水戶領共に大山守山横目共江、勸農兼職申付、村役人一同農業之儀心を付、勸農改役にも申合、精密相勤候樣可申付事、

一同 勸農改役被仰付候處、各江判談之儀は勿論、諸事熟談之上、何分指圖をも致、相勤候樣可申合事、

一 御國民取扱之儀は大切成事故、各々も無油斷出精取扱候事には候得共、一郡迚も廣大成ル村村ニ候得ば行屆兼候由、厚く御世話も被爲在、勸農改役被仰付候得ば、諸事格別驗有之樣、別而工夫等可有之事、

一 農業疎に相成候村々も有之趣粗相聞、不屆至極に候、先年より被仰出候諸掟堅ク相守、此上農事致出精候樣申付、若等閑成もの有之候はゞ嚴重に申付、村役人共も吃度相咎候樣可被取扱事、

一 此度元〆役共、格別之義を以被召出候ニ付而は、難有事存、各手代共も、此節別而御奉公相勵可

公御代、明暦元年、御郡中ノ漆木ヲ總御改メアリテ、廿六萬三千三百十三本ヲ御役木ト定メラレ、右木ノ實五千八百俵餘ヲ公税ト定メラル、其後元祿ヨリ享保ノ頃マデ四十九萬本餘ニ增多シ、御國益甚盛ナリシガ、其後漸々衰ヘ耗リテ、安永元年ノ御改メニハ、僅ニ正木十九萬本ト記セリ、今此ヲ再ビ盛ニスルトキハ、其利他物ノ比スベキナク、百萬本植立、果シテ成就スルニ於テハ、一ケ年ニ木ノ實ヲ收ムルコト十萬俵蠟ニシテ十一萬貫目、代金賤キモ二萬七千五百兩ニ成トノ成算ナリ、右之通、其利尤モ大ナルヲ以、美作專ラ心ヲ盡シ、牛森原ヲ始メ、荒野空地ヲ開キ植立、又出役等ヲ勵マシ、富民豪農ヲ募リ、諸地ヲ開キテ植サセ、申立次第ニ其苗木ヲ賜フ、猶民ヲ勸メン爲メニ、一本ヲ植ル者ニ二十文ヅヽヲ賜フ、桑楮ノ二木モ亦頻ニ世話ヲ盡シ、荒地ハ云ニ及バズ、諸士村民ノ宅地、寺院堂社ノ境內等マデ植立シメ、其物成ノ分ハ、皆官府ニテ高價ニ御買上成下サルベキ旨ヲ以勸勉ス、且松林ハ昔ヨリ有リケレドモ、杉林ハ甚少カリシカバ、是亦諸村ニ諭シ、山澤ノ宜ニ從テ大ニ植立シム、其御手當御元方ノ公費、一時莫大ナリト雖モ、敢テ厭ヒ玉ハズ、國中富メバ公家モ亦富ミ、民豐カナレバ君モ又豐カナリトノ御趣意ナリ、斯リシカバ、民亦漸々其利ヲ知テ、諸種ノ樹藝年ヲ逐テ盛ニナリ、闔境ノ荒地日ニ開ク、天明凶荒ノ後、御窮迫ノ爲ニ中頃衰ヘシト雖ドモ、寬政御改革ニ及テ、再ビ興リ益盛ナリ、今ニ至テ往々處トシテ漆桑ノ圃、松杉ノ林アラザルハナシ、

又藍ハ昔仙臺領ヨリ入來ルコトナリシヲ、御國ヨリ產シ玉ハントテ、安永二年、仙臺ヨリ大友次助ト云老圃ヲ召抱ラレ、故須田下屋敷ヘ大ニ藍圃ヲ開カレシニ、其性太ダ好シ、依テ次助ヲシテ諸村ヲ廻テ、畑ノ拵ヘ播キ様養ヒ様ヨリ、藍玉ニ製スルマデ指南セシメラレ、尤其掛ノ役人數人命ゼラル、於是民競テ作リシカバ、其出ス處年ニ夥シキニゾ、安永六年ヨリ他領藍御差留、御國藍ヲ御買上ニテ、紺屋ヘ御拂ニナル、翌七年八月、成島町染屋伊兵衛ト云者ヘ、藍御渡ニテ其善惡ヲ

官ニ重役ナキ故ナリトテ、深ク御評議ノ上、明和八年十二月、新ニ郡奉行所ト云ヘル一局ヲ、二之丸政府ノ側ニ開カレ、毛利内匠雅元ニ鄕村頭取、大石源右衛門ニ次頭取、長井藤十郎高康、永井喜惣兵衛貞則ニ郡奉行被仰付、〇中略是時竹股美作ヲ以テ郡奉行ノ勤方心得書ヲ渡サル、大略左ノ如シ、(遺稿集、鄕村手引、米府鹿子、外史等參用、)

一農業ハ御治國ノ根元ニ候ヘバ、廣ク民家ノ盛衰ヲ考ヘ、差配ノ善惡ニ因テ、鄕民ノ安キカ安カラザルカ深ク此ヲ察シ、都テ地方ノ儀、明白ニ取捌キ候コト肝要ニ候、尤急ニ及ビカネ候義ニハ可有之候ヘドモ、民ノ患ヲ解キ害ヲ除キ、耕作ノ盛ニ行ハレ候樣ニ相含ミ取扱可申候、民家潤澤致シテ、御藏モ相滿、自ラ四民モ安カルベク候、此ノ義ハ當職ノ主意ニ候間、能々思慮ヲ盡シテ相勤メラルベク候、〇中略

一荒地開發ノ事、靑苧ノ事、木ノ實ノ事、桑ノ事、楮ノ事、紅花ノ事、綿ノ事、右ノ分ハ御當領(〇出羽米澤)第一ノ產物ニ候、永ク隆ニ相成候樣、其筋々ノ役人共ヘ差圖致サルベク候、右仕法ノ儀ハ、追々評判第一ニ候、何卒ケ樣ノ類取立ル空地明地相應ノ場處有之バ、早々植立ノ手配リモ可有之ヤ、地ノ利ヲ盡シ候義ハ、國ヲ富シ候根元ト存候、油斷ナク評判可有之候事、

〔鷹山公偉蹟錄四〕樹藝御世話ノ事

富國ノ策ノ第一ハ地力ヲ盡シ、樹藝ヲ盛ニスルニ在リトテ、御襲封(〇上杉治憲)ノ初メヨリ、追々御世話アラセラレシ内、美作(〇家老竹股富綱)ガ議ヲ以テ、安永四年新ニ一局ヲ御城内大腰掛ノ東ニ開カレ、(所謂東御長屋役場)以テ樹藝總裁ノ府トセラレ、吉江喜四郎ヲ總頭取、齋藤三郎右衛門ヲ次頭取ト命ゼラレ、又五年ヨリ横目三人、扶持方ヨリ役方十人、及下役掛役等ノ小吏數人ヲ設ケラレテ、漆方桑方楮方ト三局ニ分ラレ、此三木ヲ各百萬本ヅヽ植シメラル、苗木ハ仙臺伊達・福島等ヨリ御買入ニテ、此局ニ渡シオカル、就中漆ヲ以テ第一トス、抑漆ハ古昔蒲生時代ヨリ米澤ノ名產ニシテ、綱勝

南より拾九人程、都合百六人程相選、六月四日申出候、尤給金何程づゝ爲取候而可然哉、目論候て可申出旨御達に付、壹人に付籾拾五俵づゝ平し被下置候樣にと申出候事、

寶暦五亥十月

一富田村總右衞門、矢幡村仁八、此度勸農役に被遊、手代並に被仰付候旨、尤御郡奉行支配可致旨御達之事、

同年十一月

一北御領勸農役に相立候もの、一郡より四五人づゝも、各幷總手代共も相談之上、兼々存候ものの內、村役人平百姓に不限、其器に相當り候もの撰、是又可指出候、拙者方に而存寄有之候共、尙又各撰をも承り合可令了簡候條、吟味之上可申出候事、

〔銀臺遺事卷〕一領內の山々を司る者、木を植べきよしは、往古より掟ある事なれども、年々に伐とる事はしげく、植る事はおのづからゆるかせなるに、水足五郞兵衞至房といふ侍、兼て栽培の道に委しかりけるよし聞召て、是に命じ給ひければ、絕へず打廻りて、その土地〳〵の相應の木を植させ、養ひそだつる道まで細やかに教諭しければ、皆よく生ひ茂り、又城下より始て、都て道端道端、又は河岸などあれば、いさゝかの空地にても、楮櫨などの類の木を植させ、それ〳〵の役人をたてゝ、司らしめしかば、年々に生茂りて、國中用の助となりぬ、

〔鷹山公偉蹟錄三〕郡奉行心得ノ事

農民ハ御家國ノ根元ナルニ、農政ヲ總司ル代官ハ、昔ヨリ三扶持方ノ役ニテ、其職賤シク且ツ御撰ミモナク、家柄ヲ以テ代々被仰付來リシ故、徒ニ御年貢運上取立ノ事ノミヲ務トシテ、民產ノ盛衰、風俗ノ美惡等ヲ心トセザリシカバ、自ラ其世話敎導モ疎ソカニテ、村々次第ニ衰微シテ、御取箇戶口モ減少シケリ、公治憲上杉政ヲ聽キ給フニ及テ、此事ヲ以テ第一ノ急務トシ給ヒ、畢竟農

へ參拜し玉ひて、夫より彼所に至り、禮服にて田へ入給ひて、三鋤すき玉ふ、諸大臣以下一同に是をすく、秋に至て此米を祖廟に備へられ、諸臣に神酒を賜はる、彼田地は佐藤文四郎願の趣に寄りて預られ、君の代として自耕作す、其實入殊に宜し、仍て此地の籾を國內の種米に賜はる、是より農民難有事に感服し農業を重んじ怠るものなしとなり、○中略

諸士荒田を起かへす事を願ける時、美作○家老竹股當綱感涙を流し、諸士の志、御家の大幸此上なし感ずるに餘り有、まづ我等第一當職の身なれば、鋤鍬取べき事なれども、一日も殿中に不參成難し、嫡男友彌名代として出すべし、各連肝煎所冀なりと懇に申述ければ、諸士も色々辭しけれ共、美作免さず、友彌蓑笠にて一統に出ける、美作が家老某、御家柄と申、蓑笠にて屋敷よりの御出は餘り如何なりと申ければ、美作大に怒り、國家の爲に身を盡す事は國老の職なり、汝がごとき心にて、我が家のおとなとなし置は無覺束事也と戒けりとぞ、

〔郷中御掟書〕勸農改役之事

寬延二巳四月

一村々にて筋目貧福に不拘、人物相糺、是非有之、潔白に器量之者撰之上、勸農役と號、庄屋よりも重く萬端に心を付、第一は農に精を入させ、且村內にて博奕は勿論、少々にても金錢勝負事不仕候樣に嚴敷相糺、依怙贔屓無之、勸農役之者、別而相改、萬一博奕仕候もの見當候はゞ、名主組頭等申合、明白に申出、聞糺可申候、若隱候はゞ、勸農役のものは勿論、其外役人共に重く御仕置可被仰付事、

但勸農役之者、折々隣郷へも申合、幾重にも精密に相談仕、郷中農業に精入、行跡等尤慥に、器量有之者は、勸農役より其外役人へも相談の上申出、依輕重御褒美或は御稱美、右勸農役申付候もの、太田組より貳拾壹人程、松岡組ゟり貳拾九人程、口口拾七人程、野々上より廿人程、

メ、女中部屋長局等ヲ悉ク毀シテ、其跡ヲ畠ト爲シ、君侯夫婦及ビ諸公子モ、皆一室ニ築リテ居住シ、唯一人ノ老婆ト二人ノ下部男ヲ召使ヒ君侯ハ自ラ耒耜ヲ執リ、二人ノ下男ヲ帥ヒテ、右ノ新畠ニ耕シ、近習ノ諸侍坊主等モ、時々此ニ加ハリ、菘菜、萊菔、胡蘿蔔、牛蒡、胡瓜、香瓜、冬瓜、西瓜、南瓜、紫茄、青芋、甘藷、葱、白眉兒豆、裙帶豆等ヲ作リ、庭ニハ梅、桃、梨子、林檎、栗、柿、柚子、橙、柑等ヲ作リ、池ニハ鯉、鮒、鰻鱺、鯰、泥鰌等ヲ作リ、平日ノ食料ニ餘レル物ヲバ、或ハ親戚ノ音物ニ用ヒ、或ハ遍ク家士ニ賜ハリ、且君侯ト下男ハ、薪ヲ折リ水ヲ汲ミ、或ハ諸菜ヲ採來レバ、夫人ト老婢トハ飯ヲ炊キ羮ヲ作リ、或ハ洗濯シテ衣服ヲ製シ、華費ト云フ物ハ少シモ有ルコト無シ、家士等モ初メハ皆膽ヲ潰シ、或ハ癇症、又ハ發狂ナランナド、驚訝シル輩ラモ有リシ由ナレドモ、此クノ如クスルコト三四年モ過グル間ニ、表方ノ財用融通頗ル宜クナリタルノミナラズ、君侯夫婦ノ蓄延バシ給ヘル金子バカリモ、既ニ千兩餘リニ及ベリ

〔翹楚篇〕一御國〇出羽米澤は四境皆數里の山にて包たるより、背負駄送のむつかしく、只最上川の上流松川の運漕に小舟十艘を下すのみ、夫さへに夏は水涸て叶はず、冬は氷流れ通はず、只春と秋との運漕故、米穀の他邦へ出べき便なきより、米價賤ておのづから惰農風俗をなし、田地の價賤く、惡き田に至りては、金錢添て讓與ふるも、買ふべき相手のなきといふ程に成來れり、去れば此事を深く御憂思召、〇上杉治憲安永元年三月、城西遠山村の內、四反餘の田地をもて、御小納戶御開作と名付られ、籍田の禮を行せられ、御みづから耒耜を執て三鍬古の禮、王耕一墢庶三墢とて、天子御自一墢し給ふ事故、一三鍬を下り給ひて三墢し給ひしなり、し給ひ、九墢二十七墢より、某々が次の儘に發せしなり、されば此田より出る米初穗をば、春日白子の兩社に供し、殘る所は新小姓御馬廻り組五十騎組の嫡男に御扶持給はり、御堂御法事の御用勤來した、明和三年御賦用足とて、新御小姓を止られしが、安永三年より籍田の米を給るといふを名とし出して、又新小姓も立られしなり、の御扶持米に賜りし也、

〔米澤侯實行錄〕籍田の古法に倣て、城南の郊に一町餘の田地を御手作場と定られ、君〇上杉治憲宗廟

春作生長の頃になり候はゞ、鷹野網掛等に出申間鋪旨、先年被仰出候趣相觸候通に付、此節に至候ても、いづれも出申間敷に而は可有之候得共、作方の障りを被思召、大守樣にも此節は不被遊御出候事に付、彌以右之趣率承知、鷹野網掛に不限、張網等にも出不申候樣觸、支配方江も可被相達候事、

〔銀臺遺事〕一御養生〇細川重賢のためにやありけん、桑の飯とて、桑の若葉くわへて炊しぎたるを好みまいりければ、それをだにとて、旅行の宿々にても、廚子とりまかなひけるものども、かならずいとなみて進めけるに、一とせ木曾路にて、そのものまいるまじきよし仰ありければ、御供のものども、たしなみはたれも限りあるならひ、今はあかせ給ふにこそと私語けるに、二宿三宿程過させ給ひけるに、又まいらすべきよし仰ありけり、事の樣をつく／＼考れば、其まいらざりける宿のあたりは、專ら蚕飼事を業とする里なりし、假にも民の業を妨げじとの事也けるよと、はじめておもひしられける、

〔經濟要錄〕二近世無雙ノ英傑トモ稱讚スベキハ、奥州泉ノ城主本多彈正大弼忠籌主ナリ、此君モ最初ハ頗ル貧窮ニ窘メラレ給ヒシ由ナリシガ、其頃予〇佐藤信淵ガ先人玄明窩翁、奥州遊歷ノ砌リ、此レヲ泉ノ城中ニ徵招シテ、經濟ノ道ヲ問給ヒシヨリ、嚴シク恭儉ノ二德ヲ修メラレ、其後先人ノ東都ニ出タル時ニモ、數々邸中ニ請フテ其講義ヲ聞給ヒ、密カニ夫人ト共ニ領內ノ百姓ヲ救フベキ諸件ヲ議ラセラレ、先ヅ國家年分ノ諸入用ヲ子細ニ節約シテ、此ヲ諸老臣ニ賄ハセ、君侯夫婦及ビ男女數多ノ公子等、總ベテ奥向一年ノ諸費用ヲ金四百五十兩ト定メ、君侯夫婦自親ニ此ヲ賄フコトニ極メタリ、於是乎數十人アリシ女中共ニハ、皆相應ニ物ヲ賜ハリ、此ニ諳グルニ領內百姓共ノ困窮ヲ救ハンガ爲ニ、人ヲ使ハザルヲ以テシ、皆殘ラズ永ノ暇ヲ賜ハリケル、女中等ハ君侯及ビ夫人ノ仁心深キヲ感ジ、涕泣嗟歎シテ、各其家ニ下ガリケルトゾ、其後奥御殿ヲ始

夏三箇月間、私不可仕之、但領主等作田畠耘芸事、爲先例之役法〔○役法、一本作定役〕者、今更不可有相違、

一可止百姓臨時所濟事

有限所當之外、臨時徴下事、永可停止之、

以前兩條存此旨、可令相觸御家人等之狀、依仰執達如件、

文永元年四月十日　　武藏守判

相模守判

諸國守護人

〔有德院殿御實紀附錄十四〕享保六年四月廿七日、龜戸邊より角田川のあたり、鷂をからせ給ふとてならせられし時、農功の時なれば、常のごとく耕作すべしとの仰にて、見えわたるかぎり、農民みな出てたがへしけり、

〔銀臺遺事卷〕一鷹野を好ませ給ひて、御庭にも所々にとやをしつらひ、朝夕もてあそび給ふ、されども狩に出給ひても、稼穡の妨げとなりなん事を恐れ給ひて、御供の者共をば本道を打せて近習僅に召具せらる、それにもかならず畔傳へして、假りにも田畑の中に入まじきよし、又本道を打ものは遠侍にあらんずれば、其處の小屋、かしこの村に休らひてもあれかし、去ながら茶一盃にても乞ひたらん處へは、かならず代を與ふべしと、深くいましめ給ふ、無下に間近く渡らせ給ひても、耘るもの變らず、耕す者やまず、道に行逢奉りても、君〔○細川重賢〕とも知らず打通る者もありけれ共、狩裝束は主從同じ樣なれば、誰とも見分ぬこそ理りなれとて、咎め給ひし事は一度もなし、又春のもの、ひ立より、秋の實のり苅納むる迄は、川ぞひに獣など羽あはせし、粟の穗風に鶴の聲打しきるをも、皆餘所に聞なして立寄らせ給はざりし、されば此事家中にも制し給へば、寶暦十三年老臣ふれて云、

り、是其初メ小田原侯ノ命令ヲ受ルノ時ニ當リ、土地自然ノ貢稅ヲ前知シテ言上セシ員數ナリ、人々其明知、始ニ終ヲ計ルコトノ了然タルヲ驚感セリ、

〔報德記 七〕相馬侯躬カラ領民ニ勸農ノ道ヲ論ス

相馬侯充胤○天保某年、父君益胤君ノ世ヲ繼ギ、爾來大ニ國家ノ衰弱、百姓ノ困苦ヲ憂ヒ、專ヲ父君ノ志ヲ繼ギ、國弊ヲ矯メ、領民ノ艱難ヲ救ンコトヲ以テ心思ヲ勞シ、衣ハ綿衣ヲ用キ、食ハ味ヲ重ネズ、諸人ニ先立艱難ヲ厭ハズ、江都ニ在テハ力ヲ公務ニ盡シ、國ニ在テハ春秋必自ラ領邑ヲ巡歩シ、百姓ノ疾苦ヲ問ヒ、大雨暴風雪中トイヘドモ駕ヲ用キズ、躬親ラ籍田ヲ耕シ、民ノ艱難ヲ試ミ、民間ノ老人ヲ賞シテ、父老ヲ尊敬センコトヲ敎へ、力田ノモノヲ賞シテ、勸農ノ道ヲ敎へ、幼若ヲ導クニ孝悌ヲ以テシ、貧民ヲ安撫シテ其業ヲ、勵マシメ、邑々ノ盛衰、人氣ノ善惡ヲ直見シ、論スニ二宮尊德○ノ良法ヲ以テシ玉フ、領民君ノ仁心深クシテ、民ヲ憐ミ玉フコトノ厚キニ感ジ、汚風ヲ革メ、家業ヲ勵ミ、君ノ憂勞ヲ安ンジ奉ラントス、是ヲ以テ彌先生ノ道廣ク行ハレ、大ニ風化スルコトヲ得タリ、且忠臣ヲ擧ゲ政ヲ任ジ、能ク臣下ノ諫ヲ納レ、善言ヲ求テ以テ速ニ之ヲ行ヒ臣下過チアリトイヘドモ、敎諭ヲ加へ改心セシムルヲ以テ先トシ、人ヲ廢棄セズ、屢先生ヲ招キ禮ヲ厚クシテ敎ヲ請、其論說ヲ聞、大ニ悅ビ、益其道ヲ施行シ、群臣ニ仕法ノ良善ナルコトヲ論シ、仕法ノ力ヲ用ル臣下ヲ召シテ、屢其勞ヲ慰シ、厚ク賞譽ヲ下シ玉フ、是ヲ以テ諸臣感激シ、再興ノ道ヲ成就シ、君意ヲ安ゼンコトヲ以テ今日ノ專務トセリ、美名他邦ニ響キ、賢君ヲ以テ稱スルニ至レリ、

〔續々泰平年表〕安政四年三月廿八日、寺社奉行江、蝦夷地御開に付ては、勸農之儀をも厚御世話有レ之候處、去辰年箱館最寄村々より、初て御年貢差上、御滿悅被二思召一候、依レ之右御米兩山御靈屋へ御進獻被レ遊候間、其段御別當へ可レ被レ達候事、御米者御賄頭より御別當江相廻し候害、日光山御宮御靈屋へも御進獻有レ之、

〔式目新編追加〕一農時不レ可レ使二百姓一事文永元

衣ハ綿衣身ヲ掩フニ足ルヲ期シ、用ウベカラザルニ至ラザレバ別衣ヲ製セズ、食ハ一汁ノ外ヲ食セズ、邑中ニ出テ食スルニ、冷飯ニ水ヲソヽギ、味噌ヲ嘗テ食スルノミ、邑民ノ薦食一物モ不食、曰汝等惰農ノ爲ニ如此困窮ニ及リ、予千辛萬苦ヲ盡シ、汝等ヲ安ンジ、汝等ノ衣食足ル時ニ至ラザレバ、予モ亦衣食ヲ安ンゼズト、終日聊不休、夜ニ至リ陣屋ニ歸リ、寢ルコト僅ニ二時ニ不過シテ起、前日ニ明日ノ爲スベキ事ヲ考ヘ、萬事ノ處置少モ遲留スルコトナク、流水ノ卑ニ下ルガ如シ、其神速ナルコト、衆皆常ニ驚歎セリ、如此艱難丹誠枚擧スルコト能ハズ、

〔報徳記 二〕三邑十有餘年ニシテ全ク興復ス

先生野州ニ至ルヨリ、千慮百計、興復安民ノ良法ヲ布、或ハ廢地ヲ擧、或ハ絶家ヲ起シ、窮民ヲ救ヒ、家屋ヲ與ヘ、衣食農具器財ヲ施シ、善人ヲ賞スルニ阜大ノ財ヲ以テシ、直ヲ擧テ枉レルヲ錯キ、惡人不直ノモノ、自然ニ己ガ非ヲ改メ、善行ヲ踏シメ、教ルニ人道ヲ以テシ、導クニ勤農ヲ以テス、處置各其至當ヲ得、終ニ民戸ヲ増シ、農力大ニ勤ミ、荒蕪數百町ヲ開キ、往昔四百有餘ノ家數ヲ以テ稼穡セシ田圃、今ハ民力ノ勉勵ニ由リ、半數ニ滿ザル戸數ヲ以テ耕作シ、猶田圃ノ少ナキヲ憂フルニ至リ、舊來ノ艱苦ヲ免レ、始テ心ヲ安ンジ、其業ヲ樂ムコトヲ得タリ、人心大ニ和ラギ、人ノ憂ヲ聞ケバ共ニ憂ヒ、人ノ幸ヲ聞ケバ共ニ悦ビ、憐愍ノ心發動シテ頗ル人倫ノ道ヲ辨ヘ、家々親ミ、人々和睦セリ、始メ良法開業以來、是ヲ破ントスルノ妨害百端、七年ノ間、尺ヲ進ム時ハ尋ヲ退クガ如ク、成功何レノ時ニカ來ラント、心勞限リナカリシニ、至誠ノ感ズル所、鬼神ノ助ル所、八年ニ及ンデ民心一變、大ニ舊染ノ汚俗ヲスヽギ、淳朴實直ノ風ニ化シ、三四年ノ間ニ、如此ノ功業ナレリト云ヘリ、於是先生百姓永續ノ道ヲ計リ、往古ノ盛時ニ當リ、四千石ノ貢税三千餘苞ヲ出セリ、是薄地ノ貢ニ其度ヲ越タリ、是ヲ以テ此衰極ニ至レルヲ察シ、田圃ノ位ニ應ジ、其出粟ノ多少ヲ試ミ、相當自然ノ租税ヲ定メ、七分免ノ貢税トナシ、二千苞ヲ以定額トシ、宇津家ノ分度ヲ確立セ

再興セシメバ、不凡ノ傑出、必其功ヲ成ン事目前ニアリ、群臣手ヲ束ルノ難場ヲシテ、治平再榮ノ道ヲ立ル時ハ不世出ノ賢ナルコト論ヲ不待シテ明ナルベシ、其時ニ至リ、小田原十一萬石ヲシテ、富國永安ノ政ヲ任ゼンニ、誰カ服セザルモノアラン、嗚呼然ナリト、獨心ヲ決シ玉ヒ、命ヲ下シテ先生ニ此事ヲ任ズ、〇中略

先生櫻町陣屋ニアリテ艱難ヲ素シ興復ノ道ヲ行フ

文政五壬午年、先生始テ櫻町ニ至ル、陣屋アリ、此地元來小田原侯ノ領地ナリ、往年此三邑四千石ヲ分チ、以テ宇津家ノ采邑トナス、櫻町陣屋ハ小田原領分ノ時ノ陣屋ナリ、屋根破レ柱腐朽シ、四壁皆クヅレ、軒下ヨリ草木生ヒ繁リ、狐狸猪鹿是ニ居ル、邑中モ是ニ准ジ、田圃三分ガ二ハ茫々タル荒野トナリ、僅ニ民家近傍而已耕田存スト雖モ、毎戸惰農ニシテ、百草其上ニ蔓リ、諸作ハ其下ニ伏セリ、元祿度ニ當リ、高四千石、民家四百四十戸、租税三千百苞餘ヲ納ム、然ニ衰廢極リ、方今ノ貢税僅ニ八百苞、戸數百四拾軒餘ニ減少シ、家々極貧ニシテ衣食足ラズ、身ニ敝衣ヲ纏ヒ、口ニ糟糠ヲ食ヒ、耕耘ノ力ナク、徒ニ小利ヲ争ヒ、公事訴訟止時ナク、男女酒ヲ貪リ、博奕ニ流レ、私欲ノ外他念アルコトナク、人ノ善事ヲ惡ミ、人ノ惡事災難ヲ喜ビ、他ヲ苦シメ己ヲ利センコトヲ計リ、里正ハ役威ヲ借リ、細民ヲ虐ゲ、細民ハ之ヲ憤リ、互ニ仇讐ノ思ヒヲナシ、稍損益ヲ争フニ至テハ、忽チ相闘フニ至レリ、〇中略先生斷然トシテ如此難地ニ臨ミ、先ヅ民屋ニ住シテ、陣屋ノ草萊ヲ除キ、大破ヲ補理シテ是ニ移住シ、三邑舊復ノ規畫ヲ立、鷄鳴ヨリ初夜ニ至マデ日々廻歩、一戸毎ニ臨テ、人民ノ艱難善惡ヲ察シ、農事ノ勤惰ヲ辨ジ、田圃ノ經界ヲ察シ、荒蕪ノ廣狹ヲ計リ、土地ノ肥磽、流水ノ便利ヲ考ヘ、大雨暴風、炎暑嚴寒トイヘドモ、一日モ廻歩ヲ止メズ、四千石ノ地一戸尺地トイヘドモ、胸中ニ了然タラザルコトナク、然後善人ヲ賞シ、惡人ヲ諭シ、之ヲ善ニ導キ、貧窮ヲ撫育シ、用水ヲ堀リ、冷水ヲ拔キ、勸農ノ道ヲ敎ヘ、荒蕪ヲ開キ、諸民安堵ノ良法ヲ行フ、自ラ艱苦ニ處シ、

相成リ、カホドニ實ノラザル歟ノヨシ申出ルマヽ、尙處ヲ見タテ作リ試ミ申ベク、又善惡トハ名宜シカラズ、今日ヨリシテ善作ト唱フ可シト申付テ、其後東覲訖リテ下國入城セシトキ、勘定奉行申出ルニハ、先年早岐ヘ命ゼラレタル稲、追々作リ立ル所、出來穗至テ宜ク、當秋ハ籾十八石デキ、ソノ中御年貢米ニモ少々スリ立候、コノ籾處々ノ田地水少ナキ所ニ植ツケ候ニ宜キヨシ、郡代ドモ申出候旨申スニ因テ、籾ヲ所々望ノ者ニ引替ヘ分遣シ、種子ニサセヨト命ジタルニ、其頃平戸ノ郡代ガ云ヲ聞クニ、コノ島中ニモ、方々コノ種ニテ作リタクト願フ者多ク有ル由ナリシニ、又近頃(文政六年)早岐ノ吏ノ江都ニ出シニ問フ者アリシニ、早岐邊ノ田方ハ、七分通リハ皆コノ種ヲモテ作リ、米モ至テ善ク、先年我ガ旅中ヨリ携ヘコシタル種ト人々申傳ルトゾ聞ク、思ヨラヌコトニテカヽル事ノ耳ニ入ルハ、タグヒモ無キ樂意ニテコソアリケレ、

〔報徳記〕一小田原侯先生(二宮尊徳)ヲ拔擢シテ分知宇津家ノ采邑ヲ興復セシム

斯ニ旗下宇津某ハ、大久保侯ノ分家ニシテ、采邑四千石、下野國芳賀郡物井、横田、東沼ノ三邑是也、土地至テ磽薄ニシテ五穀乏シク、人氣亦是ニ准ジ、放僻邪肆、無頼遊惰ナルガ故ニ、元祿年中マデハ、戸數四百五拾軒ナリシガ、連年離散ノモノ多ク文政度ニ至テハ、僅ニ百四五拾軒ヲ殘セリ、互ニ利ヲ爭ヒ、爭論訴訟絶ルコトナク、動スレバ相鬪フニ至レリ、故ニ衰貧極リ、田野荒蕪シ、渺茫トシテ民家狐狸ノ住居トナルモノ多ク、收納中古四千苞ヲ納シニ、僅ニ八百苞ヲ納ム、宇津家ノ艱難モ亦窮レリ、大久保侯深ク是ヲ憂ヒ、此民ヲ導キ勸農ニ趣シメ、再復ノ政ヲ布ントシテ、厚ク心思ヲ勞シ玉ヒ、群臣ニ選ビ當器モノ、ニ命ジ、野州櫻町興復ノ事ヲ任ジ、入費數千金ヲ下シテ、其成功ヲ促ガシ玉フニ、一度其地ニ臨メバ、侫奸ノ爲ニ欺レ、或ハ處置其度ヲ失ヒ、遂ニ他國へ走リ、或ハ逐ハレ小田原ヘ歸リ、其罪ヲ得ルモノ既ニ數人ニ及ベリ、群臣手ヲ束テ、又更ニ此事ニ任ゼントモノナシ、公大ニコレヲ悔イ、尋常ノ及所ニアラザルコトヲ歎ジ玉フ、今此土地ヲシテ二宮

セ玉フ、右ノ通御世話盡サレシカバ、果シテ一國蠶業ニ赴キ、御惠賜ヲ待ズシテ、自ラ山ヲ穿チ河原ヲ開テ、桑畠ヲ仕立ル者數ヲシラズ、諸士ノ屋敷、寺社ノ境内ト雖ドモ、皆桑ナラザル處ハナシ、遂ニ第一等ノ御國産トナリヌ。（外史逸事）

〔鷹山公偉蹟錄十四〕農業ヲ重ンジ玉フ事

享和三年四月、赤湯ヘ御入湯遊サル、其近村自昔水利ニ乏ク、旱損ノ患多カリシニ付、公年來御心ヲ盡サセラレ、諸所ニ新堰堤ヲ築カシメラレシカバ、此御入湯ヲ幸ニ此ヲ御覽アラントテ、御著湯ノ翌日ヨリ御疲レヲモ厭ヒ玉ハデ、ヒタスラ諸村ノ堰堤等御巡見アリケルガ、莅戸善政ガ築カセタル蓮花壇ト云堤ヲ御覽ゼントテ、或小川ヲ渡シ玉ヒシニ、御馬ノ口取リノ者、向岸ニ茨ノアルヲヨケントテ、畑ノ方ヘ倚テ引タリシニ、誤テ畑ヘ入レケレバ、畑物少シ踏荒シタリ、公大ニ御愁ノ御容子ニテ仰セケルハ、民ノ辛苦セシ畑物ヲ馬ニ踏セシハ誠ニ勿體ナシ、早ク畑主ニ價取セヨトテ、急ギ其役ノ者ニ仰セテ、畑主ニ白銀ト御酒ヲ賜ヒケリ、常ニ稼穡ノ艱難ヲ思召スヨリ、御鷹野等ニ出玉ヒテ、田ノ畔ナド渡リ玉フ時、都テ植置シ者聊モ踏ミ玉ハズ、必ヨケテ通ラセ玉フニゾ、御供ノ面々モ、自ラ心ヲ付ケ踏ミ害フコトハナカリキ、

〔甲子夜話二十四〕過シ寛政八年ノ夏、下國セシ時ノ道中、防州小郡驛ノ西、タカチト云處ニ休ラヒタリ、農家ニテ染工ヲ兼シ家ナリシガ、今日ハ某ノ田植ナレバ祝奉ルトテ、三方ニ稻苗ヲ載テ持出タリ、予モ悅入ルトテ取收タレドモ爲方ナシ、去レドモ人ノ志ナレバ、少ニテモ持コシテ、領内○肥前平戸ニ植サセヨト申付テ、器物ニ少シ植テ、日ヲ經テ領ノ入口早岐ト云マデ持著キ、所ノ郡代ニシカ〳〵ノ旨ヲ申含ム、ソノ秋長崎ヘ行トテ早岐ニ止宿セシニ、郡代稻三穗ヲ持出テ云ニハ、コノ夏命ゼラレシ苗植タレド、莖イタミ候テ、ヤウヤク新芽生ジ、纔ニカホド實ノリ候ユヱ、コノ稻ノ名モ見定カネ候得ドモ、中早田モノニテ、善惡ト呼ブ稻ニ似依リ候ガ、御領ハコノ種ハ古ク

成下サレ、且ツ其數ニ從テ、桑畠料ヲ御惠借成下サレ、賤利四年賦ニシテ御取立アルナラバ、一時ニ隆興仕ルベシ、既ニ桑畠成就スル上ハ、其利ノ大ナルコト、御利息ヲ召上ラレテモ、聊カ民ノ泥ミニナルベカラズ候ヘバ、其利息ヲ母錢ニシテ、復其子ヲ生ジ、子母相倚テ蕃息致サバ、數年ノ後、桑苗ハ自然ニ子母ノ間ニ生ジテ、再ビ官錢ヲ出シ玉フニ及バザルニ至リ可申候、此レ蠶桑役場ノ無盡藏ナルベシト申ス、有司ニ下シテ議セシメ玉フニ、只サヘ御藏元御窮乏ノ此節、如何シテ其料賜ハル餘力アルベキ、御他借ヲ以テ其事ヲ擲メ玉フトモ、モシ成就セズバ、徒ニ御難ヲ貽スベシト云論多ク、其議殆ト止マントス、公之ヲ聞召シテ、執政ニ諭シテ宣ハク、凡ソ事ハ速ニ成就セントテハ却テ成就セヌ者ナリ、孔子モ欲速則不達ト仰ラレキ、只小ヲ積テ大ヲナシ、其事ノ永續スルヲ以テ眞ノ成就トナスベシ、當今勝手向財用乏ク、立續キ方無之折ナレバ、尤莫大ノ料ヲ民ニ與フルコト叶ハズ、然レドモ民力モ窮殫セル上ナレバ、多少ニヨラズ上ヨリ借シ惠マズシテ、惜シキ國産ノ道廢ルベシ、我猶節儉ヲ行ヒ、臺所仕切料（四百兩）ノ內五六十兩ヲ減ジ、此ヲ年々繰出シテ蠶業ノ手當トスベシ、尤五六十兩ハ輕少ナガラ、十年廿年ノ久キヲ積マバ、必若干ノ蠶利ヲ生ズベシ、且ツ上ヨリシカ〳〵ノ御手當下ルト聞カバ、其聲ニ應ジテ、有餘ノ民ハ、自ラ進テ桑ヲ植ヘ地ヲ開ク志ニ赴クベシト仰セケレバ、執政中感服シ奉リテ、則チ公ノ御臺所料ノ內、年繰ニシテ蠶業ノ御手當ニ成下サルトノ趣ヲ御國産所ヘ御渡シ、（蠶桑役場、初メ御國産所ノ中ニアリ、文化中、代官所今ノ局ニウツサル、）在々ニ命ジテ桑苗ヲ作ラセ、年々五十兩ニ五十貫文ヅヽノ苗木ヲ御買上、之ヲ四民ノ願ニ應ジテ成下サル、又桑苗開發料トシテ三貫文ヅヽ御惠借アリ、又御本城ノ御奥、並ニ公ノ餐霞館御奥ニテ、多分ノ御養蠶マシ〳〵テ、蠶業ノ重キコトヲ示シ玉ヒ、又伊達福島等ヨリ、養蠶ニ工ナル者數人召抱ラレテ、國中ニ敎ヘシメラレ又其養方及ビ桑植育方等ヲ、風土ニ考ヘ合セテタメシアル事共ヲ集メテ一卷トナシ、養蠶手引ト名ヅケテ、蠶桑局ヨリ板行ニシテ國中ヘ頒チ與ヘサ

〔銀臺遺事 卷〕一此國(陸○羽)の民、むかしより蚕飼ふ業に疎かりければ、寶暦十年の頃より、領内に申觸れて、桑を植させ蚕飼の事を勸めらる、

〔鷹山公偉蹟録 四〕農業御講求ノ事

地利ヲ盡シ、民産ヲ利スルハ、博ク諸國ノ農政ヲ學ブニアリト思召、平洲先生ニ御尋アリシニ、先生關口十郎左衛門ト云者ヲ進メラル、此人ハ少キヨリ諸國御代官ノ手代元占等ヲ勤、當時八十餘ノ老翁ニテ、農事暗練セザルコトナシ、依之安永二年春、志賀八右衛門(御役)(御)馬場次郎兵衛(役所)ヲ遣サレ、諸國ノ良法ヲ問ハセ玉フ、彼翁深ク公ノ思召ヲ感ジテ、耕種ノ利害、風土ノ善惡等、微細ニ記セシ秘書ヲ借シケレバ、公大ニ悦バセ玉ヒテ、之ヲ熟讀マシ〳〵テ、利害ヲ講究シ玉ヒシ故、御世話ヨク屆カセラレシトナリ、

〔鷹山公偉蹟録 六〕蚕桑御再興ノ事

安永中、專ラ阜産ノ政ヲ行ヒ玉ヒシカドモ、御國用乏キヨリ、止ムコトヲ得ズ、天明七年御國産役場、漆桑役場等姑ク御廢シ、物産ノ道、中途ニシテ大ニ衰フ、然ルニ寛政御改革ノ時ニ及テ、富國安民ノ道ハ、只此一術ニアリトノ思召ヲ以テ、再ビ國産ノ諸局ヲ設ケラル、(御國産所、蚕桑方、山林方、農馬方、漆方等ナリ、)夫夫ノ役人ヲ仰付ラル、其法率子安永ノ故規ニ因リ、益密ヲ加ヘ、効功又從テ大ナリ、其尤著シキ者蚕桑トス、蚕桑ノ事ハ、物産民利ノ第一タルヲ以テ、莅戸善政、尤心ヲ此業ニ留メ、新ニ蚕桑役局ヲ開テ、務テ此事ヲ大ニセントス、於是局ノ吏上言シテ云、蚕桑ノ事ハ、元ヨリ農家第一ノ利ニシテ、民皆之ヲ知ルト雖ドモ、今ニ思儘ニ行ハレザル仔細ハ、養蚕ハ桑ヲ以テ本トスル處、其桑苗ヲ買フ料、培植スル料等、貧民ノ上ニテハ容易ニ辨ジカヌル故ニテ候、夫レ桑ノ生長スルコト、大率子三四年ヲ經ザレバ用ヲナサヌ者ニ候故、其利ヲ知レドモ、貧民ハ目前ノ難澀ニ逐レテ、其業ヲ起シカ子候コト是非ナキ次第ニ候、依之官府ニテ桑苗木ヲ多ク御買入アリテ、其願ヒ次第、苗木ヲ

キンメイ竹〈是は自然と江戸駒込御屋敷に生ず〉　瓢木〈葉はモチノ木に似て、實は瓢箪のごとし、常盤木也、〉　虎フ

甘蔗〈サトウタケ〉　胡椒

竹　要木〇中略

又領内に漆椿櫨多く御植させ、漆紙蠟燭の用乏しからざる樣にと思召候、リヤウブをば、上方にては雜に仕候を、此國にては存じ申さず候處に、西山公北領の八溝山にて御見出し、土民共に御敎へなされ候、又木槿、三叉、柳、竹、松の皮麥程にて紙共御すかせ候、又野路山路田畑の道、及び寺社の門前等、並木を植へ然るべき所へは、其所相應に、松、杉、櫻、檜、㯃、〈木名はヘリノ木、一名は大ヘヤ、〉或は茶木を御うゑさせなされ候、又暖國を好み申草木等をば、伊豆駿河安房上總などへ遣され候、これによりていつとなく、今世に相見へ申物共御座候、西山公常々仰られ候は、禽獸草木やうのものまで世話にいたし、役人共に申付、ふへ候樣にと存候事は、全く身ゝ爲めに非ず、日本の爲と思ふ故なりと仰られ候、

〔西藩野史〈十九吉貴公〉〕九月〇寶永二年　吉貴公〇島津　國に入て、大に政を興し、國中に令して曰、〇中略

一神社佛閣修造興行之事、可ㇾ專ㇾ勸ㇾ農事、可ㇾ徵ㇾ納年貢ㇾ事、右三ヶ條者、政務ニ付而、萬事相通事候故、義祖以來、每年吉書に記、面々〈江〉も急度見せ置候儀、當家題目之政規、誠以義祖御賢慮不ㇾ淺次第に候、彌其旨忘却有間敷事、

〔介壽筆叢〕肥後政府〇熊本　壁書

郡方

一農は國家の大本也、歲時農桑を勸課し、租稅正しく、力田孝悌を激勸し、風俗を勵し、本業に敦し、遊手苟簡を戒め、地理を興し、徭役を均し、饑窮鰥寡孤獨を賑恤し、蓄積に厚、水旱に備へ、水利を導修し、農器を貯へ、民を導くに善を以し、其姦慝を糺し、訴訟留滯すべからざる事、〇中略

右は寶曆六年御改正之砌、靈感院樣〇細川重賢　御直筆にて、政府に揭示置れ候也、

〔桃源遺事 五〕一西山公〇徳川光圀　昔より禽獸草木のたぐひ迄も、日本になきものをば唐土より御取よせなされ、又日本の內にても、その國にありて、此國になき物をば、其國より此國へ御うつしなされ候、その思召、するゐに記す、

草之類

朝鮮人參（江戸駒込御屋舗井水戸にも御植候）　薩摩人參　蘭　葵（賀茂の祭にかくるあふひ也）　ケンヤウ草　落花生　唐鬼灯（ロウサ一名ハマヽタフ、俗云ハマナスビ、）　唐チサ　唐芥子　黑葡萄　阿蘭陀茄子　ハラスマレイナ（一名ロウスマーレイナ）　鉋橘（ザボン）　朝鮮茄子　ヘンルウタ（一名ヘンルウダ、俗名アルウダ草、）　日陰蔓

草蓮花　糸蓮花　ツノ蓮花　金糸蓮　唐蓮（紅白）　烏芋（クログワイ）　ブツカウ草　蓴菜（水戸御城下、及御領內所々の堀、又西山の池へ御はなち候、）　南部薯蕷　何首烏　水松（ミル）　眼茄（ガンカ）・昆布（松前の海より御取よせ、大津濱、那珂濱へ御はなち候、）　若紫（此草は西山の山中に生じ候を、西山公はじめて御見出しなされ、わかむらさきと御號候、二月花咲、）　濱木綿（潮來の濱に御座候へども、人存ぜず候、所にては濱芭蕉と申候よし、西山公御見だし候より、人これを存候、）

木之類

難波早梅（さくや此花冬籠とよくみし梅也）　玉蘭　黑梅　江南所無（梅也）　木犀（又云カツラノ木）

菩提樹（シデ辛夷）　娑羅雙樹　雨椿　紀州熊野杉　佛手柑　臘梅　柚山椒（青柚の香におなじきがゆゑに名とす）　榅桲（マルメル）　冬山椒　ソナレ松　唐杉　白木蓮　雪下（躑躅也）

ヤシヤノ木（メイサ）　カキウ　果李　木槵子　楊梅　新羅松子　藤松

會津林檎　林檎　沙菓（リンゴ）　有田橘　咬噹吧橘（ジャガタラミカン）　紀伊國橘　大殿堂柚　岩梨實

赤梨實（マテバ椎實）　白輪柑子　無花果（イチジク）　巴旦杏（アメンダウ）　唐川練子　鐵樹（ソテツ）

桐油木（此實雨具の油によし、）　香椿（よく諸毒な消す妙也）　唐枸杞　龍眼肉　櫨（一名山漆、俗云ハゼノ木、蠻舶より來る、實は蠟に宜しく、木は弓に用ゐる木なり、）　リヤウブ（京都にては一名常若、常陸にてはハダカボウト云、）　椶櫚竹　鳳凰竹　肉桂

御座被レ成、子細もなき事なり、予あやまちて蹈倒したり、天民の日に暴され雨にぬれ、千辛萬苦したる物を足にかけたれば、天道を恐れてそとく丶り置たり、疾く刈らせよと仰あり、〇中略、

一御野廻の節、稻いまだ穗に出ざる内に、此は何といふ稻ぞと度々御尋被レ成、郡奉行御答申上るを御聞被レ遊候て、聞には左にてはなし、是は葉幅廣ければ、何にて可レ有レ之とて、地主を召御尋被レ遊候へば、果して其通り也、稻の名も知らぬ郡奉行、百姓を養ふは危き事也と仰らる、

〔甲子夜話一〕德廟〇德川吉宗郊外御成ノトキ、農家ニ入セ給ヒ、暫ク御憩ノ時、其家ノ佛ダンノ下ノ戸棚ヲ開キ見玉フニ、菜蔬ノ種ヲ紙袋ニ納メテ貯置タルヲ、彼是ト出シテ御覽アリ、頓テ出サセ玉時、家ノ主戸外ニ跪伏シテ居タルニ上意アリシハ、戸棚ノ中ノ種物ヲ見シガ雜ハセヌゾトノ仰ナリ、農アツト平伏シタリ、扈從ノ人、上旨ヲ知モノ無リシトゾ、種子ヲ混合スルコトハ農ノ最忌トコロ、德廟ノ下情ニ通ジ玉フコトカクノ如シ、

〔有斐錄上〕一赤坂郡〇備前に狩し賜ひ、夫より數日村邑をめぐらせ賜ひし時、或所にて農をあつめ、終日耕業を語らせて聞し召、日暮て老農共退出けるを呼返し給ひ、殖物の中、何物が第一多く得るやと問せ賜ふ、答申上けれども、怪しみ給ふ色有り、やゝ有て土地に依て多寡の不同有べし、聞及たるは異國にても芋。を植て富たる者ありといふ、試に色々の物を植て見しに、果して芋に及ぶ物なし、芋一つを植れば、大抵壹升を得つべし、一反に十石を得べし、燥濕の地にも不レ寄、培さのみかたからず、葉も莖も食ふべき物なり、五穀に次げる物也、汝等知らざる事はあらじ、土地の不同なるによるならんと仰あり、

〔有斐錄下〕覺〇中略

一空地有レ之所は、う。る。しの實うへさせ可レ申事、

一米種の品々、品物に至る迄、地に合と、不レ合と能々考させ可レ申付レ候事、

祖父江久之丞殿
上野長兵衛殿

右之通被仰出候間、在々所々觸渡可被申者也、

同十二月十三日

上野長兵衛
祖父江久之丞

五郡奉行 江○土佐

〔紀州政事鏡下〕一在々澤々山々風烈く無之所杉植立候樣に可仰付候、右植立木主へ半分遣候、證文相渡置可申候、右植立の者致病死候而も、證文所持いたし候はゞ、子孫之者願出次第、半分遣シ可申候間、隨分出精可致候、杉苗手入、銘々念入可申候、尤藏入給所共同樣可申付候、百姓共爲に成可申候、

一野山ニ而能キ草木立兼候所も有之候はゞ、茅植立可申候、左候はゞ百姓家作ふき草にも可成候間、是亦得與申付、爲植立可申候、藏入給所共同樣可申付候、茅は一度植置候得ば、永々絶へ不申樣承る也、乍然後々差合出入不相成樣、其村方向々の者立合植立可申候、尤植立相濟候はゞ其村方并山主名前書上可申候、末々に到り違亂無之ため受取置可申候、

一畑邊り山岸通へは、漆木も地主共銘々植立候樣可申付候、成木いたし候而も、右木の役不申付候、地主共ために申付候、夫共往來道境へは決而植立申間敷候、雨天之節、通之者へさゞれ落候得ば、人により漆にかせ、煩にも相成樣相聞得候間、往來へは決而無用可申付候、殊に植立場所宜候而も、他人の田地障に相成か、又は末々障可相成場所見合候樣、熟與可申付候、

〔有斐錄上〕一御鷹狩御歸りに口村にて路に仆れたる稻穗を、紙もて御くゝり合せ賜ふ、民の傍に在てこれを見しかば、いかなる故にやと口口ざりしかば、侍士此由申上る、公○池田光政やゝ默して

を出し植、可令商賣事、

一來春は大和柿、蜜柑のほ申遣取よせ、百姓何によらず望次第可遣候間、地よさいの所々に接立、
可令商賣事、

一萬物種生之時分を勸、其月々のケ條に可書付候、尤每年之きゆんにより、時節の替は候得共、月のかはりは無之候間、其月の上旬中旬下旬可入物を豫勸可書記事、

一百姓男女諸作尤依在所候、其段は郡奉行代官其所々莊屋年寄令相談、年中之諸事を可申付候、

一通申付迄にては善惡不相知候間、每月に事跡を代官莊屋年寄をして可相改候、左候はゞ正月之事は二月の五日に改、其次月何も可爲同斷事、如此一村切に仕、法式を相守、在所よく仕代官莊屋には可令褒美候、若此旨背村々は過銀可召置事、

一百姓男女諸作と申に、今迄在來事と心得、其事計を能仕候得と申にてはなく候、仕來候事の外、在所により、これ〱の儀は何月の事に候間、如此に候と書付可出事、○中略

一木綿、たばこ、なたね、在々の散田に作可仕候、當國のものは、散田にケ樣の類うへ候は、草手に夫役かゝり申とて、作仕事大方は用捨仕よしに候、他國のものは幼少之子供の役に草をとらせ候間、左樣に可仕事、

右之通、在々百姓中へ堅可有御申付候、惣每小事之儀より大事には成候、總而百姓共之心行は、はやく手に廻る事にてなく候得者、進不申候得ども、左樣之一篇には無之と見候間、此等之趣、能々得心仕樣に可有御申付者也、

寛文二寅十二月二日　野中傳右衛門

片岡武右衛門殿

坪內忠兵衛殿

こそありけれ、

〔野中紀事 三〕掟○中略

一あれ地少も無之様、随分ひらき田地に可仕候、精を入ひらき候はゞ、はらひ可遣候、其上品により、三年五年七年之内、作り取に可仕事、○中略

一春は田がへし、夏は草ぎり、秋は納め、冬は麥まき、其時を失はざる樣に精を入、少もゆだん仕間敷候、家ふしん等仕候はゞ、耕作の隙に可仕事、

一かひ子かひ候事存候者は、やしき廻りに桑の木をなみ木に植置、かひ子かひ可申、不存者はうるしの木植可申、用に不立木一本も植申間敷候、右之木植させ、木に懸る年貢可取とての事には無之候間、随分植置、少之便に可仕候、相背候はゞ、本人不及申、莊屋可為曲事事、○中略

一萬事ゆだんなく、少もたゞ居不仕、耕作にせいを入れ、能仕付候ものにはほうび可遣事、○中略

寛永二十年六月三日　主計　良繼花押

本山

莊屋次郎左衛門

總百姓中

〔野中紀事 三〕掟

一御國中在々所々に、漆之木、桑之木、楮、茶之木植可申候、かぢは何之地にても生立よく候、山懸或弘屋敷所持のものは、杉檜桐松木によらず植可申候、杉なへはふせつけたる、又は出家などに功者在之候之間、遂吟味、在々に過分ふせさせ、令配分植させ可申候、屋具にも遣可被申時分者、山奉行見分之上を以賣買可申付事、

一漆之木、桑之木、楮、茶、今迄在來分は可為前々之通、此以後生立候分は、役儀令免許候之間、随分精

れば、めして其製を奉られしに、精く書て奉りぬ、やがて治兵衛に命せられて、品川御殿山、芝新渠のほとりに、その實をあまた蒔せらる、この時治兵衛、おのれもよき地をえらみ植ふやし侍るべしとて、その實を賜はらんことを請申けるに、今其實を蒔たりとも、年へずしてはもの丶用に立がたかるべしとありしに、いかにも某が生涯に利を得る事はかたしといへども、年へて後子孫にいたり、生涯のよすがともなしなば、末ながく國用ともなり侍るべしと申けるに、ことはりと聞召れ、櫨の實多くあたへらる、治兵衛これを戸田川の邊に蒔て、や丶成木せしが、その後大水にあひてみな流沒せるは、をしき事になむ、されど吹上、御殿山、新渠の櫨は年ごとに多く實のりしかば、かの治兵衛がうけたまはりにて蠟に製しけるとぞ、このほど薏苡なども所々にてつくらせ玉へり、

〔有徳院殿御實紀附錄十七〕沙糖も今は日用かきがたきものとなれば、唐土より來るをまたず、わが國の產をこそ用ゆべけれとて、甘蔗培栽の法をあまねく尋もとめ玉ひしに、享保十二年、松平大隅守繼豐が家人落合孫右衛門といふ者、薩摩國よりいで來り、培殖の事ども委く申ければ、其敎をうけしめて、濱の御庭にて作らしめ給ひ、又駿河長崎等の地にも植られ、延享のはじめには、專らこの事を沙汰し給ひ、深見新兵衛有隣(書物奉行)等にも仰下されて、天工開物をはじめ、府志、縣志等の諸書より考あつめられ、また長崎に來りし唐商李大衡、游龍順などにもとはしめられしかば、各製法の事を書て奉れり、吹上御庭の下吏岡田丈助某といへるは、心きゝたるものにて、やゝ製法に熟せり、小姓磯野丹波守政武も仰をうけて吹上にいたり、火候など試し事もありしかど、其ころは土性に應せざるゆゑにや、唐土のごとく多くは出來がたかりしかど、寛政のはじめにいたりては、諸國ともに多く作り出し、唐產よりも盛に行はれ、大師河原などの地にては、氷糖をさへたやすく製する事となりしも、またく此御ときの御心おきての、やう／＼あらはれけるに

曲事可被仰付候事、

〔牧民金鑑十七〕安永五申年正月

桑有之村々、蚕飼候節、桑之枝をおろし、葉をば蚕に飼、枝計に成候を薪にいたし焚捨候、右枝之皮を取、紙に漉候得ば、ケ成紙に相成候、左候得ば、少々たり共百姓共助に相成候間、紙漉有之候所に而は、其趣紙漉共江申聞、紙に為漉可申候、紙漉無之候而は、取集向寄村方紙漉渡世いたし候處江、右同様申談、貢遣候様可為致候、是又百姓勝手に可相成事に候間、村々江得と可申含候、

申正月

〔例書四〕一御代官所預り所村々之内、からむし有之候場合、糸を取機物等に致候得ば、村方勝手にも相成候筋に候處、其儘打捨置候場處多有之候間、以來御代官所御預り所より寄々可申渡候、

子十月

〔有徳院殿御實紀附錄四〕農は國の本なればとて、民間の事はむきて御心を用ひ玉ひ、新令どもあまたゝび下されしが、〇中略七年〇享保九月廿九日、山野草萊の地はさらなり、海濱の地にいたる迄も、つとめて墾開すべしとふれられ、〇中略同じ九年〇享保閏四月廿三日には、溝洫をさらひ、農民等力を戮せて水柵をつくろべしとなり、〇中略同じ十一年〇享保十月十九日、州國和睦して、田疇をひらき、溝洫を治むべしと重て令せられ、〇中略これ等みな生民をすくはせ玉はむとて、御みづからの御旨より出し所なりとぞ、

〔有德院殿御實紀附錄十七〕櫨は蠟に製し有用のものなりとて、享保三年、薮田助八數直に命せられて、紀伊國にて櫨蠟の事つかさどりし酒井秀弟といへる者の方にいひやり、櫨實をおほく運致し、吹上の御庭にうゑられしに、やう／＼繁滋せしかば、府内にもこの製法しりし者あるべしと、もとめられしに、丸屋治兵衛といへる商人、もと薩摩の者にて、櫨蠟の製に熟せしよし聞えけ

〔享保集成絲綸錄二十四〕正德三巳年四月

條々

一諸國御料所御仕置之次第、前々よりの御條目御定書等有之候處、近年に及び在所の法度ゆるみ、所々の風俗正しからず、其業とすべき耕作の事に怠り、其職にあらざる藝能の事を翫び、屋作衣類食物を始め、萬事につきて其分限に過ぎ、或は五穀に宜しき地を費し、衣食のたすけにならざる物を作り、或は持高拾石以下の百姓、其心に任せて田畑を配分し、すべて此等の類、古來の定法に背き候事ども有之由相聞候、自今以後、名主庄屋等はいふに不及、末々の百姓共に至迄、前々の御條目御定書等の旨を相愼み守り、少も分限に過候事ども無之、專ら農業に精を出すべき事、〇中略

正德三癸巳年四月廿三日　　諸國御料所諸百姓

〔享保集成絲綸錄二十四〕當時村方五人組帳

差上申一札之事〇中略

一田畑壹歩之所も荒し申間敷候、若作り面之所餘り候はゞ、毎年正月中に可申上候、其儀なくあらし申候はゞ、根取之通、御年貢差上ゲ可申候、其上曲事に可被仰付候、但し壹人身の百姓煩に無紛、耕作不能成候時は、五人組は不及申に、一村之者共寄合、田畑仕付收納仕候樣に、相互に助合可申事、〇中略

一耕作常々精出し、作之間は、男女ともに相應之稼いたし可申候、若作に不精にて、徒に暮候もの猶有之ば、五人組之内にて、互に致吟味、異見可申候、不用もの有之候はゞ、名主江早々相斷、彌名主爲申聞、其上にても承引不致候はゞ、御役所江可申上候、若隱置候はゞ、名主年寄五人組共に

古事類苑

政治部九十四

下編

勸農

勸課農桑

農桑ヲ勸奬スル事ハ、鎌倉幕府以來モ亦王朝ニ讓ラズ、就中德川幕府以來ハ、大ニ意ヲ此ニ用キ、幕府ヨリ諸藩ニ至ルマデ、種々ノ方法ヲ設ケテ、以テ奬勵シタルモノ少カラズ、或ハ支那ノ籍田ノ法ニ倣ヒテ、諸侯自ラ耒耜ヲ秉リ、或ハ田畝ヲ巡リテ農情ヲ視察シ、或ハ勸農ノ吏ヲ置キテ農民ヲ勸諭シ、或ハ老農ニ諮詢シテ其意見ヲ陳述セシメタリ、

〔花營三代記 上〕應安七年十二月廿八日、下仰三ケ條、○中略

一農桑事

右國者以民爲基、民者以農爲天、各勵池溝堰堤之勉、宜致稻穀紬絹之備矣、○中略

以前三ケ條所仰如件、

年號正月日

〔享保集成絲綸錄 二十四〕寬文八申年三月

今朝評定所江諸大名家來召寄之、仰出之書付、岡田豐前守、松浦猪右衛門、出座ニ而渡遣之、

覺

一從此以前如仰出、在々所々之費、奢たる儀不仕、農業を專らに致し、進退持たつる樣に、常々心懸、諸事無油斷はげまし可申事、○下略

金四千九百貳拾貳兩拾四匁壹ト五厘　有金

内

金千百三拾貳兩三分八ト五厘　上方爲替○以上二行朱書

金貳千九百九拾九兩三分九匁七ト壹厘貳毛　向々御貸付向々御代官引渡高之分

金百兩　本川俣村破之助外壹人、久喜本町元右衛門差上難代之分、

金四百兩　中水難拜借三割利金

金百拾壹兩壹分三匁貳ト五厘九毛　池村喜三郎最寄村々相續之ため差出金

金百兩　杢師村三郎左衛門差出金

金貳千百九拾三兩三分拾壹匁貳厘九毛　關東村々米價并差出金

・金百四拾九兩三分六匁　戌御貸附利金之内

右之内

金五千九百九拾五兩貳分　戌年御貸附亥ゟ申迄拾ヶ年元金貸居、年壹割貳ト息、年々取立之分、

差引

殘金五拾九兩貳分

麥百七拾貳石七斗四升
荒麥三石四斗八升
稗九拾三石貳斗六升九合
空大豆壹石七斗四升　文政十亥年　大和和泉播磨國
籾ニ直
一籾七千九拾貳石五斗九升四合六勺六才　社倉御圍穀
内
籾四百四拾四石六斗三升壹合　御下穀其外共新穀ニ引替圍置候分
此米貳百貳拾貳石三斗壹升五合五勺
籾六千六百四拾七石九斗六升三合六勺六才　更當其外拜借等年賦諸戻可ㇾ申分
此米三千三百貳拾三石九斗八升壹合八勺三才
小以米三千五百四拾六石貳斗九升七合三勺三才
米百石五斗四升四合貳勺　上知村々江諸戻之分引渡
内米五拾石三斗四升五合三勺　同斷貸渡之儘引渡
〆米百五拾石八斗八升九合六勺
差引
米三千三百九拾五石四斗七合八勺三才　有高
外米三拾八石七升八合　常盤村分引渡有ㇾ之〇中略
社倉元立
一金六千五拾五兩　文政九戌年　社倉御貸附元〇東[illegible]

記文奉納　小池兵作　貞吉（花押）

明和七年寅十月十二日　宇都宮助右衛門　光信（花押）○
（下略）

（西條東村先々社倉世話頭取周藏控）

〔大森文書〕申渡

一社倉十人組頭取　所平

但格式庄屋之次

右之通申付候條、此旨相心得、諸帳面受取、合役之者申合せ、厚く力を入可相勤候、勿論社倉貯物永代無退轉様取計專要ニ候、貸附幷取立方等猥ヶ間敷義無之様手厚取計可申候、凶年有之候とも、貧民不飢渇手當ニ候得共、其期ニ臨、救ひ方等之義、聊無差閊様との趣意ニ候得共、村内平生之難澁取計候而ハ、社倉貯之詮ハ無之ニ付、常ニ庄屋組頭とも無油斷申合、出シ入等之作法を第一ニ相守、役人長百姓之あわい心得違之筋無之様可相心得候、永々之事故、手先不正之義有之候而ハ、決而不相濟候に付、下方ニも疑念不生様、深切ニ正道を專ニいたし、幷得失等を考、平日厚心懸可申候、依之格式等も本文之通申付候條、郡廻候中、幷我等、其外御歩行目附番組等廻村之砌、晝泊所ヘ罷出、社倉用向之義直ニ可申聞候事、

寅（○明和七年）閏三月十五日　松尾平馬（印）
植木三藏（印）

〔上方關東甲州社倉穀金銀調〕社倉元立

御料所々引渡高

籾貳千貳百四拾八石三斗九升四合壹勺
米貳千三百八石貳斗三升八合三才

下上戶四斗　　下中戶米貳斗　　下下戶米壹斗

右割合ニ而、麥ニ而も米ニ而も、大豆ニても小豆ニ而も、雜物ニ而も、何ニ而も取立置事也、

〔本藩租稅記〕社倉ハ、村ゴトニ借米ノ處ヲ設ルコト也、喩バ高千石ノ村ニハ必ズ百石ノ借米ヲ定テ藏之ベシ、（此米モシ國用ノ中ヨリ出ザレバ、富民ニ募リテ出之シメ、漸チ以償ヒ返スベシ、富民ノ米ヲ出ス者ハ可有賞賜、）毎年春夏或冬春ノ際ニ於テ村中ノ窮民ヲ擇ビ、各其口數ヲ量テ此米ヲ借シ、其秋冬ノ末、穀ニ登ニ及テ、先壹分半ノ息ヲ加ヘテ歸納セシムベシ、此壹分ヲ以テ米ノ本主ニ返セバ、十年ニ至テ皆濟也、（但シ原米バカリニテ利息ハ不レ加ナリ、）除ル半ノ米ヲ以、又元米ニ雜テ借ストキハ、五六年ノ間ニモ原米ハ歸シ盡スベキコト也、（利ニ又利息アリテ知レ是ナリ、）社倉ノ藏米既ニ百石ニ及バヾ、爾後ハ壹分或ハ五釐ノ息ニシテ、窮民ニ時ノ豐凶ヲ斟酌シテ借レ之トキハ、饑歲ト云トモ、途ニ有餓莩コトハ無之ランカ、（是ヲ司ル者ハ村中ニテ家富ミ志正キ者ヲエラビ、兩人ヅヽヲシテ守リ司シムベシ、）

〔社倉法實行誓約書抄寫〕第一。（從明和七寅十月十一日至安永八亥十月三日）（當村兩庄屋分助兵作　世羅郡徳市村野曾原庫次郎）

右村數九拾村、百十四人、

誓約

一今度御上より社倉法厚く相立、彌弘まり候樣ニ被仰渡之御儀、難有仕合奉存候、村民御憐愍之御公恩敬而忘却仕間敷事、

一御當社秘藏之社倉法幷神穀之殘麥、共ニ相授り候儀、冥加之至奉存候、然者神物同意ニ相守り、利欲之取計ひ不仕、後來永々相立、無違亂樣ニ申送り可仕事、

右於相背者、御當社幷ニ私共產土神社之御罰可相蒙者也、

安藝郡矢野村　渡邊勇助　正明　花押

〔誓約　第一〕

元麥拾壹石

題出る時、從₌公儀₋別段ニ拜借せず、右之社跡米ヲ以救ㇾ之、先年御預所ゟ御代官へ引渡之時、社跡米數拾石ヲ渡し、水戸黄門光圀卿ハ、國内之淫祠ヲ停止あり、數多之祠ヲ毀ヲ、潰ひ開發有し事、中華ニても祭る間敷神ヲ祭るを淫祠と言て、悉制禁也、唐之代ニも淫祠ヲ禁じて、三百餘ケ所毀てり、光圀卿も會津正行候も、是ニ效ひ玉ひて、淫祠ヲ禁じ給ひ、民ヲ救玉ふハ、難ㇾ有善政也、淫祠ヲ禁とハ聖人の道也、

一會津侯御預り所、其老幼扶持として、八十歳巳上の民、男女共壹人扶持、巳下之幼稚之者も、孤ハ不ㇾ及ㇾ云、兩親あらば、極貧窮、大勢之子供養育難ㇾ成者ニハ、壹人扶持宛給ㇾ之、八十歳ニ不ㇾ滿共、鰥寡孤獨之類、病氣等ニても稼難ㇾ成者へ扶持を玉ふ、則社倉米、社跡米ヲ以救ㇾ之、年々村々實迄、悉く穿鑿有る也、先年御代官へ引渡有ㇾ之時も、悉く申送者、元來會津侯之時代は、領内老幼之事、尙有ㇾ之故、御預り所之方も、御伺之上、領分同樣老幼扶持ヲ初められ、都而常陸國奧羽等之在々ニて、生れ子ヲ間引と言て、大勢出生すれバ、養育ニ迫り、出產之時直ニ殺す、會津領ハ、老幼扶持有ㇾ之故、其事嚴敷停止、實ニ養育之難ㇾ成者も、其年數ヲ限り、扶持ヲ給り、是ヲ育り、然て村々ハ脹妊之女有時ハ、村役人改ㇾ之、壹人も間引同樣ニ世話致事之由、誠ニ善政之遺風、可ㇾ仰事なり、

〔例書　五〕一小宮山杢進存寄申上候、國々社倉米之義者、三分公儀、七分百姓、右之通、公穀入受候事故、六ケ敷、却而村々差支難儀致し、今も所ニ寄、右返納殘御勘定組ニ差出候所も有ㇾ之

一右往古之社倉之儀者、年々分限ニ應じ、穀物取立置、貧者之夫食ニ致候、右之通囲穀國々ニ有ㇾ之者、當辰〇享保九年之飢饉ニも、飢人者有ㇾ之間敷哉、是者公儀之御世話ニて可ㇾ出來事也、右割合左之通、

上々戶米貳石　上中戶米壹石六斗　中下戶米壹石貳斗

中上戶米壹石　中々戶米八斗　中下戶米六斗

り、租稅之外ニ、米麥粟稗其外雜穀之類何ニても、人々難義と不成程、其分限ニ隨ひ聚之、日匪障屋元ニ藏ヲ建、是ヲ詰置、價宜敷時節賣出し、銀ニして隣國在町へ年壹割之利足ニて貸渡し、每歲極り十五ヲ限り取立之、年內ニ又貸出し、日田銀と唱、公金同然の取計也、在々ハ大庄屋奥印、城下ハ町年寄奥印ニて貸之、隣國諸侯方幷家中等へも貸といへ共、武家之證文ニては不貸、町人百姓の證人、勿論家貸田畑金高相應ニ書入取之、年々利倍し、又每歲助鄕穀も集め、支配所凶作引方等相分之儀ハ、右銀ヲ以償之、夫食種貸有之節出て、無利足年賦ニて貸渡救之、近來揖斐家ニ至る迄連綿せり、當時御代官交代ニ成て、其如何成行しや不知、先年庄大夫勤役中、利倍金多分ニ成、金三千兩伺之上江戶御金藏へ納之由、享保年中、濃州笠松御郡代辻六郎左衞門支配所ニて、社倉ニ似寄たる事ヲ始、暫く是を行ふ、其後同人轉役出府ニ付、其已來連綿なく、夫成ニ成たり、高崎領ニも、年壹合麥といふ事、安永之末まで有之、仕法ハ右助鄕穀ニ似たり、租稅之外、課役の樣成物なれど、分限ニ隨ひ減ニ年壹合づゝ米麥ニても雜穀ニても豐年之時差出事なれば、曾て民之難義ニ成義ニあらず、凶年ニハ不出之、都而救ヲ請、飢急ヲ凌ぐ一助たり、享保之比、秋田領三春〇磐城三春、秋田氏封地、ニも是ニ似たる事ありしと也、諸侯以下、家中迄も、知行之內少しづつ義倉ニ詰置、患難ヲ可凌事可なるべしと、徂來先生も是ヲ言り、去ながら、前々も國々ニ社倉義倉ニ似たる政事有て、民ヲ救ふヲ名として、果ハ領主地頭之有ニ成る事多し、然る時ハ善政ニ無て、都而惡政之基なれバ、容易ニは難始事成べし、

一社跡米と言ハ、會津御領主御預り所、幷領內之神等は毀跡ヲ田畑ニ開發して、村持或ハ望有者ハ、地主ヲ定、土地相應之年貢ヲ出させ、社跡米と名付、御預り所之分ハ、公儀之物とし、領內之分ハ、自物とし貯置、民の患ヲ救玉ふ、勿論神佛之敷地なれば、代除或ハ見捨地成故、何れも高外なれバ、高ニハ不結入、年之年貢米、餘り多分ニなれバ、御預り所之方ハ、公儀へ納、凶年夫食種貸等

右之通被仰渡、一同承知奉畏候、銘々郡代御代官江可申聞候、以上、

寅十〇天保三年九月四日

守岡直次郎手附
前島逸作印
外出役連印

(代官觸留三)天保十三寅年申渡

御料所村々貯穀之儀ニ付、去丑年被仰渡候趣を以、夫々増囲いたし候分ハ、増囲石高ニ應じ、最初相囲月壹ヶ年限御下穀有之候間、夫々石數相調可被申立候、

右ハ奉行衆被仰渡之、

寅十二月

右仰渡之趣、一同奉承知候、右御受申上候、以上、

十二月廿三日

篠田治三郎手附
前島彌藏印
外出役連印

(代官觸留四)申渡

御料所村々貯穀貸渡之儀、日數廿一日當之石數區々ニ而者不宜候間、向後者日數三十日壹人分、米者男貳合、女壹合、麥者男四合、女貳合、雜穀者男八合、女四合ヅヽ之當りを以、急難に而實に難捨置節者、不及伺貸渡、其旨早々相屆、左迄にも無之節者、伺之上可被計候、

卯十〇天保四年四月

右之通被仰渡、一同承知奉畏候、以上、

卯四月四日

篠田次郎手附
前島源藏

(地方凡例錄十)社倉之事〇中略

一享保之比、豐後國日田御代官岡田庄大夫支配所ニ、助郷穀と云事を始めらる、是も義倉之類な

壹升代銀壹匁四分三厘　此錢百拾八文なり

右兩度御救被下（七拾八兩は八拾四兩の誤歟、可レ糺）

一天保三年

百俵ニ付金百貳拾四兩　壹俵代銀七拾四匁四分

壹升代銀貳匁壹分貳厘　此錢貳百貳拾

一天保四年春

百俵ニ付金百拾四兩　壹俵代銀六拾八匁四分

壹升代銀壹匁九分五厘　此錢貳百貳拾壹文也

一天保八年

百俵ニ付金百七拾八兩　壹俵代銀百六匁八分

壹升代銀三匁貳厘三毛　此錢三百四拾五文

〔代官觸留 三〕御料所村々貯穀之儀、寛政之度切々御世話も有レ之、享和元酉年、別紙之通申達候、其後追々貯穀相増候に付、違作其外急難ニ而、夫食江差支候節者、早速貸渡、公儀御世話ニ而、平常貯置候備を以、銘々急難相凌候段、感悟いたし候ハヽ、已後貯候勵にも可レ相成所、違作其外急難ニ而、夫食指支候節ハ、貯穀も其儘居置、夫食相借申立候場も有レ之、右樣備置候而已に而、其用不レ成候得者、有名無實に、近々村々疑惑を可レ致候間、以來急難ニ而、夫食差支候節ハ、不レ取敢レ先貯穀貸渡、其段可二相屆一、右ニ而も取續出來兼候ハヽ、其節夫食相借候儀可二相伺一候、且貯穀一村限り穀數其外貸渡詰戻手當等相尋候砌、江戸役所にも委細書留無レ之候而ハ不レ叶譯に付、是迄書留麁略之場も、委細に取調置、尋候節、速に答書指出樣取計、尤兼而申達置候通、右樣見廻村之節、貯穀相改、取締方嚴重にいたし、尤急難に無レ之貸渡候節も、伺之上可レ被二取計一候、

壹升ニ付銀三分八厘　錢五貫相場（金壹兩ニ付テ也）

壹升代錢貳拾五文なり

一享保十六年夏

同相場ニ而金壹兩ニ錢五貫貳百文之時

壹升代錢貳拾六文

一延寶三年春

百俵ニ付金七拾八兩　壹俵ニ付銀四拾六匁貳分

壹升代銀壹匁三分八厘　壹兩之錢八貫文ニ而百拾四文　此時飢饉ニ而御救被下（貳分ハ八分カ）

誤鈔

一元祿十四年夏

百俵ニ付金八拾四兩　壹俵ニ付銀五拾匁四分

壹升代銀壹匁四分三厘　錢百拾八文なり

此時本所江御救小屋建ツ

一享保十七年

百俵ニ付金七拾八兩　西國筋飢饉

一天明四年夏

百俵ニ付金百拾八兩　壹俵ニ付銀七拾目八分

壹升代銀貳匁貳厘三毛　此錢百六拾六文

一天明七年春

百俵ニ付金七拾八兩　壹俵代銀五拾匁四分

幕府領民合同貯穀

一籾八百四拾四石餘　同所　廻米方掛同断
一籾六百六石餘　同所　竹垣三右衛門取扱同断
一籾貳万七千八百三拾三石　同所　伊奈半左衛門取扱同断
一籾拾貳万七千八拾三石餘　本所御藏　御囲籾
一籾壹万六千九百貳拾九石餘　淺草御藏　同断
一籾四万貳千六拾九石餘　大阪越後御買上ヶ淺草御藏　同断
合四拾六万貳千五拾九石餘
右之通御座候、以上、
酉二月　御取箇方　廻米方掛

〔吹塵錄七米穀〕村々貯穀之事
勘定方をつとめしものゝ話に曰く、徳川氏領内村々貯穀と唱ふるは、囲米、詰米等の外にして、人民に屬するものなり、其貯品は、米麥雜穀、其外土地の宜きに隨ひ、貯蓄せしめ、代官之を管理し、凶荒にて糧食欠乏の時は、貸與し、年賦を以て詰戻さしめ、平年には、腐損せざる前に新穀に交換す、其損失費用等、悉皆村方ニ而負擔す、其倉廩を郷藏と稱す、郷藏の改築ハ、村費なりといへども、其木材ハ、官林より惠與するを例とす、此貯穀、年々十二月晦日の有高を、各地方より屆出しめ、勘定所にて總額を計算し、勘定奉行の一覽に供する事なり、其大數及び賦課の方法に至りては、記臆に存せずといふ、

（承應より天保まで）淺草御藏前米價高下

一承應元年春
百俵ニ付金拾八兩　壹俵ニ付（三斗五升入、下同じ）銀拾匁八分

〔小菅囲内町會所囲穀納屋藏取建一件〕町會所囲籾増石囲場之儀ニ付相伺候書付

町會所囲籾増石之儀、當六月中相伺候處、籾に而拾六萬石を目當に仕、追々買入候積を以、右籾置場の儀は、追而取調可申上旨被仰渡候、然ル處、右納屋藏取立可申場所之儀、伊原友之助持小菅御殿跡に相應之地所有之候ニ付、支配向の者差遣、見分爲致候處、同所に是迄有來候御藏御構、地方ゟハ餘程相隔、綾瀬川邊り江附添候場所にて、凡壹万坪程の地所江、右納屋藏取建候得ば、通船の都合も宜、殊ニ人家を離、火災の患も無之、其上御囲内の儀ニ付、取締も宜有之候之旨申聞候、右場所之儀は、小作人差置、小物成場同様、一ヶ年永拾六貫文餘、友之助役所江納來候間、右之分壹ヶ年に町會所積金之内を以御代官江相渡、小作人江ハ地代金之積を以、相應に手當差遣し候積り、尤右藏地取建方の儀は、急速にハ出來兼候儀に付、此節ゟ取掛り不申候而ハ、來秋に至り、兼て御下知濟増石追々買入候儀ニ付、右場所此節御代官ゟ請取、地平均等取掛り追々に納屋藏取建候樣仕度奉存候、依之此段奉伺候、以上、

辰〇天保十五年十二月

〔塵塚談下〕籾藏下谷新し橋へ寛政元酉年歟、御建立これあり、貧民御救を第一にし、且町屋敷所持の者へ、安利の御貸附金有之、御勘定衆町與力出役し執計也、此地これまでは大的場と馬場なり、左の方は往還にて有し、代地淺草堀田原にて出來、其後新大橋のむかふへも籾藏御建立あり、都合籾藏二ヶ所になる、此地はあやしき茶屋ども住居せし所にて有けり、代地深川高橋の脇にて渡り、町名を常盤町と號す、又其後柳原土手下へ籾藏建、此地は元町屋なりしが、燒亡して火除地にてありしところなり、

〔吹塵錄米穀七〕嘉永元申年江戸書穀有高
申十二月晦日有高
一籾貳拾七万千八百九拾五石餘　小菅納屋御囲籾

ラ之儀ニ付、敢而損毛之論ニ不拘、籾圍高相增候儀を一途に取計候樣仕度、一體米價之儀者、天然之相場ニ而、氣候水旱ニ寄、人氣買進ミ、又者買泥ミ候場合ゟ、相場相立候儀勿論ニ候得共、平和之砌高下致し候ハ下直ニ買置候米を、高直ニ可賣拂爲メ、米屋共計策も可有之、町會所ニ圍籾充全致し候上者、無故米價引立候節ハ、受痛之分相拂、下落致し候得バ、買入方の儀取計候樣致し候はば、米屋共之計策も自ラ不行屆候樣相成可申哉、當時貸附金元利納高を以、年中之會所入用貸附等差支も有之間敷哉ニ付、積金貳万兩餘者、外入用ニ不致、籾買入一圓之入用と取極、

町會所籾圍買入方之儀、近來武家方收納籾を買入候得共、米方御用達共を始め、御當地米屋共者、玄米取扱重ニ而、籾之儀者手馴不申候ニ付、納之節、籾帳見極方碇と難行屆、武家方ニ而も納方取扱等者、御當地米屋共江申付候哉ニ而、右之者共內實之所得も有之候ニ付、必定精籾而已相納候とも難見極、既是迄取調之上、籾帳不宜分者、引替申付候儀も有之、時々懸念不少儀ニ而、且兎角者直安之儀を論、買入候樣ニ相成、一通り者可然譯ニ者候得共、元來荒救之御趣意ニ候上者、稀之儀ニ而、自然年を經、事實之摺立申付候節ニ至、籾帳不宜、用立兼候樣ニ而者、以之外之差支ニ而、折角之御仁政行屆兼候樣ニ而者、實ニ不容易儀故、以來者直段少し者高直ニ當り候共、本文納方之儀者、御勘定奉行ゟ御代官江申渡、其筋ニ而得と籾帳相撰相納候ハヾ、吟味も相屆可申哉ニ奉存候、

其外溜金出來候時々、圍穀行屆候樣御沙汰有之候ハヾ、市中江も相響キ、御仁政之御趣意難有奉感伏、一同安堵可仕、其上右體御當地におゐて、荒凶之御備厚御世話有之候旨、國々所々にて承傳候ハヾ、領主地頭ニ而も圍穀之世話も行屆可申哉と奉存候、依之申上候、以上、

寅五月

遠山左衛門尉

鳥居甲斐守

二ヶ日半餘之御救渡方ならでハ無之候間、凡百万石ヲ目當ニ致し取調候處、左之通御座候、

籾百万石

摺立玄米五拾万石　　但五合摺

此白米四拾五万石　　但壹割減

前書一日分御救渡

千百五拾壹石九斗八升四合五夕ニして、三百九十日半餘之食料ニ相成申候、

右之通ニ付相場下直之節を見合、追々買入、充全之上者、一廉之備も相立、且米相場下落之砌、相場引立之爲ニも相成、武家町家一同之御救可相成と奉存候、

米價下直ニ而者、武家方困窮者申迄も無之、町人共も渡世薄く、百姓も耕耘辛苦之詮も無之、僅ニ價ニ替候ニ付、餘作之利江走り、自ラ奢侈之風俗を醸し候儀ニ付、是以下落之甚敷ニ至り候而者、定利之外之難澀ニ而、既ニ文化度米價下直之節、市中之者江買持米申付候得共、全一時之儀ニ而、無際限持圍も難相成、無程拂出候節者、元之委ニ相成、御世話之詮も無之哉ニ而、右體下落之砌、買持等申付候程之米を、籾ニ而町會所江買入置候ハヽ、中年米拂底之折柄、他國之米買入ニも不及、市中之御救者十分ニ行届可申儀ニ御座候、

右之通、百万石者目當ニ候得共、右備相立候上者、敢而目當之高ニ不拘、年柄ニ寄、何程も厚御備ニ相成候樣、年々其上にも買增、

圍籾之儀、三十年位ハ相保候儀ニ御座候、

藏々不足ニ候ハヽ、所々明地江圍穀藏取建圍置候方可然、

此儀火除明地ニ候とも、藏々取建之儀者、却而火除ニ相成、差支之儀も有之間敷奉存候、

尤受痛鼠喰等之損毛ハ、多可有之候得共、畢竟金銀重モニ可貯置譯ニハ無之、凶年飢歲之御備專

町會所圍籾之儀ニ付申上候書付

町奉行　遠山左衛門尉

町會所之儀、起立以來、五拾餘年ニも及び、市中積金追年利倍致し、貸附高等莫大之金高ニ罷成候處、圍籾高當時拾六万八千九百四拾八石ならでハ無之、尤文政十二巳年、天保五午年之大火、同七申年凶作之節、窮民御救等ニ付、夥敷出高ニハ有之候得共、當時之圍高いかにも手薄に有之、同所之備充實ニ無之候而ハ、寛政度之御趣意ニ振レ、御仁政之基本相立不申儀ニ付、取調候處、御府内町方之分、去巳五月書上人別高、

町方并寺社門前町屋町人總員數

五拾六万三千六百八十九人　内　男三十万六千四百五十一人　女廿五万七千貳百三十八人

右之通、其日暮し之者半分と見積、

貳拾八万千八百四拾四人半　男凡十五万三千貳百貳拾五人半　女凡十二万八千六百拾九人

籾有高

拾六万石之高ニ積

摺立八万石　但五合摺之積

此白米七万貳千石　但壹割減之積

男壹人ニ付一日五合宛之積　白米七百六拾六石壹斗貳升七合五夕

女壹人ニ付同斷三合宛之積　白米三百八拾五石八斗五升七合

二口白米〆千百五拾壹石九斗八升四合五夕

但貳拾八万千八百四拾四人半、一日之飯米高、

右白米七万貳千石を以、一日分千百五拾壹石九斗八升四合五夕ツヽ之渡し高ニシテ、日數六十

り度と存候者も有之候ハヾ、勝手次第之事ニ候間、其段可申出候、

右之通、町中爲御救、不時之備を建被置候、猶取計方之儀者、追而夫々江委敷可申付候、右者町方永續之基本ニ候間、名主、地主、家守共、精々申合、此上町法たがわざる樣、永く相守べきもの也、

亥十二月

〔世事見聞錄五下〕諸町人中邊以下之事〇中略

尤今世困究人御救の爲とて、寛政度の法にて、町會所又は籾藏といふものあり、是は町々の失費年々莫大に成しを穿鑿ありて、悉く省略せられ、其減少高の內七步方御取立有て、籾を圍ひ置れ、飢饉の節者御手當成といふ、依て町々にて七步とも唱也、常々も此所より困窮人の長煩、父母なき乳呑子、又ハ死人を葬る事の出來ぬものに、米錢を給るなり、誠に强を欠、弱きを助る御法にして、御仁政と云べし、併ケ樣の御主法ならでは叶はざる樣に成しは、既に世の末に詰りたる證也、尤天明年中、飢饉の節、困窮人共の有樣によつて、此法立しものにて、以前はケ樣の法はなくとも濟しもの也、向後此圍ひ籾にて、二年三年の飢饉は御救行屆べし、此後段々に人寄り集り、困窮人廢人等充滿、其上暴風洪水地震火災等の凶事、五六度も重り來りなば、中々是式の事にて行屆まじき也、又常々も右の御仁政の行屆兼て、右にいふ如く、困窮に倚りて、親を捨、子を捨、其外種々の惡道をなし、又ハ廢人と成、又ハ變死するもの少からず也、全體町家住居のものより、段々前に述るごとく、更に天下國家に於て不益成ものなり、其不益なるものが、三都其外國々に充滿して、或は驕奢安逸に誇り、或は困窮人となり、或者惡逆無道の溢れ者と成て、米穀其外諸產物を費す事、夥敷事共也、此費は、武士と百姓より出す物なり、誠に天下の大賊なり、

〔諸色調類集十ノ七十〕寅〇天保十三年五月七日

越前守殿江御直上ル

可申付處、町役人其外至而煩雑之事ニも聞候ニ付、先凡紀之趣を以、主法相立事ニ候間、此上迚も無益之入用有之候ハヽ、早々地主共可訴出候、右減金者、前書割合之通、積金手取増町入用も餘分等ニ加へ可遣候、

但町々ニ寄、番銭芥銭と唱、家割ニ月々取集候金高も不少候、右者年來之仕癖不宜儀ニ付、右之分者地借店借ゟハ向後爲出申間敷候、

一右積金等之儀者、町々永續之備ニ相成候儀ニ付、從公儀も御金壹万兩總町中江被下、右積金江差加へ、場所を撰、追々米藏を建圍籾致し、年々餘金者猶積置、往々非常之備ニ相成候樣可致候、尤圍ひ籾者、格別之凶年、實々一同困窮飢ニも至り可申時之手當ニ而、常々米價高直成節々等、渡遣候筋ニ者無之候、割渡遣候儀者、奉行所より之沙汰たるべく候、

但右積金者、素地主共ゟ差出候筋ニ候間、後々ニ至り總高も逹々多相成候ハヽ、地主共實に難立行災難等有之節ハ、糺之上其時宜ニ應じ、貸付又ハ相應ニ金高見計、遣切ニも可致候、或者店借之者等、老年ニ而夫幷妻子ニはなれ、幼年ニ而父母を失ひ、可便方なく飢ニも可及者江者、糺之上、手當も致可遣候、

一右積金取集方世話致し候ニ付、名主等江者、積金高ニ應じ、世話料相應ニ可差遣候、

一場末町々之內ニ者、地主共手取金無之程なるも候由、右體之場所ハ素ゟ積金之沙汰ニ者不及候、此度之町法改正ニ付、聊ニても手取金相增候分者、積金として其七歩を差出ス儀ニ而、多少を可論筋ニ者無之候、積金無之程之町々者、常迚も難儀之事、火災其外ニ付而も、困窮者猶以之儀ニ付、右町々江も行屆候ため、旁御差加金も被成下候儀にて候、一體積金之儀、利安貸付等ニも相成、右利分を以積金無之町々も、非常其外も、御手當ハ同樣ニ可被成下候間、左樣可存候、此度右體永續之主法被仰出候者難有儀ニ付、若總町中之內ニも、身元相應ニ而志有之、積金ニ加

江戸町會所貯穀

操詰戻不相成向ハ可成丈當丑年詰戻し來寅年より前書割合之通年々囲増候樣可被致候、

〔天保集成絲綸録八十三〕寛政三亥年十二月

總町
名主共
地主共
家主共

當地之儀ハ、萬物諸國々入來候而、自由をたし候事ニ而候得共、天明午未（六年七年）米直段甚引上候節貳拾萬兩之御金御下ケ被下、買米相渡候而も、末々者及困窮候程之事ニ而候、都而國々ニは諸大名囲穀を始として、京大坂其外共、夫々ニ凶年之備有之といへ共、江戸表ニ而者其備も無之ニ付、此度町法改正之上、町入用之費用を省き、右を以非常の備囲籾幷積金致し置べく候、

一町入用減金之七分通を以、町々永續之囲籾且積金致し、貳分通者、地主共増し手取金たるべし、殘壹歩者、町入用之餘分として差加可申候、全體町入用減之儀者、所々ニ而悉不同ニ有之、總町中江ならし候而者、餘程之減ニも見へ候得共、銘々地主共之所得ニ遣候而も纔之儀、又地代店賃等引下させ候ニも、軒別ニ割配候得者、至而少分之事ニ候、かるきもの共渡世之一助ニ可成程ニも無之、其上一旦之事者無詮儀ニ候、一同永續之手當金石囲置候ニしく事なく候間、右之次第能く辨可申候、

但町入用ニ壹歩之餘分を加へる事者、臨時之入用有之時も、右之餘分を以可相辨ためニ候間、臨時之入用等有之候共、此度定置金高々不相増樣可致勘辨候、尤右之内ニ而も、猶又減候ハヽ、夫ハ家守共出精之事ニ付、爲褒美とらせ可遣候、万一右定之外入用多相懸り、地主之方々入用増候儀ニ及候ハヽ、早く地主家守々可訴出、難儀ならざる樣取計可遣候、

一此度一統減書差出候得共、一體不同ニ而減方無數も有之、又一向ニ減なきも相見候、再應糺も

寛政二戌年七月廿七日

領分在町等江も囲米可申付旨御書付

松平越中守殿御渡

近年凶作打續候處、二三年以來、作方多分宜敷候ニ付、凶年之備等も、自然等閑ニ可相成哉ニ付、殊ニ當年ハ米直段引下、一統難儀之事候、一統當年彌豊熟ニ候ハヽ、成丈手操次第、置籾囲米等可申付候、領分在町等江も令敎諭、相應相暮候者共、是又囲米等致候樣、精々可申付、於公儀當年置籾等も多分被仰付、御買米も可被仰付旨被仰候事ニ候、

右之趣、萬石以上幷老中支配之面々江、不洩樣可被相觸候、

七月

〔公事方御下知集〕丑（文化十四年）五月　紀伊守掛り　川崎平右衛門出

一上州沼村出火見分吟味伺

書面、金藏も、火之元之義ハ、精々可入念之處、臺所ゟ及出火、多分之家數類燒、幷貯穀燒失致段、不埒ニ付、急度も可申付處、其節ゟ入牢罷在候上は、此上咎之不及沙汰段申渡、證文取之可被差出候、以上、

〔德川禁令考〕三十八 儲穀 天保十二丑年十月十日

籾遣拂之分詰戻幷寅年（天保十三年）より囲増割合之事

近年凶作打續之處、両三年以來、作方も多分宜敷候ニ付、非常之備、自然と等閑ニ可相成哉ニ候、於御料所も、囲籾被仰付候間、私領之分も、壹萬石ニ付籾百石之割合を以、當丑年より巳年迄、五ヶ年之間、面々領村に囲置候樣被仰出候、一統節儉相用、其段領村凶年之備等可有之候得共、天下之御備に相當り、御安心之儀ニ思召候、寛政度厚御趣意を以被仰出候間、囲穀之分、不得止事用途ニ遣

候得バ、當時之御儉約のみを以、其手當ニ可被仰付樣も無之候間、高壹萬石ニ付、五拾石之割合を以、來戌年より寅年迄、五ヶ年之間、面々領邑ニ圍穀致候樣被仰出候、尤於公儀も、右程合を以、御備米被仰付候義に付、元非常之御備之儀に付、其領邑ニ而面々備置候得バ、天下之御備に相當り候儀ニ而、御安心之儀に思召候天下之御用度に被爲當候節ハ、勿論之儀、其領邑非常之節ハ、御沙汰之御程も可有之儀ニ候條、一統節儉相用、右體有用備向等專一ニ可被心掛候、

酉九月

一圍米之儀、領分半毛損毛之分者、年圍米ニ不及事、

一御手傳相勤候面々ハ、其年より三ヶ年之間、圍米不及事、

但右兩條、何も年延五ヶ年、都合高ハ圍ひ可申候、尤用捨ニ不及、平年之通圍候とも、是又勝手次第之事、

一圍米之儀、成丈籾ニ而可被詰置、籾ニ無之分者、年々詰替可致事、

一來戌年より、圍候樣ニ被仰出候得共、當年より圍候儀、是又勝手次第之事に候、尤年限者五ヶ年同樣之事、

一圍藏等差支迷惑之儀も有之、向寄御藏納被致度面々者、其趣可被相伺候、御藏御差支無之時者、伺之通可被仰付候、

一拜借金有之向、皆濟迄者、圍米高半減之積可心得候、尤定石之通、圍ひ候とも、是又勝手次第之事、

一兼被仰出候酒造之儀、過造無之樣嚴重ニ被相改、米穀猥ニ費し不申、江戸大坂其外、廻米相增候樣可被心得候事、

一年々圍高等、御勘定奉行江可被屆事、

九月

囲籾幷城詰米等之儀ニ付御書付

當秋より於御料所籾圍置候樣被仰付候間、萬石以上之面々も、當秋收納之節より、分限高一萬石ニ付籾千俵宛圍置候樣被仰出候、

一萬石以上江戸表廻米之儀、三年以來之石高、御勘定所江可被書出候、

右委細之儀ハ、御勘定奉行江可被承合候、

四月

寶曆十辰年七月

分限高壹萬石ニ付籾千俵宛圍置之事

一去ル戌亥兩年於御料所、籾圍置候樣被仰出、萬石以上之面々も、籾圍候樣被仰出候得共、亥子兩年米直段高直ニ而、下々可及難儀ニ付、右置籾相拂候樣相達候處、又々當秋より於御料所、籾圍置候樣仰付候間、萬石以上之面々も、當秋收納之節より、分限高壹萬石ニ付籾千俵ヅヽ圍置候樣被仰出候、

一萬石以上、江戸表江廻米之儀、去酉年相達候通、廻米高之內、貳分通相減候樣可被致候、右委細之儀者、御勘定奉行江可被承合候、

七月

寬政元酉年九月十七日

圍米之儀被仰出

近年御物入相重り候上、凶作等打續、御手當御救筋及莫大候ニ付、追々御儉約之儀被仰出候得共、天下之御備御手薄ニ有之候而ハ、不相濟儀思召候、依之享保之御例を以、上納米も可被仰付候得共、當時不如意多之儀、且凶作等ニ而、難澀之砌ニも候得バ、不被及御沙汰、乍然廣大之御備之儀に

一御用米元高四千石　大和國郡山　松平甲斐守

一御用米元高壹万石　山城國淀　稻葉佐渡守

一御用米元高壹万石　攝津國尼ヶ崎　松平遠江守

一御用米元高貳千石　攝津國高槻　永井飛騨守

一御用米元高貳万石　近江國彦根　井伊掃部頭

一御用米元高三千石　播磨國明石　松平左兵衛督

一御用米元高貳千石　播磨國龍野　脇坂中務大輔

一御用米元高壹万石　播磨國姫路　榊原頼母

一御用米元高五千石　近江國膳所　本多主膳正

一御用米元高三千五拾石　伊勢國龜山　坂倉新十郎

一御用米元高貳千石　近江國水口　加藤孫三郎

一御用米元高五千石　伊勢國桑名　松平下總守

元高　合七万六千五拾石

此半分　三万八千貳拾五石

右之面々、御用米之内高半分、大坂江相廻候様ニ相達候間、得其意、右向々江可被申渡候、

十二月

分限三千石以下關東知行有之、拂米致度面々、來ル十八日より廿日迄之内、大手御番所後、御勘定所江家來差出、書付寫取可申候、以上、

十二月

〔德川禁令考三十八儲穀〕寶暦三酉年自四月至九月

諸藩置米貯穀

以上

右癸卯十一月觸

〔德川禁令考三十八貯穀〕備穀

天和三亥年

米穀貯置之儀被仰出

覺

去年當年豐年たる之間、此節可致凶年之心當由被仰出候、被存其趣、國主、領主、米穀等少々被貯置候樣可被心得者也、

十月日

享保十五戌年

城詰、米幷置米等之儀御書付○中略

近年者豐年打續候間、凶年之爲手當置米被仰付事候之間、諸大名も米穀等可成程ハ被貯置候樣可被心得候、以上、

八月

〔德川禁令考五十七米穀〕享保十七子年十二月

領分知行之米御買上幷御用米大坂廻等之事

領分當子年米御買上ニ可致候間、町人江不相構、時之相場を考可買上、米直段幷石高共ニ書付、明十五日より廿日迄之内、御勘定所江可被差出候、

但領分に有之米幷船中尤江戸着之米共、右之通相心得、書付可被差出候、

十二月

御勘定奉行江

内七百七拾石餘右同斷

一籾三万貳千四百石　同　佐渡御囲籾

一籾貳千八百石餘　同　熱田笠松御囲籾

一籾三千百七拾石餘　同　奥羽御囲籾

元高貳拾八万石

一籾三千拾七石餘　丑　飛州御囲籾

一籾貳万五千三百石　雑穀御拂代貸付利金買入村々御囲籾

一籾三千百石餘　貳拾分一御下ゲ穀

小以高籾五拾万五千八百石餘

元高貳拾八万四千六百九拾六石餘

一米拾壹万貳千三百石餘
大豆七百貳拾石餘　御年貢米御囲 諸家城詰御用米大豆

寛政度囲高八拾五万八千八百石之内

籾八拾八万五百石　寅十二月　諸家收納籾囲置 諸家囲穀有高

内

籾六拾貳万七千八百石餘　寛政囲穀

籾貳拾五万貳千七百石餘　天保増囲

籾百三拾八万六千三百石餘

總合米拾壹万貳千三百石餘

大豆七百貳拾石餘

外

一籾貳拾三万石餘　町方七分積金買入市中御救之分 町會所囲籾

元高拾六万石

一籾拾四万四千八百石餘　淺草本所濱御藏

内貳万千五拾七石餘、丑御年貢籾、

元高拾壹万六千四百石餘

一籾拾貳万石餘　小菅御囲籾

内三万五千石右同斷

元高壹万石

一籾八千石　二條御囲籾

内三千石右同斷

元高貳拾八万石

一籾拾三万八千石餘　大坂御囲籾

内壹万九千五百貳拾四石右同斷

元高七千石

一籾七千八百石餘　駿府御囲籾

元高貳万石

一籾九千三百石餘　清水御囲籾

内三千五百石餘右同斷、駿府清水兩所分、

一籾五千石　仝備　堺御囲籾

内千石右同斷

一籾三千七百石　同　南都御囲籾

右御附紙

壹万俵之内三千俵、先年御遣方に成候分、當戌年より詰足、向後壹万俵之積り可₂相詰₁旨、御代官御勘定奉行より可₂申渡₁候間、可₂被₁得₂其意₁候、

戌三月　酒井下總守

右附札之通、下總守江申渡候間、可₂被₁得₂其意₁候、

〔御勘定所定書中〕駿河淸水御　米

一米壹万石

是者享保十九寅年ゟ始、毎年御年貢米を以詰替、古米は御拂に仕、代銀者、江戸御金藏江除置申候、最御遣方に相成候節者、其節相伺、御遣方にいたし候事、

駿河御園米

一米三千五百石

是者古米壹万俵に候處、元祿年中、三千俵江戸江相廻し、夫ゟ七千俵宛詰申候處、享保十五戌年、御城代酒井下總守伺之上、三千俵詰足被₂仰渡₁、其以來壹万俵宛、其年々御年貢米を以相詰、古米者、翌年之御遣ひ方に致し候事、

甲府御園米

一米千八百石

是者享保九辰年ゟ始り、毎年其年々御年貢米を以相詰、古米者、翌年之御遣方に致候事、

〔例書五〕一八丈島御園穀、享保年中被₂仰付₁、年々新穀を以て詰替置候而、急難御救之爲、圍置候事故、急夫食ニ貸渡、亦々元之石數程詰置候事也、是者公儀之御用穀也、

〔吹塵錄米穀七〕天保十四癸卯年全國畜穀有高

御圍籾大豆有高

一米七万石

是者其年々御年貢米を以、其年ゟ翌年四月頃迄に詰申候、内貳万石程者、其年々御年貢米之詰替無構掛り可申分者、其年之夏中御拂に成、右代銀を以除置、丑年御年貢米納替之上、右代銀翌年之御遣ひ方に相成候、貳万石之殘米者、其年々御年貢米納次第詰替、古米御拂に仕、代銀者、翌年之御遣ひ方に相成候、

大坂新規御圍米

一米七万七千五百石

是者享保十九寅年ゟ始、其年之御年貢米を以、其年ゟ翌年四月頃迄に詰替、古米御拂仕、代銀者、大坂御金藏に除置申候、

駿府御城詰米之儀に付伺書

一駿府御城米、古米新米入替之節、足米無滯詰置申候樣仕度奉存候、

右御附紙

御城米足米之儀、相詰候樣、御代官江御勘定奉行より申渡筈候間、可被得其意候、

一御城米者、總御詰米之外、分ケて詰置候樣仕度奉存候、

右御附紙

御城米分ケ置候も、又者今迄之通致置候も、差支候儀無御座候間、有來之通、分置候に不及候、

一御下知狀に者、御城米壹万石詰置可申旨御座候處、詰申候處者、壹万俵古來ゟ詰來申候由に御座候、御下知狀者、御城米之俵數違申候間申上候、此段如何相心得可申哉、奉伺候、

右御附紙

御城米詰米之儀、古來より壹万俵相詰候間、向後者、壹万俵詰置可申候、左樣可被相心得候、

一右御代官ゟ御詰申候御城米、壹万俵之內、元祿年中に江戸ゟ被仰遣、三千俵御用に遣、夫ゟ今以、七千俵も御城米詰申候由承候、右俵數之儀者、御代官ゟ伺申候條、御座候、以上、

御勘定奉行江

城詰米之事、年々城主より詰替候とも、畢竟御用米之事に候得ば、燒失之剋は、從公儀詰候樣に被
仰付筋と被思召候旨、被仰出候間、向後共可被存其趣候、以上、

七月

〔御勘定所定書中〕所々城詰米之儀御書付

所々城々詰置候米、城米と唱來候得共、向後御用米と唱可申候、右御用米燒失又者流失等之所者、
見分可被相伺候、右之趣領分に御用米有之分可被相達候、以上、

享保十五年戌八月

〔御勘定所定書中〕諸國御囲米等之部

○○二條定式御囲米

一米壹萬石

是者其年之御年貢を以、年内に納申候、年に寄翌年江送り納候儀も有之候、翌年御年貢米納
候得者、前年之米と詰替、古米御拂に仕、代銀者、其翌年者、御遣方に相成候、右御囲米之内、少々
御遣方に成候儀も有之候得者、京都町奉行ゟ、其譯申越、御勘定奉行返答之上、御遣方にいた
し候儀も有之候事、

二條新規御囲米

一米壹万石

是者享保十九寅年ゟ始、毎年扣年貢米を以詰替、古米者御拂に成候、代銀大坂御金藏江納除
置申候、尤御遣方ニ成候節者、其段相伺、御遣方にいたし候事、

○○大坂定式御囲米

千石　武州岩付　阿部對馬守

外ニ二千石、右同斷、都合三千石

五百石　江州大津　福島八左衛門

貴志九左衛門

一万石　肥前唐津　松平和泉守

五千石　同　島原　松平主殿頭

三千石　豐後府內　松平將監

二千石　丹波福知山　朽木伊豫守

三千石　石州濱田　松平周防守

是ヨリ左ハ、寛文丑ノ年〔○元年〕ニ、新規ニ仰セ付ラル分ナリ、

三千石　上野前橋　酒井河內守

二千石　下總佐倉　大久保加賀守

千石　下野壬生　三浦志摩守

二千石　下總世喜宿　久世出雲守

千石　三州西尾　增山兵部少輔

千石　三州刈屋　稻垣信濃守

二千石　同　横須加　本多越前守

三千石　志州戸羽

以上

〔憲教類典 五ノ九 米穀〕享保十五庚戌年七月

二千石　同　諏訪　諏訪因幡守

千石　同　伊奈　西尾隱岐守

千石　濃州岩村　丹羽式部少輔

二千石　濃州加納　松平丹波守

千石　下總古河　堀田筑前守

外ニ二千石、寛文元年ヨリ増ス、都合三千石、

五千石　下野宇津宮　本多下野守

三千石　奥州平　内藤左京亮

千石　下野太田原　太田原備前守

五千石　奥州白川　松平下總守

千石　羽州神ノ山　土岐伊豫守

一万石　越後高田

四千八百六十三石　羽州山形　奥平小次郎

三千石　奥州二本松　丹羽若狭守

七千石　同　會津　保科筑前守

和州郡山　松平日向守

千五百石　武州忍　阿部豊後守

外ニ千五百石、寛文元年ヨリ増ス、都合三千石、

千五百石　武州川越　松平伊豆守

外ニ千五百石、右同斷、都合三千石、

石高	城地	氏名
十万石	摂州大坂	万年彌三郎
		間宮庄五郎
		飯高彌五兵衛
		原田彌之介
一万石	摂州高槻	田中孟右衛門
		本多十右衛門
一万石	摂州尼ヶ崎	青山大膳亮
二千石	丹波亀山	松平伊賀守
三千石	丹波笹山	松平九十郎
三千石	泉州岸和田	岡部内膳正
一万石	播州姫路	松平大和守
三千石	播州明石	本多出雲守
五千石	備後福山	水野美作守
五千石	豊前小倉	小笠原遠江守
千石	豊後木付	松平市正
二千石	上野高崎	安藤對馬守
五千石	甲府	甲府宰相殿
千石	信州川中島	佐久間備中守
二千石	同　松本	水野隼人正
二千石	同　小諸	西尾隱岐守

石高	地	姓名
壹万石	駿府	渡邊殿介
		猪子左大夫
二千石	駿州田中	酒井日向守
二千石	遠州掛川	井伊伯耆守
三千石	遠州濱松	青山和泉守
三千石	三州吉田	小笠原山城守
三千石	三州岡崎	水野右衛門大夫
千石	尾州熱田	名取半左衛門
一萬石	勢州桑名	松平越中守
五千石	濃州大垣	戸田左門
千石	勢州龜山	板倉隱岐守
三千石	江州水口	小堀二右衛門
千石	江州永原	觀音寺
五千石	江州膳所	本多隱岐守
二万石	江州彦根	井伊玄蕃頭
一万石	城州淀	石川主殿頭
五千石	城州二條	海野次大夫
		藤井勘兵衛
		高橋七兵衛
		尾崎十兵衛

古事類苑

政治部九十三

下編

貯穀

鎌倉足利二幕府ノ間、貯穀ノ制アリシヲ見ズ、徳川幕府ノ時ニ至リテハ、幕府ハ二條城、大坂、駿府等ノ要所ニ穀物ヲ貯ヘ、又諸藩ニ令シテ、之ニ倣ハシメ、又江戸町會所ニモ寛政年中命ジテ貯穀ノ備ヲ爲サシメ、以テ不時ノ凶作等ニ備ヘシム、而シテ諸藩若シクハ幕府ノ代官所、郷村等ニ在リテモ、亦古代ノ社倉ニ擬シテ、種々ノ方法ヲ立テタル所アリキ、

〔信長記〕六室町殿御謀反之事

一去夏御城米タ被出御商買之由候、遠國未穏平候間、御倉ニ兵養澤山ナル體コソ、自然ノ御爲ニモト諸人モ深ミ可申ニ、金銀ノミ御蓄無勿體存候事、

〔玉露叢〕三十六一諸國所々ノ御城米ノ事

千石　武州神奈川　伊奈半左衛門

二千石　相州藤澤　成瀨五左衛門

五千石　相州小田原　稻葉美濃守

外ニ二千石、寛文元年ヨリ増ス、都合七千石、

三千石　豆州三島　伊奈兵藏

千石　駿州蒲原　井本藤右衛门

壑に斃れ、枵腹鵠形野を蔽て、死骸むなしく禽犬の餌となさしむる事、實に不仁の至也、其時々惠をなして施食の政を令すといへども、其法を知ず、故粥廠に其地を撰ばずして、汚下濕土に作る、升數少なくして濁水を飲しむるのみにして、襤褸をだに肩に懸ざる者に、衣を與ふる事もなければ、寒濕に込りて死する者猶多し、かくて五十日百日と限る故、其後は又汚汗の中に立より外の事なしなど、天如傷の仁心を以て、常に無告の困窮を恤むといへども、氣運有てたま〳〵年饑煢單據なき物落流し、餓莩に及なんとする時は、粥糜を煮て枵腹の民に與へ、衣を施して氷凍の苦を救ふは、又荒政の一也、其廠舍は水深の上に作りて、水は乏しからざる様にして、風を洩して臭氣去しめ、業を授けて頒て、いたづらに食はざる時は、必土に歸り生を全くせざるはなし、實按、今の世、長谷川氏の人足寄場是也、荒政要覽の書に、施粥の法委しく見得たり、されば民を治むる責ある人、ゆるかせにする所にあらずといひける由、人の語りし程と、實もと思ひ侍りて爰に記す、惠雖不能周於人、而當常存於厚と、薛文清公宜ひしを三復すべきかも、

授貧具通人情、亦爲貧難外一時良器、因論荒政幷及之、

〔國本論 二〕一旱既甚しく、田水忽ちにかれて、禾稼見るがうちに枯稿し、草色皆黃に變す、〇中略これ旱天の苦しみなり、霖雨數日晴ざれば、農民の憂苦常に河水の溢る丶にありて、皆郊野に出て土を運び、堤塘の蟻穴を補ふ、〇中略是水潦の苦しみ也、或は凶年五穀みのらずして、人烟つひに絕ゆ、魚蝦螺蚌を取りて喰ひ、盡る時は又木皮草根を食ふ、〇中略是飢饉の苦しみなり、或は疾疫流行して戶々相死し、家々相疾む、〇中略是疾疫の苦しみ也、或は蝗蟲群飛し、山を覆ひ野に滿ち、聲は風雷の如く、又集る事雲烟に似たり、一度集れば田中頃刻にして靑色なし、是蝗蟲の苦み也、是の如く災あれば、民皆走りて有司に訟ふ、有司其虛實を糺し、數日にして是を上に聞す、諸有司を經て終に上に達す、人君これを聞て、疾く有司に命じて其疾苦を救はしむ、其命も亦諸有司を經て下る、爰に於て既に旬月を經るなり、有司の命を受るも亦簿書を急として、生靈を以て念とせず、金錢米粟を點撿し、或は後患を恐れ、或は文法にか丶はる、終に大費を恐れて賑卹の策を盡さず、衆議漸く決して是を行ふの時、民十に三四は旣に溺ひにか丶りて蘇息する事を得ず、其金錢米粟を與ふるも、厚薄多少は又貪吏黠胥の心にあり、爰に依りて窮民却て得る事少くして、富民反て得る事多きに至る、發廩の令、齎錢の命下れども、實惠なくして反て恨みを下に歸す、是聚斂の臣盜臣に劣る所以なり、

〔蠹尻 六〕或國の守、飢餒の丐者を府下に集め、粥を煮て施し給ひしに、彼の乞兒ども、幾程なくて多く死けり、吏是を見て曰、彼等裸行草食日久しかりしに、俄に溫饅を喰、腹中替れるゆへに、自ら死しけるにこそとて、取すてけり、其國の老者是を聞て曰、痛哉、凡季世國を治むる人、貪婪にして剝脂推髓之奸吏をして、牟利の政をなさしめ、慘刻督促に彼百姓を驅立、流離顚沛の極にいたれり、慳怯にして鄙嗇にやすんじ、遂に濱頭に面てを仰て、人の殘食を乞しめ、或ひは赤身菜色、往々溝

雜載

〆人數貳拾五万九千七十三人

二月廿五日より、於柳原籾藏被下之、

男壹人　白米五升　女壹人　同三升

小兒男女共三才より十五才迄三升　六十歲以上男女共三升

〔天保集成絲綸錄 五十三〕天保四巳年二月

寺社奉行江

於東叡山最樹院樣〈○德川家齊父治濟〉御法事相濟候ニ付而

鳥目六百貫文　座頭　盲女

右之通被下候間、內原撿挍江可被申渡候、

天保四巳年三月

御勘定奉行江

今度於東叡山慈德院樣〈○德川家齊母岩本氏〉御法事ニ付

米三百俵　施行米

右之通被下候間町奉行申談、諸事去ル丑年十三回御忌御法事之格ニ可被致候、

三月

〔獻替錄 〕後世賑恤之法、大抵與宋時同、亦所謂聚饑爭之民、與升合之食者、故其弊亦不相異、愚下之情不意得財、隨手用盡、不知善後、在聚食之中、有絹服者、有肉食者、甚則有與他婦奸淫者、一離賑恤、究覓歸於乞丐剽盜耳、是名爲活人、而其實殺人也、〈○中略〉諺云、救災如救焚、救飢如救溺、言賑恤則不可緩也、雖然賑恤有限、饑黎無窮、古人處之、亦有多方、趙清獻、范文正、歐文忠、工役代賑、朱文公勸富戶納粟

〔天明集成絲綸錄九〕寶曆十二午年九月

寺社奉行江

深徳院様〇徳川家重母大久保氏御法事相濟ニ付而

鳥目五拾貫文　　座頭　盲女

右之通被下候間、吉永撿校江可被申渡候、

〔天保集成絲綸錄三十一〕天明八申年九月

寺社奉行江

於東叡山御法事〇徳川家治三回忌相濟而

鳥目六百貫文　　座頭　盲女

右之通被下候間、豊藤撿校江可被申渡候、

〔天保集成絲綸錄三十〕文化十二亥年五月

寺社奉行江

鳥目三百貫文　　江戸座頭　盲女

右此度於日光山御法會ニ付〇徳川家康二百回忌被下候間、此段司馬崎撿校江可被申渡候、

〔視聽草六集三〕天保二年御施行米被下町數

天保二辛卯年春、台廟〇徳川秀忠二百回御忌ニ付、江戸町々江白米被下人數、荒増左之通、〇中略

町數千四百七拾七ヶ所

〔倭訓栞中編十二〕せぎやう　施行の字なり、今貧道乞士、或は災禍飢困の徒に物を與ふるを専らいふ、北條泰時の代に、美濃大に飢、よて場を株川の驛に設けて粥を與へし事見ゆ、今も然り、古への賑給なるべし、

〔寶暦集成綿綸錄八〕延享二丑年二月

町奉行江

此度八講御執行ニ付

施行米　五百俵

右之通りニ被相心得、御勘定奉行江可被談候、

二月

〔寶暦集成綿綸錄十二〕寶暦七丑年二月

御勘定奉行江

今度於増上寺天英院樣〇徳川家宣室近衛氏御法事ニ付、

米貳百俵　施行米

右之通被下候間、町奉行申談、先格之通可被致候、

二月

寶暦八寅年九月

町奉行江

今度於増上寺月光院樣〇徳川家繼母勝田氏御法事ニ付、施行之儀、御勘定奉行江申渡候間、相談先格之通可致候、

九月

法會施行

地　東叡山御小家　上野御山下

淺草廣小路御小屋　　淺草駒形町家持　内田屋　甚右衛門

一味噌汁三樽

右十月九日ゟ毎日施行　　同所山の宿家持　信吉

一味噌二樽

一梅干四十樽　　同所西仲町家持　源兵衛

一鰌二百本　　同所田原町三丁目　儀兵衛店鳥屋　松五郎

一錢十貫文　　同所東仲町　家主　中

一漉返紙六百帖

一澤庵十樽　　同田原町二丁目家持　三河屋　喜三郎〈○下略〉

〔吾妻鏡　二十一〕建暦三年〈○建保元年〉四月廿日辛卯、於南京十五大寺、供養衆僧、可有非人施行之由、將軍家〈○源實朝〉年來御素願也、今日被仰京畿内御家人等云云、廣元朝臣奉行之、

〔壒嚢抄　七〕施行ヲ、シ行共ヨムハ何事ゾ、施ノ字ニ於テ二ノ心有、乞丐人等ニ物ヲ與ルヲセ行ト云ホドニ訓也、

町會所外四ヶ所より之焚出握飯配方、明廿日より相止候間、野宿ニ難儀之者有之候ハヾ、最寄之御救小屋入可相願、尤市中其日稼之者共之內、格別困窮之もの共江御救被下候間、其支配名主方江早々可申立事、

右之通、早々申通候、

十月十九日

右之通、被仰渡候、町々自身番屋江急速張出候樣、可申通旨被仰聞候間、御組合限、月行事持場所共、行屆候樣、御取計可被成候、以上、

十月十九日　　町會所年番

御救被下

一十二月十日、曉七時より支配分人數相揃、町會所江召連、明ヶ六時致參着候ニ付、同所年番江相屆候得バ、無程貳町目始呼込ニ相成、御掛御役人中立合之上、此度地震ニ付、其日稼之者共、三歲迄之小兒ハ相除、十五歲以上より六十歲迄之男ハ、白米五升宛、十四歲以下六歲以上之男、幷女之分ハ白米三升宛、人數ニ應、御救米被下候間、難有頂戴可仕旨被仰渡、家主共銘々御請印形仕候、

〔地震出火〕御救小屋施行名前附〕聖代記〇中略

于時安政二卯十月二日夜、不意の天變一時に發して、四民の困窮、人命の死亡、家庫堂社の破損燒亡、許多といふ數を知らず、朝に燒野に出て灰塵に染れ、夕べに地上に臥て寒風に身を晒し、哀といふも餘りあり、かゝる中にも官府の御仁惠莫太にして、難民撫育の御德澤は、實に太平の御國恩にして、既に五ヶ所に御救小家を建させられ、憨ひを忘れて歡喜を增、諸人安座して万歲を唱ふ、堯舜の民仁を好し、富有の商家財を分て、貧しき者へ施行せしむ、〇中略

五ヶ所御小家　　淺草廣小路　深川海邊新田　幸橋御門外　同所八幡宮境內　上野火除

之哉、是又御申聞可被成候、

卯十月十二日　　町會所年番

右通達ニ付、組合內取調、左之通返答出、

稀成地震、同時ニ出火致、類燒之者野宿罷在候間、町々窮民共江家內人數ニ應、握飯壹ツ宛被下候得共、場廣之儀ニ而、御救行屆ざる場所も有之趣ニ付、白米ニ相成候方辨利ニ候哉御尋ニ付、私共組合町々取調候處、白米ニ而被下候樣相願度旨一統申候、尤南傳馬町三丁目外貳ヶ所之儀ハ、別紙之通申立候、依之此段申上候、以上、

卯十月十四日　　五番組世話掛　名主共

南傳馬町三丁目人別高凡六百五十人程之內

一窮民九拾人程

疊町同四百八拾人程之內

一同八拾人程

白魚屋敷同三百人程之內

一同七拾人程

右町々地震、幷類燒ニ而、差向渡世も出來兼、困窮罷在候者共、右三ヶ町ニ而、都合人數貳百四拾人程御座候處、右之者共江御白米ニ而被下置候而も、類燒場所ニ而焚出ハ差支候間、右人數丈之御握飯折合候迄、暫之間最寄御焚出場ニ而被下置候樣仕度奉存候、左候得バ、町內より入物持參、持人召連、御場所江罷出奉請取、町役人共立合相渡候得バ、御救末々迄行屆難有奉存候、

握飯配方相止　　年番名主共

〔德川禁令考二十八救恤使〕安政二卯年十月

地震後町奉行巡見并御救等之事○中略

御救小屋取建

地震并出火ニ而類燒致候、野宿之窮民共御救之ため、淺草廣小路、幸橋御門外、深川海邊町續江小屋取建候間、野宿之もの勝手次第、右小屋江願出候樣可致候、

右之通、町々江申觸候樣、支配之名主共江早々可申通、

卯十月

右之通、御掛御役人中被仰渡候間、御支配町々野宿罷在候者之内、御小屋入相願候者、幸橋御門外御小屋場ハ、明後六日夕刻より、其外貳ケ所ハ明五日夕刻より、最寄勝手之方江願出候樣、急速御申渡可被成候、御救筋之儀ニ付、吳々も御組合限ハ屆候樣御取計可被成候、此段御達申候、以上、

卯十月四日　町會所年番

同增掛年番

御救之儀ニ付尋

稀成地震同時ニ出火いたし、類燒之もの野宿罷在候間、御救小屋五ケ所ニ而握飯焚出、市中町々端々迄窮民共江、家内人數ニ應、握飯壹ツ宛被下候得共、場廣之儀ニ而、御救行屆ざる場所も有之趣ニ付、一統行屆不申候而ハ、御主意にも相振候間、各樣御組合限、白米ニ相成候方辨利候哉、町々之摸樣御書取御取調書、明後十四日無間違町會所江御差出可被成候、右ハ御掛御役人中被仰聞候間、此段御達申候、以上、

但白米ニ而被下候得バ、握飯焚出御配ハ御差止ニ相成候趣候間、右ニ而も町々之者ハ差支無

〆九万四千九百〇三石二斗九升なり
男女人數二口米高
〆二十三万七千八百七十九石六斗九升なり
一七分通り男女總數、〆六百二万二千九百七十一人なり、
壹人前ニ錢貳百文ヅヽ
錢〆百二十万貫〇貫字恐衍五千五百九十四〆ト五百文なり、
此内類燒致候者へ、壹人前錢五百文ヅヽ被下之、
〆十八万八千二百十七兩三分ト六百文なり

〔見聞雜錄十七〕地震後所々出火之儀申上候書付
去ル二日夜四時頃地震後、〇中略総合凡貳里拾九丁餘巾平均貳里貳町程燒失町火消共店人足共
武家方人數消防仕、口々ニ而鎭火申候、此外相替儀無御座候、以上、
卯安政二年十月
右出火翌朝四ッ時頃致鎭火候
御救小屋人數十月廿八日迄入高
一六百四拾六人　淺草雷門前　御小屋
一六百三拾三人　深川海邊大工町　同所
一四百五人　同所永代寺境内　同所
一四百五拾貳人　幸橋御門外　同所
一五百六拾壹人　上野山下　同所
總〆貳千六百九拾六人

より御救小屋として同所御山下通り江一ヶ所、○中略かゝる中にも廣大無量の御仁惠の御手當被仰付候段、諸人安堵之上、御國恩のかたじけなきを謹て拜謝し奉り、皆万歳を唱へける、

〔見聞雜錄十七〕安政二卯十月二日、大地震出火ニ付、御府内町人江御救米被下候處、御府内四里四方、町數元八百八丁なれど、今新地代地門前地差加へ、

一五千七百二十三町

右里數ニ直シ、但レ三十六丁一里にして、

〆百五十八里三十五町なり

一江戸町人計りの數

八百六十万四千貳百四十四人なり

此内

一男四百〇八万五千〇四十人

内七分通り當上高

二百八十五万九千五百二十八人

米五升一人前

〆十四万二千九百七十六石四斗也

一女四百五十一万九千二百四人

内七分通

三百十六万三千四百四十三人

米三升壹人前

略同日夜四ッ時頃火はしづまり、人々安堵の思ひをなしにける、

御救小屋壹ヶ所、外神田佐久間町河岸通り、

〔武江年表八〕弘化四年、今年三月八日より川中島善光寺如來の開帳ありて、諸國より參詣群集する事稻麻ごとし、然るに淺間山の烟、常よりも減たるを怪しみ居たるに、三月廿四日晝夜快晴にてありしが、夜四ッ時頃、俄に大地震ひ出し、立地に家屋を覆し、壓に打れて即死するもの幾千人といふ事を知らず、善光寺近邊の旅店は參詣の輩泊り合して、この禍に逢ふもの有、ともに數へがたし、無程この倒れたる家より火燃出て大火と成る、善光寺の本堂は傾たる儘殘り、其餘は悉く灰燼となんぬ、この時山中にのがれて利益を蒙り、一命を全ふせしもの數多あり、又雷鳴の如き響ありて尙ゆり出し、夜明に及ぶ迄八十餘度、四月五月にいたりても猶止事なし、大地は裂けて泥砂湧出し、其間へ人家墮入、丹波島より二里川上、虛空藏山廿丁程崩れ犀川へ落入、洪水溢れ、丹波川へ押出し、左右瀨のごとし、燒死の人馬幾といふ事を知らず、或筆記に三万人とあるは、大凡の積りにて證とはしがたし、水内郡は殊に甚しかりしとなん、其他山崩れ水溢れ一村を流す、たまたま生殘るものも片輪となり、米穀盡て飢に迫り道路に悲泣す、この間地震は止時なく、用水は泥水となり、雨遠にして渴に苦り、程なく官府より小屋を建られてこの窮人を育し、食物を給はりけるとぞ、誠に千年の大厄にして、聞く毎に戰慄す、

〔見聞雜錄十七〕頃は安政二乙卯年十月二日夜四ッ時、俄に大地震ゆり出し、○中略　此度稀成天災ニ付、御公儀樣より町々一統へ御救米被下置、其上往還野宿の者へ、新に三ヶ所之御救小屋造作被遊被下置候、

場所左之通

幸橋御門外、淺草廣小路、深川海邊新田、深川八幡宮境內、上野御山下通り、上野東ゑい山宮樣

共江手當、炭薪其外品々買上物入用之分、

金百六兩、永百四拾五文壹分、

是は御救小屋病人療治いたし候牧野良元外四人江藥代并出生之もの取揚候もの江爲手當相渡候分、

錢四百七拾貳貫文

此金七拾貳兩貳分、永百拾五文三分、

是は御救小屋内可稼當人取計、壹人ニ付、錢四百文ツヽ、元手錢并小屋内病死人取置料として、店主は三貫文、家族は貳貫文、三才以下之小兒は壹貫文ツヽ、相渡候分、

白米貳千貳百五拾九石八斗五升

錢壹万四千八百三拾九貫八百文

此金貳千貳百八拾三兩、永四拾六文壹分、

是は類燒窮民共人數七万四千百九拾九人、壹人暮は白米五升、錢貳百文、貳人暮ゟは四歳以上家内人數ニ應じ、壹人白米三升、錢貳百文ツヽ、相渡候分、

右は類燒窮民御救入用ニ而、町會所積金溜を以取計候分、書面之通御座候、依之申上置候、以上、

午閏五月

〔見聞雜錄十五〕安政元甲寅年十二月廿八日、夜五ツ時頃、神田連雀町ゟ出火し、〇中略翌日朝五ツ半時頃に漸火鎭りて、人々安堵の思ひをなしぬ、〇中略右出火ニ付、同月廿九日晦日、此度類燒之もの江、公儀ゟもつそう飯、紙包にて、梅干二ツヽ添、壹人江被下、翌卯正月四日ゟ、新シ橋外町會所ニ於て、男女子供迄、壹人ニ付、白米三升、錢貳百文ツヽ被下置候事、

〔見聞雜錄十九〕頃は安政五戊午年十一月十五日、明七ツ時頃、下谷新屋鋪武家方より出火して、〇中

印竹内清太郎
町會所掛

類焼窮民御救入用高之儀申上候書付

御届

遠山左衛門尉
印鍋島内匠頭
同石河土佐守
同羽田龍助

當正月十五日、本郷丸山邊ゟ之出火ニ而類焼致し候窮民共、御救筋取計候諸入用、左ニ申上候、

一白米貳千八百五拾壹石六斗貳升四合

金四千八百五拾三兩貳分、永貳百文壹分、

内

白米五百九拾壹石七斗七升四合

是者本郷丸山邊ゟ之出火ニ而、類焼野宿之もの、并御救小屋内之者江一日壹人ニ付三合宛之當を以、正月十六日ゟ三月十日迄、延人數拾九万七千貳百五拾八人、握飯ニ而相渡候分、

金千四百五拾三兩壹分、永百貳拾貳文五分、

是は前同斷、三ヶ所御救小屋、并役人詰所、湯小屋、竹矢來、町會所握飯焚出所、白米搗立所、其外取立物入用之分、

金九百三拾八兩貳分、永貳拾壹文壹分、

是は焚出し握飯持運び、小屋場内水汲湯焚掃除人足、御救小屋取建中、晝夜相詰候町役人

御救小屋掛名主
貳拾壹人
金千疋
別段金五百疋ツヽ

同断家守
百六拾人
金百貳拾五兩

右當正月十五日、本郷丸山邊ゟ之出火ニ而類燒致し候窮民共、町會所ニおゐて握飯配方、并神田佐久間町外貳ヶ所江御救小屋取建、町會所に而焚出し賄渡方取扱、且右小屋入之外、類燒いたし候もの之內、實に難澀之もの共江被下候米錢渡方等之儀、一同出精相勤、御救筋も行屆候ニ付、御褒美被下候方與先例取調候處、去巳年、青山邊ゟの出火ニ而、握飯配方、并御救小屋取扱候節、御用達江壹人ニ付銀七枚、同見習江銀五枚、年番名主江銀三枚、別段金千疋、座人世話役江金三兩、別段金七百疋、座人并御用達手代江金三兩、別段金三百疋、同手替手代、定詰手代江金千疋、書役江金五百疋、小遣門番人江金三百疋、御救小屋心付候名主江金千疋、別段金貳百疋、同断家守七拾貳人江金七拾兩被下候處、去巳年之大火ニ見合候而は、此度は御救米錢被下候人數五万五千人餘、小屋入人數千貳百人餘多く、其上小屋々々も掛隔居候ニ付而は、別而手數も相懸り候儀ニ付、書面之通、町會所金之內ゟ品能御褒美被下置候樣仕度奉存候、

午三月

下ヶ札
本文、家守江被下金之儀、去巳年大火之節は、七拾貳人家守御救小屋江、相詰候延人數千貳百三拾壹人ニ而、金七拾兩被下候間、一日一人銀三匁四分壹厘餘ニ相當、此度は百六拾人之家守小屋江、相詰候延人數貳千百五拾壹人ニ而、本文之通、金百貳拾五兩被下候得ば、一日一人銀三匁四分八厘ニ相當申候、

午閏五月廿日、伊勢守殿江三阿彌を以上ル、

銀五枚　　同見習
　別段銀貳枚宛　　四人
銀三枚　　年番名主
　別段金千七百疋宛　　六人
金三兩　　座人世話役
　別段金三兩宛　　貳人
金三兩　　座人
　別段金壹兩貳分宛　　拾人
同斷　　御用達手代
　同斷宛　　九人
金千疋　　手替手代
　別段金貳百疋宛　　九人
同斷　　定詰手代
　同斷宛　　五人
金五百疋　　書役
　別段金百疋ヅヽ　　六人
金三百疋　　小遣之もの
　別段金貳朱ヅヽ　　三人
　　門番
　　拾人

ヅヽ之積、焚出し方は町會所ニ而取計候積り、右懸り支配向組之ものエ申渡候、尤去巳年、青山邊ゟ出火之節は、小屋入之もの凡三十日を限、居處才覺可致旨、兼而申渡置候得共、今般は大火之儀ニ付、日限之目當付兼候間、追而之模樣ニ寄、猶申上候樣可仕候、此段申上候、以上、

午正月(中略〇)

申渡

年番　名主共

此度丸山邊ゟ出火ニ而類燒いたし候、野宿之窮民共御救之ため、神田佐久間町、江戸橋廣小路、於屋町エ小屋取建候間、野宿之もの勝手次第、右小屋エ願出候樣可致候、

右之通、類燒町々エ申觸候樣、支配之名主共エ、早々可申通、

午正月(中略〇)

午正月廿二日廻し濟(中略〇)

御救小屋内之者御救中、銘々稼方いたし、右稼溜を以、夫々有付方可致之儀、類燒いたし野宿も致候程之者共ニ而、元手錢も無之、稼方ニも差支難儀之趣ニ付、去春大火ニ而類燒いたし、御救小屋入之者共エ、元手錢四百文ヅヽ被下候振合を以、可稼當人取計、四百文ヅヽ差遣し可申哉、此段御伺申候、

午二月

〔丸山出火御救一件下〕午(弘化三年〇)三月晦日廻し濟(中略〇)

類燒窮民御救筋取扱候御用達以下、御褒美之儀取調左ニ申上候、

御勘定所御用達

銀七枚

別段銀三枚宛　八人

たる、西は御堀端通り神田より一石橋迄、日本橋の向は、通一丁目より疊町迄、京橋手前一圓類焼、

（中略） 類焼の貧民御救の小屋三ヶ所へ建られ、其餘の賤民へも米錢を賜はる、富有の商家よりは、色々の施をなす、

〔丸山出火御救一件 上〕類焼野宿之者共江御救渡方取掛候儀申上候書付

御届

印 遠山左衛門尉（町奉行）
同 鍋島内匠頭（町奉行）
同 石河土佐守（勘定奉行）
同 羽田龍助（勘定吟味役）

昨十五日、本郷丸山邊ゟ之出火ニ而類焼致し候もの共之内、野宿難儀之もの共江、御救被下置候方（與奉）存候間、前々ゟ之振合を以、壹人三合ツヽ之積り、先ツ四五日も握飯渡方取計候積り、町會所邊之者共江申渡、不取敢今朝より同所ニおゐて焚出し、渡方爲取計申候、尤總人數石數等之儀者、追而取調申上候樣可仕候、此段申上置候、以上、

正月（弘化三年）十六日（中略）

類焼ニ而野宿致し候者共、差置候小屋場取建候儀ニ付、申上候書付、

印 遠山左衛門尉
同 鍋島内匠頭
同 石河土佐守
同 羽田龍助

一昨十五日、丸山邊ゟ之出火ニ而、野宿罷在候もの共、翌十六日ゟ御救握飯相渡候得ども、困窮之者共、急速住居才覺難出來、野宿いたし候もの多分有之趣ニ付、神田佐久間町、花房町地先、（井）江戸橋廣小路、松屋町河岸江小屋場取建、野宿之もの入置、例之通三歳以上江、一日壹人に付、白米三合

金三百貳拾壹兩三分、永貳百四文、

内

白米拾貳石九斗

是者神田富松町ゟ之出火ニ而、類燒野宿之もの江、壹人ニ付、三合ツヽ之當りを以、三月廿七日ゟ廿九日迄三日之間、延人數四千三百人江握飯ニ而相渡候分、

金拾貳兩、永拾五文六分、

是者前同斷、焚出方、并配方持運人足賃、薪代、其外入用之分、

白米三百六石三斗七升

錢二千拾四貫六百文

此金三百九兩三分、永百八拾八文四分、

是者前同斷、窮民共、人數壹万七拾三人江、前書之割合を以、家内人數ニ應じ米錢相渡候分、

白米千百七拾石六斗八升五合

合

金貳千四百貳兩、永七拾三文貳分、

右者類燒窮民御救入用高、町會所積金溜を以取計候分、書面之通ニ御座候、依之申上置候、以上、

巳五月

〔武江年表八〕弘化三年正月十五日、北風烈しく砂石を飛す、夕八時過、小石川片町の北、武家地より失火して丸山へ移り、本妙寺菊坂の邊より、本郷御弓町、夫より元町邊、又本郷通り、湯島町通り、春木町邊、神田明神門前、(神田社樓門境内神社、并湯島天滿宮社壇は恙なし、)旅籠町、仲町の邊にいたる、湯島の火は駿河臺へ飛て、小川町へ燒込、東西神田町々一圓燒亡し、今川橋向は、本町石町、室町、大傳馬町、小田原町、小舟町、堀江町、小網町、茅場町、八丁堀濱町、永代橋際迄、靈岸島、築地、鐵炮洲、佃島、(本願寺迄はやけず、)南八丁堀にい

を以、正月廿五日ゟ三月廿日迄、延人數九万四千五百三十五人江握飯ニ而相渡候分、

金千六兩三分、永百八拾五文五分、

是者前同斷、御救小屋、并役人詰所、町會所白米搗立場、赤羽心光院、并小屋場内焚出所、其外取立物入用之分、

錢三百拾壹貫八百文

此金四拾七兩三分、永貳百拾九文貳分、

是者前同斷、小屋内可稼當人江計、壹人ニ付、錢四百文ヅヽ、遣し候元手錢、并病死のもの取置料、店主者三貫文、家族者貳貫文、三歳以下之小兒者壹貫文ヅヽ、相渡、其外小屋内奇特のものへ遣し候褒美錢等之分、

金四百八兩三分、永三文六分、

是者前同斷、焚出し方人足賃、炭薪諸色運賃、并赤羽心光院江遣しもの、其外品々買上物代之分、

金四拾六兩貳分、永貳拾貳文五分、

是者御救小屋内病人療治致し候寄合醫師河野良以弟子共江、藥代として相渡候分、

白米五百六拾七石八斗壹升

錢三千七百四貫六百文

此金五百六拾九兩三分、永百八拾八文四分、

是者前同斷、類燒窮民共、人數壹万八千五百貳拾三人、壹人暮者白米五升、錢貳百文、貳人暮よりは四歲以上家内人數ニ應じ壹人白米三升、錢貳百文ヅヽ、相渡候分、

一 白米三百拾九石貳斗七升

ニ積、貳〆六百七拾目餘、此金四拾四兩貳分餘與相成、右之處江銀七拾枚被下候得ば、六拾六匁替ニシテ金四拾五兩餘ニ相成、壹貼貳分五厘五毛ニ相當候ニ付、聊相增候哉ニ候得共、銀相場之狂ひニ寄候而は、いづれとも難申、一同早朝ゟ晩景迄、日々詰切出精療治致し候儀ニも有之候間、書面四人江銀七拾枚、町會所金之内を以被下可然奉存候、左候はゞ其段良以江相達し、渡方取計候樣可仕與奉存候、此段相伺申候、

但河野良以儀も、五百三拾八貼藥差出候得共、右者施療治仕度旨、越中守殿江〇本ノ若年寄伺之上取計候儀に付、藥代は不遣積ニ御座候、

巳四月

印　遠山左衛門尉
同　鍋島內匠頭
同　石河土佐守
同　羽田龍助

〔青山出火類燒窮民御救一件下〕類燒窮民御救渡入用高之儀申上候書付

御届

當正月廿四日、青山邊ゟ之出火、并三月廿七日神田富松町ゟ之出火ニ而類燒いたし候窮民共御救筋取計候諸入用、左ニ申上候、

一白米八百五拾壹石四斗壹升五合
金貳千八拾兩、永百拾九文貳分、

内

白米貳百八拾三石六斗五合
是者青山邊ゟ之出火ニ而、類燒野宿之者、并御救小屋內之者江、一日壹人ニ付、三合宛之當り

同　羽田龍助

去ル廿四日、青山邊ゟ高輪海手迄類燒、町々小町共、凡百貳拾ヶ町程ニ而、野宿致し罷在候もの共江は、翌廿五日ゟ御救握飯相渡候得共、右野宿之もの、凡三千人程も有之、場末困窮之もの共、急速住居才覺難出來もの多候趣ニ付、赤羽橋際河岸地江小屋場取建、野宿之もの入置、先例之通、三歳以上江一日壹人ニ付、白米三合ツヽ之積、焚出し方は町會所に而取計候積、右掛支配向組之もの江申渡候、尤小屋入之もの凡三十日を限、居所才覺可致旨、兼而申渡置候樣可仕候、依之御普請奉行江御斷之儀申上候書付相添、此段申上候、以上、

巳正月　〇中略

此度類燒難澁人共御救として、赤羽江小屋場取建候處、追々日數も相立、身寄等江たより候歟、夫夫身之片付方も可有之儀ニ付、來ル廿日を限り、其後小屋入願出候而も難相成もの也、

巳二月　〇中略

私儀是迄施藥仕罷在候處、此度類燒ニ付、御救小屋有之候場所之內、若病人等有之候はゞ、爲修業施療治仕度、此段奉伺候、以上、

二月十三日　　寄合御醫師　河野良以

附札
可爲伺之通候、尤町奉行可被談候、

〔青山出火類燒窮民御救一件下〕巳四月十二日廻し濟〇中略

寄合御醫師河野良以弟子　青木良山　牧野良元　岡良博　青木良知

右之者共、赤羽御救小屋內病人療治致し候ニ付、藥代先例取調候處、去ル申年、米價高直ニ而、御救小屋取立候砌、療治致し候町醫師江、服藥一貼ニ付、二分五厘之當を以、藥代被下候ニ付、右ニ見合、藥貼數取調候處、煎藥九千三百六拾七貼、右之外丸藥散藥其外共、都合壹万七百貼餘ニ有之、代銀

類焼人江御救渡方取掛候儀申上候書付

御届　　　　　　　　島喜一郎 略〇中

印　跡部能登守 〇町奉行
同　鍋島内匠頭 〇町奉行
同　石河土佐守 〇勘定奉行
同　羽田龍助 〇勘定吟味役

一昨廿四日、青山五十人町より出火ニ而類焼致し候もの共之内、野宿いたし難儀罷在候もの共江、御救被下置候方奉存候間、去々卯年十二月、丸之内より出火之節相渡候振合を以、一人三合ヅヽ、之積、一日凡千人程ヅヽ、四五日も握飯渡方取計候積、町會所掛り之もの江申渡、先づ不取敢同所ニおゐて、昨夕より渡方取計候得共、此度之儀は最寄違ニ付町會所ニ而焚出し方爲取計候而は不便利ニ而、運送等無益之失費相掛候ニ付、寛政度麹町違出火之節、類焼窮民共、同所平川天神社内ニおゐて、米錢渡方取計候儀も御座候ニ付、右之振合を以、増上寺別院赤羽心光院地内借受、同所江支配向組々のもの相詰焚出し渡方取計候得ば便利も宜候間、寺社奉行江相達候上、右之通爲取計候、尤難澁人之次第ニ寄、増方をも致し、總人數石數等之儀は、追而取調申上候樣可仕候、此段申上候、以上、

正月廿六日 〇中略

類焼ニ而野宿致し候もの共、差置候小屋場取建候儀ニ付、申上候書付

御届

印　跡部能登守
同　鍋島内匠頭
同　石河土佐守

〔武江年表〕弘化二年正月廿四日、北大風砂石を飛す、晝八時過、青山權太原續三軒屋町武家地より出火して、一時に燒ひろがり、或飛火して、麻布三軒家、一本松、鳥居坂邊、六本木、龍土、市兵衛町、櫻田町、永坂邊、廣尾、白金、魚籃觀音、大信寺の邊、二本榎、伊皿子、猿町、高輪、幷田町等燒亡して海手に至る、夜に入、狸穴、三田の新網町の邊燒亡、戌下刻鎭る、武家寺社數を知らず、町數百廿六箇町、燒亡怪我人、或は海邊の者、前後の火に包れ、海中に入、溺れ死するものを合せて幾百人といふ事を知らず、赤羽橋の側に御救の小屋を建て、類燒の貧民を育せらる、

〔青山出火類燒窮民御救一件〕類燒致し候もの共御救筋之儀ニ付申上候書付

町會所掛

昨夕之出火及大火候ニ付、御救筋之儀、早々取調可申上旨被仰渡候ニ付、町會所江罷出、御勘定方、幷御向方類役江も申談、評議仕候處、存外場廣之趣相聞候間、去ル戌年四月、本小田原町、幷去々卯年十二月廿八日、丸之内より及出火、京橋邊より芝口邊、其外燒失致し候節之例ニ見合、類燒致し及難澀候もの共江壹人ニ付三合宛之握飯、今夕より當分日々燒失之場所江持參差遣候積、手當申付候、且又追而人別委細取調出來仕候はゞ、定例類燒御救之米錢被下候儀奉伺候積ニ御座候、且御勘定所江相掛より及文通候處、土佐守殿、幷吟味役衆江、直ニ申上候由返書申來候、依之申上候、

但類燒場所掛離、持運不便利ニ付、今夕握飯持參、場所之樣子等見積、引續日々遣候儀ニ御座候はゞ、品ニ寄、最寄寺院借受焚出候樣可仕候、尤員數之儀も、先今夕千人分手當致し差遣、樣子次第、明日遣候員數增減仕候積ニ御座候、以上、

正月二十五日（弘化二年）

加藤九平

島佐大夫

二月十七日、小屋入調高、

兩國廣小路　千貳拾五人

江戸橋廣小路　七百八拾五人

松屋町　千七百七十三人

佐久間町　四百七十六人

數寄屋橋御門外　九百七拾貳人

〆五千三拾壹人

二月廿日、小屋入調高、

兩國廣小路　九百九拾七人

江戸橋廣小路　七百三拾壹人

松屋町　千七百三拾五人

神田佐久間町壹丁目　五百拾壹人

數寄屋橋御門外　九百拾九人

〆四千八百九拾三人

一火之用心嚴重ニ心付可ㇾ申事

一酒一切相用申間敷事

一喧嘩口論者不ㇾ及ㇾ申、男女相互ニ行儀相愼可ㇾ申事、

一病人等有之候節者、町役人江早々申上候之樣可ㇾ致事、

右之條々、堅可ㇾ相守ㇾ者也、

午二月

〕二丁目迄延燒、三度の燒亡一ッにして、長凡壹里、幅平均にして十町の餘といふ、燒死怪我人、數ふべからず、御救の小屋十箇所へ十三棟を建られ、貧民を救はせらる、

〔天保五年御救一件大火〕類燒人江御救窮方取懸り候儀申上候書付

榊原主計頭〇町奉行
筒井伊賀守〇町奉行
土方出雲守〇勘定奉行
中川忠五郎〇勘定吟味役

御屆

町々類燒に付、野宿罷在候もの御救之儀、小屋懸出來之上、渡方取懸り候而は及延引候間、格別難儀之者江、昨九日ゟ、先ヅ握飯渡方相始申候、尤總人數石數等之儀は、追而取調申上候樣可仕候、依之申上候、以上、

二月十日〇中略

類燒に而野宿致し候者共、小屋場增取建候儀ニ付申上候書付、

榊原主計頭
筒井伊賀守
土方出雲守
中川忠五郎

御屆

一神田佐久間町壹丁目地先
一數寄屋町地先

右場所々々江、此節之類燒ニ而野宿致し候者共、差置候小屋場增取建候ニ付、此段申上候、以上、

午二月〇中略

此白米五百七拾三石壹斗貳升九合

但一日壹人ニ付、白米三合之握り飯壹ツヽ、味噌添、半紙貳枚ヱ包、相渡申候、

文化度大火之節ハ

一五万六千九百五拾五人

但一日壹人ニ付白米三合ツヽ

此石數百七拾石八斗六升五合

右之通御座候、外ニ小屋入不致類燒窮民ヱ相渡候米錢員數之儀ハ、別段申上候、以上、

丑六月十八日　　年番肝煎

同七月六日、榊原主計頭樣江〇江戸町奉行被召呼、於御座敷左之通被仰渡候、

町會所年番　肝煎名主　源太郎　八左衛門　惣藏　新右衛門　源七　市之丞

市藏　六右衛門　同名主　五郎兵衛　條八

其方共儀、當三月大火之節、類燒窮民共ヱ握飯相渡ニ付而、日々曉より町會所ヱ相詰、焚出方差配致、并御救小屋之見廻、人數高等取調、其外御救米錢渡方之節ハ、多人數之事故、是又早朝より罷出、深更迄も調方致、格別骨折相勤候ニ付、爲御褒美銀三枚宛、別段金七百疋宛差遣ス、

丑七月

同月十日、於町會所御救渡中、格別骨折候ニ付、年番肝煎拾人ヱ、別段爲御手當金拾両被下候、

同五月廿九日、支配方類燒窮民四歳以上より、壹人ヱ白米三升、錢貳百文宛、獨身者ヱハ、白米五升、錢貳百文宛、於町會所被下候、

〔武江年表八〕天保五年二月十日、晝九時頃、大名小路の邊より出火して、諸侯の藩邸數宇、鍛冶橋御門、數寄屋橋御門、南鍛冶町、鈴木町邊、南傳馬町、銀座町、尾張町、三十間堀、新橋向、木挽町、築地邊、芝口

ニ而、西ハ柳原通り、須田町片側通り、新石町より鎌倉河岸御堀端通り、數寄屋橋御門外八官町、丸屋町、山王町迄、東之方ハ兩國西廣小路、永久橋、新川、新堀、靈岸島、鐵炮洲、佃島一圓、南ハ芝口金六町新橋迄通り町左右、芝口三丁目東側迄限り、木挽町、築地海手迄類燒、大火ニ付、同廿三日幸橋御門外、外六ヶ所江御救小屋御取建、右御小屋入類燒の窮民江、壹人白米三合當ニ而握り、飯可被下置、文化三寅年之例を以、御伺濟ニ相成云云、

此大火ニ付類燒致、往還井廣場等ニ菰張致、野宿罷在候者共爲御救、左之場所々々江御小屋御取建、出來次第、於其場所人數ニ應、握り飯可被下段、御伺之上被仰渡、右御趣意早々行屆候樣、各樣江御通達可申旨、御詰合御役人方江被仰渡候ニ付、勝手次第、右最寄之御小屋江可罷越旨、御組合限行屆候樣御取計可被成候、此段御達申候、以上、

一筋違橋御門外壹ヶ所

一幸橋御門外壹ヶ所

一江戸橋廣小路壹ヶ所

一數寄屋橋御門外壹ヶ所

一神田橋御門外より常盤橋御門外迄之間貳ヶ所（此小屋場之間五丁程隔り）

一松屋町河岸貳ヶ所

一築地門跡前貳ヶ所

右御達申候

丑三月廿三日

町會所
年番肝煎

丑三月廿三日より五月廿一日迄、野宿ヲ小屋入人數、

一拾九万千拾貳人

正月

〔武江年表七〕文化三年三月四日、晝九ツ時、芝車町より出火、〇中略類焼凡長貳里半、幅平均七丁半、諸侯藩邸八十三宇、寺院六十六箇寺、名ある神社二十餘ヶ所、町數五百三十餘町と聞ゆ、又燒死溺死千二百餘人といへり、類火にあひし賤民、御救の小屋十五箇所へ建てこゝに憩はしめ、食物を給る、此餘の貧民へも米錢を給はる、

〔天保集成絲綸錄百六〕文化三寅年五月

類焼町々

名主共

當三月中之火災ニ而、類焼町々も多分ニ有ㇾ之、右ニ付而は、類焼之窮民江も品々御救被ㇾ下候積之儀ニ而、地主共も彼是可ㇾ及ニ難儀ㇾ事ニ候間、右類焼町々積金之儀、當年中令ニ用捨ㇾ候間可ㇾ得ニ其意ㇾ候、勿論此度之儀は、格別之譯を以、右之通ニ候間、決而以來之儀には相心得申間敷候、

右之趣、其方共一同令ニ承知ㇾ類焼地主ども江も不ㇾ洩様可ニ申聞ㇾ候、

寅五月

〔武江年表八〕文政十二年三月廿一日、北風烈しく、巳の剋過、神田佐久間町貳丁目河岸の材木小屋より火出て、〇中略翌廿二日朝鎭火す、武家方類燒夥しく、南北凡一里餘、東西二十餘町、燒死溺死の壹千九百餘人と聞り、御救の小屋九ヶ所を建て、類燒の貧民を救せらる、

〔德川禁令考二十八救恤他〕文政十二丑年

大火ニ付、類燒窮民野宿之者江握飯被ㇾ下、幷御救小屋御取建、

附右掛被ニ仰付ㇾ御褒美

文政十二丑年三月廿一日、晝四半時頃、神田佐久間町壹丁目河岸細工小屋より及ニ出火ㇾ北大風

是者右同斷、床上江水押上候分、人數壹万千四百貳拾貳人、獨身暮之無差別、壹人ニ付、白米三升、錢三百文宛、四才以上家内人別ニ應、床下迄水押入候分、人數壹万九百四拾八人、獨身暮者錢三百文、貳人暮以上者、壹人ニ付、錢貳百文ヅヽ相渡候分、

右者出水揚窮民町人別之分御救入用、町會所積金𢌞を以取計候分、書面之通ニ御座候、依之申上置候、以上、

未〇弘化四年八月

火災救恤

〔武江年表二〕明暦三年正月十八日、乾大風、未刻より本郷五丁目裏本妙寺より出火、〇中略此類燒萬石以上の御屋敷五百餘宇、御旗本七百七十餘宇、但し組屋敷數をしらず、堂社三百五十餘宇、町屋四百町、片町八百町、燒死人十萬七千四十六人といへり、依て本庄に二町四方の地を給ひ、非人をして死骸を船にて運しめ、塚に築て寺院を建て國豐山無緣寺回向院と名づけしめ給ふ、去年十一月より、當年正月に及ぶ迄、雨更になし、二十一日に至て大雪降、米價一時に登揚して、貧民の困苦甚しく、道路に悲泣す、正月廿三日より七日の間、火災に逢ふて飢餓に及ぶ輩へ、所々に於て粥を給はり、又町中へ銀子壹萬貫目金にして十六萬兩、間口一間に三匁壹分ト、銀六匁八分ヅツといふ、を下し給はる、囚獄の罪人を、火事の時放たるゝ事は、この時より始れるよし、むさしあぶみに見えたり、

〔享保集成絲綸錄三十九〕享保八卯年正月

一於町中、輕き身上之者、火事に逢候て、當日を送り兼、及渇命可申體之者有之候はゞ、訴出、前廉に帳面に記置可申候、然らば火事に逢候度々、幾度にても妻子共御救可被下置候事、

但帳面に書置候以後、身上取直し候歟、又は他國江も參、或は奉公ニ出候類有之ば、其段訴出、帳面消可申事、

右之趣相心得、名主家主五人組申合、相互に致吟味、書面之通之者有之候はゞ、早々可訴出候、若打捨置、脇ゟ相知候はゞ、可為越度候、以上、

一白米四百九十五石四斗三升五合

金千四百三拾壹兩貳分、永百四文壹分、

内

白米百五拾貳石七斗七升五合

是者出水場難儀之もの共江、一日一人ニ付、三合宛之當りを以、去午七月九日ゟ同十七日迄、延人數四万ア千三百七拾五人、助船江乘來候もの共江、壹人ニ付、壹合五夕宛之當りを以、延人數六百八拾四人、并助船上乘之者船頭共江壹人ニ付、貳合宛之當りを以、延人數三千三百拾貳人、握飯ニ而相渡候分、

金貳百四兩三分、永六拾八文五分、

是者右同斷ニ付、町會所内江焚出小屋取建、入用焚出し方握飯持運人足、并窮民江御救米相渡候節、計立人足賃、其外品々買上物代之分、

金貳百六拾四兩、永百八拾九文六分、

是者右同斷、掛役人見廻之節、乘船并助船握飯配船賃錢之分、

金九拾貳兩三分、永百六拾九文壹分、

是者右同斷、助船江乘參候町人別之もの、江戸宿江差置候窮民六百六拾九人、七月九日ゟ同十七日まで、賄代并江戸宿共江手當、右窮民之内、病人療治致候醫師江藥代并出產之もの取揚候者江手當遣候分、

白米三百四拾貳石六斗六升

錢五千六百五拾貳貫九百文

此金八百六拾九兩貳分、永百七拾六文九分、

金貳兩三分、銀三匁三分三厘、（右佛船其外江相用候新規御用幟五拾本井桿之代）

金貳兩三分、銀七分、（高張挑灯拾五張、弓張同六張、下ケ挑灯四張新規其外張替、排雨覆等之代、）

金七兩貳分、銀七匁五分三厘、（同断繋下ケ挑灯、胴彩繋船、其外江相用候蠟燭代、）

金壹兩三分、銀四分五厘、（大川橋下之方繋船、并流シ綱等にて相用候竹、縄、藁、綱、苫、浮ケ木、杉丸太等之代、）

金三兩三分、銀拾三匁三分五厘、（両國橋西側、中杭貫根杭流失跡仮養御入用、）

金三兩三分、銀壹分五厘、（同橋芥留杭、其外出水中手當縄、土俵、并損料杉丸太等之代、）

午六月廿一日ゟ七月十六日迄

金拾八兩三分、銀六匁、（同橋其外江水防ニ付、壹夜相詰候出役之もの辨當代、但人數千百三拾壹人分）

同月廿八日ゟ十月十四日迄

金拾四兩壹分、銀壹匁八分、（鯨船水主辨當代但人數千四百貳拾八人分）

右之通御座候、以上、

午十二月〔〇中略〕

竹内清太郎　印

町會所掛

未八月五日、伊勢守殿江林阿彌を以上ル、

出水場窮民御救入用高之儀申上候書付

御届

町奉行　遠山左衛門尉　印

町奉行　鍋島内匠頭　印

勘定奉行　石河出雲守　印

勘定吟味役　羽田龍助　印

去午六月下旬ゟ下谷、淺草、深川、本所邊出水之場所、窮民共御救筋取計候諸入用、左ニ申上候、

金貳拾三兩壹分
〆　銀貳拾七貫九百九拾匁
錢七拾貫百三拾四文
都合金五百兩貳分、永四拾文、
右之通御座候、以上、
午十二月

出水ニ付、兩國橋水防人足賃、其外御入用調書、
金貳百貳拾貳兩貳分
銀三匁三分壹厘
内
午六月廿九日ゟ七月十二日迄
金六拾貳兩、銀四匁、　兩國橋水防人足賃　但壹人銀貳匁ツ　人數千八百六拾貳人分
同七月二日ゟ同十二日迄
金八拾四兩　兩國橋江流掛候もの引除方、游艇船水主四人乘賃銀、　但壹艘銀貳拾四匁宛　貳百貳拾艘分
同七月三日ゟ同廿日迄
金五兩壹分、銀八匁、　右同斷、大川橋川下江繋置候船、并碇流シ綱揚方等ニ相用候分、共船床賃銀、　但壹艘九匁五分宛　三拾六艘分
同月三日ゟ同十二日晝時迄
金九兩貳分、銀拾匁、　右繋船水主賃銀　但壹人晝夜銀四匁宛　百四拾五人分
同月十三日ゟ同廿日迄
金五兩貳分、銀八匁、　右繋船廻し方引拂、并碇流レ綱、運送傳馬船貳拾艘賃銀、　但水主壹人銀貳匁宛　百六十九人分

右之通ニ有之候間、前々類焼御救小屋内病人江爲相用候薬代之振合を以、書面之通薬代渡方取計申候、此段申上置候、

午八月〇中略

出水ニ付、助船并水防人足賃其外御入用調書、

午七月三日ゟ同十六日迄

一町船千七拾艘　此賃銀弐拾七貫九百九拾匁

内

大傳馬船六百四拾四艘　貫銀拾九貫三百弐拾匁　但水主五人乗壹艘銀三拾匁宛

同船百六拾七艘　同四貫八匁　但同四人乗壹艘銀弐拾四匁宛

小傳間船弐百五拾九艘　貫銀四貫六百六拾弐匁　但水主三人乗壹艘銀拾八匁宛

同七月朔日ゟ同十日迄

一金拾六両三分　日本堤水防人足三百三拾五人賃銀　但壹人銀三匁宛

同月朔日ゟ同十六日迄

一錢四拾八貫七百五拾弐文　同断并助船其外ニ相渡候蠟燭代

同月八日ゟ同十五日迄

一錢拾四貫六百弐拾四文　助船江引揚候人數之内三百五十壹人江爲給候握飯香物代　但壹人錢四拾文宛

同月三日ゟ同十五日迄

一錢五貫六百七拾文　助船江相用候高張挑灯雨覆等之代

一金六両弐分
　錢壹貫八拾文　助船江相用候高張挑灯并弓張挑灯之代

理ニ有之、水難之方は日合有之、住居向手入等いたし候程之儀ニ候得ば格別、最初之水引落、又候無程水押上候迄之儀と見候時は、格別難儀之筋も有之間敷哉と奉存候間、再度之處は不相用、一般ニ前書申年之振合を以、床上之分は、白米三升、錢三百文、床下之分は獨身者江錢三百文、貳人暮以上は錢貳百文ツヽ、三才迄之小兒は相除キ、四才以上ゟ家内人別ニ應じ、御救被下可然哉ニ奉存候、尤此後追々願出候分も御座候得ば、糺之上不及伺、渡方取計、總人數之儀は、追而申上候樣可仕候、此段相伺申候、

但向後御救米不被下内、猶又水押上候分、ならびに床下之分江御救被下方等、都而本文之趣を以取計候樣可仕と奉存候、

午七月　〇中略

午八月廿二日廻し濟　〇中略

去月中、郷宿江差置候水難窮民共之内、病人等江手當爲致候服藥、其外貼數取調候處、左之通、

小傳馬町三丁目町醫　原田貞齋

一藥數百五拾壹貼

内　煎藥百三拾壹貼　丸藥貳拾包

代銀三拾七匁七分五厘　但壹貼ニ付都而銀貳分五厘宛

神田仲町壹丁目同　福光順甫

一同百九拾三貼

内　煎藥百八拾貳貼　丸藥九包　目藥貳貼

代銀四拾八匁貳分五厘　但前同斷

合銀八拾六匁

文化十四丑年七月、床上迄同斷、　壹人ニ付白米五升錢五百文

床下迄同斷　壹人ニ付白米五升錢貳百文

文政五午年、床上下ニ不拘、　壹人ニ付白米三升錢貳百文

文政六未年七月　前同斷白米三升錢三百文

同年八月　前同斷白米錢同斷

文政七申年八月、床上迄押上候分計、　壹人ニ付白米三升錢三百文

同年八月閏八月兩度、床下迄水押上候分、　獨身者江錢三百文　貳人暮以上江同貳百文

是は床下之分ニ付、不被下旨最前被仰渡候處、同店之內ニも床低之分は、床下床際迄も水押上、同樣難儀いたし、床下之分不被下候而は騷立可申旨、名主共ゟ强而相願候ニ付、御評議之上、依願被下候筋ニ無之、度々之出水ニ付、格別之譯を以、此度限り被下、向後は床下之分は不被下旨被仰渡候、

右之通、區々ニ有之、尤右は出水之多少ニ寄候儀とは乍存候得共、右體床上下ニ不拘被下候儀度度有之、殊ニ近來御救筋之儀、厚く御世話被爲在候折柄ニも御座候間、床下之分ニも被下候方ニ可有之哉、尤今般之儀は、最初出水之節共、兩度床上迄水押上候分有之、右者格別難儀ニ可有之候間、文政七申年御救被下候節之員數よりは、相增被下候方ニも可有之哉とも乍存候得共、水難ニ付御救相願、米錢不被下候內、猶又水押上、再度水難之廉ニ而御救被下候先例無之候間、猶勘辨取調候處、類燒いたし候もの他江店替いたし、又候間もなく類燒いたし候而も、先ニ類燒之方ニ而、御救相願調中に候得ば、後之類燒町々ゟ御救相願候人別之內、名前相除差出候趣ニ而、右者支配名主之取計迄之儀ニ而、御評議濟等も無之候得共類燒之方は、右體之仕來ニも有之、左候迚、仕來を崩し候儀も不容易儀ニ而、殊火災之方は其次第ニも寄候得共家財等其時々燒失いたし候道

一町々江水押上ゲ候程ニ候はゞ、見計座人御用達代年番名主之内壹人爲乘組、爲相救候樣可仕候、且兩御組同心之儀者、最寄を分ケ差配致し、吟味方、御勘定方、兩御組與力之儀も見計、遣配致し候樣可仕候、

一水數日床上江揚り、實ニ飢ニ可及程ニも相成候はゞ、壹人三合ヅヽ之積を以、人數見計、握飯相仕立、前書同樣之手續ニ而、及飢候者共江相渡候積、

一救船を以相助候者共、可立退身寄も無之旨申立候はゞ、少人數之内は馬喰町三分、御代官江申談、郷宿江入置、入用は追而町會所ゟ差出、人數相增候はゞ、米澤町邊江假小屋補理差置候積り、

右之通取計候はゞ、御救筋行屆可然哉、尤享和度以來、出水之度々、御救米錢は被下置候得共、町會所起立以來、出水ニ付握飯相渡候例無之、天明度出水之節は、町方御役所御取計ニ而堺町葺屋町兩芝居茶屋江被仰付、焚出握飯被下置候ニ付、其節之取計ニ准じ、前書之通相伺申候、

午七月　○中略

午七月廿二日廻し濟　○中略

今般之出水ニ付、御救被下方之儀、文政七申年八月、水難御救被下候振合を以、床上江水押上候分計、壹人ニ付、白米三升、錢三百文づゝ被下候積、御廻し相濟候處、下谷通新町、幷本所石原町外三ヶ町名主共ゟ、床上床下之無差別御救被下候樣仕度旨等、別紙之通、品々歎願申立、何樣同店之内にも、床低之分は水押上、床高きものは、床下又は床際迄水押入、床之高下ニ而、一ト長屋之内ニも不同有之、其日稼困窮之者共稼出來兼、難儀いたし候は同樣ニ候間、御救方不同相成候而は、一同氣請ニ拘り候段も無餘儀次第ニ相聞候間、猶其以前之分をも取調候處、左之通、

享和二戌年七月、床上迄水押上候分、　壹人ニ付白米五升 錢壹貫文

床下迄同斷　壹人ニ付白米五升 錢五百文

小印 遠山左衞門尉 町奉行

同 鍋島內匠頭 町奉行

同 石河土佐守 勘定奉行

同 羽田龍助 勘定吟味役

大川筋出水、東緣者勿論、西緣江も所々押開き、橋々も危く、本所邊所々床上迄水押上、立退方ニも差支、難儀いたし候もの有之候趣ニ付、不取敢昨夜中、町會所掛りより申付、御救船拾艘差出申候、尤右之內貳艘者、町方同心共爲乘組、竪川通井小名木川通り江乘入、本所邊水難之樣子爲見屆、及飢候ものも有之候得ば、早速握飯焚出方爲取計候積ニ御座候、依之此段御屆申上候、以上、

六月晦日 中〇略

小印 竹內清太郎

町會所掛

午七月六日廻し濟

小印 左衞門尉

同 內匠頭

同 土佐守

同 龍助

此度出水ニ付、追々申上候、本所、深川、淺草邊川筋江救船差出、町方下役井座人ども見分爲致候處、床下又者床上江上り候場所も有之候得共、水引口ニ而、食もの其外差支之儀も無之候由、且大川通之儀も、水増減無之趣ニ付、先救船差出方之儀は見合候處、利根川通武州埼玉郡本川俣村地內堤切所出來ニ付而者、西葛西領邊水開ニ相成、水下町々出水可致奉存候間、猶不取敢救船三拾艘用意仕、川々增水之樣子爲見屆、下役井座人共差出申候、右體之場所切所出來候上者、水之淺深難計候間、取計方之儀、兼而左之通相伺申候、

〔蜘蛛の糸巻〕火事

同年〇天明六年五月半比より七月迄霖雨晴日なく、道路田の如し、諸人洪水をおそれしに、果して七月の末稀有の洪水にて、猿ケ股の堤きれて八十餘村を流し、溺死數を知らず、深川の大家は軒を浸し、小家は棟を越す、御藏前通り船にて通行、大橋東橋も追々洪水にて崩れ、兩岸通路たえしゆゑ、親族水災を案じ、人心安からず、官船數艘溺を助け、あるひは屋の棟に露命饑渇を救ひ兩國廣場、馬喰町馬場、二ケ所に小屋を作り、朝夕の食を賜ふ、

〔見聞小說十一集〕丙午丁未　　著作堂

この年〇天明六年七月十二日より、雨のふりそゝぐことおびたゞしかりしに、十四日より十六日に至りて、又洪水のわざはひあり、まづ江戸は、本所深川、木場、洲崎、竪川筋、牛島、柳島のほとりの洪水いへばさらなり、下谷、淺草、外神田、いづこも水に浸されぬはなし、〇中略されば十七八日のころよりして、水見まひの良賤奔走しつゝ、辨當偏提、坐具調度をおもひ／＼に齎らしてゆくもの、ちまたに陸續たり、又關東御郡代伊奈氏のうけ給はりて、馬喰町のあき地に假屋をしつらひ、水厄のものを入れおかせて、日毎に粥を下されけり、

〔武江年表八〕弘化三年六月、〇中略此節洪水未だ減せず、七月にいたり彌大雨降、七日八日より再水增して、大川水勢すさまじく、大川橋、新大橋、永代橋損じて往來止り、兩國橋のみ通行なれり、本所邊所によりて水軒端に付く、本所の士民夜中俄に江戸をさして逃來る人有、其混雜いはんかたなし、夫より船持に命せられて、日々助船數艘を出されてこれを救しめらる、此輩馬喰町の旅人宿に預られ、やがて住所へ歸らしめ給ふ、

〔出水御救一件〕午〇弘化三年六月晦日、伊勢守殿江友阿彌を以上ル、

大川筋出水ニ付、御救船差出候儀申上候書付、

三好助右衞門

右兩人、御施行米石積り焚出申付候、

御施行割渡役　樋口杢之助

白銀三枚宛三人　向方　田邊佐左衞門

同貳枚　同　秋山兵藏

右四人御施行割渡役相勤、秋山兵藏ハ中途より病氣ニ而不能出候ニ付、貳枚被下置候、

兩國橋御普請奉行ニ而、御施行役相勤候、

白銀五枚宛　由比彌右衞門

向方　高山友右衞門

〔武江年表六〕安永九年六月、大雨降續き、廿六日より、江戸近在、利根川、荒川、戸田川洪水、村々人家を流し、永代橋新大橋落る、助船を以此難を救せらる、

天明六年五月の頃より雨繁く、隔日の樣なりしが、七月十二日より別て大雨降續き、山水あふれて洪水と成れり、十三日十四日より牛込小日向出水、石切橋邊武家方壁際迄、人々乳の丈も水あり、小石川邊尤洪水にて、柳丁、戸崎丁、家潰れ、江戸川水勢すさまじく、橋の流たるも有、神田上水掛樋危く、大勢の人夫を以て防がしむ、後には、樋の上壹尺程水乘りしが、十七日十八日頃より少しツゝ減じたり、目白下山崩れ上水樋つぶれ、水道一月の餘絶たり、昌平橋筋違橋危く、和泉橋は假橋、板流れたり、十五日より大川千住出水、小塚原は水五尺もあるべし、千住大橋往來留り、掃部宿軒迄水あり、本所深川は家屋を流す、平井受地邊一丈三尺とも云、大川橋兩國橋危く、十六日往來留る、十七日晝、新大橋中の間四間流失、永代橋廿間程流失、隅田堤三間程、貳ヶ所押切、男女江戸へ向ける、兩國橋を流り過來り、淺草邊は船にて往來せり、吉原は床へ水上る、雜司ヶ谷大水にて怪我人多し、四谷牛込邊は高き所なれども一兩日水たゝへて難儀せり、其餘石垣土手の崩れしは數ふるにいとまあらず、官府よりは助船など出し危難を救しめられ、十八日兩國廣小路へ御救小屋を建られ、窮民救せらる、

等潰廻、足弱之者乘助候由ニ候間、遂吟味、早々可被申付候、

八月

〔德川禁令考二十八救恤使〕寛保二年戌八月朔日御用覺帳書拔

一寛保二年戌八月朔日、大風雨ニ而、同三日より本所深川滿水ニ付、同四日より扶ケ船被仰付、小網町、靈岸島、鐵炮洲、佃島より差出ス、扶ケ來り候者共、新大橋西之廣小路江上ゲ置、小屋相懸ケ、同六日より御施行被下候、

一新大橋より船ニ積、御施行相渡候分、人數拾万五拾八人、此石白米百九拾三石貳斗、但壹人ニ付、粥ハ壹合積り、飯ハ貳合積り、

一兩國橋より船積、御施行相渡候分、人數八万六千貳人、此石白米百六拾六石、但壹人ニ付粥飯右同斷、

人數拾八万七千人

石高三百五拾九石貳斗

右ハ六日より同廿三日迄、日々御施行相渡申候、御施行積候船、鶴武左衛門方江被仰付、日々新大橋兩國橋江差出シ、出役同心宰領ニ而、本所深川出水之場所、町人共江御施行配り遣、

一同廿七日、兩御頭御褒美黃金幷御時服御拜領、

一同廿八日、本所見廻り役、幷御施行割渡出役與力下役同心共ニ、御褒美拜領いたし候事、

一出役與力ハ、同日御懸り之御老中松平左近將監殿、本多伊豫守殿、加納遠江守殿江御禮ニ罷越候、

當戌年本所見廻り役

安藤源助

白銀拾枚宛　向方

米有之間敷候、先近郷江計成共淺草御藏より米を船ニ積廻させ可申事、

一右仕方ハ、村々大小、人數之多少不及吟味、御料私領わかちなく、米相渡させ可申候、半左衛門并江戸廻御代官ニ申付、手代共船ニ乘せ、御米役船ニ五六俵ニ而も積せ、一ヶ村江米三四俵宛成共、名主江渡させ可申事、

一右船大成船、俵數積候而ハ、船重く川筋參間敷候、五六俵拾俵迄積候程之船可然事、

一川筋有之所ハ勿論、常々船通路無之所も、此節ハ船可參候間、船參次第手分致、淺草川綾瀨川又ハ中川行德川より積、小川船之可入所より乘入、村々配候作略可申事、

一川筋通路無之所、此節葛西筋ニハ多くは有之間敷候哉、左樣之所ハ水も深無之積ニ候間、夫江ハ米渡候ニ及間敷哉、

一右隨分早不申付候而ハ無益ニ候、此上四五日も過可申候、又此上四五日も過候得バ、飢候者ハ存命ニて有之間敷候間、此所を第一ニ心得、自然二重ニ相渡候而も、其分ハ不苦候、今日中よりも配、明日明後日迄ニ配相濟候樣可仕事、

一水附候村々も退場有之、外村江成共退候ハヾ、左樣之村々江ハ相渡ニ及間敷候、殊ニ淺草川よりも此方之村々、利根川より向之村々ハ、たとへ村江水付候而も、後ニ高ミ有之間ヶ樣之村々ハ省、實ニ食物之手當有間敷所江遣候樣、御代官共江可申聞事、

右之通、伊奈半左衛門江申渡、半左衛門手代計ニ而不足ニ候ハヾ、外御代官江も申渡、無遲々樣可被申付候、

八月

御勘定奉行江

本所筋出水之由ニ候、先年猿ヶ股切、出水之節、本所邊水押上、其節鶴飛驛江申付助船差出、本所

天保八酉年五月

御勘定奉行江

去申年、諸國違作に付ては、米穀其外とも拂底にて、御府内市中末々之者、及難儀候者不少趣ニ付、御救として、淺草御藏において、御米貳万俵被下、末々之者江割渡候樣去月中申渡、右御米町年寄共に爲請取、割渡遣し候處、此節之樣子にては、當年諸國共麥作は出來方宜、取入穀數も多可有之哉之趣相聞、おのづから米價も追々引下り可申哉に候得共兎角食物無く、差當り末々之者、及難儀候者多分有之趣ニ付、猶又爲御救助、淺草御藏において、御米貳万俵被下候間、町々名主共請取、各組之者をも差添、末々之者江割渡遣し候樣申渡し、尤右御米請取方等之儀は、委細御勘定奉行江申談、諸事差支無之樣可被取計候、

右之通、町奉行江相達候間、可被得其意候、

〔武江年表四〕寛保二年七月廿八日より雨降續、八月朔日晝八半時より大風雨、夜通し止事なし、近郊大水溢り出、本所深川人家を浸し、大川通り水勢烈しく、兩國橋は御普請中にて杭を流し、永代橋新大橋損じ、隅田川土手切れ、葛西へ水押入、千住土手切れる、五日又利根川堤切れ、次第に水かさ増り、溺死多し、官府よりは御助船を出されて救はれ、小屋を建て食物を給はる、

〔德川禁令考二十八救恤使〕寛保二戌年八月

出水御救之儀ニ付御書付

御勘定奉行江

淺草川綾瀨川堤押切、村々江入水候由、東葛西も同然たるべく候、隅田村寺島村邊ハ、淺草川之大堤ニ百姓共上居候由、近郷ニ地高成所有之候ハヽ、其所百姓共參可申候得共、東西葛西領一面之平地ニ而、淺草川中川、東之方ハ利根川之中ニ有之村々、少々之高みに上り存命候而も飯

ば曇り、或は朝降て晴れ、日中降て夕に止などして四月に成ぬ、四月朔日より八月十五日までの間おなじさまにて、快晴十日にみたず、○中略實に古今未曾有の凶歳也、おほやけより命ありて、裏店住の町人、男子に白米貳升五合、錢四百貳拾四文、老幼婦女の類は、白米壹升五合、錢貳百四十八文たまはりき、江戸中すべて三拾貳万二千人餘にて、米五千石餘、錢拾三万貳千貫許といへり、裏店住にても、下女下男弟子なとあるものにはたまはらず、表住の者は、下女下男弟子などのなき工商にても賜事なし、

〔安政見聞誌下〕抑遠き昔の事は諸書に出るといへども、當代の老人猶定かに知るものなし、まづ三十年來の事は眼前に見る所なれば、諸人疑ふ心も有べからず、前代にいまだ聞かざる義の粗を爰に記す、○中略同○天保七年諸國不作、三月頃百文ニ付米貳合八勺、飢死もの尤多し、是より前七十五年以前、天明三年には、百文ニ付三合、又同七未年は、百文ニ付四合五勺、其時節には諸所米屋を打毀、騒亂多かりし由なり、然るに右天保未年は、稲妻、阿武松にて角力は大入大繁昌、又芝居は中村歌右衛門の名殘狂言にて大當り、更に飢饉の體にあらず、是全く公より御救の手厚なるに寄所なるべし、○中略同九戌年諸國不作、百文ニ付米四合八勺、御救出る、

〔天保集成絲綸錄百六〕天保八酉年三月

御勘定奉行江

去申年、諸國違作に付ては、米價其外とも拂底にて、御府内市中末々之もの共及難儀候に付、厚く御世話も有之候得共、次第に陷困窮候者不少趣ニ付、御救として、淺草御藏において、御米貳万俵被下候間、町年寄共江申渡、右御米爲請取、末々之者共江早々割渡候樣可被取計候、尤御米請取方之儀、御勘定奉行江可被談候、

右之通、町奉行江相達候間、可被得其意候、

此内、二千五百人遊女　但禿共六千三百人ノ内

五万三千四百三十八人　出家

七千二百三十餘人　山伏

三千五百八十餘人　神主

御救金　貳万両　町々父母妻子壹人前三匁二分ツヽ頂戴

同米　六万俵

右之通、町總人數へ被下之、

天明七未年五月

總人數〆百三十六万七千八百九十餘人

同六月朔日御書付出ル

百俵五人扶持以下へ御救米出ル

〔武江年表八〕天保七年、今年四月より日々雨降、又曇天にて、五月に至り霖雨止む時なく、菜蔬生る事なし、嵯峨開帳詣人少く、看せ物あまた出しけれども見物なし、両國橋畔納涼また寂寞たり、七月十八日、二百十日に當り、旦より大風雨家屋を傷損す、大川通出水あり、是より米價一時に登揚し、夫のみならず、八月朔日、先に倍せる大嵐朝より烈しく、屋宇を破り、樹木を折り、怪我人あまたあり、近在は水溢る、是によつて米穀彌乏しく、諸人困苦甚し、七月より貧民御救として米錢を賜はり、又十月にいたり、筋違橋御門外より和泉橋迄の間河岸通りに、御救の小屋を營てこれに居らしめ、食物を賜はる、

〔松屋筆記八十四〕天保七年霖雨及飢饉

天保七丙申年三月十九日壬寅より雨降出て、廿九日までの間、快晴僅に四日なり、其外は降ざれ

救被下、（曲淵甲斐守 牧野大隅守）四日市に小屋かゝり施行場とす、壹人に玄米貳合五勺、豆貳合五勺、銀三兩貳分づゝ、小兒七歳以上迄御救被下、

〔一話一言 七〕同年（○天明七年）御救金米書付

今度御救に付町數御改

一天明六丙午年十月廿八日改人別

江戸町數

一二千七百七十（二イ）餘町　但新地寺地とも

同家數

一貳拾万八千（五百イ）餘軒（二十八万八千餘軒イ）　但表間口計

同人數

一人數百貳拾八万五千三百（餘イ）人

内

五拾八万七千八百餘人　男（男六十九万五千餘人イ）

六十九万七千五百餘人　女（女五十九万三百人イ）

外ニ

三千八百四十餘人　座頭

一万四千五百餘（十三イ）人　吉原人數

内

八千二百（餘イ）人　男（六千三百人イ）

六千三百（餘イ）人　女（八千二百人イ）

殘更に仰下され、雁皮紙に刷印せしめて大內にも奉られ、日光山の御宮にも進薦せしめらる、救荒の民政を重んせらる、盛慮の一端、これにてもおしはかるべし、

〔翁草二十〕金銀米穀之事

元祿十二年己卯の秋、八月十五夜に大風有、米穀熟せざりしかば、其年の冬、大倉の米價、百苞三十五石を金五十兩に被定、則金一兩には米七斗也、〇中略辛巳〇元祿十四年の冬に至て、都下に飢人多く、道路に餓死する者有、憲廟〇德川綱吉則有司に命じて、本所の鄕に廣舍を作り、每日數十石の米を粥に煮て、飢民に與へしめ給ふ事、百餘日に及ぶ、翌年の春に至りて、飢民やうやく少く成ぬ、

〔十三朝紀聞四中御門〕享保十七年九月、自夏西南諸道大蝗、西海、山陰、山陽尤甚、大飢、於是幕府移關東粟、貸西國諸藩、以賑其民、　十八年二月、西南諸道登飢、餓死者十六萬九千九百餘人、於是幕府又人發、每男日給米二合、女一合、以濟億萬飢者、

〔武江年表四〕享保十八年七月、飢饉に付御救ひ給はる、

〔十三朝紀聞六光格〕天明五年九月、琉球大飢、幕府貸穀萬苞、金萬兩于薩摩守島津重豪、以賑之、

〔蜘蛛の糸卷〕うちこはし

翌年天明七丁未年五月、玄米兩に二斗五升、麥八斗、大豆六斗、同月十日比、白米百文に付三合五勺、豆七合、同廿八日比、百文に三合、御藏米三十七石に金二百五兩、一兩に一斗七升、錢兩に五貫二百、兹にいたりて米穀動かず、米屋ども江戶中に閉す、同月廿日の朝、雜人共赤坂御門外なる米屋を打ち毀す、〇中略

市中の人數

同月〇天明七年五月廿日の蜂起より、廿一日廿二日廿三日廿四日まで、江戶中諸商人戶をとざして業をせず、依之米はさらなり、諸人日用の品に困る、廿五日初めて戶を開く、町奉行に公命ありて御

之、設場于北野四條磧五條磧諸處、與粥及錢米、自三月至五月而止、

〔視聽草十集四〕延寶飢饉

當年延寶三年天下大飢饉にて、金子壹兩に米五斗宛是を賣、錢百文には黑米壹升壹合なり、是に依て、人民飢にのぞんで死する族多かりし、其趣上に聞し召され、御慈悲を加へられ、柳原の土手の下に小屋がけ仰付られ、江戶中の貧人ども其所へ呼び集め、施行粥を被下ければ、皆々悅び來りけり、京都にても、四月九日より北野七本松と四條河原にて、江戶のごとく貧人共に粥を給はりし、誠に大慈大悲なりし、京都へ御借米二万俵いでけり、但し表壹軒に付、四斗九升九合七才宛にあたるなり、尤江戶町中へも拜借米仰付らる、然るといえ共、四五年米故、俵より出し候て升にてはかり候へば、過半ふけ候へ共、皆米を大切にいたし候事ゆへ、臼などにてつき候へば、古米ゆへ、ことの外へりおほく候間、其まゝ黑米にて食しけるとなり、御惠みの程、有がたく奉存と也、

〔有德院殿御實紀附錄四〕享保のはじめ、万石の人々に領地たくはへの多寡を御尋ありしに、いづくも太平久しく、奢侈風をなし浮費多きゆゑ、おのづから府庫むなしく、荒政の備おろそかなりしかば、嚴しく御かうじ蒙る者少からず、しかるに同十七年春より霖雨ふりつゞきて、畿內よりはじめ、西國中國にわたり蝗災あり、秋にいたり餓死するもの百万人に及べりとぞ、公にはあらかじめ淫雨をはかりたまひて、ことしの凶荒をしろしめされければ、賑救の御政すみやかにいたらぬくまもなく、公料の地には飢民さらになかりしとなむ、これより先、坂城の府庫もむなしくなりしを、宿老水野和泉守忠之に命せられ、さきだちて其備有しかば、こたび賑救の便を得られしとなり、私領のかねて備とゝのはざりしは、餓莩おびたゞしく、後に御咎蒙りし人もすくなからず、また京大坂をはじめ、諸國の富商豪民等御仁政に感動し、私に金銀米穀分限に應じて、ほどこし救ひけるものもありしかば、其名をしるし仁風一覽と名付て梓行せしを偶御覽ありて、

寛永十九年壬午飢饉　是より三十三年の後
延寶三年乙卯同　五十七年經て
享保十七年壬子同　五十二年經て
天明三年癸卯不作
天明六年丙午飢饉　四十八年經て
天保四年癸巳同　此年八朔大風雨

九月頃より白米小賣百文に五合五勺、御救米兩度、翌年春六合五勺、北國不毛餓死多し、然るに江戸の窮民に菜色なかりしは、御德澤に浴する故なり、仰ぎこうむるべし、國恩一日も忘るべからず、

案ずるに、荒凶は大方五十年を一期とす、前記をおもひはかるに、飢饉の備はなしたきものなり、一人三度の飯の一箸を米につもりて五十年貯へおかば、荒凶の時、一家安心はさらなり、他人をも救ふべし、是何のざうさもなき事なれども、吉に居れば凶をしらず、成すこと安くして、成る人を聞かず、

〔大猷院殿御實紀 四十九〕寛永十九年二月、すべてこの月より、五月に至るまで、天下大に飢饉し、餓莩道路に相望む、また身に一衣覆ふ事もなし得ず、古席をまとひて倒れふすもの巷にみちたり、よて町奉行をして各その郷里をたゞし、領主代官に命じ、飢者をたすけて、その故郷にかへさしめ、その外は市中に假屋を設け、旦暮粥をつくりて、飢者に施行せられしとぞ、〔家譜、寛永系圖、天享東鑑、〕

〔武江年表 二〕寛永十九年三月より七月に至り、天下大飢饉米價貴騰し、死人多し、御救米錢を給はる、

〔十三朝紀聞 [illegible]三 元〕延寶三年正月、天下大飢、餓莩載路、京師棄兒、空屋比比而在、大將軍〇徳川家綱孝、勤賑

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年（○貞永元年）十一月十三日、凡去今年飢饉、武州（○北條泰時）被廻撫民術之餘、美濃國高城西郡大久禮以上千餘町之乃貢、被停進濟之儀、遣平出左衞門尉、春近兵衞尉等、於當國於株河驛被施于往反浪人等、於尋緣邊上下向輩者、勘行程日數、而施旅粮、至稱可止住由之族者、預置于此庄園之間、百姓被扶之云云、

〔兎園小説十一集〕丙午丁未　著作堂（○瀧澤馬琴）

家伯兄羅文居士の錄中に、近世荒饑路考の一編あり、騰寫すること左の如し、

寛永十九壬子年、春より夏に至り飢饉餓死多し、　今年（○天明七年）迄百四十六年

延寶三乙卯年、天下饑饉餓死多し、將軍家下命、從三月至五月、於北野七本松原四條河原、貧人を集、粥及米錢施行、　今年迄百十四年

天和元辛酉年十一月、江戸飢饉、爲御救米三萬俵被下之、　今年迄百三年

同二壬戌年二月、飢饉餓死多し、三月洛陽大雲寺、誓願寺、法輪寺、此外於諸寺錢施行、又餓死の爲一七日施餓鬼供養、於北野松原從將軍家粥施行、　今年迄百二年

元祿九丙子年、自夏至秋、中國稻虫生す、西國大名衆拜借、餓民御救、　今年迄九十二年

享保十七壬子年、關東五穀不熟、依之窮民御救、　今年迄五十四年

寶暦六丙子年、五穀不熟、窮民御救、　今年迄三十七年

天明三癸卯年、關東五穀不熟、江戸及奥州飢餓、此節五千俵田沼山城守に被下之、信州淺間山燒崩、溺死多し、窮民滿道路、依之被命於領主、以鐵砲追之、或ハ打殺之、　今年迄五年

同七丁未年、自春至夏、江戸及諸國飢饉、至五月白米三合代錢百文に及ぶ、都下の俠者及餓民等、江戸中の米屋を破却闕遺無し、京大坂も亦如此、至秋鎭る、追日爲御救米て、直段下直に被下之、

〔蜘蛛の糸巻〕追加　凶荒年表　永代橋崩る

凶年救恤

二月

享保八卯年七月

一先達て相觸候小石川於養生所に、極貧之病人御扶持等被下、并通ひ病人共養生被仰付候に付、逗留之病人は支配所江訴候上、名主方にて致吟味病人差遣候處、心得違之儀も有之哉、又ハ支配所江訴候事を大切に存候歟、彼是世話致し候儀を六ヶ敷存、願人有之候ても、家主名主等迄、其分に打捨置候樣に風聞有之候、依て向後支配所江相願候儀も無用可致候、家主等にても、相店之者、店請人成共一人、病人に相添、名主亦は名主無之町ハ、月行事判鑑を養生所江直に持參可致候、役人吟味之上、長屋江入置養生可申付候間、壹町切に名主家主致吟味、病人共養生所江可差遣候、本道外科眼病之御醫者衆迄被仰付、毎日相詰候て療治有之間、地借店借之者迄茂念を入可申聞候、以上、

七月

享保十巳年十月

今度聖堂前堀江、八兵衞と申者老女を突落し候處、止り居聲立候時、辻番人引上ゲ養育いたし置、御目付江相達候、右老女町奉行江相渡候處、病氣故溜江遣し置候内相果候、向後無宿非人之外、右類之病人等ハ、吟味之上小石川養生所江遣し、療養いたさせ候筈候間、其節之途吟味可申聞旨、御目付江申渡候間、可被得其意候、

十月

（吾妻鏡九）文治五年十一月八日甲子、葛西三郎淸重依被仰付奥州所務事、還御之時、不令供奉、所留彼國也、仍今日條々有被仰遣事、先國中今年有稼穡不熟愁之上、二品相具多勢、數日令逗留給之間、民戸殆難安堵之由、就聞食、平泉邊殊廻秘計沙汰、可被救窮民云云、

養生所

右之通可被相觸候

四月

〔享保集成絲綸錄 三十九〕享保七寅年十二月

一小石川傳通院前に罷在候小川笙船と申者、極貧之病人之爲メ、施藥院可被仰付哉之旨、目論見書付存寄申上候に付、段々御吟味之上、今度小石川於御藥園、病人養生所被仰付候間、町々極貧之病人、藥茂給兼候體之もの、或ハ獨身にて看病人も無之、又ハ妻子有之候得共、不殘相煩、養生不成者之類、右養生所江罷越、致逗留候て療治受可申候、尤療治之内は御扶持被下、其上夏冬之衣類夜具等に至迄、諸事不自由ニ無之樣に被仰付候間、其身步行し候ものハ格別、步行難成病人は、家主或ハ親類店請、又ハ相店之〇之下恐脫者字成共御〇相字恐脫類、御役所江可訴出候、吟味之上、名主判鑑を以、四ッ前後ゟ七時迄之内、養生所江可相越候、其段役人江茂申付置候事、

一養生所江晝計通ひ候て療治請度と存候者ハ、其所之名主申達、名主之判鑑を持、直に養生所江參、役人江相達、療治請可申候、是又役人江其段申付置候事、

但右之類江は、御扶持不被下候、養生所江參候刻限ハ、是又四ッ前後ゟ七時迄之内可相越事、

右之通相心得、町々にて療治請度者有之候ハヾ、養生所江可差越候、病人之儀、當分致世話候儀を六ヶ敷存、不訴出候樣に取計、差留置候類、追て相知れ候共、名主家主五人組可爲越度候、

十二月

享保八卯年二月

一小石川養生所江可遣病人之儀、先達ては看病人無之者計可差越旨相觸候得共、自今者、看病人有之候とも、又ハ寄子之類たりとも、極貧にて藥も給兼候體之者ハ可訴出候、吟味之上、養生所江可遣候間、其旨相心得可申候、

此節一統風邪流行ニ付、御目見以下之者共江御煎藥被下候、諸事享保二戌年之通相心得、可被取計候、

天保三辰年十月

覺

此節一統風邪流行ニ付、御目見以下之者共江御煎藥被下候、諸事文政四巳年之通相心得、可被取計事、

天保八酉年四月

大目付江

時疫流行候節、此藥を用て其煩をのがるべし、

一時疫には、大つぶなる黒大豆をよくいりて壹合、甘草壹匁、水にてせんじ出し、時々呑てよし、右醫遲に出ル、○中略

右之藥方、凶年之節、邊土之者雜食の毒にあたり、又凶年之後、必疫病流行の事あり、其爲に簡便方を撰むべき旨依被仰付、諸書之内より致吟味出也、

享保十八辛丑年十二月

望月三英
丹羽正伯

右は享保十八辛丑年、飢饉之後、時疫流行いたし候處、町奉行所江板行被仰付、御料所村々江も被下候寫、

右は當時諸國村々疫病流行いたし、又は輕きものども雜食之毒に當り、相煩難儀いたし候趣相聞候、天明四辰年御藥法、爲御救相觸候處、年久敷事故、村々にて致遺失候儀も可有之候ニ付、此度爲御救、右之寫、猶又村々江、領主地頭ゟ可被相觸候、

十六軒、此人數八百八十七万七千八百八十人、内男四百五十三万四千四百五十三人、女四百三十四万三千四百二十七人なり、右の内窮民八分通り、男三百六十二万七千五百六十二人、但シ一人ニ付白米五升ツヽ、十七万九千七百七十八石八升、兩ニ四斗相場にして金四十四万九千四百四十五兩ト銀四匁五分、女三百四十七万四千七百四十一人、但シ壹人ニ付三升ツヽ、十万四千二百四十七石四升八合、此代金二十六万六百十七兩二分ト、銀七匁二分也、盲人二千三百七十四人、米高百十八石七斗、此代金二百九十六兩二分二朱なり、

右四斗相場にして

代金總〆七十一万〇八百五十九兩二分、銀四匁二分也、

〔享保集成絲綸錄三十九〕元文五申年正月

疱瘡はやり候付、陰陽二血丸可被下候間、布衣以上、幷御目見以上之面々、望之者有之候はゝ、河野仙壽院、栗本瑞見方まで相願拜領可仕候、尤勤候者は、於御城仙壽院瑞見江申達候共可仕候、

但いまだ疱瘡不致子共大勢有之、餘慶〔[illegible]〕拜領致度者は、子共何人と申儀、兩人方江申達可相願候、

右之趣、向々江可被達置候、

〔武江年表六〕安永二年三月末頃より疫病行れ、人多く死す、（江戸中にて三月より五月まで凡十九万人疫死といふ、大方中人以上なり、）御救として朝鮮人參を給はる、

〔天保集成絲綸錄百六〕文政四巳年二月

口達之覺○中略

別紙

覺

猶格別難儀之分は、間もなく定例之通願出候とも、勝手次第之事ニ付、右ニ不ㇾ拘早々取調可ㇾ申出候、

右之趣、昨日於町會所、關所年番肝煎名主共江申渡候間、右之者共ゟ申通も可ㇾ有ㇾ之候得共、場所多人數之儀ニも候間、猶又其方共江申渡候申合不ㇾ洩樣、一統之名主共江申通じ、無ㇾ遲滯行屆候樣可ㇾ致候、

戌三月

享和三亥年五月

町會所年番

肝煎名主共江

町會所江申出候窮民御救願之儀、平常之通可ㇾ申立ㇾは勿論之儀、此節世上一統麻疹流行ニ付、難儀之旨を以、申立候分も多く有ㇾ之候得共、猶又心附行屆候樣ニ取調、是迄定式窮民御救願之振合を以、願出候樣可ㇾ取計ㇾ候、

右之通申渡儀ニ候間、總町名主共江、不ㇾ洩樣可ㇾ申通ㇾ候、

亥五月

〔武江年表 八〕文政四年二月中旬より風邪流行、賤民へ御救米錢を賜はる、

天保三年冬、風邪流行、賤民へ御救米錢を賜はる、

〔見聞雜錄 十二〕嘉永四辛亥歲

去ル極月中より、風邪人數多有ㇾ之ニ付、今般御公儀樣ヨリ、以御仁惠ヲ、諸人御すくひの爲、男は壹人ニ付白米五升ヅヽ、女三升ヅヽ、被ㇾ下置、其大數あら增、左に記す、

御府內四里四方、町數三千六百丁、右三十六町壹里にして凡百里なり、町家數百七十七万五千七

古事類苑

政治部九十二

下編

救恤下

〔天保集成絲綸錄百六〕享和二戌年三月

年番
名主共

此節一統風邪流行いたし、其日稼之もの共、別而難儀可致筋ニ付、御憐愍之御趣意を以、御救之儀被仰出候、仍之棒手振、日雇稼、其外諸職人ニ而も、其日稼之賃錢を取、家内扶助いたし候類之者、家内之内三歳迄之小兒は相除、四才ゟ人數江加入、風邪病人之有無ニ不拘、獨身之者は壹人錢三百文ヅヽ、貳人暮以上之者は、壹人貳百五拾文ヅヽ之積ヲ以、人數に應じ御救可被下候間、名主共支配限、幷行事持之分とも一同相調、明日ゟ柳原町會所江、凡人別書取調可差出候、尤右人別ニ引當、金ニ而直ニ可相渡候間、割渡方之儀は、可成だけは錢に而相渡し、增減有之候はヾ、追而持參、又は增シ受取之積ニ可致、右は御慈悲を以被仰出候事ニ候間、少しも無遲滯調之趣、書付を以申立、受取之渡シ方之儀、早々行屆候樣可致候、勿論右ニ而已泥ミ候筋には無之候間、格別困窮之類は、別段町會所江可申候、

但此度之儀は、臨時御救之儀ニ付、兼て困窮之者共調之上、たとひ此節定式之通、窮民御救願出、米錢受取候分も相除候ニ不及、勿論右體困窮ニ而、當時調中又は此度一統之御救受取候而も、

よく家をおさめ、ますく繁昌するもあり、衰へたる家を再興するもあり、又禮をとゝのへて迎たる女に家をやぶるもあり、善悪のかたはしをとらへていふは通論にあらず、悪養子に出合したる母の心になりて見よ、断滅の禍目前にありて、それを逐出しても断滅はおなじ事なれば、さもならず、恤倖をうけて老後安穏なるとは、雲泥の違ひなるべし、罪ありて流死したる人も、公罪或連累なれば、家系は断滅するとも、其妻子は恤倖をあたふるもあるべし、

千石取たる人の跡は、百人扶持と大略を定めて、一人に十人扶持にてよかるべし、大小ともに老弱一兩人なるは、親族の家に寄住するも多かるべし、此恤倖を持てゆけば、親族の顔つきよし、窮困を免かるゝのみにあらず、親族の勝手よきこともあるべし、とりかへ子といふもの、元より國禁なれども、今に絶ずと聞く、嚴禁あるべし、

ば、亡命日々におほくなるべし、それにて過惡を勸るやうになりゆくべし、故にこれもさしおく、但老年まで無事につとめて、子なくして死たる時、跡目なければ祿なし、殘りたる老弱饑寒に困むべし、是には恤俸あるべし、

恤俸の法、たとへば百石とりし家は十人扶持、大略を定めて老弱五人なれば、一人に二人扶持にて過不足なし、二三人なれば餘あり、六人以上なれば不足、上より餘るをとりて不足を補にて、大抵一人に二人扶持にて通行すべし、老女廢疾は生涯扶持なり、寡婦再嫁すれば其嫁するまで、女子は嫁年迄、嫁年過て嫁せざれば扶持をとゞむる、人數は年を經て、減あり增なし、其家に養女あれば其實方へ引渡すべし、偽て年をかくす者、養子を實子といつはるもの糺すべし、この株を買取、冒して恤俸を受るものは嚴禁あるべし、かへす方なくて同居養育を願ふものあるべし、是をゆるすとも恤俸はあたへず、

寡婦一旦恤俸をはなれて再嫁したるもの、其後離縁して立歸りたりとも再恤俸なし、

今まで恤俸の政なき故、老者は老後の事を慮りて養子をするなり、或は末後急養子といふことあり、或は實子幼少なれば代番を立るもあり、此急養子、たとへば親族の選もなく、出所をも糺さず、唯假父になる者だに相應なれば事をすますなり、さて此養子過惡ありて罪にかゝれば、其家斷絶する也、亡命にても斷絶す、其老弱の難儀いかばかりぞや、實子にても不肖なれば是非なき事なれ共、それはそれにて覺悟すべし、家をたてん爲のみにて、他人をいれて家財をあたへ、其人に家を潰さるゝは無念の至りなるべし、大抵養子には不肖おほし、家系を大切と思ふ心なき故なるべし、急養子はことさらなり、或人、養子にても、よき人がらにて、其家繁昌するものあり、是はいかにといふ、今富商大賈に至賤の女を愛して、それを本妻とするものあれば、其家必衰微すべしと人皆いふなり、是違ふ事なし、されどおほき中には至てよき女ありて、

右店主伊助儀、當七月五日欠落仕、可引取身寄無之、とよ儀、漸賃洗濯等ニ而其日を送り候處、店受人困窮ニ有之、月日相立候ニ随ひ、捨置候得者可及飢渇者ニ有之、今般被仰渡ニ相當仕候者ニ而、當月十一日ゟ、町内ニ而日々手當仕置申候、依之申上候、以上、

同　きん　同三才

同町嘉右衛門店
日雇病死長蔵後家
とよ　四十四才
ゑほ　同二才

一貳人暮

右店主長蔵儀、當六月九日病死仕候處、可引取身寄無之、とよ儀、賃洗濯等仕候得共、乳呑有之、踈之賃銀ニ而其日を送り兼、店受困窮ニ有之、月日相立候随ひ、捨置候得ば可及飢渇者ニ有之、今般被仰渡ニ相當仕候者ニ而、當月十一日ゟ、町内ニ而日々手當仕置申候、依之申上候、以上、

右町名主慶之丞幼年ニ付同所東仲町
組合
名主　喜平次印

右之通、私組合取調申上候、猶又自今當十月迄之内、先達而被仰渡候廉々之者御座候はゞ、御届申上、手當可仕候、依之申上候、以上、

天保八酉年八月廿三日

三番組
世話掛り
浅草新鳥越町
名主　兵蔵印

〔年成録〕恤倅

鰥寡孤を恵むは、聖王の仁政なり、然るに是より急なる事あれば、こゝにいはず、軽き士流貧窮に苦しみ、或は心得たがへにて亡命したる、或は過悪あり、罪をおそれて亡命したる、其家内老弱饑寒に困むは、いたましきものなれど、亡命の罪あれば、それを一々に恵みな

右同日ゟ手當　　七番組　佃島

一夫病死店請養ひ之妻子三人

當八月廿二日ゟ手當　　拾五番組　麹町谷町

一置去り之母姉二人

同月十一日ゟ手當　　同　元鮫河橋八軒町

一孤壹人

同月十日ゟ手當　　拾七番組　深川元町

一夫病死身寄無之妻子三人

同月十五日ゟ手當

〆拾五人

右之通、町内手當仕候旨世話懸り名主共申立候、則組々屆帳四冊相添、此段申上候、以上、

酉八月廿五日　　館市右衛門（江戸町年寄○以下三人連署）

喜多村彦右衛門

樽藤左衛門

浅草田原町貳町目置去り之妻子四人、夫病死身寄無之妻子貳人、手當御屆、

町年寄

浅草田原町貳町目　治七店
日雇伊助捨置候

一四人暮

妻　とよ　酉四十九才

倅　熊次郎　同十三才

娘　とら　同八才

り候而者、取調方混雜いたし、自然不行屆儀も出來可ㇾ申、定例御救渡も、當歲之小兒は人別相除、小屋入ものは四才以上江焚出シ被ㇾ下候儀ニ付、右渡方も、當歲者人別ニ不ㇾ加、拾五歲までは大人並ニ相渡候積、勘辨之上、定例御救之例ニ見合、員數取調候處、左之通御座候、

男女之無ㇾ差別、一日一人

白米三合

雜用錢百文

但當歲者相除、拾四歲ゟ貳歲迄者錢四拾八文宛、且極老ニ候共、米錢員數は壯年もの同樣ニ相渡候積、尤同居之親、其外伯父幷拾五歲以下之悴有ㇾ之候共、其次第ニ寄、本文之通相渡候樣可ㇾ仕候、

右之通相渡、店賃之儀者、其店ニ罷在候日數ニ應じ、月々下ゲ遣し、店請人又者家主方江引取置候分は不ㇾ相渡候積、且母病氣ニ而乳出不ㇾ申分、又は病死欠落いたし、難儀之段申立候當歲貳歲之小兒は、定例御救米錢之外、乳貰手當錢相渡候ニ付、右樣之類者、定例之見合を以、書面米錢之外、乳貰錢も相渡、其外病死取置料之儀も、定例ニ見合相渡候樣可ㇾ仕奉ㇾ存候、右手當渡方之儀者、一ヶ月三度ニ割合、十日分宛前廉ニ相渡、伺之通被ㇾ仰渡候はゞ、右之趣、町會所年番名主江申渡、町々名主共江爲ㇾ申達ㇾ候樣可ㇾ仕候、依ㇾ之町年寄差出候書付、幷年番名主共江申渡書案相添、此段相伺申候、

（置去妻子孤子御救一件）置去妻子其外町內手當申出候者申上候書付　町年寄

當八月〇天保八年三日、被ㇾ仰渡ㇾ候置去り幷孤等、其廉々屆出候者、左之通御座候、

三番組　淺草田原町貳町目

一置去り妻子四人

當八月十一日ゟ手當

同組　同町

一夫病死身寄無ㇾ之妻子二人

ゟ當十月迄、居町町役人共世話致し可遣、十月後は孰レも店受人江引渡、右入用之儀、其居町限取賄候は、時節柄可及難儀、市中一體之助合に付、惣町小間割出銀申付ル條、當分之入用は、居町幷組合町々ニ而、追而月番町年寄方江可書出、惣町小間割出銀方之儀は、場所上中下之差別を以、町年寄共差圖可請、右之趣、組々不洩樣申通、銘々名主共、厚相心得取計、月行事持之場所者、最寄名主心付可取扱、

但番外は可相除、

右申渡趣、證文申付ル、

酉八〇天保年八月

酉八〇天保年九月四日廻し濟

町々置去之妻子孤等、手當相渡候米錢高之儀ニ付、相伺候書付、

小印　伊賀守　町〇筒井、奉行、　印　渡邊三郎助　定〇御勘組頭
同　安房守　町〇大草、奉行、　佐藤清五郎印　岩淺三五大夫同
同　飛騨守　定〇明樂、勘奉行、　横山一大夫同　松村忠四郎同
同　五郎左衛門　定〇田口、勘吟味役、　鵜岡榮藏同　中村又藏同
　加藤九平同　高橋鐵次郎同

町々置去り之妻子孤等手當入用、町會所ニ而相渡候積り、越前守殿水〇老中、野、江御伺濟之由を以、伊賀守殿町〇筒井、奉行、ゟ御掛合有之、町年寄共差出候、一人當り米錢員數書付御引渡御座候ニ付、一覽取調候處、一日一人白米三合五勺、雜用錢百文、拾五歳以下は白米三合五勺、錢七拾文、七歳以下は白米三合五勺、錢四拾八文宛與有之候得共、佐久間町御救小屋內ニ罷在候もの共は、一日白米三合宛被出し相渡候ニ付、右見合を以、一日一人白米三合宛相渡可然、且拾五歳以下與口々員數相分

落一通り之ものは、可成丈宥免之上、歸住爲致候積を以、手當之儀可取計候、

右之趣、万石以上之向江、不洩樣可被相觸候、

三月

〔置去妻子孤子御救一件〕町年寄共ニ而可爲申渡案

組々世話懸り　名主共

今三日、南御役所ニ而被仰渡候、町內置去之妻子幷孤之類、當十月迄助合候者、御仁惠之一廉叶ひ不輕候條、間違無之樣、右類輩は組合名主立合、實情相糺、其妻子世話致し候事、

一若又左迄窮迫之樣子不相聞、妻子置去候始末胡亂ニ候はゝ、其段相届、可得差圖候事、

一貳拾壹番組之類、小組合之分は、當座賄共差支候節者、隣組三番組名主共勘辨致し取扱可遣、其外共小組合之分は、隣組名主共勘辨可取計事

右之趣、名主共相心得可取計旨、從南御奉行所被仰渡候間、組々不洩樣可申繼候、

酉（〇天保八年）八月

申渡

組々世話懸り　名主共

引續米價高直ニ付、厚御世話有之、度々市中御救米錢被下、且當三月中觸置候、品川外三ヶ所御救小屋出來、道路ニ迷ひ、又者行倒もの等御手當有之砌ニ付、此時節町內置去之妻子幷孤之類、目前居町を失ひ、道路ニ可迷もの者、當分市中一體ニ而可助合心得を以、左之通、

一稼亭主出奔、置去之妻子幷同居親共、

一兩親俄ニ相果候孤、幷亭主相果身寄無之妻子、

右兩樣のもの、相應之店請引取人有之分者格別、店受人茂實ニ困窮致し、可便方無之ものは、此節

之番所江召連訴出候樣可致候、

右之通申渡候間、早々組々江申通候樣可致候、

午正月

天保八酉年三月

大目付江

去申年以來、米價高直ニ付ては、御府內市中、其日稼之者ども及難儀候間、町會所ニおいて、御救米錢被下、又は御救小屋取建、厚御世話も有之候得共、此節ニ至り候ては、道路に迷ひ、又は行倒候者も有之哉ニ相聞候ニ付、此度御代官中村八大夫、山田茂左衞門、伊奈半左衞門、山本大膳掛りにて、品川、板橋、千住、內藤新宿邊江も、御救小屋取建、御手當有之候積りニ付、右體道路ニまよひ、或は行倒候もの等も有之候はゞ、其場所辻番所組合頭取より家來差添、最寄小屋場に差出、右組合入不申向は、銘々家來差添、同樣可差出候、

右之趣、江戶中武家方、寺社之向江も、不洩樣可被相觸候、

三月

右之通可被相觸候

天保八酉年三月

大目付江

品川外三ヶ所御救小屋江入候者之內、當時村方人別相除候ものにても、御料所幷万石以下知行出所之分は、可成丈歸住爲致、其餘之分は人物ニ寄、荒地又は人足寄場等江も被差遣候積、公儀において、品々御仁惠之御所置も有之候事故、右御趣意厚く相心得、仕置等申付候ものに無之、村方人別相除候類、御救小屋江入候分、掛り御代官より元領主江引渡候はゞ、追拂等不致、欠

名主
家主　共

一七拾歳位より以上ニ而、夫并妻ニわかれ、手足之働も不自由ニ而、やしなわるべき子も無之、見繼可遣ものもなく、飢にも可及もの、

一拾歳位より以下ニ而父母ニわかれ、見繼可遣もの無之類、

一年若ニ候共、貧賤なるもの長病ニ而、見繼可遣ものも無之、飢にも可及類、

右箇條之類ハ、町役人共得と糺候而、柳原籾藏會所江其町々名主印形書付を以、家守共より可申出候、去年備置候通、町々積金之内ニ而右之通貧之難儀成者江ハ手當可渡遣候、

右之趣、町々名主家守共、不洩樣可申通候、

五月廿一日

〔武江年表 八〕天保四年、今年米價登揚し、貧民へ御救の米錢を賜る事度々也、富有の町人、各貧民へ施しの米錢をあたふる事おびたゞし、

〔天保集成絲綸錄 百六〕天保五年午年正月

近頃町々往還ニ行倒相果候、無宿體之者數多有之候ニ付、去年不作之國柄多く、其土地ニ難ネ、御當地江出可便方無之、無宿ニ成り行倒居ルものなぞは、厚御仁惠より穢多頭彈左衞門構内江小屋相建、介抱手當方之儀、去月中ゟ申付置候處、其後も行倒相果候もの間々有之、畢竟町々見廻り方不行屆、中には相煩候體見請候ても、町內障り之樣、其所持場外江追拂候哉にも相聞、旣倒煩ひ居候もの見出し候ても、介抱之間合も無之相果候趣之訴ニ相成り、右は人命ニ拘候儀、且は火之元等の爲にも有之候間、以來町々等閑なく、往還地先、明地、河岸地、并預り地、受負地とも、其筋之もの、晝夜時々能々相廻り、倒居候もの有之候は丶、早々介抱手當いたし候上、月番

若打捨置、脇ゟ相知れ候はゞ可爲越度候、

九月

享保七寅年正月

一町々にて困窮之者、以後若類火に逢候砌、一日を送り兼、可及渇命體之者有之候はゞ、去丑六月相觸候通、町々致吟味、右之通之族於有之は、困窮之譯、書付可差出候、尤有無共に、書付名主月行事致印形、來ル十七日迄、喜多村〇江戸町年寄所江可被差出候、以上、

正月

享保十八丑年正月

一今度町々、其日を給兼候飢人江とらせ候爲メ、名主共江御米相渡置候、此儀に付て、名主は勿論家主等迄、虛妄之義有之歟、若又油斷にて飢人多く有之ば、其所ゟ早速可申出候、

右之通、町中可觸知候也、

正月

享保十八丑年二月

一此節町々困窮之儀に候間、店借地借渡世難成程之者は、其地主家主ゟ、地代店賃等、當分可致用捨候、米高直之中立にて渡世成能き者實、困窮人同前ニ申なし、地代店賃不納ものは、吟味之上、急度可申付候、

二月

〔德川禁令考救恤四十八〕寬政四子年五月

窮民御救起立

總町々

救恤基困窮之

いかなるゆゑにやといふかりしに、今年小民艱困の時に至り、かく仰出され、財貨多く下に散せしかば、さてその時を待せ玉ひし神算よとて、たれもく感歎し奉りけるとなり、

寛保二年八月、風雨はげしく、そのうへ信濃國淺間山、武藏國秩父三國峠より山水多く湧出て、關八州水害およびたゞしくわきて、絹川利根川あふれ出、江府近き葛西のあたりも民屋流失し、溺死するもの少からざりしかば、○中略四十万兩の府金を出して、水殃にかゝりし國々の河渠を浚利し、堤防を修築ありしかば、窮民その役をつとめて錢穀を得、みな飢寒をまぬかれける、

〔享保集成絲綸錄 三十九〕元祿十五午年二月

近年末々之者及困窮、非人も出候、此以後凶年抔候ば、一入可致難澁候、就夫右之御用之儀、丹後守○稻葉、老中、被仰付候間、何茂申合遂僉議、丹後守江可被相伺候、以上、

右之書付、寺社奉行、大目付、町奉行、御勘定奉行、長崎奉行、京都町奉行、大坂町奉行江一同豐後守○阿部、老中、申渡之、老中列座、但遠國奉行は何茂當時在府之面々也、

享保六丑年九月

町々におゐて、親妻子又は自分茂重く相煩、拵茂不罷成、及渴命候類も候はゞ、御扶持米可被下候間、遂吟味可訴出候、但右は年來其所々に致住居候ものゝ事に候、當分外ゟ參居候者之儀は、訴出候に不及候事、

一先頃致吟味書上候町中困窮者之儀、火事に逢候はゞ、五七日之內御扶持米可被下候、右同斷之者茂候はゞ、遂吟味可訴出候、尤書上候者之內、身上取直し候歟、又は他國江茂參候はゞ是又可訴出候事、

右之趣、自今相心得、名主家主五人組申合、相互に致吟味、書面之通之者有之候はゞ、早々可訴出候、

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年二月十八日、非人ヲ賑スヲ賞シテ、白銀ヲ新吉原町森田屋勝女ニ賜フ、

新吉原町江戸町二丁目七左衛門地借茶屋渡世森田屋かつ　其方先代五十三年以前、文化四卯年より當時迄、引續き網代笠木綿頭巾等、年々非人へ施行、代金三百九十八兩二分餘、是迄施差出し候段、渡世柄には奇特の事に候、依て褒美として銀五枚取らせ遣す、

〔落穗集追加五〕飢饉の時の事

一問曰、當御代〔德川氏〕になり、いつの比の事にや、江戸町中の米の直段俄に高直になるを以て、新乞食抔も多く出來、飢死の者共有之たると申す、飢饉沙汰の義は如何なるや、答曰、〔中略〕御當代の如く、天下御一統の御時代に於て、たとへ天災の飢饉年と有之ても、公儀の御威光を以て御救ひ可被成と有之に於て、上の思召次第と申もの也、夫に付天正年中の事抔にても有之哉、五畿內大きに不作仕り、米穀の直段高直になりしを以て、輕き者共は飢に及び、新乞食抔もあまた出來るなれ共、米穀拂底の時節ゆへ、人の救ひ施し抔も無之に付、道路に伏したをれて相果たる者限りも無之となり、是を秀吉公聞給ひて、殊外に御苦勞に被遊候由、則鴨川桂川等堤の普請を申付られ、土砂を持はこび候程の者には鳥目をあたへらるゝを以て、飢饉の難を遁れるとなり、右秀吉公の義は、かたの如くなる才智の御人なれ共、天下一統の時節にて無之に付諸國の米穀運送の下知仕置に於ては、力に及不申候故に、是非なく手前の物入にて飢饉を救ひ被申るゝと也、

〔有德院殿御實紀附錄四〕中國西國の飢饉により、年を逶て米價騰貴しければ、江府の小民等、またこれが爲に艱困せり、享保十七年にいたり、城溝浚治の事命ぜられしかば、數多の人夫をかり催しけるまゝに、下賤の者、日々其雇錢を得てよろこぶ事限りなし、これよりさき衆人私議しけるは、當代の御政あまねく及ばずといふ所なし、しかるに城溝の久しく湮塞せしを浚ひ玉はぬは、

朱書
去巳年町會所金を以、市中川浚被仰付候御入用之内江金五拾兩宛差出し金致し候者江銀三枚宛、三拾兩より四拾五兩迄差出候もの江銀貳枚宛貳拾兩より貳拾五兩迄差出候もの江銀壹枚宛貳拾兩以下差出候もの譽置候樣可仕哉之旨、町奉行伺之通被仰渡候、

一同年青山邊ゟ之出火ニ而、御救小屋出來候節、小屋入之もの共江施し候分、前書上金之例ニ見合、品ものは代積り致し、金五拾兩以上差出候もの共江銀三枚、貳拾三兩以上差出候者共江同壹枚宛、町會所金之内ゟ被下、貳拾兩以下差出候もの共は、譽置候樣可仕哉之段相伺候處、伺之通被仰渡候、

右例ニ見合、別紙五拾兩以上差出候もの四人江銀三枚宛、三拾兩ゟ三拾八兩餘迄差出候者四人江銀貳枚宛貳拾兩ゟ貳拾七兩餘迄差出候もの拾人江銀壹枚宛被下、貳拾兩以下差出候者共は譽置候樣可仕與奉存候、依て別紙〇別紙略名前書相添此段奉伺候、以上、

午四月

申渡

大熊善太郎御代官所
武州足立郡西荒井村百姓
かつ

右者當正月中、類燒之窮民共、御救小屋取建差置候處、右小屋入之もの共江施行差出候段、奇特之至ニ候、依て譽置候樣可被致候、

右者阿部伊勢守殿〇老中江伺之上、土佐守殿〇石川、勘定奉行被仰渡之、

午〇弘化三年五月

方奇特之筋ニ付、相應ニ御褒美被下候方與類例取調候處、

朱書　今般町會所金を以、市中川浚被仰付候御入用之內江金五拾兩ツヽ差加金致し候のも江銀三枚ツヽ、三拾兩ゟ四拾五兩迄差出候もの江銀貳枚ツヽ、貳拾兩ゟ貳拾五兩迄差加候もの江銀壹枚ツヽ被下、貳拾兩以下差出候もの書置候樣可仕哉之旨、町奉行伺之通被仰渡候、

右例ニ見合、別紙五拾兩以上差出候もの共、江銀三枚ツヽ、貳拾三兩餘ゟ貳拾六兩餘迄差出候もの共江銀壹枚ツヽ被下、貳拾兩以下差出候もの共者書置候樣可仕候哉、尤御褒美銀出方之儀者、町會所金之內ゟ相渡候樣可仕と奉存候、依之別紙〇別紙略名前書相添、此段奉伺候、以上、

巳九月

〔丸山出火御救一件下〕奇特者御賞之儀相伺候書付

書面伺之通、御褒美被下候間、都而書面之通可取計旨被仰渡、奉承知候、

午〇弘化三年四月廿六日

印　遠山左衛門尉

同　鍋島內匠頭

同　石河土佐守

同　羽田龍助

當正月十五日、本鄕丸山邊ゟ之出火及大火、類燒之窮民共、野宿致し難澁之體ニ付、其筋申上、神田佐久間町地先外貳ヶ所江御救小屋取建、都合貳千九百六拾人小屋入致し、日々賄相渡候處、右御仁惠ニ感伏致し、別冊名前之通、小屋入之もの江施し度旨願出候間、承屆、掛り名主爲立會、壹人別ニ爲割渡候儀ニ有之、一體今般は大火之儀ニ付、別而難澁致し、小屋引拂方も自然相延可申哉之體ニ相見候處、右之もの共之救合力ニ而、元手錢相應ニ出來、銘々住所稼ニ在付候樣相成、最前之樣子柄與は違ひ、案外引拂も捗取、右ニ付而は町會所入用も多分相減候上、多人數一廉之產業出來候樣相成候段、不一ト方奇特筋ニ付、相應之御褒美被下候方與類例取調候處、

伊奈公、公大嘉之、越閏正月辛未、檄義賑人及里正、召見于府、褒賞懇到焉、特賜宴於公堂、終日盡歡而罷、自是遠近聞而興起、往々賑救者、蓋矜式于我也、府公特賞吾黨、亦以賑最先諸郡也、然麥未熟、窮餓未盡、起義人又作粥、於里中万福寺養窮、以庶幾及麥之熟也、於是飢民百千群、集于寺中以賦口食、若斯者殆七十日、至食新而止、以得窮餓再蘇矣、夫惟隣里相保、鄰救所望、釜庾周急、吾土肇造、乃父老相謀、志之于石、以貽永世、希使後人知斯里有仁厚之俗、而多義賑之人云、其二十一人姓名別錄于碑陰、

天明四年甲辰夏六月、寓客東都松延年記、

〔青山出火類燒窮民御救一件下〕奇特之者共御賞之儀申上候書付

書面五拾兩以上差出候者共江銀三枚宛、貳拾三兩以上差出候者共江同壹枚宛被下、貳拾兩以下差出候ものの共者書置被下、差出方之儀者、町會所金之内ゟ相渡候樣可仕旨被仰渡、奉承知候、

印同　遠山左衛門尉〇町奉行

同同　鍋島内匠頭〇町奉行

同同　石河土佐守〇勘定奉行

同同　羽田龍助〇勘定吟味役

巳〇弘化二年十一月七日

当正月廿四日、青山邊ゟ之出火及大火、類燒之窮民共、野宿致し居候處、場末之儀ニ付、急速貸長屋出來可致模樣ニも無之、店借之もの共、何れも路頭ニ彳、難澁之體ニ付、其節申上之上、赤羽新堀川端江御救小屋取建、數合千六百七拾九人小屋入致し、日々賄相渡候處、右御仁惠ニ感伏致し、別冊名前書之通、小屋入之もの共江施度旨願出候間承り届、懸り名主爲立合、壹人別ニ爲割渡候儀ニ有之、一體前書之通、場末邊鄙故、店賃も至而下直ニ而、幽之稼致し候もの共ニ付、右之外可也之場所、貸長屋等江住所相求候力ラも無之、急速小屋引拂ニも難相成樣子ニ相見候處、書面之者共之救合力ニ而、夫々元手償相應ニ出來、銘々住所稼ニ在附候樣相成、最前之樣子柄与違ひ、案外引拂も捗取候丈は、町會所入用も相減、畢ニ相成候上、多人數一廉之産業出來候樣相成候段者、不一ト

錢だに相出し候はゞ、手に入可申候得共、來春夏之間は、七八月之間に至り候はゞ、米穀調物にも有之間敷と相考候趣に付、少々貯籾有之分も、當年は不相出、來年に至り必至之時節に至、助成可仕存寄を以、當年は金錢を以見繼與候由、是等之處至て深切成志と奉存候、ことに其身は勿論、家内中共に雜穀干糅粥等にて朝夕簡略仕、此節金壹分に付、米八升六合より九升迄仕候得共、一粒も賣拂不申、來年に至り村内隣村之救に可仕下々心之由、誠以深切成志に奉存候、其上悴同苗軍次郎義、一ヶ月に三四度ツヽ村内相見舞、家内有無をも見屆困窮之私共へ彼是力を付與候に付、はたらき候にも自然とすゝみ有之、麥作も無恙仕付仕候、來夏之取續にも罷成候義、偏に右宇右衞門廣大之深切故と奉存候、右品々別て奇特之取計ひ共と奉存候に付、乍恐村内惣百姓連印、書付を以御屆奉申上候、以上、

仙臺御預り所　奥州伊達郡高子村百姓

善八印（〇以下人名略）

天明三年卯十二月廿四日

仙臺御預り

桑折御役所

前書御屆申上候通、相違無御座候に付、奥印仕奉差上候、以上、

右村組頭　庄四郎印

同名主　總右衞門印

〔事實文編附錄十一〕武州幸亭義賑窮餓碑　松村延年

天明三年歲在癸卯、大陽氣微、夏多伏陰、山東郡國、穀蔬皆不熟、加之七月之初、信毛之間、山冢發火、大山卒崩、近帶之州雨焦沙、平地積或至四五寸、野無青草、至明年春、民大飢、餓莩相屬、武州葛飾郡幸手邑里、雖人々飢困、其未餓者二十一人、各出錢穀義賑焉、民以得活、管赤縣府主事土屋貞榮、聞諸府尹

候、

一錢拾貳貫五百文

是は當八月廿三日に、私共之内困窮百姓十二軒へ、夫食代として合力仕くれ申候、但男壹人へ錢三百七拾文づゝ、女壹人へ錢貳百五十文づゝ、子共壹人へ錢百弐拾五文づゝ、

但此節米壹升に付、錢七拾貳三文位仕候、

一籾貳石四斗貳升五合

是は當八月晦日に、私共之内困窮百姓十二軒へ合力仕くれ候、但此節新米は出來不申、古米は疾にたべ盡し、且つ調物にも一切無之時節に付誠に及飢渇に申體の處、右之通合力仕與候を以、困窮百姓助命仕候義に御座候、

一金拾貳兩

是は當九月七日に、私共十六軒へ、來辰農夫喰調代金に用達くれ申候、但返濟之義は、兩三年之内、世柄立直り次第、元金無利足にて返濟之積りに用達くれ、尤銘々割渡し候金子を以籾相調、當時名主宅へ預ヶ爲置、來春農夫食に爲貯置申候、

一金七兩貳分

是は例年之通、御年貢金上納仕候に付、私共之内極難澁之もの十三軒へ、來辰六月十五日限に、無利足にて返濟之積に、昨廿三日に用達與申候、

一金貳兩貳分

是は當時より正月中迄之夫食代に、私共之内極難澁之もの拾三軒へ、來辰の六月十五日限、無利足にて返濟候つもりに、昨廿三日用達與申候、

右之通手當仕、取計ひ與申候、尤内々右宇右衛門存寄之趣は、當年は米穀高直に候得共、せめて金

卯十二月　来辰六月改、無利足にて返濟之積、

一同　拾六軒へ金五兩

辰二月十二日　當辰六月廿五日限無利足

一上保原村　七拾貳軒へ金三拾兩程、

卯九月卯十一月之内借す、但是ハ他領ゆゑ、書面にハ無之、

一信夫郡鎌田村之内、阿武隈川東向鎌田村、高子ノ隣村也家數三拾九軒へ金拾六兩、

卯十二月カス　来辰の六月切に無利足返濟之積

一信夫郡瀬上村之内、阿武隈川東向瀬上、高子ノ隣村也貳拾七軒へ金八兩貳分、

卯十二月カス　来辰六月無利足返濟之積、

右各届書アリ略之、高子村ノ計記之、

乍恐以書付御屆奉申上候事

一當村百姓熊坂宇右衛門儀、村内困窮百姓手當之儀は、平年にさへ彼是深切に世話いたし與候者に付、當大凶年に相當り、手當いたし與候儀は不珍候得共、當年之儀は、別て厚き深切之取計奉存候に付、乍恐品々左に奉申上候、

覺

一錢拾三貫三百五十文

是は當二月九日に、例年之通、農夫食代六月十五日限に返濟之積、無利足にて用達與申候、尤日限に返濟仕候、

一金貳兩壹分ト錢五百文

是は當六月四日に、夏成御上納金に、此月末迄無利足にて用達與申候、尤日限に返濟仕

納爲致、都て親宇右衛門代より差遣候分、合力仕候心得に罷在候へども、返済仕候者も有之候へば受取置、尚又困窮之者ども之手當に仕、其外長病にて罷在候者へは、米等を差遣、醫師を頼、療治等之義迄世話いたし、又は困窮にて他村へ奉公等に罷出候者へは、夫々に手當いたし、引戻候様取計候へば、是等之義は、年季之義に付、員數不相知、小前百姓どもをいたはり候に付、難取續體之者も相續仕候、右高子村之義は、山間之悪地にて、近年水旱損相續、村方難義仕候得共、右之通、宇右衛門年來深切に手當仕候に付、百姓共取續、年々御年貢無滯上納仕、諸事宇右衛門を見習、百姓共農業出精仕、一村之交りも睦敷罷成候段、宇右衛門奇特之義ども村方一同申之、郡中へも相響、自然と人氣も宜敷相成候義に付、可相成候はゞ、相應之御褒美被下置候様仕度旨、陸奥守御預り所役人申聞候、〇下略

見出し
天明三卯年八月十六日出羽守殿水野也

御勘定奉行江

松平陸奥守御預所　奥州伊達郡高子村

百姓　宇右衛門

銀拾枚

右之者、生得實體成者にて、數年村方へ奇特之取計致候に付、其身一代刀差免、幷子孫迄名字名乗可申候、爲御褒美書面之通被下之、

右は御勘定所之書留を寫置候也

其後又々困窮之者を救候書付、熊坂氏よりかり得て寫、左に記す、

一天明三年癸卯、奥州飢饉之節、伊達郡高子村百姓熊坂宇右衛門、困窮之村々へ農夫食代として借遣し候書付、村々より届書出し候書付によりて抄出す、

一箱崎村　家數五拾六軒へ金貳拾壹兩三歩

賞私領賑恤者

右合銀二拾八貫九百七拾目餘、味噌壹石八斗餘、手六斗、鰯壹斗、米拾九石餘、雜穀貳拾九石餘、茶三斗、錢拾五貫文餘、鹽拾八石餘、樫實壹石九斗餘差出相救候、

〔年成錄〕然るに天明の饑年、米價金三兩にいたりしに、此倉米一粒の賑救はなかりし、いかなることにぞ、寬政中川崎に一倉をおき、府下の民に命じて義穀を輸さしむ、數年をへて河内大水、漂沒の民饑困甚し、此時官命、府下の民を勸めて賑救せしむ、皆食物を舟につみて往て餉す、此時の賑救は夥しき事なりし、官よりはいかばかりの恤賑を賜りしや聞しらず、

〔押山叢書　二〕享保十七子年、西國中國四國田畑虫附損毛せしめ五畿内筋米穀高直ニ付て、右之ものの共、金銀米錢ならびに諸品を出して貧窮飢人を救、きどくなる事に付、公儀より御銀被下、又は御ほめ有之候、此外私領方之儀は、際限もなき事故、さるすにあたわず、御料所の分を御役所より申おろし、こゝろざしのきどく成事を諸人にしらしむべきため、令版行者也、

〔一話一言　四十四〕熊坂氏恤民書付

天明三年八月十六日、奥州熊坂宇右衛門御褒美被下候時、御勘定所書付之寫、

松平陸奥守御預り所奥州伊達郡高子村

百姓　宇右衛門

右宇右衛門義、貞實成者に付、年來村方へ奇特成取計仕候旨、村方一同訴出候に付相糺候處、親宇右衛門代より、常々小前百姓共をいたはり、御年貢年々無滯致皆濟、寳曆五亥年凶作之節、其身并家内之者ども粥を給、村内困窮之百姓共へ、籾貳拾石、麥三拾俵差遣し、當宇右衛門代に罷成、明和三戌年、困窮之百姓共へ、麥三拾俵合力仕、相續成兼候ものへは、金七八兩、米麥五六石ツヽ、年毎に差遣し、不作之年、自分夫食不足之節は、代金にて差遣し、御年貢等差滯候節は村役人陣屋元へ往來も繁く雜用も相掛り、小前之ものども痛に相成候義を歎き、其砌は金子差出上

貳拾七斤差出相救候、

備後國安那郡

右合銀五拾目餘、雜穀九拾六石餘、米七拾五石餘、鹽四石、茶五拾斤差出相救候、

讃岐國小豆島

右合銀八百八拾目餘、米五石六斗餘、麥三百七石餘差出相救候、

伊豫國宇摩郡

右合銀貳貫五拾目餘、雜穀六拾六石餘、味噌壹石九斗餘、米六拾八石餘、芋貳石餘、鹽貳石餘差出相救候

隱岐國海士郡

右合米拾四石餘、雜穀四拾壹石餘差出相救候、

豐前國宇佐郡

右合銀壹貫七百六拾目餘、味噌拾二石餘、柿粉六斗、米三拾壹石餘、鹽貳拾七石餘、茶三石、雜穀百七拾貳石餘、粉糠壹石餘、くろめこ拾五把差出相救候、

豐後國日田郡

右合銀七百六拾目餘、雜穀百三拾八石餘、鹽七拾四石餘、米四拾八石餘、味噌貳拾六石餘、醤油實二拾壹貫目差出相救候、

肥前國高來郡

右合銀拾七貫六百四拾目餘、雜穀五拾石餘、米拾壹石餘、味噌壹石壹斗餘、植栗三千斤、錢五拾八貫文餘、大根貳百本、芋四拾七石餘差出相救候、

肥後國天草郡

酒粕千四百八拾貫目餘、糖三石、豆葉十壹俵、錢千三百八貫文餘、大根貳百七拾本、茶十九斤、薪百十
四束差出相救候、
近江國甲賀郡
右合金拾六兩、米百八拾四石餘、銀七百三拾目餘、錢百廿八貫文餘、雜穀百貳拾三石餘差出相救候、
丹波國桑田郡
右合銀拾匁、雜穀貳拾四石餘、米三拾九石餘、干葉貳拾連、大根七拾本差出相救候、
丹後國熊野郡
右合銀三貫八百貳拾目餘、雜穀五十六石餘、米百八拾五石餘、鹽貳斗餘差出相救候、
但馬國二方郡
右合銀貳拾目、雜穀百五拾三石餘、米五百四拾貳石餘、薪八百荷差出相救候、
石見國邑智郡
右合米貳千六百拾六石餘、雜穀拾貳石差出相救候、
播磨國神西郡
右合銀八百目餘、錢三貫文、荒糖三石、味噌三貫目、米三百六拾貳石餘、雜穀二百貳拾貳石餘、鹽四俵、
大根漬六拾本差出相救候、
美作國西々條郡
右合銀壹貫百六拾目餘、雜穀百六拾石餘、鹽貳拾八俵四十壹石餘、糖九斗餘、米百六拾石餘、酒粕壹
石壹斗餘、茶九斤差出相救候、
備中國後月郡
右合銀拾貫八百三拾目餘、雜穀百九拾壹石三斗壹升餘、米三百四拾六石餘、鹽六拾九石餘、茶四百

白貳拾七石餘、味噌少、薪貳百十五荷差出相救候、

伏見

右合米三拾四石餘、錢四百六拾貫文、大豆三斗餘差出相救候、

長崎

右合金壹兩、銀貳拾壹貫八百五拾目餘、錢五拾壹貫文、米貳拾四俵貳石餘差出相救候、

山城國愛宕郡

右合銀三百四拾目、雜穀貳拾貳石餘、米九拾九石餘、味噌四拾五貫目、あらめ貳拾八貫目餘、錢四拾七貫文餘、糖五石差出相救候、

大和國葛上郡

右合銀壹貫九百三拾目餘、雜穀四百三拾九石餘、鹽五石餘、薪芝百七拾荷、菜大根貳反步程作り立候分、米千三百五十七石餘、芋拾七石餘、樫實五斗、青苧百九拾四把、錢三拾八貫文、味噌百貳拾八貫目、干葉千百貳拾貫目餘、大根五百本、

河內國

右合銀拾五貫六百六拾目餘、雜穀三百三拾六石餘、茶六拾四斤、米四百三拾九石餘、酒粕貳百四拾五貫目餘、木綿百拾六斤餘、藁百把、錢三百八拾四貫文餘、あらめ百八拾七貫目餘、薪三拾束差出相救候、

和泉國

右合金貳兩貳分、米三百六石餘、銀三貫五百四拾目餘、錢拾四貫文、雜穀三百拾壹石餘差出相救候、

攝津國東成郡

右合銀四貫八百九拾目餘、雜穀七百七拾八石餘、鹽壹石餘、干葉五百四十連餘、米八百七拾壹石餘、

施し、又者貸候而、其上ニも餘慶あらば不貯置賣出すべし、今年幸に虫附之わざわひを遁候とて、近國近郷之難儀を見ながら、平生之ごとく暮候儀者、冥加之程をも可恐事ニ候、年之廻りニ而豊年凶年ある事なれば、自然我村凶年之わざはひ逢候時は、他村之合力を請、取續べし、此度他をおろそかにしては、我難儀之時、他村之合力疎略なるべし、大凶年ニ者、國々一同之持合ニなくては取續難成儀故、此處を能々心得、名主庄屋長百姓等致世話、村中ニて少宛も出合せ候はゞ、難儀之村江合力又者貸候樣ニも可成候間、名主庄屋長百姓隨分可出精事、

一朝夕之食物さへ右之通ニ候へば、況酒餅麪類等ニ費をすべからず、總而〆賣彌堅停止之事、

右之趣、在々所々江相觸、合力救など仕候もの有之ば、名主庄屋等隨分無油斷遂吟味、其段後日ニ御代官所支配所江可申出者也、

子十二月 〇中略

京都

右米九百四拾五石餘、雜穀貳石餘、醬味噌拾六貫目、髭人參半兩、銀九百七拾目餘、味噌拾七貫目餘、餅、あらめ五貫目、薪拾七束、錢貳千四百九拾九貫文餘、酒粕拾五貫目、香物三百、茶五斤差出相救候、

大坂

右金二百五十兩、錢三万三百三十三貫文餘、茶貳百貳拾七斤、銀貳拾二貫四百目餘、雜穀八十九石餘、餅三拾四重、布子百六拾四、米千貳百拾貳石餘、酒粕六十二貫目餘、薪四掛差出相救候、

奈良

右合金貳歩、錢六百六拾壹貫文餘、米百二石餘、味噌拾五貫目差出相救候、

堺

右金貳分、錢三百四拾九貫文餘、餅貳重ト拾、銀壹貫貳百八拾匁餘、雜穀貳石五斗餘、布子四ツ、米五

豪富義賑貸

一去ル卯年御仕法替、無利足年賦濟之外、上リ高有餘引當貸增無之分は、定例類燒十ケ年賦ニ貸附、貸增有之分は、右貸附高之內ニ而貸增、殘金引去、年賦濟之分とも、一同取立可申候、

一右之外、貸附金渡方等之儀者、都而定例類燒場同樣ニ相心得、貸附方入念取計候樣可致候、

右者、峯行來龍助殿御評議濟ニ而申渡、

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附靑砥左衞門事

寬喜元年ニ、天下飢饉ノ時、借書ヲ調ヘ、判形ヲ加ヘテ、富裕ノ者ノ米ヲ借ルニ、泰時法ヲ被置ケル、來年世立直ラバ、本物計ヲ借リ主ニ可返納、利分ハ我添テ返スベシト被定テ、面々ノ狀ヲ被取置ケリ、所領ヲモ持タル人ニハ、約束ノ本物ヲ還サセ、自我方添利分、倍ニ返シ遣サレケリ、貧者ニハ皆免シテ、我領內ノ米ニテゾ、主ニハ倍ニ被返ケル、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年(○貞永元年)十一月十三日、依飢饉可救貧弊民之由、武州(○北條泰時)被仰之間、矢田六郎左衞門尉旣下行九千餘石米訖、而件輩今年無據于辨償之旨又愁申之、可相待明年之趣、重被仰矢田云云、

〔押山叢書二〕御高札之寫

一今年西國四國中國五畿內邊迄𪜈、田作虫附損亡ニ付而、御料所百姓共、夫食米被貸渡候、然共虫附之國々、夥敷損亡之儀故、此上ニ𪜈來春麥作出來候迄之內、難取續者も可有之哉、虫附候村之內ニ𪜈、米穀金銀貯有之者は、身上相應　飢人共江合力致、或者貸渡、又者米穀金銀貯は無之候得共、平生之ごとく相應ニ暮之者は、夫食不足之者同樣、隨分食物勘略致、其餘慶を飢人江合力、又者貸渡候而、何とぞ餓死之者無之樣隨分可致介抱事、

一損亡之國之內ニ而𪜈、所ニより虫附ざる所ニ而、其村食物不足ニ無之候共、此節者名主庄屋長百姓を始、小百姓ニ至迄、損亡之村々同樣ニ心得、食を減じ、少ニ而𪜈餘慶あらば、近鄕之飢人江

増は類焼いたし候節ニ限り候得共、其後類焼無之候而も貸増出來候樣相成、既此度之類焼場ニは、貸増之分多く有之候間、右貸増之分五割増拾ヶ年賦ニ貸替、右返納殘金は、此度貸附高之内ニ而引去、いづれニも年賦濟共、一同取立候樣可仕哉、

但御用達申立候以前之通、上り高三分二、幷貳百兩已上貸付候儀は、可成丈貸渡出來、銘々手取相増候樣可致と、右之通申立候得共、實は貸過ニ相成、心痛仕候旨申立候義ニ有之、出金高も相嵩可申候間、兩樣とも先ヅ見合候方與奉存候、

一此度、貸替金渡方之儀、當時諸色も高直ニ付、文政十二丑年、大火之節之振合を以、普請取掛り已前、半金も渡方無之候而者難儀可致旨、年番名主共申立候ニ付取調候處、同年は右之通渡方取計候處、中には金子受取候而も、普請取掛り不申、餘事ニ遣拂更地之儘、流地預り地等ニ差出候類有之候趣ニ而、其後午年大火之節は、普請皆出來之上渡方取計候儀ニ有之候間、此度も右之振合ニ相心得候樣可仕奉存候、

但御用達申立候元利取立方之儀ニ付、前々之通、朱判角判相用度趣は、別段取調可申上候、

右之趣を以、貸替方爲取計候樣可仕哉奉存候、依之御用達江之申達、幷類焼町々江之觸達案相添、此段相伺申候、

午〇弘化三年三月

朱書 午三月晦日、福田所左衛門〇勘定吟味方改役小原清次郎立合申渡ス、

申渡

御用達

此度類焼ニ付、貸附相願候分、取計方之儀、拜領町屋敷沽券地名主役料引當之分共類焼ニ付、新規貸附相願候分は、定例五割増十ヶ年賦ニ貸附可申候、

町會所金借受罷在候、拜領町屋敷沽券地、寺社門前地等之內、今般類燒いたし候分は、追々貸替願出可申間、取調候處、文政十二丑年大火之節、殘金引去貸替、幷新規貸附高共、合金九万六千九百兩餘、天保五午年同斷、合金八万千七百兩餘、全く出方ニ相成、右ニ見合候得者、此度も多分之出金高ニ可相成、當時御用達手元ニ預り金四万六千兩餘ならでは無之、此度之貸替ニは迚も引足り申間敷候間、此度貸替之分は、御金藏假納之分、御下ゲ金ニ不相成候而者相成間敷候間、右者別段取調相伺候樣可仕、且又去ル卯年、御仕法替ニ而、無利足年賦濟相成候分、幷年賦濟相成候ニ付、上り高有餘有之分、右有餘を見込、別段利付五ヶ年賦貸增候分とも、此度貸替相成候ニ付而は、勘定合も入組、殊ニ大火之儀ニ付、町中之樣子をも考合、一體之仕法立、得與勘辨いたし可申立旨、御用達幷年番名主共江申渡候處、夫々別紙之通、見込申立候間、猶勘辨之上、取計方左ニ申上候、

一御仕法替、無利足年賦濟之分幷捐敗、又は永年賦利付五ヶ年賦貸增之分迄も、年賦延等之儀、年番名主共申立之趣は、地主共ニおゐては勝手之筋ニ候得共、會所ニ於ゐ而者莫大之不益ニ而、自然御救筋之備、手薄ニ相成候儀ニ付、右三ヶ條とも、迚も難出來儀ニ有之、且又御用達共見込は、年賦之分置居、猶又貸增候而は、第一行末取立方、幷此後年限中又々類燒等有之候節之取計方深く心配いたし、附而者年賦濟上り高一杯之口者貸替不致、地主方ニ而望之者江受負地等ニ爲取計、年賦濟之分返納爲致候方ニ可有之哉之旨申立、何れも可然共難差極、尤年賦濟之分置居等之儀は、去春青山邊ゟ之出火、其外類燒之者共江貸替候振合にも相振れ、氣配ニも拘り可申間、不可然との儀、御用達申立之趣尤ニも相聞候間、拜領町屋敷、沽券地、名主役料引當、貸附とも、先ヅ口而去巳年青山邊ゟ出火ニ而類燒いたし候場所、貸替之振合を以、年賦濟無之分は、定例之通五割增拾ヶ年賦ニ貸附、年賦濟有之分は、前同斷增貸いたし、且青山邊出火之頃は、貸

大隅守、筑後守取計、追而可申上候、以上、

二月廿一日

根岸肥前守
山崎大隅守
池田筑後守

〔丸山出火御救一件下〕午三月晦日廻し済

最初懸り之もの見込は、十分に貸附不申候而者、貸長屋之普請など行届申間敷との事ニ而、新規ニ貸増之仕法取調差出候得共、一體町會所御貸附無之節とても、貸長屋類燒後、さのみ普請差支候と申候程之義も承り及不申候、第一町會所者、貸附之事者主意ニ無之、非常窮民之御救筋專務ニ候處、多分貸出し金いたし候而、若當年米價格別引上ゲ候事など有之候節者、救方差支可申候、是迄之仕法ニ而も、文政之大火ニは九万六千兩餘、天保之大火ニ者八万千兩餘之貸出しニ相成候間、其節之振合ゟ差ゆるめ候て、何程之貸出高ニ可相成哉も難計、先ヅ先前之振合ニ而、八九万兩之出方與見積り候而も、此節會所有金は四万六千兩餘之由故、四五万兩之御下ゲ金無之候而者、間ニ合不申候間、貸増之主法新規ニ存付候者、何分可然共難申候間、先ヅ是迄之振合ニ居置候方與存候、掛江申談候而、書面之通り之調出來申候、尤此主法ニ而は、外町々は相濟可申候得共、兩組同心持地之分者、是迄格外之貸附高ニ相成居、其上返納も遲引ニ候間、書面之通り、舊來之仕法ニ居置候而は難澀可致、就而は種々何かに事寄、兩奉行衆江も歎願可致哉ニは候得共、その爲ニ外迄ゆるべ、御金出方相增、非常御備手薄ニ相成候而は不宜候儀、いづれにも書面廻し之通、舊來類燒貸增之仕法ニ而居置、兩組同心持地之分ニ限り、別段仕法勘辨爲致候方可然義與被存候、

龍助

龍助殿御談之趣を以取調直し御廻し仕候　町會所掛（名〇人略）

借貸救急

江賣渡候樣可致、尤代金は請取候日ゟ日數十日之内ニ御役所江持參可致候、

但御拂米買下ゲ候分は、賣帳別ニ拵ヘ、三升以下買候者江計賣出、帳面ニ留置、三升以上買求候者江は、通例商ひ米賣渡候樣可致候、

右之趣不洩樣、舂米屋共江早々可相觸候、

巳八月

〔一話一言 七〕同〇天明八申年正月晦日京都大火諸書付寫〇中略

此度京都未曾有之火災、下々可致難義、不便之事に候、當分爲凌、米三千俵、銀六拾貫目、總町人へ拜借被仰付、唯今迄町人共奢に暮、無用之費多、外聞に拘り、遊樂を事といたし候趣に聞へ候、右體に及候間、此節に至り別而困窮増可申候條、以後右體之儀無之樣、質素相守り可申事、殊に町人共利潤無之候而は、商賣相續不致事に候得共、近年は別而人々差支を見込高下をなし、人々之難儀に乘じ候而、一己之利潤を求め候類有之哉に候、一旦利得有之候而も、天道に背候間、不時之損失有之事に候條、能々心得可申事、此節皇居も未御全備無之義に候間、下々は猶更艱難いたし質素に正道心得之、永代相續を心がけ可申事、

二月二十一日

根岸肥前守〇勘定奉行
山崎大隅守〇京都町奉行
池田筑後守〇京都町奉行
土岐主税
石川大膳

右難有思召之趣、松平越中守殿〇老中被仰渡候段、今廿一日、紀伊守〇大御番頭在京御目付土岐主税、石川大膳、京都町人共へ申渡候處、誠廣大之御仁惠之儀、一同難有申候に付、米金割渡方、其外之儀は、

出、上米の相場は七十兩以上なりき、夏御借米五拾二兩にてありしが、五月に入りて米價いよいよ貴く、百三四拾兩となり、今日を送る市人等、已に飢に臨めるもことわりぞかし、〇中略米穀拂底に因りて、津々浦々迄御救方の事、關東御郡代伊奈半左衞門に被仰付之、半左衞門計ひにて、大麥兩に壹石、米は兩に四斗の積りをもて、江戸町中へ御すくひ米あり、尤右代物は五日めに差出候へば、又候其跡の米麥ともに賣りわたし觸れられしなり、

〔蜘蛛の糸巻〕賢臣擧げらる

打ち續く荒凶ゆゑ、富農ども穀を出ださず、官柄にも動かし易からざるに似たり、されば國儲普からんとて、此年天明七丁未六月廿日、賢臣伊奈半左衞門當年二十七ぬきんでられて從五位下攝津守に任じ、御小姓組番頭格假に五穀運搬の總司令に命せられ、米穀買ひ上げの金子二十萬兩を降し給ふ、是他用ならず、市中御救のためなり、余此ときいまだ席に入らざりければ、國恩の一飯を喰し、ゆゑ、今拙筆に染むるはいと〳〵かしこし、伊奈殿總司と聞きて、富農ども招かざるに集り來り、穀路大にひらけ、時の相場にて買ひ上げ、價を減じて諸民にうりたまへり、官仁職備に感服して、諸國よりも穀船日毎に入津す、船印に伊奈の二字を染めたる幟を飄せり、依之米價追々引き下げ、六月兩に一斗八升の米、七月二斗八升、八月四斗二升五合、九月六斗八升より、僅に一二升上下して年終り、萬民喜躍して、春をむかへり

〔天保集成絲綸錄百六〕天保四巳年八月

町觸

此節江戸表有米拂底ニて米價高直之處、當月朔日大風雨後は、猶更高直ニ相成リ、市中難儀之趣相聞候間、格別之御仁惠を以、此度三拾五石ニ付、金四拾貳兩之積を以、御拂米被仰付候間、勝手次第町奉行月番御役所江罷出、鑑札請取之、淺草御藏江罷出、米請取、右相場に准じ、下直ニ小買之者

賑恤類救

四日市廣小路
神田佐久間町
入町堀松屋町

右三ヶ所へ御建被ㇾ下置、數萬人の難澀御救下さる、おん恵の廣大なる事知るべし、

丙午弘化三〇年正月十五日十六日兩日大火、焼だされの人々居ど立どにまよひ、こゝかしこにあつまりなきかなしむ、なんじうい ふばかりなし、

〔丸山出火御救一件上〕

神田佐久間町河岸
江戸橋廣小路
松屋町河岸

右場所江、此度大火にて、類焼之窮民共入置候御救小屋取建候間、勝手次第右小屋場江罷出、掛り之ものゝ江申立、小屋入可ㇾ相願ㇾもの也、

午弘化三〇年正月十八日　町會所

右之通、建札五拾枚、左之場所江建置、〇場所略、

〔丸山出火御救一件上〕以ㇾ書付ㇾ奉ㇾ願候

一此度大火ニ付、御小屋相立候ニ付病人有之候節療治仕度、尤昨巳年赤羽御小屋相立候節、河野良以門人共江被ㇾ仰付ㇾ候御例ヲ以、私江被ㇾ仰付ㇾ被ㇾ下候樣此段奉ㇾ願候、以上、

御目見醫師牧野雲元弟
牧野良元印

弘化三丙午年正月十九日

〔兎園小說十一集〕丙午丁未　著作堂〇瀧澤馬琴

天明七未年、打ちつゞきたる米直段、當春に至りてはますく貴く、春御借米百俵五十兩の張紙

方江預可置事、

右之通申渡候間、其旨相心得、組合限不洩樣可申達候、

申十月

〔青山出火類燒窮民御救一件上〕定

此度大火にて類燒いたし、難儀之もの共等の御小屋江さしおかれ、毎日御まかない下され、其上家業もとで錢をも下され候間、ありがたく相心得、日々稼方出精いたし、少しも早く居所才覺致すべし、三十日をかぎり御小屋出申付る間、其節に至り、難澁いたさゞる樣、唯今より心掛べし、

一火の用心嚴重に念いれ、心付申べく事

一酒一切相用ひ申間敷事

一公儀御法度は申におよばず、喧嘩口論、すべて男女相互に行儀相愼み、老人子供等別而いたわるべき事、

一病人等これある節は、早々申立候樣致すべき事、

右之趣堅く相守り、もし心得違これあるにおゐては、御小屋出し申付るもの也、

巳二月〇弘化二年、中略、

二月二日

伊勢守殿御直御渡御書取

覺

此度青山邊々出火ニ而類燒致し候窮民共、御救方手當行屆候趣相聞、一段之事ニ候、併度々之儀ニ而、小屋破損も可致儀故、夫等之處も心付、猶此上御救方格別行屆候樣可被取計候事、

〔見聞雜錄十一〕御仁惠御救小屋場所

午三月

類燒窮民小屋場引拂之儀相伺書付

主計頭〇町奉行、榊原、
伊賀守〇町奉行、筒井、
出雲守〇勘定奉行、土方、
忠五郎〇中川、勘定吟味役、

類燒窮民御救小屋ニ罷在候もの共之內、身寄等江立退候もの、此節迄ニ千三百人程も有之、殘三千七百人餘罷在候處、右之もの立退方、心任ニ致し置候而は際限も無之候ニ付、當月限りニ其小屋內立退候樣可申渡と奉存候、依之此段相伺申候、以上、

午三月

文化三寅年は三十日程ニ而小屋內引拂、去ル巳年は五十五日ニ而小屋內引拂、且此度日數之儀は、四十八日程ニ相成可申候、

〔天保集成絲綸錄 百六〕天保七申年十月

近年引續米價高直ニて、其日稼之者ども一統困窮および候處、當夏以來、追々米直段引上ゲ、必至與及難儀、家財衣類等迄賣拂候ても給續兼、住所にも離、及飢渴候程之ものは、此度爲御救、神田佐久間町河岸江小屋補理置候間、右小屋入申附候、尤朝夕賄之儀は、町會所より被下候間、晝之內は銘々出稼いたし、元手を稼溜、凡百候程相立日はゞ、銘々店持候樣可致、尤格別之御仁惠を以被仰付候儀ニ付、小屋內ニ罷在候內、風儀宜相愼罷在候樣申付、其外諸事町會所掛り差圖可致候間、其旨可存、且俄ニ住所ニ離、未行倒候程ニは無之、及飢難儀いたし候者有之候はゞ、召連可訴出候、

但窮民御救小屋江入候儀は、兩番所幷町會所江駈込、困窮申立候ても、元居町町役人相糺、實に及飢渴候程之儀、相違無之候はゞ、押切書付渡し遣、小屋入申付、尤右書付は、小屋場詰名付ども

救小屋

此度世上一統御救助筋ニ付、大奧女中之儀は、御恩惠ニもれ候委故、格別之思召を以、金五千兩被下置候、尤女中抔江容易ニ御金者不被下候思召ニハ被爲在候得共、此度之儀は、一統御救之儀ゆへ、右之通被仰出候間、右思召之所をも達し置候樣ニとの御沙汰ニ候、尤御金出方之儀は、大坂御用金を以可被取計候、

十二月

〔看聞日記〕應永二十八年二月十八日、抑去年炎旱飢饉之間、諸國貧人上洛、乞食充滿、餓死者不知數、路頭ニ臥云々、仍自公方〇足利義持被仰諸大名、五條河原ニ立假屋、引施行、受食酔死者又千萬云々、

〔武江年表 二〕明曆三年正月十八日、乾大風、未刻より本鄕五丁目裏本妙寺より出火、〇中略

觀吾堂集　江府回錄の後、假に小屋をまつらひ、みな人すむを見て、

よしといひあしとやいはむつのくにのこやせの中の寒さ冷しさ　吉川惟足

〔元祿救民記〕元祿十六年癸未の春に至て、餓人次第に増長し、一國忽艱苦に及ぶ、元祿十五年壬午七月八月兩度、風雨洪水、凶饉多し、先公義山〇土佐內家の御藏を開かれ、彼窮民を救給ふに、正月も過、二月に成ば、飢人彌多く、御小屋に入者二千餘人、其後米穀益乏しく、田地扣家藏持たる者も自然に窮迫す、去ども御救屋に入事を恥て餓死するもの又少からず、

〔天保五年御救一件大火之部〕午三月十八日、肝煎名主源太郎江申渡、

肝煎名主江

先月上旬、火災ニ而致類燒、差當り居所も無之、野宿いたし候者共、當分之內雨露を凌候ため、小屋を取建入置候得共、無際限可差置儀ニも無之、不遠內引拂候儀可申渡儀ニ候處、其節ニ至り、無存懸事之樣ニ存候類有之候も難計候間、銘々住所は勿論、家業取付方等、此節ゟ心懸ケ、追而引拂日限申渡候節、不及迷惑樣、小屋入之もの共江得と教諭可申聞置候、

九月十日

（天保七申年臨時御救一件）米價高直ニ付、其日稼之者共江御救米錢被下候儀申上候書付、

印　榊原主計頭　〇町奉行
同　筒井伊賀守　〇町奉行
同　土方出雲守　〇勘定奉行
同　田口五郎左衛門　〇勘定吟味役

此節追々米價高直ニ而、市中之者共及難儀候ニ付、右之者共江御救相渡候方ニ可有御座候旨、御内慮相伺候處、伺之通被仰渡候間、人別取調、渡方取調候樣、支配向組之者江申渡候、尤先例米價高直之節は、男壹人江一日米五合ツヽ、六十歳以上拾五歳以下之分、并女壹人江同三合ツヽ之割合を以相渡候得共、此度之儀は、米錢半々之積ニ而、男壹人江米。貳合。五勺。當時市中下白米相場錢百文ニ付六合之割を以、殘四拾文、六拾歳以上十五歳以下之者、并女壹人江米。壹合。五勺。錢。貳拾。四。文ヅヽ、日數十日分差遣候樣可仕奉存候、依て此段申上置候、以上、

申七月

（德川禁令考二十一後房女部）天保十四卯年十二月廿四日

女中江御救金被下候趣

大炊頭殿御直播磨守江御渡

戸川播磨守　〇勘定奉行
榊原主計頭　〇勘定奉行
佐々木循輔　〇勘定吟味役
立田岩太郎　〇勘定組頭

書面伺之通可取計旨被仰渡、奉承知候、

榊原主計頭 ○町奉行
筒井伊賀守 ○町奉行
土方出雲守 ○勘定奉行

巳九月七日

此節米價高直ニ而、市中其日稼之ものども及難儀候ニ付、身元相應之もの者相除、其日稼之ものども江、御救米差遣候樣可仕と奉存候、尤町會所年番肝煎名主どもより、總町之名主江爲申通、名主一支配限、其日稼之者人數爲書出、町會所圍籾之內、摺立白米ニ舂立、男壹人江一日米五合宛、六拾歲以上拾五歲以下之分、幷女壹人江同三合宛之割合を以、日數十日分差遣樣可仕哉、此段奉伺候、以上、

巳九月

覺

書面伺之通可被取計候事、○中略

米價高直ニ付、町會所御救米渡方之儀申上候書付、

榊原主計頭
筒井伊賀守
土方出雲守

御屆

米價高直ニ付、市中其日稼之もの江御救米渡之儀、伺之通被仰渡候間、市中人別調方、且町會所圍籾摺立白米舂立共、追々出來仕候ニ付、向柳原町會所、幷深川新大橋向町會所建添地兩所ニおゐて、明十一日ゟ御救米渡方相始申候、尤一日人數五千人程宛、晴雨とも相渡候積り御座候、御救總人數、幷白米渡高等之儀者、渡し方相濟候上、猶又可申上候、依之此段御屆申上候、以上、

一米諸色共御買上ニ而、堺町葺屋町米屋共江焚出申付、壹人前白米貳合積、握飯ニ味噌掛目凡九匁ツヽ、紙包ニ致、懸之者改、荷籠ニ而人足共ニ爲持、吉川町江持運、同所掛之者致差配、割渡、本所深川之方ハ、船之手分いたし、與力同心之内差添、呑水共配遣、右之通日々壹度ツヽ差遣可申事、

一焚出場所、與力同心六人、雇船之方與力同断、同心四人、吉川町差配方與力同断、同心六人懸相極、其外ハ日々手配可申付事、

一水引候上、右御救相止候共、老人病人片輪もの等ニ而、兼而困窮之上、住居潰、或者大破致、諸道具商賣もの押流、差當可取續様無之、及渇命候極貧之もの共江、男ハ一日壹人貳合、女小兒江一日壹合ツヽ、御救米三十日之積、前々通調之上可被下事、

天保二卯年二月六日

米高直ニ付御救米被下之事

此節米高直ニ付、町々困窮之者江爲御救、三歳以下之小兒ハ相除、男壹人江白米五升宛、六拾歳以上拾五歳以下之男、幷女壹人江同三升宛被下之

右之通被仰渡、一同難有奉頂戴候、仍如件、

天保二卯年二月六日

町々
家主連印

二月朔日より五月二日迄、町會所、靈岸島建添地、兩所ニ而御渡有之候總高、

白米壹万三百九拾五石八斗七升

人數貳拾七万八千三百五拾三人

口數九万百貳拾貳口

〔天保四年御救一件〕米價高直ニ付、其日稼之者共江御救米被下候儀相伺候書付、

大豆　　　　貳万俵

一江戸中町數貳千七百七拾貳町

一家主貳拾萬八千五百餘人

一人數百貳拾八萬五千三百人

内
男五拾八萬七千八百餘人
女六拾九萬七千五百餘人

外ニ
一座頭三千八百四十餘人

一出家五萬三千四百三拾人

一諸神主三千五百八十人

一山伏七千貳百三拾人

一壹万四千五百餘人新吉原人數

内
八千貳百人男
六千三百人女

外ニ
貳千五百人遊女かむろ

〆百三拾六万七千八百四拾餘人

〔德川禁令考救恤使二十八〕出水之節取計方手續之事年校合トアリ原注享和元酉

一吉川町江御救小屋、梁間三間、桁行拾五間、杉丸太建、總繩結、屋根苫葺、軒高八尺、四方掛拂、根太竹簀、無緣疊或莚敷貳ケ所、幷三人立雪隠二ケ所、葭簀苫葺、總圍竹矢來、入口壹ケ所外ニ焚出持運與力同心差配致候小屋、梁間三間、桁行拾間、仕様右同斷、軒高壹丈、三方葭簀張、桁行五間之間、根太竹簀、琉球無緣之疊敷、前通壹間之苫葺庇付、殘五間之所、土間之積、尤不足之節ハ建增可申事、

玉ふべし、平常の國費は年毎の入額もて辨じ、成たけ浮費を省き、金貨をおほく貯へ玉ふべし、かく貯へ玉へといふは、何のためなれば、第一は軍國の費用に備へ、第二は不虞の火災にて、御居城はじめ、城下の士民まで燒亡にあひて艱困せむに、これを賑救あらむがため、第三は日本國中に守護地頭を建置て、萬民飢渴せざらん設はあるなれど、またいかなる凶荒打續て、その力も及ばざる時には、上より守護地頭に力をそへて、それ〳〵に頒布して、救荒の政を施さむがためなり、これぞ天下の主たる者の本意なれ、かゝるをもて常年の入額何ほど餘分ありとも、あだに心得て、さまで功績なき者にみだりに新地與る事あるべからず、○中略その旨よく心得て、將軍にも申上よと仰られしとぞ、

〔德川禁令考救恤二十八條〕天明七未年五月

米高直ニ付御救米被下之事

鳥居丹波守殿○老中御渡

近來凶作打續、米穀高直之上、去秋出水以後、此節ニ至、米直段別而高直ニ相成、町々及困窮、下賤之者ニ至候而ハ、今日をも送兼候程ニ致難儀候趣達御聞候、依之格別之思召を以、御救之ため、御手當として米代金被下置候間、難有事存、此上猶亦致勘辨取續候樣可仕旨、名主共江可申渡候、右御手當金之儀ハ、御勘定奉行江申談請取可被相渡候、尤被下方等之儀ハ致了簡可被取計候、

五月

〔一話一言三十六〕天明七未年江戶御救金米

一此度飢饉にて、天明七未年五月、江戶中町家御救米並御救金高

御救金　貳万兩

御救米　貳万俵

古事類苑

政治部九十一

下編

救恤上

鎌倉足利幕府時代ノ救恤ハ、史料ノ徴スベキナク、今之ヲ考フル能ハズト雖モ、近ク德川幕府ニ至リテハ、記錄文書ノ稽査スベキモノ少カラズ、抑〻德川幕府ガ、直接ニ救恤ニ意ヲ用キタルハ、特ニ江戶ノ市民ニアリ、夫ノ天明七年ノ飢饉ノ如キハ、自存シ能ハザル市中ノ窮民、凡ソ百三十六萬餘、幕府ガ之ニ賑恤セシ金高二萬兩、米穀數萬石ノ多キニ及ベリ、凶年救恤ニ次ギテ、幕府ノ最モ意ヲ用キシハ、火災、水害、疾疫ノ三者ナリキ、卽チ市中ニ大水若シクハ大火アリテ、幾萬ノ窮民一時ニ其所ヲ失フコトアレバ、幕府急遽ニ令ヲ發シテ、便宜ノ地ニ數宇ノ假屋ヲ建テ、窮民ヲシテ任意ニ入舍セシム、之ヲ御救小屋ト云フ、而シテ數十日ノ間、之ニ飮食ヲ與ヘ、尙ホ自立シ能ハザル者ニハ、資ヲ給シテ生業ニ就カシムルコトアリ、之ヲ御救金、御救米ト稱シタリ、又市中ニ疾疫流行スル時ハ、藥餌ヲ施シ、米錢ヲ與ヘ、或ハ藥方ヲ敎ヘタリ、其賤價ヲ以テ糴穀シ、借貸シテ救急スルガ如キ、私物賑恤者ヲ賞スルガ如キ、略〻王朝ノ救恤ニ似タリ、而シテ當時諸藩ノ救恤ニ至リテハ固ヨリ一樣ナラザリシナリ、

〔東照宮御實紀附錄十二〕駿府へ移らせ玉ひし年の卜月、江戶へおはして、これまで江戶西城に貯へ置れし黃金三萬枚、銀子一万三千貫目を、そのまゝ將軍家へ進らせらる、その時江戶の老臣へ仰ありしは、これは御身の奉養にもちひ玉はず、天下の物とおぼしめして、このうへにも積貯へ

慶長二年三月廿四日

盛親在判
元親在判

之、

〔東大寺文書六〕德政事就澤秋山御對談事、至來四月可有延引之旨、先日雖牒送申候、依之諸方質屋不取質物候間、貧者之歎無申計候、立還無興隆之至候、所詮只如去年之掟當月中可有其沙汰候、至四月延引事不可有其儀候、此子細云寺中云鄕內、全能々被相觸候者、可目出之由、可有御披露于貴寺之由謹乞候也、恐々謹言、

二月十七日　沙汰衆等

東大寺年預五師御房

〔古文零聚六上卷〕進上東寺免輿在所　坂公文所

就今度德政之儀、京中御寺々樣、坂より免狀輿之分雖破申候、堅蒙□□以各前旨免後申入候上者、於向後□細不申入候、仍爲後證一紙進上候、殊ニ當所若狹方中作申候旨聞申入候狀如件、

長祿元年霜月十七日　坂總衆公文所花押

東寺輿在所申上

〔信長公記八〕天正三年乙亥四月朔日

被仰出趣、既に近代禁中御廢壞之條、從先年御修理の儀被仰付令成就畢、併公家方被及御忿轉の間、方々沽却の地村井民部丞、丹羽五郎左衛門兩人に被仰付、爲德政公家衆の本領被還附、主上公家、武家共に御再興、天下無雙之御名譽、不可過之、

〔長曾我部元親百箇條〕掟〇中略

一公領名田訴訟停止之事、付買地判形前德政右同前、判形無之地者可依奉公之忠事、〇中略

急度すまし可申候、利足六わりに相定申、ぶさたにおゐては、牛馬けんぞく、又いづかたにて成共、見合□えち物をめしおかるべく候、いらん申まじく候、此内壹人かけ申候共中としてそだて可申候、爲其仍如件、

文祿貳年ミノ六月廿六日

柳島 宮内助花押
大□ 右衛門丞花押
□ 甚五郎花押

荻生伊右衛門殿

〔香取神宮古文書纂 五〕借用申金子手形之事

合金子壹兩三分者、但小つぶ也、

右金子壹兩三分之子錢に、かなくぼの畑二まい渡しおき申候處實正也、何時にても、本金右合に請申候者、九月より十月之内請可申候、其間天下一同之はた返し、如何樣之義御座候共、右之本金壹兩三分、不相濟うちは、其方にて御てさく可被成候、本金右合相濟申候者、右ノ畑無相違御かへし可被下候、爲後日一札如件、

慶安三年刁霜月廿七日

賣主吉原村 檢非違使
口入 市兵衛
同 與七郎

宮中淸右衛門樣

〔親俊日記〕天文八己亥年七月廿五日庚申、一上下京諸土倉、今度德政之儀付而、御停止之旨被仰付、以政所公人開闔雜色、令相觸之、先以忝存候由申、先御五荷三種ヅヽ上進之、私へ三十疋ヅヽ、到來

永代賣渡屋敷之事、在所者山田浦口之内、

四至（限東堀殿之内方屋敷　限南界道　西四間五尺　限西世古道　限北光照寺屋敷　奥江拾九間之中）

右件之屋敷之事、永代雖知行、依有急用、直錢廿四貫文、浦口之ぬしや兵衛四郎方へ沽渡事實正明白也、設天下大方之地德政行共、於此地不可有他之違亂煩候、仍爲後日證文狀如件、

永正十五年戊寅十二月吉日　　榎倉小二郎果印

武親

二郎太郎殿

口入浦口之六郎兵衛門

孫　太郎殿

〔法隆寺伍師年會衙記錄〕文安二年乙丑十二月十五日評定云

一綱封倉借錢事、設雖有天下一同之御德政之儀、於向後之借錢者任契約加利、並隨員數必可有返辨者也、先年兩度之御德政之時、總別之借物悉無返濟之間如此、且先例當時依不叶、寮本秘計、忽及寺要支配闕如云々、所詮於自今以後借錢者、堅以可令返濟之旨、滿寺一同評定事切畢、仍爲龜鏡記錄而已、

于時綱封倉沙汰人　舜清花押

賴祐花押

五師所　良海（以下人名略）

〔荻生文書〕柳島宮內助等兵粮借用狀

借用申兵粮之事

合壹石貳斗者

右借用申所實正也、たとへ國がへ又ハとくせい入來候共此兵粮におゐては、無沙汰なく、本利共

延慶三年庚戌十一月廿八日

賣主　利綱判

同嫡子顯利判

○按ズルニ、前文ハ此賣劵ニ添ヘタル德政擔保證文ナリ、

〔尾張國妙興寺文書七〕沽却

尾張國中島郡山口保内靑木畠地事

合參町者四至界注文、在別紙、

右件畠地者、宗顯重代相傳之地也、而報恩寺佛物用途漆拾貫文仁限永代所令沽却于當寺也、於領家年貢者、任先例可有其沙汰、至地頭方年貢已下得分物者、寺家一圓仁可令管領給也、更不可宛申臨時課役已下萬雜公事者也、將又自公家武家雖出來何樣新儀御德政、於彼所者、爲佛陀沽却地之上者、不可有悔返之儀、若又宗顯子孫中仁背此狀致違亂煩者、可爲不孝之仁也、仍爲後證沽劵之狀如件、

貞和貳年丙戌九月十三日

民部權少輔宗顯花押

〔田中教忠所藏文書坤〕沽却　畠地立證文之事

合壹段者　在河内國八上郡野遠鄉萩原里廿六坪之内

四至限東黒石領　南他領
西大道井溝　北大道

右件畠地、元者、字後藤二郎重代相傳之地也、而今依有直要用、宛直錢陸貫伍百文限永代相副本劵四通令沽却阿闍梨覺密房事明白也、假令雖經子々孫々不可有他妨者也、兼又雖有御德政不可有煩者也、仍爲向後龜鏡立劵文之狀如件、

正平七年壬辰七月十一日

賣人　後藤二郎

〔輯古帖三〕定

德政擔保

〔嚴助往年記〕天文十五年十一月日、御法之德政制札被懸之、十月晦日云々、土一揆禁中江參致訴訟、先代未聞珍事有之、仍自武家其外所々御警固、武者被進之、從當門跡〇理性院一夜被進之也、不可思議子細共有之、是十月末之事也、

〔御湯殿の上の日記〕天文十五年十月七日、一きども、そふせうを申て、ぶつそうせひもなき事にて、とざまないへ〱　おとこたちこと〱く出こうあり、　八日、ぶけより御けいごまいらるゝ、あなたこなたより御ばんしゆどもまいる、

〔長享年後畿內兵亂記〕永祿五年三月廿九日、德政之札、松尾之鳥居打之、〇中略　又德政之札嵯峨釋迦堂大門、四月十一日打之、梅津正法院一揆等被破之、同十六日、一揆等悉上靑事院責、其ヨリ後日ニ、倉方責之、又自佐々木承禎德政之札、四月廿日比、洛中ニ被打之、京中德政悉行也、　八月二十五日、德政爲上意、同二十八日、被打高札、又自伊勢守被打白札、

〔東寺百合文書ナ十一至十五〕八幡西三昧田壹町賣進了、何樣煩も出來之時者、其明不事行者、以本直錢一倍不日可辨償者也、且公家武家號德政、雖有賣地買地之沙汰、於此名田者更不可致違亂、又沽却上者、作人分何にもあてられ候べく候、仍爲後日狀如件、

延慶三年十一月廿八日　　利綱判

嫡子顯利判

〔東寺百合文書ナ十六至二十二〕沽却私領田地事

合壹町者　在山城國乙訓下久世村內久世里十九坪五反　河依里八坪五反

右件田地者、利綱之重代相傳之私領也、而依有要用、直錢陸拾漆貫文仁限永代相副本證文三通所奉沽却平氏女實也、更不可有他妨者也、爲八幡宮西三昧田、每年錢壹貫文備進之外者、無萬雜公事地也、若何樣煩出來之時者、可明沙汰者也、仍爲後日證文之狀如件、

きこ、ろなし、

〔大乘院寺社雜事記〕文正元年九月十三日、一京都德政事、自一條至三條、任雅意諸大名打破土倉酒屋、取散雜物了、三條以下事ハ以本錢五分一可請質物之旨、自侍所相觸之云々、言語道斷次第也、

文正二年三月一日、一就德政事、木津土民致緩怠之間、來月ニ可有發向之由、寺門一同及神水、幷可申置地頭云々、就其尙々木津者共致緩怠、來十七日祭禮田樂裝束共自京都申下處、可相支之由支度及合戰云々、然間自昨日木津以下山城與當所一向不通、

〔宣胤卿記〕文明十二年九月十一日、自葉室有狀、先日爲德政土一揆出張之間、追却之處、今朝又蜂起、以前之間通路不可叶、明日番第二所役之事可存知云々、下邊物忩、言語同斷事也、　十五日壬辰、土一揆內野邊充滿、三條坊門東洞院放火、聊燒失、都護樂都院等來臨、被誘引之間同道、先行佛陀寺、次詣眞如堂誓願寺、路次所見及寺院民屋、口々或以土塗塞之、或以筵覆藏之、末代之至極可歎也、一條前黃來談入夜上邊土一揆物忩無極、一條高倉邊放火、酒屋土藏懸兵粮、伏見殿右府許等懸取酒肴料云々、希代事也、　十七日甲午、世間物忩同前、土藏等出質物云々、　十八日乙未、所々土藏就出質物、諸人競取之條頗物忩云々、

〔親長卿記〕文明十七年八月廿一日、邊土土一揆、有德政之儀云々、

〔大乘院寺社雜事記〕明應二年十月廿四日、一出雲公、去十九日上洛、昨日下向、去廿日より京都ハ德政之沙汰在之、廿一日則於西院邊倉方及合戰、大將細倉也、打負、高屋倉被打了、子負手、內者一兩人被打、聟負手、倉方迷惑也、自細川備後守ニ申付之、下地馬借之間、發入之由雖申之、無殊事、於于今者德政必定云々、

〔親長卿記〕明應二年十一月十六日、今日聞、土一揆爲德政閉籠日吉社、自山門衆徒等發向、大宮社以下灰燼云々、發入者也、

之聚、道路不通商估咸止、天下爲之憂、　廿三日、以路塞未歸靈隱而在木幡、德政之盜自宇治縣出者、攻木幡御堂修行某房、遂破之以火、之爲焦土也、　廿四日、余自間道歸靈隱、盜大聚攻洛、洛兵固禦之盜死者無數、盜破新熊野午枕庵、而悉奪其儲、　廿五日、盜燒京城、四邊鳴鐘鼓吹筒角、大騷動、細川之兵守城北門、山名一色土岐之兵、備南路之盜、京極赤松之兵禦東道、而大退盜、盜寇掠邊境、不獲入城也、　廿六日、官軍與盜攻戰、蒙瘢者多矣、盜漸沮云、　廿七日、盜欲破本寺、行力之徒急防之盜、乃退矣、

　廿八日、以諸路不通、米穀不至、僕告晨炊不給、余命羹糝之調、　廿九日、官軍愈熾、群盜稍竊其潛亡不過一二日云、　卅日、有號荷田者、群盜魁者也、聚凶徒保守於東寺、以官兵稍強、盜咸逃散、荷田乘淀河舟、而竄於紀南云、　十一月一日、群盜逃散、諸路已通、天下喜之、　三日、本寺之東班、以官命捕門前之行力、與盜同惡者、斬其首而出之於官、又逃惡者火其家者六七也、伏見里竹田村其令咸出賊首也、

　四日、官捕盜人之魁首號荷田者、斬之、以其首梟六條河原也、　十四日、小童周勤之伯父某、謀通德政之賊、下刑官之獄、其屬求余之救之、乃說春公、公又說刑官豐州守某、彼暫緩其刑以還之云、然而一二日際有之、則來囚心動、且俟十數日云、

(劫濁發心路記)文安寶德年中このかた歟、諸大名おの／＼一家の中よりあらそひ出來して、分國大亂かさなり來れり、しかるを和談の嚴制なく、おさふる政道をきかず、賢哲のまことにいらず、儒道のをしへになれず、つもつて應仁の亂となり、今洛陽の殘擲におよべり、まことに劫末の障災眼前せり、去年(文明元)は、つくしより義敏上洛とて、九重しづかならず、九月(當年)のすゑ、伊勢の守(○貞親)たひらく以後、河州よりゑもんのすけ(○畠山義就)洛をいで、はたけやまがたの亂逆しきりにおこつて、京中さわぎあへり、かのらんすいに、便風を得て、山崎にしの岡ふしみ、ふか草、淀、鳥羽、いげの土一揆等、夜な／＼に下京にあつまりて德政のかねをならす、酒屋土倉の譴責、晝夜の不聞なし、王城に德政さかんなればゐなかは申におよばず、都鄙の關鄉、月迫にいたるまで、天下やす

右旨於違犯之輩者、速可處罪科者也、仍下知如件、

天正十年十月　日　　恒興（○伊丹氏）花押

〔滿濟准后日記〕正長元年九月十八日、今曉當所（醍醐）地下人等號徳政蜂起、方々借書等悉責出燒云云、凡徳政事、自江州沙汰出也、八月以來事歟、以外次第也、此由先急申遣細川右京兆方間、即時奈良入道以下數百騎令入寺、灌頂堂以下警固、仍鄕民等不及嗷々儀各退散、地下悉打開了、次管領方へ申遣了、則得上意申付侍所赤松了、當職勢二百騎計山科に陣取、隨左右可入寺云々、

〔歴史徴 三十六〕正長元年行徳政

興福寺大般若經後語曰、去八月比ヨリ御徳政ト云テ、王城江州五畿內徳政ヲ行畢、河內國ハ廿一箇年田畠賣買等悉本主返畢、出擧利錢ハ札ノ錢トテ二文出、質ノ主取畢、借書皆主取畢、爰南都ハ、本三分一ニテ質モ借書トモ萬物本主取ベキヨシ定畢、濫支ハ自國他國破畢、

〔建內記〕嘉吉元年九月六日庚子、今夜○中略土一揆構籠洛中洛外堂舍佛閣、不被行徳政者、可燒拂之由訴訟之、○下略

〔管見記〕嘉吉三年二月九日、抑塔森船渡代官山本彌次郎、爲徳政張本人、（號徳政、取返永代沽却地云々、）爲管領成敗、淨井新藏人搦捕之、昨日誅之云々、仍彼在所代官職事、片岡次郎三郎望申之間、今日與補任了、鳥羽邊徳政張本輩、皆以逐電云々、

〔師鄕記〕康正二年九月十九日丙戌、坂本土一揆（號馬借）此間號徳政、閉籠八王子社頭、仍被催山門使節幷山徒等、被對治之間、今日發向、○中略

〔碧山日錄〕長祿三年十一月九日丁亥、群民會聚於城西、鳴鐘考鼓、求有徳政之令、其實便虐政也、故大相公（○足利義政）命諸大夫、是日誅其爲綱頭者、且毀燒其屋宅也、天下歡焉、

寬正三年十月廿一日、徳政之盜復起、自城外鼓譟而攻洛、官兵禦之、　廿二日、遶民鳴鐘伐鼓爲徳政

禁制

德政條々

右於土倉質物者、今更非沙汰限、至諸借錢預狀、合力請取、并所領永地年紀本物返以下事者、堅被制禁訖、若有違犯之輩者、可被處罪科之由所被仰下也、仍下知如件、

享德三年九月廿九日

飯尾肥前入道

沙彌在判

布施下野守

三善朝臣

十月二日、先度德政事、堅被制禁之、雖被打高札、於于今者、除永地、被棄破年紀本物返地等訖、早任請文之旨、以借錢十分壹、可被收納之由候也、仍執達如件、

享德三十月廿九日

飯尾下總守爲數在判

布施下野守貞基在判

二階堂忠行在判

〔親俊日記〕天文八年八月廿四日己丑、一德政之御下知之儀被仰出之、佐々木少弼殿へ御談合處可然由候間可申遣候、

今度上下京地下人、申德政停止之儀、佐々木霜臺返事被申上候、然者可被成下御下知候、恐々、

十一月十一日乙巳、一上下京德政停止、御下知賦百疋有申事到來之、

〔興正寺文書〕定

條々〇中略

一德政事制事

德政停止

ルベキ事、
一ボン、カウバコ、茶ワン、花ヒン、カウロ、カナ物已下、廿ケ月タルベキ事、付ブゲノタゲヒ、廿四ケ月事、
一米コク幷ザコク等、七ケ月タルベキ事、
右條々任二先例一、サダメオカル、トコロナリ、シヨセン十分一ヲサタセシメ、以二女白書一トルベシ、若コノヤク月ヲハ、セスギバ、ナガレ質タルベキ上者、德政ノサタニオヨブベカラズ、萬一寄二事於左右一、ガウ〱ノ儀ニオヨバヾ、オキテトイヒ、トリテトイヒ、共ニ以ザイクワニシヨセラルベシ、此外ノ借錢以下事、相互令二注進一、御下知ヲモツテ、其沙汰アルベキノ由、所レ被二仰下一也、仍下知如レ件、

永正十七年二月十二日　丹後守平朝臣
上野介藤原朝臣

〔妙法寺記〕大永戊子改元　此年以の外に大日でりに候、六月七月八月迄てり候、此年五月十六日に大雨降て、十七日に大水出て悉田畠を損す、○中略　賣買米二升五合、粟四升、大豆四升、小豆二升五合賣候、此年御上意より地下へ三年先はおしつぶし、其後をば本なしと御觸候、去間下衆なげきも有、喜も有、大概はなげき被レ申候、

〔親俊日記〕天文八年十月廿八日壬辰、一八幡四郷德政事付而、京中土倉御下知之事申之、但如何之由上意御伺之、御心得之由候間、賦松丹○松田丹後へ遣之、　十一月三日丁酉、一八幡德政事臼井トクヲ兩人御下知之事申之、貴殿へ五百疋堀市古口申之、賦百疋、禮二百疋、　廿日甲寅、一八幡德政之儀付而、重成懸二御下知一、自二社家一被二申請一之訖、

〔東寺執行日記〕享德三年九月三日、土一揆東福寺ニ寄入、其後東寺西八條寺以下、在々所々ニ陣取也、○中略

一はたけまん、まんまくうち敷、水引等事、可ㇾ爲二樂器類一

一太刀　刀　鑓　長刀　脇ざし以下事　可ㇾ爲二武具一

一目貫、かうがい、下緒、うでぬき等事、同前

一まくの事　同前

一茶わんのはち同さら以下事　可ㇾ爲二茶碗の物之類一

一つり鐘同ちやうちんの事　可ㇾ爲二金物類一

一藥種事　可ㇾ爲二雜具一

一鏡　爪刀事　同前

一とりかへの質の事　雖ㇾ爲二絹布一雖ㇾ爲二武具一後のをもちいらるべし、但於二不三利平一者可ㇾ爲二前々質物一

一革類事　革袖ぼそ、同はかま、足袋、前かけ、ゆがけ、きやはん、たちつけ、此外者可ㇾ爲二武具一

一とくりの事　可ㇾ爲二家具一

一すきくはの事　可ㇾ爲二雜具一

一銚子ひさげ、なべ、かなわ、包丁、菜刀等事、可ㇾ爲二家具一

一年ごろの事　有二本法一之條、不ㇾ及二德政沙汰一

一預狀事　可ㇾ依二文章一

一上錢事

一小袖已下ニ金物器そふる事　こそでは小袖、かな物はかな物の類たるべし、

〔建武以來追加〕定二德政一事 政所方、德政時制札案文、

一ケンフノタグイ、エサンノ物、諸籍ノタグヒ、ガツキノ具足、カグ、ザウグ等、置月ノ外、十二ケ月タ

ケ月物者七ケ月、但至二百文以下一者、但二一倍約月之旨一不及被執□之、

一質物取乎、或在國、或留之事、但非二土倉私質一

一失質事　於二无證據一者、可レ爲二盗人之咎一、有二札明一、於レ有二證據一者、以二質本錢一倍一可レ致二其辨一、

一去年正月廿七日質物札事　爲二小月一之間、不レ可レ流、爲二大月一者可レ爲二流質一、

一鞍　あぶみ　くつわ　刀革　切付　鞍覆以下皆具事　可レ爲二雜具一、

一戸たてぐの事付材木　無二先縦一之間可レ爲二雜具一、

一唐汁はいほの事　同前

一漆事　同前

一毛氈事付之氈　同前

一敷革事　同前

一牛同車事　車は可レ爲二雜具一、牛は可爲本物返□准據之間、可依主之□月、

一やげん事　可レ爲二雜具一

一佛具花ざら等事　同前

一大とのへはたの事　同前

一硯文臺等事　同前

一鈴物ひやし物等事　可レ爲二花瓶之類一

食物精進魚類等事　可レ爲二米穀類一

一仮○仮恐誤鋼事　可レ爲二花瓶香爐類一

一きんらん、どんす、からおり物等事、　可レ爲二絹布類一

一猿樂のおもての事　可レ爲二樂器類一

遠江前司 判 正任

陶尾張守殿

〔政所賦銘引付三〕一清泉大光明寺承欣書記 文明十三十一三

岡崎殿御被官平賀加賀增秀、以去年九月廿二日借錢四貫文、號德政巳前九月三日借物、申給五分一賦。。。。

云々、可預御糺明云々、

一加左將玉井藤左衛門尉長貞 文明十三十二廿五

曾我上野介致助方借錢事、於去年九月德政巳前分者不及力、至九月以後分者不及五分一御沙汰

之上者可被棄破事、无其謂之由申、

〔二水記〕永正元年九月十一日戊戌、今日爲武家德政之成札ヲ被打、　十二日己亥、今日處々質物、萬

人取之物忩、

〔長享年後畿内兵亂記〕永正元年、天下飢、多德政、

〔興福寺英俊法印記〕永正二年七月八日、就去年德政之儀、大安寺辰市美濃庄、對寺門致緩怠間、今日

六方衆、爲進發下向候、仍大安寺ハ、成身院依侘言、屬無爲候、　三年三月六日、今日成身院、其外自類

衆少々申合、大黑尾之大黑天神、先年德政以來谷ヱ堀倒置ヲ奉成御歸座了、

〔集古文書 提 三十七〕德政法條々 永正十七

一質物札なしの事　札ありに同前、但有相論之義者、可被打置之、又者於相論者、被召出土倉帳、可

有對決之、

一賣懸買かけの事　先規無其沙汰之條、不及德政之沙汰、

一替用脚事　同前 但官利平沙汰者、可德政行ハ、

一日錢事　於百文以上者、廿四ヶ月物者廿四ヶ月、廿ヶ月物者廿ヶ月、十二ヶ月物者十二ヶ月、七

れそむき侍らず、かすべしと申したる物は、皆そのほうへとりたまへ、但し此ふれにつきて、いたましく思ひ侍る事あれど、それも是非なし、かりそめに貴殿の御やどをかり侍る事、是時節也、今さら此家をかへすべき事に侍らず、さればむかしより久しく所持したまふ家なるべけれど、折あしく借りあわせ、妻子所從ひきつれ、たちのき給はん事、笑止に侍ると申せば、亭主もこれは理不盡の仰にて候と、あらそひけれど、とかくわたすまじといへるあいだ、かれこれ大事になりて、事行所へうたへ侍るに、家主をめされて、にくきふるまいかな、いそぎ立出候べし、嚴重の掟なれば、力およばず、大かた家をとられて、いづくともえらずのき侍ると、いひつたへたりとかたり侍し、家主がすこしのよくにふけりて、あさましき目にあいたるとて、その比天下の口に、わらはれしと也、

〔政所賦銘引付〕一松本大興寺雜掌（此事親元上洛之前より被仰候、仍不及賦之儀也、）
（清泉州）洞々倉七里親春被預置百貫文事、號合錢、稱先年德政之儀、不可返辨之由申候、
合治阿州（文明五十一十四）
（此事）同十一月十五日、於執事代官所、以總意見、如大興寺雜掌申落居候畢、

〔大內家壁書〕德政訴訟事
筑前國人之申、文明元年以來至長門國令渡海之仁、前々米錢借物事、悉不可返辨之由被仰出畢、但號取返質券之狀同質物等、自然及喧嘩鬪爭、至及國國忩劇者、爲不忠之族、云米錢主、云借人、共以可被處罪科者也、所詮雖不取返彼借狀、既如此御成敗之上者、於當年八月七日以前之借狀者、可爲永○（爲永之下恐有誤脫）不可立也、然者各不及論量之儀、無爲令相談者、可爲神妙之旨、可被相觸筑前國中之由所被仰出也、仍執達如件、

文明十年十月六日　播部助（判）房行

り、〇中略いにし比より、將命御敎書をねがふもの、武家の外おほくは、先德政たりとも、不易たるべきのよしを、第一にねがひのぞむとみへたり、たとへば今度何々品に就て、粉骨をぬきんで、御馳走申上ば、たとへ德政の法度、これ有といふとも、御下知のむねにまかせて、買得分の田畠並借せず、米錢、しち物、預り狀、永地之事、一切改動あるべからず、若相違犯之輩於有之者、成敗を加ふべきの狀、仍如件、およそかやうのたぐひおほし、又ある人の申けるは、去る文明の比の德政に、おかしき事ありしと申つたへたり、其比三條五條のわたりに、おほくの旅人とまり侍れば、にぎはしかりけり、此折から、德政のふれちかくあるべきとの風聞しけるあひだ、亭主の町人、よきつゐでなり、たからをもふけ侍るべしとたくみて、かの旅人の所持の物を、いち〳〵見て、このゐきざししばらくかしたまへ、此つゝみたる物は、何にて侍るやらん、くるしからずは、かし給へと申けるあいだ、旅客此事たくみていへるとは、夢にもしらざれば、やすきほどの御事なり、御用に立ん物は、何にてもかし申べしとうけがひける間、おほくの旅民の所持の具、ともに皆かしたまへといふ一こと葉をそへたり、かくのごとくして、一兩日もすぎ侍るに、案のごとく、公儀よりのふれなりとて、貝をふきたて、鐘をならして、辻々に德政の御法度ありとのゝしりける、そのゝち彼亭主旅人をあつめて、申けるは、さて〳〵うとましき事をも、申かけ侍るものかな、此德政と申は、かたじけなくも、うへさまよりの御觸也、此下知のこゝろは、何にてもかり侍ると申こと葉をかけたる物は、皆かりぬしへたまはり、かしたる物は、皆ぬしのそんにて、天下のかしかりを平らかに、ひとしくせさせ給ふ御法なり、されば此ほどかし給へと申物は、皆此ほうの物なり、是わたくしならず、則唯今の御ふれこれなりと、さもきら〳〵しう申けるに、旅人は、何のわきまへもなく、これはいかなる御ふれぞとばかりいひて、人々目を見あわせ、仰天して、とほうにくれて居たり、中にいとこざかしきものありて、罷いでゝ申けるは、よし〳〵たがひにくるしからず、うへさまの御ふ

權大外記康富申、綾小路大宮與猪熊之間南頰敷地事、糺明之間、置所務於中、來二日以前令出對、可被明申之由候也、仍執達如件、

康正元十一月卅日　伊勢守代　有家判
綾小路大宮酒屋　政所代　行久判

廿九日、今日奉(政所)行諏訪信濃守方ヨリ、猶間畠幷舊跡敷地、永代沽却之契約、棄破之御奉書整送之、依德政御法也、五分一可收納也、又兩所務可置中之由、召文二通同副送之、彼是祝著千萬、

〔蔭涼軒日錄〕長祿三年九月廿三日、觀音經之講在、赤松次郎法師新田三ヶ條之遵行之事、山名相州被召之時、其御禮服申之、聊披露之、次郎法師參而獻二千疋御太刀也、德政之事可被仰付之由、稱白之、

〔應仁記一〕嗚呼鹿苑院殿(○足利義滿)御代ニ、倉役四季ニカヽリ、普光院殿(○足利義敎)ノ御代ニ成、一年ニ十二度カヽリケル、當御代(○足利義政)臨時ノ倉役トテ、大嘗會ノ有リシ十一月ハ九ケ度、十二月ハ八ケ度也、又彼借錢ヲ破ラントテ、前代未聞ノ德政ト云フ事ヲ、此御代ニ十三ケ度迄行ハレケレバ、倉方モ地下方モ皆絕ハテケリ、

〔塵塚物語四〕德政之事

中古天下德政といふふしぎの法をたてゝ、我がまゝをふるまひきたれり、そのおこりをたづぬれば、世のみだれうちつゞき、軍產とぼしきゆへに、かれこれの商人職人の金銀をうばひ、あるひは借りとりて、そのぬしにかへさず、されぱとて、此事おとなしからざれば、彼の人のきく所も、うとましく思ひて、より〳〵此法をおこなふ、たとへば、かりたる物は、かしぬしのそん、かしたる物は、かり主の德となれり、これを一國平均の德政といへり、我國神代よりこのかた、かゝる無理なる法をきかずといへり、此事公方にはしらせ給はず、彼三職のごとき人のふるまひなりといへ

勢家、就借書、爲錢主可致催促之、次錢主與借主人之與同者、共可被處嚴科、此段儻令違犯者、可有異沙汰之由、被仰出之訖矣、

享德三年十二月十八日

(建武以來追加)一諸宗佛事物事康正元十廿八

於貳文子祠堂錢者、任本帳、難被准德政法之旨、被定置之處、或限宗體、或論利平之多少、申亂入條、太不可然、所詮任先度御成敗、不謂諸宗、至貳文子之祠堂錢者、不及子細歟、

(康富記)康正元年十一月廿二日、向諏訪信乃守忠郷許面謁、未出仕申云々、猫間畠、綾小路、大宮舊跡等敷地、永代雖沽却之、以他足可返辨之文言有之間、今度德政可返哉之由、相尋候處返答云、雖永代之沽却、再賣寄進、依可返辨文言、今度被付本主、御法勿論也、此等子細、多有之、不寫之、　廿八日、朝恩地、七條坊門朱雀與坊城之間、北頬敷地東西肆拾丈、南北廿丈、號猫間畠、事、限永代令沽却于其國寺、直河前舊跡綾小路大宮與猪熊之間、南頬敷地口東西六丈五尺、南北拾三丈餘、　永代令沽却于同在所酒屋北村、雖然自然煩出來之時者、以他足可辨償云々、於如此之類者、今度爲德政之法、被棄破訖、然早以借錢之伍分壹、被收納之、至彼所之者、如元可被全知行之由、所被仰下也、仍執達如件、

康正元年十一月廿七日　信濃守判　山城守判

權大外記殿

表書　權大外記殿　表書　山城守忠行

權大外記康富申、七條坊門與朱雀間北頬敷地猫間畠事、糺明之間、置所務於中、來二日以前令出對、可被明申之由候也、仍執達如件、

康正元十一月卅日　伊勢守代有家判　政所代、行久

其國寺

〔建武以來追加〕德政條々嘉吉元

一諸社神物付取明熊野諸要脚事

不可有改動之儀、但不載其社名者、難被信用歟、

一祠堂錢事限貳文子

子細同前、但不載祠堂方帳者、難被許容歟、

一永領地事

不可有改動之儀、但爲出錢主返狀之年紀之內者、不可有其沙汰之、

〔集古文書三十七〕相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

鶴岡八幡宮領內沽却地所々事、爲德政所返付也、停買得人綺、如元可被全社領之狀如件、

寶德二年十月廿九日　足利成氏花押

若宮別當御房

〔康富記〕享德三年十二月十八日、後聞德政大法壁書內、去十月廿九日條目、三ヶ條被改之、今日壁書被押改之云々、

〔集古文書三十七〕蜷川某藏

德政條々中略〇

一帶下知狀地事

於年紀本物返地者、可被返付本主、

一本物返地同屋事

子細同前中略〇

右條々堅被定置者也、早守此方、各申給奉書、可被收納拾分壹、於不帶奉書之輩者、不謂權門、不嫌

之道也、義之本也、事之奇通也、元凶未誅、舊惡未報、不似下小赦彼貪愚之所乞、以弭封內之啍々、以事彼大之爲上策也、況富者之散財、如臨河汲水、雖失有餘、窮者得金、如涸鮮之遇於濕、飲小爲生、若能如彼之所乞、窮者可以忘半年之患、富者涉於三年、儻亦能有所復於其舊焉、而後致其主於唐虞三代之治、以使其民樂其治、而醉於其化、於是乎黔首熙々於下焉、衣冠濟々於上焉、武作武之遊、文作文之遊、抃於市、歌於野、是則天下之心失焉而後得也、可謂德政有驗矣、天下豈有勢之失於德政之仁治焉者也、況社稷宗廟英靈、皤祠勢蔴、苟倘在上、必有所足爲者焉、區々鄙心、嚀敢克做于杞人之慮焉乎哉、

嘉吉辛酉年〇元季秋十一月五日

〔東寺百合古文書〕德政條々　嘉吉元年閏九月十日

一永領地事

任元亨例、過廿ヶ年者、錢主可領知、至未濟者、可被返付本主、但爲凡下輩者、不依紀年、領主可相計、

一帶御判并下知狀地事

既被經御沙汰之上者、不能悔還、

一賣寄進地事、不可有改動之儀、

一祠堂錢事、子細同前、

一本錢返地同屋之事、可被返本主、

一年紀沽却之地事、子細同前、

一質券地事、子細同前、

一借書事　付德政文章子細同前

一土倉以下流質事、過約月者、任法可爲錢主計、

冬將有死於凍、彼出金以利於汝之一冬、彼出穀以支乎汝之一日、方於此時、德彼如父、敬彼如主、彼何嘗哉、百計將不有利於彼之生焉、彼非徒富有、其金谷奇貨、以豐碩其口體、聚蓄其聲色、以肆盈彼之所欲而已、彼亦昔如汝之貧、一圭之物不妄使、一黍之粟不妄分、餒不敢自咱、冷不敢自衣、守之如城、僅克臻於茲焉、而後沾於親隣、賑於窮族、國用不足也、官吏不責汝而責彼矣、軍實之不給也、士卒不給汝而給彼矣、彼保愛錐末毫芒、以俟於家國鄉黨不時之備焉、脫龜筒而割生肉矣、彼獨何人乎、

僕切以爲凡治天下、仁以成經、義以成權、雖寬不可忘於義、雖察不可忘於仁、天下不可以無重望之大臣、天下不可以無遠謀之機臣、無遠謀不能以應時變、無重望不能以服衆心、必有重望大臣、而副以遠謀之機臣、內以仁與義守之、外以寬與察資之、四海可坐而觀於掌上也、況里下黔民、千鈞之弩、豈足老壁焉乎、眉山夫子之言曰、人能碎千鈞、不能無失聲於破缶、能搏猛虎、不能不失色於蜂蠆、吾請論之、天下之民、一富而十貧、十饑而一飽、衆勝於寡、少歸於多、古今之勢也、如人之治不起之沈痾、先證知其脈絡、而洞識其不平之氣下調之血、在肝在肺、在於心脾府乎臟乎、然後視君臣上下之品、投之藥、膏肓之○（之下恐脫疾字） 或其可起也、察彼情伺彼隙、不使彼知、而期彼於降矣、是不足多費術焉、今一細民之紛起、一富之竭乏、雖似小故、其弊有大可畏者焉、實其下而犯上之兆、上而受制於下之漸也、幸而無陳吳之伍之唾手而睨天者而已、烏知乎滑不知所止、有至於無所可奈之何者、可謂不飫之需也、嗚呼天下之爲天下、以勢焉耳、今夫庶民之從於士卒、士卒之從於將相、將相之從於一人、皆以勢耳、今且苟一失其勢、舉止不得其所、奸猾之流乘之、而桀紂暴於下矣、故曰、有暴主一人之暴也、天下無人主、天下之暴也、民以相殘、天下失心、繇此言之、是固蜂類之必不可不拂者也、經之常之理也、仁之不得止者也、昔者泰階和平、岳瀆封禪、惠於下民、專示恩、方聖主之升遐、念彼貧匱无告之民、下以均等之法、謂之德政、時又氣淳、予者不甚傷、得者不甚競、可謂上下順承、政令發於德矣、方今四海待治、府中之權、如磐石焉、奇計妙幹、神威雷行、天下之勢、實歸乎羽翼大臣之手矣、然大大小小、權

在山城國紀伊郡轆里卅三坪北繩本二反次

右件田者、兵衛尉久繼相傳私領也、而依有要用、限直錢拾玖貫文、相副次第證文、永代所奉賣渡智願御分實也、向後更不可有他妨、若不慮違亂出來之時者、本主並請人相共可致明沙汰也、尙以不事行者、不日本直錢於可令糺返者也、若及遲々懈怠候者雖預苛法之責、史付公私總別不可申異議子細、兼又近日關東御德政御式目風情之子細等任於事左右申出違亂候者、可被處盜犯罪科者也、仍爲後日龜鏡賣劵之狀如件、

永仁五年十一月十一日

賣主　兵衛尉久繼（判）

沙彌行蓮（判）

請人　れんまやう（判）

〔京都將軍家譜　上〕嘉吉元年九月、行德政、救貧民、（翱僧慧鳳作德政論）

〔竹居淸事〕德政論

人君代天立極、爲天下之心焉、蓋心以御萬物、人君以御天下也、唐虞之天下、樂唐虞之心、桀紂之天下、病於桀紂之政、（○此間恐脫桀紂之政四字）謂之暴焉、唐虞之政、謂之德焉、且夫人君以德重於上、則天下定於安矣、人君以暴重於上、則天下栗於疑矣、堯有不肖、舜有頑嚚、父不（○不下恐脫能字）得而傳之於子、子不能得而受之於父、一暴一德、不移而遠、天下有暴主、一人之暴也、天下無人主、天下之暴也、民以相戮、天下失心、況德政仁治之主乎、昔宋大宗皇帝、謂宰臣趙某曰、今南北征伐交發、一假寐非朕之心也、朕聞海外有國、國主南面、而居其所而已、凡百司之務、佐扶之良、舉以總矣、朕甚羨之、皇朝府公之權、與人君半、府公若有梁頽之變、則赦放罷市、於是細民之奸猾者、乘以爲不飫之需矣、金谷之周於急者、土壤之需於人者、質躬成良家之隸皂者、黨附氣應、群呼而類和矣、一鄉于而萬鄉嚮矣、滔々皆是、富兒鼠走、貧男蟾睨、戈矛四攻、殆將頽於山丘、謂之德政、嗚呼是何哉、昔汝之梁、朝將无繼於事、汝之眼、

〔天地歷代根元圖〕永仁五年、一天下の御德政を行はる、是德政の始めなり、沽却の田畠其外質物悉歸本主、

〔東寺百合文書 ヒ 五五至六五〕讓渡進相傳私領田事

合壹段者 在山城國紀伊郡佐井佐里廿五坪自南四反目

右田者、友吉相傳私領也、爰藤原氏女由緒甚深之間、限永代相副本券六通所奉讓渡實也、但親父西妙於讓狀者、依有地類不相副之、仍裏書了、更不可他妨之狀如件、

永仁五年六月廿三日　野部友吉 判

關東御德政間、讓狀並賣券二通ニ給也、

○按ズルニ、右ハ讓狀ト賣券ト二通ヲ製シテ、以テ德政ヲ免レントセルモノニ似タリ、此ニ示ス所ハ讓狀ニシテ賣券ハ次ニ示ス所ノ如シ、

〔東寺百合文書 ヒ 五五至六五〕賣渡進私領田事

合壹段者 在山城國紀伊郡佐井佐里廿五坪自南四反目

右件私領田者、親父沙彌西妙重代相傳私領二反內也、而依有直要用、直錢拾貫文仁限永代相副本券六通藤原氏女仁令賣渡進處也、但所載券文二反之內、自南二反目五反目等者、西妙存日之時、讓與息女二人了、而於中四反目者、友吉讓得之了、而於讓狀者、依有地類不相副之、仍裏書了、若千万一仁違亂相違出來之時者不過廿ケ日可令辨納本直錢拾貫文者也、仍爲向後龜鏡新券狀如件、

永仁五年六月廿三日　賣主　野部友吉 判
口入　野部氏女 判

〔東寺百合古文書 五〕沽却私領田事

合貳段者南堂院領　於所當分限者見于本券文

德政例

〔蠹簡集五〕土佐國香美郡赤岡今村庄右衞門藏

今村忠兵衞方次留田宮之爲造營俵物壹俵正福寺へ預置由尤候、氣遣神妙候、至此木いかやうの德政新規申候とも、さうゐあるまじく候者也、仍爲後日如件、

天正十七年八月廿日　親氏花押

今村忠兵衞方

〔親心寺文書六〕今度從信長樣當國德政之儀被仰出候、然者如我等之仁等爲御使節上河内之分在在所々悉棟識候事被仰付候條、只今其御寺へも可致參入存候刻、從先規御不入委承候、殊更碓井因幡守殿爲御取繼、自往古彼寺之儀者、諸事御免除候子細蒙仰候之間、則承知同心申致不參候、於此上候而者、彌諸篇向後何之儀も疎略申儀有間敷候、恐々謹言、

正月廿九日〇天正四年　下村源左衞門花押

光順花押

八木新九郎

親心寺御總中

參玉床下

〔新抄〕文永元年正月三日己卯、今日被召德政之意見於人々、

〔勘仲記〕弘安九年十二月一日癸巳、傳聞、今日德政評定、殿三公、大納言等參仕云々、　三日乙未、早旦參院、雜訴定也、大臣、大納言、德政御沙汰、毎月一日、十一日、二十一日可被參仕云々、　廿四日丙辰、近日德政興行、無先規歟、一、十一、廿一日等德政沙汰、大臣、大納言等許、　閏十二月一日癸亥、不出仕、今日德政評定、殿下幷三公御參云々、官員數有其沙汰云々、

〔北條九代記下〕永仁五年三月六日、被止越訴、但本所事一箇度被許之、質劵賣買地可被返本主、凡下買地不依年紀、利錢出擧不及沙汰云々、

〔尾張國妙興寺文書五〕永代賣渡申下地之事

合壹段者在所（東限耕雲地、南限不動寺地、西限瑞芳地、北限耕雲地）

右彼下地依有要用、祠堂錢五貫五百文、本證文於相副、永代不動寺へ賣渡所申實正也、縱雖天下一同新儀御德政成下、於彼下地者、不可有回變之儀候、自往古諸役等全无之、然上若又致違亂煩輩出來バ、如諸堅被爲罪科可申、仍爲後代賣劵之狀如件、

康正元年乙亥十一月三日　　宗文花押

〔長享年後畿內兵亂記〕永祿五年九月十二日、公方德政雖被懸之、三好筑州依訴訟、德政不行、至十二月、以公人、洛中洛外至邊土、德政不行旨、被相觸者也、然間倉役各出之也、

〔伊勢國鹿海妙高寺古文書〕永代賣渡申畠之事

在所しやうかいと（東限大湊善八郎殿畠、西限大湊喜八郎殿畠、南限道、北限大湊又二郎殿畠）

右依急用有、直錢金貳兩仁賣渡申處實正也、若天。下。大。法。德。政。行候共、於此畠違亂煩在間敷者也、本所當壹石にて候、爲後日書文如件、

天正六年戊寅五月十七日　　大見なと四郎二郎花押

口入竹鼻新右衛門

〔政所賦銘引付三〕一木幡眞光院雜掌（文明十二六七）

明家法眼契約料足事、一亂中號私。德。政。可令棄破云々、非御成敗之上者、可被加御下知之由申云々、

〔壺簡集四〕土佐國安喜郡安喜輔茂兵衛藏

私德政事、曾以不可破候、惣口一同之德政之時者、可任其時宜候也、

天正十三年正月三日　　親泰

今村與介かたへ

德政雜類

〔吾妻鏡八〕文治四年四月十二日戊寅、院宣等到來、或自是被申勅答、或始被仰下條々事也、

院宣云○中略

近曾天變地妖、連々有奏聞、是則人愁重疊之故歟、妖不勝德、不可如德政、謂德政者、以宥人愁、可爲先也、存此旨、殊令致沙汰給者、四海靜謐萬民歸仁歟者、院宣如此、仍執達如件、

三月廿八日　太宰權帥藤經房奉

謹上　源二位殿

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年六月十六日、美濃國飛脚參申云、去九日辰剋、當國蒔田庄白雪降云々、武州太守令怖畏給、可被行德政之由、有沙汰云云、

〔吾妻鏡三十〕文曆二年元年○嘉禎三月十六日己酉卯剋大地震、今日依天變地妖等事、可有御祈禱德政等之由、於武州御亭有其沙汰、師員朝臣爲奉行云云、

〔吾妻鏡要目集成一〕此頃の德政は、民庶の愁を除き、行仁政を德政と云、至室町家之末、令を下して、民に愁をいだかしめ、上に利を得るを德政と云、

〔大樹寺法式〕一祠堂錢借曳之年米錢三和利二文子ニ相定上者、縱天下一同之德政、國次之德政、私德政、雖入來、令除之事、

天正七卯三月廿一日　御諱花押

大樹寺勢連社磨譽上人

〔建武以來追加〕一定德政事嘉吉

右可爲一國平均沙汰之旨、被觸仰畢、可令存知之由、被仰下也、仍下知如件、

嘉吉元年九月十二日　中務少輔源朝臣

〔京都將軍家譜下〕享德三年、是年一國平均德政、

名稱

古事類苑

政治部九十

下編

徳政

徳政ノ稱ハ、仁政善政ト一般ニシテ、中古王政ノ世ニ當リ、天災地妖ヲ始トシ、異常ノ事アリテ租ヲ蠲キ、刑ヲ緩クシ、仁ヲ施シ、徳ヲ布ク每ニ、特ニ此名ヲ用ヰ、鎌倉幕府ノ初ニ於テモ、其行フ所仍ホ中古ノ政ト異ナラザリシガ、其中葉以降ニ至リテハ、大ニ往時ニ反シ、負債ヲ債主ニ償ハズ、質物及ビ賣買地ヲ本主ニ還サシムルヲ以テ徳政ト稱セリ、故ニ債主若シクハ田畠ノ買主ハ、其負債者、若シクハ田畠ノ賣主ヨリ、徳政擔保ノ證書ヲ請取リ、又ハ賣渡證文ト讓狀トノ二通ヲ製シテ買主ノ便宜ニ供スル等ノ事アリキ、而シテ足利幕府ニ及ビテ、其弊ヲ極メ、負債者ハ、債額ノ十分ノ一、或ハ五分ノ一ヲ政府ニ納レ、政府ヨリ奉書ヲ得テ證左ニ備フルニ至リ、貧民保護ノ名ノ下ニ、政府自ラ利益ヲ獲得スルノ計ヲ爲セリ、是ニ於テ徳政一揆ナド稱ヘテ、暴民四方ニ肆行シ、他人ノ財物ヲ掠奪シ、或ハ政府ニ逼リテ、徳政ヲ行ハシメントスルニ至レリ、而シテ徳政中ニ於テ、天下ニ普ク之ヲ行フヲ一國平均ノ徳政、又ハ天下一統ノ徳政ト云ヒ、其他一國ニ限ルアリ、京中ニ限ルアリ、公領ニ限ルアリ、又大名等私ニ之ヲ行フモアリシナリ、嘉吉文安ノ比ヨリ文明應仁ノ際最モ盛ニシテ、天正文祿ノ比ニ至テ稍衰ヘタリ、徳川幕府時代ノ棄捐ハ、其濫觴實ニ此ニ在リキ、

〔運歩色葉集 登〕徳政

江戸内同様、在方にても右質屋に准じ、夫々定例之咎申付候様可仕率存候、

但本文申上候は、町人百姓之儀に而、軽き御家人武家之家來、幷盗物と不存、質置主證人等に相成盗賊被召捕候儀を承り、或は怪敷儀と心得、頭支配其主人等江申立、支配より掛率行所江申立候得ば、御咎弛候先例數多有之候間、右は只今迄之通相心得罷在候、〇中略

申十二月

不存預り置候類も、盜賊被召捕候儀承、訴出候分は同樣に候哉、致評議可申上旨、御書取を以被仰
聞候、
此儀、安永九子年、江戶內質屋組合人數相極、取締被仰付候に付、品川宿、內藤新宿板橋宿、千住宿
共、江戶內同樣取締可被仰付候得共、右宿々は、支配場も入交有之、其上近在百姓に而、質物取候
儀、差留候儀も差支有之趣に候間、是迄之通差置可申、幷紛失物吟味等不行屆儀に候間、以來紛
失物町觸致し候節は、其度々右品書御勘定奉行江相達可申、早速右宿々在方迄相觸、似寄之品
有之候はゞ、添簡に不及、直に町奉行所江訴出候樣可相觸旨御勘定奉行江被仰渡候間、得其意、
御勘定奉行江可談旨、松平右京大夫殿、〇輝高、老中、町奉行江被仰渡候に付、御勘定奉行江も申談、則
右四ヶ宿最寄在方江は、御勘定奉行より兼而申渡置、町觸之儀町奉行より相達候得ば、早速相
觸候儀に付、右之場所は、盜賊被召捕候儀承、訴出候共、江戶內質屋同樣咎可申付心得に候得共、
右宿々最寄を離候在方は、紛失物等有之節々、村觸致候儀にも無之、一體場廣之事故、外々之取
沙汰等承、訴出候も稀之儀に付、右在方之分は、去ル巳年御渡被成候御書付之通に而可然段申
上候得共、御書取之趣を以、猶又評議仕候處、前書四ヶ宿幷右最寄在方之分、盜賊被召捕候を承、
訴出候而も、咎申付候上は、右最寄を離候在方之分計、咎不申付候は、其度々取計方も紛敷樣相
成可申、前書に申上候通、四ヶ宿最寄を離候在方は、盜賊被召捕候を承、訴出候も稀成儀に付、訴
出候共、不取上候而も、差支之儀も無御座、江戶內同樣に極置候方、却而後來之取計、紛敷儀も無
御座可然哉に奉存候間、以來は在方質屋共も、盜賊不被召捕、幷吟味にも相成不申以前、外々之
取沙汰承及び候歟、亦怪敷品と心得訴出候分は、村觸之節、訴出候に准じ、咎は差免、盜賊被召捕、
又は吟味に相成候を承、訴出候共、一軌に定例之咎申付候積り極置、勿論在方之分は、一判又は
無判之無差別、過料錢三貫文申付候儀は、是迄之通相心得罷在候樣可仕、且質置主證人之儀も、

參訴出候故、質屋共御咎に相成候儀、先者無之、邂逅之儀に御座候、尤右不束之段者、度々町觸も有之候處、今以盜物等質に取候儀者不相止、右者假令盜物等質に取候とも、盜賊吟味之節訴出候得ば、質代損金迄に而事濟候儀と推量り候故之儀、其上質物札方等之儀、町觸には嚴敷申付、吟味之上は、每度同樣咎之沙汰不及段申渡候も失體に而、甚如何に奉存候、依之再應評議仕候處、質屋訴出候より、盜賊相知候は勿論、不被召捕以前、町觸之節等訴出候歟、或は外々之取沙汰等承り訴出候質屋者、質代損失迄に而、咎は不申付候積り、其外盜賊被召捕候以後訴出候分は、質代損失之上、一判或無判、夫々定例之咎申付、且質置主證人に罷成候者共も、是又右質屋に准じ、夫々咎申付候はゞ、旁以來之取締にも相成可申哉に奉存候、依之相伺申候、

但在方質屋共之儀は、江戸表と違、質物札方之節々、村觸等致し候にも無之、場廣之事故、盜賊被捕候儀承り訴出候得ば、咎は無之儀と推量り候類も無之筋故、在方之儀は、去ル巳年御書付之通にても差支候筋有御座間敷奉存候、

以上

未十一月

寛政十二申年二月

在方質屋咎之事

盜物と不存質に取候在方質屋、幷質置主證人、又は右品預り置候もの等御咎之儀評議仕候趣申上候書付、

評定所一座

盜物質に取候質屋共自訴之儀、去未十一月相伺候通相濟候、然處在方は被捕候儀承、訴出候而も、是迄之通、自訴取上に相成候得ば、場所に寄、區々可相成候、假令ば品川宿邊入交候所にては、隣家隣町に差別有之、如何ニ候間、在方之分は、同樣に相成候方には無之哉、且質置主證人、或は盜物と

一古著屋、古著買、古鐵屋、古鐵買共も、前書之品々者、同樣之取計を以買取可ㇾ申候、

右之趣、急度相守可ㇾ申候、若相背き、不埒之質取方、幷買取方致於ㇾ相顯ㇾ者、嚴重之咎可ㇾ申付ㇾ者也、

四月

〔德川禁令考後聚二十六行刑條例〕寬政十一未年

質屋手代幷主人咎之事

一紛失物と不ㇾ存候得共、仲間定法相背、無印に而質物取候質屋手代、五十日手鎖、主人は右品取上ゲ、過料錢五貫文、

右之通、南御役所〇江戸町奉行所に而は、前々より仕來候處、北御役所にては、手代は同樣五十日手鎖、主人は品取上ゲ過料錢三貫文に而、御役所は一體に有ㇾ之處、右體取計方不同有ㇾ之候而は、如何之由に而、土佐守、肥前守評議之上、以來北御役所之通、手代は唯今迄之通、主人は品取上ゲ、過料錢三貫文、尤主人直取は、是又只今迄之通、過料五貫文、

但本文兩樣共訴出節は、寬政九巳年九月七日、一座伺濟之通、咎は差免候事、

右寬政十一未年五月十八日、北御役所內寄合に評議極、

寬政十一未年十一月廿四日

盜物質に取候質屋幷置主證文御咎之儀に付申上候書付

書面伺之通可ㇾ仕旨被ㇾ仰聞、承知仕候

未十一月廿八日　評定所一座

質取方不念之質屋共、去々巳年九月御渡被ㇾ成候御書付之通、訴出候分は、有判無判之無ㇾ差別、質代損失申付候迄に而、過料者差免し候、然處町方之儀者在方と違、盜賊被ㇾ召捕ㇾ候得ば、直に自ら右之沙汰相聞候故、其盜賊共、直に引合候は勿論、手を越、質に取候ものども、其掛々之御役所江其品持

利兵衛と申者へは不遂對談も質物取置候處、吟味に可成品之由及承、清大夫方江質物相返し、質代金預ケ金證文に致し取置、其上此度遂吟味候處、質帳面末に記し置、紛失物町觸申付候節引合せ吟味も不仕様にいたし置、旁不屆に付、家財取上江戸拂、

（德川禁令考後聚二十六 行刑條例）寛政九巳年九月七日

質取方不念之質屋御咎書り之事

質取方不念之質屋御咎之儀、御書面之通可相心得旨被仰聞、承知仕候、

巳九月　評定所一座

一壹判、或は一人何判之質物取候質屋、　質物取上、過料三貫文、

一無判に而質物取候質屋質物ハ取上、過料五貫文、

一町觸之節、幷吟味之儀承り訴出におゐては、一判無判之無差別質物は取上、過料は差免、

一在方質屋は一判、一人兩判、或は無判に而も、質物取上、過料三貫文、

但訴出におゐては、過料は差免、

一在方にても、質屋組合江入候分は、江戸質屋と同斷、

（德川禁令考後聚七 觸禁布令）寛政十午年四月

質屋共諸器具取扱幷古衣類等賣買取締觸書

質屋共儀、不埒之質取方致間敷旨、先年より度々相觸候處、近年等閑に相心得、毎度盗もの質に取、其上武士方看板物等、或は合印等有之品迄も數多質に取、幷武具之類をも、身分不相應之ものより、得と出元も不相糺、猥に質に取候類有之、不埒之至に候、以來武具之類、其外格別手重成品、幷合印有之看板物奥印取之候上質物に取可申候、且又合印無之看板物にても、質置主身輕き奉公人體に候はゞ、證人之奥印を取候而質に取可申候、

右同年四月八日、伺之通御下知、本文極、

（貼紙）是は此度評議之上相極申候

延享元子年八月、大岡越前守、島長門守、水野對馬守伺之内、

質物出入取捌之事

一（極）壹人兩判之質物を取置、吟味に可成品之由承、質物相返し、預金證文に仕直、其上質帳不埒にいたし候質屋、　家財取上　江戸拂

（朱書）是は寛保元酉十一月、船松町一丁目伊兵衛儀、松平遠江守足輕小堀清大夫任頼に、出所も不承札、清大夫兩判渡候故、證人利兵衛（缺）は不逢、對談も質物取置候處、吟味に可成品之由及承、質物相返し、預ヶ證文に仕直、其上質帳危末に記し置、紛失物町觸之節、引合吟味も不成樣にいたし置、不屆に付、家財取上、江戸拂可申付旨、十一月廿二日、本多中務大輔殿被仰渡候處、伊兵衛儀病氣に而、申渡延し置候處、同廿五日病死、

（貼紙）是は唯今迄之取計を以相極申候

右同年八月十七日、伺之上御下知、本文極、○中略

船松町一丁目　久右衛門店　質屋　伊兵衛

寛保元年酉八月廿四日入牢

右伊兵衛儀、松平遠江守足輕小堀清大夫頼候に任せ、出所も不承札、清大夫より兩判渡候故、證人

質屋處罰

午
二月

〔德川禁令考後聚二十六行刑條例〕正德三年年

紛失物町觸之節、隱し置候もの、

小石川御箪笥町
質屋中右衛門手代
儀兵衛

右儀兵衛事、去年十二月廿四日之夜、竹山新十郎妻殺害せられ、衣服等被盜取候、然に依て、支配所より、其衣類之品々、書付を以、質屋共江相觸候處、質物之中、其書付に記され候もの無之由を申、其後相尋、もの有之に及び、小袖壹質に取置候事相知、奉行所江申出、最初帳面に、小袖紋所之事記し不置候故に、心附無之由陳申と云へ共、總じて質物取方之事相定、處法嚴密に有之、其上盜物之事被相尋候に其事を輕んじ、其心を不用候次第、罪過重疊し候、然れ共、すでに奉行所江申出候事に依而其罪を宥、追放之重科におこのふ者也、

〔德川禁令考後聚三十四行刑條例〕質物出入取捌之事〇中略

一利足相濟置候質物、可請戻旨申候得共、賣拂候由に而、其品不渡質屋、

質物爲請戻
過料

極
但質物賣先不相知候はゞ、元金一倍之積り代金爲相渡、過料可申付事、

朱書
是は元文二巳年正月、下總國窪田村幸助所持之衣類品々、去卯三月、同國小生川村新五右衛門方江質物に入、元金五兩貳分借請、去辰五月爲利上錢六貫文相渡、當時可請戻旨申候處、賣拂候由に而不爲請戻、不埒に付、買戻可爲請返候、若賣先不相知候はゞ、都而質物は、元直段より過半下直に取候通例に候間、元金一倍之積、爲質物代置主江相渡、右之内に而元金可引取旨質屋新五右衛門に申渡、

京割符年寄 三宅壽圖
同 津田勘兵衛

今度右貳人江質物改役申付候、京割符仲ケ間之者共相勤候間、可其旨存候、總て質屋古手屋共商賣之筋、紛敷品無之樣に可致旨、前以度々申付候處不相用、猥に相聞江候、且又紛失物等有之節、度度相觸候得共、其品分明に不相知候、畢竟質屋仲ケ間之外に、近年内々にて諸色入替と名附、或は賣切之仕期にて、隱密に質物取候者共多く有之紛敷候、吟味不行屆故と相聞江、不埓に付、向後相定候質屋之外、右之仕期にて質物取候義者令停止候、若左樣之義於有之者、其品不殘可取上候、近近右會所相極候上にて、質看板請取、向寄次第組を分け、胡亂成質物、一切不取之樣可申合候、改方之義、并會所出張等之儀は、吟味之上追て可申觸候條、此旨洛中洛外質屋古手屋共江可相觸者也、

享保十七壬子歲十一月晦日

右之通相觸候樣に被仰渡、申觸候、以上、

五十嵐源吾

質屋帳簿改

〔天保集成糾繪錄九十九〕寬政十一未年正月

加役方組與力同心、盜賊手掛に付、以來町々名主方江罷越、質屋帳面相調候儀有之候節、紛敷儀無之ため、町奉行所之鑑札加役方江渡置、町々名主共方江も、右合鑑札壹枚ツヽ相渡候間、加役組之もの、名主方江質屋帳面取寄爲改可申候、たとへ度々罷越見知り候ものにても、其度々鑑札引合候上、質屋帳面爲改、無鑑札之ものには、決而爲改申間敷候、若無鑑札に而可改旨申候はゞ、其旨相斷、承引不致候はゞ、留置可訴出候、勿論加役組改に參り候度每、右之始末、月番之番所江可訴出候、尤名主宅江質屋帳面取寄爲改、質屋江罷越改候儀者爲致間敷候、

右之趣急度相守可申候、且名主替等之節者、渡置候鑑札、月番之番所江持來可改受候、

年に一度宛相改候、然處寶永六丑年多より相止候事、

〔諸問屋幷商雜類編〕元祿十六未年十二月

一今度質屋幷古着屋總代相止候付、向後紛失物僉議之節者、町年寄江申渡之、每度可相觸候間、支配之町切、名主共質屋古着屋共、委細遂吟味、紛失物不隱置申出候樣に證文取之、相知れ候はゝ僉議懸りの番所江早々可申出之、此以後質物取置候節、彌入念請人取置可申候、尤質屋數定置、其外猥に質物取申間敷候、勿論利足之儀、總體高直に不致樣、只今迄之通可相心得之、且又古着商賣之儀も、是又證人を取、紛失物不致、商賣振入念可申付之候、右之趣令違背、紛失物等吟味之節隱置候段、若外より相知候はゝ、其町々名主可為越度候、以上、

十二月

〔享保集成絲綸錄三十六〕元祿十六未年十二月

一近年質屋總代、古着屋總代と申者相定、盜物其外紛失物詮議之節、右之者共申付、商賣人之方を令吟味候、然處質屋總代、古着屋總代相止候之間、向後は古來之通り、右之類僉議之節は、其所之名主支配切に可申渡候間、急度遂吟味可申候、兼々右之通り相心得候樣に可申渡者也、

十二月

〔寬曆集成絲綸錄二十八〕寬延三午年二月

質屋共より爲目百錢宛取立、質屋總代可相極旨風聞有之に付、町中質屋共、質物之取引差支有之樣相聞候、左樣之儀者、曾而無之事に候間、以來質物之儀、無差支取引可仕候、此旨質屋共江申聞置候樣可申渡候、

二月

〔質中間定帳〕覺

候節、御觸書之寫、

堀川通御池上町 藤屋六兵衛
河原町通三條下町 大和屋源左衛門
新町通二條下町 高島屋六郎兵衛
鉄屋町・三條下町 山田屋勘左衛門

右四人、此度質屋總代申付候條、取扱之義、其外尋物等、來ル辰二月より令ニ相改ニ候て、洛中洛外質屋共、此旨相心得、油小路二條下町質屋總代會所江罷越、質看板取之、向寄次第、組合胡亂成質物一切不ニ取候樣相互にて遂ニ吟味ニ、質置段、幷月切、又は總代方江出銀之義は、追て相究べく旨、洛中洛外質屋共可ニ令ニ觸知ニもの也、

元祿十二卯年十二月廿五日 信濃 駿河

（京都御役所向大概覺書 六）質屋總代之事

藤屋六兵衛
大和屋源左衛門
高島屋六郎兵衛
山内勘左衛門

右者元祿十二卯年申付、質會所、姉小路通油小路西江入町に借宅、總代四人之内、壹人宛每日相詰候由、手代八人、賄一人、下男一人有之、

一洛中洛外質屋數六百二十八軒有之、總代會所入用銀として、質屋壹軒より每月銀壹匁宛之積、七月極月兩度に請取、且又質屋一軒に鑑板壹枚宛、總代より渡し置、此代三匁五分ヅヽ也、十ヶ

質屋總代

一白金村者郷中之事故質屋商賣相成間敷事に候處、如何成譯に而質商賣致候哉、訴訟方質屋共も可及吟味事、

（享保集成絲綸錄三十六）元祿五申年十月

一今度神田旅籠町中村平右衞門、本所相生町堺屋三九郎、神田多町車屋久右衞門、此三人之者へ質屋總代申付候間、町中家持、借屋、店かり、地かりの質屋は不及申、總て不依何者に、質物を取金銀借し申者之分は、不殘本石町三丁目總代會所へ可參候、但日限は別紙に有之候間、書付之通、會所江罷越、帳面に判形致、其上質屋之作法之定書一通、看板壹枚ツヽ請取、自今已後、右三人より相渡候定書之通、堅可相守候、今度質屋仲ケ間相極候上は、相互に致吟味、邪欲成儀仕者有之候はゞ不隱早々總代方へ可申候事、

一重て質屋仕度と存候者は、總代會所江罷越、質屋仲ケ間之連判致、定書看板ともに請取可申候、向後質屋看板無之して、質を取金銀借し申者有之候はゞ、本人は不及申、家主五人組名主迄急度可申付候、若質屋相止メ申者有之候はゞ、總代方江相斷、右請取候書付看板共に返し、帳面之判形消可申事、

一總代料として、質屋壹人之手前より壹ケ月に銀四分づゝ、出候間、毎月晦日總代方へ持參可申候、若遲滯仕者有之候はゞ、急度可申付候事、

右之條々、質屋之分は不及申、家持、借屋、店借、地かり、出居衆、召仕等迄不殘爲申聞、堅相守可申候、若違背仕候者於有之は、急度曲事可申付者也、

十一月

（質屋元仲ケ間舊記手續書）質屋仲ケ間總代會所譯柄之事

一質屋仲ケ間總代會所之義、元祿十二卯十二月廿五日、質屋之內、左之四人之もの江初て被仰付

無之間、此已後迚も右賣買に付、差滯筋有之、及訴出候義は勝手次第之事に候、其所之取引之趣意、吟味之上可令沙汰候、

右之趣、三郷○大坂町中可觸知者也、

安永七年戌八月

〔例書四〕一武州荏原郡白金村百姓五左衛門義、質屋店を出し質を取候處、右村地所者、伊奈半左衛門殿御代官所に而、人者江戸町奉行支配故、右村有來質屋共、町奉行所江訴出候、質屋仲ヶ間に而無之五左衛門儀、質を取候而外々之同商賣之邪魔仕候而、甚迷惑仕候、右五左衛門質商賣御取上被下候樣にと、月番町奉行に願出候に付、町奉行所より伊奈半左衛門殿江申來、半左衛門殿にて其段被相糺候處、右村名主答候者、田舍之義故、御年貢時節上納に差詰、衣類諸道具田畑等を其形に遣し、金銀借受、御年貢償申候而早速之間を合申候、且又有來候質屋に入候得者、御年貢上納之間に合候程、貸與不申候に付、上納之方早速之間に合不申候、五左衛門方江遣し候得者、早速御年貢之間に合、上納方差支無御座候、若五左衛門内證質屋商賣御差留被下候得者、御年貢上納之御差支罷成申候旨相答候に付、其段口書取之、町奉行所伊奈半左衛門殿より被申達候、依之五左衛門内證質取候而も不苦、外質屋共願不取上、一件相濟、

但百姓五左衛門義、白金村百姓共御年貢に差詰候節、田畑衣類諸道具を形に入、金銀借遣し候を、外質屋ども、五左衛門質屋之仲間江も入不申質を取候而、商賣之障に相成、迷惑致候間、五左衛門質取候義留願候處、全諸色を以質に取候に者無之、百姓共御年貢上納之節、急々差詰、諸色形に入、金銀を調候而、御年貢相納候由、品受取金銀渡し候に付、店帳面か證文等可有之候間、爲見候樣可吟味、且金錢貸遣候者、何程之利合に而貸遣候哉、

候共、支配之名主方江早速相届置、紛失物町觸之節、吟味請可申候、

右之通被仰出候間、以來其旨可相守候、若相背候もの有之候はゞ、急度可申付候、

右之通、町中可觸知もの也、

辰正月

(御冥加金上納帳)松坂町〔〇伊勢〕質屋株之儀、明和度御定之趣を以て相守居候得共、天保十三寅年、諸商賣とも、株に不拘取計候ても可然旨御觸有之、株外にて質取候もの出來、不取締に相成候に付、尚此度御取調御鑑札御下渡に相成、明和度御定之通、堅く相守可申事、

冥加金納方左之通

古株金拾兩也　但金壹兩づゝ、當子年より來る酉年迄十ヶ年納、

新株金拾五兩也　但當金五兩上納　殘り金拾兩也、前之通十ヶ年納、

右之通、一同承知之上連印爲致、無相違可致上納事、

嘉永五年子十二月　町會所

(寨令拔抄三)質屋仲間之外にて、諸色引當に取、銀子質渡、賣上證文取置、質物同前之義致間敷旨寛延年中爲觸知置候處、近年猥に相成、賣上は勿論、手附銀等之證文を以、銀子貸付候者共有之、質屋共渡世難儀之由に而、差留之儀願出候、總而諸色賣上候上は、買主方へ引取可申筈に候所、無其儀、賣上證文取之、右品其儘賣主へ質付置、質賃等受取候上者、賣買之名目迄に而、全く質物同樣之仕形に付、質屋仲間之外に而は致間敷事に候間、先年相觸候通、無違失可相守候、且手附銀之義は、買付候證據銀に而、買切候品をかし置候とは譯違候へども、いつ迄も無限其分に致置、內々にて利銀抔受取候ては、是又質物同樣に相當り候條、紛敷取引致間敷候、尤右は質同前の仕形を押かくし、賣上又は手付銀之姿に取拵候者之義に而、一通り之賣買を差留候筋には

相退可申候、以上、

差上申書物之事

一度々如被仰付候、請人無御座質物、一切取り申間敷事、

一縦令請人御座候共、下直成質物は吟味仕、両隣近所之者共致相談取可申候不念に仕、盗物取置候に於は、或は欠所、或は牢舎可被仰付之旨、町中へ御書出し御座候通り、曲事可被仰付事、

一不依何時に御改之刻、質屋中之内壹人成共、質見世を別申候て、御改にはづれ申様成儀仕候はば、如何様にも曲事可被仰付候、此判形之外、壹人も質屋無御座候、若し壹人成共加はり申候は、急度御断申上、御帳に連判仕候様、為仲間可致吟味候、為後日判形仕り差上申候、

寛永拾九年午五月

(舊令諸商株仲間書札)質株ノ事

質株ノ儀、寛永十九年午五月、同業人名取纏、帳簿連判差出候事、夫レヨリ仲間ノ組ヲ設ケ候事、年来無冥加ニテ相營ミ、年行司或ハ質方年寄ト唱ヘ候者、日々奉行所ニ出勤、囚獄ニモ出勤シ、盗物改ノ節、同業中ヘノ達方等ヲ旨トス、

古銅古道具、古手屋質屋ヲ加ヘ、之レヲ三商トス、

(諸問屋再興調十四)明和九辰年正月廿日町觸寫

覺

今度町中質屋商賣いたし候もの共、依願組合人數相極候間、以來新規に質屋商賣いたし候儀者不相成候ニ付、其旨相心得、尤前々相觸候通、素人にて質物取候儀、堅停止ニ候、

但前々相觸候通、屋敷方江出入いたし、無據譯合にて、金銀之替に當分品預り置候類者格別、勿論右者出入屋敷に限り候儀に候間所々より引請、紛敷儀無之様いたし、尤當分預り置候品に

一大晦日之夜は不及申、平日夜に入り、質物藏出し致間敷事、

一質屋より判組之者へ、音物遣候儀致間敷事、

一質物に取候品々、又質物に差入候儀、雙方相對にて取引可致候、尤新規雙方勝手筋之取計不致、前々より仕來候姿を以て取引可致事、

一都て流質物、相對を以て質屋より質屋へ讓り渡候はゞ、誰方へ相讓候旨、質置主方へ申聞、承知之上讓り渡可申事、

一質物利足、小質物は定之通にて取引可致候、尤銀高之質物者可為格別事、

一俵物其外嵩高成質物多く取候て、外にて借藏致し候はゞ、藏敷賃敷は、質屋方より差出、質屋手前之借分に可致事、

一質屋より先々へ人を廻し質物取儀、決て致間敷事、

一利上ゲ、質物替、質物殘、質物札書替候て、札に其譯書記、利分二重に不相成樣可致事、

一質判組之内、御咎請候歟、又は出奔致候樣子承り候はゞ、早速質會所へ相斷り可申事、

一質屋之内に召抱候下人、暇出し候者は召抱申間敷候、尤前の主人へ相斷り、差構無之候はゞ勝手次第可致事、

一從古來質物に取間敷品は勿論、盜質と雖、品物置主方に其儘差置、質物取候儀致間敷候、且又絹布類數多持參致し候はゞ、出所等篤と相糺候上、取可申事、

一質置主相煩候迚、銀子先貸致置、跡にて質物取候儀致間敷事、

一質物利足之儀、質使致候者と馴合、利足分遣候儀致間敷事、

一寺社之什物、質物に取申間敷事、

右之條々、從古來質屋定法に候間、嚴重相守可申候、若心得違相背候輩有之者、質年寄へ申出、仲間

差出し可申事、

但し失物御觸書廻り不申內、被盜物質屋方にて被盜主見付相斷候はゝ、右同前、置主請人へ知らせ不申、早速質會所へ相斷り可申事、

一質判組致し候節は、置主、請人、町所宿元等篤と見屆、地人と直談之上、質請狀印形取可申事、

但し同家人、幷盲人女之請人にて、質物一切取申間敷事、

一貸名前を致し質物取引、幷出店同樣之儀致間敷事、

一質判組之內、宅替、名替、印替等致候はゝ、早速質請狀印形相改可申事、

一質請狀入念案文之通、例年取替可申事、

但し請狀文言無之小帳に、印形取申間敷事、

一質置主より頼候迚、質屋にて置主請人之判組を拵、質物取候儀致間敷事、

一置主請人兩判不持參候質物を取、追て質屋より右兩判取に遣候儀致間敷事、

一質入判取帳へ、置主請人之兩判を取り、質物取可申事、

一質物使にて來り候はゝ、持參候使之名前を帳面江相記置可申事、

一質置主請人兩判無之質札、出し申間敷事、

一質札失ひ候由を申、無札にて請に參り候はゝ、右置主請人より一札取候上、質物出し可申事、

但し質札幷質判等一切預り申間敷事、

一質物限月、從古來定之通り、三ケ月切質札に書記可申事、

但し相對を以て延遣候儀は、可爲格別事、

一質屋へ取置候質物、置主と相對致、質屋より質屋へ取候儀致間敷事

一取置候質物、一切貸申間敷候、縱令代に持參致候共貸申間敷事、

之候はゞ、先々能々遂吟味、其上置主證人慥に候はゞ可取之候、奉公人右之通之品數多持參候はゞ、其屋敷江參、主人又は役人へ申斷、承屆候上可取之候、

右之趣、古着商賣候者共も可爲同前事、

一質物古着共不相應成物にて、其品怪敷相見候はゞ、彌遂吟味、品により其者を留置、番所へ可訴出事

右之趣、先達て申渡候得共、頃日猥に質物取之、又は古着買候者有之、不屆に候、向後書付之趣相守、質物古着念入可致取引候、若盜物、質物に取之、或買候者有之候はゞ、吟味之上、盜物取上之、主へ相渡し、代金は損に爲致、其上、品により過怠可申付候間、右之趣、質屋古着屋共へ、急度可相守旨相觸可申候、以上、

十月

（享保集成絲綸錄三十六）正德元卯年十二月

覺

町方質屋古着屋共、猥に紛敷質物取候由相聞候、總て質屋共、證文等隨分入念、盜物一切質に取買取申間敷候、若相背、不慥成物質に取買取候はゞ、曲事申付、名主五人組も可爲越度候、又は僉議之品に依て、急度可申付者也、

十二月

（質屋仲間掟）質仲間。。。。定法書

一失物御觸書相廻り候節は、早速寫取致印形、入念相改、銘々請取渡日限刻限等頭書に相記し、廻狀無滯順達いたし、留りより質會所迄差戻し可申事、

一失物御觸書に似寄候質物取候はゞ、置主請人へ知らせ不申、品に委細書付相添、竊に質會所へ、

一質屋取置之事

右質屋之札、雙方宛名有所を付、諸人讀候樣可書附、不讀樣ニ札付候事、堅令停止、畢竟質物取置事、先規之觸法也、所詮質物之價不足高下故也、自今以後、諸質物之價、以三歩二を質主江可相渡、三歩一は質屋之可爲利潤、又利足之事は可爲相對候、斯相究上は、妄に下直之質物不可取置、若盜物質物於取置は質屋可處罪科事、

元和八年戌八月廿日　周防〇中略

元祿六年酉十二月より、追々御觸書數通舊記有之候得共略之、〇中略

元祿十二卯年十二月廿五日　信濃
駿河

〔大坂御式目〕一質物取置事

右諸人無之質物取不可申、たとひ諸人有之といふとも、下直成る質物は吟味致しこれをとるべし、若盜物を於取置は、或は闕所、或は籠舍可申付事、

慶安元歲四月五日　孫大夫
丹波

北組　年寄中

〔享保集成絲綸錄三十六〕寶永三戌年十月

一町中質屋共質物取候之節、置主證人兩人罷越候はゞ質物可取之候、壹人にて印判貳ツ持參いたし、置主證人之名申立候共質物取り申間敷候、

一吳服屋商賣物と相見、紙付之小袖之表帷子、幷編物卷物之類數多持參、質物に可取置旨申族有

質屋制度

〔世事見聞錄五上〕諸町人之事

扨又質屋の事、是又金貸の類にて、強欲非道を極めしもの也、先大小名、其外武家の銘寶銘器を始め質物に取込、高利を貪り、殊に武具、馬具、脇差の類、目利行屆ず、直段の程合を知らずとて、格外下直に預り置、侍の懸命の道具とも不辨、疎略に取扱ひ、用捨もなく品を流し、譬へば元拾兩に取置たる品を、二拾兩三拾兩にも賣出して、倍に倍の利益を取、其外貧人を相手にして、衣類諸道具をとりて高利を貪る也、證文を取りて高利に過分の引當を取置事故、聊損をする事なし、又其品を流して本金の十倍に成したるも、元の置主へは何の噂もせず、我ものとする也、當世貧人の多き最中に、質屋のみ富榮て、家藏大造に成り、又貧民の多き場所を見立て、新規の質屋を始る程の事にて、兎角に貧人を貪り取事を本とし、悉く強欲非道の業體にて、國家の毒虫といふべし、其上己等が奢りの程は言語述難し、

〔建武以來追加〕一酒屋土倉關所事永享二九廿

若有如此關所者、可被付納錢方焉、

一諸土倉沙汰人等事

所々土倉沙汰人等犯用本主納物、令居住洛中邊土幷田舍云々、頗自由之至也、於如此之族者、追放在所、可被處盜犯罪、

〔御當家令條二十一〕定○中略

一質屋中諸道具質取候時、置候者町内宿主をも能可聞屆、難澀仕、名宿をも於不申者留置、奉行所江可申來、假ニ名乘候はゞ、人を副、宿を見留置、質可取事、○中略

元和八年八月廿日

〔質屋元仲ケ間書記手續書〕元和年中、質屋中江始て被仰付候書記之事、

取替質

一質屋江盜賊入、品盜取候類、於無紛者、雨損に可申付候、併質屋ぐりを致疎に、不念より被盜取候
筋相聞候はゞ、質物銀高一倍にて、置主江償せ可申候、
此儀質物に取置候處被盜取、吟味願出置候處、質置主より、右質物請返之儀願出候共不取上候先
例有之候得共質屋共、ぐりを致疎に候不念之段、及察度候書留不相見、其仕儀にも寄可申儀に付、
兼て難差極候、

〔集古文書掟三十七〕德政法條々永正十七
一とりかへの質事
雖爲絹布、雖爲武具、後のをもちいらるべし、但於不足利平者、可爲前々質物、

雜載

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕同〇正和二年には、新院〇花園御治世わたらせ給ひて、大宮並神輿造替の御沙汰あり、神殿の料足は、戸津升米、神輿の功程は、京都の土藏にかけられけり、山門子細を申ければ、山門氣風の土藏には、件課役を被除之由仰下されけれども、其御喜とて、一字別七百五十疋の沙汰をいたしつゝ、終造畢して本社に奉送、朝議の委細なるも、執申衆徒の沙汰も、いさぎよき心地ぞせざりける、

〔永享年中文書〕御判
質城事被召加衆中訖、早可存知之由候也、仍執達如件、
永享三十二月廿六日 貞連
土倉方一衆中

〇

質屋

〔人倫訓蒙圖彙四〕質屋 萬目利(よろづめきゝ)に應じて金銀をかす、僞眞の評判に及ず、請人を取てこれを證據として札を出す也、大坂の質屋類、合三百四十五軒有、

可被成候、右地所ニ付、故障之筋無御座候、爲後日質地證文仍如件、

年號月　　何國何郡何村　地主　名主　何助

同　何六

何村　何九郎殿

但、直小作、別小作共、證文取置べし、且筆數多く一紙證文に認がたきせつ、小拾帳添き事、

質物損失

〔建武以來追加〕一諸土倉盜人事 永享五十三

取置質物之上者、自今以後、爲倉預辨於利分上來質者、以一倍可致其沙汰、至利平巨多札者、假令絹布十ヶ月、武具廿四ヶ月本錢之外、以半分可償之、若無私力爲倉預者、召進其身可被處罪科、万一號逐電令拘惜者、爲本所可致其辨矣、

〔集古文書 三十七 掟〕德政法條々 永正十七

一失質事

於無證據者、可爲盜人之咎、有證明於有證據者、以質本錢一倍可致其辨、

〔長曾我部元親百箇條〕掟 ○中略

一質物之事、盜人或者火事、露顯之上にて、於失は、借錢可相捨事、○中略

慶長貳年三月廿四日　盛親 在判　元親 在判

〔大坂堺問答 坤〕質物出入

一質屋燒失、藏も燒候儀、質屋置主通等を以願出候共、燒失に於無紛者、兩損之積にて、願取上申間敷候、

此儀於當表も、同樣取計申候、

一合田壹反貳畝拾三歩　　貳ヶ所

右者我等所持書面之地所、今般貴殿方江質地ニ相渡、金何程借用申處實正也、年季之儀者、當未十一月ゟ來ル亥十二月迄五ヶ年季ニ相定、年季明子年正月ニ至、金子無相違致返濟、地所請戻可申、萬一其節請戻難出來候ハヽ、可致流地候、尤年季中、御年貢諸役共、貴殿方ニ而御勤可被成候、右地所ニ付、故障之筋無御座候、爲後日質地證文、仍如件、

年號月

何國何郡何村
地主　何次郎
年寄
名主　何助

何村
何五郎殿

右の通、年季明流地いたすべき旨の文言ある證文にて、年季明二ヶ月の内に、質置主願出候得ハ、請戻相成、年季明二ヶ月過候てハ、流地に成り候由の事、

但、直小作、別小作とも、證文取置べし、且名主年寄組頭等の役人には、組合ハなき筈ニ付、親類にても加印いたし置べき由之事、

小拾帳附候流地證文振合

質地證文之事

字豐地四ヶ所
字隈富貳ヶ所
字德田壹ヶ所
字常住田貳ヶ所

一合田畑七反九畝廿貳歩　　九ヶ所

右者我等所持書面之田畑今般貴殿方江別紙小拾帳相添、質地ニ相渡、金何程借用申處實正也、年季之儀者、當子三月ゟ來ル午十二月迄、七ヶ年季ニ相定、年季明未年正月ニ至、金子無相違致返濟、地所請戻可申、萬一其節請戻難出來候ハヽ、可致流地候、尤年季中、御年貢諸役共貴殿方ニ而御勤

印之返り證文相渡置候間、右年限之內、金子差戻候ハヽ、直ニ地所可相返候間、右ニ而取計いたし與候樣申聞、其頃年貢納方其外差支之折柄、外ニ質地ニ取與候もの無之、右體返り證文請取置候ハヽ、永代讓渡之趣意ニも有之間敷、且金子出來次第、年限之內ニ而も、地所可差戻約定ニ候上ハ、子細有之間敷と存、相手之もの共任申、地所代金ハ、前書專藏外五人より質流地、又ハ讓受候節之代金ニ而相渡候積り取極、村內名主勇右衞門連印、相手村方名主善五郎奥印之本證文差入、〇中略

總合高百貳拾貳石五斗貳升貳合六勺五才

此立附米貳百八拾七俵壹斗四升貳合五才

此讓地金四百八兩貳分ト　永五拾三分六分

右者貴殿持高之地所、銘々古證文幷名前立附小帳江添紙を以、書面之金四百八兩貳分、永五拾三文六分ニ而、今般我等讓受置申候處、當寅年より向三拾ヶ年限り、右金子我等方江御渡被成候ハヽ、前書之地所早速相返可申筈ニ約定仕候處相違無御座候、依之返り證文入置申處如件、

天保十三寅年五月

返り證文差出人
猿野目村
與兵衞
新平

大町村
六右衞門殿

前書之通、立合見屆、相違無之候、以上、

流地證文

〔名主五人組心得書〕流地證文振合

質地證文之事

字何
中田八畝廿八歩　御水帳無之名寄帳　何太郎名請

下々田三畝拾五步　同人名請

相手方
組頭與兵衛事　佐兵衛〔略○中〕
吟味ニ付呼出候同村百姓　傳助
外八人〔略○中〕

右出入去ル酉年、根岸肥前守御勘定奉行之節、同人方江訴出候處、元來地所永代賣いたし候ニ紛敷相聞候間、其節御演說之上、裏判ハ不差遣、相手方并右ニ引合候もの共ハ、差紙を以呼出し、手限にて吟味中、追々掛り相替り、當時拙者方江請取、吟味いたし候處、訴訟方之儀、親六右衛門代之節、相手窪野目村地所之內、同村專藏、善吉、城八、辯次郎、庄右衛門、同國大淸水村佐七持分田畑合高百貳拾貳石五斗貳升貳合六勺五才、寬政二戌年より文政十亥年迄ニ、追々質流地、又ハ讓渡之證文請取進退いたし、

本文專藏外五人ハ先年病死、尤右之內佐七ハ當時潰退轉いたし候段申立候間、證文取上一覽いたし候處、悉直に質流地、又ハ讓渡候趣之證文ニ而、殊ニ流地證文之分ハ、年季を定候文言も無之候間、全流地との儀ハ、名目迄ニ而、事實永代賣之取引と相聞申候、

罷在候處、追々困窮相成、借財相嵩、取續兼、年貢米金納方ニ差支、無據天保十三寅年中、右地所不殘質地ニ差入金子調達いたし度、村內ハ勿論最寄村々承合候得共、望人無之當惑之折柄、相手之もの共罷越、右村方之地所他村江追々質地に相渡し、流地相成候も多分有之、困窮ニ陷り一村難立行候間、相續方之儀、村內相談之上、領主役場江相願、地所取戾之仕方相立候ニ付、他江質地ニ差入候儀ニ候ハヽ、相手新平佐兵衛江渡與候樣いたし度、尤仕法立之取計ニ付、通例之質地年季ニ而ハ差支候間、永代讓渡之證文を以、引受度旨申聞候得共、田畑とも永代賣之取計ハ難出來、素より五六年之內ニハ、受戾候心組之儀ニ付、右樣之儀ニ而ハ相談難致旨相斷候處、左候ハヽ本證文ハ讓渡之文言ニいたし、三拾ヶ年之內、金子取揃相渡候ハヽ、何時ニ而も地所可差戾旨之村役人加

質地流地之儀ニ付問合

質地拾ヶ年に限り申候哉

下ケ札 御書面拾ヶ年以上之年季ニ而質地取引不致定法ニ候

一質地拾ヶ年季濟候後、二ヶ月濟候迄不請返流地ニ相成候段申立候ハヽ、其儘流地ニ申渡可然筋ニ候哉、

下ケ札 御書面年季明不受戻候ハヽ流地ニ可致由、又ハ永々支配可致など之文言證文ニ有之候ハヽ、二ヶ月過ギ候迄不受戻候上ハ、流地ニ御申付可然候、

一三ヶ年五ヶ年七ヶ年季之質地之儀、縦三ヶ年過四ヶ年目不受戻、流地ニ相成候段申立候ハヽ其儘流地ニ申渡可然候哉、又ハ拾ヶ年ニ限リ、右體短年季之儀ハ、年季過流地ニ相成段申立候共、取戻闕所ニ可申付儀ニ候哉、

下ケ札 御書面、拾ヶ年以下之質地不相成筋ニハ無之間、年季明流地ニ可致旨之證文ニ候ハヽ、年季明不請戻候上ハ、流地ニ御申付可然、格別不埒之儀ニ無之、質地を闕所ニ可申付筋ニハ無御座候、○中略

申　三月　　美濃部十右衛門

小笠原志摩守

〔德川禁令考後聚十三行刑條例〕御相談書

一藥違出入

訴訟方　元林伊太郎當時三宅監作御代官所　羽州村山郡大可村組頭　六右衛門

織田兵部少輔領分　同郡鹽野目村名主　新平

不及禁止事、

〔德川禁令考後聚行刑十四條例〕寛政十一申年三月二十八日

貸金滯より田地質ニ入、小作米并元金滯中、年季明ニ付、右質地取扱方伺、

擒者知行上州山田郡西小倉村軍治と申者より、同村百姓政右衛門と申者江相掛貸金滯有之候趣、寛政六寅年出訴候ニ付、雙方呼出、吟味中ニ御座候處、同年五月中、扱人立入、内濟仕度段申出候ニ付、其砌内濟申付候、右内濟之趣意ハ、政右衛門所持之田地、軍治方江元金拾兩之所江、五ヶ年季之質地ニ差入、質地證文并小作證文取置申處、年季中、小作米并元金差滯、當年者年季明ニ付、右質地軍治方江受取、軍治持高江入申度由願出候、右者軍治方江地所爲引渡候筋ニ御座候哉、又者濟方申付方も可有御座哉、此段御問合申上候、則質地證文并小作證文寫二通、此度差出候願書共懸御目申候、

三月廿八日

池田伊三郎家來
神谷七五三郎

御書面質地年季明不請戻候ハヽ、流地ニ御申付右地所軍治方江爲引渡可申筋ニ可有之候得共、先政右衛門をも御呼出、元金作德滯共致勘定、地所請戻候共、又ハ可請戻手段無之候ハヽ、年季明候上ハ、早々流地可致筋ニ付、軍治江相對致し候樣、一應利解御申聞、可請戻手段無之由相談も不整候ハヽ、流地ニ御申付、地所軍治江爲引渡、同人名前書替候樣御申付可然、勿論小作證文江認有之候、元金年季中、一ヶ年貳兩宛、可相濟約諾之金子、一兩年ハ軍治方江請取候由ニ付、軍治方江地所受取候上ハ、右之分ハ政右衛門方江可差返旨御申付、流地ニ請取候事ニ付、是迄之作德滯ハ不及沙汰段、御申渡候方ニ可有之候、以上、

中四月

年號闕

入らぬ毛を苅取候事、何事ぞや、約月過候間、佗事たつまじきにて候はゞ、作地をこそ知行可仕候へ、如此所行、盗賊之咎難遁者歟、

一永領質券之事、御法趣、本銭一ばいの時、はなし状を仕候てこそ、ながれ質には定候へ、然此料足は未一ばいにならず候、はなし状をも不出て、約月わづか十日ばかりすぎ候とて、下地職々等を知行すべきよし申事、まうあく之次第候、

一料足を借候事は四月、田うゑ候事は五月、然間作毛をゑ。ち。も。つ。に入ざる事、借状に見え候、被召出候て可有御披見候歟、過分之毛を苅取候間、本々利算用仕候へば、未猶不残候、此條々被聞召分、下地職々等重書を返付させられ候て忝可存候、此旨以可預御披露候、仍粗言上如件、

文明貳年十一月　日

〔親俊日記〕天文七年十一月廿六日丙申、一住吉淨土寺與桑原道陰相論事口返事在之、茨木伊賀、飯尾上野介、同兵部丞、御返事樣體住吉淨土寺と桑原道陰申結、就借錢之儀質券田地爲流質、永可領知否事、

淨土寺如申者、去巳年和平、翌年午年十二月晦日事之、既追越舉來之證狀請取在之上者、更寺家非越度云々、道陰如申者、約月既馳過之條、任借狀之旨、可爲流質間、永可知行云々、

政所方口返事云

武具、雜具、絹布、樂器、米穀類、其外儀者、約月在之、於田地者約月定無之、然ば質券無永領定法在之上者、早彼田地可被返付寺家也、但於本錢者、任舉錢一倍御法、以算勘可有辨償之口也、

〔信玄家法上〕一相當之質物之儀者如定、若過分之質物、以少分取之者、縱雖過兼約之期、聊爾不可沽却、利潤之勘定、至于無損亡者、五三月相待、頻加催促、其上尙令無沙汰者、以證人可賣之也、〇中略

一百姓年貢夫公事以下、無沙汰之時、執質物、無其理令分散條、甚非據之至也、然而定年月過其期者、

年寄
壘屋吉兵衛
萬屋吉右衛門
笹屋勘兵衛

〔吾妻鏡四十〕建長二年七月五日己巳、評定、以來本錢三百文入流質所〇所一本作人事、有被仰之法、所謂假令二貫文一倍之時可流之、二貫文以下者、不可依文書、

〔建武以來追加〕德政條々〇嘉吉元中略

一土倉已下流質事

過約月者、任法可爲錢主之計也、

〔集古文書掟三十七〕享德三年德政條目

德政條々〇中略

一土倉以下流質事

過約月者任法可爲錢主計

右條々堅被定置者也、早守此方各申給事書、可致收納拾分壹候、於不帶事書之輩者、不謂權門、不嫌勢家、就借書爲錢主可致催促之矣、錢主與借主人之與同者、共可被處嚴科、此段尙令違犯者、可有異沙汰之由被仰出之訖矣、

享德三年十二月十八日

〔東寺百合古文書〕敬觀法師重而言上、定觀法師構私曲申條々事、

一限七月質古請文仕、是非不申云々、言語道斷之空言也、度々彼私宅へ罷越、作毛苅入代成候て、返辨可仕候、其間事は相待候へと申候へば、一度も見仕らぬ上を、善惡之及返事候はん、質物にも

亥年、質物預り申節、置主壹人、請人壹人取之、兩人印形一札差入候上、質品預り可申旨被仰付候に付、右は故障無之ため、御憐愍を以被仰渡候義と、一統難有右之趣相守、質屋渡世仕罷在候所、質物差置候者共は、其日稼、身がるの者多分御座候故、小前之質物にも、其度毎請人同道仕、兩人印形之一札取入候義は、殊之外六ヶ敷存、急成入用之砌、間に合不申、夫故自然と質物持參不仕候様に相成、追日質屋衰微仕、右之様子にては、行末渡世相續之程無覺束、歎ヶ敷奉存候に付、恐多奉存候得共、先達て私共貳拾組より、質物取方之義、以前之通り被仰付被下候様御願奉申上候、尤質仲ヶ間江加入致、質屋渡世仕度存念之者も有之由に御座候得共、當時質物取方六ヶ敷御座候に付、加入致申義も見合居候趣、粗相聞申候、依之火災以前之通りと當時とは、私共仲ヶ間軒數も餘程減少いたし、何分一統衰微仕罷在、殊更質置主などは、前段申上候通り、多分身がたる之者に御座候故、銀錢等入用之節、請人留主にて候歟、亦は遠方へ罷越候節は、出來相調がたく、差當り間に合不申、今日之營に差支、殊之外難澁之趣に相聞申候、然る處、此度私共仲ヶ間江御尋之義有之、夫々御答奉申上候、此上私共仲ヶ間の義、火災以前之通御立被成下候はゞ、何卒格別之御憐愍を以、前段之趣に被為聞召分、質物取之義、享保年中、被為仰渡候と、去る亥年迄仕來候通、質請證文十二ヶ月之間相用ひ、十二ヶ月限りに相改、諸事火災以前之通り被為仰付被下候様乍恐奉願上候、尤銀壹貫匁、金貳拾兩以上之質物之義は、其度毎に證文取之、質品出所相尋、不正之品預り不申様仕度、勿論聊之質品にても、出所不正之品等之義精々申合、質屋組內限、相互に念入吟味可仕候間、御憐愍を以、右願之趣御聞居被成下、質物取方之義、以前之通り被為仰付被下候はゞ、仲ヶ間之者共、一統無恙渡世相續可仕、廣大之御慈悲と如何計難有仕合可奉存候、依之貳拾組年番之もの共連印仕、乍恐此段御願奉申上候、以上、

寛政十二年申七月廿二日

町方部〇京　質屋仲ヶ間貳拾組

一米コク幷ザコク等、七ケ月タルベキ事、

右條々任先例、サダメオカル、トコロナリ、〇中略若コノヤク月ヲハセスギバ、ナガレ質タルベキ上者、德政ノサタニオヨブベカラズ、

永正十七年二月十二日　丹後守平朝臣
上野介藤原朝臣

〔諸問屋再興調十四〕元祿五申年十一月町觸寫

質屋作法御定之事

一刀脇差諸道具諸品等者　十二ケ月切

一衣類等者　八ケ月切〇下略

〔憲令拔抄三〕質物商賣致候者共、質物取候節、三ケ月限りに相極、其月に受戻候者有之候而も、三ケ月分利足銀取來、輕き者ども致難儀候由相聞候、仕來とは申ながら、質屋共直成事に付、已來は、受戻候月迄之利足銀取候樣、質屋共江申渡候間、其旨可相心得候、

右之趣、三鄕〇大坂町中可觸知者也、

天明四年辰十二月　土佐 備後

〔御答書幷御願書之寫〕乍恐奉願口上書

一私共義、質屋渡世仕、享保十四酉年、質物取方之義は、質舖證文十二ケ月の間相用ひ、十二月限に相改候樣被為仰付、同十九寅年、質物改會所被為仰付候て、會所へ出銀壹ケ月限に貳匁宛、家別に差出來候、其後明和九辰年、〇安永元年質屋仲ケ間より御冥加銀差上候樣被為仰付候に付、町方質屋仲ケ間之者共より、年々銀六拾枚宛、天明七未年迄御上納仕來候處、去る申歲、一統類燒仕、御冥加銀出銀等之義、御憐愍を以て御宥免被成下、無恙渡世相續仕、難有事存候、然る處寛政三

頭欄

一右之通申渡候間、質主共差支無之樣、手廣渡世可致、若此上無謂質取方差扣候歟、不正之義於相聞者、無用捨召捕吟味之上、嚴重之可及沙汰候、其旨右渡世之者共江不洩樣可申聞、

（御觸書集覽二）天保十三寅年五月九日

四ツ谷長安寺門前忠兵衞店　質屋
三郎兵衞

其方儀、今般諸色直段引下ゲ方之儀、御趣意厚く相守、是迄質物利足金壹兩に付、壹ケ月銀壹匁又は壹匁貳分、錢百文に付、同斷三文宛請取來候處、最寄同渡世之者共之振合に不拘、金壹兩に付、七分五厘、錢百文に付、壹文貳分に引下ゲ候段、奇特之儀に付褒置、

右之通、北御奉行所に而被仰渡候間、町々自身番江張出し置可申候、

南北小口
年番

右組合中、早々可申繼旨被仰渡奉畏候、以上、

天保十三寅年五月九日

（建武以來追加）一洛中洛外土倉質物事

於絹布類者十二ケ月、至武具者廿四ケ月之由、所被定置也、若過彼數月、不請出者、爲流物可致計沙汰之旨、可相觸諸土倉之由、所被仰下也、仍執達如件、

永享三年十月十七日

大和守飯尾貞連
備中守伊勢貞國（于時政所）

一条中

（建武以來追加）定德政事

一ケンフノタグイ、エサンノ物、書籍ノタグヒ、ガツキノ具足、カグ、ザウグ等、置月ノ外、十二ケ月タルベキ事、

一ボン、カウバコ、茶ワン、花ヒン、カウロ、カナ物巳下、廿ケ月タルベキ事、（付フダノメケヒ、廿四ケ月事、）

達可被成候、此段御達申候、以上、

寅十二月廿八日　　　　熊井理左衛門（以下二〇人略）

右之通達來候間、此段御達申候、以上、

寅十二月廿八日　　　　組合　世話懸り

〔天保新政錄　三〕天保十四卯年二月九日、於南御番所被仰渡、

壹番組より貳拾壹番組迄　諸色掛り　名主共

番外新吉原町　品川十八ヶ寺門前　名主共

質物利足之義者、世上金銀利足より、格別高利に相當候間、去寅十二月、質物利足相改觸渡候處、從來之利足割合相減候に付、元手薄之質屋共者、俄に利潤を失ひ候樣に相心得、一般に質取方差扣、輕き者共、融通差支へ令難義候哉之趣に而、吟味之上、急度も可申付處、先此度者令宥免、融通のため、先達而相觸候利足割合之內、當分金五兩以下は、元金壹分に付、一ヶ月貳拾文、百兩以下拾兩以上、元金壹分に付、錢拾四文宛之割合之利足に致遣候間、此上質取方聊無差支、手廣に渡世可致候、

一下質物利足之儀、寛政文化之比迄者、凡年六分位之利足に而取引致し來候處、近年追々高利相成、年壹割貳分位より八分位迄之利足に而取致し、今般質物利足相減候に付、少々宛者利分引下候向も有之候得ども、右割合に准じ、引下候義無之候に付、小前之質屋共之利潤薄、令難義候由に付、以來年七八分之利足に引下ゲ、右より以下之利足に而取引致し來候義者、只今迄之通相心得、可成丈利安に取引可致、

一質物八ヶ月過、定之通相流候旨、置主江及掛合候而も、兎角彼是差支候義申談、無謂期月相延、利分相嵩み候上、流質に相成候儀間々有之、質屋ども令難義候由に付、以來八ヶ月限、置主江相斷、不受戾候はゞ、定之通相流し候樣可致、

度旨當三月中申立候間、承屆置候處、今度世上貸金銀貳拾五兩に付、利足壹ヶ月壹分に御定被ㇾ仰出、右之釣合に而者、當春引下ゲ候質物利足、未格別高利相當り候間、左之通引下ゲ可ㇾ申、

金壹分以下之錢貸之分

一百文ニ付　壹ヶ月利足　貳文

金貳兩以下

一金壹分ニ付　同　貳拾文

金拾兩以下

一金壹分ニ付　同　拾六文

金百兩以下

一金壹分ニ付　同　壹分

但是者元祿度定之通、年八分之割合に居置可ㇾ申候、

右之趣相守、正路に渡世可ㇾ致、尤是迄質入之品請戻候節も、右割合に引直し利足可ㇾ受取、若此後不正之取計致し候者於ㇾ有ㇾ之は、吟味之上、急度咎可ㇾ申付候、

寅十二月

右之通、從ㇾ町御奉行所被ㇾ仰渡候間、町中質屋ども者勿論、家持借屋店借裏々之者迄、壹人別に申聞、一統行屆候樣、町中不ㇾ殘入念可ㇾ相觸候、

寅十二月廿二日　町年寄役所

十二月廿八日

市中質屋共儀、利足引下ゲ方御觸流有ㇾ之候後、質物取候儀、等閑之樣子ニ相聞候、右直下ニ融通之儀、右此上質取方、聊も差扣不ㇾ申樣、市中早々申通候樣、南御番所ニ而被ㇾ仰渡候間、御組合限り御通

〔忠富王記〕文龜二年六月三日、建仁寺質太刀一貫五百文、自戌五月三日至今日十三ヶ月、三百九拾文上之、打刀二貫文、四百廿文同上之了、但自七年四月之間、當年五月之定云々、

〔質屋元仲ヶ間舊記手續書〕元和年中、質屋中江始て被仰付候舊記之事、○中略

利足之事は、可爲相對候、

〔諸問屋再興調十四〕元祿五申年十一月町觸寫

質屋作法御定之事○中略

一錢質百文ニ付　四文利
一金貳兩以下ハ　壹分ニ付四分宛
一金拾兩以下ハ　同三分宛
一金百兩以下ハ　壹兩ニ付壹匁宛
一金百分以上者　右之積を以、下直に可有相對事、

右之通、今度從御公儀樣被仰付候上は、質置主請人に此作法書之通、能と申渡、請人判、置主判取、質取可被申候、御定之切過候得ば、ながれ申候、尤利足濟被申候はゞ、又借可被申候、今度御吟味之上、拙者共に右之改被爲仰付候間、毎度廻り、諸事吟味仕候間、判形日切之用捨有間敷候、前書之通相違御座候はゞ、御公儀樣江拙者共可申上候、以上、

元祿五年申十一月日

探屋三九郎
車屋久左衛門
中村屋平右衛門

〔御觸書集覽〕天保十三寅年十二月廿二日

諸色直段下之儀、厚御世話有之候に付、質物利足之儀も、元祿度之定より、貳割五分引下ゲ渡世致

利子

一町中質屋共質請取手形、壹ヶ年切に取置、其請手形にて質物いくも取申候由、今度質物出入に付、御番所ヘ質物持出申候、御穿鑿之上、其段不屆に被聞召候間、自今巳後、質屋共質取候はゞ其質物之品々委細に書付、時々に手形念を入取置可申候、巳來此旨於相背は、急度曲事に可被仰付候間、町中質屋共、堅可相守者也、

二月

〔建武以來追加〕一質物利平事

絹布類、繪衫物、書籍、馬、樂器具足、家具、幷雜具以下、可爲五文子、盆、香合、茶碗物、花瓶、香爐、金具等、幷米穀類等、可爲六文子、

長祿三年十一月二日

一洛中洛外諸土倉利平事、近年任雅意致其沙汰云々、太不可然、所詮於高利者、爲衆中定置、嚴密可被相觸之、若有異議在所者、隨注進可被處罪科之由被仰出候也、仍執達如件、

長祿三十一月二日

之種（飯尾肥前守　于時左衛門大夫）
之清（飯尾加賀守）
忠行（二階堂山城守　于時政所）

定置洛中洛外諸土倉質物利平事

一絹布類、繪衫物、書籍、馬、樂器具足、家具、幷雜具以下五文子、於約月○（月下一本有此字）者、許置十二ヶ月、

一盆、香合、茶碗物、花瓶、香爐以下、金物、武具等、可爲六文子、於約月者廿ヶ月、但至武具者、可爲廿四ヶ月、

一米穀幷雜穀等、利平同前、於約月者可爲七ヶ月、如此所定置如件、

長祿三年十一月十日

損銀相懸け申間敷候事、

一質物限月之儀者、三ヶ月限定、尤利足銀一ヶ月銀壹貫目に付、何程宛に相極め、三ヶ月切相渡可ㇾ申候、

一御公儀様より、失物御吟味之御觸書者、此方に寫取置引合申候間、其元に而御引合に不ㇾ及候、萬一不念之儀有ㇾ之候はゞ、我等方へ引受埓明、其元江少しも御難儀懸け申間敷候、且亦流物之儀者手前江取出し、其元江一切質物流し不ㇾ申候、猶亦銀子入用之節者、何時成共返濟可ㇾ申候、爲ㇾ後日ㇾ入質證文、仍而如ㇾ件、

年號月　　請質人　何屋誰

　　　　　入質證主　何屋誰

何屋誰殿

〔午日閑話　一〕覺

一硯箱　壹ッ　常吉公所持

一屛風　壹雙　家達筆

一石印　壹箱　但し數七十二

今度依ㇾ有ㇾ要用、右質物に入置候間、銀子壹貫五百目借用申候事、實正明鏡也、又何時にても右銀子御入用之節返濟可ㇾ申候、萬一調達出來兼候はゞ、右預置候品、勝手次第に御賣拂可ㇾ被ㇾ給候、其時違亂無ㇾ御座ㇾ候、爲ㇾ後證ㇾ仍如ㇾ件、

寶永七年亥九月　　尾形光琳　華押

清水五郎左衛門殿

〔享保集成絲綸錄三十六〕寬文七未年二月

名主　何右衛門

何村
何左衛門殿

〔香取神宮古文書纂十二〕質地手形之事

一前々より御神用入目に相詰り、我等知行之内、所はむかい田貳俵前之田に掛け、金子六兩貳分預り申處實正也、於此田地には、横合より構無御座候、爲其請人加判仕候、若し如何樣之六ヶ敷儀出來候共、證人急度相濟可申候、年季の儀は、當申の霜月より來ル亥の年の霜月迄、中年三年に相定申候、年季明、本金六兩貳分返濟申候て、質地請返し可申候、年季明申候共金子滯り申候內は、其方にて何ヶ年も手作可被成候、一言之子細無之候、爲後日證文、仍而如件、

享保元年申霜月廿一日　田地主松井某印

請　人引地某印

宮中大藏殿

右之田地の儀は、我等小作に仕候、每年米貳俵宛相濟し可申候、少も滯り申間敷候、以上、

民部

〔大坂要用錄三諸證文〕入質證文。。。

入質證文之事

一何町何屋誰方に取置候質物、銀子入用に付、其元江入質に差入申候に付、我等請人に相立申處實正也、則質物之儀者、此方に取置候直附、帳面之通致付札、通帳に書記差入申候、且亦金銀取渡之儀者、別に致通帳勘定可仕候、尤通帳者此方に有之候、萬一右之通帳紛失仕候はゞ、其元帳面之通無相違相濟可申候、右通帳を以差入置候仕呂物之內取出し候はゞ、早速代り之質物差入、不埒之儀御座候はゞ、借り銀何程に而も、其元帳面之通、本人に不拘、我等方より急度相立、少も

字何
中畑貳反三歩
一合田畑六反四畝八歩　三ヶ所
右者我等所持書面之田畑、當寅ゟ亥迄拾ヶ年季ニ相定、貴殿江質地ニ相渡候處、年季中右地所我等直ニ小作いたし候ニ付、當寅ゟ年々御年貢諸役相勤候上、米何程金何程、何月幾日迄ニ急度可相濟、若滯候はゞ、地所御取上可被成候、其節異論申間敷候、爲後日小作證文、仍如件、
年號月
小作人　何國何郡何村百姓　何兵衛
組合惣代　何　八
名主　何右衛門
何村
何左衛門殿

別小作證文振合
小作證文之事
字何
上田貳反五畝廿三歩
中田壹反八畝拾貳歩
字何
中畑貳反三歩
一合田畑六反四畝八歩　三ヶ所
右之田畑、當寅ゟ亥迄、拾ヶ年季ニ相定、我等小作いたし候ニ付、當寅ゟ、年季中、年々御年貢諸役相勤候上、米何程金何程、何月幾日迄ニ急度可相濟、若滯候はゞ、地所御取上可被成候、其節異論申間敷候、爲後日小作證文、仍如件、
年號月
小作人　何國何郡何村百姓　何兵衛
組合惣代　何　八

質地證文之事

字何 上田貳反五畝廿三步　　御水帳 何兵衛名請

中田壹反八畝拾貳步　　同人名受

字何 中畑貳反三步　　何七名受

一合田畑六反四畝八步　　三ヶ所

右者我等所持書面之田畑、今般貴殿方江質地ニ相渡、金何程借用申處實正也、年季之儀者、當寅ゟ亥迄拾ヶ年季ニ相定年季明子年正月ニ至、金子無相違致返濟地所請戻可申、尤年季中御年貢諸役、貴殿方ニ而御勤可被成候、右地所ニ付、故障之筋無御座候、爲後日質地證文、仍如件、

何國何郡何村百姓 地主 何兵衛

組合總代 何八

名主 何右衛門

年號月

何村 何左衛門殿

右のとふり、年季明流地いたすべき旨の文言なき證文にて、年季明拾ヶ年の内に、質置主願出候得ば請戻し相成り、年季明拾ヶ年すぎ候ては、流地になり候由の事、

一年季のかぎりもなく、金子有合しだゐ請戻べき趣の證文は、質入の年より拾ヶ年內に、質置主願出候得ば請もどし相成、拾ヶ年過候ては流地になり候由の事、

直小作證文振合

小作證文之事

字何 上田貳反五畝廿三步

中田壹反八畝拾貳步

或成給御下文幷下知狀、或過知行年紀之地外、不論公私領、可返付本主之由、被下御符畢、今更不及改變、但自今以後者、不能禁遏、任前々成敗之旨、可有沙汰、

〔新編追加政所〕一質券賣買地事

右於向後者不及沙汰、但被成安堵御下文幷下知狀分者、今更不可有相違、

正安二年七月十日　陸奥守判

相模守判

上總前司殿

〔建武以來追加〕一質券賣買地事文永五七四

給御下文者、不及子細、雖不給御下文、過廿ヶ年者、不及沙汰、

〔東寺百合古文書三十一〕藤原氏字姬鶴女與四郎國光相論淳和院領八條大宮田地事、兩方訴陳雖事繁、氏女者帶祖母見阿之讓狀、可領掌之由訴之、國光者自氏女父友弘之手取質券領知之旨陳之、然者以質券之地雖進退之上者、氏女領掌不背理致狀、下知如件、

延慶二年六月十五日

預所沙彌殿

〔建武以來追加〕一本物返質券所領事永享十二廿六

以彼在所之所當、年々雖致其沙汰、依不辨本錢、及多年、令侘傺之條、不便之至極也、然早勘度々收納、到一倍者、可返付所領於本主也、

〔名主五人組心得書〕一質地證文文言の內に、利足の定など認候ては、質地にならざる由の事、

一小作證文文言の內に、利足として年々何程づゝ、可差出など認候ては、よろしからざる由の事、

通例證文振合

是迄引續、地所作居候緣を以、永小作と心得、地所難相放旨、小作人より願出候節之取計と相聞候得共、素より質地ニ拾ヶ年以上之年季無之上ハ、小作も右ニ准じ、質年季より餘計之小作年季取極置可申謂無之、殊ニ地主相替候節も、小作證文書替可申は勿論之儀、左候得バ其時々小作人も相改候姿ニ而、假令自分ハ素より之者ニ而も、質取主相替候上ハ、引續候小作之筋無之、其上小作ハ質取主之了簡次第之儀、相對ハ格別元地主等小作致し來候共、是以素より質地ニ差出候程之儀、畢竟年季明請戻相成兼候上ハ、流地可相成ハ差定候事ニ而、質地ハ必定直小作而已ニ可相限譯ニ無之、最初より質取主手作又ハ前小作等ニ渡置、流地相成候ハヾ、其節最早地所ニ可相離理合之事ニ而本文之趣ハ全く名田小作之意味と混じ候、小作人之申立方と相聞候上ハ、貳拾ヶ年三拾ヶ年小作致し來候共、雙方引續候譯ニ無之候間、質取主了簡次第之心得を以、可取計旨令下知候事ニ有之候、

見質

〔新編追加政所〕一見質事不可取利分、可辨本物也〇中略　文永五七一評、

一質券所領事　文永十七十二評

今日以前分事、不論質券見質、雖不辨本錢、止錢主之沙汰、本主可全領知也、被成御下文者、不及沙汰、但正嘉元年以來御下文者、就理非致越訴之條、非制之限、入質之地者、今年中以後可令返之、

質券

〔運歩色葉集志〕質券

〔新編追加政所〕一關東御領事、非御家人幷凡下之仁、或稱相傳、號請所、或帶之券質券等、多以領地之由有其聞、尋明越中越後兩國之當知行之交名田畠在家員數可被注申之狀、依仰執達如件、

弘安七年五月廿日　駿河守判

尾張入道殿〇中略

一質券賣買地事　永仁六二廿八

其以後ハ質屋之可ㇾ任二所存一事、

（地方凡例錄四）一又質之事

是は質に取たる田地を、取主ゟ又外江質に置候を云、是又制禁也、然ども元地主承知ニ而加印於ㇾ有ㇾ之者、元地主江濟方申付る、又質地之節增金借請候はゞ、其分は又質置たるものへ濟方申付、

（名主五人組心得書）一質に取候地所を、質取主、又候外江質地に差入候節ハ、元地主江かけ合、きつと質地證文江加印をうけ置べき由の事

（德川禁令考後聚十四行刑條例）文政十一子年

質地小作之儀ニ付伺

三月廿七日、石川主水正宅內寄合おゐて評決、大貫次右衞門伺、

百姓困窮に迫、所持之田畑質ニ差入、直小作致し居、年季明請戾成兼、流地ニ致し候共、右地所引續小作致し候處、後々地主不如意ニ相成、右地所又外江質ニ差入、是又流地相成候、二度目之金主小百姓ニ而、所持之地所作足不ㇾ申、前書流地之地所をも、一同手作可ㇾ致旨申聞候砌、是迄數十年小作致し來、先々地主被二取放一候而も、難儀之趣申立候共、當地主手作致し度段申立候上ハ、貳拾ヶ年三拾ヶ年小作致し候地所ニ候共、取放可ㇾ申儀之段伺、

此儀御定書ニ、貳拾ヶ年以上之名田小作ハ、永小作ニ可二申付一と有ㇾ之候處、右ハ質地之小作ニ而ハ無ㇾ之、田畑多く所持致し候もの手作ニ餘り候ニ付、小百姓江每年小作爲ㇾ致置候處、小作滯候故を以、地面取戾度旨、地主より訴出候時之取捌ニ而、右體之分貳拾ヶ年餘小作爲ㇾ致置候地所、地主方江取戾候儀不二相成一、矢張小作人何年も小作爲ㇾ致、作德滯ハ濟方申付候取計ニ有ㇾ之、今般次右衞門相伺候趣ハ、質地ニ入候地所、地主直小作致し居、流地追々又質ニ成候而も、矢張最初之地主小作致し候處、末之質取主ニ至リ、小作ニハ不二相渡一、手作可ㇾ致旨申聞候を、前書小作人ハ

懇賦但二重書入も同斷○中略

天明八申年御渡
大坂町奉行小田切土佐守伺

家屋敷二重書入一件

秋元但馬守領分河州丹北郡住道村百姓
源兵衛
外一人

右之もの共儀、彌兵衛相頼候迚、光雲寺祠堂金借り請候砌、家屋敷土藏長屋等、返濟引當ニ書入置ながら、又々靈源寺祠堂銀借受候節ニも、右家屋敷土藏之内、同樣引當ニ書入候儀、彌兵衛ニ同意いたし、借受證文ニ致連判候段不屆ニ御座候得共、此もの共連判之出入ハ、先達而相濟候間、所拂、

此儀田畑屋敷二重ニ書入候もの、中追放之御定御座候得共、吟味書之趣ニ而ハ、所持之家屋敷土藏門長屋とハ乍申、銘々江金銀可借受ためニ二重ニ書入候儀ニも無御座、彌兵衛頼ニ同意いたし候不屆迄ニ而、殊ニ光雲寺祠堂金之方ハ、銘々割當之分、拂方もいたし候間、右之差別ハ可有御座哉ニ付、二重書入加判人所拂之御定ニ准じ、伺之通所拂、

〔大御定目〕市町定○土佐高知藩、中略

一借物爲返辨書物ニ入質物を、又外へ二重之質ニ入置事於有之ハ、可爲曲事、其輕重に依て、牢舍科付、質物ハ可付先判也、但質物之價餘計可有之物賣拂、其代物以先。判。之方相濟、餘分ハ後。判。之方へ可遣、若後判之方其質物受取、先判之方爲相濟願有之バ、可任其意、勿論可依質物之品事、

一質物之事、其本人并質物其者之所持於無之者、慥に聞屆、請人を可相究、本人相對迄ニ而、受人無之質物を於取置者、可爲曲意、若盜物ニ而露顯之時ハ、質物ハ急度本主人返之、質屋之損失、其上牢舍、依其趣輕重可有、如定置念入請人置、若於盜物ハ質屋非越度、雖然盜物ハ本主人返可遣、借物速に出事不相叶被言共、本人受人行罪科、隨其者之身上可令裁判事、

一大抵質物定之日限ニ不請時ハ可流約束たりと言共、質物之主より斷有之バ、三。十。日。ハ。相。待。之。、

金子は拾両ゟ以下、雜物は代金に積拾両位ゟ以下は、　入墨敲

但先入牢申付、代金亦ハ商物にて成共於二相濟一には拾両以上ハ江戸拂、拾両以下は所拂、

〔德川禁令考後聚十八行刑條例〕延享元子年六月、大岡越前守、〇中略伺之内、〇中略

同〇御定書百箇條　二ケ條目

一田畑家屋敷并建家等二重ニ書入候もの

書入主　輕キ追放
證人　過料

此書入と有レ之ハ、いまだ其物ハ不二相渡一證文に書入候計りニ而候哉、左かれども金子ハ請取候と相見へ候、彌其通之事ニ候ハヽ、罪科輕重両樣ニ無レ之、何レ江成とも同樣ニ極メ可レ然哉、

朱書 右御尋之趣奉二承知一評議仕候處、別條二重質之儀ハ、金主江地所屋敷相渡候上、屋敷ハ直家守いたし、田畑ハ直に小作いたし、年季之内ハ金主之地所ニ候處、最初質入いたし候儀を押隠、両方江家守成、或ハ二重ニ小作を請候段、質入候地面を全ク自分田畑と僞り、二重質仕候事ニ御座候、書入之儀ハ其地面屋敷等先江渡置候筋ニ無二御座一、二重ニ書入候迄ニ而、二重質とハ譯違候間、先達而書入之方ハ一等輕御仕置伺相濟候得共、二重之儀ハ同樣ニ御座候間、御仕置も同樣ニ而可レ然哉奉レ存候ニ付、二重質入之但書ニ、二重書入も同斷と、左之懸紙之通相認可レ申哉、奉レ伺候、

一田畑屋敷二重に質入いたし候もの

質入主　中追放
名主田畑取上　輕キ追放
加判人　所拂

一田畑家屋敷主建家等二重ニ書入候もの

書入主　輕キ追放
證人　過料

借ニ而可有之、右之内ニハ村役人ども限之取計ニ而、小前之もの共不相辨分間々可有之、右之類以來都而身代限申付候上ハ、連印之村役人ども一時ニ濟、退轉ニ及び、村用等差支之程も難計候ニ付、事實得と吟味之上、領主地頭借候段無紛、村役人共如何之筋も不相聞候ニおゐてハ、假令小前之もの共不相辨候共總代呼出し其段爲申聞、矢張村方江割付爲相濟候方ニも可有之哉、尤右ハ吟味之始末ニも可寄儀ニ付、其節々厚評議之上、事實相當之所を以取計候樣可致、尤領主地頭奥印裏印添證文等致し候分ハ、本文金通裁許可被申付候、

二重質

〔地方役人四〕二重質は、同所之田畑を兩人江質に入るヽ云、

〔御定書百箇條〕二重質、二重書入、二重賣、御仕置之事、

寛保二年極
一田畑屋敷二重に質入致候者

質入主　中追放
名主　輕追放
加判人　所拂

寛保二年
延享元年極
但二重書入も同斷、田畑屋敷建家等ハ、初之金主江相渡、後之金主江は家財取上可相渡、尤名主加判人馴合、禮金取候ハヽ中追放、後之金主乍存質地書入等於證文取候に於ては、江戸拾里四方追放、

寛保四年極
一諸賣物代金請取其品不相渡、外江二重賣いたし、亦は取次可遣品質に置、幷賣拂金銀横取致候者、金子は拾兩ゟ以上、雜物ハ代金に積拾兩位ゟ以上は、　死罪

一押買狼藉鄕質國質取間敷事
一御持之内諸役并つわう有之間敷事
一兵粮五升切、市之日計可出之事、
一子年より未之年迄、八年可爲諸不入事、
一荒院之儀、從子年未之年迄廣野之事、

天正十六年戊子二月三日

〔徳川禁令考後聚十五行刑律例〕一鄕印證文を以借候金銀出入

右御定書ニ百姓を相手取候借金出入ハ、地頭借ニ相聞候共、地頭裏印并役人奥印於無之ハ、地頭借ニハ不相立事と有之候處、吟味之上、實ハ領主地頭借候由、百姓共申立候類、領主地頭并家來之奥印裏印添證文等無之候とも、右家來相糺、領主地頭借之由申口符合致し、領主地頭可引受旨申候ハヽ、領主地頭江濟方申付、領主地頭并家來奥印裏印添證文等有之候ハヽ、假令引受濟方不相願候共、領主地頭江濟方申付候積、寛政二戌年二月、評定所一座申合有之、其通取計來候得共、元來金主共ハ、村方を目當ニ貸付候處、領主地頭引受ニ相成、切金裁許申付候而ハ、百姓共鄕印を以、貸渡候詮も無之候間、領主地頭并家來奥印裏印添證文等無之候ハヽ、百姓共俱々地頭江引受之儀相願候共、御定書之通、都而地頭借ニハ不相立、日限濟方申付候上不相濟候得バ、連印之村役人手鎖申付、不相濟候得バ、村高江割付爲相渡可申、萬一村役人共而已之取引ニ而、小前百姓共不相辨ニおゐてハ、連印之者江身代限可申付候、領主地頭奥印裏印添證文有之候分、領主地頭引受相願候ハヽ、御定之通爲引受裁許可申付候、

御附札

書面鄕印證文を以借候金子之類、領主地頭并家來奥印裏印等無之候共、多少ハ領主地頭

鄕質

〔今川記五〕かな目錄

一國質をとる事、當職と當率行にことはらず、爲レ私とるの輩は、可レ處二罪過一候也、

〔興正寺文書〕定

條々 略〇中

一國質所質幷付沙汰停止事 略〇中

右旨於二違犯之輩一者、速可レ處二罪科一者也、仍下知如レ件、

天正十年十月日　恒興 丹〇伊 花押

〔集古文書三十六禁制狀〕禁制　六波羅密寺千部講中

一國質所質事 略〇中

右條々堅被二停止一訖、若於二違亂輩一者、速可レ處二嚴科一者也、仍執達如レ件、

天正十二年二月日　民部卿 玄以

〔香取神宮古文書纂十二〕申請六ヶ月借錢狀之事

合本錢一貫文者

右御料足者、一ヶ月に百文別に五文づゝの利分をかんがい申、十月と申候はゞ、本子共沙汰可レ申候、若一ヶ月も無沙汰申候はゞ、文のみには、身の子わつは生年十才に相成候、御藏本に永代相傳に入置申處實也、此上無沙汰申候はゞ、市町路次のきらひなく、見あひに鄕質をめされ候はんに、たとへ其所の地頭政所、親類兄弟他人いぎあるまじく候、仍爲二後日一狀如レ件、

文安三年ひのへとら二月廿三日　取主下總國香取郷いとにはの住人彌二郎 花押

〔武州文書〕北條氏條目

赤岩新宿不入之事

國質
所質

口入深敎房參

〔諸色調類集十ノ四十六〕天保十三寅年五月
左衞門尉殿ノ相談廻　大坂町奉行所より問答
株札書入金銀貸借遊女衣類等之儀に付調

遠山左衞門尉殿
鳥居甲斐守殿〇遠山鳥居二人並江戸町奉行
阿部遠江守
德山石見守〇阿部德山二人並大坂町奉行

以剪紙致啓上候、然者此度都而株札問屋仲間組合等被差止候に付而者、是迄夫々右株札等質物又は引當に金子貸出置候之分、返辨相滯訴出候時者、素々不正物を質引當等に取候儀に者無之候に付、右御觸以前取組に而、外々如何樣之筋も不相聞分者、通例貸金出入之御取捌相成候儀に候哉、〇中略

右廉々、當地見合之儀有之候に付、書面之通及御問合候、御用多之御中、別而乍御世話御地御振合等、委細被御申聞被下候樣致し度存候、此段可得御意如此御座候、以上、

四月廿七日　德山石見守印
阿部遠江守印

遠山左衞門尉殿
鳥居甲斐守殿

〔政所賦銘引付二〕飯加一定智靜泉申狀文明五十一朔
去九月末、於大津小袖面茶染一貫得候處、行泉坊被官夏見又八、號失物押取候、此外巨多失物有之、懸靜泉可取所質之由申之云々、

〔實隆公記〕大永六年五月廿日、質物黑小袖百五十匹置之、綱堂手驗書狀遣之、小袖被返之、六月三日、九月十二日、遣高田與次於東福寺、黄金貳兩爲質物十五六日作善事申付之、

〔親俊日記〕天文八年十二月廿四日丁亥、東坊城家雜掌被申鹽公事役事、對久山調賣券狀被入置質物候條、既今度雖押置之、被成問狀御下知之間、契約之子細、條々雖在之、於質券地者、可致返上、至借錢者、早速可被渡付之由、久山申之間、然者以此旨可被成御下知也、

十二月廿四日　親俊

治部河内守殿

〔大館常興日記〕天文九年七月十三日、一日行事本常より各へ折紙在之、盆之御靈供之儀、御ゑち物を可被出候勅旨、左京大夫殿より本常への文在之、次蔵阿知行木下屋地事、嵯峨天源院御下知違背候間、御下知事、仍御ゑち物被出候樣に御申可然候、次蔵阿事申分於事實者、御下知尤可然候由申之也、

〔徵古文府三〕入申麻座壹間

右之座者、御本所樣御能道具調候爲、其びた錢拾貫文にて入申候、仍爲後日如件、

天正六年戊寅二月十六日　山田三方花押

樣はかりや二衞門殿

〔金峯神社文書〕借用申高野奥院錢之事

合十貫文利分貳文子

右此料足者、依有用要借用申事實也、質物ニハ日向薩摩大隅之山伏一圓ニ入置申者也、三月九月ニ利平運上可申候、若無沙汰候者、質物可有御知行候、仍後日之狀如件、

永祿五年八月十四日　吉野寶藏院　光遍花押

〔建武以來追加〕定置洛中洛外諸土藏質物利平事

一盆、香合、茶碗物、花瓶、香爐以下、金物、武具等者、可爲六文子、〇中略

長祿三年十一月十日

〔政所賦銘引付　四〕一臺屋修理亮能家（中將大興寺飯加）　文明十四　九廿七　三廿六

洛中商賣紙座事、先祖相傳無其隱、然件支證共一條道場玉壽菴ニ入置質物之處、彼菴ヨリ村上左京亮預置候、紛失之由、玉壽菴證狀有之、然下京橘屋と申者、令出帶件支證申給御奉書之段、无是非次第也、可預御札明云々、

合奉行布野州　同五月三日分

清式大輿寺又右座申望曰子細、諏訪ニ與寺、

〔徵古文府　二〕定油座之事

合壹間者

右座之事ハ、三方用錢之時、會願齋左衛門殿へ直錢參貫文にて入申候處實正明白也、然間爲三方入申候上ハ、筵泊等之儀あるまじき者也、仍爲後日證文之狀如件、

永正二年乙丑十二月廿六日　三方

花押

花押

花押

〔建武以來追加〕定德政事政所方德政時制札案文

一ケンブノタグイ、エサンノ物、諸結ノタグヒ、ガツキノ具足、カグ、ザウグ等、置月ノ外十二ケ月タルベキ事、〇中略

永正十七年二月十二日

以物品條式等爲質

役共、此方ニ而相勤可申候、萬一滯候ハヽ、家屋敷名前書替、無異議相渡可申候、爲其連判證文仍如件、

年號月日

家主　　證印
　　　　家主
五人組　證印
名主　　證印

誰殿

〔幕制秘錄　乾〕乍恐口上

一何町何屋何右衞門家屋鋪、本人五人組年寄連印證文ヲ以、銀何拾貫目之家質ニ取置候處、當何月幾日、右何右衞門儀、家出仕、御日限至、歸り不申、右家屋敷欠所ニ被爲仰付、三鄕入札御拂渡御座候得共、望者無御座、其段右町內ゟ御斷奉申上候、凡銀何拾貫目餘、增銀いたし候樣被爲仰付奉畏候、色々勘辨仕候得共、建家裏側共甚破損廻り有之、當時見込も無御座候得共、段々出精仕、銀何百目增銀仕候ニ付、何卒右家屋敷、私へ被爲下置候樣御願奉申上候、此段御聞屆被爲成下候ハヽ、難有仕合ニ奉存候、以上、

何町
何屋何兵衞

年號月日

何兵衞

〔文保三年記〕玄上爲盜人被取了、而今年五月六日出現、其趣者、七條玄海法印之許ニ、三百文質物ニ置之、一倍之後、錯（テ）入道八百文買之、其後伊豫國住人志津河左衞門尉二貫文買之、琵琶造ニ令造直之、而琵琶造取進廳司殿北殿之處、玄上ニテハ無之由被出了、其後進九條殿了、自九條殿被遣西園寺、付玄上之條、無子細之旨被申了、仍官人章房搦取志津川左衞門尉并紺將入道等了、玄海法印ヲバ武家有沙汰、未搦取之、依之官人章房可有勸賞之由有其沙汰、下賜院宣了

金子約束時節不ㇾ濟節者、沽券證文不ㇾ及ㇾ斷金主方江留置、借主方ゟ出訴致候ニも不ㇾ及、

〔德川禁令考後聚十八行刑條例〕天保十三寅年十一月十三日

家質證文改正ニ付、町奉行所より市中名主共江申渡、

世話掛
市中取締掛
名主共

右者、前々家質書入候節、家質證文文言と、本沽券狀文言と、同樣之振合ニ而、家質金主江渡し、地主を家守ニ致し、別紙ニ請狀差出、一ト通りニ而ハ、本沽券狀と見紛れ候書振ニ而、本沽券狀ハ名主方江預り候仕方ニ有ㇾ之、紛敷相聞候間、今般仕法相改、沽券狀金主江相預ケ、聊紛敷儀等無ㇾ之樣可ㇾ致旨相觸候ニ付、以來右證文面認振之儀伺出ニ付、猶取調之上、別紙之通り雛形相渡候間、以來一統右之振合ニ相心得可ㇾ申候、

一沽券狀金主江相預ケ候節、立合改候上、印封ニ致し、家質證文と一緒ニ相預ケ、尤地主方江金主よりも沽券狀預り置候趣ニ書付取置候儀ハ、申立候通り可ㇾ致候、

但印封之儀者、地主町役人共調印可ㇾ致候、○中略

右之通相心得、無ㇾ差支ㇾ取引可ㇾ致旨被仰渡、證文御雛形御渡被ㇾ下難ㇾ有奉ㇾ畏候、爲ㇾ後日ㇾ如ㇾ件、

五番
南傳馬町名主新右衛門煩ニ付
伜新七郎
外一組一人宛印

天保十三寅年十一月十三日

〔政普集乾〕家質證文案

家質證文之事

何町何丁目家屋敷表間口何拾間、裏行何拾間、但何人役、右家宅地面共、來ル何月迄ニ金子何百兩之家質ニ差入、則金子慥に請取申處實正也、然ル上者、家質利金壹ケ月何兩宛無ㇾ相違ㇾ相渡、公役町

之もの一同、名主方へ立合、金子取引致候得共、家賃借受候地主ハ手元差支候而、金子借受候譯柄ニ付、五人組名主へ弘メ金同様之仕向等請申間敷旨、寛政三亥年御改正之節被仰候間、都而町役ニ而立合、證文加判致候而も、弘メ同様之仕向ハ請不申候、

一禮金と唱候者、家質借受候者より被相頼、貸方江申遣、相談整候様世話口入いたし候もの有之、右口入人幷貸方之もの江、借方より取引相濟候上に而、金高ニ應じ、三歩之割合ニ而、禮金受取、右三歩之内半金ハ口入人江、半金ハ貸方江配分いたし、右貸方、手元ニ而者、四半金程ハ、其身召仕のもの共江配當いたし遣し候も有之由、此割合縦令バ金千兩家質借受候節、借主より差出候禮金、

高三拾兩

内

拾五兩　　口入人

七兩二分　　貸方

七兩二分　　貸方之召仕共

右之通、凡下々ニ而之振合ニ御座候由、尤町役人共不相拘儀ニ付、名主方立合、家賃金取引之場ニ而ハ、決而禮金取遣ハ不為致事ニ御座候、素より町規表立候儀ニ者無御座候間、禮金取遣之儀にて不實之行違等有之町役人申聞候而も、更に取扱候筋合等無御座候、尤貸方に寄り而、右割合少少ヅヽ之相違ハ可有御座候得共、凡書面之通、下々ニ而之内之通例ニ御座候、

右御尋に付此段奉申上候、以上、

寅十月廿二日

牛込改代町
名主　三九郎

小石川金杉水道町
同　市郎右衛門

深川熊井町
同　理左衛門

〔例書二〕一沽券貸者、證文、金主方江相渡、金子借受、名主五人組立會ニ不及、内々ニ而取計借受候

仕法も有之由候處、先年より預置候沽劵狀を以、不正之取計致し、重キ御仕置ニ相成候ものも不少候、以來家質取引致し候節は、沽劵狀名主方へ預置候義も相止、家質證文江金高幷宿賃割合等之儀相認、借主幷五人組名主一同連印致し、沽劵狀相添、金主江相渡し、聊紛敷義無之樣仕法相改取引可致候、若此上紛敷義於相聞者、吟味之上急度咎可申付條、此旨町中可觸知もの也、

〔諸色調類集十ノ六十九〕天保十三寅年十月

小札ニ而附

店主共より差出候雛形金主より地主へ可遣沽劵狀預り一札案

何町何側何角より何軒目
沽劵狀預り申一札之事

一表京間田舍間 何間

表幅 何間

裏行 何間

沽劵金何百兩

右家屋敷引當ニ而、何百兩御用立申候ニ付、沽劵狀何通預置申候、返金之節無相違相戻し可申候、為後日沽劵狀預一札仍如件、

何町家持か店借か
何

年號月日 誰

誰殿

町々町屋敷家質ニ書入候節、借主より禮金差出候儀有之、右者町規之有無、幷割合等之譯御尋ニ付、左ニ奉申上候、

一家持共、金子融通ニ付、所持町屋敷を家質ニ差出、金子借受候砌は、借受候もの、幷右五人組貸方

達アリ、

市中人民申立は、家質等取組候を、人ニ爲レ知候てハ、商賣方差支に相成候ニ付、懇意之者、或ハ出入之者相賴、無口錢にて取引致、其餘口入人相極候へバ、口錢差出候儀、難澁可レ致候に付、是迄之通、御差置相成度旨申立候、

〔新舊政令拔萃〕明和四亥年十二月

大坂三鄕幷端々にて、百姓町人所持の家屋敷、土藏、納屋、諸株、髮結床等質物出入、金銀貸借證文奥印之義、江戸町人相願、依レ之差配所御免相成候間、以來差配所へ申出、奥印可レ受候、尤差配所よりも加入銀貸付、是迄借り受居候分ハ、期月之砌、證文相改候節、追々一統差配所より加入銀貸付致、奥印、爲二世話料一銀高百目に、貸し方より銀四分、借り方より銀六分づゝ、差配所へ受取候筈に候間、其旨可二相心得一候、

〔天保新政錄二〕家質宿賃歩合引直シ幷家質仕法改候事

天保十三寅年九月廿七日御觸

今般市中地代店賃引下ゲ方申付、地主共手取金相減候ニ付而者、其以前上り高見込を以、家質金借受罷在候者共、引下ゲ方之歩合ニ寄、上り高格別相減候場所は、以前之宿賃差出候分、地所ニ不レ應、過分之家賃ニ相當候間、自然相滯り、終ニは書入候地所も相渡候樣ニ成行、可レ及二難義一候間、今般引下ゲ候地代店賃、上り高相當之宿賃ニ歩合を引直し、證文書改候樣可レ致、尤引下ゲ方致候以後貸付候分は、是迄之通無二差支一取引可レ致候、

一家屋敷家質ニ入候節、借主幷五人組金主一同、其支配名主宅ニ而立合之上金子相渡、家質證文之儀者、沽劵狀同樣、永代賣渡之文面ニ而、金高相認、借主幷五人組名主連印致し、家守請狀幷宿賃幷期月等相認、借主五人組連印致し、金子相渡、幷沽劵狀も封印ニ而、名主方江　願置候、從來之

渡遣件之家には其町人以相談丁寧之者を爲致住居尤之事、

年月日

〔町會所留二十二〕寛政十二申年七月廿五日、銀座掛りゟ來ル、翌廿六日挨拶下ゲ札いたし返ス、

岸斊十郎殿　　田口五郎左衛門

壹
大黒長左衛門拜領屋鋪引當町會所貸付金、當時返濟殘金七拾兩有之候處、此度長左衛門御咎被仰付、地面御取上ゲ相成候ニ付、右殘金之分者、銀座金銀之內より、繰替相渡候積り御廻し相濟候間、都合次第納方取計可申處、右之趣ハ、其御掛りよりも、主膳正殿江被仰上、最早御聞濟有之候儀に候哉否承度候、御挨拶次第、納方取計候樣に御座候、此段及御問合候、

七月廿五日

下ケ札
○

御書面大黒長左衛門町會所金貸付返濟殘金之分七拾兩、銀座餘銀之內を以、此節返濟之積り御廻し相濟候由、右貸付金取計方之儀ニ付、此間町奉行衆幷主膳正殿江、御廻し差出置候儀に候得共、御書面之通、此節不殘返濟に相成候へ者、町會所におゐて差支之筋無之候、尤御掛合之趣、町奉行衆幷主膳正殿江、猶又申上候樣可致、此段及御挨拶候、以上、

七月廿六日　　岸斊十郎

〔新審政令拔萃〕家質會所之事

明和四亥年九月十三日

江戶淺草金龍寺門前、勘助店斊右衛門と申者、此度家質口入相願候、德用ハ口入三百文に相極、是迄十貫目にて百目ツヽ、口錢口入取來候內、壹匁ツヽ受取申度旨、勿論親類抔對談にて、質入致候儀ハ、格別之旨奉願候ニ付、右之通被仰付候而も、町人共差支ニ相成候儀ハ無之哉、存寄申上候樣

一家質金〔從二前々一之例〕
享保五年極　但日限之上於滯者、家質可爲相渡、日限之內宿賃も濟方可申付候、尤年季內にても宿賃滯三ヶ月過訴出候ハヾ取上可申事、○中略　何ヶ年以前にても、金高に應じ、日限濟方可申付事、

延享元年極　一爲替金　家質同然金高に應、日限濟方可申付、

〔御定書百箇條〕家質金滯日限定

寬保二年極　一金三拾兩以下　四十日限
一同　金三拾兩以上　六十日限
一同　金五拾兩以上　八十日限
一同　金百兩　百五十日限
但百兩有餘ハ、見合日限可申付事、

享保五年極　一金千兩以上　同月とも十二ヶ月限
右日限內之宿賃も濟方可申付事

寬保二年極　一拜領屋敷家質入於及出入ハ　屋敷取上　屋敷主百日押込
但書入に致金子借候も、家質金同然之事、

〔武家嚴制錄二十〕京都所司代板倉氏父子公事扱掟條々

掟○中略

一町人家屋しき、爲質物借狀ニ書載、不依金銀米錢借用仕候者、自德人其町之年寄隣家江斷申すべし、勿論元利年月之極ハ如借狀可相濟、又ハ一ヶ所之屋敷を德人兩人之方へ質物仕、借狀書載候ハヾ、家主可爲曲事、借狀ハ先判顯、又ハ其町人迷存候而書載候かを可用立哉、所詮一所兩人江質物書入候而致對論、其家主拂渡之家財欠所、借物方分限に令配當、此家財ハ德人共方へ

之由申候、不請取要脚候條、造意之至、可預御糺明候云云、

〔政所賦銘引付 三〕一建仁寺廣燈庵雜掌 松對 文明十二十二十四

十地院殿御借錢、寛正六十二、廿七貫文事、于今御難澀之上者、以質券地三條烏丸東北頬地子、可勘給云々、

〔政所賦銘引付 四〕一涌泉寺住持聖泉藏主 中播大 文明十四四廿六

小林藤右衛門入道借用五貫文事、質券綾小路猪熊與大宮間地子一貫文、既廿餘年所務之、猶不返付云々、○中略

〔法隆寺衆分成敗曳附幷諸證文寫〕一天正三年九月朔日、於垣內藤次郎ト云物、家ヲ開令逃亡、彼屋宅之儀者、實舜ヘ質物ニ入置、期限以相過故、藏本方へ可被進退存分之處、爲寺役者既ニ被撿封條、依及申事、集會評定曰、盜人生捕事者爲聞實否也、仍一旦被撿封儀者、掟法之旨雖爲尤、實舜進退之事、證據多々有之上者、理不甚被撿斷事、却而無其謂者歟、自然別ニ存知之體雖任之、其家守令逃毀次第早速ニ被沒收者、向後借屋幷家。。質等沙汰不入物歟、若其儀者要旨作立、號開家無理ニ被沒收者、侘傺之族逃毀不期何時條、彙而兩對ヲ申乞、其借り主可爭之間、門戶ヲ可閉置歟、若無其儀者、藏本ニハ手ヲ可被空者歟、所詮寺家之科人、幷理手無之家分は撿斷勿論也、萬一爲其家之主申理體有之而、證文無隱者、其主可爲進退旨、一味同心候、其通ニ取置了、

一總別逃亡人之開家、撿封後卅日之間被相待、其內ニ不令還住、兎角申子細無之者、寺家へ可被沒收旨、評定如件、

天正三年乙亥九月廿六日　公文代

沙汰衆

〔御定書百箇條〕家質幷船床髮結床書入證文取捌之事

左衛門、彌右衛門儀、長吉ハ年貢爲助合、地主共方江金子差遣候とハ乍申、金主より可相勤年貢諸役を、地主共江爲相任置、新右衛門ハ佐左衛門外一人より長吉方江差入候質地證文ハ、地主共より年貢諸役相勤、金主より年貢助合候極之證文ニ候處、何等之心附も無之加印いたし遣、佐左衛門、彌右衛門ハ、長吉方江相渡候質地之儀、年貢爲助合、金子差越候對談ニ候迚、右を足合ニいたし、銘々年貢諸役相勤罷在候始末、一同不埒ニ付、長吉、新右衛門ハ、過料錢三貫文宛被仰付、佐左衛門、彌右衛門ハ、御叱り被置候段被仰渡、一同承知奉畏候、且過料錢ハ三日之內、齋藤嘉兵衛樣江可相納旨被仰渡、是又承知奉畏候、若相背候ハヾ、重科可被仰付候、仍御受證文差上申處如件、

嘉永五子年九月二日

江川太郎左衛門當分御預所武州入間郡城村
百姓長右衛門親
長吉

武藏庫次郎知行同國中里村
名主新右衛門代
德右衛門

百姓佐左衛門
代兼
彌右衛門

村役人總代
百姓代
半次郎

以家屋宅地爲質

〔政所賦銘引付 二〕一山徒乘光祐秀申狀 清泉列 文明五十十二

去應仁二六、飯室谷聖行房質運借物九貫餘事、調遣預狀、同谷西花院ヲ入質券、同年十二月且五貫文返辨之處、號流質、房舍沽却事、○中略

一淸三位雜掌季益申狀 淸四左宗賢事也 文明七正廿六

本物返屋事、自去年五月限當月中、契約後藤七郎左衛門尉候間、今月廿四日渡遣、料足之處、既流

質地出入取捌方公事方吟味役江坂孫三郎江問合幷挨拶〇中略

不埒證文を以質地之地所請戻之儀、質取主不ㇾ承知之節之事、

一質地年季明拾ヶ年過候分、請戻候儀、質取候もの不承知ニ付、地主訴出候類ハ、假令不埒之質地ニ候共、年季明拾ヶ年過候儀ニ付、取上不ㇾ申筋ニ候哉、

右ハ質地年季明拾ヶ年過願出候共、證文見屆、不埒之證文ニ候ハヽ、願取上借金ニ准じ、前條之通可ㇾ取計候、

右者、天明二寅年三月、公事方吟味役江坂孫三郎江問合候處、前書之通挨拶、右ハ杉岡佐渡守公事方御勘定奉行之節、質地之儀悉世話有ㇾ之、右之通相極候由、其節孫三郎申聞候事、

〔地方凡例錄四〕一質地は年貢計金主差出、諸役は地主勤る、證文之事、是は通例金高ゟ餘計借請、其代ニ地主ニ而諸役相勤メ、不埒證文ニ付、年季內ならば定法之通の證文に仕直せ、雙方幷加判、名主は過料申付ル、年季明キ訴出る時、二ヶ月內ならば地面請戻させ、二ヶ月過なれば流地に被ㇾ申付、勿論雙方掛り合共過料申上る、

〔德川禁令考後聚十四行刑條例〕差上申一札之事

私共出入、當時御吟味中ニ御座候處、雙方とも質地取引之儀ニ付、元文二巳年之御觸、幷五人組帳前書之趣忘却いたし、相互ニ定法ニ振候質地取引いたし候不埒之段相辨、一同恐入候ニ付、相對之上、最前之質地ハ金主共江差戾、去々戌年對談いたし候通、別段他所新規質地ニ受取、年季之儀ハ、同年より來ル申年迄、中拾ヶ年季ニ相定、金六拾兩宛貸渡、直樣右金子を以、先質地代金夫々勘定受、尤彌右衞門ハ先質地元金九拾兩と差引三拾兩不足相成候間、右之內當金受取、貳拾兩ハ別段年賦借金證文にいたし、且今般質地ニ受取候地所ハ、年貢諸役とも、以來金主方ニ而相勤候筈取極、一同無ㇾ申分、御吟味下ゲ之儀奉ㇾ願候處、願之通御下ゲ被ㇾ成下候段被ㇾ仰渡、且長吉新右衞門、佐

不埒質地

〔名主五人組心得書〕一質に取候地所を、すぐに質入主に小作いたさせ候を直小作ととなへ、小作證文をきつと可取置由の事、

一質に取候地所を、質入主に小作いたさせず、外のものへ作らせ候を、別小作と唱へ、是また小作證文可取置由の事、

〔徳川禁令考後聚行刑條例十四〕安永八亥年

質地之儀ニ付觸書

一質ニ取候もの作取にして、質置主年貢諸役ハ勤候を頼納と唱、御法度ニ候、

一質入之地面を半分直小作致し、質地之高不殘年貢諸役共地主より納候を殘地と唱、御法度ニ候、

右二ヶ條及露顯候得バ、雙分加判共御咎有之事、

一質地年季明十ヶ年過訴出候而ハ、御取上無之事、

右之條々、大小之百姓衆而相辨候樣、村役人より爲申聞、以來年々名主宅にて爲讀聞可申もの也、

〔徳川禁令考後聚行刑條例十四〕天明二寅年三月

質地出入取捌方公事方吟味役江坂孫三郎江問合并挨拶〇中略

半頼納之質地之事

一半頼納と申ハ如何之質地ニ候哉

右ハ質地ニ相渡候地所之年貢ハ地主より相納、質地ニ取候もの方ニ而ハ、諸役計勤候類并質地ニ渡候地所之內、年貢諸役勤候程、地主方江殘置、同人方ニ而年貢諸役を勤、殘地を勤、先方江計受取作德ニ致し候質地、此兩樣を半頼納と申候事、

〔徳川禁令考後聚行刑條例十四〕天明二寅年三月

殘地
切畝歩
頼納
中頼納

〔名主五人組心得書〕一質入の地所壹反歩のところ、五畝歩を質置主すぐに小作いたし、五畝歩を質取主作りながら、質地壹反歩だけの御年貢諸役を、不殘質置主方にて差出候取極の證文を、殘。地。とゝなへ、決而致間敷よしの事、

一撿地帳之面、一筆壹反歩の地所を、五畝歩質入いたし、殘五畝歩を質置主所持いたし候類を、切。畝。歩。と唱へ、決而致間敷由の事、

〔質地格法〕質地頼納之事

是は寛永二十年、地主方ニ而年貢諸役ヲ勤、買主作取頼。納。と云、

地主方ニ壹畝歩貳畝歩殘置、右ニ而地主年貢諸役勤、買主作り取を半。頼。納。と云、

右永代賣御仕置同樣之趣、被仰出候、

一古來地所御取上追放被仰付候處、近來不埒證文ニ而御取上無之、相對之趣、敢而頼納之御吟味無之儀、○中略

殘地之樣成質地之事

一武州鴻巣宿茂右衞門相手、同國下鄕村茂兵衞質地出入、是は壹町五反貳畝歩、茂右衞門方江質地ニ入、五反貳畝歩、地主儀兵衞致直小作、作德ニ而年貢諸役可相勤約束、外壹町歩は長兵衞と申者江小作ニ請、小作金、茂右衞門方江可遣旨證文有之、殘。地。之樣ニ茂相聞候間、相伺候處、壹町歩と五反畝歩と小作證文壹通ニ分有之故、評議之上裁許有之、

一質地證文、定法之文言ニ候ハヽ、小作證文は殘地等之不宜文言ニ而も、元金は取上裁許有之、小作取上間敷旨、享保十一午年申合候得共、本證文は殘地之儀無之とも、小作證文ニ質入之反別之內、何程致直小作、此作德を以、總反別之年貢諸役相勤と有之は、金主手作之分、全作取ニ成候間、向後是等之類ハ、元金も不取上、品ニより咎可申付事、

元文三午年四月二日

年限之無差別無取上、名主過料、尤名主質入之儀不存、證文ニ於不致加印ハ不及咎、

右寛保三亥年五月三日、伺之通御下知、本文極、

寛保三亥年二月御書付之内、

質地小作取捌之内

一拾ヶ年以上年季質地　　　　無取上

朱書 拾ヶ年以上年季質地ハ、元來御制禁ニ而候哉、何ゆへ無取上事ニ候哉、

同月御好ニ付、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

質地小作取捌之内

一拾ヶ年以上年季質地　　　　無取上

朱書 拾ヶ年以上年季質地ハ、元來御制禁ニ而候哉、何ゆへ無取上事ニ候哉、

朱書 右御尋之趣奉承知候、拾ヶ年以上年季質地ハ、前々より御停止ニ候間、其旨可相心得旨、元文二巳年、關八州伊豆國御觸有之候、永年季質地證文ハ、永代賣ニ紛敷御座候間、年季を相立、前前より評定所一座申合、取上不申候、此段御下知之趣に付、文言書改懸紙仕奉伺候、

御附紙

朱書 亥四月廿六日、此御附札ニ而御下ゲ被成候處、此儀ハ先達而御答相濟候儀ニ付、閏四月廿九日御附札ハ御取御下ゲ被成候、

此御答之趣ニ而ハ、拾ヶ年以上年季質地御停止ニ候、然バ張紙にも不及、前々文言ニ而能候事、

懸紙

此箇條御附紙御下知之通、懸紙取除申候、

一名主加印又ハ名所無之、享保十四酉年以來之質地證文ハ、書入借金に准、日限濟方可申付事、

〔享保集成絲綸錄四十四〕元文二巳年二月

覺

一名主加判無之質地證文之事

一名主畫候質地ハ、相名主又者組頭等之役人加判無之證文之事、

一、十年季を越シ候質地證文之事

右三ヶ條之儀、幷田畑永代賣買、又は地主ゟ年貢諸役を勤、金主は年貢諸役を不勤、質地之類は前々より御停止ニ而、村方五人組帳書記有之處、右之通之不埒之證文を以訴出候も有之處、自今五人組帳名主庄屋等大小之百姓等江、度々爲讀聞、不致忘却樣可仕候、

一享保元申年以來年季明候質地は、自今年季明十。ヶ年。過訴出候はゞ取上無之事、

一金子有合次第可請返旨證文ニ有之質地は、質入之年ゟ十ヶ年過訴出候はゞ、取上無之事、

右二ヶ條、自今十ヶ年之內訴出候はゞ、取上裁斷有之候、右年數過候分は取上無之事

右之通、村々ニ而可相心得者也、

二月

〔德川禁令考後聚十四 刑行條例〕寛保二戌年十一月、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

質地小作取捌箇條之內

朱書 極 一質地名所幷位反別無之、或ハ名主加印無之不埒證文、　年限之無差別無取上、名主過料、

是ハ先達而伺之上御下知相濟候得共、猶又評議仕候處、名主質入之段、一向不存、證文ニ加印不致候ハゞ、咎ニ及申間敷哉と奉存候付、懸紙を以、今一應奉伺候、

懸紙

右此旨可相守者也

享保八卯年八月

質地出入裁判之儀、今度相改り、別紙之通、御代官所江相觸候間、私領方ニ而も、右之通可被相心得候、以上、

八月

〔德川禁令考後聚十四刑律條例〕質地小作證文無之ニ付無取上例

享保十六亥年十月

一相州大山八大坊寺領御師須藤尉大夫相手、同國下落合村仁右衛門外一人質地出入、

一落合村增右衛門質地ハ、小作證文無之ニ付無取上、

一仁右衛門分、通例之文言小作證文も有之ニ付、日限濟方申付、

〔德川禁令考後聚十四刑律條例〕元文元年辰九月

一享保十四酉年以來、質地證文名主加印、又は名所等無之質地ニ難立分ハ、書入ニ准じ候筈ニ候、然バ質地證文年季かゝり候とも、借金ニ准じ候上ハ、年季無構、元利共三十日切濟方可申付候、但小作之儀ハ、高利ニ當り候ハヾ、是又壹割半之利足ニ直可申付事

右之通、評定一座評議之上相極、

懸紙

質地出入取捌之事

一質地本證文取上無之分、小作滯も取上不申事、

一別小作ハ日限濟方申付候上、不相濟候ハヾ、身代限可申付候事、

一重御役人評定所一座知行所出入も、質地之分ハ不及伺、裁許可申付事、

濟之定ニ手形申付、元金切次第、幾年過候而も、地主江相返シ候樣可致候、いまだ年季有之分共ニ訴出候はゞ、是亦向後右之通利分壹割半之積り改之、手形仕置させ可申候、

一質地裁判之格法、前條之通、此度相改候ニ付、五ヶ年以前酉年以來限之訴出候分は、只今迄裁許を以、流地ニ成來候分ニ而も、當然元金不殘差出シ、田地請戻シ度と願出候者ニは請戻させ可申候、但流地持候者之方ニ、畠地配分致置、又は年季賣質地等ニも致置候分は、其儘ニいたし請戻させ申間敷候、流地取候者之手前ニ田地有之分計、右之通請戻させ候樣ニ可申付候事、

一自今は質田地を以金子借り候事、其所之田地直段ニ貳割引積ヲ以、手形名主庄屋組頭等加判可仕候、質地地主ニ直ニ小作致させ候といふ共、向後小作之年貢壹割半之利積を以、小作入上可相極候、是ゟ高利ニ不可致候、壹割半ゟ利安ニ借シ借り致候儀は、相對次第たるべき事、

右之趣堅可相守候、若違背之輩あらば、可爲曲事者也、

享保六丑年十二月

享保八卯年八月

覺

一去々丑冬中相觸質地之類、流地ニ不成裁判有之候處、右之通ニ而も質地請返シ候事も成兼、却而迷惑致候者有之、金銀之借シ借りも手支候由相聞候ニ付、當卯九月ゟ丑年以前之通取捌有之筈ニ候事、

一金銀不致返辨、質地をも不相渡、及出入候ニ付は、可訴出儀勿論ニ候得共、年久敷儀は取上無之候間、享保元申年以前之出入は訴間敷事、

一丑年以來當卯八月中迄、奉行所又は私領ニ而も、質地年賦ニ請戻し候裁判申付、證文改置候分は、彌其通ニ可相心得候、然共此上相對を以質流しニいたし候共、勝手次第之事、

貫象候間、取上可申候、

一地主誰印、口入誰印、名主誰印、如此有之は取上候、

右之通、卯五月廿一日、肥後守殿江六郎左衛門殿相談相濟、向後如此可仕由ニ而、此書付御渡候事、

名主加印之事

一名主加印無之證文、取上無之事、享保三戌年八月六日○中略

質地證文證文言惡敷類之事

一質地元證文文言之內江小作書入候分、御取上無之由、一紙之末ニ小作手形と別段ニ書出し、證人加判無之候得ば、別紙同前之事、享保三戌年八月六日極

一殘反別證文、御取上無之候、

一質地證內ニ何町步は年貢諸役地主江渡、殘地金主方ニ而年貢諸役なしニ作致候類、不埒證文ニ付、御取上無之、○下略

〔享保集成糾輪錄四十四〕享保六丑年十二月

總而百姓質田地年季明ケ已後、金子濟方相滯候儀訴出候得者、只今迄は金高ニより、五六十日七八十日之日切申付候而、一度之日限ニ不相濟、得與流質ニ申付、日延ニ者不申付候、是は江戶町方ニ而質ニ入屋敷之取扱之格ニ相准シ、日延ニ不為致候、然共地方之儀如此申付候得ば、分限宜キものは質流ニ田地大分取集、又は田地連々町人等之手ニ入候樣ニ成候、田地永代賣御制禁ニ而候處、おのづから百姓田地ニ離候事は、永代賣同然之義ニ候條、自今質田地一切流地ニ不成候樣、只今迄質入ニ致置候、又當然訴出候而出入ニ成候分ともニ、質年季明候者、手形仕置させ、小作年貢等ニ而も、前分極置候分は、壹割半金利積之外は、金子損失ニいたし、只今迄質地之小作年貢滯り有之ば、壹割半之利金積を以、元金之內江加入、其後は無利之濟崩之積り、金高壹割半宛、年々返

但本人死候時は、子同罪、

一買主過怠牢舍、證人右同斷、

一地所は、公儀、或は地頭江取上、

一（年號なし）田地永代賣主は牢舍之上所追放、倅加判有之候得は、不屆之旨申渡、所追放、

但家財欠所之不及沙汰、

一田畑永代賣之手形差出ニ付、賣主證人共、牢舍申付、出牢之上、賣主在所追放、買主は三年以前病死ニ付、倅召出、田地取上、賣主之地頭江可領地旨申渡、金子は可爲損失申渡、

一手形ニは永代賣とは文言無之候得共、買主子々孫々迄、名田可致由之文言有之、或は子々孫々迄之文言は無之候得共可請返と之文言無之、或は爲禮金請取由之手形有之候、然ば手形之面は、永代ニ田畑賣渡との文言は雖無之、各評儀之上、永代賣買手形ニ令決定候ニ付、賣主八人、買主拾壹人、證人拾六人、爲過怠十日ヅヽ双方牢舍申付、出牢之上、八人在所追放、買主拾壹人、證人拾六人は出牢之上、在所江相返ス、地所は地頭江取上、地頭領知ス、金子は損失ニ成、○中略

質物田畑之事

貞享四亥年四月御書付
元祿七戌年七月廿二日一座相談

一質地取置候方ゟ年貢相納候儀は、爲通例之處、田畑は金主方江相渡、年貢は田畑元主ゟ出候者有之由相聞、不埒之至ニ候、向後は不及申、右之通雖相定置、於顯は双方共罪科可申付事、○中略

質地證文印形之事

享保八卯五月廿一日

一地主誰印、證人誰印、組頭誰印、如斯有之は取上候、但外壹人證人有之候得ば、尚更取上候、

一地主誰印、名主誰印、組頭誰印、如此有之は取上候、

一地主誰印、組頭誰印、口入名主誰印、如此有之は、組頭は役目之印形有之ニ付、名主は役目之印形

〔政所賦銘引付三〕一次郎右衛門男布野州文明十一八廿五善法寺殿御局御被官也
口入借物二貫文質劵之地内野畠一段事、彼借主叉號分沽却之、无謂之族押妨之云々、

〔春日神社文書十〕加賀國小坂庄西方事、毎月朔日臨時之御神供爲功所、辰市中方知行之在所を質物ニ入候間、過分之要脚口入仕候、借状并代官佐味田請文可被沙汰さる處ニ、最少の致沙汰無御座候間、庄家一人を下相尋候處、年貢事は悉以代官佐味田方へ致沙汰而請取を所持候、中方に尋候得ば、更ニ無存知由被申、佐味田ニ尋候へば、中方へ渡候と申、如此申延候ては、借錢無返辨候間、致借状無沙汰候ば、永代可被取流旨沙汰候、佐味田請文ニ契約可被相違候者、代官を可被召放候也沙汰候上は爲錢主可直納旨申付處神人五郎右衛門罷下、借物不可返渡候由、寺門御衆議御下知と申上候、諸方へ書狀を付、借錢無返辨候條歎入候、爲寺門借錢可有御棄破子細何事候哉、肝要、辰市中方自筆自判之借狀請文明鏡之上は、不可及御不審候、向後御知行仕候者、御神供以下無懈怠備進可申、壷理之御成敗を被成下候者、可畏存旨可被御披露候、

二月廿四日　中務少輔延俊

供目代御房

〔質地格法〕質地永代賣之事

一寛永二十未年十月十一日、質地證文不限年季、或は永代ニ賣渡、或は子々孫々迄可致名田等之文言、又は可請返由之文言無之は、永代賣と云、

右之品、向後堅ク停止之事、

右之趣被仰出候

右御仕置之次第

一賣主牢舍之上、在所追放、

案構出之歟、被召出正文可申所存、縱雖爲之一載、時友之判形、如彼文章者、爲負物儀之條顯然之上者、宜任傍例可沒收本利勘定之御沙汰者哉、是三次時眞令同家于正弘宿所事、正弘未生男子之當初、爲亡父時友之計、以正弘養子之儀、年來經廻之條、御領內無其隱、依芳契不淺、正弘一期之間、令隨逐之許也、然者正吉爭以時眞可成進退之思哉、且過分申狀也、是四次如正吉謀陳者、資財物文書等被强盜以後、號名田去狀契狀案及濫訴之條、不輕罪科云々、比與申狀也、於名田畠者、正爲一旦之領主、一期之後可返與藤三郎之旨、書載于時友契狀之間、爲後證以彼案文讓與于時眞之條、有何誤難哉、將又於證文者、或爲盜人被取之由令言上之、或於守護御方有其沙汰之間、不備進之旨令申歟、變變申狀纡曲之至極也、是五此外正吉謀計之次第、條々雖多端、一々期問答之時者也、所詮被究御沙汰之淵底、任道理爲蒙御裁許、目安言上如件、

曆應四年四月　日

〔鈴鹿家記〕應永元甲戌年十二月八日庚戌筑前隼人鳥目灰吹五十兩、岡崎村伊地知宗雲へ借用、

借用仕候灰吹鳥目之事

錢合百貫文　此利一ヶ月ニ四貫文

灰吹合五拾兩　料目貳百拾五匁、此利一ヶ月六匁四分五厘也、

右錢灰吹致借用所實正明白也、爲其質物、兩人之田畠、吉田村ニテ貳町八反、內壹町三段大角筑前、壹町五反ハ鈴鹿大藏、來年十一月迄預置申候、若兩銀錢遲々仕候者、兩人田畠永代作取ニ可被致候、其時一言之違亂申間敷候、仍借狀如件、

應永元年十二月八日

鈴鹿隼人正定康判

大角筑前守時行判留之

伊地知宗雲老

倹申狀者、相語山僧、於大津抑留定祐、責取歷狀云々、如此者已非和與之儀、可謂乞索、不在志之所之、強之取之物、可還其主云々、成倹所申之趣、旁其罪敷、以此趣可令披露給、經高謹言、

十月廿八日　民部卿經高

逐申

兩方文書慥返上之、付本奉行兼有畢

〔新編追加政所〕一質券田地同作毛事 永仁五八十評

右或不辨本錢之以前、押作所領、或雖辨本物、不請取之、令領作云々、云彼云此、太無道也、然者本主雖押作、不辨本物之以前者、至件作毛者、可爲錢主之進止、又錢主雖耕作之、辨本物之後者、於作毛者、可爲本主之進退也、

〔東寺百合文書は自一至二十四〕目安

太良御庄百姓藤三郎時眞申、被棄捐紀藤太正吉濫陳、任道理、欲蒙御裁許事、

右時澤名田畠四分一者、亡父時友依爲重代相傳、御年貢幷負物辨償、去元德二年十二月廿日、對于正吉父次郎權守正弘、一旦避渡之、正弘一期之後者可返與藤三郎之旨載契狀之處、爲奉掠御沙汰、不備進證文、結句於守護方有其沙汰之上者、不可進覽文書於本所之由令言上之、大犯之外、守護所可有自專哉否、且可足上察、就中兩方爲一同御進止百姓之上者、尤可仰寺家御成敗之處、恐罪科令拘借文書之條、姧謀顯然也、是一 次所當御公事幷負物等、依辨償入置名田之間、爲質券之條眼前也、然者正弘一期无後者、可返與之由約諾分明也、年紀十餘年之間、當名田之地利、莫太之上者、被召出時友借書正文、云借物之本利、云地利之多少、悉被勘合之、任傍例可被經御沙汰、何以質券可成永代領知之思哉、是二 次於正吉備進之元德二年十一月十七日狀者、不審繁多也、如言上于先段、依負物辨償避與名田之上者、何故以藤三郎可入置于質物哉、是偏就于時眞備進之時友避狀之案文、廻今

以莊園爲質

任といへども、自今以後、此覺悟をなす輩は、所帶を沒收すべきなり、

〔政所賦銘引付 二〕一片山太郎左衛門尉正次 文明七九十八 御料所若州富田公文

賀茂社司森雅樂助借物 五拾貫文 質券之地、若州賀茂庄年貢本利相當分、任借書 正文備右 旨、可收納之由、御奉書事、

〔政所賦銘引付 二〕一沼田 松主 彌太郎光延 文明八八廿一

知行分若州瓜生庄下司職重書事、去寶德二、入置拾貫文質物之、約月晦日入夜可請返之由申候處、就號流錢主中村 守護被官 押領彼所之、就被成御下知、雖返付、猶拘惜重書云々、

〔政所賦銘引付 三〕一 飯加 山徒安養春澄 文明十二十一廿二

一色殿 江 古安養春憲借進用脚事、以質券丹後國久美庄年貢引給半、一亂出來畢、爲相殘分、如已前可被所務云々、

以田畠爲質

〔平戸記〕寬元三年十月廿八日、去廿五日、朝自殿下被下文書、見開理非可申之由被仰、 兼有 奉書 其日物忌自翌日被見、今日就請文畢、

彼狀云、

伊勢國村松御厨、貢宣與成俊相論、度々訴陳等如此候、見開理非可令申給之由被仰下候也、恐惶謹言、

十月廿五日　　　　權少輔兼有 奉

進上　民部卿殿

請文云

村松御厨事、質券之田地、不可爲永財、凡條格制炳焉也、加之其質者、非對物主、不得輙貢、是令條之文也、被付本領之條、無懈怠可備進神宮上分之由被仰下、可叶道理歟、抑貢宣申和與之儀、而如成

右以所領或入流質券、或令賣買之條、御家人等侘傺之基也、於向後者可被停止、至以前沽却之分者本主可令領掌、但或成給御下文又下知之狀、或知行過廿箇年者、不論公私領、今更不可有相違、若背制符有致濫妨之輩者、可被處罪科歟、非御家人凡下之輩質券得地事、雖過年記、賣主可令知行、

正安二年七月五日　　陸奧守判

相模守判

上總前司殿

〔集古文書五十三書詞〕二宮省忠契約狀

契約申尾張國國分寺內本妙興寺領事、九所領者、省忠當知行無相違之地也、雖然依有要用、妙興寺佛物用途五拾貫文借用申處實正也、一年中ニ貫別肆百文充相副利平、本利相當之間、諸公事等一圓ニ可有御知行候、但天下一同又者於此在所旱水風損時者、差遣進使、年貢之多少相定候、可有御結解候、萬一此所領不慮之子細候者、質物ニ同國三栁當知行之在所を、此本利相當之程可有知行候、若年紀中ニ違犯煩申仁出來候者、公方堅被經御沙汰者也、仍爲後日契約之狀如件、

應永參拾壹年甲辰十一月十日

二宮備中省忠花押

〔建武以來追加〕以御恩地令沽却事文安元九廿六

此段先例之制禁炳焉也、雖然近代如此之類、於下被成下安堵御判地者、今更不能改動沙汰、自今以後者、年紀質券等之外、被停止永地入流等、若猶背規矩令沽却者、云賣人云買人、共以可有其咎焉、

〔今川記五〕かな目錄

一借用之質物に、知行を入置、進退事盡るゆへに、或號遁世、或欠落のよし、侘言を企る儀有之、去明應年中歟、庵原周防守、此儀ありし、譜代の忠功もだし難きにより、宜隨其儀畢、(但以料所續津の鄕、鎗主に違之、)今年(大永五乙酉)房州此段さきりに言上雖去條、一往加下知ところ也、一家と云、面々と云、一通は其儀に

〔新編追加 政所〕一以所領入質券令賣買事○中略

右二ヶ條被棄破畢、早可被存其旨之條、依仰執達如件、

文永七年五月九日 奉行人連五方 頭人狀同之

相模守判

左京權大夫判

尾張前司入道殿

〔新編追加 政所〕一質券賣買地事 永仁六二廿八

或成給御下文幷下知狀、或過知行年紀之地外、不論公私領、可返付本主之由、被下御符畢、今更不及改變、但自今以後者、不能禁遏、任前々成敗之旨、可有沙汰、

〔新編追加 政所〕一質券所領事 文永十七十二評

今日以前分事、不論質券見質、雖不辨本錢、止錢主之沙汰、本主可全領知也、被成御下文者、不及沙汰、但正嘉元年以來御下文者、就理非致越訴之條、非制之限、入質之地者、今年中以後可令返之、

〔新御式目〕弘安七五廿七評

一沽却質券地他人私與所領事

御家人等、以所領或沽却、入流質券、或私與他人之時、雖載子細於證文、有限公事者、加本領主跡可被致其沙汰、至年貢等者隨分限可進濟、

〔新編追加 政所〕一以御恩所領入負物質券事 延應二四二十

右沙汰出來之時、過半分以上致辨者、差日數令辨償之、可被糺返彼券契也、其辨不足半分者、須充給所領於他人也、

〔北條九代記 下〕永仁五年三月六日評云、○中略 質券賣買地、可被返本主、

〔御成敗式目追加〕一質券賣買地事

以所領爲質

聞候、右體之儀者、金銀通用之差障に相成候儀に付、自今堅く停止之事候、向後右金銀を質物に取引致候者有之者、吟味之上、急度可申付候、

右之通可被相觸候

七月

〔吾妻鏡 三十九〕寶治二年七月十日乙卯、雜務條々有其沙汰、教經等勘申云、所謂父祖入所領於質券、不致辨、令死去之時、令讓與後家幷子息畢、而得其所之仁、依爲親之出舉、平均可支配之由申之、自餘子息等差名字、入質券之上、其所知行之仁、可致沙汰之由申、

〔吾妻鏡 四十八〕正嘉二年七月十日丁巳、今日評定、差名字、入質券所領事、其所知行之仁、可致其償歟之由被定云云、泉又太郎藏人義信與安房四郎顯綱相論下野國栃木鄕事、顯綱以彼鄕依入質券、已被付給人畢、然者任傍例、如一倍之定、於百貫文錢者、早可沙汰渡義信云云、

〔新編追加 政所〕一以御恩所領入負物質券事 延應二 四 二十

右沙汰出來之時、過半分以上致辨者、差日數令辨償之、可被糺返彼券契也、其辨不足半分者、須充給所領於他人也、

前縫殿頭文元朝臣所領、紀伊國高安庄沙汰時、被定之畢、

〔御成敗式目追加〕一以所領入質券令賣買事 文永四 十二 十六評

右御家人等以所領、或入質券、或令賣買之條、爲侘傺之基歟、自今以後、不論御恩私領、一向停止沽却幷入流之儀、可令辨償本物、但非御家人之輩事、被載延應之制間、不及子細歟、

〔新編追加 政所〕一賣買質券所領事 文永五 七 四評定

右給御下文者、不及子細、雖不給御下文、過廿ヶ年者不及沙汰、本物事、先可糺返也、次本所進止所職事、依其所事御家人等致訴訟之時、於六波羅令執沙汰、分限有定准歟、可依其左右也、

一抱而朱印之寺社領田畑屋敷外之もの江相渡儀難成事ニ候間、質地ニ不取様ニ兼而百姓共江申聞可置旨、御代官江書付を以て申渡候、

朱書（綠色）

此文言入用之儀と相見候、張紙取退可然事、

元文二巳年

〔三秘集六〕一領內之質屋隱鐵炮を證人も無之質に取候段相顯候上者、右鐵炮は領主へ取上、質屋咎者如何に可申付候哉、

御附札

書面隱鐵炮者、證人も無之質取候質屋之儀、鐵炮者質に取間敷品に候間、鐵炮者領主江御取上、關八州之內に候はゞ、所拂歟、錢十貫文過料程之咎にも可有之哉、然共一件之始末にも寄、咎之品も有之儀、吟味之趣委細不承候而者、極候而難及御挨拶候、

〔德川禁令考後聚六制禁布令〕元文三午年

寺附之品書入之儀に付觸書

近年諸寺院、猥に其寺之本尊什物佛具幷建具等書入、又は賣渡之證文を以、金銀致借用候寺院數多有之、不埒候、向後右之品質ニ入、或賣渡證文を以、金銀致借用候當人は勿論、證人迄も、吟味之上、急度可申付候、尤金主之儀も、右之品質物に取、或賣渡證文にて金子を貸し候段、不埒に付、金子濟方之儀訴出候共、向後は濟方申付間敷候、

四月

〔德川禁令考後聚七制禁布令〕寶曆十一巳年七月

通用金銀幷古金銀質物に取引致す間敷旨觸書

江戶、京、大坂、其外諸國共に、當時通用之□□金銀、幷古金銀を、其向々江質物に入候もの有之由相

追加 從前々之例
一質地元金并直小作滯日限濟方申付候節ハ、小作滯之金高ニ無構、元金日限之通可申付事、

〔享保集成絲綸錄四十四〕寬永二十未年三月、

田畑永代賣御仕置〇中略

一質ニ取候者は作り取ニして、質ニ置候者ゟ年貢役相勤候得者、永代賣同前之御仕置、但頼納買といふ、

右之通、田畑永代賣買御停止之旨仰出候、

〔五人組帳〕一質地取候もの、年貢不出之、質地ニ遣置候無田地之者之方ゟ、年貢役等勤候もの有之由相聞、不屆之至候、右之趣急度可相守旨、被仰付畏候事、

天保七申年

〔地方役人四〕質地并書入等之事

一田地は百姓永代家督たるを以、寬永年中永代賣御制禁以來、打續御條目有之、然るに百姓貧福常ならず、不得止事して質ニ入れ、其用を足すと云へども、身命を繫ぐ元なれば、隨分及出入、又質地之品も候故、旁臨時之御定有之事也、

一永代賣は質地證文に年季を限らず、或は永代賣渡し、子々孫々に至る迄名田にて致抔文言、又可請返の文言無之は、皆永代賣といふ、

〔例書一〕一切畝歩ニシテ質入法度也

一質田地請返候義、子孫之外遠き親類願出候も有之候、此儀如何可被仰付哉、右質田地受返之義、子々孫々親類たり共、願之筋不及沙汰事、

〔德川禁令考後聚十四行刑條例〕延寶三卯年

御朱印地質地取間敷旨申渡候覺

上總前司殿

〔新加制式〕一以御恩地入質物事

右要用之時、以給地入質物事、雖為制禁、无力之族、失術計之條、以憐愍之儀、限三ヶ年而可有宥恕哉、然者借用人、錢主人、過此年紀而互於申合者、可被召放彼所領、次其主三ヶ年中、不慮令斷絕者、可為錢主之費、但最前對其主人遂案內者、可為錢主之計、

闕

〔信玄家法上〕一負物之分、定年期渡田畠人者、書加土貢分量、欲令沽却者、買人幷其地頭主人へ可相

〔御定書百箇條〕質地小作取捌之事

元文二年極
一年季明ケ拾ヶ年過候質地　流地

但流地之文言無之證文は、年季明拾ヶ年之內訴出候はゞ濟方可申付、

從前々之例
一年季內之質地　年季明請戾候儀可申付

元文二年極
一年季限無之、金子有合次第可請戾證文、　質入之年より拾ヶ年過候はゞ流地

同
一拾ヶ年以上年季質地　無取上

寬保三年極
一質地高所幷位反別無之、或は名主加印無之不埒證文、　年限之無差別無取上、名主過料、尤名主質入之儀不存證文に於不致加判は不及咎、

但右金主地主承屆、相對之上地主を定、水帳可相改旨、名主江可申渡、尤名主質地相名主無之村方は、組頭加印於有之は、定法之通濟方可申付、

〔德川禁令考後聚十四行刑條例〕追加

寬保四年極
一質地元金年季之內內濟いたし、年季明殘金有之旨及出入候においては、　內濟之金子ハ地主江相返し流地小作滯計濟方可申付、

追加 從前々之例
一質ニ取置候地面直小作滯之儀、金主訴出候においてハ、

但日限之通不相濟候はゞ、地面取上可相渡、

上候書付、〇中略

一借成質物を以借候金銀

右御定書ニ、家質ニ准じ金高ニ應じ、日限濟方可申付と有之、家藏質渡證文ハ書入金ニ准じ取扱候得共、町役人親類總代連印有之分ハ、家質ニ准じ金高ニ應じ、濟方申付、沽券狀を預ケ、借候金銀も、町役人連印無之候得バ、借金ニ准じ取捌來候間、是迄之通裁許可申付候、

〔御定書百箇條〕盗物質に取、亦は買取候者御仕置之事、

享保六年　元文五年　極

一盗物と不存、證人取之、如通例之質に取、吟味之上、盗物之儀不存譯に決候はゞ、證人に元金爲償、質物は取返し、被盗候ものエ相渡可申事、

但證人も御仕置に成、金子可差出掛り無之候はゞ、質屋可爲致損金に候、尤證人無之、或は不念之質取方に候はゞ、質屋損金爲致、其上咎可申付事、

〔例書四〕一質屋盗物を乍存質に取候儀、奉行所察當答之事、

一質屋質物を取候を、先年町奉行所エ質屋共被呼出、質物を取候に者、盗物と存候而も、盗物と不存候而も、預り物致候哉之旨、江戸町中總質屋エ尋有之候處、答に者、盗物と存候而質に取候之段申之、左候得者、宜候旨被仰聞候由、盗物に而も、證人有之候得者質に取、公儀より尋之節、品を差出候爲に候、但在方に而も同然たるべく候、

禁制品

〔新編追加政所〕一質券賣買地事

右於向後者、不及沙汰、但被成安堵御下文并下知狀分者、今更不可有相違、

正安二年七月十日

陸奥守判
相模守判

相當之御咎相伺候筋にも可有御座候哉、
年季明拾ヶ年過候質地請戻之儀訴出候共、流地ニ申付可然候、不埒證文ニ候共、永代賣ハ格別、地所取上候筋ハ無之、成丈借金證文ニ爲認直可然候、不埒證文加印之名主ハ多分過料を申付候、但三貫文、
右之外質地ハ品々之定法有之、其時々次第不承候而ハ難決事、
〔德川禁令考後聚十四 刑條例〕寛政十二申年閏四月
質地年限内家内不殘欠落ニ付取計之事
領分之者、家内不殘立退行衞不相知、尤右之者不屆之筋も有之致出奔候ニ付、家財家屋敷所持之田畑迄闕所申付候、然ル處右田畑ハ質地書入等仕、證文も有之、通例之證文ニ而不埒之儀も無御座候間、金主ニ引渡候筋ニ御座候哉、又ハ依其科闕所申付候上ハ、不及其儀、證人江返金申付候儀ニ御座候哉、或ハ闕所之儀ニ付、一向金主損失ニ爲仕候儀御座候哉、
但質地等年限之内ニ御座候ハヽ、年限中ハ領主江取上置、年季明ニ至リ金主江引渡候筋ニ候哉、又ハ年限中ハ證人江田畑預ケ、年季明ニ至リ證人より爲致返金、相濟候ハヽ、右田畑證人ニ遣し、若返金相成兼候ハヽ、其節流地ニ致し、金主江爲相渡候儀ニも御座候哉、
右之趣奉伺候、以上、
閏四月　　鳥居丹波守家來　伊藤安右衞門
御附札
御書面、闕所ニ可成地所、質ニ入置、定例質地之證文儀ニ候ハヽ、地所ハ御取上拂ニ御申付、右代金之内を質取主江質地元金御渡被成、若又拂代金之高、質地元金より不足ニ候ハヽ、地面ニ而被成御渡候筋ニ可有之候、
〔德川禁令考後聚十五 刑條例〕天保十四年卯五月廿五日、越前守殿御下ゲ、金銀出入裁許改革之儀取調申

年季內之質地請戻度願之事

質地年季內請戻度旨申出候共、相對ハ格別、請戻申付候筋ニハ有ㇾ之間敷、乍ㇾ去不埒證文候ハヾ、借金ニ准じ取計可ㇾ申哉、

年季內之質地請戻度旨申出候ハヾ、年季明滯儀有ㇾ之候ハヾ、可ㇾ訴出ㇾ旨申渡候筋ニ而、尤不埒證文ニ候ハヾ、質地にハ不ㇾ立候、借金證文ニ爲ㇾ認候方可ㇾ然候、金主訴出候時ハ、借金之濟方可ㇾ申付ㇾ筋ニ候、

但本文之質地、相對ニ而請戻ハ、勝手次第之事ニ候、

貳三ヶ年之質地之事

一享保元申年以來之質地ハ、年季明拾ヶ年之內ニ而證文も宜候得バ、請戻被ㇾ仰付ㇾ候趣、右者貳三ヶ年季之質地ニ而も、年季明拾ヶ年內ニ候得バ、請戻申付候筋ニ御座候哉、

但享保元申年以來、年季明候質地ハ、年季明より拾ヶ年、幷金子有合次第可ㇾ受ㇾ戻旨之證文ニ有ㇾ之、質地ハ質入候年より拾ヶ年過、訴出候分も取上無ㇾ之、何れも拾ヶ年內ニ訴出候分は、取上吟味可ㇾ有ㇾ之旨、元文二巳年關八州幷伊豆國江御觸流シ御座候、右者御觸無ㇾ之外國も、右ニ准じ取計候筋ニ可ㇾ有ㇾ之哉、

質地貳三ヶ年季之極ニ而も、質地證文宜候得バ、年季明拾ヶ年之內ハ爲ㇾ受可ㇾ然候、但關八州伊豆國も本文之趣御觸有ㇾ之候、外國之取計も右ニ准じ候得共、其所之仕來を考、成丈內濟爲ㇾ致候取計肝要ニ而候、

年季明拾ヶ年過候質地之事

一質地年季明拾ヶ年過、請戻之儀訴出候分ハ、願取上不ㇾ申儀と存候、乍ㇾ去一ト通質地證文相糺、不埒之證文候ハヾ、假令年季明拾ヶ年過候共、地所ハ取上御拂之積、且證文江加印之村役人等ハ、

長祿元年丁丑十一月廿五日　　住山

〔親俊日記〕天文十一年卯月廿二日壬寅、松田丹後守殿へ撰錢事付而、上下京酒屋土倉中質物之事申間、賦遣之、書狀案文、

撰錢事、今度被定御法被打高札訖、於向後者守彼札可致商賣候、但至質物者、借主約諾次第可被渡之由、諸土倉酒屋中へ可被成御下知候、

卯月廿二日

松田丹後守殿

〔名主五人組心得書〕一十ヶ年以上之年季にて、質地差入間敷由の事、

一字地所の名目也　位上中下の位數なり　反別檢地帖の面一筆壹反分にて、內實は金歩有之、たとへ壹反貳三畝分あるとも、質地證文には、檢地帖の通壹反分書したゝめ可申、左樣不致候得者檢地帖に不引合よろしからざる由の事、

右字位反別、檢地帳に不引合候得者、質地にならざる由、檢地帳なき村方は、名寄帖江突合、相違なき樣念いろべき事、

〔五人組帳〕一享保元申年以前年季明候質地者、年季明拾ヶ年に過訴出候而者、御取上無之候、金子有合次第可請返旨證文ニ有之質地者、質入之年ゟ拾ヶ年過訴出候ハヾ、御取上無之旨被仰渡奉畏候事、

天保七申年

○按ズルニ、右ハ代官山本大膳ノ定ムル所ナリ、

〔名主五人組心得書〕一質地年季あけざる內、請戾し不相成由の事、

〔德川禁令考後聚十四刑條例〕天明二寅年三月

質地出入取捌方公事方吟味役江坂孫三郎江問合并挨拶

制度

ニ在レバ、宜シク參看スベシ、

〔新編追加政所〕一利錢出擧事永仁三

入質物於倉庫事、不及禁制、

〔建武以來追加〕一本物返質劵所領事永享十二十廿六

以彼在所之所當、年々雖致其沙汰、依不辨本錢及多年、令侘傺之條、不便之至極也、然早勘度々收納、到一倍者、可返付所領於本主也、

〔政所壁書〕洛中洛外諸土藏事文安二九廿一

依類火令燒失土藏、或入止之、或數年之間、可被免除公役之由、雖歎申族出來、向後一切不可被許容、德政以後、土藏令減少之處、猶寄事於左右、雖及訴訟、不可有御免之、令略本宅、若以密々儀、可取高利幷日錢等之質物造意歟、甚不可然、於土藏者、雖爲一所、至減少者、云公役失墜、云諸人愁歎、旁就公私、非無其費、所詮於自今以後者、堅所被停止之也、若背制禁、猥企訴訟者、可被處重科之焉、

〔大內家壁書〕一盜物之事、雜賀飛驒入道妙全、當所在國之時御尋、被申分聞書、○中略

一失物質物に置時、其盜人くらへ持來てをく事は、不能左右、若人をやとひてをかば、其人體を倉へめしぐして、申時質物をいだす、請錢不可入也、

寬正二年七月八日

〔東福寺文書三〕定

門前八町質物之事

右自今以後、於法性寺八町不論多少取質物之輩は、爲寺官之成敗可有破却其家、及左右之家若寺官私有許容者、卽時可有缺官、於兄部者破却家、剩可有改易者也、爲諸東堂幷十三塔銘々衆儀所定置如件、

古事類苑

政治部八十九

下編

質物

質物ノ制度ハ、鎌倉幕府以來ニ於テモ亦備ハレリ、當時質物ノ品類ニハ絹布、米穀、所領、田畠、宅地、家屋等アリ、中ニ就キテ其所領ヲ以テ質トスルハ、事ノ最モ重キモノナルニ由リテ、其制亦甚ダ嚴密ナリ、卽チ當時所領ヲ質トスルニハ、必ズ其年紀ヲ限リ、若シ期ヲ過グト雖モ、債主ノ直ニ之ヲ收メ、或ハ之ヲ賣買スルヲ嚴禁ス、然レドモ其禁ヲ破ルモノ常ニ多キニ由リテ、或ハ時ニ令ヲ發シ、負債ヲ償ハザレドモ、質券所領ヲ本主ニ返戻セシメシコトアリ、其他ノ質物ニ至リテハ、約定ノ期ヲ過グレバ、債主之ヲ收ムルナリ、之ヲ流質ト云フ、又質物ヲ交換スルヲ取替質ト云ヒ、水火ニ損破シ、或ハ盜マレタルヲバ失質ト云ヘリ、

足利幕府ノ頃、京師ノ富豪等、金錢ヲ貧民ニ貸シ、償還ノ期ヲ過グレバ、其質物ヲ收メ、利潤ヲ謀ルヲ以テ業トスルモノアリ、之ヲ土倉ト云ヘリ、當時政府之ガ爲ニ其期限及ビ利息ノ制ヲ定メ、絹布、繪衫、書籍ノ類ハ十二箇月ヲ限トシ、錢百文ノ利ヲ五文トシ、盆、香合、茶碗等ハ二十箇月、武具ハ二十四箇月、米穀ハ七箇月トシ、並ニ六文ノ利トス、而シテ又政府往々德政ト稱シ質物ヲ本主ニ返還セシムルノ令ヲ發シタルニ依テ、人民爭テ土倉ニ亂入シ、質物ヲ出サンガタメニ騷擾ヲ極メシコトアリ、事ハ德政篇ニ詳ナリ、

質屋ハ舊ク土倉ト云フ、土倉ハ蓋シ質倉ノ稱ナリ、質屋ノ事ハ尙ホ產業部商業篇八品商條

百兩相渡候割合ニいたし、殘金繰用可致と相企候始末三笠附ニ似寄候仕方、不屆ニ付遠島、

此儀三笠附點者同金元幷宿遠島と有之御定ニ准じ、伺之通遠島、

仰付候儀ニ而、兼而連中を極賭金會日を定候迄ニ而、望之ものハ札を買請、會日ニ罷出、當圖之者江金子相渡、其日限之取計ニ致し候類、三笠博奕同前故、右之類を取退無盡と相心得罷在候、本文内藤角馬一件吟味之趣ハ、賭金幷人數之定有之、右取極候人數ニ爲合、會日定置、終會迄之内、連中不殘手取致し候積りニ而、當圖之者ハ跡賭之代り、手取金之内殘金致し、右金子貸附利足を以跡賭を致し候積ハ、連中之者之申合ニ而、取退無盡とハ難申、博奕三笠附之類とも趣意違可申候、然ル處武家之家來ニ而ハ、縱令賴母子無盡ニ而も申立候儀ハ致間敷趣意を以、明和元申年評議之上輕も御咎附可然旨申上、其通被仰渡候儀も御座候間、前書角馬一件之儀も、一通之賴母子無盡ニ候得バ、角馬其外武家之分ハ押込、町人百姓ハ無御構ものニ候得共、都而無盡賴母子等之儀、名目ハ其通ニ而も、內實之取計ニハ品々之不正も可有之哉、畢竟連中江損金を掛候趣意ニ候得バ、右ハ取退無盡之方江附候も可然哉ニ付、此度角馬一件之儀も、掛り土佐守儀取退無盡ニ紛敷と見込、吟味詰候儀ニ御座候間、右之趣意を以、一件御仕置之釣合等を見合評議仕候得バ、土佐守申上候御仕置之趣相當ニ奉存候間、伺之通被仰渡可然哉ニ奉存候、

卯十一月

文政二卯年御渡

大[illegible]改長井五左衞門伺

常州下館下町平十郎三笠附ニ似寄候賭事之會元相企候一件

常州眞壁郡下館下町

百姓 平十郎

右之もの儀、御法度相背大賴母子講と唱、賭事之會元いたし、右番附紙を拵、長右衞門、庄右衞門、六兵衞、與吉、其外名住所不存もの江相渡、世話料差遣候、對談ニ而爲取捌、賭錢壹貫五百文ニ而、金三

右之通、寛保元酉年相觸候處、年久敷相成、若可致忘却哉ニ付、猶又觸置候間、急度可相守候、以上、

右之通可被相觸候

申十月

安政五午年五月廿四日

取退無盡ニ紛敷儀相催スモノ召捕糺明可致趣町奉行所申渡

南北小口年番
名主共

取退無盡と唱、三笠博奕同然之儀者、停止之旨、前々相觸候處、近頃寺社普請其外品、品名目を付、右取退無盡ニ紛敷儀相催候由相聞、不屆之至ニ候、以後右體之儀相催候者於有之者、召捕及吟味間、心得違之者無之樣、其方共より不漏樣早速可申通候、

午三月

〔德川禁令考後聚二十四 行刑條例〕寛政七卯年御渡

町奉行小田切土佐守伺

賴母子と名附候無盡吟味取計之儀ニ付評議

當八月一日御渡被成候田沼淡路守家來內藤角馬儀、賴。母。子。講と名附、無盡取立候一件、御仕置之評議仕候趣、左之通ニ御座候

一內藤角馬儀、不如意ニ而難儀致し、賴母子講と名附、無盡取立講元ニ相成、料理茶屋借請、取退無盡ニ紛敷儀致し候段不屆ニ付重追放、其外連中之者共も、夫々御咎之儀相伺申候、

此義寛保元酉年之御書付ニ、取退無盡と號、三笠博奕同前之儀有之、停止相觸候處、今以不相止、寺社建立講又ハ品々之講と名附、取退無盡致し候ニ付、顯候分ハ御仕置被仰付候間、向後右體之儀有之バ、三笠博奕同前之咎可申付と有之、三笠博奕同前之仕方故、御仕置も同樣被

平八　北島町 五郎兵衛店

平四郎　松屋町 新左衛門店

平兵衛

元文六酉年正月廿四日入牢

右之もの共儀、遂吟味候處、御停止相背、取退無盡之札賣致、立前錢請取、德用ニいたし候段、三笠博奕句拾ひ同前之仕形、不屆ニ付、松平左近將監殿依御差圖、同年四月廿二日、家財取上、非人手下ニ申付之、

宇右衛門　本小田原町二丁目源兵衛店 らくだ

元文六酉年正月廿四日入牢

右宇右衛門儀、遂吟味候處、前々より博奕を打、其上十三年以前より塗家修復講と名付、取退無盡いたし候處、十一年以前、御停止之觸有之付、本石町名主傳左衛門江申談、大岡越前守江伺相濟候由、傳左衛門申旨ニ任せ、御法度相背、取退無盡いたし、去年又々御停止之觸有之ニ付、水野備前守方江塗家修復講と名付願出、吟味之節ハ、紛敷無之樣ニ可致旨申渡候處、願之通申付有之儀と申觸、取退無盡頭取いたし候段、重々不屆至極ニ付、松平左近將監殿依御差圖、同年四月廿二日遠島申付之、

類例

明和元申年十月

取退無盡停止ノ觸書

此觸書ハ、本章ヲ全錄セシモノ、故ニ略ス、但末文アリ、左記ノ如シ

除八時過之座圖親元不濆無盡將滿、廻圖座敷餘物有祓、張欲心中呪符不効、若夫至酒終勝取人寄圖開、或疑第邪拾邪、又問偶乎奇乎、目安開之大聲可爲摩枯無盡師、無盡場之小書似諷下手義太夫、當者進、否者退、寺有取退、社有富実、雖物名因其處至欲氣無微塵一間耳、本圖否而欲心盛、先鋒盡而呪符起、或懐持佛三飯粒、又握鍋頭之信心、牢口不當、雙程不聽、然當圖雖有詠懸之苦勞、譲人亦有禮金之取德云、

〔德川禁令考後聚七帙制令〕寬保元酉年

取退無盡之儀ニ付御觸書

取退無盡と號し、三笠博奕同然之儀有之由相聞候ニ付、停止之旨、前々相觸候處、今以不相止、近頃ハ、寺社建立講、又者品々之講と名付、取退無盡いたし候ニ付、右當人共相顯候分ハ召捕、此度御仕置申付候、向後右體之儀有之バ、武士方、寺社方、町方、在方、共ニ遂吟味、當人者不及申、地主家主五人組名主、一町內之もの共迄、三笠博奕同然咎可申付候、常々心懸ケ吟味いたし、疑敷もの於有之者早々可訴出候、以上、

四月

右之通可被相觸候〇中略

元文六酉年正月十九日入牢

南八丁堀壹丁目代地忠七店　平吉

右平吉儀、遂吟味候處、前々より御停止之觸も有之處相背、所々寺院之取退無盡之札賣いたし、其上山本立安申合、會林講と名付、取退無盡之致頭取、寄錢之內、兩人ニ而致配分候段、不屆至極ニ付松平左近將監殿依御差圖、同年四月廿二町遠島申付之、

根村町忠右衞門店

與五郎花押　新左衛門花押
宗　智花押　與左衛門花押
新五郎花押　與　七花押

新町参

〔慶長見聞集　三〕江戸町にてむじんはやる事

聞しは今、關西大坂堺にてのはやりもの、關東江戸まで流行しは、たの。も。し。無盡と名付て、ひんなるものが有德なる者をかたらひ、金を持寄、坐中へ出し、百兩も二百兩も積置、皆入札を入、是を買とる、うとくなる者は貧なる者にたかふかはせ、毎月金の利足をとるを悦び、貧なる者は持ぬ金を得ること、地して歡ぶ、はやりものなれば、いかなる人も、五十口、三十口無盡に入り、扨又無盡好む人達は、一人して百口も二百口もするなり、江戸本石町四丁目の乳牛彦右衛門と云人は、二百廿口に入て、無盡中をかけまはり、賣買にひまなしと、愚老に物語りせられし、

〔嬉遊笑覽　五宴會〕享保二年十一月廿六日、今度天野佐十郎儀、無盡金を企、其上金子之肝煎等致し逐電仕、むさぼりたる儀共有之付て、死罪被仰付、是又神尾五郎兵衛、神尾外記、神尾彌五兵衛事、無盡金の連中に罷成、追て掛金迄遣之、侍の仕間敷儀ニ付、追放被仰付、明和の初ごろ、無盡講はやれり、寢惚文集明和丁亥無盡會稿序あり、有花有實造物者之無盡藏、而多金多錢、頼母子之初會日也、故借茶屋則引一文目之茶代、嫌遲參則除八時過之座圖云々、また太平樂府に、一自掛山子、毎會出錢頻、花。圖亦不中、空掛常被身、山子ハ江戸にてやましといふなり無盡の法、その始は異なるものなり、〇中略同意して行ふことを矛楯と呼むことといかなり、何ぞ其故ありしなるべし、

〔寢惚先生文集〕無盡會稿序

有花有實、造物者之無盡藏、而多金多錢、頼母子之初會日也、故借茶屋則引一文目之茶代、嫌遲參則

興行之儀者、可為諸人安堵可基乎

〔香取神宮古文書纂十一〕申うくる六文子無盡錢の狀の事

　　合本直錢二百文者

右件の御ようとうは、百文別に六文宛のりぶんおかんがへ申候て、本子共に未進なくさた申候べく候、もしぶさたの時は、ゑちけんには、乘あみのまへのやしきお、御藏分に永代に入おき申候べく候、此上なんじゆうお申候はゞ、御はうにまかせ、いちまちろじ、所おきらはず、見相のがうゑちおめされ候はんには其所の地頭政所以下のさた人しんるいた人、一言もいらんさまたげあるまじく候、仍為後日狀如件、

　　應永十八年辛かのとの卯う八月十四日　　下うり總ぬし國香取佐原の村住人案主乘あみ花押

〔京都上京文書二〕賴母子之事

　　後藤殿額申上候

一取過衆三分一にて御わび事申候間、おやいろ〳〵其儀申候へ共、札もち御がつてんなく候、

一其上四分にておや才覺仕候へ共、これも御札もち御がってんなく候、

一半分にてあひそたてかへのよし仰出され候處に、おやいろ〳〵取過衆申候へば、うけあひ候へ共、れうそく〳〵出し不申候間、其樣子御札もちへ申候へバ、おや無沙汰とかきあげさせられ候、一だんおやめいわく仕候、

おぼしめしわけられ被仰付候バ、かたじけなく可存候、此段十七人のおや衆として申あつかい候處に、八人のおやども無沙汰と被書上候、一段めいわく仕候、　內かまへ町

　　上柳原　下柳原　御靈口町

十七人之內　又次郎花押　孫三郎花押

東大寺要錄六卷封戸水田章御筆勅書に、伏願以此無盡之財實因施、无相之如來、鷹筑波集三の卷廿五丁ゥ南部定之句に、君ガ才にてこゝろいそがし、三吉野のたのもしに行年の暮、尤雙紙上十一丁ォうれしき物の品々の段に、たのもしのふだつきあてたるはうれしし云々、新撰犬筑波夏部、おや子ながらぞ賀茂へまゐれる、たのもしをとりの日にあふ祭りして、東寺文書鈔入ノ卅四ゥ

〔新編追加政所〕一鎌倉中擧錢、近年號無盡錢、不入置質物之外、依不許借用、甲乙人等以衣裳物具置其質、盜人亦令賣買贓物者、所犯忽可令露顯之間、竊以贓物入質物令借用之處、被盜主見付質物之時、錢主等稱世間之通例、不知其仁幷在所之由申之云々、所存之旨甚以不當、於自今以後者、入置質物之日、可令尋知負人交名在所、若沙汰出來之時、至不引手次者、可被處盜人也、以此旨面々可相觸奉行保內之狀、依仰執達如件、

建長七年八月十二日

相模守判

陸奧守判

伊勢前司殿○中略

一石原左衞門五郎高家、與鎌倉住人慈心相論腹卷事、

右訴陳之趣、枝葉雖多、所詮以件腹卷、令入置無盡錢質物之處、慈心抑留之由、高家雖申之、一倍已後經訴訟之間、非沙汰之限矣者、依仰下知如件、

弘安二年十一月卅日

平判

散位藤原朝臣判

沙彌判

〔建武式目〕一可被興行無盡錢土倉事

或被宛召莫太之課役、或不被制打入之間、已令斷絕乎、貴賤急用忽令闕如、貧乏活計彌失治術、忽有

〔釋氏要覽 下雜記〕寺院長生錢 律云、無盡財、蓋子母展轉無盡故、兩京記云、寺中有無盡藏、又則天經序云、釋二親之所蓄、用兩京之蓄邪、其不絕結招提之字、成充無盡之藏上、十誦律云、以佛塔物出息佛聽之、僧祇云、供養佛華多、聽賣買香油、猶多者、賣入佛無盡財中、

〔撈海一得 上〕今人患難アル時ハ、親戚朋友社ヲ結ビ、金ヲ集テ相救フヲ賴母子ト云、唐ニモ有コトナリ、清ノ趙恒夫ガ寄園寄所寄ニ曰、近時邑無賴子、邀百人作百子會、人出銀幾兩搖骰子、點多者先收、每月一應、八九年而百人畢收、然其先收者、冀其不能終局渙社、是欲圖賴之耳ト是ナリ、先ニ金ヲ收ル者ハ、會ノ渙ンコトヲ願フ人ノ黠智、和漢同情ナリ、又曰、江西有一僧、創千佛會、人出銀一兩、投木櫃搖骰點多者得百金歸、不必復應、而往來之行人圖僥倖、不過二三日、即聚千人、僧則利其一會得抽分數金耳、此ハ今ノ百兩富ナリ、

〔松屋筆記 六十七〕賴母子無盡 無盡錢土倉、蔵武式目三丁オ、

與清曰、今世種々の憑子あり、取拔無盡といふは、鬮に當て金を收りたるもの、跡の懸金を出さゞるなり、家質講といふは、當鬮の者、所持の宅地を宛てたる劵を出して跡の懸金にし、後其劵を取返すなり、封金講といふは、金預りの富人に任じて、封じ置て取るよし也、積金講といふも亦似たり、又湯島天神の富、谷中感應寺の富、目黑不動の富を江戶三富といふ、萬人の小銀を集めて、一人百金に當る也、文政年中になりては、京江戶大坂の富、何十ケ處といふ事を知らず、これを射得たる一人の爲には、富の多さもあるべし、不運不當の萬人の爲には、貧亡講ともいひつべし、貪欲の下人これがために產を傾け、亡命するものおほかるぞ、なげかしきや、

無盡と云ふ名目は、無盡財におこりて、もと僧家の語也、宋高僧傳十五卷十七丁ウ唐抗州靈隱山道標傳に、置田畝歲收萬斛、置無盡財與衆共之云々、同廿の卷十三丁オ唐洛京慧林寺圓觀傳に、李源父𢘥居守天寶末陷於賊中、遂將家業捨入洛城北慧林寺、即𢘥之別墅也、以爲公用無盡財也、佛祖統記卅四三丁ウ法門光顯志に、無盡財、

無盡

へ往て、禮を云、銀百枚外に拾枚を持參す、利息の心なり、如水對顏し暫くありて、人を呼て、さきに人の呉たる鯛を三枚におろし、其骨を吸物にして、酒を出せよと云ふ、兩人心に不足す、酒訖て三好銀を取來て禮を云、如水云、初より借す心無し、合力の心なりとて、再三強ても取らず、二人甚だ感じて歸りけるとぞ、

〔德川禁令考後聚十六行刑條例〕安永七戊年八月六日

町方之もの借金銀出入地立店立願出候一件相談書

御相談書　牧野大隅守

都而町方地借店借之もの共、借金銀出入有之候得バ、地立店立願出候而も、右金子出入家主引受不申候得バ、地立店立不相成仕來候處、右之通ニ而ハ地主家主甚難儀致し候趣相聞、殊不埒成ものハ、地立店立家主より可願出趣候得バ、金子出入態掠候樣成ものも有之哉ニも風聞致候間、以來外公事合吟味筋之ものハ格別、金子出入之分者家主引受ニ不及、地立店立定法之通申渡候樣致し可然哉、

右之趣及御相談候、

戌八月六日

下ケ札
御書面之通、以來取計可然存候、

戌八月十六日　曲淵甲斐守

○

〔下學集下疊字〕濫子(タノモシ)日本俗、出少錢取多錢、謂之濫子也、

〔南畝莠言上〕同書〇下學集に日本俗、出少錢取多錢、謂之濫子也、いま世俗にて頼母子といふ、無盡のことなるべし、

リ、マゲテ留メ給ヘトテ又ヤリケリ、又云ケルハ、親ノ事ヲオモクモ思、イタハシクモ存ズルコトハ、誰モヲトリマイラスベカラズ、サレバアノ世ニテ、親ニコソトラセタク思候ヘ、愛ニテ我身ニ給ベキコト候ハズトテ返シケリ、度々問答往復シテ事ユカザリケレバ、鎌倉ニ上テ對決シケリ、事行ノ人々ヨリ始テ上ニモ下ニモ聞及タグヒ、カヽルメヅラシク哀ナル沙汰イマダキカズ、至孝ノ志モフカク、世間ノコトハリモ、ワキマヘ存ゼルニコソトテ、ホメノヽシリケリ、心アル人ハ涙ヲナガシテゾ感ジケル、サテ件ノ物ヲ以、兩人ノ亡父ノ菩提ヲトフラフベキトゾ下知セラレケレバ、國ニ下リテ、兩人相合テ、二人ノ亡父ノ爲ニ、佛事イトナミケル、實ニ有ガタキ賢人ナリ、サレバ人ノ物ヲカリテイタランヲバ、相構テオコタリナク返スベキ者也、

〔花營三代記〕應安三年十二月十六日、仰詞

山門土人號負物譴責、成洛中所々之煩、剩不憚禁裏仙洞咫尺、亂入卿相雲客住宅、致種々惡行之間、被申座主宮、嚴密可有誡沙汰、曾不能叙用、彌以猥藉、違勅之坐難遁歟、於向後者、爲武家召捕彼輩等、可被處罪科乎、

〔川角太閤記〕三一二三日過、毛利殿兵粮米船二三艘著申候、輝元分別にハ、此兵粮米總陣へ進し度候得ども、右に大納言様米御賣被成候に、輝元きよう言葉不入者とて、言葉に品をあらせ總陣へ被申遣候ハ、我等兵粮澤山著申候、御用に候ハヽ借可申候、此米京都にて、御返被成可被下候、本にて被下候へ共、五わりにあたり申候、是にて請取申間敷くと、陣中へ被申渡候、いまだ米とぼしき故、大形の衆中、御借被成候、後聚洛にて、皆御返被成候時、輝元返事にハ、此時の音信にて、御座候とて、一粒も其米受取不被申候事、

〔老人雜話〕上高麗陣の時、太閤日根野備中を高麗へ使に遣す、備中甚貧く、支度成がたし、三好新右衛門を介媒にて、銀を黒田如水に借る、如水銀百枚を借す、備中歸朝して、新右衛門と同道し、如水

限之證文可致旨、文化二丑年二月町觸有之候間、證文無之分ハ取上不申、料錢之儀ハ日數有之候共、三日分之料錢計濟方申付、借方之者品物質入等致し候ハヽ、右品物ハ早々爲相濟候樣申付候上、不相濟候節ハ、吟味之上相當之咎可申付候、尤懸意之間柄ニ而、素人より借受候ニ無相違分ハ、假令證文無之候共取上、右同樣濟方可申付候、

〔大坂堺問答丼〕貸物出入

一貸物取引之儀、通帳面ヲ以致取引、證文無之候ハヽ、印形有之候共、損料之儀者申付間敷候、

此儀貸物取引之儀、通帳ヲ以貸借致候付、右帳面ヲ以取戻出入、幷貸錢之儀ヲバ、帳面認方にも寄可申候間、差極難得其意候へ共、借請候者、宿屋渡世にて、日々借受候旨通帳ニ致し有之、印形有之分ヲバ取上候、何れ借請候趣意にも寄可申候と存候、

〔沙石集六〕亡父夢子告借物返事

中比、武州ニ、サカイマヂカキ程ニスミテ、互ニイヒムツブル俗有ケリ、一人ハマヅシク、一人ハユタカナリケル、サルマヽニ常ニ借物ナンドシケリ、サテトモニ死去シテ後、二人之子共親共ノムツビシガ如クイヒカヨハシケリ、マヅシカリケルガ子、夢ニ見ケルハ、亡父來テヨニモノナゲカシキ氣色ニテイヒケルハ、ソレガシ、トノヽ物ヲイタ〱ラカリテ、カヘサヾリシ故ニアノ世ニテ、セメラルヽ、彼子息ノモトヘ返スベシトツグ、夢サメテ親ノ時ノ後見ニ事ノ子細ヲタヅネケレバ、サル事侍リキ、御夢ニタガハズトイフ、サテハ不思議ノ事也トテ、イソギ員數ノ如ク沙汰シテ、彼子息ノモトヘ、カヽル子細侍レバ、カノ借物沙汰シ進スル由申送ケリ、カノ子息ノ返事ニ申ケルハ、コノ物爭カ我身ニハ給ベキ、アノ世ニテ、ソレガシガ父責マイラセンウヘハ、又カサネテ給ベカラズトテ返シケリ、又オシカヘシ、ヲクリテ云ク、此世ニテサタシマイラセザランニツキテコソ、アノ世ニテハセメラレマイラセ候へ、親ノナゲキヲヤスメ、夢ノ告ヲタガヘジト思侍べ

分、彌内濟も不仕候得ハ、猶吟味可仕處、一體貸方不埒成儀ニ付、一通り之濟方ニ可能成筋にも無御座、借方ニ而も、甚不束之儀ニ御座候間、御咎も可有之筋と奉存候、此度伺之通、御差圖有之候得ハ、當時滯掛合中之分ハ無取上相成候間、右御咎之御沙汰ニも及び申間敷奉存候、依之町觸案相添、此段奉伺候、

丑二月　　小田切土佐守

根岸肥前守

〔天保集成絲綸錄百四〕文化二丑年二月

町觸○中略

一損料貸之品、衣類夜具等、其外古來ゟ仕來候通、實ニ差支之間を合候ため、品ニ而貸附候分不相返訴出候ハヽ、吟味之上於無相違者、取上濟方可申付候、

但當座之間を合せ候事ニ付、三日限り之證文致し置、聊紛敷儀不仕、勿論損料錢高直ニ致間敷候、○中略

右之通、町中不洩樣可觸知者也、

丑二月

〔德川禁令考後聚十五行刑條例〕天保十三寅年十月朔日

越前守殿江御直上ル

金銀出入取捌之儀ニ付勘辨仕候趣申上候書付　　鳥居甲斐守

○中略

一損料金錢

右ハ借金銀濟方を危踏、衣類其外損料貸ニ致し、借方之もの、右を質入いたし、當用相辨候故、損料と質入之利分と二重ニ相成、難儀致候ニ付、無取上、金差支之間を合せ候ため貸附候ハ、三日

是ハ去ル午年之證文ニ而、右樣米代前金ニて相渡候趣之處、米ハ當午年ニ相成可渡與之文言ニ有之、拾ケ年以前ニ代金可遣置譯も無之、是又紛敷相聞候、

右之通ニ而、買受候上、預置候儀ニ者無之、其上實ニ預米ニ候ハヽ、右體年久打捨可置樣も無之、全貸金ニ候處、證文面品能書取候迄之儀ニ付、去巳九月之御書付ニ而、願之趣無取上、訴狀ハ差戻候樣可致候哉、及御相談候、巳上、

午〇文化七年八月　廿一日、一座評定極ル、

〔德川禁令考後聚行刑條例十六〕文化二丑年二月

損料貸

損料之品貸借之儀ニ付奉伺候書付

書面伺之通取計、町觸可仕旨被仰渡、奉承知候、

丑二月十九日　小田切土佐守

根岸肥前守

金銀貸方致し候もの共之內、日なし貸と唱へ、少分之金錢、町方其日暮之もの等江貸附、尤少々利足高利ニ相當候得共、右を借受、其日之元手ニ仕、身輕之者共、今日を取續候儀ニ御座候處、去ル巳年借金銀相對濟被仰出候以來ハ、日なし貸共、濟方を危踏、衣類其外夜具等、損料貸ニ致し證文取置、借方ニ而ハ、相對之上、右を質入致し、當用相辨候故、以前之高利を借候よりハ、損料と質入之利分と二重ニ相成候故、難儀致し候趣ニ相聞、其上一體之姿も、日なし之金錢貸候よりハ、却而如何ニ御座候、右ニ付種々評議仕候處、損料貸之儀計嚴敷相制候ハヽ、差支之程難計奉存候、依之別紙之通町觸仕候ハヽ、程能金錢ニ而貸附候樣相成可申哉ニ奉存候、

一近來者、御家人又ハ輕キ御旗本之內ニも、心得違、右體損料之品借受候も有之、返濟相滯及出訴、先方江訴狀相達置、內濟仕候も有之、又ハ當時掛合中之分も御座候而、如何成儀と奉存候、右之

戌十月

寺社奉行
大草安房守
御勘定奉行

〔公事取扱〕紛敷買預米無取上訴狀差戻、

御相談書

根岸肥前守

一武州寄居村兵吉相手同國津田村伴七外八人代金相渡買預置候米大豆不相渡出入

是ハ拙者方江訴狀差出候間、一通相糺候處、訴訟方兵吉兄兵右衞門義、相手之者共ゟ、先達而

米大豆買請預置、證文取置候處、右之分兵吉讓受候趣申立、證文左之通、

相手之内

一新宿村萬五郎前谷村元右衞門へ相掛候分

是ハ買請預置候趣ハ、文面不束之義も不相見候得共、萬五郎父久五郎元右衞門親先元右衞門

名前ニ而安永又ハ天明年中之證文ニ而、有預米ニ候ハヾ、可拾置樣無之紛敷相聞候、

一大蘆村仙右衞門、前谷村新八江相掛候分、

是ハ新八義者、親十藏代之儀ニ而、安永年中、又ハ拾ケ年以前之證文ニ有之、殊ニ借用金幷元利

之文言認加、借金ニ無相違相見候、

一津田村伴七外三人江掛候分

是ハいづれも天明年中幷九ケ年以前ニ年附ニ而、米大豆出來次第、其年之內可相渡趣も認有

之、米大豆代金ニ相渡候趣ニ而、預米與申趣意ニ者無之、殊ニ其年之内ニも可相渡品を、是迄

可拾置筋も無之候、疾與催促等致し候趣も無之候、

一大蘆村八十右衞門江相掛候分

相成候節者、一般ニ貸金出入同樣切金申付候方、於事實者可然哉、併預ヶ金者前々より本公事日に差出候間、貸金同樣切金申付候も如何可有之哉ニ付、家質金ニ准じ金高ニ應、日限濟方申付、相滯候ハヽ、其掛々宅江家來呼出、嚴敷申渡、追々願人江爲相渡候樣致し候ハヽ、矢張切金ノ姿ニハ可相成候得共、取扱方貸金預金之差別有之可然哉、且拜領町屋敷家守又ハ飯米舂入諸請負之者共差出置候身元金等可差戻分相滯、願出破談ニ相成候節者、前書家質金ニ准じ濟方申付、猶等閑致し候ハヽ、是又其掛宅江家來又者身分ニ寄當人呼出、嚴敷申付、追々爲相渡候方ニ可有之哉、先例も無之、難決候間、此段及御相談候、

戊九月

御書面、武家掛り預ヶ金、并身元金出入裁許申付方之儀、利附之證文を以滯願候而ハ、切金ニ可相成儀を推量事實引違、預ヶ金證文取置、利分受取、又ハ古借等ニ多分利足を取、右證文を書替願出候類も可有之哉ニ付、以來一般ニ家質滯ニ准じ、金高ニ應じ、日限濟方申付、相滯候ハヽ、家來呼出、嚴敷申渡爲相渡候ハヽ、貸金預ヶ金之差別も有之可然との御見込之趣勘辨取調候處、一體事實相違之證文等を以願出候類をも、一般ニ右樣裁許申付候而ハ、相當致間敷哉ニ付、右體之類ハ、得と事實吟味之上、貸金之趣意ニ相當り候分者、證文面に不拘、貸金定例之通裁許申付、全預ヶ金ニ無紛相決候分者、天明三卯年、買受米出入裁許申付方之儀ニ付評議濟、并前書家質金滯之御定ニ准じ、金高ニ應じ、日限濟方申付、相滯候ハヽ、家來呼出、嚴敷申渡、爲相渡候儀者、御見込之通ニ而、存寄無之、萬一其上ニも濟方等等閑類も有之候節ハ、預ヶ金ハ素々預り主自用融通ニ可致筋ニ無之候間、右不埒之廉吟味詰、其始末ニ寄、先例等ニ見合、相當之御咎申付候方ニ可有之、其外拜領町屋敷家守又ハ飯米舂入受負之者共差出置候身元金等可差戻分相滯願出候節も、右預ヶ金滯之振合を以取計候方可然哉と存候、以上、

此儀両替屋之外、通帳ヲ以預銀取引之出入利銀濟方之差別共、先例書留不相見候、尤帳面認方等吟味次第之義ニ付、兼而難差極與被存候、

〔德川禁令考後聚十六行刑條例〕天保九戌年九月廿一日

武家江掛預金身元金出入裁許申付方之儀ニ付相談書

御相談書　筒井紀伊守

一武家江掛候預金出入、拙者方江數口願出、當時吟味中之處、濟方掛合不行屆破談ニ相成候向も有之候處、武家方江預ケ金裁許申付候先例差當無之、既去酉二月中、牧野左衛門、駿河町奉行之節、預ケ金取扱方、隼人正方江問合有之處、預金者、自用融通ニ可致筋無之候間、家質金滯ニ准じ、日限濟方申付候上、滯候ハヽ、身體限申付相當可致哉ニ付、右之趣、其節御一座江御相談之上、越前守殿江相伺候處、伺之通可及挨拶旨被仰渡候、右者町人百姓共之出入ニ而、武家方預金者差別も可有之哉と、再應先例取調候得共、相見不申、然處武家方借用金之儀者、金子貸出候もの、利付證文ニ而ハ、滯願出候節、切金申付候儀、粗承傳、貸附候最初より、預ケ金證文面ニ相當、貸出候向も可有之哉ニ付、左候得者、利分受取候而も、證據ニ可相成書付類相渡申間敷、又ハ古借等ニ而、追々多分利足を取、終ニハ預ケ金證文書替候儀も可有之一概ニ證文面を以、家質ニ准じ、預ケ金を裁許申付候而ハ、預り人於武家方者相當仕間敷哉、元來武家方非常手當金、身元慥成町人共江相預ケ候者、無謂儀ニ無之候得共、町人より武家方江預ケ金致し候ハ、輕き身分ニ而、纔合有之歟、或ハ身柄ニ而、由緒有之候ハヽ格別、左も無之、一通ニ出入致候迄ニ而ハ、却而先柄ニ寄、手重相成、強而町人共より可相預樣無之候間、武家方江無利足預ケ金致し候儀、先者於事實有之間敷、町人共者金子預り候而も、融通ニも相成候儀、武家方ニ而ハ、自用ニ致し候外、致し方無之、旁以家質金滯等ニ准じ、濟方申付候而ハ、相當仕間敷候間、以來武家方江預ケ金出入破談

一右出入扱人立會、篤と及掛合候處、一體雙方共懇意之間柄故、自然と勘定合等閑ニ相成居、入組有之候ニ付、扱人立會勘定取調候處、內實金何拾兩訴訟方ヱ可遣勘定ニ相成候ニ付、右之內ヱ當金何拾兩相渡、殘金之儀者訴訟方ニ而致不足候筈、其外雙方申爭ひ憤之儀者、扱人貰受、右出入無申分熟談內濟仕、偏ニ御威光と難有仕合奉存候、然ル上者、右一件ニ付重而雙方より、御願筋毛頭無御座候、爲後證連印濟口證文差上候處、仍如件、

年號月日

何之誰知行所
何國何郡何村
百姓　誰印

何之誰領分
何國何郡何村
百姓　誰印

御評定所

〔政書集乾〕預金手形案

預申金子之事

一金百兩也　但通用金也

右者書面之金子慥に預置申處實正也、然ル上者、何時成共、貴殿御用之節ハ無滯相渡可申候、萬一遲滯仕候ハヽ、加判人方ニ而調達致シ、急度辨濟可仕候、爲後日預り手形入置申處、仍如件、

年號月日

預主　誰印
證人　誰印

誰殿

〔大坂堺問答乾〕一利銀之儀

一兩替屋之外、通帳ヲ以預銀致取引候分、利銀書入有之候共、證文無之候而者、利銀者不申付間敷候、

强盜ニ取ル、、并ニ燒亡ノ物、法意ニハ返サズ、竊盜に取ル、、物ハ實否ヲ知ザル間、預人辨レ之、武家モ此義歟、

〔諸州古文書〕武田信玄分國諸役免許狀

一鵜月七百貫文預候、利錢之事可レ爲二四文子一、以二其故一商諸役一月馬六疋口、又門屋四間令二免許一者也

奏者　跡部九郎右衞門尉

卯月〇天文十九年十二日　林土佐守

〔法隆寺衆分成敗曳附并諸證文寫〕一今度〇永祿九年阿波衆入國忩劇付、敵方預ヶ物可レ取之由申、花園院實光院兩院へ打入、寺家ヨリ申分候者也、其曖以下用途入間、諸坊等之藏別ニ懸取懸、寺之預物無二別之樣一可レ申曖之由沙汰候也、於二講師坊之壹一集會在レ之、

〔長曾我部元親百箇條〕掟〇中略

一借物并預ヶ物又直之米預り候物、火事盜人ニあひ候時は、其預りての我物迄失候者不レ可二立替一、若預ヶ候物計失候者可二立替一事、付又かし堅停止之事、〇中略

慶長二年三月廿四日　盛親在判

元親在判

〔政普集坤〕預金滯願滯濟口證文案

差上申濟口證文之事

何誰知行所何國何郡何村與頭誰より、同國同郡何村百姓誰江相掛り、預米滯出入、去丑十二月、何之誰樣江御訴訟申上、去ル二月二日御差日御裏御尊判頂戴、相附候處、相手方より茂御差日當日罷出、夫々返答差上御吟味中、引合人をも被二召出一、當時御吟味中ニ再應御日延奉二願上一、掛合之上熟談内濟仕候趣、左ニ奉二申上一候、

物、造意歟、と見えたる日錢は、日成の類なるべし、江戸に烏金あり、そは今日貸して翌朝烏の鳴をりに返す金也、

〔公事取扱〕借金家質出入〇中略

一車借錢、日なし錢取上無之候、品ニより雙方答の古例、

〔德川禁令考後聚刑律十七條例〕享和三亥年正月廿七日落着

戸田采女正殿御差圖　根岸肥前守掛

不埒之貸金致し、證文取拵、濟方願出候もの、

白金臺町八丁目家主
庄兵衛

此もの儀、高利之金錢貸借致間敷段、度々申渡も有之處、八年以前辰年中より、日なしと唱候貸方ニ而、金壹兩用立候積之證文受取、内實者錢三貫八百文貸渡、錢四百文ツヽ、拾二度ニ都合四貫八百文受取、元利皆濟之積ニ極、證文面ハ貳拾兩壹分ニ候得共、内實者至而高利ニ相當過分之德用取候處、翌巳年貸金銀相對濟御觸有之、多分之損金致し、其後右貸付金相止候得共證文書替候もの共を相手取、去ル酉年及出訴、吟味中、内金受取、殘金ハ無利足五ヶ年ニ割合可受候積内濟致し候得共、右年賦金常又相滯候とて、前書不正之證文を以、濟方願出候段、不屆ニ付、江戸拂申付之、

借米利息

〔今川記五〕かな目錄

一故なきふるき文書を尋取、名田を望事、一向停止之畢、但讓狀あるにおいては可爲各別、借米之事わりは、其年一年は、契約のごとくたるべし、次の年より、本米計に一石には一石、五ヶ年の間に、本利合六石たるべし、十石には十石、五ヶ年の間に、本利合六十石たるべし、六年に及びて、無沙汰に付ては、子細を當奉行幷領主にことわり譴責に可及也、

預金預物

〔御成敗式目追加〕一預物事

日錢
日成貸

ニ相當をも不存罷在、前利引去分をも、最初より之利足濟方二重ニ願出次第ニ至段、右始末不屆ニ付、江戸拂可申付處、盲人之儀ニ付、座法之仕置可請旨申渡、總錄江引渡、

一金十郎儀、貸金利足之儀ニ付、御觸之趣乍相辨、親金山撿挍任申、證文面而已金貳拾五兩ニ付一ケ月金壹分之利足ニいたし貸、內實棒利と唱、期月迄ニ追々元金之內成崩ニ請取、利足之儀ハ最初貸渡節之元金高江割合取立、故、格別高利ニ相當り、其上利德を量り、撿挍江者不申聞、一己之存付ニ而、日々融通を以渡世いたすもの共江ハ、前同樣之證文ニ而、貳拾兩ニ付壹ケ月壹分之割合を以、期月迄之前利、幷元金高一割之禮金、其外手代共筆墨料等元金高之內より引去相渡、猶期月迄ニ追々元金成崩ニ請取、右禮金筆墨料等利足江加ふれハ貳兩三分餘ニ付、壹ケ月壹分程之高利ニ相當ルも有之、殊ニ及出訴節も、右等之次第押包罷在故、撿挍儀、前利引去分をも、最初より利足之濟方二重ニ願出次第ニ至、猶吟味相成而も、一旦申陳罷在始末、不屆ニ付違島、

〔建武年間記〕口遊、去年八月二條河原落書云々〇建武元年歟、日。錢。ノ質ノ古具足、

〇按ズルニ、日錢トハ、金錢ヲ貸シ、每日計算シテ、其利ヲ收メシモノナリ、

〔建武以來追加〕一諸土倉之事文安二九廿九

依類火令燒失土倉、或入止之、或數年之間、可被免除公役之由、雖歎申炫出來、向後一切不可被許容、德政已後、土倉令減少處、猶以寄事於左右、雖及訴訟、不可有御免之令略、本宅、若以密々之儀可取高利幷日錢等之質物造意歟、甚不可然、〇下略

〔松屋筆記〕百十七日成貸

江戸に日。成。貸といふものあり、そはかしたる金錢を日々に返濟するをいふ、成とは返濟を成すといへるを略せし語也、建武式目追加群書類從卷四百五十一丁左一に、若以密々之儀可取高利幷日錢等之質

不相當之樣にハ相聞候得共、右ハ全盲人等、武家其外江對シ、不法之及催促、甚敷所業之もの有之、不穩儀故、右を制候場合ニ而、嚴重之吟味ニ及候樣相成候儀ニ可有之、只勘定合之處ニ而ハ、質利ニ引當候而ハ、金銀高利貸之咎當りハ、何分不都合にも相聞候事、○中略

兎角ニ、高利之吟味等ハ、不法手荒之催促等ニ及び申候を取締いたし候ハ、格別、只々利合之勘定を以て及吟味候而ハ、自然一切貸出し候もの無之、借方ハ益困窮いたし、却而世上差支之患を增候樣相成可申奉存候、此上何分にも難捨置者共有之候ハヾ、其節ハ無用捨召捕及吟味にも可申候樣奉存候、尤梅田撿挍外二人儀ハ、品不宜樣ニ聞え、殊ニ身分有之隱居之金子等も相廻し候由ニ申居候趣、其儘にいたし置も不可然哉共奉存候得共、併可及吟味品ニハ無之間、何となく總錄方江致沙汰置候樣可仕奉存候、每々不顧恐懼存之段申上候儀ハ、多罪幾重にも御宥免被爲在候樣奉願候、依之御下ゲ之御書取返上、取調候風聞書相添、此段申上候、以上、

未八月　　遠山左衛門尉

〔德川禁令考後聚十七行刑條例〕嘉永三戌年五月十三日落着

山城守殿御差圖　淡路守懸

金山撿挍より、新吉原町町人源助外百貳拾人相手取、貸金濟方願出候一件、

一金山撿挍儀、貸金利足之儀ニ付、御觸之趣乍相辨、證文面而已金貳拾五兩ニ付壹ヶ月金壹分之利足定ニいたし置、內實棒利と唱、期月迄ニ追々元金之內成崩ニ請取、利足之儀者、最初貸渡節之元金高江割合取立積、金子貸附故、右之內ニ、拾三兩餘ニ付壹ヶ月壹分程之利合ニ相當ルモ有之、殊ニ伜金十郎江申付、取扱さするならバ、猥ニ、無之樣、精々可心附處、同人儀、金子貸渡節、是亦同樣之證文を以、內實金貳拾兩ニ付壹ヶ月壹分宛之割合を以、期月迄之前利、其外元金高一割之禮金、手代筆墨料等、元金高之內を以引去相渡、期月迄ニ、追々元金成崩ニ請取、至而高利

彼是と差繰、元金高ハ取上り候間、損毛之姿にても渡世ニ相成候譯に有之、且借方にても、質入等之品ハ更ニ無之事故、貳百文宛六齋ニ成し候得バ、日々之賣德等にて利を得候事故、店貸雜用を仕拂ひ、實體にかせぎ候得バ、妻子扶助も可成にハ出來候より、取續ニ相成候事故、右樣之貸借無之候而ハ、自然乞食非人に相成候外ハ無之、無據惡事も仕候事故、右等之下情故、中々以小金之分ハ觸面通り貳拾五兩壹分之利足にて何程借入度存候共、貸人一切無之候、扨亦百兩前後之貸金にてハ、貸主何程強慾無道ニ而、五兩壹分等之高利貪度存候とも、決而借人無之、多分ハ廿兩か廿五兩壹分位ニ而、從來融通致し來候、又千兩以上ニ相成候而ハ、是又觸面通り、廿五兩壹分にてハ、多分借入進み候ものハ少く、壹割位よりにて無之候而ハ、箱通用ハ先少候、自然安利に當り、融通致し候、夫も大金を並利にて借入度進み候方ハ、孰にも返金無覺束存候間、是亦貸人稀ニ有之、右之譯故、迚も利足之儀ハ、相對に而自然定り候姿に當り候事故、御定書にも廿兩壹分より以上ハ、廿兩壹分に而濟方申付候積ニ相成居申候、右金銀利足ニ見競候而ハ、質物利足ハ高利に當り居申候、

（朱書）質物利足之儀ハ、元祿度定有之、金壹分以下、錢質百文ニ付壹ヶ月四文之利ニ有之、年ニ五割に當り候、金貳兩以下壹分ニ付銀四分、年三割貳分餘ニ當ル、金拾兩以下、壹分ニ付銀三分、年割四分ニ當ル、金百兩以下壹分ニ付年八步ニ當ル、右錢質之百文ニ付四文之割合、當バ當時金壹兩ニ付錢六貫五百文ニ而、壹ヶ月之利錢貳百六拾八文銀目ニ而貳匁五分ニ有之、金利ニ直シ、壹ヶ月六兩壹分之割合ニ當り、高利にハ候得共、此法ニ而從來濟來候處、去ル寅年中越前守殿江鳥居甲斐守より伺、一旦少々宛下候樣ニ御下知有之候處、何分規縮ニ而不融通故、翌卯年七月、尙又觸直し、當時ハ元祿度通ニ古復ニ相成居申候、右質物利足之儀ハ、古來之定にハ候得共、六兩壹分之利足ニ而高候得共、差許ニ相成居、却而引當物も無之證文金之高利ハ、御咎ニ相成儀

共、素より總而相對ニ而取引致し候儀故、兎ゟハ止不申儀ニ而、錢貨ハ猶更小金之分ハ迚ゟ當時貳拾五兩壹分ハ勿論、其以上にても利安ニ貸借ハ出來申間敷、嚴重ニ糺候而ハ、却而吹毛之差支出來難計奉存候、其謂ハ、大金之取引ハ、高利ニ而ハ迚も無之、兎角小金小前之貸借ニ而銘々借方不勝手より聢敷申出候儀と奉存候寅年前頃迄ハ、濟方ハ貳拾兩壹分ニ申付候得共、小金之分ハ、多分拾五兩壹分之證文ニ取引有之儀ニ御座候、右ニ而安利ニハ無之候得共、譬バ高二三百俵位之限ニ而、歳之暮ニ春之出勤も出來兼、家内之もの共、雜用等にも差支候得バ、拾五兩も借入候得バ、限也にハ辨用致し候間、月ニ壹分之利足ニ而、二月之御切米ニ而、皆濟之手段ハ出來兼候とも、三ケ月之利足遣置候得バ、公私共辨候譯故、更ニ高利之譯を不論、あつく賴入候而も、借受候儀ニ有之、其以下小前町人共ニ至り候而ハ、節季ニ至り、古布子にても調、春をむかへ、且商ひ元手等にも、差支、店賃諸拂手當無之、難儀仕候得バ、五兩も借入候得バ、凌候事故、月々壹分之利足にてハ、高利にハ當り候得共、素より質入之品も、餘計ハ無之、手段ニ付兼候ものハ、禮金を差出候而も、商取續、人並ニ暮され候得バ、外聞も宜敷有之候事故、借入候譯ニ有之候、さて亦極々下賤之其日ぐらしの者共儀ハ、日々の元手ニ差支候得バ、日。成。と唱候貸借有之、右にも品々仕方ハ有之由ニ候得共、普通月。六。齋。と唱候仕方ハ、證文面ハ常體之貸金ニ認方いたし、譬バ錢一貫文を一口と定メ月六齋に元利成崩ニ而、貳百文ヅヽ渡し遣、この濟方、六度ニ而壹貫貳百文ニ相成、この內ニ而貳百文ハ利足ニ當り候、右を金利ニ直し候得バ、壹兩之錢六貫五百文と致し、利足一貫貳百文程ニ而、金五兩ニ付一ケ月壹兩之利足ニ當り候、極々之高利ニハ御座候得共、元より身薄之もの共ニ而、天秤一本ニ而商致し居候者共江貸付候事故、可引當品ハ一切無之、其上中ニハ困窮ニ迫り、闕落、妻子置去、或ハ喧嘩口論、又ハ出入等ニ而、濟方不相成もの共有之候間、申さば三拾人江貸出し候も、三分一拾人位ハ故障出來、損毛ニ相成由、併日々之出入にて、利を直ニ元に貸遣し、多人數之事故、

〔天保集成絲綸錄百四〕文化拾二亥年二月

町觸

高利金貸借之儀、前々ゟ度々相觸置處、近頃者右貸借之儀、專ら增長いたし、座頭仲間、其外抔より證文等ハ、通例之利金ニ認、實ハ格別高利之上、三ヶ月限り四ヶ月限證文書替、其度々前利を引取候由、右之內ニ者、盲人ニ者無之、又ハ浪人等之類、撿校勾當之家來ニ成、給金宛行等も不申受、自分之金子を貸出し、相滯候節ハ、不法之催促致し候趣相聞、且武家之內、陪臣之儀ハ、主人江中立候得バ、其品ニ寄、主人ゟ濟方致し、借主之家來咎等も有之ゆへ、專ら陪臣其外表立候而者、其身之難儀ニ相成候者江計、近頃貸出し候由、利足之儀も前書同樣ニ而、借主之もの甚致難儀候趣も相聞候、以來右體之貸借致間敷候、若相背候ハヽ、幷右體ニ紛敷取計致し候者有之候ハヽ、召取吟味之上御仕置可申付候、尤右之趣ハ、總錄派頭ニ而、嚴重ニ可相糺間、急度可相守候、

亥二月

〔德川禁令考後聚十五 行刑條例〕弘化四未年八月

淺見兵大夫初筆高利金貸出候儀ニ付、勘辨仕申上候書付、

書面梅田撿校外二人儀申上候通、總錄方江致沙汰置候樣被仰渡奉承知候、

未八月廿日　　遠山左衞門尉

淺見兵大夫初筆高利之金子貸付候風聞之趣、御書取御下ゲ被成、致勘辨可申上旨被仰渡候、此儀風聞之趣を以、猶取調候處、高利之金子貸候儀無相違相聞候得共元來高利貸御仕置當之儀、凡四兩ニ付壹分之利足取候者遠島、五兩壹分位より九兩餘迄之分、追放ニ有之、拾兩ニ付一分位より之分にてハ咎ハ無之處、文政五午年中、筒井紀伊守より、大炊頭殿江伺之上、百日手鎖之當ニ相成、其後右之通ニ有之候、一體高利金貸候者、度々御沙汰も有之、召捕及吟味候儀ニハ有之候得

いかにと聞ば、片輪車は榊原の紋なり、越後の高田の城主となり給ふゆへなりとぞ、

〔徳川禁令考後聚十十行刑條例〕享和三亥年八月六日落着

根岸肥前守掛

高利錢日限取立、其上借主行衛不相知ニ付、證人を相手取、濟方願出候もの、

神田松下町三丁目北側代地家主　利兵衛

此もの儀、高利金貸借致間敷旨、度々被仰渡も有之處、去戌十一月中、神田佐柄木町半右衛門店伊兵衛江、金五両用立、貸附方之儀者格別利潤も可有之と存付、右五両ニ付、利錢三百文ニ相極、貸附候翌日より、日々に錢拾貫文ツヽ日數四日ニ四拾貫文取立、四日目ニ利錢三百文引取、時之相場を以差引勘定致し、餘錢之分ハ、差戻候と雖申と、其後も同様之仕形ニ而、引續一ヶ月之内ニ都合五度貸附、其度々三百文ツヽ利錢引取候ニ付、日數廿日ニ金五両之利足壹貫五百文ニ相成、殊ニ伊兵衛行衛不相知候迚、證人神田平永町幸七店善兵衛を相手取、濟方之儀願出候始末、不届ニ付、家財取上、江戸拂申付之

文化十酉年二月六日落着

牧野備前守殿御差圖　永田備後守掛

貸金證文面を取拵、金高ニ應じ、禮金幷高利を前引いたし、利德過分ニ貪取候もの、

芝中門前三丁目五兵衛店町醫師　藤倉玄昌

右之者儀、金子貸附候節、證文面者、二ヶ月限ニ相認候得共、實者四ヶ月貸附候對談ニ而、利分之儀ハ、貳拾両ニ付壹分ニ相定候得共、金高ニ應じ、禮金幷先利を引落し相渡、二ヶ月相立候得者、猶又右之振合ニ而禮金先利共受取候ニ付、右禮金を利分ニ引直し、利金江合候得者、拾両以上貸附候金子者、六両貳分貳朱餘ニ付、壹分之高利ニ相當、右體過分之利德貪取候段、不屆ニ付、重追放、

を取上げ、むごいと云ことは更に知らず、此郡次郎ばゞ飽まで心强く、かしつけの所を毎日催促にあるきて、風雨の差別なく、此ばゞ靑茶の布子に上田縞紺の帶しめて、しんちうの矢立を腰にさし、根津の方より、淺草並木、三島門前、紅屋横町、堀田原門脇、馬道、田町の邊よりぐる〳〵と、借し金取立にありきけり、いか成る鬼のやう成る者も動せぬ惡意知者なりとも、此婆々を見るとぞつとすると云、最初は此郡次郎ばゞ一人にてわめきけるが、同氣相求るとやらん、同町にまた澁紙ばゞ有けり、或時此ばゞ谷中の感應寺の無盡に當り、其金を以此郡次郎ばゞと云合せ、同樣に茶や〳〵へ借て、近年は二人連立て同じやうなるばゞどもわめきあるきけり、三途川姥が分身したるかとうたがひけり、此者車錢を借と云ことか、但兩人兩輪の車のごとしと云事か、ぐるりぐるりと風雨の日も能く廻るとの事にてか、人々車婆々と呼けり、然に澁紙ばゞはいまだ最中所々方々へ金かしてあるくなり、今少々も金持し人は婆々を賴廻し貰故に、手廣くかしあるき、境町邊、樂や新道、葭町新道、木挽町、天神、明神、神明等の影馬茶や等へ金子を借す、借所一兩かしては一日の利足二百文づゝ、明日迄はまたざるを掟とす、此けしからぬ高利の金も有ものかな、此やうな金子は大かた勝負事する者の借るなり、其高利をしりて借る者、幾人も有は不思議のことなり、此金を烏金といふ、一日の内に返さずして一夜延引するを泊り烏と云、夫は四百文利足取ることとなり、是を烏といふ子細は、境町ふきや町の茶や芝居の者は、人々に仇名を能付て呼事なり、されば公儀御徒士衆の事を、此邊にて隱し言葉に烏といふ、黑ちりめんの羽織を着て、大勢横雲のたな引頃、御番往來とてさかひ町を通るを見て明烏と云、早う來るなどゝいふ事なり、此ばゞか金子は元竹內御徒士にて有しゆへなり、今は外に借し人も多くあれども、烏金と云、二三年以來は、郡次郎ばゞ、澁紙屋ばゞ連立ありき、車婆々と云て呼けるが、此頃一人に成りければ、片輪車と人々たはむれけりとぞ、此頃葭町茶屋の女房どもは、彼ばゞがことを高田ばゞと呼し故、

追剝の如く、當世貸借の筋にて、世の中の混雜大方ならず、公事訴訟も十に八九は此筋の事也、與與も貸借は貧福の隔る媒にて、惡人は貸てと成て身を勞せず、結構に通行者多く出來て、人情鬼の如くにして、慾がましく毒を與へて利を貪り、善人は借主と成て、餓鬼道に墮たる如く、折角金錢を借りて一時を凌んとすれば、忽炎と成りて高利を取られ、身を焦す也、右餓鬼の如き威勢を成て、若滯りたる時は、或は家藏を取立、又は家財雜具衣類鍋釜抔押取にいたし、又妻娘抔を賣らせても取る、猶屆ざる時は、公邊へ訴る也、借手は奉行所の僉儀に逢ひ、身上の有り丈けを責取られ、手鎖又は牢獄の苦患に及び、親類又は證人等迄も艱難に陷る也、是又吟味役人は鬼の如くに成て取立る也、今の世の惡人は己が精力一抔に剝とり、猶屆かざる時は、奉行所の厄介に懸け、吟味役人を强欲非道の手先に遣ふ如くして取立る也、公邊迄强欲非道の手先に遣ふとは、餘り勝手儘の事ならずや、

〔當世武野俗談〕車婆々

下谷三崎町に車婆々と云者有、此ばゞは、高利の金子を借して人をせぶり、ゆすり同前の事にて、世の中を渡るばゞなり、夫死して元は賤しからぬ家より出たり、夫は下谷和泉殿橋通りの御徒士三枝傳藏組にて、七拾俵五人扶持取の竹內伊左衛門と云御奉公人なりき、竹內病死の後悴郡次郞家督せし處に、身持不行跡の儀有之、公儀より御暇被下浪人せしなり、然ども浪人せし節に、厄介養育金家代金等百五十兩程被下けり、其金にて町家を借り、夫婦母渡世しけるが、いつの頃よりか根津の女郞や、又は淺草茶やどもへかし、又は芝居廣小路見世物へ相應に一兩三兩ヅヽ、借し、高利を取り、一兩に付一ケ月十二匁ヅヽの利足にかし、其節彼利分を先へ引取り、口入禮金外に三匁ヅヽ、都合十五匁引、壹兩の所へ三分手取り、三十日切、若延引すると證文を書替、延金利足の元に結んで、大金の高にして、其證文の趣向二三枚有之、のつ引させぬ惡證文、家崩させ家財

も如何なり、又寺僧社家の類も、祠堂金、相續金抔號して、山師共の手をも借らず、自身に貸金利倍の事を取扱ふ族數多有り、是寺社人に似合ざる所業なり、前にいふ如く神佛は人を助け給ふもの也、貧人を苦しめ、貧人の懷を掠め取て、歡び給ふべきや、今貧人ども身上のさし詰りたる所、一時の辨用に羅れて、右體高利の貸金を借り込、段々利倍に吸取られ、終に身上を崩す基と成、誠に田を著て〇田字以下恐有誤毒を飮たる如く、皆恨み悔る也、其恨悔る所の不淨財を以て、公儀の御益と成し、寺社の所務とする事、大逆道也、公儀を始め、有職の歷々、佛神の是迄世に難有と崇め奉る方々、高利を奪ふ事を欲し給ふ世の中なれば、當時少しも有り餘りなる町人百姓等、聊も取憚る所なく、此道を專ら取行ひ、或は家質或は質地又は所質、其業體株式など引當に取て、ひたもの貧人を責め遣、己が身上を造るもの多し、殊に此貸人にては、同じ商賣のさし障もなく、假令隣合せ軒を並べて始めたり共、差構はなく、其上何の商賣體よりも勝手に宜敷手代丁稚等を大勢仕ふにも及ず、利潤も澤山有事故、專ら流行する也、尤殘忍至極の人情ならずんば、此道遂げ難し、金貸の流行するは、世に非常の起る基、貧人を拵る基也、又月成シ錢、日成錢、損料貸、烏金抔云貸方あり、是は身薄なる貧人に貸して、殊の外高利なるもの也、烏金といふは、朝烏の啼出る頃貸出して、夕曉烏の啼に歸る頃取返すをいふ、纔一日の融通に、一ケ月に當る高利を取るなり、損料貸といふは、衣類夜具蒲團蚊帳など、一日何程といふ損料を極て貸す也、貧人は是を借りて、夫を又質に入日々の損料と質の利と二重に費す也、當世惡人は右體時世に逢て金貸となり、纔の金錢を忽大金に育上ゲ遣上ゲ、善人は時世に後れて金錢を借り、利に利を奪れて忽ち貧人と成行なり、如此善人惡人の成行、天理に違ひたるを見て、當時世の可否を知るべし、扨又右の貸金の口入をして禮金といふ物を取て世渡るもの少からず、また貸付の世話いたし遣すやう抔と僞り、其世話の雜用と號して、金錢を歎き取、或は先禮抔といふて、貧人を付込かたり取る類多く有り、其行ひ體態ま

扨當世、少の元手金を持、又右體山師と成て、金銀を得たるもの、金貸を始、高利を取事、當時の風俗なり、全體貸借の筋は、前にもいふ如く、懇志合の實意を以て、相互に融通いたすべきに、今の世の貸借、少しも實意の沙汰にあらず、身上に見當なきものへは、假令竹馬以來の朋友といふ共貸し遣さず、又身上に猶豫あるもの、いまだ見不知の他人たりとも貸し遣す也、全く利を貪る爲の謀にして、更に實意の事にあらず、元來實意同志の事なれば、利足を取るべきものにあるべからず、利何割何歩など極るは、道理に當らざる事なり、此利足と云事は、いつの頃より始りたるにや、いかにも商賣の輩の作法と見えて、卑劣なる事也、然るに近來御攝家方、宮門跡方、其外權門の家にて專ら行るゝ事に成、右體貸金渡世を始めたるものゝ故、色々の御名目を假りて、金銀に威を付て貸しつくる也、其上高利を奪ふべきやうにたくむなど、御攝家方抔ハ、此上もなき高貴の御方なれば、貧賤を憐み給ふべき筈ながら、左にあらず、今貧賤を奪ひ給ひ、また宮門跡方は、佛方の棟梁なれば、衆生を助べき所に、殊の外非道を行ひ給ふ也、貪欲滿々たる山師共が、其非常の威を被りて、高利を貪事なり、其高利といへる謂は、本金融通貸付る時は、先期月三ケ月を定め、其三ケ月の利足一割二割など引取、其上禮金と號し、是又一割二割など引取、本金拾兩の證文をとりて、金子を六七兩ならでは渡さゞる也、是を三ケ月目にいたり、一旦歸して、又結る時は、又元の如く利と禮金共踊りて取る也、依之一ケ年も貸附る內は、拾兩ハ貳拾兩と成り、百兩は貳百兩と倍增せり、外商賣には、かやうの利潤を得る事なし、夫故非道を盡してなり、又公儀に於ても、世上融通の爲との御事にて、御貸附金といふもの有、世上の貸金よりも利足安き故、融通の爲ともあるか、是等の事は享保以來の御法にもあるか、其以前迄の世の御法にはあるまじき也、是又引當の品を出して拜借するなり、引當なきは餓死するとも叶はぬ事なり、御仁政に弛れし事なり、今ケ樣の所業、武士の上にあらば、御咎の御沙汰有べき也、御咎と成べき程の事を、公儀に於て行るゝといふ

高利

をも利足爲差出候積勘定いたし、裁許申付候方にも可有之哉、差當り拙者共ニ可見合先例も無之候間、其段役所御取計振承知いたし度、此段及御掛合候、以上、

丑十月

御書面之趣致承知、取調候處、去ル寅年、世上金銀貸借利足之儀ニ付、御書付出候段も、前々仕來之通、閏月を除、勘定爲致裁許申渡候儀ニ有之、既翌卯年、十〇天保四年借金銀出入取捌方改革被仰出候節、拙者共御役所手限、公事金銀出入日限濟方申付候分、立合勘定書認方之儀、閏月相除候積、先役共相談之上、取極置候趣も有之候間、爲御見合右勘定書文格、別紙書抜相添及御挨拶候、

丑十月　井戸對馬守

〔大坂堺問答乾〕一利銀之儀

一日歩利銀之儀、一ヶ月一歩半迄之利銀ニ相當候ハヽ、日歩之無貪著可取上候、依之訴訟前月迄月限之利銀爲相願、端日ニ成候利銀者取上申間敷候、

但兩替屋之儀者、日延シ與唱、日寄江加、取引致候儀ニ付、兩替屋之儀者、高利ニ不相當分ニ而、日歩利銀取上濟方可申付間、端日に成候利銀も無差別濟方可申付候、

此儀兩替屋之外ニ而も、日歩利銀取候共、一ヶ月一歩半迄ニ當り候ハヽ、濟方申付候、尤兩替屋ニ而も致訴訟候月之利銀者取上不申候、

〔豐臣秀吉譜中〕天正九年、是年奈良町人借金銀債高利者有之、人競借與之、甲來求利則以乙金銀加利而返之、乙來又乞利則以丙丁等金銀倍蓰而附之、遂使金銀積于道路、其徒數十人、富而紛奢、然其畢竟不知爲如何、蓋其實者、得一旦之利而有後日害、是與穿窬不異、秀吉聞之、磔奈良町人數十人、且命曰、多財故借盜金、亦與同罪也、宥之倍其借數、以使出金銀而入官、

〔世事見聞錄五下〕諸町人中邊以下之事

右之通、在町共可被相觸候、

月

〔例書 一〕一借續之金子之利足、五分ニ、手形仕置候ニ付、滯事候得者、支配江可訴出事、

〔徳川禁令考後聚十五 行刑條例〕嘉永六丑年二月廿九日

借金銀利足取立方之事

町奉行衆　　尾張殿 御城附

屋形勤之もの、町人共より金子致借用、返濟相滯、町人共より尾張殿役場江願出、元利取立相渡候節、取立方等延引相成候共利足之儀ハ、願出候月迄之分取立相渡、若六分以上之利足ニ候ハヽ、六分ニ爲引下相渡可然哉之事、

但本文利足之儀、願出候節之前月迄之分、取立相渡候筋にも可有御座哉之事、

書面利足之儀、役場江申出候前月迄之分取立相渡利足高之儀ハ、去ル寅年御觸後、廿五兩ニ付壹分より高利ハ無之筈ニ候間、右之趣を以取扱可然存候、

丑二月　　井戸對馬守

嘉永六丑年十月十三日

貸金銀出入裁許申付候、閏月之分ハ、利足相除候儀ニ付掛合、

井戸對馬守殿　　本多加賀守

貸金銀出入濟方裁許申付候儀、前々ハ貸出候月より、出訴前月迄之内、閏月有之候得バ、右閏月之分ハ、利足相除、勘定いたし、口書江も其段認込候得共、右ハ閏月を込め、御定之通、一割半の割合にて、月割勘定いたし候得バ、閏月有無之年に寄、一ヶ月之利足、多少も有之、勘定紛敷故之儀に可有之、然ル處、去ル寅年、〇天保十三年御書付之趣にてハ、月割を以利足勘定可致儀ニ付、其以來ハ、閏月之分

右之通被仰渡奉畏候、爲後日仍如件、

南北小口年番
坂本町名主新助後見
新右衛門煩ニ付代
鐵藏

寅十月廿一日

北方高砂町
名主　庄右衛門

〔諸色調類集十ノ四十六〕御觸案

世上金銀貸借之儀、去寅年天保十三年九月中、金貳拾五兩ニ付利足壹分之割合を以、取引可致旨相觸候處、金主共利德薄を厭ひ、融通不宜趣ニ付、其後奉行所江出訴之分、裁許之儀、切金ニ者不申付、直ニ日限を以濟方申付、埒不明ニおゐて者、身代限金主江爲相渡候處、向後者前々之通裁許可申付候條、彌無滯取引可致候、勿論借方おゐても、其旨相心得、等閑之儀無之樣、實意ニ濟方可致候、

但右之通相成候付而者、先訴之分取上濟方申付置候内、同樣之後訴有之候とも、取上裁許可申付候、

一賣掛之儀、十ケ年以上之滯者相對濟申付、奉行所ニ而者取扱不致候處、去々卯年、諸借金相對濟被仰出候ニ付而者、右以後之分者十ケ年前後ニ不拘、都而前々之通取上裁許可申付候、

但遊女揚代滯之儀、追々多分之貸ニ相成候分ハ、向後共只今迄之通、奉行所ニ而ハ不取扱候得共、當座之儀ニ而不實等も無之借方之もの不埒之分ハ、已前取上裁判可申附候、

一今般金銀出入之儀、前書之通申付候ニ付而者、利足之儀も、右寅年相觸候趣ニ不拘、向後前々之通相心得、相對可致候勿論高利之貸方致し候歟、其外不埒之取計於有之者、吟味之上、嚴敷咎可申付候、

但奉行所おゐて取扱候節者、壹割半以上之分、壹割半ニ申付候條、其旨も可相心得候、

一此度金銀貸借利分之割合、右之通相成候上ハ、以後棄捐等之沙汰ハ無之儀ニ付、金主共安心致し貸出、世間之融通無差支樣可致候、尤右ニ付而者、返濟方茂是迄之借金銀棄捐可致抔との心得違ハ致間敷、又貸方茂容易ニ出訴可及筋者有之間敷、諸事寬政九巳年、金銀出入之儀ニ付相達候趣、彌堅相守、精々實意を盡し取引可致候、若右之趣相背、節義ニ闕候取計於有之ハ、無用捨及吟味、右之廉ニ而嚴敷咎可申付候、

右之趣、在町共可被相觸候、

九月

右之通可被相觸候

右之通相觸候間、寬政之度被相觸候ヶ所江、右之旨可被申渡候、尤以來之裁許茂、彌事實相當、厚く吟味有之候樣可被致候、不實之取計致し候分ハ、其所之廉専一ニ吟味致し、咎可被申付候、且又裁許之限銀を不足差出候分茂有之候ハヽ、右始末柄篤と相糺、是又事實相當之所相辨、可被及裁許候、

右之通、御書付出候間、町中不洩樣入念、早々可相觸候、

九月晦日　町年寄 役所

〔御觸書集覽二〕天保十三寅年十月廿一日　南北小口年番 名主共

金銀貸借之儀ニ付、當九月相觸候後、容易ニ致出訴候儀者、不相成と相心得、金子貸出候者危踏、融通不宜よし相聞候、假令今般相定候利合より、是迄高利ニ當り候證文有之候共、及出訴候得者、今般相定候利分ニ引直し、嚴重濟方申付候間、金主共聊無危踏貸出候樣、名主支配限り能々可申諭候、

寅四月十九日、甲斐守江談之上、但同人江寫一冊達之、

越前守殿江御直上ル

貸金銀利足之儀ニ付申上候書付

遠山左衛門尉
鳥居甲斐守

貸金銀利足之儀ニ付、御沙汰之趣も御座候間、勘辨仕候處、是迄出訴致し候出入、裁許申付候節、御定之通、壹割半以上之利足者、壹割半に相直し濟方申付來候處、今般厚御趣意ニ付、御藏前札差渡世之もの、或者質屋共等、追々利下ゲ仕候儀ニ付以來世上金銀貸借利足之儀、廿五兩ニ付壹分之利足を普通之定に仕、右利足より高利之分者右割合に勘定濟方申付候方ニも可有之哉、乍去御定書にも相響候儀ニ付、一應評定所一座江も御沙汰御座候方と奉存候、依之申上候、以上、

寅四月

遠山左衛門尉
鳥居甲斐守

（御觸書集覽二）天保十三寅年九月晦日

世上金銀貸借利足之儀、是迄壹割半之處、以來金廿五兩ニ付壹分之利足に利下ゲ被仰出候間、諸國共右之割合を以無滯貸借致、相對ニ而右より高利金一切貸出申間敷候、尤右定之外、品々之名目を付、多分之雜費取候儀決而致間敷候、

一是迄金廿兩より高利貸出候分ハ、此節より以後不殘廿五兩ニ付壹分之利分ニ相直可申候、其餘利安ニ貸出し置候分ハ、猶更勝手次第ニ候事、

一宮門跡方、其外名目有之貸附金之分茂同樣たるべき事、

岩ヶ崎村　仁左衛門
井木村　茂右衛門
長右衛門

伊能平右衛門殿

〔享保集成絲綸錄 三十一〕享保十四酉年十月

近年諸人勝手向難儀之由ニ付、借金銀利分等相減候樣ニ被仰出候、夫付諸納借今年分上納之儀御用捨を以被差延候間、右之分來年より上納可仕旨被仰出候間、其趣可存候、

右之通可被相觸候

〔德川禁令考後聚十五 行刑條例〕元文元年辰九月

一借金幷書入金等利足之儀、貳割より高利之分ハ五分之利ニ直し濟方申付候得共、自今ハ壹割半之利足ニ改、裁許可申付事、

右之通、一座相談之上相極候事、

〔香取神宮古文書纂 十五〕借用申金子手形之事

一金壹兩借用之所實正也、爲此しち地中岺にて麥七升蒔畑入置申候、利足之義者、拾。貳。兩。壹歩以勘定、來亥ノ極月廿日前、元利共急度返濟可申候、若濟兼申候者、しち地請人方え相渡、其元へ金子にて返濟申、少も掛御苦勞申間敷候、爲後日仍而證文如件、

寬保二年戌極月廿八日　借主宮坊（敬攝河合婦）林平印
受人　護國院印

御手洗　興兵衛殿（五郎祝先祖）

〔諸色調類集 十ノ四十六〕天保十三寅年四月

〔建武以來追加〕一祠堂錢事明應九十、松田丹後守長秀奉行之、雖為縱二文子、連々利平沙汰來、過一倍之證據分明者、可被棄破者也、

○按ズルニ、祠堂錢ハ、卽チ今世ノ祠堂金ナルベシ、蓋シ錢ヲ社寺ニ納メ、之ヲ出擧シ、其利子ヲ以テ、功德ノ用ニ供セシナラン、又二文子トハ、月別ニ百文ノ利二文ナルヲ云フ、

〔大福寺文書〕百姓市兵衞金子借用狀

借用申金子之事

金壹兩壹分代五百文者

右借用申所實正也、利束之儀ハ、一月ニ壹兩ニ代百文づゝニ相定申候、若天下一同之德せい入來候共、何樣之儀御座候共、御無沙汰申間敷候、為後日仍如件、

寬永三年とら三月十八日

但右ニかり申金子算用仕、手形取かへ申候間、此外ニハ手形出申候共ほごたるべく候、

三ヶ口村
市兵衞花押

灯明坊樣

〔伊能文書〕松岡傳兵衞借用證文

借用申金子之事

合拾五兩者　江戸小判也

右借用申所實正也、但利足者本金拾五兩付壹ヶ月ニ金壹分宛ニ相定申候、岩ヶ崎村并木村物成ニ而、當暮霜月中ニ江戸相場ニ六分之舟賃ヲ加相濟シ可申候、但其元ヘ拂申米之直段者、江戸相場と其元之直段を引合中分ヲ取、本利共ニ急度致勘定相渡し可申候、為後日之證文、仍如件、

寬文拾壹年亥ノ四月十五日

西尾小左衞門內
松岡傳兵衞

六文子毎月可上利之由、借書遣之、

〔香取神宮古文書纂十六〕依有要用借申料足狀之事

合本錢壹貫參百文者

右件之御料足は、加日を以一月として、百文別に六文宛の子錢を副へ申候て、本子共に未進なく、明年中に沙汰可申候、若無沙汰申候者、文身には返田下神田二段を、御藏本に入置申處實正也、明年辛卯年、彼料足を無沙汰申候者、彼田を壬辰の年の作毛より始候て、來候はん辛丑年之作毛まで、十ヶ年十作が間、御知行相違あるまじく候、仍爲後日狀如件、

文明二年庚刁十二月十四日　借主　香取ゆうがい〇要害　沙彌宗光花押

〔武州文書〕則長氏長連署借用證文

かり申料足事

合拾貫文者此方かふちん壹貫かり申候

右毎月貫別四十文づゝ、りぶんをあいそへ、來十二月中にかならず〳〵返辨可申候、つじ殿をうけにたて申候うへは、さら〳〵ぶさたあるまじく候、仍如件、

文明八年六月十一日　則長花押

氏長花押

〔大乘院寺社雜事記〕文明十二年十二月廿四日、一去年九月五日、二十貫三文子法花寺殿御借下、錢主妙德院也、昨日御返辨注文被遣之、合本利三十貫二百文也、此內御足付樣十貫御書在之、於杉原方可請取之云々、

五貫、正月十五日以後可沙汰之由、北市商人請乞申、則加利平可渡妙德院之由申、御中間口合云云、

但シキチバイノノチニ、ツコニコヲ、ケツクシヲルベタ候、

〔鈴鹿家記〕應永元甲戌年十二月八日庚戌

借用仕候灰吹烏目之事

錢合百貫文　此利一ケ月ニ四貫文

灰吹合五。拾。兩。　料目貳。百。拾。五。匁。此。利。一。ケ。月。六。匁。四。分。五。厘。也。

學宗花押

○按ズルニ、百貫一月ニ四貫文ノ利ハ、四分ニシテ、一年四割八分ナリ、又貳百十五匁一月ニ六匁四分五厘ノ利ハ、三分ニシテ、一年ニ三割六分ナリ、

〔香取神宮古文書纂十六〕依要用有申請參文子錢狀事

合本錢二貫文者

右件の御料足は、百。文。別。に。、參。文。宛。の理分おさしそへ候て、本子ともに、ぶさたなくさた申べく候、若ぶさた候はゞ、質券には、左原ねぎ內大はしの田二反、案主內壹反、合て參反、斗代は七斗代、此料足にあいあたり候はん程、御知行候はんに、子々孫々にいたるまで、全一言もいぎお申事あるまじく候、仍爲後日之證文狀如件、

應永三十二年きのとのみ九月廿九日　　取主香取社　永幹□□

〔建武以來追加〕一借物年紀事 永享十二十廿六

借主等、相待十箇年、令無沙汰之間、爲其誡、彼年紀以後以三倍可返辨之旨、先度雖被仰出、於利平者、不過廿一箇年者可爲一倍、但被如此定置者、借主等亦寄緯於左右、可令難澀歟、所詮至其類者、隨致所致訴訟、若猶有停滯之儀者、以庭中可言上矣、

〔康富記〕文安四年四月三日、先人御命日也、一條道場玉樹庵坊主 與件 供養也、自彼庵百。疋。借物到來、

〔新編追加 政所〕一利錢出擧事 永仁五六一評

右不及尋成敗、下知以後、縱雖申子細、非沙汰之限、

〔徵古文府 一〕申請利錢事

合拾貫文者

右件錢者、每月百文別五文宛利を副て、來十二月之內、慥可致沙汰也、若背約月致難澀者、宇治鄕字糀田貳段、同鄕高進牢之內、明年限手作貳拾ヶ年可進退給也、但糀田貳段者、相副本文書兩通十一枚所入置也、彼年紀候間、更不可有別違亂之狀如件、

正和二年八月五日　　領主禰宜口口神主貞明花押

〔稱古帖 三〕借請　用途事

合拾貫文者

右用途者、爲奉行方會尺料足所借請也、每月貫別加五十文利分、來秋以刑部卿年貢內可令返納也、本料悉任時和市可被返辨、更不可有依違之儀、仍借書如件、

至德三年卯月十七日　　公文所判

年預 御判 下知 ○

〔渡邊文書〕借錢利錢文事

合貳貫貳百文なり

右件用途者、每月加貫別に四十文宛之利分可爲辨進候、但於質物者、小泉院內字二セマチ田壹段お入置候者也、仍爲後證絕鑑借書之狀如件、

嘉慶二年戊辰十二月十日　　口請人四三郎 ヘヌケ中

〔新編追加政所〕一可禁斷私出擧利過一倍幷擧錢利過半倍事、

右同狀僞出擧之利、令格相存、而下民之輩、至于過期、廻利爲本、過責爲先、未經幾歲、忽及數倍、殆傾王臣家、動妨諸庄園、如斯之漸、責在朝家、且仰京畿諸國等、且任弘仁建久格、雖過四百八十日、不得過一倍、於擧錢者、宜限一年、以半倍利、縱雖積年紀、莫令加增、縱雖出於證文、莫令敍用、若猶有違犯者、令負人觸訴使廳、糺返文書、沒官其物者、以前條々事、宜旨到來之節、下知先畢、守狀跡、可令禁斷焉、宜下旨其篇雖多、於件三ヶ條者、嚴制殊重、若有違犯之輩者、不日可注進交名之狀依鎌倉殿仰、下知如件、

嘉祿二年正月廿六日　　武藏守平判
相模守平判

一擧錢利分事、不及私了見、任宜旨之狀、可令成敗給之狀、依仰執達如件、

寛元二年六月廿五日　　武藏守判

謹上　相模守殿

〔吾妻鏡四十一〕建長三年九月十七日甲戌、出擧利錢之事、所領於入流者、被下御敎書之由、其外相論者、可有一向問注所之沙汰之由被定云云、

〔新編追加政所〕一利錢出擧事永仁三

右甲乙之輩要用之時、不顧煩費、依令負累、富有之仁、專其利潤、窮困之族、彌及佗傺歟、自今以後、不及成敗、縱雖帶下知狀、不辨償之由、雖有訴申事、非沙汰之限矣、○中略

一問注所申、鎌倉住人等利錢事、

不可懸地主、以下部直可加催促、

〔北條九代記下〕永仁五年三月六日評云、○中略質券賣買地、可被返本主、凡下買地、不依年紀、利錢出擧不及沙汰云々

古事類苑

政治部八十八

下編

貸借下 無盡併入

〔法曹至要抄中出擧〕一錢貨出擧以米辨時一倍利事〇中略

同年〇建久四年十二月廿九日宣旨云、應錢貨出擧以米辨償利事、右得記錄所今月廿三日勘狀偁、錢直法任去年八月六日宣旨狀、一貫文別以米一斛爲正物、於利分者、依弘仁十年五月二日格、每六十日取利、不得過八分之一、雖過四百八十日、不可過一倍歟者、左大臣宣、奉勅、宜依勘申者、使宜承知依宣行之、

案之、擧錢之利、雖爲半倍、停止錢貨、以米致辨者、以錢一貫充米一石、每六十日取利、再滿四百八十日者、可爲一倍之利矣、

〔玉蘂〕建曆二年三月廿二日宣旨

一可停止私出擧利過一倍事

抑出擧息利、本條區分而擧、建久以一倍之利分、爲永年之定數以降、雖似有施行之實、猶非无違犯之聞、固守彼符、曾勿違越、

〔新編追加政所〕一借物事可有其沙汰、但可加利分之由書載證文者、不及沙汰、

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年八月三日、今日評議、〇中略出擧利爲多々利、其沙汰出來事、不能武士口入之由、被仰六波羅云云、

方不申付候而は、證人取置候詮無之、尤證人者、其身一代限、借主は病死出奔等いたし候とも、家株有之候得ば、其子孫迄も相掛り、相續人無之分、證人引受可申との文言無之候とも、證人ニ相立候節之趣意相糺、可引受筋ニ候はゞ、濟方申付可然儀ニ而、引受之文言無之候得ば、不及取上方ニ相成候はゞ、世上貸金銀融通差支候樣成行可申も難計、不穩儀ニ候間、是迄從來取扱候通、本人潰候はゞ、本人故障有之候はゞ之文言ニ無差別、假令證人引受之文言無之候とも、吟味之上濟方申付可然旨、評議相決候儀も有之、旁在方之もの、當人闕落いたし候とも、相續人有之候を、一般に爲相手取候儀不相成樣成行候も、事實におゐて不相當ニ有之、尤右闕落跡之儀、闕落いたし候ものは、畢竟困窮ニ迫候故之儀ニ候處、親類身寄等に而跡株引受、暮方幷田畑等世話いたし候は、闕落跡引受人之趣意ニ付、都而右闕落人之諸借財濟方いたし候樣ニては、跡株世話可爲ものも無之樣成行、おのづから荒地も出來可致筋ニ付、右體之分者、是迄之通居置、以來當人闕落いたし、悴又は跡相續人を相手取及出訴候節は、賦人共ゟ、相手方村役人共江掛合姓名書受取候節、闕落跡相續いたし候段、村役人共名印之書付所持いたし候分者、爲相手取候方可然哉と存候、尤去ル卯年貸金銀賣掛等之出入出訴之義ニ付、御觸之趣も有之相手方村役人共姓名書出方を難澀可致筋無之候間、前書之通極置候方と存候、依之及御相談候、以上、

子　四月

〔公事取扱〕借金家質出入〇中略

一借金證文ニ加判人於有之者、當人加判人兩方江濟方申付、畢竟相對の事故、濟方申付候節の證文ニ、家主不及加判、

も難計、不穏儀ニ候間、是迄從來取扱候通、本人滯候ハヾ、本人故障有之候ハヾ之文言ニ無差別、假令證人引請之文言無之候とも、吟味之上、濟方申付候方可然と存候、依之別紙書抜相添、揃者共存寄之趣御挨拶および候、猶寺社奉行衆江も御相談之上、御取極之儀と存候、以上、

卯十一月

〔新張紙〕文政十一子年四月二日、一座評議の上書面之通決ス、

御相談書

石川主水正　曾我豊後守

都而貸金銀賣掛等之出入出訴之節、相手之內、當時闕落いたし候ものは、當人見當次第可相掛期も有之候ニ付、跡相續人を相手取候とも、是迄裏判者不差遣心得ニ有之、右者相續人有之候とも、聢と致相續候と之治定も無之、或は斷絶いたし、親類內抔ニ而書方引受候類も間々有之、畢竟困窮ニ迫候而闕落いたし候程之ものを、相續人有之候迚、爲相手取候も如何と之儀より、裏判不遣仕來ニも可有之、既夫病死いたし、後家ニ而相續いたし候分は、誰後家と計肩書爲認、訴狀之內、夫存生中之貸金等滯候分は、其譯文段ニ爲認、是迄爲相手取來候儀ニ付、以來在方之ものを相手取、右體之出訴におよび候節之儀勘辨いたし候處、去ル卯年、主水正幷遠山左衞門尉、公事方掛之節、貸金銀出入之內、借主病死、又者跡株無之證人を相手取訴出候節、證文ニ本人滯候はゞと之文言者、本人存在にて濟方差支候節之儀ニ可有之、本人出奔いたし、相續人等無之分は、本人住所相知次第可掛期も有之、猶更之儀ニ付、以來本人故障有之候はゞ、證人ゟ辨濟可致旨之文言有之證文は、本人出奔いたし、證人江相掛り訴出候とも、取上濟方申付、右文言無之證文を以、借主病死又者跡株無之候迚、證人相手取候分は、都而取上ニ不及方可然哉之段、御一座江御相談および候處、一體證人掛之儀、返金滯候節者、如何樣とも取計可申ため之證人ニ可有之、引受之文言無之候迚、濟

ニ而、濟方差支候節之儀ニ可有之、本人出奔いたし、相續人等無之由申立候分ハ、本人住所相知次第可掛期も有之、尚更之儀ニ付、以來本人故障有之候ハヽ、證人より辨濟可致旨之文言有之證文者、本人出奔いたし、證人江相掛訴出候とも、取上濟方申付、右文言無之證文を、借主病死、又者跡株無之候迠、證人相手取訴出候分ハ、都而不及取上方相當ニ可有之哉と存候、依之及御相談候、以上、

卯十一月

岩瀬伊豫守
榊原主計頭

石川主水正殿
遠山左衛門尉殿

借金銀出入證文ニ、本人滯候ハヽ、證人可引取と之文言有之候得バ、證人江濟方申付、右文言無之候而も、吟味之上、證人ニ相立候儀無相違、外ニ子細無之候得バ、濟方申付候儀ニ有之、然ル處、本人滯候ハヽと之文言者、本人存在に而濟方差支候節之儀ニ可有之、本人出奔いたし、相續人等無之分ハ、本人住所相知次第可懸期も有之、猶更之儀ニ付、以來本人故障有之候ハヽ、證人より辨濟可致旨之文言有之證文者、本人出奔いたし、證人江相掛訴出候共、取上濟方申付、右文言無之證文を以、借主病死、又者跡株無之候迠、證人相手取候分ハ、都而取上ニ不及方相當ニ可有之旨、御相談之趣、承知いたし候、一體證人掛之儀、金銀貸出し候もの共、右返金滯候節者、如何樣とも取計可申爲メ之證人ニ可有之引請之文言無之候迠、濟方不申付候而ハ、證人取置候詮無之、尤證人者、其身一代切、借主ハ病死出奔等いたし候而も、家株有之候得バ、其子孫迠も相掛、相續人無之分、證人引受可申との文言無之候とも、證人に相立候節之趣意相糺、可引請筋ニ候ハヽ、濟方申付候方可然哉、且家藏書入金之儀、貸金銀同樣之裁許ニ可申付旨、先前町觸有之、此度右之通引受之文言無之候得バ、不取上方ニ相成候ハヽ、金銀貸出し候もの之心得も可有之候間、先年之振合を以、町觸ニ而も無之ハ、金銀貸出候もの共、難儀可致、併右之通相成候ハヽ、世上貸金銀融通差支候樣成行可申

難捨置不屆有之候ハヽ、其節ニ至リ相伺候上、取計候方可然、尤吟味相濟候上者、主人名前出候を相咎候儀者、家風次第ニ有之、且子之借財ニ付、親を相手取候歟、又者家名相續之者等相手取候類、幷主人より咎申付候而已ニ而、家名ニ差障無之分者、多分濟方申付、家名致斷絕候得ハ、濟方不申付儀ニ有之候、

但又者之身分相分リ不申候間、取極難及挨拶候、

一金子借受候他藩之者、主人より咎申付、家名斷絕致し候ニ付、連印之者相手取出訴致し候節、連印之者共より、右譯合申立候ニ付、其向役人江利害等申聞候儀ハ無之候、

本人證人共相果候借金濟方之事

金子借主證人共相果、跡株相續之ものニ掛候而願出候節、田畑家財讓請候相續人有之ハ、其ものより可差出筋に候得共、田畑家財ハ不及申、家屋敷迄外江質入書入ニ致し、何にても無之跡江、名前計讓受罷在候相續人、其借金可引受樣無之候間、當人幷證人共相果候上ハ、金子濟方之不及沙汰積、吟味詰相伺可然事、

〔德川禁令考後聚刑十六行條例〕文政二卯年十一月

借金出入借主病死或ハ跡株無之證人を相手取出訴之節取扱相談書、

十一月二日町奉行存寄書之通評議極ル

御相談書

石川主水正　遠山左衛門尉

借金銀出入之內、借主病死、又者跡株無之、證人を相手取、訴出候節、證文ニ本人滯候ハヽ、證人より辨濟可致旨之文言有之候得ハ、取上、證文ニ右文言無之候而も、吟味之上、證人ニ相立候儀相違無之、外ニ仔細無之候得ハ、是又濟方申付來候儀ニ有之、然ル處本人滯候ハヽと之文言ハ、本人存在

處、不及自力候ニ付、右金子所用仕候者之主人江願出候得共、取上無之ニ付、無是非公訴ニ相成候處、最初連印仕候節、無據勤向入用、其上其主人障ニも相成可申程之儀も有之、勤柄候儀ニ付不得止事連印遣候儀ニ御座候得共、出訴と相成候節ハ、如何可相成筋合ニ御座候哉、右連印遣候者之儀、彌出訴相成候得バ、主人之名前も出候儀、旁主人より咎被申付候歟、又ハ親類之者ニ候ハヾ、猶當仕候節ハ、其親又ハ相續之者迄相懸候儀ニ御座候哉、

一公訴相成候節、相手被取候當人者、御奉行所御聲懸引合之者故、其主人又ハ親之存分取計候儀者、伺之上ならでハ相成不申儀ニ御座候哉、

一右金子所用仕候者、其主人より咎之次第御届申上候後、出訴ニ候ハヾ、猶相手取候共、御取上ハ無之儀ニ御座候哉、

一右之御届無之以前、出訴仕候節、訴訟人より相手取不申候共、連印仕候同藩之者より、御奉行所江願出候得バ、其譯合ニ依候而ハ、他藩金子所用仕候者之方、其向之役人江御利解被成下候儀御座候哉、願人より不相手取候儀ニ付、御取上者無之儀ニ御座候哉、右之趣象而心得罷在度、御内々御問合申上候、以上、

二月　　諏訪伊勢守家來　渡邊三左衛門

書面、他藩之者連印ニ而、證文面者、相殘り候者壹人ニ而引受可相濟旨之文段相認金子借受候後、他藩之者、其主人より咎申付、家名斷絶致し候得共、右者他藩之者所用ニ遣候金子故、以後厄介相成間敷旨之書付差出有之候共、右者連印之者共、相對內議定之儀ニ有之候間、證文面之通連印之者江濟方申付候儀ニ有之候、

一連印之內、相殘り候者相手取出訴相成候得者、主人名前出候ニ付、奉行所吟味ニ不相成以前、咎申付、悴を久離致し候儀者不宜儀ニ有之、況吟味中、當人身分主親之存分致候儀ハ難相成、乍然

人有之バ、殘之者より可濟旨之文言無之候共、證文表銀子之内、誰何程借請候與申譯認無之候ハバ、殘連判之者江銀高不殘濟方申付候、且又連判之内差支有之候ハヾ、殘ものより可濟旨之文言有之候ハヾ勿論之事ニ候、

〔御當家令條二十二〕江戸町中定、○中略

一買掛其外負物等有之者、令死亡之時、有來中并口入之輩者、彼方江可催促、於無證文不可掛之、有相續之子者、可辨償之、親之負物可相濟事勿論也、子之負物不可掛其親、雖然親加判於有之者、不可通其償事、○中略

明暦元年十月十三日

〔公事取扱〕借金家質出入、○中略

一武士借金日切申付置候處、跡式斷絶ニ付、一類之内、別ニ領地被下候方より切金爲相濟度旨、金主申出といへども、不及沙汰古例、

〔德川禁令考後聚十六行刑條例〕文政十三寅年二月

連印證文之借金、其一人主人より咎を受、家名斷絶之節、右金子返濟方之儀問合、

藩中之者、他藩之者と連印證文を以、婦人名宛等ニ而、金子借用仕候處、右之金子ハ、他藩之者壹人ニ而所用仕、同藩之者江ハ、以後決而厄介懸申間敷旨之印紙差出、右を取置候處、右金子所用仕候他藩之者、其主人より咎被申付、在所表江差遣候上、家名斷絶等相成候ニ付、金主方ニ而ハ、連印之儀、殊ニ相殘候もの壹人ニ而も引請返濟可申旨之證文面ニ付、同藩之者江催促仕候節、種々及內談相詫候處、元金ハ勿論、滯利足迄も、全調達不仕候ハヾ、出訴可致旨申出候、尤金主ニも、全書壹人ニ而所用之儀ハ承知仕居候得共、當時借主咎被申付、遠國ニ罷在、殊ニ家名斷絶、子孫も無之儀ニ付、其者を不相手取出訴仕候節、元來連印仕候同藩之者、不念不行屆儀ニ付、元利調達返金可仕候

〔公事取扱〕借金家質出入〇中略
一養子之借金、養父之家來手形致置候といへども、養子實方へ相歸ルうへは、不ㇾ及ㇾ沙汰ㇾ古例、
〔德川禁令考後聚〕行刑十六條例養子借金濟方願之事
養子借金有ㇾ之、闕落いたし候歟、又ハ相果候以後、養父を相手取、濟方願出候節、家督相續爲ㇾ致候養子ニ候ハヾ、養父引受可ㇾ相濟筋ニ相聞候、家督不ㇾ相讓、親掛にて罷在候内之借金ニ候ハヾ、相對之事ニ付、養子病死いたし候ハヾ、濟方之儀不ㇾ及ㇾ沙汰ㇾ、闕落ニ候ハヾ、見合掛之積、吟味詰相伺可ㇾ然事、
先住之借金濟方之事
一先住借金有ㇾ之段、當住不ㇾ存、本寺觸頭より其段不ㇾ申聞ㇾ、於ㇾ致ㇾ入院ㇾハ、後住不ㇾ及ㇾ返濟ㇾ、先住之弟子并證人より爲ㇾ濟ㇾ之古例、
一先住借金、當住不ㇾ存旨申ㇾ之といふとも、先住借金も有ㇾ之バ、入院致間敷旨、不斷ニおゐてハ、當住又ハ證人より爲ㇾ濟ㇾ之、
〔公事取扱〕借金家質出入〇中略
一兩人連判ニ而金子借受候處、壹人相果ニ於てハ、半金濟ㇾ之させ、返金被ㇾ致といへども、受取書付も不ㇾ取置ㇾ、當人致闕落ㇾ、依而無ㇾ證據ㇾ、殘壹人も半分爲ㇾ濟ㇾ之、
〔大坂堺問答〕乾連判出入之儀
一連判借名前之内、死失跡斷絶、或倅有ㇾ之候而も、當時奉公人ニ成、名跡人無ㇾ之時者、右證文ニ連判之内万一闕候者有ㇾ之バ、殘のものゟ可ㇾ濟旨之儀書入無ㇾ之時ハ、其者一分之銀高除、殘銀殘連判之者江濟方可ㇾ申付ㇾ候、名請人有ㇾ之時者、連判一統濟方可ㇾ申付ㇾ候、證文ニ連判人之内闕人有ㇾ之バ、殘者ゟ可ㇾ相濟ㇾ旨有ㇾ之時者、縱令壹人相殘候共、銀高不ㇾ殘濟方可ㇾ申付ㇾ候、
此儀連判借名前之内死失、可ㇾ致ㇾ相續ㇾ倅奉公人ハ斷絶ニ而、跡相續之もの無ㇾ之、證文ニ連判之内闕

御尋事天文九子

父借錢事、其子他家ノ養子ニナリ、他家相續ノ時ハ、異姓他人ニ罷成之間、實父死去候へども、五旬ノ内にも社參をも仕、公武へ出仕をも致候而、實父忌穢無之、實父ノ跡たゝざる故也、然者實父ノ借物、他家養子ニ罷成者可返辨事、更以不可有之者也、公武令奉公ノ輩、各此分也、他家養子と申事、當座借物をのがれんために申歟云々、此段ハ養父ニ可被相尋者歟、又其在所あまねく可存知之、以此段可被決之者乎、老母養フ上ハ、他家養子たるまじき事、たゞしき實父實母ノ流牢を見つぐ事、人倫の常の理也、更に此義ニヨテ他家養子たるまじきとハ難申者也、都鄙此類多し、

環翠軒在判

諏訪信濃守裏判也在判

此分尤無餘義存候、仍加草名候

〔大坂堺問答乾〕一親懸り之もの、幷女房、同家人、下人江金銀出入之儀、

一同家人江對シ候金銀出入は不取上候、併身上持罷在候節之借金銀賣掛等ニ候はゞ、當時同家ニ相成居候共、取上濟方可申付候、貸物預物等都而有物出入者、最初ゟ同家人ニ候共、取上濟方可申付候、

但同家ニ罷在候節之借金銀賣懸ヶ等ニ候共、其者身上構候上願出候はゞ、取上濟方可申付候、

且又捴而同家人江日切濟方咎等申付候上、出入不相濟候はゞ、無身上之者ニ付、所持之雜物願人江可相渡旨可申付候、

同家人江對し候借金銀出入、身上持候もの同樣取計來候處、天明元丑年十月、御城代土岐美濃守殿江、山崎大隅守相伺、本文之通相極置候、

御書面之通、幷但書共、當表も同樣取計申付候、尤最初ゟ之内、家人ニ候共、一分之家業いたし候ものは濟方申付候、

爲請人令加判、

(大乘院寺社雜事記)文明五年九月十五日、一安住寺殿御借物事、就當門跡領可押給之由、支度仁有之歟、千万不得其意事也、依何事被御借下事予可存知哉、予更以不立請人不致一行事也、但依附弟可存知由、錢主等相存哉、此外事ハ不可有、安住寺殿與予更以非附弟、其故ハ門跡事院領等事、悉以自京都被仰付之、予自九歲年至當年卅六ヶ年院務無相違、更以自安住寺殿御手ハ不相續門跡也、自予方ハ御料所事并龍花樹院々號事許可申入了、賀州禪師方料所、同予許可申畢、御入滅上者、料所共事ハ取返申計也、一旦給人也、依何事予不存知借物等事可辨返哉、沙汰外事也、所詮此間安住寺殿ニ近々料所分事、云當國云他國、古市致取納候て可進之、則彼御菩提方并九條殿朝夕事等以此由可存、當分有之由仰之畏入由、古市筑前守共以御請申入了、安住寺殿事、自京都御成敗以後、予令入室、子細條々、并自立野殿御出頭以後、猶以予爲大乘院之由、證文等給旨同請文等事、

(信玄家法上)一親之負物、其子可相濟事勿論也、子之負物、親方へ不可懸之、但親借狀加筆者、可有其沙汰、若又就于早世親至拘其遺跡者、雖爲逆義、子之負物可相濟事、

一負物人或者號遁世、或號逐電、分國令徘徊事、罪科不輕、然者於于許容之族者、彼負物可辨濟、○中略

一逐電之人々田地、取借錢之方者、年貢夫公事以下、地頭へ速可辨濟之事、○中略

一負物人有死者、口入之者名判、其方え可催促之事、

一以連判就于致借狀者、若彼人數之內、令逐電者、假雖爲走人可辨濟之、○中略

一藏主就于逐電者以日記相糺、至于錢不足者、其田地屋鋪可召上之、但永代之借用狀、於二傳者、不可懸之、年期地之事者、可有其沙汰、年貢夫公事等者、當地頭へ速可勤事付負物人之借狀、經年期者、負物不可懸之事、

(蜷川弓馬故實)歩射聞書之內

借上

紛敷候間、以來ハ町奉行衆同樣、金銀錢束候儀ハ不致、銀ハ六拾目、錢ハ六貫文以上、都而一品ニ而金壹兩ニ相當之分而已取上、其餘ハ爲相除候樣可致と存候、依之及御相談候、

子五月

〔庭訓往來〕被仰下之旨畏拜見仕候畢、就先度御事書、〇中略 鳥羽白河車借、泊々借上（カシアゲ）、湊々替錢、浦々問丸、同以割府進上之、〇中略 恐々謹言、

卯十一月　　中務丞清原

進上　采女正殿

〔庭訓往來抄下〕泊々借上（トマリ〳〵ノカシアゲ）トハ、錢ヲカシテ、十日々々ニ利ヲ加ヘ上ルヲ云ナリ、

〔源平盛衰記九〕山門堂塔事

近來行人トテ、山門ノ威ニ募、切物奇物責ハタリ、出擧借上入チラシテ、德付公名付ナンドシテ、以外ニ過分ニ成、〇下略

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年〇延應元年九月十一日丁丑、諸國地頭等、以山僧并商人借上輩補代官事、一切被停止、是爲貪當時之利潤、不顧後日之煩、以如此輩補代官之間、偏忘公物備、只廻私用計之由、依有其聞也、

〔貞永式目追加〕一凡下輩不可買領買地事 同日(延應二年五月二十五日)評

右以私領令沽却事、爲定法之由、先度雖被書載、自今以後、縱雖爲私領、於賣渡凡下輩并借。上。等者、任近例、可被收公彼所領也、

借主
請人

〔建武以來追加〕一諸人借物請人事 永享八五廿二

至預御罪科輩者、且以折中之儀可及半分沙汰、但其身令安堵、云借。主。、云請。人。、相共可致其償矣、

〔康富記〕文安四年十二月廿八日、院町定使長島勘解由入道、詣圓福寺借物五結事申請之、以彼入道

中付候積り、

右之通取扱可ㇾ申哉と存候付、及二御相談一候、

巳九月

御書面借金銀取捌方心得之儀、二ヶ條共、夫々御見込之通ニ而可ㇾ然、拙者共おゐても、同様申合置候様可ㇾ致存候、依ㇾ之及二御挨拶一候、

巳十一月　寺社奉行
　　　　　御勘定奉行

（徳川禁令考後聚十六 行刑條例）元治元子年五月評決

金銀錢合高壹兩以上ニ相當之分ハ取上、以下ハ不二取上一積相談書、

一色丹後守　本多加賀守

去ル卯年評議ニ御下ゲ有ㇾ之候、鳥居甲斐守町奉行之節借金銀裁許改革之儀ニ付、相伺候書面ヶ條之内、貸金銀賣掛等之出入滯高之儀、少分之賣掛借金、多人數相手取、目安裏判願出候類不ㇾ少、在方之もの共、難儀可ㇾ致候間、以來五里内ニ而七日目裏判書差出候場所之もの相手取候出入ハ、金壹分、銀錢右同斷以上ハ取上、五里外ニ目安裏判差遣候場所ハ、今般定相場金壹兩六拾目、錢六貫五百文以上ハ取上、右以下ハ目安掛ハ爲二相除一可ㇾ申哉と相伺、評議之上伺之通と申上、其通相濟候趣ニ見合、譬バ一人ニ而金貳分、錢三貫五百文程借受居、金錢相束候而ハ、壹兩以上ニ相當之類迄、滯出入願出之分、町奉行衆ニ而ハ取上無ㇾ之、拙者共方ニ而ハ、右樣金銀錢相束候而も、御改革之節被二定候錢相場六貫五百文之高ニ詰り候得バ、則壹兩以上ニ相當候譯を以取上來り、是迄區々ニ相成居、是以錢六貫五百文と相場相定居候ハ、壹兩以上ニ相當候有無も見分安ク候得共右定相場相止、其時々之相場ニ被ㇾ任候樣相成候上ハ、日々入狂有ㇾ之、金壹兩ニ相當候有無見分ヶ方至而

右古借書替候證文之趣申爭候節、相手方ニ先前戻り居候證文又ハ古借之砌、内金利分等相渡候請取書之類有之、金高モ符合いたし、印形其外共事實無相違相聞候分ハ、既ニ安永末年十二月中、年賦金裁許之儀ニ付、一座評議濟ニモ、通帳又ハ手紙抔を相手方ニ而證據ニ申立候共容易ニ不取用、印紙有之分ハ、年賦月賦之裁許可申付積、取極有之候間、凡右ニ基キ、相手方之證據ニ相立、證文面新借ニ相成居候共、取上ゲ裁許ハ不申付積、或ハ御觸以前之書付等所持いたし候共、端紙之類、或ハ印形も無之、金高等も符合不致、疵と辨別附兼候類ハ、何樣申爭候共不取用、都而新借と見居、取上濟方申付候積り、

一右御觸後、貸増いたし、古借を束、新借證文ニ改願出候分、

右寛政十二申年、小田切土佐守勤役中、下谷坂下町二丁目町醫小谷春東儀、武家江掛り候貸金口々願出候節、縱令バ同巳年八月金八兩用立置候處、相對濟御觸後、尙又借用いたし度旨申ニ付、金拾兩用立、其砌八月中、貸置候八兩元利共引取、八兩之古證文借方江差戻、拾兩之新借證文受取、新規貸附之旨申立候得共、證文書替候も同樣ニ可有之哉、右を取上ゲ濟方申付候ハヾ、書替之分、一統右之姿ニ相成、不取締之趣を以、相對ニ而濟し候樣可申渡旨、一座相談ニ見合、是迄取扱來候得共、右は纔ニ貳兩餘之貸増金ニ相成候故、相對濟申付候而も、強而差支も無之、一通り相當之樣相聞候得共、縱者萬一元金貳百兩有之候處江、百兩之貸増いたし、都合三百兩之新借證文ニ書替願出候節、顯然多分之金高御觸後之貸渡ニ相違も無之を、書替之趣意に相成候迚、不殘相對濟申付候も、相當致間敷哉ニ付、是又新古相束候儀、證據も有之、無相違相決候分ハ、金高之多少ニ不寄、縱一旦古借之分濟切、新ニ貸渡候姿ニ對談致し有之候共、事實右之内古借ニ當り候金高丈ハ、相對濟申付、全貸増ニ相成候分而已取上ゲ濟方申付候積り相改、尤前書同樣申爭而已ニ而、無證據、又ハ事實不分明之類ハ、都而新借と見据、相對濟ニハ不申付、不殘濟方

割合之通り毎月幾日迄ニ無相違返納可仕候、万一何樣之異變御座候共、聊無滯相納可申候、若納方相滯候節者、右家屋敷御引渡候とも、負拂金子調達相納候共、御差圖次第毛頭違背仕間敷候、尤町入用、家守給、家作普請共、此方ニ而仕拂候間、右金子皆納仕候節者、家屋敷沽劵狀御戻可被下候、爲後日金子拜借家質證文仍如件、

年號月

拜借主　誰印
家守　誰印
五人組　誰印
同　誰印
名主　誰印

御勘定所御用達衆御中

〔法曹後鑑〕弘化二巳年九月

借金銀出入取捌方之儀ニ付相談書

寺社奉行衆　遠山左衞門尉
御勘定奉行衆　鍋島內匠頭

去ル卯年天保十四年相對濟御觸後之貸金願出候節、相手方ニ而ハ、古借書替候證文之趣申之、雙方申爭決兼候類、間々有之、右ハ相手申立而已ニ而、證據も無之、難取用分ハ、衆より證文面を以、夫々濟方申付來候得共、中ニハ紛敷書付等、相手方ニ所持いたし居、證據ニ差出候而も、辨別いたし兼候類も有之、自然其筋之事實ニ應、取扱候故、見込ニ寄候而ハ、異同之儀有之間敷とも難申哉ニ被存候ニ付、右類凡左之趣ニ取置候而ハ如何可有之哉、

一卯年十二月十四日以來之日附ニ而通例之貸金證文

弘化二巳年七月

万石以下家來江申渡寫

諸國御代官御預所ニ而取扱候御貸付金、去ル寅年(天保十三年)ヲ限、元金滯利金共半高棄捐、殘半高無利足年割上納之積、卯年(天保十四年)十二月被仰渡候通、年賦年季を以拜借之分ハ、御主法替ニ相成、一ヶ年限之御貸附ニ而、其年元金皆納難相成、尙又拜借證文被書替候分、未ダ證文不書替候共、卯年新證文可相成儀ニ付、寅年限之御主法替ニ者不相成候間、其段相心得、尤右に懸り候未納利金寅年迄之分者、半高棄捐、殘半高納方之義者、是迄納高之壹分七厘五毛之割合を以別段相納、且文政度納金御主法替相成候分、壹ヶ年貸之並借ニ相成候分、御主法中之不納者、百名ニ付金貳分ヅヽ別段相納候積、右納方割合幷證文等之義者、御代官御預所より委細可相達、尤全村方のもの拜借之分も、同樣相心得候樣可被申渡候、

右者跡部伊賀守殿江伺之上申達候間、可被得其意候、以上、

(貸附金無利足年賦濟一件)天保十五年辰三月、沽劵地類燒拾ヶ年賦御貸附證文、

御會所金家質證文之事

一金何百何拾兩

內前同斷

右者何町何町目何側何角(京間田舍間)表何間表幅同斷裏行何間有之、沽劵金何百兩之私所持之家屋敷家質ニ差入、町御會所積金之內を以、御仕法付之外、金何程、此度拜借仕、則名主五人組立合、右之金子慥ニ請取、家屋敷沽劵狀壹通御預申處實正也、此家屋敷之儀、拜領地借地等ニ者無御座候、勿論諸親類者不及申、外より構申者無御座候、若横合より違亂申もの御座候ハヽ、加判之者共何方迄も罷出、急度埓明、各方江少も御苦勞相掛申間敷候、右金返納方之儀者、御仕法付幷新借共、書面

一滯金九百兩迄　同切金高拾兩　一滯金千兩迄　同切金高拾兩
一滯金千五百兩迄　同切金高貳拾兩　一滯金貳千兩迄　同切金高貳拾兩
一滯金貳千五百兩迄　同切金高三拾兩　一滯金三千兩迄　同切金高三拾兩
一滯金五千兩　同切金高四拾五兩　一滯金七千兩迄　同切金高八拾兩
一滯金壹万兩迄　同切金高八拾兩
一壹万兩餘ハ三拾ヶ年賦以上ニ割合、其度々評議之上、切金可申付事、

〔牧民金鑑十二〕天保十四卯年六月朔日水野越前守殿御渡

諸大名御旗本之面々、近來別而及困窮候趣達御聽、此度以思召馬喰町御用屋敷取扱御貸附金、去寅年を限半高棄捐、殘半高無利足年割上納たるべき旨被仰出候事、
　但拜借後、利納五ヶ年ニ不至ものハ、五ヶ年納濟之上、本文之通たるべき事、
一滯利金之分は、元金に准じ可有上納事、
一當卯年より、新規御貸附をも拜借可被仰付候、勿論元利納方不違期月樣、銘々兼而心懸拜借可被申立事、
一遠國奉行所幷遠國御代官御扱御貸附金之儀者、是迄之通居被置候間、無遲滯元利上納可被致事、
右之通被仰出候條、其旨可被相心得候、是迄納方等閑之向も不少、必竟不覺悟故之義も有之、向後彌節儉相用、勝手向取直候樣可被心懸候、委細之儀者、梶野土佐守、井上備前守、根本善左衛門可被談候、
右之通可被相觸候
六月　〇中略

右ハ年賦證文之極ニハ不㆑相拘、最初之元金高を以濟方申付來候處、都而年賦ニ相成候ハヽ數年來之借金ニ而、元來得心之上極置候儀ニ御座候間、證文之極を用ひ、年賦之滯計通例之濟方申付未期月不㆑相成分ハ、年賦相對之通可㆑相濟旨可㆑申付哉之旨、寶暦九卯年五月、評定所一座伺濟有㆑之以來之儀も、右之通相心得取捌可㆑申候、

〔德川禁令考後聚十六 行刑條例〕天保十四卯年六月

此度相改候切金員數割合書付　評定所一座

一金貳兩より百兩迄　凡拾ヶ年賦之積　一金百壹兩より千兩迄　凡拾五ヶ年賦之積

一金千壹兩より三千兩迄凡二拾ヶ年賦之積、一金三千壹兩より壹萬兩迄凡二拾五ヶ年賦之積

右年賦濟之趣を以目當ニ致し、滯金ニ應じ、切金員數之割合左之通、

一滯金貳兩迄　前々切金高錢三百文　一滯金六兩迄　同切金高二朱

一滯金拾兩迄　同切金高壹分　一滯金拾五兩迄　同切金高壹分貳朱

一滯金貳拾兩迄　同切金高壹分貳朱　一滯金貳拾五兩迄　同切金高貳分

一滯金三拾五兩迄　同切金高三分　一滯金五拾兩迄　同切金高壹兩

一滯金六拾兩迄　同切金高壹兩壹分　一滯金七拾五兩迄　同切金高壹兩貳分

一滯金九拾兩迄　同切金高壹兩三分　一滯金百兩迄　同切金高貳兩

一滯金百五拾兩迄　同切金高三兩　一滯金貳百兩迄　同切金高四兩

一滯金三百兩迄　同切金高五兩　一滯金四百兩迄　同切金高六兩

一滯金五百兩迄　同切金高七兩　一滯金六百兩迄　同切金高八兩

一滯金七百兩迄　同切金高九兩　一滯金八百兩迄　同切金高九兩

上ニ割合、其度々評議之上、切金可ㇾ申付事と有ㇾ之、右者千壹兩より三千兩迄、凡貳拾ヶ年賦、三千壹兩より壹万兩迄凡貳拾五ヶ年賦ニ濟切候積り之割合ゆへ、壹万兩餘者、三拾ヶ年賦以上と而已有ㇾ之候事ニ而、壹万兩有餘之滯金ハ、何程にても金高不ㇾ拘、三拾ヶ年賦と限候儀には不ㇾ相ㇾ聞候間、勘辨いたし候處、千壹兩より壹万兩迄之滯金、切金員數割合を以、貳万壹兩より貳万三千兩迄之切金員數割合候得ハ、凡四拾五ヶ年賦ニ相當り、右之通ニ而ハ、金高次第格別永年賦之濟方申付候口々も出來候樣相成、如何ニ而、右巳年之御書付ニも、延享元子年以來之金銀出入、奉行所ニ而取上候儀、同三寅年相達候以來、既五拾年餘追々金銀出入數多ニ成行候、元來人々相對之上之借貸ニ候得ハ、取上裁許にも不ㇾ及事と有ㇾ之、右體年數之際限も有ㇾ之候事ニ付、壹万兩以上ハ、何程之金高にても、都而四十ヶ年賦內ニ而濟切候樣割合候方相當ニ可ㇾ有ㇾ之哉、依ㇾ之今般之滯金切金員數割合左之通、

一滯金貳万五拾兩

此切金

壹ヶ月五拾兩　壹ヶ年六百兩濟　三拾三ヶ年五ヶ月ニ而皆濟

右之通切金可ㇾ申付哉、及ㇾ御相談ㇾ候、以上、

亥四月

右文化十二亥年四月十三日、一座評決

〔德川禁令考後聚十五行刑條例〕天保十三寅年十月朔日

越前守殿江御直上ル

金銀出入取捌之儀ニ付勘辨仕候趣申上候書付　鳥居甲斐守

一年賦金

〔德川禁令考後聚十七 行刑條例〕子〇文化五年十月

大坂町奉行江 相違候書付　　　　評定所一座

其表貸金銀出入、以來御當地取計方之通、御取計候樣、御下知有之候ニ付、御問合之趣令承知、左ニ相違候、〇中略

切金員數割合

一金貳兩迄　三百文	一金六兩迄　貳朱	一金拾兩迄　壹分
一金拾五兩迄　壹分貳朱	一金貳拾兩迄　貳分	一金三拾五兩迄　三分
一金五拾兩迄　壹兩	一金六拾兩迄　壹兩壹分	一金七拾五兩迄　壹兩貳分
一金九拾兩迄　壹兩三分	一金百兩迄　貳兩	一金百五拾兩迄　三兩
一金貳百兩迄　四兩	一金三百兩迄　五兩	一金四百兩迄　六兩
一金五百兩迄　七兩	一金六百兩迄　八兩	一金七八百兩迄　九兩
一金九百兩千兩迄　拾兩	一金貳千兩迄　貳拾兩	一金三千兩迄　三拾兩
一金五千兩迄　四拾五兩	一金壹萬兩迄　八拾兩	

〔法曹後鑑〕文化十二亥年四月

壹萬兩以上切金之儀ニ付御相談書　　　　根岸肥前守

一金吹町家持半兵衛願、板倉充之進貸金出入、

右出入滯金貳万五拾兩、去月廿一日、三十日限濟方申付處、寛政九巳年以來、壹万兩以上滯之貸金銀出入裁許之例無之、去ル寅年伺書ニ添進達之切金員數割合書付ニ、壹万兩餘ハ、三拾ケ年賦以

〔天保集成絲綸錄〔百四〕〕寛政九巳年九月

大目付江

一延享元子年以來之金銀出入、奉行所ニ而取上候儀、同三寅年相達候以來、已ニ五拾年餘、追々金銀出入數多成行候、元來人々相對之上之借貸ニ候得者、取上裁許ニも不及事ニ候間、是迄之分裁許ハ不申付、自今出訴之分、吟味之上取上、夫々可申付候、尤買掛り諸職人作料手間賃等ニ至迄同斷之事、

但只今迄取上裁許日限等申付置候分も濟方、向後者奉行所ニ而取扱致間敷候、

一金銀借貸之儀者、年古儀ニ而も、相互ニ實意を以て、應對ニ候得ハ、容易ニ出訴裁許請ニも不及事ニ而候處、返濟方も不實意ゟ、多くハ猥ニ出訴ニおよび、風俗不宜候、此度裁許之限り相改候而も、只今迄之借金銀棄捐ニ可致抔心得候而ハ、尤不埒之次第ニ而候、又欲心を以事を企、出入ニおよび、或ハ全く利德ニ而已拘り、不埒成出訴之類ハ、吟味之上、夫々急度咎可申付事、

一以來濟方可申付分、申渡之金高不足致し、毎度不束ニ候ハ、糺之上急度可及沙汰事、

以上

巳九月

右之通可被相觸候

〔町會所留〔二十一〕〕申寛政十二年十月十日、御用達座人江申渡、肝煎名主江者、早々一統名主共江も申通樣申渡、

町會所江家賃幷年賦成崩等貸付願之儀、是迄勝手次第願出候處、巳來者每月朔日より、九日迄之內に限り願出可申候、十一月者、朔日ゟ十五日迄之內可願出候、

但正月十二月は、貸付願書不請取候事、

まで奉行所ニて壹ヶ年兩度之裁許に日切等申付候分共、向後奉行所ニては不申付候間、相對を以無滯急度相濟べく候、

三月

〔例書四〕一借金年賦ニ相成、貳拾ヶ年ゟ永年賦與唱、永年賦之儀者、如何樣成儀有之候而も、年賦之崩候も無之、夫共借方ゟ返金年賦通り不違候得者、訴候節、年賦通ニ爲濟、跡年賦通申付、但十九ヶ年賦上之年賦證文ハ、吟味之上切金ニ申付、

〔國制記四〕三十年賦御免之御觸

御役所金銀拜借人共より、諸向江貸附候金銀之儀、拜借人共、猥ニ貸附方致候ニ付、右爲御咎、明和元申年、三十年賦ニ上納申附置候處、最早廿四ヶ年來相立、殊ニ近來米穀高直、其上當春は火災ニ付、一同難儀之趣ニ相聞候間、御憐愍を以、在方町方共、向後右上納之儀御免被仰付候ニ付、借受人共、一同呼出し可申渡候得共、此節呼出し候而は、渡世之障ニ相成、多人數及難儀候間、此段相觸候、

右之通、御憐愍之御沙汰在之候、全昨年以來打續難儀之趣相聞候ニ付、下々之者共、渡世致出精、不正之筋無之樣御趣意ニ候間、以來彼是無跡形も儀浮說等不致、金銀通用之儀者、當六月洛中洛外へ相觸候通、借方之もの隨分相稼、不實不致、限月返濟無相違樣可致候、貸方之者ハ、此後右體年賦等ニ可相成と不加疑心、少も無危踏、正路之取組ニ候ハヽ、潤澤ニ貸出シ、金銀通用不自由ニ不相成候樣可致候、返濟方不埒之者及出訴候ハヽ、嚴重ニ濟方可申付候、右之趣相背、等閑ニ相心得、又者品々浮說等申成し候族於有之者召捕、嚴敷可蒙吟味候事、

右之通、洛中洛外裏借家ニ至迄、不洩樣可相觸者也、

天明八申年七月

但當四月廿七日、右三十年賦借り受居候もの有無、町々御札在之事、

一享保十四酉年以前之借金出入者無取上

（公事取扱）借金家質出入〇中略

一町人百姓借金申付方、借金方多少ニ不構、三十日切之度ニ切金爲差出、出金之仕形於不埒者、手鎖かけ、尚又滯候ハヽ、身代限申付、武士方ハ日切之度ニ切金申付、

（德川禁令考後聚十六行刑條例）安永四未年十二月

貸金出入濟方年。賦。月。賦。裁許之事

評定所一座

都而貸金滯出入ニ相成、年賦證文ハ無之候得共月々或者五節句抔と期月を相立、員數を極メ、通。帳。等。ニ。而。請。取、或者文通ニ、金主方より何月分も不相分抔と申文段之手紙抔を相手方ニ而、年賦之證據ニ申立類有之候、右。之。類。年。賦。ニ。ハ。不。相。立、元金高ニ而濟方申付、且年賦證文ハ無之候共年年或者月々何程宛可相渡とか、可受取とか申、印形有之、書付有之分ハ、年賦月賦之裁許之積り

右之通、安永四未年十二月廿五日評議極ル、

（我衣）延享三丙寅年三月中旬、得。濟。被。仰。出。子年以來金銀貸借先年之通、毎月裁許ナル、七ヶ年以前迄ハ二季ノ裁許タルニヨツテ、七月切金被仰付、十二月右之切金持參、若極月延引之輩ハ、翌年盆前ニ成ル、依テ貸方ハ不宜、

（寶曆集成綜綸錄三十）延享三寅年三月

三奉行江

覺

一借金銀賣掛等之出入は、人々相對之事故、近來壹ヶ年兩度之裁許ニ申付候得共、向後三年已前、子正月より之金銀出入は、前々之通取上、裁許可申付候、四年已前、亥十二月迄之金銀出入、只今

先年八條庄爲質物於實光院令借錢候處、此島目御寺門へ從錢主寄進付、既質物流ニも割本利一倍合六百貫文切錢ニ御詫言申上候、依數年之牢籠無沙汰候間、又質物流切申候、雖然自當秋被庄一圓被成御知行給、如今闕所候共、本地安堵候共成足者一圓ニ御寺門へ被成御直納、以上六百貫文始中終ニ相澄候者、本借書被相出、庄下此方へ返給候樣御同心可畏入候、從今者相澄迄、此方而一粒一錢內外付不可引給候、則庄屋共在樣悉以可致取沙汰候旨、堅申付候、彌御寺門へ被召上御存分可被給付候、代官共堅固可致一圓運上之馳走候旨申付候、則致加判候、聊以不可有相違候、然者從當年十ヶ年之間、庄下之成足不足候共、以他足可有究返候、若年季驅過候て無沙汰候ハヾ、質地之儀被取添、永代可有御知行候、其時不可有申事候、委細多聞院に入魂申候て、御集會御披露可給候、恐々謹言、

永祿七甲子年七月十四日　　遠勝花押

〔享保集成絲綸錄十七〕元祿十五午年閏八月

一近年金銀の出入多、外之御用之支ニも罷成候間、拾八年以前丑年(貞享二年)事之通、去巳年(元祿十四年)迄之金銀出入者取上無之相對を以埒明候樣ニ被申渡、當午正月ゟ之分可有裁許候、尤預り金掛り、賣物之前金、諸職人作料、手間賃等、凡テ相對之筋ニ而金銀出入ハ同前之事、(中略)

一只今迄ハ、借用金又ハ利付之分ハ無取上、預ケ金と有之候得バ被致裁許候得共、畢竟內證ハ同前之事ニ候間、向後ハ一樣ニ可申付候事、

一奉公人引負又ハ取逃仕候者、請人方ゟ給金ハ急度辨濟爲致、其外引負取逃之辨金ハ、請人分限有次第辨させ、不足之分ハ、主人損失致させ、欠落仕候ハヾ、請人ニ尋出候樣ニ急度被申付、右之不屆者、死罪又ハ流罪ニ可被申付候事、

〔公事取扱〕借金家質出入

棄捐　年賦　切金

身代限り申付方之事

一身代限り之事、自分居宅并藏家財共ニ不殘取上可申候、

但他所ニ家藏有之候共、諸財物之分ハ取上可申候、家藏之儀ハ構無之、

〔新編追加(政所)〕一利錢出擧事(永仁三)

右甲乙之輩、要用之時、不顧煩費、依令負累、富有之仁、專其利潤、窮困之族、彌及侘傺歟、自今以後、不及成敗、縱雖帶下知狀、不辨償之由雖有訴申事、非沙汰之限矣、次入質物於庫倉事、不及禁制、

〔新御式目〕一利錢出擧事(永仁五三六)

右不及尋成敗、下知以後縱雖申子細、非沙汰之限、○(中略)

一借物事

可有其沙汰

以前四ヶ條、去月廿一日、

借物事可有沙汰、但可加利分之由書載證文者、不及沙汰、

〔新編追加(政所)〕一利錢出擧事(永仁五六一評)

右不及尋成敗、下知以後縱雖申子細、非沙汰之限、

一利錢出擧事(永仁六二廿八)

不可尋成敗之由同雖被定下、於向後者子細同前、

〔建武以來追加〕一棄捐御判幷御下知等事(應永十三)

被成棄捐者、盡未來際不可有改動之、曾不取上者也、各守此法可申沙汰哉、

〔春日神社文書(九)〕追而只今五十貫文令調法、且運上候、幷從先年少々寶光院ヘ沙汰候も、爲御寺門可被成御尋候共、本利可爲六百貫文之內之由、能々可得其意候、此外不申候、

ナリ、日限ノ中ニ家財ヲ外エ出ス者ハ、三日晒ノ上所拂ノ法ナリ、是ハ役人吟味セズトモ、第一乙ノ方ニテ日夜心ヲ付ケ、甲ノ方ニ若シ鍋一ツタリトモ他エ出セバ、直ニ訴ルユエ、甲モ奸ヲ行フコトヲ得ズ、且ツ三日晒ノ耻ヲ受クルノミナラズ、所拂ニナリテハ、三郷借屋エ入ルコトモ叶ハズ、終身回復モナラズ、妻子路頭ニ迷フ業ユエ、甲モ家財ヲ他エ出サヾルナリ、只公事ニナラザル以前、最早産ヲ失ハント思ヘバ、貸方ヨリ訴ニナラヌ内ニ、家財等漸々賣リ拂ヒ、又ハ親類等ヘ預ルモアリ、ソレユエ貸方ニテモ、此借主ハ返濟六ツカシカラント思惟スルトキハ、亦アラカジメ手ヲ廻シ、其動靜ヲ察シ、聊モ家財等他ヘ送リ出スノ萌シヲ見レバ、忽チニ奉行所ヘ訴出ル事ナリ、此定法有德公ヨリ始ルト申傳フナリ、實ニ難有御事ナリト語レリ、

〔新編追加 政所〕一取流土民身代事（正應六五廿五、同廿日以奉行人豐州被仰下畢、）

右對捍有限所當公事之時、爲令致其辨、取身代之條定法也、而或依少分之未進、或以吹毛之咎、取流身代之條、尤不便也、縱雖經年月、償其負物、請出彼身代之時者、早可返與之、無力于辨償、可令流失之旨、其親其主令申之時、相計身代之分限、談傍例於近郷之地頭代、給與彼直物、取放文之後可令進退之矣、

〔牧民金鑑 二十二〕元祿十五午年（中略〇）

一方々負方有之者、身上をつぶし、分散願之儀、向後借し主同心不仕者有之候共、相待候而も、目當も無之者ハ、先願之通ニ、分散を以一應埒明ケ、後ニ身上仕直し候ハヾ、其節訴之樣可被申付候、

一只今迄ニ、借用金又ハ利付之分ハ、無取上、預り金と有之候へば、被致裁許候得共、畢竟內證同前之事候間、向後ハ一樣可被申付候、

〔德川禁令考後聚 十三 行刑條例〕元文四未年三月差上、翌申五月十日、綠色御書入御好之趣有之帳面之內、

ザル段不屆ニ付、定法ノ通家屋敷道具等殘ラズ乙某ヘ引渡スベキ旨申渡ス、此定法ト云ハ、妻子眷屬等皆立ノマヽニテ、夏冬トモソレ〳〵不斷着用シタル衣服ノミ渡シ、家財ハ勿論、先祖ノ位牌マデ殘ラズ貸方ヘ沒收スル掟ナリ、扨甲某ハ、誠ニ耻辱此上ナケレドモ、千兩ニ笠一蓋ノ譬ノ如ク、乙ノ方ヘ破レ家ヲ不殘サシ向ケ、又カク申渡ヲ受ル上ハ、他ノ細々シキ借金ハ一圓返スニ及バザルコトニナリテアレバ、無借金ノ人トナリ、棄捐モ同樣ナリ、サリナガラ、父母妻子其日ヨリ路頭ニ迷ント思フニ、コヽニ一ツ面白キ事アリ、大坂ニハ三鄕借屋請負人ト云モノアリ、三鄕トハ、假令バ天滿鄕某鄕々々ト三所ニ長屋アリテ、右ノ家ヲ殘ラズ貸方ヘ沒收セラレタル者ノミ住居ス、其世話人ヲ請負人ト云、甲某來レバ、直ニ請負人ノ手ニ付、三鄕ノ內ニテ然ルベキ長屋ヲカリ、其日ヨリ商ヒデモ始メラルヽ也、親類懇意ナド世話シテ遂ニ家業ヲ起シ、サキノ貸方ヘ掛合ヲツケ、位牌ハ何程ニテ返シクレヨ、何品ハ重器ユヘ何程ニテ返シクレヨトテ、追々熟談整ヘバ、貸方ニテ無用ノ位牌等ヲ所持センヨリハ、掛合談ジ金ヲ取リ、其上ニテ熟談整ヘバ、家ヲモ丸ニ返スナリ、甲某家ニ歸ルコトヲ得レバ、其日ヨリ又元ノ如ク何町ノ何屋ト回復ス、奉行所ニテモ、元ヨリ借金ヲ返スバカリノ罪ユエ、熟談整ヒタル由、乙ヨリ屆レバ、夫ニテ事濟ナリ、甲モ家產ヲ失フホドノ愚濃ナレドモ、三鄕借屋ヘ入レバ、會稽ノ耻ヲ雪ント激勵シ、一代ノ內ニ回復スルモアリ、タトヘ父ハ回復スルコトヲ得ズトモ、其子ハ貧窶ノ中ニ生長シ、父ノ業ヲ復スルナリ、多キ中ニハイヨ〳〵ナリ下リテ、三四代モ借屋人ニテ終ルモアリ、江戶ニテハ借金出入リ訴ヘニナレバ、雙方ヘ理解ヲ含メナドスレドモ、其間ニ奸吏因緣シテ賄賂ヲ貪ルノ弊少ナカラズ、大坂堺ハ右ノ如ク故、何事ナク濟ムコト良法ナリト、矢部語ル故、某疑テ問ヒケルハ、イカニモ面白キ法ナレドモ、甲某三十日延ノ中ニ、私ニ家財道具等賣拂ヒ、貸方ヘ引渡スベキ命ヲ蒙リテモ、引渡ス品ナキ樣ニ巧ムノ患ハナキヤ、矢部手ヲ拍テ曰、ヨクハ問セタリ、某モ語リ落セシ故、不審尤

付、鳥居甲斐取調申上候書面之内、

初ケ條

一借金銀　一祠堂金　一官金　一書入金　一立替金　一先納金　一職人手間賃金
一手附金　一持參金　一賣掛金　一仕入金　一諸道具預ケ證文ニ而金銀借候類
一諸物賣渡證文ニ而金子借候類　一御家人又者御用達町人等拜領屋敷地代店賃を書入金子借候類、

右者御定書ニ三十日限濟方可申付日限之節、少々に而も相濟候ハヾ、一ケ月兩度ツヽ切金ニ爲差出、其上濟方不埒ニ候者、身代限可申付事と有之候内、百姓町人江相掛候出入者、切金之裁許相止、先ヅ對決申付候上、訴訟申口符合致し、證文面紛敷儀も不相聞候ば、不及吟味、直ニ家質金ニ倍之日限ニ而濟方申付、右日限ニ不相濟候ハヾ、手鎖預申付、滯之分濟切候ハヾ、差免、手鎖預申付置候而も濟方等閑ものは、身代限可申付、尤子細有之、雙方申爭候類者、其始末吟味之上、前同樣可申付趣相伺、評議之上、濟方割合之儀者、右之通相心得、尤在方のもの等、猥ニ身代限申付候儀者不容易、殊大坂表ニ而も、右日限之內過半相濟候ハヾ、猶又最初之日限程改て濟方申付候趣ニ付、右同樣取計、其上ニ而濟方不埒ニ候ハヾ、身代限申付、可然哉與申上、其通被仰渡候、

〔東湖隨筆〕下　矢部定謙曰、大坂并ニ堺ニハ借金出入ノ裁判定法アリテ、能ク事情ヲ得タル扱ナリ、タトヘバ、甲某乙某ヨリ借金返濟滯リ、乙ヨリ訴ニナルトキ、奉行所ニテ雙方呼出シ、證文見屆ケ、彌ヨ相違ナケレバ、三十日ノ內返濟スベキ由ヲ申渡ス、三十一日目ノ朝呼出シ、未ダ返濟方叶ヒガタキ時ハ、又三十日ノ日延ヲ許シ、必ズ返濟スベキ由ヲ申渡ス、六十一日目ノ朝呼出シ、未ダ返濟方整ハザルニ於テハ、定法ノ通リ甲ヘ手錠申付、是非返濟スベキ旨ヲ申渡ス、九十一日目ノ朝呼出シ、未ダ整ハザル時ハ、手錠ヲバ許シ、サテ〳〵追々申渡シ、手錠マデ申付タルニ、返濟方致サ

拾三ヶ條目

一地代金

一店賃金

右御定書ニ三十日限濟方申付、日限ニ不相濟候ハヽ、切金ニ爲差出、身代限可申付旨有之候得共、利倍致し候金銀共品違ひ候間、以來家賃金同樣之日限ニ而、濟方申付候上、不相濟候ハヽ、身代限可申付旨相伺、評議之上、諸借金同樣日限濟方申付候上、身代限申付候方可然哉と申上、其通被仰渡候、○中略

貳拾三ヶ條目

一遊女揚代金出入

右者多分之賣掛致し候ニ付、無益之金銀遣捨候者出來候間、以來芝居町吉原町等より、棧敷代又者遊女揚代滯等願出候とも無取上、相對濟可申付旨相伺、評議之上、存寄無之旨申上、其通被仰渡、右之趣御觸有之候、

此儀遊女揚代金之儀者、遊女買揚候もの、其身之不愼より、多分之賣懸等も出來候筋ニ候を相對ニ申付、取上濟方不申付候ハヽ、右江附込、都而惰弱もの之心底增長いたし候樣成行可申哉、其上相對ニ而不行屆、損金而已いたし候樣に而者、自然渡世向衰微いたし、遊女御免の詮も無之候間、右は前々之通取上濟方申付候積、今般御觸廻し有之方可然、且芝居棧敷代等願出候儀者差向無之候得共、是又前書揚代金ニ准じ候儀ニ付、此上右體之類願出候ハヽ、同樣濟方申付候樣可仕哉ニ存奉候、

（諸色調類集十ノ四十六）弘化二年乙巳十二月廿二日

一去ル卯四月九日評議致し申上候通可相心得旨、越前守殿被仰聞候金銀出入裁許改革之儀ニ

但口書取調方之儀ハ、相手方借受候手續、滯金高、證文文段、并何様濟方申付ヲ、受ヲ候而も、申分無之趣等事短ニ認、願人口書ハ、前々之振合を以相手方口書之奥江濟方相願候由計認、尤外ニ子細無之ハ、別段相談演說等にも不及取計可申事、

一金高ニ應じ日限濟方申付方之儀、百両迄之日數ハ夫々家賃金御定之日限一倍を以可申付候得共、百両有餘ハ見合、日限可申付と有之候間、向後割合左之通、

百両以上三百両迄　四百日限　　三百両以上六百両迄　五百日限

六百両以上千両迄　六百五十日限

但千両以上ハ、本文御定書ニ、閏月共十二ヶ月限と有之候間、右一倍之日積を以、凡二ヶ年を限濟方申付、尤格別大金之分ハ、其節評議之上取極可申事、〇中略

之通申合候事

四月〇天保十四年

（御定書百箇條）質地滯米金日限定

一五両以下五石以下　三拾日限　　一五両以上拾両迄五石以上拾石迄　六拾日限

一拾両以上五拾両迄拾石以上五拾石迄　百日限　　一五拾両以上百両迄五拾石以上百石迄　二百五拾日限

一百両以上百石以上　閏月とも十ヶ月限　　一貳百両以上貳百石以上　閏月とも十三ヶ月限

從前々之例

右日限に准じ濟方申付、相滯候ハヾ、地所金主江爲相渡可申候、尤其人之身上ニ應じ取計可申候事、

（諸色調類集十ノ四十六）弘化二年乙巳十二月廿二日

謀實女御仕置并借金銀出入取捌方、其外之儀ニ付、御書取之趣評議仕候趣申上候書付〇中略

但呼出候節致不參候歟、又ハ濟方申付候而も、不埒之聢有之ハ、武士方ハ御老中江申達、寺社在町方ハ急度咎可申付、且又不埒之貸方之類ハ遂吟味、其品ニより金主之者可相咎事、

一地代金　　三十日限濟方可申

一（從前々之例）店賃金　　右同斷

右二ケ條、日限ニ不相濟候ハヽ、切金ニ爲差出、其上濟方不埒ニ候ハヽ、身體限ニ可申付候、

一（從前々之例）連判證文有之、諸請負德用割合請取候定、

一同　芝居木戸錢　　仲ヶ間事ニ付無取上

一同　無盡金

（寛保元年極）但證文慥ニ有之候共、仲ヶ間事ニ相決候付而ハ、一向取上申間敷事、

一（從前々之例）日寄附込帳ニ記候借金、印形無之分、　　無取上

一同　宛所無之年號無之證文　　右同斷

一同　證文之末ニ利足定書載有之、其所ニ印形無之、利足、　　右同斷

一同　家賃金質地金幷諸借金宛所違之證文を以於訴出候者、　　右同斷

但證文讓請候由申候共、證據於無之ニハ取上申間敷事、

一（寛保元年極）家賃

一同　諸借金　　利足　　一割半以上之分ハ一割半ニ可直

〔德川禁令考後聚十五行刑條例〕借金銀出入取捌方改革之儀、今般御書付を以被仰渡候ニ付向後評定所公事取扱方申合書、

一差日當日、公事合承り、訴答申口符合いたし候分ハ、口書取調、出來次第重而金公事日之帳外又ハ其後にても、雙方評定所江呼出、金高ニ應じ、家賃金一倍之日限ニ而濟方可申付事、

人は勿論、町役迄も不埒之事ニ候間、此以後右體之義在之候ハヽ相糺、當人町役之者迄も、咎をも可申附候間、右之趣得と相辨、無油斷濟方可致候、手錠預差免候ニ付、諸借金銀返濟無之候而も、濟方不申付、棄捐ニ相成候抔と浮說申觸候族も在之候よし、甚以如何之事ニ候、濟方不埒之分は、前書之通、嚴敷濟方可申付候間、貸方之者は不危踏、潤澤ニ貸出し可申候、畢竟金銀之義は、通用第一之義ニ候處、火災ニ付返濟等閑ニ相成、早々浮說在之候得ば、貸附方は危踏不貸出、此以後借入等却而難儀難澀等相增候道理ニ候、勿論貸方之者も、金銀貸出し不申候而は、通用不自由ニ相成候間、以後貸方之者も可成丈安利を以無危踏貸出し、借方之ものは、隨分相觸不實不致、限月返濟無相違樣ニ致候得ば、手支之節、相應之借入も可致出來候間、右之趣相心得、金銀通用廣く相成り、一統手支無之樣可心掛候、無跡形義共、品々浮說も在之趣ニ付、貸方之者、借り方共心得違無之樣、右之趣相觸候間、洛中洛外裏借家ニ至迄、不洩樣可相觸者也、

天明八年申六月

〔公事取扱〕借金家賃出入〇中略

一證文有之といへども、借金ニ候哉、代金〇賣買代金調商業上ニ候哉、相決ざるに於ては、半金爲濟之、

〔德川禁令考後聚十五行刑條例〕借金銀取捌之事

一借金銀　一祠堂金　一官金　一書入金　一立替金　一先納金　一職人手間賃金

一手附金　一持參金　一賣掛金　一仕人金　一諸道具預ヶ證文ニ而金子借り候類

一諸物賣渡證文ニ而金子借候類　一御家人又者御用達町人等、拜領屋敷地代店賃を書入金子借り候類、

延享三年極
右之分、延享元子年以來之滯ハ、每月四日廿一日呼出、三十日限濟方可申付、右日限之節、少々も相濟候ハヽ、一ヶ月兩度宛切金ニ爲差出、其上ニ而濟方不埒ニ候ハヽ、身體限可申付事、

慶長二丁酉年三月朔日　元親

〔地方大意〕拜借金銀等請取手形ニ被申渡、御老中加判可有之書付

總而拜借金銀之儀、請取手形御勘定所ニ而裏書認、御勘定奉行裏印ニ、御老中加印之儀、只今迄御老中月番之加判之時も有之、又被申渡候御老中加判之時も有之、不同ニ付、相談之上、向後者月番ニ無構被申渡候御老中加判有之筈ニ候間、末々迄此通心得可申旨、大久保加賀守被申渡候事、

子三月

拜借金引替手形之儀ニ付覺書付

御金藏江拜借上納皆濟之節、引替之手形、其向々ゟ御勘定所江手形差出、御老中若年寄判形消候樣可仕旨、水野和泉守江申聞候、

辰十二月

〇前文云、此辰年恐享保九年也、

〔國制記四〕手錠町預ヶ御免之事

諸借金銀返濟滯、手錠町預ヶ申附置分

當春大火後類燒之者共者勿論、類燒不致者共も、當分は迚ら返濟之手段在之間敷、手鎖預等ニ而も、稼も不相成候義ニ付、格別之譯を以、當分之處、手錠預等を差免置候、其後濟方候者も在之候得共、日數相滿候而も、今以返濟相滯もの多在之候得ば、右之者共、此節以前之通可申付筈ニ候得共、左ニ而は彌困窮相增、當時日々働も不相成、町內ニ而も、番人等付置候も難儀之事ニ候間、先當分其儘ニ差置、濟方第一可致勘辨旨、利害申聞候趣、町方よりも不致忘却、隨分世話致、銀主江も不絕及應對、濟方可爲致候、尤其上不埒ニ差置、貸附方之者より追訴申出候得ば、追々前々之答をも可申付、且又以後金銀返濟不埒之者在之、及出訴ニ候節ハ、類燒後之取引は勿論、其以前之分共、定法之通、急度濟方可申付候、是迄は、日限濟方申付候而も、日延ニも不能出、等閑ニ致置候者も在之、當

對修學院地下人等幷方々秘計米錢都合廿九貫九百文(目錄在別紙)事、去天文十五年德政之砌除申請御請御下知處、殘人數約諸之子細雖在之、于今令無沙汰之云々、所詮、十分一進納上者、本利共以可加催促之由所被仰下也、仍執達如件、

天文十九年九月十六日　播部助

左衞門

伊之

大森新四郎殿

〔今川記 五〕かな目錄

一借錢の事、一ばいになりて後、二ヶ年之間は、錢主相待べし、及六ヶ年不返辨ば、當奉行幷領主にことわり、可及譴責也、米錢其利分の事は、契約次第たるべし、

大永六丙戌年四月十四日　紹僖在印判

〔信玄家法 上〕一負物之分、定年期渡田畠人者、書加土貢分量欲令沽却者、買人幷其地頭主人へ可相屆、無其儀上、或者依折檻主人收放之、或者有子細地頭改之時、縱買人雖帶負物人之借狀、不能信用事、

一米錢借用之事、至一倍者、頻可加催促、此上猶令難澁者、可有過怠、自然地下人等借錢之處、輕下輩負物人令沙汰、可披露、是又右同前之事、

〔長曾我部元親式目〕掟

侍共簡略申付候樣之事、過分之借銀にて、奉公役不勤者には、知行高百石に、何程と借可申、乍去二三年之簡略にて不成者、可遂上聞、其者知行物成米養育人奉公之品、彼是見合を以、年數无利。に可申付事、如何程借銀有之候ても、品により可令赦免事、○中略

不經訴訟過十箇年者、任式目不及沙汰、

一諸人所領百姓等負物事 弘安八四十六

或領主或代官、非加署狀者、不可及尋沙汰之由、去年雖被仰下之、自今以後者可被止此儀也、

〔新御式目〕一負物事

明年到西收可閣之

糺明寬元之例之分、付下地否可有御沙汰、

〔建武以來追加〕一諸人借物事 永享八五廿五

所用之時令借用之間、借與者芳志隨一也、爰雖致催促、不能返辨之是非、而經年月之條、云不知恩、云無理、旁以背正儀者也、所詮自被定置永享八五廿五已後、雖及催促三ヶ度日限百五十日於不能承引者、於政所可訴申之、若糺決之間不致其沙汰者、本利相當返辨之外、爲過怠分相副彼拾分一可被責渡之、但錢主與借主相談之、以利平連々致其償者、非制之限、錢主又相待過怠之御成敗、寄事於左右不叙用、少分辨償者、雖被定置不可依御法焉、

一負物年紀事 永享九十十三

就先度被定置、經數十ヶ年、以古借書令催促借主子孫之條、無盡期歟之上者、廿ヶ年未滿借書者、以前任被定置法、假令十ヶ年者一倍、廿ヶ年者三倍、嚴密可致沙汰、於其以後非制之限矣、

一借物年紀事 永享十二十廿六

借主等相待十ヶ年、令無沙汰之間爲其誠、彼年紀以後以三倍可返辨之旨、先度雖被仰出、於利平者、不過廿一ヶ年者、可爲一倍、但被如此定置者、借主等亦寄緈於左右可令難澀歟、所詮至其類者、屬政所致訴訟、若猶有停滯之儀者、以庭中可言上矣、

〔親俊日記〕頭人御加判

ハ通例借金とは譯違ひ、既ニ寺院之賣渡證文停止之上ハ、向後金高ニ應じ日限申付、於相滯ハ書入之品々可相渡事、

〔德川禁令考後聚十八行利條例〕寛保元酉年七月町奉行所より書抜來候例書付之內

家藏賣渡證文ニ而金子借り候例

享保十年巳六月四日

本郷竹町權左衛門女房くめと丸山田町市郎兵衛家質金出入

一右遂吟味處、下谷七軒町先小兵衛後家幷養子、當小兵衛申候ハ、右金子先小兵衛より市郎兵衛方江貸候と申遺言も無之、尤書付等も無御座候、右金子之儀曾而不存候、右家屋敷之儀ニ付申分無御座候、

一市郎兵衛家屋敷讓證文幷家守證文とも、軍右衛門悴權十郎致所持、軍右衛門借置候金子ニ無紛相聞間、右元金幷宿賃滯、七十日切ニ可濟旨證文申付、

一右元金之內、先達而相濟候分と、宿賃滯幷請取之增減之儀ハ、雙方名主立合致勘定、先小兵衛請取ニ印形有之分ハ勘定相立、印形無之分ハ是又日切申付、

一同年巳八月廿五日相濟ニ付、元利都合七拾兩三分拾四匁五分之代りに、右市郎兵衛家質之家屋敷急度可相渡旨證文申付ル、

〔新編追加政所〕一借物幷預物事、雖准負物、仍可有其沙汰、〇中略

一諸人所領百姓負物事弘安七五廿七評

就訴人之申狀被懸負人在所之間、有難澀輩之時、不知子細之領主、致非分之辨歟、於自今以後者、或領主或代官、非加署狀者、不及尋沙汰、

一雜人利錢負物事弘安七八十七

不埒證文之事

一不埒之質地ハ、地所取上證文ニ加印致し候村役人等も相應之咎申付候由、右者如何之質地を右之通申付候儀ニ御座候哉、

右者頬納之質地、幷永代賣此兩樣ハ地所取上、質地證文加印之村役人五人組等も相應之咎申付、且半頬納之不埒證文ハ、地所取上候筋には無之、借金ニ准じ可取計事、

半頬納以下不埒證文之質地之事

一半頬納以下不埒證文之質地、借金ニ准じ取計方ハ、質地之金を三十日限にも濟方申付、右日限ニ不濟候ハヽ、切金申付候儀も有之候哉、

右ハ質地金を借金ニ准じ、直ニ濟方申付候筋ハ無之、地面ハ地主方ヱ爲返、質地證文ハ取上、質地金ハ借金證文ニ爲直可申候、其上ニ而貸金證文を以、金主訴出候ハヽ、通例借金出入之通可取計事、

〔公事取扱〕借金家賃出入〇中略

一通例之借金を、奉公人請狀に認給金と申立といへども、實ハ奉公人も無之不埒ニ付、訴訟不取上、不埒之證文爲致不屆ニ付、爲過料借金取上之、

〔德川禁令考後聚十四行刑條例〕元文四未年三月二十一日

以賣渡證借金

賣渡證文
家守小作
名田小作　等之儀ニ付一座申合書付

申合

家藏賣渡證文ニ而金子借り候類之出所

一質屋敷之外、建家諸道具等賣渡之證文にて、金子借請候類、前々ハ切金ニ申付候得共、右之類

不埒證文

〔德川禁令考後聚十四刑律條例〕年號闕○中略

一取拵候質地證文ニ候ハヾ、取用不申取戻闕所ニ仕候筋ニ候哉、

下ケ札

御書面不埒之證文ニ候ハヾ、質地ニハ難立地所書入證文ニ付、借金ニ准じ候取計ニ可致事ニ而、容易ニ闕所ニ可申付筋ニハ無之候、荒増ハ前付札之趣ニハ候得共、質地ニハ品々定法有之、證文等も得と一覽不致候而ハ、兼而難及治定之挨拶、及出入等候而ハ、其始末ニ寄、申付方も有之儀ニ付、其事ニ臨ミ委細之始末不承候而ハ難取極存候、以上、

申三月　美濃部十右衛門

〔德川禁令考後聚十四刑律條例〕天明元丑年三月

質地作德出入之儀ニ付相談書

桑原伊豫守
山村信濃守

御相談書

質地作德出入訴出候節、吟味之上質地證文ニ字位高反別等認無之證文ハ、勿論水帳と不引合證文ニ加印致し候名主ハ、過料可申付御定ニ候處、作德計濟方相願候節、小作證文糺之上、位反別等水帳ニ不引合、又ハ位反別等認無之分ハ、加印之名主咎申付候も有之、又ハ不咎も有之、區々ニ付、以來作德計相願候節も、質地元證文小作證文共相糺、字位反別水帳ニ不引合、或ハ認無之分共、加判之名主、御定之通、過料之上、作德滯ハ借金之利足ニ准じ濟方申付、質地元金ハ濟方之不及沙汰候得共、右體不埒證文ニ付、相對之上證文可仕直旨可申渡と存候、依之及御相談候、以上、

右丑三月四日、一座評議極、

天明二寅年三月

質地出入取捌方公事方吟味役江坂孫三郎江問合并挨拶○中略

と有之候間、死罪ニも可相成候得共、此もの儀者、催促いたし候手段可相成と、借方之もの任申證文受取置候儀ニ而、右證文之趣、頭支配抔奥印可有之品にも無之、不束之書面ニ而、勿論此者より好候而取置候儀ニハ無之間、一體之趣意、右御定よりハ品輕キ方ニ可有御座、僞之儀と存じながら、右證文を取候趣意ハ、謀書と乍存、頼ニまかせ認遣し候もの、重追放御定ニも似寄候間、右をも見合候處、右よりハ趣意不宜、延享四卯年、馬場讃岐守町奉行之節、伺之上申付候、永富町二丁目八兵衛店浪人横田次郎右衛門儀、所々武家方江金子貸附候內、拾兩用立候處ハ、證文之面拾五兩一步と有之候得共、利○○禮金と名附、貳兩引取、八兩相渡、六十日限ニ證文書替、其度々貳兩宛受取、又ハ元金一倍之證文或ハ白紙ニ印形取置候段、返金滯候ハヽ、過分之金子書入可申巧、且又頭支配勤筋ニも相障候文書之證文も有之、不憚公儀、重々不屆至極ニ付、遠島申付候例も御座候間遠島、

〔德川禁令考後聚十八行刑條例〕文化十二亥年御渡

大坂町奉行伺

攝州廳合村常次郎取拵之證文を以出訴いたし候一件

重田又兵衛御代官所攝州住吉郡廳合村

常次郎

右之もの儀、彌助喜右衛門申ニ同意いたし、宛所并借主名前も無之、印形計押有之銀子借用證文を、藤兵衛并藤吉先代判太助實印之由承候迄ニ而、素々紛敷證文と乍相辨、銀子取立候ハヽ可致配分との欲心ニ迷、無跡形も銀主之姿ニ相成、此もの宛名爲書入致出訴、對決之上、糺受候節も、元銀主名前等迄申僞候段巧成仕方、其儀可相顯儀を可遁ため、掛與力江金子致持參、取扱宜敷候旨申置候段、賄賂ニ相當、重々不恐公儀仕方、不屆至極ニ御座候得共、右巧之儀ハ、吟味之上相顯不遂事を、賄賂之金子も不致受納、差戾候儀ニ付重追放、

貸地元金拾五兩貳分幷 過料錢拾貫文　權兵衛
同七兩貳分幷 過料錢拾貫文　伊右衛門

右之通、念譽方より借り候金子相返、其上ニ而過料錢書面之通可差出旨申渡、

過料錢拾貫文　名主 三郎兵衛

同斷　念譽

右之通可差出旨申渡

僞證文

〔德川禁令考後聚四十寬政刑典〕僞證文之事

一金銀借用之證文及露顯候而ハ、難立筋、又者支配頭或ハ顯候而申分難立者之名を僞、文言之內江書入、金銀を借候者死罪、

但右之趣乍存於貸ハ、貸候者モ同罪

取拵證文

〔德川禁令考後聚十九行刑條例〕享和三亥年十一月

戶田采女正殿御差圖　根岸肥前守掛

實印無之と乍心付、金子貸渡之一件、

麹町龍眼寺門前春三郎店 忠兵衛

右之もの儀、呉服代物、又ハ衣類反物取交質入致し候を、相對致し置、武家方江損料貸致し、滯之節催促致し候手段ニも可相成と、借り方之もの任申、實印ニハ無之儀と乍存、不輕取拵之證文取置候段、不屆ニ付遠島、

右御仕置付

右御定書ニ、金銀借用之證文、及露顯候而ハ、難立筋、又ハ支配頭或ハ顯候而ハ申分難相立ものゝ名を僞り、文言之內江書入、金銀借り候もの死罪、但右之趣乍存貸候ニおゐてハ、貸候ものも同罪

たり、是又永代賣同然嚴敷御制禁也、ケ樣之證文大方名主組頭加印は不致義ゆへ、訴出る共無取上ニ而相濟事なれ共、其村之田畑質入直段相應も有之儀ニ付、不相應の金高ならば遂吟味、彌御法度之倍金に決すれば、出入濟方之不及沙汰、雙方共重き科料申付ル、賣主買主共過料員數は例に不拘、身代に應じ重ク申付ル、若名主加判有之か證文印形等有之ば、證文名主共過料申付る也、

但其國に寄、譯合を不存、右類之取遣り有り、既に奧州伊達信夫郡邊は、多分倍金手形ニ而質地を致取遣候義、古來ゟ仕來り候樣に成、御定法通に取計ては郡中の障に成り、不相治候ニ付、取計方其筋江内々伺たる處、遠國邊鄙法も不存國柄、若質地及出入たる時は致差略、倍金の姿にても倍金と顯さず、證文認方等外に不行屆義有之ば、其所を以地所不引渡樣吟味詰、外之障に不成樣取計可然哉之旨、挨拶有之候事、

〔名主五人組心得書〕一質地差入、金子拾兩借請、證文には貳拾兩借請候趣したゝめ候を、倍。金。と唱へ、けつして致間敷よしの事、

〔德川禁令考後聚十八行刑條例〕享保五子年觸書

質田畑倍金手形停止之事

一田畑質入候節、倍金手形ニ而取やり仕候も有之由、倍金手形爲仕間敷旨、御代官江相觸候事、〇中略

享保五年子九月二日

一下總國布佐淺間前念書と、相馬郡羽中村權兵衞外一人質地金出入、

念書方江田畑質地ニ書入、金子借り候處、倍金を以可令返辨之旨約諾いたし候上、出入および、地頭方ニ而一應遂吟味、猶又於評定所一座詮議有之候處、雙方不埒之出入ニ付、窺之上左之通申渡、

右ハ評定所一座ニ而評議極ル
〔德川禁令考後聚十五行刑條例〕卯〇天保十四年五月廿五日

金銀出入裁許改革之儀取調申上候書付〇中略

一家質金質地金諸借財宛所違之證文

右御定書ニ無取上、但證文讓受候由申候共、證據無之者取上申間敷事と有之候處、古證文帳面等買求、讓受之積相對いたし願出候紛敷出入數多有之、吟味之上不及濟方候得共、在方之もの共ハ、出府入用相掛難儀いたし候間、內濟致し候を見込、古證文帳面讓受候類相聞候ニ付、親子兄弟之外讓渡不相成旨、天明八申年五月、評定所一座申合、右之趣申上候以來、親子兄弟之外、證文取用不申候間、是迄之通取捌可申、座頭官金弟子讓之儀ハ、是迄取上來候得共、取計兩端ニ涉候間、以來ハ官金之儀も右同樣取捌可申候、

倍金幷白紙手形

〔御定書百箇條〕倍金幷白紙手形ニ而金銀貸借致候者御仕置之事

一倍金幷白紙手形ニ而、質地借金等ニ取やり仕候者、不埒ニ付、濟方之不及沙汰、雙方幷證人共過料可申付事、

但金主借主過料員數之儀ハ、例ニ不拘、身上ニ應、重く可申付事、

〇按ズルニ、白紙手形ノ事ハ、法律部訴訟文書ニ詳ナリ、

〔地方凡例錄四〕一倍金質地之事

田地永代賣御停止ニ付、內々倍金質と名付、譬ば拾兩相當の田畑、金主相談の上、質地證文には質金貳拾兩共三拾兩共直段を上ゲ、一倍又は二增倍ニも認め、手取は拾兩取之田地を金主江相渡し、年季明ケても難請返樣に致し、若出入等に成たる時、質地と見ゆる樣に、賣主買主相談にて、謀計を以永代に賣渡義內々有之由、是は買主の方ゟ重に望、倍金手形候ハヾ、可買取旨申事と見へ

違式證文

平書加本錢、恣錢主等改借狀云々、敢非正義、所詮迄一倍勘定棄破彼狀可被返付質劵地以下於本主、向後有背制止之族者、可被處罪科、次借物方事、不帶政所之賦、猥及訴訟條、太不可然、自今以後儀被停止之上者、奉行人各可令存知焉、

〔政所賦銘引付三〕一清式大藤民部中務少輔政盛　文明十一八廿二

方々借錢事、就錢主讒責遣作替借書之間、令倍々任御法旨、可預一倍返辨之御下知云々、

〔名主五人組心得書〕一名主加判なき質地證文は不宜由、尤名主の質地證文江者、相名主加判いたすべし、相名主なくば年寄か、又は願の上役入いたし候組頭の内にて加判可致事、

一名主なき村方の質地證文江者、年寄か、役入いたし候組頭の内加判いたすべし、尤年寄組頭の質地證文江者、相役のもの加判いたすべき事、

〔例書一〕一名主加印無之者無取上、名主證文判ニ而も加印有之分者可取上、尤名主借主ニ而、相名主加印無之者無取上候事、永代賣渡頼納ニ准ジ候、勿論文言惡敷、本證取上無之分者、其小作も不取上、

〔德川禁令考後聚十六行刑條例〕天明六午年五月廿一日

貸金銀井利足濟方之儀ニ付相談書

一日寄附込帳ニ配置候借金印形無之分

一宛所無之年號無之證文

一證文末ニ利足定書載有之、其所ニ印形無之利足、

右三ヶ條難分證文之儀、前々より取上無之、右ニ准じ證文ニ元利と相認、員數之極無之分も利足之濟方ハ不申付候、併三ヶ條とも相手方借受候段無相違相濟可申旨相答、利足も同樣申聞致符合候ハヾ濟方申付候事、

作替證文

すはらず、びんぼうゆるぎしている所へ、松原通りの紙子屋、身上つぶれ、負せ方三十七人寄合するについて、此米屋惣太郎も、米代壹貫三百五拾匁あれば、賣掛の頭とて、仲間より回文まいる、扨こそ損の口があいた、此弱みからつけ込で、今に貧乏の花さかせんと、肩をいきらし、左前のすそをからげ、すまたをふんで悦びける、中間立合吟味するに、ねはまもなければ、家財に六貫目の古。手。形。をそへて取、賣立て見るに、やう〱三分半にまはれば、いづれもかんにんしてすまし、古手形はとても埒のあかぬ物、反。古。同。前。な。れ。ば。、もみくさにして紙子屋へやるべきといふを、はした錢賣小兩替屋、此中間にて手形の文段を見て、是は慥に銀(かね)になれば、我にまかせたまへ、見事に銀にしてみせんと、彼手形を懷中し、預りし主の方へ行、町所へ付屆し其上に、表向へも出べきと、むづかしうかゝりければ、借り手は歷々の牢人、親類の取持にて、近日御奉公に出らるゝ、心ごしらへの最中、若おもてだちては、立身の障りと、町中をたのみ、六貫目を貳貫五百目にて色々噯れければ、中間には拾ひ物と悦び、貳貫五百匁取てすまし、拾物にした銀を、兩替屋どのゝ大なる御働き、かたじけないと、中間寄合割付て取らんとするを、頭分の人申けるは、死だものが蘇生(いきかへる)事はあらふが、此古手形が銀にならふとはぞんぜなんだ、しかればまんざら拾ひものといふもの、此内五百目すくなう取たればとて、さのみの事もござるまい、何といづれも貳貫目はわつて取、五百目はのけて、置て中間の氣ばらしに申合して、東山へ參るまいかといへば、一座尤と同じ、日をさだめて圓山にての參會、晝から酒にてけふのたのしみ、千金にもかへぬと、ずいぶん奢てからが、世智なる者共が指圖なれば、どふしても百二三十目銀があまると申を、迚も中間の慰につかひすてるの合點なれば、三味線ひいて歌うたふ、

〔政所壁書〕一作替借書事　文正元五廿六

於二借錢一者不レ可レ過二一倍一之段、雖レ爲二先例一、近年依レ爲二有名無實一、去永享年中、重堅被二定置一訖、然號二作替一以二利

〔京都上京文書二〕定

上京〇中略

一借錢方之事、證文之外、ことばの契約を以、かりかす事不可仕、幷號預狀利足之員數書のせざる證文者、利辨不可有之事、〇中略

天正廿年五月十二日　玄以判

〔續視聽草二集六〕往古銀借付證文の事

借り受申銀子之事

一銀百五拾目也

右之銀慥預り申候、萬一此銀子返濟致し不申事御座候はゞ、人中において御笑ひ被成候共、其節一言の申分無之候、依如件、

萬治三年子五月　さのや喜兵衛

はりまや嘉兵衛殿

〔甲子夜話五十一〕或人曰、先年長崎ニテ老人反古ノ中ニテ見タルトテ、昔ノ金銀借用ノ證文ヲ語ヌ、其前ノ文ハ今ト異ナルコトナカリシガ、終ニ此金返辨方於相滯者、面目失可申候ト有リ、カク認タル上ハ、借テ約定違フコトナク互ニ貸借セシコトナリ、然ルニ當時ハ證據正シク書並ベタルニ、證人與判ナド數人連署シタル證文モイツシカソノ證ナク、信義ナキ振廻アリテモ、聊カ恥ル心無シ、コノ薄俗ノ世風ヲ見テモ、昔ノ質實ナルハ、古證札ノ文言ニテモ知ルベシ、人情ノ轉遷慨歎ニ堪ズトナン、件ノ古證文ノ年號ハ元祿トアリシト覺ユト、

〔商人軍配記一〕揚屋へばかり出す米屋の仕果

是は福神の重手代が、我を一はいはめしか、但し所を聞まがへて、福力のつよい家に來るかと、尻

如件、

享徳貳年癸酉十月十二日　とり主香取佐原之住人案主

用々あるによつて借用錢の狀の事

合本錢四百文者

右件の料足は、百文べちに、卅日を一ヶ月として、六文づゝのかんがへをいたし、當年中に本子共さたいたすべく候、もし一錢もぶさた候はゞ、ふみのみには屋敷内のさう田のほつくどもを、かの料足にあいあたり候はんほど、くら本に知行候はんに、まつたくいぎ一言もあるまじく候、仍爲後日狀如件、

文明二年かのへ四月十二日　大瀬宜胤房花押

いどにはいや次郎所

〔政所賦銘引付三〕一星野（布野）宮内少輔政茂　文明十三十十七

武者小路室町と烏丸間南頰屋地事、借錢八貫文ニ、文明十二五ヨリ、同九月迄加六文子利平都合十貫四百文也、就錢主酒屋中島所望借書ヲ如賣劵調遣候段勿論也、非沽劵歟否可預御糺明云々、

〔政所賦銘引付四〕一正（誠信）善都寺　文明十四十一十二

西院内兩名幷佃等事、寛正年中、公方樣春日御社參候時内原借錢之賣劵被入候間、秘計候處、混候人等給分之地、沽却棄破之儀、爲一條院殿可被棄捐云々、於借錢之地者不可混沽却之上者、任借書之旨、本利相當之間可知行之由、可預御下知云々、

〔親俊日記〕天文十一年九月十七日甲子、一同攝州富田森二郎左衛門借錢事、彼母儀、號私財及催促云々、森二郎左衛門定借書宛所可在之候、口狀迄申事不足信用、如此申候了、

げかけて、みなもさた候はざらんをば、あげぬとしになされ候べし、しむけんを入をき候うへは、ゆめ〳〵しさいあるまじく候、もしこの庄こうしにつけて、おもひのほかなるいらんもいできて候ハヾ、いちばひ百貫文をさたしかへし候べく、げたいし候ハヾ、いかなるさたをいたされ候とも、さらにしさいを申まじく候、よてのちのため、せうもんの狀如件、

德治三年〇延慶元年二月十日

千代松丸在判
廣康在判
妙圓在判

〔香取神宮古文書纂十一〕申うくるしゆつご〇出擧の狀

もちもみ一斗、ちや、ろつきん給候、若無沙汰候はゞ、いやしきは、かきのきをきつて、西うしろのいやしき、三ばうの山そへ候て、又きつねづかのまご三郎つくりのはたけを、くらもとに御いれおき申候、無沙汰候はゞ、ばい〳〵をかんがゑて、めされ可候、たといてんかの御とくせいきたり候とも、かの狀をさきとして、めされ可候、仍爲後日狀如件、

應永卅一年きのへたつ八月十六日　下總國香取郡佐原安主吉房花押

御くらもと大しんどのへ

〔香取神宮古文書纂十二〕申うくる德せいにの狀の事

合本錢二百文者

右件の御れうそくは、一ヶ月七文づゝのこせんおかんがゑ申候て、七ヶ月と申さば、もとこととも に上申べく候、若無沙汰候はゞ、しちけには、けいやくぼとけのひこ五郎作の畠一反を御藏本に入おき申事實正なり、此の上も無さた候はゞ、案主内の田畠を、その分程ゑいたいにめされべく候、其所の持等〇地頭萬所〇政所しんるい、きやうてい、ましてたにん、いらん申まじく候、仍爲後日狀

以巨多要脚令借用之輩寄事於窮困最少分令辨償之可被借書之旨及强談云云結構之趣罪科惟重堅被制禁者也、諸人同前、

〔沙汰未練書〕一利錢以下負物證文等ニ、無沙汰左右、精文詞不可書之樣、公家武家不可及執沙汰者、但可依文章也、

〔信玄家法 上〕一借錢法度之事

無沙汰人之田地、自諸方相押之事、以先札可用之、但借狀至無紛者、其方へ可落著之事、

〔五人組帳〕一諸事并借物仕候者、自分之手廻商人、又者武士方出家ニ不限、方々江貸置候手形ニ并借金、或者上納金之由書入之候、右之通文言書入申間敷候、若上納并借金之由書入、脇より取置候手形有之候ハヾ、曲事ニ可被仰付旨奉畏候事、○中略

天保七申年

○按ズルニ、右ハ代官山本大膳ノ定ムル所ナリ、

〔古文零聚 一〕かりうくる日よし上分のようとうの事

合伍拾貫文

右くだんのようとうは、月ごとに一貫文づヽに參拾文のり分をくわヘて、げたいなくわきまへ候べし、たヾしえち物には、やましろのくにかつらのかみのしやうのてつぎせうもん、ゐんせんとうをあげ候べし、もしり分一ねん中を計たして、しわすにあげ候べし、もしり分をあげ候はずば、一ばいすぎ候はヾ、せうもんにまかせて、この庄を一ゑんにながくしらせられ候べし、りぶんをとしごとにあげ候はヾ、五かねんまでは御まち候へ、たとひり分をげたいなくあげて候とも、五かねんまでもとをかへしまいらせ候はずば、ながくこの庄をとられまいらせ候べく、もしりぶんをあぐるとしあげぬとし候ハヾ、四かねんにこの庄をえらせ候へ、もし一ねんのり分をあ

借用證文

在町共濟方厳敷可ニ申付一候上ハ、貸方不實之類、高利金、且又貸金內渡致候而も受取書も不レ遣、及ニ出訴一候節、本金ニ而相懸候類者、遂ニ吟味一其品ニ寄、金主之もの可ニ相咎一候、

一近年家藏諸道具賣渡證文を以、金銀貸出し候族多有之候由、家質とハ違ひ名主加印も無レ之、畢竟書入金之儀ニ候間、貸金銀同様之裁許ニ可ニ申付一候、

但船床、結髮床賣渡ハ、格別之事、

右之趣、町中可ニ觸知一もの也、

三月

〔京都上京文書〕〔二〕定　上京

一家屋敷一所持候者、二所へ書入、借錢借米不レ可レ仕事、○中略

天正廿年五月十二日　玄以判

〔德川禁令考後聚〕〔十八刑條例〕延享元子年六月、大岡越前守○中略伺之內、○中略

同〔○御定書百箇條〕二ケ條目

一田畑家屋敷幷建家等二重ニ書入候もの　書入主　輕キ追放
　證人　過料

此書入と有之ハ、いまだ其物ハ不ニ相渡一證文に書入候計りニ而候哉、又かれども金子ハ請取候と相見へ候、彌其通之事ニ候ハヾ、罪科輕重兩様ニ無レ之、何レ江成とも同様ニ極メ可レ然哉、○中略

〔建武以來追加〕一諸人借書事

無理之輩、誘ニ取他人之借書一、令ニ譴ニ責負人一之條、非レ無ニ其煩一、早爲ニ政所方沙汰一可レ被レ加ニ炳誡一歟、

一借錢事

〔德川禁令考後聚十六 行刑條例〕寛政六寅年八月四日

書入金出入相手方欠落いたし、妻子江日限證文書替之儀願出候評議之事、

御相談書

池田筑後守

願人　伊勢町喜右衛門店　清八

相手　曾我安十郎御代官所　下總國葛飾郡八幡町　百姓　藤七

一書入金出入

右藤七儀、欠落いたし候ニ付、過料之上、永尋申付候間、去月廿五日及演説候、然ル處願人清八願出候ハ、藤七儀致欠落候處、外々借用金有之、貸方之もの江、右藤七妻子より濟方いたし候ニ付、拙者掛り之分も右之もの共引受、致濟方候樣申付相願候旨願出候得共、欠落もの妻子江日限證文書替等申付候例も無御座、いづれ欠落もの之儀ニ付、書替ハ不申付、日限證文ハ取上爲相納可申と存候、右者訴訟方相手方之無差別、書替願出候共難取上旨申渡候樣可致候哉、以來之取極致し置度、此段及御相談候、

寅八月四日

右寛政六寅年八月四日、一座評議極ル、

〔德川禁令考後聚十八 行刑條例〕延享三年町觸案

伺之通、町觸可申付旨被仰渡奉畏候、

寅三月廿八日

島　長門守

能勢肥後守

一近來金銀貸借不自由ニ付而、種々不實之貸方多、不宜文言等證文ニ書入、又ハ高利ニ貸出し候もの有之由相聞不屆ニ候、此度相改り、前々之通、平日裁許申付、濟方不埒之輩ハ、武士方寺社方

右借用申候所實正也、來秋中ニ五わり半也を以、利足本利共に返辨可申候、もし御國がへ新德政入來候共、其引かけ申間敷候、爲後日證文進候、仍如件、

文祿二年癸巳六月廿日

三枚橋傳馬衆

六斗　太郎左衛門花押

六斗　同所源七郎花押

四斗　同宇右衛門花押

三斗　同喜兵衛

四斗　同二郎左衛門花押

五斗　同六郎右衛門花押

壹石貳斗　同小たくみ三郎黑印

口入　後藤孫七花押

鳥居丹波守家來
伊藤安右衛門

伊右衛門殿參

〔德川禁令考後聚十四行刑條例〕寬政十二申年閏四月

質地年限內家內不殘欠落ニ付取計之事〇中略

右之趣事伺候、以上、

閏四月

御附札〇中略

但書入と申ハ、質地證文ニ無之、借金銀返濟滯候ハヾ、地面可相渡由之證文之事ニ御座候、右ハ質地ニハ難相立、通例之借金銀ハ、借主闕所之仕置相成候得バ、金主損失相成申候、

閏四月

書入

〔大乘院寺社雜事記〕寬正元年二月廿九日、一井殿庄之內正願院負所事、近來烏養次郞令押領之處、彼次郞他界之間、古市申請、去々年仰付之、今度就筒井歎申入之間返付之、但一期後可返進云々、

井殿庄負所米之事、箕田次郞孫壁田次郞三郞之子金滿丸一期之間、爲御恩被仰付候條、畏入存候、自然就餘庄致緩怠子細候者、雖爲何時可被召上候、猶々金滿丸一期之後者、必々可返進旨可有御披露候也、恐々謹言、

長祿四三月廿九日　　　永順判

御奉行所

井殿庄正願院負所米事、金滿丸一期之間、被仰付候由被仰出也、恐々謹言、

三月廿九日　　　　　　　　敎承

筒井殿

〔多聞院日記〕天正十一年癸未三月廿三日、借米之事從十後被申上了、　廿四日、從十後米之事被申間、蓮成院へ申談了、五十石可有借用、此內廿石、金半枚ニテ今日渡候、十五石現米、以上後方十五石ハ蓮ニテ可借之通申合了、上田左馬丞權丞藤七郞上了、　六月十七日、於蓮成院米十石、三升子ニ借用、チマタ畜二郞ニカス、十三石ノ預リ狀ニ申付候、此內五石ハ我等へ取返、則我等ノ米也、二石ハ敎淨へ寺ノ替ヲヒコ二郞ゟ返辨也、夫ヲ又是へ上樣ゟ給通ニ敎ト申合了、シカレバ七石ハ我等ノ米也、本利九石一斗我等ノ米也、ノコリ三石ノ本利合三石九斗、蓮成院ノ米也、十三石ノ預狀ニ蓮ニ可在之、ソレヲ此方へ取テ、蓮へハ我等ノ借書可遣者也、

〔荻生文書〕三枚橋傳馬衆借米證文

借用申米之事

合四石者但京升也

云、如飯酒事、兼日沙汰人所被用意也、

〔新御式目〕條々

一次肥前國沙上社事

如高木伯耆守六家定代申狀者、當國段米被寄附之處、或奉行人借用、或領主米借間、有名無實云々、

仍而借用云未進催嚴納之、急速可令送之、

正嘉三年二月九日

〔吉田文書〕□□筥印陁羅尼利米帳（本書裏書ニ□□利米帳トアリ）

定置　□□筥印陁羅尼利米事

合貳斛壹斗伍升者（十合定）　但利並伍升米也

右子細者、以仰願房施入地直米、令出舉、後年陁羅尼衆供料地田可儲料也、但此米面々ニ預取、副利並可辨進也、此衆中若不慮事出來事有者、爲此衆沙汰付房舍等ニモ付田可請取也、又誰々モ皆可配此利米分可用意也、爲後日證文注進狀如件、

顯眞（花押）　榮實（花押）　慶盛（花押）　弁舜　禪忠（花押）　聖嚴壹斗五升（花押）　幸尊（花押）　增被（花押）

淨快　經實（花押）　實禪（花押）

已上十八人貳斗配、一人ハ一斗五升、

弘長二年壬戌卯月十七日

〔今川記〕五かな目錄

借米の事、わりは、其年一年は、契約のごとくなるべし、

〔長曾我部元親百箇條〕一借米如有様斗可渡、若不足之俵子、其儘於相渡者、可爲曲事事、

〔信玄家法上〕一穀米地負物不可懸之、但作人構虚言者、縱雖經年月可處罪科事、

付候もの共之内も、猶又此度類燒仕、當日夫食ニも差支、且諸御用人等ハ勿論、諸家通行人馬繼立方休泊共差支、宿役難相勤難儀至極仕候間、本陣脇本陣人馬役平旅籠屋のもの共一同、夫食家作料永年賦ニ而拜借被仰付度旨願出候間、吟味仕候處、宿方申立候通り相違無御座候得共、多分之金高ニも有之、且百姓家之分者差當り小屋掛同樣ニ而も差支無之儀ニ而、御儉約御年限中ニ付、可成丈ケ家數相減可相願、夫食之儀も、親類身寄之もの共ゟ爲助合、又者他借いたし取續候樣利解申聞候處、旅籠屋之分ハ、諸家通行旅人休泊等も有之、家作出來不仕候而者、休泊之差支も有之、銘々渡世も難相成樣困窮之もの共ニ而、連々借財相嵩、此上他借融通手段無之、拜借不被仰付候而者、他村親類共方江家内一同退身仕候外、手段無之旨相歎候間、夫食之儀者、再應利解申聞、親類身寄ゟ爲助合候積、家作料之儀者、宿方申立候通、實ニ宿役難相勤、必至と難儀仕候段相違無御座、當時御儉約御年限中ニ而五分相減、百姓家ニ而人馬役相勤候分共取調候處、金高書面之通御座候間、拜借被仰付候樣仕度奉存候、於然者右金貳百三拾八兩貳分永百八拾七文五分、御金藏ゟ請取之相渡、當酉年御金藏御勘定元拂組仕上、返納之儀者、前書割合之通り取立之相納、其年ニ御金藏御勘定元ニ組仕上返納、皆濟之節納札を以、入手形引出候樣、御證文可被下候、依之奉伺候、以上、

文政八酉年六月　古山善吉印

御勘定所

借米

〔吾妻鏡十七〕正治三年〈○建仁元年〉十月六日癸未、江馬太郎殿〈○北條義時〉昨日下著豆州北條給、當所去年依少損亡、去春庶民等粮乏、盡失耕作計之間、捧數十人連署狀、給出擧米五十石、仍返上期爲今年秋之處、去月大風之後、國郡大損亡、不堪飢之族、已以欲餓死、故負累件米之輩、兼怖譴責插逐電思之由令聞及給之間、爲救民愁所被揚鞭也、今日召聚彼數十人負人等、於其眼前被燒弃證文、年雖屬豐稔、不可有糺返沙汰之由直被仰含、賜飯酒幷人別一斗米、各且喜悅、且涕泣退出、皆合手願御子孫繁榮云

候分、領主地頭引受相願候ハヽ、御定之通為引受、裁許可申付旨相伺、評議之上、領主地頭幷家來奥印裏印等無之候而も、多分は領主地頭借ニ候處、右之内ニ者村役人共限之取計ニ而、小前之もの共不相辨分聞々有之、右之類是迄多分利害申聞、内濟致し、逝迄裁許申付候而も、切金ニ爲差出候事故、左して難儀之筋無之候得共、以來都而身代限申付候上者、連印之村役人共一時ニ潰退轉およひ、村用差支候程も難計ニ付、事實得と吟味之上、領主地頭借ニ無紛おゐてハ、假令小前のもの共不相辨候とも、總代呼出、其段爲申聞、矢張村方江割付爲相濟候方ニも可有之哉、右者吟味之始末ニも可寄儀ニ付、其節々厚く評議致し取計候樣ニ仕、其外領主地頭奥印裏印添證文等有之分者、本文之通相心得候積申上、其通被仰渡候、此儀前書之通、諸借金取捌方古復致し候上者、都而御定幷寛政二戌年、一座申合之通取計候樣可仕候、

〔地方帳面伺書類記〕奥州道中鍋掛宿類燒家作料拜借伺書

覺

野州那須郡奥州道中鍋掛宿

村高五百貳拾七石八斗六升五合

總家數七拾七軒之內

燒失家數五拾貳軒
外 問屋場壹所燒失

一金貳百三拾八兩貳分永百八拾七文五分、類燒家作料拜借、〇中略

右者私御代官所野州那須郡鍋掛宿組頭源吾居宅裏灰小屋ゟ、當月三日夜四ッ時頃及出火、暫時ニ隣家れ燃移り候ニ付、村內者勿論近村々之もの共、追々驅付相防候得共、折節南風烈敷、火勢强相成難消留、火元共都合五拾貳軒幷問屋場壹ヶ所燒失仕、其節急火ニ而狼狽仕、家財諸道具等持出し候間合も無之、不殘燒失仕、漸老人子供等手當仕逃去候儀ニ而、元來困窮之宿方、旅人休泊も外宿ゟ者少く助成も薄く、其上貳拾壹ヶ年以前、文化元子年六月中燒失仕、其節家作料拜借被仰

一百姓共鄕印を以金銀借用之證文に、領主地頭幷家來之奥書裏印又ハ添證文等有ㇾ之類、金主ゟハ證文表之百姓共を相手取、濟方願出候節ハ、先ヅ一座裏判を以、百姓共呼出、一通相糺候上、領主地頭家來をも呼出、糺之上、領主地頭江濟方可ㇾ申付候事、

但本文之通、領主地頭幷家來之奥書裏印添證文等有ㇾ之候ハヽ、縦令領主地頭江引受濟方不ㇾ相願候共、領主地頭江濟方可ㇾ申付事、

右は寛政二戌年二月十一日、一座申合候事、

〔諸色調類集十ノ四十六〕弘化二年乙巳十二月廿二日

隱賣女御仕置幷借金銀出入取捌方其外之儀ニ付、御書取之趣、評議仕候趣申上候書付〇中略

拾六ヶ條目

一鄕印證文を以借候金銀出入

右御定書ニ、百姓を相手取候借金出入者、地頭借ニ相聞候共、地頭裏印幷役人奥印於ㇾ無ㇾ之者、地頭借ニ者不ㇾ相立事奥有ㇾ之候處、吟味之上、實者領主地頭借候由、百姓共申立候類、領主地頭幷家來之奥印裏印添證文等無ㇾ之候とも、右家來相糺、領主地頭借之由申事符合致し、領主地頭可ㇾ引受旨申候ハヽ、領主地頭江濟方申付、領主地頭幷家來奥印裏印添證文等有ㇾ之候ハヽ、縦令引受濟方不ㇾ相願候共、領主地頭江濟方申付候積、寛政二戌年二月、評定所一座申合有ㇾ之、其通取計來候得共、元來金主共者、村方を目當ニ貸附候處、領主地頭引受ニ相成、切金裁許申付候而者、百姓共鄕印を以貸渡候證も無ㇾ之候間、領主地頭幷家來奥印裏印添證文等無ㇾ之候ハヽ、百姓共倶々地頭江引受之儀相願候共御定書之通、都而地頭借ニ者不ㇾ相立、日限濟方申付候上、不ㇾ相濟候得者、連印之村役人手鎖申付、不ㇾ相濟候得者、村高江割付爲ㇾ相渡可ㇾ申、万一村役人共而已の取計に而、小前百姓共不ㇾ相辨ニおゐては、連印之もの江身代限可ㇾ申付候、領主地頭奥印裏印添證文有ㇾ之

金壹兩ニ付六拾目之積り
此銀貳拾貫三百拾貳匁四分七厘八毛
但し壹町ニ金拾貳兩貳歩　永三十八匁五分六厘六毛餘
此銀七百五拾貳匁三分壹り四毛
幾殘り四町分
金拾六兩貳歩　永貳百十八匁八分八毛
但壹町ニ金四兩　永百七十九匁五分貳厘貳毛
此銀貳百五拾匁七分七厘壹毛
右元金一同來酉年より五ヶ年限りニ返上、利足は酉年より同三朱之積りニ而、年々七月十二月兩度ニ可相納旨被仰渡候事、

〔張紙留〕一百姓共、鄕印證文を以、金銀借用致、金主ゟ右連印之もの共を相手取、濟方之儀願出候ハバ、一座連判達、百姓共呼出、吟味之上、實ハ領主又ハ地頭借之由、百姓共申立候類、證文ニ領主地頭幷家來之奥書裏印添、證文等無之候共、領主地頭家來呼出相糺、右家來も、領主地頭借之由申口符合致、領主地頭江濟方之儀可引受旨申候ハヽ、領主地頭江濟方可申付事、

但吟味之上、百姓ハ領主地頭借之由申立、領主地頭家來ハ百姓借之由申爭候ハヽ右家來之申口を取用、百姓を相手取候借金出入、地頭借に相決候共、地頭裏印幷役人奥書無之ニおゐてハ、地頭借ニハ不相立事と有之御定にて、百姓江濟方可申付事、

（朱書）是ハ口寄附込帳ニ記候借金印形無之分ハ、無取上と有之御定ニ候得共、借主も滯罷在候段、無相違旨申口符合致候得バ、濟方申付、申爭候時ハ、右之御定ニ而濟方之儀不及沙汰旨、取捌來候ニ准じ、本文之通申合候事、

ハ、百姓之爲不宜候間、御料私領一統之風水損手當等有之節ハ格別、通例之事ニは不相渡候間、末末百姓甘ク相成候段、享保十八丑年、寛保三亥年被仰渡、夫食之事さへ右之通ニ候處、村方貸附高追々相増候而ハ、如何ニ候、畢竟借受候節ハ、勝手ニ相成候而も、且又御年貢取立等ニも差障可申儀ニ候、以來御料所村々江貸附候儀、容易ニ申付間敷候、

〔牧民金鑑十二〕安永六酉年七月

村方諸拜借金銀入手形之儀、場所替最寄替等之度々、新手形ニ引替來り候處、以來ハ至て年古分、亦は年賦替等之分ハ格別、其外ハ寶暦八寅年以前之通、元手形居置、新手形ニ引替無之積り、元方御金奉行へ申渡候間、其旨被相心得、場所替最寄替等之節は、是迄引替候新手形之振合ニ屆出相認、雙方ゟ元方御金奉行月番江被相屆、尤屆書差出候趣、御殿御勝手方江可被申聞候、

文政八酉年十二月十五日

都而御料所村方江御貸附金貸渡候儀者相止候樣、去ル戌年中、御取箇方掛ニ而取調之上、夫々奉行衆ゟ被仰渡有之候處、其後別段之譯柄等有之、伺之上、御料所村方江貸渡來候分も有之候哉、左候ハヾ、右伺濟之譯、巨細書面いたし、申立勿論、前書被仰渡有之候後貸渡候儀無之候ハヾ、右否、是又書面ニいたし、早々馬喰町御貸附役所江可被申立候、以上、

酉十二月十五日　　中長十郎

〔國制記四〕町々爲御救拜借金之事

一金貳万兩、京都燒失町々江爲御救被仰付候、但し燒殘り町々江者、燒失町々之三分一之割を以、拜借被仰付候

燒失町　町々貳拾七町分

金三百三拾八兩貳歩　永四拾壹匁貳分貳毛餘

但家數合三萬七千八拾七軒
人數四拾壹萬八拾九人
一寛文九酉年京都町中へ拜借被仰付候
米高貳萬拾貳石六斗八升四合貳勺大坂大津御藏米
但家數三万九千貳百貳拾軒　壹軒ニ付四斗九升七合宛
右者、米　直町方困窮ニ付被仰付候、返上之儀者、翌戌亥子三ヶ年ニ致上納候、
一寛文十三巳年、御築地廻り類火之町數百七拾町へ拜借被仰付候、
米高壹万千五百八拾石
但家數三千八百六拾軒　壹軒ニ付三石宛
右返上者、金子ニ而、寅卯辰三ヶ年ニ致上納候、
〔例書五〕一金四千六拾兩
右者元文四未年、川崎平右衞門伺之上、拜借新田場、外村々江、年々年。壹割。之利足ニ而貸附、利金之分者、總百姓江爲取續割渡、年々豐凶ニ隨ひ、雜穀取立置候處、半左衞門御代官所ニ被成、右雜穀多相成候ニ付、右溜穀相拂、元金四千六拾兩ニ差加貸附、右利金之内ニ而、拜借金者拾四年ニ返納相濟、此節者貸附ニ可相成金五千兩程ニ相成、去冬も雜穀六百石溜り有之、此分相拂、夫食ニ貸渡候ニ付、公儀よりの御金者出不申候、右返納金も貸附元江加候積、去秋ゟ追々取立候雜穀も、六七百石ニ相成候ば、是迄之通、拂金致し、貸附元江加可申候、
〔牧民金鑑十二〕安永四未年十二月八日
申渡
公儀御貸附金、幷堂上方、寺社方貸附金、近年別而多相成來候、在々夫食貸ニ而も年々返納滯候而

〔甲子夜話 七〕京師ノ東門跡借財ノ負債ヲ患テ、ソノ檀家ヲ召テ、門主自ラ其償ヲ命ジ、且自ラ祖師ノ遺訓ヲ講ズ、檀家ノ人貨財ヲ入ルヽ、モノ殊ニ饒シ、其金八萬兩ニ過タリ、門主因テ積借ノ費ヲ退ケ、殘貨ハ其家司及奴僕ニ配分シタリト聞ク、ソノ宗門ノ曼淫ハ甚シキモノナリ、

〔蔭凉軒日錄〕永享七年十二月九日、加賀國安國寺新命聖院首座、丹後國雲門寺新命中省首座、攝州廣嚴寺新命永群首座、公文御判各出、寺家奉借公錢千貫、

〔政所賦銘引付 四〕一嵯峨供恩院雜掌 飯與三左 文明十五 七 廿六 臥雲庵

當院借錢事、錢主南明庵本錢貳百五十貫文返濟、

三百六十貫餘 以北嵯峨仙蘭寺年貢、去寛正六年ヨリ文明十四迄十八ヶ年分、

六十八貫文 同所地子錢十八ヶ年分

貳百四十貫文、加州安吉保內心覺加地子分、

以上六百六十八貫餘也過上畢

可被返付質券仙蘭寺之由申之

〔百合叢志 四 文書〕法度 入山家鄉 ○信州飯田領、中略、

一脇々より、鄉中へ之借物、法度ニ申付候上者、地頭之借物云も可爲無用候、自然年貢之未進も、其筋奉行手前にて借用、地頭へ之儀者、皆濟可仕候事、○中略

慶長寅六月八日 秀政朱印 肝煎共 百姓共

〔京都御役所向大概覺書 二〕洛中拜借之事

一寛永十一 戌 閏七月

大猷院樣御上洛、京中町方へ白銀五千貫目被下之、家毎百三拾四匁八分宛拜領仕、

立候共、後住ものゑ濟方可申付候、

一兩本願寺ゑ相掛候金銀出入、文政十亥年四月、評定所一座相談濟之上、武家ニ准じ取扱候得共、右ハ新規之儀ニ付、以前之通、諸寺院同樣取扱可申候、

御附札

書面兩本願寺輪番留守居家來等、自分借ニ無之、借主本願寺之節ハ、輪番家來等相手取候共、平寺同樣、裏書差遣候も不相當ニ有之、其上輪番者交代之ものゝ儀、七日裏書ニ而ハ京都ゑ引合等、彼是差支も可有之哉ニ付、本願寺ゑ掛候金公事ハ、其節之輪番呼出し、訴狀相渡、熟談爲致、不整候得バ、返答書申付、手限吟味之積、先年評定所一座評決有之候由ニ付、其通可被取計候、

一家賃金　一奉公人給金　一引負金　一取逃金　一質地小作取捌

右五ヶ條、御定書ニ委細之取捌有之、嚴法ニ御座候間、是迄之通ニ取捌申可候、

右取調申上候趣、書面之通御座候、尙相洩候儀も御座候ハヾ、追而取調可申上候、以上、

寅十月十〇（天保十三年）　鳥居甲斐守

〔法隆寺伍師年會衙記錄〕寛正五年甲申九月廿日、於講師坊評定云

就寺門借錢返濟寺領分百文宛之段錢可被相懸之由、衆日ニ必定之處に、興福寺ヨリ一國平均之段錢相懸事堅致停止云々、然間來年迄、寺領段錢事モ令延引者也、仍評定如件、

爲借錢之足付上者、來年必無他緣之儀可被相懸者也、

年會五師　重海花押

始末ニ寄、引受之家來、揚屋入等申付候儀、是迄之趣ニ取計候樣可仕候、

一寺院社人、能役者御用達町人江相掛候出入、

右者武家江相掛候金銀出入裁許ニ准じ、切金員數、度々不足ニ持參致候もの共ハ、吟味之上相當之咎可申付候、

但寺院之借金、當人御仕置相成候後、後住相手取濟方相願候節、取計振之儀、寛政三亥年八月、先役共より寺社奉行江及掛合候處、寺印相用候分ハ、後住江濟方申付、自分印之分ハ、證人江濟方申付候先例有之候ニ付、住職中、寺印を以修復入用ニ致候趣、證文ニ有之候ハヽ、寺附之借金ニ付、後住可引受筋之旨、其頃寺社奉行牧野備前守より挨拶有之旨、書留相見申候、然處淨土宗之內增上寺末ニ限、寺附之借財ハ、本山江申立候上、借入候掟之由ニ而、右申立無之金銀出入ハ、假令寺附入用之旨、證文ニ書載有之、寺判を以借受候金子ニ候共、弟子讓ニ無之候而ハ、先住之借財を後住江引受濟方いたし候儀ハ難成旨、出入之度々申立候ニ付、文政度以來、先役共より、寺社奉行江及掛合候處、證人又ハ法系法類之もの引受候筋之旨、追々挨拶有之、證人死失退轉等致し、法類法緣無之之ものハ、願人不存寄損失いたし候ニ付、先者雙方江利害申聞、內濟致し候得共、以後嚴重之裁許相成候上ハ、裁許目當無之候而ハ差支候間、以來諸宗ニ不限、寺判之借金ハ、都而後住江爲引受候方申付候樣可仕候、

御附札

書面、寺院借金銀、先住死失又ハ御仕置跡引受方之儀、宗體ニ寄、夫々掟も可有之候得共、元來奉行所ニ裁許之規則無之、宗體ニ寄取計方區々相成候も如何ニ付、以來堂塔修復又ハ寺務入用ニ借受候段、證文面ニ書載有之寺判之分、寺附借財と見居候ハヽ、假令宗派之仕來等申

右同斷
町人

間口壹間ニ付地主より銀三匁宛

但於大坂表此度御用金差出候者ハ相除候積

右者午ゟ來ル戌迄五ヶ年之間、年々前書之通出金銀被仰付、從公儀も御金被差加、一同大坂表於會所利足七朱之積を以諸家江御貸附渡し、返濟引當之儀者、大坂表通用之米切手幷領分之内相應之村方證文ニ書入、万一相滯候節ハ、米切手ハ彼地定法之通取計、切手米爲相渡、村高ハ最寄御代官江預り、其物成を御返濟之積、勿論右出金銀之分、御用相濟次第、出金致候者ども江御戻被下、利足ハ七朱之内、會所諸入用之分引之、其餘之利足右元金銀御戻被下候節、是又出金銀致候者江可被下間、心得違無之前書之通出金銀可致候、尤納方之儀、諸國共寺社山伏ハ銘々之出金銀高、本寺本山ニ而取極申渡候迄、日數廿日之内、百姓町人ハ前書申渡候趣相違次第、是又日數廿日之内、出金銀致し、來未年ゟ者、年々正月中之積相心得、出金銀ニ分、御料者其所之奉行、御代官、幷御預り所、私領者領主地頭江差出、夫ゟ江戸向寄ハ江戸駿河町兩替御用達三井組、幷同所上田組ニヶ所之内早々相納、大坂向寄ハ、彼地にて三井組ハ高麗橋三丁目、上田組ハ上中之島町、右貳ヶ所之内江可相納候、右之通万石以上以下共、領分知行在方町方不洩樣可申渡旨、可被相達候、

六月

〔德川禁令考後聚十五 行刑條例〕金銀出入裁許改革之儀取調申上候書付○中略

一武家江相掛候金銀出入

右ハ切金高、古來之員數ニ復し、三十日限濟方之上、壹ヶ月兩度宛、於評定所切金ニ差出、切金不足ニ持參いたし候ものハ、家來御役宅江相廻し、員數通り取寄爲相渡、猶等閑候ものハ、不及申上、家老又ハ重役人等呼出、嚴敷申付、小身之面々ハ、其頭支配又ハ同列一類之内江急度相達其

古事類苑

政治部八十七

下編

貸借中

幕府貸金

〔應仁記 一〕亂世御時之事

嗚呼鹿苑院殿御代ニ倉役四季ニカヽリ、普廣院殿ノ御代ニ成、一年ニ十二度カヽリケル、當御代臨時ノ倉役トテ大嘗會ノ有リシ十一月ハ九ケ度、十二月八ケ度也、又彼借錢ヲ破ラントテ、前代未聞德政ト云事ヲ、此御代ニ十三ケ度迄行レケレバ、倉方モ地下方モ皆絶ハテケリ、

〔牧民金鑑 十二〕天保六午年七月三日御書付

近年金銀融通不宜、諸家差支有之趣ニ相聞候間、此度金銀融通之ため、左之通出金被仰付候、

諸國寺社領

宮門跡尼御所者相除き、其餘之分、本寺本山幷重立候社家ニ而取調、其末々之趣ニ随ひ、上之分壹ケ所ニ而、金拾五兩與定メ、其以下者相應之出金高、本寺本山幷重立候社家ニ而相極メ、末寺觸下支配等江可申渡候、

諸國 御料 私領

持高百石ニ付銀貳拾五匁宛

但於大坂表此度御用金差出候者は相除候積

ハ行屆兼候間、年番世話取扱之撿挍三人江、取鎮候樣申渡候ニ付、座中不殘聞合候處、自分之名當弟子共之名當之證文はわづかにて、七八分通りハ女名前、少々ハ男之名前も御座候、仲間之名當ハ總錄奥印仕出訴爲致、俗人ハ町役人計にて相濟候間、高利高禮之取鎮方行屆兼申候、何卒男女之名前ニ而も、仲間之懸合候金子ニ御座候ハヽ、奥印無之分御取上無御座候樣仕度奉存候、

塙撿挍

十月

座頭共貸金、當人相果跡相續人等より、濟方願出候節取計之事、

〔德川禁令考後聚十六 行刑條例〕寛政五丑年

一座頭共貸金證文宛所ニ、弟子又ハ仲間中抔と書加有之、官金、跡相續人幷讓受人等座頭ニ候ハ
ハ、定例之通取計、素人より右證文を以願出候ハヽ、假令座頭之緣有之ものに候とも、濟方
之不及沙汰積り、

右寛政五丑年五月、一座評議極ル、

文化十三子年二月

盲人貸金出訴之節取捌相談書

二月十一日御用部屋より請取

加賀守御相談もの

今度、塙撿挍より申立候趣ニ付、以來之處、撿挍妻より願出候貸金、且撿挍ハ勿論、外盲人ニ而も、證
文ニ官金之譯有之、總錄支配受候身分之ものより願出候貸金、總錄司馬崎撿挍奥印無之候ハ不
取上事、

右之通、備後守談濟、同人より詮議方、與力江被申達置候、尤撿挍江も右之段申達候事、

二月

塙撿挍持參書付

覺

高利金貸借之儀ハ、去二月中、御書付を以被仰渡、奉恐入候、勿論是迄、皆座一統江高利高禮不法之
催促等致間敷旨、年々相觸置候得共、此度ハ格別之御憐愍故、別而相愼候樣申渡候、然ル處末々迄

撿校勾當、其外座頭共官金之由申立、高利ニ而世上江貸出、返金滯候節者、座頭共大勢差遣、武家方者玄關等江相詰罷在、高聲ニ而雜言申、或晝夜詰切罷在、彼是我儘成體ニ而致催促候も有之由相聞候、勿論借金催促之儀、其時宜ニ寄、勝手次第之事ニ候得共、右之致方者、借主へ耻辱をあたへ候而返金爲致候樣仕候事ニ候得者、催促之筋ニ而者無之候、右之通過分之高利ニ而取引仕候故、外外よりも座頭共幷金子預金爲貸出候もの多有之趣ニ相聞候、過分之高利又ハ法外之致催促候儀ニ付、奉行　吟味ニ相成、答申儀も有之候得共、兎角不相止、其上借主貸主得心之事とは乍申、返金相滯候節者、法外之催促可致旨證文爲認取置、且又利金之儀、證文ニ者通例之利金ニ爲認、實者高利ニ取引仕、其外ニも禮金與名付、用立候金子之内ニ而引取候儀ども有之旨相聞、不埒之至ニ候、以來過分之高利ニ而貸出候儀致間敷候、勿論借金催促之儀者、勝手次第之事ニ候得共、玄關其外、催促のもの罷越間敷場所江相詰雜言等申、法外之儀致候儀仕間敷、若相背候ハヽ、吟味之上、急度可申付候、

但座頭共所持之金子者、官金ニ仕候ニ付、所々江貸出候儀者、尤之儀ニ候得共、他之もの之金子を預置、自分金子之由申貸出候儀者仕間敷候間、以來右體之事仕間敷候、

右之通町奉行より相觸候間、向々寄々可被相達候、

十二月

〔天明集成絲綸錄四十九〕安永七戌年十月

近來盲人幷浪人共、高利金貸出、不法成致催促等候趣ニ相聞、不屆ニ付、今般於奉行所、右體之族吟味申付候、然處常體之金銀貸借迄紊有之候樣相心得、貸借差支候而ハ、世上及難儀候ものも可有之候間、常體之金銀貸借ハ、勝手次第相對差支無之樣可致候、

右之趣、心得違無之樣可被相觸候、

妙法院宮
右家來江

宮貸附金之儀、文政度申達も候處、近年不正之取計多く、借受候者難澁に及び、殊ニ差加金之義、兼而之達ニ相背、難捨置筋ニ付、嚴重之取計ニ可及處、是迄取扱候家來共之流弊ニ付、寬宥いたし置、今般御改革之御趣意を以、已來滞之節ハ、宮ゟ被仰入ニ不及、一同目安掛ニ而銘々ゟ可願出、文政度屆高之外、差加金之分、一ト通借用證文之文段に引直し、宛名も取扱候者之名前ニ認メ替、消印之古證文相添、一應奉行所江差出改受、右之口、向後通例文面ニ而貸出し、混雜無之樣可取計、且是迄之通ニ而は、不取締之筋有之候間、傍輩限り申合、町地面之内一ト場所借受、當十月迄ニ引移り、役所の姿ニ不相成樣、旅宿之名目ニ而貸附取扱候場所一ケ所を取極、其所ニ而立合、不正無之樣、互ニ相改取引いたし、右之外自分宅幷外宅之者貸附取扱候義、一切致間敷候、利足之義、文政度達候趣も有之候處、銘々私之取計を以、內密高利ニ相當、不束之儀も有之、今般被仰出候通之利足を以、禮金諸掛り物一切受取間敷、利足を加へ證文書替候節ハ、追々安利ニ引下ゲ、屆高之分共、以來鄕印證文之外、武家在町銘々借受候員數內譯無之、連印貸相止メ、壹人別金高顯然ニ認入べし、町方ハ町役人共ニ印形爲見屆、無相違旨之書面取置、聊も猥成義無之樣、正路に可取計、若相背候もの於有之は、嚴重之可及沙汰候間、無等閑可相心得候、

一乘院宮
佛光寺門跡
專修寺門跡
右家來共

〔諸色調類集十ノ四十六〕明和二酉年十二月

候處、右三宮貸附金之儀、品々異同者有之候得共、更ニ公儀ニおゐて御聞濟無之旨申筋ニ者無之、素ゟ不相當之筋ニ候とも、是迄滯金取立之義被仰立次第、奉行所ニおゐても借方之もの江利害申聞爲濟來候儀ニ付、此節ニ相成、一般ニ不及御沙汰樣相成候而者、公儀御趣意之趣者、宮方ニおゐて、御辨も無之事故、不穩御心得可有之者素ゟ之儀、左候ハヽ、必定品々御困窮之次第、其外御差支等可被仰立哉ニ付、右三宮貸附金之儀、追々取調有之候處、いづれも元極等聢と無之候間、一通りニ候得者、此上難被及御沙汰筋候得共、格別之譯を以、去午未年〇文政五年六年被書出候金高を元高ニ定、高利ニ無之樣被仰付候儀者、御聞濟有之候間、已來一割迄之利足ニ而貸附、相對ニ候とも利分附、分明ニ相分り候樣取調、私共月番江差出、右之內無據譯ニ而利分を結び、元に致候分有之候ハヽ、右者外口返濟金之內ニ而引去、聊ニ而も元金高より不相增樣取計、尤滯金濟方之儀、奉行所へ被仰立候節者、右前月迄之元利金高を以、家來より申立、奉行取調中之利足取立候儀者難相成旨、改而申達、右書出置候名前之分相滯取立之儀被仰立候ハヽ、濟方利害等申聞候義ハ、是迄仕來之振合ニ取計候趣可仕候哉、別紙宮方家來共差出候書付寫壹冊、奉行所書留寫六冊相添、此段相伺申候、

丑四月

〔天保新政錄三〕天保十四卯年四月九日樽役所申渡

宮門跡方貸附金之儀、并傳通院、高野、大德院、鎌倉東慶寺貸附金も、左之趣ニ准じ、寺社奉行所ニ而夫々被仰渡候、

青蓮院宮

圓滿院宮

圓滿院宮貸附金者、寶暦明和度之御願濟、九百貳拾貫目之元銀を、江戸京大坂大津町方、其外江五分之利足を以貸出候迄ニ而、是以悉く利倍等者難相成筋と相聞、妙法院宮之方者、元高難分候得共、利金壹割ニ而、最寄御代官幷京大坂町奉行支配町人ニ而、貸附之儀而已、公儀におゐて御聞濟有之候趣ニ御座候、然ル處安永四未年、門跡方其外寺院等貸附金之儀、御改革有之、金高不殘公儀江差出、其外々奉行所又者御代官より貸附ニいたし候分者格別、其餘觸流之儀者難相成次第等被仰出、既天明二寅年、圓滿院宮より平等院寄附講銀、關東筋江貸附之儀、御願有之候處、不及御沙汰段被仰出、寛政二戌年、妙法院宮より拜借金御願有之候處、難成旨被仰出候節、右代りとして、武家方江貸附ニ相成、滯居候分取立被仰付候儀有之、右者畢竟安永度御改革後者、貸附金取立之儀等難被仰立事故、拜借金之代り取立被仰付候儀ニ可有之、左も無之、近來之如く被仰立次第濟方利害申聞候儀ニ候ハヾ、右體之被仰出者有之間敷儀ニ而、右等之趣考合候得者、被仰立次第、調役より利害申聞、奉行所調中之利足迄爲相濟候者、不相當之儀ニ候得共、右者天明四辰年、阿部備中守寺社奉行勤役之節、圓滿院宮貸附金を、大森織部知行野州八木岡村彌藤次外拾九人、其外有高大之進相滯候節、借請もの共呼出、相對を以可相濟旨申聞候得共、濟方いたし不申、遲滯有之候而者、貸附御免之詮も無之由を以、唯今之通濟方申付、不相濟候ハヾ、評定所江差出、吟味之上、定例金公事之通取計可申哉之段相伺、伺之通御差圖相濟候儀、起立ニも可有之哉ニ而、右伺濟之儀、前々年、宇治平等院貸附金、關東江貸出之御願不被及御沙汰段被仰出、間も無之儀ニ而、不都合ニ付、取調候處、推考之沙汰に者候得共、平等院持寄講金、關東江貸附之儀者、新規ニ候とも、知行物成拂代銀、關東江貸附候義者寶暦之度伺濟も有之儀ニ付、假令安永之御改革ハ有之候とも、右者奉行所におゐて殊格之取計不致迄之儀者、一通りニ金子貸出候義者、普通之寺社私ニ貸附候分も濟方者申付候事故、右之見合を以、前書之通相伺候義と相聞申候、依之已後取計振等之儀、勘辨評議仕

右之通、銘々申立候ニ付、奉行所書留取調候得共、年古キ分者留帳連續不致、借寫等ニ相成居候分を以、追々突合候故、品々手數相懸り、漸此節相分り候處、靑蓮院宮之方者、別紙書拔之通、書留有之、右ニ寄取調候得者、元文之度、傳奏衆江被仰入置候米金銀高之儀者、凡千百兩前後程有之候處、明和元申年ニ相成、右江京大坂ニおゐて之持寄講銀、其外御遣金等相加、都合六千五百兩、壹ケ年五分之利足を以、江戸京大坂大和近江江五ケ年季を以貸附之儀、御聞濟に相成、觸流之儀迄被仰出候處、同四亥年中、主法替御願有之、京大坂町人共江世話御賴、右町人より相對ニ而貸出ニ相成候趣ニ有之、圓滿院宮方者、別紙書拔之通、寶曆十二午年、知行相成、拂代銀三百貫貸附、濟方不滯樣、京大坂大津江觸流之儀、御願之通相濟、

本文伺濟、書面之趣ニ而者、京大坂大津江觸流之儀、幷右貸附銀關東筋之ものも拜借相願候間、滯候節者、於江戸表其掛り奉行所へ可被仰入間、其節者早速返濟いたし候樣、取立之儀をも御願有之候趣ニ候處、關東筋江貸付之分、濟方滯候節之儀者、承付ニも記無之候得共、御願之通旨有之、此上者おのづから關東筋江被貸附候分、滯候節之儀も、御聞屆ニ相成候趣意と相聞申候、

猶又明和二酉年、山城大和河內和泉攝津近江六ケ國在方町方共、幷江戸町方一統觸流之儀、幷宇治平等院寄附講銀六百貳拾貫目貸附之儀、御願有之處、再應觸流之儀者難相成、平等院寄附講銀貸附御願之儀者、江戸京大坂江五分之利足ニ而五ケ年季を以貸附之積、御差圖相濟候趣ニ有之、妙法院宮之方ハ、別紙書拔之通、明和元申年金高員數不相知、大佛殿爲修復勸化被仰付候寄金を、最寄御代官幷京大坂町奉行支配町人ニ而、壹ケ年壹割之利足を以て貸附之義、御聞屆に相成候趣ニ有之、其餘之儀者、書面無之、難相分候得共、右宮方家來申立之次第、書面江引合、不都合之儀も有之候間、奉行所書面之趣を以取調候處、靑蓮院宮貸附金者、明和度之金高六千五百兩を元金與定、京大坂町人共より五分之利足を以、江戸京大坂大和近江江貸出候迄ニ而、利倍之儀も難相成、

〔宮門跡方其外貸附金一件下〕文政十二年丑六月廿六日、出羽守殿江以大澤彌三郎進達、寅六月十七日承付候樣被仰聞、以岩佐郷藏御下ゲ承付いたし、同十九日御同人江以同人再達、

宮方貸附金取締方之儀伺書、

書面伺之通取計可申旨被仰聞、承知仕候、

寅七月十七日

松平伊豆守

寺社奉行

去ル巳年、知恩院宮貸附金取立方之儀、松平伯耆守寺社奉行之節相伺候處、御尋有之、猶取調候節是迄取立之儀被仰立候、青蓮院宮圓滿院等之貸附金起立糺之上、京大坂之振合ニ准じ、當時之貸附金高、幷貸先名前共、夫々爲書出、右金高を元高に極置、已來貸先名前之儀、毎年壹度宛爲相屆、右屆有之候分、滯取立之儀被仰立候ハヽ、仕來之通、同役より利害申聞爲相濟、其餘貸先名前屆無之分者不取上積り改正仕候心得を以、當時貸附金高、貸先名前等爲書出候樣可仕哉之旨相伺候處取調申上候通可仕旨被仰聞候ニ付、青蓮院宮圓滿院宮、其外妙法院宮貸附起立等爲書出、取調候內、伯耆守御役替ニ付、太田備後守寺社奉行之節請取取調中、同人御役替ニ付、松平伊豆守方江請取、再應取調候趣、左之通御座候、

一青蓮院宮貸附金之儀者、元文四未年十一月、金銀米被貸付候段、傳奏衆江被仰入、御遣金幷於京大坂持寄講銀百五拾貫目餘貸付被置、右金高六千五百兩餘ニ相成候處、返濟相滯候ニ付、明和元申年九月、酒井飛驒守寺社奉行勤役之節、證文極之通可致返濟旨、江戶京大坂大和近江江觸流之儀、幷返濟滯候ハヽ、其所の奉行所江可仰立旨被仰入候處、聞濟有之、右之分元利積立、武家寺社在町江貸出候分、去ル午年十二月迄ニ、都合金貳万六千六百兩餘有之由ニ而、貸附起立之儀、別紙之通申立候、〇中略

仕、後代迄、先住之意願も相立、難有奉存候、且又先年燒亡之節、銀三百枚被下置候得共、願之通被仰付候ハヽ、万一類燒等仕候者、右利金餘慶も有之候ハヽ、除ケ置、普請料等不奉願樣可仕候由相願候、

右之通相願申候、先住以來無情怠御祈禱勤來、餘程之金高、殊一派之宗例ニ而、金子取扱、奉行所江願候義者難仕、末々迄斷絕不仕樣致置、御祈禱幷修復料ニ仕度との義、無餘儀願御座候、外例ニも成間敷候間、願之通可被仰付候哉、依之奉伺候、

五月

〔天保集成絲綸錄百四〕文政二卯年十一月

寺社奉行

總而門跡方其外寺院等貸附金之儀、安永四年以來、返濟方觸流相止、無據譯相立難被捨置分ハ、金高不殘公儀江差出、其所之奉行又は御代官ゟ利足幷年限を定、貸附候筈ニ相成候處、向後ハ是迄貸附ニ相成居候分は格別、新規貸附之儀ハ、容易ニ不承屆、併門跡方比丘尼寺等、寺院領少分ニ而、實ニ修復料等差支候歟、格別筋分相立候分は、安永之度達之通、願金高爲差出、尤最初之金銀高極置、貸增利倍年延願等ハ難成趣を以承屆可申候、

一相對ニ而貸附、貸先名前金銀高屆置候分、元高取調、此節改而爲相屆、以來當時之高より不相增樣相達、万一增候分者、返濟滯候共、於奉行所は不相立積、若格別之御由緒ニ而、無據貸附高增別段申立候ば、取調之上承屆、尤貸附方等等閑ニ不相成樣、相應之引當を取候歟、又は町役村役連判證文を以貸渡、一貫目以下小貸之向迄も、同樣入念可申、貸附中絕之分は、自今不承屆筈ニ候、

右之通、今度改而松平和泉守江相達候間、得其意、何も被申立候向も有之候ば、右之趣を以取調候樣可被致候、

行申談致兩承付候樣被仰聞、致兩承附、同廿八日御同人江順阿彌を以、紀伊守進達、

書面之通可仕旨、本多紀伊守江被仰渡候旨承知候、

酉五月廿六日　水野對馬守

湯島靈雲寺溜金御貸付願之儀申上候書付

伺之通可申付旨被仰聞、承知仕候、

酉五月廿六日　本多紀伊守

湯島眞言律宗靈雲寺

惠曦

右相願候者、開山覺彥儀、常憲院樣御代、元祿年中、初而寺地拜領仕、爲普請料金三百兩被下置、寺建立、寺領百石御朱印被成下、正五九月歲末幷年中御祈禱被仰付、本尊大元明王之繪像、御自筆被成下、開山以來無懈怠御祈禱執行仕來候、右御祈禱之儀ハ、餘程大造之事御座候處、本領百石之物成幷每年被下置候御祈禱料銀百枚を以執行仕候、尤年々少宛之殘金を、寺修復料仕來候、然處享保二酉年、御祈禱料被下置候儀、一同之列ニ而相止候、寺領百石之物成計ニ而者、右御祈禱之入用餘程不足御座候得共、數年無懈怠勤來候御祈禱之儀御座候得ば、何卒不致退轉樣、先住惠光丹誠仕、開山之餘德ニ而、只今迄年中御祈禱先格之通少も改不申、當住義も其格守勤來、修復も相應仕來候、然共相定候料物無之候而者、後代及び相續仕兼可申ニ付、先住代より今至少々宛修復料除ヶ置、猶又近年御內々被下置候御祈禱料餘分を合、當然溜金千兩程有之候得共、外へ貸付、元利之催促は、宗法ニ而難仕、祠堂金等貸附返濟滯候而も、金銀之事ニ而爭論及び候儀、於一派不相應之事故不仕、右千兩程の金子取扱仕兼候、依之何卒右金子、近國御代官江御預ヶ被仰付、年々利分被下候樣仕度奉願候、左候得者、寺領物成等、右之利金を以、年中御祈禱永々無斷絕相勤、寺修復も相應

牛込穴八幡社堂修復料殘金貸附之儀ニ付、高野學侶方在番願出候儀申上候書付、

高野在番申出候通、殘金者高野江預候樣可仕旨被仰聞、承知仕候、

巳正月廿三日　　牧野越中守

牛込穴八幡諸堂大破ニ付、爲修復料金五百兩放生寺江被下置、御書付之社堂三ヶ所、三百四拾兩ニ而相仕舞、殘金百六拾兩者、永々爲修復料御代官江預置、利附ニ貸附可申旨、舊臘委細申上、伺之通可仕旨被仰渡候付、其趣放生寺江申渡候處、今般高野學侶方在番申出候者、右修復料金、別當放生寺江被下置候之段、高野山江申遣候處、被仰出候趣、於一派も別而大切奉存候間、可罷成儀ニ御座候者、右三ヶ所修復殘金高野山江預置、年預坊に而致世話貸附置、修復入用之度々、利金を以取計、如何樣之儀候共、元金者居置、尤修復入用無之、利金餘り候年者、元金江差加、永々退轉無之樣仕度旨、高野山門首幷集議一同ニ相願候段申越候由、在番申出候、右修復料殘金之儀者、先達而伺相濟候得共、在番申出候儀故、一應申上候、

正月

寛保元酉十二月中務大輔殿江進達

上野大慈院江被下候金子貸附之儀申上候書付

御屆

上野大慈院　　大岡越前守

右大慈院江被下置候壽光院殿御佛供料金貳百兩、東叡山總物金之內江入置、執當之世話ニ而、當暮より貸シ付致し、右利金壹年分百兩ニ付七兩貳分、貳百兩ニ而利金都合拾五兩ツヽ、年々受取、年中御佛供料ニ仕、相殘候分溜置、御遠忌御法事相勤候由申聞候、依之申上候、

寛保元年酉五月廿三日、左近將監殿江、紀伊守進達、同廿六日、左近將監殿、越中守江御渡、御勘定奉

織田出雲守江掛候貸金出入取計方之儀、御留守居之方ニも聢と書留も無之、左候得バ奉行所より取立方世話いたし候ハヾ、償成御寄附金之樣ニ可相成哉、不容易事ニ而、御勝手方御勘定奉行も加り、評議いたし可申上旨被仰聞候ニ付、一同評議仕候處、右體之儀願出候節之取計方、差當例相見不申、同書ニ而ハ、延享五辰年至心院樣御逝去之節、御遺金御遺物等被下候趣者、御法事之度度納經拜禮願出候書面ニも相見候得共、明和五子年御祠。堂。金。貳百兩、浚明院樣より御寄附被成下候由者、奉行所書留無之、從大奥向被下候趣ニ相聞候ニ付、御留守居江掛合糺候處、難相分由ニ御座候、然上者御祠堂金之由者、申立迄之儀、借方より取置候證文ニ、御祠堂金之趣認有之候とも、右者相對之儀、右類取上候樣相成候而ハ、際限も有之間敷、御寄附之譯不相分上者、難取上筋ニ付、相對を以請取可申旨申渡、訴狀者不取上差戻し、併至心院樣御靈牌安置いたし罷在候儀者無相違、御供養差支候趣者不容易儀ニ付、織田出雲守家來呼出し、右之趣得と申聞、殊ニ御祠堂金と心得、證文ニも其趣認借受、年來相立候迚、返濟相滯候而ハ、如何之儀ニ御座候間、去ル巳年御書付之趣忘却不致、實意を以、相濟候樣、相達候方可然哉ニ奉存候、

亥
五月

緒　書面松平周防守承付之通、被仰達候旨被仰聞、承知仕候、

附　亥五月廿八日　　評定所一座

書面御寄附之譯不相分候間、難取上筋ニ候、相對を以請取候樣申渡、訴狀差戻、織田出雲守家來江ハ、去ル巳年被仰渡候趣を以、相濟候樣可申達旨被仰聞、承知仕候、

亥五月廿八日　　松平周防守

〔宮門跡方其外貸附金一件 上〕元文二年巳正月廿三日左近將監殿江進呈

社寺貸金

事明白に相成、却而御取締も相立可ㇾ然哉と奉ㇾ存候、

右御尋ニ付、取調候趣、書面之通御座候、依ㇾ之御渡被ㇾ成候御書狀壹通返上仕、此段申上候、以上、

寅十一月　　遠山左衞門尉

鳥居甲斐守

〔天龍寺文書七〕請取申山代銀子之事

銀合六貫目

內貳貫五百目者、景德寺祠堂銀也、先年親宗〔借用仕置申候、此度右六貫目之內ニ而返進仕候、利銀貳百八拾七匁御用捨忝奉ㇾ存候、指引殘銀子三貫五百目、只今慥請取申候、都合六貫目之通り相濟申候、

一右差上げ申候山之內、源[illegible]樣御請被ㇾ遊候分之地子每年六斛壹斗壹升九合三夕七才、則臨川寺樣へ當年ゟ御寺納可ㇾ被ㇾ遊候、仍爲ㇾ後證ㇾ如ㇾ件、

元祿三年庚午

五月十五日

山主　吉田忠兵衞印

同母　淸薰印

臨川寺樣御役者中

〔德川禁令考後聚十六行刑條例〕享和二戌年御渡

松平周防守伺

谷中臨江寺御寄附金之由申立候貸附金濟方之儀ニ付評議

書面評議仕申上候通、松平周防守江被ㇾ仰達ㇾ候旨被ㇾ仰聞ㇾ承知仕候、

亥五月廿八日　　評定所一座

去戌十二月十一日評議いたし可ㇾ申上ㇾ旨御渡被ㇾ成候、松平周防守相伺候、谷中臨濟宗臨江寺より

旨可申聞段、京都町奉行江可申渡旨、所司代江被仰遣可然哉之旨申上候處、其通被仰渡候趣書留有之、右之外前々より武家の身分ニ而利附の金子貸附候儀難相成旨之被仰出者勿論、元極候之規則者無之候得共、廉耻ニ可拘與之趣意を以、附利之分者一般ニ沙汰不及儀ニ可有御座、譬バ町家之娘等ニ而、武家與向相勤、并町人ニ而、武家家來ニ相成候もの、勤中何の辨も無之、利附の金子貸出し、何れも暇取候後、町家江嫁入者、元々町人江立戻候後ニ至、出訴致候共、勤中之儀も相聞候得バ、取上不申儀ニ而、右等も相當とも難申哉ニ候得共、仕來之趣を以取扱候儀ニ御座候、右ニ付而者、別ニ金主を拵え貸出、其外種々品能取繕及出訴候向も不少、借主方ニ而者、滯候節ニ至リ、利附之廉を顯露に致し、借受候金子を棄捐ニ可為致與之心底を以申立候類も有之、一體武家貸金利足を取候心底、廉耻を失候與申場台より、武家出訴者不取上儀與相聞申候得共、人の財寶を借り、公私之用を辨、右之恩を不謝、剩元金迄も不致返濟心底者、貸付利足を取可申心底より遙ニ廉耻を失ひ、不埒之儀ニ御座候得共、右等ハ格別之御咎も無之、却而貸出候もの者不相濟譯ニ相成居候儀與奉存候、然處前書之通御尋も御座候ニ付、勘辨仕候處、去丑十二月、万石以下之面々、町屋敷所持いたし候儀難相成との趣相達置候儀者無之、已ニ御家人江者町屋敷被下候程之儀ニ候得共、内々讓受、外名前等ニ而所持致し候儀は難相成候ニ付、前前より御取上ニ相成、御咎等も有之候、此度より改而表向屆申聞、町家作之町屋敷讓受、武備手當之ため、銘々分限ニ應、所持いたし候儀者不苦旨被仰出有之、右ニ見合、武家方ニ而も、非常手當等貯有之分者、武家同士助合候得者勿論、領分知行所江貸出、又は□□時宜ニより出入町人等江格別利安ニ貸附候儀者不苦樣、尤右金子滯候節ハ、武家同士ニ候得ば、吟味相願可申、其外ハ當時給金取立同樣、奉行所江直達之積、左樣ニも相成候ハヾ、世上金銀融通宜、古金銀引替方相懸候場合にも至、其上金主名前取拵、公邊を詐候儀無之、又者不實之姦計仕候ものは相止、諸

事分明也、

〔長曾我部元親百箇條〕掟〇中略

一國中又被官出擧を取事、主人不ㇾ知上給分迄上表仕、住屋を捨候者、主人へ於ㇾ相懸ㇾ者、出擧催促停止之事、〇中略

一出擧未進事、催促之上令ㇾ難澁ㇾ者、奉行中迄相理堅可ㇾ取、但年々無ㇾ催促ㇾ者、本分迄にて可ㇾ成事、〇中略

慶長二年三月廿四日　盛親在判　元親在判

〔諸色調類集十ノ四十六〕天保十三寅年十一月廿七日向方より來ル

越前守殿

武家ニ而利附之金子貸附候儀取調申上候書付

町奉行　遠山左衛門尉

武家ニ而利附之金子貸附候儀取調可ㇾ申上旨、御書取を以被ㇾ仰ㇾ渡候、此儀取調候處、寛政八辰年評定所一座江評議御下被ㇾ成候、京都町奉行相伺候西大路家家來高宮正親より、大坂表之もの共を相手取候、預ケ金銀幷預道具等取戻願取計方之儀、評議之上、都而武家幷堂上方家來之身分ニ而、利足を取、在町のもの江貸渡候歟、又ハ道具書入貸渡候金銀者、相對之事ニ而、濟候迄及ㇾ出入ㇾ濟方可ㇾ願出ㇾ筋ニ者無ㇾ之候間、右體之類者取上不ㇾ申、金之預ケ物不ㇾ差戻ㇾ儀を願出候ハヾ、主人より奉行所吟味之儀、其筋江可ㇾ申立ㇾ筋之旨申聞候樣相心得、此度正親申立候儀も、利足を取り候貸金銀か、又者道具書入金銀貸渡候儀ニ者無ㇾ之哉相糺、若右之通ニ候ハヾ、相對之事ニ付、堂上方家來之身分ニ而、及ㇾ出入ㇾ可ㇾ願出ㇾ筋ニ無ㇾ之段申聞、取上不ㇾ申、全預ケ置候金銀道具無ㇾ故不ㇾ差戻ㇾ儀ニ候ハヾ、西大路家より奉行所吟味之儀、御附江可ㇾ申立ㇾ筋之

山崎助左衞門
安藤源五郎左衞門

〔吾妻鏡十七〕正治三年〇建仁元年十月六日癸未、江馬太郎殿〇北條泰時昨日下著豆州北條給、當所去年依少損亡、去春庶民等糧乏盡失耕作計之間、捧數十人連署狀、給出擧米五十石、仍返上期、爲今年秋之處、去月大風之後、國郡大損亡、不堪飢之族、已以欲餓死、故負累件米之輩、怖譴責、插逐電思之由、令聞及給之間、爲救民愁、所被揚鞭也、今日召聚彼數十人負人等於其眼前、被燒棄證文、年雖屬豐稔、不可有糺返沙汰之由、直被仰含、剩賜飯酒幷人別一斗米、各且喜悅、且涕泣退出、皆合手、願御子孫繁榮云云、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年五月二十日丁卯、就雜務等事、有被定下之篇目、〇中略謀叛人出擧事、其一類所從者、不及沙汰、至百姓等分者、早可致辨之由、可有御成敗者、且所被仰遣六波羅也、

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衞門事
寬喜元年ニ、天下飢饉ノ時、借書ヲ調ヘ、判形ヲ加ヘテ、當給ノ者ノ米ヲ借ルニ、泰時法ヲ被置ケルハ、來年世立直ラバ、本物計ヲ借リ主ニ可返納、利分ハ我添テ返スベシト被定テ、面々ノ狀ヲ被取置ケリ、所領ヲモ持タル人ニハ、約束ノ本物ヲ還サセ、自我方添利分、悉ニ返シ遣サレケリ、貧者ニハ皆免シテ、我領內ノ米ニテゾ主ニハ悉ニ被返ケル、左樣ノ年ハ、家中ニ每事行儉約、一切ノ質物共モ、古物ヲ用フ、衣裳モ新キヲバ不著、烏帽子ヲダニ古キヲツクロハセテ著シ給フ、夜ハ燈ナク、晝ハ一食ヲ止メ、酒宴遊覽ノ儀ナクシテ、此費ヲ補給ケリ、仍一度食スルニ、士來レバ、不終ニ急ギ是ニアヒ、一タビ梳ニモ、訴來レバ、先是ヲキク、一寐一休是ヲ不安シテ、人ノ愁ヲ懷テ待ンコトヲ恐ル、進テハ萬人ヲ撫ン事ヲ計リ、退テハ一身ニ失アラン事ヲ耻ヅ、然ニ太守逝去ノ後、背父母、失兄弟トスル訴論出來テ、人倫ノ孝行日ニ添テ衰ヘ、年ニ隨テゾ廢タル、一人正ケレバ、萬人夫ニ隨

りの義にて、町年寄共不辨之儀を、一應打合も無之、町年寄方ニ而取調申上候事ニ付、萬一被仰上ニ相違等御座候而者、何共不都合之儀與心配仕、且者町會所貸付有之候地所之儀ハ、貸付高等都而町會所ニ拘り候儀者、私共取調申上候年來仕來ニ付、其段を申上候事ニ而、既ニ其節申上候増山元甫上り地面之儀者、跡拜領相願候もの有之、御下ゲ相成候ニ付、館市右衛門方ニ而御吟味繪圖取調差上、御下ゲ札案江者、町會所貸付滯而已取調相認、別廉御下ゲ札ニ相成候ニ付、市中取締懸鋯付江引分ケ取調候與申上候義ニ而者無之、素々地所之儀者、御年寄方ニ而取調者勿論之義ニ付、町會所おゐて異存等更に無御座候處、右増山元甫上り地取調之節申上候趣を以、彼是差支等申上候者、何共不相當之儀與奉存候、今般之高原八十次郎上り地面之儀者、元祖へ取戻之儀申上候事ニ候間、跡拜領相願候地面とハ、事柄替居候間、自ラ被仰上案御振合も相違仕候儀ニ御座候處、一般ニ去卯九月之申上江引當取調兼候段申上候者、一端を以萬事江及候儀ニ而、一體偏固之惑故、左樣心取違ニも至り候儀と奉存候、尤右増山元甫上り地爲取調御下ゲ御座候節、御上相成候繪圖面、此御下ゲ札案等を町年寄共得と熟覽之上、首尾會得仕候ハヽ、自然惑亂も相晴可申哉與奉存候得共、猶夫にて差支等申上候而者、却而御用辨ニも拘り候儀ニ付、以來之處ハ、去卯九月中、向方同役申上候通、町會所金貸附有之地面取調候節ハ、町年寄共、町會所江罷出、滯高其外承辨仕候上ニ而、被仰上案取調候か、又者一先町會所江御下ゲ相成、滯高等取調申上候ハヽ、右書面を、猶年寄方江御下有之候ハヽ、右を口ニ同方ニ而取調申上候と歟、兩樣之內可然被思召候方江御取極相成候ハヽ、以來之區々ニ不相成可然哉與奉存候、

右取調方、勘定仕候處、書面之通御座候、依之右増山元甫上り地取調候節之繪圖面寫相添、此段申上候、以上、

辰五月

吉田百助

のニ付、終にハ不納勝ニ相成、無據書入之地所、武家者拝領地ニ付、會所江預、町人者流地ニ致し、會所附ニ相戌、所持之地所ニ離れ候もの、年々相殖候間、今般前書之御仕法被仰出候上ハ、町會所貸付金も、此節を限り、不殘無利足十五二十年賦ニも御仕法替被仰出候方ニ可有之哉、左候迚、公儀御金藏江差響候儀者、聊も無之、御救筋ハ無殘處行渡り、輕キものども相助り、一同格別難有可奉存候、右之趣可然思召候ハヽ、一應御勘定奉行存寄御尋之上、御治定御座候樣奉存候、依之此段申上候、以上、

卯十二月

鳥居甲斐守
鍋島内匠頭

〔諸色調類集十ノ六十九〕天保十五辰年五月廿日

町會所貸附有之候地面取調方之儀申上候書付

町會所懸

元御目付支配無役高原八十次郎上り地面、元組江取戻之儀、御目付衆より申上、主膳正殿御渡有之候書面御下ゲ有之候ニ付、被仰上案、幷差支有無取調申上候處、右被仰上案之内江、地坪取調書加可申旨被仰渡候間、地所之儀ハ、町年寄共主役之儀ニ付、同方へ御下ゲ御座候樣仕度段申上候ニ付、御下ゲ御座候處、去卯九月、向方同役共より申上候書面江、市中ハ、取締懸鰭付を以申上候文段之内、町會所金借用有之旨、町役人共申立候地所之儀ハ、町會所おゐて御下ゲ札案取調候方相當之旨與申上有之、夫ニ付、今般之高原八十次郎上り地面坪數等認加被仰上案、町年寄方ニ而取調申上候而者、町會所懸りより猶差支等之儀可申上哉之懸念ニ而、取調彙候趣申上候處、前文之通、私共より八町年寄江御下之儀申上、同方ニ而者取調彙候趣申上、詰り御用向御差支勝ニ付、以來之處、何れ與歟評議仕、取極可申上旨被仰渡候、

此儀、去卯九月、向方同役より申上候書面之趣ニ而者、町會所取極相伺濟、此貸付金高都而同所限

所御用達ゟ貸付申候、

一右貳口合金貳万兩之利金溜五千兩、文化七午年ゟ、右同樣之利足を以、御勘定所御用達ゟ貸申候、

但右三口利金之内ニ而、御勘定方幷私共兩組掛り與力同心御用達年番名主共江、年々御手當御褒美銀等被下置、殘金者御用達共預り罷在、尤筆墨料幷座人門番小遣等者、七歩積金之内を以、御手當給分共被下候ニ付、本文利足ニ者拘り不申候、

右之內壹万兩程ハ籾買入

（貸附金無利足年賦濟一件）天保十四卯年十二月

大炊頭殿江

町會所借附金之儀ニ付申上候書付

書面、町會所金主儀、是迄貸附有之候分、此節を限、無。利。足。二。十。ケ。年。賦。ニ被成下候段被仰渡奉承知候、

卯十二月十六日　鳥居甲斐守

鍋島内匠頭

此度諸向御救之ため、厚キ思召を以、公儀諸御貸附金藏宿貸出金御仕法替可被仰出哉之旨、此間評議御座候、右者如何之御摸樣哉者難計候得共、彌前書之通被仰出候事ニ相成候得者、町會所貸附金も、何とか御仕法不被仰出候はね者相成ましく、依之勘辨仕候處、町會所貸附金ハ、元來公儀之御金ニ者無之、寛政之度町入用減省し、七分を積立、凶年非常之御救ニ御備被置、輕キ御家人町人共江元。利。成。崩。し。之仕法ニ而、當時三十万兩餘も貸附ニ相成居候處、元より借受候程之難澁も

天保十二丑年正月十一日

名主　長兵衛
　　　助右衛門

町年寄御役所

鳥居甲斐守

〔諸色調類集十ノ七十〕天保十四卯年四月

町會所積金之儀ニ付取調申上候書付

市中七歩積金減方之儀、御沙汰有之候ニ付、先般遠山左衞門尉幷御勘定方申合談判仕候趣取調申上候處、尙又右書面御下、勘辨仕可申上旨被仰渡候、

此儀、寛政二戌年諸色直段引下方被仰出候處、右渡世之もの者、多く地借店借之者重モニ付、商ひ品而已直下致候而者、取續方難儀致し候ニ付、地代店賃引下候得者、地借店借之もの共暮し能く相成、左候而者、地主共手取金薄く其頃町入用追々多分ニ相掛り、地主共難儀致し候ニ付、町入用相減し、地代店賃引下候得者、地主地借店借共持合平等ニ可相成御趣意を以引下方被仰出、其節町入用減金之内を以、社倉取立圍穀いたし、公儀ゟも御下金被成下候積被仰出候ニ付、町入用減金取調候處、御府内總町數千六百町有之、寛政元酉年一ヶ年總地代店賃五拾四萬六千八百九拾兩餘之上り高ニ而、町入用之儀者、天明五巳年ゟ右酉年迄、五ヶ年平均一ヶ年拾五萬五千百四拾兩餘相掛候ニ付、右之内（寛政三亥年評議書ニ係候割合書之内）町入用減金三萬七千兩出來候間、此內、壹歩、三千七百兩臨時町入用、增手當貳分、七千四百兩、地主增手取金ニ致し、七歩貳萬五千九百兩（當時貳万貳千七十八兩）者町會所江取立、

一寛政度七歩積金御仕法之節、御下金壹万兩、御勘定所御用達江相渡、年四分ゟ五分迄之利足ニ而貸付申候、

一寛政十一未年、七歩積金之内ゟ金壹萬兩引分ケ、別段金と唱へ、前書同樣之利足を以、御勘定

但し無利足年賦濟方可相成分、並に向後借金の儀は、是迄の通りに候事、

右之通り被仰出候間、其旨相心得、銘々分限を守り、不慎の儀無之樣可被致候事、

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年癸亥正月廿二日、再ビ月俸ノ士借財ノ年賦ヲ達ス、

和泉守殿渡書付　御藏米取借財方利下げ等の儀に付、舊臘相達し候趣も有之候處、高ニ對し格別借財多の者有之、右割合にては、却て難儀致し候者も有之哉に相聞候に付、猶又左之通り、

百俵ニ付七十兩以上借財有之分ハ、三十ケ年賦、　同斷百兩以上ハ四十ケ年賦　同斷百五十兩以上ハ五十ケ年賦

右之通相心得、向後借財不相增樣可相心掛旨、御藏米取の面々へ可被達候、

江戸町會所貸金

〔諸色調類集十ノ四十八〕御貸附金之內、三百六十兩、館市右衞門掛ニ而、

室町壹丁目家持半兵衞、武州本庄宿住宅ニ付、店支配人長兵衞江御預候證文寫、

奉願候御金之事

一金三百六拾兩

右者町方御貸付金之內、書面之御金高、年。壹割。之利足ニ而、當丑年より、來ル巳年迄、五ケ年季之積、各樣より半兵衞江御預被成、慥ニ奉預候處實正ニ御座候右御金之儀者、家質御取御預ケ可罷成儀ニも可有御座候處、年壹割之利足故家質無御座、書面之御金高御預被成候、難有奉存候、然ル上者、年季之內、壹ケ年分利金翌年正月十一日限り、年々上納仕、年季相立、來ル午年正月十一日、元利共急度上納可仕候右御金奉預候內何樣之異變有之候共半兵衞所持屋敷之內爲質拂、右御金高元利共少しも無違背上納可仕候、右所持屋敷之內賣拂候歟、又者家質書入等仕候儀御座候ハヾ、其以前御訴可申上候、爲後日名主加印仕、證文差上申候、仍如件、

室町壹丁目家持半兵衞
武州本庄宿住宅ニ付店支配人

中山貞次郎殿
鈴木八兵衛殿
黒澤正助殿
西井孫大夫殿
西新八郎殿
馬場藤五郎殿

但貳分判壹分判南鐐之類納候節は、本紙金子之脇江、但し何金と認可申事、

右後藤包相濟候ば、使者之もの直ニ馬場藤五郎宅江持參候處、直請取候、家來請取ニ候ハヾ、書付可取之事、

〔嘉永明治年間録十一〕文久二年十二月廿八日、万石以下ノ士、馬喰町役所ニ返納金年賦ノ法ヲ緩ス、

和泉守殿御渡　馬喰町御貸附金拝借、万石以下の面々御救として、去酉年〇文久元年を限り、利足年五分引下げ、元金二十ヶ年賦返納、去酉年まで滞り利足金の分、當戌年まで年延成下され、是迄一ヶ年分の納高、五ヶ年に割合返納の事、是迄無滯相納候面々ハ、當戌年相納べき利足御用捨被成下候、右之通り被仰出候間、納方割合委細の儀ハ、御勝手掛り御勘定奉行同吟味役へ可被問合候、

士卒輩淺草藏宿ニ於テ、借財返辨年賦ノ法ヲ緩ス、

御同人御渡　御藏米取の面々勝手向御救として、是迄の借入金ハ、新古の無差別、當冬御切米後、證文書替の節を限り、年七分に利下げの事、年賦濟方ハ百俵に付、金五十兩以上ハ、元金二十ヶ年賦、三十兩以上ハ十五ヶ年賦、右以下ハ十ヶ年賦濟の事、

付之、

但上納之儀ハ、來辰年より十ヶ年賦ニ上納可ㇾ仕候、

〔御勘定所定書下〕御代官其外引負有ㇾ之に付預金上納に成候譯書付

御代官其外引負有ㇾ之に付、預金上納に成樣、其人相續に而預ヶ金手形を以、申立有ㇾ之候共、手形文言上納者無ㇾ之候得者、相立不ㇾ申候、

一右之類、其人或者御仕置に成、或は病死跡式斷絶に而候得共、預金之類、負方之足金に成候故、上納之文言手形無ㇾ之候とも、濟方申付、直に上納致候、是者前方、右之通、伺之上相極申候、

戌六月

〔佐渡奉行公務扱〕御役成拜借金上納一件

文政七申年十二月朔日、左之通、年賦上納御金、奉行月番ゟ案紙可ㇾ請取、尤十一月相下り本紙西之内ニ認メ、案紙ニ相添、御扣壹通後藤包ニ而、馬場藤五郎方江使者ヲ以差出、

但シ御案紙月附、十一月と有ㇾ之候得共、十二月朔日納ニ付、十二月之月附ニいたし候、後藤へ使者罷越、西ノ内貳枚持參、別紙ニ金高覺書ニいたし、後藤へ參ル者の姓名致ㇾ印形ㇾ遣、包料ハ無ㇾ之、印形も持參爲致候、

上納申金子之事

一金三拾兩者　　但後藤包

右者佐渡奉行被ㇾ仰付ㇾ候ニ付、文政五午年金三百兩拜借、去未ゟ辰迄拾ヶ年賦之內、當申年分上納申處仍如ㇾ件、

文政七申年十二月　　泉本正助印

堀內小膳殿

幕府貸金返納法

嵩候事、都而難儀之筋ニ相成、且ハ御年貢取立等ニも差障可申義ニ付、以來御料所村江貸附之義、容易ニ申付間敷旨、安永年中被仰出候、

（天明集成絲綸錄四十一）安永九子年十二月

御勘定奉行江

宗猪三郎

前々ゟ之拜借金返納棄捐之儀被相願候、棄捐之儀者難成子細有之、當年ゟ五ヶ年之間年延被仰付候ば、御勘定奉行江可被談候、

右之通、宗猪三郎江相達候間、可被得其意候、

（天明集成絲綸錄四十二）天明二寅年六月

御勘定奉行江

久世大和守

明和六巳年以來、度々之拜借返納殘金貳萬九千五百兩有之候處、年來勝手向至而不如意之由、返納可爲難儀候、幼年之節、御側近相勤、其上當時勤柄之儀ニ付、格別之思召を以、當寅ゟ亥迄、十ヶ年者、一ヶ年金四百兩宛、來ル子ゟ子迄一ヶ年金七百兩宛、末之子年者金三百兩之積、都合四拾七ヶ年賦ニ可致返納旨被仰出候、

右之通可被得其意候、

（幕府政法雜錄一）天明三卯年十二月廿三日

御側　高井兵部少輔

西丸　小堀土佐守

其方知行所、當年半毛餘損毛有之、可爲難儀思召候、勤柄之儀ニも有之候間、金五百兩宛、拜借被仰

旨被仰立候趣、無御餘儀筋ニ相聞候間、格別之譯ヲ以、當辰年より午年迄三ヶ年之間、年延被仰出候、來ル未年より、割合之通御返納有之候樣可被申上候、

右之通、紀伊殿家老衆江相達候間、可被得其意候、

文化十三子年十二月

御勘定奉行江

水戸殿御勝手向御不如意之處、差當當年御不足金三萬兩程、此節ニ至御差支之趣、猶又被仰立候次第、無御據筋ニ付、格別之譯ヲ以、此度金壹萬兩拜借被仰出候、來丑年ゟ十ヶ年賦御返納可被成候、且又去暮御守殿御入用之方江御取替被遣候金五千兩當暮不及御返納、是又來丑ノ年より十ヶ年賦御返納可被成候、此段可被申上候、此後御拜借又者御取替金等之儀被仰立候共、容易ニ難被及御沙汰候間、其段も可被申上置候、

右之通、水戸殿家老江相達候間、可被得其意候、

(天明集成絲綸錄三十八)寶暦十一巳年二月

大目付江

諸拜借金被仰付候面々之內、銀ニて相渡返納ハ金ニて相納候樣相達候分、此以後ハ金ニて成共、銀ニて成共、勝手次第可相納候、尤金ニて相渡候分ハ、返納も金ニて相納候儀、勿論之事候、

右之趣、拜借金有之面々へ可被相達候、

(例書一)一公儀御貸附金、幷堂上方、寺社方貸附金、近年別而多相成來、在々夫食貸ニ而も、年々返納滯り候而者、百姓之爲不宜ニ付、御料私領一統風水旱損手當等有之節者格別、通例之事ニ者不貸附方末々百姓方之爲ニ相成候事ニ候段、享保十八巳年、寛保三亥年被仰出、夫食之事ニ而も、右之通ニ候處、村方貸附高追々相增候而者、如何ニ候、畢竟借請候節者、勝手ニ相成候而も、年々返納相

付候、上納之儀者、來卯年ゟ貳拾ヶ年賦可有返納候、且領分堤川除普請之儀者取調、追而可被相願候、尤御勘定奉行可被承合候、

右之通、榊原式部大輔江相達候間、可被得其意候、

十月

〔天明集成絲綸錄四十三〕天明七未年四月

御勘定奉行江

金五千兩

右者近々定姫御方御婚姻ニ付、御入用も可被為在と被進候御金之儀者、御勘定奉行相談可被請取候、

一田安領之儀、打續物入多、婚姻方入用ニ可相立手段無之旨、品々被申立、誠ニ無據儀ニ付、被進候御金五千兩之外ニ、御内々ニ而金五千兩拜借被仰出候、返納之儀者、當暮三千兩、來暮貳千兩上納候樣可被致候、右ニ付先達而拜借金之內、當暮上納可有之分金三千五百兩者、御差延被仰出候、尤御勘定奉行可被談候、

右之通、田安附家老江、於奥御側衆ゟ達有之候間、相談可被渡候、

四月

〔天保集成絲綸錄八十七〕文化五辰年十一月

御勘定奉行江

紀伊殿御勝手向、近年御取締被相直、御拜借方之儀、規則も相立候處、去年御領分大風雨ニ而、御收納向相減候上、當年之儀も暴風、其上雨天打續、御收納多分之御損毛、其外破損所等も不少、救方費用も多、御難澁ニ付、去ゝ年相達置候御返納金殘四萬五千兩之儀、暫上納御猶豫被在之度

一五拾石より九拾石迄　金拾四両　一百石　同貳拾両
一二百石　同四拾両　一三百石ヨリ六百石迄　同六拾両
一七百石ヨリ九百石迄　同百両　一千石ヨリ二千石迄　同貳百両
一三千石ヨリ四千石迄　同三百両　一五千石より九千石迄　同四百両

右上納之義ハ、十ケ年賦ニ返納可ㇾ仕候事、
但金子請取候儀ハ、至ㇾ來春ㇾ御勘定奉行江可ㇾ談候、
以上

右之趣、向々江可ㇾ被ㇾ相觸ㇾ候、
十二月

〔天明集成絲綸録四十一〕安永九子年正月
御勘定奉行江
今度城取建候ニ付、金貳千両拜借被ㇾ仰付ㇾ候、上納之儀者、來巳年ゟ十ケ年ニ上納可ㇾ有ㇾ之候、
酒井石見守
右之通可ㇾ被ㇾ得ㇾ其意ㇾ候、

〔天明集成絲綸録四十二〕天明二寅年十月
御勘定奉行江
榊原式部大輔
領知所替以後、先領知ゟ收納相減、年來及ㇾ困窮、此節ニ至差詰難ㇾ取續ㇾニ付、御手當之儀内々被ㇾ相願ㇾ候所替以後收納相減候儀者、承知候事ニ付、兼而其覺悟可ㇾ有ㇾ之儀ニ付、願之趣難ㇾ被ㇾ及ㇾ御沙汰ㇾ事候得共、家筋被ㇾ思召、格別之御沙汰を以、爲ㇾ御手當ㇾ金壹萬両、并淺川領分爲ㇾ御手當ㇾ金三千両拜借被ㇾ仰

一御扶持方計取候者ハ、拾人扶持を五拾俵積たるべき事、
但御切米ニ附候扶持方ハ、高之外ニ候間除候事、
右之通ニ可相心得候、以上、
十二月

〔享保集成絲綸錄三十一〕覺
一牛込御門之外神樂坂邊、前々蠣殼葺ニ被仰付、又者自分ニ而蠣殼葺仕、此度類燒仕候面々蠣殼葺可仕候、拜借被仰付事、〇中略

一三拾俵以下　金三兩
一三十俵より四十俵迄　同五兩
一五十俵より七十俵迄　同七兩
一八十俵より九十俵迄　同拾兩
一百俵　同拾五兩
一貳百俵　同貳拾兩
一三百石より五百石迄　同三拾兩
一六百石より七百石迄　同四十兩
一八百石より九百石迄　同五拾兩
一千石より貳千石迄　同七拾兩
一三千石より四千石迄　同百兩
一五千石より九千石迄　同百五十兩

右上納之儀者、十〇年〇賦ニ返納可仕候事、以上、
五月（享保十七年）

元文元辰十二月
神田橋外、猿樂町、三河町、駿河臺邊、家作瓦葺ニ可仕候、依之右之面々、左之通拜借被仰付候、部屋仕之者ハ、高半分之割を以拜借被仰付、巳三月より九月晦日迄ニ、家作不殘瓦葺出來候樣ニ可致事、
〇中略

拜借金高割

近年打續米下直ニ付、何も勝手難儀仕候由、度々儉約之儀、被仰出候得共、諸人花美ニ成來、其心不相止候、來春ハ、急度儉約之儀可被仰出候、先其内も致勘辨、何分ニも勝手取續候樣可仕候、一兩年、格別米下直之故、小身之者共ハ、差當勝手別而及困窮候段相聞候、依之當暮取續之ため、御奉公相勤候、五百石以下末々之者迄、地方取、御切米取共、拜借金被仰付候、員數幷上納之年數之儀ハ、令張紙候之間、可被得其意候、以上、

十二月

張紙之寫

一五百石　金三拾兩

一四百石より四百九十石餘迄　金貳拾五兩

一三百石より三百九十石餘迄　金貳拾兩

一二百石より二百九十石餘迄　金拾五兩

一百五十石より百九十石餘迄　金拾兩

一百石より百四十石餘迄　金七兩

一七十俵より九十九俵迄　金六兩

一四十俵より六十九俵餘迄　金五兩

一三十俵より三十九俵餘迄　金三兩

一二十俵より二十九俵餘迄　金二兩

一二十俵以下　金一兩

右ハ御足高持高共ニ、五百石より以下之輩、御番衆、小役人、遠國小役人等、其外御徒、與力、同心、坊主、御小人、御中間、黑鍬之者、總而御譜代ニ而無之輕き者迄、御奉公勤候分江、拜借被仰付之、來亥暮より十ヶ年返納可仕候事、

一當時拜借有之者ハ、其上納相濟候以後、此度之拜借、十ヶ年ニ可返納事、

一御足高ニ而拜借候者、御役御免被成候歟、隱居家督ニ成候はゞ、御足高之分ハ上納ニ不及候間、以本高可有上納事、

一御役料ハ、高之外ニ候間相除候事、

其意候、

天明三卯年十二月

御勘定奉行江

松平右京亮

領分損毛ニ付、拝借金被相願候得共、不被及御沙汰候、先達而之拝借金、當暮上納之分貳千両御差延被下候、尤御勘定奉行江可被談候、

〔天明集成絲綸錄四十三〕天明六午年八月

御本丸西丸中之口江張置

出水ニ付拝借金割合之覺

一拾五石以下　金壹両　一拾五石より拾九石迄　金壹両貳分　一貳拾石より貳拾九石迄　金貳両

一三拾石より三拾九石迄　金三両　一四拾石より四拾九石迄　金四両　一五拾石より五拾九石迄　金五両

一六拾石より六拾九石迄　金六両　一七拾石より七拾九石迄　金七両　一八拾石より八拾九石迄　金八両

一九拾石より九拾九石迄　金九両　一百石より百四拾九石迄　金拾両　一百五拾石より百九拾九石迄　金拾五両

一貳百石ゟ貳百四拾九石迄　金貳拾両　一貳百五拾石ゟ貳百九拾九石迄　金貳拾五両　一三百石ゟ三百九拾九石迄　金三拾両

一四百石ゟ四百九拾九石迄　金四拾両　一五百石ゟ九百石迄　金五拾両　一千石ゟ九千石迄　金百両

但御切米取は百石百俵之積可相心得候、御扶持方計被下候もの者、壹人扶持五俵積金給之もの者、壹両ニ付壹石之積たるべく候、

右之通、可被相心得候、

〔享保集成絲綸錄三十一〕享保十五戌年十二月十五日

一御禮過、諸番頭諸役人組支配有之面々居残、拝借被仰出之、

拾萬石ゟ拾四萬九千石迄　同壹萬兩
拾五萬石ゟ拾九萬九千石迄　同壹萬貳千兩
貳拾萬石ゟ貳拾九萬九千石迄　同壹萬五千兩
參拾萬石以上　同貳萬兩

右之通、拜借被仰付候、金子之儀は於大坂可相渡候、上納之儀は來丑年ハ被成御用捨、來々寅年ゟ五ヶ年賦可有上納候、以上、

〔享保集成絲綸錄三十一〕享保十八丑年十一月

居屋鋪類燒、居城燒失地震等ニ而大破之節ハ各別領內損毛ニ而、拜借金上納差延願之義ハ、向後可爲無用事、

右之通、萬石以上以下共、可被達置候、以上、

〔勘契備忘記中〕享保十八丑年

領地損毛ニ而者、拜借金差延難成旨御書付、

一居屋敷類燒、居城燒失地震等ニ而大破之節は格別、領內損毛ニ而、拜借金上納差延願之儀ハ、向後無用ニ候事、

右之通、萬石以上以下共可被相達候、

巳十一月

〔天明集成絲綸錄四十二〕天明二寅年十二月

御勘定奉行江　水野出羽守

當年領分餘程損毛有之、勤柄之儀ニも候間、先達而之拜借金、當冬上納御差延被仰出候間、可被得

之候得共、間も無之、左樣ニ段々拜借金ハ相調不申候事ニ候、乍去兩度拜借有之候もの、最初之拜借金上納相濟候以後、五ヶ年之內、又候燒失ニ候ハヾ、其節者拜借可被仰付候、尤借宅者拜借不相調候、然レ共地を借り自分に作事仕候家貳度燒者、拜借被成候筈に候、

但遠國役人又者御役屋敷被罷在候者、本宅燒失候共、拜借無之筈ニ候、

巳三月

〔憲教類典拜借三ノ七〕享保十七壬子年九月廿八日

一西國四國中國領地、稻ニ虫付候場所之大名江於帝鑑之間雁之間大廊下拜借金被仰付候旨、以御書付松平左近將監殿被仰渡候之趣、

西國四國中國筋、當作毛夥敷虫附損毛之段、追々相聞候、常體之事候得ば不及御沙汰儀ニ候、火饑人は損毛等之樣子次第、品ニより參勤等御用捨も有之候得ば、一同之事故、左樣之儀ニも難被仰出候、然共此度格別之事ニ付而、當所務半物成以上不足之分江は、御料所も同前の事にて、夫食等御入用も多候間、被思召候程は難被遊事ニ候、用立候程ニは有間敷候得共、拜借金可被仰付候、物成之儀ニ付而は、杉岡佐渡守、細田丹後守、樣子承屆候上、拜借金相渡にて可有之候、但爲御禮西丸江罷出不及、并老中江相廻不及候、拜借金相渡候以後、老中右京大夫豐前守若年寄迄可被相廻候、

壹萬石ゟ壹萬九千石迄　金貳千兩
貳萬石ゟ三萬九千石迄　同參千兩
四萬石ゟ四萬九千石迄　同四千兩
五萬石ゟ六萬九千石迄　同五千兩
七萬石ゟ九萬九千石迄　同七千兩

一百石ゟ下之輩ハ、小給故増多被下之事、

一銀壹萬貫は、燒失之町中江被下之事、

一御留守居并町奉行衆江者、御預ヶ之屋敷作事料被下事、

二月九日〇中略

寛文九己酉年十一月

上納金子之事

一金何兩　誰

一金何兩　誰

合金何兩ニ小判　後藤庄三郎包

右是は戊申年類火ニ付、拜借被申候金子之内、當酉年分上納申候、我等共組ニ付如此ニ候、以上、

寛文九年酉十一月日　組頭誰判　番頭誰判

南條小兵衛殿

須田傳左衛門殿

西尾直四郎殿

〔御書付留要略二〕火事

一享保六巳年三月十四日、左之御書付、筧播磨守被差越候、

覺

一此度被仰出候拜借金之儀、五年以前、兩度以上居所燒失之面々共江拜借被仰付、翌年ゟ五ヶ年賦ニ上納之筈ニ候、此度拜借金仕候以後、若今明年ニも居所燒失之者も可有之候、其者共江も是又拜借可被仰付候、右之通、兩度迄拜借金被仰付候以後、近來之內居所燒失之者、自然と可有

一舞々猿樂町屋敷に在之分町中江被下候御金之内にて見計可被相渡候事、

二月

屋敷燒失之面々御金拜借幷被下覺

參百貫目　壹萬石ゟ壹萬五千石迄

同百三拾貫目　壹萬六千石ゟ貳萬五千石迄

同百五拾貫目　壹萬六千石ゟ三萬五千石迄

同百七拾貫目　三萬六千石ゟ四萬五千石迄

同貳百貫目　四萬六千石ゟ五萬五千石迄

同貳百三拾貫目　五萬六千石ゟ六萬五千石迄

同貳百五拾貫目　六萬六千石ゟ七萬五千石迄

同貳百七拾貫目　七萬六千石ゟ八萬五千石迄

同參百貫目　八萬六千石ゟ九萬九千石迄

右之通り被為借候、來戌年ゟ十ヶ年上納あるべき事、

一御扶持方ハ、御切米高ニ入申間敷事、

一御扶持方にて被下候面々者、壹人ニ付、米五俵ツヽ之積を以御金可被下事、

一幼少又は病者にて、御番不仕輩ニハ、被下候高を以御金可被為借事、

一百石金拾五兩　但九百石迄五拾石ニ五兩增

一千石ゟ金百兩　但千四百五拾石迄右同斷

一千五百石金百五十兩　但千九百五拾石迄右同斷、五千石まで五百石ニ付五拾兩、

一六千石金五百五拾兩　但六千四百九拾石迄五百石ニ付廿五兩

罹災者貸付

辰
三月

右之通、伺之上相極候、

〔天明集成絲綸錄四十一〕安永七戊年九月

御勘定奉行江

當年日光江相越候ニ付而、先達而、両度之拝借金、當多上納御差延被下候間、可被得其意候、

板倉佐渡守

〔天明集成絲綸錄四十二〕天明六午年九月

御勘定奉行江

駿府加番被仰付、急ニ罷越付而、金千両拝借被仰付候間、相談可被渡候、

岩城伊豫守

〔憲教類典三ノ七 拝借〕明暦三丁酉年二月

類火之面々御金拝領之覚

一所々在番或は御普請奉行、或火之番、或御役勤候寄合之面々者、知行高を以御金被下候事、

一抱屋敷、地子屋敷、親類屋敷、自身作事仕候面々ニは、拝領屋敷、御前知行切米高を以御金被下候事、

一親兄弟ニ掛り在之輩、借家之分、知行切米之三分一御金被下候事、

一醫師其外町屋拝領仕候輩者、御番衆並知行切米高を以御金被下事、但町中江被下候分は除可被下候事、

一御扶助之諸職人、町屋敷在之分は、町中江被下候御金之内にて可被相渡候事、

一御扶助之諸職人、屋敷不持分は、御切米高、亦御扶持方計取候者には、其高にて御金被下候事、

高五万石陣屋無レ之御代官
一金九拾両　拜借

右同断陣屋有レ之御代官
一金六拾両　右同断

高拾万石陣屋無レ之御代官
一金百四拾両　右同断

右同断陣屋有レ之御代官
一金七拾両　右同断

高拾五万石陣屋無レ之御代官
一金百八拾両　右同断

右同断陣屋有レ之御代官
一金百両　右同断

本文拜借之義、御代官被仰付候時、本文之通被レ下、其以後類燒仕候而も、拜借ニ及間敷哉、又は只今之通拜借被仰付候而可レ然哉、可申上旨奉承知、左ニ申上候、

一御役被仰付候節、家作料被レ下候へバ、類燒不レ仕候時ハ、御代官勝手ニ宜御座候へ共、類燒打續候時ハ、本文之入用程ニ家作早速不レ仕候而ハ難相成御座候、其節ハ拜借不レ被仰付候ハヽ、御年貢金取越候義ニも可罷成哉と奉レ存候、

一右之通ニ御座候間、只今之通、御役被仰付候時、幷類燒之時拜借被仰付方可レ然奉レ存候、

一右家作拜借、只今迄ハ被下候諸入用をはぶき、五ケ年返納ニ仕候へ共、此度相伺候通、諸入用掛候ハヽ、はぶき候金子も少く御座候ニ付、拾ケ年賦ニ返納被仰付可レ然奉レ存候、

此ケ條只今迄之通ニ極

一右返納不相濟内相果、又ハ御役退候ものハ、只今迄之通年數を相延し、御切米之内ニ而可レ成程返納爲レ仕候へバ、差支之儀無御座候、

此ケ條當人相果候ハヽ、棄捐ニ相成候積相極、

右は御用場手代家來等差置候爲、家作料關東上方之無差別、御代官被仰付候へバ、右之通之拜借被仰付、五ケ年ニ返納仕候、依レ之類燒仕候へバ、又右之高程拜借被仰付候、以上、

一金七拾両　二條御城御門番之頭
一金六拾両　同御鐵炮奉行
一金七拾両　大坂御鐵炮奉行
一金七拾両　同御弓奉行
一金七拾両　同破損奉行
一金七拾両　同御具足奉行
一金七拾両　同御藏奉行
一金七拾両　同御金奉行

同斷ニ付被下金之分

寛政八辰年より
一金三拾両　駿府御武具奉行
天保十四卯年より
一金百両　長崎奉行支配組頭
寛政三亥年より
一金五拾両　日光奉行支配組頭
寶暦八寅年より
一金七拾両　佐渡奉行支配組頭
天保十四卯年より
一金五拾両　新潟奉行支配組頭
一金三拾両　二條御藏奉行
安永三午年より
一金五拾両　禁裏御賄頭

〔勘定所條例 二〕享保二十一辰年
御代官拜借之書付

御代官拜借之義、上方御代官ハ金貳百両、關東御代官ハ金百両、御代官所高之無差別、御役被仰付候時拜借、翌年ゟ貳ヶ年ニ返納仕候處、享保十巳年、諸入用被下候時ゟ相止、左之通拜借被仰付候、

一金七拾両　同御具足奉行
一金七拾両　同御藏奉行
一金七拾両　同御金奉行
一金七拾両　二條御門番頭
一金六拾両　同御鐵炮奉行
一金三拾両　禁裏御賄頭
是迄拾ヶ年賦返納之積
一金千両　長崎奉行
是者拜借被仰付候翌年暮上納之例
一金三拾両　二條御藏奉行
是者拜借は無之、彼地江引越候節、書面之通被下之、
一金三百両　新潟奉行
是者拾ヶ年賦
一金五拾両　日光奉行支配組頭
一金五拾両　新潟奉行支配組頭
一金三拾両　同支配廣間役
一金貳拾両　同支配定役
一金拾五両　同支配並役
是者いづれも引越料として被下之
遠國小役人引越ニ付拜借金之定

居大炊頭殿被仰渡候間、可被得其意候、尤御金請拂之義者、岡保右衛門江申渡候、

辰正月

幕府無利息貸金

〔吹塵錄二十九徳川氏五〕諸國御役人拜借金高書

一金壹萬兩　大坂御城代
一金三千兩　大坂御定番
一金貳千兩　伏見奉行
一金千五百兩　駿府御城代
一金四百兩　駿府御定番
一金五百兩　大坂町奉行
一金三百兩　京都町奉行
一金三百兩　奈良奉行
一金三百兩　駿府町奉行
一金三百兩　山田奉行
一金三百兩　佐渡奉行
一金貳百兩　日光奉行
一金三百兩　堺奉行
一金三百兩　大坂御船手
一金三百兩　御所附
一金七拾兩　大坂御破損奉行
一金七拾兩　同御鐵炮奉行

我等幷傾町屋敷屋、各方江相願、地代店賃引當、御仕法付之外、此度金何程借用申處實正也、返濟之儀者、町役諸入用之多少不拘、仕拂御仕法付幷新借共、書面割合之通、每月幾日迄ニ無相違家守誰致持參相濟可申候、縱類燒等之義有之候共、右極之通、無相違差出可申候、右家屋敷地代店賃外引當等ニ致し置候儀無之、勿論諸親類其外何方よりも構申者無御座候、

右之通致規定候上者、毛頭違背致間敷候、自然年季之內、當人何樣之違變有之候共、町役人連印仕候儀ニ付、元利金急度取立相濟、少も滯無之樣可致、尤右幷傾町屋敷間敷等、相違無御座候、爲後日年季定證文仍如件、

年號月日

何支配何役

借主　誰印

家守　誰印

五人組　誰印

同　誰印

名主　誰印

御勘定所御用達中

〔牧民金鑑十二〕弘化元辰年正月

申渡

柴田善之丞

竹尾淸右衞門

豐田藤之進〇中略

馬喰町御用屋敷詰御。代。官。取。扱。御。貸。付。金。御。主。法。替。被。仰。出。候。ニ付、向後自分共、吟味役取扱候樣、土

武藏國村々社倉金御貸附　甲斐國勵錢御貸附
越後國水原村外壹ヶ村差出金御貸附　武藏國目沼村寄持物差出金御貸附
備中國龍納鐵代御貸附　關東筋村積金御貸附
石見國凶年手當銀御貸附　右同國急難夫食手當御貸附

右御貸附金銀之義、貸渡其外取計方之義ハ、是迄被相伺、且金銀高仕譯書等、年々被相屆候向も有之候得共、仕譯等不被差出分も有之候間、當酉年分ゟ以來、年々元利有高遣拂、其外等巨細ニ相認メ、美濃紙書面ニいたし、來戌春、早々可被差出候、尤遠國之分ハ、四月中迄ニ無相違可被差出候、

但取扱候御貸附無之分ハ、名前之上江其段可被相認候、

酉八月

(貸附金無利足年賦濟一件)天保十五年辰三月

拜領地類燒拾ヶ年賦御貸附證文

地代店賃引當借用金證文之事

一金何程

內

金何程

但右拜借返納殘當辰より亥迄、無利足貳拾ヶ年賦、閏月を除、一ヶ月金何程とも返納之積、

金何程

但類燒ニ付增拜借之分、年三分之利足を加へ、當辰何月より向百貳拾ヶ月ニ割合、壹ヶ月金何程とも返納之積、

右者何町何町目何側何角より何軒目、表京間田舎間何間裏幅何間、裏行何程、此坪數何百何拾坪有之、

敷幷遠國御代官御領所取扱之分、一同打込、壹人別、右金高之割合ニ相心得可ㇾ申哉、勿論金四兩取立之內、金貳兩貳分ハ元金五拾兩五分之利足ニ而、殘金壹兩貳分ハ、利付五拾兩之元金與相心得、金五拾兩以下之分ハ、五分利足丈ケ差引、其餘ハ元金ニ而取立候儀ニ相心得可ㇾ申哉ニ奉ㇾ存候、右元利金四兩之內利足御遣方ニ相成來候分ハ、右之內江渡方ニ可ㇾ仕候哉、元金ハ御貸出しニ相成候哉、

但去ル寅年以來、利足不納之分、元ニ加候儀者、壹人別金高御取極迄之不納を元ニ加候儀與相心得可ㇾ申哉ニ奉ㇾ存候、

朱書御附札
書面初ケ條之內、元金取立候分、御金藏納或ハ下ゲ戻等ニ可ㇾ相成、元極之廉も有ㇾ之候ハヾ、元極之通取計、其外都而伺之通り可ㇾ被ㇾ取計候、

但寅年以來、利足不納之分、元ニ加候儀ハ、去卯年十二月迄之利足不納之分は、元ニ加へ、當正月分ゟ御主法之通利下ゲ、無利足等ニ相成候間、其旨可ㇾ被ㇾ相心得候、當正月以來不納元利之內江相納候分も有ㇾ之候ハヾ、右取計方ハ猶追而可ㇾ被ㇾ相伺候、

文政八酉年八月

申達

御貯麥御拂代御貸附　　取集穀拂代御貸附
元清水殿領知中下ゲ金御貸附　　御國籾欠減償方御手當御貸附
繩筵拂代御貸附　　上總國村々差出金御貸附
飛驒國村々同斷御貸附　　甲斐國御廻米陸附助成御貸附
遠江國中泉村寄持金御貸附　　遠三州不熟米石代仕埋御貸附
三河國水難潰百姓助合金御貸附　　河內國貯夫食稼増御貸附

ニ而、何ニ歟取締不レ宜方ニ世評請候基ニ有レ之、且者前書之通、切角貸過無レ之様、目當之金高相定置候而も、御貸附役所ニ而、其金高程借受候者、後日之手限御貸附金有レ之役所江申込候得ハ、又候右目當金高迄者、貸渡候様之儀も可レ有レ之哉ニ付、旁以自分申込置候名順者、御貸附役所之分手限之分共、其無二差別一夫々申込候月日を以、同日之分ハ分限高少キ方を先ニ立、一體打込之順可レ被二相立一、銘々役所ニ扣、自分役所江も扣江差置、新規申込有レ之、又ハ貸出候度々、其役所ニ而相屆候様可レ被二取計一候、

寅六月

〔牧民金鑑十二〕水出羽守殿被レ成二御渡一候御書付

御勘定奉行江

馬喰町御用屋敷、并遠國御代官御領所ニおゐて取扱候御貸附金、地頭之入用ニ而、去丑年迄追々借請候分、直印之證文ニ書替、其後季明倘又證文出替候分共、知行高百石ニ付金三十兩餘ゟ五拾兩餘之借請高ニ及候分ハ、當辰年ゟ五拾兩迄ハ利足年五分ニ引下ゲ、其餘ハ可レ爲二無利足一候、納方之儀ハ、高百石ニ付、壹年元利合金四兩ヅヽ可レ被二相納一候、

但去ル寅年以來、利金不納之分ハ元に加、本文同斷之事、

文政三辰年八月

私共取扱候御貸附金銀納方之儀、萬石以下之向々江被二仰渡一候ニ付、心得方之儀左ニ奉レ伺候、

一初ケ條高百石ニ付金三拾兩餘ゟ五拾兩餘之借金高ニ及候分、當辰年ゟ五拾兩迄ハ利足五分ニ引下ゲ、其餘無利足ニ而、元利之内壹ケ年金四兩ヅヽ取立候儀ハ、高百石ニ付三拾兩以上借請高之分、金五拾兩迄ハ利足五分ニ引下ゲ、其餘之借請高ニ相當候分ハ、何程の金高ニ候とも、高百石ニ付五拾兩丈ケ五分之利足ニ引下ゲ、其餘無利足之積相心得可レ申哉、尤馬喰町御用屋

辰八月

松　左近將監
安　藝　守
水　和泉守

津田外記殿

朱書
松平者、享保八ゟ延享二迄、安藤者、享保七ゟ同九十一月迄、水野者、享保二ゟ同十五迄御老中也、是ニ寄而考れば、この辰者、享保九辰年也、

〔牧民金鑑十二〕寛政五年丑十二月

申渡

先達而被申立候諸入用御手當金之儀、松伊豆守殿江相伺候處、郡而御貸附取扱候御代官江ハ、利金歩合被下候ニ付、其譯を以、御貸付利金之壹分通七百四十八兩餘之内、五百貳拾三兩餘、御代官五人江御貸付之方、爲諸入用被下之、尤右之内ニ而、銘々御役宅手代長屋等少破之内致修復、殘貳百貳拾五兩餘ハ、村々急難爲御手當郡代江預置可申旨被仰渡候間、可被得意候、以上、

丑十二月

寛政六寅年六月

申渡

御貸附金貸出方之儀、諸家萬石以上以下共、夫々分限高ニ應じ、貸過無之樣、萬石當り、百石當り等割合相定置、役所へ申込候順を以、有金次第貸出候積り、先達ヲ各伺之上申渡候間、銘々手限之御貸附金迚も、右ニ准じ可被取計儀ニ候處、急而御貸附金借受度旨申込置候人々之内、何某ハ御代官誰方へ近頃申込候處、早速ニ貸渡有之、何某ハ去年何月御代官誰方江申込候得共、今以貸渡無之、同じ郡代附ニ而も、人々ニ寄候哉、取扱方ニ内々之譯ニ而も有之哉抔、浮説致し候輩も有之哉

或ハ後世ノ日歩ノ如ク、毎日計算シテ利ヲ收メシモアリテ、其收ムル所ノ利、實ニ本錢ノ一倍ヲ超過スルモノ多シ、蓋シ當時各地政ヲ異ニシ、貸借ノ法必ズシモ同ジカラズ、加フルニ人民恣ニ契約シテ、初ヨリ多利ヲ貪リシアラン、或ハ過期ヲ責メ、更ニ猶豫ノ期限ヲ與ヘテ利ヲ加收セシモアラン、今其輕重多寡ヲ詳ニスル能ハズ、而シテ利息ヲ稱シテ利分ト云ヒ、利平ト云ヒ、其過當ノ利ヲ高利ト云フ、又借物ヲ償還スルニハ、金ヲ借リ米ヲ以テ償フアリ、米ヲ借リ金ヲ以テ償フアリ、或ハ抵當地ノ年貢及ビ地子ヲ以テ償ヒシモアリ、若シ負債者逃亡スレバ、請人ヲシテ代償セシメ、又返期ヲ過グレバ、兩情和同ノ後、抵當地ヲ賣リ、其價ヲ以テ償還セシムルアリ、猶ホ質物篇ヲ參看スベシ、

足利幕府ノ中葉以降、天下喪亂シ、公私一般衰弊セシニ由リテ、貸借ノコト頻繁ニ至ル、加之幕府往々人民ノ物ヲ借リ、之ヲ償フノ途ナキニ由リテ、屢、負債ヲ債主ニ償還セザルノ令ヲ發シ、之ヲ德政ト稱セリ、是レ幕府、人民ヲ利スルヲ以テ名トシ、實ハ幕府自ラ其利ヲ謀リシナリ、事ハ德政篇ニ詳ナリ、

賭錢ノ事ハ、又法律部下編博奕篇ニ在リ、宜シク參看スベシ、

幕府貸金

〔地方大意〕駿州貸附金之儀ニ付、駿府町奉行江渡候御書付、

一去年被申聞候、其地町方在方拜借金、江戸納ニ可相成分、六百六拾六兩之儀、拾ヶ年差延取立、江戸江上納仕度由被申越候得共、差延之儀相止、尚辰暮ゟ申暮迄五ヶ年取立、江戸江上納候樣可被致候事、

一只今迄、其表役所御用ニ付、入用壹ヶ月金五拾兩迄者町拜借貸附金之利足之内を拂、五拾兩以上者江戸江被申越可被請取事、

右之趣可被得其意候、猶又被承合候儀も候ハヾ、御勘定奉行江可申越候、以上、

古事類苑

政治部八十六

下編

貸借上 無盡 併入

鎌倉幕府創立ノ後ハ、古代ノ公出擧ノ制全ク廢絶シテ、私出擧ノ事ノミ行ハル、而シテ其出擧ノ稱ハ、慶長年間ニ至ルマデ猶ホ存セリ、然レドモ當時出擧ト稱スルコトハ漸ク少クシテ、多クハ借物、借錢、借米、借用米ト云ヘリ、而シテ其契約ヲ結ブニハ、必ズ證書ヲ作リ、利子及ビ抵當ヲ記入シ、請人連署シテ之ヲ債主ニ納レ、以テ後日ノ證憑ニ供フ、之ヲ借狀借書、契狀若シクハ證文ト稱ス、然レドモ或ハ無抵當ナルモアリテ、其利子ハ契約ニ隨ヒテ、一年或ハ一月每ニ債主ニ納レ、且其利息ノ制法ハ、時ニ依リテ沿革アレドモ、大約從前ノ制ニ準據シテ、私出擧ノ利ハ一倍ヲ過ギ、擧錢ノ利ハ半倍ヲ過グルヲ得ズ、而シテ永享中ニハ、十年以內ニテハ一倍ニ過グルヲ得ザレド、若シ二十年ヲ過グレバ、本利三倍ヲ以テ償還スルノ制ヲ立テシ事アリ、一倍トハ王朝時代ノ出擧ノ制ヲ承ケ、卽チ一本一利ヲ云ヘルニテ、一年或ハ一月ノ利、幾何タルヲ定メザルハ、蓋シ各自ノ契約ニ任セシモノナルベシ、今當時ノ借書ヲ通考スルニ、百文ノ利ヲ一月ニ三文(一年ニ三割六分ニ當ル)トシ、或ハ三文六分(一年ニ四割三分二厘ニ當ル)トシ、或ハ四文(一年ニ四割八分ニ當ル)トシ、或ハ五文(一年ニ六割ニ當ル)トシ、或ハ六文(一年ニ七割二分ニ當ル)トシ、或ハ七文(一年ニ八割四分ニ當ル)トセルモアリテ、祠堂錢ノ如キハ、百文ニ二文ノ利子ヲ納ル、ヲ制トシ、又借米ノ如キハ、五年ニ五倍ノ利ヲ收ムルモアリ、或ハ其利ヲ廻ラシテ本トシ、更ニ利子ヲ生ゼシメシアリ、

〔上諏訪神社文書五〕諏方上宮祭禮退轉之所再興次第〇中略

一大島之鄕より、六百文之湛祭儀者上なしと號して總百姓等勤之、然ニ水ニ流のよし申拔、百姓難澀五百錢を以致其償之由候、無田畠則何有水損乎、速ニ六百文之分を以神主源右衛門勤之べし、〇中略

茲時永祿八乙丑年十二月十日

大祝殿　神長官殿

〔駿河國新風土記二十政理〕一竹籔有之者、年中ニ公方江五十本地頭江五十本可出之事、〇中略

天正十七年七月七日　天三兵例

何村

百姓中

〔諸問屋再興調十五〕寛政五巳年町觸

町方結髮共者、組合を定、役をも勤來候處、近來組合ニも不入、無役ニ而所々江入込、髮結渡世致候もの共增長致し、猥りニ成候段、不埒之至候、向後仲間不入者、髮結渡世決而致間敷候、此上若相背もの於有之ハ、吟味之上、急度可申付候、

右之通、町中可觸知もの也、

七月十九日

八月廿四日

一慶忍專當、昨日入滅、十餘年罪科人也、故筒井順永律師之奈良代官也、奈良中之惡行申沙汰者也、大明神大罰之故、子息以下一門緣者大略滅亡之後、則體又如此云々、大邊惡行始之事、

一不謂兩門跡御領中人夫召仕之、奈良巡京上剩田舍邊召之、出陣之楯以下持之、七郷東大寺郷以下無所殘者也、是一、

一雨乞相舞在之、其郷々ニ相舞錢ト号シテ、一番別一貫文百二十貫懸取之事、是二、

一地口錢、念比ニ百姓相替在所一々ニ切取之事、是三、

一有德錢ト號シテ、人々ニ大小料足懸之事、是四、

此事後ニハ郷錢ト號シテ、一郷宛ニ懸之也、

一於東大寺郷、製裟用途ト號シテ懸之事、是五

一寺番匠以下京上奈良巡等人夫役事

如此等新儀非法ハ、不知其數者也、

〔鶴岡事書日記〕

上使

一綿貫雜玄佐坪下道用途事（三百文下行、一人分十二文宛定〇五月十六日）

（矢古宇書下案）去年就坪役事、以御年貢內可切留之由、申條無其謂、皆爲地下役之由、被成書下候處、候不能叁上、不事向、致其辨之由申候、各以年貢內令未進之條、甚以自由之奸謀也、所詮就此夏麥可令皆濟之由、百姓等可被申付、不可有緩怠之儀之狀如件、

應永二年五月十六日　法印

矢古宇公文殿

明德四年十一月廿六日　左衛門佐源朝臣在判義將

○按ズルニ、閏月役ハ、閏月アル年ニ、別ニ此月ノ役ヲ課スルナラン、

〔甲陽軍鑑品第五十三十九〕侍衆、我所領の百姓年貢諸役等に付て、私儀有ば、過錢を以て、地頭へ侘言可仕候、但御國法相背者は、大形の科にて免し過錢出し候は丶、是も御職へ差上べく候、必私有べからざるものなり、如件、

天正五丁丑年十二月吉日　高坂彈正尹也

〔大乘院寺社雜事記〕文明十二年八月廿日一乘郷民等歎申入、自古市方人夫申懸、於于今者可逐電云々、此子細仰遣古市、總而兩門領知爲衆中召仕事故、筒井律師順永之時より爲應忍專當奉行召仕初了、以此例又古市召仕、剩郷錢相舞錢等相懸之、於領主者一向令見所體也、珍事々々、如今日者奈良中大略可滅亡云々、

〔田中敎忠所藏文書乾〕中御門殿敷地以下、神祇官修造地口事、所致免許也、仍達執如件、

永享七十一月十九日　口家判

〔古文零聚三〕段錢、棟別、地口、臨時課役以下、向後深可令爲免除之由、所々仰下也、仍執達如件、

文明十八年六月十七日　對馬守

東寺雜掌中　沙彌

〔大乘院寺社雜事記〕延德四年六月卅日

一奈良中雜務間事可停止條々

一地口錢事、社頭造營要脚令不足者、隨宜可相催之歟、其外雜務方以下可停止事、

一近來號郷錢、號相撲錢、號有德錢、號袈裟錢、非分新儀有之云々、幷落取濫支錢事等條々惡行、奈良中迷惑不可過之歟、自今以後、堅以可停止之事、

○按ズルニ、篝役ノ事ハ、官位部鎌倉職員編遠國職篇六波羅探題ノ條下ニ在リ、

垸飯役

〔吾妻鏡 五十〕文應二年〇弘長元年二月廿日壬子、修理替物用途、幷垸飯役事、充課百姓事、永停止之、以地頭得分可致沙汰之由被定之、

○按ズルニ、垸飯役ノ事ハ、禮式部饗禮篇垸飯ノ條ニ在リ、

普請役

〔見聞雜錄〕掛川の城主には、氏眞を入守護する勢、朝比奈備中守を大將として、其勢わづかに七百人、男女雜兵千に不足、併近年備中は、三浦が取成故、氏眞の氣に背き、駿府へも出仕せず、剩軍役普請役等も不勤、

〔小田原衆所領役帳〕二十六貫五百三十六文、勝之内廣野、御普請時半役、　五十貫文、下中村總領分之内、渡邊左衛門、大普請半役、今度被致上、知行致可申付、

〔續撰清正記 六〕家中への知行割の事
扨役は知行請取て後に、〇中略千石に十人出し、二月二日より、十二月晦日迄、普請役いたし候也、若未進あれば、一人に付、米五升づゝ、極月に出し申候也、

小普請役

〔明良帶錄 後編〕小普請
享保以前、御留守居無役無勤の者、御城幷御番城二三の丸御門の高石垣破損繕、草取人足、高に應じて出したり、夫故小普請といふ名目あり、是を主役とす、貞享元祿の頃より金納と成る、是を小普請金といふ、百石二兩の割合なり、〇中略小普請金ハ、月番にて取集るゆへ、金集手傳を組の羽織格に申付たり、

○按ズルニ、小普請役ノ事ハ官位部德川氏職員編寄合小普請篇ニ在リ、

閏月役

〔建武以來追加〕閏月役事
既被定員數之上者、曾不可有加增之儀矣、〇中略

侍役

大番役

香錢
番代錢

篝役

文治三年九月十三日　平〇盛時

〔吾妻鏡　二十三〕建保六年三月廿三日甲午、今日依爲良辰、勅使重継〇中略參御所、日次不宜之間、日來不令謁給、逗留之程、爲御家人等役、毎日經營于勅使、

〔吾妻鏡　四十九〕正元二年〇文應元年十二月廿五日戊午、京上所役事、有其沙汰、今日被定法云云、〇中略

一地頭補任所々內御家人大番役事

先々御家人役勤仕之輩者、可爲守護催促事、

〔長曾我部元親式目〕諸侍之役之事、銀役に定、但物成米五十石に付て、壹人役也、壹人に付、銀貳分五厘宛、正月十六日より、六月限迄、附拂之儀者、米にても、銀にても、勝手次第可爲事、〇中略

慶長二丁酉年三月朔日　元親

〔吾妻鏡　十六〕建久十年〇正治元年九月十七日丙午、京都大番役、依有懈緩之聞、可加催促之旨、被仰諸國守護人等云云、廣元朝臣幷景時奉行之、

〇按ズルニ、大番役ノ事ハ、官位部鎌倉職員編地頭篇ニ在リ

〔大館常興日記〕天文九年三月十七日、佐方より各へ申市次郎言上、三上番代錢未進千八百匹云々事、幷東山より田地細川典厩被官山本孫四郎預望、此儀意見御尋之事候、未落著候處、京兆より山本かたへ可被成下知との事、先以可被相傳申段、御使可被立之由事、三上番代儀、定雖不可有疎略、違亂より如此と存候、然共申合上は、知行於無相違は、早々可有其沙汰由被仰て可然存候、將又就東山田地儀、京兆への御使事、各如御事書無別儀由、兩條如此申之也、　十年十二月廿二日、道祖千代方より御番錢三百匹運上之云々、取次同前〇諏富也、

〔吾妻鏡　三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年六月十九日壬戌、爲洛中警衛、出辻々可燒篝之由被定、仍被充催□役於御家人等云云、

仰付御書付、○中略一知行役の人數、先例武具等、一樣も無欠所、支度之事、或人云、知行とは、近年のこと也、古來は所領と云しと云々、是大なる誤也、元龜元年、信玄上方在陣の新式に如此、

所領役

〔長曾我部元親百箇條〕一知行役作毛勿論、不寄大小事、堅固可相勤、若材木出普請等、於遲參仕者、日數一倍、可爲科役、并賭巳下無沙汰候者、是又一倍にて可有運上事、○中略

慶長二年三月廿四日　盛親在判
元親在判

〔快元僧都記〕天文二年三月十二日、假殿下地被引誘、大道寺藏人佐、太田兵庫助、後藤左京亮巳下奉行、皆以所領役、諸侍間別請取、普請不恥昔者也、三年六月廿四日己未、所領役々、各家老中、去年造營之出錢被仰付、諸侍神人之爲奉公、末代之龜鏡之間、一點無拘惜云々、

武家役

〔太平記三十九〕諸大名讒道朝事

抑此管領職ト申ハ、將軍家ニモ、宗徒ノ一族ナリケレバ、誰カハ其職ヲ猜ム人モ有ベキ、又關東ノ盛ナリシ世ヲモ、見給ヒタリシ人ナレバ、禮儀法度モサスガニ、今ノ人ノ樣ニハ有マジケレバ、是誠ニ武家ノ世ヲモ治ンズル人ヨト覺エケルニ、諸人ノ心ニ違事ノミアリテ、終ニ身ヲ失レケルモ、只春日大明神ノ冥慮ナリト覺エタリ、諸人ノ心ニ違ケル事ハ、一ニハ近年日本國ノ地頭御家人ノ所領ニ、五十分一ノ武家役ヲ毎年カケラレケルヲ、此管領ノ時ニ、二十分一ニナサル、是天下ノ先例ニアラズト、憤リヲ含ム所ナリ、

家人役

〔吾妻鏡七〕文治三年九月十三日辛亥、攝津國在廳以下、并御室御領間事、被定其法、今日爲北條殿奉可得其意之由、所被仰遣三條左衞門尉之許也、其狀云、

攝津國、爲平家追討跡、無安堵之輩云云、○中略抑御室御領所稱數輩之寺官、充催御家人役之由、有御訴訟、所詮三人寺官之外、可止他人妨之由、被申御返事、可相存其旨、依仰執達如件、

仁治二年三月廿七日

主殿頭小槻宿禰

〔上諏訪神社文書四〕諏方下社祭祀數年退轉之分、今茲永祿八年乙丑十一月朔日、令再興加下知次第、〇中略

一正月六日、大和、高木、富郡、辰野、山田、右五鄕より相勤神事之儀者、爲地頭役調之、聊無懈怠可執沙汰、山田之鄕之義者、無里之長之間、六人之宮奉行申合可勤之、就而神事當役人輪次者、宜守先例之事、〇中略

宮奉行

竹居祝〇中略

追加

一宮公事等、可爲如前々之事、

以上

〔北條五代記五〕昔矢軍の事

見しは昔、關東諸國に、弓矢をとり、東西南北において、たゝかひやんことなし、去程に、侍たる人は、鐵炮をみがき、藥をあはせ、弓の弦をさし、矢を作、うつ木靑木などにて、木鋒をけづるにいとまあらず、扨又鏃を木鋒のごとくうちのべ、さきをのみのごとく作り、矢の根とす、是をすやきと名付、每年七月には、七夕の矢と號し、大名小名知行役に、主人へ上る、十筋の内、五ツはすやき、五ツは木鋒、いつれも是を數矢と名付たり、

〔小田原衆所領役帳〕松田因幡百三貫九百七十一文、四郡壬子撿地辻今井鄕半分、知行役、御免出錢者中役、有御印判、

〔見聞雜錄〕信玄其としは、御出陣之支度、遠國陣之ならしを被仰付、殊更十八ヶ條之新式之掟を被

神妙之至、御感不斜也、依茲手前代官所有次第、三萬七千石令加增畢、本知合十萬石之內、壹萬石者、可爲無役、諸侯之內、臆病者於有之者、被御闕所、猶以可被加國守之條、全命可抽眞忠之狀如件、

文祿三年九月日　秀吉御朱印

加藤左馬助どのへ

大名以下諸士役

〔吾妻鏡 十五〕建久六年八月廿九日辛巳、鶴岡上下宮常灯油事、爲大名等役、被結番每月可進之由、日來被定仰之處、間有對捍之間、仍今日加增人數、結番每日也、是則就少爲解緩也、

守護役

〔御成敗式目〕一諸國守護人奉行事

右右大將家〇源賴朝御時、所被定置者、大番催促、謀叛、殺害人〇註略等事也、而至近年分補代官於郡鄉、充課公事於庄保、非國司而妨國務、非地頭而貪地利、所行之企甚以無道也、抑雖爲重代御家人、無當時之所帶者、不能驅催、兼又所々下司、庄官以下、假其名於御家人、對捍國司領家下知云々、如然之輩、可勤守護役之由、縱雖望申、一切不可加催、

〔新御式目〕弘安七五廿七、評、

一獄舍事

一官倉事

一兵士事

以上三ヶ條、爲守護役可致沙汰、

〔普廣院殿御元服記〕公家進金代、諸國守護役、銀折數代、政所方催諸道、下行目錄別紙ニアリ、

〇按ズルニ、守護役ノ事ハ、官位部鎌倉職員編守護篇及ビ足利氏職員編守護篇ニ詳ナリ、

地頭役

〔吉田社文書 上〕一同持夫遲參幷對捍事

右御遷宮者、社內之大營、遷延之勤役也、件夫鄉別一人、爲地頭役令沙汰進者、先例也、

一人役

慶長貳年三月廿四日　盛親在判
元親在判

〔長曾我部元親式目〕諸侍之役之事、飯役に定、但物成米五十石に付て、壹人役也、

半役

〔親元日記〕文明十三年六月十四日丁巳、酒屋中上下より御禮千疋、去二月より七月まで、半役御免御禮云々、

〔小田原衆所領役帳〕廿貫文奈古屋内給田、多米彌次郎大普請之時半役、

〔謙信家記〕輝光公備定事

家老ドモヲ集、領分ノ國々ヘ觸ラレケルハ、〇中略各之著到ノカンガヘ、書付ヲ以テ可申越トアリテ、越後、佐渡、飛騨、越中、加賀、能登、上野、出羽、右八ケ國ヘ陣觸有ケル、但上州ト庄内一郡ノ内ハ半役也、

〔太閤記十二〕相模國小田原氏政家傳之事

來春關東陣御軍役之事

五畿内半役〇中略

天正十七年己丑十月十日　秀吉御判

無役

〔太閤記十四〕加藤左馬助感狀之事

唐島におゐて、番船三百餘艘之中へ、加藤が船只一艘乘入事、寔に古今ニ絶たる手柄を盡しゝかば、御感尤甚し、此外にも致忠節たるとの注進有しか共、將軍其淵底を盡され、左馬助のみに御感狀有、其辭曰、

其方事、天正十一年夏、於江北柴田合戰之刻、突一番鑓、其働揭焉、爲御褒美一廉令加增畢、今般亦於朝鮮唐島、番船數百艘之中、離味方類船乘入、乘捕敵船、數多之手柄、其勇功誰立于上乎、孰比于下乎、殊今度於順天對山兩城、可引入之旨、各雖令連判、就難見棄於加藤主計頭等、不及加判之旨

一四國九州は、高一萬石に付て、六百人之事、
一中國紀州邊は五百人
一五畿內四百人
一江州、尾、濃、勢、四ヶ國は三百五十人、
一遠、三、駿、豆邊三百人、是より東は何も二百人たるべし、
一若州より能州に至て其間三百人
一越後出羽邊二百人
右之分、來年極月に至て、大坂へ可被參著候、出勢之日限、重て可被仰出候、守其旨宿陣不指合樣に、成其意可申者也、

天正十九年三月十九日　秀吉

〔續撰清正記 六〕家中への知行割の事

喩ば千石にても、五百石にても、其物に相當りたる鄕の高を、代官方より書出させ、物成の多少、地の上下をかくして、高ばかり御覽有て、それ〳〵に下行有たりと、てうど千石五百石ある鄕はなき故、或は千十二石何斗、或は四百九十何石何斗と、高よりあまるも有、又少不足もありたるを、有餘も不足も、鄕ぎりに下行有し故、たとへば千石と定しものが、千三十五石と、折紙に被下たるも有、又九百三十何石と不足して、千石の知行にわたりたるも有し也、餘は准之、扱役は、知行請取て後に、物成の帳を渡し、地の高下に隨て、軍役致したる也、積は五勺五分の物成のある知行なれば、千石に十人出し、二月二日より十二月晦日迄、普請役いたし候也、若未進あれば、一人に付、米五升づゝ、極月に出し申候也、

〔長曾我部元親百箇條〕一軍役武具等、不斷可相嗜事、可爲本道、一僕抽餘仁者、可加增、○中略

守る、馬場内藤各不殘召て、被仰出けるは、〇中略敵國始て治るには、法多しては可不服、吾は三件に一を減じ、夏秋冬に可令上納事、一町ニ在々に至迄、軍用課役兩年可令免除、

〔總見記二十〕佐久間信盛御勘氣事

八月〇天正八年十二日、大臣家〇織田信長御動座、直ニ大坂ヘ御著有之、是ニ於テ佐久間右衛門尉信盛、同甚九郎、同御勘氣ヲ蒙ル、罪科ノ儀、御自筆ニ書付ラレ、仰出サレ候畢ヌ、〇中略

一與力ヲ專トシ、餘人取次ニモ構候時ハ、是ヲ以テ軍役ヲ勤メ、自分ノ侍不相拘候段、中々徒ナル比與ヲ構候事、

天正八年庚辰八月日

〔太閤記十二〕相模國小田原氏政家傳之事

來春關東陣御軍役之事

五畿內半役、中國四人役、幷四國同坂より尾州に至て六人役、北國六人半役、遠、三、駿、甲、信、此五ケ國七人役、

右任軍役之旨、來春三月朔日令出陣、攻平小田原北條、可有忠勤者也、仍如件、

天正十七年己丑十月十日　　秀吉御判

と書て、國々への廻文有之、〇家忠日記追加作二十二月十三日

〔家忠日記追加〕天正十八年二月二日、松平家忠兵ヲ發シテ、三州深溝ノ城ヲ出テ、駿府ニ赴ク、公相州御進發ノ軍令ヲ諸將ニ令シ給フ、

一持鑓は、軍役之外たる間、長柄を差置持する事、堅く停止、

天正十八年二月日

〔太閤記十三〕朝鮮陣軍役之定

建武元年十月日

傳馬役

〔信濃國諏訪社家文書〕武田勝頼朱印

縦雖爲軍役衆并當家一門之家人、右證文之傳馬役相務、向後□次之御普請役御免許ニ候、則欠所之屋敷分、各相談可補之、但軍役衆在陣中は、御赦免□□如此新定之處、若有違犯輩者、可有御過怠之旨、被仰下者也、仍如件、

今福市左衛門尉奉之

諏方十日町

○按ズルニ、傳馬役ノ事ハ、政治部下編驛傳篇ニアリ、

陣夫

〔成岡文書〕定

一陣夫者貳百俵ニ壹疋壹人宛可出之、荷積者下方升可爲五斗目、扶持米六合、馬大豆壹升、地頭可出之、於無馬者歩夫貳人可出之、夫免者以請負申一札之内、壹反ニ壹斗充引之可相勤事、○中略

一地頭百姓等雇事、年中ニ十日宛爲家別可出之、并代官請可爲三日宛、扶持米右同前事、

天正十七年七月七日　伊奈熊藏家次花押

〔世鏡抄下〕隱居分所領配當ノ事、嫡子ノ計ヲヒタルベシ、但雖計之、大法ノ儀ハ、二親心安クスベキ程可計之、所領依分限也、軍役諸公事アラバ、百貫ニ十貫千貫ニ百貫也、他ハ准之、無諸役ハ、依其世帶可有評定也、

軍役

〔甲陽軍鑑十九品第五十三〕一天正四年子の歳に、飛驒の國半國の主、きらや筑前、子息監物、前々より、是は長尾謙信の旗下なるが、謙信へ申、甲州武田の旗下江間常陸を御退治、尤と申て越後勢を引出し、飛驒を皆乘取、謙信の國に仕る、軍役の定は、弓千張、鐵砲千丁との儀也、

〔見聞雜錄〕信玄公には、府中に御馬を被立、御人數聊不散、八陣守禦之備にて、御本陣を中にして各

悉く記置頭り、其年の取米増減ニ而、四。一。高。も増減有ゆへ、夫錢も年々増減あり、此夫錢餘國に無レ之、取米掛り大造成納め物なり

〔聞傳叢書 二〕奥州伊達信夫郡福島領四。一。高。之事

取米壹万五千百廿一石七升四合

外米七千九百三十七石四斗七升四合

六尺給納候村々除之

一四一高三万七千六百拾貳石三斗七升六合　　夫錢掛高

此夫錢永貳百貳十五〆六百七十四文三分　　但高百石ニ付永六百文ヅヽ

是ハ上杉播磨守領分之節、家來之知行地方ニ而相渡候分、物成詰ニ而、取米四十壹石、夫四一高百石被下度、百石ニ付夫錢と唱、永六百文ヅヽ取立候ニ付、御料所ニ相成候而も、引付ニ而夫錢取立候由なり、六尺給同様之品ニ付、六尺給納候村は取立不申候段申傳ニ御座候、御取箇増減有レ之候得バ、四一高も狂申候、算法ハ四一ニ而割候得バ、四一高と成申候、夫に六を掛候而、夫錢と成申候、

仕丁役

〔建武年間記〕一仕丁役事

以二十町田地一、毎年一ヶ日役、可レ令二勤仕一也、

雜訴決斷所牒　某國衙

諸庄園郷保地頭以下所領等御年貢幷仕丁役事、副二下御事書一通一、

牒、諸庄園郷保地頭職以下所領等御年貢幷仕丁役事、任二御事書之旨一、不レ論二本領新恩一、當時管領田地分、任二實正一令二注進一之、以二正税以下色々雜物等所出廿分之一一、守二參期一可レ進二納御倉一之由、相二觸國中一、急速可レ申二散狀一者、牒送如レ件、以牒、

ニ付、小百姓共、一言の義不申、出入等に及間敷旨堅く前書に記、村入用帳、總百姓不殘令連印、二冊同樣に仕立、年頭支配地頭役所へ差出し、押切印を取、二冊共村方へ持歸り、年中之入用其時々二冊同樣に附立る、是を白紙帳と云、扨盆暮に至り、村役人長百姓立會、一應限僉議の上致割賦、立會の者共、奥書印形ニて、翌年始其年白紙帳一同割賦濟たる、小入用夫錢帳二冊共役所へ差出置、於役所追而改之上、不審之所も有之ば、名主呼出相糺、金高之所へ役所之押切印形致、一冊は役所へ取置、一冊は村方へ相返義、御料所之通法たり、右等の入用夫錢帳を、越後邊にては、万雜小役帳ともいふ、右之通取堅メ置ば、以後夫金出入等の發りたる時に、小入用帳をもつて證據に致す、前書之通、改方手堅く不致、名主組頭心任せに付立置、割賦致たる小入用帳は、出入等之節、證據には不相立事なり

四一高掛夫錢

〔地方大概集五〕四一高之事

一是は奥州伊達、信夫、宇多、三郡ニある定納高掛物也、餘國にはなき夫錢にて、右三郡にある四一高百石ニ永六百文宛取る、外國々の夫錢と違ひ、多分の掛ものなれども、其譯相志れず、

但四一高の儀、一説ニ、右夫錢は、古來よりの高掛物ニ付、往古は四ッ分一の定免なる由、故に方今の取米を四ッ一分にて除、古の高を仕出す也といへり、されど右高に直すには、本途米計りの筈なれども、見取米を加、四一にて除くは如何の譯ならん、後世誤て見取米を加たるにや、又奥州御代官長谷川左五郎考には、本途見取米を四斗一升俵ニ直したる俵數にて、百石百俵の積り壹俵を壹石ニ見たる高也、夫錢は則俵掛也といへり、右兩說いづれか是ならん、

〔地方凡例錄五〕一夫錢足前柿木役之事

此夫錢は、奥州伊達、信夫、宇田、三郡ニある定納高掛物ニ而、餘國の夫錢と異り、右三郡ニある四一高百石ニ付永六百文ヅヽ懸ク、夫錢と唱取立る、其謂如何成譯と云事不知、四一高之義は、前書に

〔地方凡例錄 五〕小入用夫錢之事 付り 百姓割合物御定法之事

是は村方にて、年中公儀地頭用之諸入用、幷總村ニ掛り小入用品々、又用惡水川除普請入用之人夫、且助鄉村々は宿場へ差出す人馬、其外村用に夫人足役も高割を以出す義、定法なり、人足銘々罷出可相勤事なれども、鰥寡孤獨之類高は乍持、自身の働難成は、或ハ人足當り多く、自身出てハ農業差支になるに付、村役人へ相願、人足賃にて差出す類ひ、是等夫錢と唱へ、年中の入用百姓高割にて差出す事なり、尤町場、山方、浦方、濱方等、少高にて家數多き村々は、家別割に仕來りたる村方もあり、亦田畑反別割にも致す、いづれ古來は鄉例にて仕來りし通り致すべし、しかれども、公儀地頭へ納る役掛りの類、高割、家別割、人別割には村々舊例にて致來り、出入もなく濟來る處は其通、若及出入時は、以來高掛りにすべきよし、享保六丑年被仰渡、尤割合方之儀御書付如左、

一田地ニ不掛村入用、祭禮又は寺社奉加等の品は、家別割に可仕事、

但雨乞等の入用、地面へ掛り候類の事は、高割に可仕事、

一山林野高類、前々より入會之地、相對を以、割合候義有之時は、本百姓は不及申、出作、幷水呑、家抱等之者迄、人別割に可仕事、

丑正月

一村々小入用夫錢に付ては、間々公事出入有る事故、村役人私もなく、又百姓共疑心もなき爲め、年中の村入用可付立程紙數を積り、帳面二冊仕立、前書致連印、村入用之義、此帳面之外決て相用間敷定、或定たる入用 幷 聊之義は、名主手前より差出置、此帳面に記、若臨時之入用、村割可成品有之ば、組頭百姓代 幷 長百姓の內兩三人、名主元へ呼集め遂相談無謂入用は不及申、名主我意を以、百姓不得心之品等決て不割掛、少も村入用減候樣申合、心を用評議の上、無據品は此帳面に記し、盆暮兩度可致割賦、於然は此帳面記候品、縱米金高多く共、一統評議之上相掛る入用

由、勢州と大館殿兩所へ申すて候て可罷下旨、被申上候間、先勢州へ申候處、二三日串、先逗留仕候へと承候、何に御兩所へ案內申候へと被申付候間、申之由申也、於常與如此次第、一向不存知候、勢州任被申旨、先逗留尤可然存候よし令返答也、

〔足利季世記七　秋公方記〕御祝ノ御能ノ事

今度信長乘、攝州一國平均ノ時、家々居所亂妨、國中所々、舊跡ヲ打破リ、寺內財寶ヲ押取リ、寺社方ノ繁昌ノ所ヘハ、夫錢ヲカケテ、切トラルヽ、前代未聞ノ事共也、石山今ノ大坂本願寺ヘハ、五千貫カケテ、責トラルヽ、堺南北ヘモ、夫錢二万貫可出ト、使タテラルレバ、中々叶フマジキ由、返事シケレバ、其儀ナラバ、責トルベシト聞エケル、

〔例書三〕一野州阿蘇郡新里村、去申年村入用出錢、百姓共之內出錢相滯候ニ付當村役人ども出錢寄兼難義之旨、吟味願出、依之及吟味候之所、右百姓之內、坤右百姓有之、出錢滯候段申之候ニ付、相尋候者、村入用掛ケ候度每、入用高一廉限爲見、小前之もへ越石たりとも、出錢割合帳ニ銘々得心と取置候哉致吟味候處村役人答候者、右入用高一廉限爲見候得共、帳面ニ印形取置不申段相答候ニ付、印形取置不申者無念ニ候得共、入用高出錢之一廉限、相違無之哉、遂吟味候處、少も相違無之候ニ付、入作百姓名前認メ、向方地頭に添翰致し、右入作百姓出錢滯之分、小前ニて御取上可被成候、此方江入作百姓被遣、吟味之上滯出錢取立可申哉、御報ニ可被仰聞候旨申遣ス、勿論右添狀此方支配之村役人江爲持參遣ス、

〔例書三〕一夫錢、年中名主方ニ而取替置、翌年春ニ至り、小前百姓共江割合候處、割合少々違有之ニ付、及出入候趣意者、上州山田郡桐生新町百姓佐五左衞門外六十八人訴出候者、右割合違之儀、組頭致加印願書差出、依之立會勘定申付、村入用一廉限取立、夫を寄付、總付總高ニ而割高壹石當を限、右壹石當を小前壹人別持高江掛仕出候處、勘定相違無之ニ付、小前百姓不屆に付、急度申付、

にも差支、其上入用も掛り難儀におよび、又領主地頭の方にても、在鄕の人夫呼遣ふ事止たり、但し高掛りは其家々にて違ふ、高百石ニ付貳斗四五升、或は壹斗五升掛るもありて一樣ならず、私領村々都而夫米掛るにもあらず、前々仕來りにて掛らざる村方もあり、今以人夫にて差出す村方もあり、何れも古來よりの仕來りを用ふ、又夫金とて永にて納る村方もあり、

〔政普集乾〕百姓夫金取立之事

一領主地頭遠國御用、亦者御加役被仰付候砌、高百石ニ付金三兩ヅヽ夫金と唱、領分知行江申來候處、御料所ニ而者、御傳馬宿入用、御藏米入用、六尺給米と唱、三役御取立有之、御傳馬宿入用米、高百石ニ付六升掛り、御藏米入用金同斷金壹分掛り、六尺給米同斷貳升掛り、右之通、年々御取立有之候處、私領所ニ而者、此三役不相掛故を以、臨時御役當り有之節、夫金申付候儀與者心得、右ニ准じ、百姓難義不致樣勘辨致可申候事、

〔北條五代記四〕北條氏茂百姓憐愍の事

世澆季におよび、武欲ふかふして、百姓年中の耕作を撿地し、四ッもなき所をば、五ッといひかけて取、此外夫錢、棟別、野山の役をかけ、あらゆる程の物を押て取、

〔大館常興日記〕天文九年五月九日、武田方被官淸水在京也、彼淸水以富越内々申候者、青鄕人夫兩人、一人は公儀につめ申、一人は大草めしつかい候、然に公儀人夫事、以夫錢被仰付之、可然者をめしをかれ候、此夫錢三ケ月つもり申候、曲事之由被仰出候とて、御厩の者共、けんせきに入られ候、結句は淸水被官扱候間、開闔に被仰付てめしこめられ、ろうえやさせらるべきとの御事にて候間、淸水事は更不存知事候、武被官にて候へ共、雜掌一分にてもなく候、縱令私に在京仕候にて候を、如此被仰懸、一段迷惑仕了、時にあたりの公儀の御事候間、つもり候分、淸水わきまへて進納之仕候こそ候へ、然間如此之御儀、淸水ハ不申下候へ共、武存知候て、いそぎ淸水罷下候へば、罷下候

江戸ニ長く夫々相詰るは、農業にも差支、人々入用も相掛り、甚致難義、又地頭之分ニ而も、在鄕之夫人入用之辨利も不宜、故高ニ何程と夫米相納させ、人夫ニ而呼遣ふ事止たり、勿論高懸りは、其外家々に而違ひ有之、高百石に二斗四五升ニ掛るも有、又壹斗四五升、其内掛りもあり、古格之通取立るは、始め何の比ゟと申事不知、御料ニ成ても、夫米納來りたる村方は、私領引付通に納む、尤夫米納、日村方は、六尺給米御免なり、併夫米之高六尺給米ゟ少なければ、夫米免に而、御料幷に六尺給米取立る義近例なり、私領村々都而夫米掛るに非ず、前々仕來りニ而不掛村方もあり、何れ古來ゟの仕來を用る事なり、又夫金とて永ニ而納むる村もあり、

一地頭京大坂駿府在番、或は屋敷燒失等、格別之臨時有之節者、夫金とて高百石に金三兩ヅヽ、罷在る定法なり、是は夫米夫金致定納村方ニ而も、臨時の夫金は軍役なれば、別段に懸る事なり、

一夫役は陣屋掃除人足、或は雪かき人足等、又は臨時之水夫等ニ呼遣ふ物、又城內普請等大方有之節、日雇人足計りニ而は、多分人足入用掛るに付、領分ゟ夫役として、高百石に何十人と極、差出させ召仕ふ、尤員數其定は、家々之仕來ヲ相用る、大體之夫役は、夫米夫金納る村方も、臨時之儀は遣ふ事なり、右人夫遣ひ方は、前々如申、古へは倭漢共庸法有之、遣ひ方之員數法律も定りありしかども、當世ニ而ハ、一向定りもなく、國々家々勝手次第之遣ひ方に成たり、夫米夫金納る村方川除用水普請等に人夫遣ふ者格別、地頭用ニ正人足當遣ふべきは、二重に成、有間敷事なれども、前前仕來るなれば、夫米納る村々ゟも、臨時之人足は差出さする、去ながら成丈地頭役人心ヲ用、農業宜敷時節なれば、民之難義ニ不成樣容赦有たき事なり、

〔地方活法中五〕高掛り物の事

一夫米夫金は私領に限る、往古は領地知行所より人夫を呼、領主地頭にて遣ふ、又遠國在番等の節は、在番先江召連、或は江戸屋敷にて水夫とて遣たる處、遠方の村方は永々夫ニ詰ては、農業

夫米夫金

一藪方ハ　　角倉與一
一賀茂川筋は　　角倉甚平
右人足入用之節、手代より助右衛門、八郎兵衛方江申越差遣、御用相仕舞、人足員數相極、手代ゟ町代江書付差越候、
一御泉水幷草刈掃除、新家方ゟ申付、人足員數之義、町代江申渡候、
　但草刈町夫人足ハ、正德二年辰七月ゟ申付候、
右三ヶ所共、町代仲ヶ間宛名ニ而、手代より書付參次第、指口之町々江銘々支配ゟ申付置、賃銀之義者、助右衛門八郎兵衛、町々江參、直ニ請取申候、尤壹ヶ年ニ一廻り、又ハ人足多ク入候節者、二廻りも相掛り候事、

〔享保集成絲綸錄三十九〕享保七寅年四月
一唯今迄拜領屋敷、組屋敷、町屋、其外役人足不相勤候町屋も有之候、畢竟町屋之儀ニ候得者、並之通公役不相勤罷在候儀者有之間敷事ニ候、既此度居宅土藏作り致候町々ハ、物入も有之間、人足十二ヶ月御免ニ付、右高役之分、只今迄人足役勤來候町々江臨時ニ相掛ケ、公役理させ可申程之事ニ候、依之右人足役不相勤候町々江も、總町中之ごとく、自今公役可申付候間、其旨可相心得候、割合極次第、町年寄方より觸可遣候間、差圖次第急度可相勤候、此儀ニ付、無筋事を申立、訴訟致ニおゐてハ、吟味之上申付候所、爲其前廉ニ觸知せ候間、右之趣可相心得候、
　四月

〔地方凡例錄五〕一夫米夫金夫役之事
夫米夫金は御料には無之、私領に有事なり、往古は領地知行所ゟ人夫を呼、地頭ニ而遣ひし由、大番にて京、都等有之バ、夫人を京都へ呼遣ひ、又江戸屋敷に而も、水夫迚遣ひたる處、遠方之村方、京

仕舞候而、唯今相勤候夫頭、猪熊御池下ル町河内屋助右衛門、同町伏見屋八郎兵衛、親共も右五六人之內ニ而、家業相續、只今迄凡五六十年以來相勤候由、然共右年數之內、二十四年以前、元祿七戌年、美濃屋喜七郎と申もの、町夫賃銀引下ゲ相勤可ㇾ申旨、町代仲ケ間江願書指出候、直段下直ニ成候得ば、町中之爲ニも成候故、其段相願候付、喜七郎江相勤させ候樣被ㇾ申付、二三年は喜七郎壹人ニ而相勤候處、助右衛門、八郎兵衛儀、家業ニ離レ候儀迷惑之由、賃銀喜七郎請負直段同前ニ引下ゲ可ㇾ申旨相願候ニ付、然上者、喜七郎、助右衛門兩人申合相勤候樣被ㇾ申付、二三年勤候處、喜七郎義、病氣ニ而難ㇾ勤候間、代りを八郎兵衛江讓り度旨相願候ニ付、願之通申付、只今至、助右衛門、八郎兵衛、兩人相勤申候、尤町代仲間江請負證文取置申候由、

一町夫賃銀直段、前方者一匁四分、喜七郎請負直段者一匁二分、

一右賃銀一匁五分宛ニいたし度旨、助右衛門、八郎兵衛相願、寶永五子年十一月、願之通被ㇾ申付候、

一洛中御免地年貢地共、町夫相勤候、

但洛中之內六ケ町ハ御築地廻り掃除御用相勤候付、總並之町夫ハ不ㇾ相ㇾ勤候、幷兩本願寺々內も町夫不ㇾ相ㇾ勤候、

町夫勤方之譯

一御土居藪方

一賀茂川筋

一御泉水筋

一御築地廻り明地矢來御修復、草刈掃除、幷觀世太夫一代能場普請、

右所々江、前々ゟ町夫指出相勤候、

人足遣方之譯

目安可申上候、五月九月兩月者、作時分に候間、地頭へ之役儀、百姓ニ赦免候事、○中略

慶長寅○七年
六月八日　秀政朱印

肝煎共
百姓共

〔地方活法 五中〕高掛り物の事

一夫役は陣屋掃除人足、雪かき人足、或は臨時の水夫に呼遣ふ、又城内多分の普請ある時は、高百石に付何拾人と極め呼遣ふ、其員數定りなし、家々の仕來りを用ひ、右體の夫役は夫米夫金納る村方も臨時之節は事ふ事なり、夫米夫金納る村方川除用水普請等に人夫を遣ふは格別、地頭用に正人足呼遣ふは、勘辨あるべき事なり、

〔世事見聞錄 二〕百姓之事○中略

其上殊に難義なるは、國役、傳馬役、人足なりといふ、國役抔ハ、人少にても、又荒地有りても、村高程に納る事なり、是も昔はなかりしが、五十年來の課役なりといふ、また傳馬役、人足役の事、彼邊ハ日光道中、奥羽の道中、例幣使街道など、往來多の場所故、何れか宿驛助郷を勤むるに、是又村高江割付る事にて、百姓十人二十人ならでハなき所へ、三十人も四十人も當り、馬五疋ならでハなき所へ、十疋も拾五疋も當る故、無據宿驛場へ賃錢を出し、雇上て役を勤るといふ全體宿々人馬の入用も、古來よりは倍増いたし、彌増難義の重るゆへ、堪へ兼て段々離散し、荒地潰地出來るといふ、尤の事なり、いづれの國々も、右の振合にて、させる產業もなく、不融通不辨利の地に、追々に人家減るといふ、西國筋、中國筋、また奥羽の間も、農業一式の地ハ人少になりし、

〔京都御役所向大概覺書 六〕夫頭勤方之事

一町夫頭之役、古來ハ所々ニ五六人程モ有之、其向寄次第、人足差出相勤候得共、病死又者家業相

〔法隆寺衆分成敗曳附幷諸證文寫〕

一國役人足之儀付、諸掟旨委細如二別紙一、

天正十二年甲申極月廿八日　沙汰衆舜濟　公文代胤

〔駿河國新風土記 二政理〕御法度被二仰出一條々事

一夫役之義者、高千石ニ付可レ爲二三人一候、但百姓無レ之在所者、千石ニ付三十石宛可レ遣候、少知之給人衆江者、高百石ニ付三石宛爲二夫米一可二出置一候、右御定之通、夫役相勤候者、別ニ人足被レ遣儀有間敷事、(〇中略)

右之通、堅可レ申二聞之一旨、就二御意一如レ是候也、

慶長四乙亥六月十六日　内藤正(花押朱印)

安部大河內 百姓中

〔瀧口文書〕德川氏法度

御法度被二仰出一條々事(〇中略)

一夫役之儀ハ、高千石付三人たるべく候、但百姓無レ之在所ハ、千石付三人宛可レ出候、少知之給人衆ヘハ高百石付三石宛爲二夫米一可二出置一候、右御定之通、夫役相勤候者、別ニ人足被レ遣儀有間敷事、(〇中略)

(略)

右之通堅可レ申二聞之一旨、就二御意一如レ此候也、

慶長四己亥年七月吉日　内藤正(花押朱印)

駿東郡山尻村總百姓中へ

〔百合叢志 四文書〕法度

入山家鄕(〇中略)

一百姓一人ニ付而一ヶ月ニ一人宛、地頭へ奉公可レ仕候、但公儀之普請ニ、百姓召遣候地頭ニ者、以二

文應二年二月廿五日　武藏守

相模守

陸奥左近大夫將監殿

〔太平記十〕新田義貞謀叛事

相模入道〇北條高時舍弟ノ四郎左近大夫入道〇慧性ニ十万餘騎ヲ指添テ、京都へ上セ、畿內西國ノ亂ヲ鎭ムベシトテ、武藏、上野、安房、上總、常陸、下野六ケ國ノ勢ヲゾ催サレケル、其兵粮ノ爲ニトテ、近國ノ庄園、臨時ノ夫役ヲカケラレケル、中ニモ新田庄世良田ニハ、有德ノ者多シトテ、出雲介親連、黑沼彥四郎入道ヲ使ニテ、六万貫ヲ五日ガ內ニ沙汰スベシト、堅ク下知セラレケレバ、使先彼所ニノゾミテ、大勢ヲ庄家ニ放チ入テ、譴責スルコト、法ニ過タリ、

〔大乘院寺社雜事記〕長祿三年七月八日、一五ケ所法師原參ス、人夫役事自筒井方懸之、無沙汰トテ丁仕戸上膳手ヲ使ニ付了、可如何之由歎申入之、仍不可然旨加下知之間召立了、

文明五年七月十一日、一法花寺奧參申新免田堤事、來十七日ヨリ可築之云々、十六町田數ニ一段別人夫一人宛可能出云々、百六十人也、相殘四町五段分ニ又重て可申付之、合二十町五段餘分也、來ル九月ニ堤段錢事可相懸之由、四珠院、普賢院、法花寺殿、寶來方仰遣使奧也、各可得其意由云々、

〔壺簡集三〕土佐國高橋介作藏

三津川各人夫役之事、此砌被申付候へば、當時公方より人夫等申付候事、大用候間、爲始末、公物三津川各より申付候、連々山內存分成候はゞ、如先人之時は、人夫役可申付也、其時は、公物の儀は、可有上表者也、仍爲後日如件、

永祿八年三月吉日　政貞花押

河村久助どのへ

夫役

御代官幷御預り所役人江可被申渡事、

戌十月廿日

嘉永六丑年八月

外寇之義者、國家之大患ニ候處、近來異船度々渡來、其次第ニ寄候而者、安危ニも拘り候義ニ付、西丸御普請を初、臨時之御出方相續候折柄ニ候得共、莫大之御入用をも不被爲厭、內海江嚴重之御臺場御取建被仰出、猶追々御所置之次第も有之候積、國家之安危者四民之患ニ而、武家江者、武備一圖ニ力を用ひ可申旨被仰出、農工商之義者、別段御沙汰無之候得共、防禦筋ニおゐてハ、四民共力を盡し可申義ニ付、御料所村々之內ニも、右體不容易筋を會得いたし、且者昇平貳百年來之御恩澤ニ浴し、御備筋御入用之內江上ゲ金相願候內存之ものも可有之哉、左候ハヾ前書之次第者勿論、西丸御普請ニ付而も、格別に下々を被爲厭、聊之御用も不被仰付、厚御仁惠之程をも得と爲申聞、銘々力之及び候丈、身分ニ應、右御入用之內江上納金可致旨、穩ニ能々申諭し、尤强而上ゲ金申懸候事、實ニ不相成樣可被致候、

〔運歩色葉集 婦〕夫役

〔吾妻鏡 七〕文治三年三月四日丙午、東大寺造營之間、爲引材木、被仰人夫事之處、周防國地頭等及對捍云云、二品殊令驚申給、可致精勤之由、今日被仰遣彼地頭等中云云、

〔吾妻鏡 五十〕文應二年〇弘長元年二月廿五日丁巳、今日所被仰六波羅也、其狀云、〇中略

京下御物送夫事

京下御物送夫、任雜掌申請、無左右依令下知、人夫多々之間、民之煩尤不便、自今以後、申請人夫之時、令見知御物多少、定人數可載長帳也、且於私物送夫者、一向可令停止也、兼又夫役、寄事於左右、於路次不可致狼藉之由、可被加下知之狀、依仰執達如件、

合金百壹万八千五百拾五匁餘但金壹兩ニ付凡銀六十四匁替

〔牧民金鑑 六〕天保九戌年三月廿四日申渡

支配所内百姓共、上ゲ金之儀、格別身元宜もの共江ハ、上ゲ金員數取極申渡、可然分も可有之哉、尤去々申年中、窮民救方等致シ候ものも可有之候間、右等之處、得と勘辨いたし、各限ニ而名前幷員數共取調可被申聞候、

右者越前守殿御沙汰ニ付、申達、

天保九戌年十月廿日申渡

御料所村々上ゲ金之儀、追々内意被申立候内、至而小金之分も有之候處、身元之厚薄者、啶との見定も出來兼可申道理故、貳十兩以上差上候分者、先ヅ者相應之身元ニも可有之哉ニ付、貳拾兩以上者、上ゲ金被仰付、其以下者、不及上ゲ金、奇特之段申聞置候樣相達候處、今般別紙之通、越前守殿御書取を以被仰渡候間、左之通可被相心得候、且亦先達而申立之內、貳拾兩以下之分、不被及御沙汰段申渡候分も、實意ニ上ゲ金いたし度存念之處無其儀、本意を失ひ候體ニ而、今般御書取之趣を及承、再應相願候類有之ハ、尙其次第可被申立候、

水野越前守殿御書取

覺

書面御料所村々上ゲ金相願候ものゝ內、金高少き分不及沙汰候ハヽ、小前之者共、小金之故を以、奇特之志難立樣相成、氣請ニも拘り可申哉、畢竟御國恩を辨、銘々存込之趣相願候譯柄ニ候得共、强而身元厚薄等相糺候ニも不及、實意ニ上納相願候段無相違趣、御代官幷御預り所役人共より申聞候ハヽ、一同奇特之譯を以、願之通上納爲致候樣可被取計候、尤身元相應之もの、名聞而已を以、總之上ゲ金相願候類、又者上金いたし、銘々取續方ニ相障り候樣之儀無之程を見計ひ可申旨、

銀致し、御受可致趣ハ申立候得共、御用總金高も整候儀、然を善右衞門ニ限り、猶別廉出金爲致候ハヽ、餘り阿漕成儀、公儀之御處置ニハ如何敷、御仁政之御趣意ニも相當申間敷、且ハ後年猶御用金等被仰付候節之氣配ニも拘可申哉ニ付、私存寄ニハ、御用總金高も整候故を以、右別廉之出金ハ御用捨御差止ニ相成候方可然、都而御爲と奉存候間、此段自書を以、外記方江及内談候處、存意之趣ハ尤ニ候得共歸府之上得と取調、御用途御繰合出來候ハヽ、御用捨之儀可及掛合間、受印申付相廻候樣ニと申越、外記存寄も無謂事ニハ無之候得共、右申上候次第ニ付、可相成ハ、右增銀之分、御差止ニ相成候樣仕度、此段御内含迄ニ申上置候、以上、

卯(○天保十四年)九月　久須美佐渡守(○中略)

九月十七日請印申付候

御用金并上金高書付

一銀六万四千八拾五貫五百目　大坂堺兵庫西宮御用金。

此金百万千三百三拾五兩餘

一金壹万四千八百拾六兩　大坂堺兵庫西宮上ゲ金。

銀百廿三貫六百五拾九匁

此金千九百三拾二兩餘

外

古銀八貫五百目　築山茂右衞門別廉書分御預所

此金百三拾貳兩餘

古壹分判百貳拾匁　播州加東郡太郎口夫村

古南鐐百八拾匁　仁右衞門上ゲ金

總金高百八万四千九百六拾六兩三分餘

内金九拾八万拾四兩三分餘　大坂之分

金貳万八千七百貳拾七兩壹分　兵庫之分

金五万四百拾六兩貳分餘　西宮之分

金七万八百八兩壹分餘　堺之分

右之外、大坂町人共之内、出金高いまた不取極分、凡貳万兩程者可有之候間、大坂之分、百万兩餘ニ相成、左候得者、外三ヶ所分、拾万四千九百五十壹兩三分餘を加、兼而外記江被仰含候金高、百拾万兩餘ニは相成候儀ニ御座候、○中略

先達而内々申上置候鴻池屋善右衛門江、別廉ニ出金爲致候儀、外記當所引拂後、組與力内山彦次郎より爲申諭候處、最初御受致し、金七万兩分六十五匁相場ニ而、銀四千五百五拾貫目、來申年迄ニ年割上納相濟候上、文化度御用金御下ゲ戻、殘銀九百拾貫目を來酉年一時ニ御下戻之姿ニ致し、右銀高江五百四十貫目足銀致し、都合千四百五十貫目、酉年より子年迄ニ割合相納候積御請可致、右之外ハ不及力旨歎願致し候ニ付、右之趣を以、受書案取調、外記京都逗留先江相廻及相談候處、右受取案之通、本紙受印申付、追而江戸表江相廻候樣申越候ニ付、其通取計候樣可仕候、然ル處、先達而も内々申上置候通、善右衛門儀、内實ハ是迄貳拾万兩之出金高之由ニ候得共、表向江ハ聊も顯不申、表向壹人ニ而拾万兩之御受ハ何分致兼候趣歎願致候段ハ、畢竟家法之質素を相守候故之儀ニ而、可賞筋無餘儀場合ニ付、彦次郎より外記江も申談、同人も承知ニ而、善右衛門家族をも加へ、拾万兩之積一旦取極候處、受書申付候節ニ至リ、右家族之名前を除候樣外記談ニ付、彦次郎も甚當惑仕、善右衛門ハ七万兩ニ致し、家族ハ夫々別廉ニ致し、右受書相濟候後、別段善右衛門より出銀之儀申談候筈、示談之上、外記引拂後、彦次郎も不得止事申談、前書之通御下戻銀江足

千兩に付十枚を賜はるの例なり、

〔用金上納帳文化〕酉〇文化十年十二月十九日納

一金貳百兩　永上納　淺草馬道町貳丁目　池田屋市兵衛

酉十二月十九日納
一金五百兩　永上納　淺草元旅籠町貳丁目札差伊勢村屋次郎兵衛父　忠左衛門

酉十二月十九日納
一金貳百兩　永上納　淺草旅籠町貳丁目代地札差　下野屋又兵衛

酉十二月十九日納
一金百五拾兩　永上納　淺草御藏前片町札差　伊勢屋安右衛門

同日納
一金貳百兩

酉十二月十九日納
一金貳百兩　永上納　深川木場町　万屋和助

〔市中取締書留〕御用金之儀ニ付申上置候書付

久須美佐渡守

先達而御內含迄ニ申上置候御用金之儀、羽倉外記〇代官去月十二日、但州表江出立後、猶又町人共を呼出再應申諭、尤兼而取扱申付置候組與力內山彥次郎等より、再三利害申聞、總年寄共よりも爲申談、追々氣受も立直り、增金申立、或者人撰ニ而御用金申渡候もの之外、御用相勤度旨、總年寄共迄相願、又者出金高を極御差加金相願候もの、其外爲冥加永上納仕度段願出候者も有之、格別ニ金高も相進、いまだ見切も附兼候內、外記但州表御用相濟、去月晦日歸坂仕候處、不快ニも有之、殊總金高不取極內、外記幷同人支配向差加り、取調候而者、おのづから下タ方之氣配ニも拘り可申哉ニ付、外記江も無急度申談、私方にて引受取計候內、外記義、差急ギ歸府致し候樣、御沙汰有之候由ニ而、此節迄御用金勤高取極候分受書申付引拂度段申聞、いまだ納方割合、幷出金高不相極分も有之候得共、外記申聞候趣も無餘儀事ニ付、納方割合受書、幷金高不取極之分、受書も追而受印取候上、外記方江相廻し候筈示談仕、去ル十七日受書申付候分、金高左之通御座候、

立賄賂を入れ抔して、二千両をあげて事濟と云、己が悴の放埒には万有餘の大金も出せしが、御用金となれば、其十分一を惜みて、或者歎き或者恨み、或は又公邊の事を書り抔する也、

〔翟巢漫筆八〕御用金

寶曆十一年 金百十三万両 一書に百十一万五千両とあり 大坂

文化三年 金十五万七千五十両 江戸

文化十年 金十七万三千八百十両 江戸

金百二十七万千両 大坂

一書に百十一万両餘とあり、江戸ハ五千両以下五十一両以上なり、大坂ハ不詳、

右ハ共に米價を昂貴し、財用の融通を圖るべき爲に、上納を命せられしなり、

天保九年 金十万八千二百両 江戸

弘化元年 金八万五千九百七両 西丸造營に付、札差商人より上納す 江戸

金百十四万九千八百廿二両 大坂兵庫西宮堺とも

一書に百九十八万千両とあり、本丸造營に付上納す。

安政元年 金二十九万三千九百四十五両 江戸

一書に二十九万七千四百三十五両とあり、西丸造營海岸防禦に付上納す、

慶應元年 金九十一万千五両 江戸

此後同三四年の間にもありしよしなれど不詳

凡用金は二。朱。の。利。を。加。へ。て。下。戻。さるべき定めなれば、右の内には償還せられしもありしならん、其數は未考、用金を上納せる商人は、其褒。美。として金五千両に付銀二十枚、二千両に付十五枚、

用金上金

〔看聞日記〕永享八年十一月二日、抑聞金商人被召捕、二人被刎首云々、自公方金千五百兩被召之處、不所持之由申、其罪科云々、有德之者也、

〔政普集乾〕百姓江用金申付候品々之事

一用金申付候者、臨時御役當り、亦者類燒不時之物入等有之、實ニ無據砌、村方江も得與其譯柄歸伏爲致、相對を以可爲差出事ニ候得共、得心之もの有之、區々ニてハ其外之取締ニも響候故、不得止事、嚴重ニ可申付儀も、其時宜ニより可有之事勿論ニ候得共、享保二十卯年御觸も有之候通、百姓所持之田畑山林を質ニ入、金子借請候儀、一切致間敷候、尤右ニ准じ候取計幷領分知行、所村々寺社等江出金爲致、無盡ニ似寄候取計など致し、金子調達候儀、堅無用可致儀ニ候、

御定書

知行所百姓被申付、田畑質入ニ致し、金子爲借致候類有之候樣之儀、有之間敷事ニ候條、向後無用ニ可致候、右之外者、只今之通爲べく候、

右之趣、可被得其意候、

享保二十卯年五月

〔世事見聞錄五上〕諸町人之事〇中略

尤時に振れて御用金差障りにもならず、近來御用金を貳千兩上ゲたる物の內證を聞くに、其ものの悴放埓にて、數多の金銀を遣ひ捨し故、勘當をいたし、其悴浪人にて、一ケ年程他所にありしが、是懲めの勘當なれば、永き事にあらず、頓て本家へ歸るべし、假令歸らずとも、公邊の沙汰にも成し事なれば、捨置事にあらず、金銀を貸たりとも、大丈夫なりと見込て、所より貸者多く、壹万四千兩餘の借金出來て、此事親の元へ聞ゆれば、難義致さんと存たり、夫は以の外なる事と驚て呼返し、座敷の內に押込、先にも返濟せしと云、此者近來五千兩の御用金を被仰付候を、數々難澀を申

臨時役

同〇天正三年八月廿三日、信長公ハ府中ヨリ一乘谷ヘ御本陣ヲ被移、爰ニシバラク御逗留アリ、〇中略越前加賀兩國ノ者ドモ、或ハ御赦免、或ハ安堵、又ハ刑罰、ソレ〳〵ニ御裁許也、御法令ニ曰ク、

掟

一國中ヘ非分課役不可申掛、但書到子細有テ、於可申者、我々ニ可相尋、隨其可申付事、〇中略

天正三年九月日 〇又見信長公記

〔甲陽軍鑑品第十四二〕殊更利根過たる大將は、邪欲深ければ、內の者に知行を出すにも、惡所をゑらび出して、士卒につかはす、其上諸侍をせばめ、知行百貫とる者をば、課役を申懸、五十貫はへつらふてとり、五十貫の侍をば、廿五貫へつらひ取り給ふ、〇下略

〔駿府政事錄〕慶長十六年辛亥八月朔日、自京都飛脚到來、申云、去月廿七日依爲吉、寅剋三種神器奉渡假殿之內侍所、同剋主上令移御座於假殿、則古御殿壞始、洛中下人爲課役、板倉伊賀守勝重奉行之、

〔新編追加雜務〕一臨時役事

殊大營之外、一向可停止之、縱雖充催之、不可懸百姓、以地頭得分可致沙汰、

〔公家新制四十壹ヶ條〕一可停止役夫工造內裏以下先例有限勅院事外同臨時徵下事

仰省、愛其人役者、國宰之所恤也、早在節儉之義、可致淸平之政、此上國吏背符旨若徵下者、土民參官底宜言上之、

〔遷宮例文〕夫伊勢二所大神宮、廿年ニ一度之造替遷宮ハ、皇家第一重事、神宮無雙大營也、〇中略因茲太政官配符ヲ被下諸國、運上役夫工功粮於萬民、緈之威儀、述而難盡也、

〇按ズルニ、大神宮造宮用途ノ爲メ、臨時ニ役夫工米ヲ諸國ニ課スル事ハ、神祇部大神宮遷宮篇ニ詳ナリ、

陸奥左近大夫將監殿

〔葛井寺藏文書〕當寺人夫以下、臨時非法課役等事、任先例所令停止也、執達如件、

正平十六年十二月廿三日　左馬頭楠正儀（花押）

剛林寺々僧御中

〔和長卿記〕文龜元年十二月二十三日丁卯御即位日次凡爲今日歟、雖然國役之事、爲武家雖被下知、一向不致沙汰之間、如今者大禮之儀、急速不可事行歟、諸人呑氣畢、

〔親俊日記〕天文七年十二月五日乙巳、節季御用脚トシテ納錢方へ臨時可相懸否之段、以書狀御倉執事代尋之、　六日丙午、納錢節季御用脚之事被露之、如先規可申付之由御返事、納錢在所付可被記申之由候、以淵田河村申遣之、

〔伊勢古文書集一上〕天文九年記錄

就兩大神宮假殿造替萱米事、如先規可被其沙汰之旨、對當國中所々被成御下知訖、拜知之事、神用可被抽御祈禱精誠之由所被仰下也、仍執達如件、

天文九年七月廿日　前丹後守判　攝津守判

宮司殿

〔京都上京文書一〕禁裏御修理御用脚運上之事

合六貫文

納申處皆濟也、仍如件、

弘治二年八月八日　室町頭南中町井　月行事國松喜次郎　南奉行　結城山城花押

〔總見記十五〕越前國御仕置御領障事

臨時稅

銀ヲ以テ取引仕候間、右輸出御役錢ノ儀ハ、洋銀ニテ上納被仰付置度奉願上候、其餘諸上納ノ義ハ、被仰渡候通リ、正金又ハ御切手ヲ以テ上納可仕候、依之此段奉願上候、以上、

子三月十二日

問屋總代
同頭取
濱田屋
兵右衞門
同
佐藤半兵衞

沖ノ口
御番所樣

前書之通申上候間、奧印仕候也、

蛯子丞

(沙汰未練書)一名主庄官、下司、公文、田所、總追捕使略○註以下職人等事、件所職等者、地頭領家進止職也、略○註但帯各別御下文者、有限公○事○課○役○之○外○、不○可○隨○地○頭○領○家○私○下○知○、

(吉田社文書上)下　常磐袴墓兩鄕

可早訪進御○熊○野○詣○用○途○錢拾貫文事

右依御宿願、來八月上旬始御精進、可有御參詣、然間殿中邂逅之御經營、鄕內寡少之課役也、早除人給等之外、支配段別、任員數、期日以前無懈怠可令沙汰進之狀、依仰下知如件、

建長四年五月　日　　預所散位三善朝臣花押

(吾妻鏡五十一)弘長三年六月廿三日辛未、將軍家宗尊○御上○洛○事、有其沙汰、被充課○役○於諸國、御敎書文章一同也、西海事者、被仰遣六波羅云云、御敎書云、

御上洛間、百姓等所役事、段別百文、五町別官駄一疋、夫二人可充行、至島者、以二町可准田一町、此外不可成民之煩、但有逃散之輩者、相觸在所可令勤其役之狀、依仰執達如件、

弘長三年六月廿三日　　武藏守
相模守

に、長崎の商人高木彦右衞門といふもの、船額七十隻の外に十隻を増され、銀額六千貫目の外に、貳千貫目の代物替をゆるされて、運上の金二萬餘兩を進らすべき由を望申しければ、こゝに於て伏見屋が代物替をば停められ、高木が請ふ所をゆるさる、一年を隔てゝ、元祿十二乙卯、荻原近江守、林藤五郎等、長崎に下りて、長崎の會所にて、外國の船賃をもて、我國の商人に賣得し價銀を金子に換し所七萬兩、此外唐人阿蘭陀人の金銀つかひ銀落銀間金銀役料などゝいふもの、共に總計金一萬兩餘の外は、悉く皆公に收らるべき法を定む、これ地下配分金七萬兩といふ事のはじめ也、

〔憲敎類典五ノ六海路〕安永七戊戌年三月廿六日

酒井石見守殿御渡　　御目付江

於長崎唐船江相渡候煎海鼠干鮑之儀、從前々諸國浦々ニ而相稼、長崎俵物請方之者買取來候由ニ候得共、是まで生海鼠鮑之漁獵不仕浦方も有之、又は唐人向之煎海鼠干鮑仕立方を不存、等閑打過候浦々も有之由相聞候、從前々稼來候浦方は不及申、是迄仕立馴候近浦等聞合、專出方相增候樣、無油斷可相稼候、尤長崎俵物請負共手先之者、猶國々申談可買取候間、直段等は浦方之相對次第たるべく候、御領所浦々、是まで運上相納來候浦々之義者格別、此段煎海鼠干鮑之類、稼方初候新浦之分ハ、當分運上之不及沙汰候間、獵業相增候儀を專一可致候、

〔問屋諸用留〕文久甲子年

乍恐以書付奉申上候

御番所諸上納金之儀、以來洋銀ニテ難相成候間、御切手カ又ハ正金ヲ以上納可仕旨被仰渡承知奉畏候ヘドモ、外國人ヘ賣渡候輸出御役錢ノ儀ハ、素ヨリ異人ヘ賣買仕候儀ニ付、何レモ洋

旅人宿運上

〔例書 四〕覺

私御代官所越後國頸城郡澤田村附草生水油運上年德金年延伺差上置候處、未御下知無ㇾ御座ㇾ候、御勝手方より皆濟御屆、吟味之上、早々相伺、片付候樣被ㇾ仰渡ㇾ候、年內餘日無ㇾ御座、皆濟御屆來春ニ相成候而者、三年越ニ罷成ㇾ奉ㇾ恐入ㇾ候間、何卒急ニ御下知被ㇾ成下ㇾ度候樣仕度奉ㇾ存候、依ㇾ之以ㇾ書付ㇾ申上候、以上、

卯十二月廿五日　御代官名印

御勘定所

〔地方凡例錄 五〕一旅籠屋冥加永

是ハ五海道(東海道、中仙道、甲州海道、日光海道、水戸海道)、其外脇往還驛場之旅籠屋、古來株あるをバ、運。上。冥。加。永。等之沙汰無ㇾ之所、近年何れの驛場も飯盛女差置儀相始り、願之上壹軒之飯盛女貳人宛御免有ㇾ之類者、冥加永等相納方ニ成り、賣女と申儀者、容易ニ難ㇾ成事なれ共驛場ハ不ㇾ及ㇾ申、船著之所々、近年賣女似寄たる事有ㇾ之所、天明八申年、公儀より國々御改有ㇾ之、七十年來すぎ來りたる所ハ御免、其外バ都而嚴敷御停止被ㇾ仰出、私領方ニ而も、委く遂ㇾ吟味、驛場飯盛女者、江戸表ニ而者上納屋敷抔ニ准ずる故か、宿場ニ而も飯盛不ㇾ置旅籠屋ハ冥加永等なし

貿易商運上

〔折たく柴の記 下〕むかし唐船の數も、交易の銀額も定らざりしに、貞享二年乙丑より、唐船交易の歲額銀六千貫目、阿蘭陀船の金額五萬兩に定められ、元祿元年戊辰に至て、唐船の歲額七十隻に定めらる、然るに元祿八年乙亥、伏見屋四郎兵衞といふ者、額外に銀千貫目の交易をゆるされて、價銀千貫目にあたる程のものども、銅をもて買とらむ事を望み申す、其望所をゆるされき、是を世に代物替といふ事の始とす、明年丙子には、運上の金壹萬兩を進らすべければ、五千貫目の代物替をゆるされん事を請ふ、また望む所をゆるさる、これ運上といふ事のはじめ也、其明年丁丑

錢貳歩增之義示談行屆有之候ニ付、彼是申越候もの無之、尤攝州酒造人共冥加直上納相好不申ものも有之哉ニ粗承知仕候、右ニ付於彼之地ニも、酒造人一同心配混シ合罷在候事哉ニ承知仕候、〇中略

慶應三卯年十二月　靈岸島銀町貳丁目家持五郎助京都住宅ニ付

下り酒問屋總代大行事　店預り人　庄兵衛印

同所同町彌兵衛地借

同當行事　門兵衛印

御番所樣

醬油税

〔地方凡例錄五〕一室。屋。役。

是ハ麹屋之運上也、壹軒何程之極り有、麹商賣相止メ、室潰せば、役錢差許ス、

〔地方凡例錄五〕一醬油屋冥加永

是ハ造醬油屋冥加永相納る、尤所ニ寄、運上冥加金銀等なきも有、醬油屋者乾度したる株と申ニはなけれ共、仲間商ニ付、新規ニ始るニハ、其所之仲間申談願出、吟味之上、差障等無ければ差許ス事なり、

〔地方大概集六〕醬油屋冥加永

一是者造醬油屋より納る冥加永なり、尤冥加金銀納めざる所もある也、借醬油屋者確と株といふものなけれども、仲間商賣に付新規に始るは、其所の仲間熟談の上、願書差障等なければ差免す事也、

油税

〔地方凡例錄五〕一油船運上

是ハ油絞を渡世者、油船壹艘ニ付何程と運上相納、尤酒屋等と違ひ株なし、

仰聞候義ニ御座候、依之遠路駈隔候酒造人共、兎角商内直段疑惑を生シ候ニ付、壹樽ニ付六匁冥加上納差含有之候仕切書、表金商内直段相顯シ、總〆高樽數割を以、冥加上納引去り、殘金之内より口。錢。八。步受取候儀ニ御座候、尤仕切之義者、壹ヶ年壹度差遣し、荷物代之義者、又節句戎講共、壹ヶ年六度爲登方仕來り、往古より酒問屋商法ニ御座候、然ニ近年酒造人共、荷物代金差し急、當地渡爲替、或者樽船支配船頭へ渡金時々申越、酒問屋手元差支金融難澀仕候得共、是迄不都合之儀無之、御府內入津樽數相減不申樣駈引仕候、內實者全問屋共、內損致候義ニ御座候、

一此度冥加直上納被仰付候得共、是迄酒造人共よりは請取不申、矢張仕來り之通、冥加銀差含賣買致候內より上納仕候義ニ御座候、然ニ御府內酒仲買、幷小賣屋、不如意之もの數多、近年閉店致候もの數軒在之、酒問屋義者、得意之もの江酒荷物時々仕送り遣し候義ニ付、賣懸殘金相嵩み、問屋共難澀仕候義ニ御座候へ共、荷主共冥加金直上納願立候得共、問屋共賣懸滯金江冥加上納可致、六匁も同樣懸倒ニ相成、難澀仕候間、攝州酒造人共より、乍恐大坂町御奉行樣江直上納可致旨、被仰聞被下置候ハヽ、難有仕合奉存候、

一冥加銀上納仕候義、全荷主共江者、割合相懸り候義無御座候、前書奉申上候通り、壹樽ニ付冥加上納仕來り候義者、問屋共丹誠ヲ以、月々取集上納仕候賣掛代金仲買小賣屋共、拂方不致分者、問屋手元差繰上納仕候處、此度名儀迄之趣被仰付、深奉恐入候、右者前書奉申上候通、攝州酒造人共、決而手元江差響候義者無御座候、此段乍恐御賢慮被下置候樣奉願上候、

一古來より商內代金之內より、六。步。口。錢。請取來り候處、近來諸色大高直、万事入用多分ニ相懸り、殊ニ得意一同江賣代金貸込多分ニ相成、問屋共相續方難出來、歎息罷在候ニ付、諸國酒造人共江及示談ニ、貳步增八步口錢、一時丑年より請取候義ニ御座候、尤攝州酒造人共而已之義ニ而者無之、尾三勢濃州、右國々より御當地江積送り候酒造人數多在之候得共、冥加金直上納、幷口

此冥加銀六匁五分、但壹ヶ年、

請渡人　角倉一學御代官同州十市郡出合村　清三郎

右者、私御代官所和州宇陀郡松山村之内松山町佐兵衛願候者、角倉一學御代官所同國十市郡出合村清三郎所持之酒造株、此度讓請、冥加銀之儀者、壹ヶ年六匁五分、是迄清三郎上納仕相稼候積仕度旨、相願申候間、相糺候處、分ヶ株等迄も無之、右冥加銀之儀、造高不拘、前々六匁五分ツヽ納來候、尤角倉一學方江も懸合候所、願人申立之通相違無御座候間、讓受被仰付可然奉存候、於然者右冥加銀六匁六分、當辰ゟ取立之相納、鄕帳ニ記、其年々御勘定元ニ組仕上候樣、御證文可申附候、恐恐、

寛政八辰年八月　　木村宗左衛門印

御勘定所

表書之酒造米高百八拾石願之通讓受申付、冥加銀六匁五分、當辰年、松山村鄕帳外書ニ記取立之、其年々御勘定元ニ組可被仕上候口者本文有之通也、

未八月

〔諸問屋身元金調上〕乍恐以書付奉願上候

一元治元子九月中、株御鑑札御下ゲ被下置、就而者壹樽ニ付、冥加金六匁上納被仰付候後、荷主共江仕切書之儀、壹ヶ年見積リ、冥加金拾万兩餘ニ相成、酒問屋共相續難出來、難澁歎願奉申上候處、其節被仰聞候ニ者、右壹樽ニ付、銀六匁上納爲致候儀者、酒問屋儀、幷諸國酒造人共之手先より爲差出可申義ニ者無之、問屋共日々商内江右六匁を差含み賣渡候得者、都而呑人之手元より差出候道理ニ有之候間、酒問屋共、御府内安住ニ渡世罷在候得者、御國恩厚相辨へ、商内直段ニ差含有之候壹樽ニ付銀六匁宛、時々入津機數念入ニ相改、月々無差支上納可致旨、御利解被

〔憲教類典五ノ十一酒造〕正德五乙未年十月

覺

元祿十年、諸國酒造米の數を改定メられ、運上之事可減由被仰出候、然るに酒運上の事出來候以後、酒高直に至り、世上之ため不可然候ニ付而、前御代初、酒運上之事御免許候得共、諸物高直之由を以て、酒下直にも無之、其上又酒造米之數も、違法之事候由相聞候、急度御吟味可有之候得共、當年は諸國豐熟之由ニ候間、別格ヲ以、寒造之酒、元祿十年定數三分一限り、此外新酒等一切に禁せられ候、當年寒造の酒ハ、來春二月ゟ賣出すべし、上方之酒、舟積改等之事者、嚴密の御沙汰可有之候、すべて酒造の法違犯の輩、罪科ニ行はるべき次第は、御代々御例に任せられ、其御沙汰可有之者也、

未　十月

〔天保集成絲綸錄九十六〕寛政二戌年十二月

三奉行江

諸國酒造之儀、先達改之上、御料私領共休株之分、以來酒造難成旨觸置候處、休株ニ而も相應之冥加等納候向も有之由相聞候得共、追而及沙汰候迄ハ、休株冥加之儀差出ニ不及候間、其旨相心得可申候、

右之趣、御料ハ其所之奉行御代官、私領ハ領主地頭より、酒造休株之者江可申渡候、

右之通可被相觸候

十二月

〔地方諸伺例書〕覺

一酒造稼株壹所　請負人　私御代官所和州宇陀郡松山村　佐兵衛

巳年ハ壹人ニ金三十兩宛被下候、寅卯辰三ヶ年ハ壹人ニ銀貳貫五百目宛被下候、

運上金銀之譯

一金二万八千三百六十七兩　但元祿十丑年ゟ寶永五子年迄、拾二ヶ年分運上、

一銀二千五百九貫目餘　金銀上納高

一銀九百二十三貫五百目餘　但五割運上銀之內、會所入用ニ被下之、

右之通、元祿十丑年ゟ寶永五子年迄、酒運上差出候處、翌巳年冬ゟ運上相止申候、

〔敎令類纂初集六十八〕元祿十丁丑年十月

今度町中造酒屋共方ゟ、御運上出候筈被仰付候、就夫御運上之儀、御酒屋理兵衞、八左衞門、次左衞門、忠助、此四人取立申候、改候仕方は、右四人之者方ゟ可申談候間、少も違背仕間敷候、品ニ寄四人之方へ問屋共呼可申候間、左樣候ハヽ、早速罷越、差圖を請可申候、但請酒屋之分は、運上出不申、造酒屋計出し申候間、此旨可相心得もの也、

十月

〔百一錄〕寶永六年三月十二日、酒運上等運上被免、船石錢是亦赦免、

〔地方大槪集六〕酒株之事

造酒觸書之事

三分二造改方之事○中略

一造酒運上、關八州者、享保年中差免され、方今は無運上ニ成たり、されど、餘國は前々の通、休株にて酒造致さずとも村役にて小物成同樣、役銀相納むる所もある由なり、

但關東の內ニも私領には前々引付にて、酒荷口金又は冥加など、唱、酒造屋より役永納る所もあるなり、

可令觸知者也、

丑十月　備前　駿河

雜色　町代

一同年十月、酒改之儀申付、

新町通一條上ル町　重衡屋平右衛門

新町通三條下ル町　茨木屋甚左衛門

室町通四條下ル町　菱屋長右衛門

酒改様之儀、従江戸酒屋利兵衛、同忠助、此兩人登リ候ニ付、立會、江戸ニ而改之筋ニ相勤候ニ申付、

一酒改之會所、二條通新町西江入、表口六間餘 裏行十三間餘 借屋也、宿代一ヶ月ニ百目宛、手代二十五人、小使三人、下男五人有之由、

一先年酒造米株高十三万三百九十三石餘、此酒屋數六百二十六軒、但洛中、洛外、嵯峨、八幡、山崎、井手村、醍醐、江州坂本之分、

一支配八ヶ國、寛文九酉改ニハ、酒屋數千八百四軒、造高五万二千八百二十壹石餘之由、但元祿十巳年改之儀ハ、洛中洛外右ヶ所之外、御料ハ御代官、私領者領主ニ而相改、運上之儀も私領者領主江相納候、

一運上銀上納之儀、最前ハ大坂御金藏江相納候處、元祿十二卯年四月、右御運上銀爲替ニ而、三井次郎右衛門、同三郎助請取、於江戸指上度由願ニ付、其通申付、同七月ゟ初而爲替ニ致させ、向後此通ニ申付候、

一右會所入用、筆墨紙蠟燭宿代給金米薪鹽噌賄入用書記之、此分被下、外ニ酒改三人之者江初年

可レ爲二直進一之旨、可レ成二奉書一候由被二仰下一之、

一御末男衆十三人御月宛事

各百疋宛可二下行一之由被二仰出一之、

十月十七日

一柳原下〔註〕木南西頰酒屋中村三郎左衞門尉、小川實彌相續内山玄左衞門尉等事、

爲二二條殿御被官一之間、可レ爲二直進一之旨、先度被レ仰二付中澤備前守一、被レ成二奉書一之處、玉泉不レ手レ引之條以レ下

行可二申付一之由、以二萬阿一被二仰付一之、

〔雪月花二〕一元祿十年丑七月酒。御。運。上之事

酒造株高　十三万三百九十三石　酒屋　六百二十六軒

洛中井嵯峨、八幡、山崎、井出村、醍醐、山科、江州坂本、大津、

右之運上銀合三百十四〆十三匁九分六厘貳毛、同寅年酒造高二万千百四石、酒屋右同斷此運上銀千

百六十六〆四百目、

同卯年、酒造高六千二百四十七石三斗二升、但去寅年造高五分可レ被レ致候樣被二仰付一候故、如レ此御座候、

此運上銀二百九十二〆八百四十三匁壹分

〔京都御役所向大概覺書六〕先年造酒運上之事

一元祿十巳年十月、酒運上取立之儀ニ付相觸候事、

覺

一酒商賣多、下々猥ニ酒ヲ飮、不屆成儀も仕出シ候ニ付高直ニ成、下々酒多不レ飮樣ニ、今度諸國酒

運上被二仰出一候條、向後其酒ニ應じ、直段五割程高ク成候儀運上可二差出一運上取立役人相極、追而

可二申觸一候間其者方江罷越酒改ヲ請、運上之員數等可レ受二差圖一候、此旨洛中洛外之酒屋井町々江

度々被仰出條々　延德二貞通

八月卅日、以葉室殿被仰付之、

一嵯峨倉酒屋役事

今度將軍〇足利義稙宣下御要脚、爲洛中酒屋土倉三万疋役分進納之、沙金代未下之間、以後東所役錢可被付、其足雖爲上樣御料所、先例無之上、御事闕之間、先可致借取之由被仰出之、仍宜下方之儀、悉皆白川殿御存知之條、以上州御意訖、

同日、以葉室殿被仰付之、

一大津松本酒屋役事

同御足付之條、可申付園城寺雜掌之由被仰出之、〇中略

九月廿一日、以葉室殿被仰付之、

一酒屋土倉役事

以前一乘中村九郎左衛門尉井深村平右衛門尉、押置地下御公用、致狼藉之條、言語道斷之次第也、所詮度々任被仰出候旨、可言渡當御倉玉泉候由堅可申付之、於引違分者有御糺明、就有無落居可被仰付當御倉之由被仰下之、

致筭用狀井引違分注進等以前、備上覽處、被置御前訖、

同日、以種村刑部少輔被仰付之、〇中略

一野洲井酒屋土倉役同臨時等事

就此度土一揆張本人上山討捕之、爲忠節、一代御免之旨可成奉書之由被仰出之、

同日、以葉室殿被仰付之、

一福井酒屋土倉役川臨時等事

肆拾貫文
百貫文
以上百捌拾貫文
定殘陸拾參貫五百廿三文
嘉吉二年六月日

山井安藝守景久　兩人御訪下行
吉田社神殿御修理幷神服部要脚下行

〔大乘院寺社雜事記〕長祿四年六月廿六日、一幷山酒。壺。錢。役。事、爲京都連々御成敗之處、𢌞山儀于今無一決、仍去年分于今令無沙汰候間、無力可及嚴密沙汰旨取向處、以光宣僧都色々爲𢌞山歎申入之間、無力每年不退六十貫文之通致請文了、萬一壺數增バ可見知之由仰定了、知院緣舜法眼奉行、繼舜申次之了、自𢌞山光宣僧都方ニ令申使者妙觀院云々、仍爲後證令加判了、各於公文所加判者也、

請文案

恒例當山酒壺錢事、不依壺之多小、每年不退六拾貫文分、七月上旬可令沙汰進上候、此上者始中終以此分可被聞之候者、可長存之旨、𢌞山評定候由、可然樣可預御披露候、恐惶謹言、

長祿四年六月廿六日

井山年預實照判
副年預英弘判
妙觀院宗祐判

御奉行所

〔親元日記〕文明十三年六月十四日丁巳、酒屋中上下より御禮千疋、去二月より七月まで半役御免御禮云々、杉江方へ渡之、

〔集古文書三十七〕延德二年酒。屋。役。條目

参拾五貫六百文　　御女房達御行着物進納
拾貫文　　今如意様御方御人数御行着物、當月來正月分、
百貫文　　大御所様乘御月宛
以上貳百参拾貫九百四拾六文
嘉吉二年
正月分
拾捌貫百拾七文　　朔日御祝幷炭代
参拾九貫九百四拾文　　御油代
参拾五貫六百文　　御女房達御行着物進納
拾貫文　　政所内談始御要脚
百貫文　　大御所様乘御月宛
以上貳百参貫陸百五拾七文
二月分
貳拾漆貫四百十七文　　朔日御祝幷御炭代
参拾捌貫四百五十文　　御油代
参拾六貫六百文　　御女房達御行着物進納
百貫文　　大御所様御月宛
以上貳百貳貫肆百六十七文
都合六百参拾漆貫漆拾三文
殘貳百肆拾参貫五百廿三文
此内
肆拾貫文　　季長季末両人御訪下行

件小野宮神人等申酒。麴。役事

爲西京之所業、以彼得利、相從神役之處、近年或神人等令出座住地方、或請習其業、盜商賈之條、彼是自由所行、不叶道理歟、所詮去貞治年中、造酒正師郡以下罪科事被經奏聞畢、於出座者還住本所、勤社役、至非成業之族者、雖爲洛中、可備神稅者也、以此趣被申別當僧正御房之狀、依神仰執達如件、

嘉慶元年九月十六日　　　左衛門佐花押

當宮御師石見法師御房

〔建武以來追加〕洛中邊土散在土倉幷酒。屋。役條々〇中略

一政所方年中行事要脚內六千〇千一本作十貫文支配事

爲每月々別沙汰之上者、縱雖有御急用、寺社幷公方臨時課役等、永可被免除之焉、〇中略

一造酒正申麴。役。事

自往古、有限所課也、不可依此沙汰焉、〇中略

明德四年十一月廿六日　　　左衛門佐源朝臣在判義將

〇按ズルニ、麴役ハ酒屋役ト同ジキモノナルベシ、

〔集古文書五十四注文〕嘉吉元年十二月廿日懸納幷進納分

酒屋參百貳拾七ケ所分但此內新加廿五ケ所、中公事□之一所銅貳貫八百文宛、分錢捌百捌拾貫陸百文內

進納

十二月分

貳拾參貫捌百廿三文　　　朔日御祝幷御炭代

參拾九貫九百四拾夾　　　御油代

貳貫四百文　　　御くだ物代

拾玖貫百八拾文　　　年始歲末御祝方色々沼田方行之

拾匁宛之運上、買請候米屋共より差出可申事、

但惡米ハ運上不差出、正米直段に准じ相應ニ可買請候、万一正米を惡米之由申まぎらし、下直ニ買請候ハヽ、是又賣主より急度可申出候、吟味之上可相咎候事、

一當十月十五日、買請米高賣渡米高、一ヶ月切ニ月番町奉行所江書付差出、運上は賣渡候月より中一ヶ月置ニ可相納候、

一金壹兩米壹石四斗以上買請候ハヽ不及運上候、尤賣直段は買請直段に應じ、勝手次第たるべき事、

但賣直段より買請直段、各別下直買請候ハヽ、遂吟味可相咎事、

一右運上申付候儀、此節計と心得、十分に買入ざる儀も可有之哉、米直段不宜内ハ、何ヶ年も運上申付候間、丈夫に直段買上可申候事、

一運上差上候付而、万一買請不申米屋有之候歟、又者邪曲を以、紛敷儀においては、米賣主より早早町奉行所江申出し、吟味之上急度申付候、若不申出者有之、後日ニ相知候ハヽ、是又曲事たるべき事、

一江戸大坂米直段宜相成候迄、近國より例年に替り、俄に米高積廻し申間敷事、

一大坂ニ而ハ、米切手賣之儀も、右同前相心得例年に替り、米高多壹度に切手差出申間敷事、

一右之通に而、江戸大坂米直段宜成候ハヽ、右に准じ、諸國とも米直段宜賣買可仕候事、

右之通、急度相心得、米賣買可仕候、

右之趣、相觸候條、其旨相心得、御料者御代官、私領者地頭より可相觸候旨可被達候、

十月十〇 享保二十年

〔北野文書〕管領斯波義將執達

米商稅

何で許し玉はぬぞやと云ひけるに、順齋是を聞て、今より後、偸盜の起り候はぬ政だに候はんには、如何にも許しなんと答ふ人々心得ず、如何なる事ぞといへば、本朝にて、唐土より殊に勝れたる者は紙の品なり、中にも、小紙といふ者は、高きより卑きに至て、一日も無くてかなはぬ者にて、其價の賤ければこそ、世の助けとはなれ、望み請ふ者が、今までの商人が奉りしより、千兩の黃金を增して奉らん、といふは、此千兩の金、いづくより出づべき、此紙をあきなふに、價を增して、其利を得て奉らんとの事に候はん後まづ價を增して商ふを、又それを買て、商ふ人いくらもあらんに、是も同じく、利を得てあきなはんとせんには、こゝに加り、かしこに增して、後には價甚だ貴くなりなん、凡そ一帖の紙價、一二錢を增したらんには、貴ある人の患となるには足らず、貧賤の人、一日に得る所の利、誠に少なし、僅に一錢二錢を重ねて、妻子をも養ふ、かくあさましき者とても、今日までは、小紙やうの者を常に用ゐ來れり、値忽に增したればとて、更に何物を以てか是に代ふべき、然らばこれ等も又、おのれ〳〵が商ふ者なにもあれ、その値を增して、其得る所の利を以て、小紙をも買ふより外の事あらじ、〇下略

〔鹿苑日錄〕明應八年八月六日、東歸和尙、仔細問唐船事、〇中略又金溪和尙曰、天龍寺船歸朝之時、於鹿苑有抽分也、于時院主則竺雲和尙也、所謂抽分錢者、荷物日本之直、有博物之人、而定其直、以其十分一納之於寺也、

〔親俊日記〕天文八年十月十五日己卯、米屋座賦百疋到來之、

〔德川禁令考米穀五十七〕米直段幷運上其外賣買之儀ニ付御觸書

米直段次第下宜罷成武家幷百姓難儀之事にて、町人諸職人等に至迄、商ひ薄く、かせぎ事無之、世上一統之困窮におよび候間、當冬より、江戶大坂米屋共諸國彿米、江戶ハ金壹兩に付米壹石四斗以上ニ買請可申候若直段より以下ニ買請申におゐてハ、當月十五日より米壹石に付銀

義ニ候哉、右未年ハ、私共より何程宛會所へ出銀候哉ト御尋御座候、
此義、御冥加銀都合銀貳百三拾枚之内、私共仲ヶ間貳拾組より、銀六拾枚、在方質屋共分銀七枚、都合六拾七枚、天明七未年まで年々無滯直上納仕候、會所出銀之義、壹ヶ月限り貳匁宛家別ニ取集め、貳拾組年番之者共より、七月十二月兩度ニ未年迄ハ、是又無滯會所へ相渡申候義ニ御座候、尤會所冥加銀不納致罷在候義、在方質屋、町方古手屋義ハ、私共組合相違ひ候ニ付、右樣之義ニて、會所より右之通不納致候義ニ候哉不奉存候、〇中略
右就御尋、此段奉申上候、以上、

町方質屋仲ヶ間貳拾組總代
烏丸竹屋町下ル町　金屋庄八

寛政十二申七月廿二日

藏敷商運上

〔明良帶錄世職〕籾會藏所
非常の手當として、籾にて圍置、小間の運上あり、石橋彌兵衞持なり、
西河岸會所　杉本茂十郎持にて、手代取扱、

紙商運上

〔藩翰譜五伊丹〕たとへば、當時商人の抽分の料とて、世にいふ、運上金といふ事なり、黃金を公けに奉りて、甲斐の國の御領より出る小紙を、世にいふ、鼻紙といふものなり、一人して買て商ふ者あり、然るにまた富める商人ありて、職につきて今迄の人が奉りしより、貢金一千兩を增して奉るべし、某に小紙買ふ事を許し給ふべき由を望み請ふ、人々此事然るべき事なり、許すべしといへば、入道順齋、まづ待ち玉へといひて聞かず、此望み請ふ商人は、執政の人々にも知られたる者なれば、内々執政にも此由を申て望み請ふ事止まず、三年の後、執政の人々順齋に向ひて、甲斐の御領より出る紙の事、望み請ふ者あり、聞職の人々許すべしとあれども、わどの獨が用ゐぬといふはまことか、天下の富より見る時は、千兩の黃金、誠に少しきなりといへども、これを以て國用を足す時は、豈貧なしとせんや、如

訖、

洛中洛外酒屋土倉納錢執沙汰事、捧貳十人連判、任申請員數之旨被仰付候訖、於御公用者、每月對御倉正實可相渡之旨、可被成御下知、□□□□□恐々、

十二月卅日　親俊

松田丹後守殿

地下人納錢爲禮三百疋到來之、佐野中山野洲井來也、貴殿へ五百疋進上之、月宛百疋可進納云云、道運へ百疋、

十一年二月廿三日甲戌、京中倉役事、御小者御雜色被除之可被仰付候、　三月朔日壬午、先度被仰出候京中諸土倉懸錢事、重テ執事代松丹御倉正實坊然者五十疋分、可立御用候由被仰遣候、

〔長享年後畿內兵亂記〕永祿五壬戌年九月十二日、三好筑州依訴訟德政不行、至十二月以公人洛中洛外至邊土德政不行旨被相觸者也、然間倉役各出之也、

〔地方凡例錄五〕一質屋冥加永

質屋之株有りて、仲間行事等相立有之、冥加永運上之類、以前者無之處、近年者御府內も運上相始り、國々ニ而は運上冥加永相納る所も有、亦運上もなく、仲間行事等もなく、勝手次第質取る所も有、在之村方等之小質屋、願等無之、勿論冥加永等之沙汰もなく、勝手次第之所多分有之、所々其所仕來ニハ格別、左もなき町場等、質商賣願出ニハ不及事也、

〔御答書幷御願書之寫〕就御尋口上書

一私共儀、質屋渡世仕罷在候處、天明七未年分冥加銀貳百三拾枚之內、私共仲ケ間より直納致候銀六拾七枚ハ相納候得共、會所より相納候百六拾三枚不納致罷在候、右未年は、私共仲ケ間より出銀、會所へ不相納候故、會所より不納致候儀ニ候哉、又ハ出銀ハ會所へ相渡候得共、不相納

〔花營三代記〕應安四年十一月二日、諸國段錢、洛中邊土土藏別三十貫酒屋壺別二百文云々、

〔建武以來追加〕洛中邊土散在土倉并酒屋役條々

一諸寺諸社神人、并諸權門扶持奉公人體事、悉被勘落之上者、可致平均沙汰焉、

一寄事於左右及異議所々事

任法爲衆中可致其沙汰、若尙於難澀之在所者、就注進有糺明沙汰、且立用公物、且可被付寺社修理矣、

一政所方年中行事要脚內六千貫文支配事

爲每月々別沙汰之上者、縱雖有御急用、寺社幷公方臨時課役等、永可被免除之焉、〇中略

右此條々、更不可有違依之儀、可令存知之狀、依仰下知如件、

明德四年十一月廿六日　　左衞門佐源朝臣(在判義將)

一諸土倉之事(文安二九廿九〇政所壁書、諸土倉上有洛中洛外四字、廿九作廿一、)

依類火令燒失土倉、或入止之、數年之間可免除公役之由、雖歎申族出來、向後一切不可被許容、德政已後、土倉令減少處、猶以寄事於左右、雖及訴訟、不可有御免之、令略本宅、若以密々之儀、可取高利并日錢等之質物、造意歟、甚不可然、於土倉雖爲一所、至減少者、云公役失墜、云諸人愁歎、旁以就公私非無其費、所詮於自今以後者、堅所被停止之也、若背制禁企訴訟者、可被處重科、

永享二年十一月九日　　加賀守基貞

散位貞元

〔親元日記〕文明十年六月廿一日辛亥、就御作事要脚之儀、酒屋土倉無役所々へ御借用事、兩奉行上使、(治部大夫松田對馬守)(式)所司代(浦上近江守)被仰之、御作事奉行(布施下野守飯尾加賀守)に貴殿御副あり、

〔親俊日記〕天文八年十二月卅日癸巳、納錢方事、上下京地下人廿人、捧連判致加增、依望申被仰付之、

倉稅
倉役
質屋運上

組合行事町々年寄共江

當地兩替錢屋共江役金被仰渡候ニ付、諸商賣人所持之天秤壹挺ニ付、一ケ年冥加金貳歩ツヽ之積り、去辰年より當未年迄四ケ年分、金貳兩之處、當未年中貳ケ年割納いたし候樣、當十月尚又申渡候ニ付、當年分追々相納候、其餘商賣體も難成、至而困窮等を申立、當年可納分、今以不納者共も在之候、依之右不納之者共は、此度相除キ候而、當年分納濟候者共尚又天秤壹挺ニ付殘金壹兩者、格別御宥免を以、來申年より辰年迄九ケ年ニ割納申付候間、申より卯迄八ケ年ハ、壹ケ年ニ銀六匁六分ツヽ、相納、辰年皆濟之節者、七匁貳分ツヽ相納可申候、右之通申渡候上者、年々無滯相納可申候、且又此節迄冥加不納之者共者、所持之天秤、御役所江所持之者共者、一町限年寄共より可申聞候、尤此以後新規ニ天秤用度もの在之候ハヾ、先達而申渡置候通可伺出候、右之段人別ニ呼出し可申渡候得共、多人數之儀ゆへ、其方共へ申渡候間、其旨相心得、町々年寄共江可申聞候事、

天明七年未十二月

右之通、町々江申達置候處、翌申正月晦日、大火後、未何之沙汰も無之候事、

〔元德二年三月日吉並叡山行幸記〕同二年〇正和には、新院御治世わたらせ給ひて、大宮並神輿造替の御沙汰あり、神殿の料足は、戶津升米、神輿の功程は、京都の土藏にかけられけり、山門子細を申ければ、山門氣風の土藏には、件課役被除之由、仰下されけれども、其御喜とて、一字別七百五十疋の沙汰をいたしつゝ、終造畢して、本社に奉送、〇中略四月〇元德四年には、祭禮可承繼之由、嚴密の沙汰侍て、馬上料足は、京都の土倉にかけて、儉約の儀をもてつとむ、

〇按ズルニ、土倉トハ質倉ヲ謂フナリ、

〔小田原衆所領役帳〕百貫文町屋下　伊勢八郎殿、但上表ニ付、御藏錢被懸、

慈悲ヲ御聞濟被成下置候樣奉願上候、以上、

三組番組兩替屋世話方

神谷町彦兵衛地借

新助印
（以下八〇人略）

慶應三卯年十二月十四日

天秤料

〔國制記四〕天秤料上納之覺

一天明五巳正月御觸在之、壹町限天秤所持之者、名前書出可申旨被仰渡候ニ付、町々ニ而有無相糺、所持之分計名前書上置候事、

同七年未年三月廿四日、東御役所江被召出候ニ付、當組町相揃罷出候處、京都之儀者、銀子取扱、反古包ニ而、前々より取引致來候、此度兩替幷錢屋仲ヶ間へ被仰渡候間、右素人天秤所持之者共江、割合金被仰付候間、去辰年より當未年迄四ヶ年分、天秤壹挺壹ヶ年ニ金貳歩宛都合貳兩、當年中ニ上納可仕旨被仰付、依之町々天秤所持之面々江申聞、得心之上、同四月朔日御請書奉差上候、同十月十七日御觸書到來、右天秤料當年出金可仕處、時節柄不宜候ニ付御慈悲を以、當十一月十五日迄之内金壹兩、來申年引殘之壹兩割〆ニ可仕旨被仰渡候、同十一月十五日ニ、町町罷出、當夏以來、米穀高直故、銘々困窮ヲ申立、上納之儀來春迄御猶豫被下度旨、一同御歎申上候得共御取上無之故、十一月十八日、天秤所持之面々より、壹挺ニ金壹兩宛、室町荒木伊右衛門江相渡、手形引替、右切手東御役所江相納候、

但し町々天秤所持之内ニも米屋酒屋等者、其仲ヶ間へ差出し、町分ニ相拘り不申候、

同十二月廿四日、東御役所江京中組之行事、町年寄被召出、當組も罷出候處、御前ニ而被仰渡候寫

洛中洛外町續町々之内

天明七丁未三月十日

本兩替仲間
南鐐屋組
三口錢屋組

返答

一先達而丑寅兩年分、商内高書付可ㇾ奉ㇾ差上ㇾ樣被ㇾ仰付、則兩年分商内高書付相認奉ㇾ差上ㇾ候、然ル處卯十二月ヨリ、增步早々取立候旨被ㇾ仰付ㇾ奉ㇾ畏、夫ヨリ追々商内仕來候處、全體近年世上不景氣ノ模樣ニ御座候が、殊ニ右增步掛引仕候故哉、近來兩替用事ども無數ニ罷成、年々賣買相減じて、銘々渡世も難ㇾ仕姿ニ成行、至て難澀仕候故、乍ㇾ恐右增步之義、何卒古來之姿ニ可ㇾ被ㇾ成下ㇾ樣、奉ㇾ願上ㇾ度存知含罷在候、然ル處此度、辰年ヨリ當未年迄之役金高、上納可ㇾ仕樣被仰付、誠廣大之金高故、十方暮恐入奉ㇾ存候、前段に奉ㇾ申上ㇾ候趣ニ御座候ニ付、何卒至而御減少被ㇾ成下、商内相續仕度候、此段各々樣御賢慮ヲ以、宜鋪御願取可ㇾ被ㇾ成下ㇾ候樣、奉ㇾ希上ㇾ候、以上、

行司

天明七丁未三月十二日

錦屋卯之吉
代 利介印
近江屋富太郎印
鴻池屋幸介印

〔諸問屋身元金調下〕乍ㇾ恐以ㇾ書付ㇾ奉ㇾ申上ㇾ候

一今般御改正被ㇾ仰出、渡世身元金上納方之儀ニ付、一昨十二日厚御諭之趣、一同難ㇾ有奉ㇾ承伏ㇾ候、依ㇾ之仲ヶ間場末小前之もの共迄、三組番組幷牛込榎町濟松寺領共、人數六百三十三人之もの共江篤と申諭、御手數恐入候ニ付精一配出精仕、年々貳千兩奉ㇾ上納ㇾ度奉ㇾ存候間、何卒格別之以ㇾ御

月番之奉行所へ可訴出候、左候ハヽ遂吟味、元方不埒之筋も相聞候ハヽ、嚴重ニ是又咎可申付候間、一同不移時日、夫々直下ゲ、荷元等之懸合可致候、

右之趣、町中不洩様可觸知もの也、

寅五月

右之通、從町御奉行所被仰渡候條、早々町中端々迄、不洩様可相觸候、

但番屋江ハ、太筆ニ相認メ、可張出置候、

寅五月十二日

町年寄
役所

○按ズルニ、十組問屋菱垣廻船問屋ノ事ハ、產業部商業篇ニ在リ、

〔天明集成絲綸錄四十六〕天明四辰年十一月

町奉行江〇中略〇

今般兩替屋共、役〇〇〇〇金相納候ニ付、右御定兩替屋之外、商人共ゟ素人江錢賣渡候儀、決而致間敷、兩替屋江賣渡可申候、〇中略〇

右之趣、町中急度可相觸者也、

十一月

〔本兩替仲間要用差出扣〕差上申一札

一兩替役金之義、先達て三万五千兩可相納候旨被仰渡候處、格別減少之義、御願申上候得共、增歩取置候上者、役金之義差上可申筈ニテ、尤役金之義、最初ヨリ十ケ年積被仰渡候得共、去辰年ヨリ、當未年限御免被成候旨、先達て書上候丑寅年兩年分、商賣高平均高割付、一ケ年役金貳万兩宛積ヲ以、右四ケ年ニて、都合八万兩、當年中追々上納可仕候、右納方割合之義、一統へ申聞候上、早々書付を以可申上旨、被仰渡奉畏候、御請依如件、

難成程之切金輕目金を以上納致候儀ニ付半金下ゲ之分ハ、御藏金ヲ以引替遣ス、年々右之振合を以、順々御預ケ被成候、其旨を存、上納金致候者江不洩樣申通、不取締之儀無之樣可申合、

巳六月五日

（幕令拔抄八）江戶菱垣廻船積問屋共より、是迄年々冥加上納金到來候處、問屋共不正之趣も相聞候ニ付、以來上納ニ不及候、尤向後右仲間株札ハ勿論、其外とも、都て問屋仲間幷組合抔と唱候儀ハ不相成等に付てハ、是迄右船ニ積來候諸品ハ勿論、都て何國より出候品にても、素人直賣買勝手次第可爲候、且亦諸家國產類、其外總て江戶表江相廻候品々も、問屋に不限、銘々出入之者ども引受賣捌候儀も、是亦勝手次第之旨、於江戶表被仰渡候、右ハ諸商賣手廣に相成候樣、格別之御趣意を以て、被仰渡候儀ニ付、厚く相心得、江戶積到來候者ハ、無危踏、諸品積廻し方可相勵候、

右之通、三鄉町中可觸知候也、

天保十二丑年十二月廿三日

（御觸書集覽一）天保十三寅五月十二日

諸色高直ニ而ハ、四民困窮之基ニ付、今度十組上金を初め、總而物價に可拘筋之上金類、幷冥加ヲ以、御用相勤候向々、欠附人足等迄不殘御免之上、厚御世話も有之候處、諸色直段之儀、日用之品ハ追々引下候趣ニは候得共、品物ニ寄、一向直下ゲ等不致分も有之、或ハ品を劣らせ、懸目、升目等を減シ、如何之賣方致し候ものも有之哉ニ相聞、不埒之至ニ候、右風聞之通相違も無之ニおゐてハ、折角御世話有之、御仁惠之御趣意も不行屆、直下ゲ之詮も無之候間、銘々御城下ニ安住いたし、御國恩を以、無異ニ家業を營候冥加之程を相辨、實意ニ立戾り、正路ニ渡世可致候、萬一利德ニ泥ミ、心得違之者も有之候ハヽ、密々役人相廻し買上ゲ置、嚴重之咎申付ルニ而可有之候、乍去元方直段引下方之懸合行屆兼、無據直下ゲ難相成譯柄も有之候ハヽ、元方掛合之書面を以、無斟酌早々

問屋總仲間貳拾五人ニ而、年々金三拾五兩、竹皮問屋總仲間十人ニ而、年々金貳拾兩、奧州筋船積問屋總仲間三十五人ニ而、年々金貳拾兩、油問屋三人ニ而、金三拾五兩、小間物問屋總仲間百六拾九人ニ而、年々金三百三十兩、人參三臟圓賣藥渡世平兵衛儀ハ、年々金貳拾兩、塗物問屋總仲間貳拾六人ニ而、年々金六拾兩、菅笠問屋九人ニ而、金拾兩、廻船下り鹽問屋、下り鹽仲買問屋兩組總仲間貳拾壹人ニ而金五拾兩、下り酒問屋總仲間三拾八人ニ而年々金千五百兩、永々上納致方、并大坂足袋商人共之儀、足袋荷物菱垣船ニ而積下シ候ニ付、右商人共申合、年々金拾五兩、爲冥加永々上納相願候得共、御當地へ住居不致候ニ付、旅宿致し候雪踏問屋九人之者共より上金致度旨、積行事大行事會所頭取差添、組合限り願出候、然ル處運上物等之下々難儀ニ相成候義ハ先年御差留ニ相成候儀ニ付、不容易事ニ付再應相糺候處、商賣物直段江拘り候儀ハ決而無之、又ハ及後年手元難澀之義等も決而無之由ニ而、上金之儀達而相願、段々申立候次第、奇特なる儀ニ付、願之通申付候間、右金高年々上納可致候、且又上金之儀ハ、通用難成程之切金輕目金を以相納候樣可致、

申渡

菱垣廻船積仲間十組問屋
大行事　品川裏河岸
釘屋嘉助
外三人

此度十組問屋共相願出候上金高、都合八千百五拾兩之儀ハ、毎年其方共より直ニ當御役所へ可相納候、尤右之內、半金四千七十兩ハ、爲融通十組總仲間之者江被御預置候間三ヶ年相立、四ヶ年目上納可致候、勿論御貸附抔と申譯ニハ無之、利金等差出候筋ニハ決而無之、全仲間之者共爲融通三ヶ年之間御下ゲ被成下候間、心得違無之樣可致候、尤上金之分ハ、先達而申渡置候通り、通用

〔室町殿日記九〕掟○中略

一洛中洛外諸商買人等座之輩、先規之運上雖無沙汰、被免許之條、向後急度可上納候事、○中略

右三ヶ條、違犯之輩於有之者可爲曲事候もの也、

永祿八年七月日

松永彈正少弼

問屋運上

〔地方凡例錄五〕一問屋運上

是ハ湊河岸場、町場、種々之問屋有、穀問屋、絹問屋、肴問屋、舟問屋、其外諸商賣總而問屋無之はなし、賣物之品々取あつかひ之大小ニ而、運上高ニ多少有り、勿論問屋株有之、新規ニ願出る共、容易ニハ不許事也、

十組問屋運上　菱垣廻船問屋運上

〔德川禁令考四十五商估〕文化六巳年六月

十組問屋冥加金

申渡

江州城州茶問屋總代
南傳馬町二丁目平左衛門店
友次郎
外二人
其外問屋十六組程

不殘

其方共儀、從往古御府内住居ニ而、商賣手廣に致し、御國恩冥加之儀を存候而、此度十組之内、眞綿問屋總仲間三拾三人ニ而、年々金百兩、干鰯魚〆粕魚油問屋總仲間拾五人ニ而、年々金貳百兩、江州城州茶問屋總仲間三拾人ニ而、金五拾兩、古手問屋總仲間拾貳人ニ而、年々金五拾兩、下り蠟燭

市場運上之義者、往古より定り、新規之市場願出るとも、容易ニ不差許、市ニも所々有、種々の雜物商賣するも有、穀物計或ハ絹所ハ絹綿糸類之市も有、農具物者重ニ市有、又馬市有、肴市、茶煙草市、其外最寄之勝手宜敷類、古來より其品其所ニ而致商賣來、遠方よりも其市ヲ心掛る故、其所々之仕來有、市場運上之義ハ、市立町數の長短ニより、運上之多少も有、同樣ニは難極、又商賣物見世役とて、其見世々々より取立る運上有、賣高之分一有、見世々々より取立る類ハ、市毎不同有、市場運上と極り、其所より納る運上ハ、市之繁昌不繁昌ニ不拘、小物成名目之樣に成、年々無不同相納る、然れ共古へ者、市有之市場ニ而も、漸々致衰微、近年相止たる場所御免願出れバ、吟味之上、市運上免許申付る事有故、市運上ハ定納小物成共難定、先ハ浮役之類也、

〔祇園執行日記〕康永二年十二月三日、綿新座神人社役、去卅日、三百文外不出候間、今日綿賣三人、所持綿付納留置了、　四日、綿新座神人〈小袖座商人〉、昨日三人所持綿之今日二人出、人別二百文、

正平七年二月十八日、安居神人所役事、自吉野殿號被免許、商人公事難澀之間、今日予帶康永元二兩年院宣案、今日向姉小路〈中略〉尋子細之處、任先朝御代例、被免公事之由、被下綸旨、於洞院殿可相尋之由承候間、先日下知了、

〔大乘院寺社雜事記〕寛正三年十二月二日、一仕丁戶上國安事、致唐笠之沙汰者也、仍當門跡唐笠座衆ヱ、每年百文宛致其沙汰了、此二十餘年如此也、然而此六七年以來、以仕丁號此百文料足令無沙汰之間、連年座衆致訴訟之處、國安申入趣ハ無其儀也、一向座衆虛言申入云々、兩方申狀令相違間、去月座衆與國安召合糺明候處、國安申狀無其謂也、其子細問答候處、向後事可致公事旨、國安領狀申了、總座衆ハ七ケ年無沙汰分七百文、同可致其沙汰旨訴訟申、色々以折中儀、如形名主方歲末事致其沙汰無爲ニ成了、幷國安之子事ハ可加笠座衆之由治定申了、雖爲仕丁云昔座云唐笠座、其座之公事ハ致其沙汰者也、仕丁職ニハ不混亂事ナリ、國安之子ハ不仕丁也、

勝手儘ニ相成候而ハ百姓共本業を怠候基ニ而、冥加運上等差出候得共、自然猥ニ稼方難出來様心得、取締之事ニも相成、殊ニ在々最寄限之渡世筋を以、相納候冥加運上等ハ、其品ニ對し、聊之儀ニ而、物價ニ差響候ニ者無之、既ニ御代官共ヨリも、前書之趣、追々申聞候向も有之、旁右等之分も、是迄之通居置候様可仕哉と奉存候、依之尙又此段奉伺候、以上、

巳七月〇弘化二年

〔大成令六十九〕萬治二亥年正月

一振賣之者、五拾以上拾五巳下、幷かたわ者ニ、今度振賣御札被下候間、只今迄振賣仕候者ばかり、年數僞り無之様ニ町中吟味仕、書付上ゲ可申候、家持札取候儀、又ハ新規に振賣商仕、札取候者堅停止之事、

一絹、紬、木綿、麻、布、幷かや、してう振賣仕候者に御札被下候間、人數改書上ゲ可申事、

一古著買、煎茶賣候者有之候はゞ、吟味仕、其町々人數書付上ゲ可申候、是ハ札錢壹ヶ年に金子壹兩宛被召上候事、

一髮結壹ヶ年に、師匠は金子貳兩、弟子は金子壹兩宛被召上候間、人數相改書付上ゲ可申事、

一振賣御札被下候以後、札なしに振賣商仕候者於有之は、御改之上、當人は曲事被仰付、其上家主ゟ過錢として拾貫文宛被召上候間、此旨急度相守可申事、幷髮結札なし、右同前之事、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年〇安貞元年閏三月十七日丙申、諸國守護地頭所務之事、貞應二年任御下知狀致沙汰、市津料、供給雜事、赤銅等事、可停止守護所張行事、以下條條被觸仰云云、

〔大乘院寺社雜事記〕延德四年〇明應元年五月十七日、一辰市過錢間事、昨日巨細古市方ニ令申旨宗順相語之、

〔地方凡例錄五〕一市場運上

弘化二巳七月十七日、伊勢守殿ゟ御直、土佐守上ル、同月廿七日承付候樣、上倉彥左衛門を以、御同人御下ケ、翌廿八日承付いたし、佐山八十郎を賴、同人被遣返上、

諸運上冥加之內、問屋幷商賣等之銘目を以納來候分、取立方之儀、評議候趣、相伺候書付、

書面伺之通、可取計旨被仰渡、奉承知候、

巳七月廿七日

石河土佐守
松平河內守
佐々木修輔
羽田龍助
立田岩太郎
關保右衛門
御勘方

在方諸運上冥加之儀、一般差免候而ハ、農家之本意を失ひ、取締にも拘り、其外品々差支も有之候ニ付、再應評議之上、問屋幷中買仲間運上之類ハ、先般被仰出候趣も有之候ニ付、御差免、尤右等之銘目相唱候とも、稼方之事實利潤ニ拘候儀無之分ハ、追而糺之上取調、其外商賣之利潤を以、相納候類ハ、御差免之積ヲ以、是迄之通可被居置分、幷御差免可相成分共、口々取調、勿論向後新規稼方願出候節ハ、右等之趣ニ准ジ、相糺候上、前々仕來之通、私共手限を以申付候樣可仕哉之段、去辰十一月中相伺候處、伺之通可相心得旨、被仰渡候間、古來ゟ之唱來を以、問屋又ハ仲間等之類ニ相聞候分者夫々糺之上、金銘目而已ニ而、稼方之事實、都而右樣之筋ニ無之、物價等之響ニも不相成品者、銘目唱替之上、是迄之通り居置候儀ニ有之、然ル處、右之外商賣之銘目を以相納候類、且小賣幷受賣酒屋等運上冥加之儀ハ、御差免之積、其砌申上置候得は、御府內と違、在方之儀ハ、右體之餘業

一越中へ使者ヲ越候案內者可馳走之旨申候間、一月ニ馬一疋之分、商買之諸役令免許者也、

彥十郎

十二月十九日　　奏者　高白齋

濃州之商人　源吾

〔御觸帳　二〕享保五年庚子三月

覺

一他國より來候諸商人運上銀之義、先年被仰渡候通、問屋著ハ勿論、當分之町宿にても、其宿主所之町代を指かへ、賣物之品々帳面相改、運上不洩樣ニ取立、差上可申事、

一他所者之商物を引受、自分商物之積りに申なし、運上不指上、賣買仕者も有之樣ニ相聞候、右之族有之候ハヽ、急度可申付候間、町代組頭常々心を付、紛敷儀無之樣ニ吟味可仕事、

附、問屋江著候他所商人之內、ひそかに當地之商人江相對を以直賣いたし、運上洩申義有之樣ニ相聞候、左樣之儀無之樣ニ、問屋宿主相改可申候、吟味之上、問屋宿主ハ勿論、相對有之買候商人も、可爲越度候、

右之通、御奉行所被仰渡候間、町中不洩可被相觸候、以上、

子三月　　佐治茂右衛門

吉田次右衛門

右之趣、問屋宿主急度相守候樣入念可被相觸候、以上、

町中町代衆　　上長者町　花井八郎左衛門

〔諸問屋幷商雜類編〕在方商業運上冥加ノ事

法曹無番

古事類苑

政治部八十五

下編

雜稅下

〔蔭涼軒日錄〕寬正五年二月八日

當寺門前就諸商買課役以先規免除之事云々、棠陰和尚披露之、無先規課役則尋于飯尾可有御免由云々、

〔今川記五〕かな目錄追加

一分國中諸商賣の役之事、自先規沙汰し來る事は、乍不便了簡に不及也、今に至て、のがれ來る事とて、新役望訴者、無際限といへども、許容せざる也、自今以後、ケ樣の訴訟取次者においてハ、知行十分一を沒收すべき也、知行なくば、給恩と雖可改易也、○中略

天文廿二年二月二十六日

〔諸州古文書〕武田信玄分國諸役免許狀

一一月馬五疋之分、商之諸役令免許者也、仍如件、

十二月○弘治二年六日　奏者　跡部越中守

五味八郎左衞門尉

一就鹽硝鈍下分國之內一月馬三疋宛諸役所令免許者也、仍如件、

弘治三丁巳正月廿八日　奏者　秋山市右衞門尉

之多少有、凡径七八尺位之水車、永貳百文より貳百五十文位、九尺より一丈一二尺ニ及ぶ車ハ、永三百五十文程より四百文位、夫も稼之多少ニ依り、同様ニはなし、私領抔ニは無運上之車もあれども渡世之爲仕立たる水車ハ、冥加永可爲納事なり、

水車運上

納來候處、去丑年場所替ニ而、私御代官所ニ相成、運上米貳石取立相納申候、然ル處此度書面之通、船數相增候ニ付、壹艘ニ付米五斗宛之割合を以、此運上米壹石、當寅年より鄉帳ニ記、尤三分一直段を以、石代取立、其年々御勘定元拂組仕上候樣御證文可被下候、尤此上船數增減有之候ハヽ、右割合を以、運上米取立候樣可仕奉存候、依之奉伺候、已上、

寛政六寅年六月　篠山

御勘定所

捻印　裏書――

〔大成令 四〕享保七寅年五月

定

一船石拾石ニ付錢三文、百石ニ付三拾文、千石ニ付錢三百文、廻船之者共ゟ可出之事、

但遠國船ハ、上下之分拾石ニ錢六文宛之積り、江戶來度每ニ可出之、近國船ハ、幾度通船候とも、遠國船三度之積を以、錢十八文、年中最初一度可出之事、

一石錢請取方ニ付、私曲がましき儀有之者、船方之者共、奉行所へ可訴之事、

一篝たきやうよろしからざる儀於有之者、是又可申出之事、

右者、三崎城ケ島、鳥羽菅島、兩所篝入用として、此度石錢相極候間、自今以後、廻船者共堅相守、通船之時、當港におゐて可差出之者也、

享保七年五月日　奉行

〔地方凡例錄 五〕一水車運上

水車之義、新規ニ願出取建ルハ、水下之用水差支有無者不申及、水元隣村差障等得と相糺、川の上下近隣差障無之ハ申附べし、運上冥加永ハ、其村又ハ隣鄉類例も有るべし、勿論車之大小ニ寄、確

此銀八拾目　但壹艘ニ付拾六匁

七艘　三百石より三百四十九石積迄

此銀九十八匁　但壹艘ニ付拾四匁

貳拾貳艘　貳百五拾石より貳百九拾九石積迄

此銀貳百六十四匁　但壹艘ニ付拾貳匁

〔雪月花二〕高瀬船之事

京より伏見高瀬舟支配　角倉與市

舟數百五十八艘　運上銀二百枚（元祿元年伏見奉行上申候○中略）

一嵯峨大井川高瀬川舟支配　九十艘　角倉與市

内七十艘ハ高瀬船、二十艘ハ獵船讓請船、遊山船、

運上銀貳十枚（元祿三年伏見奉行上ル）

〔地方諸伺例書〕播州菊川通船運上米取立伺書

覺

一川船貳艘　松平久五郎領分播州 請負人 與吉 字七

此運上米壹石　壹ヶ年分　但

外四艘　去ル巳年ゟ相稼申候

右者松平久五郎領分播州美嚢郡菊川筋通船三艘、去ル巳年御免被仰付、壹艘ニ付米五升、尤稲垣藤左衛門方へ相納、其後追々場所替ニ而、竹垣三右衛門支配ニ相成、通船四艘此運上米貳石宛相

〔地方凡例錄五〕一小船役

是ハ漁船、作船、荷船ニ無之船之役錢、是も所々ニ而異同あり、

〔京都御役所向大概覺書七〕同所(津〇大)百艘船役初り之事

一百艘船之儀、右貳千百六拾六艘之內ニ而、舟持共、大津堅田ニ罷在候、是者關ケ原御陣之節、御奉公仕、御朱印頂戴村、于今諸浦ニ而荷物心次第ニ積申由、舟かぶニ而賣買仕候故、舟持人數極り不申候由、

但百艘舟之者共、御朱印之由書出候得共、寇といたしたる御證文ニ而者無之と相見へ申候、先年之高札之樣ニ相見候、文言奧ニ記之、

百艘船役初り

一天正拾四年迄者、舟數拾六艘有之候處、太閤秀吉公被仰付、天正拾五年舟數百艘罷成、永代役義無相違樣ニ被仰渡由、淺野彈正少弼高札有之、

〔京都御役所向大概覺書七〕同所(津〇大町)湖水船之事

御運上銀九貫四百六拾六匁五分(正德四午年)四分但舟大小ニより、御運上銀高下有之、

御運上銀、享保元申年迄者、江戸江相納り候へ共、當酉年よりハ大坂へ上納之旨、

一(御料私領)船數貳千百六十六艘　但(百艘舟之儀、此船數之內ニハ、大津堅田に居住いたし候外、井伊掃部頭殿領內之舟者、前々より支配之外ニ付、燒印指除候故、舟數不相知)候由、

內

丸船千三拾七艘

此譯

五艘　三百五拾石より三百八拾五石積迄

右五尺間竿に而打出候分、長横平均五尺、壹間に付御年貢百文に定、壹間不詰尺者、六寸より貳尺五寸迄五拾文に定、貳尺六寸より五尺迄者百文に定候事、

但武家船者、何も定之間不入、御年貢定候船之分、

一長錢三百文　小繕船

一長錢四百文　土船

一長錢五百五拾文　淺草土船

一長錢貳百文　飯沼藻草取船

此品者間不入船、銘々に而御年貢定候事、

御年貢掛り極印文字之定

一守字長錢百五拾文ゟ　同四百文迄

一文字長錢四百五拾文ゟ　同七百文迄

一光字長錢七百五拾文ゟ　同壹貫文迄

一金字長錢壹貫五拾文ゟ以上

一賓字總無年貢之船

右之通、證文之趣を以、相極候事、

〔寶曆集成絲綸錄二十九〕延享四卯年八月

覺

川船役銀取立之儀、時相場相止、金壹兩銀六拾目替を以取立候積りに相成候間、其旨相心得候樣、町中不殘可相觸候、以上、

八月

附御年貢手形、於番所改ヲ請可申事、

一御年貢手形無之船、他之船之御年貢手形を、借候においては、貸人借主とも可爲曲事事、

一往還之船、不限晝夜番所にて相斷可被通、若隱忍往還において者、可爲曲事もの也

奉行

享保六巳年三月

右之高札、關宿、猿江、橋場、三ヶ所船役改番所に、古來より相建候、

一巳年八月より來七月迄を相定、御年貢取立、御勘定仕上候事、

川船間尺盛付御定

六。尺。間。を以、長計打、御年貢定候分

一茶船類　長錢百五拾文　長貳間貳尺五寸迄

一同　長錢貳百文　長貳間三尺五寸迄

一同　長錢貳百五拾文　長貳間五尺五寸迄

一同　長錢三百文　長三間壹尺五寸迄

一同　長錢三百五拾文　長三間三尺五寸迄

一同　長錢四百文　長三間五尺五寸迄

一同　長錢四百五拾文　長四間壹尺五寸迄

一同　長錢五百文　長四間三尺五寸迄

一同　長錢五百五拾文　長四間五尺五寸迄

但五間五寸以上者、茶船たりといふ共、竪横間可入事、

小船にても世事あらば竪横可入事〇中略

此船艫梁外法より、袖梁外法迄、間に入、横不入、

ニ加判形者、爲社家之青氈於後代可守此規則之由、任于請者也、

茲時永祿九丙寅年九月三日　　信玄花押○中略

一八劔大明神之造營は、執船役可相勤之由、任本帳之旨七年ニ一度、船役令催促相當ニ可加修補者也、

〔信濃國諏訪社家文書〕天正六丙寅二月

一八劔宮造營之次第、郡中之船別錢、上之船は米諏方升貳升、中之船は壹升五合、下之船は壹升、如此取集、

〔地方凡例錄五〕一帆別運上

是ハ廻船之運上也、帆之石數ニ掛、運上相納、大坂堺其外灘目等之湊(攝州より中國筋海邊ヲ都而灘目と云)廻船ハ、多分之運上差出ス、遠國も同然たり、新艘造り立る時ハ、村役人江相屆、支配地頭へ願出、船數帳ニ相記、尤支配地頭より燒印致し相渡ス、上方舟ハ勿論、國々之廻船ニ而も江戶大坂へ廻す船は、廻船方役所ニ燒印申請る事也、

一川船役

是ハ高瀨船平駄艜飼ほう丁にたり等、川筋ニ而荷物積出船、都而役錢相納む、御府內ニは川船奉行有之節、江戶船ハ勿論、國々之船にても、江戶へ相廻る船は、川船役所へ運上乍出、燒印請之、江戶へ不廻船ニは、川船奉行之燒印ハ不請、支配地頭之燒印ヲ請る、何れも役錢相納る、川船役所へ運上差出船ニ而も、支配地頭へ役錢差出ス、國々所々ニ而多少之違有、

〔御勘定所定書中〕川船役所勤方口役銀取立等之定書

定

一每年八月より、翌年五月迄、川船御年貢幷役銀納可申事、

河上往反舟、幷商買船等事、假權門勢家名、押而令運送云々、太不可然、仍當時關役失墜之由被聞召訖、如然之類、於向後者所停止也、猶以違犯者、爲處罪科可注進之旨、可被相觸學侶官符等之狀如件、

應永十四年十二月十七日　衆徒

興福寺別當僧正御房

〔大內家壁書〕諸商賣船諸公事免除事、雖有望申族、自今以後、不申次之、若於有御免輩者、爲上意可被仰出之也、仍壁書如件、

文明十九年三月廿九日　左衛門尉武明

大炊助弘□

〔駿河志料〕清水湊に繫置新船壹艘之事

右今度遂訴訟之條、淸水湊、沼津、內浦、吉原、小河、石津湊、懸塚、此外分國中所々、如何樣之荷物俵物以下相積雖令商買、於彼舟之儀者、帆。。役、添。。役、幷出入。。之役、檣手立使共免除畢、假自餘免許之判形相破、至于其時、爲一返屋臨時之役等雖申懸之、不限時分、他國にも使已下別而可令奉公之旨申之條、爲新給恩令扶助之上者、不可及其沙汰、然者以自力五拾貫文之買得有之云々、分限役是又一返之役臨時役等免許畢、年來爲無足令奉公之條、永不可有相違、雖然以判形於諸役仕來添者、可勤其役者也、仍如件、

永祿參庚申年三月十二日　中間藤次郎

〔信濃國諏訪神社文書〕信玄花押

諏訪下社祭祀數年退轉之分、今玆永祿八年乙丑十一月朔日、令再興加下知次第、

一三濟之山峯行三澤對馬守、從往古取來候分ハ、舟役。。○中略如此致所務、勤其職之由言上候、

諏方上宮末社同祭祀退轉之儀、尋搜舊規、與其百廢、然ニ社司等所望之意趣者、令帶來所之古文

假其主之號、令輕御下知、爲通公役、申亂子細之輩、自今已後、可令追放其所也、右御定法事、不可限當關一所、可爲御分國中此準據之由、堅固所被仰下也、仍執達如件、

延德四年（明應元年）五月二日　遠江守前司（判）正任
木工助（判）弘依
三河守前司（判）重行

杉信濃守殿

河岸役 河岸地代

〔地方凡例錄（五）〕一河岸役

是ハ河船著之河岸役永船問屋有之、問屋運上相納ても、前々引付ニ而、河岸役永納來りたるは、縱川筋之模樣違ひ、船著相廻ても、小物成之名目ニ而定納ニ成たれバ、永く相納る事なり、

〔幕令拔抄（八）〕材木屋竹屋幷外商賣ニて、川中を置庭等ニ相用候者、兼て願濟ニて、冥加銀上ゲ來候分、以來川岸地代と唱替、材木屋竹屋之義も、一同總會所江上納銀取集、萬端取計候樣被仰渡候間、其旨右商賣人江不洩樣、町限可被達置候、且又願立願止名前替等之義、度每御月番川方御役所へ罷出、帳面張替等可致、同日總會所帳面をも張替候樣、町に於て相心得、其筋へも相心得置可被申候事、

天保十三寅年八月廿三日

器物税 船税

〔那智山實方院文書〕□退治事、任貴報候、守□鹽崎一族等、相共致其□自周防國竈門關至□津國鹽崎可令禁固、西國□、遂船幷廻船等、且榜別錢□貫百文爲兵粮料足、於兵庫島竊取、若寄事於左右成其煩者、可處罪科候狀、依仰執達如件、

曆應二年三月十四日　武藏守判

〔春日神社文書（六）〕御判

德治二年正月七日　彈正弼平業時花押

〔建武以來追加〕一諸國新關幷津料事

成諸人往來上下之煩之條、太以不可然、早本新共可被停廢之歟、○中略

諸國狼藉條々貞和二十二三、沙汰、○中略

一構新關、號津料、取山手河手、成旅人煩事、

以前條々、非法張行之由、近年普風聞、雖爲一事、有違犯之儀者、可改易守護職、若正員不存知、爲代官結構之條、蹤跡分明者、則可召上彼所領、无所帶者、可處遠流之刑矣、

〔今川記五〕かな目錄

一駿遠兩國津料、又遠州駄々日の事停止之上、及異儀輩は、可處罪科、○中略

大永六丙戌年四月十四日　紹僖在印判

關錢

〔建武以來追加〕一諸國新關幷津料事

成諸人往來上下之煩之條、太以不可然、早本新共可被停廢之歟、

〔安土日記二〕永祿十二年九月九日、國中勢○伊城々破却之、御奉行方々へ被仰付、其上當國之諸關、取分往還旅人之爲惱之間、於末代御免除之上、向後關錢不可召置之旨、堅被仰付、

○按ズルニ、關錢ノコトハ地部關篇ニ詳ナリ、

浦役錢

〔大內家壁書〕諸人被官公役被定御法事

就御動座、依去年御上洛、任先例於赤間關御座船之事、被仰付之處、以浦役錢可致進關之由、地下仁申請之間、被任懇望畢、然間彼等以相談、令支配當關地下中之處、或號寺僕、或號武家被官、令難澁出錢候事、地下愁訴一同云々所詮如此之族、於令違背公役者、可被相支當關住居之由被仰出、若及違亂、者云在所、云交名、隨注進之左右、可有殊御敗成之、總別於所々、先御代以來、此御定法歷然之處、勸

相模守判

因幡前司殿

一津料河手事

先年被留畢、而近年所々地頭等、押取之間爲諸人之煩云々、於帶御下知者、不及子細、其外致押取之輩者、可令停止、若違犯者可有其科之由、可令相觸其國中、猶以不承引者、可令注進交名之狀、依仰執達如件、

弘安四年四月廿四日　相模守判

某殿守護人事也

一條々諸國一同被仰下畢

一河手事

一津泊市津料

一沽酒事

一押買事

右四箇條、所被禁制也、於河手者、帶御下知之輩者、不及子細之由雖被仰下、同停止之畢、守此旨可被相觸國中、若令違犯者、可被注申之狀、依仰執達如件、

弘安七年六月三日　駿河守判

信濃判官入道殿

〔法觀寺文書〕北條業時執達狀

八坂法觀寺釋運上人申、攝津國三ヶ所一州兵庫渡邊商船津料事、

右任去年十二月廿三日關東御教書、可被致其沙汰之狀如件、

雖相糺、今知る者なし、勿論是々是迄の限も不知、又同所川附並之村々も海高なきも有、越後國蒲原郡信濃川五十嵐川抔大海あり、鮭鱒之大漁あれ共海高なし、

炭竈役

〔地方凡例錄五〕一炭竈役

是ハ炭燒出ス竈之役也、竈一ツニ付何程と極相納む、

乳牛役

〔壬生家文書一太政官符若狹國司〕

應任官使右史生安倍定宗立劵狀、令辨濟公家長日御修法供米造八省院料米圖、宗寺法花會用途太政官厨家納物等、永停止國郡使入勘幷甲乙輩妨、又課役令吉原安富子孫相傳領掌國富保同領犬熊野荒浦壹處事、〇中略

右得彼定宗等去二月十三日立劵文、偁厨家去年十月十四日解狀偁、謹撿案內、得彼保解云、當保者、吉原安富相傳之私領也、〇中略如此之所、被止課役者、承前之例也、〇中略所謂伊勢太神遷宮役夫工、造內裏造御願乳牛役大嘗會、凡勅事院事已下等也、〇中略

從四位上行右中辨藤原朝臣花押　　正六位上行左少史惟宗朝臣花押

建久六年十二月四日

津料河手

〔吾妻鏡二十〕建曆二年九月廿一日甲子、諸國津料河手等事可被止由、日來及御沙汰之處、其事爲得分、所々地頭、依申子細、今日如元可致沙汰之由、面々被仰下云云、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年〇安貞元年閏三月十七日丙申、諸國守護地頭所務之事、貞應二年任御下知狀致沙汰、市津料供給雜事等可停止、守護所張行事已下條々被觸仰云云、

〔新編追加雜務〕一河手事弘長二七一

承久以後、於所々致新儀之煩之由有風聞、可停止之、〇中略

文永元年四月廿六日　　武藏守判

あらん限りの損害なり、依之中古改之停止有と見へたり、尤可然儀なり、

〔地方凡例錄一〕海高之事

是は漁獵有之海川に付、村方高に結び、水帳にのせ、本高同然年貢高懸物に納るも有、又水帳に不載、村高之外に海高何拾何石と記、役金銀納るも有、古來如何之譯ニ而高入致たる哉不知村方多し、尤海川附ニハ、都而海高有にもあらず、海上高有村者先は稀にて不可定、古來よりの仕來と見へたり、勿論古へゟ之事とは不聞、關東御入國以後之義と相見ゆる、當時海高有村々も、海上は空なるもの故、何方ゟ何方迄高之內と定たる事もなく、高に結び方何を以高壹石と極たる哉も不相知、併古來極たる時分は當なしに高には入間敷、定而小物成高之樣に、其所之漁獵或は海草等之所務を積、金銀何程上る漁方ニ付、米金銀何程迄は納も能きと遂穿鑿、田代同然と見て高に結たるとみへたり、又漁方ニ而も、年々所務有之故、高に結び、年貢役金銀納るも能と心得請たる成べし、然ニ田畑は、年々種を下し、立毛生ずれば、末代盡る事なく、然共田地すら流作不定地は高に不結、反高等に致置、況哉海川の漁獵又は海草の所務においておや、濱の摸樣惡敷成ものは、風雨地震等之天變にて、海川の淺深も違へば魚寄らず、魚類は、己が住能き方へ至る、然ば今日魚の寄ても、明日者慥ならず、海草は非情之もの成共、是迚も枯盡る事有、種を下し、肥を入、修理を加へ、生育する作物さへ、天地之變ニ而、年に寄り風水旱虫之難有り、生きものは心任せ成る故、曾而極たる事なし、魚不住海草枯盡たる時は、手入も不成、海高は所々負物と成り、村あらん限、末代迄之煩なり、ゆへに中古改りて海川を高に結ぶ事停止と成り、當時者何程大漁有場所ニ而も、役永運上者格別、新規高入は不相成由、尤の事也、下總國海上郡銚子領村々海高は、元和之比ゟ始り、又元祿年中私領上知に成、設樂勘左衛門御代官之節ゟ始りたる村も有る、尤何れも村高之外ニ而、本途には不入、海高拾石に役永凡壹貫文ツヽ納む、村エ寄少しく員數不同有り、古來高ニ入之譯、村方

海石

（地方凡例錄五）一池魚役。

是ハ池ニ而漁獵致ス役金、總村より納るも有、又漁師極り有れば、其者共より納るもあり、縱漁業不致とも、一旦小物成者名目ニ而定納ニなれば、漁獵有、此ニ不拘、村方より役金差出す事なり、

一鐵砲運上。

是は畜類威鐵砲、殺生筒兩樣之運上なり、威筒者、猪、鹿猿兎之類作物ヲ荒ニ付、玉なしニ威計ニ而打事故、運上ニ者及ざれ共、鐵砲猥ニ不成ため、村役ニ少々運上を差出さする、尤無運上之所も有獵師筒ハ、渡世之爲、借り請事故、獵師共より運上を納さする、尤威筒より格別餘計ニ納さす鐵砲之義ハ、御料私領共御定法有て、證文差出獲物打留書付等差出關東ハ別而六ケしく、獵師も四季打貳季打之分有村々新規願出共貸渡義無之なり、

（地方落穗集三）海石。海石と云事

一海邊付に有之内に、何石何拾石と結び水帳に載たる有、本高の如く高掛物不殘懸る事有之也、是ハ古來より高に結び來るは格別新規に海を高石高に結ぶ事ハ不成事也、如此の義も有之と云事を知らしむる迄に記す也、都て動きの有物ハ高に結ぶ事なく、右之如くの地ハ魚獵或ハ海草等に付所務有を以て、田地同然と見て高に結びたると見へたり、田地ハ年々に種を下し手入肥しをして立毛を生ず、然れバ萬代も盡る事なし、然れ共田地すら不變之地ハ高に不結、年々見取にする也、況や海中の魚獵、又ハ海草等の所務におゐてをや濱の樣子惡敷なれバ自ら魚よらず、魚ハ生物なれバ己が住能き所に至る然バ今日魚の寄も不備、種を下し、生立作さへ天地の變りて、或は水損又ハ風損旱損等の違有、まして生物ハ己が心任せ成故、極たる事なし、又海草ハ非情物なれ共、枯ると云事有、枯て後に植つく事なし、又如何樣の變にて根切せんも計り難し、如此定席なき物を高に結たる時ハ魚不住、海草枯るに至りてハ、其高ハ所のせおひものとなり、其村

是ハ大川筋、鮎鯉其外川魚等取ル漁に簗と申て、川を石積ニ而瀬切、魚道ヲ一所ニつぼめ、其所々ニ竹簀を當て、簀之上ニ魚落たる樣ニ致したる者也、山川ニ而有之事ニ而、沙差引等有之大河ニ者難成、大川之簗簀も大竹ヲ用ひ、間數も廣く致ス、又船通用之川なれバ、片方ニ寄、通船之口ヲ明ケ、船通路差支無之樣致ス、簗場も古來より場定り、新規に取立る事は容易ニ不相成、運上之義ハ、簗之大小ニ從ひ多少有、勿論年季も有、是又村抔之簗も有、請負人有もあり、又古來より持主極りたる簗も有、何れ仕立る先より運上差出ス、何ぞ子細有之、簗不相掛年ハ、運上差許ス、夫も年季ヲ限る、請負人有之ハ差許さず、

〔折たく柴の記 下〕此年〇正德三年七月二日に、大和川魚梁船の御沙汰あり、是は攝津國より大和國に送るもの共をバ、川船に積載て、河内國龜ヶ瀨と云所に至り、此所よりしては水淺ければ、魚梁船といふものにうつし載て、彼國中に分ち送る、其魚梁船の事は、慶長の頃より、大和國平群郡立野村の住人に、安村といふ龍田本宮の社入支配し、其運賃の益によりて龍田の社を修造し、公にも運上の銀三十枚を參らせけり、安村ハ、代々喜右衛門と云也、此事によりて龍田の社御修造の例へなきなり、元祿年中丁丑に至りて、立野村の者共漁梁船の事仰付られんには、運上の銀百五十枚を參らすべしと望こふ、此所は御料にて、しかも運上多く參らすべしと申ければ、其請に任せて、安村が支配をば停めらる、〇中略荻原近江守等、南都奉行所幷御代官に事の由を尋ね問ふて後に、かの魚梁船の事かへし付られんには、運上銀三百枚を參らすべき由、もとの支配人安村望請ふによりて、立野の者ども、又三百廿九枚運上銀を參らせん事を申訖ぬ、立野の村と申は、わづかに千石の地にして、戸口の數も多からず、十四年此かた、此船の賃によりて御年貢を參らせ來りしに、今はた是を安村に返し付られん事不便なり、只今迄のごとくに、立野のもの丶支配たらん事然るべしと申ければ、同き六年己丑十月、勘定奉行の異見のごとくに御沙汰畢りぬ、

役人立會引揚げたる鰯を、何百何十杯と計り其日之相場迄極る、是ヲ水名相場と云、二斗俵ニ而山盛四盃入壹俵を壹盃と云、此壹盃に而金何拾兩と相場立る、尤鰯ニ者不ㇾ限、都而漁事ニ而取上、相場ヲ立るヲ水名相場と云、此相場取立るなり、鰯網ハ大八手、中八手、小八手と三段有、網一張に眞網船、逆網船、魚取船とて三艘ツヽニて引、又外ニ貳艘張と云て、船貳艘ニて引鰯網之小漁も有、大八手網ハ、長凡四拾貳尋、幅上ニ而三拾六尋、下ニ而四拾六尋程、船ハ凡長六七間、人數四拾四五人ニ而引、其内ニ船頭、沖合漁師、水主色々之役有、年中此人數ヲ抱置、風雨其外しけニ而沖出難ㇾ成日者、何十日も無益ニ食せ置し故、大造之入用掛る、又新規網船諸道具仕立、漁師給金飯料等、一帖ニ付凡金六七百兩も掛る事、中八手一帖三拾四五人、小八手貳拾四五人餘も乘組む、網仕立諸雜用多少之金高相掛り、誠ニ海中之大漁なり、又まかせと云網有、一名小舌網と云是ハ至て大造成網ニ而、船拾餘艘も掛り、海上壹里餘も引廻し、其内ニ而八手網を遣ふ、當時房州上總九拾九里邊ニ　あるよし、近年迄銚子飯岡村ニ有しかども、今ハ潰てなし、

〔倭訓栞 中編二伊〕いさば　今魚肆をいへり、磯端の義にや、又勇魚場にや、○中略西州にて魚の名にもよべり、

〔地方凡例錄 五〕一小漁運上

是ハ鯨鰯等之大漁ハ、定法之分一有ㇾ之、其外鰹、鮭、鱈、鮪、鯉、鮒、鱸、鯔等、釣職、長繩、投網、海川諸漁ハ、其所所ニ請負人等、年季ニ而引請、是より是迄何程之運上可ㇾ差出ニ付、小漁物賣出漁師共より取上度相願、吟味之上、運上高極るも有、亦國所ニよりて、小漁も公儀地頭へ賣相場分一取立るも有、漁場之義者、上方、東國、北國、西國、南海、何れの國々ニてもある事にて、其場所々々之仕來有義ニ而、運上分一等之取立方同樣ニ者無ㇾ之義也

一集。運。上。

有之、村方へも運上差出ス、勿論支配役人村役人も立會事也、此切鯨ハ、下總銚子邊ニ度々有事也、右四品とも、鯨見掛レハ早速村役人へ相達、支配役所へ屆出、村役人幷其浦支配御領私領共役人罷出、夫々致見分、入札等申觸る事也、

〔地方大意〕突鯨寄鯨運上之書付

一突鯨運上貳拾分一

是ハ突鯨御座候節、浦役人立合、早速近所ノ村江入札申付、落札金高之内二拾分一之積、前々ゟ運上取立上納仕候、前々ゟ如此、

一寄鯨運上三分一

此運上、以來三分一之積、明和三戌六月十日相觸ル、

是は寄鯨御座候節、浦役人立會、早速近處ノ村江入札申付、落札金高之内二拾分一之積、前々ゟ運上取立上納仕候、前々ゟ如此、

一寄鯨運上三分一

此運上、以來三分一之積、明和三戌六月十日相觸ル、

是は寄鯨御座候節、浦役人立會、近所村々江入札申付、落札金高之内三分二致上納、三分一は所之もの江被下候、前々如此、

一流鯨運上十分一

是は流鯨御座候節、浦役人立會、近所村々江入札申付、落札會高之内致運上之積如斯、

辰六月

〔地方凡例錄 五〕一鰯分一金

鰯漁ハ海中之大漁也、鰯網引揚たる時、漁師と五十集商人（肴物を五十集物と云、魚之商賣致候物チ五十集商人と云、）幷其濱之

儀分一ニ納たる由、其後前書御定法極たると見えたり、

一突鯨と云ハ、生きたる鯨ヲ突留たるヲ云、一體鯨漁ハ前書ニ如記、漁場極り鯨突之頭有之、定式ニ致鯨漁、分一等其外濱法有て、嚴重ニ取締有之事也、鯨漁無之場所ニ而、突鯨可有之謂もなく、勿論可突留道具漁船等も無之、突鯨ハなき事なれども、海中之事故、萬一沖合鯨見掛ケ、道具等補理(シツラヒ)漁師寄合、早船ヲ以突留間敷事ニも無之、若突留タル時ハ、餘漁と違ひ、早速村役人へ達、支配御代官領主地頭役人へ相屆、改見分ヲ請、近村入札申觸、落札之上拂ニ致、落札直段之内二十分一、役所へ運上差出ス、漁師共分ケ方ハ、其浦仕來之定法も可有之、出入等不相成様、村役人共取計、突留たる節之働ニも應じ、夫々歩分ニ致し所務する事也、

一寄鯨と云ハ、森ヲ請痛ミ、或者死たる鯨、漂流し、自然と岸へ寄たるを、濱へ引上、前書之趣致注進、入札之上拂ニ成、代金三分一、公儀又者領主地頭へ、分一取立、三分一寄たる村方へ被下之、沖ニ有鯨ヲ人夫入用ヲ懸、引寄たる義ニ無之、自然と磯へ流寄り引揚る計、外ニ人夫等不掛、村方骨折失却等薄キ故、地頭へ三分二、村方へ三分一と分る定法なり、

一流鯨と云ハ、沖ニ漂流する鯨を見附、早速大勢早船ヲ出し繋留メ、濱へ引付取揚たるヲ流鯨と云、分一ハ十分一上納、其餘ハ村方へ致割賦事なり、

一切鯨ハ、前條之如く沖ニ漂流たる鯨ヲ見付、磯へ引寄度といへども、急ニ人数船抔揃兼、彼是致す内に、沖へ流行てハ難手ニ及故、漁師共早舟ヲ出し、手ニ大庖丁ヲ（長二尺餘の大出刃庖丁）以、鯨の上ニ乗り移り切取るを切鯨と云、其時ハ、我劣らじと船を乗付、長キ庖丁を以、手々ニ切取事故、誠ニ軍場之様ニて、中ニは怪我等有之、其内ニハ次第ニ遠方へ流行、浪風荒く切取る事も難成、小船ニ而者追掛ケ切取難く成ニ付、乗り戻る、右切取たる白身赤身、人々集メ、五十集商人立會致入札、買取て、落札直段二十分一ニ納、其餘ハ切取たる漁師共所得ニ致ス、尤上納分一之外へ、其浦浦ニ而極め

突（突道具を云、鑿の様成鐖を木ニ付、船中より投突致し、至而漁師手練無くては突留ざるよし、）入れたるは、何分通り、夫より貳番三番と割合、尤壹番計ニ而留るも有、又何番も追々ニ突も有、其外掛合之者分ケ方定法有、鯨之大小ニも依れ共、譬ニも鯨一本取れば七浦浮むと申程之大漁也、鯨突之頭、大村之儀太夫、松島之與五郎抔と申者ハ、數千人之漁師ヲ手下ニ附、領主より格式等申付、至而大身者也、此類鯨突之頭ニは、餘國ニも有べし、其外流鯨寄鯨、切鯨など、鯨漁無之海邊ニも稀有事なり、此定法、ハ末ニ記ス、

一市○賣○分○一○高○

是ハ市場ニ而商賣物之賣高ニ應じ、二十分一、三十分一、其市場前々仕來ヲ以、取立る事有、又賣高ニ不拘、敷延之數ニ應じ取立る所も有、種々之義有れバ、其所ニ無之而者、委敷ハ記しがたし、○中略

一突鯨、寄鯨、流鯨、切鯨、分一定法之事、附り、流鯨有之たる時、取計御書付等之事、

一突○鯨○　貳○拾○分○一○

一寄○鯨○　三○分○二○

一流○鯨○　拾○分○一○

一切○鯨○　貳○拾○分○一○

書面之鯨有之時、近村之入札申觸、落札金高之內ハ、場所御料なれば公儀江分一相納メ、私領者領主地頭へ納之、御料私領入會之村ならバ、落札金高村方ニ致割賦、御料私領共、其當之分一納之、是ハ享保九辰年二月、御代官原新六郎支配所分鄉之村方ニ寄鯨有之節、伺ニ而定る、近年安永五申年二月、常州鹿島浦江寄鯨有之時、分一之義、御勘定組頭横尾幸之進へ御代官相伺、猶又評定所組頭江坂源三郎へ御定法取り合たる所、前書之通り分一ニ相違無之旨兩人共申聞候、又嚴有院様御代寬文九年、下總國銚子浦御料私領入組之場所へ寄鯨有之、御料私領割賦御料之高ニ割たる內、半分ハ上納ニ成、半分ハ御料之者へ被下、又御料私領立會突留たる鯨、御料分割當り五分一、公

之義者不₂相成₁、若子細有ᇫ之免許之筋有ᇫ之共、前々持來りたる網代株之者相障るニ於てハ、不₂差免₁、併懸₂吟味₁、前後差障なく、一村得心之上ハ、伺之上新規申付る事も有、乍ᇫ去他村下等新規之義者決而不₂相成₁、尤役永者村々不同なり、

一鳥。取。役。

是ハ里方ニ有事也、熟地水付之場、鷹鴨等之附く所ニ而致₂殺生₁、役金納る、是又獵師より納るも有、又村役ニて出すも有、小物成之名目ニ成たる者定納なり、〇中略

一鳥。札。運。上。

是ハ鳥取役同樣、熟地田方水付等鳥之附所ニ而、鳥獵致度旨願出候者有ᇫ之バ、御料私領共、役所より燒印之木札相渡し、壹枚何程と相應之運上申付、此札ヲ下ゲ居れバ、居村者勿論他村ニ而も一領之内者、心次第殺生致ス、鳥取役ハ、村役銀差出ス定納小物成也、鳥札運上ハ、獵師へ札相渡、殺生致させる故、浮役也、

一高。網。役。鷹。運。上。

高網役ハ、冬春之内、鴨小鴨之類ヲ取、鷹運上ハ、夏秋鷹ヲ取運上也、兩樣共勢州長島本田新田附ニ直ニ有ᇫ之、御料私領役人立會入札申付、雙方村方高割ヲ以運上高相極メ、此類勢州ニ不ᇫ限、餘國ニも有べし、

〔地方凡例錄五〕一鯨。分。一。金。

鯨漁ハ鰯同樣ニ海中之大漁、突鯨分一ハ、是も水名相場二十分一の運上也尤鯨漁ハ、國々所々ニハなし、重に紀州熊野浦、肥前五島、唐津、大村、松浦筑前福岡領ニハ鯨突之大身者有、其外之國々ニも海ニより鯨漁致所もあれども、大造成漁ハなし、關東ニ而も、房州勝山浦鯨漁有、是ハ土鯨とて小クして、身ハ不ᇫ食、肥しニ成油ヲ重ニ取、尤皮の白味ハ喰料ニ商賣致ス、突鯨ハ、壹番森ヲ森と云ハ鯨ナ

壹艘　國府津　村野宗右衛門船

此肴錢每月貳百五拾文宛之役

一肴損間致監上可申、但隨時無監にても上可申者、可爲船主之隨意代物にて納申儀被停止事、

一國府津上十日ニ被定置候十日之内者二度ニも三度ニも、貳百五十文之肴之積を以上可申、十日共至于今遲々者可被懸過役事、

一御肴之渡所由比千菊清五郎左衛兩人ニ被定候、相渡ごとに必請取ヲ取、御糺明之時爲先請取可申披事、

以上〈○中略〉

庚申〈永祿三年〉二月廿三日

國府津之船主

村野宗右衛門

○按ズルニ、年月日ノ上ニ北條氏ノ虎ノ印アリ、

〔地方凡例錄五〕一網。役。

是ハ海邊又ハ川通リ漁獵ヲ致ス漁師共より、役永ヲ出ス漁獵物之義ハ、前々仕來りなれバ、他村他先ニ而も網ヲ入る、海漁之義ハ尙更他國他鄕たり共、入會に漁獵致ス、然共海川共前々仕來り之外、新規之義不相成、若前々網役ハ納め漁師無之とも、鄕帳ニ記し、小物成名目なれば、漁業有無ニ不拘定納なり

一網。代。役。

是ハ大川筋鮭、鱒鯡等取る網代を建る役永、網代主定り、其者之持場極り村差出明細帳等ニも場所字記有之、他國他村之外ニも、古來より持來る場所有他之村より障る義坏決而不相成、勿論古來より持來りたる場所者、縱網代不建、休株ニ而も、役永ハ致上納、又新規網代場相願ふとも、新規

漁獵稅

大十兵持參也ト記シ四奉行名印アリ、據之按ズレバ、六人者鄕士ニテ紙役ヲ兼タル趣ナリ、同十九年正月五日山田又右衛門吉成（豐臣少將家人ナリ）花押書ハ、ダ吉瀧諸役並坪免許云々、肌吉瀧、本六人、新三人、參彌三郎、二郎左衛門、與左衛門、半右衛門、新左衛門、二郎右衛門、新右衛門トアリ、文祿三六月廿二日、（淺野印章）市川村ノ內、唐好ノ紙漉十人ノ夫役令免許者也、右兵衛、四郞左衛門、民右衛門トアリ、是モ本衆三人名ナレドモ、此時既ニ十人ナリ、外ニ無年號ノ書三通、甲府殿時代ノ事ト見タリ、今ノ名前甚兵衛、宇兵衛、源左衛門、十左衛門、四郞兵衛、市兵衛、與左衛門、定兵衛是ナリ、運上紙取立役人、原半右衛門、信田四郞左衛門二人、苗字帶刀ス、貢紙ノ截口ニ朱ノ印ヲ押ス、故ニ判屋トモ云、右ニ記セル天正十七丑年文書ニ據レバ、本衆六人ニテ、貢紙ノ改モ役セシ趣ナレド、何頃ヨリカ改役人アリ、右二人ノ名ハ寶永二酉年領主引渡記ニ見タリ、享保九辰年引渡記ニハ原新助、（大ハ牛平ト云）信田彥三郞トアリ、原ハ後年野村替ル、寬政五丑年運上紙金納被仰付、信田藤藏、野村平六二人御指止ニナリ、自是村長年番ニ小口印ヲ押シ、運上金ヲ取集ム、

〔吾妻鏡 十八〕元久元年五月八日庚午、就國司等之訴、有被經沙汰之事、所謂山海狩漁、可從國衙所役事、鹽屋所當、以三分一、爲地頭分、可止抑留之儀事、節料燒米、可爲國司德分事、以上三ケ條、且隨國宜、且任先例、可致沙汰之旨、被仰付地頭等、

〔諸家文書纂 二〕納諸御料足日記

合明應五年分〇中略

貳拾四貫五百文　川かり錢、此內七百文立物日記別紙あり、

伍拾玖貫十文四錢、此內六貫六百文、　立物御請取あり

〔相州文書〕北條氏御臺所肴代定書

本城御前樣御臺所每月納肴、從昔相定帳面改而被仰出事、

岩間村（○八代郡）二人、遠藤太郎左衞門、渡邊甚左衞門ナリ、東河內領諸村ヨリ漉出紙運上ヲ取集ム、苗字帶刀、給金貳兩宛、朱油代ハ二人壹分二朱被下、紙ノ截口每束ニ押印ナリ、改所並紙倉一所、公役ニテ修理セラル、倉屋敷四畝十歩、除地ナリ、船役米拾八石三斗六升ハ、三澤、車田、切房木、古關、杉山、北川、清澤、常葉、岩間、道村、芝草、大磯、小磯、瀨戶、中倉、釜額、拾五村ヨリ貢ス、市川大門村信田藤藏野村半六（初ハ原半平）二人アリ、苗子帶刀、給金貳兩、朱油代貳兩貳朱ヅヽ被下、前々ヨリ運上紙取集ヲ役セシニ、寬政五丑年二人御差止ニナリ、運上紙金納ニナリ、金百四拾七兩貳分餘ニ定ル、村役人隔年ニ取集メ、束紙ノ截口ニ朱判モ押ヌコトニナリヌ、又紙船役米ハ、永壹貫七百五拾文ナリ、當村ニテ所漉出ハ、肌好奉書、小奉書、糊入、旦紙、小判紙、生漉、五色糊入、半切、黑白龜皮、唐紙樣等ノ諸品アリ、（古時運上紙ノ法、紙倉改所等ノ事ハ略之、）亦御用紙漉拾人アリ、天正十年ノ後引繼被仰付、古文書數通ヲ藏セリ、今モ彼拾人ハ賣紙運上免許ナリ、

〔甲斐國志 百十五 士庶〕八代郡西郡筋

一村松新右衞門、渡邊新左衞門、（市川大門ノ者二人ナリ、紙本）村松右近丞、一瀨民部丞、村松半右衞門、同四郞左衞門、（天正十三年四人ナリ、以上六人ヲ本衆ト云、同十四年ヨリ三人ヲ新衆ト云、）今御納戶御用紙漉十人、賣紙運上免許ナリ、所藏印書數通、天正十一未年卯月一日、四奉行ノ書ニ、市川ノ肌吉新右衞門、同新左衞門、自前々諸役御免云々トアリ、武田ノ時ヨリノ引付也、同十二申年十月廿八日、石四印（石原四郞右衞門）二通、御當代肌吉過分被仰付候間、棟別一間宛可被下趣、民部丞、半右衞門、四郞左衞門、三人ノ名ヲ記セリ、一通ニハ右六人ノ名氏殿ノ字モアリ、同十三酉年二月十八日、同卯月十六日、四奉行印書二通、本漉衆二人、外新四人被仰付、棟別六間免許由ナリ、同十四年戌三月廿四日印書、大門宿肌吉衆三人御免棟別云云トアリ、同十七年丑三月七日、四奉行ヨリ肌吉漉六人命ズ、（上略）右段上旦紙漉衆堅相觸、猶私曲ノ者アラバ、爲六人役可致披露、則可有過怠者也、同三月二日肌吉小奉書、御本（手本紙也）二紙成吉、日下兵、

際立御上納難出來、重々奉恐入候得共、手薄ニも家業相續罷在、難有仕合ニ奉存、御國恩爲身元金壹ヶ年金五拾兩年々御上納仕度、何卒格別之以御慈悲御聞濟被成下置候樣、偏ニ奉願上候、

以上、

紫根問屋　紫染屋　行事

尾張町二丁目源土〇土恐誤地借

慶應三卯年十二月　圖藏印

御番所樣

紙漉運上

〔地方凡例錄五〕一紙。船。役。

紙ヲ漉箱ヲ船といふ、紙漉之役錢なり、是ハ村役ニ出すにあらず、紙漉共より、船壹艘ニ付何程と役金を出す、尤紙漉商賣に甲乙有之、大勢ニ而漉ケバ舟數ニ應じ、餘計納る、左すれば、紙漉稼相止る時ハ、船役差免べき事なれども、外之稼と違ひ、紙漉ハ酒株同然ニ而、新規ニハ容易ニ不差免事ゆへ、船株有之れば、漉手致中絶も、村割にして役金相納置、追而稼人出來之節、紙漉取立候爲め餘は不申付事なり、

右者何國にも有之

〔甲斐國志百一人物〕御運上紙取役人

一西島村〇巨摩郡一人　笠井半兵衞ト云、西河内領諸村ヨリ所漉出ノ運上紙ヲ取集ム、苗字帶刀ニテ、給金一年ニ金貳兩、朱油代金貳朱ヅヽ被下、傳云、元龜二年辛未ヨリ運上ノ事始ル故ニ、印中ニ未字ヲ刻リト、以朱東紙ノ側ニ押スナリ、紙ハ下糊入、下々糊入、西内、小半紙、藏半紙等ヲ漉ク、各貳百枚切、一束ニ五枚ヅヽ、但藏半紙拾枚ヅヽ、運上ナリ、又紙漉船役米ハ、箱原、江尻窪、夜子澤、寺澤、大鹽、手打澤、切石、笹走、千須和、鹽上、柳川、西島、十二村合五石五斗四升四合貢ス、其外ノ村ニハナシ、

是又以書付可被申屆候、

右之通、町中不殘、寺社門前迄、可被相觸候、以上、

正月十〇享保三年六日　　花井八郎左衛門

町中町代衆

案文

覺

何町紺屋誰

一銀何程（壹年貫）　　藍甕何ツ

〆

右之通、相違無御座候、以上、

申正月　　何町丁代　誰印

同断誰　上長者町印

〔諸問屋身元金調〕下

乍恐以書付奉願上候

一紫根問屋　紫染問屋　行事尾張町二丁目源土〇土恐誤地借圓藏外壹人奉申上候、私共仲間之義者、寛政八辰年より、問屋仲間名目被仰付、安穩ニ渡世相續仕、當時三拾貳人家業仕罷在、御國恩冥加至極難有仕合ニ奉存候、然ル處、今般商法爲御取締、株札御下渡被下置候ニ付、御冥加御上納被仰付候ニ付、難有奉存、一同出精御上納可仕之處、手狹ニ家業銘々身薄之者ニ而、殊ニ近來米價高直ニ而、在方紫根作方至而無少、御府内出荷物、去ル嘉永六丑年と見合候得者、荷物出來高、當節百分一ニも相當不申、漸々壹ヶ年三拾俵程も出來兼候次第、右樣之時節ニ相成候而者、御用御染物等御差支無之樣、一同心掛罷在候、右人數ニ而有之候得共、一同染職之者故、厚被仰渡も有之候處、

一呉服紺屋新左衛門儀、代々御領分中紺屋共所より、甕年貢錢取申筈に、古來より被㆑爲㆓仰付㆒、先年も相觸置候處、今程ハ紺屋年貢錢不沙汰に仕、或は甕の數をも隱し候もの有㆑之由相聞、不屆に候、甕の數をもあらため、年貢錢無㆑滯年々相濟可㆑申事、

一自今以後、新規に紺屋に罷成候か、先年之紺屋其職を相止、仕廻候ハヽ、其度々に新左衛門所江相斷可㆑申候、町中之紺屋共、此旨可㆓相聞㆒候、若相背もの有㆑之候ハヽ、僉議の上、急度可㆓申付㆒事、

五月廿五日（元祿七年）　水　九左衛門

松　市左衛門

吉田忠左衛門殿

吉田忠左衛門

町中町代衆

如㆑此被㆓仰出㆒候間、可㆑被㆓相觸㆒候、以上、

〔享保集成絲綸錄三十六〕寶永二酉年三月

一紺屋藍瓶役之事、壹つニ付鳥目貳百文づゝ、毎年霜月中可㆑出之旨被㆓仰付㆒候處、相滯紺屋共有㆑之由、今度土屋五郎右衛門御訴訟申上候間、未出之紺屋共ハ、跡々出し來候所へ、急度持參仕候樣可㆓申觸㆒候、自今以後も御定之通、毎年霜月中ニ藍瓶役、無㆑滯出し候やうに、町中紺屋共へ可㆓申觸㆒候、以上、

三月

〔御觸帳二〕覺

一町中幷寺社門前ニ居申候紺屋共ゟ、呉服紺屋忠左衛門方へ出シ申候、甕年貢之義、改被㆓仰付㆒候間、別紙案文之通、無㆓相違㆒樣ニ書付相認、今明日中ニ我等方へ可㆓被㆓差出㆒候、紺屋無㆑之町ハ、無㆑之段、

御番所様

〔地方凡例錄五〕一紺屋役

紺屋役ハ、上方關東之紺屋役、藍瓶ニ掛、役錢差出ニ付、藍瓶役と云、國々より、藍作り出す所ハ、紺屋ニ無之、百姓銘々藍瓶ヲ持、手染ニ致ス所有、是等ハ百姓より藍瓶役錢納る所も有、關東之國々者、土屋五郎兵衛と申者、紺屋頭被仰付、江戸住居仕、當御代ニ至り、御朱印頂戴仕、紺屋共致支配同人方江役錢取立る、遠國者五郎兵衛支配ヲ不請、支配地頭へ納る、又國所ニより、役錢無之も有、土屋五郎兵衛紺屋頭被仰付候由緒、委しき義不相分、追て糺すべし、

〔享保集成絲綸錄三十六〕寬文八申年十月

定

武藏國、相模、伊豆、上野、下野、安房、上總、下總、常陸、此九ヶ國紺屋藍瓶役之事、任天正廿年二月朔日紺屋頭土屋五郎右衛門頂戴之御朱印之旨、城付之領地除之、其外藍瓶壹口ニ付、米一斗づゝ、雖令收納來、當時依爲八木高直、自今以後は相定鳥目貳百文候訖、但江戸町中、幷下總三國之內、佐倉領と取合配分、同役頭土屋五郎右衛門也、其外於右之國々藍瓶役五郎右衛門可進退之、但江戸遠近三里之內も、毎年霜月中、彼鳥目、五郎右衛門所江致持參可收納之、三里之外ハ差遣手代可納之、若於有難澁之族は、遂達奉行所可受其旨也、

寬文八戊申年十月廿六日

內膳正○板倉重矩
但馬守○土屋數直
大和守○久世廣之
美濃守○稻葉正則

〔御觸帳一〕覺

是ハ石工之役錢なり、尤上方筋御預ヶ村伊豆國抔重に有之、其外國々ニ而も所々へ石切出し相廻す場所有之、其村役ニ而納るもあり、石工人數相極り納るも有、尤村々ニ而少々石工等ハ役錢冥加永等無之もあり、

〔諸色調類聚國役運上〕天保十三寅年三月

問屋組合仲間停止被仰出候付、石工見世持御國役石工差出方之儀ニ付、御作事奉行江達、〇中略

乍恐以書付申上候

一御府内見世持石工共、御國役勤方之儀御尋ニ付役調、左ニ申上候、

本材木町八町目
庄藏店
與市〇以下人名略
石工職人共世話致し候もの

右者、見世持石工共貳百廿五人程は御國役相勤候儀、天明四辰年五月中、曲淵甲斐守様御勤役中、石工共奉願、御用之節御作事方御役所石工職人三百人宛年々差出し、御用相勤來、御用多少有之、壹ヶ年三百人之内相勤候節者、殘人數之分賃銀壹人ニ付銀五匁五分ツヽ之割合を以、元十三組之行事共ゟ石工同職之もの共方賃銀取集メ、石方棟梁龜岡阿波方江相納來候處、當三月中仲ヶ間與唱候儀御差止被仰付候後、御國役勤方之儀は、是迄之通り今以相勤罷在候得共、同職人之內、心得方區々ニ而、御國役勤方相斷候ものも有之、當時百七十七人は御國役相勤、四十八人は相勤不申、右御國役御用之砌、御作事方御役所ゟ石方棟梁龜岡阿波方江被仰付、其時々同人方ゟ石工職人共方江差圖次第、人數職人差出相勤候旨申立候、依て此段申上候、以上、

天保十三寅年五月六日

本所緑町
名主
長兵衛印

ハ城普請鐵物役相勤ニ付、土佐支配ヲ離れ、領主へ役銀相納る、刀鍛冶者別段なり、土佐由緒追而糺すへし、

〔德川禁令考四十五聚工〕年號闕寅五月

關八州鍛冶頭之事

一天正年中御入國之節、私先祖關八州鍛冶支配被仰付候ニ付八州鍛冶職之ものより壹ケ所ニ付銀五匁ツヽ取立申候、右ハ國役銀を以、御小細工方奧向御用相勤申候ニ付毎年八州江手代共相廻シ御國役銀取立申候儀ニ御座候、以上、

寅五月

御作事方支配
御扶持人鍛冶頭
高井土佐印

〔牧民金鑑十四〕文政五午年八月十九日

內藤紀伊守殿御渡、金森甚四郎達、

御鞘師佐柄木彌太郎先祖ゟ關八州鞘屋觸頭ニ而、御矢之根磨御用之節ハ、御府內幷在々鞘屋共觸集、國役鞘及差圖、其後御鎗、御長刀、御杖付御小刀、御刃ぶくら等國役鞘申付候處、彌太郎觸出方不行屆故心得違之者有之、不罷出趣相聞候、假令外職ゟ相兼候共、鞘職いたし候ものハ一ケ年壹人役之積りを以、彌太郎ゟ順ニ觸達候筈ニ候條、急度罷出、差圖を請可鞘上候、

右之通、御府內ハ勿論關八州之內御料御代官、私領者領主地頭ゟ不洩樣可相觸候、

午八月

右之通可被相觸候

〔地方凡例錄五〕一石屋役

鍛冶役
鑄師役

書面、桶樽職人共組合再興之儀取調候處、右職業ニ付而ハ、桶大工頭差配受、往古貳拾七組ニ定、代役錢上納仕來、其後御賄頭衆御懸合之上、寛政六寅年ゟ右代錢ハ兩御役所ヘ御取立、御賄方江御引渡相成、取集掛名主被仰付候儀共、夫々御役所舊記有之候、且場末町々江ハ、岩村職人とも組合居候儀取調候處、是又年古く市在組合候振合有之候間、向々御達ニ不及、再興名前帳江差加可然筋與奉存候、

一桶町國役錢之儀も、去ル寅年迄ハ、代役錢同様御取立御引渡相成候故、是以兩御役所御取扱之積、夫々江被仰渡候方與奉存候、右ニ付別紙被仰上出、御賄頭衆江御掛書幷南北小口年番名主、其外桶町町役人共江之被仰渡共、案文四通取調奉入御覽候、且又桶樽役錢取集掛名主共之儀、町年寄ニ而相撰、別紙ニ名前申上候もの共被仰付、其外職人共増減取調方等之儀、伺之通被仰渡可然哉ニ奉存候、

亥十月　　再興掛

桶樽職人之儀取調申上候書付○中略

亥十一月十七日　　町年寄○中略

一桶樽職人　　現在千三拾九人

但組數貳拾七組

右者寛政六寅年ゟ、役錢取集掛名主被仰付、去ル丑年迄八人宛相勤候處、寛政度之義、私共方書留連續不仕、聊日記書拔差上、却而名主共方ニハ樽與左衛門申渡候寫差出候間、其儘奉入御覽、此度諸色掛名主書上候現在人數、書面之通御座候、

〔地方凡例錄五〕一鍛冶役。。。　是ハ鍛冶壹人何程と役銀差出ス

御當代ニ至リ、高井土佐と申者、鎌鍛冶頭被仰付、江戸表ニ罷出、關東之分役銀取立る、併城付村々

書物ニも相見、右者如何之譯ニ而、檜物所之者共、御用差免ニ相成候哉之取調者雖相分、吉兵衞病死後者、數代一人ニ而御用相勤來、職人國役之儀ハ、相對を以、代金ニ而藤十郎方江壹ヶ年金貳十兩宛可差出約定之趣、是又藤十郎所持之書附有之候間、則右寫御達申候、尤右役錢、丸屋町清助と申もの加印にて請取之由、又右衞門江申達し、同人より各清助江金子渡方致し候儀も有之候由者、藤十郎心得違之儀ニ付、嚴敷申渡候處、及斷返候段申立、然ル上ハ、年來勤來候御用向、容易檜物所之者共江者雖申附、福田與之助、二連木九右衞門、取扱申渡候儀者、藤十郎身上向世話致候迄之儀ニ而、御用向者、素藤十郎心得居候儀、夫是右ハ御賄所內々之取計ニ付、檜物所之もの共、何角と可申立筋無之、依之願書幷支配向江差出候願書類四通壹冊差進候間、前書之趣御利解之上、右書面御下渡有之候樣致度、御挨拶旁此段御掛合仕候、

辰九月

〔地方凡例錄五〕一大工。役。

是ハ大工役錢、職之上中下差別ニ而、役錢之多少あり、尤下之大工上達して中ニも上ニも成、其儀者大工仲間を村役人致吟味、上中下相分ル、尤私領ニ而者、役大工迚、城普請或ハ陣屋普請等ニ而、日數を定め呼遣ひ、役錢不取立所も有、又御領私領共、前々より役錢なく、勝手次第大工職致す所も有、其國々の仕來り通り也、

一桶。屋。役。

是も大工役同然なれども、職之上中下無差別、一人何程と極り相納む、桶屋ニハ棟梁と申は無之、公儀ニては御舂屋之支配なり、私領ニ而も城下之舂屋支配之所もありて、舂屋之桶類役等勤るもあり、

〔桶樽職役錢書留〕嘉永四亥年十月廿七日鑄附返上

工業稅
杣取役
檜物師役

東坊城家雜掌被申璽公事役事、對久山調賣劵狀被入置質物候條、既今度雖押置之被成問狀御下知之間、契約之子細條々雖在之、於質劵地者可致返上、至借錢者早速可被渡付之由、久山申之間、然者以此旨可被成御下知也、

十二月廿四日　親俊

治部河內守殿

〔信濃國諏訪神社文書〕信玄花押

諏方下社祭祀數年退轉之分、今茲永祿八年乙丑十一月朔日、令再興加下知次第、

一三濟之山奉行三澤對馬守、從往古取來候分ハ、舟役、杣取役、檜物師役、三澤山之役、如此致所務、勤其職之由言上候、雖然右之諸役等者、至八十餘年斷絕之上は、不及改敷、

〔市中取締續類集二〕檜物所國役之儀ニ付、御賄方より掛合調、

安政三辰九月晦日　東條

辰九月晦日成ル

池田播磨守殿　御賄頭

年始御規式木具類、檜物所國役ニ而、元祿之頃迄、同所名主又右衛門先祖御用相勤候由を以、先規之通相勤度候由、御賄處江願出度段、去卯十二月、其役所へ願置候ニ付、勝手次第可致旨御申渡、願書御廻有之、則當二月中、右又右衛門外貳人之者ども、支配組頭方へ願書差出候間、中立之趣取調候處、御賄頭出候由燒失にて不相分、併細井藤十郎、御入國以來、木具御用相勤、右御用相勤候ニ付、御謠初御謠始之御盃臺獻上、年々白銀被下置候、御大禮之節、御秘事御用之御品ハ、誓詞之上仕立候儀ニ而、猶藤十郎をも相糺候處、度々之火災ニ而書物燒失、碇と相分兼候得共、元祿之頃、檜物所之者共相勤候御用向をも、藤十郎幷吉兵衛と申者江御賄所にをゐて申渡候儀者、藤十郎所持之

寛元元年十一月廿五日　相模守平朝臣

〔地方凡例録二〕鹽濱之事○中略

一鹽濱ハ、海有國には、何國ニも雖有、又鹽ニ不成汐も有、鹽濱無海邊も多し、新濱願出れバ田畝新開同前、大縄反別分間ニて相改、鍬下年季致吟味、濱相應地代金も納、年季明撿地致ス仕方ハ、田畝ニ替る事なく、持主限反別ヲ改、餘歩も田畝同前差加へ、上中下三段ニ位分致ス、位の見分ケ樣、濱の樣子、浪當り模樣宜、浪荒くもなく、平かにして、鹽の干加減ノ宜キヲ上として、次ヲ中、又潮際度々普請等も入、地面も高低有場所ヲ下とす、潮ヲ引入るゝ大溝を堀、夫より濱中小溝を立、濱之内凡壹反歩井戸六七ヅヽ堀、是ハ汐を引上て、鹽ヲ垂場所也、深くハ不堀、此溝敷井戸敷ハ反別之外ニ除之、尤海之模樣ニ就而溝もなく、海より直ニ汐ヲ汲、一面ニ懸る濱も有國々所所ニ而少々宛違あり、燒方鹽釜之仕形も所々の仕來ニ而少しヅヽ違あり、

一鹽濱者、反別計ニ而、反高場ニ入、村高ニハ不結、乍去古來ハ高に入たる場所有之也、古キ濱ニハ高入ニなり、鹽年貢本途之内に入たるも見ゆ、近來新鹽濱ハすべて反高也、

一年貢ハ上濱凡永五百文位、中三百五十文、下貳百文程納、大概百五十文下りニ附る、尤鹽之儀、海ニ寄、格別善惡有、至て惡キハ鹽辛き有、にがき有、味甘き有、播州赤穗之鹽抔味ひ能くきゝ強し、最上の鹽とす、濱にも善惡あり、又出來上りの多少も有故、年貢も國々同樣ニはなし、關東之鹽濱年貢、大概右之當り也、何れにしても、畑年貢分ハ餘程高く附る事也、年貢は鹽ニ而正納いたすも有、正納成ハ金拾兩ニ何百俵と直段吟味之上正納申付る、下總國行德五位邊之正納鹽ハ、金拾兩ニ五斗入貳百俵、近來之定直段也、風雨等にて浪荒浪闕等有、濱損すれバ、見分之上年貢引方申付る、普請成就致、元ニ復し、反別減少なけれバ、定之上納申付る事なり、

〔親俊日記〕天文八十二月廿四日丁亥

右件藍、國衙之昔雖爲貳井之所役、庄號之時、領家巳令免除畢云々、然者地頭獨不可致藍沙汰、宜令停止也、○中略

以前條々大略如此、抑件庄爲備進公家、嚴重用途之地、於事無煩、可令土民安堵也、凡地頭庄務間事、所詮任前地頭時貞法師之例、可致沙汰之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、故下、

承元元年十二月日

惟宗(例署名以下略)

〔東寺百合文書ほ自一至三十二〕若狹國太良庄○中略

一茜藍代錢壹貫貳佰文事

歎心等申云、件役無先例候、非法也、彼役外又被召仕雜事云々、定西申云、故次郎兵衞入道(忠淸親父)被補地頭事建久年中也、藍茜多年役也、其外雜事又傍例也云々、歎心等申候、次郎兵衞補始之後、其代官丹次光末、并次地頭中條右衞門尉代官三人無沙汰、而右衞門尉得替之後、次郎兵衞尉還補、承久二年比歟、以新儀被宛行件所役拾九箇所之間、自彼領家依有御訴訟、太略所被免除也、就中瓜生庄雜掌與地頭代遂問注之後、自關東被停止了、彼御成敗狀進覽之、且若狹四郎代官阿門、依此等之罪科可造進屋門并雜屋一宇之由、被下關東御敎書了、其狀同進覽云々、定西申云、藍茜代錢事、次郎兵衞入道跡前阿庄者、代々地頭之時、悉所勤仕也、當地頭上野三郎爲時、同彼藍茜飼屋雜事等、守本地所之跡、令沙汰取之條勿論、且祢沙汰抄四通(自寛喜四年至于仁治)進覽之、又百姓等所申之九箇所之外、當地頭知行四箇所所辨藍茜也、此所々等皆以兵衞入道跡也、何可有差別哉云々者、瓜生庄雜掌與地頭代阿門(忠淸代官)遂問注之後、藍茜代錢并飼屋雜事用途付云、先例之證據云、國中傍例之糺明、可有左右之由、瓜生庄問注之時加下知候處、如關東御成敗狀者、件兩條尋傍例之處、旣無先例之由、國中所々一同令注申歟、加之鳥羽庄內有此訴訟之時者、文曆二年問注之後卽被停止了者、不及異儀云々者、此上早可被停止矣、○中略

〔甲陽軍鑑品第十四〕地下の分限者、町人のごとき人共、諸奉行へ取入、物をつかふて氣に入り、又は女人などを引かけ、奉行に能思はれ、樹木の役、竹の年貢、塩役、布役を諸在郷へあてられ、然べしと、藏法師役者共に、地下の福祐の者共告る、尤と悦び、やがて出願人に云、其大將の好ことなれば、則時申上候、

〔京都御役所向大概覺書三〕山城國中上ケ竹之事

支配 小堀仁右衛門

一村數百二ケ村

一小竹合千五百六拾貳束七分　但壹尺八寸繩

外貳拾八束壹分 元祿四未年、同九子年、郡村藪地川成、井寶永五子年八瀬村御免ニ付減、

一寸竹合貳千百三拾五本　但三寸廻ゟ七寸迄

外三百五十四本 寛永五子年、八瀬村御免ニ付減、

右西之岡御領私領之村々、藪役ニ而、毎年八月相觸置、十一月致上納候、仁右衛門手代立會所司代組與力當分請取之、二條竹藏ニ積置候、右竹者例年仁右衛門ニ而入札申付、御拂申付候、

〔地方凡例錄一〕桑高之事○中略

桑畑桑之間々に麥作抔付るも有、其村之外畑並位付有之畑へ植付有之桑ニ、桑高別に一結入れば、二重高に成に付、桑高は不附、勿論桑之間々ニ作物は木陰に成、出來形不宜故、檢地之節、上畑も下畑にも下々畑にも位付可致事也、檢地以後地主勝手を以畑ニ潰し、桑仕立たるは、桑高可付義には無之、最畑之廻り空地ニ仕立るか、又ハ山原等之空地ニ仕立る分、桑高付るもよけれ共、古來より無之義ならば、高に不結、右高之當ニ准じ、桑年貢申付て可然、

〔壬生家文書一〕一可同停止藍役事

苧桑楮竹木等稅

是ハ池ニ而藻草ヲ取、又は漁獵も致し、其地一圓ニ支配致を運上申付る、大概池役同前なれバ、池役者定納小物成にて村役納め、池運上は持主有之か、又ハ請負人等有之故、浮役之類ニ而、池役とは少し譯違ふ也、

〔新編追加雜務〕一桑代事

右地頭分可割合否之由、雖載篇目、兩方申旨子細不詳、但隨其所皆有差別、於爲山所出者除本年貢之外、可致半分之沙汰、至爲在家役者、可依在家率法焉、

一苧、在家役、麻、樹木、五節供以下事、

右地頭者、每物可被分充之由申之、雜掌者、新補率法條々之外也、雖一塵不可交之由申之云々、今除本家領家年貢之外、可爲半分之沙汰也、然而於無領家定使得分之所々者、不可及地頭得分之沙汰、但至五節供者、一向可令停止地頭口入也、次白苧事、先々御成敗之所々者、非沙汰之限矣、

寛喜三年四月廿一日　武藏守　判

相模守　判

駿河守殿

掃部助殿　○中略

一白苧幷桑代事

右國司領家、自元於不召之所々者、新補地頭始不可取之

文曆二年七月廿三日　武藏守　判

相模守　判

駿河守殿

掃部助殿

池役　池運上

用買物之價と成、世間ニ通用し、何國ニ而も五拾兩之融通有之、國の不益ニは不成、堀出ス拾兩は土中ニ埋り有、金銀世間へ出るニ付、拾兩だけの國益也、然共爲商賣請負等ニ而堀出者ハ勿論、諸侯方ニ而も多少之損失あれバ、出方少してハ休山ニ可成筈也、公儀ニ而は、凡にはあらず、五拾兩入用ヲ掛、拾兩堀出せバ、四拾兩之御不足之樣なれ共、日本國中ニ而は五十兩之上ニ土中より拾兩出て、六拾兩之通用則拾兩之國益也、君國之變事有時ハ、海內之金銀都而公儀ニ而自由ニ成事なれば、諸侯方とハ違ひ、御入用を掛ケも堀度物也、諸國休山多く、金銀を土中ニ埋置事誠ニ惜敷事ニあらずや、其外之五品も、世上へ拂底ニ成、價貴成も、燒失等あれ共先は休山多く堀出ス所少故、自高直ニ成て、國中之不自由不少事なり、

〔京都御役所向大概覺書三〕砥山運上之事正德五未年改

一古郡文右衛門御代官所、城州綴喜郡井手村砥山運上之儀、年々三月、中井手村近在御料私領入札相觸、落札を以御勘定所江相窺、四月より翌年四月迄壹ヶ年限ニ砥爲切出候由、

一年々入札申觸候得共、近年望候者無之候ニ付、四年巳前、正德貳辰年、雨宮庄九郞御代官所之節より、年々運上銀三十三枚宛差上、大坂町人泉屋市右衛門與申者、砥切出し申候由、但運上銀、享保元申年迄ハ江戶へ相納り候得共、當酉年より大坂へ上納之筈、

一禁裏御料小堀仁右衛門支配、城州綴喜郡多賀村領山內より青砥石出シ、御運上銀七枚宛、公儀江上納請負人木津屋傳左衛門年賦なし、但御運上銀、仁右衛門方ゟ取立、所々ゟ相渡、御勘定ニ仕組申候、

〔地方凡例錄五〕池役。

是ハ池ニ而藻草等ヲ取、肥に致し、或ハ眞菰ヲ刈、其外にも村方助成ニなる池なれバ、役米永上納するを言、○中略

一池。運上。

一同貳匁三分ゟ三匁貳分迄　十ヶ一右同断、九荷被下候
一同四匁ゟ五匁九分迄　五ヶ一右同断、四ヶ被下候
一同六匁八匁迄　三ヶ一右同断、二ヶ被下候
一同八匁五分ゟ拾匁迄　貳ヶ一右同断、一ヶ被下候
右者佐渡荷壹荷ゟ出候分金目ニ隨ひ、書面之運上御取立也、但出繼壹荷ト申は、錠を貳ッ切にして、半枚を以ニ致、此内江出繼醤油樽ニ壹盃入、以壹ッヲ定法佐渡荷と申也、右以壹ッ入候出繼貫目大概七八貫目也、
一右同断、元文元辰年、齋藤嘉六郎御代官所之節、江戸町人木村嘉七、間堀願之節、運上割左之通、
一砂金壹分ゟ九分迄（佐渡荷壹荷ニ付）　無運上
一同壹匁ゟ貳匁迄　十五ヶ一壹荷上納、十四ヶ被下候
一同貳匁壹分ゟ三匁迄　十ヶ一壹荷上納、九ヶ被下候
一同三匁壹分ゟ五匁迄　五ヶ一壹荷上納、四ヶ被下候
一同五匁五分ゟ七匁三分迄　三ヶ一壹荷上納、二ヶ被下候
一同八匁ゟ拾匁迄　二ヶ一壹荷上納、一ヶ被下候

砥石山運上

〔地方凡例錄五〕一砥石山運上
砥石山ハ、青砥、天草砥、上州砥、鳴瀧、名倉荒砥、品々有、都而髮剃刀砥は、王城之國ならでは無き物之由昔大和國、攝津國近江國等ニ都而有時、其國々砥石山出來、今平安城ニ成てハ、山城國愛宕郡鳴瀧ニ限りたり、其外之砥ハ國々ニ有之何れも切出之請負人有て、年季を限り運上冥加金銀差出す尤砥石ニ不限、常之石堀出ス金銀古へと違ひ大ニ減少したるにより、彌通用之金銀拂底ニ成たり縱バ拾兩之金銀堀出し、入用ハ五十兩掛る共、其五拾兩其堀出大工人足等の手ニ入、其外諸

是ハ平地に反別を受、他村入會に而秣苅取、年貢上納するを云、野方ハ多分持主ハなく總村持也、都てハ野山ニ而も山原にても反別有之、反ニ米永何程取と定りたるを年貢と云、無反別ゟ納るハ野手野役米永抔と云、何にても小物成なり、又野高とて持高之内ニ入有之類は田畑同様本途物成之内なり、

一野。役。米。

是ハ反別もなく、芝草等不生立、不用之場所成共、曠野原丘地村境等不分明ニ而、論所にも可相成趣ニ付、境目分明に致置度、爲後證役米上納致すと云、

野。手。米。永。

是ハ秣有之原野にて、總村持にて野手相納、村中入高秣苅取る、尤村中苅餘る程の大場成は、他村へ草札を渡、野手米永ヲ納させ、入會苅取するもあり、又前々他郷地村數ヶ村入會之野方も有、都而ヶ樣之類は無反別之場所多し、

金山運上

〔天龍寺文書六〕三會院山之儀、爲山手以參斗御納之升、毎年十月中ニ御院納可申候、萬一未進仕候者、何時成共可被召放候、其上山。之。鍰。者、御寺ト御談合次第ニ可仕、仍請狀如件、

慶長六辛丑年閏十一月廿六日　山田喜五郎　家長花押

三會院御役者中

〔地方落穗集十〕金山問堀運上割之事

一豆州青野毛倉野金山、元祿十六年御代官小長谷勘左衛門之節、

運上取立左之通

一砂金壹匁ゟ壹匁貳分迄　無運上

一同壹匁三分ゟ貳匁貳分迄　十五ヶ一　壹荷上納 十四荷被下

早雲守護する國の百姓、前世の因縁なくして生れあひがたし、ねがはくは民ゆたかにあれかしと申されければ、民家聞て此君の時代、永久にあれかしと佛神へきせいし、喜悦の外他なしと云云、

〔地方凡例錄五〕一山年貢

是は百姓持山反別有て、銘々地主極り、年貢米金之員數も出來、定之木柴取來る、又無反別も有、或は總村入會に而、持主定らざる山方もありて、鄕帳外書に記、年貢差出す事なり、同山に而も、山高とて、高に結び年貢納る山ハ、田畑同樣本途物成之内に入、高外之山年貢は、小物成之内なり、勿論持主有之山は、田畑同樣質入とも致し賣買有之事なり、〇中略

一山役

是ハ山年貢同樣たるといへども、最初木柴生茂りたる節、米永に而も不差出して八難苅取、村中總百姓入會に仕來り、山役と名付、米金相納る類を云、左すれば、木柴を盡したる節ニ、山役可差許、筋なれ共、小物成之部に入、定納に成るは、木柴有無ニ不拘引付物と成、增減、又一向之兀山不用之場所にも、山役差出す類あり、是は隣鄕山境等不分明に而、末々境場等無之ため、役永納置事も有之なり、

〔地方凡例錄五〕一山小物成

是は山年貢同樣ニ而、名目替りたるまでなり、〇中略

山手米永

是ハ山内不殘村持に而、秣等苅取、山手米永納め、又外村々望之者有之ば、山手米永爲差出、山札相渡、柴草苅せる義も有之なり、

一野年貢

〔信濃國諏訪神社文書〕信玄花押

信州諏方郡上宮祭祀退轉之所、今茲永祿八年乙丑十二月五日、令再興加下知次第、○中略

霜月廿七日之神事、掛九頭井之神田役之由、夙年不存知、

一十二月廿五日、大夜明之神事、白米貳升、神長かたへ貳百錢、幷汁鳥神事等、拘田地役候、

〔信濃國諏訪神社文書〕諏方上宮末社同祭祀退轉之義、尋捜舊規興其百廢、然ニ社司等所望之意趣者、令帶來所之古文ニ加判形者、爲社家之靑氈於後代可守此 則之由、任于請者也、

茲時永祿九丙寅年九月三日　信玄花押○中略

一九頭井之瑞籬鳥居、諏方郡上原南北之田役を以、建立之旨、露彼本帳之上者、彼處之田役七年ニ一度宛令催促、其員數相當ニ可修理旨、成下知者也、

一爲諏方郡竹居庄之磯並之內、瀬大明神之寶殿、玉垣、鳥居、御作田寶殿、鳥居、廊會美酒之宮、彼三ケ所可造營旨、本帳如此、任先例、彼庄之田役を割三分、三社之修補、可相勤者也、

〔新編追加 雜務〕一山野河海事

右領家國司之方地頭分以折中之法、各可致半分之沙汰、加之先例有限年貢物等、守本法不可違亂、

〔北條五代記 四〕北條氏茂百姓憐愍の事

早雲諸侍をいさめていはく、國主の爲に民は子也、民の爲に地頭は親也、是わたくしにあらず、往昔より定れる道也、いかでか憐みをたれざらん、世澆末にをよび、武欲ふかふして、百姓年中の耕作を撿地し、四ッもなき所をば五ッといひかけて取、此外夫錢、棟別、野山の役をかけ、あらゆる程の物を押て取、分際に過たる振舞をなし、花麗に心をつくし、米穀を徒についやす故に、百姓苦しみ餓死に及ぶ、是によて、早雲今定る所、年中收納する穀物の外に、一錢にあたる儀なり共、百姓にいひかけすべからず、諸役宥免せしむるにをいては、地頭と百姓和合し、水魚の思ひをなすべし、

沙汰之由申入相觸、地下承引不申也、水本又無覺悟次第之由被申、無承引之儀云々、仍而門主御無興、醍醐奉行鬱憤云々、雖然子細申分不致承引間、於段錢之儀者、誠申處無餘儀被停止、然者被仰懸處、無其曲被失御面目之間、不知因緣不可然條、安養院行樹院兩人就異自他有子細被申合宰相寺主數日及扱之間、無力五十疋宛之御禮物進之者也、

〔總見記十二〕上方御勢遣事附信玄病死事

信長努々公儀へ對シ、少シモ疎略ヲ不存ノ間、御敵ニ被成候儀ヲ、御免有テ可被下由、御誓狀ト、人質ヲ被指上、樣々ニ理ヲ盡シテ、御侘言有トイヘドモ、公方家更ニ御承引ナク、洛中洛外ヘ、兵粮矢錢ヲカケハタラレ、〇下略

〔法隆寺衆分成敗曳附幷諸證文寫〕諸證文寫之覺

掟　和州法隆寺

〇中略

一矢錢兵粮米幷雖當座之取替、不可懸之事、〇中略

右條々定置訖、若於違犯之輩者、可處嚴科者也、

天正二年正月日　信長御朱印

〔信濃國諏訪社家文書〕禁制

信州諏方明神社家

一相懸箭錢兵粮事、

右條々、堅被停止訖、若於違犯之輩者、速被處嚴科者也、仍下知如件、

天正十年三月日　信玄朱印

〔信濃國諏訪神社文書〕信玄花押

諏方下社祭祀數年退轉之分、今玆永祿八年乙丑十一月朔日、令再興、加下知次第、

一八月十五日之御神事、彥左衛門尉田地役に候へども、彼神田荒て、埋波浪底、年久則斷絕無據事、

宗澤長經在判

十一月廿四日

和州諸給人御中

〔尾張國郡司百姓等解文〕尾張國郡司百姓等解　申請官裁事

請被裁斷當國守藤原朝臣元命三箇年內責取非法官物幷濫行橫法卅一箇條愁狀〔○中略〕

一請被裁斷守元命朝臣自京下向每度引率有官散位從類同不善輩事〔○中略〕

卽供給之日、垸飯之外一度之料、白米八九斗、黑米五六石、每郡鄉絹十匹、其外號段米、町別一斗二升、況乎一宿借屋、補設不遑塵芥、然則耕田之人悉逃亡、作畠之民僅以留跡者也、〔○中略〕

〔英俊日記〕十二月〔○永正四年〕廿八日、段錢去月十日、武家之三奉行、此方三奉行、取沙汰分、當年中之分三百八十餘貫、段米百四十餘石、運上訖、

〔春日神社文書七〕請申　條々事、

一國平均造營要脚土打、段米、段錢、進官以下、當山惣列知行分、雖爲一粒不入之抑留、每度闕怠可令運上於寺門、〔○中略〕

永正十三年〔丙子〕卯月十三日　多武峯寺燈爐講大勝主

延秀

供目代御房

兵粮米

〔吾妻鏡五〕文治元年十一月廿八日丙午、補任諸國平均守護地頭、不論權門勢家庄公、可宛課兵粮米〔段別五升〕之由、今夜北條殿〔○時政〕謁申藤經房卿中納言云云、　廿九日戊申、北條殿所被申之諸國守護地頭兵粮米事、早任申請可有御沙汰之由、被仰下之間、帥中納言被傳勅於北條殿云云、

○按ズルニ、兵粮米ノ事ハ、官位部鎌倉職員地頭篇ニ詳ナリ、

矢錢

〔嚴助往年記下〕天文十五丙午八月朔日、三好孫二郎、當鄉〔江〕矢錢之儀申懸候時、以棟別雖被遣之、猶不足之間、重而被相懸之由云々、當院〔○理性院〕之儀者、從往古段錢課役一切被停止、帶綸旨、前々不致其

段米

て、朝倉殿へ被二仰付一候ハヾ、庄家之大儀にてあるべく候、就中此分にて目出落居候ハヾ、慶傳吉萬房ニ渡可レ申候、よの上使御下向候へバ、庄內之ミつゝいをゝく行候間、條々可レ然樣ニ御注進を可レ給候、

萬事このみ入申、每事恐々謹言、

十月廿五日　　河口惣御百姓中

吉萬房へまいる

〔蔭凉軒日錄〕寬正三年六月十一日、天龍寺領江州建部莊內自二山門一被レ懸二段錢一之事停二止之一、御奉書被レ成之事伺レ之、即命二于山門奉行布施下野守一也、

〔府中總社文書〕廳宣　　留守所

可下早任二宣旨狀一除二三社領一外、不レ論二神社佛寺以下免給等一平均宛二催公田建久以後新立庄園一令中進濟上大嘗會用途料段別參升米事、

副下

宣旨　院宣

右大嘗會者天下之重事、諸國之課役也、是以所レ被レ宛二召段別三升米一也、早任二宣旨一平均令二宛催一、早速可レ進濟一、兼又新立庄園幷公田員數等委可レ令二注進一言上之狀、所レ宛如レ件、國宜二承知一、不レ可二遲怠一、以宣、

文永十一年六月

介惟宗朝臣

〔英俊日記〕十一月〇永正四年廿四日、此間每日御造替爲二談合一、於二修南院家一沙汰人會合有レ之、〇中略

御造替段錢、並寺門段米寺社領等事、各无二相違一可レ被二相渡一、万一於二違亂之在所一者、給人可二相改一者也、恐恐謹言、

〔大乘院寺社雜事記〕長祿四年七月一日、一自室町殿坪江河口段錢事、去春比ヨリ被仰出之、無其例之間、爲寺門、捧事書了、近日又以抽留木御催促之間、學侶事書明日可上之也、事書事、宗秀五師ニ仰付之了、一段寺門ニ披露故也、

興福寺學侶衆徒群議條

越前國坪江河口兩庄撿挍所、大乘院家御段錢事、田樂御頭役等時、任先規被懸催者、毎度佳例不能左右之間、則其子細爲寺門捧一行事書畢、然而於彼庄公方樣御公用段錢京濟事及御沙汰云々、事實者、頗迷惑之至、何事如之哉、御門跡御頭役、自國他國御領段錢古來規式也、殊更彼兩庄者、公用巨多之庄薗、相以此等要脚可被致御用意歟處、公方御段錢被懸募者、御門跡御頭役難成立歟、啻匪御先途滯停、神事違亂、爭不驚思食哉、自然不慮之事、併仰御下知可遂其節之處、依御公用錢、覃神事猶豫者、云神慮云人口、寺門可失面目之上者、公方御段錢、先以被成放免御成敗者、五社明神鎭添萬機利物之權衡、三千禪侶彌致食運長久懇欵之群議如件、

長祿四年七月一日

寬正二年十一月廿三日、一河口庄段錢事、仰付朝倉候條、百姓等以外仰天云々、則百姓書狀自給主進之、返事ニハ中々違變朝倉方事不可得仰之了、武次同注進之返事同篇了、百姓沙汰次第緩怠無是非者也、成唯今如此申狀、比興次第ナリ、

乍恐以狀申入候、御段錢之御事者、朝倉殿へ被仰出候由承候、去年當年事ハ、五百年三百年此方にもなき不熟にて候間、色々なげき申候、さ候間、今度之使節ハ、百貫までの御請を申候へ共、叶まじく候由蒙仰候間、まづ罷下候、さ候間、庄内にも百貫文之奔走を內々たしなみ申候處ニ、其分にてもかなうまじく候由承候間、又百貫文あひそへ申て貳百貫文分、當年中ニ進上可申候、又來年中ニ貳百貫文進上可申、已上此分にて御免候樣ニ御披露を可給候、猶以叶まじく候と

段錢停止

禰宜大夫殿
桑原土佐守殿

〔東寺百合文書に之六自三十六至四十〕納御要脚段錢事
合貳拾貫文者　田數貳拾町
右爲東寺領丹州大山庄段錢、所納如件、
寶德元年十一月二日　二宮兵庫助景國　花押
茨木近江入道宗安　花押

東寺雜掌

〔大乘院寺社雜事記〕應仁元年丁亥四月六日、一自長谷寺書狀到來、自去月披露、學侶當所御造營反錢事、不作分十餘貫文事、種々雖歎申入、學侶儀不叶、仍來秋可沙汰、近日德政事及其沙汰之間、傳借事一向不叶旨申之、則仰遣供目代方了、

文明二年十月五日、一今度爲法花會竪義、諸庄段錢事、任例仰付之、一國平均反錢附有之、任文安三年例、兩方百文宛致其沙汰了、就其平均反錢事、於越智鄕者、不隨寺命珍事也、神供反錢無其例云々、然間門跡反錢事、越智鄕分古木新庄、興田庄、五位庄、無沙汰之間、於此段錢者、先例旨以古市申遣之間、可申付云々、返事到來了、越智鄕外者、悉以平均方致其沙汰云々、

〔東寺百合文書ほ之三十三至五十二〕東寺領太良庄段錢事、別而被仰談子細候而、可有停止國催促之由候也、仍執達如件、
享德元十一月三日　長行判
山縣下野守殿　享德元國方要脚段錢免狀

十月十日　　權中納言忠光上

進上　民部大輔殿

〔後愚昧記〕應安五年十月十日、癸未、畑庄飛脚到來、經世入道遣狀、當國段錢事云々、今度院御領以下三社領、三代御起請符地等、更不可除之由雖被申、免除之院宣歟云々、於飛脚者先返下了、段錢同事以行算雜掌遣藤中納言忠光卿院執權也許、尋此事之處、三社不可除之由、可被下院宣之旨、武家以兩使令申間、經奏聞、今日尹令出院宣了、然者免除事非被申之限云々、

〔集古文書四十四下知狀〕應永十一年寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

鶴岡八幡宮御修理要脚事、雖寄進應永六年上野國段別錢、被成他要脚之間、爲彼替甲斐國段。別錢。五疋。宛。分、今明二ヶ年所寄附也、致其沙汰可致於營作之狀如件、

應永十一年五月十五日　　華押

中務少輔入道殿

爲寺院用途課段錢

〔東寺百合文書と之一至二十三〕鴨河合社造替料山城國反錢事

右以壹段別八十文宛、來二十五日以前可有究濟候、若令難澀者譴責使有入部可加催促之狀如件

嘉吉元年十一月二十一日　　花押
　　花押

とうじ領
かみくせ

〔東寺百合文書ほ之三十三至五十二〕東寺領太良庄一宮三宮造營反錢事、去任文安貳年段錢例可被致成敗之由候也、仍執達如件、

寶德貳九月廿七日　　栗屋右京亮　貞判
　　長行判

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕康正二年造內裏段錢幷國役引付

合

五貫八十文(五月廿九日、廿六日定、送狀在請取出、)嵯峨大雄寺領(尾州味岡庄段錢)　五貫文(同月廿五日定、同、)嘉隱領(段錢)

九貫六百文(同月廿五日定)寶壽院領(雲州飯田邑段錢)　參貫五百文(同日、同前、)三條帥殿御家領(攝州細川庄段錢)

〔東寺百合文書〕(な之三十二至三十九)送進造內裏反錢事

合拾玖貫文者

右爲東寺領山城國久世上下庄、上野植松庄以下、所々散在參拾捌町分錢、所送進之狀如件、

文安二年二月二十一日　公文法眼淨聰判

爲武家用途課段錢

〔東寺百合古文書〕請申

東寺御領播磨國矢野庄例名方供僧學衆御代官職之事

一公方段錢幷守護段錢以下、臨時之課役等、於不足者、一切不可申入寺家、爲代官可致其沙汰事、

文明十五年(癸卯)六月十一日　御代官東壽在判

〔蔭凉軒日錄〕長享三年三月六日、勝田地頭方段錢相懸條、以寺官連署兩奉行藥師寺彥四郎、鳥井十郞左衞門尉方へ遣了、愚太初加判

爲神社用途課段錢

〔建武以來追加〕日吉神輿造替要脚內其國段錢事(應安五七十一)、就被下院宣所有其沙汰也、所詮召出國大田文、寺社本所領、幷地頭御家人等分領、悉充公田段別三拾文、急速可執進之、若有難澀之在所者、守護使相共遂入部、可致譴責矣、〇(又見花營三代記)

〔花營三代記〕應安五年十月十日、日吉神輿造替諸國段錢事、不除三社領三代御起請符地、可充催之由、可被仰遣武家之旨、新院(〇後光嚴)御氣色所候也、仍言上如件、忠光恐惶謹言、

月以前、可被沙汰之由、被下御敎書、

〔妙興寺文書〕段錢納付狀

納御卽位 幷 御禊大嘗會宮廳要脚、尾張國段錢事、

合貳拾貫文者

右、爲中島郡之內妙興寺領公田肆拾町分、所納如件、

正長貳年六月十一日　眞良 花押○以下署名略

〔集古文書 捉三十〕永正七年下知狀 屋代弘賢識

多田院領攝津國多田庄七鄕、幷加納分米、谷村、山本村、小戸村等、御卽位段錢事、先々爲免除之地條、恐守護催促之上者、早可被沙汰彼代、更不可有難澀之由、所被仰出候狀如件、

永正七九月廿三日　長俊 花押○以下署名略

爲內裏仙洞造營課段錢

〔東寺百合文書 な之三十二至三十九〕

納造內裏料段錢事

合貳拾漆貫貳佰貳文者 除但請入組

右、爲東寺領乙訓郡久世上下庄田數伍拾肆町參段參百五十步分、所納如件、

應永八年六月廿九日　花押

花押

納京御所御修理要脚段錢事

合參拾肆貫玖百九十文者

右、爲東寺領分、度々所納如件、

應永十四年十月四日

爲朝廷用途課段錢

三拾文、急速可執進之、若有難澀之在所、守護使相共遂入部、可被譴責矣、次當參輩所領事、仰所務官可京濟之旨相觸之、且領主之名字、田數之分限、可注申之焉、

惣奉行　佐々木治部少輔

右筆　門眞權少外記

〔大乘院寺社雜事記〕長祿四年閏九月六日、一諸御領段錢段別百文宛相催之、催北面賢善也、納所事仰付尊藤之由、抑兩奉行に段錢納所御奉行御計故也、

田樂御頭段錢支配事

神殿庄定田、　楊本庄、　倉庄、　出雲庄、　九條庄、　與田庄、　森屋庄、

小大田庄、　楠本庄、　羽津里井庄、　西山庄、　新治庄、

寬正四年十月十八日、一國中私段錢之事、新義說充滿一國、依引募亂歟、停止之成敗上者、自今以後、涯分可專談義決擇再興矣、就中當時爲體、以寺社恩澤充修學之根、人希以惣別潤色充俗徒之賂、倫多、然間童形同宿之寺僧不幾、此是非法滅大本哉、仍以惣別潤色隨分可配修學同宿之資緣者也、將又寺邊往反之童體、或裁綾羅嚴身、或求錦繡著之、因玆貧母無緣之幼童、新絕弘交衆宿願有緣之寵、徒交邊山之塵、宗敎頓滅之先表可過之歟、寄宿依心體專可被存故實事、

明應二年十月廿七日、一越智方一國平均私段錢事、自學侶此間問答趣相尋供目代之處、越智方與申徒分者、段別百文之內、奈良方ニ地主在之者、百姓分五十文計可給云々、奈良方ニ地作一圓知行有之者、百姓分卅二文分可給旨越智申入、然之間、此趣一國中ニ以公人自寺門相觸之、小泉知行分自小泉方段別百文相催之、以外不可然之由自越智方致問答云々、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年九月十日乙未、御禊大嘗會用途事、每田地一段、可進濟錢二百文之由宣下、於關東御分國幷沒官御領等者、直可進納之旨、自公家被仰下訖、其外地頭所々事、今日有議定、來十

〔尺素往來〕就沍弱名田、被懸過分莫大之段錢夫役事、難澀次第也、

○按ズルニ、吾妻鏡ニ、弘長三年、將軍入朝ノ時、諸國ノ田一段ヨリ、各、錢一百文ヲ徵セシコト、エタルハ、卽チ後世ノ段錢ノ類ナリ、然レドモ當時未ダ段錢ノ稱アリシニアラズ、

〔建武以來追加〕御成敗條々 應永廿九七廿六 松田丹後入道常普奉行

一役夫工米以下段錢京濟事

差日限、作捧請文、於不致其沙汰在所者、可被闕所矣、

〔春日神社文書九〕本鄉江段錢懸樣之事

一反別十疋宛事

一於寺門者百姓役卅二文宛事

一當年迄之事

一國衆懸增之儀者無之樣可有異見事

一與力衆同可被申觸事

以上

八月〇天文二十三年廿九日　宗職花押

〔甲陽軍鑑品第四十七〕甲州にて、侍大將衆同心ニ預おかるゝ、侍ども、知行百貫とる者、大形五十貫は、名田と申物にて、年貢少づゝ出し、殘は、其地主知行にふみてとる、右少づゝの年貢は、名田の中に段錢と云物を撰出し、高にふみ、又別人に下さるゝ、

〔花營三代記〕應安五年七月十一日、日吉神輿造替料足事、被付諸國段錢、

日吉社神輿造替要脚內諸國段錢事 應安五七十一

就被下院宣、所有其沙汰也、所詮召出國之大田文、寺社本所領、幷地頭御家人等分領、悉充公田段別

人足運上

書面支配所内諸運上滯候者ハ、出作百姓ニも催可申候へ共、御普請其外諸請負人ハ、出作百姓とハ譯違可申間、不埒之筋有之候ハヽ、取計方之義懸り江可被相伺候、

〔寶暦集成絲綸錄二十九〕寶暦三酉年四月

町中日雇札役錢、唯今迄者、鳶頭共取集、日雇座江差出候へ共、子細有之ニ付、當分者、町々家主共江取集、名主方江差出、名主より早速奈良屋役所迄可相納候、

鳶口　役錢三拾文宛　車力　役錢三拾文宛

後日雇月切　右同斷　前入口　右同斷　駕籠舁　右同斷　但武家方雇六尺共

月雇　右同斷　但武家方町方共

淺草御藏米揚日雇 同根揩日雇　右同斷　脊負輕子　同四拾六文宛

但シ下座見役錢共、唯今迄二季差出候間、先ツ此度取集ニ不及候、

右之通、急度取集、來月六日七日兩日之内可差出候、延引ニ及候ハヽ、御用人足之差支相成候間、無油斷取集、日雇人別帳相添、急度可相納候、

一前々御觸茂有之、無札ニ而日雇稼候事ハ不相成事ニ候處、無札之者茂有之候由、右者別而家主より遂吟味、極り之役錢取立可差出候、尤日雇札は唯今迄之通、日雇座ニ而請取候樣可致候、幷唯今迄滯有之候役錢茂可有之候間、是又同前ニ候、

四月

〔明良帯錄世事〕馬口勞頭

馬込勘解由、國々馬次諸方人足を出す、馬一疋に付、十文の揚錢を取て運上とす、

土地稅段錢

〔常照愚草〕諸國へ段錢、被相懸時は、奉行來國を取て、其國ハ誰々と被分之、是を國分之奉行と申事也、其國々守護へ御下知書出申候也、

物事以下、悉皆新儀事ハ被破之了、門跡大儀重々在之、自往代御領幷諸山寺等以之辨諸事之處、一旦門主兒永代者、以何可大儀沙汰哉、仍如先例諸山寺有德錢等、一段大儀之時ハ仰付之者也、及異儀之條不可然、門跡無力間、待時刻計也、相懸十市可達所存者也、比六七ケ年間、十市梱原ニ仰合子細也、辰剋、十市勢取向釜口近所云々、過錢等無其沙汰者、一山可令發向云々、物取雜人如雲霞云々、時刻到來不及力事也、

延德四年○明應元年八月廿四日、一慶忍專當昨日入滅、十餘年罪科人也、故筒井順永律師之奈良代官也、奈良中之惡行申沙汰者也、大明神大罰之故、子息以下一門緣者大略滅亡之後、則體又如此云々、

大邊惡行始之事、○中略

一有德錢ト號シテ、人々ニ大小料足懸之事、是四、

此事後ニハ鄉錢ト號シテ、一鄉宛ニ懸之也、

後家役
出家妻帶役

〔甲陽軍鑑品第五十四二十〕長坂長閑、跡部大炊、勝賴公へ申あぐる、信玄公御他界の前、春中に足下へ趣給ふとて、御支度のため、金子を御調あるに、後家役、出家の妻帶役まで、召あげらるゝといへども、漸七千兩ばかりにて候、たゞ今又、是は何事もなきに、立所にて一万兩の金子調申候儀は、信玄公十雙倍、勝賴公御威光ましなさるゝ故、如件、

請負人運上

〔聞傳叢書七〕一支配所內諸運上幷御普請其外諸請負事、他之御料私領之もの請負運上差滯候歟、又ハ請負不埒之筋も有之候節之事、

是ハ他之御料私領ゟ出作百姓ニ、御年貢等差滯候節ハ、本百姓同樣吟味仕、手鎖抔も申付候心得ニ被在候之間、諸運上其外請負事不埒有之候ハヾ、吟味仕、度々不及伺ニ、宿預ケ手鎖等も申付、追而領主支配江申達候樣可仕候哉、

御附紙

德錢　有德錢

取り、百姓住宅も碇と不定、万事不調成ゆへ、棟役を懸て、家々役を取、夫を百姓迷惑して、家を長屋之樣ニ作り、棟役之減る樣ニするニより、門役ヲ懸て取る故、又門役ヲいとひて、口を塞ぎ少くするによりて、其後ハ內の竈を數へて鎰役と名付、役ヲ取立る、鎰は鍋釜を掛る自在鎰之儀也、中古石高等定りて村別鎰役と云ハなく、今も越前ニハ小物成之名目ニ成有之由、其外山家ニハ間々あり、持高ニ不構、家壹軒より錢何程と平均ニ割取集メ、村入用に遣ふも有、是ハ山內木草等苅取る事、高ニ不構、家並ニ入會苅取故也、又堤切所水溜或は猪鹿獵出す樣成節、人多入時、村方ニ不構、竈役に壹人宛出す事もあり、是をも鎰役と云て、遠國山中等ニ有、小物成之類なり、

〔永享年中文書〕御判

富士淺間宮造替事、役所等相定之所、駿河國段錢、德錢、剩他國以下被付、其足、連年雖致、其沙汰、未事行云々、且不怖神慮、且不顧民煩之條、甚不可然、所詮不日遂造功、可被申請遷宮日時勘文之由、所被仰下也、仍執達如件、

永享三年九月十五日　大和守

沙彌

今川上總介殿

〔大乘院寺社雜事記〕長祿三年七月八日、一爲六分奈良中ニ有德錢懸之、於無沙汰仁者則令進發了、以外嚴密也云々、ツノフリノ左近次郞男ニ六貫文分可出之由雖令申之、彼左近次郞男之子松菊丸、狩衣ノ御童子ニ參了、先祖又依爲御童子召御童子了、然上者親公事不可沙汰條勿論也、可相除之由、此事執沙汰ノ仁行賢（舜玄）方ニ仰遣間、閣之了、千万喜悅旨仰者也、自餘悉以出之、皆借用通云云、

文明三年閏八月十一日、安住寺殿門主時、以當座之儀御沙汰條々、段錢御免事、諸知行所ニ被入借

右色掌人、在家雜事、令免除之、且爲御祈禱也、仍所注如件、故下、

治承七年〇壽永二年三月十七日

〔東寺百合文書ほ一至三十二〕若狹國太良庄〇中略

一在家役事

字役

右子細雖多、制分百姓屋敷内、於令居置親類下ノ人等者、可被停止各別之所役焉、

寛元元年十一月廿五日　相模守平朝臣

〔蠹簡集五〕土佐國大野見宅兵衛藏

坪付田上六右衞門新給十七ヶ所、合壹町壹段廿八代五歩半、

右之加扶持は、今度高麗へ召連候處、別而奉公仕候條、爲褒美云付上は、向後抽自餘國役幷字役、諸事無殘可相勤者也、

文祿三年甲午十一月六日　親忠花押

田上六衞門かたへ

〔蠹簡集五〕土佐國吾井郡岡崎孫六藏

坪付市川一衞門給七ヶ所、合六段廿七代貳歩、

右之買地、此中別テ奉公相心懸候條、爲加扶持言付候、國役幷字役等、無殘可相勤候、猶以向後無退屈、奉公可仕者也、

文祿三年甲午十一月六日　親忠花押

市川一衞門かたへ

鎰役

〔地方凡例錄五〕一鎰役之事

鎰役といふハ、古昔ハ總而役を掛るニ、物之譯不定、石高免狀と云ふ事もなく、年貢も取れ次第ニ

八月〇天文二十三年廿九日　宗職花押

〔蠹簡集五〕土佐國高知岡安節藏

此中奉公相心懸候條、爲襃美越知面役人ニ相定候、万百姓役等、無緩可被申付候、勿論理不盡之沙汰、聊以仕間敷者也、

文祿三年十一月十四日　親忠判

岡式部かたへ

在家役

〔吾妻鏡二〕養和二年〇壽永元年八月五日癸卯

可令早停止若宮供僧禪寳在家役并自作麥畠壹町地子事

右件人、爲若宮供僧、長日之御祈无懈怠、而在御介仕房、准於士民、懸万雜事、令煩之條、不穩便事也、於自今已後者、云万雜公事、云垣内畠、可令停止其煩之狀、所仰如件、以下

治承六年八月五日

〔新編追加雜務〕一苧在家役麻樹木、五節供以下事、

右地頭者、每物可被分充之由申之、雜掌者、新補率法條々之外也、雖一塵不可交之由申之云々、〇中略

寬喜三年四月廿一日　武藏守判　相模守判

駿河守

掃部助殿

〔三島文書〕下伊豆國留主所

可免除早三島宮色掌人伍人在家役雜事

〔大村文書〕駿河國安部湯島村之內大村屋敷、幷大子之山等之事、右任先判同印判之旨、棟別諸役以下免除不可有相違候也、仍如件、

永祿貳年十一月廿八日

大村壼六郎殿

定

自今已後、捕物奉公無疎略可相勤旨申候條、如前々、棟別幷諸役有御免許者也、仍如件、

天正二甲戌年十二月十八日

跡部大炊助奉之

安部　大村壼六郎殿〇駿河國

棟役

〔信玄家法上〕一他鄕へ有移家人者、追而可執棟役錢事、

〔信濃國諏訪神社文書〕諏訪上宮末社同祭祀退轉之儀、尋捜舊規、與其百廢、然ニ社司等所望之意趣者、令帶來所之古文ニ加判形者、爲社家之靑氈、於後代可守此規則之由、任于請者也、

茲時永祿九丙寅年九月三日

信玄花押〇中略

一秋庵御寳、神殿之中部屋、前宮、十間廊、右之四ヶ所退轉、如本帳は、諏方十鄕之役たるの由、書載之條、如證文十鄕之家壹間より、五文錢宛棟役を執、彼員數之內、以半分秋庵之寳殿を立、殘而半分を分割して、御寳幷神殿之中部屋二ヶ所之造營可相勤候、

百姓役

〔英俊日記〕永正四年十二月四日、段錢員數事、百姓役卅二文、段米同一升宛可出候由、切符入了、不口間田餘田惣田數被懸了、先納當納、共以百姓役計也、

〔春日神社文書九〕本鄕江段錢懸樣之事

一反別十疋宛事

一於寺門地者、百姓役卅二文宛事、〇中略

以上

棟別免除

ず、兎角之儀あるにおいては、かたく可申付也、

〔石田文書〕定〇中略

一地頭百姓等履事、年中ニ十日充為家別可出之、并代官履可為三日宛、扶持米右同前、〇中略六事、

一四分壹者、百貫文ニ貳人充可出候事、〇中略

天正十七年七月七日　伊奈熊藏家次花押

大工總右衛門殿

〔信玄家法上〕一棟別侘言一向停止畢、併或者逐電、或者死去之者、就有數多、及棟別錢一倍者可披露、糺實否、以寛宥之儀、隨其分限可令免許、

〔富士北山本門寺文書〕今川氏眞安堵狀

駿河國富士上方本門寺之事

右任代々數通判形之旨領掌、永不可有相違、然者陣僧棟別地撿々見社役諸勸進竹木見伐以下一切停止之、本年貢之外不可有地頭代官綺、次門前數拾五間棟別免許之旨、先判形雖有之、唯今為新在家之由訴訟之間、為新儀五間合貳拾間永所令免許也、縦總國不入之地四分一等為當座一返之履雖申付之、彼寺之事可為無緣所之間、不可准自餘者也、仍如件、

永祿三庚申年十一月十六日　氏眞花押

〔杉山文書〕棟別之事

右今度就三州急用、免許之棟別一色悉雖取之、兩人事者依勤陣參、不準地下人之間、永免除畢、向後免許棟別雖相改之、兩人儀者、不可有相違者也、仍如件、

永祿六癸亥四月十日

杉山小太郎殿

望月四郎右衛門殿

心ニ企參上、雖可歎申、先捧連署者也、然者至御手洗河下者、任社例被閣之者、一社彌奉爲仰上裁、可勵御祈禱之忠勤者也、
一棟別錢十疋宛事、人々歎申者也所詮以壹疋宛、如先度言上被仰付、國中平均者、御修理可輙歟、
一御要錢事、以前依被仰出致沙汰間、重役之由皆以歎申者也、若此條僞申候者、鹿島三所大明神、八幡大菩薩、御罰を可罷蒙者也、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

永享七年八月日　　權案主　藤原助成人名略○以下

〔信玄家法上〕一棟別法度之事、已以日記、其郷中へ相渡之上者、或者令逐電、或者死去、於其郷中速可致辨濟、爲其不改新屋也、
一其身或捨家、或賣家、國中徘徊者、何方迄莬追而可取棟別錢、雖然其身一錢之無料簡者、其屋敷抱人可證之、但於屋舖二百疋之內者、隨其分限可有其沙汰、自餘之郷中、令一統可償之、縱爲他人之屋敷、同家屋敷相抱付而者、不及是非事、

〔今川記五〕かな目錄追加
一不入之地之事、代々判形を載し、各露顯之在所の事は沙汰に不及、新議之不入、自今以後停止之、總別不入之事は、時に至て申付、諸役免許、又惡黨に付ての儀也、諸役之判形申かすめ、棟別錢さたせざるは私曲也、棟別、だんせん等の事、前々より子細有て相定所の役也、雖然載判形別而以忠節扶助するにおいては是非に不及也、不入とあるとて、分國中守護使不入抔申事甚曲事也、當職の綺、其外內々の役等こそ、不入之判形出す上は、免許する所なれ、他國のごとく、國の制法にかゝらず、うへなしの申事不及沙汰曲事也、自舊跡守護使不入と云事は、將軍家天下一同御下知を以、諸國守護職被仰付時之事也、守護使不入口ありとて、可背御下知哉、唯今はをしなべて、自分の以內量國の法度を申付、靜謐する事なれば、志ゆごの手入間敷事かつてあるべから

候、嘉曆興福寺造營、被付日本國棟別候云々、彼時沙汰不審存候、若被觸御耳事や候つらん、御才覺候者可被示下候、此造營事、草創之時申沙汰候、適相殘候、今度伺可奉行之由、自武家別申入候由、被仰下候間、老骨雖難堪候、無力申領狀候、興福寺例沙汰候趣、分明候者、別不可有煩候、彼時儀無所見者、可為何樣候哉、炎暑之最中雖其恐候、存煩候之間言上候、蒙御處分候者、可畏入候、恐惶頓首謹言、

六月十九日　經顯

洞院殿

抑天龍寺造營料棟別事、武家奏聞事候者、不可有異義之條勿論候歟、洛中事、誠難被混諸國候哉、然者各別沙汰不能左右候也、嘉曆蹤跡分明候者、不可有子細候哉、此事等、僧服解籠居程沙汰候歟、彼時儀曾不覺悟候匡遠、師茂などニハ尋聞食候哉、彼是所見不分明候者、洛中在家と被載之條、不可背物宜候歟之旨存候、可有計沙汰候哉、每事期後信候、恐々謹言、

六月十九日　空元

（鹿島社文書二）注進

鹿島太神宮諸神官等謹言上

右為當社御修理要脚、當郡棟別錢御寄進、一社所畏存也、仍如度々言上、於宮本鄉御手洗河下者、依為當社荒籬之內、鎭座以來諸公事一切無之者也、其上神官之屋敷名田等多之、爰鹿島民部大輔者、當社云大宮司、又號總官、警固社頭、奉守護神事仁也、於彼知行分者、每日之供祭料、收納租穀、卯月霜月大神事料物等出之、其外年中細々之神役不可勝計、是皆天下安全御武運長久之精祈也、然ニ每度令當參、致在陣奉公之間、雖為當社事、至臨時之所役者、曾以不勤之旨、先立雖令言上、重而被仰出候條、一社愁訴至也、既降臨以來不易法而、限今度被破者、云御神事退轉之基、難測神慮之間、一社同

政治部八十四

下編

雜稅中

戸口稅 棟別

〔集古文書 三十七〕攝津國多田社藏

左辨官下 攝津國

應令取國內棟別拾文錢貨宛用當國多田院本堂以下修造料事

右得彼寺僧等去年十二月廿八日奏狀偁、謹撿舊貫、賜宣旨、勸諸方修造堂宇者、皇家之先規、佛閣之固實也、爰當寺者、多田滿仲之祐寂場也、○中略 望請天恩、因准先例、宛取件八ヶ國棟別齊亮拾文、可修造當寺本堂已下破壞之由、被下宣旨者、奉祝寶祚於九重之雲、永傳白業於三會之曉者、權中納言藤原朝臣俊定宣、奉勅依請者、國宜承知依宣行之、

正應六年正月十九日　　　　大史小槻宿禰花押

右中辨藤原朝臣花押

〔園太曆〕延文四年六月十九日庚辰、抑一品送消息、天龍寺造營料棟別洛中分事被談合、嘉曆興福寺沙汰事、曾不覺悟之旨報了、

抑天龍寺造營料、可被付日本國棟別之由、武家奏聞之間、諸國事被下綸旨候云々、洛中事、別可被仰下之旨、寺家望申候、此事何樣可候哉、如諸國不嫌權門勢家之由、被載下候者、庸相雲客居所皆可相混候、若被差分際、洛中在家棟別など可被載候哉、無傍難候樣、有沙汰之條、大切ニ可被計下

右之米、御代官勝手次第、二條、大坂、大津御藏へ相納度斷有之候付、納證文兩奉行ゟ認遣候、但大坂ヘハ町奉行中宛所ニ而御藏衆ヘ收納被致候樣、可被申渡旨申遣ハス、

取立る、又私領上知之村方、私領之節高百石に付、夫米貳斗より內なれば、夫米免許にて六尺給米掛る、貳斗より餘計なれば、私領引付之通り、夫米納にて六尺給米掛ざる事なり、

右三役之儀者、風水旱虫の凶作にて、田畑五分以上の損毛に當れば、三役免除の定法なり、新田高入なれば三役掛る、古來より私領の村方は、糠藁代納め來り御藏前入用なし、右村方上知なれば、糠藁代引付之通り上納、外に御藏前入用掛る、但し中古私領渡しに成し、村方の糠藁代は、元來御藏前入用なり、よつて其村上知となれば、糠藁代は免許にて御藏前入用掛るなり、

〔御觸幷御書付留 二〕村々高掛物免除之儀、去戌年より田畑合五合以上損毛ニ候得バ、其壹ヶ村ニ高不ㇾ殘御傳馬宿入用、六尺給米、御藏前入用、三役免許申付候由ニ候、向後前々之通、田方五分以上損毛之節ハ、其田高損毛高計り三役免許可ㇾ被ㇾ申付ㇾ候、

寶永六子年三月

右之通、堀大和守殿被ㇾ仰渡ㇾ候間、其旨可ㇾ被ㇾ相心得ㇾ候、

〔京都御役所向大概覺書 三〕八ヶ國御取箇之外御藏入掛り物之事

一江戶御臺所六尺給米高、從ㇾ御勘定所ㇾ每年申來、五畿內、近江、丹波、播磨、御藏入村々へ割符申付ル、

正德四午年
掛高三拾五万九千八百八拾五石餘

此六尺給米六百四拾三石八斗　年々不同

外
貳拾八万貳千六百五拾六石餘　萬引高

但京、伏見、奈良、堺廻り村々、宇治本鄕廻り、和州吉野郡村々春祭禮役懸り村、攝州之內京都祇園神事役勤候村、江州國友村所々、御殿附村々御傳馬宿、同助鄕宿次飛脚勤候宿々所々、夫米銀勤候村々、幷大工杣木挽積多高等之分へハ割符不ㇾ相掛ㇾ候、

〔地方役人三〕高掛物之事○中略

一高掛、往古ハ人足勤也、御黒鍬、陸尺、御藏納の人足の類故、引付を以、私領方總而大名方ニ而も、領知知行ゟ年々人歩を呼召仕しより、今ニ其名殘りて有る事也、

高五百石

米壹石　御陸尺給米　但百石ニ付貳斗掛

米三斗　御傳馬宿入用但百石ニ付六升掛

永壹貫貳百五拾文御藏前入用但百石ニ付永貳百五十文ツヽ

歌に、むら高を四ツにわりて御藏前入かけ六に三かけの宿、

前方ハ年々御割賦にて納、不同有之、享保七寅年御書付出候而、高百石ニ付、御傳馬宿入用、六尺給米、御藏前入用ハ、書面之通定納ニ相成候、右之外關東ハ小穀代とて、年々御割賦ありて納候處、享保年中、御免被成、右三役ハ、臨時之高役といふて、本石納也、口米も不掛、然處寶曆七丑年ゟ、六尺給米、并御傳馬宿入用米、御張紙直段ニ而、三兩增にして石代金納ニ相成候、

〔地方活法中五〕宿、六、藏、三役の事、

一御傳馬宿入用米、六尺給米、御藏前入用、是を三役と云、高掛りにて納む、傳馬宿入用は寬永四亥年より高百石ニ付米六升宛納む、是は五海道問屋本陣の給米其外宿方入用になる、尤石代金納なり、六尺給米に高百石ニ付米貳斗ツヽ納む、是は人夫を百姓役にて村々より差出したる處、享保年中夫人の人數を積り、其給扶持分を米にて納る事なり、是を六尺給米と云、石代金納なり、尤引付にて米納の所もあり、御藏前入用、上方は高百石ニ付銀十五匁、關東は永貳百五十文宛納む、御米藏諸入用なり、右三役私領にはなき事なり、私領渡りに成し、村方は御傳馬宿入用六尺給米、合高百石ニ付、貳斗六升を夫米と名付、御藏前入用金は、糠藁代として高掛りにて

〔地方凡例錄五〕一三役之事

三役と言は、私領には無事なり、其始年暦も不知、尤課役の人夫等を出し、庸調之法あれば、三役に類したる義はあれども、三役と名目附、定納に成たるは、御當代にて始し事とみへたり、御。料。所。村。村。御。傳。馬。宿。入。用。米。六。尺。給。米。御。藏。前。入。用。是ヲ三役といふて、高懸りニ而納む、前方は年々御勘定所ゟ御割賦ニ而、年ニより不同ありしが、享保年中ゟ定納と員數定りたり、

一御傳馬宿入用ハ、寶永四亥年ゟ被仰出、高百石ニ米六升ヅヽ納、是ハ五海道問屋本陣給米、其外宿方御入用被成故、石代金納なり、道中方御除金之內へ相納る事也、

一六尺給米ハ、高百石ニ付米貳斗ヅヽ納、是ハ古來は臺所ニ而召仕ふ夫人、百姓役ニ村々ゟ差出たる處、不馴ニ而難用立、其上百姓も致難澁ニ付、中古御臺所方ニ而御雇ひを遣ひ、賄事行より人數を御勘定所へ書出、割賦有之、年々不同有之處、享保年中、六尺之人數ヲ凡ニ積り、給扶持を御料之高ニ積り合せ、高百石米貳斗ヅヽ定納ニ成たり、是又石代金納也、尤引付ニ而米納ニ成所もあり、

一御藏前入用、上方は高百石、銀拾五匁、關東ハ永貳百五拾文ヅヽ納ム、是ハ淺草御藏諸入用ニ相成る、右三役私領渡に成る村方ニ而ハ、御傳馬宿入用六尺給米合て、高百石ニ貳斗六升ヲ夫米と名付、御藏前入用金ハ、糠藁代之名目を附、御料之節之通、高掛りニ而取去る、亦私領上知之村方、前之夫米夫金納メ來り、其儘ニ而御料ニ成たる村方ハ、六尺給御免なり、尤前之取立來りたる夫米之高、貳斗ゟ內なれば、夫米御免、御料並六尺給米掛る、貳斗ゟ餘計之夫米なれバ、私領引付之通、夫米納させ、六尺給米不懸、右三役之義、風水旱蟲等之凶作ニ而、田高五分以上之損毛ニ當れば、三役免除ニ成定法なり、又新田高入有ば、三役掛る、私領上知前々ゟ糠藁代納來る村方有て、御藏前入用ヲ名目附替たる糠藁代ニ無ければ、御料に成て、糠藁之外ニ御藏前入用も掛る事也、

り、荏は壹斗掛り高役に納候、

〔地方大概集五〕荏大豆納之事

一關東方荏大豆納ハ、高百石ニ大豆二斗荏壹斗也、尤荏大豆とも二升ニ代米壹升、代永なれバ、荏大豆五石ニ代永壹貫文ヅヽ下さるゝ事也、右納方正大豆もあり、又年々石代金納もあり、或ハ何分通りハ正大豆、何分通ハ石代金納になるもあり、いつれも前々引付通り取計事也、越後國蒲原郡にハ、取米拾石ニ大豆壹斗掛りの納物あり、納方ハ凡三分通正大豆、七分通上振大豆と唱、壹石代銀四匁五分ヅヽ、六拾目替金納なり、何故上振と唱、安石代にて納むる哉、其譯相しれず、勿論代米ハ關東荏大豆納同樣相渡る事也、

右の外私領上知などにハ、引付を以春麥胡麻筵繩等、種々の高掛り物あれども略之、

〔地方役人三〕高掛物の事〇中略

一大豆荏納關東ニ有、是ハ高役ニ取立る事なれ共、高掛物といふ儀なく、代米を渡す也、米納無之村ニ而ハ、他村之置米を以、荏大豆共ニ貳升ニ付代米壹升ヅヽ渡也、

〔憲教類典地方五之三〕貞享四丁卯年十一月

定〇中略

一關東方荏大豆納之儀、米壹升に貳升代永壹貫文、五石代之積り、高百石に大豆貳斗かゝり、荏は壹斗かゝり之積り、高役に可相納、私領之上知不同之所は可為右同前、荏大豆共に大分御入用有之年は、割增有べし、但各別之子細有之、荏大豆難納所は、前方御勘定所江可窺之、但伊豆、甲斐、陸奥、出羽、京方筋は可為有來事、

以上

貞享四卯年十一月日

一御代官所御預り所之内、夫錢、夫米、夫金銀、永小役、永米、永納候分、六尺給米相納不ㇾ申場所場所ニ寄、御藏米入用永、御傳馬宿入用米共、不ㇾ取ㇾ立場所も有ㇾ之候事、

（朱書）右之内夫米、夫錢納候村ニハ、六尺給米可ㇾ相除ㇾ旨、御定書之内ニ有ㇾ之候、然ル處村方ニ寄、六尺給米ゟ夫米夫錢之方納員數出候も有ㇾ之候間、出申候分は、右夫米夫錢差免、陸尺給米取立、其外夫金銀永役米永之類ハ、六尺給米之差繼ニハ相成間敷候間、別段ニ六尺給米取立候積り、尤御藏前入用永、御傳馬宿入用米之差繼ニ仕來り候分も、六尺給米同樣別段ニ取立可ㇾ然奉ㇾ存候、

〔地方凡例錄　三〕小役錢之事

是も高掛り物にて、美濃國郡上郡に限り有ㇾ之、餘國には不ㇾ承、及同郡先年私領之砌、小役金四十兩三分永と五十四文五分、七色役と名付納たる由、其品は木錢、夫錢、京夫、江戶夫、牢之木、猿樂、堤銀、此七色之役銀、高百石に銀百目宛取立來り、其後高增減有、高當りは違といへども、役銀辻は古來之通り高割にて取立、當時御料に成ては、右之七色役を小役銀と唱、高割にて相納む、依ㇾ之三役幷外高掛り物は免除に相成、右發端相糺候處、古來地頭京都にて御役筋被ㇾ仰付、京詰の節、知行所より薪を取寄、水夫を呼遣ふ、江戶屋敷へも水夫を呼、牢の木は牢屋修理の材木を出させ、猿樂は配當米百姓役に差出させ、堤銀ハ川除等の入用地頭へ取立、知行所堤川除之普請を致來たるを、いつの比よりか、代金積りとて、員數を極、小役銀と唱ふ、物成同樣高割にて取立來る、縱右品之不足にても、此外百姓へ不ㇾ掛、地頭入用に仕來りたる由に付、小役銀納る村々は、御料に成とも、外高掛物なし、外國々にても、是に類したる高掛り納物等可ㇾ有なれども、國々ハ廣き事にて、細には不ㇾ知、右之高掛り、先餘國に稀成納物に付記置なり、

〔地方要集錄〕一關東方在。大豆納之儀、米壹升ニ貳升代永壹貫文に五石代、高百石ニ大豆は貳斗掛

〔地方活法中五〕高掛り物の事

一村々入用錢は、村役人どもの私もなく百姓どもの疑心もなきため年中の村入用付立べき程、紙數を積り帳面を貳冊仕立、前書に連印いたし村入用の儀此帳面之外決而相用間敷、定式の入用幷聊の儀は、名主手前より差出し置此帳に記し、若臨時入用村割に可成品あらば、組頭百姓代幷重百姓の内兩三人、名主宅江呼集め、逐一相談無謂入用は勿論我意を以百姓不得心の品等決而割掛ず、少も村入用減る様に申合せ心を用ひ評議之上、據なき所は此帳面に記し盆暮兩度に割賦致すべし、然に於ては此帳面に記したる品、たとへ米金高多くとも一統評議之上、相掛る入用に付、小百姓ども一言之儀申さず、出入等に及間敷旨、堅く前書に記し、村入用帳總百姓殘らず令連印、貳冊同様に仕立年頭に支配地頭役所へ差出し押切印を取二冊とも村方江持歸り、年中の入用、其時々貳冊同様に付立る是を白紙帳と云倩盆暮前に至り村役人長百姓立會、一廉限り會議之上割賦いたし、立會之者ども奥印形にて翌年始其年の割賦濟たる入用夫錢帳貳冊とも、役所江差出し置、役所におゐて追々改之上不審の品あらば、名主呼出し相糺し、金高の所へ、貳冊とも、役所の押切印いたし、壹冊は役所江置、壹冊は村方へ返す通法なり、右小入用夫錢帳を、越後邊にて萬雜小帳と云、

〔聞傳叢書二〕高掛物取立方之儀ニ付申上候書付

定式高掛御藏、米入用、六尺給米、御傳馬宿入用取立方之儀、都而一村之總高ロ懸可取立處、一村之一中懸候高も有之、又ハ不取立高も有之候ニ付、此度相改被調候様、先達而被仰渡候ニ付、追々相調、朱書を以左ニ申上候、

一御代官所御預り所之内、郷藏敷、用水堀敷、堤敷、土手敷、道代、陣屋敷、潰地等之類、高掛物免除之場所も有之、又者取立候處も有之候事、

右之浮役、皆濟之所實正也、仍如件、

慶長十一年午五月二日　井志黒印

鄕右衛門尉殿

高掛物

〔地方凡例錄五〕高掛り物の事附米永金不盡限りの事

高掛りの義、中華にては家口と云て、家別に掛け、本朝にても、往古は人別に掛、中古は田地の反別に掛、今は村高掛る也、小物成とは別にて、百姓役故、知行渡物成詰の高に不結、御料にては三役、私領は夫米、夫金等、或は荏、大豆、其外前に引付にて高に掛納る類は、村々にては年中村方小入用米金、普請竹木人夫等、都て高に掛る、最關東筋、村高は有て民家小前には高無之、反別計りの村方は、反別或は取米高に掛るも有、亦宗門帳入用其外にも、人別不通品は顔役とて、高持水呑之無差別、人別割にて出品も有、東鑑に云、文治元年十一月廿八日、補任諸國平均守護地頭、不論權門勢家庄公、可宛課兵粮米段別五升とあれば、頼朝卿始て國に守護、庄園に地頭を置て、權門勢家の雖領地たり、反別に掛、兵粮米を出させ給ひしと見えたり、又北條時代弘長三年六月、頼朝將軍上洛の時、百姓等取役の事、段別百文、五町馬壹疋、夫二人可宛行、畠以二町可准田壹町とあり、鎌倉時代の臨時の課役とみへたり、左すれば高掛りの事、頼朝卿時代より起たるや、又其以前公家一統の代より國高に掛る課役も有たるにや、其始不詳、御當代に移りて、國役高掛り御朱印寺社領除地公家門跡の領知は、相除く御作法なりしが、いつの比よりか、右の分も國役割計は掛、今世は都て御朱印寺社領にても、國役金納る也、其外定式の高掛りは、村高の內諸役免許の御證文有之か、又前前より高役免除之分は、年貢計り納め、高掛りものは相除定法なり、

算法除乘之儀ハ、高掛り物に割出しても、掛出しても、免數により不盡出る事多し、限りなくては區々に成る故、地方にては不盡の限り四捨五入して限りを極置事なり、米之端ハ才の位迄、

無之と申儀も有れバ、足前柿木役等、羽州ニも有之哉、未糺、小物成之名目ニは、譯不知品國々ニ有事と、河內國の內抔ニも、足下ゲ前と言小物成有、村中取米掛りニ而納む、先年御代官引渡之節、先支配へ相尋候處、前々引付ニ而取立來り、何故足下ゲ米と名付取立る事にや、譯不知旨答之、村方古老の農夫に、色々雖致穿鑿、沓物ハ勿論、申傳へも如何成故か、小物成と言事知る者なし、是等も奧羽の足前抔の類ニ而、往古私領の砌、人夫之代納たる役米ニ而も可有之哉、遠國片鄙には、ケ樣成譯も無、小物成前々引付ニ而納ると見へ、百姓之難義にも成事なり、如此の類、無實の課役は、私領上知之節相除引渡か、又は請取りたる御代官吟味之上申上、免除伺有度物なり、上へ納る所は纔にして、差したる御益と申にも無之、村方ニ而ハ、永之難義になる事なり、仁政を及すの心ゟしては、時々役人可有勘辨事共なり、右後藤庄次郞等は仁心も有、宜き御役人と可申人なり、

一柿木役も、往古ゟ之小物成にて、柿木有無ニも不拘、小物成之名目と成て納む、右郡々は山中多きゆへ、古へ柿澤山ニ而、民家助成ニも成たるゆへ、始し事ニも可有哉、右品々納物之發り、右之記も後人の考察而已、先吏も種々雖被糺、其濫觴慥成說不詳、

〔由比文書〕請取申浮役之事

一貳拾五両壹分貳朱者　黑印　鹽年貢

一拾貳俵者、鹽、但七斗入也、　黑印　見取之鹽

此金貳分貳朱也

一六貫文者びた　黑印　山手

此金壹両也

已上金子貳拾七両也

一金者壹匁ニ貳石五斗にして、物成ニ入組、高江は一倍之積五石ニして入申候、

一錢者右同斷

亥七月九日

杉浦內藏允
松浦猪右衛門
德山五兵衛

寛文十一年亥年御勘定所より申來寫

〔地方凡例錄五〕夫錢足前柿木役之事○中略

一足米、柿木役も、右三郡○奧州伊達、信夫、宇田、ニ有、小物成の定納物也、何故右之名目ニ而納ると云、其濫觴、村方ニ而も不知、支配地頭ニ而も知る人なし、尤足前之儀、或說ニ、羽州大石田河岸より、同國米澤城下迄行程三日路程有所、米澤城附村々百姓役ニ、城詰之鹽を運送する人夫、牛馬之失墜夥敷掛、農業のさまたけにも成故、往古役永納に願、家一軒前一軒前といふは、四壹高六拾貳石五斗ヲ一軒といふ、一ヶ年日數三百六拾日之積りヲ以、一日永壹貫宛定納に成しと、老農申せし由記したる書物あり、足役の代りに納る役永故、足前といふにや、此說羽州に納物なれば聞へたる樣なれども、伊達、信夫、宇田三郡ゟ、米澤へ納めたる事も有よし、併古來羽州米澤領地ニ而も有しや、又足前柿木役等羽州ニも有、小物成にや、出羽國山奧の村方に洗足代といふ小物成有、往古私領之節、地頭役人村方へ參り、洗足を出せと申せし處、村中之者、洗足と申言葉を知らず、色々評議しても不相知、無據當村にハ洗足は無御座候間、代錢ニ而差出度段相願、役人へ鳥目差出したる由、其引付ニ而、今御料所ニ成而も、洗足代と言、鄕帳組之小物成有由、往古片鄙ニ而、ヶ樣之可笑敷事も有しと見得たり、大體之譯も不知、跡なき小物成之品、奧羽南國の內、其間々ニ有之ニ付、中古奧羽の御代官後藤庄次郎、下々難義を歎き、品々糺之上、御免許伺雖有之、舊年納來りたる品故、御免除

の高ニハ不ﾚ結入、尤小物成名目之內、年季もなく、何運上と記たるもあり、實は運上物にはなく、古來より小物成之名目なれバ、小物成ニ入れ、知行渡も組入る事也、都而御料所なれバ、御勘定所ニ而、夫々之掛役有、小物成ハ、浮役ニ而も、中之間伺方之掛り、運上冥加永の類ハ、運上方之掛りなり、名目計の運上ニ而も、運上冥加永之名目あれバ、運上方之掛りニ成る、右小物成ハ、國々所々ニ而其名目夥敷ありて、其品書盡しがたけれども、あらましをあげて左ニ記、

但上方關東共小物成ヲ高ニ結び、知行渡之時、永壹貫文、高五石替に直し渡し來、上方筋にハ永無ﾚ之銀錢なり、銀なれバ六十目、錢ハ四貫文を金壹兩ニ當て、五石替に致來る處、五六拾年已前、間違之事出來、壹兩ヲ高貳石五斗代にして渡たる事有、夫々後誤之儘、上方之分は貳石五斗替に成る、是は甚不穿鑿之通法なり、東海道筋ハ永高の村多し、一貫文を高に直ス時、前々五石代なれバ、御代官ハ高五万石之內ニ永高千貫文あれバ、五千石の高ニ直し、五万石の都合ニ致ス、若右代高之村ヲ知行ニ渡ス時、本途は五石代、小物成ハ二石五斗代ニ而渡し而ハ、高一事兩樣ニ成、如何成者也、然バ古法ヲ改るハ能々吟味了簡可ﾚ有儀なり、加樣之村方ハ萬一知行渡にならバ、近例ニ不ﾚ泥、其節伺ひ、取調伺之上可ﾚ取計事なり、

〔百合叢志文書四〕法度　入山家鄕○中略

一小物成公儀江相納候外、百姓に出置候間、地頭ニかまひ有間鋪候事、○中略

慶長寅○七年六月八日　秀政朱印

肝煎共
百姓共

〔京都御役所向大概覺書三〕壹万石以下之知行割小物成高ニ入樣之事

一米者一倍にして高に入、物成江者有米之儘ニ而入申候、

一銀者壹匁ニ米五升替にして、物成ニ入、高ニ者一倍にして入、

錢相場ニ而も、其相場をバ用不ㇾ申、壹匁ニ錢五十文餘ニも仕取候、其外目錢抔與申差引も仕候、依ㇾ之御家中へ求申候魚直段もおのづから高直ニ罷成候、

〔大成令六十六〕寛文十二子年三月廿三日

覺

一口錢銀之儀、唐船は每年仕來通に可ㇾ致ㇾ之、阿蘭陀之商物買取之輩も、向後は唐船之例に准じ口錢銀可ㇾ出ㇾ之事、〇中略

右之通、從ㇾ今年ㇾ於二長崎一可ㇾ申二付之一間、其趣存候樣に、京都大坂堺町中可ㇾ被二相觸一之者也、

三月廿三日

永井伊賀守殿〇以下五人名略ス

小物成浮役

〔地方凡例錄五〕小物成浮役之事

小物成、浮役は、年貢之外ニ納むる名目也、一樣ニ云へ共、小物成ハ、總名にして、浮役は其內の一つなり、年貢の事を物成といふによりて、小年貢といふ意ニ而、小物成といふ、田畑より納る年貢は、本途といひ、野錢、山錢、林永、漁獵役、池川海役、其外品々之名目有ㇾ之、古來より鄉帳に記し、定納ニ成物を都て小物成といひ、地處有ㇾ之其地より納る小物成は地主も有、其職品ありて納るも、納主あれども、往古ゟ名目は無ㇾ之、何故納るといふ事、村方ニ而も不ㇾ知、支配地頭ニ而も、不二相辨一類もあり、是等は總村中高割、又ハ本途年貢之取米高掛納にも有、一體小物成之起りは、上古、租庸調之法令ニありし時の調役の遺法と見得たり、鄉帳ニ記し、定納ニ成、小物成は、知行渡之節、物成詰とて、米なれば、壹石を高貳石、永は壹貫文を高五石替、上方筋は銀なれバ六十目、錢ハ四貫文を五石ニ當て、高ニ結ぶ定法なり、又何役、何永、何分一、何運上、冥加永などゝ言ふて、鄉帳外書に載候ても、年季を限り、或は年に寄增減有ㇾ之類、又臨時物ニ而鄉帳ニ不ㇾ載品も有、是を浮役と唱ふ、此類は知行渡

一宮腰三步半口錢取立人と申候而、肝煎之内三人極有之候、此所ニ三步半口錢と申義者、村御印ニ茂無之候事ニ候、此三人ハ高畠彥大夫奉行之時分申付候、其以前之義ハ不存由、三人共ニ申候、右三人裁許之内、諸魚鹽仕候程ニ大とれ不仕候故、終ニ口錢取立候事無之旨申候、夫故馬淵友之進勤候内、終三步半口錢取立上不申、彥大夫勤之時分、唯壹ヶ年三分半口錢取上申候、御定ニ無之口錢取立候段難心得ニ付、仲左衛門相考候へバ、總而魚口錢之事、生魚ニ而金澤問屋江著申分ハ、六錢口錢ニ而、遠所之分ハ鹽魚に他國江出候ニ付、いづれも三步半口錢之御定ニ候、三步半は他國へ商候口錢也、依之宮腰近邊浦方ニ而諸魚多ク取レ候時分、鹽を致し、他國江洩し可申旨、御爲之樣ニ申成候而相願候を、奉行も口錢上り申所江迄心付、取立候と被存候旨、仲左衛門申候事、

一同所魚口錢取立之内ニ、八步口錢と申事有之候、是又村御印にも、其外にも御定無之事ニ候、宮腰之義、諸事金澤問屋並ニ相勤候樣ニ與有之ニ付、金澤問屋方ニ六步取立候故、其通ニ仕候、金澤問屋手前ニ而ハ八步口錢之事ハ、其子細ハ問屋共も不存候へ共、先役人以來取立上來候故其通ニ仕候旨申候、八步口錢ハ、小魚の方ニ取立申旨ニ候、小魚兩樣有之候ハヽ、大魚ハ八步、小魚ハ六步ニ而可有之處、都而小魚は八步と申義ハ、先年金澤問屋、最前運上ニ而壹ヶ年何程與請合相勤候時分、數へ魚之分ハ、問屋方ニ而數取與名付、其内ニ而之宜魚を撰みて、其分を問屋取分ニ仕候故、浦方之者致迷惑候、右數江魚用意仕候者、小魚之分ハ六步之上ニ貳分を加へ、八步口錢ニ仕可差上旨相願、兩樣ニ罷成候與、浦方ニ而覺書仕置候、然者問屋手前ニ而、自分ニ相增候口錢ニ候、小松問屋ニハ、今以右數取之魚百ニ二ツ宛取申由ニ候、此趣ニ候得ば、八步口錢御印物御定にも無之口錢ニ候間被指止、勿論數取魚も取不申樣ニ可有之哉與存候、金澤問屋ニ問屋相場與申義を相極置、外ニ無之差引仕候、左候得バ銀一匁之代錢渡之剩、其時分何程之

內者を以、吟味之處、宮腰役銀小物成等、寛文十年、村御印之趣と相違、取立間敷役銀ヲ取立、指上可申役銀をも不足之體ニ候旨、依之仲左衞門御年寄衆江及相談、諸方支配所小物成取立之樣子承り候へば、委村御印之趣ニ相違仕候、是ハ時之指當り候處迄、詮義を以、前々御算用場之印之紙面[illegible]渡之衆ニ候由、如斯ニ而ハ、末々彌其本を取失ひ、御仕置之筋ニ可致相違候間、此次ニ總樣御紋可被成候哉、左候ハヽ、主付承屆候而、追而書立、上之被達御聽、被仰出次第、御紋可被成哉之旨申入候へ共、一段尤ニ候、追付可相改旨、年寄ヲ以御申渡候由、右吟味之樣子有增承り及候趣、既ニ記之、

一宮腰村御印奧書小物成之義ハ、十村見圖候上を以指引有之候ハヽ、其通可出旨之事、

此通ニ候處、取立之義、宮腰町奉行之支配ニ罷成、下役人を定、其者江見圖次第ニ而拜見人も無之、口錢取立等も不憚、勘定も此者共直ニ相遂申候、是ハ寛文二年寄衆及其節御用人之紙面致所持、其趣を以勤候旨文言如左、

覺

一於宮腰諸魚商賣仕、口錢取立候義、同町菓子屋佐左衞門ニ被仰付候間、無油斷精進候樣可被申付事、

一年中取立候口錢之內、十分一佐左衞門ニ被下事、

一口錢銀取立候刻ハ、佐左衞門書付ニ致、奧書、直ニ上させ、一ヶ年切ニ爲懸勘定可申候事、

一諸虛猥賣買之作法以下、金澤魚問屋聞合、相違無之樣可仕候、右之通無相違樣、念を入、度々改可申付事、以上、

寛文二年五月廿七日　今枝式部判〇以下人名略

寛文十年、村御印御改之時分、此紙面可相改處、此通ニ罷成候義如何、其後ニ下銀ハ拾枚ニ相極、御算用場紙面有之、今以其通ニ取申候、

目錢　口目錢　口錢

ニクルシミシ事思ヒヤルベシ、其ノ一二ヲイフニ、棟別役、點役、課役、押立人足役、陣夫、竹木見切商賣役、木綿役、連尺役、四分一人足役、普請役、魚座役、荷物役、澀柿役、綿役、舟役、酒役、傳馬役、胡麻油役、挽駒役等ノ名、其外ニモクサ〳〵見エタリ、鹽畑役、人質役、其中ニモ棟別、課役、押立人足ニハ、コトニクルシミシ事ノ多カリシ故ニヤ、此役ヲ免除スル事ヲ云ルモノ多シ、點役一ニ轉役、又天役トモ書ルモノアリ、イカナル役ヲ云ルニヤ、

〔諸州古文書〕攝津國兵庫渡邊神崎三ケ津、商船目錢事停止、諸社神人同供祭人、幷供御人等船自由對捍、爲大佛殿柿葺料足、自今年至八ケ年、致闕務、可被終修功者、天氣如此、仍執達如件、

嘉曆二年四月廿七日　左大辨花押

〔東大寺文書五〕攝津國堺浦泊船目錢、限參箇年被付東大寺八幡宮修理料足事、任御下知之旨、被沙汰、早可勘進於當浦之狀如件、

永和貳年六月十一日　沙彌宗徹花押

渡邊四郎兵衛尉殿

〔武家名目抄公事七中〕蜷川親俊記曰、酒屋方柳桶壹荷充代目錢等事、違先規候條太無謂、然者役錢減少基不可然、注文遣之、相談酒屋中、於役錢沙汰候在所者不及是非、恣令與行、不順其役在所者、堅可被停止候、此條々有違犯輩者、被注申交名候由候也、仍執達如件、永正九十十三日、玉泉房眞致、

〔榮山寺文書〕宇智郡夏季御段錢之事

反別六拾文宛、目錢口目錢、將策如前々相加、來廿日以前に可有皆濟候、無沙汰候者、御使可入候也、

明應九庚申六月十四日　花押

榮山寺

〔鳩巢手翰事〕享保三年、宮腰之者共と、大野村栗崎村之者共、爭論有之をも、算用場佐藤總左衛門内

分一

立物之事

一米ハ百文ニ一斗二升目俵別三斗六升俵

一麥ハ百文ニ三斗五升目俵別三斗五升俵

一黄金ハ一兩壹貫五百文金

以上三色、此外精錢一圓於度懸錢被停止也、

丁卯六月廿四日

中島郷小代官中
　　　百姓中

○按ズルニ、右年月日ノ上ニ、北條氏ノ虎ノ朱印アリ、

〔地方凡例録五〕一分一金銀之事

是ハ漁獵其外ニも、商賣物賣物高之分。一。金銀、爲冥加上納するを云、分一之多少ハ其所ニより色色也、

〔鴨江寺文書〕德川家康直書

遠州濱松庄鴨江寺領、同寺中門前其外山林一切爲不入、諸公事、棟別、四分一、人足等免除之事、

右綸旨幷數通之證文爲明白之間、任舊規之例領掌畢者、以此旨可被抽國家安全之懇祈者也、仍如件、

天正十四年九月七日　花押〇德川家康

鴨江寺

〔官本當代記〕自此年中〇慶長二年畿內、京、伏見、大坂、堺、諸賣物不嫌大小ヲ、五分一ノ役被召上、庶民爲之迷惑ス、

〔駿河國新風土記二政理〕今川氏武田氏ノ古文書ヲ見ルニ、百姓ノ賦役一ニアラズ、亂世ノナマ苛斂

同様之上納高ニ相成、高取付候三役銀、無謂相減、不當之筋ニ付、古ニ復シ、以來正金納に改替、米切手を以致上納候ハヽ、時々相場添銀付にて相納、別紙之通、渡金之儀も、都て正金又ハ米切手添銀付にて、渡り方可取計候、然共三役銀之儀、從來米切手納に仕來候處、添銀高料相成候、此節に至、正金に立替り候てハ、今更高懸り相增候筋に存取、中には差當り覺悟違之者可有之歟候へ共、渡り金迚も同等にて、先前之上納高に相成候儀に付、敢而難澁筋等申立品ハ有之間敷候、乍去添銀各別高料之時節、仕來を改替候儀ニ付、下々に至りてハ、指當り難澁たるべくやニ付、當年の儀ハ、添銀時相場之半數、爲御手當御用捨被下筈候間、其旨相心得承知、添以書付、早速可申達候事、

但正金にて上納之分共、添銀に當り候丈ケ之半數、御用捨相成、尤正金相場之儀ハ是迄之筈候、

一添銀相場之儀、夫銀ハ二月朔日、堤銀ハ十二月朔日、傳馬銀ハ六月十月朔日之町相場にて、上納之、

別紙之通、支配所江早速相觸候樣、兵部少輔殿被申聞候旨、御側御用人申渡候條、此段可相達旨、奉行衆被仰聞候、仍右寫三通差越し候、以上、

五月十日　　支配勘定組頭

關戸嘗太郎殿

〔相州文書〕北條氏懸錢定書

卯歳懸錢、但六月分、

右中島鄕懸錢、前之高辻百九拾四文也、來七月晦日を切而、必々可致皆濟、相定分錢候間、不及催促急度可致皆濟、此上致無沙汰付者、奉行人濟々可被指越間、自地下中くりやもたひ可致之者也、仍如件、

右市郎右衞門煩ニ付

代　庄三郎㊞

五人組　長　助㊞

慶應元丑年十二月九日

上納物

御預申金子之事

一金四千貳百九拾三兩三分者

右者今般御進發に付、上げ切上納金御藏納迄之內、書面之通奉預候、御沙汰次第早速上納仕候、爲後日依如件、

慶應元丑年七月晦日

御爲替三井組

三井元之助㊞

御番所

〔御觸帳九〕弘化四未年

是迄諸渡り金、諸上納物共、正金幷米切手添銀付、又ハ無添銀之米切手と三段に相成居候處、以來諸渡物之儀、都而正金又ハ米切手添銀附にて相渡筈候間、諸上納物之儀も同樣、正金又ハ米切手添銀付ニて可相納事、

但諸拜借幷被返下金調達等、幷相對借財之類ハ、正金米切手共取引、尤是迄之通之筈候事、

五月

諸渡金諸上納物共、以來正金又ハ米切手添銀付候筈、別紙之通相觸候付てハ、三役銀を初、諸上納物之儀、正金場村々之外ハ、是迄米切手ニて上納、幷渡金之儀も同樣に候處、右ハ寛政年、米切手出來之砌ハ、添銀之差別も無之候へ共、追々添銀付候樣相成、當時にてハ、前ニ相定居候役銀高、半減

〔冥加上納金書上〕〆金百兩

内

金拾兩　淺草駒形町家持　惣兵衛

金拾兩　同町同　源助

金拾兩　同町同　佐七

金拾兩　同町文太郎地借　半兵衛

金七兩　同町彌兵衛地借　彦右衛門

金七兩　同町伊之助借地　林五郎

金五兩　同町政齋地借　助七

同町幸左衛門地借　忠次郎○中略

此もの共儀、今般御進發に付、年來御當地に安住家業相續いたし候御國恩冥加として、御進發御用途之内へ上げ切上納金いたし度旨願出候段、奇特之儀ニ付、右之趣申上、願之通上納申付、奇特之儀に付書置、

右之通被仰渡、難有奉畏候、爲後日仍如件、

右惣兵衛○以下人名略

印一貳百兩　深川佐賀町家持　市郎右衛門　煩ニ付代　庄三郎

此もの儀、今般御進發に付、金貳百兩御用金申付、來寅年より五ヶ年に割合、御下戻之積申渡置候處、去月廿一日迄に皆納致し、右金子之儀者、御國恩冥加之爲め、上げ切に致し度旨相願候段、奇特之儀ニ付、右之趣申上、願之通申付、御褒美として銀五枚とらせ遣す、

右之通被仰渡、難有奉頂戴候、爲後日仍如件、

江可申聞旨被仰渡、承知奉畏候、依之御請申上候、以上、

寅十三年（〇天保）七月八日

寺西直次郎手附　飯田彌太郎印

外出役一同連印

〔代官觸留 四〕御請

此度諸國石灰稼冥加不殘免除被仰付、右稼方、以來勝手次第に候得共、去寅九月中、百姓共心得方之儀に付、御觸有之候ヶ條之內、百姓共耕作に力を用べき身分に而、餘業に移り、町人之商賣を始候儀、決而不相成と之趣も有之候間、以後新規石灰燒稼相始候もの有之候ハヾ猥に不相成樣得與相糺、前條御觸に相振候儀無之樣可申付旨被仰渡、承知奉畏候、右爲御請申上候、以上、

卯十四年（〇天保）二月十五日

藤方彥市郎手代　野中修平印

外出役連印

〔冥加上納金手形 一〕箔屋町忠七地借

九番組人宿　政次郎（〇中略）

此者共儀、今般御進發ニ付、年來御當地ニ安住、家業相續致し候御國恩冥加として、御進發御用途之內江上ゲ切上納金致し度旨願出候段、奇特之儀ニ付、右之趣申上、願之通上納申付、褒美として政次郎善兵衛、佐兵衛、坂本町久三郎、鐵五郎、吉兵衛江銀三枚被下、兵衛、清左衛門、幸太郎、彌右衛門、通四丁目長右衛門、半次郎、儀兵衛江同貳枚宛、八五郎、甚五郎、吉右衛門、七三郎、圓藏、幾五郎、十兵衛、七郎平、總兵衛、清兵衛、長右衛門、善助、金藏、兵五郎、五兵衛、長八、小七、源八、新兵衛、又三郎、新助、新右衛門、嘉兵衛、太郎兵衛、久三郎、傳藏、安左衛門、八右衛門江同壹枚宛とらせ遣候、

右之通被仰渡難有奉頂戴候、爲後日仍如件、

丑元年（〇慶應）二月十八日

冥加金

〔經濟問答秘錄二十三征榷考〕或領分ニ枡札ト云テ、物ヲ擔フ者皆運上アリ、貧者ノ日傭ニテ、肩ニ二分ケテ擔グ身ニ運上スルハ無理ト云ベシ、

或邦ニ油絞ノ運上ハ、太宰府座主ヨリ一戶ニ油一升ヅヽ納ム、是モ往古國主ヨリ故有テ免許トミユ、諸藩是運上大抵一戶銀廿匁以上ナリ、其總計ヲ量リテ官ヨリ座主ニ納メ、領中ノ運上ハ官ニ輸ル事正キ法ナリ、古ヨリ租調庸ハ其君ニ勤ルハ天下ノ常道ナリ、斯ル不正ノ事、戰國ノ宿習ニテ、往々ハ諸國ニ有リ、改革スル事ヨロシ、

〔經濟問答秘錄二十三征榷考〕髮結床鄕宿ハ、百戶ノ町トイヘドモ免スベカラズ、黃櫨運上諸國各異ナリ、或邦ニ畠ハ無稅ニシテ、一本ニ銀何分ト懸ル處アリ、若シ枯レバ除稅ヲ乞ヘドモ有司聽サズ、再植セヨト命ズ、

〔俚言集覽美〕冥加錢

〔大藏法數三〕二加出華嚴疏一卷用字函〇第一顯加、二冥加、加卽加被、佛於華嚴會上、以三業神力、或冥、或顯、加被法慧等諸菩薩、各各說法、故有此二加也、〇中略冥加者、謂佛以意業神力、加被菩薩、增其智慧、於大衆中、爲人演說、令無所畏、隱密難見、故曰冥加、

〔淺草米廩舊例〕納宿より出ス冥加金

一金百六拾兩

但每年二月八月金八拾兩宛上納

〔代官觸留三〕御請

此度諸色直段之儀ニ付、被仰渡候趣を以、諸運上諸冥加之類、文政元寅年已前之方も、諸色直段に差響候分ハ、取調可申立所、此節場所替最寄替ニ而、鄕村引渡に差懸り候分者勿論、追々可指出諸運上諸冥加總添證文者、右取調不及、其儘早々指出候樣、尤糺方之儀ハ、跡支配江申送候樣、御代官

御代官所幷御領所ニ而取立候諸運上冥加、分一等之儀、兼々被仰渡候趣も有之候得共、一般ニ差免候而者、農業之本意を失ひ、取締にも相拘、其外差支も有之候趣ニ付、土地と人力より出候分、幷諸荷物改所、又は取捌場所等ニ而、取締相ニも相成候分一、運上之類は、是迄之通居置、全商賣之利潤を以相納、物價ニ拘り候類は差免、尤問屋幷仲間立候名目にても、稼方之事實前同様商賣之利潤に拘候譯ニ無之分は、猶取調候筈ニ付、先達而被相伺及下知候廉々之内、齟齬いたし候分も可有之候間、猶早々取調可被相伺候、

右者大和守殿江伺之上申渡

辰十二月

〔甲斐國志二國法〕商賈ノ役、工職ノ役ハ諸商ヒ一月馬何疋口或市川ノ郷かうじ一人賣ナドト古文書ニアリ、塗物役、紺屋役等、皆運上金ナリ、布役、鍵役、竈役、樹木役、竹ノ年貢、鹽役ト軍鑑ニ見タリ、隨落僧ノ妻帶役事、（淨土眞宗萬福寺長延寺家舍僧妻帶役免許文書ニ彼條アリ、）浮所務ト云ハ、今都留郡ニ有リ、浮役トテ、四十八品ノ輕役ヲ配當スル類ナルベシ、御印判衆ト云ハ、武田文書ニ間々見タリ、朱印押ス事ヲ司ル役人ナルベシ、天正壬午時、織田家ヨリ出セル禁制書ニ、御判錢、取次錢、筆耕料不及出之ト銘々書添アリ、諸家共ニ時ノ風ニテ、毎事ニ役錢ヲ采ルト見ユ、御印判衆モ其類ナルヤラン、三郡ノ諸役ハ、追年御改正ナリ、草里畑、桐畑、漆畑、楮畠ノ類ハ、本高ニ入ル、所餘者ハ葡萄、梨子、柿木、草永等之運上ナリ、凡テ高係リニ被仰付、郡中㓹金並三役トテ、取米外ニ貢納スル事ニナレリ、

〔經濟問答秘錄二十三征権考〕諸藩運上各異ニシテ高低有テ、人情ニ齟齬スル事アリ、其品物ニ由テ高カルベキニ低クシ、低カルベキニ高キ事モアリ漁獵ハ最上トスレドモ、不獲ノ時ハ不権ニ致スハ當然ナリ、其次ハ酒屋、其次ハ麴肆、其次ハ吳服等ナリ、小間物店ハ種々ノ免札ヲ受ルコト、下低ニ致シ置ベシ、

右之通被仰渡承知奉畏候、以上、

六月廿三日

吉岡次郎右衛門手代
黑澤順一郎印

運上方今井直右衛門殿達

天保三辰年十月

諸運上諸冥加之儀、前々より稼方甲乙盛衰ニ寄、增減致シ候趣意を以、五ヶ年七ヶ年、亦者壹ヶ年貳ヶ年ニも被仰付來候處、右年季切替之節も、稼人共支配役所江願出、亦は呼出吟味いたし候儀ニ付、數日相掛り候儀も有之、運上冥加者聊之儀ニ候得共、稼人共內實諸雜費も相掛、迷惑いたし候儀も有之趣、粗風聞候間、以來年季切替之節、是迄相納候運上冥加より格別踏込增方いたし相願候ハヽ、申立方之次第を以、拾ヶ年拾五ヶ年二拾ヶ年季、亦者品柄ニより、たとへ新規たりとも定納ニも可被仰付候間、新規相願候分共、右之心得を以、稼人共江得と利害爲申聞、取調伺可被差出候、尤同銘之品ニ而も、村柄ニも寄候儀ニ付、同郡之內たりとも、外々見合ニ不拘、一己限增方吟味いたし可被相伺候、勿論銘々稼方ニ寄、試稼等者矢張年季短ニ相願候も有之候ハヽ、右之分者是迄之姿ニ取調可被申候、

右之趣、此度御評儀濟ニ候間、篤と相心得、取調可被相伺候、此段申達候、以上、

辰十月

吉見儀助
杉江彌太郎
五島三六郎
渡邊三郎助

弘化元辰年十二月

申送

上と云も、冥加永と申も同樣なりといへども、急度締りたるものハ運上金と唱、又上へ願候故冥加之爲米金何程上納可仕抔申類ハ、冥加米永と唱へ、少々意味違ふといへども、一體は同樣にて、何れに唱ても不苦事なり、併其內に運上と難唱品も有、其譯ケ、何ぞ所得ニもなる品抔、新規ニ願ふ時、冥加金何程可相納といふ樣成儀ハ運上とハ難申、運上冥加米永役金等之類、年季物たり共、鄕帳外書に記ス分一金者、漁獵抔取上ゲ、賣高貳拾分一、又者十分一、其外市場諸色賣高貳拾分一、三十分一抔、商賣之品ニより分一之分り有之、或ハ請山材木伐出之分一も有之、何れも分一金者鄕帳ニは不載、左かしそれも分一之品ニ寄、前々より小物成之名目ニなり、定納ニなりたるも有、ケ樣之類ひは分一之名目是有とも、鄕帳に記す、臨時物といふは、たとへバ新田新發地代金、又ハ御林木往還並木立枯拂代金、關所物抔、何品ニ不限、御拂物等之類、入札相觸、引請納るも有、又村請ニ而納るも有、何れ何品ニ而も、其年の臨時ニ納る類ハ、年限り之儀ニ付、鄕帳ニハ不載取立るヲ臨時物と唱る、右運上等之類も、一統ニ唱るハ、都而小物成なれ共、右ニも申如く、定納と浮役との違有て、縱鄕帳外書ニ載たる品ニ而も、物成諸之節、高ニ結ぶと不結之違有、運上冥加永浮役之類、是又種々品數多、畢てかぞへがたし、

〔例書三〕一總而運上物之類、吟味致候節は、御軍用物は捌方賣買之先迄可及吟味事、

〔牧民金鑑六〕文化十三子六月廿三日

一諸運上冥加年季切替以前、遂吟味可被相伺旨、每々御下知相達候處、年季明候春又者夏之頃ニ至り、伺書被差出候も間々有之、取調之品ニ寄手後ニ相成、稼人共及難儀候儀も可有之、右體之手續通例之樣ニ成由ニ候得共、自然與御益筋江も關候道理ニ付、當子年季明ニ而、若伺書未被差出分も有之候ハヾ勿論早く遂吟味被差出、向後とも無弛、年季明前年不殘遂吟味、伺書可被差出候、

見おほかれど、いづれも同意なれば引出す、

〔吉田社文書 上〕仰下二箇條

可鄕々御年貢絹憶加精好差印文事

右神領田所當代絹等者、國中第一之絹云々、近年運上之絹、云上品云准絹、麁惡無極、使等不致精好之故歟、憶撰納舊例四十匹絹可差印文也、若令運上不法絹者、其闕分被責貞恒歟、兼又稱別納不差印文令運上、早可被追下也、各以此趣下知鄕々可致沙汰、〇中略

正治三年正月廿二日　　造東大寺次官三善花押

〔官地論〕加州之土民等、建立專修念佛之一法、依勵勤修、土貢地利一塵不運上、

〔鳩巢手翰 知〕一諸物之運上を被召上候事附長崎表商賣之法を取改候事

諸物之運上を差上候ニ付而者、各其買出し候物の價の中より、差上候程の金銀取出し候ハ而者不叶候𪜈、其價の增加るべきハ勿論ニ而候、一物の價の高く成候へ者、夫に連而萬物の價の高く成候謂は、奉行中出府の如くに候ニ付、運上之事出來候以後者、諸物之價高くならざる樣に認成候、然に文昭院樣〇德川家宣御代始、運上之事共、御停止ニ候得共、諸物之價既に高く成來候上之事ニ候得ば、さして其價の減じ候程の物も無之候、凡諸物之價一度高く成候後に、元の如くに賤くなり難く候事、皆々此例候歟、大地震大火事の度々に少高く成候もの、初の價に減じ罷り候事なりがたき如くに候、長崎表商賣の法改り候て、百藥之類をはじめ藥種等ニ至ルまで、唐物之價高く成來候事、其大本は御運上之事ニ起り申候、此表之事之子細は、其事多く候而詳にしるし盡し難く候故に、大略をしるし候迄ニ御座候、

〔地方凡例錄 五〕一諸運上冥加金銀臨時納物之事附り水車濫觴之事

諸運上冥加金銀者、村方筋成人之以渡世相稼、諸商賣漁獵、或者水車等之類、其外何物ニ而も請負人等有之、年季ヲ限り、其品ニ應じ、運上又者冥加永相納メ、又諸職人其職相勤內、役金ヲ以出也、運

公方役

一關東關外之無差別、公事合ニ無之諸運上、河岸場附替通船、亦者御益筋、都而御入用にも拘り候願事ハ、御勝手方御勘定奉行月番江添簡を以、願人召連罷出可差出、

但國役普請相願度旨申出候ハヾ、國役金相掛候川筋村々ニ候ハヾ、可相濟儀ニ候得共、百姓之願添簡可致筋ニ者無之、糺之上自力ニ不及普請者、其領主地頭より御老中方若年寄衆亦其支配頭へ願之上可被仰付事也、

〔室町殿物語〕秀吉公京都の開基御たづねの事

其後禁裏をみがき立、王法の政すたれたるを起し、もゝ〇中略とより洛中の地子米、公方役など、悉御赦免あり、御身は、伏見大坂にかんこくわんよりも堅く城郭を拵へ給ふ、

〔小田原衆所領役帳〕本光院殿衆知行所方、山中彥十郞百貫文、三浦三崎之內百拾八貫文、中郡〇中略御公方役前々より有之、

〔江北記〕一當方御家かはりの事、六角殿、大原殿、其外一色殿、道譽御兄弟也、有子細、御家子に被成候也、然れども公方役には、當方御名代めされ候由、御家子にて候間、御屋形樣御をくりには、御出なきなり、

運上

〔伊呂波字類抄〕宇疊字運上

〔吾妻鏡〕六文治二年二月廿八日丙子、被申京都條々、有其沙汰、治定云云、

一仰五畿七道諸國庄園、免除兵粮米進、可令安堵土民事、

依此米催事、民戶殊費、於今者殆無乃貢運上計之由、頻有領家訴之間、及此儀、然者賦遣使者可觸廻之由、可被仰北條殿者、

〔松屋筆記〕百四運上〇中略

按、右に運上といへるは、公物を運送し上する事にて、今世の運上とは殊也、此外吾妻鏡中に所

州、政義自最初、依令候御前、以當國南郡、宛賜政義之處、此一兩年國役連續之間、於事不諧之由、屬筑後權守俊兼愁申之、仍可隨芳志之由、被遣懇勤御書於常陸目代、

〔吾妻鏡六〕文治二年八月二十日甲午、小御所東、此程被加修理、今日有御移徙之儀、藤九郎盛長爲上野國役沙汰此事云云、

〔吉田社文書下〕一准絹參疋貳丈內

上品二丈絹一切准絹一疋四丈　社役　准絹一疋二丈　國役　上品絹二丈　同國役

一准布拾陸段內

八段　社役　八段　國役

右結解注進如件

建保二年二月日

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年〇安貞元年五月二日戊辰、造伊勢太神宮役夫工米事、諸國飢饉、疲民難致合期辨之趣、奏聞既畢、被待勅答之處、御杣用途、及闕如之由、使等愁訴之間、武州分駿河伊豆兩國役等者、召出畢、御沙汰訖、

〔蔭涼軒日錄〕寬正五年八月四日、普廣院殿〇足利義教一周忌幔、渡于飯尾左衛門大夫、蓋來八日御點心料、諸大名國役可被出此半分也、

長享三年四月十日、伊勢云、京兆江可被遣御使、尤可然御使事者、我等同名者一人被遣可然、又戒師施物員數事、所憑白可然御要脚事、自何方可出哉如何、愚云、以國役之內被遣可然乎、

〔親俊日記〕天文八年二月廿八日丁卯、御車寄雜色、〇中略給物二十貫文事、爲伊勢國役任例致其沙汰可被執進、請取之由、所被仰下也、仍執達如件、

〔政昔集〕諸運上河岸場附替幷通船願添簡之事

右件寺加納勅院事並國役、可令免除状、所宜如件、留守所宜承知依件行之、以宜、

建久三年八月廿七日

守源朝臣判

〔壬生家文書 一〕左辨官下 播磨國

應且任舊跡糺定四至堺且免除雜徭穀倉院領當國小犬丸保事略○中

右得彼院去年十二月廿四日解状偁、彼保解云、略○中 望請天裁、任舊跡且被裁定四至境、□□□符地永被停止勅事院事、造內裏□御願寺□□勅使、驛家雜事、乳牛役、總大小國役者、彌知道理之不空、全有限之公用者、中納言藤原朝臣泰通宣、奉勅依請者、國宜承知依宜行之、

建久八年四月卅日　　右大史三善朝臣

右少辨平朝臣

〔集古文書 三十七〕河內國錦部郡觀心寺藏

廳宣　留守所

可令早任度々宣旨、幷後白河院廳御下文、免除觀心寺東坂等國役雜事、及踐祚大嘗會、初齋宮、初齋院事等事、

右件寺領勅院事略○中 國役等、可免除之由、度々被成下宣旨廳御下文畢、早任彼状、可停止國役万雜事、勅院事等、略○中

建仁三年六月廿八日

右兵衞權佐兼守藤原朝臣判

〔吾妻鏡 三〕壽永三年○元暦元年四月廿三日辛卯、下河邊四郎政義者、臨戰場、竭軍忠、於殿中積勞効、仍御氣色殊快然、就中三郎先生義廣謀叛之時、常陸國住人等、小栗十郎重成之外、或與彼逆心、或逐電奥

國役

延德四年五月二日　遠江守前司 判 正任
木工助 判 弘依
三河守前司 判 重行

杉信濃守殿

〔蠹簡集〕五 土佐國高岡郡吾井鄕岡崎孫六藏

坪付　五ヶ所　合五段拾五代四歩〇中略

右之田地、此中別而奉公心懸候間云付候、自今猶以公役以下、無緩可仕者也、

天正貳十年三月吉日　親忠

市川一衞門

〔長曾我部元親百箇條〕一給役過上者、奉公中へ相理、以其上有様可引、御急用之時者、本軍役之外にも、人數相かさみ可勤、奉行へ重而遂理、公役可引、如何様之事候共、一人を二人引事、停止之事、〇中略

慶長二年三月廿四日　盛親 在判
元親 在判

〔吾妻鏡〕八 文治四年七月十一日乙巳、六條殿御作事、二品〇源賴朝御知行國役者、爲親能奉行、以大工國時、欲被造進、遠江國所役事、被下御教書、今日到來、則被付被國司義定云云、

六條殿御作事之間、六條面築垣一町門等、可被造進者、依院御氣色、執達如件、

六月廿七日　權右中辨

遠江守殿

〔集古文書〕十四 國宣 河內國錦部郡觀心寺藏

國宣　留守所　可免除觀心寺加納東坂勅院事並國役事

關下　交名注文一通

右任官之習、或以上日之勞、賜御給、或以私物、償朝家之御大事、各浴朝恩事也、而東國輩、徒抑留庄園年貢、掠取國衙進官、不募成功、自由拜任、官途之陵遲、已在斯、偏令停止任官者、無成功之便者歟、不云先官當職、於任官輩者、永停城外之思、在京可令勤仕陣役、已厠朝列、何令籠居哉、若違令下向墨俣以東者、且各改召本領、且又可令申行斬罪之狀如件、

元暦二年四月十五日

〔吾妻鏡三十三〕延應二年（○仁治元年）九月卅日庚寅、御家人等中、任官之輩、不勤行役事、依有其恐、召進用途之由、今日有評定、所謂左右衞門尉分（人別百匹）左右兵衞尉分（人別七十匹）左右近將監分（人別三十匹）內舍人分（人別廿匹）等也、不供奉行幸等者、爲每年役、可進濟云云、且加催促、令致沙汰、可注進交名之旨、所被仰諸國護人也、

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々、貞和二十二十三沙汰、同守護人非法條々

一大犯三ヶ條（付刈田狼藉使節遵行）外、相綺所務以下、成地頭御家人煩事、

號公役對捍、稱凶徒與同、無左右令管領同所領、與耻辱、及牢籠事、（○下略）

〔大內家壁書〕諸人之被官公役被定御法事

就御動座、依去年御上洛、任先例、於赤間關、御座船之事、被仰付之處、以浦役錢、可致進關之由、地下仁申請之間、被任懇望畢、然間彼等以相談、令支配當關地下中之處、或號寺僕、或號武家被官、令難澀出錢候事、地下愁訴、一同云々、所詮如此之族、於令違背公役者、可被相支當關住居之由被仰出、若及違亂者、云在所、云交名、隨注進之左右、可有殊御成敗之、總別於所々、先御代以來、此御定法歷然之處、動假其主之號、令輕御下知、爲通公役、申亂子細之輩、自今以後、可令追放其所也、右御定法事、不可限當關一所、可爲御分國中此準據之由、堅固所被仰下也、仍執達如件、

又每々かやうの儀につゐて直納と申事不可然候、如此申出候上は、前々旨役人より外にとかくの儀曲事たるべく候、

世帶不辨之儀如何令申談候哉、はや二ヶ月及び飢にのぞみ候事、前代未聞不及申候、これは我々が耻辱と可申候哉、各いるがせと申べく候哉、先面目たる子細候、さ候間、諸鄕庄點役事、國中平均にやふによし及度々雖申候、于今無其實候、曲事候、一向年寄中いるがせに候間、世帶以下の事、このまゝ捨置き候はんずるも、なに／＼と令申合候はんずるも、爲父子兎角申がたく候、われ／＼にかぎり候はず、田のせんたうを持候ものは、前代より准田段錢にてこそ國の補ひをも仕げに候へ、近年は諸役人けつ氣かんぢやうなどゝ申事も候はず候へば、役人のふとくしんをも諸給人のあうりやうをも不及分別候、たま／＼いま程志賀內者在封のよし申候へば、かたく令申聞候て、直入鄕諸給人點役免許のよし申候はんずる仁の交名をしるし候て、注進候者、そのうへにてしか／＼と申付べく候間、一たび分別をもて申さだめて以後は、たれ／＼とかくわび事候とも、取上候て、承まじく候、老中の事は不及申候、きんじゆさい／＼の者として、とかくわれ／＼が耳に入候は丶、所せん取上候はんずる其身にまづ／＼ふちんをさせ候べく候、直入にかぎらず、諸鄕庄此むね同前たるべく候、雖然万壽寺領勝光寺領事は、免許たるべく候、此外よろづ給とやらんを立候仁などは分別入べく候哉、可被得其心候、恐々謹言、

三月十五日〇年號不詳　　親治花押

老衆々中

〔吾妻鏡四〕元曆二年〇文治元年四月十五日戊辰

下　東國侍內任官輩中

可令停止下向本國、各在京勤仕陣直公役事

點役

太良庄建武元年天役用途事

合

參貫百四十壹文　先度納分

貳貫九十五文　當年納分

未進壹貫四百貳十七文

右注進如件、

建武貳年七月廿二日　　國友　花押

〔武州文書〕北條氏諸鄉公事赦免狀

國中諸郡就退轉、庚戌四月諸鄉公事赦免之樣體之事

下百貫文　　武州久良岐郡本牧鄉

右爲諸點役之替、百貫文之地より六貫文懸ニ可出趣相定候、然者本牧五百貫文依不入、此役錢貳拾貫文、六月十日兩度ニ御藏へ可納、此以後ハ昔より定候諸公事一も不殘令赦免候、細事之儀も不可申付候、郡代觸口不可有漏候、若背此旨申懸者有之者、百姓御庭へ參可致直奏、但陣夫廻陣夫幷大普請玉繩城米錢をバ可致之、廻陣夫をバ年中八貫文ニ以夫錢可出事、

一地頭代官ニ候者、百姓及迷惑候公事以下申懸ニ付てハ、御庭へ參可申上之事、

一退轉之百姓還住候者ニ者、借錢借米可令赦免候、但今日より以前之儀也、今日より以後闕落之者ニハ不可此赦免事、

一無御印判、郡代夫、自今以後不可立者也、仍如件、

天文十九年庚戌四月朔日

〔志賀文書〕老衆々中　　親治

友○七

天役

從四位上行右中辨藤原朝臣判　　正六位上行左少史惟宗朝臣判

建久六年十二月四日（○中略）

將軍家政所下　若狹國國富庄（○中略）

一臨時重役、無其隙事

右如同狀□□者、閑院造營、關東御堂釘、正地頭宿所燒失之訪、叡山講堂材木引、八條御所用途、其外當國造八幡宮杣入之煩等、公文百姓等之勤、已巨多也云々者、爲地頭職、何不下知雜事哉、但於過分不堪之課役者、早可令優土民矣、

建保四年八月十七日　　案主菅野（○以下人名略）

〔建武以來追加〕一臨時課役事

先例有限公事之外、一向可停止之、次月充以下所役々、宜使補年貢也、縱殊公役之時、雖被充課役、役之不可懸土民、宜爲地頭之沙汰也、

〔鹿王院文書三〕寶鏡寺鹿王院領諸國所々（目錄在別紙）役夫工米以下諸公事臨時課役等事、任官符宣并御判之旨所免除也、早爲守護使不入之地、可全領知之狀如件、

應永十九年五月九日

內大臣源朝臣花押

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附靑砥左衞門事

又（○平氏）佛神領ニ天役ヲ懸テ、神慮冥慮ニ背カン事ヲ不痛、又寺道場ニ懸要脚、僧物施料ヲ貪事ヲ業トス、是併上方御存知ナシトイヘトモ、セメ一人ニ歸スル謂モアルカ、角テハ抑世ノ治ルト云事ノ候ベキカ、セメテハ宮方ニコソ、君モ久艱苦ヲ嘗天民ノ愁ヲ知食シ候、

〔東寺百合文書は自一至廿四〕注進

可早任先例令勤仕國衙課役事
右件所之地頭宮内大輔重頼、寄事於所職、押妨國、由事、依國解、自院所被仰下也、早付地頭事之外、於國衙之課役者、停止非法之妨、任先例可致其勤之状如件、以下、

文治四年九月三日

〔吾妻鏡十二〕建久三年二月五日戊申、故左典厩〇源義朝御乳母、字摩摩局自相模國早河庄参上、相具醇酒、献御前、年齒巳九十二、雖期旦暮之間、拜謁之由申之、幕下〇源頼朝故以憐愍給、是有功之故也、有所望者、雖何事可令達之旨、被仰下之間、早河内知行地、可免除課役之由、可被仰總領之旨望申之、仍被相加三町新給之上、任申請之旨、召盛時、可下知土肥彌太郎之趣被仰云云、

〔壬生家文書一〕太政官符若狹國司
應任官使右史生安倍定宗立券状、令辨濟公家長日御修法供米造八省院料米圓宗寺法花會用途太政官廚家納物等、永停止國郡使入勤并甲乙濫妨、又課役令吉原安富子孫相傳領掌國富保同領犬熊野荒浦壹處事、
右得彼定宗等去二月十三日立券文偁、廚家去年十月十四日解状偁、謹撿案内、得彼保〇國富保解云、當保者、吉原安富相傳之私領也、〇中略早給官使、糺定四至、勘注田畠、且斷向後牢籠、且欲令宛濟旁納物、抑如此之所被停止課役者、承前之例也、近則越前國池上庄、讃岐國作原庄是也、可被免課役之由、申請之心者、關鹿雜徭、并國中大小雜事、皆被免之儀也、所謂伊勢大神宮遷宮役夫工、造内裏、造御願、乳牛役、大嘗會、凡勤事院事巳下等也、望乞任壽永二年宣旨、并國司廳宣状、賜官使、撿注田畠、糺定四至、辨濟長日御修法供米等、永令停止課役及國郡使入勤等、安富子孫相傳、可領掌之状、欲被申下宣旨者、今加覆審、所申有謂、望請天裁、任申訴被裁下者、將知道理之不空、彌欲全公用之勤者、〇中略從二位行權中納言源朝臣通資宣、奉勅、宜賜官符者、國宜承知依宜行之、符到奉行、

雜役

課役

覺可仕者也、

卯〇慶長八年　三月五日　安西源兵衞印判

中根長兵衞印判

新町中

〔吉田社文書上〕一鹿島祭雜役間事

右去年、以社司訴狀被申上關東之處、可尋沙汰之由、被仰下守護所之旨、所被載御敎書也、件御敎書定右到來歟、可被存此旨矣、

以前三ヶ條、依仰執達如件、

四月七日　右衞門尉三善花押

左近將監田所等御中

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年四月廿三日辛卯、常陸國務之間事、三郎先生謀叛之時、當國住人除小栗十郎重成之外、併被勸誘彼反逆、奉射御方、或逃入奧州、如此之間、以當國南郡宛給下河邊四郎政義畢、此一兩年上洛、度々合戰竭忠節畢、而南郡國役責勘之間、云地頭得分、云代官經廻、於事不合期之由、所歎申也、彼政義者、殊糸惜思食者也、有限所當官物、恒例課役之外、可令施芳意給候、於當官物無懈怠可令勤仕之旨、被仰含候畢、〇中略仍執達如件、

四月廿二日　俊兼奉

常陸御目代殿

〔吾妻鏡八〕文治四年九月三日丙申、宮内大輔重頼不法事、就被下院宣、早可被停止之由、被仰遣重頼、

〇中略

下　若狹國松永并宮川保住人

伊豐後印
石主馬印
芳賀平兵衞殿
小原有右衞門殿

別役

〔大館常興日記〕天文九年七月廿二日、一攝州日行事より各へ折紙在レ之、伏見殿雜掌以ニ諏方信濃守一申諸口役所御停廢に付て、伏見殿御領地別役事、不レ混ニ自餘一御當知行也、仍以ニ其旨一無ニ相違一被ニ仰付一者可レ爲ニ御祝著一云々、異ニ于他一御儀をもつて可レ爲ニ其御分別一之由申レ之也、奏者長谷川也、

諸役

〔官地論〕去程國中之一揆、付ニ山河參河守一歎申子細、先年屋形樣○足利義高、長享元年六角高頼征伐、從ニ山内一御出頭之後、亂劇打連、民間無レ安、或被レ放ニ火住宅一有レ伏ニ山野一時、或被レ追ニ出在所一有レ構ニ城郭一時、然間不レ事ニ東作之業一西收之利乏、依レ之忽稱ニ稀土貢一不レ務ニ公方之諸役一事、是非ニ私之如在一併依ニ公道之紛一也、

〔諸州古文書〕武田信玄分國諸役免許狀

一於ニ甲信兩國一彼荷物一月ニ拾駄分諸役所渡、巳下無ニ相違一可ニ勘過一富士參詣之時節モ可レ爲ニ同前一者也、

逐而、三郎事者、令レ在レ國者、審明已後モ可レ爲ニ同意一、

拾月○天文四年十日　　奏者　宗春○中略

一其方父子參府之砌、一月之内荷物三駄之分諸役令ニ免許一者也、

二月○永祿二年八日　　奏者　跡部伊賀守

大日市入道殿

巳上

〔攝津藍本村文書〕藍本莊村之内新町往還ニ付、諸役御赦免ニ被ニ仰付一候間、彌町中致ニ繁昌一候樣ニ才

堵由遍有其聞、然則於大番役者、自今以後、段別錢參百文、此上五町別、官駄一匹人夫二人、可充催之、於此外者、一向可令停止也、令定下員數以後、於日來沙汰所之者、就此員數、不可加增也、

(吾妻鏡五十一)弘長三年八月廿五日壬申、御上洛事、依大風諸國稼穀損亡之間、爲休撫民煩、所被延引也、○中略

來十月御上洛、所有御延引也、且於御京上役辨濟所々者、可令糺返于百姓也、早以此趣可被下知攝津若狹國中之狀、依仰執達如件、

弘長三年八月廿五日　武藏守

相模守

陸奧左近大夫將監殿

定役

(新編追加雜務)一農時不可使百姓事 文永元

夏三箇月間、私不可仕之、但領主等作田畠蠶養事、爲先例之定。役。者、今更不可有相違、

(庭訓往來)定役。。公事。。臨時課役、月迫上分、節季年預、更不可遁避歟、

勤役

(天龍寺文書一)臨川寺領等勤。役。寺社國衙臨役等御免事

任貞和五年四月廿八日卞府、不可有相違之狀如件、

延文元年十月十二日　左中將花押

當寺長老

役義

(諏訪古文書)松賤新田、酉ノ年ゟ撿地次第御年貢者半分宛納所可被仰付候、但三年之內家を爲御作可有候、役義者粟佐起高ほど新田ゟ御申付可被成候、草かり場之事ハ、入込と申付候間、荒不申樣ニ可被成候、爲其以上、

午九月九日　高數馬印

來候はん癸卯年之作毛まで、十ケ年廿作が間、萬雜公事を停止候て、本錢四貫文に賣渡申處實正也、此内に地頭方へ所務之分、料足百文宛、毎年沙汰あるべく候、縱天下之御德政成下、又者職に付て合力など、申事、一言も申まじく候、年記過候者、本錢四貫文にてうけ返可申、仍爲後日、證文之狀如件、

文明五年癸巳九月晦日

賣主　香取又八宗吉花押

〔香取神宮古文書纂十三〕奉寄進所務代田壹段

右件之田坪者、多田村之内、かうりき津原崎廣町壹段を、毎年正月一日御神事料として、所務五連づゝ、進候、然者彼所務代に件之田を社家へ進置所也、當年より始而、永代御知行可有也、若彼田地相違致候者、如前々所務を五連づゝ、沙汰可申候、仍身上堅固、武運長久、御精誠可爲肝要候、仍爲後日一筆如件、

永正十一年甲戌九月廿七日

多田掃部助
平胤家花押

〔吾妻鏡八〕文治四年十二月三十日辛卯、親能申送云、六條殿造營之間、所役屋々事、致丁寧勤之由、殊所蒙御感之仰也、爲公私眉目歟之旨、二品〇源頼朝太令喜悅給云云、

〔吾妻鏡十四〕建久五年五月五日乙丑、御所中屋舍、葺菖蒲事、可爲檜皮葺所役之由被仰、分年々政所下部等沙汰之云云、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年七月廿七日庚子、六波羅御造營所役事、無沙汰之國々相交之間、有其沙汰、早可令辨償之由、今日被仰下云云、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年十二月廿五日戊午、京上所役事、有其沙汰、今日被定法云云、

一京上役事附大番役

諸國御家人、恣之錢貨之夫駄、充巨多用途於貧民等、致呵法譴責於諸庄之間、百姓等及侘傺、不安

前可致沙汰、若過約束日限有懈怠者、以壹倍六十石、同三月十五日以前可究濟、且自當年之分、實綱知行之時者、不可致所務之違亂煩、有限濟物者、任撿注得田、不可有對捍、次號司名內壹町六段三百步坪付在別紙、是又雖及相論、自明年不可致所務之違亂、仍和與之狀如件、

正安元年十二月十四日　藤原賴宗花押

（裏書）爲向後所加封判也

左衛門尉花押

兵庫允花押

和與　加府村內有時知行分所務相論事

右自弘安六年至于去年永仁六拾ケ年分、稱地頭對捍、實綱依及訴訟、雖番訴陳、以和與之儀、用途參拾八貫文、明春二月十日以前、可沙汰送實綱方、且自當年分、當村有時知行分內、大神田所當并司名以下之所務、於實綱知行之時者、不可令致對捍、但參拾八貫文內、拾八貫文者、不日所致沙汰也、殘貳拾貫文者、約束日限中可致沙汰也、若彼日限令違期者、明年二月廿日以前、以二倍陸拾貫文用途可致沙汰之狀如件、

正安元年十二月十九日　平有時花押

（裏書）爲向後龜鏡所加判形也

左衛門尉花押

兵庫允花押

〔香取神宮古文書纂十六〕依有要用本錢返□□置申畠狀之事

合本直錢四貫文者

右件之畠坪は、おけばた職之內、いみのくぼあまつゝみの上々畠を、明年甲午年の作毛より始候て、

先年公方御下向之時、坊々各御用錢體學衆辻坊阿ミダ院各千疋成就院飯丸院、各五百疋禪徒窪院、二千疋新坊觀音院乾坊各五百疋也、面々相語、惣山ヱ先途以下大儀之時、御用錢被仰之、此段ハ不及異議、則公方御下向時モ致其沙汰了、各々有德錢事ハ無先例間、不可應御下知云々、就中安住寺殿御院務之時御免狀給之、巨多御禮申入了云々、

此方仰ハ稱先例無、而又安住寺殿御代御免と申條、自語相違也、無先例者何物ヲ可有御免哉、於先例者又不能左右在之、

文明七年六月十九日、一箸尾之妻女昨日圓寂云々、筒井之女也、去年奈良田舍用錢段錢、不謂神社佛寺權門高家之領地、加下知迎取女也、不可有長久之由口遊、如案也、

公物　〔大内家壁書〕就寺領沙汰出來之儀、被押置中途土貢事、準武領不可被用御公物、縱雖爲中途神事行事、勤斷以下入目等者、不可止先例、但至餘得分者、可被備公用之、自今以後、各可存知此旨由、依仰壁書如件、

文明十八年五月廿六日

右衞門尉弘康

大炊助弘有

所務　〔新編追加雜務〕一諸國庄々預所、地頭相論之時、糺定兩方之處、於地頭非法者被處罪科、至預所定使者、雖有非據不及別沙汰之間、依無所恐、國々所務嗷々之間、異論連々不絶歟、

〔吾妻鏡四十四〕建長六年四月廿九日辛未、評定、西國庄公地頭等所務事有其沙汰、是本地頭所務者、可依往昔之由緒、故追先規之例、可令止新議非法也、新地頭者被定率法之上者、其外全可停止濫吹也者、存此趣可加下知之由、即被相觸五方引付云云、

〔香取神宮古文書纂十五〕和與　相根村所務條々事

右當村年々所出物以下、又四郎實綱就訴訟雖番訴陳、所詮以和與之儀、籾參拾石、明春二月十日以

用錢

飯尾大和守殿　　如此也

去月三月八日万疋進納之今日ともに二万疋也

十七日、一宮川役御公用、去年天文七未進之儀九十貫也、然に半分預御免候樣にと以六角霜臺民○朽木民部より御佗言にて其分也、仍十五貫文、近日進上之請取、富越かたより、いつものごとく出之也

一此四分一十一貫文餘、此方へ給候て、其外三十三貫餘、宮内卿殿御局へ富左持申させ候、尤目出おぼしめし候由御返事也、

一諏神左より去十三日日付也到來、此御公用堅々申調え、如此すまし被申候由申之也、仍此狀趣則宮御局へ懇に申入之、近日可有上洛之間、御成候やうに御心へ可目出候趣、内々申之尤候其分也云々、

五月八日、一加州七ケ御公用事、先度千疋進上後無音不可然、其後度々以富越申候、下代臼井かたへ急度可被申届候由申之處、此間も其分申事候、去年ハふじゆく不及是非候へ共、堅被仰間、御公用可立申候、かわしの事可申爲に大阪へうすい罷下候近日罷上べく候間、可爲其分由被申之也、常興對正實以面可申を、口中煩候て平臥候間、奏者松本平兵衛尉以此分申承也、　六月八日、一飯尾和州來入、御料所若州安賀庄御公用、去年未進分五千疋也云々事、御代官熊谷彈正大夫以書狀今月四日日付也飯和へ申事に堅く申付候處、若州去年依不熟、迷惑之由、百姓等申候、然間於京都相調え、近日可致進納之旨申之也、仍重而催促候爲に人を可差下段、可爲如何哉由被申候之間、如此熊谷申候事、嚴重之儀也、唯今人を不及被差下事と存候、若又如此申たるまでにて延引候ハヾ、其時被差下候て可然存候旨、存分申之處、大和守も左樣に存候儀にて候由被申也、

〔大乘院寺社雜事記〕文明三年閏八月十一日、一釜口事、自十市方色々問答、過錢等無其沙汰者、可被向由申遣云々、

（河野文書）當春之祝儀珍重に候、仍爲冬ハ日吉郷公用錢、去々年分上給候、一段祝著此事候、將又去年公用錢事、春中ニ急度被仰付、嚴察上納候ハヽ、尤可爲本望候、頗入存候、去年者餘長々被留置迷惑不及是非候、此度之事者、別而御馳走ニ所仰候、雖輕微至候、白布一端、杉原十帖、扇子五本、牛黃圓五貝令進之候、於爰許相應候儀、可承候、猶根體山本源五郎申合候間、不能議候、恐々謹言、

三月十二日　靈超判

河野宗三郎殿

就公用之儀、差下能島與助、御在國之刻、雲州並以壇生加賀守、霜月中に公用上給候者、新領地一所給候由歎申候キ、內々壇生加賀守者心之樣被申候間、其時唯今上給候者可爲安堵候、頼存候不日被加御詞候はヽ可爲大慶候、仍杉原十帖、絹一疋、扇子三本、牛黃圓十貝進入候、猶委曲之段、與介申含候條不能詳候、恐々謹言、

霜月朔日　靈超判

河野左京大夫殿進じ候

（大館常興日記）天文九年卯月十四日、一御料所若州安賀庄御公用（去年分也）唯今且万疋進上之間、則御倉へ納申候、國よりの送狀、熊谷彈正大夫如此候旨、飯和より申之間、則宮內卿御局へ此分申入也送狀宮御局まて見せまいらせ候也、日出候よし御返事也、

一此送狀返給之間、則飯和へ遣之也、

御料所安賀庄御公用事

合百貫文者

右爲去年分內所致進上之狀如件、

天文九年四月十日　熊谷彈正大夫勝直判

公用
公用錢

然被思食旨、委細御氣色云々、此段は攝州承之也、其外少々種々仕之、

〔多聞院日記〕天正十五年九月十一日、一昨日ハナラ中諸商買停止了、昨日ヨリ又佗言歟、賣買在之、ナラ中屋敷地子ノ藏付町別一石ヅヽ可上之由觸了ト、日々諸方人夫、公。事。別。錢。以下迷惑了ト、

〔政所賦銘引付三〕一畠山刑部（飯加）代文明十二十一廿二　刑部少輔政清事也

知行分紀州濱仲庄代官梶原新介、文明三年爲公用太刀一、長房到來候、七百匹質物置候處、至去年七百餘貫文致算用云々、

〔親俊日記〕天文八年十一月十日甲辰、御料所桐野河内村御公用事、今度以小田宗珍一行押置之段、前代未聞次第也、速可被處其咎之旨、對右京兆被仰出之處、則可被申付之趣嚴重御請之上者、宜令存之所、號損免各致逃散云々、頗狼藉所行歟、急度令還住年貢諸公事以下、如先々可致其沙汰、若猶於難澁之族者、注進交名可有御成敗之由、所被仰出候狀如件、

天文八十一月十日　松村　堯秀
　　　　　　　　　飯中大　貞廣

當所名主百姓中

十二月廿日癸巳、納錢方事、上下京地下人廿人、捧連判致加增依望申被仰付之證、

洛中洛外酒屋土倉納錢執沙汰事、捧貳十人連判任申請員數之旨被仰付候訖、於御公用者、每月對御倉正實可相渡之旨、可被成御下知□恐々、

十二月廿日　親俊

松田丹後守殿

十一年閏三月廿三日。。。

一鹽合西物座商人賦百疋到來

公事錢佰漆拾壹貫佰伍拾伍文

同庄高津方三ヶ村分、(○中略)公事錢佰參拾參貫陸佰拾貳文、(加行枝名年貢錢)

一同庄生野方三ヶ村分、(○中略)公事錢貳佰玖拾貳貫伍拾漆文、

一(丹波國)瓦屋南庄、(○中略)公事錢捌拾肆貫肆佰陸拾貳文、(加二大豆一)大豆代

一同北庄、(○中略)(丹波國)公事錢伍拾伍貫伍佰伍拾文、

一弓削庄上村、(○中略)錢貳佰貳拾參貫伍佰玖文、(役僧官米三昧木代公事錢色々)

一同上村、(○中略)錢貳佰貫玖佰陸拾貳文、(役僧官米三昧木代公事錢色々○中略)

一(播磨國)的部南條鄕、(半分)當知行、雖然近年代管堀方無沙汰、(○中略)公事錢捌拾陸貫捌佰捌拾八文、(○中略)

一(加賀國)横江庄、(○中略)公事錢佰貳拾貳貫玖佰捌拾文、

一(阿波國)那賀山庄、錢參佰玖拾貫參佰陸拾八文、(米參大豆代公事僧代色々○中略)

一建部下庄保司方、錢參佰拾　貫佰參拾文(米代公事錢色々○中略)

一耳西鄕、(○中略)公事錢捌貫佰文、

一岡安名(半分○中略)錢佰陸拾伍貫參佰貳拾四文(公事錢色々○中略)

一志深保、錢佰陸拾伍貫貳佰六拾八文、(米代公事錢色々○中略)

諸方公用錢仟佰貳拾貫文　每年沙汰之

右就當知行分所記如斯

至德四年(丁卯)閏五月廿一日

納所昌賛(判○以下人名略)

〔大館常興日記〕天文九年七月廿四日、一豆州攝州(日行事也)佐本常來入也、勸修寺殿と藤中納言殿被申候、巷所地子事、兩方共以和與之趣也、此段は豆州承之也、石谷源三郎、三淵掃部頭被申候。公事。役。錢。事、被伺申處、禁裏御料所など御ざ候に、其段は被打置候て、先以此方之儀御裁許候へば、不可

方も先年寺主好實上座爲奉行、此門跡牛飼乘六ニ預給者也、

糟糠公事

上狛庄ヨリ三百文上之　加茂庄人別

三日原人別

下座ト號シテ

トノ　寺田　ナシマ　ヒラウ　カハタ

此五ケ所ヨリ五百文上之

此外河內者人別　鳥見者人別　西京者人別

以上大乘院方

河ヨリ西分公事各人別ニ上之

ハセ　サカ中　下狛　菅井　ミヤノクチ　タカキ　天神ノモリ

以上一乘院方

〔天龍寺文書二〕天龍寺領土貢注文

合

一六人部庄宮村方三ケ村分

京進米貳佰拾壹斛伍斗肆升柒合

延伍拾貳斛玖斗伍合一斗別二升五合宛

并貳佰陸拾肆斛肆斗伍升貳合寺升定

庄納米佰柒拾柒斛捌斗肆升

代價柒拾柒貫捌佰肆拾文

請申越前國河口庄之內細呂宜上方公文政所職事

合（中略）

一公事錢二貫文事

一同所新開料三十貫文事（中略）

右（中略）所濟物事、悉於國不過約月御門跡之御使仁可渡申、（中略）

長祿三年八月七日　山形加賀入道常祐判

延德四年三月十四日

一當門跡座茶賣公事錢事、先年定使正陣法師之代官豐田中間於寺內中院邊、商人與彼代官高聲ニ問答事在之、不可然旨六方及評定、定使正陣住屋被進發了、其以後此事無沙汰也、爲門跡不便旨、此間六方ニ令披露間、如元可有御知行之由返事到來、珍重々々、

就茶公事儀御披露之趣、意得申候、如先規爲御奉行可被成御下知之旨、得其意之由、洩可有御披露旨、六方集會評定候、恐々謹言、

三月十四日　六方衆等

伊豫寺主御房

延德四年壬子四月二日

一兩門跡御牛之飼料、山城國者、共致其沙汰、精糠公事錢事、御牛飼孫六兄弟、與木津庄之木守御童子、此應仁一亂以後、相論子細在之、一向木津者申狀非儀也、其子細今日以專實寺主令申送一乘院了、此事一段爲學侶致成敗之由、木津者共言上之、無跡形事也、自修理目代內々侘事申入時、自然相押荷物等事、先以出之事連年事也、非學侶儀之由、念比ニ申送之了、得御意云々、此公事取樣、木津川ヨリ東分ハ當門跡ニ公事致其沙汰、川ヨリ西分ハ一乘院方公事致其沙汰者也、一乘院

公事錢
公事役錢
公事別錢

〔阿州將裔記〕義昇〇足利

一義冬はじめて阿波國へ來りたまふ時、平島の內西光寺に落着たまふ、依之西光寺領分田地貳町餘之年貢諸役物等、ともに赦免有て、家來兵庫入道善行方より紙面指遣す、

文言

至阿波國平島庄西光寺依被居御座、當寺領年貢諸公事等、永代被免許訖、彌可被抽御祈禱精誠之由所被仰下也

天文十六年四月十三日　沙彌善行

西光寺參

〔妙海寺文書〕北條氏康禁制

一諸公事〇中略

右沼津之寺小田原江被移之由候間、如前々令免許候、仍如件、

天文廿年辛亥七月十七日　北條氏康花押

妙海寺

〔信玄家法上〕一百姓年貢夫公事以下、無沙汰之時、執質物、無其理令分散條、甚非據之至也、然而定年月過其期者、不及禁止事、

〔東寺百合文書む之二十八ノ上〕賣渡永代田畠之事

合貳段、字神田、〇中略

右公事錢段別六十一文宛〇中略

永享十年戊午二月廿八日

〔大乘院寺社雜事記〕長祿三年八月八日

雜役免除公事

モノナリ、此外ニ大名諸士等ニ課スルモノアリ、守護役、地頭役、知行役、所領役、率公役、武家役家人役、侍役、大番役、番役、番錢、番代錢、籌役、垸飯役、普請役、小普請役、閏月役等ノ如キ是ナリ、要スルニ、武家時代ノ雜税ハ、多クハ幕府ヨリ課スル所ニシテ、其餘大名ヨリ課スルアリ、朝廷ヨリ課スルアリ、神社佛寺ヨリ課スルアリ、今多ク識別セズ、文ヲ按ジテ知ルベシ、其税目ノ如キモ亦頗ル夥シク、時ニ隨ヒテ名ヲ異ニスルモノアルベク、處ニ依リテ名ヲ異ニスルモノアルベク、名同ジクシテ實異ナルモノアルベク、實同ジクシテ名異ナルモノアルベシ今其詳細ヲ知ルニ由ナケレバ、名ニ就キテ類ヲ分チタルモアリ、亦已ムヲ獲ザルニ出デタルナリ、

〔御成敗式目〕一關東御家人以月卿雲客爲聟君依讓所領公事足減少事

右於所領者、讓彼女子雖令各別、至公事者、隨其分限可被省充也、親父存日、縱成優恕之儀、雖不充課、逝去後者、尤可令催勤、若募權威不勤仕者、永可被辭退件所領歟、凡雖爲關東祗候之女房、敢〇敢一本作聊勿泥殿中平均之公事、此上猶於令難澀者、不可知行所領矣、

〔吾妻鏡〕二一治承六年〇壽永二年八月五日癸卯、鶴岳供僧禪睿捧訴狀云、長日不退御祈禱更無怠慢之處、於恩賜田畠准平氏被充催公事、愁訴難默云云、仍則停止萬雜公事之由被仰下、召禪睿於御前直賜御下文、

下

可令早停止若宮供僧禪睿在家役〇中略事

右件人、爲若宮供僧、長日之御祈無懈怠、而在御令住房、准於土民懸萬雜事、令煩之條、不隱便事也、於自今已後者、云萬雜公事、云垣内畠、可令停止其煩之狀、所仰如件、以下、

治承六年八月五日

如キモノ是ナリ、此他高掛物ニハ、桑楮等ノ類アリ、又海石トテ、海上ノ漁區ヲ石壁シテ課稅セシ事モアリタリ、

雜稅ノ賦課法ハ、戸口ニ課スルアリ、棟別、棟役ノ如キ類ナリ、又土地ニ課スルアリ、其內田租ノ附加稅トシテ課スル如キモノニ、段錢、段米等ノ類アリ、段錢、段米ハ、毎一段ヲ標準トシテ、臨時ニ若干ノ錢米ヲ課スルモノニテ、武家ノ兵粮米モ亦一種ノ段米ニ外ナラズ、此他土地使用ノ爲ニ課スルアリ、河岸役、河岸地代ノ如キ是ナリ、又鑛山、或ハ石材ヲ採集スルニ課スルアリ、池中ノ藻草等ヲ採集スルニ課スルアリ、又ハ苧、桑、楮、竹、木、藍、茜、鹽、幷ニ鹽濱、炭竈ニ課スルアリ、又鳥獸ヲ獵シ、魚介ヲ捕フルニ課スルアリ、サレドコハ或ハ網、梁、又ハ銃、若シクハ漁舟ノ如キ器具ヲ目的トシテ、之ニ課スル等ノ事アリキ、

又工業稅アリ、主トシテ職人ニ課ス、杣取役、檜物師役、大工役、桶樽役、鍛冶役、研師役、石屋役、紺屋役、紙漉運上ノ類ナリ、又物品ニ課スルモノニ、船稅、水車運上等アリ、又商業上ノ稅アリ、市稅、問屋運上、十組問屋運上、兩替商運上、紙商運上、米、麴、酒、醬油、油商等ノ稅、旅人宿運上、貿易商運上等ノ類ナリ、

此他、又臨時稅ニハ、造內裏、大嘗會、行幸等ヨリ、大神宮、役夫工米、及ビ神社、佛寺ノ修造、將軍上洛ニ關スル費用等ノ爲ニ之ヲ課スル例頗ル多シ、德川幕府時代ノ用金、上金等亦皆多ク此ニ屬ス、

又古代ノ庸ニ準ジテ、人ヲ役スル事アリ、之ヲ夫役ト云フ、夫役ニハ金穀ヲ代納セシムル事多シ、而シテ其賦課法ハ、或ハ漫然鄕村ニ課スルアリ、或ハ鄕村ノ反別、又ハ石高ノ差ニ應ジテ課スルアリ、其石高ニ應ズルモノハ、謂ユル高掛物ニシテ、夫錢、小入用夫錢、四一高掛夫錢、及ビ私領ノ夫米、夫金、夫役ノ類ノ如キ是ナリ、是等ハ皆朝廷、幕府、大名等ヨリ農民ニ課スル

古事類苑

政治部八十三

下編

雜税上

王制時代ノ調、庸、雜徭、雜税ニ當ル所ノ、武家時代ノ田租以外ノ税目ヲ擧ゲ、併セテ一篇ト爲シ、題シテ雜税トス、

凡ソ鎌倉幕府以降ニ在リテハ、此等ノ雜税ヲ呼ブニ、公事、公用、所役、運上、冥加、上納物、懸錢、分一、目錢、口錢等ノ名ヲ以テシ、其内、定期臨時ノ兩種ニ分レタリ、而シテ此内、公事、公用等ノ如キ語ハ、或ハ田租等ヲモ包括シテ呼ブコトナキニシモアラズ、又運上、冥加等ハ、或ハ人民ヨリ請願シテ課セラルヽアリ、官ヨリ年ヲ限リテ課スルアリテ一定セズ、分一トハ、所得ノ幾分ヲ税トスル義ニシテ、四分一、五分一等ノ名アリ、目錢、口錢ハ、或ハ商船ニ課シ、或ハ酒屋ノ桶ニ課シ、或ハ反別ニ課シ、德川幕府時代ニハ、魚税ニ此名ヲ呼ビシ所アリキ、又德川幕府時代ニハ高掛物ト云フアリ、石高ニ應ジテ田租ノ外ニ徵收スル所ノ附加税ニシテ、小物成ノ一部、及ビ浮役ノ類是ナリ、小物成トハ、物成卽チ田租ニ對スル語ニシテ毎年定時ニ本税ノ外ニ附加スル一種ノ税目ナリ、而シテ是ニハ高掛物ト、否ラザルモノトアリ、高掛ノ小物成トハ、三役(傳馬宿入用、六尺給米、藏前入用、)小役銀、大豆荏納、漆役、池運上等ノ類ニシテ、否ラザルモノトハ、大工木挽役、鍛冶役、河岸役船運上等ノ類ナリ、浮役トハ、小物成ノ一種ナレドモ、多ク臨時ノ課役ニ係リ、其定時ノモノモ、年ニ隨テ增減アリテ一定セザルモノヲ謂フ、卽チ漁獵税、酒税ノ

〔親俊日記〕天文七年三月廿三日丁酉

田上永正與香山彥三郞地子相論之事、具令披露候處、三問三答之趣雖事多、香山出帶沽劵狀、非正判之旨、慥指申之間、於无證判候者、可被成御下知由〇此間損恐々、

三月廿三日　親俊

松田豐前守殿

諏方神左衛門殿御宿所

雜說

無、都モ古ハ如此百姓ヨリ計年貢ヲ取テ、町人ニハ取ラヌハ、如何ナル故ニヨリテ、町人ノ會釋ハ個様ニ結構成コトゾヤ、此起リハ明智日向守ヨリ起ル、其惡例ヲ太閤用ヒ玉ヒテ、大坂ニテモ取レズ有シヨリ、江戸モ其通リニ成タリト見ヘタリ、明智ハ主君ヲ弑ミタル人也、信長公ハ御當家ノ御味方也、然ニ萬代迄モ、明智ガ恩德ヲ人々ニ有難ガラスルコト、如何ナルコトゾヤ、

〔東寺百合古文書五十五〕廿一口方評定引付〇康正三年丁丑長祿元年六月廿九日連署除之

一上野庄夏麥幷地子等事、爲先兩公文可執沙汰之由治定了、有收納者聽可支配云々、

〔東寺百合古文書百十二〕小河坊城雜掌申、禁裏御料所左京職領洛中散所巷所田畠等事、帶證文當知行之處、或混亂現地、或號權家被官、地下以下有名無實云々、太無謂、早有押妨之族者退之、任先例年中地子悉以彌可被全領知之旨被成奉書了、宜被存知之由所被仰下也、仍執達如件、

永正十五年八月十五日　美濃守
近江守

大內左京大夫殿

〔大內家壁書〕一今八幡社頭幷御神領事條々

一修理造營之時、社領中人足有催促可召仕也、然而號地子辨濟、不勤仕人足以下諸役云々、大綱修造之時者、縱雖爲地子收納地、可相催之、若及異儀之仁者、不可居住社領中之事、〇中略

一諸人號屋地、雖申請神領內、則不作家、不辨收地料、剩於彼地內定置百姓、納取地子、偏如私領有受用族云云、於自今已後者、縱以上裁雖預給、至如此之仁者言上子細、爲社家可召放件地、若又乍居住不社納地料者、就訴訟之是非可被付渡其家於其地事、

右條々堅固所被仰出也、以此旨可有其沙汰之狀如件、

文明十年卯月十五日　遠江守正任奉

京御ハキ拂ヒ成サル迚京中ノ地子御免成サレ、萬事賞罰正シク仰付ラレ候故、萬民ニ至ル迄、仰ギ奉ラズト云事ナシ、

〔織田信長譜〕天正十年六月、光秀〇明智振威於洛中、置所司代以掌政事、且免許洛中地子錢、

〔細川忠興軍功記〕一光秀公〇明智ハ具足乍召御參內被成、扨洛中之地子被成御免、高札御立被成候事、

〔京町古格〕上下京中地子御めんなされ、御朱印筆切錢銀子二十枚請取申候、

天正十九十二月廿八日　山中播內判

木下牛介判

民部卿法印

〔立入左京亮入道隆佐記〕文祿二巳五月廿八日に、高麗國へ諸勢被取懸、〇中略古今かようの御名譽之御大將樣御座有間敷、兩年なごやに御在陣候へば、京都之地下人ことぐくめいわく仕候、地下ひつまり候、法印さへ無御座候て、めいわく无申計よし候、御上洛を待かね申候、御福力之御大將樣にて候、地下中惣間之屋地子御ゆるし參候由候、千年萬代御長久之三國共に、如御存分之被仰付候樣にと念願計候、

〔北野文書三〕西京上下町人屋地子之事、如京都相構候條、任先例令免除訖、不可有改動候由、所被仰下也、仍下知如件、

慶長九年十二月廿日　伊賀守源朝臣〇板倉勝重花押

〔元寬日記〕寬永十一年七月十七日、將軍家光公御上洛、閏七月、自將軍家賜京町人銀五千貫目、每家銀百三十四匁八分八厘當ル、又大坂奈良之地子銀有免許、

〔政談四〕京江戶大坂伏見抔、地子錢ヲ出サヌコト古法ニ違フコト也、田舍ノ地ニハ年貢ヲ不出地

治承六年〈○壽永元年〉八月五日

○按ズルニ、治承五年、養和元年ト改元シタレドモ、鎌倉ニテハ猶ホ治承ノ稱ヲ用キタルナリ

〔東寺百合古文書二十三〕廿一口方評定引付〈文明二年庚寅〉八月十日〈連署除之〉

一長國寺西地之事、門指等不致領狀聞、乘珍法橋ニ申付、何樣にも致了簡可開、於地子者如以前、寅年ヨリ三ケ年可有御免、巳歳ヨリハ野畠分半地子可沙汰由衆議所也、

〔總見記十二〕公方家御退去宇治合戰信長公洛中御仕置事

今度放火ニ付テ、上京ノ者ドモ迷惑損亡仕ルベシトテ、地子錢、諸役事御免被成、御救有ルニ依テ、諸商賣ノ町人ドモ忝存ジ、町々ノ家居、本ノ如ク作リ立ル、其外善政ヲ施サレ、洛中洛外ノ御仕置殘リナク仰付ラレ、村井民部丞ヲ所司代ニ被成下、奏聞ヲ經テ長門守ニ補任セシム、御書出シヲ賜テ洛中ノ仕置、御慈悲ノ沙汰ノミナリ、其文ニ曰、

定

一京中地子錢、永代令赦免畢、若從公家寺社方、地子錢之內收納有來分者相計、以替地可致沙汰事、

〈○中略〉

右條々相計可申附者也

元龜四年〈○天正元年〉七月吉日　信長

村井長門守へ

〔明良洪範續篇十〕細川幽齋ハ文武兼備也シ事ハ、世ニ知ル所也、其自筆ニテ書記サレシ覺書ヲ、彼家士三宅某ガ方ニ傳ヘケリ、軍中並ニ侍ノ心得ニ相成覺書、〈○中略〉

信長樣御軍法ハ、御敵ヲ仕リタル者ハ、子々孫々迄モ御果シ、御跡ヲモ返ス程ニ嚴鋪成サレ候テ、天下ヲ御治メ成サレ、內裏ノ御修理等仰付ラレ、王法ノ衰ヘタルヲモ御取立候テ後、子細有テ上

地子免除

閏二月二日

一衞門五郎家、今日可被壞之處、地下人等申云、家事者一間太切處、可被壞召條、爲地下不可然歟、然者居屋ニ申請度之由雖歎申、思食子細有之間、今日中可壞來議畢、

〔東寺百合古文書二十三〕廿一口方評定引付（文明二年庚寅）四月五日（連署除之）

一上綱淸水上年貢、同加地子未進過分間、麥可被懸札由評議畢、

〔親俊日記〕天文八年八月三日戊辰、去晦日室町土御門三福寺地子錢未進爲催促、大館兵庫殿中間罷越立科申懸之、六十錢事爲御法間、一貫二百文可取之由云々、存外なる申事不及覺悟、亭主雖申之、種々惡口、家具携罷出候間、其町人出合打擲仕之、其旨被入上意御耳、被宿亭當方被官人堤三郎兵衞申次、爲此方如御法可成敗之由御申、御代々御判被成下之、當方被官人、爲上意不可有御成敗之由、三管領同前也、右筆かたへ御尋之處、近年事不存知之由申之、然者御判證文等被御覽度之由、細川伊豆守本郷常陸介兩人して被仰出之、唯今則可備上覽之處、此一亂以來、山迄預ヶ置候間、向後召寄可懸御目云々、其外證例多之常德院殿（○足利義熙）江州御動座之時、鳥羽田中事、木村民部事、近年北白川井口跡事、爲此方不及御成敗被仰出申付候者也、唯今事、先開闔申合可致成敗云々、

〔吾妻鏡二〕養和二年（○壽永元年）八月五日癸卯、鶴岳供僧禪寂捧訴狀云、長日不退御祈禱、更無怠慢之處、於恩賜田畠、准平民被充催公事、慇訴難默云云、仍則停止萬雜公事之由被仰下、召禪寂於御前直賜御下文、

下

可令早停止若宮供僧禪寂在家役幷自作麥畠壹町地子事

右件人爲若宮供僧、長日之御祈無懈怠、而在御合住房、准於土民懸萬雜事、令煩之條不穩便事也、於自今已後者、云萬雜公事、云垣內畠、可令停止其煩之狀、所仰如件、以下、

收納季節

〔東寺百合古文書 百二十〕讓渡壹㠀地事
合壹段六十步者
在山城國乙訓郡下久世庄內河依里 九坪地頭本㠀也 本地子夏麥六升五合、秋蕎麥六升五合、○中略
應安四年辛亥十二月七日 沙彌圓勝在判

〔新編追加 雜物〕一㠀地子二ヶ度夏春地頭可取否事○下略

〔東寺百合古文書 二〕請申東寺御領八條院々町所務條々
一地子收納、任先例六月十二月二季各半分、不依地下澁不無懈怠可執進之處、縱少分未進雖有之、於夏地子者九月中、至冬地子者後年三月中、不依地下澁不、悉可備進候事、○中略
右雖爲一事、不可違越之、若僞申者、可―――――八幡御罰者也、仍請文如件、
永和元年四月三日 良快判

〔東寺百合古文書 四十六〕請申東寺御領八條院々町所務條々
一地子收納、任寺例、六月十月二季各半分、不依地下澁不可執進之、縱於地下者雖有未進、於夏地子者六月廿日、至冬地子者十月廿日、悉必可令備進、若有不仕之儀者被押置私住宅可及嚴密之御沙汰事、○中略
右條々違越請文之旨者、不日可被改替所務職、更不可及異儀、仍請文之狀如件、
應永十六年八月十一日 立田承祐花押

地子未納

〔東寺百合古文書 二十一〕廿一口方評定引付寛正七年丙戌二月晦日連署除之
一五段田衛門五郎撿符屋事、自去年度々及御沙汰云々、地子兩度佛事田一向不致其沙汰之間、被屋敷地子分之住屋可致召壞、於佛事田百姓職可被別人仰付治定、

地子米

一枇島町門岡良右衛門願請築地坪數百四拾八坪五合

此地子銀七拾四匁二分五厘、年々上納、

右築地追テ地堅リ、建家等相成節ハ、地子地代銀等相增積リ也、

〔梅林寺文書〕

以上

播州茨木村梅林寺地子米高三石餘之所、片桐主膳正代官替節、拙者相改御帳ニ書載上候處、御奉行衆樣子被レ爲レ聞、如二其以前一可レ令二用捨一之由被二仰候條、則如右御帳面書直し差上候間、向後可レ有二其御心得一者也、

元和拾年子九月廿八日　間宮三郎左衛門光信印

梅林寺

地子雜穀

〔東寺百合古文書六〕讓渡畠地事

合壹段者

在二山城國乙訓郡下久世庄內一久世里廿四坪雙林寺御領內也

四至　限二東地頭本畠一　限二南繩手一
限二西同御領一　限二北井料田一

右件畠地者、藤原廣世重代相傳之所也、雖レ然依レ有二親子之契約一、十郎左衛門尉殿仁限二永代一所二讓與一實正也、雖レ爲二後々末代一更不レ可レ有二親類他人之妨一者也、但領家方本地子夏麥五升、秋蕎麥五升可レ被レ致二沙汰一、此外無二別公事一、仍爲二後日龜鏡一讓狀如レ件、

文和元年壬辰十二月十五日　藤原廣世花押

嫡子同國廣花押

地子銀

大覺寺御門跡領髙田村御本役年貢草錢地子錢等之義、向後御直務申定上は、下用給五段半事も一職可被御直務、自然催之輩、望申、御直納之上は、別號下用給事不入義候、御寺領之坊ヽ可成義者、今より以後も御停止尤候、恐々謹言、

大覺寺殿御雜掌中澤右近大夫殿

天正十二年下知狀 所藏不詳

地護軒分地子錢年貢所々散在事、令扶持之條、彌遂糺明、全可有領知候、恐々謹言、

天正十二卯月五日

梅菴入御宿所

〔大坂諸一覽之寫〕地子銀之事

一銀三拾七貫貳百六拾六匁八厘八毛

是ハ堂島新地安治川壹町目、同上貳丁目、同所三丁目、富島壹丁目、同貳丁目、湊橋町、將基島、堂島西之端、所々御預ヶ地地子銀、幷堂島新地五丁目、曾根崎川内に有之西本願寺船入場地子銀、

〔長崎志續篇二〕諸築地架造等增減之事

安永八己亥年

一椛島町油屋庄右衛門願請同町空地坪數七坪

長拾二間　幅三尺五寸

此地子銀七匁、地代銀七匁、年々上納、

一椛島町願請空地坪數三坪六合八勺

長六間壹尺八寸　幅三尺五寸

此地子銀三匁六分八厘、地代銀同斷、年々上納、

御下知候、雖澀候間、成懸只今被仰出候、親俊諏訪神左衛門へ書狀遣之、

〔總見記十二〕公方家御野心事同信長御諫書事

近年公方〇足利義昭ハ、信長ニ對シヒソカニ野心ヲサシハサマル、〇中略信長公モ内々此事御存知有トイヘドモ、シラヌ振ニモテナシ給フテ、只忠節ノ誠ヲ盡シ諫言ヲ奉ラレケリ、サレドモ曾テ御承引ナシ、其狀ニ曰、

言上條々〇中略

一明智地子錢ヲ納置、買物之代ニ渡遣候ヲ、山門領之由被仰懸、預置候者之方へ御押之事、〇中略

月日〇元龜四年　彈正忠平信長

トゾ有ケル

〔集古文書三十二〕天正十一年下知狀所藏不詳

其方地子錢事、四百五拾文相定候、右之通永代無相違可運上者也、

天正十一八月日

一條藥屋町

池上右兵衛殿

天正十一年下知狀所藏不詳

其方地子錢事、五百文に相定上、永代不可有相違候、恐々謹言、

天正十一極月十八日

北小路室町

安積曾丹床下

天正十一年下知狀所藏不詳

五石八斗一升八合　貞久名
三斗一升　兼友名
九斗九升　秋光名
一斗三升三合六勺　澤藤名
三斗三升五合　正久名
一斗八升三合　恒任名
一麥地子
八田平野治郎
一石五斗一升五合五勺　貞行名
一石二斗六升四合　貞久名
一斗九升五合　兼友名
一斗八升八合五勺　二郎丸名
三斗九升　秋光名
三斗八升四合　正久名
一斗三升五合　恒任名
以上十四石四斗九升六合七勺
代錢七貫二百四十九文〇中略
右結解狀如ㇾ此
康曆貳年十二月廿七日　勘定

〔親俊日記〕天文十一年七月十四日壬戌、永原越前守重隆、申下京寺社本所地子錢、先年引替雖ㇾ被ㇾ成

一所廿代内　十代屋敷分　十代後地百文　道敎
一所十代十八卜内　十代屋敷分　十八卜後地廿五文　德三郎今左近二郎
一所廿五代内　十代屋敷分　十五代後地百五十文　三郎太郎
二所壹反卅五代内　廿代屋敷分　壹反十五代後地六百五十文　道佛
一所廿代十八卜内　十代屋敷分　十代十八卜後地百廿五文　左近二郎入道今法圓
一所廿五代十卜内　十代屋敷分　十五代十卜後地百七十五文　馬入道今馬允
一所卅代十四卜内　廿代廿四卜後地二百卌四文　金剛三郎
一所十代十八卜内　十代屋敷分　十八卜後地廿五文　サツマ
一所十五代十八卜内　十代屋敷分　五代十八卜後地六十七文　信道
一所十五代十八卜内　十代屋敷分　五代十八卜後地七十五文　十郎太郎入道今左近四郎

以上拾肆間內

壹間分地子錢百六十四文、但大水流失之、源三郎入道分、仍寺家之上御使被加見知畢之、

拾參間分地子錢貳貫廿六文〇中略

建武元年十二月日　　御代官牟禰花押

〔朽木文書十六〕與保呂村御年貢米結解狀

秋。地。子。御結解狀

合　康暦貳年分〇中略

合

八田平野治郎

二石九斗四升四合　　貞行名

地子錢

合壹段在所壹里貳公事錢七十八文納九文
　但本所當一斗五升加てう加地子二斗四升〇中略
應永八年辛巳正月晦日　　如圣花押

〔東寺百合古文書百十三〕賣渡申永地畠之事
　合壹段者在山城國乙訓郡下久世之庄內中月里卅三之坪
　四至限東地類、限南溝、限西藪、限北繩手、
右件畠地者、外畑六郎左衞門入道先祖相傳之私領也、〇中略本所者五條坊主一斗貳升宛也、定加地子八斗也、於猶向後號本文書出來之輩、爲公方樣可被行罪科候、仍後日賣券之狀如件、
　享德元年壬申十二月廿日　　賣主外畑六郎左衞門尉定祐花押

〔三鈷寺納帳〕散在納帳　永正十五
　鷄冠井分〇中略
一反淨雲寄進　加地子三斗六合　　左衞門四郎

〔建武以來追加〕一故戰防戰事永正十一四十、長秀、
一就名主百姓等年貢地子錢以下無沙汰事、
不可依此御法矣

〔東寺百合文書タ一ノ四〕注進備中國新見莊東方地頭御方損亡撿見并納帳事〇中略
一市庭在家後地用途事
　內
　二所壹反十代卌代後地四百文廿代屋敷分　　黑石二郎
一所廿五代十卜內十五代十卜後地百九十文十代屋敷　　源三郎入道

加地子

一段ツカ本　ウリ地定地子一斗五升〇中略
一反ニナサ田　ウリ地定地子一斗
一反マス本　ウリ地定地子一斗　スエノ源六

〔庭訓往來〕畠事、蕎麥、大豆、小豆、大角豆、粟、黍、稗等、隨畑山畠之乾熟、可課桑代加地子、遂每年實撿之節、敢以不可存自由之依估、

三月七日　玄蕃允平

御政所殿

〔庭訓往來諸抄大成〕加地子　年貢の外に、地子を取を云、

〔東寺百合文書カ十二之十九〕讓與私領地壹處事

合三段者

在西京三條坊門　西京極以東サソト云

西京左衞門町田　加地子田別三斗三升〇中略

文治五年三月十五日　僧明達花押

〔東寺百合文書一〕寄進東寺八幡宮

當寺水田內角神田里號南田三段加地子事

右水田者、嚴瑜重代相傳之地也、爰當社阿彌陀三昧雖及再興之沙汰、依為無供之勤行、法會之體有名無實、然者未來相續、猶以難測、依之且為法會興行、且為現當二世、以彼三段加地子、永代所奉寄進當會之捧物也、是併以消塵之土貢、為負和光之瑞籬也、仍所寄進狀如件、

貞治五年八月日　權律師嚴瑜花押

〔東寺百合文書百六十一〕讓渡　田地事

定地子三百廿四文夏冬辨

一所　同所西口一丈四尺　奥八丈九尺

地子四百二十文

此内加地子四十五文出之

定地子三百七十五文夏冬辨

一所　七條櫛笥南頰西角

口二丈五尺五寸　奥十丈

地子七百六十五文

此内加地子七十六文出之

定地子六百八十文夏冬辨

一所　鹽小路櫛笥東頰南角

口二丈六尺　奥十二丈二尺

地子五百文

此内加地子七十六文出之

定地子四百廿一文夏冬辨

已上定地子貳貫百八十六文

應永貳年十二月日　注之

〔粲山寺年貢收納帳〕康正二年丙子十二月廿日年貢收納帳

畠之分

一反ウカノミ　ウリ地定地子五升ワイチンヨリハカルベシ　善五郎○中

〔太閤記十一〕行幸

今度之行幸規式、後代に我心をつぐもの有て、朝廷いよ〱さかへさせ侍るやうにと祝し給ひけり、これによつて禁中正税のため、洛中の地子こと〱く末代に至り、相違なく廳務として納め奉り候やうにとて、仰出さる、御一行之事

一京中銀地子五千五百三十兩餘、可レ爲二禁中御料所一之事、

一米地子八百石之内（三百石 院御所 五百石 六宮 關白領）〇中略

天正十六年卯月十五日　　秀吉

菊亭殿

勸修寺殿

中山殿

〔東寺百合古文書 匹十九〕會中講料所敷地四ヶ所注文

一所　七條坊門櫛笥北頬西角

口五丈五尺　　奥九丈三尺

地子　五百五十文　　市町

此内加地子百五十文出レ之

定。地。子。四百文夏冬辨

一所　七條大宮南頬中程

口一丈二尺東　　奥八丈一尺

地子三百六十文

此内加地子三十六文出レ之

他候、恐々謹言、

後十月〇天文五年廿三日　氏直

諏方神左衛門尉殿

天文九年七月十四日、佐方より各へ折紙在之、奉阿申知行分敷地、今出川地之内岡御所御被官人在之、彼者居住之間は、地子用捨仕候、今度彼宅對河井沽却候、地子催促之處、岡御所へ沙汰仕候由申候、一向無謂次第候、仍御下知之事申也、此分一定候はゞ無別儀哉と存候、宜爲御兼議候由申之、十七日、日行事本常より各へ折紙在之、〇中略諏方長松以飯齋左申、知行四條綾小路尼目辻坤角小家三間屋地子事、違亂之族在之御下知事、當知行段捧請文上者、可被成之哉之由、同細豆御事書在之、是又同心也、

〔京都將軍家譜下〕天文廿年三月、三好長慶下知洛中地子錢事、

〔言繼卿記〕天文二十一年七月十四日乙未、一各申付御倉町之地子令催促、支判計壹貫三百八十五到、同近衞地子大澤出雲守三百七十持來云々、

〔足利季世記五將軍地藏記〕公方勝軍地藏ヱ出張之事

同〇永祿元年七月十四日、京中ノ地子ノ錢子、三好殿ヨリトリケレドモ、公方樣〇足利義輝ヨリ何ノ御カマイモナシ、是ヲ如何ニト申スニ、是非佐々木義賢、公方樣ト三好殿ト和談アルベキヨシ兩方ヘ相通ラレ、近々其沙汰アル故也、

〔集古文書三十二下知狀〕天正十一年下知狀所藏不詳

一條西洞院新町西輪事、北者限正親町通、南者土御門通ヲ限、西者廿丈、地子錢者、往古ヨリ如有來野畠分ニ令納所、早々家之儀可相立、右之屋敷ハ、永代不可有相違候狀如件、

天正拾一年六月　玄以

右御地子は、毎年四百文（夏〇二百文 冬〇二百文）無懈怠可沙汰申候、若無沙汰事候ハヽ、何時にてもめしはなされ候て、他人に宛らるべく候、其時更一言の仔細を申まじく候、仍請文之狀如件、

至德三年十月十五日　　室胤（花押）

〔室町家御內書案下〕一鳩塔師申、處司以南油小路東頰（口壹丈六尺、奥貳拾丈、口壹丈二尺、奥拾丈、）屋地事、如元令居住、於地子者、嚴密可致其沙汰之旨、可被相觸之由所被仰下也、仍執達如件、

永享四年十月十一日　　肥前守

播部頭

赤松左京大夫入道殿

〔東寺百合古文書一〕請取八條大宮西頰地子事

合五百文者　　乘慶辨

右爲冬〇地子〇分、且所請取如件、

永享九年十二月五日　　[illegible]（花押）

〔東寺百合古文書百二十七〕請申東寺御領九條堀川大巷所下地之事

合壹所者

右件御地子者、毎年兩季（夏〇六百伍十文六月廿日以前、冬〇六百五十文十月廿日以前、）悉可納申候、就中臨時人夫御公事等、無懈怠可致其沙汰者也、萬一雖爲兩季御地子壹錢、件過約日無沙汰申候者、不日可被召放彼百姓職候、仍爲後證請文狀如件、

康正貳（丙子）年拾月十六日　　持田左近將監季宗（花押）

〔大館常興日記〕就（宮裡）敷地之儀、去夏〇地子〇之事、松田豐前守被相付御下知候、世上可爲法樣候旨存候處、至于一所切々申事迷惑仕候、此等之趣、以事次可然之樣預御披露候ば、尤祝著可存候、奉願候、外無

宅地地子

除一貫二百文

百七十五文　　公畠ヲ預所方ヘ被取入云々

百七十五文　　散仕丸新給分

八百四十六文　　恒枝押領分

殘七貫二百十四文〇中略

右散用狀如件

曆應三年二月三日　　公文地頭代平敎重花押

〔東寺百合古文書二十三〕廿一口評定引付文明二年庚寅三月十六日連署除之

一寶住寺畠地子事、一貫八百文分ニ當年計可由附候条、以畢、寺家納分二百文減畢、此外三百文乘圖得分減間、都合五百文、當年計可被減由評議所也、

〔東寺百合古文書百十二〕永代賣渡申畠事

合壹所者丈數東西十壹丈南北十三丈也、但此內一丈八堀ニナル也、〇中略

右件畠者、東寺執行代々相傳之私領也、〇中略於地子者、每年夏冬兩季ニ壹貫四百文、無懈怠可被納候、爲其百姓請文ヲ相副候也、〇中略仍爲後證賣劵之狀如件、

長享元年十二月廿三日　　東寺執行　榮增花押

〔大館常興日記〕天文九年七月十二日、日行事本常各へ折紙あり、祐阿以治部兵衛大夫申、知行分二俣河寺之內屋地幷野畠地子錢事、吉阿以來當知行也、去年より號在非分競望難澁條、可致沙汰旨御下知之事申上之、就請文文言にて申之條、尤可被成事可然存候由申之也、

〔東寺百合古文書九十一〕請申東寺御湯料敷地地子事

合壹所在所唐橋猪熊いのくまより西北頰辻子の奧東頰口五丈奥五丈、

合

一百柒石参斗陸升貳合参才　本目錄定

一請加米分

五石捌斗陸升　先御代官下斗代ヲ高斗代ニ被レ行増分米

壹石玖斗参升参合三勺　畠田所當米

但異行畠分、然而云ニ畠地子ニ云ニ所當米ニ爾様并進之□百姓等歎可レ申之間申レ之

玖斗玖升　建武四年御年貢未進分

巳上百拾六石玖升伍合参才○中略

右散用狀如レ件

暦應貳年二月日　地頭代平敎重花押

〔東寺百合古文書百三十六〕太良庄注進暦應二年地頭方御年貢以下散用狀事○中略

一麥畠地子分

錢八貫四百十二文內

除一貫二百文

百七十五文　公田分ニ預所方ヘ被ニ取入一云々

百七十五文　散仕丸新給ニ御免云々

八百四十六文　恒枝押領分

殘七貫二百十四文

一秋地子分

錢八貫四百十文

右領家二箇度被取納歟、就之地頭可相當之由所申無子細、十一町別給畠段別五升加徵之外、不可有違亂也、

〔東寺百合古文書百〕注進　嘉元參年山城國池田御庄田畠御檢注目錄事 ○中略

一畠漆町玖段廿

分地子壹貫伍佰捌拾文 段別貳拾文

右注進如件、

嘉元四年丙午二月日　公文沙汰師寂判

下司左衛門尉源重判

檢注使僧祐尊判

〔東寺百合古文書百三十〕注進播磨國矢野御庄例名文保元年御地子麥并米納麥散用事

合定畠參町玖段參拾伍代 段別二斗三升定

公方御地子麥玖石一斗三升壹合 ○中略

文保元年六月日　公文代定心花押

〔東寺百合古文書百七十九〕和與

遠江國原田庄雜掌直踰與當庄內細谷鄉地頭原小三郎忠益相論當鄉所務條々事 ○中略

一麥地子事 ○中略

右條々、每年不違先例、隨分限可致沙汰也、○中略

以前條々、和與狀如件、

元德三年十二月十五日　藤原忠益花押

〔東寺百合古文書九十八〕太良御庄注進曆應元年地頭方御年貢藏付事

古事類苑

政治部八十二

下編

地子

鎌倉幕府時代ノ地子モ、王朝ノ制ノ如ク田畠ヨリ徴セリ、後ニハ市街ノ地ヨリモ徴セルコト、恰モ地代ノ如シ、恒例ノ地子ヲ定地子又ハ本地子ト云ヒ、年貢ノ外ニ加徴スルヲ加地子ト云フ、而シテ其地子ハ毎年二季ニ錢、銀子、米、雜穀等ヲ納メタリ、

名稱

〔易林本節用集〕（知言語）地子

田地子

〔東寺百合古文書〕（百二十八）注進

大宮巷所田地夏。冬。地。子。之事

六百文　田（號如門前）　公文所

三貫伍百文　田　乘觀

以上四貫百文〇中略

右注進如件

文明十三十月廿五日　祐成（花押）

〔大館常興日記〕天文九年七月十七日、日行事本常より各へ折紙在之、北野一社中宮上、北野内湯田地子銭事、清光院殿へ尋御申可然候由、細豆御事書也、尤候同心也、

畠地子

〔新編追加（雜務）〕一畠地子二。ケ。度。（春。夏。）地頭可取否事

年貢ニ上ル米俵ニ、尻ヲ掛ルハ何者ゾ、勿體ナキコトヨト、大ニ罵リケレバ、速ニ立チ去ラセ玉ヒケル、ソノ跡ヨリ供奉ノ人々多勢來リ、モシ此邊ニ在セラルヽヤト尋子奉ル樣子ヲ見テ、老農始テ驚キ、今ノ罵リシ御方ハ、公方樣ヨト思寄リ、眞ニ恐入ケル、二三日經テ、御代官伊奈半左衛門ヨリ、ソノ老農呼出シニナリ、是ゾ此程ノ事ニテ、イカナル罪ニカ陥ルベシト、案ジ惱ヘドモ、セシ方ナケレバ、家内ニ暇乞シテ、泣々出行シニ、伊奈氏申渡スハ、御年貢米ノ事、大切ニ心得奇特ノ至リナリ、因テ御褒美下サル迚、白銀若干賜ヒシトナリ誠ニ隅ヨリ隅マデ、御行届ノ御政トテ、人々感ジケルトナリコレハ、公鑑モノ語ナリ、清〇清松コレヲ記スルニ及デ涕下テ不止、

來其沙汰、今日仰件鄉本地頭忠幹可令致辨之由云云、

(古簡雜纂卯)上野國高山御厨北方內大塚□□兩鄉預所前隼人正親盛代道盛、與小林五郎次郎入道道義跡得一分地頭善六兵衞尉朝清妻女大江氏相論初任撿注幷年貢以下事、

右者、兩方訴陳狀、欲有其沙汰之處、去月廿二日兩方和與畢、如氏女狀者、兩鄉內氏女知行分田畠在家等不殘段歩、相分下地於五分、貳分者預所可被取之、至參分者氏女可知行也、且和與之上者、云向後年貢、云以前未進、不可有其沙汰云々、道盛狀同前者、守彼狀相互無違亂、可令領掌之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

德治三年二月七日

陸奧守平朝臣花押

相模守平朝臣花押

(香取神宮古文書集十六)大戶大禰宜地行分田錢の事○中略

七石二斗、村田三ケ村分、 御そこく○租穀

七石二斗、みなみノ方、 御そこく

應永廿年九月十七日 山口國信花押

大戶大禰宜殿へ

(北條五代記二)古今弓箭の沙汰の事

秀吉天下を治めて後、百姓の年貢をむさぼり、其上日本國中田畠を撿地し百姓の悲しみ、たゞ是秀吉一身欲するが故也、

(甲子夜話十二)又○德川吉宗御鷹場先ニテハ、スベテ御手輕キ御事ナリシトナン、是モ何方ヘカ御放鷹ノ時、附從ヘル人兩三人ニテ、アル農家ノ庭ニ至ラセラレケレバ、米四五俵積テ有シニ、御腰ヲ掛ラレ、御休憩アラセラレシニ、ソノ家ノ勝手ヨリ老農出テ、目ヲイカラシ、大音ニテ、公方樣ヘ御

一國中之地頭人、不申子細、恣稱罪科之跡、私令沒收之條、甚自由之到也、若犯科人、爲晴信被官者、不可有地頭之綺、田畠之事者、加下知可書、別人年貢諸役等、地頭へ速可辨償、〇中略

一札狼藉田畠之事者、於年貢地者可爲地頭之計、至恩地者、以下知可定之、但貢物等之儀者、隨分限可有其沙汰、〇中略

一有地頭申旨、下點札之處、至捨作毛者、自翌年彼田地可任地頭覺悟、乍去雖不苅取作毛、令辨濟年貢者、不可有別條、〇中略

一逐電之人之田地、取借錢之方者、年貢夫公事以下、地頭江速可辨濟之事、〇中略

一負物之分、定年期渡田畠人者、書加土貢分量、欲令沽却者、買人并其地頭主人江可相屆、

一藏主就于逐電者、以日記相調、至于錢不足者、其田地屋舖可取上、〇中略年期地之事者、可有其沙汰、

年貢夫公事等者、當地頭江速可勤事、〇中略

一百姓年貢夫公事以下、無沙汰之時、執質物無其理令分散條、非法之至也、然而定年月過其期者、不及禁止、〇中略

右五拾五ヶ條者、天文十六丁未六月定置畢、〇中略

〔今川記五〕かな目錄追加

一百姓等地頭にしらせずして、名田賣買之事、曲事也、但爲年貢收納當座之儀においては、宥免あるべし、年期二三ヶ年におよばゞ地頭代官に相ことはるべし、永代の儀は不及沙汰也、〇中略

天文廿二年二月廿六日

〔吾妻鏡三十七〕寬元四年十二月廿九日甲寅、左馬權頭入道昇蓮與上野入道日阿、相論下總國松岡莊田久安兩鄕所務條々内、去文曆元年貢物所濟事、依爲日阿當給人、可令辨償之由、領所昇蓮訴申之間、日阿拜領者、文曆元年十二月十六日也、全不徵納彼年貢物之上者、難辨濟之旨、日阿陳之、仍日

百姓に、のぞみのごとく可相增かのよし尋る上、無其儀は、年貢增に付て可取放也、但地頭本名主を取かへんため、新名主をかたらひ、可相增の虚言を構へ、地頭においては、かの所領を可沒收、至新主は、可處罪科也、〇中略

大永六丙戌年四月十四日　紹僖在印

〔甲陽軍鑑品第一 一〕甲州法度之次第〇中略

一名田之地、無意趣取放之事、非法之至也、但有年貢等過分之沙汰、剩至兩年者、不及是非、〇下略

〔總見記二十 二〕諸將恩賞幷甲信二州御掟事

今日〇天正十年三月二十九日甲信兩國ノ御法度書被仰出、御仕置有之、

國掟　甲信兩州〇中略

一百姓前本年貢之外、作分之儀、不可申掛事、〇中略

右定之外、於惡敷扱者、罷上訴訟可申上候也、

天正三年三月日

〔建武年間記〕條々建武二

於決斷所可有沙汰條々

一領家地頭所務相論、幷年貢難濟以下之事、

一所務相論、幷年貢以下沙汰、一向可有成敗事、

〔建武以來追加〕寺社本所領條々延文二九十御沙汰

一帶御下文輩事〇中略

要害地事、下地相分、年貢支配、兩樣之多少、兼日難定、隨在所之用否、宜爲臨時裁斷、〇下略

〔甲陽軍鑑品第一 一〕甲州法度之次第

一麥八斗　代四百文

一大豆貳石參斗　代壹貫八百四文　米五十九石四斗六升、此内　石別七百文宛　五石五斗糧供并料、御倉付除之、

一四拾壹貫六百四十文

一佰四拾八貫四百八十二文錢成方　此内拾六貫、寺社人給除之、

五拾貫文　五社へ新御寄進

七拾貫文　國下用

四貫百五十八文　米伍石九斗四升、四合代、石別七百文宛　就二御下向一下用小日記在レ之、

八貫七百五十文　御下向之時、御雜事色々小日記在之、

已上參佰四拾參貫七百八十八文、此内、

參佰貳拾五貫參百六十五文

殘而拾八貫四百廿三文、御扶持方へ不足可レ有レ之、

但國々依レ亂、御年貢或は惡とうに亂取、或は放火に失間、牢損之由申、しからば給人方無足たるべく哉、

寄供參瑶進
雄春判

禁年貢增收

〔建武以來追加〕儉約條々

一臨時課役事

先例有レ限公事之外、一向可レ停二止之一、月次充以下所役々、宜レ使レ補二年貢一也、

〔今川記五〕かな目錄

一譜代の名田、地頭無二意趣一に取放事停止之事、

但年貢等無沙汰においては、是非に不レ及也、兼又彼名田年貢を可二相增一よしのぞむ人あらば、本

損亡十石二斗

定御米五十六石五斗八升九合七勺二才

右注進如件

建武三年十二月日　　下司（花押）

〔朽木文書十六〕與保呂村御年貢米結解狀

合　　康曆貳年分

四石八斗七升六合九勺　貞行名　　四石八斗九升六合　貞久名

九斗七升四合　二郎丸　　一石一斗二勺　秋光名

一斗八升一合八勺　孝月　　一石七斗八升六合　今末名

二斗四升四合　兼友名　　一斗三升二合七勺　澤藤名

二石二斗九升八合　正久名　　一斗三升三合　恒任名

五升五合三勺　俊岡名

以上十六石六斗七升六合九勺　代錢十三貫九百文（〇中略）

右結解狀如此

康曆貳年十二月廿七日　　勘定

〔集古文書注文五十四〕野依雄春年貢算用注文（所藏不詳）

美濃國小島莊御年貢算用狀事

合文正元年分

一七拾七貫四百文　糸貳百五十八兩代、（三一兩別[illegible]宛）此內廿一兩寺社除之、

一玖拾五貫五百八十文　綿五百卅一兩代、壹兩百八十文宛、此內七十一兩沙汰人七人除之、

以上總都合錢佰伍拾貳貫佰漆拾參文

除

肆拾貳貫參百文　月宛料錢方之下行之、請解狀別紙備之、

貳拾壹貫貳百文內　貳拾貫文京進、壹貫貳百文夫貫、去年九月廿六日進之、

伍拾貳貫伍百文內　五十貫文京進、貳貫五百文夫貫、去年十二月廿八日進之、

貳百文　七月廿七日諏方御祭下行之、

百五十文　御年貢御倉付酒直下行之、

壹貫四百文　四郎方之請取之

壹貫四百八十文　國司上御使入部之時、細々雜事料下行之、注文別紙備之、

參貫文　國司上御使引出物料下行之

壹貫文　正月二日百姓等魚看以下、細々雜事料下之、

貳拾九貫拾五文內　貳拾漆貫陸陌卅九文京定當進之、壹貫參百漆拾陸文夫貫、

建武元年十二月日　御代官尊爾（花押）

〔東寺百合文書へ十三之十四〕注進東寺御領山城國上野御莊建武三年御年貢散用事

合　除神田人給定

公田十一町反八十步

不作六反大卅步

河成二町四反小四十步

殘定田八町十步

分米六十六石七斗八升九合七勺二才

一麥貳石參斗捌合

代玖佰肆拾文　百文別に二斗五升定、委結解者、先度後六月日令言上之間、重不申及候、上

進四石七斗京定、此外預所給分ヲ令申畢、

以參拾肆貫貳拾漆文

右石用伍拾貫文者、去々年十二月進上仕候間、去年十一月にいたるまで、十一ヶ月の利分者、三十

三貫文、(六文子定)本利者八十三貫文候、然に御米代幷細々御用途共に卅四貫二十七文是ヲ給候間殘

石四十八貫九百七十三文不足候、任被仰旨預御計候者可然由相存候、仍注進之狀如件、

應長二年正月三十日　　僧定圓奉押

〔東寺百合文書ター一ノ四〕注進新見莊東方地頭御方御年貢米雜穀代幷色々用途結解散用狀事

合

一米代　肆拾參貫漆百漆拾文

一雜穀代分　拾捌貫肆百漆拾捌文

一高瀨御年貢錢　陸拾捌貫捌佰陸拾文

一桑代錢　壹貫參百五文

一百姓等弓錢　壹貫文

一市庭後地錢　貳貫廿六文

一市庭御公事等錢　參貫文

一段別錢　拾參貫肆佰卅四文

一栗代錢　佰漆拾五文

一歳男錢　貳百文

〔下學集下態藝〕結(ケツ)解(ゲ)

〔貞永式目抄二〕結解、結トハ算ヲ入テ、數ヲユヒ立也、解トハ算用終二其理一トグル也、

〔日用重寶記二〕名字俗名の事

難字の分のみを一ツ二ツしるす、難字になくとも、字はしれて、よみまぎらはしき分計出す、〇中略　結(けつ)解(げ)

〔吾妻鏡十三〕建久四年十月廿一日甲寅、諸御領乃貢結解勘定事、奉行人等於二私宅一遂二其節一之由、有二風聞一之間、甚不レ可レ然、至二今日以後一者、於二政所一可レ致二沙汰一之旨被レ仰云云、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年九月八日乙巳、豐前々司尙友參二御所一、相二具子息内藏允尙光、兵衞尉能尙等一、自二京都一參著云云、藤民部大夫行光爲二申次一入二見參一、是爲二西國御領乃貢納下奉行一、令二在洛一也、

〔新式目〕弘安七五廿

御領御年貢、每年被レ遂二結解一、可レ被レ全二得分一事

〔新編追加政所〕一政所納物幷年貢結解事正應三廿八

爲二勘定一、問注所器量公人兩輩、可レ被二撰申一歟、

〔東寺百合古文書百三十一〕播磨國矢野例名那波佐方目三ケ所沙汰牧之色々御物目安事

合

一御米卅伍石玖斗漆升伍合除損亡同貫米定　去年十一月京進

代卅壹貫參佰文　　百文別壹斗壹升伍合定

一大豆漆斗貳升壹合貫米除定委細別紙に申　去年十一月京進同前

代伍佰拾四文　　百文別仁壹斗四升定

一細々御物

代壹貫貳佰漆拾參文同前

年貢結解

永五貫五百丘拾文九分

外

一金貳兩三分　　小物成

一錢三拾八貫九百九文　　右同斷

米六百貳拾壹石壹斗壹升五合

永五貫五百五拾文九分

納合

金貳兩三分

錢三拾八貫九百九文

〔雜筆要集〕結解文樣第八十四

注進　某御莊某年官物未進米解〇解上脫二結字一　勘文事

合

惣輪田貳佰町五斗代

所當分米一石　所濟伍佰石

未進佰石

所下

十石　杣人夫等食物　十二月在御下文自餘準之

十石　替米料某丸請十二月一日御下文

以上何佰所下

右結解大略注進如件

年月日　　姓―判

高百六拾四石六斗九合八勺五才　永荒諸引
内高六石七斗七升六合五勺　連々可起返荒地引
高九斗五升三合　午山崩引
小以高百七拾貳石三斗三升九合三勺五才
殘高千五百六石七斗七升九合壹勺五才
此取　米六百三石貳斗四升五合
永四貫八百七拾四文六分

同國寄

高合三拾九石五斗壹升七合五勺　新田
内　高貳升五合　永荒諸引
高壹石貳升七合　連々可起返荒地引
小以高壹石五升貳合
殘高三拾八石四斗六升五合五勺
此取　米拾四石四斗五升貳合
永六百七拾六文

田畑反別六町三反三畝廿三歩（但敷地共入）　見取場
此取米三石四斗壹升八合

（本田新田共）總高合千七百拾八石六斗三升六合
見取場反別合六町三反三畝廿三歩
取合
米六百貳拾壹石壹斗壹升五合

高拾貳石五斗壹合
上畑壹町四反七畝壹步　盛八ッ半
高七石貳斗八升貳合
中畑貳町四畝壹步　盛七
高拾四石六斗六升八合五勺
下畑貳町六反六畝廿壹步　盛五ッ半
高拾石九斗八升七合五勺
下々畑貳町四反四畝五步　盛四ッ半
高四石八斗三合
屋舖四反八畝壹步　盛十
高五拾石貳斗四升貳合
小以八町壹反步
此取米拾七石七升三合　免三ッ三分九厘八毛餘　反貳斗壹升壹合內
取米合百三拾壹石七升六合　本途
一反別貳町六反四畝拾八步　山畑壹ケ所
此納米三斗四升四合　反壹升三合
一反別五反壹畝貳拾九步　萱地壹ケ所
此納米六升七合　反壹升三合
外
一錢百文　麻地畑年貢
一錢壹貫八百貳拾四文　糠藁代
納合
米百三拾壹石四斗八升七合
錢壹貫九百貳拾四文　○中略
下總國寄
高合千六百七拾九石壹斗壹升八合五勺　本途

附之儀、年々美濃紙帳面ニ書抜相添可差出事、

但上知之分、三拾ヶ年増減差引ハ、別紙ニ不及、右書抜帳面之末ニ認入べき事、

〔文化六巳年下総國拾壹村取箇免狀〕

酉ゟ巳迄九ヶ年定免　　香取郡

一高四百三拾九石六斗八升　　武田村

内

五拾壹石五斗壹升壹合　　無地高永引

貳石六斗貳升五合　　溜井池敷引

此反別貳反壹畝歩

小以高五拾四石壹斗三升六合

殘高三百八拾五石五斗四升四合

此反別三拾町壹反廿四歩

内

高三百三拾五石三斗貳合
貳拾貳町貳拾四歩　　田方

高五拾石貳斗四升二合
八町壹反歩　　畑

此譯

高六拾四石八斗壹升三合
上田三町貳反四畝貳歩　　盛貳拾

高六拾二石九斗壹升三合
中田三町五反九畝拾五歩　　盛拾七半

高百七石五斗三升
下田七町壹反六畝廿六歩　　盛拾五

高百石四升六合
下々田八町拾壹歩　　盛拾貳半

高三百三拾五石三斗貳合

小以貳拾貳町貳拾四歩

此取米百拾四石三合　　免三ツ四分餘
反五斗壹升八合餘

十二月

〔牧民金鑑五〕明和一丑年十二月三日呼出、彌左衞門申渡、

御取箇之義ニ付申渡

當御取箇之儀、上方筋關東共爲差風水損等も無之、一體出來毛宜敷趣相聞候、前々より定例之通、撿見歸著以後三十日限り、御取箇帳差出候筈之處、いまだ御取箇帳不被差出候面々も有之、如何之儀ニ候哉、當御取箇濟方等見合、致延引候儀と相聞、甚心得違之至ニ候、近來一體御取箇取劣候村々多候處、當御取箇之儀、前書之通無難之事柄ニ付、延享元子年御取箇辻を目當ニいたし、近來取劣り之分ハ、當年取戻候樣ニ出精可被致候、當御取箇各出精之次第ニ寄、支配高格別相減候積り申上ルニ而可有之間、可被得其意、尤是迄之出精之有無をも可相糺候間、御代官幷御預所被仰付候初年より、當丑年迄之御取箇、年々增減書付いたし、急ニ可被差出候、勿論當御取箇之差出帳、吟味ニ差戻候分も、右之趣被相心得、格別取增可被申聞候、右之通、奉行衆吟味役衆御評議上ニ而、被仰聞候間申達候、銘々請書、御勘定町奉行衆御宅へも可被差出候、

丑十二月

〔牧民金鑑五〕文化九申年八月二十七日達

御取箇附相減候場所ハ、御取箇帳へ添、減之一村限り被差出候儀ニ有之候處、近頃ハ右帳面不被差出、向も相見候間、以來之儀無據子細有之、減米相立候分ハ、前々之通り減じ、一村限り相添可被差出候、

文化十二亥年九月四日

私領上知有之節、初年ハ御取箇帳之內、別廉ニ相認可申處、近來相認不申分も有之、區々ニ付、右ハ前々之通、別廉ニ相立、國限總寄等ハ、是迄之振合之通組込、可被差出候、尤以來上知之分ハ、御取箇

等、莊屋組頭非分之割付仕之旨、每度後日爭論有ㇾ之間、無ㇾ紛明細に割帳可ㇾ被ㇾ申付ㇾ事、〇中略

四月

〔享保集成絲綸錄二十三〕正德三巳年四月

條々〇中略

一年々御代官より、村方へ相渡し候御取毛割付目錄、其村大小之百姓共、委細に承知すべき事、古來より之定法に候處に、近世以來名主莊屋等、其末々の百姓共に申聞せず、或は無用之費、或ハ非分之私有ㇾ之由相聞候、自今以後、御取毛割付目錄ハ、不ㇾ申およば、村入用之品々に至ても、古來定法之ごとく、其村中大小之百姓分明に承知之上、帳面に記し印判を仕し置、每年御代官中、村切ニ其帳面を被ㇾ見有ㇾ之、村中諸百姓等、其子細ヲ相尋られ、名主莊屋等非分之私も無ㇾ之、大小百姓共無用之費も無ㇾ之樣に、宜其沙汰有べき事、〇中略

正德三巳年四月十三日

〔牧民金鑑五〕寬延三午年十一月日申渡書付

一年々御取箇附之次第、石代等名主莊屋門前又ハ高札場ニ掛札いたし、寅年御取箇附幷石代掛ケ札いたし候迄差置、銘々替常々村方之者、御取箇之趣令ㇾ承知ㇾ候樣可ㇾ致候、右掛ケ札之儀ハ、去ル丑年申渡候得共、年中不ㇾ懸置ㇾ場所も有ㇾ之樣ニ相聞候間、猶又可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、〇中略

午十一月

〔寶曆集成絲綸錄二十一〕寶曆七丑年十二月

御代官御預りより差出候御取箇帳、只今迄御勘定奉行吟味役評議之上、取辻之多少相極候、自今ハ御代官御預りより御取箇帳差出候節銘々御取箇辻評議之上相極候增減其度々被ㇾ相屆、其上ニ而御代官へ申渡候樣可ㇾ被ㇾ致候、

小以米何百石　取ヶ帳ニハ平均一反ニ付何斗
　　永何拾貫文　　　　平均一反ニ付永何十文

此永を貳石五斗代々米四ニ割、夫ニ取石を加、是を總取米と見て、高にて割り、高ニ幾と知也、

外

一此所に新開拜見取場、其外小物成類記之、

納合米何百石
　　永何拾貫文

永壹貫文ニ五をかけて高五石と成、夫に五ツ免を掛、米貳石五斗と成、古來ノ定也、近來當歷知にハ、貳石五斗代也、五ヶ年十ヶ年平均にハ、壹石貳斗五升代也、

此納方

一米何斗　　　　　荏納

　此荏何斗　　　　但米壹升ニ貳升代

一米何斗　　　　　大豆納

　此大豆何斗　　　但米壹升ニ貳升代

一米何拾石　　　　米納

一永何拾貫文　　　金納

但永壹貫文を金壹兩代ニ仕、金壹分ニ永貳百五拾文を、四ツニ割、六拾貳文中を、壹朱ト云、三拾壹文貳分五厘を朱中と云、總永拾文拾五文朱中ニ立、まくり上べし、尤三朱より朱中迄、金壹兩六拾六匁替之相場ニ而銀上納、勿論其所古來の定も有べし、貫代も所によるべし、甲州に壹貫文壹石四斗・四升之所もあるよし、

右之趣にて、其所之古法を本として了簡有べし、新規成儀者、差支無之樣に能々考べし、

〔享保集成絲綸錄二十三〕寛文六年年四月

覺

一御年貢方金銀米錢小物成等迄、上納仕候百姓中割付壹人前ツヽ、委細書記之、壹帳に仕立、幷諸役入用、是又別帳に書載、莊屋小百姓不殘判形爲致、年々御代官に取置可被申、年貢幷諸役入用

或

酉御年貢可納割付之事　　　何國何郡何村

一高何百石

内　何石何斗　前々郷藏敷地引
　　何石何斗　當検見引

殘何百石　取ケ候ニハ高ニ讓ツ毛付讓ツ

内　何拾町　田方
　　何拾町　畑方

此譯

上田何町何反何畝何歩　　一反ニ付米何斗

此取米何拾石

中田何町何反歩　　一反ニ付米何斗

此取米何拾石

下田何町何反歩　　一反ニ付米何斗

此取米何拾石

上畑何町何反歩　　一反ニ付永何拾文

此取永何貫文、但上田ニ準永反取仕出、

中畑何町何反歩　　一反ニ付永何拾文

此取永何貫文

下畑何町何反歩　　一反ニ付永何拾文

此取永何貫文

何石何斗　　當撿見引

引小以何石何斗（小以とハ小〆の事也、以ハ集止也、囲也、一紙の締なりトモ合トモ云也、合ト書たる後、別紙書加たる所を部合と書也、又小以上の上略て小以ト云、）

殘高何程

此取米何程（毛付幾高ニ幾つつ）

（但此内に谷切、字限、悪地など有之ハ内譯仕、見違にて其分下げべし、）

外ニ

一何反歩　　見取場

此取米何程　　反何斗

一何反歩　　新開

此取米何程　　反何斗

一此所に野山沼川運上、其外小物成類可取分を立、或所により口米道米夫米等を記、重而津出

又ハ人足遣候節、相應に代米遣事もあり、

納合米何程（取箇帳にハ高ニ幾ツ、本取幾ツと記、外物を除、高にて割本取と云、但論五ケ年か十ケ年の上げ下げ付べし、）

内

一何程　　十分一大豆銀納或大豆小豆納

一何程　　三分一銀納

一何程　　米納

右之通、當何年物成取箇相極候間、村中大小之百姓出作之者迄立會、無高下致割符、急度皆濟可仕者也、

可納米銀迄さへ知るれバ濟と心得、地頭も村方も、夫なりに致置く仕來りと見へたり、右にも如記、割付鄕帳ハ、後年他領他村田地米金等之儀ニ付、公事出入等有之時、證據にも可成大切之品なれバ、縱私領遠國たり共、割付免狀ハ急度巨細に書記、重役調印に而渡し置度事なり、右割付免狀之認方振合不一定、其國其支配之引付にて區々なり、然れども其荒増を以て、末ニ雛形出しゝたり、

但割付免狀共撿見取なれバ年々渡し、定免村ハ切替之初年渡す時、奧文言ニ高取米永於無增減ハ、定免中、此割付可用旨書入相渡し、相違なければ年々渡ニ不及、破免ハ勿論、損地あるか、起返あるか、或ハ小物成諸運上等增減有之、少分ニ而も高取米永增減有之年ハ、定免中ニ而も割付相渡す、都而割付村方へ渡れバ、村中長百姓、五人組、判頭等、名主元へ呼出、割付拜見致させ、拜見證文迄、御割付得と拜見承知仕候、然ル上ハ御割付通、期月迄急度皆濟可仕旨相認、總百姓連印之書付、名主元へ取置、御代官役所へも寫に、村役人共奧印ニ而可取置也、

一掛札といふは、享保之初頃より起り、本百姓入作越石等に至まで、年々取箇を能く知りて、免割ニ虛妄なからしめん爲に、年貢高厘附反取委細ニ書分て、其村の高札場か、又ハ名主莊屋の門、或ハ戶口之上抔、諸人見安所ニ掛置、是を掛札といふ、此掛札下も役所ニ而仕立、村々へ渡す、御年貢納方等ニ而、村役人并姦邪之筋不相成爲なり、

（勸農固本錄）取箇割付認樣式

何年取箇割付之事

何國何郡
何村

一高何百石

內何石何斗　前々井路引

何石何斗　惡地引

歸り三十日限り、可差出旨之御定め二成る、若出來兼る子細有之、及延引時ハ、御取箇方へ日延を申上ル事なり、

一鄕帳ハ關東遠國共、其年十二月限差出、是又御取箇帳濟方遲く、其外諸證文等不濟差支有之、鄕帳仕立ニ差支ゆれバ、春ニ成差出事も有り、尤從御勘定所催促於無之ハ、御代官より延引之譯屆ニハ不及催促あれバ、難差出譯申立る事なり、尤三月限り差出せバ催促もなし、

〔地方要集錄〕一御料所御取箇差出帳、每年十一月限差上候、鄕帳十二月中、御勘定所へ差上候、定之通難成子細候はゞ、御勘定所へ斷仕候、

〔地方凡例錄七〕一割附免狀之事附り掛札之事

割付免狀共、百姓公納年貢之目錄也、上方關東に而名目違ふ、關東ニ而ハ割付と云、駿州より上方筋中國西國方ニ而ハ免狀と唱、國により下ゲ札と云所もあり、孰れも古來より其所の云ならはしにて、言の違ふのみ、別のものにハあらず、割付と云ハ、田畑上中下の反別ニ取米永を割付て取立るといふ儀也、又免狀と云ハ、古き詞にて、是程年貢ニ納べし、其餘ハ百姓の取分に免じけると云事成るべし、前條にも記す、厘附之事を免といふ同儀なり、上より下さるゝ、免を記たる書付と云心ニ而、免狀と唱共いへり、下札と云ハ、御料所にハ無き事なれ共、遠國之私領等ニ而、下ゲ札と唱る所もある由、其謂不解せ、按るに御料之割付免狀之樣ニ、高反別田畑之分り等、巨細に不記、可納米銀辻を記、免計りを付、村々へ渡所も有り、下ゲ札之樣なる端書ゆへ、下ゲ札と唱るなるべし、又先吏小宮山氏之按にハ、免狀同意に而、下さるゝ、年貢之書付と云定成るべしと有り、御料に而も、割付免狀いまだ出來ざる以前、假免狀といふて、撿見濟取箇極れバ、可納米永辻計端紙ニ書付、役所押切ニ而渡し、米拵之支度致させ追々取立、割付免狀ハ追而出來次第春ニも成り渡す、關東ニ而も、是ハ假割付とハ不云、假免狀と唱る也、右の下ゲ札則假免狀同然なり、遠國之私領故、其年

一御取箇帳ハ租税之元也、田方致検見、取箇を極め記、勿論定免村ニ而取箇増減無之共載之、前年之取箇増減を記、并前年より跡四ヶ年分取米永と差引増減を記す、其前六ヶ年分下ゲ札にして記之、都合拾ヶ年分之取箇高下を見する、尤一ヶ村限ニ認るにあらず、一郡限、定免、破免、検見取と三口ニ分厘を附、田畑本途見取共載之外納物ハ不載、一支配限總寄いたし、御勘定所へ差出す則御勘定所於御取箇方改之、取箇之高下を論じ、検見取破免之分、前年より減じければ、可相増旨再應御代官へ達し、據なければ引戻迄、少々取箇を増差出す、最初村方ハ御代官極置たる取箇なればバ、多分之増ハ成がたし、何程吟味強く共、御代官目鑑を以極たる取箇なれバ、可増筋詮無之、少も増ざればバ御勘定所吟味之詮もなく、御取箇帳いつまでも不濟故、無是非少々ハ増事あり、若村方へ難増ければ、無據御代官辨納儀も有、右吟味濟伺之通、御取箇被相極旨、御勘定組頭より口達有之、請書差出事也、郷帳割付共、都而此取箇を元にして仕立、其年御納所之元に成事故、至而大切成帳面なり、公儀并諸侯方、其外諸旗本ニ而も、家祿之元ニ成、地方第一之帳面なればバ疎略ニすべからざる事なり、帳面仕立振合ハ、末ニ雛形有り、

但旗本ハ勿論諸侯方ニ而も此帳面無之、其年之取箇割付を元として、納高何程と知る家も有り、是ハ甚不宜仕方なり、家祿之根元なれバ、取箇帳ハ有度事なり、高崎領ハ右ニ似寄たる取箇之元を記帳面ありて、是を御考帳と唱、其年之取箇極りたる上、年々の厘附帳添、於會所ニ御年寄并御勝手方、列席へ差出し一覧有、御取箇相濟候上、御勝手方地方掛り之面々へ御料理被下舊例なり、外諸侯方ニ而も、取箇極れバ免振舞と號し、掛り之面々へ、料理出る家も有之由なり、

○中略

一御取箇帳前々ハ十一月限差出定法なれ共、國所ニ寄、検見旬遲く、十一月中旬迄掛るも有りて、十一月中、帳面仕立出來兼ルニ付、享保年中より、御代官検見濟歸府、三十日を限り、遠國ハ陣屋へ

之、調濟たる上、御勘定奉行へ皆濟屆書差出す、屆書振合左の如し、　但糊入半切

私御代官所當御預所、武藏上野上總國高六万六千、五百貳拾石九升八合八勺四才反高貳百三拾九町貳反九畝貳拾七歩新墾濱反高壹町六反九畝拾歩、去丑御物成五千貳百四拾六石壹斗壹升壹合四勺五才、米貳拾四石七斗六升六合六勺、去子置米殘共、去丑十二月廿九日より當寅二月晦日迄、淺草御藏へ上納仕金七千五百八拾壹兩貳分永百八拾三文七分五厘、去六月廿六日より當寅五月廿六日迄、江戶御金藏へ上納仕候、

一小物幷口米代御藏米入用等、去丑年可取立分、米三石貳斗九升八合、去丑十二月廿九日より當寅二月晦日迄、淺草御藏へ上納仕金千百貳拾八兩壹分永百三拾九文四分九厘、去丑六月廿六日より當寅五月廿六日迄、江戶御藏へ上納皆濟仕候ニ付、御屆申上候、以上、

寅七月　伊之某

一御代官役所より村方へ渡す皆濟目錄ハ、村々御年貢米金銀役所へ納ル時、一村限りに通ひ帳村方へ渡置、上納之度々、當當之手代請取之、役所元帳と通帳ニ記、金銀ニ添、元〆手代へ差出せバ、元〆請取之押切印形いたし、通帳ハ村方へ渡す、又村方へ手代差出取立る時ハ、手代姓名ニ而請取書を渡す、是を小手形と唱、米ハ淺草御藏へ納、御藏奉行より納。札。相渡る、納札と云ハ、其内納たる俵數を小直紙に書、右ハ何之御年貢米請取候段、御藏奉行連印、御代官宛、且書にハ御藏方致ニ押切渡す、是を納札といふ、御金藏へ納たる金之納札も、同樣御金奉行連印に而渡る、米金銀とも皆濟之上、右通帳小手形役所へ差出せバ、皆濟目錄ニ引替、請取之證據として村方へ渡置、右二帳共仕立方之振合、末之雛形に記す、

右三品之書物を、地方之三帳と唱、高取米金銀、小物成、高掛、其外諸納物高內引共、三帳之員數少も不違樣相仕立、鄉帳皆濟目錄ハ、御勘定所へ差出、割付幷村方皆濟目錄ハ、御代官調印之上村方へ渡、後來若公事訴訟等有之時、證據ニ成大切之書物也、

結ぶハ、郷帳組の品々計也、郷帳に不組品々、物成詰ニハならず、郷帳の米永より起る納物、其外郷時に差出す品々等、一體米金之納總辻を記たる、納拂明細帳と云帳面有りて、淺草御藏御金藏へ納るべき、數品一事に面洩る事なし、郷帳仕組方振合の雛形末に記す、

但郷帳に若違有れバ、御代官差扣伺程の大切成る帳面故、違ひなき物に決し、以前ハ於御勘定所改る事なかりしに、三拾年以前より、御勘定之內郷帳掛り出來之當時ハ、御勘定所へ手代差出、相手として改る事に成たり、

一郷帳にハ五ケ年厘之上り下りを記し、五ケ年平均米之厘を以年貢の高下を知り、知行渡の物成詰も郷帳五ケ年之米を以致す事なり、○中略

一地○方○三○帳○とハ

一御○取○箇○郷○帳○

前條ニ著す通りなり

一御○年○貢○可○納○割○付○

是者御年貢米金銀、小物成、高掛、口米金、其外其年可納品々を書記シ、調印之上村方へ渡ス、委ハ末之條ニ有、

一御○年○貢○米○金○皆○濟○目○錄○

是者御年貢米金皆濟致たる上帳面仕立、御代官調印、御殿皆濟方へ差出す、國郡郷定免檢見郷等不致、一支配總縱リニ面高を記、本途見取米永、高掛、小物成、口米永、諸運上分一米金等、米ハ計立を付、其外諸御拂物代金を附、此拂を立、元拂勘定合せたる帳面也、此帳皆濟方へ差出し、地方元拂御金藏元拂とも、追々取立たる當○證○文○證文と云へ、年季有之類、或ハ其品ニよ永々元ニ組か拂ニ立るか之證文、何れも用るな證文といふ、當證文は、其年限り、元拂の證文なり、御勘定仕上ケ、證文合せ濟は上り證文になる、御勘定所に留る、差出せば、證文合冲、皆濟目錄之廉々に突合せ有

取箇帳　年貢皆濟帳　年貢掛札

なるを讃嘆し各感心しけるに時又云やう、向に初ケ條の掟には背るに非や、然りとて困窮の各に、此方より催促もなり難し、されど又御地頭にそむき、宗門の御箇條にたがふも又氣毒なり、いかがしなんとて、退て皆々考へて見よとて歸しけり、かくて村々の者ども立去りて、一夜談じけるが、翌日又一緒に來りて、皆々申談候に、仰の旨理り至極に候、此上は妻子を賣てなりとも、今年三分一上納可ㇾ申、殘貳分は暫御ゆるし給らば、明春と秋とに悉收納申すべし、此旨御聞きわけ願ひ奉ると、誠を盡して申ければ、各の志奇特なり、此旨尤可ㇾ然と許し候程に、兩年に事故なく納けり、機に應ずる方、殊に勝れたりと、人の稱し、

〔地方要集錄〕一關東方にては、御取箇御年貢之可ㇾ納目錄を、百姓江年々渡し置候を、年貢割付と申候、駿河より上方中國西國にては、年貢免狀と申候、所ニ寄下札共申候、

一御代官所支配限に御取箇を郡切に仕都合之御取箇を書上候帳を差出と申候、一村限に郡分銘々御取箇附、幷有とあらゆる小物成運上等、幷山林等迄記し候を、御取箇鄕帳と申候、

〔地方凡例錄七〕鄕帳發之事

鄕帳の濫觴を尋るに、古來は諸事大樣にして、租稅の法も細密ならず、其年々御代官御取箇を極め相納め、公儀に而多少の御穿鑿もなく、厘割と云も無ㇾ之濟來し處、大猷院樣家光○徳川御代、慶安二己酉年、諸御代官へ被ㇾ爲ㇾ命、年々御取箇幷小物成高掛り物等可ㇾ納分帳面に仕立、御勘定所へ可ㇾ差出旨に而、御案文相渡り、仕ㇾ立之、御取箇鄕帳と名付、此時より差出事ニ成たり、尤其一村の土地より出る品類を記す帳面たるに依て、是を鄕帳といふ、租稅の元にして、可ㇾ納品々是に洩る事なく、至而大切之帳面なり、則公儀御納所の根元たる故、万一鄕帳に算違書損等あれバ、御代官差扣伺定例也、鄕帳に載るハ、可ㇾ納品々の元にして、是に掛る口米永、或ハ出目米延米、又ハ年々増減有る諸運上、分一臨時物等ハ不ㇾ載ㇾ之、土地より發る數品計りを記す故、知行渡之時、物成詰にして高に

め、繩打始り、何反何町と云事出來、又石盛も付て、一石十石百石と積り上げて、日本國知行高定まり申候、繩打たんれん功者有て、所務有之と申候、其かいもなく無作と年貢催促無詮事と申候、地頭により水損に百姓の妻子を入、年貢米取事も有之様に見へ候、是もせひなき事に候、

〔寛の須佐美追加二〕間部氏の高崎を領せられし頃、十五ヶ村の民、未進を不納事三年に及べり、様様に催促すれども、不納して云やう、我等困窮納べき力なし、此上は人々が首を召るべしとて、徒黨すべき摸様なりしかば、諸役人うれひてさまざまに計れども、事ゆくべしとも見へざりけり、足輕の一人云、あはれ予がかゝりたらば、たやすく納させんと云しを、長臣の許に聞ゑて、呼出し代官になしけり、かくて其村長の許に往て、我この役になりぬれば、村中の民と艱苦を共にせざれば本意ならず、未進の事も納ざれば治たゝず、しかりとて納べき力もなきに、しいて責べき様もなし、心を一つにしてはからひたらば、其術も亦出來ぬべし、とかくに睦しからざれば調がたし、先暫逗留して村中の様をもとくと見屆べし、一兩日中に、村々の民どもを呼集めて逢ぬべし、今日は先休息せんとて打とけかたり、そこら見廻せば、一間なる所に持佛堂有て、一向宗の念佛本尊を置たり、そこにて云やう、此村は一向宗なりけり、幸某も同宗なり物事申合にも宜こそとて、その日を過し、次の日より村々の邑長を始め、總百姓までつどひ來けるに、前の如く云て、さて此度我等被仰付も、未進の納らざる故なり、さらばとて人々産業を失ひては、君の御爲にもならざれば、末々油斷なく納べきと心得て、當分先其事には及まじきと云ければ、皆喜ぶ事限なし、又云やう、此村は一向宗のよし、十五村ともに一宗なりやと問ふ、一同にさの如しと答にし、然ば我も同宗なり、彌申合べしとて、宗門の尊き事などしばし語ければ、皆喜びてうち解たるさまなりけり、そこにて各宗門の御箇條持たるにやと問に、誰々が持しと云、それを取寄せて見べしとて、人をして讀ましむるに、第一ヶ條に守護への收納怠べからずと有、一編を終て後、その掟の殊勝

右次郞九郞御代官所、去々未年御年貢金不納之儀、先達而被申聞候、書面之趣ニ而ハ譯も相立候事候間、不納金千三百兩餘、拾ヶ年賦ニ上納仕候樣申渡、只今迄之通、御役相勤させ候樣可被致候

御勘定奉行へ

美濃郡代
青木次郞九郞

十一月

〔御觸幷御書付留〕御代官所御預所御物成皆濟之儀、享保年中、御吟味之上、國々期月御定有之、右承知之事ニ候得バ、期月迄ニハ皆濟可有之事勿論ニ候處、近來ハ期月ニ至候而も、納方捗取不申趣被申立、御勝手方掛りより及催促候、度々納之日限書付被差出候得ども、期月相滯如何ニ候間、難船其外吟味ニ付、其分之御收納無據延置候ハ格別、右子細も無之分ハ、各心掛之淺深、出精之甲乙ニ寄、假令取立捗取がたく候村方ニ候とも、期月過格別遲納可被致筋無之ハ、畢竟皆濟可相成面々も、外々之納方を見くらべ被及延引候類も可有之哉、左樣にハ有之間敷事ニ候、年內又ハ期月前皆濟之分ハ、御褒美をも被下置候程之儀ニ候得バ、期月過候儀無之候樣、以來之儀ハ急度可被相改候、若無謂皆濟及延引候ハヾ、其段申上候而可有之條、可被得其意候、

明和三亥年六月

〔御觸幷御書付留〕各御代官所御預所期月過、米納可有分、追々申渡候得共、納方捗々敷於無之ハ、以來何國何郡何村未納何程ヅヽ有之旨、內譯書御勝手方掛より申達次第、早々可被差出候、未進有之村方へ、直ニ糺之もの差遣候歟、又ハ品ニ寄、其村方名主組頭或ハ總代限、未進高之分申渡次第差出候積、兼而取調可被置候、右於御殿久世丹後守殿被仰渡候、

天明八申年七月

〔石川正西聞見集坤〕一昔は田畠何反幾畝といふ水帳もなくや、みにて候へども、太閤天下を御治

貞享四丁卯年十一月

定○中略

一未進之儀は、向後御代官之可爲辨濟、但他所江相渡候所、前年之物成、翌年五月までの內、於有之は、所を請取候方より取立之可相渡、五月以後共、前年之未進於有之は可難立、前廉御勘定所江可相達事、○中略

以上

貞享四卯年十一月日

〔享保集成絲綸錄二十三〕正德三巳年四月

條々○中略

御年貢之事、自今以後、毎年春中御勘定所より吟味有之候間、御代官中支配之村方、上納米金等未進無之候樣、急度催促可有之候、若百姓共及難澁候者有之バ、御勘定所に達し、其未進之輕重に隨ひ、過怠之沙汰可有之、若又百姓共難澁之子細も無之、御代官所之怠慢によりて、上納延引に於及には、其御代官より急度返納可有之候、國法によつて延實と申、當年上納すべき所を、來年之秋に至て、金納に仕候類も、其定の期月相違なく、上納せしめらるべし、若其期月至らざる內に、其支配之地、或ハ他の御代官に替り、或ハ私領の爲に引渡し候事有之においてハ、其未進之分ハ、當御代官當地頭より取立候而、上納有之候樣に申合、前御代官御勘定ニ立、各其子細ヲ以、御勘定所へ相達らるべし、若又其期月を過候ても、未進之分は、皆濟に及ばず候においてハ、たとひ其支配の地ハ他へ相渡候共、前御代官より未進之分を被取立、猶又皆濟に及ばず候においてハ、是又御代官より急度返濟有べき事、

〔寶曆集成絲綸錄二十一〕寶曆三酉年十一月

バ、不埒もなき事故、期限を越たりとも咎申付べからず、年を越ても極貧困の百姓ハ、麦作ニても收納せざれバ、公納の手立もなき事故、翌年五月迄容赦いたし、其上不埒もあらバ、右之通取計ふ事也、

〔憲教類典五之三地方上〕寛永十九壬午年六月廿八日

覺〇中略

一百姓年貢之儀、無損毛所申掠之、未進すべからざる事、〇中略

右條々被仰出候間、得其意、尾張殿御家中之外、御預分寺社之輩、町人百姓等、堅被申付候儀尤候也、

寛永十九年午六月廿八日　宮城越前守〇以下四名略

寺尾左馬助殿

右條々堅可被申付者也、

寛永十九年午六月廿八日

大目付中

兩町奉行

寛文六丙午年十一月十一日

御勘定所下知状

定〇中略

一年貢不濟内、借金借米爲返辨、他所江穀物等少も不可出之、若年貢致引負、百姓欠落仕候はゞ、年貢は五人組又は村中として皆濟仕、其上百姓可尋出事、〇中略

右之條々堅可相守之、若令違背輩於之有は、或死罪、或籠舍過料、隨科之輕重、急度可申付者也、

寛文六午年十一月十一日

一百姓抑留年貢之事、罪科不輕、於百姓地者、任地頭覺悟、可令所務、若有非分之儀者、以撿使可改之、(中略)

右五拾五ヶ條者、天文十六丁未六月定置畢、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一國中諸百姓地頭莊屋爲奉行、隨分あひはぐゝむべし、○中略每年相定年貢、堅可運上、毛頭於未濟は、直分莊屋名主中、怱可行重科事、○中略

右條々於國中、自今以往、可爲龜鑑之條、貴賤共令信用、全可相守、若一言於相背者、忽可處嚴科者也、依所定如件、

慶長二年三月廿四日　盛親在判
元親在判

〔地方要集錄〕一未進百姓年貢納兼候とて、田地取あげ候と申儀は無之法に候、未進百姓何共納候儀難成候而、上ゲ田地と申候而、田地を當分上げ候得ば、總作と申付、または小作共いたさせ候而、連々と未進分程取候へば、其後は地主へ田地を返し爲取候事も有之儀に候、

〔地方大概集九〕未進不納之事

一是は年貢米五俵納むべき百姓、三俵納め今二俵の分、期月を越上納せざるを未。進。といふ、五俵とも上納せざるを不。納。と唱、不埒の科甚重し、若當年の年貢、來年五月迄不納いたすにおいては、所持の田畑取上る法なり、尤拂ニハ致さず村總作申付、人夫は村役ニ差出させ、種肥養代の外ハ年貢作德とも殘らず取立、年を經たる上、元地主エ返し遣す事也、外の罪科と違ひ未進不納ニて取上たる田地ハ拂ニハ致ざる事なり、

但十月十一日又ハ十二月十日限など、其所々皆濟の期月遲速あれども、十二月中皆濟致せ

○中略

一壅水年貢未進分事、三寶院殿以雜掌可申入之由、衆議了、

(東寺百合古文書二十一)廿一口方評定引付(寬正七年丙戌)正月晦日　連署除之○中略

一矢野代官年貢未進、昨日催促人遣之由披露了、仍來三日、重駿河乘觀兩人、遣催促之由、治定了、

(東寺百合古文書二十三)廿一口方評定引付(文明二年庚寅)十一月廿二日(連署除之○中略)

一敎令院百姓三郎次郎二段年貢未進事、本米二石五斗五升、內只五斗八升二合納之、殘未進一石九斗六升八合之間、所詮彼下地二段麥被召下地可被召放由、衆議了

(宣胤卿記)明應三年二月十日、今日下青侍於越前、內裏御料所御年貢、去年分不致沙汰之間、早々可申遣之由、此間度々被仰下之故也、種物三百疋、昨日給之、又綸旨被下之、副余狀遣、號河北在所、於國有兩所、然近年以小所定御料所、申付之間、御年貢難澁致訴訟也、此御料所亂來一向不致沙汰之處、先年余爲御使下向申含之間、嚴重可致沙汰之由、捧請文、先爲御禮万疋進了、然其年秋歛、(年貢以前)朝倉(氏景、當時貞景父、)早世了、子貞景者年少、被官任雅意、其年三千疋進上以來、年々以三千疋爲皆納、雖被成武家之奉書、曾不承引、結句點定小所、及鬱訴之條希代事也、

禁裏御料所越前國河合、或號河北事、證文(慈照院殿(足利義政)御下知等案文被遣之)分明也、同名之在所錯亂事、非京都之相違、於國爲守護可尋決之處、不及其儀、御年貢抑留以外之次第也、凡不依御料所之有無、可存報國之忠節、天道無私、冥鑑有恐、所詮近年以小所點定之間、御年貢最少歛、於河合者、爲大莊之上者、如本法可致沙汰之由、可令下知之旨被仰下候也、仍言上如件、

二月七日　右中將重經奉

進上　中御門大納言殿

(甲陽軍鑑品第一)甲州法度之次第

間、今年閏四月廿四日尋下之上、同六月四日、同八月十四日兩度、仰大内豐前權守長弘遣召文之所、如長松執進時長同廿七日請文者、任被仰下之旨、企參洛可明申候云々、雖然于今不參、難遁難堪之科、然則建武四年以來四ヶ年未濟分、任注文可辨償之狀下知如件、

曆應四年十一月二十一日

左兵衞督源朝臣御判

〔建武以來追加〕國司領家年貢對捍地事（貞和二十二十三沙汰）

就貞永式目有其沙汰、地頭以下領主、不應裁許之日、雖改補所職、本所年貢失墜之條、背理致歟、仍自今以後、及下知違背之期者、收公彼職、補新司之時、可分付前司未濟五分一相應之地於本所也、次後年年貢事無同時之裁斷者、相論亦不可休之間、勘合每年分限、彼是共限永代、分付下地於本所之後、一向止地頭之所役、相互可全知行、但於今年以前分者、近年擾亂諸人窮困之間、以寬宥之儀、至所職者不能改補、前後年貢可避渡下地於本所之子細同前焉、若背此法、於割分之地、領主等致違亂者、任先例可被收公彼所領矣、次依他罪科、被召所領事、未進相積之由、雜掌經訴訟之刻、地頭等不慮被沒收件所領者、新給人治定之時、可分付下地之子細、相同初段焉、次得替地事、縱雖不充賜替、有他所領者、本知行之年貢可致沙汰之段勿論、何況充給其替者不及猶豫儀、宜令辨償也矣、次一旦領主事、或稱裁許未定之地、或號料所幷預地、領主等依申子細、動施行猶豫之間、涉年月之後、本所年貢亦失墜云々、太不可然、向後云未進、云現在分、可懸課當知行之仁也焉、次非分押領輩事、載其名字、難成施行歟、領主治定之程、先仰專使令撿納、有限年貢可勘渡本所雜掌矣、次武家領之佛神用、幷領家職預所等年貢事、不可違本所乃貢、仍子細同前焉

〔東寺百合古文書五十五〕廿一口方ヨリ定引付（寬正三年）三月廿四日　連署略之

一加賀未進等事被露處、當月中可致其沙汰候、若當月過之不進納者、於下地可百文遣候由、治定了、

知狀、結解難澀之輩者、任申請員數可成敗、猶對捍者、重以使者尋問實否、未濟之條、無所遁者、可改所職、於催促幷究濟期日者、且依其地遠近、且就未進多少、隨事之體可斟酌也、次前國司時、未濟分事、自今以後、可辨于先司矣、次同所領請所事、前々蒙下知、預御口入地之外者可顚倒、但康元元年以前者、雖爲私和談、不可有相違、弘安七年以後者、縱帶裁許狀、宜任國司之意焉、

〔古簡雜纂 卯〕宗像六郎三郎氏勝代朝秀申、肥前國晴氣保乙久安名內田地貳町五段、撿注年貢濟物等事、

右當名々主丹三郎兵衛尉跡、正中元年以下、打止撿注、抑留年貢濟物、不相從所務之由、朝秀就訴申、度々雖尋下、无音之間、以使節橫大路次郎入道祐西重加催促之處、如執達、去年十月十四日丹三郎兵衛尉跡通信請文者、氏勝申撿注年貢以下事、云撿注、云年貢、每年返抄炳焉也、所詮企參上可明申云々者、通信帶返抄之由雖申之、不出帶之間、爲不實歟、隨而捧自由請文之後、于今不參、不遁難澀之咎歟、然則於撿注者、任先規遂行之、至年貢濟物者、遂結解可令究濟者、依仰下知如件、

元德三年七月二十五日　修理亮平朝臣

〔東寺百合文書 ヱ 二十五之三十一〕請申太良莊去年御年貢未進事

右件御年貢者、數ケ度雖令申損亡、無御免上者、無力可致沙汰之處、去年爲不熟損亡之間、殊以當時最中者、堀蕨葛根欲繼身命之處、預御譴責之條、愁歎無極者也、可然者、被延來七月中、悉以無未進可致其辨候、仍請文之狀如件、

建武二年三月四日　太良莊百姓等請文

〔東寺百合古文書 二十七〕東寺雜掌光信申周防國善和莊內﨟行方事

右如雜掌所[illegible]當我七郎左衛門尉時長建武四年五月十六日請狀者、每年寺用米京定肆拾石、十二月中可運送之由載之、而同年以來至去年四ヶ年分百六十石、內百拾三石漆斗餘未濟之由訴申候

彼年以後結解、且可究濟未進、若此上有於致對捍者、申下官使、可令加苛責也、○中略

以前條々、依仰下知如件、

承元元年十二月日　　散位紀朝臣

〔貞永式目〕諸國地頭令抑留年貢所當事

右抑留年貢之由、有本所之訴訟者、即遂結解、可請勘定、犯用之條、若無所遁者、任員數可辨償之、但於為少分者、早速可致沙汰、至過分者、三箇年中可辨濟也、猶背此旨令難澀者、可被改易所職也、

代官罪過懸主人否事

右○中略代官或抑留本所之年貢、或違背先例之率法者、雖為代官之所行、主人可懸其過也、

〔新式目〕弘安七五廿

御年貢定日限可徵納、若過期日者可被召所領事、

〔新編追加雜事〕本所幷國司領家所當年貢事

領主等、致未進對捍之條无謂、任被定置之旨、可致其沙汰之由、可被成御教書於六波羅、以此趣可被仰五方引付歟、

正應三年十月十六日　　陸奥守判

相模守判

越後守殿

丹後守殿

〔御成敗式目追加〕國領地頭等可濟年貢事元亨二正十七

右臨西收之期者、致急速之沙汰、翌年二月可令皆濟、縱又雖京進、不可過六月、若抑留之由、雜掌訴申者、遂結解、可辨償之旨下奉書、不叙用者、託使者可催促之、郎及參勤請勘定者、可遣其返之由、可成下

右衛門佐御局

信濃國四宮莊地頭不進辨年貢幷領家得分由事〇中略

已上所々、尤可有御成敗之處、凡如此之訴訟者、觸來者、全不可致沙汰法也、善惡於御定者、不能左右事也、以條々令沙汰者、世間人定似偏頗之由令存歟、仍今度無御沙汰也、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年四月十八日辛丑、美濃國犬丸菊松高田鄕等地頭對捍乃貢事、同國時多良山地頭玄番助藏人仲經不從神事由事、就在廳申狀、被下院宣之間、二品〇源賴朝所被遣御下文也、

下美濃國犬丸菊松高田鄕地頭等

右犬丸菊松地頭字美濃進上高田鄕地頭保房等如私領知行、不致所當以下勤之由、依在廳訴申、自院被仰下、仍可致勤之由、度々下知、猶以對捍之間、重所被仰下也、然者度々院宣其恐不少、於今者件兩人地頭職可改補他人也、早可退出鄕內之狀如件、以下

文治六年四月十八日

五月廿九日壬午、御隨身左府生秦兼平、去比進使者、是八條院領紀伊國三上莊者、兼平譜代相傳地也、而自關東所被定補之地頭、豐島權守有經於事對捍、抑留乃貢、早可蒙恩裁之由訴申、仍任先例可沙汰濟物之旨、給御下文之間、彼使者今日歸洛云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年七月廿四日丙午、新熊野領安房國群房莊領家年貢事、有去年未濟之由訴出來、此事及度々之上、至今者暫召放地頭職、點當時得分物、補去今兩年本所乃貢之後、於可返賜否事者、追可有御計之由被定云云、行政奉行之、　十月十七日己巳、美濃國地頭等所當雖濟事、被仰下之間、早可令催促進之旨、今日被仰相模守惟義之許云云、

〔吉田社文書上〕可早注進去建久九年以後年貢進米事

右年々未進雖有其數、一切不致沙汰云、諸莊園云諸國、無此例、住人等所行、未曾有事也、彼且遣進

事也、所謂越前國北條殿眼代越後介高成妨國務、般若野莊藤內朝宗、瀬高莊藤內遠景、大島莊土肥次郎實平、三上莊佐々木三郎秀能、各或三年或一兩年煩所務、抑乃貢云云、二品殊令驚給、速可止妨之由、面々可被仰含之由云云、

〔吾妻鏡七〕文治三年四月十八日己丑、御家人平九郎瀧口淸綱、就領所居住美濃國之間、募武威不隨國衙下知、對捍乃貢、令過言召使之由、依在廳之訴、早可令尋沙汰給之旨、所被下院宣也、仍成御下文、副請文、被遣帥卿〇藤原經房之許云云、平五盛時奉行之、

誠不善の物にてありけり、口の落合ぬさま、猶奇怪也、家人にてありながら、いかでか君にあしきさまの見參に入れんとはするぞ、

美濃國內淸綱地頭所未濟爲先對捍國催之由、依在廳訴、重自院所被仰下也、就中口不落合、放言を致之旨有聞、返々不當事歟、自今以後、可隨國衙下知、若猶令對捍者、早可離散國中、仰旨如此、仍以執達如件、

四月十八日　盛時奉

平九郎瀧口殿

〔吾妻鏡八〕文治四年二月二日戊辰、所々地頭等所領已下事、自京都或屬強縁、或獻消息、愁申人々多之、仍有其御沙汰、而處廷尉公朝自去年冬在鎌倉、近日可歸洛之間、待其意爲令披露、彼訴條々載篇目於一紙、可與公朝之由云云、彼公朝下向之次、消息等所有其沙汰也、

實殿御事書云

越後國奧山莊地頭不當事

修理大夫家

尾張國津島社板垣冠者不辨所當之由事

未進年貢抑留

一出羽　越前　能登　越後

右ハ七月皆濟之積

關東筋、

一伊豆　相模　武藏　安房　上總　下總　常陸　上野　下野

右ハ正月皆濟之積

〔天明集成絲綸錄三十四〕寶暦十辰年五月

御勘定奉行へ

遠國御代官期月前皆濟仕候もの、初年ハ二ヶ年續候上、御褒美被下、夫より引續皆濟仕候得ハ、毎年被下候、向後ハ期月前皆濟仕候ハ、關東之通、初年より一ヶ年ニ而、御褒美被下候間、其趣可被心得候、

〔吾妻鏡六〕文治二年二月廿八日丙子、被申京都條々、有其沙汰治定云云、

一仰五畿七道諸國莊園、免除兵粮米進、可令安堵土民事、

依此米催促事、民戸殊費、於今者殆無乃貢運上計之由、頻有領家訴之間、及此儀、然者賦遣使者、可觸廻之由、可被仰北條殿（時政）者、〇中略

以上兩條、可被申帥中納言（〇藤原經房）者、

三月十二日庚寅、關東御知行國々内、乃貢未濟莊々、召下家司等注文、被下之、可加催促給之由云云、

六月十一日丁巳、熊野別當知行、上總國畔蒜莊也、而地頭職者、二品（〇源頼朝）令避付于彼人給、於其地下者、上總介、和田太郎義盛、引募之處、各背本所使下知、不辨年貢等之間、訴申之上、已欲令言上京都之旨、達二品御聞、殊聞食驚、今日爲主計允行政奉行、一事以上隨使下知、可致沙汰之趣、觸仰于件所人云云、

十七日癸亥、梶原刑部丞朝景、自京都進使者、執申内大臣家訴事、是家領等爲武士被押妨

一三河　遠江　駿河
右ハ三月皆濟之積
一伊勢　甲斐　美濃　飛驒
右ハ四月皆濟之積
五畿內筋
一山城　大和　河內　和泉　攝津　近江　丹波　播磨
右ハ三月皆濟之積、但二條御藏詰有之年ハ、四月皆濟之積、
中國筋
一但馬　隱岐　美作　備中　備後　讃岐　伊豫
右ハ四月皆濟之積、但二條御藏詰有之年ハ、五月皆濟之積
一丹後　石見
右ハ六月皆濟之積
西國筋
一筑前　筑後　肥前　肥後　豐前　豐後　日向
右ハ五月皆濟之積
北國東國筋
一信濃
右ハ二月皆濟之積
一陸奥　佐渡
右ハ四月皆濟之積

坂出帆之積、此度廻船御用達方へ申渡候間、其段兼て村々ニ而相心得、定船廻着次第日相不手間
取、御米計立俵拵等入念、船方へ可引渡、若船方之もの心得違等申聞候ハヽ、其段支配御代官手代
御預所役所人へ申達可受差圖、私ニ爭ひ、其間御廻米引渡、出帆延引ニ相成候樣成儀爲致間敷候、
江戸大坂御藏水揚之節も、右ニ準じ受取渡し日間不取樣可致、且是迄廻船方御用達どもへ、運賃
之外割增壹割五分ツヽ被下候處、此度五分相減、以來ハ壹割ツヽ被下候積、依之村々より右廻船
へ積込相廻候、欠米用意之分、運賃割增も右ニ準じ、當卯年分より壹割之稱ニ而可相渡候、此段笘
屋久兵衛、細田屋勘左衛門、筑前屋五郎兵衛へ申渡候間、其旨被相心得、村方之ものへも被申渡候、
以上、

文化四卯年十月

（御觸幷御書付留二）卯〇天保二年　二月廿四日出羽守殿御直御渡有之候御書付寫

御代官所御預所より差出候、地方御勘定帳、翌年分加印候處、近頃ハ相廻候儀も有之、且又御金藏
御勘定帳之儀も差出方及延引候趣ニ相聞候、畢竟御年貢米金諸拜借年賦返納金等、期月通り不
相濟向も有之故之儀ニ候、依之向後右納方ハ勿論、御勘定帳之儀も差出方不致延引樣被申渡、御
勘定所ニおいても、可成丈手繰いたし、加印之儀、享保之度相達候通り相心得、翌十月限可被差出
候、若子細も無之相延候ハヽ、銘々不念ニ可相成候條、其掛々之組頭幷御勘定所へも可被申渡候事、
此度右之通、水出羽守殿御書取を以、被仰渡候間、銘々得其意、諸伺等無遲滯被差出、尤御年貢金米
諸拜借年賦納金、期月之儀、前々も相達し、銘々心得候儀ニハ候得ども、猶又左之通り相達申候、

卯二月

諸國御年貢皆濟期月

東海道

三月期月之國ハ　初納九月晦日限　二納十二月同　三納二月同
四月期月之國ハ　初納十月限　二納正月同　三納三月同
五月期月之國ハ　初納十一月限　二納二月同　三納四月同
六月期月之國ハ　初納十二月限　二納三月同　三納五月同
七月期月之國ハ　初納正月限　二納四月同　三納六月同

右之通、國々期月ニ準じ、納割相定候間、被得其意、期月前皆濟可有之候、尤前書之通り皆濟被致候得者、御褒美被下置候事ニも候間、各出精可有之事ニ候、

安永元辰年十一月

〔牧民金鑑八〕天明八申年十一月

各御代官所御預所御年貢米金銀上納皆濟期月之儀は、其國々に應じ、前々御定有之、安永元辰年金方納割賦之儀も、申渡有之候得共、畢竟期月之儀は、御廻米積立候湊々より、江戸大坂其外江相廻し候、海上遠近有之故之事ニ而、金銀上納に拘り候儀には無之、勿論遠國陣屋においても、都而米金銀共、其年中に取立米ハ郷藏江詰置、海上船足立次第、空船廻著之上積立候事故、米方之期月ニ候、依之此度相改申渡候間、金銀ハ以來關東に準じ、其年内より上納方捗取候様、出精可被取計候、

〔御觸幷御書付留二〕申渡

五畿内　中國　西國筋　讃岐　陸奥　出羽　能登　佐渡國　支配

御代官
御預所役人
へ

右國々御料所村々、御年貢御廻米籾積立候廻船之儀、以來冬廻は十二月限、春廻は三月中旬限、大

立置村役人一己の私曲を以、日延等願出る儀儘ある事也、

〔享保集成絲綸錄二十三〕寛文六午年四月

覺

一御年貢收納之金銀ハ、早速御金奉行衆へ可被相渡之、翌年春夏之内中勘定目錄仕上、三年目三
四月之比、必可有皆濟候之事、〇中略

〔牧民金鑑八〕元文二巳年九月申渡

四月

各御代官所本途小物成諸運上共、金銀納之分は、極月翌正月二月迄皆濟可被致候、且又小物成諸
運上返納物等之類之內、右之通皆濟難成分は、三月中を限り急度皆濟、不納無之樣可被相心得候、
但右之通致皆濟候ニ付、諸石代幷夫食種貸返納物石代納等致候類、直段伺之儀、例年時節後ニ
候間、皆濟前間合候樣、向後極月を限り、伺書可被差出候、若難差出譯候はゝ、其節可被申聞候、且
又廻米江戸着期月伺之儀追而可被相達候、〇中略
右之通可被相心得候、以上、

巳九月

〔御觸幷御書付留二〕是迄御代官所御預所之內、二三ヶ國被致支配候分、其國々ニ皆濟期月有之候
ニ付、米金銀納札之壹ヶ國之國譯無之候而ハ、期月前皆濟之節、紛敷相見候間、向後ハ米金銀上納
之度々、多少ニ限らず、壹ヶ國限り納札取候樣可被致候、

寶曆十一巳年八月

〔御觸幷御書付留二〕諸國御年貢金納方定

二月期月之國ハ　初納八月晦日限　二納十二月同　三納正月同

〔朽木文書四〕補任　若州鳥羽庄金輪院知行分年貢之内、契約切米、國定貳佰捌拾石事、爲御代官職、嚴密に可取沙汰候、就其引替之月宛之事、自二月至八月捌貫文、毎月晦日に可有運上、但貫別加肆拾文宛利平、以來秋年貢之内、如諸算用、十月和市可被引召、相殘年貢米、連々運送、十二月上旬、可有皆濟、同分一貳拾捌石被引可有勘定、然者雖爲何个年、不可有相違候、万一無沙汰之儀候者、雖爲何時、可有改易者也、仍補任狀如件、

文明九年乙酉四月廿二日　富倉藏人丞存久花押

朽木信濃守殿

〔地方凡例錄四〕一夏成金發之事

關東之夏成、上方之三分一銀納、奥州之半石代、甲州之大切小切、何れも畑年貢なれ共、關東計夏成迚夏納む、餘國は秋成と一ツに納む、九州抔には夏石迚、元祿頃迄、麥に而納る所も有たる由、今はなし、尤關東之夏成も麥石迚別には不掛、畑取永之内を夏納故夏成と云、餘國秋成と一同に納るに遲速有迄に而、關東夏成とて、取箇の強きにはなし、然共麥石無之共、國々一體之取箇、秋成の内に籠り、古制とは大に違强成たれバ、秋糧夏稅と二季に納るも、關東夏納毛同然也、

〔地方大概集九〕銀納取立方之事

一村々撿見相濟、取箇米銀辻取調の上、假令バ銀拾貫目上納いたす村方なれバ、初納銀六貫目十月十日限、二納銀三貫目十一月十日限、三納銀壹貫目十二月十日限、右三度ニ急度可相納旨、村々銀納高ニ應じ、右の割合を以九月中支配所村々エ觸渡し、期月に至れバ、急度取立べし、尤國所ニより收納の遲速あれバ、期月の儀見計可申付事なれども、大概年内皆濟の積取立る方よろしかるべし、都て百姓取扱は餘り寛優なれば、種々の故障申立るものなれバ、日延等無據筋もあらバ承屆、大體の儀なれバ期月無滯取立る方、百姓爲ニもよろしきものなり、小前上納銀ハ嚴しく取

一〔於料所保被勤仕之地非此限〕可進濟御倉、但至貢金貢馬等之類者、可守先例、若注進之田數以下減少之條、支證出來者、於餘田者可被收公也、

一參期事

隨遠近國被定其期畢、守彼明分可進納御倉、若致懈怠者、參期已後三ヶ月中、以一倍可進濟、此上猶令難澀者、可被付當年所務於他人、

一難澀輩事

或稱無催促、或隱密管領之地、令難澀御年貢者、隨指申之仁出來、可被改易所職矣、〇中略

雜訴決斷所牒其國衙

諸莊園鄕保地頭以下所領等御年貢幷仕丁役事副下御事書一通

牒、諸莊園鄕保地頭職以下所領等、御年貢幷仕丁役事、任御事書之旨、不論本領新恩、當時管領田地分、任實正令注進之、以正稅以下色々雜物等所出廿分之一、守參期可進納御倉之由、相觸國中、急速可申散狀者、牒送如件、以牒、

建武元年十月日〇署名略

〔香取神宮古文書纂十三〕一良田郷、今年地頭所務年貢辨十一月中、十一月巳後、下地社家江可渡也、次昨日十日渡申、諸神官散在地半分渡申所實也、然而今年於所務者、地頭方有知行下地、十一月以後、社家江可歸也、於年貢者、十一月中悉可辨也、若過十一月、罪遂發所下地半分社家江可渡也、仍爲後日狀如件、

永和元年七月十日

政家在判
胤幹在判
胤泰在判

納期

三斗七升、延米の場所、込米貳升加へ、三斗九升にて納る事も有し也、壹年にして止む、御藏納の節ハ、壹俵三斗七升たつぷりとあれば納る也、

一駿遠參ハ關東並に、古來より本石納成しに、元祿十六未年、本石相止、遠國並に計立に成、正德三巳年より、貳升出目を外物に立納る、是ハ未年古法改り、計立に直り候故、申年より貳升出目を外に納、百姓の難儀と成也、計立にしたるが、誤りならバ元の通り本石に直すハ尤の事也、外貳升も出目を納に立るハ、誤の上の誤りなるべし、

〔吾妻鏡十四〕建久五年七月十六日乙亥、信濃國大井莊乃貢事、於今年者、十一月中可究濟京都之旨被仰下云云、

〔吾妻鏡十八〕元久二年三月十二日己巳、諸莊園乃貢濟期事、雖被定之、勵及對捍之間、向後或隨遠近國、被儲其期云云、宗掃部允奉行云云、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年四月廿日庚戌、國司領家年貢事、殊可致精誠辨濟、若春三月已後、就此事本所訴訟出來者、可被任地頭於本所申分之由、被仰出云云、

〔新編追加雜務〕一所領年貢事弘安七六

遠國者翌年七月以前、令究濟、可遂結解、近國者同三月中、可遂結解、雖无未進、期日以前、不遂其節者、別納之地者、可落政所、於例鄕者、可令改易所帶也、

〔貞永式目追加〕一國領地頭等可濟年貢事元亨二正十七

右臨西收之期者、致急速之沙汰、翌年二月、可令皆濟、縱又雖京進、不可過六月、〇下略

〔建武年間記〕諸國莊園鄕保地頭以下所領等御年貢事

一員數事

不論本領新恩、當時管領田地之分、任實正不日可注進之、以後正稅以下色々雜物等、所出廿分之

缺米込米

にて米を計らせ、御覽被成候へば、百姓共申上候如くにて、島田代官切腹被仰付候、其比我等(川正本)國通り合せ樣子承り候つる、

〔地方凡例錄　五〕一缺米込米之事

缺米と云ハ、遠國より之廻米、海上遙ニ運送する故、場所ニより年を越、江戶著する事も有、汐風ニ當り缺米等出來、或ハ澤手米抔ニ而缺減相立、御藏納之節不足立故、壹俵ニ五升三升ヅヽ之積、御城米之外に、勝手次第積來りたる處、近來定法相立、本米壹石ニ缺米三升ヅヽ之勘定ニ而、御城米同然、送り狀ニ書載積廻し、御藏庭へ致ニ水揚、御米內拵（内拵と云ハ、御米壹俵ヅヽ、俵へ改指入れ、内實之善惡改、掛廻し、不足之俵へハ、差米なと入な云）、御藏納濟之上、缺米殘りたる分、御藏役所より相達、切手を以、上乘之者方へ引取、納宿引請賣拂納入用清帳へ（御藏納諸入用を清立ル勘定帳を清帳と唱ふ）書載、勘定いたし御藏役所幷支配役所へも差出す、近年ハ右清帳之白板札ニ書記し、村々名主門口ニ可ニ掛置一旨被ニ爲一命、御年貢掛札同樣掛置、古來之如く缺米餘計ニ積來、百姓勝手次第取計儀ハ不ニ成一定法に成たり、

一込米と云ハ、三斗七升入ニ而も四斗貳升入ニ而も計切入而ハ、御藏場に而廻しを出したる時、不足之儀有之故、（廻之節缺立候へハ、總納俵數に掛ケ、缺米だけ致ニ勘定一、別段に御藏納致す事也）壹俵に壹升餘ヅヽも餘計に入る、一體御藏納廻之節、仕舞之壹升ハ溢れる程山盛に無ニ之而ハ、壹合缺に相立に付、旁餘計を入る事也、是ハ升目勘定之外に而、全百姓之損失也、

〔地方落穗集　五〕込高之事

一遠國よりの廻米ハ、海上遙に運送するにより、場所に寄、年を越、江戶著する事も有り、然る時ハ船の中にて鹽風に當り、ふけ米も出來、又ぬれ米、澤手米等も有、御藏納の節不足米相立に付、減米と名付て壹俵に付五升三升宛の積を以、別段に米を廻す也、關東ハ間近き故、壹俵の內へ三斗七升ゝ外、壹升又ハ壹升五合程餘慶を入れて廻す也、是を込米と云也、三四拾年以前地廻りの廻米

〔地方凡例錄五〕出目米延米之事附り一延大豆延異總之事

出目米と云ハ、關東之御料所にハなし、本石計立なき遠國にハ有り、尤悉有にハあらず私領上地等、其外にも前々之引付ニ而、年貢米之石數ニ掛け相納む、勿論員數ハ區々なり、羽州にハ本途米壹石ニ貳斗ヅヽ之出目米有り、奥州石川郡ハ本途見取米とも、壹石ニ貳升、田村郡ハ本途幷口米ヘも壹石ニ貳升ヅヽ、出目掛る、白川郡ハ本途見取三斗五升に貳升之出目あり、當郡ハ、關東並本石計立之外もあり、是にハ出目不掛、此外諸國此類何程も有べし、駿遠三三ケ國、古來ハ本石納なりしに、元祿十六年より遠國並計立納に成、其後正德三巳年より、計立之上に壹俵に貳升出目を掛け、外物として取立る樣になり、百姓難儀なる事也、私領ニ而ハ出目米を延米とも唱る、御料ニ而も往古ハ延米と號、員數極らず、斗桝ニ山盛ニ入、次第ニ計而納し故、三斗五升入之米四斗餘も有たる由、下之難儀を被為厭、其後延米と云ハ相止み、今ハ御料に延米之名目なし、何れ出。目。米。延。米。一。物。兩。名。なり、前條にも申如く、上州群馬郡之内高崎城附村ニハ、本途米壹石に四斗六升ヅヽ之出目あり、是を四六之延と唱る、ケ樣之類、關東遠國共、餘り不及聞延米也、關東ニ而私領上知に成たる村、三斗五升に貳升出目抔之村方ハ、個之上計立に直し、出目米延米之名目を除くも有り、右上州四斗六升、羽州之貳斗出目抔ハ、籾摺より發りたる延米なれ共、奥州駿遠三等之出目米ハ、籾摺より起りたるにハ非らず、關東之本石計立に類したる出目なり、此類より上方筋遠國にもあり、何れか年貢之石數に掛け、別に納る出目米ハ、定石代直段に而、多分金銀納也、間にハ米納之場所もあり、出目米を出目石と唱る所もあり、

〔石川正西聞見集坤〕一駿河の内島田の代官、年貢米升の上を高くのせて、納め取て、其のりめの出目の米をば私欲に仕候を、百姓共迷惑がり、家康樣御通りの時、御目安を差上上聞に達し、御藏の戸をはやく御閉させ、御藏の奥の壁を切明け、米を二三俵御取出させ、御前に毛氈を御敷せ、其上

り格別直段能き代金納に成候由、尤籾壹俵ハ四斗貳升入の米を、五合摺の積を以八斗四升入也、年々大方右村々一統に入札にして買請引分俵數に隨ひ金納にせしと也、然るに成年右籾領主にて直摺立の積にて入札無之、右之趣被相願候處、領分籾納の村々、摺立の儀達て相願候に付、然る上ハ摺立米を以、上納可致旨被申付、摺立奉行へ申付爲摺立候處、籾壹升を六合摺に致し、籾壹俵にて摺立米五斗四合宛出候ニ付勘辨を以、右の内貳升四合ハ百姓に給り、殘四斗八升を壹俵として、年々米納に可致旨、米納の分一統に、右の積りに被申渡、夫より籾納相止候由、其後右村々上地に成、御代官所と成し節、俵入の儀ハ御料一統に四斗貳升入に相成、外六升の出目米別段に納被仰付、今以て是を納、四六出目と申也、是等の儀、御料へ相濟候節、私領役人心得を以、俵入を郡中并四斗貳升入として可相渡事也、都て籾摺の儀は、其籾性に寄、又は籾の拵へに寄て、六合四五勺迄も、至て實張能ハ七合迄も摺もの也、然れ共平均に如斯にハ無之、深場所又ハ龜田の稻、或ハ下出來の稻抔に、五合摺にもあたらず、總て高場上出來の稻ハ實入能く、籾の皮薄く、米を餘慶に摺也、深田水冠り下出來の稻ハ、籾の皮厚く、米の實張少く、摺立の時打くだけ、或ハ青米死米多き故、摺立米少々なでハ無之もの也、如斯甲乙を平均にして、五合摺の定法ハ定めたるもの也、是古晳の勸作也、群馬郡は高場にて用水の掛引自由にして、土地又宜敷、麥田二毛作の所也、依之籾も多分に米を摺べし、甲乙なき所なり、

〔地方凡例錄五〕一出目米延米之事附り一延大豆延眞綿等之事

一上州緣野郡村方之内ニ、延大豆、延眞綿と云納物有り、是ハ私領之節、大豆眞綿を納め、其上に延を掛、取立る處、御料所に成、大豆眞綿ハ物成詰に而高ニ結び、延之分ハ小物成の樣、外物にて、納たると見へ、今も延大豆ハ元大豆壹升に、壹合貳勺五才、延眞綿ハ元眞綿百目ニ、掛目五拾三匁八分三厘五毛ヅヽ、金納に成る、元大豆元眞綿ハ、員數有之納にハ不成也、

延米
出目米

〔田園類說〕本石計立出目米之事

出目米といふは、國により年貢米之外に餘計を出處あり、本石を延米にしたるをも、出目米と混じいへ共、意味違ふと知べし、○中略

按ずるに、○中略當時にてハ貳升宛の餘米を出目米共唱へ、又計立にしたるを延米共唱ふ、然れども出目米といふハ、國々にもありて、或ハ上州に四斗六升出目、羽州貳斗出目などいふありて、御年貢之外、別に御年貢高へ懸て納るをいふ、いづれも元來籾摺より發りて始る由にて、其はじめ四斗六升出目ハ、七合三勺摺、貳斗出目ハ六合摺に當たる、此外諸國に此類有べし、本石計立の出目とハ格別也、

〔地方落穗集〕五延米之事

一往古ハ延米と號、員數を極事なし、斗升に山盛にして納しに付、三斗五升の米五斗程に成也、其以後右山盛を斗搔にて、中より搔落し抔して納し也、然る處元和二年、百姓御救の爲、壹俵三斗五升ニ極め、貳升の延米を加へ、三斗七升入にて、御藏納有之也、今三七延と云是なり、

一往古ハ小身の方へハ勝手として、上地の所を被下、依之右三斗七升延、猶又五升加へ、四斗貳升俵にして納と也、何れにも俵の納に心得有事也、今御藏入に色々の俵入有るハ、私領上地又ハ國替場所に付、其引付にて御料所に成ても、古來の俵入を用るなり、

〔地方落穗集〕五四六出目之事

一上州群馬郡の內村々にて、四六出目と云納物あり、是ハ俵入の出目米也、上州ハ四斗入に貳升の延米を加へ、四斗貳升入にて納る也、此外に六升宛の出目米定式の納物と成、上納する事也尤年々御年貢增減により、此出目も增減あり、外々に無之餘慶の納もの也、此發り如何にと尋に、右村々古來私領の節、物成の內籾納有之、此籾翌年又ハ三年程にて入札を以拂に成候て、地相場よ

一關東納米三斗五升を、三斗七升納る也、是を本石計立と云、按ずるに、古來ハ關東も本石計立の差別ハなかりしに、いつの頃やらん、三斗五升入壹俵ニ付、貳升宛の餘分を加へ、是を土用缺と名付し由、是より關東ハ通法となりて、本石計立の名目立しと、先年老吏に聞り、當時にては、貳升宛の餘米を出目米共唱へ、又計立にしたるを延米共唱ふ、

〔地方落穗集五〕本石計立之事

一本石と計立と分るハ關東計り也、上方筋、其外遠國ハ不殘計立也、本石と云ハ三斗五升入と計心得るハ僻事也、四斗貳升入の本石ハ四斗也、三斗六升入の本石ハ三斗四升也、如此出目を別に立るを本石と云也、是ハ百姓前何れも貳升の出目を加へ、取立候へバ、公儀御勘定の仕上ハ何れも出目を拔、元の石數にて仕上るに寄、元の石と云心にて、本石と云也、然れ共關東にて三斗五升を本石と立るハ、三斗五升入百俵を、三ツ五分の勘定にて、百石の物成と見る積り也、御切米も御勘定に立るに、縱バ遠國の御代官御切米高貳百俵を、御代官所御物成の內にて請取時、其支配所俵入四斗貳升成ハ、貳百俵へ四斗貳升を乘じ、八拾四石と成るを、三七（江戶御藏納米本石三斗五升に、貳升の出目を加へ、三斗七升入の俵に成也、）にて除、貳百貳拾七俵貳厘七毛と成也、三五（本石三斗五升の米に直す也）を乘じて、七拾九石四斗五升九合四勺五才と成を、御勘定に立也、尤外貳升出目除之と記す、右八拾四石と差引、四石五斗四升五勺五才減ず、

一計立と云も右の心也、上方筋遠國ハ不殘計立也、關東ハ三斗七升を以計立と云、然れ共是のみ計立と云にハあらず、公儀へ計立納る所の升目なるに寄り、計立と云也、外國の計立と同樣也、又云、御張紙直段計立三拾五石に付、何拾何兩と有ハ、計立三拾五石にて直段を極故なり、公儀へ納にハ、三拾五石を本石とし、公儀より被下時ハ計立て出すにより、計立とするなり、

古事類苑

政治部八十一

下編

田租四

本石計立

〔地方要集錄〕一本石計立之事
是ハ關八州、伊豆、駿河、三河、遠江、此國之計本石計立なり、然るに駿河、三河、遠江三ヶ國ハ、十九年以前未年〇元祿十六年より、本石相止計立となる、其後未より右之計立を三五ニ而割、三七をかけ、其年々有米內引て殘り貳升出目と名付納、但本石ハ壹石を三五ニ而割、三七をかけ、計立何程と名付る計立三拾五石といふ事ハ有之候得共、三拾七石といふ事ハ少し、三拾七石有所を三七ニ而割、三五をかけ、三拾五石に成たるを本石といふ、計立三拾五石之本石ハ、三拾三石壹斗八合ニ成候てハ、三拾五石を三七ニ而割、三五を掛れハ三三八となる、總て御勘定目錄差出、鄕帳割付之米ハ本石也、是を納る時三五ニ而割、俵より下へ三七をかけ、頭は三五ニ而割候得共、跡へ三七をかける故、不殘三七俵ニなる、是三七俵を本石ニする時ハ、俵より下計三七ニ而割、不殘三五を掛る、元之割付之本石になる、御勘定所より割出るもの、六尺給宿入用米ハ本石、其外之割物ハ大方計立ニ而出るなり、

〔田園類說〕本石計立出目米之事
本石計立ハ上方關東一統之事にあらず、上方ハ都而計立納也、出目米といふハ、國により年貢米之外に餘計を出處あり、本石を延米にしたるをも、出目米と混じいへ共、意味違ふと知べし

合田數貳拾町捌段三合内〇中略

口籾田四町七合十二步〇中略

右目錄之狀如ㇾ件

正和四年二月十五日　　預所代沙彌覺乘

〔陸奥國好島浦田檢注目錄〕注進好島田正和三年甲寅撿注目錄事

合田數貳拾町玖段三合内除荒野〇中略打口定

得田三町九段九合十二步内斤二町六段三合

本田二町六段七合十二步斤所加定

御年貢帖絹二疋四丈　餘田一段七合十二步

口籾四石一斗四升六合五勺段別一斗五升五合定

右目錄之狀如ㇾ件

正和四年二月十五日　　預所代沙彌覺乘

〔安東郡專當沙汰文〕一本御田、宮中注進之分一町也、而此内五段半、宮中供用御籾大餅等沙汰上ㇾ之、御籾正供用段別一石宛也、其外口籾斛別四斗也、然者五段半之分、正供用五石五斗口籾二石二斗也、而彼口籾二石二斗也、内一石一斗、出納鎰取二人得分之、殘一石一斗之内五斗、西御倉量ㇾ之是號ニ祓籾、物忌等得分之云云、殘六斗、公文所方量ㇾ之、號ニ口籾ニ已上正供用五斛五斗、口籾二石二斗、彼是七斛七斗也、仍殘御田四段半、方々分田也、所役支配之分奧注ㇾ之、

一宮中奉納之時、供用御籾口籾等運上量定之次第、

一御籾俵二十四俵量ㇾ之、但此内廿二俵正供用五斛五斗幷口籾一石一斗量ㇾ之、年々無ニ相違ㇾ此廿二俵ニテ奉ㇾ量ㇾ之、〇下略

可然事、

右之趣、先年も被仰渡御座候處、近來いつとなく相混候類も有之哉ニ付、尙又此度小もの成役永諸運上諸冥加之類とも、不洩樣相糺、口米永右相懸分者、其譯委細書付を以可申上旨被仰渡承知仕候、

八月十八日　吉岡次郎右衛門手代　青津等平印

外一同

(代官觸留二)小物成諸運上冥加役永等之類、都而口米永相掛候者、定法之處、右之内江者、最初吟味節譯有之、口米永不懸分も間々有之、夫々譯柄相立候分者、無餘儀候得共、近來無謂口米口永不懸取扱來候向も有之哉に相聞、區之儀有之候に付、兩三年巳來、伺書江悉く口米懸ケ、又者口永懸ケ者認メ、口米永不懸分者、其段書記之候事に相成候、然ル處定法之口米永相掛候者勿論之事に付、無謂取立落に不相成樣被心付、巳來伺書江逸々口米懸ケ、又者口永掛と認候義者相止メ、併前々ゟ譯有之米永不懸分者其譯委細認入相伺候樣可被相心得候、

右被仰渡候趣承知奉畏候、在鄕御代官江可申聞候、此段御請申上候、以上、

玉置才助印

外出役一同連印

(紀勢和州御領分記)口米

一紀州ハ御年貢米百石ニ付、貳石宛納、勢州ハ右同斷ニ三石宛納申候、

口米之儀ハ御代官納所料ニ納來候由、申傳へ候得共、慥成品ハ相知不申候、紀州勢州違有之段ハ、先領主之仕來之由御座候、

(陸奧國好島滿田檢注目錄)注進滿田正和三年甲寅檢注目錄事

一口米金錢ニ而收立候分ハ御金藏ヘ、上納米ニ而取立候分ハ御藏納之積直段遂吟味、年々十一月中取立候分ハ御金藏ヘ、上納米ニ而可爲差出候、

一但州生野銅山口銅　　一野州足尾銅持籠代

一上州甘樂郡砥山口砥　　一八丈島口紬

右四ヶ條不及御藏納、有來通請取可被申候、〇中略

右之通、伺之上申渡候條、向後書面之通可被相心得候、以上、

巳九月

〔牧民金鑑六〕寶曆七丑年九月廿三日御書付幷申渡書付

御代官御預所役人申渡覺

鄕帳取立三役之外、小物成運上、其外役永之儀ハ、口米永可相掛事ニ候得共、前々無謂仕來候間、小物成之內、口米永不相掛も有之趣ニ候、向後ハ鄕帳取立之分、謂有之は格別、其外不殘口米永取立可然事、〇中略

右之通、御書付を以、堀相模守殿被仰渡候間、御書面之趣被相心得、小もの成之內、是迄口米永不掛分、當丑年ゟ向後取立可被申候、尤謂有之除來候分、幷今年ゟ取立候分共ニ、銘々委細仕譯書付早早、御勘定所ヘ可被差出候、〇中略

右之趣被相心得、猶被相伺候筋も候はゞ、早速御勘定所ヘ可被申立候、以上、

丑十月

文化十四巳八月十八日

三役之外、小物成諸運上、其外役永之儀者、口米永可相懸事ニ候得共、前々無謂仕來候ニ而、小物成之內、口米永不相懸も有之趣ニ候、向後者鄕帳取立候分、謂有之者格別、其外不殘口米永取立

上方御代官中
關東御代官中

〔勘契備忘記上〕正德四午年

八丈島青ヶ島支配之御代官へ被仰渡候御書取〇中略

一如有來爲口米代御年貢紬之内、壹ヶ年平織紬貳拾六反、其方へ被下之候、〇中略

右者條々堅可相守此旨ものなり、

正德四午年六月

大和〇以下四名略

河原清兵衛殿

〔牧民金鑑五〕享保五子年

覺〇中略

一畑方口永之儀、永壹貫文ニ付三拾文餘被取立候も有之由、當子年ゟ定法之通、永壹貫文ニ付三拾文ヅヽ可被取立候、但古來ゟ私領ニ而、口永多取立候分、御勘定臨時物ニ組候類は格別之事ニ候、以上、

子八月廿九日

〔勘契備忘記上〕享保十巳年

口米相止諸入用被下候ニ付、御勘定奉行より御代官へ申渡候書付、

一各儀御代官所口米之儀、當巳年より被相納候筈ニ候間、被得其意、小物成口米共、只今取來候分ハ、不殘御物成同前ニ可有御藏納候、尤口米之分只今迄之鄕帳ニハ除之、御勘定帳ニハ、別紙ニ可相立候、

一口米之儀、本途小物成米金銀書譯、年々十一月中可被差出候、

共古代之名目其儘に而、三升口ハ石代金納、公納口ハ米納也、奥州之五升口も三升ハ石代貳升米納なり、

〔東作誌三〕年貢納樣之事○中略

一口米壹石ニ貳升ヅヽ、此外諸役不可有、但二重倍可仕事、

慶長九年十一月二日　　忠政○森花押

東北條郡作○美百姓中

〔御當家令條二十三〕條々

一年貢米升目之事、當納より壹俵に付三斗七升を拂、可相納事、

一年貢米壹俵に付、口米目こぼれとも一升ヅヽ、可納事、

一錢方は永樂百文之積に付、同三文ヅヽ、錢之積り口錢可收納事、

右三ヶ條、御料所幷私領之百姓に至迄、堅可被申觸者也、

元和二年辰七月日　　對馬守

大炊助

備後守

〔憲敎類典五之三上地方〕正保元甲申年正月廿一日

覺○中略

一關東方口米は納三斗七升入壹俵ニ付、壹升宛、口錢は永百文ニ付而三文ヅヽ、上方分ハ壹石ニ付而三升宛之御定之外不可取之事、○中略

右條々、從此以前度々雖相觸候、彌無油斷入念仕置、堅可被申付之候、若於疎略者、可爲越度者也、

正保元年正月十一日　　曾根源左衛門○以下三名略

に口永三拾文ヅヽ、古來より御代官ニ被下來候、上方ハ田畑ともニ米取故、御取箇米壹石ニ米三升ヅヽ、古來より御代官へ被下候處、當御代〇徳川吉宗より相止、口米永公儀へ上納、御代官へハ諸入用を米金を以、御代官之高ニ應じ被下候、

〔地方凡例録 五〕一口米口永之事、附り一御代官諸入用米金之事、一甲州公納口三升口之事、

口米永ハ、古來より引付ニ而、其初詳ならずといへども、鎌倉時代貞永之式目ニ、諸國守護人奉行之條下ニ、至近年分補代官於郡鄕、宛課公事於莊保とあるハ、口米永之事と聞へ、其時代より始たるにや、又其以前より有りたるや濫觴不詳、勿論上古にハなき事と見へ、古書にハ不見當、御當代ニ成て、關東之口米ハ本米三斗五升入壹俵に、口米壹升ヅ　納め、本米壹石に付貳升八合五勺七才に當る、上方筋ハ本米壹石に口米三升ヅヽ、遠州より西之國々ハ上方に付、三州より東出羽奥州迄關東に附く、尤奥州之内田村石川兩郡ハ、壹石ニ六升、伊達信夫宇多三郡ハ壹石ニ五升白川岩瀬兩郡ハ三升、甲州ハ壹石に四升五合四勺餘に掛る、上州群馬郡之內、本米壹石に口米六升、又四升貳合納る村方も有り、國之所々に而少之異同ハ有べけれ共、大方ハ上方より中國筋西國筋迄、壹石に三升、關東筋奥羽邊迄、三斗五升に壹升也元來口米永迚租稅之外ニ取立る事、縣令代官鄕里を支配するにハ下吏を抱、宛行を渡、筆墨紙其外諸雜事の費用有之に付、年貢米之高に掛取立之、右之費用に當る事、鎌倉時代より始たる事と見へたり、仍而御當代に而も諸國口米を御代官へ被下、手代幷家來等の扶持切米筆墨紙、其外諸入用に用たる處、有德院樣〇徳川吉宗御代、享保年中、御勘定奉行神尾若州之取計に而、口米永被下儀相止、支配高ニ應、諸入用米金員數を立被下之、口米永ハ公儀へ上納に成たり、尤諸侯方御預所之分ハ古來之通、當時も口米永被下之、甲州之口米に公納口三升口と之分り有ハ、餘國より口米多き故、壹石に三升分ハ三升口と唱、御代官へ被下、掛り壹升五合四勺五才ハ、其頃より公儀へ納るに付、公納口と唱ふ、今ハ不殘公納に成といへ

杉伯耆守殿

沙彌判昌秀

〔北條五代記五〕八丈島へ渡海の事

聞しは今、愚老伊豆の國下田と云在所へ行たりけるに、里人語しは、是より南海はるかにへだて八丈島あり、〇中略北條氏直公時代までは、三年に一度、伊豆の國下田より渡海あるに、大船に水手をすぐり取のせて、秋北風に、此島へわたる、年貢には上々の絹を納ると、くわしく語る、

〔南島志〕八丈島〇中略

一反別貳百八拾六町貳反壹畝廿九歩半　御年貢

此黄紬四百五拾三反三厘七毛

〔太閤記一〕藤吉郎殿薪奉行の事

秀吉申上けるは、他國の守護は山に付ては炭薪、海邊は其便に順て、貢し奉るやうに聞え申候、されば國中の里々、大木生茂れり、一村より一本宛貢し候へと、被仰付なば、いと安き事になん有べしと申上しかば、兎も角も能に計ひ可申、雖然百姓等不痛やうに、價を遣すべき旨仰けるに因て、其々に價を遣しけり、

〔窻の須佐美二〕寛延三年、伊豫國大洲加藤公封地米少くして、紙を漉出して貢納するもの過半なり、中子と云所に酒家あり、豪富近國にはびこり、京大坂にも家を置て、隱れなき商家なり、貢納紙の納所となりこれまで持ゆけるとぞ、近年納めたる紙よろしからずとて、容易に納る事を得ず、その返されたる紙を彼酒家に買て退し後、再び酒家にて調へて納れば宜しとて、上納調事數年なりとぞ、

〔地方要集錄〕一口米、口永といふハ、關東方にてハ御取箇田方米壹石に米三升、畑方取箇永壹貫文

已上米一石二斗一升六合之中
又一斗二升　十合定
麥五斗七升　廿に二貫六百四十八文○中略
右注文之狀如件
永德四年二月廿六日
(鶴岡事書日記)就當年所務上使兩人被著下候條々、申含子細等候、年貢等急速加催促可被皆濟之旨被申付候、○中略
一夏麥事、伏坪者畠一ッ分、右五段五十步除屋敷貳文分定分段別五十文宛ハ被爲貳百六十參文候、各拾四文、無其沙汰候、如何候哉、爲向後必々可有執沙汰之狀如件、
應永二年閏七月五日　法印在判
伏坪鄉政所殿
(東寺百合古文書三十三)送進新見莊御年貢錢之事
合陸四升者　大小棚四之内大棚一ノ代本國八貫文
右所送進如件
寬正貳年十二月十五日　公文家高
(大內家壁書)麻布寸尺之事
御分國中所納年貢之麻布寸尺之事、古式に任、よろしく貳丈八尺を以壹端とす寛斗を明也亦より布之事は貳丈五尺、或は貳丈六尺、各寛斗、郎和綱七年符也壹端なるべし者、早右之定法之旨を守、豐前國中之甲乙人等にふれしむべきよし、所被仰出也、仍執達如件、
寬正三年十月廿五日　石見守興貞俊

二百文はんようとう　一はゞ　さしなゝ
一だ　ぬか　一まい　いなばき
十二まい　こも　七升　米むしろつきとも

巳上米壹石參斗壹升六合之中
反米壹斗貳升　十合升定
麥八斗五升五合
錢貳貫八百九拾二文

一壹五郎入道名
田壹町三反大内一反御公事免一町一反大、米一石一斗六升六合之中、又三反ざいけう三人、
畠壹町二反内三反御公事免　六反參五斗七升
一貫五百文きぬのせに　五升せちれう
三升うちむぎ　二升うちむぎ
百文うちむぎ　百文まどのせに
三月三日御せんぐ　五月五日御ぜんぐ八十五文
七月七日御ぜんぐ五十五文　九月九日御ぜんぐ三十三文
三百五十九文にふどのかひたのせに　五升わせはつを
二升はんれう　二百文しやかくようとう
二百文はんようとう　一はゞさしなは
一だ　ぬか　一まい　いなばき
十二まい　こも　七升米むしろつきどもに

一爲安　町九段小（分錢五百三文、白米二升、租一斗五升四合五勺、）
一重盆一町二段（分錢五百七十二文、白米二升三合、租一斗七升六合、〇中略）
右注進之狀如件、
　曆應貳年二月日

〔東寺百合古文書百二十〕沽却進畠地事
　合壹段六十步者〇中略
右件畠地者、沙彌圓勝重代相傳、无相違所也、〇中略本所當者、夏麥六升五合、秋蕎麥六升五合致沙汰、
別無万雜公事者也、仍爲後日新放劵之狀如件、
　應安四年辛亥十二月七日　賣主圓勝在判〇以下二人略

〔岩松家文書〕足立郡大窪郷地頭方三分一方田畠注文〇略
一八郎次郎名
田壹町四反大内（二反御公事免、一町二反大反別一斗ッヽ定、）
畠一町二反内（三反御公事免、九反むぎ八斗五升五合）
一貫七百文きぬのせに　五升十合定せちれう
三升納定うちむぎ　二升納定（うちむぎ、御だいくわん給）
百文（まどのぜに、御代官御まへにて、百姓御酒給候、）　百文うちむぎ
三月三日三十八文（御ぜんぐ反別三文ヅヽ、くきのもらいんくはたによれ二百文、）　五月五日（御ぜんぐ反別五文ヅヽ、六十三文）
七月七日（御ぜんぐ五合ヅヽ、六十三文）　九月九日（御ぜんぐ反別三人ヅヽ、三十八文）
三百八十九文（にゐどのかたのぜにとくてんとさたし）　五升十合定、（わせはつを、とくてんとさた申候、）
二升十合（ほんれう）　二百文（しやかくようとう、御代官給）

〔東寺百合古文書一〕運上

備後國三津御莊常光院御年貢鹽代錢送文事

合

御鹽陸拾俵

代錢拾陸貫文 京定

國兵士用ヒ陸百文 於二彼用ト一者、御使六郎兵衛尉沙汰了、

右於御年貢者、付夫丸平太郎入道所口由進上也、仍送文之狀如件、

正慶元年十二月八日　伊賀遠實 判

進上常光院政所殿

〔東寺百合古文書な二十九之三十一〕注進山城國上久世御莊田數并御年貢 ○以下有二蟲損一

御年貢錢

一粮二十石四斗　反別八斗ヅヽ

一藁二千束 ○中略

右注進如件、

建武三年九月十三日　公文道法 花押

〔常陸國吉田藥王院文書〕注進管生莊本郷五町別半分御免名寄事

合五町別田貳拾漆町八段小四十步

段別　錢貳拾六文　白米一合五才　粮八合定

一忠時二町一反大 分錢五百六十四文、白米二升三合、粮一斗七升四合、

一吉國二町三反半四十步 分錢六百十四文、白米二升五合、粮一斗八升九合、

絹三疋但代錢三貫文　綿百兩

細布廿六段內代錢壹貫文餘

近年所濟如此、自何年減濟事不存知之、〇中略

領家持明院左兵衛督

一常陸國成田莊　棟被物二重內七月御八講一重十二月御忌一重

本年貢國絹百疋

閏月兵士三人

近年以色代五貫文進濟之、減濟之年紀不存知之、

近年代錢絹代六貫文、二ヶ月被物代一貫四百文外無濟、〇中略

右就所見注進如件、凡近年背先例不被成返抄於執事公文間、御年貢濟口事委不存知之、

正中二年三月日　公文左衛門少尉大江花押

〔東寺百合古文書百七十九〕和與

遠江國原田庄細谷郷地頭原小三郎忠益相論當郷所務條々事

一年貢事

右如雜掌申者、當庄年貢者、自往古爲現米之處、構新儀、以色代出徴符、濟年貢之間、如元可爲現米、且弘長二年以來、未進分可令究濟之由訴之、地頭者亦以色代進濟之條、經年序之上者、難顚倒、次年々未濟分事、或返抄紛失、或令朽損畢、仍雖可仰上裁、以和與之儀、於向後年貢者、以當郷弘長目錄、〇中略註爲公田數、至忠益分者、以段別貳百文錢貨、不論旱水風損、毎年十一月中可令究濟、若背此狀致未進者、任先例可被成現米者也、〇中略

以前條々和與狀如件、

元德三年十二月十五日　藤原忠益花押

件、

元應貳年五月十一日　禪尼心戒在判

〔東寺百合古文書五〕最勝光院

注進寺領莊園年貢近年所濟出物等散状事〇中略

一攝津國山邊莊　領家故右大辨兼賴領

本年貢積松十把　檜物雜器

綾被物二重内七月御八講一重十二月御月忌一重

三月兵士五人

近年盂蘭盆之時、紙三十帖進濟之歟、近年紙七月分代用途壹貫文外無沙汰、又十二月御月

忌ニ用途七百文沙汰云々、

一堺莊　領家今林准后御分

本年貢油貳石　綾比物二重内七月御八講一重十二月御月忌一重

九月兵士七人

建長年中以後代錢一貫文外不辨濟歟、〇中略

一長田莊〇備前　領家室町院御分

本年貢米七十二石　上絹十五疋四丈

綿百兩　綾十三疋

白細華布廿六反　油壹斗九升

以上御念佛料所也

但米三石　油一斗

弘安五年歲次壬午二月廿三日　狛時清花押○下略

〔東寺百合古文書百十七〕謹辭賣渡進券所田事

合壹所口東西六丈　行南北拾陸丈者○中略

但所當こみのむしろ半枚、公事行事時路作、此外全以所當公事無之、○中略

弘安五年十二月七日　賣主僧實定花押○下略

〔東寺百合古文書三十九〕沽却私領田壹所事

合壹段者

在山城國紀伊郡穴田里十四坪東縄本南壹反也

右件田地者、藤原氏女先祖相傳之私領也、○中略本所左京職也、每年莫參拾束辨之外者、無別公事物也、○中略仍爲後日賣文之狀如件、

嘉元二年十二月八日　賣主藤原氏女

請人　近清判

〔陸奧國好島澁田檢注目錄〕注進好島田正和三年甲寅檢注目錄事○中略

御年貢帖絹二疋四丈○中略

正和四年二月十五日　預所代沙彌覺乘

〔東大寺要錄二〕散在佛餉田料所事

一奉寄進　佛餉田

合壹段者　所當麥二斗、大豆二斗、

伊賀國黑田莊出作領矢河條字一井四至本券面在之

右志趣者、爲成就現當二世之悉地、每年五月四日廿四日、爲臨時恆例之佛餉料所、奉寄進之狀如

〔吾妻鏡三十三〕暦仁二年〇延應元年正月十一日壬午、今日陸奥國郡郷所當事有沙汰、是准布之例、沙汰人百姓等、私忘本進之備、好錢貨所濟、乃貢追年不法之由依有其聞、白河關以東者、於下向輩所持者、不及禁制、又絹布麁惡甚無謂、本様可令辨濟之旨被定、以匠作奉書、被觸仰前武州、

〔東寺百合古文書七十七〕沽却私領地壹所事

合半者〇中略在右京〇中略

右〇中略所當者、右京大夫殿へ筵壹枚半、ウハマキノ七尺筵計、進上スル外ニ、又何事ニテモ、公事不候也、〇中略

寛元貳年甲辰九月八日　やさ入道

〔東寺百合古文書三十七〕運上弓削島領家御方御年貢送文事

合

一大俵鹽玖拾玖俵

除車力玖俵

正鹽玖拾俵　三分一加定

右付梶取成正運上如件

建治三年九月十三日

公文沙彌花押

納所法橋花押

〔東寺百合古文書五〕沽却進私領田事

合壹段者

在山城國石井郷鳥羽手里貳拾漆坪東繩本參段內中壹段也

右馬寮本所當壹斗稻荷下社御油壹升所進納來也、〇中略

建久三年十二月廿日　　平御判

〔吾妻鏡十五〕建久六年十二月二日壬子、駿河國富士郡濟物綿千兩、被進京都、常清時澤等、爲御使云云、七日戊午、相模武藏兩國、所濟絲綿等、被進京都、新藤ニ俊長相具之云云、

〔東寺百合古文書百七十六〕沽却渡年來作手田事

合貳段者

在山城國紀伊郡柿本里二坪西縄本

右件田者、草部宗吉相傳私領也、○中略於當所者、段別油壹升、可量進稻荷下社也、仍爲後代證文立新劵文之狀如件、以解、

建久七年十月十三日　　草部宗吉花押

嫡女月氏花押

〔吉田社文書上〕仰下二箇條

可郷々御年貢絹儲加精好差印文事

右神領田所當代絹等者、國中第一之絹云々、近年運上之絹云上品之準絹、觕惡無極也、使等不致精好之故歟、儲撰納舊例四十匹絹、可差印文也、若令運上不法絹者、其缺所被責貞恒歟、兼又稱別納不差印文令運進、早可被追下也、各以此趣下知郷々可致沙汰、

一可以四月爲參期運上郷々在家布于鳥等事

右年來者四五月內、可令運上也、而近年付口之間、及九十月歟、尤以爲違例、自今以後、以四月爲參期可令運上之、可令下知此旨於郷々也、

以前兩條、依本家仰下知如件、

正治三年正月廿二日　　造東大寺次官三善花押

〔集古文書三十二下知狀〕武田信玄下知狀信濃國木曾農家藏

來丙戌自納所扣之年貢壹貫七百文處、可被下置之旨、被仰出者也、仍如件、

天正十三乙酉十月十四日　原圖書助奉之

兒野々九郎左衛門

〔易林本節用集〕色代シキダイ

〔倭訓栞中編十〕しきだい　略○中　庭訓に現物色代之價と見えたるは、品色の物を其代りとするをいふ、

〔吾妻鏡九〕文治五年十一月一日丁巳、供御甘苔十合、令進上京都給、是伊豆國乃貢也、

〔吾妻鏡十二〕建久三年十二月廿日戊午、澀谷重國者、備勇敢、尤相叶御意之間、為慰公事勤役、以彼等領所相模國吉田莊地頭、被申請領家圓滿院、為請所、御倉納物所、贖其乃貢也、

前右大將家政所

運上　相模國吉田御莊御年貢送文事

合準布陸佰漆拾肆段貳丈內加二六十反先分料

見布貳佰陸拾段

染衣五切　代百文各廿文　上品八丈絹六疋　代百廿文各廿文

納布九段內上二段中七段　代　藍摺準布卅段　代六十文

紺布二段無文　代四文　率䭾二疋　代四十二文

持者七人　代五十二文二丈　例進長鮑千百五十帖

移花十五枚　染革二十枚

右付夫領助弘運上如件、

可運上申候、地下損不、幷臨時國役運賃、郡郷雜用等之莊立用、一切更不可申入候萬一於有不法之義者、不日可被召改御代官職者也、何爲後證請文之狀如件、

永享七年七月四日　　勧修寺　慶朗藏主花押

〔東寺百合古文書二十一〕謹請申七祖御影供料田字大郞丸御年貢錢事

合參貫五百文者

右御年貢錢、近年連々無沙汰申之條越度至候、所詮於自今以後者、毎年十一月中に悉皆濟可申候、若雖爲一錢致未進過初月者、可被召放彼下地候、其時不可及一言子細者、若又至其時付申權門勢家之口入者、別而可預御沙汰候、仍爲後證請文之狀如件、

文正元年六月廿六日　　中尾　幸光判

〔鈴鹿家記〕應仁元年十二月三日癸酉、在所ノ百姓ドモ、年貢壹石ニ付鳥目五百文ヅヽ、年貢ノ相場此通定使次平ニ申付ル、百姓ドモ五百文ノ侘ニ參、當年ハ日燒仕候間、三百拾七文ヅヽニ侘申、則聖護院村何モ三百拾七文ニ御取被成候、則畠中樣澤井樣請取トヲ見セ申、本所ヘ御目ニカクル、聖護院ノ衆ノ下グ次第ニ可仕由御申シ、　四日甲戌、次平呼ニ遣年貢壹石ニ付錢三百拾七文ヅツニ定、百姓共ニ觸可申旨申付ル、

〔集古文書四十五寄附狀〕結城政朝寄進狀陸奧國白川郡八槻大善院藏

石川莊小高之内

賀茂宮之神田三斗蒔、此内沖田一斗蒔あり畠二まい、屋敷山有、年貢二貫文之所也、寄進仕候、被成知行、可有御祈禱候、仍執達如件、

于時永正二年乙丑三月十二日　　政朝

近津別當御同宿中

壹斗四升替を以て金納ニ仕、殘三分二之内、三分一通り大切直段、其年々冬御張紙直段を以て金納ニ仕、殘之分米納ニ仕候事、

〔齋藤文書〔二〕〕大まり里公田百しやう六人所當分

田數一町九反　一反川成

殘一町八反内

不作　一反　まきの田五郎太郎　一反　口き八郎　一反　又五郎入道半

定田一町五反半分御年貢六貫四百五十文

六百文　いわ口へ御こへの時、又四郎おさむ、

百文　とくさんへもいらせさせ給候也、

五百文　二反ふしゆく間、そんまうにゆるす、

辨濟分　五貫二百五十文

建武三年十一月五日　信口

〔東寺百合古文書百十二〕送進上垂水御莊御年貢代用途事

合貳貫百六拾六文内百文者大渡橋用途出

定錢貳貫六拾六文

右所送進如件

曆應四年十二月十三日　預所良證花押

〔東寺百合古文書卅三十二〕請申東寺御領遠近江國原田莊之内細谷鄕御年貢事

右御年貢者、拾玖貫文京進定請切申候上者、於當年土貢者十九貫文十一月中可致其沙汰候、自明年永享八年至始終之儀者十九貫文内十貫文者敷錢分、六月中必可運送申候、相殘九貫文者十一月中

アリ、私田内ヘ方田ヨリ一線ノ増ヲ加ヘ、九分四ニ當ルヲ正米納トス、九分之二ヲ公直ヲ以テ金納ニス、九分ノ三端米直段ニテ金納ナリ、卽チ大。ニ。切。小。ニ。切。ト。云。名。ナルベシ、大半小ノ數ニ相當リ、籾納一俵貳斗入六合摺リ、壹斗貳升ハ京枡ニテ三斗六升ノ積リ、古法ナリ慶長中減籾貳升宛ノ増被仰付、爲貳斗貳升入、京枡ニテハ六斗六升也、正米納ニ引換リ、壹俵三斗六升入ニシテ、五合四勺五才四五餘ノ摺ニ相當レリ、口籾ハ貳拾貳分壹籾壹俵壹升宛ナリ、（卽米五合四勺五才四五摺）京枡三斗六升入ノ米壹俵ニハ、壹升六合三勺六才三六ニテ台之、米壹石ニ付四升五合四勺五才四五也此內三升ヲ三升口米ト云（元下米直段金納ナリ、享保以來大切三兩增ナル）、殘壹升五合不盡ハ、公納口米トテ別ニ米納ス、他州ニハ無キ事ナリ、天正七年伊奈熊藏文書ニ銘々載ス、取高ノ外壹反壹斗宛ノ夫錢ハ、百姓請負一札有之ト云々、夫米之事ハ、享保中ニモ有リ、御料所以來ハ三役ト云納物ニ替ル也、大切金納ハ、十月御張紙直段トテ上ヨリ定ム（但領主アル時ハ、國ノ直段テ用ウ）、小切金納ハ、古ヨリ定納金壹兩ニ籾拾壹俵壹斗也、是モ米納ノ時ヨリ三斗六升ノ積リニテ、今ハ四石壹斗四升替ト云、按ニ畠ニヨリテ籾高五石ニ金壹兩ノ畠方定納アリ、本州ノ拾壹俵壹斗ハ古法貳石三斗ニテ、京枡六石九斗ニ當レリ、收納高ノ內畠方三分一ニ平均スル故ニ、如斯ナルニヤ、

〔御觸幷御書付留二〕一甲州大切金納直段之儀、享保九辰年御料ニ成候節、冬御張紙三兩高之積、御代官相伺、年々金納いたし來候處、同十五辰年、小宮山杢之進、坂本新左衛門、奥野忠兵衛相伺、私領之節ハ、甲府町相場平均ニ增加致、金納來候處、御料ニ成、御張紙直段三兩高ニ取立之、近來新穀下直にて米賣拂候節、大成足金多く、年々困窮いたし候ニ付、古來之通町相場ニ增加、金納いたし度由、相願候得共前々吟味之上相極候石代之儀故、伺之通にハ難成、其年々冬御張紙同直段を以て、金納之積り伺相濟申候、

一甲州大切小切之儀、古來より國法にて其年可納米高之內三分一通、小切直段金壹兩ニ付、四石

とはなりぬ、

一信玄領國の頃、小切直段四石壹斗四升と成事、一說に曰、右小切一度籾にて納し事も有しよし、其節金壹兩に付、籾拾壹俵半替と云事、今に申習す、是を以見れバ、右籾壹俵は甲州米壹俵三斗六升入の積を以、籾の入目を極む、依之拾壹俵半へ三六を乘じ、米に直し候へバ、四石壹斗四升と成、古來の小切直段是より發るか、右發端を知るものなし、

一甲州にてハ公納口と名付、取米壹石ニ付、四升五合四勺五才餘宛出之、外上方筋の口米ハ、壹石に三升宛也、差引壹石に付壹升五合四勺五才、他國より餘慶出す事、如何樣の譯にて多く出すと云事を、甲州の百姓知る者なし、爰に郡山侍從の臣、算者佐藤政右衛門繼佐と云人の門人、久津間勘市清祐、考て曰、甲州ハ年貢納方前々ハ籾納也、此籾の時は甲州枡にて貳斗貳升入壹俵とする也（甲州枡と云ハ、京枡三升入の枡也、京枡なりとも用れ共、今以て甲州枡を用るなり、）年貢勘定の節ハ、右籾壹俵を三斗六升の積を以納む、右籾納より考れば、甲州も壹俵に付壹升の口米なれ共、甲州枡貳斗貳升へ、甲州枡にて壹升宛、口米を出す故、京枡に直し候へバ、壹升五合四勺餘過に成也、當時ハ右公納口ハ定式の納物に成、外三升口米を納るなり、

〔甲斐國志 國法二〕一本州收納ノ法ニ、米方大切小切ト云事アリ、其始詳ナラズ、古人ノ說ニ相傳ルハ、小切ト云ハ、他國ノ畠方定免夏成ニ相當レリ、古ヘ五月上納ナリシガ、後八月納ニ成リ、又享保中百姓願ニ依テ、今ハ九月上旬ノ納ナリ、他國ハ畑方ハ金納、田方ハ米納ニ定タル事ナレドモ、國ノ仕來リニテ、本州ハ田畠米打合、其內三分一ヲ小切ト云、金納ニス、是ハ古法ニ壹反三百六拾歩ノ內貳百四拾歩ヲ大ト云、百貳拾歩ヲ小ト云ヨリ出ヅ、大皆籾納ナリ、後ニ又其內三分一ヲ金納被仰付、今云之大切、三分二ハ猶籾納ナリシガ寬文中甲府殿ノ時ヨリ、河西拾五萬石ハ正米納ニナリ、河東ハ寶永中松平美濃守、一統領分ノ時ヨリ正米ニ成ル、大小ノ割方九非ニ引當ルニ圖（〇圖略）

得同四を乘じ米納の米高也、又曰、國中（府中の最寄をいふ）の大切石數へ壹五を乘じ、國中の小切米也、總小切米の內にて、國中の小切米を減じ、殘を川內領（富士川の東西川通皆山にて東西共に往還あり岩淵へ通じ東海道富士川の渡へ出る也、右西の山の內を西川內、東を東川內といふなり）の小切米とす、又曰國中の小切へ三を乘じ、夫丈の本途見取米を得る、川內も同斷也、又曰、小切米を壹五にて除、大切米なり大切へ一五を乘じ小切米也又曰本途見取米合貳拾貳に除、三升へ公納口米壹ッ出る也、右の內三升口米を引、殘を公納口米とす、公納口米は納米一石に付、四升五合四勺六才也、又曰、本途見取米合せて三を乘じ、三升口也、（米納壹石に付三升定の積り也）

小切米發り傳來略說

一甲州小切の事、前々ハ四石壹斗四升替にて納る由也、是ハ信玄領國の節の定直段也、其節七雄戰國の砌りなれば、商家の賣買も薄く、米穀下直にて金壹兩に五石餘も致せしと也、然るに信玄在世の節、度々出陣故、領分の百姓課役につかれ、軍用金差支に付、米納の內三分一小切と名付、金壹兩に付四石一斗四升の高直段を以、九月納取立也是ハ其砌りの過怠金の高直段と見へたり、（按るに信玄領國通用の米相場五石一斗七升五合を、二割高に仕たるものなり、）其後甲州表權現樣（○德川家康）御手に入候ても、万端前々の通りとの御制法也、殊に小切直段、其節の御藏米御張紙より高直に付、前々の通り三分一小切に成候趣相聞侍るなり、權現樣御治世の頃ハ、金壹兩に五石替の定直段の由、大猷院樣（○德川家光）御治世の頃ハ、右御定直段半減に成、貳石五斗替に成候のよし常憲院樣（○德川綱吉）御治世の頃猶又半減に成、壹石貳斗五升に被仰出候也、是當時用る處の小切御定直段也、元過怠金程の高直段成しが、段々米直段上り雜穀同前の安直段に成る、當時用る御定め直段も其節通用の相場より引合せてハ、高直段に可有之候へ共、其後金壹兩に付、七八斗位の通用相場より見てハ、是又安直段と成、然れ共其後ハ引付也、今に不相替、依之御代官替の度々、御取箇の內見込年々御取箇にて差略有といへ共、取米の內何程ハ小切分とてわかちもなし、當時に至りて自ら小切の分御救の安直段

寅八月十〇三天年保

右之通被仰渡、承知仕候、御代官、一統ヘ私共より御達可申旨、是又承知仕候、

寅八月　　青山九八郎印

　　　　　平岡文次郎印

貫納

〔甲斐國志二國法〕一本州收納ノ法ニ、米方大切、小切ト云事アリ、〇中略信州ニ在ル貫納ノ事ヲ聞クニ、上畠壹反拾四ノ盛ナレバ、壹石四斗ヲ五合摺ニシテ、米七斗ナリ、是ヲ定法金壹兩貳石五斗替トシテ、永貳百八拾文貫納スト云ヘリ、即五石替ニ同ジカルベシ、亦收納高半分ヲ五石七石ニ替ヘ、金納スル國モ有ル由也、古時金錢ノ貴カリシ時、定メタル價ナカランカシ、

大切小切

〔地方凡例錄四〕一甲州大切小切之事

甲斐國四郡之內、巨摩、山梨、八代三郡ニ、大。切。小。切。と。云。石。代。有り、是は信玄時代ゟ始る、〇下略

〔地方落穗集五〕甲州大切小切之法幷算術之事

一甲斐國に大切小切と云法有り、公納米辻の三分一を小。切。と號し、金壹兩に付壹石貳斗五升替の定直段を以金納に成、九月上納す、殘三分二を又三ッ割にして、其一ッ分を大。切。と唱、其年の冬、御張紙直段に三兩高を以、是又金納に成、殘三分二を米納にする也、縱バ

米百石　本途見取共

　此譯

三拾三石三斗三升三合三勺三才餘　小切米

貳拾貳石貳斗貳升貳合貳勺貳才餘　大切米

四拾四石四斗四升四合四勺四才餘　米納

右算術に曰、米百石を九にて除き壹壹壹と成、三を乘じ小切米を得る、又法ハ二を乘じ大切米を

例年差出候石代直段書附之儀、其場所遠近日積を以、不遅樣早々可被差出候、尤是迄振合區々ニ而、綴込見合等不宜候間以來別紙雛形之通、美濃紙竪帳ニ仕立候積り、場所替等有之場所者、跡支配江其段可及演說候、若雛形之內難相分廉も有之候はゝ、廻米方掛高橋平藏江可談候、廻狀早々順達、留りゟ廻米方江可相返候、以上、

申十月廿二日　渡三郎助

何國何郡何町
何村

申十月幾日ゟ幾日迄上米平均
一金壹兩ニ付米何程

右同斷　何町
一金壹兩ニ付米何程

右何口上米平均
金壹兩ニ付何程

右上米平均ニ何斗高
金壹兩ニ付米何程

何國何郡村々
三分一直段

但三拾五石ニ付金何程
米壹石ニ付銀何程
但六十目替

右三分一直段ニ三十五石ニ付金何兩増
金壹兩ニ付米何程
二〆二直段

〔代官觸留三〕申渡

銘々取立金御金藏納之儀、皆ハ御年貢金之名目を以相納候得ハ、御年貢金之廉へ組入候處、年月を經、前書御年貢金之內、何程ハ御年貢、何程ハ小物成、何程ハ諸返納金抔と申立、引分納替相成候ニ付、調方甚及混雜、且ハ諸算付上之金高相立がたき事ニ有之、右ハ最初御年貢之名目ニ而、本納いたし候金銀、追而引分納替候筋ハ有之間敷事ニ候、若金銀取立之分、早々差引等有之候節ハ、御年貢幷小物成、其外何々之分、追而引分可申旨名目を顯し、尤本納可相成期月、證文面ニ認、假納いたし候儀ハ不苦候得共、可成丈前書之故を以、追而組替之儀、無之樣可被取計候、

右之趣、奉行衆被仰渡之、

格別段致御渡候儀も有之ニ付、其段申渡、各承知之事に候、依之去巳年之儀ハ、不熟米安直段之申立相止可申處、無其儀相聞候、尤不作ニ付、出來劣ハ可有之儀ニ候得共、一國郡不殘出來劣と申筋にも有之間敷哉、都而近年ハ其國々支配々々と申合、何事も同樣取計、連名を以伺書被差出候ニ付而ハ、御預所役人も、右伺を見合差出候類も有之、右ニ付而ハ百姓どもハ、尙又相互ニ申合勝之願而已可致儀、既に安石代願等之儀ニ付、百姓ども奉行所へ駈込訴差出候ニも、只々支配總代引受申立、甚不屆之至ニ候條、是等之儀ハ、兼々被申付方等閑故之儀ニ付、以來外支配之願方を、決而承合不致、相互ニ申合に致間敷候、支配所限り村々ヘ嚴敷可被申渡候、然ル上ハ各伺書申合被差出候儀ハ被致無用、銘々存寄一杯ニ可被申聞候、勿論御取箇之手延弛ミ不申樣ニ、精々被相糺、尙撿見之節、定石代之外ハ、前々之通、不殘御廻米之積申渡し、歸府後御取箇帳被差出候節、御廻米石數取極、書付可被差出、尤實々不熟之村々も有之候ハヽ米性劣り候とも、是又御廻米之積可被取計候、

但先達而實々不熟米有之節ハ、其段被相屆候ハヽ、見分之者可差遣旨を相達候得ども、本文之趣相達候ニ付、別段見分之もの不差遣候間、其旨可被相心得候、

天明六午年十月

〔牧民金鑑八〕天保四巳年五月十三日口達

御物成、江戶御廻米出張所入用、三分二郡中出張之分、去々卯年御廻米より以來、年後れ御勘定帳へ組仕上候積、先達而相達候處、是迄納方之儀、兩替六拾目替を以金納ニ致し、金壹分以下端銀之分、銀納いたし來候由之處、去々卯年分より六拾目替相場を以、不殘永直ニいたし、御勘定組相伺、端永納之義ハ、御金藏時相場を以代銀納ニいたし候積、相心得取計可申旨、

〔牧民金鑑六〕天保七申年十月

高之儀、早々可被相伺候、

〔牧民金鑑 六〕天明四辰年十一月

都て御物成米之內、近年不熟安石代と申立候、石數多米納と違、安石代ハ格別、村方勝手ニ成候事ゆへ、少之不熟も大造ニ申立、安石代ニ相願候村々多分有之趣相聞候、左樣成不實之願申立候ハ平生各之取計等閑之筋ニ有之、縱實正不熟米ニ候とも、石數多候ハヽ、精々遂吟味、爲撰立、可成丈米納爲致候樣取計候ハヽ、不熟石數相增候儀有之間敷候、其上京大坂之外國々御藏詰之御廻米割賦之石數も、彼是と申立相減候も有之、旁以之外成事ニ候、其上右體石代ハ翌年ニ至り、四五月頃被納候故、吟味ニ付、自然ニ前年之御物成米、翌年多ニ至候迄、彼是被請吟味候類も有之、期月後れ候樣相成、甚未熟成取扱ニ有之、旣に不熟米先年よりハ多分相增候ニ付、當秋中水出羽守殿より御沙汰も有之候、若又此上御察當にても有之候ては、自分ども初不相濟、各役儀にも可障哉、不輕事ニ付、以來ハ急度被相心得、當辰年より御取箇附取極次第、支配限二條大坂駿府甲府所々御藏詰御廻米之外ハ、不殘江戶御廻米被致、其餘定式石代伺來候石數仕譯書付、御取箇帳被差出、次第引續早々差出、吟味可被請候、○中略

右之通被得其意、手拔無之樣出精可被致候、

辰十一月

〔御觸幷御書付留 一〕都而國々御年貢米之內、近年ハ年々願石代相增、御廻米不足ニ付、以來願石代之儀は難相立候間、不殘御廻米之積、向後定石代金納いたし來候分ハ、地直段下直之分ハ遂吟味、御廻米可被致候、明和四亥年、松右近將監殿へ伺之上申渡候後、御廻米增方ハ勿論、地直段も格別下直候處に、今近年何となく奥羽越後國之分、別而御廻米相減、不熟米安直段を以て被申立、其上定石代之分ハ、定法之取計相崩、不相當之儀ども被申立候類も有之候、然候處、去々辰年、水出羽守

候ニ付、村々へ申渡候得ども、甚難儀仕候間、百貫目之内貳貫目ヅヽ上納可仕旨相願、其段相伺候處、百貫目ニ而貳貫目之上納ニ而ハ、少分ニ候間、此上少々も餘計上納爲仕候様、明和元申年十二月御勘定所ニおいて申渡有之

〔牧民金鑑 六〕明和七寅年七月廿日御書付

諸國御年貢米、幷大豆石代金納ニ相用候相場之儀、毎年十月十五日より同月晦日迄、國々町場市場等之相場、御料ハ御代官、私領ハ役人奥書致、印形爲書出、相場之高下ハ自然と相立候事に有之、作略を以立候へバ、世上一統之難儀ニ相成候儀も有之、重き取計ニ候處、近年國々之内にも、右之通御勘定所へ書出候相場之内、私之作略を以相立候相場も有之趣、寄々相聞候、万一右之趣於無相違ハ、不埒至極ニ候、依之以來相場立方疑敷趣も相聞候ハヾ早速呼出、吟味之上、重科可被行候條、其旨存、心得違無之様可入念候也、

七月

右之趣、諸國村々市町等迄不洩様御料ハ御代官、私領ハ領主地頭より可被相觸候、尤右相場書指出候御代官、幷領主地頭ニ而も、精々入念吟味之上、是迄之通、相場書ニ奥書印形いたし可差出候、若不束之儀於有之ハ、奥印之者共可爲不念候條、其旨可相心得候、

右之　可被相觸候

〔牧民金鑑 七〕安永六酉年七月晦日

諸國御年貢、江戸御廻米之儀、近年者米性不宜様申立石代金納相願候類多、自ら江戸御廻米之儀者、定石代ハ格別、たとひ前々引付ニ而、石代金納に仕來候分も、御廻米之積遂吟味、可被相伺候、尤右之通、江戸御廻米近年相減、御藏方御差支に相成候上者、不熟米幷米不足等之申立を以、願石代金納之儀者難相立候間、右之趣被得其意、當酉年之儀ハ、撿見相濟次第、御年貢米仕譯致し御廻米

是ハ只今迄之通、京都直段用ひ申候、但只今迄ハ十月十一日より、同晦日迄之相場平均用候得ども、向後右之通、十月十五日より晦日迄之相場を用、平均候積り、

攝津國

一大坂、尼ヶ崎、高槻、三田、富田、上新米十月十五日より、同晦日迄之直段用平均候積、

是ハ只今迄、上京都直段用候得共、向後其國之相場用可然ニ付、右五ヶ所相場を用ひ平均候積、〇中略、

右場所取極候儀、城下ハ大名役人、只今迄之通り奥印爲致書付取之、御代官より差出候樣可仕候、右之外三分一銀納とハ唱へ不申候、三分一銀納之格にて、御年貢米之内石代納仕來候所ニ御座候、此分ハ三分一石代直段之通増取極置可申候、

右之通相極、可然奉存候、依之奉伺候、被仰渡次第、御代官并御預所役人へ、書面之通申渡、相極可申候、以上、

寅十一月

右之通、伺之上相極候事、

〔牧民金鑑 六〕寶暦七丑年七月廿六日

總而御廻米ニ不成分撿見濟、早速村方江申渡、御廻米ニ不成不熟米等願石代いたし候儀、隨分差急申聞候樣被申渡、申出次第、手代差遣、米性致吟味、御廻米不成分は、早々被相伺下知を請可被申儀ニ候處、近年願石代年越、廻米不成時節ニ相伺被申候方も有之由相聞、甚不宜候間、向後願石代之儀、其年之内相伺可被申候事、

丑七月廿六日

〔御觸并御書付留 二〕御代官所御預所御年貢銀之内、十分一小玉銀ニ而上納可仕旨、先達而被仰渡、

以下ニ御座候ニ付、書面之通極申候、

中國筋
美作　備中　備後　　米壹石ニ付　銀四匁。
丹後　讃岐　　　　　大豆壹石　銀四匁

是ハ去寅より亥迄拾ヶ年之内、米ハ五匁餘糴上候年壹ヶ年、四匁餘糴上候年二ヶ年、其外ハ四匁以下ニ御座候、大豆ハ拾ヶ年之内、四匁糴上候年一ヶ年、三匁餘糴上候年壹ヶ年、其外ハ三匁以下ニ御座候ニ付、書面之通相極申候、

但美作丹後ニハ、拾分一大豆納無之、

西國
豐後　　米壹石ニ付　銀五匁

是ハ去寅より亥迄拾ヶ年之内、七匁五分糴上候年壹ヶ年、五匁糴上候年五ヶ年、其外ハ五匁以下ニ御座候ニ付、書面之通相極申候、

北國
越後　　金壹兩ニ付　米壹斗貳升

是ハ去寅より亥迄拾ヶ年之内、二斗餘糴上候年壹ヶ年、壹斗五升糴上候年壹ヶ年、壹斗三升糴上候年壹ヶ年、其外ハ壹斗貳升以下ニ付、書面之通り相極申候、

但十分一大豆納無之

海道筋
美濃　伊勢　三河　遠江　駿河　伊豆　　金壹兩ニ付　米壹斗七升

是ハ去寅より亥迄拾ヶ年之內、壹斗八升餘糴上候年二ヶ年壹斗六升餘糴上候年五ヶ年、其外ハ壹斗六升以下ニ御座候ニ付、書面之通相極申候。

但十分一大豆納無之

山城國

一上京、上新米十月十五日より、同晦日迄之直段、平均を用候積り、

吟味之上、近宿城下町々、米直段を平均江戸廻米百姓諸入用を相考、其外直段相増取立候ニ付、右ニ五分一直段相止候、

〔御請幷御書付留　二〕三分一十分一直段古來五畿內ハ京都之相庭取、其外國々にても所々之相庭取、御代官より差出、御勘定所にて吟味之うへ、增加直段相極銀納取立申候、此儀御勘定所にて增銀相極候儀、不相當之儀ニ付、享保七寅年より相改、國々之所相場增直段之儀、百姓共へ爲申聞、候上にて、御代官相伺候、依之一國御代官四五人も有之候得バ、銘々直段等違候ニ付、右之內一之直段高直成を相除き、二之直段に相極、又ハ一國御代官兩人有之候所ハ、一國之內ハ直段同樣に成候樣相極申候、越後駿河之儀ハ、一國之內にて最寄限り、品々直段極來候ニ付、是又古格を以て、其最寄限之直段同樣ニ成候樣ニ相極申候、

右之通、只今迄仕候得ども、糴上之儀も、銘々御代官之吟味次第にて、甲乙も有之其上糴上吟味ニ付、百姓呼出雜費、御勘定所にても吟味手間取候間、向後所相庭之上へ增銀極置可然候、左候得バ兼て百姓共も覺悟仕罷在、御代官幷御勘定所ニても、吟味手間取不申候、右增直段ハ左ニ委細申上候、

一只今迄取來候所相庭之儀、京都直段を以て、五畿內其外品々不同御座候間、此上可取相場場所、左之通相改、可然奉存候、

年々所相場へ增直段

山城　攝津　河內　　米壹石ニ付　銀六匁

和泉　大和　近江　丹波　播磨　　大豆同　銀六匁

是ハ去寅より亥迄拾ヶ年之內、米ハ七八匁糴上候年二ヶ年、五匁糴上候年三ヶ年、其外ハ五匁以下ニ御座候、大豆ハ拾ヶ年之內、七八匁糴上候年貳ヶ年、五匁餘糴上候年五ヶ年、其外ハ五匁

ハ、可被相伺候、以上、

巳十二月

〔御觸幷御書付留 二〕甲州郡内領之儀、田畑とも米取之場所津出あしく、前々より銀納いたし、年々田畑米之直段被伺候、前々田米直段ハ、冬御張紙直段ニ二三兩高、畑米直段ハ右田米直段ニ六七割安之直段ニ候、右之外新穀賣出金と名付唱ハ、新穀を取立唱にて代米を遣し、右新穀ハ致金納候處、右代米を新穀代金過年多、此分賣出金と申候、右田米之儀、享保十巳年冬、御張紙直段ニ四兩高、畑米直段ハ田米直段ニ三割安ニ相極候處、享保十二未年、御代官相伺甲州大切直段之儀も、御張紙三兩高ニ取立候樣、同國之內にて四兩高ニ相成候てハ、如何候旨相願候ニ付、其節吟味之上、田米ハ御張紙直段に三兩高、畑米ハ同米ニ三割安ニ相極候、右賣出米之分も、私領之仕辨唱にて、取立不可然に付、吟味之上、畑米直段前々六七割安之處、三割安にいたし候得ハ、右之賣出金差出候ても、御損失無之ニ付賣出金之儀ハ相止、畑米直段、田米直段ニ三割安ニ成候、〇中略

一伊州之儀、前々三分一直段有之候處相庭に壹斗六升迄錢ユ三分二直段ニハ前々引付にて、三斗七升より七斗三升安迄いたし、川近村々水所之惡所ハ、三分二直段より又々引上ゲ、金納いたし來候ニ付、依之郡々ニ而直段品々有之不宜候ニ付、享保十巳年吟味有之、三分二米引下ゲ直段之內を、前々之格を相立、翌年御年貢米より三分一直段相止メ、三分一三分二直段同樣にいたし近邊城下、上中下米平均直段を以金納之積、水所村々之內も吟味之上、五六拾ケ村引下直段相止、實賣引直段無之候て不叶分計、直段引下相伺候、前々三分二直段に貳斗安之處ハ壹斗五升、壹斗五升安之處ハ壹斗安ニ申付候間、前々三分一三分二惡米直段、品々相伺候積と、平年辨改、上中下米を平均三分一三分二同樣いたし候直段と差引五百三拾兩餘、石代金高ニ相增申候、

一出羽國五分一直段と申、前々は取米之內五分一金納、畑方山方直段相極候處、享保七年、御代官

右爲當午御年貢納方所請取申如件、

寛永拾年七月三日　半兵衛

松村作兵衛殿

〔憲教類典五之四上地方〕享保六辛丑年十一月

總而上方筋御料所御物成之内、三分餘之銀納場所、當丑冬より銀に而成とも、金に而成とも、百姓勝手次第に相納させ候はゝ、百姓共ため可宜候、前々は銀之兩替六十目替に定り、上納候儀に付、御代官又ハ在々名主莊屋等、手前にて兩替之儀に紛敷事有之由、今程は兩替時々相場次第相納候に付、村々百姓前より、銀に而も金に而も、名主莊屋方へ請取候儘に而、御代官江可納候、御代官は名主莊屋より納候儘にて、可有上納候、但兩替之儀は、江戸大坂江相納候時節之兩替を以、御金奉行納札に可書載候間、其旨可被相心得候、以上、

丑七月

〔牧民金鑑六〕享保十巳年

一古米納之内石代にて納度由、百姓願候ハヽ、三分一金納有之國々ハ、年々相定三分一直段、米壹石に付銀五匁高の積を以、可被取立事、

一定金銀納之内にて、年々直段伺有之候場所ハ、重立候石代を用、三分一直段割合之増を以て、金納之場所を三兩高、銀納之場所ハ五匁高之積、可被取立候事、

一三分一重立候石代金銀納無之國々ハ、其年之冬御張紙直段ニ三兩高之積を以、可被取立事、

右之通相心得、年々當付可被差出候、口米之儀、廻米被致候へハ、石代納ニ百姓諸入用懸り候間、金銀納願候分ハ、御年貢米金銀之積を以如斯候、併金銀納願候分も、御米不足之節ハ、米納ニ申付候儀も可有之候、其節可被及差圖候間、被得其意、村方へも委細可被申含候、若存寄之儀も有之候ハ

永納等有之、右ハ金田之分川缺損地等ニ相成、少し之段別相殘り有之候故、一村之田高之内、永壹貫文など、申取永も有之候、

一菊多郡

是ハ小笠原佐渡守上知ニ而、上遠野郷窪田郷分レ有之、畑方上遠野郷ハ貳石五斗代、窪田郷ハ三石五斗代を以金納

一河沼郡

松平肥後守上知、同人御預所四拾壹ヶ村、田畑之内米納、幷貳石四斗代、三石貳斗代を以金納、割合ハ私領引付之通也、

甲斐國

一都留郡內領秋元但馬守上知之場所、侍屋敷跡地之分永取ニ成、金貳拾七兩餘上納いたし來候、

下野國

一鹽谷郡之內松平肥後守御預所六ヶ村、田畑とも貳石五斗代を以金納、

越後國

一蒲原郡之內松平肥後守上知、同人御預所三拾三ヶ村畑方ハ三石壹斗八升代皆金納、田方之內米納永納割合ハ、私領引付之通、三石壹斗八升代を以金納、

〔勘定所指出方勤方心得書〕一石見國畑方判銀納之事

是者畑方取米壹石ニ付、判銀八匁替ニ而銀にいたし、右判銀江十二五を掛、全上納丁銀員數出候也、尤當時判銀通用無之、但米壹石ニ付判銀八匁替、此丁銀拾匁

〔香取神宮古文書纂十七〕請取申畑方金子事

合三拾兩者江戸小判

〔地方要集錄〕奥州羽州石代直段

陸奥國

一伊達信夫字多郡　金壹兩ニ七石代

一岩瀬郡　同壹兩ニ三石貳斗代

一石川郡　同壹兩ニ三石七升貳合代

右五郡御取箇總高之内、半分ハ米納、半分ハ右石代を以金納、

一白川郡　金壹兩ニ三石五斗代

但田方ハ米納、畑方ハ金納、

一會津大沼郡　同壹兩ニ三石貳斗代

此兩郡ハ村方ニより、半分石代、半分永納も有之、其外四分一、五分一、八分一、或ハ皆金納、其村村之引付ニ而金納仕候、

出羽國

一置賜郡　金壹兩ニ六石代

但御取箇總高之内、半分ハ米納、半分ハ金納仕候、

陸奥國

一磐城　磐前　楢葉

右三郡ハ、都而磐城領と唱、内藤備後守領分之節、村々増高吟味有之、七万石高を拾万石餘ニ打出シ候節、谷間野地山上等、聊ニ而も蒔付出來可申處ハ、段別石盛を附、持主ハ新田切百姓と唱、苗字等相免じ、褒美等有之候ニ付、多分之打出高出來致シ候處、右之内田高之分、米納ハ難儀之段申立、貳石五斗代を以金納いたし、金田(カンダ)と唱來候、右ニ付田高取米永不同ニ而、纔之

諸帳面に用ひよといふにハあらず、其元をわけて見せたるもの也、此次の關東厘付も同斷也、此算用ハ高百石三ッ成として、此取三拾石三ッに割、貳ッ分田米にて、此米貳拾石、拾石ハ畑取にして、是を五分違の一五にて割バ、六石六斗六升六合六勺六才、是へ田米貳拾石を加へ、合貳拾六石六斗六升六合六勺六才、是を三ッに割、貳ッ分田米、壹ッ分畑米、銀納直段四拾八匁をかけて、此銀四百貳拾六匁六分六厘六毛、四ッ成五ッ成共にいづれも算用同斷也、○中略

上方關東五分違六分違法之事

一關東田畑六分違貳石五斗替、六分を乘じて、直段壹石五斗となる、

一奥州白川、會津、長沼、三石貳斗替、直段六分を乘じて、壹石九斗貳升となる、

一同仙臺五石替、直段六分を乘じて、三石となる、

一同福島七石替、直段六分を乘じて、四石貳斗となる、

一出羽米澤六石替、半金納なげ免、

一下野宇都宮三石替、直段六分を乘じて、壹石八斗となる、

一上方田畑五分違三分一銀四拾八匁、壹石貳斗五升となる、

辨解、是ハ上方五分違關東六分違と立たるハ、諸國一樣右の通りにて、算用合ふといふ事を、引付の諸國金納直段を以、一樣のわけをいひたる物也、此法諸國の直段を貫代と云傳ふ、或覺書云、貫代の事所々にて違ふ、甲州川內領の貫代ハ、壹石四斗四升に當る故記置とあり、是ハ畑方を永に直すに、すべて貳石五斗と心得、又ハ甲州ハ古來より大切小切とて、別段の法あるに、川內領にハ古より引付にて壹石四斗四升替にするもあり、一樣にハいひがたしとて記し置也、關東の貳石五斗代も貫代の一ッなるを、作者ハ上方ハ壹石貳斗五升、關東ハ貳石五斗と、諸國の直段をバ別段に見たるハ、永高の本意を考へずと見へたり、

一高百石　四ッ成と云ハ　米貳拾石　金八両
一高百石　四ッ半成と云ハ　米貳拾貳石五斗　金九両
一高百石　五ッ成と云ハ　米貳拾五石　金拾両

右是ハ關東田畑六分違と云、貳石五斗替厘付之起也、是關東田畑此法を以執行時ハ、物成米金之多少有之地成共、厘付過不足といふ事なし、

辨解、此書面當時勘定にあへども、作者の本意ハ當時の勘定のごとくにハあらず、先三ッ成三拾石、是を田半分畑半分として、拾五石田取、米拾五石畑取として、是に六分違の六をかけて九石となる、是を壹石五斗替にして六両と成る、四ッ成五ッ成何れも同斷なり、

上方三分一銀厘付之事

一高百石　三ッ成と云ハ　米拾七石七斗七升七合七勺七才　銀四百貳拾六匁六分六厘六毛
一高百石　三ッ半成と云ハ　米貳拾石七斗四升七勺四才　銀四百九拾七匁七分七厘七毛
一高百石　四ッ成と云ハ　米貳拾三石七斗三升七勺　銀五百六拾八匁八分八厘八毛
一高百石　四ッ半成と云ハ　米貳拾六石六斗六升六合六勺六才　銀六百四拾目
一高百石　五ッ成と云ハ　米貳拾九石六斗貳升九合六勺貳才　銀七百拾壹匁壹分壹厘壹毛

右是ハ上方田畑五分違三分一銀納と云厘付也、尤關東之厘付と心得同前なり、如此成事を勘辨して、國々分明に知る也、

辨解、上方三分一銀納田畑五分違と云を、割付しもの也、是當時の算用にハあはず、かりに五分違のわけを出して見せたるもの也、たとへば三ッ成なれば、當時の算用にては田米貳拾石畑米拾石の筈なれ共、夫にてハ三々三分七厘五毛の厘付になる、此書中の法、三ッ成と積る時ハ、田畑にて正味貳拾六石六斗六升六合餘なりと、かりに見せたるもの也、三ッ成を如此に積り、

種代と申名目如何之謂を以唱へ、古來より引付に而譯不相知、安石代一種に而納ると申事にも可有哉、

〔地方一條記〕地方問答

一或人云、關東に貳石五斗替と云直段を地方に用、其外國々所々色々なる直段あり、是ハ往古米下直成節之直段を古例として、近代迄用來る哉と云、答云、聊左樣成譯にハ不可有、總じて地方ハ聖人之法といへり、然れバ關東地方貳石五斗替に不限、所々にて用る直段之法、古來之時々相場之直段とハ難云、是聖賢之法と見えたり、地方に不限万物之法、上古末代迄、一天下に用る法、聖武賢世之法成べし、米直段下直也とて、過不及之法ハ不可有、只順路之法と見えたり、子細ハ、貳石五斗と云法ハ、直段壹石五斗と成、是法上代米下直成相傳へを、近代迄古例として用るとハ、誤りなるべし、○中略

辨解、關東貳石五斗替に限らず國々所々に區の直段ある事ハ、永高の遺法にて、米下直なる節の事なるべし、元米と錢との事なれバ、其時々にて下直なる事も、高直なる事もある事也、貳石五斗と云法ハ、壹石五斗となるといふも六分違といふ事を立て、貳石五斗に六分をかけてかくいへども、元來永高の時ハ、其永高に幾ツといふ樣なる事ハあるまじきなり、永高拾貫なれば、直に永樂錢拾貫文出すべし、米ならば貳拾五石、又ハ三拾石五拾石と、其所々永樂錢と米との釣合を考へて、極めたる事なり、此書中、永貳拾貫文の地高百石になり、永にしてハ貳拾六貫六百六拾六文六分六厘六毛といへるハ、皆跡よりすり合たるものなり、○中略

關東貳石五斗替厘付之事

一高百石　三ッ成と云　米拾五石　金六兩

一高百石　三ッ半成と云ハ　米拾七石五斗　金七兩

〔地方凡例錄 四〕一相場書之事

上方筋諸國石代金納に相用る相場書之儀、國々市店驛湊河岸場等、穀問屋共より相場書差出、場所一圖ニ五ヶ所三ヶ所宛極有之、每年十月十五日より晦日迄、每日上中下米相場書穀屋共より支配役所へ差出、御料ハ御代官元〆手代、私領ハ領主地頭役人奧印に而、其所により御代官方へ差出候得ハ、於御代官役所十六日分上米平均して、其國々の定法何斗高、或ハ何兩何匁增を加へ、國々御代官より、御勘定所廻米方へ差出、吟味之上石代直段極り、其直段を以年々定たる定。。石代。。致金納事也、又風水旱虫之損毛等ニ而、米性惡敷、米納ニ難成分、又ハ何ぞ子細有之、願石代と唱、石數吟味之上相伺、石代金納に成もあり、是ハ定石代直段之上に、何程高と直段雜增之定法有之致金納、又小物成高掛米等、米納も稀にハあれ共、多分ハ石代金納に成、此直段ハ定石代直段を用、口米ハ定法之雜上有、關東之御張紙直段ニ三兩增なり、尤國により色々之納方も有之、一樣成ざれ共、大凡右之趣なり、

一右石代に用る外に、關東筋上方筋共、每年正月四月七月十月と、一ヶ年に四度、朔日より晦日迄、日々上中下米麥錢相場書を、御代官支配限書出す、場所五ヶ所三ヶ所宛定り有之、穀屋共より書出、御代官より御勘定所へ差出右相場を以、御普請扶持米夫食種貸麥種貸等、代金に而御金藏より相渡る節ハ、直段に用る、尤何れも下米下麥之直段なり、是ハ正四七十之相場書と云、

一一。種。代。之事

一種代と云も、奧州伊達郡之內ニ有る石代也、田畑米取に而、取米不殘七石替之安石代ニ而、田畑總取米金納ニ成村方有、是を一種代村と云、尤多ハ無之、又一種直り場と云村方も有、是ハ元外村並半石半永之村方なれ共、譯有之一種代に成たる村也、都而伊達、信夫、宇多郡邊、半石半永ニ而、田畑取米半分ハ金壹兩米七石替之石代金納なれ共、一種代ハ米納なし、不殘七石替金納なり、一

ハ右割合を以、三分一直段米壹石ニ付銀五匁高之積也、

但三分一金納無之、定石代有之國々ハ、右定石代を元ニ立、三分一直段割合之通りを以、可被相伺候、

一御用ニ付殘置候御物成之内段々渡、殘米金納ハ、其時之直段を以可被相伺候、

〔地方落穂集五〕同國書○甲郡内領雜穀直段仕出之事

一甲州の内都留郡内領ハ、山中にて山畑也、尤船運送の便り無之故、田畑金納の所也、然れ共田畑米取の場所にて田米ハ御張紙直段に三兩高也、畑方も外々の通り、石代三兩高に可成事に候得共、右山畑飽地の所にて、雜穀のみ作る所なれば、御用捨を以、畑米ハ御張紙直段三兩高に三割安と定め、其上にも其年々雜穀直段の高下を以、石代直段を極む、右算術に曰、去年の雜穀直段へ當年の畑米直段を乘じ、當冬御張紙直段なり去年の畑米直段を以て除き、當年の雜穀直段と成、尤大豆稗蕎麥とも一廉切、夫々の直段を以て、當年の石代直段を仕作也、

〔地方凡例錄四〕一三分一銀納十分一大豆銀納之事附り上方ハ關東より貳割增之事

一十分一大豆銀納と云ハ、大豆之直段書出伺之上極る所も有、前々引付ニ而定直段之場所も有、總取米之十分一を大豆銀納とて、石代に而納る、尤引付に而村々より、正大豆納るも有、大豆銀納正大豆納共なき村方も有り、右三分一銀納、十分一大豆銀納引掛り、米納に成なり、又村に依而譯有之、定石代銀納之數定り、米納之内銀納に成村も有、或ハ年に依不熟青米等多、上納米に難成、願。石代。迚其數を極、銀納に成もあり、拵又廻米難成場所歟、又ハ皆畑等にて、皆銀納之村方もあり、前前仕來りに而、色々之納方有事也、右三分一銀納と云ハ、上方筋中國西國共平均すれば、大方田方三分二、畑方三分一程有之積を以、如斯極たる儀と見えたり、上方ハ三分一銀納、關東ハ畑方永取と云事、年久敷いつ之頃より始りしや、一向知ざれば、古來相傳之事なるべし、

一上方とても物成の仕出ハ、貳拾貫百石の積より發る也、上方に三分一銀納の法有に寄り、畑の假取米貳拾五石を三ッ割、其一ッを實として、殘二ッを法として除バ五分と成、元米貳拾五石へ乘じて、拾貳石五斗に減、畑高五拾石ハ永拾貫文の地也、是貳拾貫百石の地也然る時ハ右拾貫文を以て、拾貳石五斗と對するにより、永壹貫文に壹石貳斗五升に當る也、永壹貫文ハ金壹兩に通用すれバ壹兩の相場的當なり、

上方銀納直段幷關東貳割高の事

一上方三分一銀納直段、壹石に付四拾八匁替と云法ハ、右に記す通り畑取定直段壹石貳斗五升より發る也、術曰、公納銀相場六拾目を實に置、右畑取定直段を法にして除之、壹石に付四拾八匁に當る也、是を以て定直段とする也、

一上方の地ハ關東より貳割能に付、定直段も貳割高し、術曰、上方直段壹石貳斗五升を法として、關東貳石五斗を除バ、貳割高と知る也、上方と關東とハ斗代盛も此心を用る也、然れバ上方石盛拾五ならバ、關東ハ拾參として可然儀なれ共、關東にても十五六の盛あれバ、上方貳割増ハ斗代盛の內へ、考入たると見へたり、

〔地方落穗集十〕諸納米金伺之儀ニ付御定書之事

一御年貢米、二條大坂御藏納之節、於船中大澤手、小澤手、濡米、色替、鼠喰之類、幷米性不宜、御藏納ニ難成分ハ、買納等ニ致候筈ニ候得共、左候而ハ納名主久敷逗留、品々入用も懸り候間、米手遣無之節ハ、金納可被申付候、右金納之儀ハ、米納國々之直段ニ無構、二條大坂江戶納共ニ、其節之張紙直段、米三拾五石ニ付金四兩高、銀納場所ハ右割を以、米壹石ニ付銀六匁高之積り、可被相伺候、

一總而三分一幷品々定石代之外、津出難所之分、畑方米納之場所、金納之類、幷年ニ寄、懸米石代、或ハ廻米殘之端米等、總而此類之金納ハ、其時之張紙直段三拾五石ニ付金三兩高、幷ニ銀納之場所

に成し故、今ハ石代直段三石七升貳合替に成たると云覺書也、山羽米澤田畑なげ免。金納。といふハ、田も畑も米取にして、總取米の半分六石替之石代をもつて、金納にする事也、

（地方落穗集二）關東貳石五斗替發之事

一關東貳石五斗替といふハ貳拾貫百石五ッ成と云より發りたるなり、貳拾貫百石と云ハ上方ノ同じ高に結ぶにハ、田計りにても、畑計りにても、山野海川共に田畑々々と結ぶ也、又百石の地、五拾石ハ田とし、五拾石ハ畑として結ぶ也、田方五拾石の物成貳拾五石本米也、畑方五拾石の物成貳拾五石ハ假米也、是へ六斗を乘じて拾五石と成る、田米貳拾五石を加へ四拾石也、依之四拾石五ッ成と云なり

一右拾五石ハ畑方高永拾貫文の本米也、然る間其貫文に壹石五斗替の直段ハ、貳石五斗の直段に見へたり、貳石五斗ハ畑高永拾貫文と畑の假米貳拾五石を對して貳石五斗也、

一四拾石五ッ成と云ハ虛厘也、田方本米貳拾五石、畑方假米貳拾五石合五拾石也、高百石に對し五ッ成也、然れ共畑方六分違の勘定にて、田畑取米四拾石と成、此四拾石を高百石ニ對したる時ハ、實厘四ッに當るなり、○中略

上方厘付幷三分一銀納之事

一上方厘付關東に同じ、但關東貳石五斗替ハ、則壹石五斗替に成、上方三分一銀納、壹石に四拾八匁替ハ、兩に壹石貳斗五升の直段に成也、如斯の差引を勘辨あれバ、國々所々厘付田畑同厘と云過不足なし、

一上方ハ都て銀遣ひなれバ銀納也、又公納の銀定直段、金壹兩に六拾目替也、古來ハ町相場六拾目の餘にて、多分安ぎに寄、下直成銀を調へ、高直段成相場に納也、依て百姓悉く潤ひに成しと也、今ハ通用銀六拾目の内へ引込に付、爲に不相成、元來右の心を以て、三分一銀納に定たる成べし、

本土ハ凡テ平陸之地少シ、猶山奥ニ至ッテハ、皆畠ノ村里多シ、故ニ精米其地ニ乏シク他ノ精米ノ價ヲ用キ、金銀ヲ以テ貢納スルヲ、石代金納ト稱セリ、（總テ石代金銀納ノ法ハ、諸州トモニ同ク、）然ルニ是ヲ收納スルニ期月ノ法アリ、仍テ其期月ノ際限ニ至ッテ、民ノ難澀セザルタメニ、定メタル古法也、則秋成之最初ニ、其地ニ於テ民ノ作リ出セル雜穀ノ類、何トイフニハ限ラズ、其民ノ年貢ノ石數ニ應ジテ、法ノ如ク納メサセテ郷藏ニヲケリ、（郷藏トイフハ、村數十七二十七組合セテ、其中ロ、ニ中村里ニ建テ、是ニ集メ、自是治所ノ官庫ニ運送スル也、故ニ謂藏トモ云ヘリ、）其雜穀ヲ以テ精米ニ充ル處ノ國法ヲノス、稗一斗精米三升ニ充、蕎麥一斗精米五升ニ充、籾一斗精米五升ニ充、大豆一斗精米ノ六升ニ充、小豆一斗精米七升ニ充、粟一斗精米一斗ニ充、（以上）是本土古今ノ法也、則如此雜穀ヲ以テ年稅ヲ價ヒ、是ヨリ期月マデノ間ニ、村民各正金銀ヲ調略シテ、治所ニ納メリ、於テ茲ニ初メ郷藏ニヲク處ノ雜穀ヲ出シ、モトノ村里ニ返シ渡スコト也、誠ニ古法ト可謂歟、

（田圃類說）諸國石代直段之事

按するに、此諸國石代、當時も引付之所々多く有之、貫代とも云、年久敷義にて、其始知れすといへども、關東の諸國永高時代の遺法なるべし、併古來ハ何れ之國も籾違ひにて籾納なれバ、此石代も此一倍の籾數なるべし、籾納止て米納になりしゆへ、米の積半減したると見えたり、いかんとなれば、關東貳石五斗代之永を、高五石とする事ハ、則籾五石にして、すぐに年貢の籾數なれバ也、今は貳石五斗代、關東畑永の通法となりたり、上方三分一直段ハ、今ハ其年々にて極る、奥州白川、會津、長沼、三石貳斗替といふ石代の內、白川領分今ハ三石七斗貳合替と成候、其譯或覺書ニ、奥州白川、長沼、森山、會津、石川領筋半石直段三石貳斗代に候處、其以後白川領分三石七升貳合がへに成候儀、長沼鐚四貫文に目を加へ候勘定を以、壹貫文ニ四分の利を加へ候積にて、三石貳斗の內にて、壹斗貳升八合引にて、三石七升貳合替に直すとあり、是前方ハ銅百錢の勘定の所に、九六錢

一千百八石七斗　　うちおろし村 常滑分
一三百九拾四石三斗三升　　をとわ村 同分
一四百貳石壹斗七升　　伊黒村 ○中略
合九千貳百三石貳斗
右令取沙汰可運上之候也、
文祿四年八月八日朱印 ○豐臣秀吉
杤木河内守どのへ

〔香取神宮古文書纂 五〕一御何米一札之事　　宮中御藏米卯御年具
卯御年貢
右之米二拾俵は、江戸にてうりまへに御座候はゞ、そのなみに、金子さし上可申候、又こゝもとにて、うれ申候はゞ、御藏拂内さし上候、そのそうばしだいにいだし可申候事實也、仍如件、
寛永五年 辰 三月卅日
瀧右衞門 印
又二郎 印
四郎兵衞 印
三郎兵衞 印
かげゆ 印
清左衞門 印
作右衞門 印
大宮司樣御内
仁左衞門殿

石代金納

〔飛州志 二 國法〕年稅雜穀代米

三斗八升　世花寺　未進九升四合　一斗三升二合　白山　一斗八升　同神主　六升
六合　同　九斗　秦屋ゑもん　未進一斗　四斗五升　大みつ圖正せん　未進五升〇中略
納以上六石四升此外未進七斗五升六合

〔農政座右二〕石高

森本氏文書文明十七年、攝津州森本森殿菴田畠納下帳ニ、
公田三段半、本役一石九斗五升、段別二斗九升一合
一色三段　本役一石九斗五升段別六斗五升アテ
佃四段　本役二石段別五斗代、下略ス、

〔香取神宮古文書纂十六〕請申　御下地下作職之事

合壹段者　御本所眞光院付

右件御下地者、望申に付候て、あづけ被下處也、仍御本所の御年貢、幷御公事物已下、額地之ごとくたるべく候、名主作職の御年貢者、勘右衛門方の十三合の升にて九斗名主分六斗作分三斗宛、無干水損可納申候、いづれも若無沙汰仕候はゞ、相當分何の下地にても候へ、可取押申候、就中下作事、不得御口を、別人契約仕事候は、堅御ざいくわにあづかり可申候、又何時にても候へ、御下地を被召上候て、他人に被仰付候とも、是非一言及べからず候、仍爲後日請文仍如件、

延徳四年四月二日　彌三郎花押

名主作職方、御年貢御納の御升、追て久我升に追々御治定あるべき由、心得申候、

彌三郎花押

〔朽木文書九〕近江國高島郡御藏入帳

江州高島郡御藏入

合貳百貫文之内　捌拾貫文御免物、但此内國下行在ㇾ之、

定錢百貳拾貫文、諸下行見勘定、任二人數一在ㇾ之、

殘分拾七貫六百文

一若狹國木津莊御年貢米

合四拾四石五斗貳升參合參勺之内　五石參斗國下行在ㇾ之　捌石九斗四合御免物

定米參拾石參斗壹升九合參勺　進納分

同御年貢錢

合貳拾貫四百六拾文之内　五貫五百文國下行在ㇾ之　四貫捌百拾貳文御免物

定錢拾貫百四拾捌文　進物分

一同國富田鄕御年貢米

合參百貳拾五石捌斗七升貳合四勺

合壹石五斗國下行　捌方之内　陸拾五石壹斗七升四合御免物

定米貳百四拾九石壹斗九升八合四勺八才

進納分依二和市一不ㇾ定

同御年貢錢

合拾漆貫四百參拾參文之内畠方也　參貫四百捌拾六文御免物

定錢拾參貫九百四拾參文

文正元年十月日　花押

〔朽木文書十六〕納大御領、公文給年貢事

合　應仁元丁亥十一月分

一反（ハルノ木）　一石二斗代　得九斗　衛門五郎〇下略

〔朽木文書十六〕新開其外色々田數御年貢事

合　享德三年卯月日

一町一段　六石六斗　椋川　五段　三石　麻生　四段　二石四斗　朽生　二段　一石二斗　口來　三段　一石八斗　地子原〇中略

進上　　黑川入道　暁如花押

〔集古文書五十四注文〕文正元年年貢注文　蜷川家藏

執口口申御領所之御年貢以下注文

一丹波國桐野河内御年貢錢

合百四拾貫文之内　五拾貫文御免物、但此内國下行在之、

定錢卆拾貫文、諸下行給人已下見勘定在之、

殘分貳百文餘

同御年貢米

合百漆拾九石參升五合之内　四拾六石五斗壹升、諸下勘定在之、　四拾九石參升五合御免物、但此内國下行在之、

定米捌拾參石四斗九升進納分　此内卅石御籾磨也

一山城國稻八妻莊御年貢米

合百四拾石四斗參升之内　四拾石四斗參升御免物、但此内國下行在之、

定米五拾壹石五斗壹升四合參勺　進納分

一備中國小坂部鄕御年貢錢

右名主職者、爲寺家被恩補之上者、本所年貢三町、縄手一段別七斗五升代、莊内貳段ニ壹石、毎年無懈怠可致其沙汰、就中對寺家、毎年不可及異儀、仍請文之狀如件、

應永十年十二月廿三日　　梵聖花押

〔香取神宮古文書纂十一〕佐原に候西ノはりそへ、司畠一反の御年貢一斗五升づゝ、さた申候べきところに、毎年十一月四日五日の机を、八升十一文申べきかたに、さうだん申候へば、向後におき候ては、子細あるまじく候、仍爲後日さうだん狀如件、

應永十一年甲申十一月　日　　御代官彌七兎花押

〔東寺百合古文書百七十五〕請申東寺御影堂常灯御料所田地事

合貳段者在山城國乙訓郡上久世庄内、壹段者、東出口壹段者三角田、

右貳段、名主御年貢分三角田九斗、總庄斗定、本東出口七斗、上升同定、毎年九月中、堅可辨申、〇中略仍爲後日、謹請文之狀如件、

應永卅一年甲辰五月三十日　　道淨花押

〔東寺百合古文書百七十五〕寄進　東寺西院論義料所事

合壹段者在所蓮華門前、繩本毎年土貢三斗、十三合升定、〇中略

永享四年壬子七月朔日　　願主權律師原濟花押

〔桒山寺年貢納帳〕享德二年年貢收納帳

桒山莊分

大アタカノ前	九斗代	得七斗	刑部入道	一反ハリマダ	四斗五升代	得三斗五升	五郎マツバラ
一反ハカシ	三斗代	得三斗	法師	大フタ田	六斗代	得四斗	尺迦院
一反カワケ田	四斗代	得貳斗四升	覺顯行圓	大樋口	二斗代	得一斗	行圓

〔東寺百合古文書百六十一〕賣渡永作手田地事

合陸段半者

在山城乙訓郡下久世内〇中略

右田地者、〇中略本所當米者一段別ニ二斗役七合升定、可致此沙汰、〇中略仍爲向後龜鑑沽劵之狀如件、

延文二年丁酉二月廿五日

賣主岡田定元花押

請人藤原正弘花押

〔東寺百合古文書一〕うりわたすなかちの田の事

合二反者在山城國乙訓郡下久世莊内

一反は久世里十三坪　四至限東なわ、限西みぞ、限北あぜ、限南あぜ、

一反はかさから里一の坪　四至限東たりやう、限西なわ、限北たりやう、限南池類、

右〇中略此でんの年ぐは久世里一反は、一石のうちを四斗と、わら一束五わとをば、本所の御ねんぐに御沙汰候て、のこり六斗をばかいぬし御とくぶんとしてめされ候べし、又かさから里一反は、年貢八斗内を二斗四升を御りやうけへ御さた候て、のこり五斗六升をばかいぬし御とくぶんにめされ候べし、このほかは一りう一せんも、よの御くうしなきところにて候、〇中略仍爲後日うりけんの狀如件、

永和四年十二月廿五日

うりぬし　せんみつ判

請人　與一判

〔東寺百合古文書百七十二〕請申上野莊名主職事

合肆段小者在所上野貳段、三町縄手貳段小、

シテ、大貢ノ籾ヲ宮方ヘ、沙汰アルベキヲ、當方ヘトメオクヲ、加徵米ト云也、

右依讃田宮方ヘ、都合ノ籾ヲ沙汰シテ後、

五斗御別料、五月五日小七月、兩度ノ分ニ、禰宜ニ請取スル也、

六斗、五日小七月ノ駄餉料神事ト云、百姓十人シテ請取也、三斗堰料トテ百姓等請取也、

一斗御倉稅トテ百姓等請取也

二石四斗、供料三人分、古八斗參也

合三石九斗、役所ヘ下行ス、餘分ハ名主筆稅ニ給也、

元德二年庚午十一月十八日日記ヲ寫畢

〔東寺百合古文書七十〕太良莊御年貢建武元年未進送文之事

合

國定拾伍石肆斗三升二合五勺二才

除雜用貳石八斗四升

正米拾貳石五斗九升二合二勺

右所運上之狀如件

建武貳年二月二十一日　預所代花押

〔東寺百合古文書百二十九〕請申東寺御影堂領水田下作職事

合貳段者

在山城國紀伊郡佐里九坪作路井

右所當米者、二段分每年四石、定坊用用途百文、九月中悉可令辨濟候、○中略仍證文之狀如件、

文和二年三月廿日　六郎兵衛末吉花押

米二石四斗五升一合　同

同前

錢二貫三百六十一文　同

地主免五段内三段與一左近 二段平二郎

錢六百五十文圓覺寺御年貢〇中略

元亨貳年六月廿七日　沙彌淨圓花押〇以下五名略

(東寺百合古文書百四)注進太良御莊御年貢米送文事

合貳拾捌石玖斗四合五勺八才内

貳石肆斗六升六合一勺八才元亨元年分

貳拾陸石肆斗三升八合四勺元亨二年分

右御年貢米送文之狀如件

元亨二年十一月二十二日　公文僧性範花押

(鹿島文書)大賀村撿注取帳副日記

一段ニ五斗四升也、此内四斗ヲ宮方へ沙汰ス、一斗四升當方へ納也

三百歩ニハ、四斗五升、此内三斗三升三合、宮方へ沙汰ス、一斗一升七合、當方へ納也、

大ニハ三斗六升、此内二斗六升六合々中、宮方へ沙汰ス、九升三合々中、當方へ納也、

半ニハ、二斗七升、此内二斗、宮方へ沙汰ス、七升當方へ納也

小ニハ、一斗八升、此内一斗三升三合、宮方へ沙汰ス、四升七合、當方へ納也、

六十歩ニハ九升、此内六升六合々中、宮方へ沙汰ス、二升三合々中、當方へ納也、

一都合ト云ハ、宮方ノ百姓モ讀田一段ニハ五斗四升沙汰ス、此内一斗四升、當方へ納ムルヲ、勘定

合二段者　所當七斗此内斗沙汰人得分急用〻

山城國大隅莊之内　作人公文

一奉寄進　佛餉田

合一段者　所當三斗

大和國法華寺之前字鍋樽　作人西念

右旨趣者、爲令成就二世之悉地、奉寄進之狀如件、

弘安元年七月日　以上不知施主名字

(春日若宮御領伴田東西莊目錄)春日若宮御社領大和國葛上郡伴田東御莊

注進　延慶三年所當米一段別一斗二升四合宛〇下略

(尾張國林阿賀良村田數濟物注文)尾張國林阿賀良村作田坪々名寄事

合

一林村

余一左近名〇中略

定田二町八段大

米二石九斗二升一合二宮彼岸米

此外二明神御祭長源寺餅米辨之

錢三貫七百廿七文圓覺寺御年貢

次郎太郎名〇中略

已上二町八段六十歩内一町三明神修理田

定田一町八段六十歩

合

東鄉八十七町五反二百八十歩〇中略

定田五町四反三百歩

六斗四升八合代三反

正米一石九斗四升四合乃米六斗九合□米一石三斗二升五合

一石代一反百五十歩乃米一石四斗一升□合六勺七才

八斗代二町一反八十歩乃米十六石九斗七升七勺八才

五斗代二丁百四十歩乃米十石一斗九升四合四勺五才

六斗代八反二百九十歩乃米五石二斗八升三合三勺四才

所當米三十五石八斗一升六合二勺四才

右注進如件

文永五年七月　本□所判形無之

〔東大寺要錄二〕散在佛餉田料所事

一奉寄進　佛餉田

合伍段小者　所當三石六斗

伊賀國名張郡新莊領之內作人宗覺 新六郎 相模兵衛次郎

一奉寄進　佛餉田

合一段者　所當六斗

大和國法貴寺　作人治部左衛門尉

一奉寄進　佛餉田

二段、比物給二段、井料一段、殘田十町七段大、 所當米三十二石三斗内十五石神事用途○中略

右當社一年中所當米已下所出物等、且依往古例、且任當時辨之實、註進如件、

建曆二年九月日 勾當兼金宮祝散位角鹿○以下別當行事五人署名略

〔常陸國吉田神社文書〕下 吉田社領内神生佐渡村地頭住人等

可早以段別拾束代、進濟御年貢穎以下事

右當社領内、彼兩村本依爲薄地、皆可爲五束代之由、雖被下知、漸々經年序之間、謬超他郷、令與復云云、仍任員數、可濟御年貢之旨、御下知先畢歟、而猶以令牢減之條、頗以自由也、由之今何可令對捍哉、早自當年、以段別十束代、可令辨濟有限官物以下之條、依仰下知如件、

建長二年七月日 預所散位三善朝臣花押

〔東寺百合古文書百三十三〕原田御莊 細谷村

注進 弘長二年正檢取帳目錄事○中略

分官米佰貳石貳斗捌升五合

段米參石玖斗貳升段別五升定

勸料米參石陸升壹合段別壹升定

小段米陸石壹斗貳升貳合段別貳升定

御佃米拾肆石捌升段別壹石陸斗定

鄉司正作米肆石陸斗漆升肆勺○中略段別漆斗漆升捌合肆勺定

右目錄注進如件、

弘長三年正月日 地頭代紀在判

〔若狹國大田文〕若狹國注進文永二年實檢大田文內事

米納

〔牧民金鑑 八〕寛政二戌年十一月

申渡

御藏納式諸入用書付

今般近江屋嘉左衞門へ、御廻米引受納方御樣申付候處、納入用過半相減候由ニ相聞候、然ル處是迄納宿共取計方之儀ハ、兼而差出置候清帳入用之外、別段ニ入分と唱、多分内入用、郡中より取立來候趣追々相聞、一同不埒ニ付、納宿株式取放申付候、依之右跡引受之儀ハ、嘉左衞門仕法を以、伊勢町古河屋五郎兵衞、德田屋五郎兵衞、小船町垂水屋治右衞門ニ納方引受申付、御廻米高割之儀ハ、三分一嘉左衞門、殘三分二之分、右三人ニ一手ニ引請申付候ニ付、別紙仕法大意書相渡候間、被得其意、此上銘々支配所郡中取〆リハ勿論、手代共心得違無之樣可申付候、尤一同新規仕法ニ相成候事故、右取計方居合候迄ハ、御藏へ御勘定方出役被仰付、万事取計候筈ニ付、其段可被相心得候、

右ハ松越中守殿御差圖ニ付、申渡候間、可被得其意候、

戌十一月

〔吾妻鏡 十二〕建久三年十二月廿八日丙寅、伊勢太神宮御領、武藏國大河戸御廚所濟事、增員數對神主被定下、當所田代捌佰餘丁也、平家知行之時、本宮御上分國絹佰拾參疋外、雖不能神用、當于此御時、爲公私御祈禱、正官物幷所被奉免也、所謂本田別貳疋四丈、新田町別貳石、所當田別壹町石參斗云云、因幡前司、藤民部丞等奉行之云云、

〔氣比宮社傳舊記〕上 氣比太神宮政所

注進 御神領作田所當米已下所出物等總目錄事〇中略

一葉原保見作田十四丁二段大内

除三町五段 神田四段 寺田二段 領家分佃一丁、 大宮司分佃一丁 案主給五段、定使給

以、給銭壹俵ニ付壹文五分づゝ頂戴仕來候、尤急度仕候書付等ハ無御座候得共、申傳を以、納宿
一同承知仕罷在候、
一上方中國西國筋北國筋　　但壹俵ニ付六勺づゝ、
此段ハ御廻米壹石ニ付三升づゝ、缺米御座候、依之右同斷、
一關東甲州信州筋　　但壹俵ニ付米壹合づゝ、
此段ハ缺米無御座、納宿骨折給計之儀ニ御座候間、如此頂戴仕來候、
右ハ納宿森村屋久次郎ニ申付、書付取候由、

〔代官留書〕關東御米納諸入用

覺

播磨屋字兵衛　河内屋彦兵衛　安屋伊兵衛　大坂屋善助　霞屋善八
明石屋定次郎　大黒屋新太郎　鍵屋與助　河内屋市兵衛　樋口屋乙五郎
大和屋善兵衛

伏見奉行御預所計　大和屋甚左衛門
小堀數馬納方計　河内屋伊兵衛

大坂御廻米納宿共、以來銘々引請納高相極置、別紙名前之もの共、御益人足等相増、割合納ニ致度旨、大坂御藏奉行申立候間、右之趣伺之上、願之通可申渡旨、此度御藏奉行へ申渡候間、可被得其意候、右ニ付新規之納入用ハ勿論、無益之入用等、納宿共より申掛候儀も有之、又ハ石數相極、納方引請候付而ハ、納宿共自然ト弛ミにも相成、如何之取計等致候歟、其外平生身持等不宜者も有之候ハヾ、其段御勘定所へ早速可被申立候、

安永八亥年二月

納宿

一御藏庭押掛手傳人足　壹人ニ付　但右同斷

右者御藏入被仰付候砌、御庭ニ而押掛人足千俵ニ四人之積、諸國一統如此、

一御藏内より拼出人足　壹人ニ付　但右同斷

右ハ御藏庭へ拼出被仰付候節、右人足千俵ニ拾四人掛り、諸國一統如此、

一御藏内ニ而押掛人足　壹人ニ付　但右同斷

右ハ拼出之節、御藏内ニ而押掛り、人足千俵ニ四人ツヽ之積、諸國一統如此、

一御藏内庭ニ而拼直人足　壹人ニ付　但右同斷

右ハ拼出之節、御藏庭ニ而拼方人足千俵ニ四人掛、諸國一統如此、

右之通、御廻米御藏納諸入用、一色安藝守樣ニ而御吟味之上、前々より引付之通被爲仰付候處、相違無御座候、以上、

安永二巳年十月

納宿巳年行事　常陸屋金左衛門
笠倉屋久三郎
大野屋利兵衛
小田屋專次郎
增田屋達次郎

川崎市之進樣御役所

〔淺草米廩舊例下〕納宿骨折給被下之儀御尋ニ付奉申上候

一出羽奥州筋、但米壹俵ニ付錢壹文五分ツヽ、此儀ハ御廻米壹石ニ付、五升ツヽ缺米御座候、納相仕錢、百姓引取に相成、御拂米の節、納宿其外米屋共入札御取被遊、御拂之節、負手世話料被爲、金壹兩ニ付米貳升ツヽ被下置候、依之給米之儀、關東筋並ニ不被下、其節御代官樣被仰付次第ヲ

傳　足五百九拾九俵迄四人、六百俵より千俵迄斜貳挺、千俵以上ハ右割合を以相立申候、

一水揚手傳人足　壹人ニ付　但錢拾五文ヅヽ

右ハ御米千俵ニ付六人ヅヽ、尤百七拾俵以下ハ何程小口ニ而も、壹人相立來申候、

一摺繩之代　壹把ニ付　但錢拾七文五分ヅヽ

右ハ御米水揚より内拵迄遣申候分、千俵三拾把ヅヽ之積、尤三百俵以下ハ何程小口ニ而も九把ヅヽ相立來り申候、

一引取米運賃　壹俵ニ付　但錢拾壹文ヅヽ

一斜目見賃　壹人ニ付　但錢百拾四文ヅヽ

一根太木運賃　拾本ニ付　但錢拾文ヅヽ

右ハ御米百俵ニ付拾本之積

一納手傳人足　壹人ニ付　但錢拾五文ヅヽ

右ハ御米千俵ニ六人之積、百七拾俵より何程小口ニ而も壹人相立申候、

一納名主雜用　壹人ニ付　但錢九拾三文ヅヽ

一筆墨紙代　壹艘分　但錢六拾四文ヅヽ

一御手本米箱　壹ツニ付　但錢四拾八文ヅヽ

一御藏入拵込人足　壹人ニ付　但錢八拾五文ヅヽ

右ハ千俵ニ拾四人之積、極月末御藏入ニ罷成候得共諸國一統如此、尤人足賃銀之儀、御分限り引付ニ請取申候、

一御藏納拵方手傳人足　壹人ニ付　但右同斷

右ハ御藏納ニ而、拵方手傳人足千俵ニ四人之積、諸國一統如此、

の邊、所々を廻りたるに、何れの村々にても、いつかどの家作の百姓共、あまた相見ゆるハ、不審なる義なり、若しイキ過ぎたるにてハ無之哉、郡奉行代官共に克々申付、收納の義に念を入れさす樣に可申由、親仁兵衛物語り仕るとて、大野知石雜談を我等承りたる事も有り、ケ樣の義を聞はべり、權現樣流の收納の致方と、申筋やと推量仕る事也、

納米運賃

〔駒井日記〕文祿二年十二月十四日、尾州之御帳面御條數、彼是民部法印を以、重て被仰出御諚覺、

一百姓年貢米屆候事、可爲五里限、但川をへだて、在所たとへば四里程にて川へ著候はゞ一里之分者可相免、又六里程川江有之者、一里分御定より遠候共可持之事、

〔地方要集錄〕一御米を津出シ濱出シ之時、納候村方ゟ五里迄之分は、駄賃船賃百姓役ニ而、公儀ゟ不被下候、

納米入用

〔代官留書〕關東御米納諸入用

一納宿給　壹俵ニ付　但米七勺ヅヽ

一掛網損料　御米百俵ニ付　但錢拾七文五分ヅヽ

右ハ御米高江右直段相掛り請取來申候

一笘莚損料　壹枚ニ付　但錢壹文四分ヅヽ

是ハ圍莚相廻り候得バ其分相用、相廻り不申時ハ、宿より差出損料如此、尤壹俵ニ壹枚宛之積を以足莚仕候、

一鋪筵損料　壹枚ニ付　但錢四文貳分ヅヽ

右ハ內拵料壹挺ニ拾六枚ヅヽ、納壹度ニ八枚ヅヽ、

一內拵手傳人足　壹人ニ付　但錢八拾五文ヅヽ

右ハ御米五百俵斜壹挺ニ相立、手傳人足四人、五百俵以下ハ何程俵數小口ニ而も斜壹挺、手

之もの共へ被申渡、買納ニ付無益之村入用不相懸樣手附手代共へも入念可被申付候、

子十月

〔落穂集追加三〕秋先に至り收納の事

一問曰、毎年秋先に至り、郷村の物成りを取納め抔に、權現樣の取納の致樣と有之義を、俗に申習と有義を、承及被申たる事ハ無之哉、答曰、左樣の義につゐては、我等抔承たる義無之也、去りながら只今其元よりの尋につゐて、少し存じ付たる義有之、大猷院樣〇徳川家光御代、何かの頃よりの參上候也、御老中方に何も御前へ御出、御用相濟候以後、土井大炊頭殿へ上意有之ハ、其方領分へ桃の木をあまた植させると有るハ、其通かと御尋の節、大炊頭殿被申上るゝハ、なる程上意の通りにて御座候、古河の領地を私拜領仕候節ハ、領分の百姓共、殊の外薪に事をかき、何れも難儀仕るに付、御當地の町方へ申付、御當地の兒共のしわざに致させ、相應の代物をとらせ、桃の實をひろわせる處に、一夏の内に大分の桃の實を拾ひ集め、持寄るに付、俵に申付、古河差越、野畑等の義ハ不申及、百姓共の居屋敷廻り迄へ、植置候樣にと申付候所に、三四年計の間に悉成長いたし、今程ハ殊の外用立候樣に承り候へ共、私儀ハ其後終に見申たる義も無御座と言上すれハ、其儀も四五十日程づゝの逗留にて、交る〳〵知行へ罷越、領内の樣子をも見分仕るやう無くては不叶義なりと、上意有之由、其後大炊頭殿三十日計の御暇にて、古河へ歸城の節、逗留の間、領分を見分あられたる後、家老共を呼出して申聞らるゝハ、權現樣御代、毎年秋先に至り、諸御代官衆支配所へ御暇被下候節ハ、何も御前へ被召、御直に上意を被成下るゝ節、兼々も被仰聞るゝ通り、郷村百姓共をば、死ぬ樣に生ぬ樣にと、合點いたして收納申付る樣にと有之上意をば、毎年被仰出たる事也、先年我等當地拜領の節、其方達へも存候通り、領地の分をば、殘りなく巡見致したるに、何も郷村百姓共、家居に家らしき家とてハ、一軒もなかりつるに、今度不慮に御暇被下候に付、此度領内

子正月

寛政四子年十月

御年貢其外米納之分、是迄ハ皆濟以前内約之節、其度々致出役候御藏奉行と、外に内役壹人加印いたし、兩名に而假ニ四半と唱納札渡置、追而皆濟之節ニ至、御藏奉行連印之本納札と引替候例、四半相渡候節之奉行、致退役候而も、右納札へ被加印形納切候年月日を記、相渡來候得共、向後ハ、退役之譯、本納之文言書加、當時之年月日ニ認、其節之勤役之奉行致連印相渡候積、

一金銀假納之分、本納札ニ引替之節、是迄ハ月數を越、御金奉行退役致候而も、勤役中納之儀ニ付、右本納札へ致印形、假納之年、月日を記相渡來得共、向後ハ假納之年月日、本納之文言ニ書加へ、當時之年月日ニ認、其節勤役之奉行致連印相渡候積、

右之通可相心得候、尤金銀假納之義ハ、去亥十一月中申通候、向後共容易假納ハ難相成候得共、實ニ本納ニ難相成譯合ニ而、假納可致分ハ、凡積ニ候共、口々之名目一口限ニ記、屆書可被差出候、其外御金奉行へ假納之達、幷地方外諸返納物、假納可致御金藏印鑑等之義ハ、是迄之通可被取計候、

十月

文化十三子年十月

諸國御廻米之内、前々より買納仕來候分、其外納不足等之分、近來石代納申付候處、當年よりハ以來之通、御藏米又ハ町米之内を以、正米ニ而買納之積可被取計旨、去月中申渡候、右ニ付村々就費無之樣、買納取扱之儀ハ、御廻米納方御用達町人共被申渡候間、被得其意、勿論可成丈其國又ハ國位之米性、御藏出米有之砌、仕來之通五合宛切下、右庭相場を以買納いたし、尤御藏出米無之實ニ無據節計、町米を以御藏納之積、右買納米三拾五石ニ付世話料銀三拾目餘、時料銀七匁五分宛當を以、村方より取立、買納入用之分ハ、定例御廻米納方ニ准じ、勘定仕上之積被取計、其段能々村方

内

拾俵　拾七貫貳百目　内五分一貳俵升廻し

拾六俵　拾七貫目　内五分一三俵升廻し

拾俵　拾六貫目　内五分一貳俵升廻し

右五分一七俵之分、俵毎ニ升廻しいたし、送狀ニ書載之、尤樣俵之儀者、七俵之入實を平均俵拵いたし、其内ニ而樣俵ニ可相成分、圖ニ而取出し候筈ニ候處、是又取計方區々ニ成も有之間、一同相揃候樣可被取計候、

但五分一廻し七俵之分、俵毎ニ廻し送狀ニ書載上者、一體之俵數ニ不同有之候得者、自右送狀ニ而相分候事ニ付、精々不同無之樣、俵拵可被申付候、尤濃州、勢州、遠州、駿州、甲州、豆州、右國々者、大坂船割差配ニ無之間、樣俵者無之候得共、右ニ準じ船中取締方、共々可被申付候、〇中略

右之通被得其意、二條大坂御藏納之分も、右ニ準じ可被取計候、

寅八月

牧民金鑑八寛政四子年正月

佐州御物成米之內、大坂御廻米之儀、是迄貫目廻之處、以來升廻ニ致度段、廻船差配人苫屋久兵衞、筑前屋新五兵衞申立候ニ付、以來ハ諸取方幷大坂納方共、三俵平均廻石請ニ申付、船中缺減用捨米之儀ハ、五斗貳升入壹俵ニ付、貳升ヅヽ之割合ニ相極候間、於佐州渡方之節、五斗貳升以下ニ升廻し相立候節ハ、大坂御藏納之上、本米納高相減候得共、右ハ算當割合相違無之上ハ、船中缺減御失費ニ相立、若又五斗貳升以上ニ相廻候節ハ、本米石高より納辻相增候筋ニ付、右增米之分ハ、餘米大坂納之積り可被相心得、則大坂御藏奉行へ申遣候趣、幷廻船差配人共差出候仕法帳壹冊相渡し置候、

寛政二戌年十月

御代官江

大坂御藏納米直納之義、當戌年ハ初而之儀故、内拵いたし方も甚不同ニ而、俵拵縄掛方等、手薄之類も有之、其村々爲直納方相濟候處、不案内ニ而筆算も差支候樣成手代等も有之由ニ相聞候間、納手代差出候節、筆算〆之差支も無之、其筋相辨候もの差出、御藏納俵拵縄掛方等、手薄ニ無之樣、入念納方可被取計候、

戌十月

〔牧民金鑑七〕寛政三亥年八月日

遠國御廻米之分、著船之上缺減相立、内拵之節、差米多分ニ候得者、難儀之筋ニ付、其國々定法之俵入を以、定之合米ハ勿論、船路之遠近ニ隨ひ、船中缺減丈ケをも見込、郡中ニ而俵拵へ入念、於湊能能相改、船積可被申付儀、去戌十月、巨細ニ申渡候、然處卯年御廻米之内、菅谷彌五郎、野村權九郎御代官所、石見丹後國御廻米之分者、於村々船中缺減を見合俵拵、納名主直乘致し候事と相見江、其上右申渡を守り、郡中申合行屆候哉、船毎ニ納名主直乘致し候故歟、江戸著改候處、定法之合米も有之、一體俵毎升目不同無之候ニ付、内拵之節、著船壹艘之積り高ニて、差米壹貳俵、或ハ四五俵に而相濟候、船毎ニ缺米百俵餘ツヽ相殘り候儀者、一體郡中取締方宜敷相聞候勿論、外國之内にも船ニ寄、俵入升目等改方行屆候も有之候得共、區々ニ而差米多分之船も數多有之候間、當亥御廻米ゟ者、書面石見丹後國村々御廻米扱方之儀も、郡中へ申渡、上乘之者遂吟味、積湊ニ而爲改被差出候手代並役人江も其段申合、都而去戌十月申渡候通り、行屆候樣可被取計候、

一樣俵拵方之儀三拾六俵　貫目掛改縦令

三拾六俵

郡而御物成米御藏納大切と存じ候ハ、農人之常故、村々ニおゐて丈夫ニ俵拵致ニて可有之儀、依之前々より合米之儀御藏ニ定法沓も有之候處、近年計立之上合米不足ニ而、漸々御藏納致し候類も有之趣ニ相聞候、米性ニ寄候而ハ、御拂之節ハ格別ニ缺減も相立、御失墜ハ勿論、其品に寄請取候もの之難儀も有之候事ニ候、畢竟俵拵等麁末故、合米不足之儀と相聞候間、俵拵等ハ不及申、合米不足無之樣、支配所村へ申渡、御物成米着岸、水揚之上、内拵念入、此上御藏納之砌、合米不足不致樣取計可被申候、

未十二月

寬政二戌年五月

先達而申渡候、大坂御藏納米籾納不足買納之分、御代官羽倉權九郎、竹垣三右衛門、役所ニおゐて御取替銀を以買納申付候筈ニ付、御取替銀御金藏より持運人足賃之儀ハ、銘々拜借相願候ものより差出し、且返納之節、納入用之儀も左之通相懸り候間、是亦拜借金高ニ割合、村々より取立之、右兩人役所へ可被相達候、

一御取替銀拾貫目

此納入用

銀貳拾三匁　常是包料　銀貳匁三分　上納箱代

銀三分　右箱小口銘并釘摺縄代　銀壹匁貳分　常是改之節往返持運人足賃

銀七分五厘　御金藏納之節持運人足賃　銀三拾目　入目

右之通相心得、尤郡中より取立、返納之儀遲滯無之、可成丈差急ぎ取立之、權九郎、三右衛門方江可被相達候、

戌五月

人用相掛り候間、明キ御藏へ人置候樣、御藏米奉行へ可申談事、

一總而御年貢水揚、幷內拵、切替拵等之節ハ、其場所左右へ繩張いたし、働人足猥ニ出入不爲致樣可申付候、若不差出候而不叶儀有之候ハヾ、御代官成ハ元〆承屆候上可差出事、

一御廻米御藏庭內へ水揚いたし、御藏納迄ハ御代官持前之事ニ候得共、夜中守り方之儀迄隨分無油斷可申付候、御藏庭內之儀ニ拘り、等閑無之樣可致事、

右ハ御年貢御藏納ニ付而、古來より御藏ニ而取扱來候定法之上へ、右ヶ條之趣差加へ、諸事心を用、差配可致候、水揚內拵切替米等之節ニ、外御用有之、御代官自身御藏へ難罷出節ハ、其段御勘定所幷御藏役所へ相屆、出役手代之外、元〆手代壹人差出、諸事差配可爲致候、右之趣、後々忘却無之樣可致候、猶巨細之儀ハ、遠野源太郎、古坂與七郎可相達候間、其旨可相心得候、

十月

右之趣、御代官へ可被申渡候、尤御預り所も、右同樣可相心得旨、是又可被申渡候、

安永二巳年六月

大坂御廻米初、難船其外納不足相成候節、買納ハ格別、石代銀納之分ハ、御勘定所より達を相待ず、各より納手代引拂之儀、彼地御藏奉行へ被相達候得ハ、早速場所爲引拂來候由之處、納ニ罷越候手代共之內ニハ、心得違不益ニ逗留いたし候ものも有之趣ニ相聞、如何ニ候間、以來右體之儀無之樣可被申渡候、是迄納手代參著、幷出立之儀、大坂町奉行所へ相屆候事ニ候へども、向後ハ月番之御藏奉行へも同樣相屆候樣、是亦可被申渡候、且御用相濟、無故逗留も致し候趣相聞候ハヾ、御藏奉行よりも、逗留之譯相糺候樣申渡置候間、是亦可被得其意候、

巳六月

天明七未年十二月三日御勘定奉行申渡

一内掽之節、御代官自身手代召連、早朝より罷出、斛壹挺ニ手代壹人宛附置、貫目掛差米之分量樣
し、廻し相違無之哉、折々計樣いたし、差違無之樣、手代其外納宿幷人足等迄、度々可心附事、
一内掽出來俵拵違無之樣、度々可申附候事、
一差米ニ遣ひ候分ハ、輕俵、甘キ俵之内より遣俵切解候節、俵入計立帳面ニ記し、元石數相糺置、差
減米員數嚴密ニ可糺事、
一掽人足一時ニ壹度ツヽ休相立、手間取不申候樣可致事、
一手代幷納主同上乘之もの、場所不明樣申合休息いたし、人足休之内も場所明不申樣可申付事
一内掽出來候ハヽ、本俵員數差減米員數差引等相改、澤手俵有之節ハ、右員數書分ケ、御藏役所へ
可相屆事、
一納之節、御代官自身手代召連、早朝より罷出、御藏奉行改之仕方立合見屆、撰出米有之候節ハ、右
難納譯承屆、若難心得儀も有之候ハヽ、其段御藏奉行へ申談候樣可致事、
一切替掽之節、早朝より御代官自身手代召連罷出、更痛或ハ濡濕等相改、其國々定法之通、俵入念
ヲ入爲掽可申事、
一納不足米等有之、直ニ買納いたし候節、御代官罷出、御藏奉行申談、諸事可取計事、
一太餅米同粃大豆等買納之儀、請負人申付、御藏納いたし候由御請負之者勝手ニまかせ、手本通
より不宜品、御藏へ相廻し、度々御藏奉行返し候儀有之趣相聞候、請負人へ申付候品ハ、別而入
念可致吟味事候間、手代等へも申付、實意ニ取計可申事、
一水揚内掽、切替掽、其外共御藏庭内へ罷出候人足共仕事仕廻候ハヽ、其一手限り御番門へ相斷
り改を受、御門を可差出候、右之趣、手代幷納宿へ、急度可申付事、
一御廻米之内、大澤手米かひ引散米等、御拂ニ可成分、入札吟味相濟候迄、御藏庭へ差置候而ハ、村

一御年貢品川表へ著船いたし候ハヾ、早速手紙差遣し、積替所相改、元船へ濡米有之哉致吟味、艀下之儀無油断申付、早々御藏庭へ爲乘込、水揚可爲致事、

但元船之主水共、艀下船之上乘いたし候得共、水揚之上、切石有之由相聞候、向後品川より御藏迄之內、手代爲相守可申事、

一御藏庭へ御年貢水揚いたし候節、御代官自身手代召連罷出、諸事可及差圖事、

一水揚相濟、輕俵、甘キ俵、鼠喰、澤手俵、或ハ浦證文附、幷更痛等盡見分ケ、入念相改候上、送狀ニ引合、俵數吟味いたし、其國々定法通り、水揚廻し可爲致事、

一水揚廻し之節、船頭辨米或ハ褒美米等之儀ハ、其國々是迄用來候定法之通り可爲致事、

一水揚之節、船不足有之歟、亦ハ過俵有之候ハ、拼取崩相改、彌右之通ニ候ハヾ、其段御藏役所へ相屆置可申事、

一船不足米、幷船頭辨米、石代金ニ而差出候節ハ、其節之張紙直段ニ三兩增之積り申付、若其節張紙直段より町相場高直ニ候ハヾ、相糺候上、右町相場を以辨米代金可爲差出事、

一水揚之節、過俵有之、吟味之上、船頭糎米無相違候ハヾ、船頭へ相返し、其段御藏役所へ相屆可申事、

一船不足米、鼠喰、甘キ俵等、辨米代金、或ハ澤手米同切替噯引散米拂代金等、巨細ニ請帳爲記候樣可致事、

一水揚相濟、澤手俵、輕俵、甘キ俵等、本俵へ拼込不申樣、入念撰分、其口々建札いたし、其員數御藏役所へ可相屆置事、

一拼置候俵數、笘莚入念爲掛、夜中風雨有之候共、不濡樣可爲致候、掛綱詰りニ納宿封印可爲致事、

一內拼人足幷手傳人足、納人用、其國々定法之通り、相違無之樣可致事、

一諸國御年貢米納之節、撰出米幷不熟米、其外澤手米等有之、代米買納之儀、是迄御勘定所へ伺之上遂吟味、御藏出米町米之内、其場所相應之米、入札之上致買納來候、以來ハ右御勘定所下知相濟候ハヽ、可成丈町米買納相減候積、其御代官より何國米代相應之出米、石數何程買納いたし度段、淺草御藏役所へ書付さし出置候ハヽ、右場所相應之出米有之節、御藏方より札さし行事共へ、出米之内石數何程と買納有之段申渡、尤其御代官へ御藏奉行より可達候間、御代官罷出、御藏奉行立會、納名主納宿どもへ爲買取、御藏納之儀ハ、是迄仕來之通可被相心得候、右之通ニ候得ハ、御藏庭拂直段ニ而買取候儀ニ付、村方入用相減、御救之事ニ候間、其旨を存知、都而買納米之儀引受取計、右代金ハ御代官所へ取立、相拂可被申候、且納名主當表へ永逗留いたし候者も多有之由ニ相聞候間、是亦納米相濟候ハヽ、早々歸國いたし候儀、常々無油斷遂吟味、無益之入用等不相掛樣可被心付候事、

右之趣、松右近將監殿被仰渡候間、得其意、急度村々江申渡、以來納入用等多く、百姓不及難儀樣、入念常々可被心付候、

十二月

明和四亥年十一月朔日

申渡

淺草御藏納米、其外取計之儀ニ付、別紙之通り御書附を以、右近將監殿被仰渡候ニ付、可被得其意候、右御書附之趣、以來忘却無之樣可被心得候、以上、

十一月　〇中略

一納入用之儀、請帳面幷前々より納ニ付、取立候入用、其外ニも、納ニ付而入用之分不殘書出、村方名主門前へ掛札いたし、小前百姓へ入用之譯承知爲致候樣、先達而申渡候通り、相心得可申事、

事訴訟に就て、御城下江出候時、御代官所手代役人之諸縁有之百姓宿と申者相定、過分の雜用を費し、都而此等之入用共、其村中江割付、總百姓の難儀に及候由相聞、御代官中委細ニ穿鑿之上一々制禁あるべき事、

附、御藏において納方の儀に付て、相滯子細有之、逗留の間久しき由相聞候、是又百姓共穿鑿之上、其子細を以御勘定所江被達べき事、○中略

正德三巳年四月十三日

〔牧民金鑑五〕寶暦五亥年四月日申渡○中略

一御年貢米俵拵之儀、去年中も精々申渡候處、戌年御年貢米御藏納之節、手本米ニ不引合、麁くだけ等相交り、一體米性不宜を被相廻候類も有之候、是等之儀も心懸け薄、手代共江之申付も等閑ニ候故、右之通之始末ニ相聞候、向後右體之儀、麁末無之樣心を用ひ、手代共江も嚴敷可被申含候、

〔牧民金鑑八〕明和二酉年十二月

各御代官所御年貢米御藏納ニ付、百姓共多分之入用相掛難儀之由相聞候、尤納名主共より、納宿へ差出候入用定法有之、其分納名主納宿連印ニ請帳差出、押切印形いたし、納名主へ相渡、村方取立候仕來之由ニ候へども、右之外内分入用も相掛候樣ニ相聞候間、右請帳通入用之外、内分入用差出候哉之有無、村方小前相糺、若請帳之外前々より無據仕來ニ付取立候も有之、さし留候而は却而さし支等も可有之哉、其所をも相糺、不取立候而不叶儀も候ハヾ、其員數を改、百姓小前不及難儀程之儀ニ候ハヽ、其分をも加へ取立候積、入用高極、請帳へ爲相入、以來年々御年貢收納掛札之通、納入用御勘定所へ差出、請帳外之入用決して内分ニ而差出間敷旨、百姓小前被申渡置、納入用極高、御代官へ取立、納宿へ相渡候樣可被致候事、

藏入之時分、御支配人より相印被成御渡候庭帳に付立、納主銘々判形致置申べく候事、

一御年貢穀物升取之儀、郷中相談にて相定、始御法度之升目かねをはらい計立、三斗七升入に納可申候、江戸御藏江納候淺、村中相談仕、才料を附、村切に納可申候、船に而越候はゞ、縦大口に候共、壹艘に積申間敷候、隣郷と寄合積入相廻し可申候、若路次ニ而御米紛失申候類如何之事ニ而、かん米立申候共、百姓共辨可申候、餘り米御座候はゞ、百姓納申俵數を以、銘々割取可申候、若後切に致請取申者、米を賣替、納札商賣申候はゞ、當人は不及申、村中名主百姓迄、何樣之曲事被仰付べく事、

一御割付總百姓寄合拜見仕、其年損毛引方共、明鏡に判を致候刻、御割付之裏、總百姓判形可仕候、自然名主壹人にて割を致し候はゞ、當座に可申候、勿論御割付之寫し、御支配人之判形を取、百姓前に差置可申候事、

一年々御年貢內割仕候節、名主年寄百姓寄合、勘定相違無之樣に割をいたし、反歩米永之員數委細に記之、名主方より皆濟手形押切判形致、百姓方江銘々相渡し可申事、〇中略

右之條々、堅相守可申候、若違背仕もの有之候はゞ、如何樣之曲事にも可被仰付候、爲其名主年寄五人組連判、一札差上申候、仍如件、

元祿七戌年正月

伊奈半十郎樣

〔享保集成絲綸錄二十三〕正德三巳年四月

條々〇中略

一御年貢納米の事に付て、名主庄屋非分之私をなし、末々百姓共無用之費多き所々有之、或は御城下御藏米納之時、差添來宰領之者ども、逗留の間久しくして、無用の物入を費し、或は御用公

入無之樣可仕、庭帳のとぢ目ごとに、手代押切印判致、重而穿さく可仕事、○中略

右條々、從此已前度々雖相觸候、彌無油斷念入仕置、堅可被申付之候、若於疎略者、可爲越度者也、

正保元年正月廿一日

曾根源左衛門

杉浦內藏助

伊丹順齋

酒井和泉守

上方御代官中

關東御代官中

〔享保集成絲綸錄二十三〕寬文六午年四月

覺

一御年貢方金銀米錢小物成等、上納仕候百姓中割付、壹人前づゝ委細書記之、壹帳に仕立、并諸役入用、是又別帳ニ書載、庄屋小百姓不殘判形爲致、年々御代官ニ取置可被申、年貢并諸役入用等、庄屋組頭非分之割付仕之旨、每度後日爭論有之間、無紛明細ニ割帳可被申付事、○中略

四月

〔憲教類典五之三下地方〕元祿七甲戌年正月

御領御代官所名主五人組御定書

差上申一札之事○中略

一御年貢皆濟不仕以前、他所江米出申間敷候、若能米を賣かへ、惡米を御年貢に納申候はゞ、壹人は不及申、名主五人組迄、何樣之曲事にも可被仰付候、并御年貢御藏入いたし候節、あら粉米無之樣に米拵致、并繩俵拵迄、諸事御定之通念を入、鄕御藏江詰置、御差圖次第に納可申候勿論御

代に熟知せしめ、其上大撿見と唱、御代官直ニ廻村せしハ、小撿見の邪正及支配所各郡の作柄、民情を詳にせんが爲なり、扨大小撿見相濟たる上、其年の取箇辻を幕府勘定所へ伺ひ、下知濟之上、郡中村々へ假割付を廻達し、十一月上旬より河岸船積湊へ手附手代を出役せしめ、貢米を取立、而して御勘定所下知を得て、江戸大坂廻米を船積し、各所藏納を致したり、

〔享保集成絲綸錄 二十三〕寛永十九午年五月

覺 ○中略

一跡々申觸候通、御年貢納候御米、江戸御城米に納候時分、能々致穿鑿、米入用多拂候ハぬ様に、名主組頭に堅可申付、才料不作法成儀仕、小百姓迷惑致候事有之におゐてハ、穿鑿之上、名主組頭曲事可申付候、不僉議においてハ、御代官衆可爲越度事、

一御年貢米、跡々より如申觸候、粗糠碎無之様に能々念を入可申付候事、○中略

五月

〔憲教類典 五之三上 地方〕正保元甲申年正月廿一日

覺 ○中略

一御年貢米下知なくして、其所に而拂申間敷事、○中略

一毎年納方割付、總百姓に不殘見せ爲致加判、以來迄出入無之様に可申付事、

一御年貢米念入、升目高下無之様可申付事、○中略

一御年貢米御藏江納候節可被入念事、

附、舟に而相越候所は、上乘船頭私曲不仕様に、可被申付之事、

一缺米おほくたち、いらざる入用、百姓に申掛、不作法之儀於有之は、穿鑿之上、曲事可申付事、

一御年貢納候庭帳に、其時之總百姓に判形致させ、名主方より小百姓前へ手形を出し、以來迄出

一御年貢皆濟之納拂致勘定、庄屋方江手代之判鑑帳可取置事、

一御年貢米納所之節、庄屋方より米主へ銘々手形遣之、右帳ニ念入書付可致、判形無念ニ而印形無之、後日訴候とも取上間敷事、

一毎年御年貢免定出候ハヽ、村中之者披見仕らせ、庄屋年寄方より村中大小之百姓、出作之もの江も、不殘相觸寄合候而致免割、小物成浮役臨時もの江も納人記、米錢遣人前宛委細書付、小百姓ニも疑敷不存様に、其譯爲申聞、右書付爲寫、其上免定之奥に別紙に續候而、立會披見仕らせ、書付銘々印形取置べし、郷藏之戸ニも免定寫いたし張置べし、御年貢割付候節、村中夫錢等入用と、御年貢入交一同ニ不致、差別を立可割合、算違無之様に隨分入念、御年貢之儀申渡、日限之通相納候様ニと、常々村中可申合事、○中略

右之條々堅可相守、此旨違背之輩あらば可爲曲事、此帳毎年正月五月九月十一月、一ヶ年に四度、村中大小百姓寄合、惣爲讀聞、常々此趣を合點仕罷在候様に、入念可申付ものなり、

年號何月

〔地方大概集拾遺一〕貢米取立方之事

大坂落城之後、全國の石高貳千八百拾九萬石之内、貳千萬石を譜代外様之大小名に與へ、これを私領と稱し、八百拾九萬石を幕府の領地とし、之を御料所と唱へたり、而して其御料所なるものも一國一郡を專領せず、大小名各家私領の間ニ配置したり、こハその地勢人情及び各藩之動靜をも探知せんがためなり、猶豐後の日田に郡代を置き、天草其他九州各國に點在せる御料所を、監督せられたるが如し、

右御料所村々の租税取立方の如きも、定免村之間に撿見取村々をこゝかしこに點在分置し、大小撿見（定免撿見の説ハ上卷之四に詳なり）を設け、年々立毛の豐凶を撿し、地味の肥瘠人民の動情等をも手附手

財寶家共、其主人可取、貢物付而申事あらば、其被官之主人より、地頭へ年貢可相立、聞人成敗之時者、其家財寶共ニ可被召上、若年貢在之時者、貢物は上より領主へ可罷下事、〇中略

右條々於國中、自今以往可爲龜鑑之條、貴賤共令信用、全可相守、若一言於相背者、忽可處嚴科者也、依所定如件、

慶長貳年三月廿四日　盛親在判

元親在判

〔地方要集錄〕一御年貢米、國々より江戸廻之時、破船有之候得ば、海路之破船に而御米すたり候は公儀御損、川船之破船は百姓之損、〇中略

一郷藏ニ而納米、若火事ニ而燒失之時、公儀役人米請取納置候得ば公儀之御損失、公儀役人不請取、名主請取置候分は百姓損失なり、〇中略

條々〇中略

一御年貢皆濟無之以前、穀物他所へ不可出之、金納之爲米賣候はゞ、先米納之員數を以積り、納米程上米拵置、夫之餘り米を賣可申事、

一米納之儀、庄屋年寄立會、靑米、死米、くだけ、粉ぬか等無之樣ニ、隨分致吟味、升目不切樣ニ俵拵之儀、二重にして、小口かゞり繩ニ而仕、庄屋升取等印判之中札入可申候、外札は木ニ而も竹ニ而も、國郡村名米主名計可記候、若船廻ニ仕候節、壹俵之貫目等入念、船頭上乘手形申付可相廻事、

一御城米船上乘之儀、村中遂吟味可遣候、御藏前之入用、幷船中雜用等、多不入樣ニ申付、委細帳面ニ記させ入用可渡之事、

一御年貢金銀、庄屋方へ取集之、扣帳ニ納候度々、金銀納主之名書付、印判可爲致之、庄屋方より金銀受取手形通帳いたし渡之、扣帳押切印判いたし遣置、後日出入無之樣ニ可仕事、

一先御年貢、以現米可運送之由令問答、梶取以下、且近隣莊例を委尋き、て相構、以現米嘗莊より室泊にいたるまで、名主百姓に、警固をいたし、友實又船にのりて路次の間、奉行をいたして可運送事、

一眞實以現米運送之段、不可叶者忩しろかみて○恐しろ以下恐有誤脱以錢かへのぼすべし、和市事、實正にまかせて、可致其沙汰、雖聊不忠をいたすべからず、又斗升事、寺家收納斗、无違目之樣可致其沙汰、又運送雜用、幷つひしろ等委細遂勘定、合成代錢、友實上洛之時、以人夫陸よりも運上仕べき事、

康永二年十一月二日　　友實花押

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一國中直分、毎秋年貢皆濟相定日限より內者、出擧其外ニ買、一粒も他所へ不可出、於背此旨者庄屋其百姓、堅可處罪科事、

一年貢之事、總別可爲摺、太吉者地面可爲立毛次第、但吉地ニ太を作事、堅可停止、若背此旨、吉地太を於作者、貢物者吉を可取上事、

一升之事、國中京升一篇可相定事、但計樣者、年貢借物者あげ、賣買者さげ可計事

一國中段米毎年如相定、可運上事、

一所々十分一、如有來堅可運上事、

一摺籾共、俵者五斗入可仕事、

一國中諸百姓地頭庄屋爲奉行人、隨分あひはぐ、むべし、若相定成物以下外、りんじの用所不可申懸事、勿論毎年相定年貢堅可運上、○中略

一あたり地に家を作、罷退時者、其年年貢於相澄者、板屋萱屋共、家主ニ可付、但彼家主令成敗時者、

古事類苑

政治部八十

下編

田租三

〔吾妻鏡 六〕文治二年十月廿七日庚子、信濃國伴野庄乃貢送文到來、二品〇源頼朝則副御書、令進京都給、地頭加々美二郎長清日者頗緩怠云云、

〔吾妻鏡 十四〕建久五年十一月廿六日甲寅、武藏相模兩國乃貢等、被進京都、行政、仲業、實景等奉行之、御使雜色時澤成里云云、

〔新編追加 侍所 傍例〕一紀伊七郎左衛門尉重經所領、丹後國之地頭得分物、以同所領夫令運上鎌倉之處、件夫丸下著鎌倉、於米町之邊見付彼侍逃夫丸、擬召捕之處、夫丸逃走之間、重經下人追懸之刻、入將軍御所御臺所、重經下人猶以追懸之間、臺番以下人々群集、云重經下人、云夫丸、召取之、申事由之間、御尋之處、子細無相違、但主人重經雖不知此子細、追入御所之條、緯已爲勝事之間、主人猶難遁其科之由、有御沙汰、即被召重經丹後所領畢、

此事、寛元年中之比武藏前司殿御時事歟、云所領之名字、云年月、委可尋記也、

〔東寺百合古文書 日三十一〕起請文條々

一東寺御領播磨國矢野莊御年貢運送のために、上御使として、所被差下友實也、毎年憲法御沙汰をいたし、不可奸曲儀更〇不可以下恐有脱誤、兩御代官沙汰人、百姓梶取等賄を得て及聊事、御寺の御ため、不忠を存べからざる事、

も多、去秋中別段に申渡候趣も有之候處、同年之義は八九月之出水に而、右申渡候吟味も不行屆、然ル處當年之儀は一體旬氣も宜、諸作熟作之趣に相聞候間、去夏秋中申渡趣ヲ以、油斷も有之間敷義には候得共、是迄仕來に不拘、立毛之實意に相當り候樣取付、銘々御取箇帳被差出候節、見取場之分は反別取調、御取箇附之次第、巨細に可被書出候、

七月

天保十二丑年十一月申渡書付

一見取場之儀ニ付而は、寛政三亥年以來申達置候儀も有之候處、高外之場所ニ付、兎角吟味も不行屆、流作場見取場とも、見取之銘目而已ニ而、事實之見取に不至も多く有之哉に相聞、反高場と唱へ候も、本田より格別に地味相劣り、御高受不相成場所に而、聊之御年貢相納來候も多、流作見取反高場之内には、地味之樣子に寄、御高入可相成分も可有之、御高入までに不至候とも、見取撿見いたし、定取之分も年々之出來方勘辨いたし、免直増等吟味可被致筈に候、且新田御高入相成候分は、多くは地馴本田に見合、格別地味相劣候節、撿地石盛附致し候故、石盛も低く、御取箇附も下免之場所多候間、追々地位相進み候に隨ひ御取箇附増方吟味可被致筈之處、下免之儘に打過候も有之趣に相聞候、石盛低き處は、高掛物之甘キも有之候間本田地位之見合に不拘、踏込御取箇附吟味可被致候、右等之趣、撿見其外廻村序、厚く心掛ケ、手附手代へも能々申含、聊等閑之儀無之樣可被取計候

名目而巳之樣ニ成行、其年々見分吟味不行屆候類も相聞候間、田方之分は仕來に不拘、撿見之上其出來形に應じ、御取箇附相極メ、若實に撿見廻村いたし候ては、差支等之譯合相立候分は取調被相伺、勿論不定地之場所は年々出來形に應じ、五公五民之御取箇にては、不作之年柄打續候ては、仕附之入用に不引合、作人も無之樣にも可相成哉に候得共、是等之割合は、其土地に隨ひ、各勘辨可有之筋に候間、いづれにも見取之名目に相當候樣、實意を以、以來御取箇附有之候樣、猶勘辨被加可被取計候、

亥四月

寛政三亥年七月廿三日申渡

申渡

都て見取場御年貢附之儀、先達て委細申渡候間、當秋之儀は各格別に勘辨有之、御取箇附被極、可被差出事にて候、然ル處見取場之内には、葭萱木立等之場所より、土地相應之御年貢相納候類も多く、反高之内にも作付難成場所も有之筋には候得共、一體大造之反別に有之候上は、稻作仕付之場所も多く可有之、殊に當年は別て出來方も宜き樣子に相聞候間、稻作仕付之場所は、是迄之仕來に不拘、當撿見之儀勘辨有之、見取之名目に不背樣御取箇附致し、銘々支配所限り、反別取調御取箇附次第、巨細に可被書出候、尤場所に寄、御普請役之者も、差遣候儀も可有之間、其段兼て可被相心得候、

七月

（牧民金鑑五）寛政四子年七月日御勘定奉行申渡書付

御代官御預所役人へ　略○中

一見取幷流作場御取箇附之義ニ付而は、去夏中一統に申渡、別而關東筋之内には、見取場反高場

事難叶、幾年過候而も打捨置候處も有之由、ヶ樣之處は遂吟味、御普請可申付候、猶大造之品に候はゞ、歸府之節可被相伺候、於然者其他之御年貢貳三年、或は四五ヶ年も差免し、年數過候はゞ、地所相應之御年貢申付候樣可被致候事、

一前々永荒之場所、自然に起返之所も可有之候間是又吟味可被致事、

一右之趣、只今迄吟味詰に無之所も多候樣に相聞候、此度隨分入念吟味可有之候、

右之通、當地ニ而詰合候御代官は勿論、且御役所に罷在候面々へも、可被相達候、以上、

享保六丑年壬七月

○按ズルニ、荒地堀起ノ事ハ、政治部下編開墾篇ニ在リ、

〔牧民金鑑 六〕寶曆六子年九月十二日御勘定組頭達

各樣御代官所反高見取場之儀、是迄御取箇差出帳へ認入、仕組御差出被成候、然ル處當子年より本途御取箇同樣致吟味候樣に、奉行衆被仰渡候間、別紙案文之通り、當御取箇差出帳へ御認被成、御伺候樣可被成事、

子九月

申渡

寛政三亥年四月廿二日申渡

都て見取場御年貢之儀、其年々出來方ニ應じ、御取箇可附筋ニ候處、檢見村々より里數隔候、少分之見取場は手分見分被致、或は近村坪刈准合を以取極、又は少々不作之年柄にても、前年之取米にて、御取箇受候方、見分請候よりは、村方勝手を以願出候得ば、其趣にて取極メ、尤畑方之儀は、年年増減等は無之候得共、不定地之場所は、最初勘辨之上反取も低く極置候事故、折々見分もいたし、地味之樣子に隨ひ取增、又は御高入にも可被相伺筋ニ候處、場所ニ寄候ては、見取とは土地之

有之年は見分いたし取箇申付、近江國湖水端に流作場多し、日照年、渇水之節は、夥敷植出し、又雨年は反別請有之分も、一向植付難成、或は今暫に而致收納程之處一夜押ながし、種もなくなる年間間有之、關東ニ而も武州、總州、常陸邊川附沼地等所々有之事也、

〔地方凡例錄 二〕見取場之事 附 一定見取之事一屋敷見取之事

見取は川附、或は山附原地野方等空地之場、五畝三畝宛田畑に致、開發場仕付、高に不入を見取場と唱、年々出來形致撿見取箇申付、新見取有之ば、村方より訴出、又は地頭より改出し候儀も有り、撿地同樣反別改見、五七年も見取場致置、地馴高入に成も、可然場所は、致撿地石盛を付、高に結入る事也、若又水損不定地歟、何ぞ子細有之、高入難成分は、始終見取場に分差置も有り、ケ樣之見取場は反當り、年々格別不同も無之ニ付、毎年不及見分、取箇は居置く事もあり、勿論野附原地山添麓等、反別多分致開發時は見取場に不致、大繩反別を改、地代金相納させ、相應之鍬下年季差赦新開等に爲致、高入に致ス、總之畝歩にて見取場になれば、地金代鍬下等不及沙汰、見出したる年より、反に貳升か三四升土地に應じ、立毛見分之上、見取米取立る事也、

一定見取と云は、野山切開き、又地低之場所埋立大分に手間入たれば、田畑可成趣ニ付、御代官地頭へ相願、年貢上納に被仰付、定見取之名目に被成下ば入用を掛ケ、場所可仕立旨願出時、得と見分吟味之上致開發、物入之程を考、定見取申付ル事なり、常之見取に請置而は、地面宜成に隨ひ段見取米も上り、又は後年高入にも成、最初より多分入用掛ケ仕立たる甲斐なき故、定取に願、見取之名目なれば、初年相極たる取箇定約ニ而、年貢相增候儀無之、又悉皆損毛ニ而引方も不立致辨納也、何程地馴たる共、高入に不申付、場所替最寄替等之節は、跡支配へ右之趣申送ル、私領渡に成るも申達候事なり、

〔御觸幷御書付留 一〕永荒地引高之內、精々入念候て立歸可申事に候得ば、其地主之方ニ而起返候

付、六七年も無難ならば、取箇を進め反取を定むべし、又川筋通り本地同前に成り、何年にも水損無之、或は畑を田に仕立、又土地高く成る田を畑に直したる所も有るべし、ケ様の所迚も、前々の引付にて、見取年貢少々計納る所間々有之、ケ様の場所は、其土地の様子を熟と見分し、拾ケ年貳拾ケ年の割付を以て吟味し、本地一同の水損は格別、見取場計り水損ならば高入にすべし、去かし石盛の勘辨有るべし、新田の心にて石盛を付べし、割付には別廉に出し、何年見取場高入と銘を打べし、又是迄一向見取年貢も不納して、如此の地も有べし、是何年改新田と銘を打高入にすべし、尤右の趣を以、御勘定所へ相伺ひ高入に致し、土地相應の取箇を申付、年々御勘定所へ伺ひ、組仕上可申旨御證文取置べし、伺は村方吟味の上、得心の證文取之候上にて伺ひ出す也、又前々水損又は故有之、土地變じ、定式の反取にて取難く、取下に致し、反取を引下取候田畑、國々に多有之事也、如此の地年久敷、右引付を以て、取下に取來候地所は、いつの頃か本地同前になりし場所も、國々に數多く、撿見の節是等の事も心付、取下の場所出來形見分致し、本地同前に出來候はゞ本地へ立歸らせ可申、兎角ケ様の可取所を取て、隱れたる御益を引出し取るは誠の御益也、いかに御益をするとて、無理なる事をして御益をするは、却て御益にあらず、民の弊衰になり、御爲を失ふ也、能々心得勘辨あるべし、

〔地方凡例錄二〕一流作場之事

是は川筋堤外、或は湖水池沼等之岸通、圃畔もなく用水壹面に掛り、地所に稻作仕付分反別に改を請、流作場と唱、年貢を納む、旱魃年には植出し多く、亦水多き時は作付難成、仕付たる分も押流、年々極面は難仕付不定之場也、尤場所廣く追々地高に成、地馴用水掛りの仕方も有り、新田にも可成趣ならば、小堤等築廻し、追而高入にもいたし、又は高入成がたき地所は、反高とも致べし、一體反高同様之物なれ共、毎年難仕付、其土大水等之節、地面とも押流事も有り、誠之不定地也、作付

一荒地之事

是は荒場同樣也、然ども一旦は田畑は取立作をも仕付、村高之内所地震等に而ゆり込、地面低成候に付、致水損候歟、又ハ流作之類ニ而、出水之度每上土押流、連々地面おとろへ、手間代も無之、おのづから荒置類をいふ、又は山崩或は川切入砂利等入候故、是を取除候事、容易に不成故、自然と荒置をいふ也、

〔田園類說〕見取反高之事

按ずるに、定見取といふて、撿地帳に記せしも有、或覺書に、總而見取場といふものは、潮入歟、池沼の埋歟、今年立毛を仕付ても、來年は不定なる場所を、見取場と名付て、高外にする事なるに、何のわけもなく、新開又は尋出の類、いつ迄も見取と名付置事、不吟味成事也、猶も不埒成は見取屋敷など丶名付候屋敷も有といへり、尤成事也、又村方より宜敷地迚開發場に願出る内にも、其村の川欠跡歟、山崩れ歟、何ぞの荒地跡を段々發して、起返にしては、本免に立返るをいとひて、後日其村の二重高に成事を不辨、當分年貢の少き事を思ひて、見取に願ふ事も有事也、起返りの場所ならば、起返りにして、其地面相應の取箇を付て然るべし、いづれに引高の立返る樣にすべき事なるに、起返りといへば早本免にせんと泥むゆへに、村方よりも是をいとひ、又自然と見通しにもなる樣に成行は、地面の取箇の不相應より、右の通りなる費も出來る事也、

〔地方落穗集四〕見取場幷取下場吟味心得之事

一見取場と云は、不取地にて、壹年穀實を取れば、貳年も皆損する樣成場也、是等の地、川通り堤下抔にある也、依之高外にて根取場と云もなく、其年切に立毛出來方に隨ひ、取箇を極る、依之見取場と云、如此の場所年久敷見取場なれば、出水の節、毎度居埃を置ゆへ土高く成り、格別の水損は無もの也、然れ共取箇前々引付を以、少々ならでは不付、去れば年々撿見の節、立毛出來方に心を

高を付候而も可然見へ候時、高に結候而新田ニ立置候歟、村高江も品に寄入候事に候、

一見取米之事

是は野方又は山之麓平地之所切開、検地を請させ高に結可申事也、然とも本途之地面におとり高にも難結候故、反別取にいたし、壹反に何程見米取上納する也、連々土目もよく成に付、末々は其年之豊凶によりて、米之増減ある也、反に何升取、郷帳には反當を記なり、

一定見取之事

是は野方又は地低之地を埋立右之分手間入候はゝ、作毛生立可申趣ニ付、御代官或は地頭江相願、定見取に年貢上納申事に候はゝ、場所取立申度旨願出候節、場所吟味いたし、物入之程を考、見取米定る事也、下田之見取にいたし置候而は、地面宜成に随ひ、段々見取米も上ケ、又は高にも結ひ候様に成候故、大分之物入之甲斐も無之ニ付、定見取ニ上納いたし、自分物入を以、場所仕立る事也、仍而定見取は高に不結事也、○中略

一永荒場之事

是は洪水之節、堤切入候石砂利大分走込、不及人力場所ニ而、たとひ人夫を懸ケ起返候而も大分之物入仕當ニも不合、剰元來之上土を押拔、其跡へ石砂利走込候ニ付、人夫をかけ起返候而も、作毛生立不申候ニ付、永荒高引ニ相立申事也、此外大沼大池葭場芝地小木など生立、兎角向地になへたるを、至極吟味之上、永荒場といふ也、

一荒場之事

是は永荒場同様之事也、乍去其村開闢之時、又は新田開發などいたし候節、元來之荒場を土地も大概に見へ候故、検地を受末々作も生立申様心付候而、作仕付候得共、こやし手間代ほども實入不申候ニ付、連々荒置候類をいふ、

見取場　流作場　荒場

反取共へ相増候間、不呑込之百姓者、高免と計相心得不可然候間、御取箇吟味之譯得と申聞、合毛切之厘取反取存候樣ニ仕、可然儀ニ御座候、此通之御取箇付ニ仕候得者、合不足畝引と申者、決而相立不申候、當荒等之引方計ニ限、吟味之上引方申付候儀ニ御座候、

右之趣御座候間、此心得を以小百姓能呑込候樣、別紙案文之內江認入可申旨、御代官江申渡可然事ニ存候、以上、

延享二年丑六月

〔牧民金鑑六〕寬延二巳年四月八日申渡書付　神尾若狹守

撿見坪苅之上御取箇相極候儀、關東段取、上方筋厘取定格ニ候得共、享保十三申年、諸國一統根取改候節、於其村々地所相當吟味詰候儀ニも無之、根取免強弱有之、不相當之場所間々有之、或古撿地之村方水帳、火災水押等ニテ紛失故、小前帳又ハ勘辨之上、石盛位等拵、御取箇仕出候も有之由、左候得バ段取厘取的中不致、村方も可有之候、有毛取之儀ハ、段取厘取之無構、其年之出來毛次第、村役人田主見屆、合毛帳致印形、御年貢作德相分り候儀故、百姓疑も無之候間、勘辨次第有毛取之方可然候、

〔信府統記十六〕松本領收納ノ事

他國ニテノ取リ樣ニ厘取、反取、永取ノ三品アリト云ヘドモ、通用ノ取リ方ハ、厘取リナリ、タトヘバ高十石ノ處ニテ一石取ルヲ一ツノ取リト云フ、然レドモ高十石ノトコロニテ端ナシニ、一石ハ取レザルモノナリ、故ニ一石何斗何升何合ト端米ヲ付ク、是レヲ一ツ何分何厘何毛ノ取リト云フ、故ニ厘取トモ、又津取トモ云フ、

〔地方要集錄〕一總而見取場と申は、田畑とも新開新田等高に結がたき地所ニ而、高を不附候而差置、輕き年貢を申付候場所故、見取年貢附候田地を見取場と申候、年經候而作なれ、地も能成候而、

知、反別計知りたる者も有、上方は高を第一とする事ゆへ、反別は不知百姓もあるなり、○中略

一虚。厘。實。厘之事

上方田畑米取ニ而、取米を直ニ致厘割故實也、關東は田ハ米取ニ付、實米成共、畑ハ永取故、永壹貫文貳石五斗代之米ニ直し、田之取米へ加へ、免割するニ付、虚厘也、都而壹年之厘附に用るハ、貳石五斗代ニ而、米ニ直す定法成共、中古と違ひ、穀の相場高直に成、何ほど豐年たり共、金壹両ニ貳石五斗之直段ハ無之事に付、知行渡等之見合ニ致、取米、五ヶ年拾ヶ年平均ニ用る石代ハ、壹石貳斗五升代ニ直し致厘附、當時之相場近き方ニ付、壹石貳斗五升代ヲ實厘とし、貳石五斗代ヲ虚厘とす、然るに地方算法全書ニは、貳石五斗代實厘、壹石貳斗五升代を、虚厘たりとある、是ハ貳石五斗代、其年の厘ニ用る故、實厘としたる物なれ共、當時相場ニ近き方實厘として可成べし、既に知行渡之時見合ニ成厘ハ、壹石貳斗五升代之厘ヲ用ゆれば、實厘たる事顯然也、先吏小宮山氏も、當時の相場に近き方實厘なりと、田園類說にも書置れたり、

〔代官留書〕一上方筋者御取箇厘取、關東筋者反取と相極、撿見之節村毎上中下位切石盛當り合相定、坪刈増合を差加へ、右當り合ゟ過分ニ出來之分者、當り合ニ而居置、餘計之分者御取箇付相除申候、當り合ゟ不足ニ出來候分者畝引相立、御取箇付仕候、○中略

一上方關東共ニ色。取。と申有、毛。取。共申候、撿見御取箇付仕儀御座候、此致方者縱令バ上田石盛拾五、厘取免五勺、反取ニ而者七斗五升取ニ而、當合壹升毛ニ罷成候、然所坪刈増合加江候得者、壹升五合ニも相成候時、根取ニ不拘、右壹升五合之分五分々々之御取箇申付、夫ゟ低合ニ至候而者、當り合ゟ格別引込候共、是又五分々々之御取箇申付候ニ付、頭合ゟ低合迄何段有之候共、合毛一段切免割付厘取反取相極不申候得者、低合毛之百姓內割不同出來申儀御座候、其上中下下々田ニ至り候而者、所にゟ上田ゟ出來方各別宜村方も御座候ニ付、色取ニ仕候得者、却而上田ゟ者厘取

高厘共虛厘ともいふ、殘高にて割たる免ハ毛付厘とも、實厘ともいふなり、

〔地方凡例錄 三〕一田畑取箇厘取反取之事 附 免之發之事

關東方ハ年貢取方、田は米取、畑は永取定法ニ而反取也、假令ば上田壹反歩ニ付取米七斗、中田六斗、下田五斗、下々田四斗抔と、大概此當りニ而、村處に寄、反取の高下有、畑ハ上畑壹反永貳百五十文、中貳百三十文、下貳百文抔と、凡貳拾文下り位、貳百五拾文之上畑ハ、隨分土地宜敷畑方也、野方土地惡敷村方ハ、上ニ而永八十文、百文之位の處も有、屋敷ハ大方上畑並之物成共、村ニ寄り上畑ゟ壹反高く、上畑貳百五拾文成ば、屋敷は貳百七八拾文之所も有之、關東ニ而も私領方、其前々畑米取の場所も稀ニは有、奧州白川郡邊ハ、關東並畑永取、伊達、信夫、宇多、石川、田村、岩瀨郡邊は田畑米取にて、半石半永とて、取米の半安石代ニ而永納、半分米納成ば、大國に付、郡々ニ而色々の違ひ有、關東ニ而も私領ハ、前々ゟ仕來りニ而、厘取の場所も有之、厘取と云ハ、高ニ幾つ何分何厘何毛と免を高に懸、取箇附るを厘取ト云、上方筋は都而田畑米取にて、厘取の定法也、縱ば上田の石盛十五には、壹反の高壹石五斗、免五つにして、取米七斗五升、中田石盛十三、取米六斗五升、下田拾壹、取米五斗五升抔と、凡石盛貳つ下り位之物也、併村々ニ而、石盛取米共悉高下有、是又私領は、上方ニも反取之村稀ニはあり、併永と申は、御料は勿論、私領ニも、上方には決而無之事也、上方は厘取、關東は反取と分れたる發りは、往古貫高、永高ゟ石高に成始り、石高と云は、元來籾高にて、百石取は、年貢籾百石を取、貳百石取は籾貳百石と、年貢高を直に籾ニ而納るニ付、無造作成處、米納に成て以後、摺らせて取る故、年々豐凶籾性ニ寄り、摺之多少有之て、籾高は從不替、摺立は取米の員數違ひ有るに寄、いつか反取厘取と云事始りたり、石高の最初籾之時分ハ、厘附と云事なし、然に上方筋は、元貫高ゟ石高に移りたる引付厘取と成、關東は永高ゟ石高に成、反別を用ひ來るに付、反取と成、其遺法全厘取反取と分るニ寄て、關東ニ而は反別を主とし、小百姓抔は、自分所持之高を不

よほど減ずる故に、近來ハ毛迄書付勘定する也、

一厘附ハ壹ツを壹リンといふ、畢竟ハ壹割之事也、〇中略

一上方ハ厘附取にする故、石盛附之高を大切にする也、夫故上方之百姓ハ、田地いかほど持たると聞バ、何石何斗と高にて答る也、自分之持たる田地の反步をバ、大方しらぬ百姓もある也、

一反取之事

是は大概石盛之半分を用、然ども上方筋は麥田に而候儀、五分々々に而も百姓不致迷惑候、關東は下地之所多所故、五分々々に而は、麥田無之處及田痩、何も四分六分と心當候事も有、

（地方要集錄）大島古心へ認遣し地方之事問ニ答候書付扣

一關東方ハ御取箇段取を以極候、上方ハ厘付を以極候古法ニ而、總而四分上納、六分作德と申定より御取箇ハ極候、右之通關東方根取石盛を貳ツニ割、五分取と極候時ハ、上方厘付取も五ツと極候積リニ成候に付、然バ掛り物を入候得バ、六分上納之積ニ成候、上方も關東も四分上納、古來より之法ニ而候由、四分取と極候間に、高掛り等之品々有之故、五分納方ニ成候、上方關東總御料高之御取箇、古來多年之平均、大方三ツ五分取ニ相當り候、因之百石之高ニ而百俵取候米、俵三斗五升ニ而、三拾五石納來候儀ニ候と申候、〇中略

九月　辻六郎左衞門

（地方落穗集三）田方撿見一件之事

反取厘取とも、取箇を仕出所ハ、反取より盛出す也、反取と云ハ上は壹反に何斗取、中下は壹反に何斗取と、上中下の位に隨ひ、段を付て取を極る也、然れ共反取厘取共に、詰る所ハ胴尻にて高厘毛付厘とて、取米を高と毛付高にて割合、何れも免幾ツ何分何厘と見る也、高厘と云ハ村高、草高ともの割、毛村厘といふハ永引等の引物を、村高の内にて引、殘る高にて割也、村方にて割たる免ハ、

畝取厘附取

ニ相糺し、勿論前書之通、木綿作ハ別而作徳有之心得を以、元根取之外増米いたし、畑方計ニ而も、年季定免ニ取調可被相伺候、

巳正月

〔地方要集録〕一都而関東方は御年貢取方、田は米取、畑は永取定法ニ而、反。取と申候は、たとへば田方は上田壹反ニ付七斗取、中田六斗、下田五斗、下々田四斗取と極候て取申候、畑方は縦令ば上畑一反ニ付永貳百五十文、中畑貳百三拾文、下田貳百文取、屋敷は上畑に大方准じ候、

上方は御年貢取方、田畑とも米取定法ニ而、厘。附。取と申候て、上田壹反之石盛十五ニ候得ば、壹反之高壹石五斗ニ而候故、五ッ取に候得ば、壹反に七斗五升、中田壹反ニ十三にて候へば、高壹石三斗に候故、壹反に六斗五升、下田壹反に十一に而候得ば、高壹石壹斗にて候故、壹反に五斗五升取申候、

右石盛上中下之間貳ッ程にて、高に而は定法貳斗程ニ而候、上中下之飛様段々此格にて候、尤関東方私領などには、前々より之取くせ候而、田畑米取にいたし、厘附取に致来候も有之候得ば、是は稀成事ニ候、御料所には、関東方に厘附取と申事先無之事候、上方にても私領方には田畑反別取にいたし候も稀には有之事候得共、御料所には無之候、上田は米永取と申は無之事候、

一厘。附。と申は高ニ幾ッ幾分幾厘と割付候故、厘附と申候、是を免。附。とも免相とも申候、畢竟は高何何割之取に當ると申儀ニ而候、

上方関東方御取筒之大法

一上方ハ厘附取也、高。取ともいふ也、厘附取と讀べけれども、聞にくき故にリ。ン。ツ。ケ。とよみくせ也、厘附取ハ村高ニ而取米を割て、何わりに當ると見て、幾わり何分何厘と、壹村にての厘附ハ、リン迄割付、幾毛と毛迄ハつけぬ法なれ共、村々を集め合又ハ大高之村などにてハ、毛も付ざれバ

入又青腐り少く、正桃多過半に取箇上り、不引合處ならバ、正桃之内不出來之分を腐り之内へ入れ、坪刈之勘定宜樣に取計事口傳なり、雖然年々出來方之豐凶に依り、吹方之多少有之事なれバ、當り合に不合迚、なき物を可取にも非ず、又有るを除く筋ハ猶以無事なれ共、少之勘辨取捨に而、上下損益なく、取箇之附方正道に行屆樣、取計事肝要なり、

〔牧民金鑑六〕天明五巳年正月廿二日丹後守殿御宅ニテ被仰渡

申渡

五畿內筋畑方木綿撿見之儀、一體田方ハ稻作を本毛とし、畑方ハ麥作を本として、石盛等相定め候事に付、麥菜種等之類、夏收納いたし候品ハ、田方之裏毛に而、畑方ハ秋收納いたし、作物之分裏毛ニ候、然る處木綿ハ田に作り候而も稻に勝、益有る品に候を、畑に作り候へバ、本毛之麥を收納いたし、其跡に裏毛に作り取候故、重々之作德に相當り候、尤五畿內ハ土地に應じ、畑木綿出來方も格別宜敷候ニ付、前々より撿見いたし、根取之外ニ增方之取計も有之事ニ候、然る上ハ假令木綿作出來方不宜年に而も、根取ニ可減樣無之筈ニ候處、其勘辨無之、近年ハ木綿一作之善惡のみに而、畑之取米吟味被致候趣に相聞、殊に撿見之儀も、木綿摘取候跡、枯草ニ相成候節、稻作一同撿見被致候由、左候而ハ出來方、善惡も分明に難相知候ニ付、右體之儀より、近來ハ菜大根等之雜事作定、根取之品より却而木綿作之方取劣、段々御取箇相減候儀と相聞候間、以來ハ前之通、畑方之木綿作ハ裏毛ながら、格別作德も有之心得を以、御取箇付吟味可被致候、且撿見之儀も、年々氣候土地柄ニも寄、少々之遲速ハ可有之候へ共、一體木綿ハ夏土用中に花咲、立秋之頃より桃を結び、八月之節に至り笑み始め、九月土用過迄、木綿吹候ものに候間、凡桃なり揃候之頃、小撿見として手代を遣し桃を改置せ、追而各廻村總撿見之節、右吹方木綿斤附等、定法之通可被取計候、若又木綿撿見いたし候より、定根取ニ居置候方、御益ニも相成、百姓之爲ニも宜敷村方有之候ハヾ、巨細

本に桃四ッ五ッより拾四五貳拾も有之豐凶に依而殊之外多少有り、壹坪に桃三百もあれバ豐作なり、竿ハ田の撿見同然、古撿新撿之村ニ而違ふ也、竿を入綿之木を挽、吹ながら青桃共不殘取、三段に撰分ケ桃を算るなり、吹殼を手に握り、潰れるハ腐りなり、青桃腐りハ勘定ニ不入、無難之桃を何拾と勘定に相成、歩刈帳にハ桃幾ッ、腐り幾ッ、木何拾本と記す、坪刈見立之儀、右に述る趣を以見立るといへ共、綿撿見度々仕馴功者なくてハ、稲と違ひ善惡難見分り、大に刈込もの也、能々可心附尤口傳計に而ハ決而難分、度々致綿撿見不見馴シ而ハ知れがたし、扨吹之儀、桃壹ッ實共ニ上々ハ六分五六厘より七分位迄、上ハ六分ぐらひ、中ハ五分下四分位なり尤豐凶ニ依り大ニ吹目違有、綿實を去り繰綿ニなれバ、凡桃壹ッ正味三分ニ積れバ、大きなる違ハなし、撿見籾積之勘定ハ、豐凶に不拘、大和國ハ桃壹ッ五分吹、山城、攝津、和泉、河内、幷中國筋之綿場ハ、四分吹之勘定にいたし、當り合仕出す、極上之出來綿ハ、桃壹ッのゑみ綿を左右へ引延せバ、長六寸程ニ引のびる、是を六寸吹と云、ケ様成綿ハ稀也、夫より五寸吹、四寸吹、三寸吹、貳寸吹と段々出來方之善惡ニより、のび違ふ、能出來たるハ、實も小くて籾も少く綿多し、出來之不宜ハ、實大くて多き故、引延し而も綿ちぎれ〱に成、綿のびず、○中略

一木綿撿見取取箇附方ハ、大坂御代官年番相立、平野目と云て、貳百貳拾目を壹斤として、其年之相場相立、壹斤代銀何匁何分、米相場何程と相極め、年番御代官より觸出し、綿直段と米直段と割合、壹斤之綿米何程と積り、夫に四を乘じ籾に直し、綿之吹目、大和ハ五分、其外ハ四分として、桃壹ッ籾何勺と當り合仕立、右玉青腐を去り、正桃數勘定之上、壹坪に籾何合何勺と積る、勿論田畑共定免之村ハ、根元免幾ッと定り有之、撿見取ハ五ケ年拾ケ年平均ニハ前年之取米を以て當り合仕立置、綿之豐凶に隨ひ、當り合より多少有之事に付、坪刈之上桃數　方ニ勘辨有り、縱バ大玉にて腐り多く而、出來方より格別取箇下るべきと見へたらバ、右三品之内少々宜を正桃之内へ數へ

分の勘辨肝要也、木綿の見樣、木綿の木立は薄く共、大概木の丈けもよく、桃數も大體付、ゑみ方の能は上出來也、九月土用前後迄青葉有之は惡し、木立枯て枝少し青は中之上也、又木の丈け太く成能熟し、桃數多く付、ゑみの宜は極上也、

〔地方凡例錄 三〕一木綿撿見之事 附り 一木綿日本へ渡シ始る事

一木綿撿見ハ五畿內中國ニ限り、餘國にハなし、一體畑作之儀も、古代ハ撿見有シ處、享保十八丑年、有德院樣〇徳川吉宗御代、畑作撿見御停止ニ成、永定免に被仰出シ處、木綿計五畿內中國ハ畑撿見被仰付、勿論田に畑物仕付るハ勝手作故、稻之上毛並に定法なれ共、木綿計ハ田に作りても畑綿同然撿見いたす、尤國々共畑にも綿作雖有之、五畿內中國之外ハ綿撿見なく、餘國之綿作ハ、外畑作同然也、七月頃より綿吹く最中にハ撿見難成、九月末十月頃迄吹仕廻たる跡を、撿見致す事なり、綿之見樣、秋之土用前後迄青葉有綿ハ宜敷、木立枯て少シ青きハ中之上なり、木大く能枯殼數多きハ極上也、少く共枯たる殼多附たるハ宜シ、青葉賑々敷見へる所ハ、若返り青桃計ニ而、一向實なく、皆無同然なり、又殼澤山ニ附宜しく見へても、腐り多き所有、腐たる殼ハ三方へ開ケたる所、裏之方へなり返り、或ハかけ落、全體小さく見ゆる、又宜敷からハ三方共、きつかりと堅く見ゆるなり、綿之實入青き內ハ桃ニ似たり、依之綿の實を桃と云ふ、熟と三ツにさけ綿吹くなり、雨年ハ綿腐り不作し、旱魃ニハ桃ならず、田畑共折々水を掛、日照年にハ六七日目程に用水を引入、暫溜へ疊切落す、雨年にハ不及、用水掛に、田に綿を作ハ稻作綿作隔年ニ仕付る、年々綿計り作りてハ宜からず、綿作ハ稻作之一倍肥シを入、水を不溜地を浮す故、翌年稻作至極宜出來るなり、

一綿撿見之仕法、往古ハ斤目計りに而勘定いたし、取箇極めたる處、中古より木綿を籾之合毛に積り、籾之勘定を以取箇附致す、九月末頃に成り、綿吹仕舞から木に附居る所へ、坪竿を入る、尤畑のうねを筋違に、枠を隅違ひにうねに當る樣に入るなり、大概三うね餘入、木數五六拾本も有、壹

木綿作檢見

其所に至て差略有べし、尤三々九段法あれ共、強く泥むもわろし、只平均にて甲乙なき程を考る事肝要也、百姓の下見悪敷バ坪數を切べし、坪數少くてハ甲乙有べし、但皆損付荒の場立毛有バ、引戻證文取なり、

一扱坪刈終らバ、名主か百姓の庭へ持寄、目通りに溜置、若ぬれ坪有バ筵を解ひろげ、自分の傍に早し、是をバ跡へ廻すべし、扱人を拂ひ稻こきこなしの人、壹坪に二人宛にして、坪數ハ自分目の及ぶ程の數を解廣げて、目通りにてこきこなさせ申すべし、坪刈を以て其村の有籾を量り、物成ハ坪刈より合取迄の間、隨分麁末の儀無之樣、心氣を配るべし、兎角百姓の手拔をくわぬ樣に心を付、此方ハ無理をせぬがよし、然る時ハ物毎正路に成也、坪刈の札紛失なき樣、夫々の筵の内に懸樣に心を付べし、こき上てこなしに心を付べし、こなしをバ隨分こなさすべし、荒く摺と米に成也、さらり〳〵とするがよし、扱摺出來箕にてふかせべし、是又ゑゐなハ吹出させべし、ゑいなによそへて、能籾を吹出す事あり、制すべし、扱箕をふき終らバ、銘々札を籾と取違ぬ樣に、一坪切に筵に入折返し、自分の前へ溜置べし、こきこなしのものハ摺立、終にハ又外の坪稻をこくべし、如此手廻して順々に差圖致し、扱不殘出來の上ハ、一坪限に立札を以地主を呼出し、名主組頭年寄長百姓爲立合、坪數合ハ此方にて可計、右何れも得と見届させ、其上帳面に記、

〔地方落穗集四〕木綿作撿見之事

一上方筋は木綿を田ニ作る也、依之田方稻作同前に撿見をする也、田之大小ニ寄筋を立、兩方より繰り上、尤横通も所々さくり上、水の掛干自由成樣に仕立る也、但元成玉（是を桃といふ、桃の形なる故なり、）田方撿見前よりゑむもの也、然れ共土玉とて木綿不宜、年に寄腐玉多し、是は雨にて土を打上る故也、綿撿見は早過てもよからず、遲過ても猶又見分ケがたく、一體中段のゑみ盛たる頃撿見すれば、善悪見分けよし、然共田方撿見の節、木綿撿見するには、兩方能加減の時分は稀也、遲速に隨ひ見

して、百姓の工面横着をくわぬ様に心掛、此方よりハ無理せぬがよし、

一立毛の見様色々有、日に向ふて見る時ハ、立毛能見ゆるもの也、又穂の返りたる方より見れバ能見へ、後の方より見てハ悪敷見ゆる、高き所より見下せバ、悪敷見ゆる也、是穂の上より見すかす故也、朝露を持たる所、雨上りなどハ籾ふくるゝ故能見ゆる、至極上出来と云ハ、しんし張とて穂重る故、稲しなひ、しんしを張たる如く穂の上へ重りて臥也、又穂の上へうづまきて見ゆる也、穂の臥たるが能とて、一様に覚ゆべからず、臥に次第有、根より平に臥たるハ悪敷、是ハ根虫歟、又ハ根くちて返りたるなり、初心の人、是を上出来なりとおもふハ僻事也、

一坪刈をする田ハ、畔にて得と見平均、爰にて切らんと思ふ所へ、ずいと入て枠を懸べし、田の中へ入あれかこれかと見くらべてハ、見へがたきもの也、扨枠を懸てハ四方の出入當り障りを改め、枠極候て田主并名主組頭等を呼入、枠の入方を見せ、得心させて鎌を入べし、勿論大勢入事を不許、刈人ハ一両人にてよし、穂かぶを高くからせ、枠取候跡にても、枠形しかと見へ候様に可致、刈仕廻候て一坪の内の稲株をかぞへ、立札の裏に記し、稲と札と一所に縫へ包み、四方より折懸、十文字に縄を懸、碇といぼ結に致させ、我より先へ為持べし、

一水深き田を坪刈するにハ、枠水上に浮て不落着、枠の内の稲計り難し、か様の所ハ稲の横並を穂上にて寄、枠を懸、枠の四角の内の方へ、細き竹を直に立させ、枠を入候上にて、稲株より穂迄わらを直に引立廻り、四方を釣合見べし、入べき穂外へ出れバ、廻りの稲かぶを銘々引立る時、稲と稲との間、夫れ丈違なる、依之水下を探り引出す、又入間敷穂の入時は、左右前後を向合て、稲を引立見れバ、稲枠に押れてからむ也、如此勘辨を以て極る時ハ間違なし、

坪籾舂法之事

一坪刈ハ出来形の甲乙、反別の多少に寄、坪数次第有べし、是ハ其場次第なれバ筆には盡がたく、

に候得共、近來坪刈と申ならハし候事、

籾を直にこきこなして、干さずして、直に量る時ハ、籾壹升を五合摺に米に積る也、籾を干してこきこなして量りて、籾壹升を米六合摺に積る定式也、

按ずるに、本文之通なるべし、

〔地方落穗集三〕立毛坪刈之事

一撿見の古法ハ、朝露の乾たる頃出、日の七ツ頃には引揚る也、是稻にしめりを持、坪刈正路ならざるを厭ふ故也、坪刈ハ三々九段に刈也是古法也、然れ共時宜によるべし、坪刈ハ仕出懸ケハ嚴しく、晝頃ハゆるまり、（是氣のくたびれる故なり）夕方ハ又嚴敷なるもの也、（是ハ晝頃ハ風くたびれ、撿見ゆるく成に、氣を付る故嚴敷成なり、）是貳ツながら正道不成、初心の内に有事也、（撿見のみに限らず、都ての事に此心有也、）是第一に心を付べき事なり、

一毛の有稻を刈ては、出かけ又ハ夕方雨上り抔ハ、毛折彙て合毛を增間、勘辨なくては、百姓一體の難儀となる也、尤百姓の願有て六ケ敷間、可成丈毛のなきを刈たき事也、心得有べし、

一坪を刈んとおもふ田に至らバ、立毛と此方の書り合と見合、何程刈出にならんと考て刈べし、尤其田の一體の出來を見ならし、無理なき樣に枠を掛べし、總て立毛ハ中高に出來たる田ハ、取實あるもの也、出來宜樣にても、あそこ爰にほか〳〵と上出來有て、間すきたるハ、取實なきもの也、又肥跡うなひ境ハ、能出來るもの也、肥跡ハ其田へちらす肥を、一所に運び置也、大田へハ所々へ運びためをするもの也、去れバ其肥汁を土へ染込故、外より出來宜物也、又うなひ境ハ堀の如くに成故、土をかきならしたる時、粉土深く寄也、尤肥も左の如し、依之出來宜敷、是等の所へ枠を掛、坪刈するハ無理也、總て坪刈ハ其田のみに限らず、村中一體の出來を計る元に立る事なれバ、隨分念入べき事也、都て其田の一體を見ならし、中分を以て坪を定むべし、上毛ハ上毛の中分、中毛ハ中毛の中分、下毛ハ下毛の中分にて刈取る時ハ、中樣にして上下共平なり、只吟味細やかに

中一兩年など懸候でハ難成事ハ、甚勘辨吟味有之候事、

〔田園類説〕撿見坪刈之事

撿見ハ作毛の見分也、毛見ともいふ、坪刈ハ有毛を積るの法也、此仕形に先輩之諸説あり、

一地方答問書云、坪刈枡の尺寸、壹間ハ六尺壹歩四方也、但内法也、木を以する事惡し、木ハぬれつひつすれバ曲る故に嫌ふ也、竹竿を以拵、坪刈する時ハ、四方の隅切組にして、銅串をさして、田地へ差入、動かぬ様にする也、坪刈の竿當様に、正路不正路あり、坪の内の稲株四方付にならぬに、竿をあつる也、二方付にする事大法也、

按するに、一方、二方、三方、四方、差付といふ有、一方付ハ坪竿を稲株の一方へ當て、三方すくをいふ、二方付ハ二方當りて、二方すくをいふ、是正道也、三方付は三方當りて、一方すく、四方付ハ四方ともに當りてすかず、差付ハ坪竿をひづませで、すかぬ様にする也、二方付の外ハいづれも正道にあらず、

坪刈の正法順路の仕様、坪刈を刈候田の坪つゞきへ、枡を打かへして當て、一所にて二坪刈て、二ッに割りて平均坪の籾を用ゆる也、

按するに、一所にて二坪刈を正法順路の仕様とハ、事たらぬ説也、其理を推時ハ、三百坪刈てならしせざれバ、心にあきたらざる所有、然共左様に刈るハ、ならぬものなれバ、田地何枚も見合、其中分の一枚の内にて能所を刈て然るべし、勘定詰にてハ中分の内の中分にて、刈筈の様なれ共、左様にはならぬもの成故、中分の上にて平均に成べし、

上田中田下田各三坪づゝ、九段刈て目ためしに用る事古法也、

按するに、是可然法也、

田畑ハ六尺四方を壹歩と唱へ申候、尤撿見の節、坪刈にも六尺四方を用ひ、是を歩刈と唱へ候事

る事候、扨又坪刈甚能いたしにくき物にて候、正敷順道ニいたし候得バ能候、わるくいたし候へバ、坪刈ハ邪魔に成候、總て其村之元來地取圖所から高く取くせニて、取來候所などにてハ、坪刈ニ而取箇積り候事ハ、一切難成事ニ候、坪刈ハ右之通之心得之爲にハいたし候、取箇第一之本之考にハ不成儀ニ而候、取箇ハ考僉儀大切之儀に候、古撿新撿竿ゆるみ候處、村方之善惡、百姓稼之有無、其外所柄之樣子等、いろ〳〵僉儀考を以、取候儀ニ而、一概ニ難申事、紙上筆頭ニ中々あらわしがたき儀ニ候事、○中略

右之通、存寄候儀、荒增如是候、外江は中々ケ樣之儀申入候事、甚だ遠慮も御座候而、不申進候へ共、無他事存候間申入候、外江一切無御沙汰、書面之通を猶又御吟味被成候上、可被仰付候、以上、

六月○中略

一撿見取箇之極樣に、坪刈を元ニ立候ていたし候事是ハ素人取と申候て、嫌候儀ニ候、總て坪刈之儀ハ、功者之上よりハ用て不用之考有之候、坪刈ハ年之豐凶見分と、實之取實とを試、撿見引方立候、合毛付之目こぶし定候ために仕候事ニ候、世間地方心得候ものも、坪刈ニて取箇極候樣ニ存候儀、不功なる儀に候、素人取の元に可仕ための坪刈も、中々能成にくき儀にて、大切之事に候、坪刈ハたれもいたし候儀候へ共、吟味いたし候でハ、坪刈ハ殊之外能成がたき、六ケ敷ものニ候、ケ樣に坪刈之儀を心付候人も少く候、中々正路實事之坪刈ハ、容易ニ難成事に候、甚功者之入候儀ニて候、元來高免に取來候村方ニ而ハ、中々坪刈を以、取ケニ當る筈に合候儀ニ而無之候、如此之村方ニ而ハ、坪刈不仕事ニ候、坪刈いたし候得バ、障ニハ成候得共、益無之故ニ候、其上百姓高免之訴訟之申種と成候、取箇之儀ハ年久敷地方に懸り心を用候て、鍛錬不仕候でハ難成事に候、地方少心得候得バ理屈取ニ成候、實正取之儀ハ、中々言筆ニ不及事ニ候、たとへバ取箇下免ニ候とて、一概ニ增候儀、曾て難成事にて、高免下免も前々より、年久敷取くせの所を取直し可申とて、中

坪刈

可致、無益之村入用等不相掛様、精々申渡之事
一石代直段ニ相用候、去寅年より相場書、年々差出來候場所ハ、前ニ寫可差出事、
一御圍穀、幷貯穀一村限、有高可書出事、
一支配所公事出入銘書、案文之通り可書出事、
一村々餘業之品可書出事
卯八月

〔石川正西聞見集坤〕一三齋〇細川御仕置は、〇中略秋中免相前に毛の上を、大庄屋撿見仕、其後代官衆撿見、其後郡奉行に横目衆撿見として、面々の撿見帳を談合なしに、三齋へ差上申候を、引合御覽じ、其上に免相定り申つるよし、定て只今も先例のごとく可被仰付と存候、

〔甲子夜話十〕唐律疏議云、於監臨內盜絹一匹、本坐合杖八十、仍須準例除名、或受財六匹四尺、而不枉法、本坐徒一年半、亦準例免官ト頃聞ク或御勘定御代官トシテ、秋穫ノ撿見ニユキタルニ、里人ノ小吏ニ絹ヲ贈ルヲ見テ、絹ヲ造ル入費ヲ代銀ニテ受ベシト言テ、ソノ物ヲ取上シト云、唐律ヲ曇曲尺トセバ何トカ云ン、

〔地方要集錄〕一壹坪の籾を刈いかほど有之とためし候を、坪刈春法、もみ摺といふ、〇中略

覺〇中略

一坪刈之籾五合摺之事定法ニ候、坪刈之時干減を立候得バ、六合摺ニ積候、干減不立生籾ニてハ、五合摺之定法ニ而候事、
一世間體之地方不功者之面々ハ、坪刈籾之勘定詰ニ而取候を、肝要之儀と心得候得共、坪刈ニ而取箇極候儀ハ、素人取と申候、坪刈ハ其年之豐凶有米取實を試るため、撿見之目ためしニは成ほど坪刈いたし候儀能候へ共、取箇之第一之根本ニいたし候儀ニハ無之候、坪刈ハ用ひて用ひざ

幷元〆能々心を用、取計不申候而ハ、舊弊改候儀ニハ相成申間敷哉、○中略

戌七月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　內藤隼人正
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　明開飛驒守

天保十四卯年八月○中略

場所ニ而可差出書物其外覺

一定免村々ハ、先達而被仰渡候案文之通、小前帳繪圖面とも取調寫ニいたし、場所著之節可差出候、尤相濟本紙之義ハ、先達而被仰渡候案文之通可心得事、

但小前帳之內、家數人別幷荒地年號等之廉ハ、見分差掛候義ニ付除置、追而書入可申事

一撿見村々ハ內見帳と、案文之小前帳と、兩樣相成候而ハ、調方間ニ合兼可申ニ付、內見帳計差出、幷荒地高反別小前帳取下小前帳、畑田成小前帳、見取、流作場、其外切添切開小前帳、村繪圖共可差出事、

一廻村順繪圖支配所申合取調、村名小判形を付、支配所ニ色分いたし、村々定免撿見之印を付、廻村順帳とも、場所著之節可差出事、

但案文之小前帳ハ、先達而申達候通り、可相心得事、

一定免撿見取共小前帳一筆限、田場料地立札可致事、

一定免撿見村々幷取下場新田とも、支配撿見相濟候後之見分相成、格別刈旬後れ候村々ハ、坪立殘し置可申事、

一高取米一村限帳、別紙案文之通、場所著之節可差出事、

一廻村道筋取繕等致間敷、全通路差支候分ハ、往來相成候樣申渡之事、○中略

一御用之外、隣村役人共、旅宿へ罷越候儀、決而いたす間敷、御用ニ付罷出候ものハ、銘々辨當持參

候間、彌弛み不申候樣、以來別而入念可被取計候、

一早春より麥作刈旬以前迄之內、凡日數五十日極を限り、支配所村々一體ニ、定免撿見無差別、年年場所を替、自分幷御勘定方御普請役組付之もの召連、廻村いたし見分致候筈ニ候間、右廻村割等取調可被申聞候、勿論撿見廻村振合之通可成丈手輕ニいたし候ニ付、廻村筋道造に其外馳走ケ間敷儀ハ不及申、無益之人馬不遣、過分之村入用不相掛樣、私領寺社領へも、支配所村々より進達いたし、かたく申合取計候樣、兼可被申付置候、

右ハ此度松伊豆守殿へ伺之上、相改申渡候間、可被得其意候、

寬政九巳年十一月

〔牧民金鑑五〕天保九戊年七月晦日

一撿見以前、田方所持之小前より、撿見入用と名付、高割を以金子取立、內見帳差出し候節、撿見掛り手附手代下役之者宅へ、村々役人相廻、酒肴代金持參いたし候村方も有之、又ハ撿見濟歸陣之節、直ニ鄕宿とも附添、肴代等持參いたし、御取箇附用捨相願、甚敷ニ至り候而ハ、引方高ニ隨ひ、私金員數約定抔いたし候趣、其外御代官御預所役人家來下々ニ至迄、酒代差出し、其上鄕宿村役人共馴合、掛役人へ私金之內をも、押領いたし候儀等も有之、撿見廻村休泊之節、料理人等相雇、酒肴差出し、馳走ケ間敷、花麗之儀も有之、村役人夫人足迄も寄合飲食いたし、入用多分相懸り候趣ニ有之、破免撿見等も三分以上損毛ニ無之分も、三分以上ニ相定、御年貢引方致遣し、中ニハ御取箇附相當之分ハ、撿見請候雜費多候故、村方難義いたし候間、村々之內、愚昧之小前ハ、撿見請、却而難澁ニおよび、出入等も出來、御取箇ハ連々減、御不益相立、遠國ハ別而右之趣ニ相聞、關東筋も右ニ准じ候趣ニ相聞候、

一定免切替荒地起返免直、都而諸改も前條ニ准じ、村役人鄕宿共馴合、取計候樣相聞候間、御代官

可致候、百姓ハ村々之元ニ而候、百姓之辛苦を相察し、飢寒無之樣心を盡し可申事、

〔牧民金鑑 六〕寛政三亥年九月七日申渡

川々出水に而水冠ニ相成候田方之内、實入ニ掛り候分ハ、早速苅揚候得バ御取箇も附、村方ためニも可相成候處、撿見不相濟候ニ付、苅揚候儀不相成捨置候而、腐ニ成候類も可有之哉、左候而ハ甚以不宜筋ニ候間、假令最寄撿見旬ニ無之候迚も、右體之場所ハ一と耕地たりとも、致撿見爲苅揚、作毛無益ニ捨リ不申樣、精々心付可被取計候、

亥九月

〔御觸幷御書付留 一〕各々支配所撿見之節、爲小撿見手代差出ニハ及間敷、若小撿見無之難成處も有之候はゞ、其以前御勘定所へ申立、差圖に任せ可申旨、正德三巳年被仰渡候處、享保元丑年より、小撿見無之差支候分、小撿見差出候積相成、當時ニ而ハ各撿見之節、手分ケいたし、手代ども小撿見差出、又ハ早稻方等、手代小撿見ニ差出候も有之候へ共、先小撿見ハ不相用姿ニ有之支配所撿見多候分ハ、吟味行屆兼候趣相聞候間右體之儀ハ、小撿見として手代差出、大撿見相濟次第、作付苅とらせ、小撿見村々も致順村候樣相心得、尤小撿見差出候村々ハ、村名認分可被差出候、右ハ各幷手代ども撿見御取箇付之次第をも、相樣候事ニ付、先當子年より來ル寅年迄、三ヶ年之間、右之通取付候樣ニ、可被相心得候、

寛政四子年八月

支配所村々田方撿見之儀、只今迄各一分限撿見いたし候上、猶自分幷御勘定かた撿見廻村いたし來候處、農業繁多之時節、役人等も多分差出、其外入用可相掛儀ニ而、可及難儀事ニ付、以來撿見之儀ハ、外御料所並之通、各一分之支配限り撿見廻村いたし、自分幷御勘定之撿見ハ相止候間、可被得其意候、依而ハ御取箇付其外も、是迄之姿より相弛み候樣に相聞候てハ、以之外之儀ニ有之

一御代官中當作撿見以前、小撿見と名付て、手代共を指遣し候時、彼小撿見之輩名主庄屋と申合、私曲之事共前條にしるし候ごとくにて、其上村方無用之費等、却而末々之諸百姓難義之事共有之由相聞候、自今以後、御代官中撿見之上、古來より記置候、村々水帳撿地帳面等に相見候、田畑石盛反取等之次第、兼而ハ亦其年之麥作以下畑物之樣子等、委細に吟味有之、彼是以相考へ、御取毛を定られ候ハゞ、手代小撿見之事を用るにハ及べからず候、若小撿見を以糺明なくして、難叶所も有之においてハ、其子細を以御勘定所へ相達し、差圖に任せらるべき事、

附、總じて御用之事に就て、御代官幷手代役人等、其支配所を廻り候時、召連れ候人數も多く村々之馳走と付屆等、種々無用之物入等も多く有之由相聞、自分以後、御代官ハ不及申、手代幷召連候下々迄、たとひわづかなる事に候とも、大小之百姓之難義無之ように、嚴密に其制禁有べき事、○中略

正德三巳年四月十三日

〔御觸幷御書付留〕一撿見之儀、村々より立毛內見帳差出、各幷重立候手代ども召連、巨細見分之上、出來方宜場所ハ、其所ニ而坪刈いたし候儀ニハ、可有之候得ども、坪刈可致と被存候場所ニ而も、苗代跡などゝ申立、相歎候得バ、其場所ニて坪刈差免し、或ハ舂法之節、干減等之儀、強而相歎候得バ、勘辨いたし候取計等も有之候趣相聞、如何成事ニ而、內見之儀ハ村方勝手ニ致、合付差出、候上ハ、坪刈ハ出來方ニ應じ、各存寄一盃ニ可被取計筋候間、其所得と勘辨之上、手代竿取までも能く申含、當御取箇之儀ハ、各別ニ出精取增之積可被致候、畢竟御取箇付之分ハ合勺ニ而も、大造之增減有之事ニ候條、精々致吟味候樣可被致候、○中略

天明七未年七月

右ハ御老中方より、御沙汰之筋有之申渡し候、撿見之儀、能々申合出精村入用相減、御取箇進候樣

但俵直シ早算ニ、一二五之算法ハ、取米に四を掛、籾にして、其籾を一二五ニ而割れバ、四六之延米加りたる米四斗貳升入之俵數に直に成由ニ而、前々右之法有之、高崎領ニ相用る、元米一二五と云を擠たるハ、米四斗貳升を七合三勺擠之勘定七三ニ而除ケバ、籾五斗七升五合三勺四才と成、是を籾壹俵五斗入之積、又五ニ而除ケバ、籾壹俵壹分五厘零六八と成、然バ有籾を一二五ニ而除ケバ、籾之俵數ニなるを、直ニ四斗貳升入之米之俵に用るハ、本式之算法ニハ無事也、五斗之籾を七合三勺擠にして、米三斗六升五合ならでハ無之處籾五斗入壹俵を米四斗貳升入壹俵に直ニ用る事、旁算法ニ不當、然共元來籾五斗入と云て、込籾掛ケ計り等ニ而、壹俵凡六斗程有之ゆへ、籾壹俵擠立れバ、米四斗貳升餘有之、本米壹石ニ延米四斗六升ニ當り、籾五斗ニ而割出たる壹犮壹分五厘零六八、直に四斗貳升入之米壹俵壹分五厘に用ひ、總勘定ニ付、六八之不盡ハ捨、一二五之法といふ早算始りたると見へたり、勿論五斗入之籾ニ而俵ニ成るを、四斗貳升入之米壹俵ニ直ニ用る儀、本算法ニハ無事なれ共、本米壹石ニ延米四斗六升を掛出したる石數を、四斗貳升入之俵ニ直したる本算と、一二五之割出同數ニ出、不盡ニ而少シ之差ひ有之迄ニ付、一二五と申法を立たる儀と見へたり、

〔鶴岡事審日記〕當鄕所務事、於御佃者可致半分沙汰、又所相殘半分內、四分一可被辨之由、百姓等致訴訟之間、當年計以寬宥之儀所出被免也、至所當者任多年趣、以撿見可定之、次於十人百姓者不應左候間罪科至極也、仍任奉書之旨、府中へ可被召遣之狀如件、

應永五年十月十三日　　法印

佐々目政所殿

〔享保集成絲綸錄二十三〕正德三巳年四月

條々〇中略

七分六厘貳毛と成、亦法籾四拾石を早算一二五ニ而除ても、米三拾四俵七分八厘貳毛六と成り、本算と貳厘餘之違ひある ハ、元來一二五之法、端シ之不盡を捨たる法に付、少之差ひ有り、世上一統之通、五合摺五公五民之法、籾四、拾石を四ニ而除バ、取米拾石と成、是へ延米四石六斗を加へ、米拾四石六斗、則一二五之取米なり、依之四六之延と云根取米ニ而、當合を仕出すにハ、取米を一四六ニ而除けバ本米出る、其本米ニ四を乘じ、籾にし而反別之坪數ニ而割れバ、當り合壹歩ニ籾何程と出る、縱バ取米拾四石六斗、反別壹町三反歩、此當り合を見ル時、拾四石六斗を壹四六ニ而除ケバ、本米拾石と成、是へ四を乘じ籾四拾石、此籾を壹町三反拾歩之坪數四千坪ニ而除ケバ、壹歩籾壹升と出る、則當り合なり、世間並之差法ニ而ハ、壹升之當り合壹町三段拾歩之取米ハ拾石也、

一二五ニ而拾四石六斗なれバ四石六斗取箇強シ、

一籾摺之儀、實入善惡ニより、籾壹升摺立米四合位より六七合位迄有之ニ付、平均五合摺之勘定往古よりの通法なり、然るに高崎城付村々七合三勺摺之勘定ニ致たる發端ハ、中古安藤對馬領分之節迄ハ、往古之遺法年貢籾納ニ而、壹俵五斗入と極め、掛ケ斗迚、升之緣ニ籾粒乘ル樣ニ斗立、其外込籾有之、五斗入と唱へ六斗入之由、折々城中於藏庭摺立候處、農業闕ケ敷時分、人夫差出、百姓難儀ニ付、米納ニ相願ひ、摺立試れバ籾壹升米七合三四勺ニ成たる處、以後七合三勺摺之勘定ニ而、米納可致旨被命、百姓納得之上、七合三勺摺ニ極たる由云傳ふ、勿論古代ハ一統世柄も宜敷、民力募り、肥養も下直ニ而、田畑之修理行屆、稻作實入能、七合餘ニも摺立たれ共、後世ハ民之風俗奢侈ニ移リ、農業も自分致怠惰、手入等麁略ニ成、殊更近年肥養悉價貴く、古之十位之價ニ成行、田畑之養手薄、土地之位劣り、實入惡敷、六合摺ニも難不相成、今更古法可改にもあらず、代々引付通を相用る、高崎領ニ不限、羽州ニハ貳斗之延米有り、是ハ六合摺之古法ニ而、御料所ニ成而も引付難改、今も本米壹石ニ貳斗宛出目とて納る事なり、是等之類、餘國ニも可有事なり、

方不宜、取箇去年より減る村ハ、遠見ニハ成がたし、

一投撿見とハ、内見帳も不差出、泊村抔へ名主百姓罷出、去年ニ何程可納と願出るを、致吟味極るを云、前條請免同樣之物なれ共、請免ハ知行所へ役人も不遣、江戸屋敷ニ而相極め、投撿見ハ其村近邊へ参りたる上願出、致吟味相極ム、万一心掛之儀も有之候而ハ、前年より取箇相增、願ふ共不承届、本撿見に致すなり

一准合と云ハ、村内離れ耕地か、或ハ新田場所等、別に歩刈可致處、本田歩刈之合毛ニ而請度旨願、又ハ村々入組たる田場一ケ村致坪刈、外村も其通之合毛ニ而請度段相願、別段ニ歩刈不致、隣村之合毛通り歩刈帳ニ記を准合といふ、

一一二五撿見之事

上州之内高崎城附村々撿見之法ハ、前々引付ニ而、田別撿見と唱へ、一二五之法四六之延と申、餘國ニなき七合三勺增、五公五民之仕法至而強き取箇也、内見ハ色取撿見同樣立毛見立、有籾一筆限致合毛付、紙札ニ認、田毎ニ建、上中下ヲ分ケ根取を用、勘定之上增減相立ル、撿見之仕法ハ、田壹枚限致見分、縱バ五合毛之建札有るを撿見役人八合と見立れバ、則地主へ八合ニ可致旨申達、地主ハ八合ニハ難成六合ニ願ひ、撿見役人ハ八合ニ可致と、彼是押合七合ニも取縮、紙札取上、改七合と書付、内見帳ニ引合せ、壹坪限地主と押合合毛取縮ル、若無體ニ低合毛を願、利害も不聞譯百姓有之バ、致坪刈、有籾通ニ取縮ル、尤田別撿見ニ付、其坪限之樣ニ而、外之田坪にハ不用、右之通之撿見ニ付、悉手間取、大郷ハ一ケ村に十日餘も掛る事也、扨總籾極りたる上、取箇附方ハ籾石數を一二五ニ而除くハ、延米加りたる納米俵數直に出る早算也、延米ハ本米壹石ニ四斗六升、俵入ハ四斗貳升也、縱バ田壹町三反拾歩、壹坪籾壹升之積ニ而四拾石有り、七合三勺摺を乘じ、米貳拾九石貳斗と成、五公五民之積り貳ッ割取米拾四石六斗、是を四斗貳升俵ニ而除ケバ、納米三拾四俵

請免と云ハ御料所ニハ決而無之、小給所等撿見ニ可遣役人無之ニ付名主呼出、當年之出來形承り、尙又外々ニ而も隣村之豐凶風聞等を糺、去年之出來方より宜き沙汰なれば、去年に何拾俵相増可請旨名主へ申聞、又出來劣り願筋有之れバ承屆ケ、押合ひて取箇を極メ、或ハ五ケ年取米致平均、其年之豐凶ニ隨ひ、右平均取米ニ増減いたし極る事も有り、是を請免共云、併撿見之筋ニ而ハ無正法之事ニ無之、私領たり共、大家抔ニハ無之儀、小給所遠國出行等纔之高ニ役人遣す失墜も有、村方ニ而も地頭役人引請るより勝手ニ付、旁請免と名付仕來たる儀と相見ゆる、私領定免付凶作之節不致破免、手當引用捨引抔と名附、鄕帳割附ハ定免通ニ居置、内證ニ而取箇引遣も請免同樣之儀也、併是ハ立毛見分之上、引方相立るニ付、請免とハ譯違ふ、破免撿見入ニなれバ、鄕帳割附之書面ニ取米不減し而難成、鄕帳割附取米減ジ而ハ、若村替知行替等有之、五ケ年平均取米致減少、物成詰之節差支るゆへ、手當引に致置事なり、是又御料所ニハ曾てなき也、

但請免又は手當引等ニ而、取箇減じ而も割付鄕帳ハ定免通ニ居置故、村替等之節、五ケ年平均取米不減、物成詰之勝手ニも能く、其上破免ニなれバ口米も減じ、又國ニ依り取米掛ニ而差出ス荏大豆等も減る處、手當引なれバ取米計減じ、外之品ハ不減、地頭勝手ニなる、勿論立毛相應之引方申付ルニ付、非常之筋ニハ不當、百姓方ニ而も撿見と違、内見等之手間も不掛、旬も不後、村方失墜も少き故、村方ニ而も勝手之筋なり、

一遠見撿見投撿見雅合之事

遠見撿見と云ハ、破免等ニハ難成事也、撿見取之村、一體之出來方格別不同も無之所ハ、入込たる耕地等有之、悉見盡し而ハ日數も掛り又ハ及暮見殘りしハ、耕地ハ入口を見て取締、或ハ壹ケ村遠方ニ離れ、大撿見小撿見引請而ハ、人夫等入用掛り村方致難儀ニ付、内見帳ハ差出し、撿見ハ遠見相顧、取箇ハ去年通りと歟、又ハ何程可相增とか、吟味之上取締る、是ハ遠見撿見と云、然共出來

る也、但當時の畝り合の坪刈見合のために用る而已、籾田毎に合毛番付、字田主の名を記たる立札を爲致、委細に遂吟味、見立て坪刈し、是を春法村方の下見合毛と改合毛を差引、其切出し合を平均して、右毛揃合毛江銘々載て、合毛を加増して籾を仕出し、有籾を〆て、是を五合摺五分取にして取箇を極る也、合毛有丈を取出す故、有毛取と云也、

〔地方要集錄〕反別取之所畝引仕樣、たとへバ上毛壹坪ニ付壹升壹合御座候而是よりおとり候分壹升壹合より引付申候事、

壹坪ニ付五夕不足	四分五厘	拾三歩半引
壹合	九分壹厘	貳拾七歩引
壹合五夕	一割三分六厘	壹畝拾壹歩引
貳合	壹八二	壹畝貳拾五歩引〇中略

右之通、何程之引付ニ而も法を立、小帳ニ逢役ニ而、晩々旅宿に而畝引極申候、法立不申、其場其場ニ而引候而ハ、後々指支候儀御座候、右引も同じ心得ニ而、小撿見之仕樣、色々可有之候へ共、委細書取がたし、有增如此候、

〔地方凡例錄三〕一有毛撿見之事附り色取撿見之事

一往古色取撿見と云法有り、仕方當時之有毛取ニ似て少シ違あり、是ハ至て古き法之由也、今不用事故、仕法知ル人なし、其後畝引撿見に成、又六十年ほど以前享保年中より古之色取ニ習て、今の有毛取初りたり、大體色取同樣なるゆへ、有毛取を都而色取撿見と唱、今之人ハ古の色取を不知、有毛取を色取と覺、當時ハ一統色取と唱 有毛取と云事を不知人多ければ、色取と唱るも害なかるべし、

一請免居撿見之事

く、上毛多年ニハ年貢に損有、依之一耕地限りに上中下一體に平均し、何合程にか當ると考、内見帳の耕地限りに、覺書して通るべし、撿見仕廻て後、右耕地限の總毛見平均の合毛を束て平均せバ、田方一體の總毛見へ平均合と成、此合毛ハ坪刈合の平均により低き物也、坪刈ハ上中下毛を合計の平均也、總毛見平均と云ハ、上中下共に、甲乙の多少を考て、合毛を見平均也、至極の豐年ハ格別、通例上毛の反別ハ少きもの也、依之中下毛の方に引落さるゝに寄、合毛の平均低く成也、坪刈にて其村の有籾を仕出と云は、田毎に坪を刈ぬもの故、上中下毛の反別甲乙有故、先ハ大旨也、尤村方より差出候内見帳に、上中下毛共に反別を分けて出すといへ共、是ハ手前勝手に拵へ候故、正路成ハなし、依之村方より書出候合へ、坪刈の切出合を掛、合毛を登するといへども、元來不正路の反別ハ不動、只見込の合毛を取出すまでなり、只一耕地限りに反別毛配を見平均方、大積りながら丈夫なり、去バ坪刈計りにて取箇極るにあらず、是ハ其年の豐凶、并其村の有籾を量る計なり、第一總毛見平均を以て、勘辨の元とす、其上村柄の盛衰、助成の有無、或ハ夫食種貸物の返納等の有無、或ハ風水旱損亡の品に寄、品々勘辨を加へ、取箇を極る事也、有て取難き所有り、無て取れる所あり、これ勘辨秘事なり、

〔地方落穗集四〕當時撿見之事

一古來は前に記すごとく畝引撿見也、享保年中以來有。毛。取。に成たり、此有毛取といふは、上中下の位に不拘、去ば反取にも不構、只其年之毛配に而取也、古へも色取といふ法あれ共、此法とも又異なり、村方より出す内見合附帳も認方前々よりたて別なり、上中下位切、合歩の奧江、上中下打込に毛揃籾仕出を書出す也、此認方上中下ともに壹升毛の反別を寄込、此籾何拾何石何斗と脇書にする也、認方壹合毛迄同斷、籾反別合籾〆をする也、如斯して帳面請取、當り合の前年の取箇を以仕出す、若前年損毛年なれば、其前年の取箇を以てする也、尤五ヶ年十ヶ年平均を見合仕立

小檢見之事

一檢見廻村の節、翌日可廻村々調、前日に廻狀を出、村々内見合付帳を、前日の泊りへ可差出候旨觸、右帳面の上中下小前反別合付を寄立、右寄の處位切突合、其上手前所持の割付下反別へ引合、若相違の處有之ば、即時に直させ都合致、翌日其帳面を以逐吟味なり、

一其村の耕地に至り候ば、其耕地の字承屆、帳面に引合すべし、尤其耕地の反別大旨を承り、耕地の方境を尋問、凡數何程あらんと、胸に算用すべし、是は東西百間、南北百間と、空目にて計り、町あへくゝる也、名主の申處と大數を引合、耕地限りに帳面に覺を致置べし、其後耕地移の順を承り、今見る所の耕地を、何方より何方へ見て、何方にて終り、次の耕地へ可移と、心を次第して足を入べし、無左して、うかと耕地へ入と方角を失ひ、心まよひ有もの也、尤一耕地切に何方へ歟目印をすべし、無左では大耕地又ハ耕地數有る所抔にて、横道成村方ハ、同じ所へ道を替へ、引廻す事も有もの也、是ハ自分の用心也、總て耕地の見分町歩は、帳面の總町歩と引合、不足の場所ハ吟味すべし、〇中略

一總て田毎の立札の反別を所々にて、立札と地面とを見合せ、田地の延有無を知るべし、取箇勘辨に入事也、其外村柄土地の善惡、用水惡水の順不順、百姓暮方の善惡、助成の有無、市場河岸場の樣子等委敷見分し、善惡に付可有勘辨也、

右是迄ハ檢見役人の心得を記す、此外にも可心付事あれ共、數多ければ略之、大旨右之趣を以心得、其餘ハ考味有べし、

大檢見之事

一大檢見ハ小檢見の跡より廻る也、檢見の心得前に同じ、只總毛を見平均事肝要也、總毛見平均と云ハ、一耕地の内にも上毛中毛下毛有、又此三段の内多少あり、上毛の多き年、中毛の多き年、下毛の多き年も有、又上毛下毛格別甲乙ある年も有、坪刈計りに拘と、下毛多き年にハ、百姓の損多

當田方立毛之儀、村中大小の百姓組頭年寄名主立會、所々ニ同樣之致坪刈、無依怙贔屓下見仕、立札帳面田毎之位反別合付番附等無間違相認、銘々致印形、帳面は前夜之泊へ差出し田毎之立札無相違樣入念、其村々廻村之節、村境へ罷出可致案内候、廻村先觸ハ前夜之泊より、順々可差出候間、可得其意候、

一村境幷他領入會之所ハ、銘々細見竹を立、地所明白ニ相分候樣可致候、

一撿見之節、無用之人數差出間敷候、名主年寄組頭長百姓罷出案内可致候、田主ハ自分之田坪刈之節、立合可申候、

一坪刈稻舂法之道具、筵繩鎌等爲持、村境へ可差出候、

一耕地移之場所、幷撿見通り筋堀之有之處ハ、足傳投渡し、通路差支無之樣可致置候、尤大通り道橋危キ場所ハ、丈夫に取繕ひ置可申候、道掃除等堅仕間敷候、

一旅宿之儀、行掛ニ可極候間得其意、決而修復等仕間敷候事、

一泊晝賄之儀ハ、御定之通木錢米代可相渡候條、所々有合之野菜を以、一汁一菜之外、馳走ヶ間敷儀、堅仕間敷候、尤下々迄酒肴一切差出間敷事、

一右撿見ニ付、万事正路ニ致し改可請之、音物等末々迄、決而致間敷事、

右之趣、逐々得其意、小百姓迄得と爲申聞、諸事間違無之樣可致候、此廻狀披見之上、村下ニ名主致印形、早々順達、留り村より可相返候、以上、

何ノ何月幾日　　　　御代官　何誰印

何國何郡何村

右村々　名主年寄組頭

古來は、案内の名主、組頭、長百姓へ、神文爲致たる事も有るなり、

りに諦るを准合といふ、是ハ違見撿見にハあらず、なげ撿見といふ、泊り休などへ、村方の名主百姓出迎ひて、當年ハ去年に何程相增納べし抔といふを、吟味して極るをいふ、元來田米畑米抔いふ差別なく、打込に極るを、なげ免といふを以、それよりなげ撿見と付しなるべし、

〔地方落穗集三〕田方撿見一件之事

一田方の撿見、古今の違ひ有、五拾ヶ年以前迄ハ畝引撿見也、其以後有毛取と云に成たり、今時此法を用、然ども地方に附たる事なれバ、古人の法も不知バ有べからず、又私領などには、なげ免割引抔とて、色々の取方有、是ハ取にたらず、今御料所の法を爰に記す、古今考味して、勘辨有べき事也、○中略

一、撿見ハ小撿見大撿見兩度見る也、小撿見を先として、田毎に角々迄委く吟味する也、其上大撿見廻村して、別段見分し、大撿見小撿見共に手々に其村の取箇を仕出し、大撿見の手にて小撿見の仕立と、手前の仕出とを突合、勘辨吟味の上にて取箇を極め、一郡一國のくゝりをして、差出帳を仕立、御勘定所へ出、吟味を請る事也、其上にて或ハ增米加免等申付る事も有、此吟味不濟以前、大概の米辻を以て御廻米申付る、是を假免狀共、又端書共云、村方右端書石數を以て、小前大割をして、御年貢取立津出しする也、

一撿見出立以前、前年の割付下帳を以て、永引起返り、又ハ當夏秋川欠石砂置水堀等、前方吟味伺の上、引に不立類を、當年の割付下へ不殘仕出し、上中下反別引物差引殘高迄、一村限りに仕立、郡〆國〆迄高反別少も相違なき樣にして、大撿見へ持之、小撿見ハ自分々々の可廻村々の分、右帳面を手々に書拔持之、扨右村々に貳拾ヶ年平均反取當り合、幷村限は御取箇の當り合、上中下共に仕出所持す、是等の道具其外見合ニ可成書物等諸帳面共、無差支樣心掛持參すべし、

一扨出立以前五六日前に、定式の廻狀を出す、但先觸ハ出立の前日に出す也、廻狀認方左之通

いたまざる樣に正路取ケを付べき爲なり、小百姓の不力なるものを敎事は、小撿見にまくはなし、乍去替りたる小撿見の仕樣など仕出して、百姓の見聞を驚かす事なかれ、兎角理屈にかゝりて、吟味强ければ、百姓の心はなれて、困窮の根となるものなれば、只眞實を以百姓對すべき事肝要なり、猶功者に隨て、撿見の事習ひ求べし、百姓仕習能して、正直にさへすれば、連々僞なく正路行渡りて、役人も百姓も骨折事なく、撿見も百姓次第にして、違ざる樣成事なれば、往々撿見の吟味も、此書付も曾ていらぬ事と成行べし、ひたすら希ふ所は爰にあり、我下の役人先自分正直を本として、百姓に及すべし、

〔田園類說〕撿見坪刈之事

按ずるに、〇中略 扨、撿見には大撿見。小撿見。遠撿見。なげ撿見。といふ事あり、大撿見は御代官の撿見をいふ、小撿見ハ大撿見の外に手代撿見する也、是は損毛の年の事にて通例の年の事にはあらず、一旦御停止なりしが、享保四亥年より、又小撿見せずしてハ、吟味不屆所へハ出すべしとの仰渡されあり、勿論吟味の仕方御書付も出たり、夫よりして例年豐凶の差別なく、小撿見を出すやうになりて、多分小撿見ハ大撿見と日をかへ、別段に延るなり、總而法令嚴なれ共、兎角絕がたきものハ賄賂の筋也、諸儒の論にも撿見取を嫌ひ、定免を好めるハ事、畢竟此賄賂の筋をいとふて也、是によりて一ッの仕形に、大撿見小撿見と人數ハ分れども、別段に小撿見をバ出さず、大撿見小撿見一同に相廻り、其村にて右左へ分るゝ歟、又ハ場所を分て相廻り、見分殘らざる樣にして、一村毎に大撿見小撿見の坪苅合毛、又ハ損毛の多少を突合、勿論泊り休村移りを一同ニ致事、予〇谷本敎が是迄見及しハ、いづれも此通にせし也、是にて疑先ハ少く、尤吟味の拔事もなし、又時により手廻しよき事も有、遠見撿見といふハ、其耕地の小口計を見て極るをいふ、また村々入組たる耕地にて、出來形同樣成場所を、一通り見分之上、其村にて步苅合毛を改て、其外の村々も其步苅の通

めして、其年立毛の目こぼしを定る、有、總面歩刈の事少も無理なる仕樣無之樣に、能々念入べし、只有やうに正路を本とすべきなり、

坪刈を肝要とする事もあり、又用て不用事も有、深く勘辨すべし、ゆるがせにする事なかれ、

撿見心得（籾量曉る、穂々見る、稲見おろす、雨上り見すかす、早田中田晩田、稲草により取實多少、風吹向風）

厚キ　薄キ　長短　根出來　實入批（シナ、サ、アエ、ウスシ、）　枯（一穂枯、枯交り、）　穂之上（不揃）　稲色（から枯、から青み、金色な）吉とす、

麥田　水田　つみ田　蒔田　刈敷田　谷田　梢田　山さわ　木障（コカ）　青立　冷水

用水　天水　水入稲　袴（右まへ、左まへ）　籾穂さきの留（貝の口、鬢留り）　一立稲（ヤリイチ、ナヤシン〳〵）　若稲　玄かれ

稲もてるもてざる　土性いろ〳〵

私領入組の節心得（境まるし、能を他と云、歩數を、此方と云時、田主の名を聞、）

水入場（穂の上まがぶる所、水入時節も、へる、節ざる、常々水場、不入時の兩、）

見分（船ニ而見る）

毛引勘定（一日分毎夜極る、毛引品々寄分ケ引方、畝引合、何合毛は何ほど引と、法を作り、高引にする、）

畑方作毛見分（三草四木之類、雜穀野菜之類、）

三草は（麻、木綿、藍なり、タバコ、藺、紅花、共大草とも云、）　四木は（桑、楮、漆、茶なり、此外柑類數多あり、）

田方毛引多所殘毛取箇上る時、畑方別格ニ取ケ付る心得、

田成畑　畑成田　荒場（起返り、又は新開有之仕心を付べし、）

小撿見不宜仕樣之事

切撿見　割引　投撿見（但水場新田等の毛引に用事もあり）

毛揃（但所により位付不埒の時に用る事、右毛ぞろひは、微細成仕樣に似て非なる事あり、勘辨すべし、）

凡小撿見といふは、立毛の善惡を能見分て、田畑になき所を取まじきの術にして、畢竟は百姓の

覚書 撿見の心覚を書付、御取ヶ極る時、吟味之本に成心得百姓、下見之歩刈の合不レ合、手代の歩刈、所の様子に〇中略

手代撿見之事

元〆手代両人先撿見に廻す先觸状 橋野道普請破損之所計こしらへ、人馬出様、庄屋年寄出迎様泊り宿ニ而馳走がましき用意を制す、

大通り見分 立毛能所へも廻る、歩刈場年々替る定る、駕籠にて見る、馬上、歩行、

灘分ヶ帳 百姓下見之灘切、上中下之歩刈合毛引合改、上中下毛仕譯大まかなれば、見分之上仕譯に勘辨有米積吟味、

村切歩刈 上中下下々四段に刈、無類上々毛を制る、又は刈様し見る事もあり、

小毛見可レ有見分ニ心得 小百姓を数心得、小百姓は小毛見願、長百姓は不レ願事有、

永荒場改 初而見分の村方委細之吟味、川欠、山崩、砂入、石留引すにる、水引る、場数、土取場、堀数、溜井数、立歸有無吟味、

田成畑　畑成田　新開　切添　植出場　見取場　高ヲ詰入べき心得

手代小撿見之事

先觸状 人馬出し様、泊宿馳走がましき儀制す、下見帳用坪ニ立札、

組手代貮人 又は三人　召仕誓紙 案紙別にあり

百姓下見帳 百姓誓紙、案紙有、歩刈仕様、合毛付仕様、人品吟味 平百姓に而も下見に出る

合毛見合引付 下見之合毛改る時心得、取ヶ低き村石盛引付様、引に云べき合毛極やう勘辨、鰥寡孤獨癈疾のものを、小撿見に而数様了簡、

撿見節序 日数三十日土用前後、所により遲速、稲穂くび迄わからみたるを期とす、

毎田に札を立る 無毛には札を除、上中下下々位反別田場字田主の名、庄屋之印判、

歩刈 坪刈春穂刈、ためしとも云、竿升さし曲尺、壹坪稲株数、一株の穂数、一穂の粒数、一升之粒数、千蔵を立る不レ立心得、麦田、水田、漬の田、藤田、米擂心得、刈所吟味、田場字田主之名品々、稲穂、二 坪刈平均、こやし跡、溝口、苗場、道端、村きわ、植絶場、竿あて様、稲かぶわけ様、粗拾やう

下見に違ある時は、三段四段刈事有、此外段々刈事も有べきか、其時の品によるべし、

合毛入札横へする事あり、是は小撿見に出る役人大勢打寄、いづれの村ニ而も人々之目利をた

略

御代官大撿見之事

凡其撿見といふは、田畑之立毛見分之事計にあらず、視觀察を以、鄕村民間の盛衰、其外あるとあらゆる事を察し見る事あり、然ども微細大略勘辨あるべし、目を以見るを視と云、心を以見るを觀と云、理を以見るを察と云、

先觸狀百姓之費をいとひ、人馬出やう、泊り宿のついらひ、用意を請す、

供之下々の用意なるべきほど小勢、荷物すくなき様、

召伴る手代下々誓紙案紙別にあり

地方功者の手代をつる、

手帳村切高反別十ヶ年取箇[illegible]年々撿見引、前方年々歩刈、水損、旱損、天水、用水、溜池、或は鄕境繩も持參すべし、右之外心得になるべき事、其節に認り書付べし、

田畑古撿新撿繩詰る、ゆるき、石盛高きひきゝ位、のろくふろく、

鄕分ケ帳或は耕地切、坪切、毛見共云、此様認様案紙あり、百姓に下見いたさせ

田方あさな切、又は三四ヶ所寄立て書出す、上中下々毛拔書分ケ、鋪々歩刈又は類を以推す、畑方諸作も書付類時によるべし、

村盛衰見所を見る、開所をきく、心の付所、

歩刈竿升捋様一升さし曲尺[illegible]籾捋[illegible]稲草稲かぶ數、一株擬穂、一穂之籾數、壹升之籾數、田場字田主之名、

撿見道定る様る年により例不運所江行、百姓見せたがる所心付やう、先撿見小撿見遁候所、歩刈場見分、

立毛善惡風木損、厚キ薄キ、枯[illegible]穂、三稲、米田、水田、虫付、駕籠ニ而見る、馬上より見る、歩行ニ而見る、

畑方立毛三草四木之類、雜穀野菜之類、

私領入組百姓に導様心の付やう

百姓作毛の儀に付訴訟聞所を聞、云所をいふ、いかりを嫌ふ、

御代官歩言を嫌ふ云所をいふ、農を聞る心得、

檢見取

樣可被取計候、

十一月

〔御觸幷御書付留〕一關東筋畑方御年貢取立方之儀ハ、夏秋冬と三度ニ割合取立候由之處、秋作損毛ニ而、畑方引相伺候程之年柄ハ、多分田方も及損毛候處、其砌ニ多分可取立畑方御年貢三分三厘餘之內、御定通り秋作畑方貳分五厘之引方相立候ても、差引八厘餘之分ハ、取立候事ニ付、其節ニ至り候ても、全村方より持出候姿ニ相成、自ら取立方差支候由を以、已來ハ夏作五分通り取立、秋冬ハ貳分五厘ツヽ取立候樣ニいたし候へハ、秋作皆損之節、貳分五厘引方相立候上ハ、外ニ可取立分無之、村方之爲にも相成、且ハ取計方等差支無之樣、小出大助申立候、乍然御年貢取立方之儀ハ、前々より敢て掟も無之事ニ付、御料所一統可被仰渡筋ニも無之候間、同人支配之分ハ利解申聞、納得之上取計候樣被仰渡候、依之御銘々御支配所限り御勘辨有之、差支候筋も無之候ハヽ、右之趣を以御取計候方ニも可有之哉、寄々及御演說候樣、奉行衆御沙汰ニ付御達申候事、

寬政六寅年六月

〔倭訓栞前編九計〕けみ　農監の人田野を巡り、年の上下を視て、斂法を定むるをいへり、西土に撿蹈などいへる是也とぞ、毛視の義、稻穗の毛をもて豐儉を知るの意也、東鑑に田園作毛、俗に粒毛などいふ是也、砂石集にも、秋の毛の上を賜ふて下ると見えたり、

〔經濟錄五食貨〕視取ハ甚シク民ニ害アリ、子細ニ代官ノ秋成ヲ視ルヲ、今ノ俗ニ毛見ト云、

〔地方要集錄〕一田方之立毛を見分いたし候を毛見といふ、撿見といふ事は、立毛計を見にあらず、田畑又は村方百姓之盛衰等、諸事視觀察之氣味有之を以、撿見といふ、○中略

一大撿見と申は、御代官立毛之見分をいふ、小撿見は手代立毛之善惡を見分にて、損毛之引方を立るをいふ、是を坪撿見ともいふ、小撿見之仕樣は、色々之法、人々之得手により、流々有之事候、○中略

〔牧民金鑑 六〕寶曆八寅年五月廿日御代官幷御預所役人へ申渡

去丑年御取箇過分之引方有之、其上畑方引被相伺候義有之候、畑方引之儀ハ、重き事に付、前々より數度申渡、一切引方無之筈ニ候得共、寬保二戌年、關東大水之節、格別之御憐愍ヲ以、畑方共相應之引方被下置候、然ル處去丑年之儀も、羽州、越後、越前、美濃、其外關東海道筋迄、一統之水難、殊に出水之時節も惡敷ニ付、彼是評議之上、畑方引之儀、去丑年壹ヶ年免許被成下候樣申上候處、格別之御憐愍を以、制外之御引方被成下候得共、以來之儀ハ、彌前々申渡置候、是迄之通畑方引之儀ハ、不相成事に候間、被得其意、心得違無之樣可取扱ため、此段其節より申達置候、

寅五月

寬政三亥年十一月

都而諸國共畑方之義ハ、田方と違ひ兩毛三毛有之、前々より定取ニ相成居候儀ニ付、不作之年柄迚も容易に御年貢引方不相成、別而關東筋永取之場、一ト通之義ニ而ハ、引方願難相立、定法ニ有之、縱令一國一圓ニ抱候水旱損等ニ而格別譯立候場所迚も、麥作秋作迄ニハ、品々取入時節も違ひ候事に付、縱令バ畑方永取百貫文納來候場所は、右百貫文之內五分通五拾貫文ハ麥作、殘五分通之內貳分五厘ハ夏作、貳分五厘ハ秋作と相立、夏秋共貳拾五貫文宛之割合を以、損毛之時節ニ應じ、吟味之上、右割合丈之分、定取御年貢之內より引方被仰付候義も有之候得共、是以通例之儀に而ハ、不被及御沙汰事に候、然ル處當秋之出水に付、村方に寄、心得違いたし、畑方引之義申上候類も可有之哉、當年之義ハ、春中より氣候も宜、田畑とも熟作之趣相聞、畢竟八月以來之出水迚も、一旦水之義ニ有之、尤行德邊海邊續村々之內、度々之高汐を受、流死人潰家等も、多分有之候程之場所ハ格別之義、其餘川附村々之義ハ、畑方秋作之分、皆無ニ相成候程之義も不相聞候間、兼而此段相含、縱令彼是難義之筋と申立、畑方引願出候村々有之候とも、利害申聞、得心之上、願筋相止候

候、上方も國々平均候へバ、大方田方三分貳畑方三分一ほど有之積を以如斯候、畢竟三分一金納ハ關東同事、畑方金納之積候、關東方ハ平均田畑大方等分之積りニ候、關八州ハ畑方多く、田方少く候へ共、伊豆、甲斐、出羽、奥州を入候而、大方田畑等分ニ而可有之候、關東方畑方永取下免之儀も、由來有之事ニ而候、上代ハ日本も畑方ハ無年貢に而候由、古昔之名殘ニ而隱岐國、佐渡國など、近年迄畑方ハ無年貢ニ而候處、近來年貢相納候、上代ハ人少ニ而、田方第一ニ耕作いたし、畑ニハ雜穀野菜など少々作り渡世仕候故、國々野廣ニ而畑ハ少々宛有之候ニ付、無年貢ニ而候よし、中古以來畑方段々開立、雜穀下直ニ候故、米直段積り甚下直ニ付、其直段積を以、畑方永取下免ニ候と相見へ候、近來米高直ニ成候故、當然ハ畑方之永取、甚少分ニ見候へ共、國法ニ成來候ハ今更畑方米取直シ、又ハ永取今時之相場直段ニ合候積ニ取永上ゲ申候儀、世々を重事故、中々容易ニ難取上事に候、總じて田方畑方共ニ、御取箇急ニ取上ゲ申族、其億兆之百姓困窮ニ可成事、畢竟上之御冥加之御爲ニ不宜御事ニ候、御料之百姓ハ私領と違、御取箇も高免ニ無之、困窮不仕、民間其御大恩を難有事存候樣ニ有之度御事に候、近年樣子ハ私領同事ニ罷成候樣ニ、世上ニ而も申事ニ候由に御座候、以上、

九月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　辻六郎左衛門

地方落穗集（五）田畑成取下ゲ反取付樣心得之事

一田方地所に寄、用水の手絶候歟、又ハ子細等有之畑成に願、取下に致し候節、此場所縱バ上田にて反取六斗ならば、田畑六分違の心得を以て、反取へ六を乘じ、三斗六升取に可致、然れ共上畑の反取と釣合を見、又ハ土の善惡を考へ、增減勘辨有べし永取にするも右同意也、取下米を貳斗五升にて除き、反取永に成上畑反取永と見合、差略の儀も其子細に寄べし、先田取を畑方に直すは、右心を證とすべし、

畠方免

石五斗五升と成、此免之内壹ッ引貳ッ壹歩五厘段免なり、是を段免場之高三拾石へ乘すれば、取米六石四斗五升と成、雙方合六拾石高取米なり、尤上中下平均免之段免ならバ、下田高ニ不拘、總高ニ而右之通之仕法ニ致すなり、

〔地方要集錄〕一地不足之事
是は洪水之節山拔等ニ而、地面江砂利、又は砂など大分走込候歟、堤切入候而、砂大分押込、地面惡敷なり、古撿之石盛ニ而、年貢上納難成候ニ付、新撿を願出る時、公儀之得下知、撿地入候石盛一段二段三段ヅヽ下ゲ石盛付ケ致事ニ而、地なし高に成候故、地不足と成也、

〔勘定所指出方勤方心得書〕一延享年中御面村々段免之儀停止被仰渡、諸國共段免は無之候處、起返候而、免下免之儀は、段免ニ而は無之、其土地之出來ニ隨ひ、取付いたし候事ニ付、年々無油斷吟味詰可申事、段免と申儀は、土地同樣之場所ニ而位を付、免合甲乙有之候儀を唱候事ニ有之、心得違ニ而起返下免之場所を、段免と唱候事譯違ひ候事ニ付、右體相心得候儀は、糺之上免合追々相直候事、

〔地方要集錄〕畑方免之儀は、畑は二毛三毛作も有之事に候故、豐凶之儀たのみ無之ものに候、先畑作之目當は、麥を以年々善惡を極候、畑方之取箇、旱水損之大損毛無之時は各別無之候得ば、少々宛之勘辨に而免極候、○中略

大島古心へ認遣し地方之事問ニ答候書付扣
一畑方之取、關東方永取金納之儀、田方同事ニ米取ニいたし可然と申儀も有之候得共、中々米取難成事ニ而候、總而田畑共ニ其地ニ作出候ものを、年貢ニ納候筈ニ而候、田ニハ稻を作候故、米を納候、畑ニハいろ／＼雜穀野菜等を作候故、此品々を納候事ハ、不能成儀故、作り候諸色を賣候に付、畑方ハ永取金納ニいたす事に候、上方ハ畑も米取に而候得共、取米之三分一ハ金納之法ニ而

たし、地味出來方之樣子に應じ、反取等取調置、定免年季明に至り、格別之增米いたし候歟、又ハ一旦撿見取にいたし、御取箇可被增儀ハ勿論に候處、右等之吟味不行屆場所も有之趣相聞、少分之增米を以年季切替被相伺候分も有之候、右體之場所ハ、精々心付可被遂吟味候、

右之趣、出羽守殿御沙汰も有之候に付、申渡候條、手附手代共江も能々申含、聊等閑之儀無之樣、可被取計候、

右之通被仰渡、奉得其意候、右被仰渡之趣、同役共一統へ私共より可申達旨被仰渡、奉承知候、以上、

卯六月七日　　池田仙九郞印○以下人名略

〔地方凡例錄三〕一段免之事

是ハ縱バ田地上中下三段之位有之處、下ノ位之內、至而惡地有之、年々外々下之地所より作毛劣り、下之年貢ニ而ハ不引合儀無相違バ、下之年貢[illegible]一段も二段も免を下ゲ、取箇附儀也、往古撿地之節、下々とも可附處、如何之儀に而下壹段ニ[illegible]る哉、今更下々の位付る儀ハ難成、右之場所計所持いたす百姓難儀故、壹ッも貳ッも其地位[illegible]應じ、免に而下ゲ遣す、是を段免と申、稀ニ有之事也、勿論撿見ハ段免場迚、別段にハ不致、總平均之色取撿見に付、總取米縮りたる上、免ニ而壹ッに而も八分に而も下ゲ遣す、是を段免と云、尤其年之出[illegible]形により、免下ぐるニ非ず、段免場迚前々より反別共極り有之事也、

但段免之仕樣、本免に壹ッ劣り之段免ならバ、段免場之高ニ劣り丈之壹ッを乘じ、元來仕出し、其米を總取米ニ加へ、夫を總高ニ割免を拵る、是本免ニ成也、其內壹ッ引段免に成る、縱バ下田高貳百石免三ッニ而、此取米六拾石之處、右貳百石之內、高百七拾石ハ本免、三拾石ハ壹ッ劣り之段免場有之バ、先ヅ三拾石ニ劣り之壹ッを乘じ米三石と成、是を總取米へ加へ、六拾三石と成、總高貳百石ニ而除ケバ、免三ッ壹歩五厘と出る、是則本免なり百七拾石へ乘じ、取米五拾三

一右之通に付、此度定免不相分ハ、嘗御取箇帳被差出候節取増候處能々相分候様、高取米永御取箇帳之内書拔、別紙ニ認相添可被差出候、

文政二卯年六月申渡

都て定免場之儀、何程豐作之年柄にても、定り候御年貢之外ハ不相納、三分以上損毛有之節ハ破免に相成、其外品々村方勝手之筋も有之、勿論實に難取付筋合等も有之分ハ、別段之譯を以、定免相濟候儀も有之候處、近年ハ御代官に寄、手代任せに致置候類も有之哉に相聞、定免切替等之節、少分之増米いたし、前々に多分之減米を以、定免被申立候も有之、如何之事に候、尤各之内格別之増米いたし、切替幷新規定免被相伺候も有之、是等ハ取計方行屆候趣に相聞候得共、一體御取箇之儀ハ、村方之盛衰、地所之樣子に寄、農作之外餘事之產業有之村方ハ、夫丈ケ小前に至迄も、富候て居候得ば、地所之見込よりも、増方申付候ても、村方痛に不相成、累年長久いたし候筋に可有之處、近年御取箇もゆるみ勝に相成、多分取劣り候に付、いづれにも御取箇相進候樣、可被取計儀に候得共、左候迚増方而已に取掛、村入用も不厭、又ハ飢寒をも不考合時ハ、百姓及困窮、田畑肥等菲薄に相成、作物出來方不宜、右等之儀も勘辨可有之儀、乍去御取箇増方差免置候儀にハ、一切無之候間、格別心付、村入用相減、御取箇相進、納期月も不後樣可被取計候、且又撿見請候てハ、人馬繼立等之諸失脚相掛、其外水腐之場所にてハ、自由に刈入いたし度杯、村々勝手之申立に任せ、全くハ吟味不行屆、下免之村々迄も定免被相伺候も有之哉に相聞候、御取箇之儀ハ、各主役第一之事に候處、地所之樣子見不申候てハ、分兼候筋に付、右體村方願に任せ、免合反取等之吟味不行屆候てハ、如何之事に候條、厚く心を用ひ出精可被取計候、

一新田場等にて不地馴以前、定免に相成、追々地味相直、當時之出來方に見合候てハ、不相當下免に當り候場所、又ハ御手當定免、其外不定地にて定免に相成居候場所ハ、兼て心付、折々見分い

〔牧民金鑑 六〕天明五巳年

當巳年季明、又ハ去辰年迄撿見取新規定免吟味之上、被伺候ニ付相糺候處、延享元子年、寶曆二申年ニ差引多分之減米相見候、別て上方中國筋ハ、子年之取米見合、吟味可有之筈ニ候處、拾ヶ年貳拾ヶ年、其外五ヶ年、拾ヶ年平均ニ增候書面にても、前書之通近年取劣候ゆへ、定免ニ無之米辻にて、定免申付候ハヾ村方ハ勿論御代官御預所役人にても、當時下免之取米を相當に被心得候てハ、一體御取箇地主心得違に相成候、定免之儀ハ、村々品々勝手多、定免願候村方ハ、土地惡敷場所少き道理、彼是見込高免を見合、可被遂吟味事に候、其上期月後れ被伺候ゆへ、此節再三及吟味候てハ、最早撿見差掛、間に不合儀と、旁不被及吟味候に付、致撿見取、立毛出來方、應先年之免合、見合一盃取增候樣可被致候、勿論村數伺之内にハ、相當之定免村方も可有之哉、左候ハヾ來ル早春に至り、一貳ヶ村たりとも引拔之伺候ても可然候、乍然最寄格別飛放れ候樣成殘村々撿見之節、定免村にても人馬繼立、其外都て難儀之筋も可有之哉、是等之儀ハ、銘々勘辨を以可被伺候、且又新規御代官ハ勿論、場所替最寄替等有之、初て定免被伺候類ハ、土地村柄善惡得と不被辨事も可有之間、左樣之類定免吟味撿見取とも、別て被心附、何れにも御取箇進候樣、肝要之事に候、

一武州足立郡蕨宿新規定免、延享元子年、寶曆二申年ニ減候バ、元來見取沼用水掛にて出來方宜敷候處、右沼新田ニ成候後、代用水掛りにて、流末ゆへ用水掛り、至て不足旱損所に成、地味薄く、前前に取附候儀不相成、此上增方有之候てハ、定免難願旨、吟味之趣被申立候へとも、見沼新田開發ハ、享保十六亥年にて、其後延享寶曆に取米に候間、右之通被申立候、吟味之次第不相當、其上蕨宿近村に同樣代用水掛御料所外支配之場所にハ、何れにも延享寶曆にも不相劣、當時免合候、然る上ハ、旱損年にハ可被劣候得共、平年にハ格別、年々可被取增候筈に候間、此段能々被相考、撿見取被申付、右兩年之内御取箇に取付候樣可被致候、

損毛候ハヽ夏秋作取米之内にて、引方相立可申候、

一田畑共に一村之内にて、水入場堤外等にて、餘程反別相分り、損毛有之場所ハ、四分餘程之損毛、又ハ皆損に候ても、一村平均候てハ、四分内に當り候に付引立不申候、右場所總村にて持候ハヾ、引方に不及候得共、百姓も分り、右場所計持候所に候ハヽ、損毛四分以上に候ハヽ、其場所計引方ニ立可申候、

右之通可被相心得候、其場所により存寄候儀も有之候ハヽ、其時々可被相伺候、損毛歩分之儀、大まかにて四分内之損毛、四分以上に成引方立候儀有之候ハヽ、可為無念候條、隨分入念吟味可有之候、以上、

戌八月、

〔憲教類典五之四下〕延享三丙寅年九月十日

定免伺書、去年及延引、撿見時節に差掛り委細之吟味も成かね候間、向後年內早春之內、遂吟味、置、三月中限り伺書御差出可有之候、尤近來目錄計にて被伺方も有之、不宜敷候間、銘々一村限り帳拾ケ年取米永相認差添、御差出可有之候、尤五ケ年七ケ年季を限、相極候事御座候間、其年々立毛相考候は有之間敷儀に候間、年內中にも遂吟味、早々差出可申旨、御列座之上庄次郎殿被仰渡奉承知候、

寅九月十日

〔寶曆集成綸錄二十一〕寬延二己年五月

御勘定奉行江

御取箇之儀、向後定免可被仰付候、併當年より定。免。に難成場所は二三ケ年之內、無油斷定免に致候樣に、相心得可被伺候、

違而申達候通いたし可被置候、
一當年季明定免之分、右之極めを以、早々吟味可相伺候、
但撿見取之處も右同樣ニ申聞、得心候ハヾ可被相伺候、
一去年定免相極、又ハ古來より未年季明候定免場も、此度右之樣を懸吟味、定免極直可被相伺候
一村方一村之分ニ而、御代官兩人支配之分者、一方へ片付可申候條、其段可被書出候、
一當年季明候分、幷撿見取之場所ハ勿論、去年相極候定免之分も、此度其村相應之御取箇極候上ハ、定免之年季、五ヶ年七ヶ年、拾ヶ年、拾五ヶ年にも極候樣可被致候、得心不仕、相應之御取箇程不增分ハ、年季を短く可相極候、
一只今迄ハ右之通吟味無之候ニ付、定免之年季切替候度毎ニ相增候儀と心得、其村相應之御取箇增兼候、此度ハ前條之通ニ而、相應之御取箇ニ候得バ、切替之節相增候儀ハ無之候得とも、只今迄之通り心得可罷在候間、此段別而可被申含候、依之當年切替候定免之內ニも、相應之免合ハ、其村方增無之候而も定免可相極候、〇中略

享保十三申年四月

〔牧民金鑑 六〕享保十五戌八月御書付

一田方四分以上にて破免之節、撿見取同樣に損毛相改引方可相立候、但四分以上割合之儀、高取米又ハ反別何れにて成共、四分以上損毛に當り候ハヾ、引立可申候、
一田方之儀、上方筋木綿作り候場所、損毛有之時、前々撿見取之格を以、吟味之上、四分以上損毛に當り候ハヾ、引方可相立候事、
一畑ハ麥作半毛夏秋作にて大豆、小豆、木綿、苧、粟、稗、菜大根、其外品々之分、半毛に立、取米永も麥作夏秋作等分に分置、麥作四分以上損毛之節ハ、麥作取米永之內にて引方相立、夏秋作四分以上

右同斷

一取米何程 たとへバ戌より寅迄五ヶ年定免

內田米何程
畑米何程

內米何程　酉年增

但右同斷

何國何郡
何拾ヶ村

右同斷

右之通、年季限りニ認メ、來ル廿日迄ニ御勘定所へ急度可差出候、以上、

子
十月

〔憲敎類典 五之四上〕享保六辛巳年閏七月

松平讚岐守
松平隱岐守 方へ相達候書付

一御年貢納方之儀、百姓に得心致させ、定免に極候樣、追々以可被申付候、

但只今迄高免下免地面不相應之所は、追々直し候樣に可被申付事、〇中略

閏七月

〔御觸并御書付留 一〕去年御取箇之儀、何れも出精被懸吟味、相增定免年季明候分も、御取箇前年季切替相濟、一段之事ニ候、御取箇も相增皆濟候儀も無滯宜候由被仰渡、夫ニ付猶又御取箇之儀被仰渡候趣、左之通ニ候、〇中略

一定免場水旱損等之損毛有之節、五分以上損毛ニ候ハヽ、引方相立候樣、先達而申達候得ども、四分以上ニ而引方相立候ハヽ、百姓くつろぎに可成候條、御代官吟味之上、其村相應ニ百姓心得候ハヽ、損毛四分以上ニ而、引方相立候積ニ可被申渡候、其村相應之御取箇を受不申村方ハ、先

平均合を見て破免を分る事

一縦バ三分以上より破免に立候ハヾ、上田ハ上田の當り合へ三分を乘じ候へバ、損毛合毛出る也、是を當り合の內にて減じ、殘合を以て坪刈合へ引合、對樣すれバ破免也、是ハ破免願の節撿見先にて可入事なり、

一又曰、坪刈不足成時の分合見樣、縦バ當り合壹升の時、此內三分ハ定式三合の損毛合也、殘七合と坪刈合對樣すれバ、三分一破免也、然る處坪刈合五合有此分何分の損毛と問、答曰、五分の損亡也、術曰、右殘合七合の內、坪刈合五合を去り、猶殘り貳合を實とす、法に三分の損毛合毛を三分にて除バ、壹分に付壹合宛也、此壹合を率として實を除き、貳割と成る、是へ定式の損毛分相三分を加へ、五分の損亡と知る也、三分ハ則三合なり、厘付反取にて分相を見るも同意なり、

〔牧民金鑑〕〔八〕寶曆六子年十月五日申渡　三郎右衛門文蔵達

定免年季譯御取箇辻書付　何之誰

たとへば申ゟ子迄五ヶ年定免
一取米何程

内　田米何程
　　畑米何程

內米何程　未年ニ增

但損地又ハ起返等ハ其斷書委細ニ可記

何國何郡
何拾ヶ村

右者何月幾日ニ伺相濟候、定免辻書面寫書上申候通、少も相違無御座候、

何國何郡
何拾ヶ村

たとへば酉ゟ丑迄五ヶ年定免
一取米何程

內　田米何程
　　畑米何程

內米何程　子年增

但右同斷

存候、一向ニ何方迄も定免ニハ、中々難成儀ニ而候、旱損場ハ莫太之損毛、先ハ無之候、水入場ハ年々見角大分歟小分、損毛各別有之事ニ而候故、一切定免にハ難成儀ニ而候、强而定免ニいたし候得ハ、甚及難儀候小百姓多御座候、

一定免ハ大百姓田地多持候ものハ、善悪之田地取交持候故悦候、小高持之ものハ、多ハ悪田持候故、定免ハ迷惑がり候得共、村中高持百姓共、定免に請負候故、不及是非候而小百姓も請候、仍甚不作之時ハ、小百姓年貢可納手段無之ものにハ、大百姓共申合候而、寄荷に而年貢ハ償とらせ候様ニもいたし候得共、渡世之入用ニ而寄荷候而取らせ候儀不仕候故、年を重候へバ小百姓困窮ニおよび候、如此に御代官も村方之内、所々分ケハ備ニ不存事にて、連々小百姓甚いたみ候而、潰およひ申ものも出來候故、右ニ付定免之儀、總體一様にハ中々難成筋ニ而御座候、此段ハ地方功者ニ而、村方之様子も能存、地方に随分厚心を用ひ、民間之事苦勞ニ仕、實に能はまり勤候御代官、心底不殘存寄之趣申上候様に、御尋被成候ハヾ、委細可申上候、其上ニ而定免ニ成候村方、定免ニ難成村方、能ゑらびゑらべ立候而、定免ニ仕候儀可然と存候、其上ニも前條之通、田方之不作多ときハ、撿見取ニ仕候様に不致候而ハ、平に行渡候儀に而ハ御座有まじく候、

〔地方落穂集四〕定免之事

一古ハ定免と云ハなし、三拾五六年以前享保年中より定免始る也、其節の免相に五分増を以て被仰付也、尤五ケ年三ケ年の年季を限り、三分以上の損毛の節ハ、破免引方被下筈の極也、然共田畑甲乙有之不决の場所ハ定免を不受、今に撿見取の村も多し、定免とは免を極め、年季の内三分以下の損亡に無貪着、定物成を納るを云也、年季明又々年季を切替る也、切替の度々吟味の上増方あり、定免にて難儀なる時ハ、願て撿見取に成也、併し最寄の撿見なくてハ、容易に撿見取りには難成もの也、

〔地方要集録〕一定。免。之事極候ニは、拾ヶ年之取箇平均を以、幾ツ之定免と、百姓相對を以極申候、定免ニ極候村方は、深山多無之儀候、定免に成にくき村を申付候得ば、小百姓之田地少く持候百姓困窮成候、地方の第一は小百姓、鰥寡孤獨を救候術を太切仕候、定免ニ而は此救成不申候故、小百姓甚痛候、總而定免ニ成候村方多くは無之ものに候、大百姓田畑大分持候百姓は、定免を悦び候事にて候、○中略

覺

一總而定免之村方不作ニ付、撿見取ニ致候儀、四分ほど之不作ニ而候得バ、可破。免。事候、然バ田方ハ年々豐凶、各別之儀有之事ニ候得共、畑方ハ二毛作三毛作候も有之付、田方とハ替り、四分程之損毛ハ、先ハ無之事ニ候、依之田方五六分之損毛有之候而も、畑方も押ならし候得バ、四分之損毛ニ不當候故、定免破候格ニ無之、左候得バ百姓田方多く、畑方少持ものハ、何共迷惑ニ候、仍而定免之村方、小百姓痛申事に候、且小百姓ハ能田ハ不持、惡田持候もの多分有之に付、右之通ニ候、地方之肝要ハ、小百姓相續候樣ニ救候儀、第一之儀に候處、定免に而ハ不作之時、小百姓及難儀候間、長久之仕方ハ、田方大分不作之時ハ、畑方ばかり定免ニいたし置、畑方ハ引分ケ、別免相應之取箇申付、田方損毛多持候ものを、救候樣に引方を立候而、鰥寡孤獨のものを救候術有之樣ニ仕度儀ニ而候、四分より以上之損毛ハ、撿見取と申候而、此四分通と申見分吟味之仕方、何とも能儀ニ難仕儀に候間、此儀隨分委細ニ吟味之至極を盡儀、專一之儀に御座候、

一定免に成候村方ハ、實事之吟味ニ而、先ハ澤山にハ無之事に候、定免に成にくき村方を申付候得バ、年を重候上にハ、小百姓段々及困窮潰候もの出來候故、公儀之御冥加ニ不宜事ニも可有御座候間、定免之儀ハ、御代官隨分入念候而、定免ニ致候而不苦村方計撰出、五三ヶ年程ツ・定免ニいたし、其上又二三ヶ年程ツ、撿見取ニ仕候而、樣子見合候上、定免ニいたし候樣ニ仕可然哉と

テ民其上ヲ怨コトナシ、此法則孟子ノ云貢法ニテ、夏ノ代ノ法也、孟子ハ龍子ガ言ヲ引テ、惡法ト云ヘドモ、彼ハ別ニ謂有コト也、日本ノ古ハ姑ク論ゼズ、當代定免ニ勝レル善法ナシ、觀取ハ甚シク民ニ害アリ、子細ニ代官ノ秋成ヲ視ルヲ、今ノ俗ニ毛見ト云、代官ノ毛見ニ往キ、其所ノ民數日奔走シテ、供具ヲ營ミ道ヲ除ヒ、館舍ヲ洒掃シ、前日ヨリ種々珍膳ヲ調ヘテ、其來ルヲ待ツ、當日ニハ莊屋名主杯云者、人馬肩輿ヲ牽テ境迄出迎フ、館舍ニ至レバ、種々ノ饗應ヲナシ、其上ニ進物ヲ獻ジテ、其歡樂ヲ極メ、手代等ハ云ニ不及、僕從ノ至テ賤キ者迄モ、其品ニ從ヒ、夫々ニ金銀ヲ賄ル、如斯スル其費、幾許ト云コトヲ不知、若少モ彼等ガ心ニ不滿アレバ、色々ノ難題ヲ以テ、其民ヲ困頓テ苦シメ、其上ニモ毛見スルニ及テ、下熟ヲ上熟ト云テ免ヲ高フス、若饗應ヲ厚クシ進物ヲ貴クシ、從者ノ賤奴迄モ賂ヲ多クシ、彼等ガ心ニ滿足スレバ、上熟ヲモ下熟ト云テ、免ヲ下クスル也、之ニ因テ里民萬事ヲ閣テ、代官ノ悅ベキコトヲ計ル、代官ノ毛見ニ往ク其利甚多シ、從者迄モ數多ノ金銀ヲ取、是皆上ノ物ヲ盜ム也、毛見ノ時ノミニ非ズ、平日モ民ノ許ヨリ、代官並ニ小吏等ニ賂ヲ輸ノコト頗ル夥シ、故ニ代官ノ輩皆小祿ナレドモ、富封君ニ等シク、手代等ニ至ル迄、僅ニ二三口ヲ養フ程ノ俸ニテ、十餘口ヲ養フノミナラズ、鉅萬ノ金ヲ貯テ終ニハ與力又ハ旗本衆ノ家ヲ買取テ、華麗ヲ極ル也、如是代官ノ私曲ヲナシ、民ノ代官ニ賄賂ヲ輸ス狀ハ、純（太宰）昔久シク田舍ニ住テ、親見聞シタルコト也、是偏ニ觀取ヨリ起レリ、民ノ痛ミ國家ノ害ト云ハ是也、定免ナレバ毎年ノ毛見ニ及バズ、定マレル免ノ如ク收納スルコト相違ナシ、然レバ民ヨリ代官ニ賂フコトモ無レバ、小民ノ役使セラル丶コトモナク金銀ノ費ルコトモ無、故ニ民ノ苦ミナシ、故ニ少シ高免ニ取テモ、定免ハ民ニ利アリ、毛見ト云コトナケレバ、代官ヲ置ニモ及バズ、代官ハ口米ト云コト有テ、許多ノ米ヲ上ヨリ賜ル、代官ヲ置ザレバ口米不出、是亦國家ノ利也、今世ノ田租ノ法、定免ニ勝ルコト無ト云ハ是也、大聖人禹ノ法ナレバ云モ愚成ベシ、

定免　破免

合　　　法金剛院領

田三段（地蔵講免）　米壹石八斗　神三郎

田壹反（同所鐘撞免）　米七斗五升　六郎丸（○中略）

田三段半（リヤウトリ）　米貳石壹斗　彥三郎

田三反（同所修理免）　米一石六斗五升　同人（○中略）

以上　田數貳町貳段六十步

分米拾三石四斗八升（○中略）

右打渡如件

天正拾七年六月八日　渦川平左衛門尉花押（三○以下名略）

法金剛院

〔紀勢和州御領分記〕諸士知行

一御藏入之村々ハ、古撿地高之通、御年貢納申候、諸士江被下候知行所ハ九十四年以前戌年五百石以上之知行所ハ免四ツ三分ニ當リ候積リ、五百石以下ヘハ免四ツ五分ニ當リ候積リニ、其村之前々十年平免を割返し、今高と極置、右之節より于今至、五百石以上ヘハ四ツ三分ニ當リ候村を渡、五百石以下ヘハ免四ツ五分ニあたり候村を渡申候

〔經濟錄（五食貨）〕凡年ニ豐凶アリ、五穀ノ登ルニ上熟、中熟、下熟アリ、覵。取。ト云ハ毎歲ノ秋成ニ、代官並ニ手代等ノ役人巡行シテ、穀ノ熟不熟ヲ覵テ、上熟ニ多取、下熟ニ少取、俗ニ之ヲメ。ン。ト云、代官巡行シテ見ル通ヲ、其領主ヨリ其年ノ免ヲ定テ、文書ヲ民ニ下シテ、租ヲ徵ス、之ヲ免。狀。ト云、免狀下テ免狀ノ如ニ收納スル故ニ、之ヲ覵取ト云也、定。免。ト云ハ、十年二十年程ノ內ニテ、上熟、下熟ノ中ヲトリテ、之ヲ定法トシテ、年々定法ノ如ニ收納スル也、上熟ノトキ多不出故ニ、下熟ノトキニ及

以上漆反廿代十八卜○中略

建武元年十二月日　　御代官尊爾（花押）

〔岩松家文書〕永德四年二月廿六日

澀江鄕目錄○中略

合貳町四反此内四段小せきめん、御○公○事○免○のぞく、以上一貫貳百三十七文分錢、

〔鶴岡事書日記〕佐坪一野兩村之內條々事

一阿彌陀堂免三反半安堵料事

一山守免年貢可ㇾ被ニ取進一事○中略

一早野數珠免兩年年貢可ㇾ有ニ取沙汰一事○中略

右悉可ㇾ被ㇾ致ニ其沙汰一之狀如ㇾ件

應永五年七月六日　　法印尙實

佐坪政所殿

當鄕堰免七段內壹段、靑戶入道雖ㇾ令ニ耕作一、於ニ年貢一者年々無沙汰之由、就ㇾ被ニ訴申一、召決之處、無沙汰之條承伏之上者、召ニ放下地一、如ㇾ元可ㇾ被ニ知行一、至ニ未進一者堅可ㇾ被ㇾ加ニ催促一之條如ㇾ件、

應永五年九月十日　　法印

矢古宇公文殿

一白髮免田參段年貢事、當年分可ㇾ有ニ執沙汰一之狀如ㇾ件、

應永五年九月十四日　　法印

佐々目鄕政所殿

〔周防國一宮領打渡坪付〕防州佐波郡大崎村內一宮領打渡坪付事

○按ズルニ、馬上免トハ騎馬ノ役ヲ免ジ、其役料ヲ徴シタルニ起リシモノヽ如シ、而シテ其他ノ免ト稱スルモノモ亦役ヲ免シ、料ヲ徴スルコトニテ、租率ヲ稱シテ免ト云フモ、亦此ニ出デシナラン、

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕同○元德四年○中略四月には祭禮可承繼之由、嚴密の沙汰侍て、馬上料足は京都の土倉にかけて、儉約の儀をもてつとむべき御沙汰侍けれ共、山門なを庶幾せず、又神輿を上奉て申ける程に、遂に差定をゆるされて、中申日は過て、廿九日にぞをこなはれける、

〔東寺百合文書タ一ノ四〕注進備中國新見莊東方地頭御方損亡撿見幷納帳事

備中國新見莊東方地頭御方段別事

合

一佛神田分

貳反廿代	山王免	赤子
卅代	尺迦堂免	同内
十代	大藏免	鈴上内
壹反十代	國主免	友清内
廿代	倉島神田	爲宗内
二反	妙見神田	重延内
五代	龍王免	宗道内
十五代	大歳免	延房内
十代十八ト	長福寺カチツキ免	同内

文治二年二月廿日

総判官代散位藤原朝臣在判

散位中原朝臣在判

総大判官代散位柿木宿禰在判

散位中原朝臣在判

目代　右衛門少尉大江在判

〔東寺百合古文書百三十五〕注進

若狭國東寺御領大良庄地頭御方御年貢算用狀事

合　文安五年分

一半分定肆拾漆石六斗八升五合之内

除

五斗　山王神事酒〇中略

三斗　拾田免

肆石參斗四升二夕　〇〇〇馬上免田島成、自㆓永享二年㆒三反大、間六年二中成る也

參石八斗　馬上免田川成、自㆓嘉吉元年㆒三反九十歩定、

肆斗漆升九合一夕六才　洪田不作分小卅歩定

漆斗五升　馬上免田川成、自㆓文安二年㆒成了、

一石五斗　妙蓮洪田分

已上拾三石六斗壹升九合三夕六才引之〇中略

右此旨僞申者、日本國中大小神祇、別者大師八幡御罰可㆑蒙候、

文安六年三月日　花押

へ貳石五斗を乘じ米に直し、高にて除厘に成、此故に右田取貳拾五石へ、畑取拾五石を加へ八にて除バ、田畑取米五拾石に成を高にて除、厘付を得る也、尤是ハ貳石五斗替五ッ成の法也、八にて除バ・二五を掛るも同意なり、

〔地方要集錄〕上方關東方取箇大法

一厘附之事を免といふは、元來壹反之石盛にて取べき筈にて、石盛は附たるものなれ共、左樣に出しては、百姓之作とくなき故に、石盛の米積りを免して取心にて免といふ、總て厘附之事を免といふことは、違たることとなれども、近來はたとへば三ッ五分之取を、今年は五分下げて三ッに取事を、三ッ五分を免して取といふ樣の心にして、三ッを免といふにより、元取の三ッ五分をも免といひ違たる也、壹反之石盛壹石五斗なれば、是を壹石五斗取は、スクミ取といふて拾五之取也、如是には取がたき故に、五斗免して壹石取によりて、五斗之免ニ而、拾の取といふべきを、十五をも免といふやうに、云誤りたる事也、

〔地方凡例錄三〕一田畑取箇厘取反取之事附免之發之事

一厘附を免と云事は、元來壹反之石盛丈可取ものなれ共、左樣に取而は百姓作德少く、難立行に付、定りたる石盛當りより免るして取ると云心にて免といふ、縱ば十五の石盛五ッの厘に而、七斗五升可取處、貳斗も免し、五斗五升取に致に付免と云、當り通七斗五升取れば、免と云に不及、

〔東寺百合古文書二〕太郎庄馬上免下文案

在廳下　藥師寺仕僧

可早開發無主荒野壹町伍段、引募當寺佛聖灯油料田事

右件料田東西兩鄕之間、開發便宜之荒野、且又爲馬上免、可引募狀如件、事既功德也、更以不可違失故、

此本米拾五石

内　貳拾五石　田方
　　貳拾五石　畑方　但田畑等分ニ五ッ成ニ分たる米也

一術曰、高百石に免五ッを乗じ、取米五拾石を得、田畑半々に分ケ、畑米貳拾五石と成べし、六分違の六を乗じ、取米拾五石に減ず、是六分違の法と成、又曰貳拾貫百石の積を以て見時ハ、畑高五拾石の元米貳拾五石へ六分を乗じ、減米拾五石と成、高五拾石ハ永拾貫文也、是貳拾貫百石の畑也、高の五石替と云是也、然れバ右減米拾五石ハ永拾貫文に對し見る時ハ、金壹兩に壹石五斗替に當る、今一五の法とするハ是也、是壹石五斗を實として元米直段貳石五斗替を以て除き、六升とするなり、

一或人曰、石盛の發りハ新田畑開發の年より、鍬下三ヶ年の間立毛を見べし、たとへバ壹ヶ年ハ坪刈合毛壹升壹合有、壹反三百歩へ乘じ、籾三石三斗也、五合摺にして米壹石六斗五升也、又壹ヶ年ハ坪刈壹升有、壹反に籾三石也、米にして壹石五斗なり、又壹ヶ年ハ坪刈九合有、壹反に籾貳石七升也、米にして壹石三斗五升と成、米合四石五斗を三ヶ年に平均する時ハ、壹ヶ年壹石五斗と成、是石盛の古法の由、又根取有、大體石盛の半分を用る、然といへ共上方筋の田畑宜、麥田多き所ハ、五分々々にても百姓不痛、關東ハ一體地面劣り、下地の所多故、五分々々にてハ麥田有之場所も、上方よりハ可及迷惑、況や麥田無之所ハ、及困窮候故、何れも四分六分の心當に用るなり、

厘付之法八之發之事

一厘付の法に、八を用るハ貳割半の法也、實に一を置、一ヶ二半ニ除バ八を得る也、此八の法を用る事ハ、縱バ田畑高百石の取米貳石五斗、五ッ成にして五拾石也、田畑等分にして、田取貳拾五石畑取貳拾五石也、然れ共田畑六分違の法有故に、一五の法を用ひ畑米を減じ、此米拾五石となるを實に置、四拾石を法として除之貳割半に當る、則外貳割半也、依て右に一を加へ一二五と成を法として、實に一を立、右法を以て除之八を得る、此八を法として用る也、高厘付を見るにハ、畑永

米八拾石五斗（午年分）　但五ッ七分五リン取

納合七百貳拾六石三斗四升二合　但三斗五升入

此俵貳千七拾五俵九升貳合　此外貳升出目共○中略

右は大禰宜上給戌ノ年ゟ午ノ年迄九年物成、社家百姓立合御勘定仕上申候、若相違ノ儀御座候ニおいては、重々仕置指上可ㇾ申候、仍如ㇾ件、

寛永八年未十月廿日　香取大宮司

百姓 清左衛門

同 作右衛門

御奉行所

〔石川正西聞見集 坤〕一淨和様（○松平康重）岸和田被ㇾ爲ㇾ取候時、木の島と申在所高免にて十。取にて御座候つる、其あたりの里々は、六。ッ七。ッ取にて候つれども、壹年に少しづゝ、取上候得ば、程なく木の島同前に罷成候、御臺所入の外も、年々に少づゝ、物成上り候て、八。ッ九。ッ取に罷成申候、俄に取ば上らぬものに御座候、

〔地方落穗集 二〕石盛仕出之事幷算法

一田。畑。六。分。違。といふは田高六斗は畑高壹石に當る、取箇は田米壹斗は畑米六升と同前也、依て田畑六分違と云なり上方は三分一銀納と云も、諸國色々の法何れも同意なり、

田畑六分違ひハ五の法發之事

六分違の法ハ五の發りハ、高百石ニ付五ッ成田畑取分より發るなり、委くハ左の通り、

高百石

此取米五拾石　高ニ五ッ取

候、御見付を可被遣候、仍如件、

慶長九年四月四日　　小河若狹花押

庄屋

年寄中

〔相州文書〕辰〇慶長九年之御繩之上定納之事

一田畠取合五ツ取之事　　富塚之郷

以上

右之分可有納所者也、仍如件、

辰九月廿三日　　彦坂小刑部判

富塚百姓中

〔香取神宮古文書纂六〕香取大禰宜上給勘定目録

一高百四拾石八升五合　　田畑辻

戌年分此取 米八拾六石五斗四升貳合　　但六ツ壹分八リン取

亥年分 米八拾九石六斗　　但六ツ四分取

子年分 米七拾九石壹斗　　但五ツ六分五リン取

丑年分 米七拾九石壹斗　　但五ツ六分五リン取

寅年分 米七拾五石六斗　　但五ツ四分取

卯年分 米八拾石五斗　　但五ツ七分五リン取

辰年分 米七拾九石壹斗　　但五ツ六分五リン取

巳年分 米七拾六石三斗　　但五ツ四分五リン取

て、此君の時代永久にあれかしと、佛神へきせいし、喜悦の外他なしと云々、○中略早雲子息氏綱時代に至ても、父の掟に相替らす、氏康時代も猶よかなり、

〔豐太閤大坂城中壁書〕御掟追加○中略

一天下領知方之儀、以二毛見之上一三。分。二。者。地。頭。三。分。一。者。百。姓。可レ取レ之、兎角田地不レ荒様に可二申付一事、

○中略

右條々於レ違二犯之輩一者、可レ被レ處二嚴科一者也、

文祿四年八月三日　隆景○以下人名略

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一國中知行方之儀、以二毛見之上一三。分。二。地。頭。三。分。一。者。百。姓。可レ取レ之、此旨百姓共及二異儀一者、地頭可レ任レ心、兎角田地不レ荒様可二申付一事、○中略

右條々於二國中一、自今以往可レ爲二龜鑑一之條、貴賤共令二信用一可二相守一、若一言於二相背一者、忽可レ處二嚴科一者也、依所レ定如レ件、

慶長二年三月廿四日　盛親在判　元親在判

〔小田文書二〕慶長九年佐西郡くしま村○安藝國相定物成之事

高千貳百石四斗八升五合

四。ツ。八。分。　物成五百七拾六石貳斗四升

内五石壹斗ハ夏麥拾石貳斗也

右之分に相定候、無二未進一納所可レ仕候、百姓中へ堅申付、作毛精を入可レ申候、當毛上中下におうしならしに可レ仕候、小百姓めいわく不レ仕候やうに可二申付一候、自然日損水損候はゞ、毛をたて置可二申上一

は、何頃より始しにや、何れの書物にも不見當、若享保年中色取撿見に成たる以後、始りたる儀にも有之哉、又天和貞享之頃追々の御政事も改りたる由、其砌より五公五民之法發りたるか、濫觴難不詳、當時は天下一統御料私領共、五公五民之取箇定法に成る、併上方筋兩毛作之分は、五分取に而も宜けれ共、關東は不宜、其上片毛作多く、麥田無之處、五分取に而は、百姓甚及困窮に付、四分取と心得、五公五民にても、撿見之節右之心得を以可有勘定事也、

〔北條五代記　四〕北條氏茂百姓憐愍の事

或老士語りけるは、早雲は、民百姓をれんみんし、慈悲ふかき故に、伊豆の國を治められたり、〇中略一人も殘らず伊豆の侍新九郎被官に候す、三十日の中に、伊豆一國治りぬ、新九郎收納する所は、御所の知行、わづか有計を臺所領に納、みな本の侍領知す、其上新九郎高札を立る、前々の侍、年貢過分の故百姓つかるゝ、由聞及びぬ、以來は、年貢五ッ取所をば、一ッゆるし、四ッ地頭おさむべし、此外一錢にあたる義なり共、公役かけべからず、もし法度を背くともがらあらば、百姓等申出べし、地頭職を取はなさるべき者也と云々、是によて、百姓共よろこぶこと限りなし、他國の百姓此由を聞、あはれ我等が國も、新九郎殿の國にならばやとねがふと云々、早雲諸侍をいさめていはく、國主の爲に民は子也、民の爲には地頭は親也、是わたくしにあらず、往昔より定れる道也、いかでか憐みをたれざらん、世澆季にをよび、武欲ふかふして、百姓年中の耕作を撿地し、四ッもなき所をば、五ッといひかけて取、此外夫錢棟別野山の役をかけ、あらゆる程の物を押て取、分際に過たる振舞をなし、花麗に心をつくし、米穀を徒についやす故に、百姓苦しみ餓死に及ぶ、是によて、早雲今定る所、年中收納する穀物の外に、一錢にあたる義なり共、百姓にいひかけすべからず、諸役有免せしむるにおいては、地頭と百姓和合し、水魚の思ひをなすべし、早雲守護する國の百姓、前世の因緣なくして、生れあひがたし、ねがはくは民ゆたかにあれかしと、申されければ、民家聞

古事類苑 政治部七十九

下編

田租二

〔地方要集錄〕覺

一四分上納、六分作德と申事、古來之定法ニ候得共、當時ハ大方五。分。宛。之積ニ候、然ども是等之儀も、一概ニ申盡がたし、功者之入候儀ニ候事、

〔地方凡例錄〕三一五公五民之事

撿見之法ニ五。公。五。民と云事は、其年之出來米を公儀地頭江半分、百姓作德半分取るを云、籾は五合摺之積に付、有籾を四に割ば則取箇辻になる、假令ば籾拾石有り、五合摺にし而米五石、此半分貳石五斗は公納、貳石五斗は地主作德に成る、往古は四公六民に而、四分年貢に納、六分作德なり、〇中略上古は稻束數を以納め、纔ニ二。十。分。一。にも及ざる朝貢なりしが、保元平治の兵亂以後、上古の法は廢絕し、國に守護、庄園に地頭を被置、兵農分てより、諸國租稅の法大に變じ、上田は六分地頭江納め、四分百姓取、中田は四分年貢、六分作德、下田は貳分地頭江納、八分百姓作德とす、平均して地頭四分、百姓六分を取、地。頭。四。分。ノ。內。一。分。は朝家の租稅として國用を足すと、古書にも見えたり、其後諸國分裂して、朝家の租稅も疏にならざる樣に成て、國々一樣には有ざれ共、大概は似たるべし、四。公。六。民。と云事、此時代の言葉を云傳ふなるべし、亦秀吉公時代諸國一統に成りての法は、地頭三分一、百姓三分二とあれば、是も大底四分六分より少し年貢弱し、今の五公五民の法

吉野村田四丁六段五代　　分（段別五一田）鐵二百卅一田二分
三斗代田四丁九段廿五代　　分米十四石八斗六升五合
已上御米五十七石四斗六升五合
右御總撿作田目錄注進如件
文永八年七月日　　公文大中臣重高花押（〇以下人名略）

分絹

分鐵

吉弘左近大夫

岡小田伊豫守殿

〔東寺百合古文書三十一〕注進大國御庄勢〇伊色々濟物事

合

・御年貢田(本家進物)拾三町參段三十五歩

分絹貳拾貳疋貳丈貳尺餘(三段別四丈定、四丈別五百文定)

代錢試拾貳貫貳佰七十五文(〇中略)

右注進如件

應治貳年五月十三日　公文沙彌生阿判

〔備中國新見庄作田目錄〕備中國新見庄文永八年(辛未)御總撿作田目錄事

合作田玖拾捌町玖(〇玖下恐脱段、)三十五代十八歩

本田分陸拾伍町柒段十五代(〇中略)

殘定田四丁四段十五代

吉野村田五丁四段卅代　分鐵(段別五一田)二百七十三一田(〇一田二字恐節字誤、節即斤字、下同、中略)

一出田分合參拾三丁二段廿代十八歩(〇中略)

殘定田二十五丁一段卅五代十八歩

右作出田十五丁六段五代

吉野村田四丁九段卅代　分鐵二百卅八一田

四斗代田十丁六段半　分米十四石八斗六升五合

油池新田九町五段卅代十八歩

一上田二段　分銭三百文　宇曽
一中田一段　分銭百文　馬場表
一中田七畝　分銭六十文　かりた
一下田壹段　分銭五十文　野田口
一中田六畝　分銭六十文　松田脇
一上田六段　九百八十文　用作
一中田八畝半　分銭七十文　宇せ田
一下田二段　分銭二百文　かやた
一上々田二段半　分銭四百文　東ノ川原
一上田六段　分銭壹貫文　西川原田
一下田四段半　分銭九百文　丹入田
一下々田三段半　分銭百五十文　市田
一下田二段廿　分銭二百文　上市口
一下々田九段　分銭壹貫文　山ノ脇

以上

上畠二段半　分銭百文　原ノわき
一中畠三段半　分銭八百文　下宍原
一下畠二段半　正月田　上ノ原
一下々畠一段半　正月田　下ノ原
一中畠一段半昔職免　石谷
一下畠二段　分銭三百文　石田
一下畠貳段　分銭百文　柿ノ木本
一上畠五段半　分銭壹貫文　四良田
一中畠二段三十　分銭二百文　下市口
一下畠三段　分銭四百文　上市口
一下畠五段　分銭八百文　吉原口
一下畠五段廿　分銭七百文　白石
一中畠一段半　分銭八十文　長田道添
一下畠二段廿　分銭百文　赤田口
一中畠四段廿　分銭五百文　爲成田
一下畠五段　分銭七百文　たうやしき
一下々畠三段半正月田　空田尾
一中畠壹段半正月免用作　空原
一下畠二段半廿　分銭百八十文　市持口

以上

天文十八年丑八月廿五日　丹生田丹後守年次

同人

堀跡田數九反（分錢貳百廿五文之内　中分百十二文納、乙亥年分、）

同所

丙子年分（中分百十二文　丙子年分〇中略）

泉水五郎右衛門跡分

泉水田數壹町壹反（分錢二百七十四文、　中分三十七文納、壬申年（明應三年）分、）

同所癸酉年（〇明應四年）分　同前納

同所甲戌年（〇應永元年）分　同前納

一泉水與三兵衛入道

泉水田數貳反（分錢二百文丙子丁丑〇應永、三四年　中分百文納、戊寅己巳（應永元年）合四箇年分、）

一平河新兵衛入道殿分、

えのづか田數三町三反三百三十歩（一箇年分錢八百五十文　内四百廿五文納、卯年分、〇中略）

一平河左衛門四郎殿分

えのづか田數三町二段（一ヶ年分錢八百文之内　四百文納、卯年分、〇中略）

應永十七年八月十日

〔豐後國高田名知行坪付〕豐後國高田名門田邑知行坪付分錢三拾貫文内

一上田四段半　分錢六百二十文　爲成本　一中田二段　分錢二百六十文　地藏免

一下田一段廿　分錢百十文　外川田　一中田二段廿　分錢百七十文　吉松

一上田七畝　分錢七十五文　田成高　一下田壹段半　分錢八十四文　石黑

一下田四畝廿　分錢四十八文　中野　一下田四段　分錢九十八文　藏松

應永十七年庚寅卯月七日

希勝花押

忠久花押

〔香取神宮古文書纂六〕香取御造營料足事、拾四ヶ年分、可致催促由、被仰間、應永十三年戌丙□月日、以切符相觸候內納帳、〔○中略〕

圓城寺源內左衞門殿分

椎名田數四町六反大分錢壹貫百六十八文內、半分定伍百八十四文納、

壬申年〔○明德三年〕分　納日十一月廿五日

同人

椎名田數四町六反大分錢壹貫百六十八文半分伍百八十四文納

癸酉年〔○明德四年〕分同日〔○中略〕

同人

牛尾田數四反分錢三百文之內百五十文納

壬申癸酉甲戌〔○應永元年〕三年分同日

三谷兵庫殿分

中澤田數六町三反小分錢壹貫五百九十四文之內、半分七百九十六文納、丙子丁丑年分、

同所丁丑年〔○應永四年〕分半分七百九十六文納

同人

おどろがうや田數壹町一反大分錢貳百九十三文、半分百四十六文納、辛巳年分、

同所

壬午年〔○應永九年〕分貳百九十三文內半分宛百四十六文納

彌二郎家内

一字（田一丁不作　畠一丁八反三百歩）　分錢八貫五百文　彦七出作

一所（田二丁七反、一丁四反半不作、一丁三反見作、　畠一丁三反内、一丁見作、三反半不作、）　分錢九貫五百五十文

以上田四町七反内（二丁四反不作　二丁三反見作）

畠拾町八反小内（三反不作　十丁五反小見作）

以上御年貢四拾四貫五百五十文定

都合百十七貫五十文　御徳田西東分一〇（此行以下至二以上分錢二十　貫六百五十文、十行恐衍）十

此外諸給分之事

にしかた柏木家内

一字（田五反内二反不作、　畠九反三反見作、）　分錢四貫五百文　岩崎給分

ひがしかた

一所畠五反　分錢貳貫文　定使分

一所田五反　分錢二貫文　同分免

一所一丁　分錢三貫七百文　政所給分

一所七反　分錢二貫四百五十文　せき免

一七貫文西東みけんの御公事免

合（田一丁七段内二段不足　畠一丁七段）

以上合分錢二十一貫六百五十文

都合（田十四町九反内三丁二反不作、　畠三十丁一反六十歩内一丁二反不作、）

總都合御年貢百三十八貫七百文内百十七貫五十文上へ定まいる分

廿一貫六百五十文諸給分御公事免共

此外佛神田

合田畠十三丁半

合田七丁五反内八段不作、六丁七反見作、畠十七丁八反三百歩内九反不作、十六丁九反三百歩見作、　分銭貳貫百文

以上御年貢七十二貫五百文定

同郷東方目錄

都合百拾七貫五十文　御德田西東分

此外諸給分之事

にしがた柏木家内
一字田五反内二反不作 畠九反内三反見作　分銭四貫五百文

ひがしかた
一所　一丁　分銭三貫七百文　政所給分

ひかしかた
一所　畠五段　分銭貳貫文　定使免

一所　田七反　分銭二貫四百五十文　せき免

一所　田五反　分銭二貫文　同じ免

一七貫文　西東みけんの御公事免

合田二丁七反内二反不作 畠一丁四反

以上合分銭二十一貫六百五十文

彦二郎入道かき内
一字田七段 畠一丁八反半　分銭五貫文　はんしやう 孫太郎

此外二貫五百文御公事免

十郎二郎かき内
一字田三反 畠二丁七反　分銭九貫五百文　同人出作

いしわらかき内
一字畠壹町二反　分銭五貫文　はんしやう 孫五郎出作

あみだかき内
一字畠一丁六反　分銭七貫文　同人出作

〔岩松家文書〕上今居〇新田庄内地檢地目錄之事〇中略

御料所西方

一宇畠九反半 分錢四貫文 御ざいけ源内太郎

ひやうへかき内
一宇田一丁五反半 畠一丁七反半 分錢十貫文 同人

此外二貫五百文 兩在家御公事免

一宇田一丁 畠一丁 分錢七貫文 御ざいけ二郎太郎入道

道まうかき内
一宇畠一丁八反 分錢六貫百文 同人

此外二貫文兩在家御公事免

衛門三郎給分

孫三郎かき内
一宇田八反 畠一丁半 分錢五貫六百文 出作分

七郎五郎かき内
一宇田四反 畠一丁三反 分錢八貫文 己作 五郎作分

松木かき内
一宇田一丁一反 畠二丁 分錢十貫八百文 出作

一宇田八反 畠壹丁二反 分錢五貫五十文 こんまやう孫五郎

はりまかき内
一宇田三反不作 畠一町一反三百歩 分錢貳貫九百文 出作

左近太郎給分あみかき内
一宇田七反半 畠一丁四反半 分錢五貫六百文 出作

なしかき内
一宇田九反内 五反半不作 四反見作 分錢貳貫九百五十文出作

十かき内
一宇畠七反 分錢貳貫三百文 出作

一宇畠一丁六段 九反不作 七反見作 作入

一三段半　分錢壹貫五十文　太郎二郎入道
一壹町　分錢貳貫七百文　江田御坊
一五段（此内半不作）　分錢壹貫三百文　了實
一二段　分錢六百文　孫八入道
一二段（六斗不作）　査七
一五段（此内四段半不作一段開）　分錢貳百文　又三郎入道
已上田數九町半、分錢貳拾壹貫三百五十文、
同所畠方
一八段　分錢壹貫六百文　木部
一三段　分錢六百文　六郎二郎入道
一八段　分錢壹貫五百文　江田御房
一壹段　分錢貳百五拾文　孫八入道
一壹段　分錢貳百文　孫三郎入道
一六段　分錢壹貫文　江田孫六
一四段　分錢八百文　江田六郎五郎
一壹段　分錢貳百文　査七
已上畠數三町二段　分錢六貫百文（十合定）
合田畠拾貳町貳段半　分錢
都合貳拾七貫五百文定
明德五年甲戌八月廿七日　國政（花押）

澀江鄕目錄○中略

合貳町四反此内四段小せきめん、御公事免のぞく、以上一貫貳百三十七文分錢

　領家方　　きやうみち作

一字田壹町一段此内二段四十歩せきめん、御公事免のぞく、以上分錢参貫五百五十七文、

　仁木方　　淨法作

一字田貳町八反此内四反大せきめん、御公事免のぞく、分錢九貫六百八十文、

　たうえ方　　左近五郎作

一字田壹町五段此内貳反半せきめん、御公事免のぞく、以上分錢五貫文、

　立河方　　七郎分

一字田貳町此内六反田成、三段、小せきめん、御公事免のぞ以上分錢五貫百五十文、

　立河方　　かくねん分

一字田三段此内一段のぞく以上分錢六百七拾七文、

一散在

　立河方　　阿久津役分

　田壹町五段此内一段半のぞく以上分錢五貫四百文

一橫山役分

　田六反六百四十文せきめん一段田成島、以上分錢壹貫九百文、

〔岩松家文書〕新田庄江田鄕内得河方目錄

一四町五段　　分錢拾貫三百文　　又三郎

一壹町八段　　分錢伍貫二百文　　木部

嘉暦三年戊辰九月日

右所定如件

至徳三年丙寅大才六月日書之畢

案主花押○下略

合

分雜穀

〔東寺百合文書ク一ノ四〕注進備中國新見莊東方地頭御方損亡撿見幷納帳事

一宗道名分

定田八段廿代

分米四石九斗五升内

損田參反半　分米貳石壹斗

得田四反卅五代　分米貳石八斗五升

里畠壹丁貳段十五代

分雜穀參石六斗九升内

損田卅代七口　分雜穀貳斗口口口口

得田壹丁一反廿代廿九卜　分雜穀參石四斗四升四合

山畠八反十代十八卜

分雜穀八斗貳升五合内

損田四反五代九卜　分雜穀四斗壹升貳合五夕

得田四反五代九卜　分雜穀四斗壹升貳合五夕○中略

建武元年十二月日

御代官尊爾花押

分錢

〔岩松家文書〕永德四年二月廿六日

分籾

清和院領攝津國都賀庄今南下司職、尾張國荒木郷、播磨國這田庄内重國郷、山城國下久世賀茂田、近江國蚊野庄上分米等事、早任當知行之旨、寺家領知、不可有相違之狀如件、

應永廿六年四月十九日　　　　　　　　　　內大臣源朝臣花押

〔陸奧國好島浦田檢注目錄〕注進浦田正和三年甲寅撿注目錄事

得田五町六段四合〇一合ハ一歟ナヲノ十二歩內新斤二丁九段四合

本田四町壹段七合十二歩內新斤加之、御年貢廿甲反、

御年貢帖絹四疋　合四反七合十二歩

口籾田四町七合十六步

分。籾。六石三斗一升六合五夕反別一斗五升五合定

右目錄之狀如件

正和四年二月十五日　　　　　　預所代沙彌覺乘

〔香取神宮古文書纂八〕一七月一日

錄司代名二段、次郎三郎、〇中略

已上三丁二段六十步、分籾壹石六斗五升、

一同初酉

吉直二段、判官代今者大井八郎跡織幡、〇中略

已上、分籾壹石八斗四升、

一八月一日

三郎祝〇中略

已上、分籾壹石九斗□□□□

三丈　　分米　　五升　　秦二郎
四丈中分米　　一斗已未進　　本智御房
四丈中分米　　一斗一升　　常乘御房
三丈　　分米　　七升　　刑部二郎〇中略
三丈　　五升　　源七〇中略
一段一丈分米　　四升　　宗太〇中略
右御寄進新開田撿注取帳如件
文和五年丙申九月廿一日
〔東寺百合古文書百七〕一山吹屋敷幷藏後畠八條蘭田等
合
一藏後畠口八丈内南堀一丈除也、奥九丈内西藏一丈除之、
以上定殘五十六坪分米三斗四升九合二才、一坪別六合二夕五才定、
一坊敷　口八丈　奥十五丈
以上百廿坪　分米七斗五升
一次廊西廊屋敷口三丈奥六丈以上八坪分米一斗一升二合六才
一八條蘭田半内屋敷一、殘蘭田三分二分米二斗定損亡一斗三升三合三夕除定
都合壹石四斗一升一合八夕内次廊四廊分者可二直納一者也
殘壹石一斗九升九合二才可レ辨レ之
應永十年十二月廿十一日
〔集古文書十六判物〕勝定院義持公御判物、京師清和院藏、

田數陸町玖段小拾步
除貳町肆段參佰肆拾步○中略
定田肆段半
御所跡　一段小卅步 七斗五升代
分米一石四升一合
御苽下地　大
分米一石
四斗代　一丁三段半卅步
分米六石四斗九升七合 交分加定
參斗代　二丁四段三百廿步
分米九石一斗三升四合三夕 交分加定
貳斗代　三段三百卅步
分米九斗四升二合四夕 交分加定
已上拾捌石陸斗壹升肆合陸夕 中略
右大概注進如件
文和貳年五月日　下司清豪

〔筑紫文書〕注文和五年丙申鏡宮御寄進北牟田新開田撿注取帳
合
一所御行大路西傍一町五段內
四丈　分米　一斗一升 未進一斗二升　木引 刑部太郎

胤明田政考曰、貫代ノトキ、タトヘバ段ノ地ヨリ錢三百文、或ハ二百八十文ヲ出スヲ、ブン錢ト唱ヘタリ、今分米ト稱スルモ、貫代ノ時ノ遺言ト知ルベシ、秀山(○小宮昌秀)按ニ、二說予ハ信ゼズ、殊ニ類說ハ鑿テリ、予思フニ分米ト云フハ、上エタテマツル分ノ米ト云コト、得分米ト云ハ自分ニ得ル米ト云コトナリ、猶今取米ト云フガ如シ、東鑑建久四年ニ、伊勢國三日平氏跡、新補地頭等募武威停止太神宮御上分米之由、本宮訴申之、彼地者當國散在田畠也、平氏雖領地下、於上分米者備進本宮之條、所見分明之間云々ト見エタリ、又檜垣兵庫家文書ニ、應永廿六年、新御寄進田地三反分米九斗、又永正五年ニ、岩田御園當年上分米之間事ト見エタリ、得分ト云ハ、東鑑脫漏ニ地頭得分之內ト云文見エタリ、又得分錢何十貫ナド云、藥王院文書等ニ多クアリ、一反ブンヨリ得ル錢ト云コトニハアラズ、上分得分ノ分ナリ、コレラヨリ轉ジテ、今ハ高ノコトヲ分米ト云ヘルナルベシ、

〔氣比宮社傳舊記〕上　氣比太神宮政所

注進　御神領作田所當米已下所出物等總目錄事(○中略)

定田十三町一段百八十步(加大宮司佃一丁定)

尊家稱嶽田一丁一段(已石代)　分米十一石交分三石三斗(加領家)

殘十二町百八十步　分米九十六石四斗(○中略)

右當社一年中所當米已下所出物等、且依往古例、且任當時辨之實、註進如件、

建曆二年九月日　勾當衆金宮祝散位角鹿(○以下別當行事檢校五人署名略)

〔東寺百合古文書〕(百二十)東寺御領山城國上桂上野御庄注進文和元年作田所當米御散用狀事

合

一本庄分

分米

れ共、元來致撿地たる時ハ、先ヅ反別を極め石盛を附、壹段之取米何程と反取ニ而最初ハ極め、夫を高に割厘取に成、仍而厘取之場所に而ハ、幾ッ何分何厘可毛之免則厘取也、然ル處右に如申、享保以來色取撿見ニ成り、根取ハ入用になく潰たれ共、元來根取之無き村とてハ無之處、一向居村之根取を不知村役人共多し、定免村に而ハ縦バ三ッ五分之定免に極れバ、則三ッ五分が根取免也、又根取を斗代と唱る處も有り、又反取と云ハ、撿見に而取米多少ニ隨ひ、壹反之當りを反取と云、根取ハ上中下の位に應じ、古來より極り有之取米辻を根取と云、反取ハ當座々々の反當りを中に而、譯違ひたる處、根取反取同様心得たる族も有り、間違之事也、

〔地方落穗集四〕分米高辻と云事

一分米と云ハ、反別に其位切に石盛をかけ、上の分米何程、中の分米何程、下の分米何程と、夫々の米を仕出すに付、分米と云、○中略都て寄付集たるを辻と云、或ハ高辻、米永辻など丶云也、此辻と云ハ會の字たるべきなり、辻ハシンの辟也、四ッ辻と云ハ會の字を用る、集ると云儀也、高辻と云も高の集たる也、辻ハ其謂無覺束、後の哲人に問べし、

〔地方凡例錄一〕石高之事附分米之事

一分米と云も石高之事なれ共、總村高を分米とハ不云、一村之内ニ而上中下所々之畝歩之高と云時、此分米何程と唱るなり、是も書付帳面等ニ高を本行ニ書、脇書に此反別何程と書時ハ、分米とハ不書、高何程と書く、反別を本行ニ書、脇書ニ高を附るに、此分米何百何拾石と書事也、一體高之事を分米と唱ふるハ、一村之內所々の畝歩之分ニ、掛りたる米を附るといふ心にて、分米と唱ふる也、

〔農政座右二〕石盛　斗代　分米　分錢

又曰、○田圃類說分米ト云コトハ、上中下田畑夫々ノ分ノ高ト云心ニテ、分米ト認ムルナリ、○中略高倉

反を改、上中下に盛と云事を定め、石代と名付、一村切の高辻を究、譬へば上田壹反歩十二、中田十一、下田十と言が如し。○下略

〔地方要集錄〕大島古心へ認遣し地方之事問に答候書付扣

御取箇之儀に付根と申來候事ハ、關東方ニ而ハ上田壹反歩之石盛十五と申ハ、分米壹石五斗ニ而候を、四歩取之積ニ而、取米六斗ニ當候、是を根取と申候、中下田も此極ニ准候、古法之取ケハ四分上納、六歩作德と申傳來候得共、いつとなく取上候、當時ハ五歩上納ニ成候所々多く、壹石貳斗之石盛を五歩取之積七斗五升を根取と申樣ニ成候、然共七斗五升當候田方ハ、稀有成事ニ候、因之御取箇之吟味に、近來根取之儀沙汰無之、前々より取來候反取を格にいたし、年々豐凶を以勘辨之上、反取增減仕候、關東方ハ古撿之村方に而、石盛不相知候村々もいかほども有之故、根取之儀總樣ニハ難取用候、前々より反取を以、御取箇吟味仕候事にハ、關東方ハ畑方取下免に候故、田方之取高免に成來候と申候。○中略

九月　辻六郎左衛門

〔地方凡例錄〕三一根取反取之事

根取と云は、元ハ直ニ村高之事ニし而、石高之始にハ此名目なし、籾納め止み米納に成て、籾高ハ石高に應じ村高と成り、取箇ハ籾を摺立米納に致故、籾之善惡に隨ひ、米の多少有り、夫より厘附も始り、取箇之目當にせしより、根取之名目始りし也、今の根取とするハ、田畑共撿地石盛極りたる時、壹反ニ取米何程と極るを根取と云、縱バ上田石盛十五、是を五ッ取ニ而、取米七斗五升と極、中下下々共石盛貳斗劣りニし而、取米定メ置ハ根取と云、關東ハ上中下を分け、反取極り有之、畝引撿見之節ハ、損毛ハ畝に而引、根取米ハ動さず、位限り反當り之根取米掛ケしか共、今色取に成而ハ根取ハ不用たりといへ共、根取米村々に定り有之、上方ハ厘取ニ而、今反當り之根取ハなけ

一石盛を見るにハ、其村の上中下反取米を拾ヶ年分平均、たとへバ上田反取四斗八升ならバ、干減貳割引四分取の積りを以て籾に直し、此籾三石と成、是則壹反の有籾なり、是を干減貳割相立貳石四斗と成るを、五合摺にして壹石貳斗と成、是拾貳の盛也、中下も術同斷、但し盛ハ貳ッ下りたるべし、又反取により貳ッ下りにて、當らざるも有べし、是等勘辨の上前後見合差略有事也、大法右の通りといへども、作の外山野海川產物餘慶の助成、又ハ市場河岸場等の所務利害損益に隨ひ、定法の外增減勘辨多し、畑方ハ前に記す如く、中田の盛を上畑に用、是貳ッ下りなり、

一根取ハ右拾ヶ年平均の反取を以て、壹反の籾を仕出、五合摺四分取にして撮取を極るなり、是又其所の得失に寄、增減勘辨有事なり、

註曰、本文反取米四斗八升を四分取の米と見て、是を段々元へ返して、籾三石を得る、是壹反壹升の有籾也、術曰、四斗八升を四分取の四に除き、元米壹石貳斗と成、是へ二を乘じ籾貳石四斗と成を、干減貳割を戾し、八にて除、元の籾三石となるなり、

〔勘定所指出方勤方心得書〕一越前國下免之事

是は都而石盛高ク、上田ニ而は四十五六位之石盛之地面有之ニ付、取米を高ニ而割合候而は、何れも下免ニ相當り申候、御取箇吟味之節も、外見合等ニも、右之趣相心得取計候事、

一能登國折返之事

是は松平加賀守御預所、前々ゟ國法ニ而畑田成ニ相成候場所、折返し之義、土地ニ寄三折四折ニも相成候、縱令畑之石盛五ッ有之候得者、三折ニ致し候得ば十五、四折ニ候得ば廿と成候、右之通石盛相增候故、畑田成ニ相成候得ば、自然と高相增申候、尤田畑ニ相成候節は、右之趣を以高減候分者、右間引ニ相立候事、

〔極秘錄〕慶長九辰年撿地入て、城付は城主自身撿地差出候高、御領は伊奈備前守家次爲總奉行、町

一石盛に右の法を立と云へ共、一向に如此五分五分と分るにもあらず、右ハ石盛仕出の根元にして、是より次第を分る也、繭田麻田麥田等の上田を、五分摺五分取にとり分る也、其法土地の善悪土性の高下に随ひ、石盛の仕出品々有、四公六民に分る時ハ、十五の盛根取六斗也、又壹反壹升毛の籾を干減、貳割引貳石四斗と成、五合摺にして壹石貳斗也、是十二盛也、是を五分々々に取、根取六斗と成る、又四分六分に分け、四斗八升を根取と定るも有、是ハ其土地に應じ、色々勘辨の上執行也、石盛の取仕出し様、右の通りなれ共、前に云ごとく、土地に付品々の利害得失を考へ立る也、又土地に付助成有所ハかぶせ盛とて、土地の助成を見込て、石盛を高くする事も有、是も河岸場市場土地より出る産物等、其外助成に可成事を見込なり、既に甲州市川大門村と云有、尤土地も宜く、田畑立毛格別吉、其上紙を漉出し糸綿等を出市場にて、大金を取捌く村也、石盛三十六也、千石餘の村なれ共、境内いと狭し、又合毛の内を減じて、石盛を結ぶ所も有、格別土地に甲乙の品多けれバ、何段にも名目を付、石盛を次第する也、か様の處ハ上地の場にはなし、

一總て根取ハ五ッ成に取法也、五ッ成ハ五分々々の法に同じ、然ながら田畑六分違の謂を以て、田畑厘付平均五ッの時ハ五ッ成に取、實は四ッに當るなり、

一石盛の段ハ所に寄一様ならね共、先ハ上中下何れも二ッ下りの法也、然れ共前に記す如く、地面土性立毛出來方次第たるべし、右體土性に段々有物なれバ、二ッ下りと心得べし、併し格別飛違ひたるも有べし、畑方石盛ハ、田方と六分違成べし、但石盛二ッ下りと云依て、田と畑とも二ッ下り也、されバ中田の石盛上畑に當る也、夫より二ッ下りにして、畑石盛を極る也、然れ共直に中田の石盛を、上畑に用るハ誤り也、依てから高と云取箇の法も心得同じき也、田畑六分違の法を用ひて、畑石盛を仕出すべし、

〔地方落穂集三〕拾ケ年平均ニて石盛根取仕出之事

ともに、高に結ぶと云ふ事なし、

一石盛を定る事、先ツ土地の位を定る事第一也、土に品々有、其一品の内に甲乙有、然れども其類を集、土性の位に准じ、其村切に上中下三段に極る事を、三段の内に偏り難きハ、下々田悪地と段を極る也、右類を集内にハ、一段と云とも出來方甲乙有べし、上土と云共、用水の掛引に難有り、悉く遠所にて、肥手入不自由なる場所、又ハ東西を塞ぎたる陰地ハ、中下の位にする事も有り、又土性不勝ども、家居近所か用水掛自由の所ハ上の位にする事有、如此の儀に付一段の内同位にして、壹升貳合の立毛もあり、亦壹升或ハ九合八合出來るも有、此三段を平均し、其中分を以て、其位位の石盛を仕出す時ハ、甲乙なく、凡石盛を仕出す法、一より起て一に歸す、土の位上中下と分つ時ハ、上の位を指て一とする、上田壹歩に生る所の籾壹升として、高石盛を仕出す、是を以て百千万の石高を積り上る、縱バ器物に積重たるを盛と云意味にて、石高を積り上るを石盛と號すと見えたり、右壹升の籾を以て石盛を仕出す法左之通り

上田壹反歩　　壹升毛

此籾三石

此米壹石五斗　　但五合摺の積り

是を石盛とするなり

内　米七斗五升　　公納

米七斗五升　　百姓作徳

是を五公五民の法と云、公納七斗五升十五盛の根取米とする也、今世上地方に七五の法と云ハ是也、五分取の法に用る、

右ハ高五ツ取の厘取に當る也、都て五ツ取を以て、地方の法の元とす、

有之候、上方五畿內之事ニ而ハ、大和國など壹段之石盛貳拾五六、關東方甲斐國など貳拾七八、北國越前國など三拾七八迄之石盛有之國々ハ、坪刈籾之積りニ而極候石盛ニ無之候、如此之甚高き石盛を、五分取之根取ニ可用樣無之事ニ候故、根取之沙汰ハ、御取箇吟味之儀ニ正敷事にハ難定候、○中略

九月　辻六郎左衞門○中略

一石盛之事

是ハ上田坪刈平均を考、縦バ壹坪壹升之時ハ、壹反歩ニ三石なり、五合ずりにして壹石五斗と成、此壹石五斗を十五之盛と積る也、下にも同前、分米といふは、十五を上田之反別へかけ、何拾石と出る、是を上田之分米といふ儀也、中下も同く畑方とも取集候米を、何百石といふ但五百石取と云ハ、田畑とも米五百石作出る所を、上下といふ事也、關東畑方石盛ハ、貳石五斗代之定法を以、永百文之所へ五ツ之盛、貳百文之所ハ十之盛と極る也、是ハ百文ニ貳石五斗をかけ貳斗五升、是ハ公儀へ取分也、是ニ百姓取分貳斗五升入五分となる、其故五分々々といふも是より出る、大概如是、撿地之上石盛を極るニハ、此勘定計ニもなく、大ニ口傳也、扨又永壹貫文を五石高と極る事ハ、小物成高を詰ニ用、此五石ハ千坪之場、大概上田分米十五之盛と見而、千坪へかければ三反三畝拾歩也、五石となる、是より出たる事、小物成、米一石を高ニ詰時、貳石之高ニすへ、貳石之高壹石を割五ツ成、永も同斷、

〔地方落穗集〕二石盛仕出之事幷算法

一石盛斗代を、積る事、古人井田の法を考へ、其國々所々の土地善惡、幷利害損益を勘辨して、山野海川共に貫高石高の法を立、高に結び、後世の掟とす、上方に三分一銀納と云有、關東に貳石五斗替の法有、又永の四割替、高の貳割替、貳拾貫百石抔と云法有り、拾町百石と云有り、右何れも貫高

石盛

一兩熊野
上田壹石三四斗ゟ下段々劣
上畑壹石壹貳斗ゟ下段々劣
一紀州口六郡近年改替之位付
田方壹反上を壹石六斗ニ付、夫ゟ段々壹斗劣に付申候、屋敷ハ壹石貳斗、
畑方壹反上を壹石五斗に付、夫ゟ右同斷、

〔地方要集錄〕一石盛と申は、田畑壹反之高附、十五十六之と盛附候儀にて候、此高附之盛を致、都合候得ば村高と申候、又上中下之田畑之反トを寄、高を附候をば分米と申候、○中略

一田畑之石盛高き所は、越後、甲斐、大和、出羽、奧州之内にも有之、石盛廿七八三拾餘迄之盛有之候、○中略

大島古心へ認遣し地方之事問ニ答候書付扣

一理屈を以申上候へば、元來撿地之石盛極候時、上田ハ坪之籾壹斗可有之地所ハ、三百步之壹段ニ而、籾三石取候積を以、米五合摺にして、有米壹石五斗を、十五之石盛と極候、然バ有米之五分ハ七斗五升ニ而候間、是を根取ニいたし、七斗五升迄ハたやすく可被取筈ニ候間、是を定格之根取と立、御取箇之元ニ可仕儀と申、勘定相之理屈ハ一筋立候事之樣ニ候得共、如此には取候儀難成候故、理屈取ニ而ハ百姓甚困窮ニ成候、石盛極候元ハ、先坪刈籾之積りニ而候得共、一槪に左樣にハ難極候、古來石盛之極樣、國法も有之、郡切ニ石盛極候所にも有之候故、實に坪刈籾を以石盛極候とも難申候、左候へバ石盛を元ニいたし、根取ニ用候儀も決定難成候、田畑ニ初て高盛を付候得バ、坪刈籾之積を以考極候得共、再撿ニ至候而ハ、村方之樣子ニ寄、山方里方海邊町場、其外之田畑作候米穀之外、德用有之物作ハ、場所等品々之考を以、坪刈籾之積之外ニ、石盛高く付ケ候勘辨

合本直錢拾貫文書

右件田畔者あさきやいりの下行事禰宜内□□□二反、斗代は八斗代、明年みづのとの未年作毛よりはしめ候て來候はんみづのへ刁年作毛まで、廿ケ年廿作毛が間、まんぞうくうじちやうじ候て、本錢返に十貫文にうりわたし候處實正也、○中略仍爲後日狀如件、

延德二年みづのへむま十二月七日　　うりぬし　香取大禰宜胤房花押

〔伊勢國渡邊文書〕就伊勢國御撿地相定條々○中略

一上田一石五斗、中田一石三斗、下田一石一斗、下々は見計可相定事、

一上畑一石二斗、中畑一石、下畑八斗、下々見計可相定事、

一屋敷方一石二斗たるべき事

一山畑野畑川田多先斗代官屆ケ、其上見計斗代可相定事、○中略

右之條々相守、下々迄此一書を遣、さほ打に可申付也、

秀吉公
御朱印

文祿三年六月十七日

羽柴下總守どの○以下六人略

〔紀勢和州御領分記〕新田畑高位付

一勢州三領兩熊野ハ新田先年ゟ段々改之通ニ而御座候、紀州口六郡ハ近年一同ニ改替斗代附替申候、

一勢州

上田壹石三四斗ゟ下段々劣

上畑壹石貳三斗ゟ下段々劣

定損免之、仍近年八斗收之、而間八斗之時者不及内撿云々、百姓請文中仁、本所年貢十三合升九斗、名主得分同升三斗云々、雖有不審書誤歟、雖然以文章推之九斗代勿論歟、○中略

同桑田三段○中略

一斗代段別十三合升八斗也、但三段内近年小河成云々、仍大之年貢、如請文者、四斗七升五合也、三仙百歩云々而當時三斗八升辨之、結句當年又三升闕之由申之、未進云々、不可然歟、○中略

圖書寮田二段號紙漉田、○中略

一斗代十合升段別一石一斗也、而依有内撿等煩、近年定損二斗免之、其旨見于百姓請文、仍當時段別九斗辨之云々、

〔香取神宮古文書纂十六〕申定田の賣劵の狀の事

合直錢壹貫四百文者七斗代八斗代

右件の田の坪は、しもいなぎ一反お、明年壬辰の年より始申候て、來候はん辛丑の年の作まで、十ヶ年十作が間、賣渡申所實正也、○中略仍爲後日、田の賣劵の狀如件、

應永卯辛十八年九月十八日　賣主下總國香取の住人　梵巫花押○中略

依要用有に、永代おかぎつてうりわたし申田の狀事、斗代五斗五升代

坪ハつはら、くぼいど二反者、

右件の田は、田所内の重代さうでんのしりやうたりといへども、ことなるけいやくあるによつて、香取社大神主の方へ、永代おかぎつて、さりわたすも、ようしよたるによつて、田所の本けの狀をさしそへて、香取永幹の御方へ、永代にうりわたし申處實正也、○中略仍爲後日之證文狀如件、

應永廿二年未乙四月十五日　賣主香取社大神主　幸實花押○中略

本錢返にうりわたし申田之狀の事

大（島）□代五郎

康永四年三月五日　　下司清兼（花押）

〔東寺百合古文書百六十一〕去渡上久世庄宗像名田事

合田壹段者坪八段田所當米四斗代、公事物佛事用途拾文、○中略

文和四年（乙未）十月廿七日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　齋三郎（花押）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　同女寅女（花押）

〔榮山寺年貢納帳〕享德二年年貢收納帳

榮山庄分

大（アタカノ前）　九斗代　　得七斗　　刑部入道

一段（ハサマタ）　四斗五升代　　得三斗五升　　五郎（マツハラ）○下略

〔鶴岡事書日記〕當村斗代以下細々物等事、近年衆中所務之様、不同之由其聞候、此所根本被停止諸御公事御佃等、不云上中下之斗代、以居作之分、領別可爲參斗代之由、百姓等捧連署之押書、依申請、以別儀爲其分之處、近比斗代等、恣申亂之條存外也、所詮百姓等申請押書狀云、段別三斗代云佃ニ公事物爲可伺之所務、十月中可被沙汰之由、可被申含候、若有及異議百姓等者、交名可有注進之狀如件、

應永五年十月十三日　　　　　　　　　　　　法印

佐坪政所殿

〔東寺百合古文書百七十五〕性心禪尼寄進田一町半條々

左京職五段半號石田○中略

一斗代如注文者十三合升但請文等中十二合之由、粗有之、不審、八斗代云々、口說云、雖爲九斗代依損亡等之煩、一斗

口口使之間、云地下云御寺非無其煩、仍任百姓申請所被定上中下之斗代也、〇中略 仍起請文狀如件、

文保二年六月十四日　右馬尉判　〇以下三人略

〔東寺百台古文書 一〕申請下久世地頭御方田坪付事

合

參段半　矢作 一反内 此半は三斗四升代 二反は二斗三升代

壹段　ふしの木 三斗四升代

右坪付如此、爲後證所下賜御判之狀如件、

元德參年三月十五日　重眞

〔東寺百合古文書 三十二〕東寺御領播磨國矢野庄西御方名主百姓等謹言上

欲早任被停止脇田治部房等庄家之經廻、名主百姓等歎申之旨、蒙御成敗條々子細之間事、〇中略

一斗代定後于名々所給、令違背御下知、爲名主百姓等之歎、彼昌範任雅意結上非分二年貢被致譴責之條、希代所行也、

一如建武年中之起請文者、不可致違亂連書之名主百姓名田等之由、乍書起請文何斗代、今後于名名所給、令違背御下知、彼昌範恣至名田等令競望事企所行甚以自由之奸謀也、〇中略

曆應四年五月日

〔東寺百合古文書 百十九〕本庄分河成一丁四段六十歩内

河原 一段 三斗代 五郎
代開 半 自康永三行心
二斗代 五郎
畠 百歩 七斗五升代

小 三斗代 九郎
畠 大 三斗代 五郎
一段大内 二斗代 與二
畠 九十歩 三斗代 左口八二郎

畠 小 三斗代 佐藤五
芝 一段大内 二斗代 五郎
芝 小 二斗代 五郎
芝 六歩 三斗代 五郎

畠 小 三斗代 五郎
芝 一段 三斗代 與三
畠 半廿歩 七斗五升代 九郎
河 二段大 四斗代 五郎

二段内 三斗
芝 一段
開 康永三

斗代

〔地方要集錄〕斗代といふは石盛の異名に候得共、百姓等反取候事迄も斗代と唱違也、

〔地方凡例錄二〕一斗代之事

斗代と云は石盛の別名にて、地面之高幾斗に當ると云事なるに、村方にては壹反之取米何程と云根取之事を、斗代と唱る村方多き故、石盛を斗代と唱へては紛し、當時は斗代といへば、多くは反取之事に成に付、石盛を斗代と唱ること、先ヅは不宜、尤も村方によりて石盛を尋る時、上田は壹石五斗代、上畑は壹石代抔と答、斗代を石盛と本式に心得たる村方も有る也、

〔東寺百合古文書百二十三〕大山庄一井谷百姓ニ被下斗代契狀案

仰定東寺領丹波國大山庄一井谷年貢斗代事

右當庄者仕切進年貢於下地之時、段別石代之旨定之畢、而損亡之時百姓就被申子細、遂内撿之條、非無煩之間、任百姓申請旨、上田段別七斗五升、中田五斗五升、下田四斗五升之旨定之畢、然者向後者不依旱水風等之損亡、任起請文旨、追年無懈怠可被運送寺庫者也、更寄事於左右、不可申子細、仍所被定置之狀、如件、

文保二年六月十四日　　公文所在判

請文東寺御領丹波國大山庄一井谷百姓等御年貢□□代事

合八町壹段參十代内

上田參町三段　段別七斗五升

中田參町貳段　段別五斗七升

下田壹町六段卅代　段別四斗五升

右御領者以下地被切進寺用足之時、段別一色石代旨被定之畢、雖然損亡之時、就申入子細被下□

戌年關東筋御代官之内、五分より以上之引方無之候處、其方御代官所ニ限リ、七分餘之引方ニ當リ候事、全手先弱く吟味不行屆義も相聞候間、御取箇下組一村限リ諸帳面被崩、御取箇帳組直し可被伺候、

布施彌市郎　野田彌市右衛門

其方御代官所、去戌年御取箇之義、遂吟味候處、去々酉年ニ見合候而ハ、四分以上之減方ニ而、過分之減方ニ有之候、尤去戌年關東筋水損有之候儀に候得ハ、去ル丑年一統之大損毛之年柄も、四分餘之引方ハ、稀成事ニ候、畢竟各手先其外手代等、取計方ゆるみ候より事起り、過分之減相立候趣ニ相聞、甚不行屆之事ニ候、依之猶又申渡候間、此上諸帳面取崩し、撿見幷破免村等巨細ニ相改、可成丈ケ引戻可被相伺候、

亥二月

享和三亥年六月二十九日、御勘定奉行申渡書付、

去戌年之儀、五畿内筋、關東、甲州、東海道筋水損ニ付、御取箇多分引方相立候、前々ハ右體損毛強き翌年ハ、何れにも根取之通引戻し、御取箇附いたし、元免を失ひ不申候事、古來之取計方ニ候處、寛延年中より、一統へ有毛取ニ相成候以後、根取之見合も無之、凶作之翌年村方難澀等之趣になづみ、心得違ニ而引戻方無甲斐、自然と御取箇之ゆるみニ相成、其村之元免を失ひ、相當之御取箇辻ニ不立戻、年々下毛之姿ニ而年を經、自然と地免之樣成行候村方有之儀ニ相聞、既ニ明和七八兩年之旱損ニ而、御取箇多分減米相立、其後元取ニ不立戻、下免ニ成行候村々多有之候事、眼前之儀に候間、當田方之儀、右國々ハ不及申、其餘之分も一統篤と被致勘辨、前貳拾ケ年内之高免のみを目當ニ不致、出來次第根取免ニ取戻候樣、可被取計候、

亥六月

御取箇之儀、豐凶ニ隨ひ、年々撿見前、御代官御預り所役人へ銘々致出精、手抜無之取計候樣申渡候ニ付、今年諸國作方宜年柄ニ付、去丑年水損減米ハ勿論、去酉年以來之減米も、多分有之上ハ、當年別而御取箇致出精候樣申渡候儀、勿論之事ニ候得共、猶又豐作之年柄候間、手抜無之御取箇附出精可致旨、御代官御預り所役人へ、急度可被申渡候、

七月

寶暦九卯年七月朔日

一當卯年諸國作方之儀、何年ニも無之至極豐作之聞有之候條、各當撿見坪刈別而念入、格別御取箇懸候樣、出精可有之候、

一御取箇附之儀ニ付、度々被仰出等も有之、其趣委細申進、各無怠懈相守可被申事ニ候、是迄年々御取箇附之次第、撿見坪刈吟味詰御取箇帳差出、吟味被請候處、去ル申年以來ハ年々不同も有之、別而去丑年ハ子年ニ米六万石餘之減ニ而、去寅年も水腐附荒等之減米多く、村限ニ而ハ却而丑年より過分に減じ候村々も多く有之候、尤豐凶ニ寄、減米も可有之事ニハ候得共、右體之場所ハ、別而手先之强弱相見候事ニ候間、隨分心を用ひ吟味可被遂候、當卯年ハ出來方宜候ニ付、豐作之立毛見分被致候ハヾ、自然とゆるみも出來可申事ニ付、當年ハ別而入念、手代共へも委細申含、御取箇手抜無之樣可被存候、依之此節より申達間、可被得其意候、以上、

卯閏七月

明和四亥年

川田玄蕃

其方御代官所、去戌年御取箇附之儀、酉年と差引七分餘之減ニ當候ニ付、同國幷最寄御代官所ニ見合候得バ、多分之引方ニ當り、寶暦七丑年關東筋水損之節も、六分より以上之引方ハ無之、尤去

候事と相聞、甚心得違ニ候、御取箇之儀手抜無之樣ニいたし、百姓も不相痛樣、其所々朝暮厚く心を被用被取計候儀、隨分無油斷心を委ヲ被取計、勿論手代共へも右之通之心得違不致、御取箇ゆるみ無之樣ニ、常々得と可被申合候事、

寶暦六子年九月廿八日、

甲州御代官へ申渡書付

總而御取箇取計之儀、厘取反取有毛ニ候處、厘取反取的中不致村方も可有之候得バ、勘辨次第有毛取之方可然旨、寬延二巳年申渡候儀ニ付、當時ハ有毛取を用ひ、御定法之通、五分々々之御取箇ニ罷在候、然ル處甲州ニ限リ、五分々々之御取箇ニハ無之、先年吉田久左衛門、遠藤又三郎、園田市左衛門、入江彌平太四人添、撿見御用被仰付候節、坪苅之上、村柄盛衰等相考、免元相極候由、右免元之儀ハ、村々ニ寄不同有之候由相聞候、當時右四人相極候免元を相用被來候哉、年數も相立候事故、變地等も可有之候間、只今に而ハ其節之免元被相用候而ハ、不相當ニ候故、免元差略被致候哉、甲州之儀ハ外々と違、五分々々之御取箇ニ而ハ、御爲ぬけ候國柄故、免元相極置不申候而ハ、難成譯も有之候哉、又ハ定法之樣ニ罷成候而、相用候儀ニ候哉、勿論兩毛作等、或ハ格別之稼等有之候所ハ、五分之御取箇ニ而ハ、御爲ぬけ候故、見込增も有之候儀ハ、地方取計專一之事ニ有之候故、右免元相極候事ニ候哉、是迄御取箇附被取計方、委細可被申聞候、將又以來御取箇附免元相止、五分五分御取箇ニ相極候方可然哉、又ハ免元相用候儀、御益之筋ニ候哉、實意之儀得と相糺、存寄之儀委細可被相伺候、

〔寶暦集成絲綸錄二十一〕寶暦八寅年七月

御勘定奉行へ
同吟味役

各御役所被取計方之儀ニ付、去秋中一統へ申達候趣書付、大屋松之助へ相渡し、通達有之樣ニ申渡候間、右書付之面承知被致候ニ而可有之候、彌以右書面之趣、違却無之樣被心懸、第一御取箇筋之儀ハ、御役専要之事ニ候間、隨分無油斷心を用ひ可被取計候、去戌年御取箇之儀、米三千五百石ハ、酉年御取箇ニ相減じ候故、再吟味之儀申渡、御取箇帳相返し候、此儀出來毛之善惡、百姓之痛ニも無貪著、引戻等被致候樣にと申筋ニハ無之、其方初年と申、定而入念御取箇附被致候ニ而可有之候得共、夥敷引方に候間、猶又御取箇仕出之諸帳面等熟覽之上、若見落心得違認違算違等之筋も無之哉、得と被相糺、且再應勘辨被致候爲ニ相返し候事ニ候、然ル處其方初年之儀故、別而出精被致、元〆初メ、數年勤來手代共故、何も出精いたし、百姓共願候ニなづみ用捨被至、相勵候樣被申渡、御取箇附被致候得共、旱水損場所多く、無據引方故、引戻之儀難成旨答書被差遣候、右書面之内、延享元子年、神尾若狭守廻村之節樣し坪刈申付、右出合を以、數拾ヶ村順合ニ爲引請、木綿作ハ上上毛御取箇申付儀ニ御取箇進之候故、百姓共騷立、堂上方迄及出訴、翌丑年ハ水損ニ付、畿痛、潰百姓も有之趣被認候、若狭守度々御代官御預所より申渡候趣共、御勘定所留書等ニも有之上ハ、自分廻村之事ニ候得バ、別而心を用、村柄土地立毛坪刈可申付儀、其節田主幷村役人的當之出合見屆候故、非分無之處を得心いたし、請印形差出候儀と相見、順合之儀も、聊非分と存候においてハ、數十ヶ村請印可差出謂無之、其上其頃ハ同姓十左衛門支配所高五万貳千六百石餘ニ而、御取箇辻前年より米壹万千貳百石餘取增候上ハ、一體出來方宜年と相見、旁以若狭守坪刈非分之筋有之候儀とハ不相聞候、且又攝河百姓堂上方へ令出訴候ハ、青木次郎九郎手代共、不屆之筋より事起り候事ニ而、若狭守廻村ニ拘候儀ニハ無之、別段之事ニ候、全體右之事共ハ、此度之答書ニ被認候ニ不及儀候處、彼是取合、子年若狭守廻村以來、百姓痛候趣ニ被認候ハ、畢竟若狭守取計方強過候と之底意ニ被存、手代共も其心得ニ而罷在候趣ニ相見候、右之存寄故、近年段々御取箇ゆるみ

はらず、實意の所得と吟味詰候て、可被書出候、尤定免撿見取場とも、一村限本新田之譯迄、委細可被相認候、實意之所相糺、吟味詰候儀、專要に候事、

四月十九日

〔牧民金鑑 五〕寛延三午年十一月日申渡書付

一御取箇吟味手拔無之、百姓痛ニ不相成儀、取計方年々申達、今年も精々申渡候處、此節御取箇下組出候內、不吟味ニ者御定法ニ違ひ、又候當年格別之出來方ニ候處、引方或ハ總計之增ニ而、不相當之伺も有之候、前々より申達候通、有合毛通手拔無之候得バ、御取箇も相增、夫に准じ、總百姓收納も多、正道ニ宜候處、不益之諸入用等引物多分ニ懸り候取計有之面々ハ、何程豐作ニ而も、御取箇幷百姓方作德有合之通ニハ不相增候、縱豐年ニ而も、低場或ハ木蔭稻虫附、又ハ格別用水不行届場所ハ出來劣り、只半毛皆無有之事ニ候、然共全體之豐作ニ付、右之分平均之上ニ而、押口增方多き事に候、前書之趣申渡候得共、御取箇下組伺帳出候節、是迄御勘定所吟味遂不相糺候故、各出精手拔之趣不相分候、依之大概宜敷相成候村々ハ、近來致手戻、當年ハ各取計方吟味之儀ニ付、堀相模守殿被仰渡候趣有之、巨細に相糺候間、銘々手拔無之樣可被致候、左候得共、出精之面々勳功相立、御役儀之規模相成候條、何分出精可有之候、地方勤方之內御取箇正道に進み不申候得バ、百姓作德も減じ、地方專要重き事ニ候間、銘々村方耕地之趣遂吟味、勘辨之上不相當之儀無之樣、嚴密ニ致吟味可被申聞候、〇中略

右之趣、外御用ニ而、村々へ差越候もの共へ申聞候而ハ、其場所支配之面々、手拔之筋ニ相成、御代官御預所役人ハ勿論、別而手代御預所ハ鄕懸り之者可爲越度候、無油斷急度相糺可被申候

午十一月

〔牧民金鑑 五〕寶曆五亥年二月日御申渡書付

而被仰渡候儀共有之候、何も得心之上、右條々不相改、場所或ハ申渡被得其意候而、申付方行屆兼、又ハ申渡一向得心無之、遂吟味相伺候筈ニ候間、各ニも手代名主致方委細遂吟味、不屆成者於有之ハ御仕置之儀可被相伺候、手代名主ハ村方取扱御取箇等ニ付、第一潔白に相守筈之者共ニ候條、吟味不行屆、此方ゟ右體之者御仕置申付候ニ及候而ハ、各不念一等重ク候條、隨分可被致吟味候、先今年御取箇、去ル戌年迄之趣ニ相成、來年ゟハ吟味次第、御取箇不拔樣、諸事此度申渡之通可被心得候、且又前々可起返田畑、其分ニ捨置候場所、數多有之由相聞候、ケ樣之儀決而有之間敷候、只今迄之仕方急度相改、若今年悉難相改事有之、五分々々にも相改、來年ニ至リ黑白相分候樣可被致候、場所ハ其譯可被書出候、何れにも手代名主吟味肝要之事ニ候、以上、

巳七月

〔寶曆集成綵綸錄二十一〕延享四卯年四月

御勘定奉行へ

御取箇之儀、年々吟味有之事候得共、向得御代官共へ申渡、村々之樣子實事ニ相糺、立毛計ニ不限、村柄等考之、不難之年ハ何程迄ニ取附可申と見附致し爲差出、御勘定所へ差置、年々右帳面引合、其年之豐凶ニ隨ひ、吟味候樣ニ可被致候、尤帳面ハ御代官共ニ、仕立差出候樣ニ可被申渡候、

四月

〔憲教類典五之四下〕延享四丁卯年四月十九日

御代官
御預り所　江申渡書付

御取箇豐年には厘取反取之場所共に、何程迄は取付可申と申儀、被書出候樣、堀田相模守殿、板倉佐渡守殿御書付を以被仰渡候、永々之形に相成、各主役重き事に候間、唯今迄之根取に一向か、

ニ候條、其品ニ隨ひ嚴敷御仕置可被申付候、前々より段々申渡候事ニ候得共、此上若各心付薄ク不精之儀も相聞候得バ、少も用捨難成候條、其旨可被存候、定免場所ハ其年之風旱水損等之申立ニ而、被致破免候得共、近年ハ隔年位破免候間、定免之詮無之、撿見場所も是又同樣之申立ニ而、近年段々下免に成來候、右之趣得と信服之上心を盡し、御取箇進候樣、諸事無油斷心を付可被申候、當年之儀、此節迄も年柄も宜候間、上り可申事勿論ニ候得共、去年之引方取返、其外にも取立候樣、當撿見別而念入、定免場所ハ一切破免無之樣、隨分可被精出候、萬一損毛之注進有之場所、各早速廻村致し、可被致吟味候、大體之義ニ而ハ、引方不相立候樣ニ勘辨可有之候、尤右之趣を以て當年ハ壹人別ニ仕方左近將監伊豫守へ可申達候間、御取箇不拔樣吟味至極被詰、御尋有之節、違却之儀無之樣可被心得候、依之前廉委細相達候間、聊油斷有之間敷候、

一損毛ニ而御取箇減候儀、風水旱之故之由にハ候得共、左程にも無之節、破免ニ及候にハ、何之旨趣可有之候、扨撿見入ニ成候場所、最初より撿見場共ニ不相應劣候ハ、又此度仕方ニ寄可申候、依之此兩條ケ樣ニも致し候ハヾ、可宜と申儀可有之候間、聊之儀ニ而も可申聞候、只今迄ハ少々存寄有之候而も、先年之通例ニ任せ來候儀も可有之候得共、仕方等ニ至迄、曾而存寄無之と申儀ハ有間敷候、外へ當障候儀ハ可致差略候條、所存之だけ別紙ニ可被申聞候、

一手代不宜沙汰之儀決定有之儀と、被相心得可遂吟味候、他には可有之候得共、自分方ニハ左樣成者無之旨被存候者之手拔之儀出來、越度ニ可相成候、外より相洩候而ハ、此度之御書付を大方ニ承ル趣ニ相聞候間、此段無油斷心掛、少分之儀ニ而も於有之ハ、急度可被申聞候、

一先年御勘定仕上之儀ニ付、大分之金貸方金永年賦上納之積被仰付、其上御口米ニ而不足之由ニ付、御吟味之上、諸入用金御扶持方被下候上ハ、諸事入用手代其外召仕給分等不足ニ付、不埒ハ無之筈之處、段々不宜儀共相聞、各勤方吟味之儀、幷手代名主等不宜者、御仕置等之儀、此度別

とげ可申聞候、其方ニ而も帳面仕立候節、可成丈ハ勘辨可有之候、

一右之儀ども、早々遂吟味可申聞候、其方ニ而ハ御代官限之儀、御勘定所ニ而ハ御料所不殘引合遂吟味候條、大分成儀、當年之間ニ合兼候間、閏六月中を限り、帳面可被差出候、六月より前にも出來候分ハ、早々可被差出候、

右者差掛御取箇吟味候間、的當無之可増御取箇ゆるみ、又ハ御取箇強候得バ、尙以連々百姓痛候ニ付、此度被仰渡候事ニ而、難有儀に候間、書面之趣得と勘辨被致、百姓を押付候儀無之、得心之上相極候樣心掛、品ニ寄撿見前、各御代官所へ相廻り候而成とも、書面之趣得と行屆、撿見時分落著間ニ合候樣、可被相心得候、此上未熟之いたし方相聞候ハヾ、其段可申上候間、自身得と吟味可有之候、右之通被致候上ニ而、追而少々之了簡違有之候ハヾ、其段可被申聞候、

享保十三申年四月

〔牧民金鑑五〕元文二巳年七月申渡書付

去年格別之風雨も不相聞候處、御取箇夥敷引候、就夫自今御取箇幷各勤方之儀ニ付、松平左近將監、本多伊豫守口上ニ而委細被申聞候上、別紙御書付被相渡候ニ付、在府之面々へハ委細申談候、右御書付各へ爲見候樣にとハ無之候得共、此度之被仰出通例之儀と心得違ニ而ハ、大切之儀、重き御文談之趣、少も間違有之候而ハ、用捨難成事故、寫遣之候、右御書付致熟覽、御取箇之儀ハ勿論、諸事微細ニ心を用、手代等へも急度被申渡、潔白に爲相勤、隨分御取箇進候樣可有勘辨候、總體御取箇之儀、坪刈之仕方、或ハ定免三步以上之引方立樣紛敷儀有之、添撿見遣候ても、其者と申合候輩も有之、或ハ破免之積と申立候場所も、添撿見被遣候得バ定免破免も有之由、又ハ手代共之申旨ニ任せ、悉不被遂吟味も有之由、其外手代等私曲之筋有之候而も、不及御沙汰內證ニ而暇遣し、未熟之仕方故、私曲之筋今以不相改候由、彼是不宜沙汰有之、右風聞之通ニ而ハ、以之外不可然事

ざる處有レ之においては、まい度寬宥の御沙汰有まじき事に候、御代官中よろしく其旨を存らるべきもの也、

正德三巳年四月十三日

〔御觸幷御書付留 二〕一去年御取箇相增候得共、急成儀故、臨時と見合、無レ謂甲乙可レ有レ之候、左樣之所ハ隣村を上、其村を下げ候樣、吟味可レ有レ之事、

一去年之御取箇相增候ても未レ無二甲斐一、此上可レ增村方も可レ有レ之候、左樣之所ハ此上何程相增、其村相應之御取箇ニ而可レ有レ之候哉、

一去年御取箇相增候而、增方之色も可レ有レ之候、左樣之處ハ何程免引下、其村相應之御取箇ニ而可レ有レ之哉、

一去年御取箇相增候而、其村相應之御取箇ニ成候村方も可レ有レ之哉

一右吟味ニ付、撿地之譯ニ而、地廣地狹山海市場稼、村方之盛衰、幷村入用隣村より多く掛候譯に、得と吟味を詰、同樣候得バ免も同樣ニ可レ有レ之事に候、万一違候譯有レ之候ハヾ、免も可レ違事ニ候間其譯可レ被二書出一候、

但村入用之儀ハ、差定候外急度可レ被レ致儀を、差急候樣故坏と不レ同法、入用多く掛り候所々有レ之由に候間、得と勘辨いたし、左樣之事ハ村入用を減、御取箇進候樣可レ被レ致候、

右之通被レ致二吟味一、高免之分撿見取之所ハ勿論、定免年季掛候分も、當年より引下可レ然候、尤可レ增分も、當年より相增可レ然候、然れども當年急ニ難レ增子細之分ハ其譯書付、何年何程、何年に何程可レ增よし可レ被二申聞一候、○中略

一一分之御代官所ハ勿論、他之御代官にても、近村と過半御取箇ニ違候所も有レ之、左樣之處ハ、相應之御取箇ニ而も免高き方之百姓追々彼是難澀可レ申候間、是等之儀ハ御勘定所よりも吟味

を以、上中下田畑之位ニ不拘坪刈いたし、年々御取箇相極候事ニ付、村柄勘辨之上、御取箇増減も致し候事ニ付、御代官功不功ニより、坪刈之節切捨等も用捨有之事に付、朝撿見、夕撿見、雨後等之節、坪刈いたし候場所、用捨勺撮之引戻調直候得バ、一村反別へ掛合、多分之増方にも相成候義に付、一旦取極候御取箇辻引戻候而も、譯相立候儀ニ付、御代官御領所役人等、再應吟味詰候方、自分行屆候筋に有之候、

〔享保集成絲綸錄二十三〕正德三巳年四月

條々 略○中

一近世以來御料之地、風水旱等之損毛有之にもあらず、させるいはれもなくて、年々の御取毛、次第に下免ニ成候といへども其村々古來より富饒に成候體も相見ず、都て此等の事、御代官中御役儀に心を被用ひず、手代役人等ニ万事を任せ置、其手代役人等ハ、名主庄屋類と申合、賄賂の多少に依、御取毛の高下取計、又是等之賄賂之事ニ就てハ、村方の物入種々、其事多有之故に候由相聞候、就ハ公儀之御爲不宜事ハ不及申、諸百姓之爲にも不可然事、皆是其御代官中怠慢之致所ニ而候、自今以後ハ姦邪之輩、私曲之事等一切に斷絶し候樣ニ、嚴密に制法を立られ、當作之樣子ニ隨ひ、古來之免相行合ニ相違無之樣其心を盡し、急度其沙汰可有事、

附、古來之定法免相之事、近鄕之取を以、相計べき由有之候、然るに近世以來、或ハ御料私領入相之村々、私領に引くらべ候得バ、御料之御取毛ハ殊之外ニ下免も有之、或ハ私領之時よりハ年年ニ下り候所も有之由、此等之趣尤以て、御代官中不吟味之事共ニハ、自今以後宜其心得あるべき事、略○中

右之條々は、去年中被仰出候、諸國御料の地巡見之面々見分の品、急度御糺明を遂らるべき事共に候といへども、當時御代官之始、別儀を以、各詮議之上、相定むる處に候、若此後に至ても、舊弊猶改

之事故、如是ものに而候と心得候而、納來候儀ニ而可有之候得共、此上右撿地之埒明候ハヽ、百姓之內證も、平直ニ可罷成候事、

一取箇之儀、急ニ法式を改候而取增候了簡、當分一兩年ハ何分にも成事ニ候得共、是又長久之法ニ而無之候、取箇分坪刈を以元ニ致し、理屈取に色取、毛揃取、合毛取など、品々術有之候得共、撿地さへ平直ニ成候得バ、取箇ハひとりでニ埒能成事ニ而畢竟取箇ハ考之一字ニ而取候儀ニ而、村方之仕置、百姓平生之渡世之暮方、山方里方村柄之樣子を以、取箇付候、假ニ而、百姓之心屈し候へバ、困窮ニ成候故心之はなれ不申樣にさへ取扱候へバ、少々取箇ハ高候而も、中々困窮不致事ニ候此勘辨甚功者之入り申事ニ而、なまじゐニ少々地方存候と申ハ、却て素人にハおとり申事候、

〇中略

右之通存寄候儀、荒增如是候、外江は中々ケ樣之儀申入候事、甚だ遠慮も御座候而、不申進候へ共、無他事存候間申入候、外江一切無御沙汰、書面之通を、猶又御吟味被成候上、可被仰付候、以上、

六月

〔勘定所指出方勤方心得書〕一再吟味引戻之事

是ハ往古ハ御代官御取箇帳差出候得バ、其趣を以相極候儀ニ有之由、元文年中より御取箇減方有之分、吟味之上再吟味申渡、引戻米等いたし、其後右之趣を以、年々御取箇吟味不行屆趣相見へ候分ハ、其年之豐凶に隨ひ、御代官吟味之上差出候帳面、水旱損等之注進之趣を以、定免、破免、撿見取、村々引方相調、年々取付的當不致趣相見へ候分ハ、其趣巨細申談察當いたし、御代官申分相分候得バ、其趣を以、御評議ニ出、難相分ハ何ヶ度も吟味詰候事、

但一體引戻と申儀、御代官吟味詰、村々御取箇辻極差出候上之儀ニ付、再應吟味申渡候筋、如何之樣にも相聞候儀ニも有之候得共、撿見取之義、前々畝引之法を用ひ候節と違ひ、當時有毛取

右六町六段内六町者、念佛禪侶之免給也、六段者佛餉灯油之料田也、然則校量免田六町於十二分、可充人別五段於十二人、其外相募六段於料田、被別半田於人別、長以此地利、專可備供具、各爲人別之營、可致月別之勤、夫灯畑參斗陸升、佛餉參斗陸升也、則分十二人、可充十二月、但有沃壤上腴之上田、有薄地下流之下田、悉計會優劣、可配分多少也、○中略

延應元年七月十五日　　正四位上行前武藏守平朝臣

〔官地論〕富樫次郎政親、○中略時々上意歎被申條々子細、某分國加州之土民等、建立專修念佛之一法、依勵勤修、土貢地利、一塵不運上、剩結黨分群、各々立一揆之與、爲緩怠之至、不及言語之由、讒訴被申上、

〔條訓栞中編十六〕とりか　俗に年貢のとりかと云は、取數の義なるべし、

〔地方要集錄〕一御取箇之儀を、御成箇御物成とも申候、

一取箇高免と申事、壓附免之高計を見聞候而は、高免とも下免とも申がたし、其所の田地いかほどの石盛に候と申事を、聞屆候上ならでは、高免下免之沙汰に不及候、○中略

一御取箇吟味之儀、前々は例年秋之末に至り、御勘定組頭之内一人ヅヽ掛りを立、御取箇差出帳吟味仕候得共、御取箇之儀は、秋作計之善惡に計不限、麥作初畑方之諸作、又は國々之土地之樣子をも考合、御爲不拔、又は百姓困窮にも不及樣に勘辨仕候樣、近年被仰出候、當分之御用掛りに而は、勘辨詳難成可有之候間、春中より年番を立、年中之次第　細に吟味仕、御取箇免相を定候樣仕候、○中略

覺○中略

一取箇之儀は、右撿地極り候得ば、何分にも了簡成能事ニ而、只今迄之通之仕法之筋ニ而ハ、中々百姓前、內證之儀不埒之儀ニ而可有之候得共、久年仕くせニ而候故百姓も親々より納來候年貢

地利

〔新編追加 雜務〕一宣旨事

左辨官下五畿内七道諸國

應令自今以後庄公田畠地頭得分拾町別賜免田壹町幷壹段別充加徵伍升事

右頃年依勳功賞居地頭職輩各超涯分恣侵土宜、〇中略方今四海既定、萬方靡然、誰輕宗廟社稷之重事、誰掠五畿七道之濟物、〇中略

貞應二年六月十五日　大史小槻宿禰

左中辨藤原朝臣

〔國太曆〕康永四年〇貞和元年十月廿一日

請殊蒙天裁因准先例被裁許雜事捌箇條狀〇中略

一請先例以國司切符令催濟所部當國所當諸司所々濟物等事

右同〇隆昌揄按內當國例所々濟物使到來之時、給廳宣下遣本國切符、〇此間恐有脫字庄園所當官物者承前之例也、而近年濟物使等、不請取廳宜、於京都譴責國司、熟國倚不堪其串、況亡國之吏矣、望請天裁、因准先例、被停止京都責、切宛庄園、欲令致其勤矣、〇中略

康永四年十月十四日　攝津守從五位下藤原朝臣隆昌

〔吾妻鏡 六〕文治二年九月五日戊申、諸國庄公地頭等、忽諸領家所務之由、依有其聞、有限地頭地利之外、不可相交、乃貢以下、不可存懈緩、於違越輩者、可有殊罪科之由被定云云、

〔島津本吾妻鏡〕延應元年七月十五日壬午、今日前武州〇北條泰時以田地、爲不斷念佛料所、限未來際、令寄附于信濃國善光寺給、〇中略圓仐法橋草寄進狀云云、

寄進〇中略

一田晴配分事

相模左近大夫將監殿

〔新編追加雜務〕可止百姓臨時所濟事〇中略

有限所當之外、臨時徵下事、永可停止之、

以前兩條存此旨、可令相觸其國御家人等之狀、依仰執達如件、

文永元年四月十日　武藏守判

相模守判

諸國守護人

〔新編追加雜務〕諸國百姓、苅取田稻之後、其跡蒔麥、號田麥、領主等、徵取件麥之所當云々、租稅之法、豈可然哉、自今以後不可取田麥之所當、宜爲農民之依怙、存此旨、可令下知備後備前兩國御家人等之狀、依仰執達如件、

文永元年四月廿六日　武藏守判

相模守判

因幡前司殿

〔建武以來追加〕本物返質劵所領事永享十二十廿六

以彼在所之所當、年々雖致其沙汰、依不辨本錢、及多年令侘傺之條、不便之至極也、然早勘度々收納、到一倍者、可返付所領於本主也、

〇按ズルニ、コヽニ所當トアルハ、所得ヲ云ヘルガ如シ、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年五月廿九日壬午、御隨身左府生秦兼平、去比進使者、是八條院領、紀伊國三上庄者、兼平譜代相傳地也、而自關東所被定補之地頭豐島權守有經、於事對捍、抑留乃貢、早可蒙恩裁之由訴申、仍任先例可沙汰濟物之旨、給御下文之間、彼使者今日歸洛云云、

二百三十石〔□米二百石〕　天王寺□料〔○此下有虫損〕

二百石〔○此下有虫損〕

三百四十八石〔○此下有虫損〕　同運上京師

一畠所當

上庄分麥二十九石八斗四升、大豆八□八斗所當、

下庄分麥二十六石五斗、胡麻九石九斗、

都合麥伍拾陸石參斗、大豆捌石捌斗、胡麻玖石參斗、

以麥貳拾石、胡麻玖石參斗、可交易助進所□

右任支配、每年無懈怠、可被致沙汰之狀如件、

貞應元年七月廿三日　花押

〔新編追加〕〔諸務〕半不輸所々地頭方公事可勤仕否事

右或辨濟所當於國司領家、令勤仕公事於寺家社家所々在々、又辨濟所當於國司、令勤仕公事於權門御邊地等在之、其內於入役者、大略令勤仕地頭役候歟、至于神領半不輸者、未切相論候、何樣可候哉、尤可被仰下候歟、

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年〔○寶治元年〕十一月廿七日丙子、畿內諸國守護地頭等所務事、有散亂子細之由、依令風聞、今日有其沙汰、所被仰遣六波羅也、其詞云、

諸國守護地頭等、遂內撿、責取過分所當之間、難令安堵土民百姓事、就國司領家目錄、可致沙汰之由、可相觸守護地頭之狀、依仰執達如件、

寶治元年十一月廿七日　左近將監

相模守

雜事二條

應准疫死以滿六年除帳百姓口分田地子分交易其調庸事

右得彼省五月十六日解偁、〇中略望請准疫死等例、以彼口分田地子稻、分交易其所當調物、〇中略

天慶五年十二月十九日

〔大隅國圖田帳〕大隅國注進國中總田數寺社庄公領幷本家領所地頭辨濟使等交名事〇中略

正宮新御領　本家八幡　地頭掃部頭

公田永用百六丁二段　郡司大藏吉平妻所知件名雖爲社領分號府別府、以數百餘丁宛五十丁、所當准千疋、殘六十餘丁不弁濟、府國兩方恣私用也、動不隨國務也、〇中略

右件總田數任御教書之旨注進如件、

建久八年六月日　大判官代藤原署名〇以下略

〔播磨國在田庄所當帳〕播磨國在田上下庄田畠所當事

合

一田所當米

上庄分三百三十四石三斗九升六合

下庄分七百三十六石四斗三升二合四夕

都合單米仟漆拾斛捌斗貳升捌合四夕

寺家御年貢米百九十二石八斗八合

殘米八百七十八石四斗二升

百石　田所當

七百七十八石四斗三升　見米分〇此下有虫損

乃貢

所當

〔大内家壁書〕百姓逃散御定法之事

権木庄寺社本所領、幷諸給分本領等百姓、或拘得土貢、或欲企嗷訴逃散他所之條、不可不誡、所詮有所望之輩搦捕狼藉人可渡之、御定法之上者、聊不可有悋惜之儀也、仍執達如件、

永享十一年十二月十九日　　杉近江守重保○以下署名略

〔伊呂波字類抄乃畳字〕乃貢

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年五月十三日、今日有被定下條々、先諸國守護人者、大犯三箇條之外、不可致過分沙汰、撿非違使所者廻寛宥之計、可専乃貢勤之由云云、

〔集古文書十三下文〕常徳院義尚下文蜷川某藏

下　出羽國仰三箇條○中略

一乃貢事

右諸國之濟物、任土之貢賦、早守毎年之所當、可致合期之進納焉、

以前三ケ條、所仰如件、

文明十一年□□廿二日

〔貞永式目〕一諸國地頭令抑留年貢所當事

〔貞永式目抄上〕所當トハ、其田ニハ、イカホド、相當スルヲ云、地頭トシテ、本所ノ年貢ヲ無沙汰スル事也、

〔御文章〕一當流ニタツルトコロノ他力信心ヲバ、内心ニフカク決定スベシ、○中略

四ニハ守護地頭ニヲヒテハ、カギリアル年貢所當ヲ、ネムゴロニ沙汰シ、ソノホカ仁義ヲモテ本トスベシ、

〔政事要略六十〕太政官符民部省

名稱

土貢

ト云ヒ、然ラザルヲ計立ト云フ、關東ニテハ三斗五升俵ニ對シ、二升ヲ加フルヲ以テ率トセリ、

〔運歩色葉集禰〕年貢

〔貞永式目抄上〕年貢、貢ハ獻也、國々ノ賦税ヲ年々ニタテマツル也、

〔運歩色葉集登〕土貢

〔尚書註疏六禹貢〕禹別二九州一、隨レ山濬レ川、任レ土作レ貢、傳、任二其土地所有一、定二其貢賦之差一、此堯時事而在二夏書之首一、禹之王以二是功一、

〔建武以來追加〕寺社幷本所及武家輩所領等事

事書一通遣レ之、早守二彼狀一、當國分來月十日以前、嚴密可二遵行一、將又土貢以下、令二先納一者、悉可二糺返一之、若於二遲怠一者、任レ被二定置一之旨一、可レ處二罪科一之狀如レ件、

建武五年後七月廿九日　御判

播磨國守護赤松圓心

〔侍所沙汰篇〕一諸國闕所事康永十五十一三、武衛管領判在レ之、飯尾美濃入道常康奉行、

諸人就二望申一、雖レ被二充行一、或稱二本主一、或號二新給一、帶二證文一申之輩繁多也、因レ茲參著之沙汰出來之條不レ可レ然、所詮向後者、闕所之段、土貢之員數、相二尋守護一、就二左右一可レ有二其沙汰一、若注進日數過二廿ヶ日一者、以二訴人差申在所一、可レ充二給御下文一矣、

〔東寺百合古文書百十〕廿一口方評定引付永享十年戊午八月十日連署除之

一寶嚴院垂水庄給主狀文□□寺領攝州垂水庄所務職事、被レ致二御興行一土貢事、近年運送之外相增事者、何樣寺家相計可レ被レ申之由、衆儀候也、恐惶謹言、

八月十日

ニ對シテ踏ヲ附シテ收納スルヲ踏附取ト云フ、而シテ德川幕府ノ時、斗代ヲ石盛ノ稱ニモ用キタルコトアリ、

德川幕府ノ時、徵租ニ定免ト檢見取トノ二法アリ、定免トハ既往五年、十年、二十年ノ租ヲ平均シテ率ト爲シ、將來五年又ハ三年ヲ限リ、租額ヲ定ムルヲ云フ、若シ風水旱等ノ災ニ遇ヒ、大ニ損耗アルトキハ、檢見ヲ爲シ租ヲ減ズ、之ヲ破免ト云フ、檢見取ハ每年田畑ノ作毛及ビ土地ノ狀況ヲ視察シ、租額ヲ定ムルヲ云フ、檢見ヲ行フニ、初ニ代官ノ手代ヲ以テスルヲ小檢見ト云ヒ、其後更ニ代官ノ檢見スルヲ大檢見ト云フ檢見ノ法ニ、畝引檢見、有毛檢見、投檢見、遠見檢見、請免居檢見、一二五檢見等ノ法アリ、檢見シテ租率ヲ定ムルニ坪刈ト稱シ、其中ノ一坪ノ稻ヲ刈リ穀實ノ熟否ヲ驗シ、以テ其處ノ準ト爲スコトアリ、

畑ニハ二毛作、三毛作アリ、又夏成、秋成、冬成アレド、夏成ナル麥ヲ以テ主ト爲シ、是ヲ以テ豐凶ヲ定ム、サレドモ畑ニハ概ネ水旱ノ災少キヲ以テ皆定免タリ、而シテ田畑六分違ト云ヒテ、田米一斗、畑米六升ノ租トスルナリ、

田租ハ米穀ヲ以テ主トス、或ハ錢ヲ以テシ、或ハ銀ヲ以テシ、大豆等ノ雜穀ヲ以テスルアリ、而シテ德川幕府ノ時、租米ニ代フルニ、銀又ハ錢ヲ以テスルヲ、石代ト云フ、德川幕府ヨリ以前、絹、布、麻、綿等ノ類ヲ以テスルヲ色代ト云ヒシガ、石代ハ此ニ本ヅキテ名ヲ立テシナラン、

租ニ加徵スルニ、口米、口永アリ、皆例貢ナリ德川幕府ノ時、關東ノ口米ハ三斗五升俵ニ口米一升ヲ加ヘ、口永ハ錢納ノ分ニ錢ヲ加フルニテ、關東ノ口永ハ、永壹貫文ニ三十文ヲ加ヘタリ、欠米ハ古ノ耗分ノ類ニシテ、海上ヲ運送シ來レル貢米ノ爲ニ、濡米、フケ米、澤手米等ノ分ヲ加フルナリ、込米ハ收納ノ爲ニ其量ヲ檢スル時ニ、升ノ上ニ盛リテ計ル事アルヲ以テ、預メ欠ヲ計リテ加フルナリ、又本石計立ト云フアリ、米ヲ升ニ入レ、斗搔ニテ落シタルヲ本石

古事類苑

政治部七十八

下編

田租一

鎌倉幕府ノ時莊園領地ノ事滋、多端ニシテ、班田ノ法久シク亡ビ、調庸ノ制既ニ廢レシヲ以テ、賦斂雜出シ、殆ド規律ナキガ如クナレド、仍ホ田租ヲ以テ本トシタリ、田租ハ年貢、土貢、乃貢等ト云ヒテ、朝廷ニ納ムルアリ、幕府ニ納ムルアリ、大名若シクハ社寺ニ納ムルアリ、而シテ概ネ四公六民ヲ以テ法ト爲シタレドモ、晝一ニ出ヅルコト能ハズ、文祿年間、豐臣秀吉ノ海内ヲ統一スルヤ、田制ヲ改定シテ、三百歩ヲ以テ一段トシ、收穫ノ三分ノ二ヲ以テ租トシタリ、德川幕府ノ初ニハ、亦四公六民ヲ以テ率ト爲シヽガ、後ニハ五公五民ト爲セリ、租ヲ徵スルニ石盛ヲ以テ本トス、石盛ハ一段ノ地ノ收穫ノ額ヲ云フ、凡ソ石盛ノ法ハ、其田ノ善惡ニ就キテ品等ヲ立テ、上田、中田、下田、下下田トスルナリ、例ヘバ一段ニ籾三石ヲ得ルハ、五合摺ニシテ米一石五斗ヲ得ルナリ、是ヲ十五ノ盛ト云ヒ、上田ト爲ス、以下二ヲ遞減シテ、十三ノ盛ヲ中田ト爲シ、十一ノ盛ヲ下田ト爲シ、九ノ盛ヲ下下田ト爲ス、又租率ヲ免、又ハ釐ト云ヒ、其租ノ輕キヲ下免ト云ヒ、重キヲ高免ト云フ、而シテ免幾ツ、又ハ幾ツ幾分幾釐ナド云フハ、皆石盛ニ乘ズル所ナリ、例ヘバ十五ノ盛ニ免四ヲ乘ズレバ、六十ト爲ル、即チ十五ノ盛ノ田ノ一段ノ租ニシテ、糙米一石五斗ヨリ六斗ヲ納ムルヲ云フ、

一段ノ租、何斗ヲ以テ率トスルヲ斗代ト云ヒ、斗代ノ法ヲ以テ收納スルヲ段取ト云フ、段取

米貳百拾四俵貳斗九升六合　但三斗七升入

此金貳拾六兩、京貳百三十文、但壹兩ニ付三石五升かい、右同斷、

三口小以貳百九拾四俵内三十八俵ハ戊ノ殘俵入○中略

右は大禰宜上給戊ノ年ゟ午ノ年迄九年物成、社家百姓立合御勘定仕上申候、若相違ノ儀御座候ニおいては、重々仕置指上可申候仍如件、

寛永八年未十一月廿日

香取大宮司

百姓　清左衛門

同　作右衛門

御奉行所

諸品幾口も有之を内ニ而〆立たる所を小以と觜、小〆と云事也、以ハ集止之字義、物を集め止たる儀、内に而小く集ると云義、則小以上之下略也

(香取神宮古文書纂六)香取大禰宜上給勘定目錄

一高百四拾石八升五合　田畑辻○中略

納合七百貳拾六石三斗四升貳合　但三斗五升入

此俵貳千七拾五俵九升貳合　此外貳升出目共ニ

右ノ拂方戌年分

米四拾八俵貳升五合　但三斗七升入

是は大禰宜前々より社役御神事拾一箇度ノ入目、但社家百姓立合、小日記別紙ニ有之、

米三拾俵三斗　但三斗七升入

是は大禰宜より前々つとむる社役御座候ニ付、寺社へ渡、但手形有之、

米百三拾俵壹斗四升三合　但三斗七升入

此金百貳拾貳兩三分京九百文、是は百姓立合□□相極如此但壹兩ニ付貳石壹斗かい、是は百姓立合ね段相極如此、

米三十八俵　御藏殘俵

四口小以貳百四拾七俵九升八合

亥年分

米四十四俵壹斗八升　但三斗七升入

御神事入目、右同斷、

米三拾四俵貳斗六升四合　但三斗七升入

寺社へ渡、右同斷、

小以高

あり、御藏米にて被下候御旗本百俵取ハ百石と云、但シ御張紙三拾五石を百石と立るハ、三ッ五分の物成詰を以て如斯、然ば四斗壹升俵に廻し高に見ても右の心也、然れば四斗壹升を四ッ壹分と見る時ハ、直に四ッ壹分の免を以て高を見る方利方近し、且俵と見るには、四一俵壹俵に付永拾文宛、諸入用を免ずと云事を見付ん爲成べし、此引落し永の儀、何れにしても利分り難し、如何樣の譯にて、四口合永の內、四一高百石を永壹貫文の位と見て引落し、殘を元永にする事歟、所の者も丟らず、前々古老の役人にも知る者なし、長谷川氏案の通、四一俵壹俵に付永拾文宛諸入用を免ずと云てもつまらぬ事也、此免じ方如何樣の意味を以て免ずるや不審也、此四一高の事普く尋求るに、今に知る人に不逢、身の不肖とす、

〔地方凡例錄一〕一四一高之事

四一高ハ國々に有高にハ非ず、奧州伊達信夫宇多三郡に用ひ、此高ニ而仕出す、夫錢七百文替出目と云高掛り小物成ある故、其年之取米を以掛たる高也、依之年々不同あり、鄕帳ニハ右小物成之肩書ニ四一高を記置、右二品之納物餘國ニ不聞、奧州之內ニ而も、此三郡ハ七石代之場所故、年貢納高他國他郡ニ稀成安石代なれバ、取米ニ掛る大造成小物成あると見へたり、

但四一高仕出樣ハ、本途見取總取米を四一ニ而除キ、位を一位上げて四一高と呼、縱バ取米千石を四一に除けバ、貳百四拾三石九斗貳合四夕貳才と成る、是を一段上げて、貳千四百三拾九石貳升四合貳夕と見て四一高と云ふ、

〔地方凡例錄一〕一小以高之事

小以高ハ高之名目ニハあらず、小〆之儀也、縱バ高三百石之村、上田高〆八拾石、中田〆百石下田〆百貳拾石、都合三百石之處、上田之分幾口も寄せ付八拾石ニ成る所ニ而、小以高八拾石と認め、中田下田も同然都合ニ而、合高三百石と認る、都而內之小〆を小以と云、勿論高ニ不限、米金其外

百文替出目と云ハ無之、奥州伊達信夫ハ、上杉家臣直江山城守給領の地たるにより、山城守自分の作法を以て、右兩様を定むと見へたり、今諸士拜領の地に家々の作法有り、御料定式の法とハ格別異なり、直江が領知も右同斷たるべし、

一奥州村々古來ハ定免の地と見へたり、四一高を以て役家數を定むるは、永米定免ならでハ極め難し、

一羽州にて取立る夫錢と云は、古來米澤城内臺所入の薪取候場所無之村方ハ、他所の山を調、遠方引取納候故、何れも運送の道法遠く、人歩數多難儀に及候故、百姓願に付、持高壹石に永六文宛薪代を出し、是を夫錢と號し取立來候由、尤城内へ遠近の村共に薪取納候故、此方より相やみ、右の法を以て夫錢取立來り候段、古老の說なり、

一同國足前と云ハ、同國の大石田河岸（須田湊より三里手前なり、清川廻りの河岸也、酒田湊通り御城米津出しの河岸也、）より、米澤城内迄行程三日路程（米澤領ハ海へ遠く、四方山にて取廻す、然れども打開きたる所なり、おふたと稱なり、）の所、百姓役に城詰の鹽を牛にて付ヶ運び候所、是も人馬夥敷掛り、往返の里數遠く失却多く、其上百姓農業の妨と成を以、役永納に願、家壹軒に、壹ヶ年に日數三百六十日の積りを以て、一日永壹文宛永納に仕來候引付を以て、今定納物に成、取立候由村老申之、右之類ハ當時跡方も無き納物也、是等の類、奥羽兩國に數多し、先年奥州の御代官に後藤庄左衛門被歎之、右無跡方定納の分ハ、御免許伺有之候得共、年久敷納來候得バ御免許無之、如斯の類ハ私領上地の節、逃して引渡候歟、又ハ請取候御代官より、吟味し上免許伺可有之事なり、

一右兩様の取立物、羽州一國にあらず、城付村々計りなり

一四一高の說區々にて、碇と其發りを知る者なし、前書の三說の内初說尤也、四一俵と見るを次とす、何れも落る所ハ同意也、四一高と云ハ、高に極る所、歷然也、然れ共壹俵壹石と見るにも謂

文の出目を取るなり、

右四一高幷七百文替出目仕出算術前書の通り也、然れ共右の發り其所にも知るものなし、爰に御代官長谷川庄五郎の考へ左之通り、

一四一高と云ハ、總取米四斗壹升俵に直したる俵數の儀を云、

一足前ハ古來役家壹軒に壹ヶ年を三百六拾四日に極め、一日壹文宛積納來り候へ共、增減入組候に付、定納役に成、壹ヶ年三百六拾文宛納之、柿木役右同斷、

一出目永取立ハ、取永に一〇三を乘じ、元永口永共に出る、此内へ夫錢足前柿木役を加入して、永都合の内四一俵壹俵に付、永拾文宛諸入用を免じて引之、殘永を出目仕出の元永を七にて除き金高に成此金壹兩に付三百文宛の出目を取也、是ハ當金壹兩ハ永壹貫文に對様する謂れ也、依之右七百文壹兩の金高へ三を乘じ出目永を出すなり、此出目永へも口永掛るなり、

又曰

一足前取立の儀、古來ハ四一高六拾壹石五斗を役家壹軒と定め、足前と名付、右役家壹軒ニ付一日永壹文宛の積り、壹ヶ年三百六拾日と極め、永三百六拾文宛取來り候よし、

一出目永取樣、右同斷、並加へ物の儀、前書の外に、茶園役定納永を加へ、五口合て差引なり、

一元永と出目永計へ口永懸り、外の家へハ口永不掛

一私に曰、四一高、幷出目夫錢足前の法、奧州一國都て用之と云にも非ず、然れ共右傳に古來といふは上杉百万石領知の節を差て云歟、伊達信夫郡專用之、尤上杉領知減少以後、右法不用の所も有べし又土地の樣子、村柄に寄、領知外にも右之法をかるも有べし、右の法發りを云時ハ、上杉を始めとすべし、其證ハ羽州米澤ハ、代々上杉の持城にて當時も居城たり、其城附領知同國置賜郡村々納物の内に、夫錢足前と有、奧州の夫錢足前も右に准ずべし、但羽州にも四一高七

是は田畑米取にて永取也、取米を二ッに割、半分ハ永取に成、定直段七石代を以て永に直す是半石半永と云なり、關東貳石五斗替の心也、羽州六石代也、

四一高幷夫錢仕出之事

四一高千七百八石八斗七升八合
一永拾貫貳百五拾三文三分　夫錢 但四一高壹石ニ付永六文宛

此四一高の仕出樣、本途米四ッ一分の免を以て除き四一高を得る、四一分は古來の定免厘と云り、此厘を以て古來の高を仕出には、此夫錢ハ古來引付の掛り物なれバ也、右四一高壹石に付、夫錢永六文宛、往古より取來るなり、

七百文替出目仕立之事

一永五拾貫四拾六文　元永

此口永壹貫五百壹文四分　但壹貫文ニ付三拾文宛

合永五拾壹貫五百四拾七文四分

一永拾貫貳百五拾三文三分　年々増減 夫錢

一永五貫九拾八文　定納 足前

一永六拾三文　同 榑木役

四口合六拾六貫九百六拾壹文七分

内拾七貫八拾八文八分引
此四一高千七百八石八斗八升八合　但四一高百石に付壹貫文と見へたり

殘四拾九貫八百七拾貳文八分　元永に成

此出目永貳拾壹貫三百七拾四文壹分

此出目永取樣、元永を七百文除き、七拾壹貫貳百四拾七文と成へ、出目永三百文を乘じ取也、

是は古來永七百文を以て金壹兩に通用せし處、今永壹貫文を以て金壹兩とするに寄、三百

五拾石ハ何ぞ子細有之、年貢ハ納諸掛物除くを除高と云、又は年貢諸役は村並に相勤るとも、普請人足等、本田ハ相勤、新田高は不相勤などと申類も有之、其品により除くも除高と云、除地見捨地とは違ふ事なり、

除地高

〔地方凡例錄一〕一除地高之事
除地と申は、御朱印地ニ續き重き事ニ而、寺社境內、幷免田畑居屋敷等、無年貢之御證文有之歟、又は前々撿地帳外書ニ除地と記有之分は、高有無共除地ニ而、其外之無年貢地は見捨地と唱ふ、勿論寺社領等高反別有之もあり、又反別は有之、高ハ無之もあり、無高無反別之場所もあり、高有之分ハ除地高と云、其外は除地と計唱る也、村々墓地死馬捨場等を除地と心得る者多し、是ハ除地と申物ニは無し、撿地之節、繩外見捨地なり、右之外ニも道川溝堤等、撿地之時分、繩外見捨ニ致す地所種々有之、何れも水帳外書ニ記置事也、

〔極秘錄〕慶長九辰年撿地入て、城付は城主自身撿地差出候高、御領は伊奈備前守家次爲總奉行町反を改、○中略其村免除地等は、高五石地迄家次墨印を出し、五石以上は御朱印を申下せし也、

四一高

〔地方落穗集五〕奥州四一高幷七百文出目之事
一奥州伊達信夫二郡の內に四一高と云有、又七百文替出目と云有り、右何れも取立物に用る事也、但四一高七百文替出目共に取箇の增減に拘る、右仕出し左に記、右兩樣の發、知る者なし、說區々也、是又左に記、

取米合七百石六斗四升　本途
米三百五拾石三斗貳升　取米
內永五拾貫四拾六文　永取
此米三百五拾石三斗貳升　但金壹兩ニ付米七石代

附致様にと被仰出、當時に而は畑に桑類有之候とも、植物にハ不構、外畑並其土地相應之位付致す故、古撿之村は格別、新撿之村方ニハ、桑高抔申儀無之事なり、

楮高

〔地方凡例錄〕一楮高之事

楮高附るも桑高同様ニ改め、壹束高五升ニ積る、或はほき短きは三四升にも極め、其外取計方桑高同然也、尤桑楮とも、民家助成之儀は格別勝劣無之といへ共、桑は葉共ニたばね、楮は葉なき枝計りまろぐるもの故、同じ三尺繩〆ニ而も、正味多少有之ニ付、楮之方高を多く致す事也、是又畑ニ有之分、當時之撿地ニハ、植物ニ不拘、地位ニ而石盛附る事なり、

抓高

〔地方凡例錄〕一抓高之事

田畑無反別ニ而、村高計有之所有之、撿地時代も不知、勿論水帳もなし、何を以て高を附たると云濫觴を不知、是は上古高反別等無之、稲之束數を以年貢も納め、百姓持地も何拾束苅何百束苅とし而、田地之取遣りも束數ニ而致し其後貫高永高石高等追々ニ始り、諸國撿地有之たる所、極山中往古ハ人跡も不知場所等、度々之撿地ニ洩れ、或ハ文祿慶長以後開發之村、遠境片鄙故、國府へ不知村抔有之、後世ニ至り年貢納る様ニ成り、百姓小前銘々持分之高ハ不積して、一村一つかみに何百何拾石と極たる村稀ニ有り、是をつかみ高と唱る、ケ様之村方は都て定免にて、小前之石高は無之、取米高ヲ銘々持高として、諸役幷人夫等も取米辻ニ掛相勤る、永祿年中、江州淺井之幕下多羅尾何某と云人、淺井沒落後、同國甲賀郡山中へ隱れ、初而村居をなし、今多羅尾村とて高八百石餘之村あり、高計ニ而無反別、則抓高なり、尤抓高と云唱計、書物等之名目ニハ不記事なり、

除高

〔地方凡例錄〕一除キ高之事

除キ高と云ハ寺社境内、或は神佛免等村高に結び、高内引に相立、年貢諸役不相勤高を除き高と云、又年貢ハ納め、外高掛り物人足等不差出高有之、縦バ三百石之村ニ而、貳百五拾石ハ諸役相勤、

桑高

別付たるもあり、無反別之場所ニ而も高入ニ致し、年貢ハ其村定免通りに納め、又ハ本高之内より拔き、野高永を別段に納るも有、前條くこ眞菰萱等高と唱るも有之色々也、下總國海上郡銚子抔之野高ハ、都而入會之小松麁朶立秣場等、村高之外ニ而野錢相納む、

〔地方要集錄〕一桑高之事

是は撿地入候節、畑中に有之桑之木束廻に見立、三尺繩〆して壹束ニ付高三升ニ極也、或はほき短時は高貳升にも極也、又は桑之大木は葉をこき遣ひ候事故、是等は右之桑束廻に准見積る事也尤株潰地は竿を除る也、併古來之撿地に潰地不除所もあり、然れば二重に年貢を出すなり、無理なれども今更改がたし、

〔地方凡例錄〕一桑高之事

撿地之節、桑畑高ニ結ぶは、桑三尺繩〆にして、壹束を高三升之積り、若ほき短き時は貳升にも積る桑之大木ハ葉をこき取事故、右之束廻りに准じ見積る事也、桑畑桑之間々に麥作抔仕付るも有り、其村之外畑並位付有之畑へ植付有之桑に、桑高別に結び入るは二重高に成に付、桑高ハ不附、勿論桑之間々之作物ハ木陰に成出來方不宜故、撿地之節、上畑を下畑にも下々畑にも位付可致事也、撿地以後、地主勝手を以畑を潰し桑仕立たるハ、桑高可附義ニ無之、尤畑之廻り空地ニ仕立る歟、又ハ山原等之空地ニ仕立る分ハ、桑高附ても宜けれども、古來より無之儀ならバ高ニ不結、右高之當りに准、桑年貢申付て、可然束に致す刈桑は葉性宜敷大木ニ致シ、葉をこき取は葉性も不宜分量重高ニ見へても、刈桑程無之故、束數積る時、其心得可有事也、大木之桑、上州利根郡、甲州郡内領抔有之、一體地性不宜所ニ有之、又ハ奥山家抔ニ而すわひを切れば、本木枯而ハ刈桑ニハ難成、大木ニ致置、葉をこき取事なり、桑高之儀、古來ハ前書之通致すといへども、近年撿地には桑高といふ事無之、桑に不限、楮茶漆等にても畑ニ有之、撿地之節、植物ニ不拘、土地之位ニ而石盛

山高

格別、新規高入は不二相成一由、尤の事也、下總國海上郡銚子領村々海高は、元和之頃ゟ始り、又元祿年中私領上知に成、設樂勘左衞門御代官之節ゟ始りたる村も有る、尤何れも村高之外に而、本途には不レ入、海高拾石に役永凡壹〆文程づゝ納む、村に寄少しは員數不同有り、古來高之入之譯、村方雖二相糺一今知るはなし、勿論是ゟ是迄の限も不レ知、又同所川附並之村にも、海高なきも有、越後國蒲原郡信濃川五十嵐川などの大河あり、鮭鱒の大漁あれ共海高なし、

〔地方要集録〕一山高之事

是は村中入會山有レ之、山稼等致候に付、山高を受、本途並之年貢を出ス事也、但此山詰樣之事、古來ヲ開合候處、撿地之節、反別改候事に而無レ之、山稼其助成ヲ見積リ、米ニ而取立候時は、何石之年貢ヲ出シ可レ然と申處ヲ見立、其村之免合を以、高ニ直シ申事也、且又村ゟ新撿を受、古撿之高合不足候時に、本高減がたく候ニ付、幸山稼も有レ之ニ付山高に受、元高合候樣に致候類も有レ之候、村々申傳候由申也、

〔地方凡例録〕一山高之事

村中入會之山有レ之、山稼等致ニ付、山高を請、本途並之年貢を出し、村高に結び入る、此山高結樣、撿地之節、反別を改る事にもなく、山稼の助成を見積り、納來りたる役米、其村之免合に見合せ高ニ直す、又ハ村々より新撿を請、古撿之高に不足有レ之時、古高難レ減、山稼も有レ之ニ付、山高を請、本高ニ合せ置事も有り、又は嶮岨巖壁等に無レ之山ハ、反別改、田畑石盛之位ニ應ジ、高ニ結ぶ事も有り、且又下々畑山畑抔と云名目ニ而、實ハ畑ニ無レ之篠朶立木之山有レ之、是等ハ山高とは不レ申、畑高ニ入れるとなり、

野高

〔地方凡例録〕一野高之事

野高ハ大方山高ニ類し、秣場等入會之場所にても、又ハ持限之原等、或ハ萱立之野方抔致二撿地一反

海高

又前書之品々、古來より高に入有之類ハ、其品致撿地高入ニ成、慶長年中、美濃國撿地帳桑高楮高あり、何れも拾把を壹束として、高三升より五升位迄有之、一定ならず、其村桑楮之善惡を心付シ事ニ哉、然れバ小物成高とは少譯違ふといへども、右信州之小物成を高に入たるは、色高と記有之ニ付、區々と相見へ高之名目ハ格別、規定も無之と見へたり、

〔地方凡例録〕一海高之事

是は漁獵有之海川に付村方高に結、水帳にのせ、本高同然年貢高掛物に納るも有、又水帳に不載村高の外に、海高何拾何石と記、役金銀納るも有、古來如何之譯に而、高入致たる哉不知村方多し、尤海川附には、都て海高有にもあらず、海高有村は先は稀にて不可定、古來よりの仕來と見へたり、勿論古へよりの事とは不聞、關東御入國以後之義と相見ゆる、當時海高有村々も、海上は空なるもの故、何方ゟ何方迄、高之內と定たる事もなく、高に結び方何ヲ以高壹石と極たる哉も不相知、併古來極めたる時分は、當なしに高には入間敷、定而小物成高之樣に、其所之漁獵或は海草等之所務ヲ積、金銀何程上る漁方に付、米金銀何程迄は納も能きと遂穿鑿、田代同前と見て高に結たるとみへたり、又漁方に而も年々所務有之故、高に結び、年貢役金銀納るも能と心得請たる成べし、然ル田畑は、年々種を下し、立毛生ずれば、末代盡る事なく、然共田地すら流作不定地は、高に不結、反高等に致置、況哉海川の漁獵又は海草の所務においてをや、濵の模樣惡敷成ものは、風雨地震等之天變に而、海川の淺深も違へば魚寄らず、魚類は己が住能き方へ至る、然ば今日魚の寄ても明日は慥ならず、海草非情之もの成共、是迚も根盡る事有、種を下し肥ヲ入、修理を加へ、生育する作物さへ、天地の變に而年に寄り、風水旱虫之難あり、生きものは心任せ成る故、曾て極たる事なし、魚不住、海草枯盡たる時は、手入も不成、海高は所々負物と成り、村あらん限、末代迄之煩なり、ゆへに中古改りて海川を高に結ふ事停止と成り、當時は何程大漁有場所にても、役永運上は

地高ハ大方高内引になる右體四木之類、高に結び入ル分ハ、引物にハ不立、割付等村高之脇書ニ、何程無地高と見せ物ニ記し置く、又ハ古撿之村方、新撿入り、何ぞ子細有之、石盛直り、古代之石盛より新撿之方低く成、反別ハ格別増減もなく、高ハ古高より減じたる處、村高ハ難減地所は無之故石盛違之分無地高と唱、高内引に立るもあり、或は古來何故無地高ニ成たる哉謂不知、仕來りに而村方も不知類多し、何れにしても田畑反別に石盛を掛けて、餘りたるは都而無地高なり、

一無地高總村親高ニ而、高内引ニ成り居るは格別、村中辨へ高ニ成、總百姓江割合ニ成る負高、寺社高へは不掛例なり、近年三州長澤村洞泉寺、同村之負高之儀ニ付出入之節、無地高ニ而も負高ニ成ル類、向後寺社高江不掛樣にとの御裁許有之たり、

〔地方要集錄〕一色高之事

是ハ桑楮高、漆高、麥苧高、くこ、まこも高之類なり、總而右之類など有之を高に結候場所多有、但右之畑廻ニ有之分ハ、大方ハ品をかぞへ立、分米作事、

〔地方凡例錄一〕一色高之事

桑漆楮茶青苧くこ眞菰抔之類、空地又ハ畑廻り等ニ植立有之分、其品を算へ積り立、米を附ケ高に結び、村高に組入るを、都而色高と云、慶安年中、信州之撿地帳ニハ、野手米山手米抔之小物成ニ高を附、本途高内へ入、色高と記、免五ッ四ッ取も見ゆる、四木高等ハ其品之名目を顯し、桑高楮高抔と記もあり、又はくこ眞菰菅高等を野高と記も有之、唱方ハ樣々也、一體色高と云は、小物成高之異名之樣成物也、何れも高ニ結び方ハ、其品の價高下を考へ、又ハ納來りたる役米永辻を、米ハ壹石の高貳石、永ならば五石替ニ積りて高入致事也、割付鄕帳等ニ記シ方、其節之役人心々ニ而、色高とも、小物成高共、或ハ其品之名目何高入とも記義と見へたり、尤小物成の類を高ニ結ぶハ、村替知行渡等之節、物成詰ニ而、定納小物成米永ニ高を附、本途高ニ結び入るを小物成高と唱へ、

無地高

所切添等も有り、旁地廣ニ成居ル故、新撿ニ成ては、孰れ村高相增也、併年々多分之川欠山崩、或ハ海欠等にて、高內引多く地所減じ有之村方、新撿ニ成、却て高減るも有之なり、

〔大福寺文書三〕辰之御繩打ニ而

一高拾貳石壹斗六升三合　出目。　金剛寺分

一高拾石六斗九升九合　同　神明領分

一高拾三石三斗六升三合　同　摩訶耶寺領

一高拾八石壹斗七升四合　同　大福寺領分

一高九石四斗四升　同　神秘分

總出目六拾三石八斗三升九合

右之出目、請御意、是非落著可被成候はゞ、先覺書如此候、

辰八月十一日　袴田善兵衞

(頭書)慶長九年甲辰八月、御繩打案內者、撿地役人名印の御圖帳現存、其節の打出し高如此、

〔地方要集錄〕一無地高之事

是ハ有來候上中下之反別ニ石盛をかけ寄候時、只今迄之割付高不足之分を無地高といふ、然ども石盛有步慥成場所ニハ、無地高といふ事少し、大方石盛不分時、申傳之村方ニ有之候事、所ニより石盛慥ならず候とも、無地高有之儀もあり、

〔地方凡例錄一〕一無地高之事附無地高之類負高寺社江不掛例之事

有來上中下之反別ニ石盛を掛寄せ附る時、只今迄之割附高に不足之分を無地高と云、然れ共石盛畝步慥成村ニハ無き事也、又ハ作毛之外、桑楮茶漆抔多分有之積り立米ニ直シ、高ニ結び入、村高を殖シたるもあり、是等之類小物成高と名目を附るもあり、又ハ無地高と唱ふるも有之、尤無

取ヶ附候而も、餘少計之取ヶを付候へば、高役も同事之樣に成候段、不得止候而、高取無之、反高に而差置候、

一反高之事

是ハ新田取立候得共、百姓も多く不縣ニ付、芝地等ニ而開發成兼候處ハ、位なしに反別を改、取箇申付候場所之事ニ候、上中下之位を積り、石高を請候てハ、御取箇殊之外不足ニ而、下免之場所ハ反高にて差置候、但田畑反高之心ニ候得共、反高とは村居なし、無高之事をいふ、

〔地方凡例錄〕一反高之事

新田取立るといへども、芝地等にて至而惡地、又ハ池沼等之植出し堤外不定地、出水之度毎押流ス樣成場所、反別計至撿地取箇を附、高ニ不入田地を反高場と云、右體之地所を高に結びてハ、年貢之外ニ高役之諸掛り有之、取米之外ニ高掛物出す故、一向仕當ニ不引合、作り手無之、又作德も有る樣に致すには、至て下免ニ不致してハ難成ニ付、高ニハ難結、反別計ニ而年貢計納る也、關東ニハ沼地等多く、反高場間々有之勿論村居等なく、本村持添多し、併一概に村居なし共難云、反高ニ而一村相立有之所も稀ニハあり、先づハ多分持添なく、開發後、追々地馴、高にも可成地所なれば、反高にハ不致、見取場ニ致置、後年地馴たる上相改、高入ニ致せども、前書之ごとき地所ハ、始終迚も高ニ難結、反高に致す事なり、

出目高

〔地方凡例錄〕一出目高之事

往古之撿地ニ而、村高縱バ千石有之處、出入歟又ハ何ぞ子細有り、新撿成たる時、高千三百石ニ打出せば、千石ハ古高三百石を出目高と唱、又ハ撿地出高共いふ、上代ハ六尺五寸竿、或ハ四寸竿も有り、壹反三百六拾歩之積、天正文祿頃之撿地ハ、六尺三寸竿、壹反三百歩なる處、新撿ハ六尺壹分竿ニ而、三百歩ニ付反別餘計ニ成、其上古撿ハ餘歩も格別多く、又ハ山附川添空地有之村方ハ、地

天文廿一壬年〇文禄元年十二月九日

高野印

佐藤印

百姓中

〔佐渡志二官員〕河原田之内山田村　青柳刷

合四万參千貮百拾五束刈　指上見出共

右引方

貮千八拾壹束刈　文二ノ永不作

貮千百六拾四束四把　文三ノ永不作

九百貮拾七束刈　文四ノ永不作

八千貮百六拾五束刈　文四ノ當毛無

殘而貮万九千七百七拾七束四把刈　御藏納

此米貮百五拾石壹斗三升壹勺六才　御藏入

以上

文祿四年十月三日

大井田印

白川印

宗無齋印

青柳印

御百姓中

反高

〔地方要集録〕一新田等悪地之場所は高を不附、反高と申候而、町分計記候而、相應之取ケを附置候所、關東ニは數多有之事に候、高を附候得ば、高役掛り候故、高役之上に年貢納候儀成兼候、たとへ

同所百苅　　　　　　　　今は八斗壹石貳斗升定　　竹彥左衞門今はせん太郎
同所五拾苅　役四升　　　四斗升定　　　　　　　　同ありむま今はひけ郎右衞門二
同所百刈　　　　　　　　壹石壹斗升定　　　　　　上村孫七○中略

以上

此外太業役在之、惣本帳之旨如此、

大永六年十月　日寫之　　　　大弼基俊判

〔佐渡志一田土〕室町家ノ時、○中略拾貫百貫ナドイフコトニテ租稅ヲ定メタリシコト、自餘ノ國ニ均シ、○中略天正十七年己丑、上杉家コヽヲ併セ領セショリ、幾苅ト云フヲモテ稱セシト見ヘテ、其年ノ霜月、黑金尙信ガ渡太鄉熊野ノ祠官ニアタヘシ狀ヲ始トシテ、熊野祠ノ條ニ出ス悉クシカリ百苅ト云フハ、京升ニテ八斗四升ナリト云ヘリ、古文書

慶長三年戊戌、上杉家所領ヲ奥ノ會津ニ移サレテ、此國豐臣家ニマイラセシ後モ、租稅ノコトドモ舊キニ依シトゾ見ユ、○中略同ジキ六年辛丑關東ノ御料ニ併セラレテ、萬制度モ立チタレド、未ダ撿地ナド云フ事ニモ及バズ、唯幾千幾百苅ヲ何石何斗ノ稱ニ改メタル迄ニヤ有リケム、

〔佐渡志二官員〕河原田之內山田村片貝村御撿知一紙

參万五千七百拾五束刈　　指上
漆千五百刈　　見出
　此外ニ
六百刈　　兩中使免
參百刈　　兩村之江料
右何も佐渡刈也、百刈ニ付而、京升八斗四升宛也、仍如件、

百五拾苅（在二邑智院一、すゝめと號、）　入道職之分

七拾苅（在二一宮一、號二二階寺一、）　座主分（寄進）

六拾苅（在二一宮一、號二尾花崎一、）　同分（中略）

已上目錄之田畠幷屋敷等之事、爲二當院領知一可レ被レ全二所務一者也、

明應八年十二月廿四日　義元（花押）

一宮藥師院

〔能登國氣多神社文書〕一宮社務領御年貢米錢納帳

一宮分

若宮田　七拾苅　役米五升六合　七斗貳升升定　延命院

一宮大坪　百苅　役八升　壹石貳斗升定　同（今ハ出雲守殿）、

竹上野　百苅　同　壹石升定　東町　御屋

中の坪　百苅　同　壹石壹斗升定　大行事（今ハからきん）

平江中田　百苅　同　參俵升定　番匠孫六

大寺竹がはな　八十苅　役六升四合（此內廿苅不作壹斗八升八合引）　七斗五升升定　但馬

竹上野　百苅　壹石貳斗升定　まち　かち大工

小深田　百苅　壹石升定　同所

竹上野　百苅　壹石貳斗升定　町　七郎次郎

同所　七拾苅　役米五升六合　八斗四升升定　勾當

同所　七拾苅　同　八斗四升升定　小行事

同所　七拾苅　同　八斗四升升定　西町　こう屋

右開撿知增分百拾苅文明十九卯月十三日

一本田千三百拾束苅文明十五九月晦日　名木野　同袋藏人丞給分

合參百拾束苅

右開撿知增分九百苅同十九卯月十九日

一本田三千三百七十苅文明十五十月四日　中條田井　同玉火新左衛門尉給分

合貳千貳百拾束苅

增分三百三十苅

右開撿知千百苅同十九五月三日

合四千八百苅〇下略

〔能登國氣多神社文書〕一宮藥師院住持職幷諸職免田之畑永代諸買得等之事

合

定任職　中河職

勝定坊　定任坊

法花坊　半村地

百苅在一宮手筒、號太田、　定持職之分寄進

百貳拾苅在千田、號竹之鼻、　友松名之分

貳百苅在同所、號富田、　入道職之分

百苅在圓井、號馬渡、　同職之分

貳百苅在一宮平江、號手筒、　安光名之分

貳百苅在千田、號馬渡、　光弘名之分

ヲ以テ高ヲ割、平均石盛ト成ルナリ、合毛差加ヘ、右當リ合ニテ差別割也、

右五箇村

高五百八拾九石四斗七升三合

此刈一萬九千六百四拾九束歟ト

此反別四十九町一段二畝八歩二五但四十束刈ヲ以テ一反ト極ム

トアルナド、古制ノ今ニ髣髴ト存スルニテ、延喜主税式ニ、凡公田獲稲上田五百束、中田四百束、下田三百束、下々田一百五十束トイフ、中田ノ束數ヨク符合セリ、延喜式ハ一町ノ束數ヲイフコレモ國々不同アリテ、一定ハセマジケレド、撈海一得ニ云フ、齊東野人ノ語モ、格物ノ一助トナル事多シ、三越奥羽北邊ノ國ニテ、田産ヲ數フルニ何クカリトイフ、富民ノ産ヲイフニ幾千刈幾萬ガリト稱ス、其高ハ定カニ知リタルモノナシ、先年越後北部ノ老農ノ一奴ニ問フニ、日田四百坪ヲ一反ト云フ、是ヲ百カリトシテ、男一人ニテ五百カリノアテニ作ラシム、田五反百カナリリヨリ穀モミ二三石ヲ得ルテ上中下田ニ不同アリト是ニテイクカリトイフ事シレタリ、決シテ貫高ヨリ出シ稱ニハアラズ、

〔越後國檢地帳〕長尾彈正左衛門尉方分　下條高波保

文明十五拾月四日
一本田千六百苅名木野　被官玉虫新右衛門尉給分

増分貳百貳拾苅

文明十九(長享元年)卯月十日
右開撿地増分七百九拾苅

合貳千六百拾束苅

一本田五百四拾五束苅松尾漆山　同宮原給分

増分三百六十苅此内三十五束苅、文明十五不作以後、爲ニ起目一入ニ松尾分一也、

同十九卯月十九日
右開撿知増分千三百苅此内六百苅起目、名木野、

合貳千貳百五束苅

文明十五卯月廿三日
一本田貳百苅名木野　同田鰭彥三郎給分

ベキヤ其可否ヲ知ラズ、唯州内一般ノ習風タルカ故ニ、若古風ノ遺在セルモノカ、其大旨ヲ載ス、
稻一把ハ、農夫ノ鎌ヲ以テ刈揚ル、其掌ノ中ノ一握ナルモノ三ツヲ合セテ一把ト稱セリ、是ヲ積ルニハ、外ニ稻二株ヲ刈リテ、稻穗ノ方ヲ結ビテ繩ノ代リト成シ積ル也、尤此繩ノ代リトセシ穗モ同ジク一把ノ籾ノ數ニ入レリ、民ノ通稱、是ヲ三手内一把ト云ヘリ、此一手ト云ヒ、一握ト云フハ、大指ト中指ニテ握ラルヽマデヲ限リトス、俗中指ヲ六寸指トモ云ヘバ、一手ハ凡六寸圍ホドニシテ、一把ノ圍、凡一尺六寸五分ナル歟、刈揚ルニハ、婦女モ是ヲツトメヌレバ、大中小人ト平均シテ、自ラ中人ニ當ルナルベシ、

稻一束ハ、前條ノ一把十數ヲ以テ一束ト稱セリ、故ニ稻ヲ始メ草木ニ至ルマデモ、總テ一把ト稱ルトキハ、必此法ヲ用ルコト也、或曰、古昔稻六十束ノ地ヲ以テ、一段歩ト定メ、六十束ニ不及地ヲ中下田トスト云フ、今世ノ民ハ、此一手一握ノ掌中ニ、甚ダ異樣ヲ巧ミテ、年ヲ追テ古法廢レントセリ、是下民ノ私ニシテ、全ク一把ノ稻ヲ增シテ、其田ノ束數ヲ減ジ、他ニ見スベキノ爲ナルベシ、
又越中ノ人ノ語リケルハ、稻一把ハ三手ヲ用ユ、一束ハ其十二把ヲ以テ積ネルトナリ、濃州ノ民ハ、古法三手ヲ以テ一把トシ、十把ヲ以テ一束トストイヘドモ、今世ニ三手半、或ハ四手ヲ用キ、敢テ法ニ拘ハラズトイヘリ、

〔田園地方紀原 中〕貫幷貫高之考

鼎川〇桝案ズルニ、〇中略百刈千刈トイフハ、上古稻何萬何千何百何十束トイヒシ頃ノ遺言ナリ、安齋隨筆後集ニ、勢州土人云、稻一束トイフハ、一把ヲ十二合セテ一束トス十二把ナリ一把トイフハ、手ニヨクツカミテ、三ツカミヲ把トイフ、凡一束ハ三十六ツカミ也、田壹段ニテ、勢州ノ邊三十束刈トイフコトアリ、又或覺書ニ、信州水内郡權堂ゴンド村、問御所アヒノゴショ村、荒木村、千駄村、栗田村、右五ケ村、往古ヨリ稻四拾束ヲ一段ニ極メ、高何石、此刈何拾束ト書出シ候ヲ、右四拾束ヲ以テ割、反別ト成、其反別

物成百六拾貳石壹斗五升　　いなり村

一高四百四拾參石三斗六升五合　　ゑそ郡

物成貳百拾貳石八斗壹升　　むかいいつみ村内

高合五千五百石

物成合貳千五百七拾五石四斗八升八合

慶長九年十月十二日　　左衛門大夫花押

尾關隱岐守殿

〔讃岐國總村高帳〕生駒壹岐守高俊公御領分讃岐國郡村幷總高覺帳

大内郡

一高九百七拾壹石五斗三升四合（田畑居屋敷トモ）　　引田濱

一同百三拾七石七斗八合　　鹽屋村

一同六拾八石五斗五升六合　　馬宿村〇中略

高合壹万貳千八百拾六石八斗壹升三合〇中略

寛永十七辰年二月改之候也

束刈

〔飛州志二〕稻之束數考

本土ニ於テ、禾ヲ刈リテ一束ト積(ツカネ)ルノ法也、是上古ハ、國ニ石計段別ナク、町數或ハ稻ノ束數ヲ以テ稱スル處、古記ニ見エタリ、然レドモ其一束ノ法ニ於テハ詳ナラザルカ、按ズルニ、此州ノ民ハ、今世モ專ラ束數ヲ稱スルモノ多シ、既ニ己ガ所持スル田畠ノ高段別ヲバ分明ニ心得ズシテ何百束刈ノ地、何十束刈ノ田ト云ヘリ、年毎ノ稻ノ豐凶ヲ語ルモ、五束刈ノ田ヨリ六束ヲ得、或ハ四ノ束ニ及バズナンドト云ル、民ノ通語タリ、但シ上古ヲ辨ヘザレバ、此州ノ法ト云ヘルモ、是ニ當ル

天正十七年八月初旬より、先西三川より撿地をうち初、其より尾州知多郡をうち侍るに、前高より減じければ、いかゞ有べき事にやとて、其手寄に在し撿地のものども寄合つゝ、評議しけるに、たゞ注進致さんにはゑかじとて、申上ければ、増減は有のまゝに物せよとのみにて、大どかに沙汰し給ひき、

〔集古文書十九 判物〕太閤秀吉公御判物 那須家藏

於下野國那須内、合五千石事、相添目錄別紙、令扶助候訖、全可領知候也、

天正十八
十月廿二日

那須藤王丸へ

〔黄薇古簡集二〕備後國之内を以遣知行方目錄之事

一高千四拾九石貳斗九升六合　ほんち郡みやうち村之内
物成四百四拾石七斗五合　やすい村
一高千九百五拾參石五斗六升八合　みかみ郡
物成九百五拾壹石九斗八升五合　たか村
一高六百貳拾九石五斗貳升四合　ぬか郡
物成參百拾八石九斗四升四合　大さ村
一高四百八拾參石壹斗四升　みよし郡
物成貳百參拾石九斗七合　ひつた村
一高六百拾四石貳斗五升四合　かうぬ郡
物成貳百五拾七石九斗八升七合　ありふく村
一高參百貳拾四石三斗　同郡

一蜂屋　三万石加増

〔太閤記 四〕前田又左衞門尉利家末森之城後攻之事

利家利長、今度佐々内藏助政〇成家中之歷々數多討捕、首共秀吉卿へ持せ進せし事、偏に奥村が所爲也、さらば感狀つかはしてんやと、兩人相議有て、

今度遂二末森籠城一、令二苦戰持定一、無二比類一忠節、令二大慶一候、雖レ爲二少分一、爲二加增一、以二押水之内千石一令二扶助一畢、并與力之者三十人附二與之一、依如件、

天正十二年九月十六日　利家

奥村助右衞門殿

〔太閤記 七〕金賦之事

秀吉公御藏入領二百万石餘有しかば、金銀米錢あつまりぬる事夥しき事なり、かやうに逐年財寶あつまり來たるを、施さゞれば慳貪くづれとやらんにあふよしなり、左もある事もやと由己法眼に問給ふに仰いと宜しく侍る旨申上しかば、さらば施してんよとて、天正十三年初秋の比、金子五千枚、銀子三万枚、諸侯大夫等に施し給へり、

〔太閤記 八〕古今各知行割之事

一秀次公尾州を臣下に分與なされしは、よしあしの地をくみ合せしかば、諍論之事多く出來き、傍輩中不和やうに聞しめし、さらば撿地被二仰付一知行割なされかへんとて、撿地の者一郡へ三組づゝ出し給ひて、〇中略制書左のごとし、

覺〇中略

一昔は田畠たりと云共、當分河に成候はゞ、高に結び入まじき事、

右無二相違一可レ守二此旨一者也

一三十石　交山分

一二千石　小倉越前守分同右近大夫分共ニ

已上五千五百十石

此外

市原四郷一職ニ加之

右所宛行也、全領知不可有相違之狀如件、

元龜元年五月十五日　信長御朱印

蒲生左衞門大夫殿

同　忠三郎殿

〔淸正記〕一御感書に云

因幡國鳥取之城爲可責崩著陣、爲物見遣候刻伏兵起候處、以半弓敵を射退、其上太刀打之高名、誠以神妙之至也、因茲爲加增百石宛行之畢、彌於抽軍忠者可加增者也、仍如件、

天正九年六月廿九日　秀吉御判

加藤虎之助殿

〔太閤記〕三信長公御跡知行割之事

若君〇織田秀信十五歲にならせ候まで、明地闕國の地預り侍る目錄、〇中略

一勝家　江州之内長濱　六万石

一池田父子　大坂尼崎兵庫　十二万石

一長秀　若州幷江州内高島志賀二郡

一瀧川　五万石加增、此外北伊勢を領す、

一高頭四百六石壹斗五升四合九夕　尾州　木田村
此物成貳百三石七升七合五夕　但五物成
右高合七百七拾貳石四斗八升四合九夕
右物成合四百四拾六石六斗七升七合五夕
已上
一高頭千五百六拾五石貳斗　但四七分物成　井口村
此物成七百四拾八石七斗七升五合
右馬場村木田村兩鄉高之替物成替之積に仕候へば、井口村にて高頭九百三拾壹石貳斗五升可相渡、右兩村之高に井口村之内高頭百五拾七石五斗多相渡算用也、高殘分六百三拾三石九斗五升有、但右内荒分四百拾八石三斗貳升引殘る高貳百拾五石六斗貳升か、
文祿三　二月四日
此分、民法へ於大坂相渡、
〔氏鄉記上〕諸大將追討事
信長卿江州へ下向有テ、國中ノ城々大名共ニ被下、仕置ノタメ數多籠置レケリ、又當國ノ住人幕下ニ屬セシ輩ニモ、本領安堵ノ御教書ヲ被出ケルニ、此時蒲生父子ニ、爲加增被下シ御教書ニ云、
領中方目錄
一千石　吉田分　一四百石　赤佐分
一八百石　安部井分　一五百石　河井分
一三百石　大塚分　一二百石　横山分
一二百五十石　栖雲分　一三十石　梅若大夫分

後人ノ八千石三千石ニアタル地ナレバ、如此書タルコトニモアランカトモ疑ヒシニ、田政考證ニ、伊藤氏藏古文書雑纂ヲ引テ、左ノ文書アリ、

坂田郡二萬五千石ハ爲御臺所入、如先々有手長可有運上、永不可有相違之狀如件、

六月十七日　柴田修理亮勝家

惟住五郎左衞門長家

羽柴筑前守秀吉

池田勝三郎孫興

堀久太郎殿

如此アリト云フ、コレ米二万五千石ト云コトニハアラズ、高二万五千石ノコトナルベシ、此頃ヨリ間々石高ヲ稱セシモアリシナルベシ、我常陸ハ、文祿三年ノ撿地以前ハ其事ナキト見エ、文祿四年ノ文書ヨリシテ、何百何十石ナド云ハ見エタリ、

〔勘定所指出方勤方心得書〕一越後國現石高之事

是は越後國新發田領一圓、現石高と唱候高之義前々其村方之取米を、直ニ村高ニ極候場所ニ付、取現米、直ニ高に成候事ニ付、現石高ト唱、縱令高百石取米も、百石或は百石餘も有之、至而高免ニ相當リ候、右之通ニ付、外村方と違ひ、計代石盛等も無之村方ニ有之候、

〔駒井日記〕文祿三年二月四日

一高頭三百四拾七石九斗八升四合　尾州馬場村

此物成貳百四拾三石六斗但七物成　尾州馬場村內

一高拾八石三斗四升六合

但是は河口久助荒すをおこし中由、百姓さし出之外有、

る様千石之高を減少いたし渡す儀ハならざるニ付、三ッ五分ニ可當る村方を糺し割合相渡ス、〇下略

〔農政座右二〕石高

鈴録ニハ、石高ニ定メタルハ浪人衆ヨリ出タリ、浪人衆本領ニ放タレテ他國ニ仕フル者ニ、當分廩米ヲ與ヘタルヨリ起レリトイヒ、田園類說ニハ、文祿慶長ノ頃ヨリ撿地改マリテ、地面ノ上中下ヲ以テ石數ヲ定メ、是ヲ高トシテ、百石ハ直ニ籾百石ノ積リナリト云ヘリ、秀〇小宮山昌秀按ニ、右ノ說ノ如クナラントモオモハレズ、前ニ云ヘル如ク、貫納ハ元來相對免金納ニ起リシモノナレバ、國ニヨリ所ニヨリ不同多キコトナリ、サレド物ノ直モ國所ニヨリ高下アルナランニハ、貫納ニテハ、コレヲ一定スベキヤウモナシ、豐臣秀吉天下ヲ一統セラレシニ及ビテ、軍役ニ不平ナカランヤウニ撿地シテ、田ヨリ生ズル籾ヲ以テ石盛ヲ定メラレシモノナルベシ、〇中略サテ此石ト云モ、秀吉ノ創制ニハアラズ、其以前ヨリアルコトナルベシ、古文書ニ間々見エタリ、其一ヲ云シニハ、

森本氏文書、文明十七年、攝津州森本森殿庵田畠納下帳ニ、

公田三段半本役一石九斗五升（反別二斗九升一合）

一色三段　本役一石九斗五升（反別六斗五升アテ）

佃四段　本役二石（反別五斗代下略ス）

ナド見エタリ、國々ニカヽル類アリシニヨリ、考案アリテ石高ヲ定メラレシモノナルベキカ、コノ文書ニ反別トアルハ、毎段何ホドト云コトニハアラズ、本役ノ外ニ、反別ト云モノ如此出ルト云コトナリ、〇中略信長記ニ、天正九年、若州逸見駿河病死、彼知行八千石、此内新知分武藤上野跡、粟屋右京亮跡三千石、武田孫八郎殿へ被進トアリ、サラバ信長ノ時既ニ石高アリシト見エタリ、又

高を寄せ合せたるを石高といふ、則村高也、高辻と云も同じ、併高辻と唱るハ、田畑之高を集たる儀也、辻之字義會也、物の集たる形、高に不限米辻金辻抔と書、都而道路之四ッ辻抔、道之出會集りたるを辻と云と同じ、石高村高とも上古ハ無之、戸數と云て、家數を以て何百何拾戸の村と唱たる處、鎌倉將軍家之時代ニ至り、文永之頃ゟ貫高起り、足利將軍家之時分、東國西國共專貫高なり、一統何百何拾貫の村と唱、其後關東の永高始り、永高ニ而は何百何拾貫之村といひ、石高ニ成たる以後村高と唱ふ、然るに石高之濫觴、何の書記にも碇と分らざれ共、文祿年中、秀吉公の命に依て、諸國一統撿地有之、引續き御入國以後、慶長撿地もあり、古制ハ追々衰廢シ、諸事改り、天正文祿之頃より石高始シと見へたり、略○註 往古之租税ハ籾納ニ付、今石高と云は、則年貢籾石之納高也、古へハ民間に金銀之通用なく、諸色交易したる時節故、百姓ハ籾を以物を求メ、又錢もあれバ籾ニ取交物を買し處、慶長以來、民間にても金銀通用自由ニ成、籾遣ひ止シ故、年貢も摺らせて取る積ニ成、五合摺之積、籾高之半分、米ニ而納るニ付、籾高ハ則村高と成、五分取之積ニ而米納ニ成たる處、村々異同も有之故、厘附と申儀始り、納方ハ土地稻作之善惡に應じ、厘ニ而取箇を極め、村高ハ噂物之樣ニ成る、前書之通ニ而、村高と云事中古より始り、往古ハ無之事ながら、後世ニ而は諸國之高極り、至而大切なるもの也、

〔地方凡例錄一〕一物成詰之事 附り 一知行渡三ッ五分發幷永方貫代之事

一私領渡之節新田渡方幷取箇免上ゲ之事

是ハ知行渡之節、高百石、米三斗五升入百俵之當りニ而、米三拾五石免ニ而三ッ五分ニ當る、公儀より私領へ渡る村々免ハ高下あるに付、其村之物成本途幷小物成米永鄕帳組之分打込、高百石三ッ五分ニ當る樣ニ割合、三ッ五分より高免之村方あれバ、又下免之村を差加へ、高ニハ不拘物成ニ而致增減ゆへ物成詰ト云、併拜領高千石之物成四百石有之、免四ッニ當る迚、三ッ五分ニ當

と思へるは誤り也、總而其時代の移り替りたる事を辨へざれば、本も末も壹ツに成りて分明ならず、先往古ニハ田地長三拾歩、横拾貳歩を段として、三百六拾歩一反にて、是に上中下の位有て稻の束數を定め、其田地の品も色々ありて、年貢の高も定有、村高をば戸數とて、家數を用ひて何拾戸何百戸など稱し、田地ハ何町何反と稱す、鎌倉將軍家の頃よりして古法も廢り、夫よりして京都將軍家時代には、軍役より貫高起り、田地千坪を壹貫として、知行領知などに此貫を用ひ、其頃より古法の三百六拾歩壹反を三百歩に變じ、其後東國にてハ、年貢辻を永樂錢に積りて永高おこる、然れ共永高は田地の坪數には拘らず、今の根取帳と云もの丶よし、其時には最早古法も失て、地頭四分、百姓六歩、又ハ地頭三分一、百姓三分二、又ハ地頭三分二、百姓三分一など云收納の法行れし處に、文祿慶長の頃より檢地改りて、地面の上中下を以、其年貢の石數を定、是を村高として、百石ハ直ニ籾百石の積り　今の世籾遣ひといふ事なきゆへに、籾納と云事を不審に思へども、古へは民間に金銀の通用なく、籾遣ひとて、諸物の賣買にも錢に籾を取交て遣ふ事也、此故に年貢も籾納なり、然るに慶長以來、金銀の通用自由に成りて、籾遣ひ止し故、隨而籾納も米にすらせて取る故に、籾摺の穿鑿より匣附おこり、畢竟村高ハ噂ものの樣になりたる也、

一集義外書云、今の俗、粟の字をあやまれり、俗に畠に作る、あはの字に讀也、あはの字ハ粱なり、粟の字ハもみの事也、米となしてはそこねやすし、虫になりてすたり多故に、古ハもみにて納め万の賣買も、もみにてせし也、

按するに、古へハ籾遣ひにて、籾納成を以、村高ハ籾高成事を知るべし、

〔地方凡例錄　二〕一石高之事附リ分米之事

石高と云ハ村高之事ニ而、田畑致檢地、土地ニ應シ上中下之位を評、石盛を極め、田畑屋敷夫々の

町抔ト有テ、石高ハナシ、武士ノ知行ヲ幾拾貫ト云モ、當時モ百姓ノ詞ニ殘リテアリ、○中略扨俸祿ヲ石高ニテ定メタルコトハ、其起リ浪人衆ヨリ出タリ、浪人衆ト云ハ、本領ヲ離レテ他國ニ仕ル者ヲ云フ、當時無祿人ヲイフ類ニハアラズ、甲州ノ浪人名和無理之助ガ類是ナリ、古ハ本領安堵ヲ士ノ本意トスル習ハシナルユヘ、其國ヲ切取リ、手ニ入レテ後ニ、本領安堵サスベキト云コトニテ、當分廩米ヲ與フ、是ヨリシテ、士ノ祿ニ石高ヲ以テ定ルコト起リ、信長秀吉ノ時分ニ至テハ、日本國中ノ士皆本領ヲハナレテ、家々ヘ散亂シタルユヘ、一面ニ石高ニナリタルナリ、當時モ古キ家ニハ、新參者ニハ廩米ヲ與ヘ、家ノ譜第ニナリテ知行所ヲ與フルコトノアルモ此遺風ナリ、且又四ツ物成、三ツ五分物成抔ト云コトハ、元來百石ト云ハ、モミ百石ナリ、米ニシテ四十石アルモアリ、三十五石アルモアルヨリ、四斗俵三斗五升俵ナドト云コト出來セリ、古ハ皆籾納ナリ、武家ニ兵粮ヲ貯置クハ、皆籾ニテ貯ヘ置クコト古法ナリ、故ニ東照宮ノ御筆ノ物ヲ御旗本ノ家ニ所持シタルニ、唯々ニモミ幾俵トカキ給ヘルガ多キナリ、カクノ如クナル子細ナレドモ、今當時ノ風俗ニ合セテ、右ニハ石高ノコトヲ云ヘリ、古ヨリ石高ト云コトアリトハ思フベカラズ、

〔地方要集錄〕一石盛と申は、田畑壹反之高附、十五、十六之と盛附候儀にて候、此高附之盛を致、都合候得ば村高と申候、○下略

〔田園類說〕村高之事

村高ハ往古にハ戶數といふて、家數を以何百何拾戶と唱ふ、貫高に成りては何百何拾貫ととなへ、關東永高にても何百何拾貫文と唱ふ、後世に而ハ貫高永高相紛るゝ事多し、石高になりてハ何百何拾石と唱ふ、卽チ年貢の籾辻なれども、今米取になり候故、高と取箇と別りし事なり、世上に而此村高を、往古より有來る事とおもふは誤りなりと知るべし、

按ずるに、今之村高ハ文祿慶長の頃より始し事也、然るに世上の人、多くは往古より有來る事

石高　村高　草高

高拾七石壹斗貳升七合
田方九貫百五拾九文
高四拾四石壹斗貳升四合
田方貳拾三貫五百九拾六文
此譯
高拾七石壹斗貳升七合
反永九貫百五拾九文
此取米拾壹石四斗五升六合　永別百文ニ付壹斗貳升五合五才內
高三石壹斗壹升七合
上畑壹貫六百六拾七文
此取永六百五拾文壹分　右同斷三拾九文
高四石五斗七升貳合
下畑貳貫四百四拾五文
此取永九百五拾三文六分　右同斷三拾九文
高三拾六石四斗三升五合
棟別永拾九貫四百拾四文
此取永七貫七百九拾三文六分　右同斷四拾文
取合　米拾七石四斗五升六合　永九貫三百九拾七文三分

〔鈐録一制賦〕大名ノ身上ヲ幾十万石ト云ヒ、平士ノ身上ヲ幾千石、幾百石ト云コト古法ニ非ズ、大形信長秀吉ノ時ヨリ起ルト見エタリ、古ノ領地ノカキ物ヲ見ルニ、何郡何郷何村ニテ幾十町幾百

一棟別永別有之、是ハ屋敷反別へ掛るなり、

〔地方落穗集二〕高の五石替考之事

一古來永壹貫文を高五石に極る事、考るに今以て相州鎌倉中に永高の村有、地坪千坪を以て永壹貫文に當ると申傳也、

〔田園地方紀原下〕永幷永高之考

鼎川〇朝按ズルニ、相州鎌倉郡ノ永別ハ無反別也、永壹貫文千坪トイフモ、申傳ヘノミニテ證トスベキ事ナシ、久保田十左衛門御代官所ノ節、御勘定所ヨリ御尋アリシ故、村方相糺シ、寶曆三年午九月、永別五百文ニ付反別一反歩ノ由被申上、其以後跡支配御代官ヘ申送リニナリ、今ハ右ノ積リニテ取扱フ事也、尤鎌倉郡ハ定免ニテ、畑多ク田少キ故、破免スルコトモナク、古來ヨリ撿地モシ事モナケレバ、定メテ永壹貫文ノ地ニ不同アリテ、一定セザルベシ、村鑑割付ハ左ノ如シ、延寶二寅年、成瀬五左衛門御代官ノ節、永別石高ニ積檢地帳ナリ、

永別高四百七拾壹貫四百四拾文ノ内　寺社領入會鎌倉ノ内

一高六拾三石三斗八升　相模國鎌倉郡大町村

内貳石壹斗貳升八合　無地高

此永別三拾貳貫七百文餘　永百文ニ壹斗八升七合

割付ハ

一高六拾三石三斗八升　大野村

内高貳石壹斗貳升九合　無地高

此永別三拾貳貫七百五拾五文

内

貳石五斗と成たる當りを以、今も郷帳厘附に、畑永壹貫文を米貳石五斗代に致す、尤百年來ハ米穀之價貴く成たる處、實米に直には、貳石五斗を半減にして、壹石貳斗五升代に成る、然共近年之當りにてハ、壹石代ならでは實米とは難申といへ共、古法を不廢御定法に相成る、依之郷帳五ケ年平均之所ハ、知行渡等之節、免之高下を引合する事ニ付、壹石貳斗五升代に而取米に直し厘附致す事也、

〔地方落穗集五〕鎌倉永引之事

一相州鎌倉邊ハ、古來の形殘りて、今に村々貫高也、古哲の制ハ、永高貳拾貫を以て高百石に當る也、是を高貳割替と云、今鎌倉にて取扱者永別と名付、永別百文を高壹斗八升七合に當る也、永別に一八七を乘じ反高出る、但右高當りハ大積りと見へたり、碇と合ハす、是を御料御代官成瀬五左衛門の作法にて大數を合せ被置候由申傳る也、

一永別壹貫文の田地坪數窮りなし、壹貫文に八百坪或ハ七百坪又ハ六百五拾坪も有之なり、

一同所村高の外、八幡領の地壹反歩小作致し候へバ、右壹反の所、縱バ永別ニ積り、壹貫五百文の場所に候へバ、右永別百文ニ付拾七文宛反錢と申を懸候て、此分御料永別の内へ加へ、右反錢へ壹斗貳升八合八夕三才取を懸、取箇取之也、（右反錢拾七文ハ永と見へたり、小作壹反歩の所、永別に積り壹貫五百文に成也、百文ニ付拾七文を懸れば、壹貫五百文の永貳百五拾文と成へ、壹斗貳升八合八夕六才取を付たると見へたり、）八幡へは小作米を相納、右地所へ掛、又候公儀へ年貢納候得バ八重納也、然れ共古來より地所の廣きを見込取之と見へたり、尤永小作（永小作とハ代々小作をするを云也、拾年以上同じ田畑を小作致し候へバ、永小作として、むざと田畑を取事難儀事也、心得可有事也、）成べし、併し八幡の田地を借りて、公儀へ取箇を取候様成物也、定て往古ハ意味有之と見へたり、此譯知るものなし、

一永別撿見有之節ハ、反錢も夫丈引る也、

一永別に川欠有之節ハ反錢も夫丈引る也、

米納に成て、五合摺の積りにて、永壹貫文は米貳石五斗代に成たり、今も永高の場所は、永別永盛といふことありて、遠州榛原豊田周智の三郡、三州八名郡邊は、撿地石盛もあり、石高もあり、水帳もあれども、永高を用ひ、石高に永盛の幾百幾拾文を掛け寄合せて永高とし、永壹貫文を高五石代にして其高を役高と唱へ、諸掛り物等は此高を用ひ撿地石高は納所高と呼び、年貢は納所高にて納む、畑方は永盛壹貫文、鐚幾百文として納ることとなり、東海道筋尾張邊までは、永高の村今も交りてあり、上州緑野郡鬼石村三波川村などは、高無段別にて永高なり、鎌倉の寺社領、尾州熱田宮など朱印も永高にて、上方筋遠國にはなきことなり、中古石高始まりし時分は、永壹貫文を高拾石にも拾五石にも積りたると相見え、疑と定法もなき處、關東御入國之砌慶長年中、伊奈備前守撿地の節より、永壹貫文には籾五石納ること始まり、其後籾納相止み、石高に替りても、右の引付を以て、永壹貫文に高五石代の定法に成たり、右の壹貫文を、拾石にも拾五石にも積り、定りたる石高なしと云ふは、定めて永高にてはなく、貫高の儀にて有るべき也、既右に記す杉田村貫高、當時貳石代之勘定、(○在本書前條)又鎌倉之村鑑に、延寶二寅年、成瀬五左衛門御代官之節、貫高壹貫を石高壹石八斗七升、壹石八斗八升抔ニ而高附有之村有之、區々に聞ゆ、永高ハ御當代に成五石代に相極り、當時小物成金等之正永を高に結ぶも五石代に致す、往古貫高ハ國々ニ有之たる由に付、今諸國にも遺法可有之哉、遠國之儀ハ不相知、永高ハ關東尾州邊迄に限たる事なるに、當時に至而ハ、貫高永高致混雜、相辨る者稀に而、一事兩名之樣に相成候、勿論當時之貫高永高共、古へ鎌倉代之仕法に而ハなく、往古ハ永盛抔といふ事ハ無之、中古天正以來之事と聞へ、古代之譯ハ不詳、當時關東永取之分ハ、永壹貫文を米貳石五斗代に當り、田之取米に加へ、免幾ツ何分何厘何毛と厘附致す、此貳石五斗代と申儀、當時之米相場に一向不引合事なれ共、古代ハ穀之價賤く、永樂錢壹貫文に籾五石を替たると見へ、永高壹貫文に年貢籾五石納之處、中古米納ニ成、籾之半分米

ル心地アリシナリ、其後暇積抄ヲ見ルニ、大伴忠男ガ相模志料ニ、永高ノ永、舊穎ナルベシ、古昔租法ニ稻納穎納ノ二種アリ、和名抄ニ某國本稻幾束、雜稻幾束、某國本穎幾束雜穎幾束トアリテ、五畿七道ノ諸國相半セリ、蓋上古ハ政事寛裕ニシテ、税則モ束ヲ以ヲセラレシガ、世務細密ニナリ行、初稻納ナリシヲ、中葉稻穎相交、遂ニ稻ヲ廢シ、一般ニ穎收トナリ、秤ニ懸テ輕重ヲ槪シ斂ムル法ヲ立ラレタルヨリ、田地ノ高ヲ幾貫文ト云名目ハ起リシナラン、

〔地方凡例錄　一〕永高之事

永高の濫觴は、京都將軍の時代、兵亂打續き、鑄錢司の官も名のみになり、通用の和錢少く、依て異國へ砂金を渡し、錢を買求めしめて國用を足す、其內明朝の永樂錢勝れて宜く、多く渡り、尙又應永年中、鎌倉管領足利滿兼代に當て、相州三崎浦に唐船漂著、船中を點撿するに、永樂錢數千貫を積來る船を抑留し京都將軍義持卿江訴るに、關東著岸の上は、滿兼德分たるべしと鈞命有、關東筋彌永樂錢多分に成、年貢の分は、すべて永樂錢にて納むべき旨命せられ、外錢四文に永樂錢一文の相當を以て通用す、故に其頃の年貢は、籾と錢とを以て納む、然るに永樂錢は、外錢四文の替りに公納に相立に付、世上も又其價を以て通用す、扨其頃まで石高はなく、往古の遺法にて、武士の所領町步も有て、重に貫高なり、永樂錢通用に成てより、田畑段別に永樂の納め高を直に附、今の根取と云もの丶如く、其貫數を合せて永高と唱へ、則ち一村の高に用ひたり、其時代の撿地にも段別あり、大半小と云ふ小割もあり、又田畑上中下の位もあれば、永高とて別に撿地せしことにてはなし、上田壹段に永何程、中下も夫々永高を極め、畑も同然なり、其永納辻を合せて一村の高とす、此故に永高も土地の位に隨ひ高下あり、壹貫文の地所も廣狹ありて定數なく、是を永別永盛など丶いふ、又高永壹貫文は籾五石を納め、畑方は直に永樂錢にて納む、若し外錢を以て納むれば、永樂壹錢の代りに他錢四文を納む、其頃は籾遣ひの時節にて、年貢にも籾納めなり、其後

撿地之高を納所高と申候而、年貢ハ納所高ニ而納申候、但田方ハ、幾ッ何分、畑方ハ永高壹貫文に鐚何百文取と致、取付申候、免狀にも納所高を用ひ出置候得者、御勘定所へ鄕帳差出等迄も役高に直シ記上申候、然ル處近年ハ紛敷候故、免狀等も役高に直し、村方へ差遣候由、○中略

又曰、同國豊田郡周知郡、三州八名郡代方、縱バ上畑壹反ニ付永百貳拾文、下畑壹反ニ付永百文など、上中下之差別有之、田方も同前ニ用ひ、元來之撿地高ハ用ひ不申、右之通村々ニ而永盛ハ違候得共、永高之譯ハ大方如此候、但五石高ニ成候儀ハ、何年以前誰時分五石高ニ成候と申儀不相知、慶長年中、伊奈備前守撿地帳ニ永盛記シ有之候、其時分より五石高ニ成候哉、村々ニ而も覺候もの無之候、○中略

又云、古來永壹貫文を五石ニ極るを見るに、今以鎌倉中ニ而ハ永高あり鎌倉の永高と申ハ、古來の永高にて可有之候、今東海道筋にも永高の所多有之候得共、鎌倉風と違ひ、是ハ其以後の永高成べし、鎌倉の永高壹貫文といふハ、一反の所を千坪の積りに申傳へ、爰を以見る時ハ、五石替と極り起り、浮役永高ニ詰物ハ定納もの故、石盛十五石ハ中より上の場所故、上田之位に見て、壹貫文に十五を掛、三を以割バ五石ト詰、然れば鎌倉永高の積りを以元にして、古來五石と極りたるべし、

〔農政座右〕二永錢

永高ノコト、田園類說ニ、貫高トハ別ニシテ、關東ニテ年貢辻ヲ永樂錢ニ積リテ、知行領知ナドニ此永高ヲ用ユ、今鎌倉ナドニ永高ヲ用キル所アリト云ヘリ、諸書コノ心得ナル多シ、然レドモコノ永高ハ、彼永樂以前ヨリアルコトナル故ニ、其說ヲ得ザルモノハ、强テ通乎永寶ノ永ナリト云ヘリ、笠澤雅廬質ニ附會ノ說ナリ、秀山○小宮昌秀藥王院文書ニ穎錢トアルニ心付テ、穎ノ字ノ假借ナルベシトオモヒ、段々穿鑿セシニ、穎稲ト云フ延喜式ニ見エタレバ、イヨ〳〵コレニ決セ

まなるはなし、今一統石高の世になりて、永高時代の譯分明ならずと知るべし、

一成覺書曰、尾州熱田大宮司所持の書物載、當知行分之事、

百七貫貳百拾文　八屋郷内

六拾八貫百四拾文　須賀郷内

百三拾貳貫百七拾貳文　熱田内

百貫四百七拾八文

都合四百八貫文

右之趣、任御朱印之旨所務等之儀、如先前可被仰付候、中納言樣〇豐臣秀次御座次第、御書相調、重而可遣之、仍如件、

天正十八年九月十日　田中兵部大輔在判

熱田社人中參〇中略

按ずるに、此外寺領社領などの古き書物共を見しに、何れも何百何拾貫文とありて、永之字なし、貫高成るや、永高成るや、今にては分りがたし、然れ共關東諸國東海道筋永高之遺法の有る所はすべて永高成るべし、右之書付も貫高か永高か分明ならずといへども、三州には今以永高の遺法あり、尾州は隣國の事なれば永高なるべし、〇中略

一成覺書云、遠州榛原郡永高之事、撿地ハ三百坪壹反田畑共に上中下の石盛を以、餘國並に分米を附高に成ル、其高壹石ニ村々より永三百七拾文、三百五拾文、貳百文是を永盛と云、但右永盛ハ田畑上中下之無差別同位ニ而、假令バ永盛三百七拾文と定候村ハ、畑方も上中下の無構、押なべ三百七拾文にて候、右の三百七拾文を、其村之撿地高合せかけ候得バ、其村之永高に成る、其永高壹貫文を五石替にして高に成候を役高と申候て、諸懸り物を割懸取立申候、又元來之

永高

志賀新藏人入道殿

〔大内義隆記〕多々良ノ朝臣義隆卿ハ、○中略紫野玉堂和尙ヲ申下サレテハ參學ノ師範トシテ座禪ノ床ニアガリ、○中略此和尙ヲ尊ミ申サレテハ、新造ニ佛閣ヲ構、龍福寺ト號シテ、五百餘貫ノ寺領ヲキフシ、末寺ヲ餘多ソヘ給フ、

〔集古文書三十一下知狀〕武田信玄下知狀信濃國木曾義家藏

定

甲州巨摩郡百之鄉貳百貫、信州築摩郡今井鄉三百貫、右依數度軍功、御扶助被仰出者也、全令領分、武用嗜之、陣役可相勤之條下知仍而如件、

永祿三庚申年五月二日朱印　山縣三郎兵衛尉奉之

鬼野主計亮殿

〔太閤記一〕秀吉公盜人を捕給ふ事

信長公西美濃に至て令發向、在々所々放火せむとて、永祿六年の秋の末打立給ふ、○中略藤吉郎頃年我信長○爲に惡事あれば、身をも不顧、時をも不移云しも、猶非唯忠義を盡し見んと思ふ己れが生質なるべしとて、旁以喜び思召、彼褒美之黃金、幷に百貫の地を恩賜し給へり、

〔利家夜話上〕一同年森部合戰の時、又一番首を御取被成候、利家卿御奉公に御出被成始て五十貫被下候、其後御加增にて、百五十貫に成、森部合戰の後、又御加增被下、其後御舍兄藏人殿の跡目を被下、合二千四百五十貫に成、其後越前府中にて三萬三千三百石被下、

〔田園類說〕永高之事

永高は、貫高とは別にして、石高以前、關東諸國にて、年貢辻を永樂錢につもりて、知行領知などに直に此永高を用る、今も東海道筋、また鎌倉などに永高の所ありといへども、いづれも古來のま

康永參年四月　　旦祐代貞泰

〔鎌倉大草紙上〕から河台戰に、日一揆皆打負、信長〔〇武田〕は忍て信濃へ打越、京へ上り給ひける、此時甲斐は鎌倉の分國なれば、持氏〔〇足利〕を賴被申ば、やがて御加勢を可給に京へ信長被參ける故に、京公方と、鎌倉殿の御意趣のおこり初是也、さて京公方は普光院殿〔〇足利義敎〕御時也、いかゞ思召けん、信長に先遠江國蒲の庄御厨にて千貫の地を、懸命の爲に給はりける、

〔房總志料二〕一里見氏九世、永樂錢にて采地割ありしと、錢壹貫文は高拾石に充と

〔太閤記十二〕相模國小田原氏政家傳之事

抑北條左京大夫氏政が由來を委しく尋ぬるに、平相國〔〇淸盛〕之八男助盛の末裔、伊勢新九郎〔〇長氏〕といひし人、是其元祖也、於備中國本知三百貫之領主にて有しが、立身の勵み盡思惟親侍れ共、事の行べき道もなし、其國之守護を可犯は理に非ず、隣國を謀りみんは力乏しとて、三百貫之地を同姓の富家に質授け、路次のあしなどを求め、武略且備し士三十餘人召具し康正三年〔〇長祿元年〕之春、關東さして武者修行に出けるが、〇下略

〔北條五代記二〕古今弓箭の沙汰の事

北條氏康、關八州を治て後、一門家老の者共より合、評定所にをいて、田畠けんちの沙汰あり、氏康聞て、〇中略先祖早雲宗瑞、年貢しゆなうの義を定をかる、より以來、北條家にをいて五ッ取所をば一ッゆるし、四ッ地頭へおさめなうす、此外役一切かけず、〇中略其比永樂五十貫百貫と名付田地の跡は、今五千石一萬石ありとかや、

〔集古文書十七判物〕大友親治判物〔肥後家臣志賀太郎助藏〕

緒方庄小河名之内小原神五郎跡百貫分〔坪付別紙在之〕事預進じ候、可有知行候、恐々謹言、

明應五年〔丙辰〕十一月三日　　親治〔花押〕大友〇

貫ノ食地也、

〔佐渡志一田土〕注進佐渡國石田長木二宮三郷御年貢給解狀事

一石田鄉

定案　拾貫漆百三十五文

御得分　叁拾四貫二百廿文

已上肆拾肆貫九百五拾五文之内

五分一八貫九百九拾一文　山城兵衛入道分

殘叁拾五貫九百六拾四文〇中略

古帳到來之時可被覆勘也

康永二年御年貢所濟分

伍貫文　五月十六日　納所方　叁貫文　五月十八日　同

貳貫文　五月廿日　同　叁貫文　六月八日　同

叁貫文　六月廿六日　同　伍貫文　十一月十二日　同

捌貫文　十一月廿日　執事御方　伍貫文　十二月廿八日　同

貳拾貫文　閏二月五日　同納所方　拾貫文　三月五日　同

伍貫文　三月五日　同　伍貫文　三月八日　同

壹貫五百文　三月廿八日　執事御方　拾五貫文　三月廿九日　納所方

伍貫文　四月十五日　同　玖貫文　康永三年四月廿一日　執事御方

已上佰貫文

右勘定注進如件、

攝津國福原庄〈領家職也〉　鎌倉右大將家〈○源賴朝〉已來傳領之、武家代々安堵在之、〈讃岐國山田庄、同在一紙、〉土貢者赤松請申時、爲四百五十貫、〈○中略〉

備後國坪生庄　山名被管人太田垣爲代官、其後平賀預申之、毎年年貢三千五百疋錢等也、〈○中略〉

和泉國大泉庄〈○中略〉　土貢細川阿波守被官人吉志請之、三千五百疋請地也、〈○中略〉

越前國足羽御厨〈○中略〉　代官朝倉美作入道請之、毎年土貢四百餘貫致沙汰、〈○中略〉

同安居保〈足羽御厨別納也〉　安居修理亮請之、毎年年貢六千五百疋沙汰之、其後不直、代官座主僧令所務、千貫計得分也、〈○中略〉

淸弘名〈安居別納名也〉　請四千三百疋、〈○中略〉

吹田名〈同〉　光臺寺寄進之地、請四千疋、〈○中略〉

同國東郷庄　代官朝倉一族〈號東郷〉預申之、年貢七千疋、〈○下略〉

○按ズルニ、匹ハ計錢ノ稱ニシテ、一匹ハ十文ニ當ル、故ニ百匹ハ一貫文ナリ、泉貨部錢篇ヲ參看スベシ、

〔水月古鑑〕亡父任遺言旨、本知甲斐國府中傳八百八拾貫所、永相違有間敷狀如件、

尊氏公
御黑印

建武二年七月九日

山形吉内

〔陰德太平記〕三　毛利先祖附元就卿之事

西明寺時賴〈○北條〉ノ時、三浦若狹前司泰村謀反セシニ、季光〈○大江〉外戚ノ親ニ依テ、彼ト一所ニ籠テ無戰利、三浦ノ一族ト同ク法華堂ニテ自殺ス、依之其子經光鎌倉ヲ追出サレ、於越後國佐橋庄南條一千貫ノ采地ヲ賜フ、經光ノ子、修理亮時親、六波羅ノ評定衆タリ、建武二年乙亥六月、足利尊氏公ヨリ藝州吉田庄山田村、貳百貫、河内國加賀田郷千貫ヲ賜リ、佐橋庄南條ニ引加ヘテ、二千二百

稱る也其書曰、天正年中、毛利氏撿地迄は、一歩を一文、一畝を三十文、一段を三百文、一町を三文貫と云、下略信濃國上田の邊には、今に貫高を用る所も有と云、

〔夏山雜談三〕陸奥ナドハ、昔ハ十貫ヲ以テ百石ニ充ツ、今世ハ五貫ヲ以テ百石ニ充ツルナリ、嗟樂麻呂往年高野山ニ斂日アリシコトアリ、此時ニ彼山ニ成就院ト云寺アリ、此寺ヘ伊達中納言卿ヨリ十二貫ノ地ヲ寄進セラルト聞シ故、委シク尋チシニ、十二貫ノ米高凡九十六石ニテ、四ツ物成ニシテ二百四十石ニ當ルナリ、則五貫ヲ百石ニ充ルナリ、永祿ノ比、參河國ハ百石ハ百貫ニ當リシニヤ、東照宮三河國住人鈴木八右衛門ト云人ニ、十貫ノ地ヲ賜ハリシハ十石ニアタルナリ、

〔貫考〕天明六年午ノ夏仙臺ニ遊ビシ時ニ、前澤ト云所ニテ、農夫ノ所持シタル仙臺家中ノ分限帳ヲ買求メシガ、其中ニ万石以上以下トモニ何貫又何石トシ、貫ト石ト入交リニ祿高ヲ記シタリ、中ニ片倉小十郎ガ知行千七百貫文餘トアリシヲ、何石ニ當ルト問ヒケレバ、一万七千石餘ノヨシ答ヘタリキ、

〔勢州社家文書〕伊勢御神領之事

參貫六百文　田參段　二宮鄕　貳貫貳百文　同貳段　同村
參貫六百文　同參段　藤田村　貳貫貳百文　同貳段　同村
貳貫百文　畠參段　上年村
合拾參貫七百文
右糭拾石九斗六升
文祿三年午拾二月十一日　丹羽平大夫長行書判
榎倉大夫殿

〔桃華蘂葉〕一家〇一條領並敷地等之事

貳石五升餘　羽生野村
貳石餘　大瀬木下
壹石九斗九升餘　北方中
貳石餘　山村中〇中略

コレニテ考ルニ、此邊ハ壹貫貳石ノ石直シナリシヤ、此石高ハ則村高ユヘ、古ノ貫高モ籾高ニテイヘル事明ラカナリ、

〔田園地方紀原〕下相州鎌倉松岡東慶寺御朱印ニ

寄進　松岡

相模國小坂鄕鎌倉内
八拾六貫六十文　二階堂
貳拾貫八十文　十二所内
六貫貳百四十文　極樂寺内

右如先規令寄附訖、彌守此旨、可有相續者也、仍如件、

天正十九年辛卯十一月　神祖御花押

常與雜文云、松岡ノ御朱印、御代々右之趣也、御朱印高百拾貳貫三百八拾文ナレドモ、此納得收納悪シク、五百石ニモ當ルベシ、

鼎川〇朝案ズルニ、コノ說ニヨレバ、壹貫ハ四石四斗四升九合、拾貫ハ四拾四石四斗九升、百貫ハ四百四拾四石九斗、千貫ハ四千四百四拾九石、萬貫ハ四萬四千四百九拾石相當ナリ、

〔甲斐名勝志〕一中古高と云あり、此事委しくしれがたかりしに、一とせ上野廣俊、信濃に行けるに、伊奈郡北小河内村の村木何某が家に傳ふ所の古き算書に見へけるよし語りければ、今こゝに

一四百七拾六石九升六合六夕　長照中
一貳千三拾壹石八斗四升八合　島田中
一六百九石四升九合五夕　駄科下
一五百貳拾石七斗四升九合五夕　毛賀上
一三百七石五升五合　下殿岡下
一六百廿石六斗八升三合貳夕　桐林下
一百三拾三石一斗八升九合五夕　時又上
一貳百六拾八石貳斗四升　上川路上
一七百三石六斗七升八合　下川路上
一百四拾九石貳斗七合　下瀬上
一千三百三拾石七升　伊豆木
松尾高〆壹萬貳千四百四拾壹石九斗四升六合三夕
天正十九辛卯年九月
御水帳　京極修理大夫様御撿地
御竿奉行　浅井九兵衛
笘井小右衛門

案ズルニ、天正ノ石直シハ天正十八年ヨリナレバ、此水帳ニ天正十九年トアルニテ、其以前ノ貫高ヲ京極修理大夫高知飯田領知ノ頃、撿地シテ石直シセシ事知ルベシ、此貫高石高ノ相當錢壹貫文ニ付、
壹石九斗九升餘　竹佐下

一五拾九貫四百文　上殿岡下
一四百八拾貳貫四百八拾三文　中村中
一三百四貫百貳文　久米上
内四拾五貫五百七拾八文　貳百五拾八貫五百廿四文　光明寺分　平分
一貳百拾八貫五拾壹文　三日市場
總〆七千六百七拾四貫五百五拾壹文
天正十五丁亥年九月日　常〻塚六左衛門
上二　中一九　下一八
松尾領村高
一六百石三斗貳升四合貳夕　竹佐下
一三百廿九石九斗八合貳夕　羽入野下
一貳百六拾貳石九斗　大瀬木下
一四百九拾七石壹升九合　北方中
一千三百拾三石八斗六升三夕　山村中
一百五拾九石八斗九升六合　一色中
一百拾八石八斗貳升壹合三夕　上殿岡下
一九百六拾四石九斗六升五合　中村中
一五百拾七石壹斗八升六合八夕　久米上
一九拾壹石壹斗五升六合八夕　光明寺上
一四百三拾六石壹斗三合　三日市場下

一三百三拾四貫三拾三文　同　西鄕

内　二百五拾貫百七拾七文　長照村下
　　八拾三貫八百五拾六文　一色村中

一三百三拾八貫三百八拾文　駄料村下

一百七拾貫五百七拾六文　下殿岡下

一三百四拾四貫八拾二文　伐林下

一六拾貫五百廿七文　時又上

一四百八拾五貫九百五拾九文　川路上

内　百三拾四貫百廿文　上分
　　三百五拾壹貫八百三拾九文　下分

一七拾四貫五百拾三文　下瀬上

一六百六拾五貫三拾五文　伊豆木上

一貳百六拾三貫九百廿六文　立石上

一貳百拾四貫三百八拾貳文　駒場上

一貳拾九貫五百九拾八文　壹神上

一五百拾壹貫六百拾八文　山本下

一貳百八拾五貫八拾八文　中關上

一三百壹貫六百廿文　竹佐下

一百六拾五貫文　羽入野下

一百三拾壹貫文　大瀬木下

一貳百四拾八貫五百文　北方中

一六百五拾六貫九百文　山村中

一三石五斗八升　以上拾石也、此代十貫文、

右之分、依有子細、酒井雅樂頭爲奏者所令扶助者也、永不可有相違之狀如件、

永祿八年乙丑十一月七日　家康

鈴木八右衛門殿

〔利家夜話〕上一前田藏人殿二千貫の御家、今程は五千石計の御知行之由、大納言樣〇前田利家も豐後〇村井も御申候、

〔雜宗制禁錄〕信長卿、字留岸に於江州甲賀に三百貫文に當ル千五百石知行所を賜はる、

〇按ズルニ、南豐寺興廢記ニハ、甲賀郡ニテ五百石ノ地ヲ寄附セラルトアリ、

〔武德編年集成〕四十天正十八年八月廿三日、神君今般關八州ヲ領シ玉フニ依テ、參遠ノ舊臣ガ所領ヲ八州ノ内ニ於テ授ラレ、各加恩セラル、然レドモ駿甲信先方ノ族ハ、新屬タル故ニ、其舊知ヨリ穀高減少ス、〇中略

一上野阿布一萬石　菅沼新八郎定盈

菅沼家傳ニ、神君嘗ニ貢税ノ吏彥坂小刑部直通ニ、參州野田ノ定盈ガ采邑ノ穀高ヲ尋ラル、所、小刑部奸邪ニシテ僅六百貫ト稱ス、是三千石ニ當ル爰ニ於テ其舊領ニ三增倍シテ一萬石ヲ賜フ、此時其祿甚減少シ、家臣等離散スト云々、

〔田園地方紀原〕下予川〇朝鼎信州飯田ノ人ニ知レルアリテ、其村ノ水帳ノ事ヲ尋子問ヒシニ、後日抄錄シテ贈リ越シヌ、攷證ノタメニ左ニ擧ン、

伊賀良庄錢納高　城下東鄉

一千三百廿九貫七百六十八文　崎田村中毛賀村上

內千六拾九貫三百九十三文
二百六拾貫三百七十三文

後も可為如此歟、第二神田十三貫文之社務ニ候處、纔三貫九百之祭役不足ニ候之條、自今以後は貳貫文相加、五貫九百文之分、長かたへ渡、五貫神事相勤べきか、〇中略何成共圖にまかせ可相定者也、

一三月寅日、行六使神事免田壹町、森林にあり定納十五貫文也、割之七貫五百文は牛山周防守、七貫五百文、岩波善兵衛請取、壹年宛以輪次可勤祭條勿論ニ候、

（勢州社家文書）奉寄進田地之事

三段サルハレ　四段馬アラキノタチ　三段宮谷稲八丁場

以上壹町代方壹貫文

為義景國家安全、武運長久、子孫殷昌、為祈禱寄進申者也、

右寄進狀如件

元龜元　六月十六日　朝倉治部丞景還判

西村八郎兵衛尉殿

（駿河國志太郡下之鄉長慶寺文書）駿河國安養寺領之事

米貳拾壹石參斗七升　代壹貫參百五十文

右為安養寺殿菩提、從前々寄分、至于末年不可有相違、

天文廿年辛亥七月十五日　治部大輔義元花押

（家忠日記追加）永祿八年十一月廿七日、此日三河國人鈴木八右衛門ニ、故有テ證文ヲ賜ル、

瀨戶地之內

一三石五斗五升　此內一石ハ寄進　開宜方

一二石八斗七升　四郎右衛門分　此內外ハ藏人

畠數一町八段成　助四郎

七段　坪右京畠　高畠　不作

定作畠一町一反

分錢三貫三百文　各々三百文代

巳上拾三貫九百五十文

文安五年戊辰十月日　納所　正悅

（勢州社家文書）伊勢大神宮へ寄進申田地之事

合五段者在所勘進定畠かた口内私領用　合三貫九百七十文也、但畠かた、

右請田地者與語久兵衛尉雖拜口分、依有要用、福井勘右衛門殿、永代寄進申義實正也、猶於神前、武運長久、如意圓滿、御祈禱所仰候、仍而後日寄進狀如件、

與語久兵衛尉勝直　判

永祿貳年霜月十三日

福井勘右衛門殿

（信濃國諏訪神社文書）信玄花押

信州諏方郡上宮祭祀退轉之所、今拔永祿八年乙丑十二月五日令再興、加下知次第、

一正月朔日、蝦狩之神事領田壹町竹居庄にあり定納拾三貫文、千野出雲令知行候、此內三段三貫九百文之處令分割、神長官ニ相渡、以此費用、神長累年執行候拾三貫文之神田役として、纔ニ三貫九百の祭勤候條、不審之由糺明候之處ニ永事元年三月廿八日、從諏方安藝守滿有證文帶來候之間、千野出雲知行においては明鏡に候、然則不及改易歟、但於神前以念鬮可相定之旨加下知畢、其鬮之品目、第一百五十年以來、三貫九百之費用を以相勤、則不覃改之、千野出雲申旨にまかせ、向

都合貳拾七貫五百文定

明德五年甲戌八月廿七日　　　　國政（華押）

〔昆陽漫錄〕反

先年相州鎌倉圓覺寺より出だせる元亨二年の注進に、（この注進甚だ長きゆゑ、其文を記さず、）町段に段反の二字を變へ用ふ、○中略同所の建長寺の西來庵の注進にも段反の二字まじへ用ひたり、その文左に記す、

西來庵領懷嶋内三郷辻在家

田數一町一反内　　　左衞門四郎

二反半　河成

四段半　鶴田　　　不作

定作田數四段

分錢參貫貳百文　　　各々八百文代

田數七反成　　　助四郎

二反　坪は中せきのやしろ方へ押領

定作田數五段　　　各々八百文代

分錢四貫文

同郷畠年貢

畠數貳町二反半內　　　左近三郎

一町一反（坪若宮小路右京畠）　　　不作

定作畠一町一反半

分錢三貫四百五十文　　　各々三百文代

一四町五段　分錢拾貫三百文　又三郎
一壹町八段　分錢伍貫二百文　木部
一三段半　分錢壹貫五十文　太郎二郎入道
一壹町　分錢貳貫七百文　江田御坊
一五段此内半不作　分錢壹貫三百文　了賢
一二段　分錢六百文　孫八入道
一二段六斗不作　彥七
一五段此内四段半小作、一段開、　分錢二百文　又三郎入道
已上田數九町半、分錢貳拾壹貫三百五十文、

同所畠分

一八段　分錢壹貫六百文　木部
一三段　分錢六百文　六郎二郎入道
一八段　分錢壹貫五百文　江田御坊
一壹段　分錢貳百五十文　孫八入道
一壹段　分錢貳百文　孫三郎入道
一六段　分錢壹貫文　江田孫六
一四段　分錢八百文　江田六郎五郎
一壹段　分錢貳百文　彥七
已上畠數三町二段、分錢六貫百文、十合定

合田畠拾貳町貳段半　分錢

三反 同所ぜに 五百文　　人見のとよ

一反 まきたいやしき 代二百文　　七郎太郎

一反 みまさかぎいけ 代三百文　　平内三郎

以上 こむぎ代ぜに 三斗六升二貫六百文

平三次郎入道分

一反小 もりたけ百五十文　　大 よのさかいみつ入二百文

一反 丸没大内四百文

平内次郎分

二反 のき＝五百文　　半 中や二百文

以上田三町大

分錢五貫五百六十八文

一ちやうつかひきうぶん

田五反　せに一貫文　　畠六反　六百文

以上一貫六百文

都合米　六石二升九合之中　納升定

又米　六斗六升　十合升定

麥　五石六斗五升三合

都合錢　五拾二貫四百七十二文

右注文之狀如件

〔岩松家文書〕新田庄江田郷内得河方目錄

〔田園地方紀原下〕古證文云

奉寄進　世良田山長樂寺

上野國世良田郷後閑三木内作人子善後家、在家壹宇、田二町五段、畠八反、毎年年貢合拾貫文間事、

右所者、代々相傳當知行無相違地也、而且爲祈禱、且爲亡者菩提、長樂寺所奉寄進也、子々孫々敢不可有子細、若至于違亂煩之輩者、永可爲不孝之仁、仍寄進之狀如件、

延久〇久誤字、恐三年卯月十日　散位源義政花押

又云

上野國新田世良田長樂寺永代奉寄進畠事

合壹町捌段二貫文所一年得分十

右件畠者、上野國新田庄小角田村内御堂前有之、件畠者、長樂寺ニ依有其志立四至堺、元亨三年癸亥十月十七日、寺ノ御使ニ打渡シ畢、如此奉寄進上者、於此地不可致一塵煩、若子々孫々於至違亂煩者、滿義跡職、一分不可知行、仍爲後代龜鏡寄進之狀如件、

元亨三年癸亥十月十七日　源滿義在判

〔岩松家文書〕應安二年七月廿八日

五日市庭まゆく在家御年貢事

三反はたけにせ　三百文　九升こむぎ　四郎二郎

三反はたけにせ　三百文　九升こむぎ　二郎四郎

三反はたけにせ　三百文　九升こむぎ　からはし

四反はたけにせ　五百文　九升こむぎ　又六口

一反くみやしきにせ　二百文　かうせん

此取米貳拾五石　但高ニ五ツ
此永拾貫文　但貳石五斗替
高五拾石　畠方
此取米貳拾五石　但高ニ五ツ
此永拾貫文　但貳石五斗替

右之通、田畑等分ニ相積、高百石永貳拾貫文ニ當リ候積リニ仕立候覺書御座候、然共古來何方ニ而、右之格ヲ以用候儀ハ無之、古來之儀ヲ勘辨致、覺書いたし候迄之儀ト相見申候、併是ヲ以考候得バ、當時知行渡等之節五石免ト申儀御座候、永壹貫高五石ニ積リ、知行ニ相渡申候ハ、則永貳拾貫文高百石ニ相當候儀、右覺書之趣ト符合仕候、左候得バ、永貳拾貫高百石ニ止候筋ニも可有御座候哉ト奉存候、右書面之外ニも高反別米、永仕分ケ等記候所も相見候得共、年久敷儀ニ而、只今算當いたし相考候而も不分明之儀共多御座候、

丑八月　伊奈伊〈○伊豫中略〉左衛門

〔太平記　三十五〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

或時相模守〈○北條時賴〉鶴岡ノ八幡宮ニ通夜シ給ケル曉、夢ニ衣冠正シクシタル老翁一人枕ニ立テ、政道ヲ直クシテ世ヲ久シク保タント思ハヾ、心私ナク、理ニ不暗青砥左衛門〈○藤綱〉ヲ賞翫スベシト、慥ニ被示ト覺ヘテ、夢忽覺テケリ、相模守夙ニ歸、近國ノ大庄八箇所、自筆ニ補任ヲ書テ、青砥左衛門ニゾ給ヒタリケル、青砥左衛門補任ヲ啓キ見テ大ニ驚テ、今何事ニ三萬貫ニ及ブ大庄給リ候ヤラント問奉リケレバ、夢想ニ依テ、先暫宛行也ト答給フ、〈○下略〉

○按ズルニ、百錬抄寛喜二年六月二十四日ノ條ニ、以錢一貫文可被直米一石之由被下宣旨ト見ユ、蓋シ貫高ノ起ル、コレニ本ヅクニハアラザルカ、姑ク附記シテ後考ヲ竢ツ、

權現樣駿府ニ被爲遊御座候節ハ、御知行永何貫文ト被下候處、御入國以來、地方ニ御直し被下候由、永何程地方何石ニ相直リ候儀ニ御座候哉、古キ書留、又ハ承傳ニも、永直し之分相知申候ハヽ、可申上旨被仰付奉承知候、依之拙者方吟味仕候處、古來之書留等、先年度々之類燒之節、過半類燒仕、當時古キ書物無御座候、尤承傳ニも永直之譯、一切相知不申候、

一於駿遠參御知行被下候儀、幷御入國之節共、拙者先祖伊奈熊藏相渡申候由承傳候得共、其節之書物等燒失仕、留書無之、委細ニ相知不申候、

一拙者祖父半十郎儀、元祿八亥年、古地方之儀ニ付、書物寫爲仕直置申候覺書之内ニ、永直之儀相見不申候、乍併右書物本書、何方ニ有之候儀ニ御座候哉、色々吟味仕候得共相知不申、右寫之儀も、覺書迄ニ認置候書物ニ而、慥成儀無御座候得共、御見合ニも可被成哉と、左ニ記可申上候、

地方貫積田割替之事

一永貳拾貫之地　村

此取五拾石　但四割替

拾貫之地　田方

此取米貳拾五石　但四割替

拾貫之地　畠方

此取貳拾五石　但四割替

此永拾貫文

一高百石　右貳拾五貫之地　右同村

此取五拾石　但高ニ五ツ

高五拾石　田方

ルモ心得ガタシ、軍役ト云モノモ、元來租庸調ノ庸ニテ、身一カヽリシモノニテ、田ニカヽルモノニハアラズ、故ニ後ノ世マデモ身ニカヽリテ、諸家ノ古文書ニ、何ノ事アレバ參陣可〈レ〉致〈二〉軍忠〈一〉ナド云ハ多クアレド、何貫ヨリ何人何疋ヲ出スベシトアルハ見アタラズ、今ノ世ノ如ク、スベテ田高ニカヽリ、百石何ホドト云コトニナリシハ、秀吉以來ノ事ト知ルベシ、今ノ形勢ヲ以テ古ヲハカルユヱニ、貫納モ軍役ノ爲ニセシモノト云フ說モ多クアルナリ

〔田園地方紀原〈中〉〕貫幷貫高之考

鼎〈○朝〉川案ズルニ、鎌倉將軍家以來、領知ノ入高ヲ、其土地ノ米價ノ貴賤ニアテ、貢米ノ多少ヲ量リ錢納ニセシヨリ、イツトナク、所領ノ高ヲ貫ヲ以テ唱ソル事ニハナリシカ、然ル故ニ、後世ノ永高ニマガヒテ混ジオボヘタル人アルハ誤ナリ、永樂錢ハ、後小松院ノ應永以後此地ニ流行シ、貫ハ其以前ヨリノ稱ユヘ一樣ニハイヒガタシ、サレド永高モ錢納ノヒノ名ナレバ、永樂錢渡リテヨリノ永高ヲ、又貫高トイヒシ事モアルベシ、故ニ永樂錢渡リテヨリ以後ハ、貫高ニモ二樣アル也、〈○中略〉永樂錢來渡以前ト以後トノ時世ヲ以テ、國ノ遠近、土ノ肥瘦等ヲ考ヘ合セナバ、大積リハ推知スベシ、但シ績和漢名數ニ、永樂錢貫數、畿內近國稱〈二〉百貫〈一〉者、充〈二〉千石之地〈一〉トアリテ、鹽尻ニ、伊勢兩宮修造ノ時、下行セル永樂錢三千貫文ハ、當時三萬石ニ當ル由ヲイヘバ、此貫ハ永樂錢ニテ計トイヘドモ、其頃中國ノ米價過不及平均セシ定數ナラン歟、又奧州ノ十貫百石ハ、邊鄙ノ地、運漕モ艱難ユヘ、中國ノ米價ト一樣ニ論ジガタキハヅナレドモ、家中知行割ハ、中國米價ノ割ヲ以テ、十貫百石トシテ渡サレシモノナルニヤ、恐ラクハ仙臺ノ十貫百石ハ、後世ノ制度ナルベシ、

〔刑錢須知〈四〉〕享保十八〈丑〉年細田丹波守〈○御勘定奉行〉尋ニ付、八月八日差出ス、

貫高之儀ニ付書付

覺

五十貫百貫ト名付田地ノ跡ハ、今五千石一萬石アリト見エタリ、武家系圖相模入道平高時ノ條ニハ、田五段ヲ一貫ノ賦トス、相模鶴岡八幡ノ祝史大伴松亭ガ說ニハ、鎌倉永・文ノ比一町三貫ノ賦ナリ、土佐國幡多郡不破村八幡宮、文祿中文狀ヲ考フルニ、田千歩ヲ一貫トス、今ノ三段三畝十歩ナリ、サレバ百貫ハ田十萬歩、今ノ法ニシテ三十三町三段三畝十歩ニシテ、三百三十三石三斗三升三合ナリト云ヘリ、編年集成ニ菅沼家傳ヲ引タルニハ、六百貫ヲ三千石ニ對當スト注セリ、和漢名數、夏山雜談ニハ、畿內近國ハ百貫ヲ千石ニ充、遠國ハ百貫ヲ、八百石、七百石、六百石、五百石ニアテタル所モアリ、畿內近國ハ、運送タヤスキ故ニ、八木ノ價賤シ、遠國ハ運送艱難ニシテ價ヤヽ貴シト云ヘリ、此外ニモ彼是云ヘルアリ、高倉胤明田政考ヲ著ハシテ曰、貫納何故錢ニ積リタルト思フニ、是段別ヲ基本トシ、一段ニ錢三百文、或ハ二百八十文ナド、土地ノ厚薄ニ從ヒ、每段ニ數ヲ定メ、錢ニテ收納シタルナリ、常陸ハ大抵段ノ地ヨリ三百文迄ニテ、所ニヨリ甲乙アリ、町段ノ土地ニハ、厚薄ニヨリ收獲アリ、甲乙アリ、軍役ハ町數ニカヽリ、所務ニ多少アル費ヲ除ンタメニ、貫代ノ法ヲ立シナラント云ヘリ、此說是ニ近カケレドモ、太閤撿地及鈴錄ノ說ニヨリテ云ヘルナルベシ、秀(山〇小宮昌秀)思フニ、是ハ朝廷ノ政衰ヘ玉ヒシニ及ビ、天下ニ莊園ト云モノ多クナリ京地ノ人々遠國ニ所領アリテ、其租ヲ收ンニハ運脚多クカヽリ、其地ノコトモ行屆カザルコトノミ多ケレバ、田令ニ見エタル、公田隨鄕土估價賃租ストアルモノニ本ヅキナラヒ、又宋人ノ錢納アルヲ摸シテ、今ノ相。對。定。免。ト云モノヽ如ク、土人ト相對代納ニ定メシモノナルベシ、〇中略古ヘ軍功ヲ賞セラルヽナドニモ、誰ノ跡何ノ莊何ノ鄕ヲ賜フナドアリテ、何千何百貫文ヲ玉フナドアルハ見アタラズ、タマ〳〵神社寄附ノ地ニ、何ノ所ノ地何貫文トアルハ、文和永正ノ文書ニ見アタリシナリ、國々皆貫ヲ以テ稱スルコトニナリシハ遠カラヌコトヽ見エテ、天文天正頃ノ文書ニハ、何貫文ヲ給フト云コト多ク見エタリ、又鈴錄以下ノ說ニ、皆貫納ハ軍役ノタメト云ヘ

得候族も多し、貫高と云は、右に如申永錢之員數には無之田地へ軍役を掛ケたる名目、假に貫と名付、永高は中古年貢を永樂錢に而納、本朝之鐚四錢之替り永樂壹錢を用ひ、其砌々永高と申儀始り、貫高永高は悉譯違ひたる事なれ共、後世に至りては相紛れ、當時有之貫高村永高村何れ歟不詳、既に右杉田村割付口之見出には、貫高割付之事と認、高付は永高何百何拾貫文、此高何程と有り、左すれば貫高村とも、永高村共不分、定而古代ハ分りたる儀に可有之なれ共、當時に而は支配役人村方ニ而も、不穿鑿ゆへ紛れたる事と相聞、當時有之貫高村永高村、何れが何れ共不分明なり、

〔續倭漢名數三篇制度〕本邦都鄙采地永樂錢貫數　畿內近國稱百貫者充千石之地、關東遠國百貫有當八百石者、有當七百石、或當六百石者、蓋采地近京都及廣邑、則運送容易而穀價貴、故錢數漸多矣、采地在僻遠、則運送艱難而穀價賤、故錢數漸少矣、如奥州、古者以十貫充百石、今世以五貫充百石、五十貫充千石、是近世河渠漸開、而舟楫之利、以濟不通之故也、

〔農政座右二〕貫納

貫納ノ起ルユヘヲ知ラズ、又何時ニ始ルヲ知ラズ、太平記ニ、相模守、近國大莊八ケ所、青砥左衛門ニ給ヒタリ、左衛門補任ヲ啓キ見テ、何事ニ三萬貫ニ及ブ大莊ヲ給リ候フヤラント云ヘルコトアリ、コノ相模守ハ北條時賴ナリ、サレド東鑑ニ貫高ノコト見エズ、太平記ニ如此アレバ、時賴ノ時代ニ始マリ、京都將軍ノ時、專ラ行ハレシト見エタリ、田園類說ニ云ヘリ、サレドモコノ外ニハ太平記ニモ見エズ、鈴錄ニハ、大抵十貫ハ百石、百貫ハ千石ニ當レドモ、上中下ニヨリテ一定セズ、貫ト云ハ軍役ヲ田地ノ坪數ヘ掛テ割付シヨリ起リテ、六千坪ニテ軍役一疋ノ積リ、是ヲ一貫一疋ト云フトイヒ、暇積抄ニハ、或ハ云フ、今五十石ノ地ヲ十貫トツモル、又一說ニハ千石ヲ百貫ト云トモイヘリ、北越軍談ニハ、二萬貫ハ今ノ二十萬石ト云ニ同ジト見エ、北條五代記ニハ、永樂

貫高

に成、人力を盡し、金銀を用れば可起返分、御取ヶ帳郷帳、其外諸帳面等に、連々可起返引高之分と記すを連々引と云、右之内にも海成大池成大石入等、縱令何程金銀を入、夫力を掛たり共、可起返仕方無之、爲人用捨たる引物に無之、天地自然に出來たる損地故、不及人力には儀ながら、天變を以、又元之地所に成べき事も不知に付、可起返引物之内に入れ、高内引に致置事なり、

〔地方凡例錄〕一貫高之事 附り六貫定之軍役一騎人數之事

貫高は、鎌倉將軍家之末京都將軍家之始より、田地に貫高と云事始り、知行領地抔此貫高を用ひ、東國西國一統に行れし事也、北條相摸守時宗之時代に起り、足利尊氏公の頃より、專ら行れし事と見へたり、貫といふは永錢の貫文にはあらず、軍役之定メを田地之坪に割附しより起り、六貫一疋と云事あり田地千坪を壹貫と定め、六千坪を六貫とす、此六貫之地より軍役一騎を勤る、○中略六千坪は壹町六反貳百四拾坪なれば、軍役の積り六ヶ敷ニ付、尊氏公時代より壹反三百歩に直り、貳町歩に而六貫なるを以、壹騎役直に分る、古へ士之知行、貫高以前は田畑之町歩を以宛行ひ、足利將軍家以後、何百何拾貫と家祿定り、石高始りたる時代迄、都而貫高ニ而致領知、幾千貫幾百貫と云事、當時も民間之詞に殘り、苗を百目苗、壹貫目苗と百姓方に而唱、田地百坪ニ苗百把植、是を百目と云、千坪に千把を壹貫目苗と唱、一万坪に拾貫目苗に當り、凡田壹歩籾壹升と積り、拾貫は籾百石、百貫千石之當り、三百貫之知行、田地百町、籾高三千石、當時之石高十五之石盛に准じて高千五百石、籾數ニ而も五合摺、五公五民五ツ取ニ積リ、高千五百石也、○中略右貫高、今も武州相州上州邊には稀に有之、石高は元來無之、多くハ無反別之村也、貫高永高共、御入國以來、壹貫を高五石替之勘定、御定法に成る、然る處武州久良岐郡杉田村貫高之割付見請たるに、永壹貫文を高貳石替之積也、然バ村に寄、仕來有之、都而五石代共不相見、扨又關東には永高と申儀有之、鎌倉邊寺社領は何れも永高也、又村高にも永高有之處、貫高と永高致混雜、既に當時は一事兩名之樣に心

地するといふ儀にはあらず、斗代石盛を右の通り心得て成すとなり、

〔地方落穗集二〕山野海川高に結ぶ法の事

一野錢、野米、山錢、山手米、其外海川共に高に結ぶ法ハ、前に記せし厘付の法を考て、田半分畑半分の心を以て結ぶべし、皆五ッ成を元に立、米永より盛出す也、米を高に結ぶには、米壹石ハ高貳石に結ぶ也、是高に五ッ成の積也、又永ハ壹貫文を高五石に結ぶ也、是を高の五石替と云也、是又五ッ成也、術曰、永壹文替に貳石五斗を乘じ、免五ッにて除し高五石に成、右ハ何れも野高と云也、又曰、葭高、眞菰高、くこ高抔と云も有、是又野高と名付也、取ハ定免五ッ取也、又漆桑楮抔は三尺廻り壹束を分米壹升と極め、一束に永貳文に極る、皆五ッ取の法也、國に寄漆畑楮畑等の撿見する事も有ㇾ之同意也、是を上木年貢といふ、

〔地方凡例錄六〕一高內年々引之事

高內引に年々引、連々引と二樣有り、年々引と云は、人作ニ而拵たる引物、其土地入用ニ而、縱ば陣屋敷、郷藏敷、堤敷、溝代、道代抔、無くて不ㇾ叶品、作物不ㇾ仕付、年貢諸役不ㇾ相勤、古往今來不起返潰レニ成たる地所を、年々引高に相立候分は、御取箇帳其外諸帳面に記す、是を年々引と唱、尤右年々引高に立品たり共、起返ざるに限りたるにも無ㇾ之、縱バ海端川邊等、堤築立、新田仕立たる處、舊年に成り、又其堤外ニも新開出來、最初の古堤は不用に成に付、其土を外へ運び出、新堤築立、古堤之跡は田畑ニ成り起返る事もあり、又は古來陣屋有ㇾ之、當時不用ニ而陣屋を潰し、敷地開發致儀も有り、左すれば、限りて不起返と申筋ニは雖ㇾ無ㇾ之、入用ニ付、高內之地所人作を以、態と拵たる引物ゆへ、先年之不起返分と相立ル事なり、此類は其品多く有り、悉書盡し難し、〇中略

一高內連々引之事付り撿地改方、并定免內損地引方之事、一作引之事、

前に如ㇾ記高內引は、年々と連々と二樣なり、連々引と云は、天變地殃に而、山崩川缺池成石砂入等

名稱

山林ノ高ヲ算シ、貫高ヲ改メテ石高トス、

〔倭訓栞前編十四多〕たか　田産にたか幾ほどといふは、高の字也、

高と云は、田畑の分米を重ね上たるを高と云也、都ての物を重ね上れば高く成るゆへ也、

〔地方落穗集四〕分米高辻と云事〇中略

高結法

〔地方一樣記〕石積り貫積り同樣之事

一地方を高に結法ハ、往古より有來國々所々、運送を量り高を考事肝要也、子細ハ上方三分一銀と云法あり、是田畑五分違とみえたり、其外國々所々に色々成相傳之法有り、就中奥州にハ所所にて直段法之替見へたり、雖然上方關東を勘辨する時ハ、毛頭之相違なく分明に見えたり、然れバ高を量るには、第一運送万事旁を能考事專一と見えたり、軍役騎馬積り、年貢諸當之元と見えたり、先關東貳石五斗替と云法ハ、田畑六分違と云儀也、此法を以高を結也、高百石として、內田方五拾石として、田畑共に五ッとして、畑方貳石五斗替と云法を以、田計之地成共、畑計り之地成共、半分にて積るとみえたり、上方ハ三分一銀と云法、田畑五分違と云儀也、此法を以高を結也、心得は關東に同じ、其內上方三分一畑、三分二田なりと心得、田計りにても畑計りにても、物成は五ッ成と積るとみえたり、兩樣之法ともに一事替る事なし、貫積り之法も、斗代盛之法も同前也、永貳拾貫之地を、內田方拾貫として、畑方も拾貫として、田畑等分にして、四割替之法貳石五斗を以積りたると見えたり、然る上ハ上方關東に不限、國々所々石高盛永貫積り、田畑山野海川之類も高に結といへば、田畑々々とつもる也、又物成も半分々々田畑々々と積りたるなり、

辨解、本文の通り聞へたり、但上方は田勝畑勝、皆田皆畑の差別なく、三分二田、三分一畑とし、關東ハ半分田、半分畑と積るなれ共、皆田の所半分畑請にいたさせ、皆畑の所半分田請に擔

古事類苑

政治部七十七

下編

高

高ハ、タカト訓ズ、タケト同語ニシテ、高卑、長短、多寡、輕重等ノ積ナリ、今ハ田畠收穫ノ多寡ヲ擧ゲテ、其地ノ廣狹ヲ計フルナリ、高ニハ貫高、永高、石高、段高、出目高、無地高、色高、海高、山高、野高、桑高、楮高、拆高、除高、除地高、込高、延高、四一高、小以高等ノ種類アリ、而シテ込高、延高ノ事ハ、封祿部知行篇ニ載ス、

貫高ハ鎌倉幕府ノ時ニ起レリ、其法ハ田土ニ依ラズシテ、收穫米ノ價ヲ通計シテ、幾貫ノ所領、又ハ幾貫ノ田地ト定メタルナリ、而シテ今幾貫ト稱スル所ヲ以テ田畠及ビ米穀ト比較スルニ、田ハ一貫文ニ一段餘、二段三段餘、四段餘、五段、五段餘、壹町ニ當ルアリ、又畠ハ一段半、三段餘、六段餘、壹町ニ當ルアリ、又米ハ一貫文ニ一石二石、二石半、二石七斗餘、三石三斗餘、四石、四石四斗餘十五石餘、二十石ニ當ルアリ、又穀ハ一貫文ニ八斗ニ當ルアリ、其大差アルコト此ノ如シ、土地ノ異、時代ノ異、升量ノ異ニ由ルト雖モ、其詳ナルコトハ考フベカラズ、

永高ハ、明ノ永樂通寶錢ヲ以テ高ヲ計フルナリ、關東ニ於テハ、盛ニ永樂錢ヲ用ヰ、納貢ニモ之ヲ用ヰシニ由リ永高ノ稱起リ永百貫ヲ以テ五百石、六百石、七百石八百石千石ニ充テタル所アリ、

石高ハ織田信長ノ時ニ起ル、豐臣秀吉其制ヲ襲ヒ、田地ヲ檢シ、收穫米ヲ以テ準トシテ、田畠

〔尤の草紙上〕のぶる物の品々〇中略

田畠にさほをあて、けんちをしては、知行の高を延る、〇下略

〔地方凡例錄二〕居撿地と云事稀にあり、〇中略右にも云ごとく、撿地は上下萬民の盛衰得失に係はり、甚大切なることにて、其村々の日受木蔭四面土地の高低、山寄川附、往來端、村居の遠近等まで考へ合せ、地位を定むべし、東西に高岸を受たる場所、幷に往還筋、並木等ある地、又は森林等も見計ひて、木陰引をいたすべし、或は片下りの地處ハ、登りに打つ竿ハ詰り、下りハ延るものに付、是等の儀も心得、就中土地の善惡地味等を能々存せずしてハ、位を分て石盛を附けがたし、其外種々心得ありて、甚六ケ敷ものに付、地方功者もなくてハ成りがたきことなり、又地所繩竿の入方等ハ、その場所に隨ひ、色々口傳あることなり、諸證文諸帳面等仕立方の定法は、先哲の著し置ける書物數多ありて、悉く記すに遑あらず、御定法の儀ハ新撿御條目を用ゐ、不分明の義は相伺ひ、若撿地に取掛ることあらバ、其筋の功者の人に尋問し、諸書物を微細に穿鑿せずしてハ、容易に取掛りがたし、

〔勸農固本錄下〕檢地仕樣之事

步竿長貳間にて、壹丈貳尺貳分（此貳分ハ砂入の餘計なり）元末石突際に判形あり、太さ壹寸貳分廻り程、壹尺宛に目をもり、又繩にて打ハ、管繩吉水繩ハ、能苧三つぐりニ筆の軸程に、むらなくこき張候て、薄澁を引、又蠟を引も吉、玄めりにたるます、長壹町或百間程に致し、壹間宛ニないさげ、拾間に色苧總を印ニ付、併每間付てハからまれ惡し、繩撿地ハ詰るもの也、了簡在べし、山坂ハ車竿、屋敷ハ鎌竿、其外步行樣し、目積り考合べし、但竿打時、半間迄にて尺寸不及打、或竪橫廣狹にて、平均間に付る所ハ、尺迄ハ用、步詰の勘定ニ入、四厘餘迄ハ捨之、五厘より壹步に入、野帳ニ致斷書、案內之者、地主へ其旨申聞べし、

〔地方凡例錄二〕撿地之事

一間竿ハ貳間竿にて、一丈二尺二分、一間に一分ツヽの砂摺のために餘計を盛込み、二寸廻り位の竹、本末銅にて張り、一尺宛に目を盛り、三尺目一尺目の印の紛れざるやうにして用る、又本と末に繩奉行の印形を押し、竹の皮にて包み、印形の消ざるやうにして用ることもあり、竹太くしてハ重く、取廻しあしく、勿論少しもゆがみ有てハよろしからず、水繩ハ苧の性を吟味いたし、筆の軸位の太さを三線に堅く綯ひ、よく／＼澁を引き強く拔き、五拾間か六拾間かにいたすべし、餘り長き繩ハ不締りなり、管ハ女竹の性よろしきを、一間充節を拔き、本末を銅にて張り、繩を通し、管繩にいたし、一間目每に白き皮を付け、間數を記し、拾間目ごとにハ印しの紛れざるやうにして用る、是又繩管ともに太くしてハ、重くして強く締り兼るなり、尤管繩ハ重めありて締りかね、取廻しも宜しからざるに付、今ハ多く管なしの繩をよく／＼延縮なきやうに念を入て拵へ用るもあり、然し御定法ハ管繩を用べきことなり、都て繩撿地ハ反別詰るものゆゑ、其心得あるべきことなり、

六州の地猶たらず思ひて、かくは計られしにやと思ふなり、

〔田園類說〕三器攷略云、○中略中葉以來六尺五寸を歩とすといへるは、上方筋には舊法云々古檢の村迄、六尺五寸竿六尺三寸竿の場所と申傳へたる所之有を以て斯くいへども、其村の檢地帳ハ勿論、其外何にも記したる事ハなし、畢竟地面の歩廣なる故に申傳へたると見へたり、是によりて憶成事ともせず或說を擧て、土地を量るには六尺一間の積りなれども、量地の歩行樣に、竿をば壹丈三尺にして、其中を提て兩端を地へ付ケ印を付て見るに、地より拳迄大概二尺五寸計りと見て六尺五寸を弦とし、貳尺五寸を鈎として、算法によりて股を出せば、地面六尺のもの二ツ有を以て、歩行の爲に壹丈三尺竿を制したるを、後の人誤りて六尺五寸壹間の所も有之と思へるハ左もあるべき事也、信州飯山に任せし人に知れるあり、往昔城主に仕へ檢地又ハ地改抔に度々出し事有、間竿の尻を兩手に持ち、胸に竿を當て、竿先を地へ付て印を付ケ、貳間四間六間と算へさせたりといへり、是も右の說に同じく壹丈三尺を弦とし、地より胸まで四尺五寸計りと見て、是を鈎として股を出せば、地面壹丈貳尺貳分内となれバ、手廻しのため、壹丈三尺竿を用ひしと見へたり、又元和以來新田の法に、六尺五寸を歩とすと云事ハ、開發以前、新田を割渡す時の事を、心得違ひて、斯くいへり、最初の割渡しには、其節役人の心々にて用ひし事也、享保年中、南北武藏野、上總國千町野新田など最初の割渡しには、いづれも六尺五寸竿を以渡し置、開發なりて本檢地の節ハ、定の通り六尺竿を以て檢地有し事也、

〔田園地方紀原上〕鼎案ずるに、三器攷略に、丈三の竿を鈎股弦に積りたるは附會と云べし、田園類說に、信州飯山の人も、鈎股弦の法を用ひし由にて引證すれども、これハ私領方一種の法にして天下に通用すべきにあらず、當今にても國持家には樣々の仕法ありて、前々家格を以て取計ひ一樣無之事ハ、封建の世の常にして引證しがたし、

撿地ハ裁許筋見込不附以前には、猥に貸わたし勘辨可有之事、

一地位は石盛伺相濟候上認入、高附もいたし可申筈之事に付、たとへバ場所にて地位評議相決候とも、清野帳へは不記して貸渡し、場所野帳へ合言葉にてまるし置可申候、

一新撿地に無之場所は、元地位も相知有之候得ども、年暦を經、地味に勝劣も可有之事ニ付、村方之もの共にも、元地位に不拘、當時之地位地引帳へ朱にて一二三附にいたし、差出候樣申渡、地位評議之節見合にもいたし候事、是等も御條目に相見候事なり、

〔田園類說〕間竿之事

一地方答問書ニ云、家作等之間積ニハ、六尺三寸又ハ六尺五寸も用ひ候由、田畑之歩積にも、中古天正年中以前之比迄ハ、六尺五寸を用候と申傳へ候、文祿年中の比、秀吉公之命にて諸國之撿地の時、六尺三寸の竿を用候と申傳へ候得共、右いづれも書記候儀も無之事故、難信用候、慶長元和之頃よりの撿地竿ハ一丈貳尺貳分を用來候、壹間を六尺壹分と定め、壹間に壹分宛之餘計を加へ來候儀、前々よりの格例ニ候、今以て公儀之撿地御條目に、壹丈貳尺貳分竿を以て、撿地可仕旨書載有之候事、

〔讀史餘論十二〕秀吉天下の事

唯今の世迄、其遺風の世の害をなす事のみある、尤議すべき事にや、一つには此人天下の田を丈量するに、古法を變じて三百步を一町(○町恐段誤、下亦同、)とす、古の說に三百六十步を以て一町とする事、一步を以て一夫一日の食として、一町一年の食分にあつといふ、然るをかくつゞめられしに、(按ずるに、古法六尺を步とす、豐臣の時、六尺五寸を步とせられし也、)又當代六尺の繩を用ひられしかば、古の三百步の中にして六十步を失へり、民いかで窮せざらむ、されど此法再び古に復せん事、井田の一度變じて復し難きが如くなるべし、思ふに此人の丈量せられしは、昔の如く或は一國一郡一莊をあたへむには、六十

高

南方川

右墨書は場所にて改候間數を認る振合なり、尤書面間數之外、中畦幷繩たるみ等引之、正味之長横如此、此分又朱間と名付猶豫之間數を附る、則長九横八にて、朱書之通に成事なり、

一穢多持之地所、甲州上曾根村檢地之節は、村持と認置候事、

清野帳に半紙横折片面三筆づゝ認

壹番字

一田　(朱書)檢地奉行調印○印略
長拾四間壹尺八寸
横六間四尺貳寸　　誰
此畝三畝六ト

高

外巾三尺　東方道

一長三間横壹間　南方墓所　　同人持

ノ内
一田　長拾四間壹尺八寸
横拾間四尺八寸　　同人
此畝五畝三ト

高

南方川

右之通檢地奉行調印之上○印略村方江貸渡し爲寫取、算違又は字違脇書相違も有之候はゞ、附札いたし可差出旨申聞遣す、但御條目之趣にてハ、早速に清野帳可貸渡樣に相見候得共、論所

以利倍取、皆濟上にて可追失、若令難澀者、可斬頸事、

一堺論之事、如何樣も檢地帳か第たるべし、雙方共ニ遂言上、沙汰分明上、非分者ニハ、爲過怠五百貫文可出之、但雙方申分於不聞分者、論所之地可[illegible]上事、○中略

慶長貳年三月廿四日　盛親在判
元親在判

檢地用具

〔勸農固本錄下〕檢地仕樣之事

檢帳に用道具　古水帳　貫代帳　五人組名寄帳　所繪圖　寺社繪圖　案内帳　番附帳　野帳　竿二組　間繩　水繩　間尺　磁石　かけや　鶴觜　鍬　鋤　荷つほ　十露盤　硯紙

分度の道具是ハ山堤高下を知り、向之廣遠近を知るなり、　見當四本是ハ天氣能ときハ、紙にてさいはいを付、雨天にハ麻にて付る、

〔檢地獨行〕野帳。認。振。半紙横折、片面に三筆づゝ認

字元　上田八畝拾貳ト

壹番
一田
長拾五間五尺四寸（朱書）拾四間壹尺八寸
横八間貳尺四寸（朱書）六間四尺貳寸
此畝四畝拾貳ト（朱書）三畝六ト
高　誰

外巾三尺　東方道

一長三間横壹間　南方墓所　同人持

ノ内
一田
長拾五間五尺四寸（朱書）拾四間壹尺八寸
横拾三間三尺（朱書）拾四間壹尺八寸
此畝七畝三ト（朱書）五畝三ト　誰

ハ、是モ西境ノ村ヨリ初メ、朱タ他村ニ及バズシテ、淺野氏ト替リケレバ其事止ミ、文祿三年ニ至テ、始テ郡中不殘檢地セリ、今之ヲ古檢地ト稱セリ、又檢地帳一冊アリ、云、鳴澤村御檢地名寄帳巻末ニ、慶長叄年戊卯月廿六日民部トシテ在判ナリ、慶長三年檢地ノ事、又他村ニナシ、思フニ此地偏鄕ニシテ隣村ナク、西邊ニサシ出タル村ナレバ、文祿ニ打チ殘シテ是年ニ及ベルカ、民部トイヒシ人不詳、淺野氏家臣ニモ聞エザル所ナリ、

（駒井日記）文祿二年後九月十四日　一豊後ゟ檢地帳到來候、都合四拾貳萬石御座候、　十二月七日　一淺野彈正所江御成　一尾州國中先高檢地之高並ヘリ分目錄帳仕立　十二月十一日　一太閤樣從大津伏見江還御〇中略　一三位法印樣江先年拾萬石之内、御檢地にて不足分一萬二千二百石之分、則尾州御藏入之内を以被進、帳面仕立、御朱印之儀申上、　十二日　一尾州御給人帳、檢地帳、御藏入、何も帳面仕立、太閤樣爲可懸御目、民部法印、淺野彈正に爲持被遣、

（甲斐國志村里十八）川口村〇都留郡

一高三百四拾七石壹斗四升四合〇中略

此村往昔ハ八代郡ニ屬ス、〇中略百年以前マデ猶ホ八代郡ニ屬セシ由ニ聞ユレド、文祿三年、寬文九年ノ檢地帳、皆都留郡ト記シタレバ、前記共ニ齟齬セリ、

（甲斐國志村里十九）桐原村〇都留郡

一高五百拾三石三斗四升貳合〇中略

此村八村ニ分レテ各里長アリ、〇中略日原村ノ里長、文祿三甲午年八月十日ノ檢地帳ヲ藏セリ

高百九拾八石壹斗九升五合ナリ、

（長曾我部元親百箇條）一不寄給人百姓、隱田仕者、聞立於遂言上者、一稜可褒美、其上を以、奉行中相談仕、檢地帳を以令沙汰、歷然地頭隱置候者、太以可處罪科、若百姓相隱候者、檢地以來之遂算用、

一高六拾五石八斗四升九合○中略

古檢地帳一冊村民所藏

成澤大田和村御檢地帳

天正十九辛卯十月吉日

成澤屋敷拾八軒、合壹反三畝、此米壹石六斗九升、

大田和屋敷八軒、合四畝拾四步、此米五斗八升、

居屋敷合壹反七畝拾四步分米合貳石貳斗貳升七合三勺

中畠壹町壹反貳步分米八石八斗五合三勺四才

下畠壹町三反貳畝拾貳步分米七石九斗四升

下々畠三町貳反四畝貳拾步分米拾貳石八斗貳升六合六勺八才

荒畠壹反七畝拾三步分米壹石九升七合三勺

畠數合六町壹反壹畝拾五步分米合三拾貳石八斗九升六合六勺貳才

家數合拾九間

右略シテ都合ノ數ヲ記ス、今ニ比スレバ分米戶數甚ダ少シ、同檢地帳大嵐村ニモ所藏セリ、末紙壞レテ不見、全數知レザレバ不記、是ヨリ以前ノ檢地帳郡中絕テナシ、唯此二村ニ存スルノミ、

天正壬午以來檢地ノ始ナリ、按ニ大石村民所藏ノ內、天正十九年卯月十四日、加藤作內家臣ノ印書ニ云、先年少將樣御檢地ノ刻云云、之ニ據レバ十八年冬頃檢地アリシ樣ニ聞ユレドモ、一郡ヲ檢スルニ、他ニハ絕テ此事聞エズ、思フニ檢地ノ催シアリシニ、無程加藤氏ト替リケレバ、其事不遂シテ止シナルベシ、加藤氏領地トナリテ此二村ノ檢地ハアレドモ、他村ニ其沙汰ナキ

一同所上ノ下田五畝三歩　長拾四間壹尺八寸　横拾間四尺八寸　誰

高七斗壹升四合

南方川

右之通、上西之内紙竪折ニ片面三筆づゝ認、紙返りは字を堂の前と認、同所とは不記、紙續のどとじめ之處同所也、他村之もの名請は何村誰と認る、〇中略

一撿地帳綴上紙限、撿地奉行千どり判貳ケ所ヅヽ押て、奥書之處、下役帳付まで調印之上、高附總反別寄之所、袋張にいたし、不見樣ニ撿地奉行印形いたし、扱支配御代官手附手代之内呼出、村方案内之もの印形取揃可差出旨申聞、末之帳ばかり、本紙扣とも渡し遣、調印相濟候上、御勝手方御勘定奉行計連印之奥書認、調印は御勘定所ニおゐて取計之積、帳面不殘御取箇方組頭江差出、公事方御勘定奉行は連印無之事、

但撿地相濟候月之御勘定奉行、奥印いたし候筈、寛政十午年、越後國鹽谷町一件論所撿地之砌、伺濟有之候事、

〔農政座右二〕撿地

土佐　土佐遺聞曰、慶長ノ頃、一國悉ク撿地セシ地撿帳百餘卷アリ其後籠宗全ト云算者、國中ノ點撿飽未ナリ、私ニ仰付ラルベシ、一萬石ノ地ヨリ千石ヅヽ打出スベシトテ、先己ガ住居ノ邊ヨリ始メシニ、近邊ノ郷民コレヲニクミ、宗全ガ家ニ火ヲカケ燒殺セリ、

〔甲斐國志二國法〕永祿六癸亥年、蘇林寺領撿地帳ニ穀米納物銘々小前ニ米何斗何升ト記セリ合貳拾四石仁斗四升五合俵數百貳拾壹俵三升五合也右代物ニ參拾四貫六百仁拾文トアリ、

〔甲斐國志十八村里〕成澤村〇都留郡

撿地帳

右之條々急度相守可申候、若於相背者、
梵天帝釋四大天王總日本國中六十餘州大小神祇、殊伊豆箱根兩所權現三島大明神、八幡大菩薩、天滿大自在天神、部類眷屬、神罰冥罰各可蒙者也、仍起請文如件、

年號干支月　　何之某血判名乘書判

〔甲斐國志村里十九〕畑倉村〇都留郡
一高三百五石六斗四升三合〇中略
古ヘハ畑倉、岩殿、強瀨一村ニシテ、文祿撿地ニ高五百八拾九石四斗六升ナリ、寛文撿地ノ時分レテ三村トナル、此村寛文撿地甚苛刻ナルヲ歎キ、愁訴シケレバ、領主ヨリモ寛宥ノ命アリテ、元祿十年重テ繩ヲ入ル、其撿地役人佐々木總右衞門ト云者仁惠アリケレバ、村民大ニ悅伏シ、其德ヲ感ゼリ、此人寶永甲申年〇元年十二月十二日病死ス、民其恩ニ酬イ、享保十三戊申年八月廿三日、石碑ヲ地藏堂ノ旁ニ建テ、長ク其冥福ヲ祈ルト云、法名宜譽澄興居士、秋元氏ノ家臣也、
一郡ノ內此村ニ限リテ、元祿十年ノ撿地帳アルハ當時ノ恩ヲ思フガ故ナリ、

〔督農要略〕一撿地帳といふハ、其村々田畑上中下の位を付、高石盛を付、竪橫間數を記し、反步を書き、地主の名を銘々記し候を、撿地帳とも水帳とも申候、

〔撿地獨行〕撿地帳認振

一上田三畝六步（堂の前）　長拾四間壹尺八寸
　　　　　　　　　　　　橫六間四尺貳寸　　誰
　高四斗八升
　　外巾三尺　東方道
一長三間橫壹間　南方墓所　　同人持

持ハ百姓之家來達者成小才覺もの吉、扨繩奉行ハ、總奉行の勤方も兼、田畑の位、竿の始終出入に氣を付、折々繼竿歩行樣も仕、田畑の中ニ寄合、上トモ下トモ定べし、又帳付役、一組四人あらば、貳人ハ宿ニ居、淸帳を認、其外諸用可調、貳人ハ野方江出、竿取何間と呼候時、此方よりも高聲にて何間と呼、帳に付べし、田畑持主の名、位付不定前にハ付まじ、總奉行より位付等何にても相談あらば、存寄有體に申べし、尤算用役も兼させべし、又目付役ハ、竿の始と納(おさまり)と、見當之出入、竿取之足腰に氣を付べし、或ハ川端道端岩根抔折詰てハ、百姓難義可仕候、ケ樣之所ハ、目付役了簡有べし、其外役人中宿々へも見廻、不行跡無之樣申付べし、

〔地方落穗集十七〕撿地役人之事

一撿地被仰付候節ハ、掛り御代官、幷御勘定下役竿取之者罷越也、御代官御勘定ハ不及誓詞、下役竿取へハ誓詞被仰付、御代官御勘定行候也、

誓詞文言幷罸文認方古實之事

一公儀御爲を專一ニ仕、少茂御後闇キ儀仕間敷事、
一御役隨分念入、麁末無之樣ニ可仕事、
一縱親類緣者好身之者有之候共、依怙贔屓一切不仕、有體可仕事、
一金銀者不及申、何樣之輕キ品ニ而茂一切受用仕間敷候、幷少々之物成共、借用仕間敷事、
一權威ケ間敷儀仕間敷候、若請方百姓等不屆之儀有之候はゞ申上、御下知を請、取計可申候、爲自分手荒之儀仕間敷事、
附、不作法之好色仕間敷事、
一朝夕御定之外、村方馳走一切受申間敷候、幷食事好ミ仕間敷事、
一田畑踏荒不申、萬端相愼、所之難儀不成樣相心得可申事、

〔飛州志一緒歷〕凡合國ノ石計、古昔ハ三萬八千石ナリト云、天正年中、金森五郎八郎源長近、後入道素玄兵部卿法印此州ニ封ゼラレテ平均ニ治メ、國ノ中央大野郡高山國府ニ於テ、天神山ノ古城跡ヲ再興シ、舊地ノ外ニ二三ノ丸ヲ北方ニ倍セリ、改メテ高山ノ城邑ト號ス是ナリ、夫ヨリ出雲守可重、出雲守重頼、長門守頼直、飛驒守頼業、出雲守頼時居之、然ルニ元祿五年壬申、官命アッテ頼時羽州上山ノ城ニ移サル、○中略　註 自是此國官治ト成テ、高山ノ城ハ加賀宰相菅原綱紀ニ命ゼラレ、賀士交代シテ守ル事四年、同八乙亥ニ至レリ、則同年城ヲ毀ツ、此時州內ノ田畠ノ經界ヲ正クセンコトヲ、濃州大垣ノ城主戶田采女正藤原氏定ニ命ゼラレ、元祿七年甲戌ヨリ八年乙亥迄、家士ヲ遣シテ戶籍ヲ改メ、石計四萬四千一百五石餘ト成レリ、

〔甲斐國志三十八古蹟〕一淨居寺城墟城古寺村○山梨郡、中略、　寶永五子年、金百貳拾貳兩貳分上納シテ、見取地ニ受テ、享保十七年子打量アリ、田額拾五石餘ニ定ムト云、

〔甲斐國志五十三古蹟〕一番所ノ廢跡長濱村○都留郡　西ノ海ヘ通行ノ路ニテ、村ノ西ニアリ、礎石存セリ、寶永七年廢跡貳拾歩ノ所、代金壹歩永百拾四文入札ニテ、永錢上納シ、村民ノ所帶トナリ、寶曆十二年午四月、御代官江川太郎左衛門支配ノ時、撿地アリ、下下畑貳拾壹歩分米壹升四合ナリ、

〔甲斐國志十大村里〕萬澤村○巨摩郡、中略、

一高五百六拾九石貳斗八升六合○中略

枝村增野以下六ヶ所○增野、登尾、大城、杉山、小倉、仲澤、ハ本、請所新田ニテ西ノ山間ニアリ、寛政中撿地アリテ、租税ヲ命ゼラル、

檢地役人

〔勸農固本錄下〕撿地仕樣之事

總。奉。行ハ正路成地方心得有人吉、繩。奉。行ハ地方功者にて魂氣强、算勘有人吉、帳。付。ハ算筆達者にて魂氣强、年四十以下吉、竿。取。ハ年廿より卅迄、達者成律義者吉、目。付。役。ハ才智有正路成者吉、見。當。

と相見、別段古石盛も無之候上は、其節之御條目も有之候事ニ付、是迄之石盛通御居置可有之哉、尤兩村とも至而地味惡敷、畑方計五斗代より上之石盛は相當不致場所ニ付、上畑屋敷とも五斗代ニ御居置、六段之位付ニ石盛御定有之候得ば、末之段ハ五升盛出來いたし候旨、然ル處是迄五升代ハ無之義ニ付、旁以右は貞享之御條目ニ御見合、古石盛御居置被成候方、地所相當可致旨、然ル處近來六段之位付を以、石盛相定候仕來之樣ニも御心得有之候間、右等之處ニおゐて如何御取計可有之哉、規定難御決旨ニ而、委細御問合之趣承知いたし、御尤至極ニ存候、且右體之場所ニ而、地味惡敷、畑方計之村方ニ而、五斗代より上之石盛も無之候上ハ、六段之位付を以、御定メ有之候ニも及申間敷、何れ古撿之儀ニ付、此度撿地之方自と打出しニ相成可申、左候得ば高反別も少少は相進可申哉ニ付、新規五升代之盛出來不致候樣、御取計被成候方、村方氣請も宜、穩ニ可有之と存候、何も六段之位付ニ無之候而は、御條目ニ相振候と申譯ニも有之間敷、右樣之場所ニ候上は、無理ニ六段石盛引下ゲ候ニも不及義ニ付、是迄之姿ニ石盛御居置被成候方可然と存候、其外懸りニおゐて差支候筋ハ、差當無之候間、右之趣を以、可然御取計可有之と存候、此段御報旁可得貴意、如此御座候、以上、

正月七日

本多傳十郎

田邊東一郎

町田萬七郎樣

添田一郎次樣

增田作右衞門樣

〔甲斐國志二二〕國法　後ニ貞享元祿ノ間、甲府殿河西ノ撿地アリテ、增五萬石餘、都留郡モ地押アリ、增貳千石餘、享保中、松平甲斐守、山梨郡內ヲ撿地セリ、追年新墾加ハリテ及三拾萬石餘、

〔檢地獨行〕以剪紙致啓上候、然ば今般一村撿地被仰付候上州千俣門貝兩村石盛之儀、是迄左之通、

貞享三寅年檢地石盛、

千俣村　中畑四　下畑三　下々畑貳　山下畑壹　屋敷五

右同斷

門貝村　上畑五　中畑四　下畑三　下々畑貳　山下畑壹　屋敷五

右之通、貞享度之撿地石盛ニ有之、酒井河內守沼田領一圓撿地之節之義と相見、別段其節之御條目も有之事ニ付、右古石盛通居置候方ニ可有之、尤兩村とも至而地味不足、畑方計ニ而、迚も五斗代ゟ上之石盛ハ、相當不致場所故、六段ニ位付いたし候節ハ、末之一段五升盛ニ相成、左候得ば古石盛にも五升代は無之義ニ付、旁貞享之御條目ニ見合、古石盛通リ居置候方、相當可致と存候、然ル處近來六段之位付を以、相伺候仕來之樣ニも被存候ニ付難相決、此段及御問合候、前書之通、古石盛ニ居置、御差支之儀無之候哉否、御取調御報被仰下候樣いたし度存候、右得貴意度如此御座候、以上、

十一月六日

増田作右衞門
添田一郎次
町田茂七郎

田邊東一郎様
山岡仁左衞門様
本多傳十郎様

去十一月六日附之御切紙致拜見候、然ば此度撿地被仰付候上州千俣門貝兩村撿地相濟候處、是迄石盛之儀、右兩村とも貞享三寅年撿地石盛ニ而、右は酒井河內守沼田領一圓撿地之節之石盛

〔玉露叢三十〕一延寶七年正月十四日ニ、松平九十郎ニ丹。波。筋。檢地仰セ付ラルニ依テ、今日九十郎家臣ドモニ、白銀時服等ヲ玉フ、○中略

一同月十六日ニ、本多出雲守ヘ大。和。筋。檢地仰セ付ラルニ依テ、今日出雲守家臣ドモヘ白銀時服等ヲ玉フ、○中略

一同月○三月五日ニ、先頃松平日向守ヘ播。州。筋。ノ檢地ヲ仰セ付ラルニ依テ、今日彼家臣ヘ白銀時服等ヲ玉フ、○中略

一同日○三月十七日先頃戶田左門ヘ濃。州。筋。檢地仰セ付ラルニ依テ、今日彼家臣ドモヘ白銀時服等ヲ玉フ、○中略

一同月○四月廿六日ニ、九鬼和泉守ヘ先頃攝。州。邊。檢地仰セ付ラルニ依テ、今日彼家臣ドモヘ、相濟御褒美トシテ、白銀時服等ヲ玉フ、○中略

一同日ニ、先頃小出伊勢守、石川若狹守ヘ丹。波。筋。和。泉。邊。ノ檢地仰セ付ラルニ依テ、今日彼兩家來ヘ御褒美トシテ、白銀時服等ヲ玉フ、○中略

一同月○六月十五日、先頃松平大和守直矩ヘ、播。州。邊。檢地仰セ付ラル、依テ家臣ドモヘ今日白銀時服等ヲ玉フ、○中略

一同日○六月二十六日ニ、先頃山。州。邊。檢地ヲ石川主殿頭ヘ仰セ付ラル、依テ御褒美トシテ家臣等ヘ白銀時服等ヲ玉フ、○中略

一同月○七月廿一日、先頃河。州。邊。ノ檢地ヲ本多兵部少輔ヘ仰セ付ラル、依テ今日家臣ドモヘ白銀時服等ヲ御褒美トシテ玉ー

〔甲斐國志古蹟三十八〕一誕生屋敷○下岩下村山梨郡　里人武田信虎ノ誕生セシ處ト云傳フ、中畠二段八畝九步、貞享元子年檢地ノ時、租稅ヲ命ゼラル、

一今度澀川郡撿地被仰付候ニ付而、龜井村眞觀寺、ほり之內寺屋敷被成御用捨候由忝存候、ケ様之儀も無御心元存、此中左右承度候處ニ、具ニ被示下、先以安堵仕候、當月七日遊佐新左衛門殿御上候時、以書狀申入候、定而相屆可申候、然者龜井村鞍作村ニ眞觀寺相拘之手作分田畠御座候、今度之御撿地ニ見分ニ出申由申越候、ケ様之作相少づゝ寺納候而、留守居之堪忍申付候、此度御撿地能候次而ニ候而、貴所様以御分別被成御寄進、寺相續候様ニ奉頼存候、○中略

霜月○慶長十七年十三日　　　　金地院

片桐市正様人々御中

〔藩翰譜八上毛利〕寬永の初、秀元關東に伺候しける時、輝元入道宗瑞、秀元の許へ使下して、井原加賀、淸水信濃といひしものなり、我家むかし領する所の地、十箇國に及べり、今入道か身に及び、わづか兩國の賦税を以て、彼の累代の家人に充て行ふに、上も下も悉くに貧しく苦しみて、軍國の賦役に堪ふる事を得難し、既に公役に奉ずる事を得ずんば、國賜らん事、其詮なきに似たり、たゞ須らく兩國の地を以て、將軍家に返へし奉るべし、如何にもして宰相の計らひにて、我家滅びざらん様を賴み思ふ所なりとぞ云はせける、秀元大に驚き、土井大炊頭利勝に就きて、此由を歎き申す、大相國家、○德川秀忠聞しめされ、秀元いかにも計らふべしと仰せ下さる、秀元まづ周防長門の地を丈量す、初め兩國の租入、合せて三十萬斛と聞えしを、今代の法を以て量るに、凡そ七十八萬斛を得たり、入道此由を聞て、悦ぶこと限りなく、安堵の思ひをなしてけり、

〔遠碧軒隨筆初集地儀〕一大峯ノ事、○中略サテ吉野山ニ知行千石餘アリ、今度五味藤九郎代ニ、內輪ニテ知行所ノ公事ヲシテ、公儀へ出ル、タゞサヘ吉野一揆所存ニ知行モヘラサレ、棹モ入タキ折節ナレバ、藤九郎撿地セラレケレバ、千石餘ノ內ヨリ又千石餘ウチ出シテ、大方三千石程トナル、其出ル分ハ、ミナ公儀へ召上ラレ、○下略

一駿府へ罷下候條、一書認置候、○中略内々承、眞觀寺之事、可有御肝煎之由令滿足候、可然樣ニ御才覺所仰候、淵川郡御撿地にも繩打無之、門前在所をも寺より少々年貢ニ請申候、水帳ニも具可有之條ニ、最前之通成申候樣ニ御才覺所仰候、御用捨ニ成候へ者、猶以珍重候、○中略

八月廿三日

安井治兵衞殿人々御中

一其後又遣迎院法傳寺さしひき可申とて被罷越候折節、前太閤秀吉公、御撿地之砌、總旦那罷出、御訴訟申、法傳寺領如先規御朱印被下候を遣迎院法傳寺之御朱印ヲトリさり、上京遣迎院ニて逐年法傳寺知行六拾八石餘納被申候事、もし御朱印ニ上京遣迎院ト御座候はゝせひなく候、遣迎院領ハ別而北河原と申所にて取申され候、下鳥羽法傳寺之御朱印にて上京遣迎院ニて法傳寺之寺領いまに納申事めいわく申候、幸御撿地之砌諸事御あらための事に候條、かやうのだん急度被仰付候て可被下候事、○中略

十月廿五日

下鳥羽法傳寺
然譽

御奉行所

一先度申候山城ニ有之興福寺末寺之內、笠置寺、西小田原寺、東小田原寺、撿地被免候樣ニと申候條、自總中使僧越申由候、伽藍も于今有之事候、衆僧も不知行候へ共、舊跡難離居住申候、餘歎敷事之由申候、幸板伊州、米淸右被越由候間、御相談候て、御馳走於我等も可爲大慶候、興福寺末寺と申ながら、別而當門へ自往古相隨候寺ニ而、旁難通候て申候、此刻御再興賴存候、

十二月十六日

一門主判

圓光寺

金地院

八月四日

米津清右衛門尉殿人々御中○中略

一昨日ハ以書狀申入候口上、御返事承居候、先以御繩當寺內堀垣內、先代御用捨御朱印懸御目、御理申入候處、被聞召分、寺家一衆大慶存候、御下奉行衆へ其內被仰付可被下候、爲其役者進じ候、猶口上可得御意候、恐惶謹言、

八月五日

米津清右衛門殿

一駿府へ罷下候ニ付、御傳馬人足被入御念被仰付、無異儀今日罷立候、內々昨日可罷立存候へ共、用所少不相調候而、今日罷下候、伊賀守殿○板倉勝重へ可然樣御取成奉賴候、仍西岡今里村法皇寺事、當寺大事院末寺ニて、拙老別而由緒之處にて候、知行寺ニ候へ共、近年御檢地已後不知行零落無正體候、今度御檢地付而、彼寺手作分少有之由候間、御繩打之剋、彼寺內看坊堪忍成申候樣、御才覺奉賴存候、一昨日伊賀守殿へ、右樣子具申上候間、被成御心得御披露賴存候、○中略

八月廿三日　金地院

恩田金右衛門殿御宿所

一駿府へ罷下候間、一書認置候、○中略河內澁川郡御檢地之由承候、龜井村眞觀寺、拙老相拘申寺に候、國中一番之知行寺ニて候へ共、先代御檢地ニ不知行零落無正體候、堀構之內、以前も少御座候、先代御檢地ニも少之年被仰定、繩打ハ御用捨候、水帳面ニも可有之候、此度も如先年被仰付可被下候、少々御寄進も候て、尙以彼寺再興御武運長久御祈禱過之間敷候、○中略

八月廿三日

片桐市正殿人々御中○中略

月廿三日、清須故薩摩主舊臣等有知行配當、去午年薩摩主加增セラレケル通、或ハ千石二千石、或ハ五百石三百石分何モ此度被召上、亦去年秋被當竿時、高六萬石減ジケル分ヲ割合セ、喩バ六百石ガ千石ニ成ト云々、　七月下旬ヨリ、美濃國有檢地、　十五年七月廿九日、大久保石見守、濃州岐阜ニ著、去夏ヨリ越後國中村里相改逗留シ、信州ヲ通リ、直ニ美濃ヘ來ル、是當國去年檢地鄉村知行爲被相改ナリ、

〔創業記〕慶長十五年七月、薩摩國島津陸奥守(又八事去去年改名)琉球ノ王令同道相上、今月廿日都ヲ立テ駿府江戸ヘ下ル、去年島津人數琉球ヘ令渡海、彼島ノ王ヲ虜ニシ、歸朝シテ及此儀、是ヨリ琉球ヲ島津ニ賜ル、彼島田檢地スルニ都合十三萬石アリト云、

〔國師日記〕一一書申入候、内々榮任可被申上候、岡崎村當寺領、庄屋良忠子忠右衛門跡式之儀ニ付て、遺言狀之通ニ傳藏可有之候旨、去年立入河内ニ被仰出候、雖然黑谷ニ在之忠右衛門弟坊主休閑と申者、兄弟共申合、樣々違亂申候由候、殊ニ今度御檢地ニ付て、彼屋敷幷作職之田畠以下迄、爭論申候由候、彼在所ヘ御折紙被遣、良忠、忠右衛門屋敷田畠何も傳藏□□付候樣ニ被仰付候て可被下候、得尊意候、傳藏ハ拙老小性に召遣候故如此候、恐惶謹言、

八月(〇慶長十六年)三日

板伊州樣人々御中

一八月三日、志州より七月廿日之狀來ル、使川井彥左衛門、

一態申入候、當國御檢地被仰遣ニ付而、當郡貴殿御奉行之由、昨晚承屆、仍當寺境內、先帳面百十三石分指出、御下奉行ヘ上候由役人申候、被成其心得可然樣ニ奉願候、然者右之外堀垣之內、在家幷寺中舊跡諸塔頭菜園等、先代御檢地之刻茂、竿御用捨候、則御朱印懸御目候、以此旨今度も御用捨候ば、寺家一山可有滿足候、但推並御法度候ば、不及是非候、先得御意候、猶使僧可申入候、恐惶謹言、

正荒ト書スルコトハ、前兩度ヲ指シテ云ナリ、其法ハ淺野〇政長ノ時ノ如ク、壹反三百歩ヲ用フ、

〔甲斐國誌二圖法〕甲州武川筋武田八幡領之事

合貳拾七石貳斗八升八合

右籾ニシテ　　大石見守渡

七拾五俵壹斗六升　　手代　雨宮二郎右衛門

内五石貳斗四升　熊荒共〇中略　　風祭才兵衛

熊荒トハ、伊奈熊藏檢地ノ時荒地ナリ

〔農政座右二〕撿地

常陸　當代年錄曰、慶長七年八月、佐竹領撿地アリ、知行高ヲ改、繩ヲ入ベキ由仰付ラル、御代官奉行衆常州ヘ打入、此國古來ヨリ久敷繩打ナシ、奉行ハ内藤修理亮、島田次兵衛、長谷川七左衛門、伊奈熊藏仰付ラル、熊藏内修理内ニ功者アリテ、神社佛閣山林古跡悉打ツメタルニヨリ、土民ナンギ中計ナシ、熊藏目代袴田善兵衛、殊ニ酷吏ニテ、少シモユルミナシ、コレニヨリ入水スル僧モアリ、又佛殿ニ火ヲカケヤキハラフモアリ、善惡ニアラズト人皆申ケリ、

〔三州龍海院年譜拔書〕同年〇慶長八年癸卯年ヨリ明年甲辰ニ至テ、米津清右衛門ヲ奉行ニ被仰付、三州ヘ總撿地ヲ入レ給フ時キ、從岡崎城主公儀ヘ願ハレ、五萬石ノ内ヘハ、城主本多豐後守殿〇康重ヨリ、本多十郎右衛門、中島半兵衛兩人ヲ奉行ニテ撿地ヲ入レ、寺社領ヘ水帳相渡ル也、此ノ時寺領ノ百姓ノ内チ、監寺宗梵藏主ト不和ノ者アリテ、當院領ノ百姓共、彼ノ奉行人ト心ヲ合セ、一ノ橋ノ義ヲ論ジ、宗梵ヲ謂ヒカスメ、寺領ヲ過半落シ、城付ノ高ノ内ヘ入レリ、是ヲ以テ此寺貧キニ依テ、漸ニ山ノ間ニ新田ヲ開キ、飯料ト爲セリ、

〔創業記〕慶長十三年七月廿日、此比ヨリ尾張國爲撿地、伊奈備前守参著、則村里被當竿、十四年正

中屋敷　貳反廿代
下屋敷　九反卅代四分　　下屋出　十六代
下畠　貳町貳反廿二代二分　　下畠出　貳反二代四分
荒壹町五反十六代
外切畑四反四拾七代二分
慶長三年七月九日算用
都合三百九拾五町三段夕
荒三拾壹町壹反四代三分
本田貳百七拾五町壹反卅六代壹分　山三右花押
出田百廿五町三反廿七代四分　山三右花押
此内
外切畑拾九町十代四分夕
慶長二年
正木右兵衛
國津右近
松田七左衛門
横山二右衛門
黒岩治部

〔武徳編年集成四十四〕慶長三年正月九日、秀吉、蒲生家ヲ再ビ憎メル事有テ、藤三郎秀行ノ領知、奥州ノ内廿郡、羽州長井二郡總高九十一萬九千石ヲ放テ、野州宇都宮新撿地高十八萬石餘ヲ授ラル、

〔甲斐國志國法二〕同○慶長六丑年御料所ニナリ、平岩主計頭專爲城代時、大久保石見守奉命打量ス、同七寅年ニ及ベリ、但都留郡ハ鳥居土佐守領分ナリ、四郡ノ高貳拾三萬八千百八拾四石六斗壹升壹合、今稱之古高、四奉行ヨリ毎村ニ掟書ヲ出ス、今稀ニ存スル者アリ、此時ノ撿地帳ニ熊。藏。荒。彈。

〔土佐國幡多文書〕土佐國幡多郡上山鄕御地撿高目錄

總田數合參百八拾四町九段四拾代四分夕內（本田貳百六拾貳町三反廿七代　出田百廿二町六反十三代四分夕）

右內

上田　拾八町七反廿七代夕　上出　八町五反廿八代四分夕

中田　四拾五町四反十七代壹分夕　中出　廿四町七反卅代三分夕

下田　九拾五町三反卅五代壹分　下出　五拾九町五反二代五分夕

上屋敷　壹町九反四十壹代壹分　上屋出　三反四十代二分夕

中屋敷　六町四反廿九代二分　中屋出　貳町五反四十六代四分夕

下屋敷　拾六町四反卅九代貳分夕　下屋出　五町八反八代五分

上畠　五町四反十七代四分　上畠出　四十七代壹分

中畠　五町六反十四代二分夕　中畠出　貳町八反卅七代四分

下畠　四拾壹町四反四十六代壹分夕　下畠出　十七町六反廿代三分夕

荒三十町七反五代四分夕

外切畑拾八町五反十三代二分夕

已上

大用村　上山岡元鈴

合十五町五段卅三代夕內（本田拾貳町八反拾九代壹分　出田八町七反十三代五分夕）

右內

上田　七反四十二代　上出　貳反廿三代

中田　壹町五反廿壹代貳分　中出　六反五代二分夕

下田　五町五反十六代五分　下出　壹町六反十六代五分

三百歩を以て壹反とす、貳百歩を以て大歩と號す、百歩を小歩と號す、五十歩を半分とす、當時用る處、方六尺を一歩として三拾歩を一畝とす、拾畝を一反として、拾反を壹町とす、一反三百歩、一町三千歩、

〔農政座右 二〕檢地

筑前　立齋舊聞記曰、慶長元年、筑前ヲ始、九州悉檢地ヲ仰付ラレ、其年ノ正税ヲ悉皆御倉ニ納置テ、檢地ノ後、當ル年貢ヲ給主ニ渡シ、殘ル米ハ御用米タルベシト定ラル、

〔武德編年集成 四十四〕慶長元年十二月、是年下野國宇都宮三郎左衛門藤原國綱、實子ナキ故、宗徒ノ臣十人上京シ、淺野長政ガ庶子釆女長次ヲ以テ、嗣子トセン事ヲ奉行中ヘ願望ス、時ニ國綱ガ弟芳賀左衛門、兼々十士ト不快タル故、私ニ上京シ古例ヲ述テ、芳賀家ヨリ國綱ガ養子ヲ立ベシ、長政ノ末子ヲ家督ニセン事ハ、國綱ガ欲スル所ニ非ズシテ、長臣等ガ僣上ニ出ル由ヲ訴クレバ、秀吉ハ宇都宮ノ本家豐前ノ城井屋形常陸介朝房、天正十六戊子年ニ亡ビタル時ヨリ、其東國ニ散在スル釆邑ヲ國綱押領シ、今ニ其事ヲ達セザルコトヲ憎レケレバ、態ト芳賀ガ申趣ヲ許容セラレ、右ノ十人ヲ芳賀ニ賜ハリ、罪スベキ由密々ニ命ゼラル、芳賀愚ニシテ是ヲ察セズ、大ニ歡ンデ、十人ノ內六人ヲ鴻命ト稱シ、洛ニ於テ是ヲ誅シ、野州ニ歸テ殘ル四臣ヲ害スノミナラズ、其輩ガ領地殘ラズ押領ス、斯テ秀吉ハ淺野長政ヲ以テ國綱ガ常陸下野兩國ニ於テ、十八萬石ト書出セシ領分ヲ檢地セラル所、三十萬石ニ餘レリ、爰ニ於テ國綱ガ僣上押領ノ罪ヲ鳴ラシ、備前國ヘ配流シテ、其領知咸ク收公セラレ、遠祖宗圓座主還俗シテ、宇都宮ノ家ヲ興シテヨリ、當國綱ニ至リ、廿一世ニシテ斷絕スト云々、

〔甲斐國志 國法二〕慶長元申同二酉年ニ至リ、淺野彈正少弼長政、一國檢地シテ石高ニ改ム、柏尾山ノ寺領從東門西門中之年貢貳拾九石八斗之事、令寄附云々、慶長二年三月九日、彈正少弼トアリ、

〔陽復記 上〕それに又豐臣秀吉公の神德も重じ給はず、神郡をも撿地し給しかば、度會郡さへ半は他領となりぬ、

〔勢陽雜記 一〕一豐臣秀吉公、天正文祿年中に、諸國撿地し給ふ時、當國をば羽柴下總守、岡本下野守、一柳右近大夫、朽木河內守、新庄東玉齋、服部釆女正、稻葉兵庫頭等に被仰付、文祿三年に撿地ありしなり、村數一千八十九ヶ村也、如此改り、大神宮領四十ヶ村ハ上古より守護不入の地として、代代不改例にまかせ、さし除き給ひぬ、

〔薩藩舊記 後集十九〕島津氏文書

薩摩國貳拾八萬三千四百八拾八石、大隅國拾七萬五千五拾七石、日向國之內諸縣郡拾貳萬百八拾七石、合五拾七萬八千七百三拾二石、內今度御撿地之上壹萬石御藏入、六千貳百石石田治部少輔、三千石幽齋、此分相除し、五拾五萬九千四百卅二石事、目錄別紙有之、令扶助訖、全可有領知者也、

文祿四年六月廿九日御朱印

羽柴薩摩侍從どのへ

〔川角太閤記 三〕一小早川隆景拜領の國、筑前も一揆再發可仕と見へ申候處を、分別を以、事出來不仕樣に被仕候、肥後の一揆も內藏助手あらく被仕候故なり、撿地を仕り、其上に昔是より三里と申處をば、五里の津出仕候へ、五里所をば八里も可仕のよし、彼是に仕置あらく被申付故一揆起り申候、〇下略

〔地方落穗集 一〕太閤撿地步數之事

一太閤秀吉公、天下を掌握の後、慶長年中、是乘坊算術の達人に仰て、諸國を撿地す、越前國に至て太閤他界有によつて、半にして止、依之今に古代の撿地殘りて所々に有、太閤ハ五六の數を以て土地を改、國の高反別を增、是を太閤撿地といふ、左の通り、

其後撿地六尺五寸坪にて撿地有

太閤樣御撿地六尺三寸坪也

一（長六拾間横五間）　此歩三百坪　壹反也

是六尺坪にて、二百三拾歩七ト五厘ニ成、然バ元一反にて廿九歩貳ト五厘ヅヽ出也、

〔續武家閑談十四〕一稻葉藏人通義ハ一鐵次男兵庫頭重通ガ子也、勢州多氣郡岩手城（田丸近處）ノ二萬千三百五十石ヲ領シケルガ、文。祿。三。年。ニ。撿。地。有テ二萬五千七百石トナル、

〔退私錄中〕堀久太郎が事幷三百六十歩を一町となす事

一、三百六十歩を壹町（○町恐段誤）とす、是ハ一年三百六十日にして、民の食料一日に壹歩ヅヽの積也、太閤の時の繩ハ六尺五寸なり、御當家になり、三百六十歩に成、又其後六尺繩に成、是は稻葉濃州の致されしといふ、

〔武德編年集成四十三〕文祿四年六月十日、秀吉諸國ノ田畠悉ク撿地シ、餘分ノ賦稅ヲ收公セラルベキ旨命アリ、勢州十三郡ハ羽柴下總守雄雅、岡本下野守宗憲、朽木河內守利綱、稻葉兵庫頭通廣、服部采女正、一柳右近大夫、新庄東玉齋等此事ヲ沙汰シテ、各田畠ヲ撿地シケルガ、先達テ兩大神宮御神領悉ク勘落スル所ニ、剩ヘ相殘ル宮川ノ內、四十箇村ヲモ撿地ヲ遂ントス、然ルニ西洞院家ノ尼孝藏主ガ膝ヲ枕トシ、秀吉睡眠セラル所、神慮殊ニ憤ラセ玉ヒテ、撿地スベクンバ命ヲ斷ントノ靈夢ヲ蒙リ、覺テ後偏身汗ニ成テ、大ニ驚キ、急ニ羽書ヲ勢州ニ飛セ、此事ヲ止ラル、爰ニ於テ神官等四海一統ノ撿地ニ、御神領ノミ其沙汰ナキ謝禮トシテ、黃金百枚ヲ獻ズル所、是ヲモ速ニ返サル、是ヲ以テ後世ニ至テ彼四十箇村ハ穀高ノ沙汰ナシト云々、蓋シ本朝諸國一統ニ撿地ト云事ハ、往昔ヨリ曾テナシ、文祿四年ノ撿地高ト末代ニ稱スルハ、此時改メ出ス所ヲサシテ云ナリ、

在之帳面ニ判を仕可ㇾ渡事、

一如ニ御法度一自賄ニ可ㇾ仕候、但ざうし薪ぬかわら地下人ニも可ㇾ召ニ遣之一事、

一給人百姓ニたのまれ、禮儀禮物を取、私曲之族於ㇾ有ㇾ之ハ、互聞付次第遂ニ糺明一さは打之もの不ㇾ相届ニ付而ハ、可ㇾ加ニ成敗一主人相紛に付而ハ、無ニ用捨一在様ニ可ㇾ令ニ言上一事、

右之條々相守、下々迄此一書を遣、さは打ニ可ㇾ申ニ付一也、

秀吉公御朱印

文祿三年六月十七日

羽柴下總守どの

服部釆女どの

稻葉兵庫どの

岡本下野守どの

一柳右近大夫どの

朽木河內守どの

新庄東國どの

右伊勢國一志郡須ヶ瀬村、渡邊六兵衛が家に所傳の古文書也、六兵衛が家ハ、先祖渡邊筑後守男四郎左衛門尉、北畠家より永祿天正の比、木造左衛門尉の目付として、須ヶ瀬へ移住し、其後兩家に分れ、太閤檢地の時、兄を仁右衛門、弟を四郎兵衛といひ、同村の庄屋を勤め、檢地にあづかりし由、其比仁右衛門と筆記せる古き書物の內に、

一太閤樣御檢地、文祿三年きのへ午年、一柳左近殿御打被ㇾ成候、仁右衛門地方ハ御宿を仕、大繩ニ請申候、

古來檢地六尺坪にて

一長六拾間 横六間 此步三百六拾坪　壹反也

〔雜々拾遺 二〕西山光明寺の住僧秀歌事

越州栗生の光明寺は、西山派の淨土寺なり、天正年中、秀吉公天下をしたがへ給て、日本こと〴〵く撿地あり西の岡は兩度の撿地にあへり、細川幽齋奉行せらる、其時光明寺の住持なにがし、幽齋のまへにひざまづきて、

みかり野の我はきじとぞ成にけりけん〳〵地にてほろ〳〵となく

幽齋大きにかんじて、殿下の御まへは、それがしよきやうにはからひ申さん、當寺の領內ばかりは、一命にかへて赦免せしむるとてゆるされぬ、其後秀吉公きこし召て、一段よくはからひし事かなとよろこびかんじたまへり、

〔伊勢國渡邊文書〕就伊勢國御撿地相定條々

一田畑屋敷六尺三寸棹を以、五間ニ六拾間、三百歩ヲ壹反ニ可致撿地事、
一上田壹石五斗、中田壹石三斗、下田壹石壹斗、下々者見計可相定事、
一上畑壹石貳斗、中畑壹石、下畑八斗、下々見計可相定事、
一屋敷方壹石貳斗たるべき事
一山畑、野畑、川田、多先斗代官居ケ、其上見計、斗代可相定事、
一山手淺鹽濱、小物成之事、先給出申付、其上見計年貢可相定事、
一立々之上中下、幷井溝リ、麥田日損水損、念を入見分、斗代可相定事、
一村切傍示を立、入組無之樣ニ可相定、今迄傍示相紛候ハヽ、隣鄕之上役申談、新傍示さかい可相定事、
一升者京升ニ相定、則撿地爲奉行在樣ニ京升を相調可遣、前々升を建集可取上事、
一撿地面百姓にもうつさせ請狀申付、以來斗代違さほ違無之樣ニ可申付候、則撿地爲奉行、其在

〔太閤記十二〕奥州九坪之城堀尾茂助乘捕事

今度御退治之國々、檢地仰付らるべきため、秀吉公會津にいたり、御動座有て、淺野彈正少弼石田治部少輔、大谷刑部少輔奉行として出されしが、漸檢地も出來し侍りければ、恩賜の地をおこなはる、○下略

〔關八州古戰錄二十〕尾藤左衛門尉杉山主水正事

斯テ奥羽ノ二州一應ヲ擇ハズシテ、殿下○豐臣秀吉ノ武威ニ伏從シケレバ、兩國ノ檢地ヲ沙汰スベシトテ、前田筑前守利家、細川越中守忠興ヲ奥州ニ留置シ淺野彈正少弼、石田治部少輔、大谷刑部少輔、其事ヲ承リテ、三隊ニ分テ、檢地ヲナセリ、

〔武德編年集成四十〕天正十八年十一月廿三日淺野彈正少弼長政ハ、大略奥州ノ土地ヲ糺シ、且甲州、信州、駿州ノ前代ノ租税ヲ記シ、歸路ニ赴キシガ、駿府ニ於テ奥州一揆勃興ノ事ヲ聞、其臣淺野六左衛門ヲ會津米澤ヘ遣ハシ、長政ハ是ヨリ武陽ニ赴キ、神君ニ軍旅ノ事ヲ伺ヒ、奥州ヘ進發ス、

〔戸川記上〕一同○天正十八年、小田原陣御發向也、○中略兎角して小田原滅亡、夫より直に奥州御進發、秀家○宇喜多も供奉し、白川に於、秀家に檢地仰付られ、肥後守○戸川秀安承之て組家來を出し、早速檢地相濟、御歸陣後御稱美有て、金銀等を被下、

〔信濃國飯田村水帳〕松尾領村高○中略

松尾高〆壹萬貳千四百四拾壹石九斗四升六合三勺

天正十九辛卯年九月

御水帳　京極修理大夫樣御檢地

御竿奉行　淺井九兵衛

筈井小右衛門

ヲ削ラレ、憤リ甚シク、奥羽ノ國民ヲ促シ、一揆ヲ起サント欲シ、今月十四日ヲ期日トス、然ニ八月以來、上杉景勝羽州ノ田畠ヲ糺シテ、六江ノ地ハ大谷刑部少輔ガ從士、撿地ヲ遂ル處、郷民難澀ノ旨有シヲ、大谷ガ臣權威ニ募、三人ヲ斬テ五人禁錮ス、爰ニ於テ庶民怒ヲ發シ、期日ヲ待ズ、當月上旬一揆勃興シ、大谷ガ勢五六十人ヲ殺ス、　十五日、増田ノ砦降、上杉先隊藤田能登信吉謀テ、降人ヲ皆剃髪サセ、劍戟ヲ押取テ、輕卒二百人ヲシテ守衞サセ、翌年迄大森ニ禁錮ス、景勝ハ大森城ニ屯シ、由利仙北所々ノ經界ヲ糺ス、木村秀俊モ餘多起ル一揆ヲ鎭メ、奥州ノ撿地ヲ沙汰ス、　廿六日、菅野ノ寨降ル、是モ剃髪サセ、坂田城ニ禁錮ス、時ニ兼テ景勝ガ臣本庄越前繁長ガ居城、庄内大浦ヘ、昨夕ヨリ凶徒襲來ノ告有シカバ、忽後詰シテ、城兵トモミ合是ヲ伐崩シ、五百七十三人ヲ討捕、又藤島城ヲモ一揆是ヲ乘取、景勝城代栗田永壽ガ臣、酒井新右衞門、同極之助等ガ勇兵ヲ討捕、然レドモ永陣殊ニ撿地ノ大任ニ依テ、上下疲勞シ、且深雪道路ヲ埋ル故、壓勢ヲ指置、來春屠ント欲、景勝越後ヘ兵ヲ班ス處、兇徒程ナク城ヲ避退ク、

〔續武家閑談十〕一奥州羽州兩國ノ監使三好中納言秀次也、則石田淺野奉行ニテ、利家卿奥州五十四郡ヲ改テ撿地ヲトゲ玉フ、扨又出羽國中十二郡ノ撿地景勝卿承テ、撿使ハ大谷刑部也、先景勝ハ利家ヨリ一日先立テ下總市川ヨリ下野ノ高原越ヲカヽリ、七月下旬會津若松城ニ至リ、政宗ヨリ城ヲ請取テ秀次卿ヘ渡シ、〇中略景勝ハ羽州ニ打入、或ハ城々ヲ請取、又ハカキ上ヲ設ケテ人數ヲ籠置、段々田畠ヲ改メ正シ玉フ、然處ニ十月十四日ニ處々ニテ、一同ニ一揆ヲ起スベキト、政宗ヨリ密々ニ相催處ニ、六郷ニテ大谷衆繩ヲスルニ、百姓ドモ强ニ訴訟スルヲ、大谷衆權ツヨク、三人ハ斬伏セ、五人ヲ禁メケル故、十四日マデ待ズシテ、上旬ニ一揆起リ大谷衆雜人ドモ五六十人打殺ス、〇中略景勝ハ大森ヘ本陣ヲスヘ、生捕ノ一揆ニ鐵炮二百挺ソヘ、コノ處ニ翌年春マデ差置、由利仙北ノ經界ヲ糺シヌ、

テ座ヲ立ウヘハ、誰カ重テ諫論スベキ、是ニハ底意有事也ト強ク留メ閑處ニ招キ入段々心底ヲカタリ玉イ、蜂屋大ニ承服ス、ソノ上ニテ酒盃ヲ進メ玉テ秀吉カクナン申サセタマヒケル

檢地ヲバ無用々々ト蜂ガサス

ト宣ヒケレバ、則兵庫頭、

空ウソフイテ聞ヌ關白

ト付ケレバ、大笑ヒニ成シトゾ云々、

〔退私錄中〕秀吉の命にて奥州羽州田地を檢定せし事幷政宗會津領せし事

一小田原陣の時、利家之十騎、奥州出羽の田地を檢定し、淺野長政木村常陸を副て、其政事を聞せしよし、秀吉の命也、

〔北條五代記十〕氏直沒落の事

然るに秀吉公は、奥州御仕置と有て、○中略奥州五十四郡の檢地をあらためさせ、秀吉公は黑川まで著御、是より引返し歸洛し給ふ、

〔小田原記〕一關白殿○豐臣秀吉奥州迄御支配黑川迄御下向也、淺野彈正、石田治部少輔、大谷刑部少輔三手ニ分、奥州ノ檢地ヲ改玉フ、

〔淺野系譜乾〕長勝―

―長政　彈兵衞　彈正少弼　從五位下

七月○天正十八年太閤○豐臣秀吉陸奥國會津に發向し、彼國の諸士こと〴〵く命にしたごふ、こゝに於て石田三成大谷吉繼等と共に、陸奥國の田地を檢地し、不日にしてこれを沙汰す、今に至りて其制法をもちふ、

〔武德編年集成四十〕天正十八年十月十四日伊達政宗累年粉骨ヲ竭シ、是ヲ得タル奥州ノ内、數郡

蓮寺ニ藏セル紙ハ、牛王寶印ノ裏ニ書シ血判ナリ、

起請文

當年田地何れも被入精散田被任一札有之候上壹札之表すこしも違候はぬやうに、一札の表にかりわけとのり候に者、かり分に成共、ついはうになり共、少損免迄引候て、年貢になり共、いづれも百姓衆のぞみのごとくに可申付候、不限御藏入諸給共に九筋之內、かやうにやくそく申聞候上者、御脇衆へも御異見可申候、年貢のへり候とて、難澁之地頭衆へハ御藏前をいたし候てなりとも、申合候首尾ちがへ申間敷候、いよいよ精々入田地耕作可被申候、其上其方より首尾ちがひ候衆をばとがに行、はたものにかけ候歟、鄉中をはらひ可申間其義油斷被申まじく候、右分違候はゞ、日本國中大小神祇御ばつをこうむり、むげんにだざいいたすべき者也、仍起請文如件、

天正十八年壬丑(〇壬丑恐庚寅誤)四月廿五日

九筋百姓中 □

伊奈熊藏

〔續武家閑談十〕一小田原落城前、加賀利家、上杉景勝ハ關東ノ數城ヲ拔テ、相州平塚ヘイタル處ニ、秀吉ノ仰ニテ、人數ハソノ地ニ殘シ、大將計小田原ヘ至リヌ、時ニ奧州出羽兩國ノ撿地ヲ改メ、守護給人ヲ定ムベキ也、小田原ハ稱々懇望扱ヲ願上ハ、近日ニ埒明ベシ、大將ハ追付奧州發向シテ、田畑ノ經界ヲ正シ玉ヘト也、依之平塚ヘ再歸陣逗留アリ、コレヨリ濡、蜂屋兵庫トヤランガ、タトヒ小田原掌ニ入トモ、天下未定、人々危ヲフムノ時ナレバ、先善政ヲ施シ賞罰執行レテ後、撿地成サレ可然也、先々田畑功者成ヲ撰ビ、目付ヲ添テ處々ヘ被差遣、ソノ土地ノ廣狹損益運送ノ自由不自由、田畑ノ善惡ヲ見積リ、有增ヲ知リ玉ヒテ後、知行割ナサレ、守護給人ヲ定メ、ソノ上ニ其人ニ仰テ、撿地相極メラレ可然也ト、理方明ニ七度マデ諫メケレドモ無承引、蜂屋ハ忠言逆耳、御信容ナキ上ハ、必ズ御滅亡ノ兆タルベシト、座ヲ立處ニ、袂ヲ取テ留ヘ、其方諫言不用之、汝モイカリ

一薪之外、自前たるべき事、

一給人ために能やうに仕、予がため不㆑可㆑存事、

　昔は田畠たりと云共、當分河に成候はゞ、高に結び入まじき事、

右無㆓相違㆒、可㆑守㆓此旨㆒者也、

天正十七年、八月初旬より、先西三川より撿地をうち初、其より尾州知多郡をうち侍るに、前高より減じければ、いかゞ有べき事にやとて、其手寄に在し撿地のものども寄合つゝ、評議しけるに、たゞ注進致さんにはまかじとて、申上ければ増減は、有のまゝに物せよとのみにて、大どかに沙汰し給ひき、かくて三州小川苅屋邊、智多郡にて二萬石げんじ侍りしに依てたとひ仰出しは有のまゝと有つれども、一往吉田修理亮方まで、此あらましをいひをくり可㆑然候はんとて、又連狀にて申達ししかば、尤なりと匠作おもひ、ひそかに御內意を得侍るに、くどき事な申しそ、たゞ給人痛ざるやうにせよと思度計なげに宣ひて、おくへ入らせ給ひけり、吉田返簡に云、

　御狀之趣則得㆓御內意㆒候へばくどき事を申よと計仰有て、何事をも宣はざりし間、其御心得尤候、頓而被㆓明㆓御隙㆒、待入存候、恐々謹言、

　　八月十六日　　　吉田修理亮

撿地衆、此狀を拜見し、思ひの外なる君にて有よな、愚意を以て君の御心をはかる事のはづかしさよと、身を責再三赤面に及びき、尾州幷西三川北伊勢の內にても、八萬石減じしか共、露悔給ず、里里村々を限り、むつかしからぬやうに知行割を沙汰し給ひしに因て、領地之內小成物ありと云へども、則給人給りき、

〔甲斐國志附錄百十九〕按ニ伊奈熊藏、寺田右京亮原田佐左衛門三人奉㆑之、西郡ニ原田、東郡ノ內ニ寺田ノ印アリ、文言皆同㆑之、是年伊奈熊藏九筋ノ撿地ヲ被㆑命、百姓ニ渡シタル起請文一通アリ、一條一

モ伊熊御繩入ノ時トアル是ナリ、其文云、依有御朱印任面付之員數如是可有所務云々、

〔武德編年集成 三十三〕天正十七年四月

宇都宮家說ニ、嫡家豐前ノ城井居形常陸介鎭房、其子彌三郎宗房、天正十五丁亥年冬ヨリ城井谷ニ蟠リ、黒田如水父子ト挑戰ス、當正月秀吉ヨリ起請文ヲ得テ雌服シ、宗房妹ヲ以テ黒田長政ニ嫁シ、今廿日鎭房中津城ニ往テ黒田父子ガ饗應ニ預リケルガ、祝酒五獻ナル時、猛勢急ニ起テ誅ニ伏ス、宗房ハ此時肥後ノ檢地ヲ命ゼラレ、虎嘯宿ニ在テ、二十八日ノ夜、加藤淸正ガ爲ニ亡滅シケレバ、庶流三郎左衞門國綱、野州宇都宮ニ住シテ、嫡家城井居形鎭房ガ知行、奧州常州野州ニアル郡邑ノコラズ是ヲ押領ス、國綱先達テ秀吉ヘ聘ヲ厚クシ、麾下タルベキ由ヲ達スト云々、

〔武德編年集成 三十四〕天正十七年七月七日、御當家國郡ノ三奉行、本多重次、高力淸長、天野康景、鈞命ニ依テ制令六箇條ヲ出ス、〇中略

或曰、神君〇德川家康今年、參遠駿甲信五州田畠經界廣狹ヲ糺サル、高數謂ラク、檢地舉テ此掟ヲ出シ玉フ歟、

〔太閤記 八〕古今各知行割之事

一秀次公、尾州を臣下に分與なされしは、よしあしの地をくみ合せしかば、諍論之事多く出來き、傍輩中やはらがざるやうに聞しめし、さらば檢地被仰付、知行割なされかへんとて、檢地之者一郡へ三與(くみ)づゝ出し給ひて、一くみのうち信あつき者、又は算勘に達し、損益にさときもの、かくのごとく與合せられしなり、人をえらび精して誓紙にも及ばずして出し給ひき、制書左のごとし

覺

一隣郷堺之儀、如先規可然之事、

一百姓不致迷惑やうに可有之事、

右之條々、無相違可被守此旨也、仍如件、

天正十五年六月六日　秀吉卿御印

佐々內藏助殿

〔農政座右二〕檢地

肥後　佐々傳記曰、天正十五年六月、秀吉公肥後國ハ佐々成政ニ賜リヌ、成政ツクヅクト思案シケルハ、當國ハ數十ケ年守護トテモアラザレバ、國中ノ田畑ヲ檢地スベシトテ、生駒小千(カセン)ト云モノニ竿ヲ打セ、是マデハ何町何反トイヒシヲ、何石ト究メケル、土俗傳ヘテ生駒竿ト云フ、一反三百六十歩ナリ、

〔國師日記〕一、乍恐申上候〇中略

一、島五ケ所ハ天正十七年之御檢地之入目、我等仕置申候事、〇中略

右之通、先年ゟ今迄ぢんたい仕候處、去年ゟ又太郎と申仁、新義ニ違亂申かけ、めいわく仕候間、有樣ニ被仰付候ば、忝可奉存知候、以上、

慶長十八年十二月一日　勝藏判在

金地院樣御內御披露

〔甲斐國志一提要〕九筋二領

一、武田時代、田野町段ノ數詳ナラズ、以貫高通用セリ、天正十午年ノ後猶依舊制、同十七丑年命アリテ、伊奈熊藏家次、一國打量(ケンチ)アリ、又慶長元申年、淺野彈正少弼打量アリ、右兩度ノ高ハ不分明、同六丑年、大久保石見守長安奉行トシテ、打量アリシ時ノ石高ヲ傳ヘテ古高ト稱シ、每村ニ水帳ヲ藏セリ、

〔甲斐國志二圖法〕同〇天正十七年、伊奈熊藏打量ニヨリ所出ノ證文ハ俵數ナリ、稱之熊藏繩、古文書ニ

米津清右衛門殿人々御中

一幸便之條令啓候

一今度之御檢地之時ニ、三聖寺開山塔圓通寺之山ニ御座候田畠ヲ、米津清右衛門殿、竿ヲ御打て、泉涌寺領ニ成候由ヲ承及候而、則拙老、伊賀殿江參て、迷惑之由ヲ申候處ニ、伊州被仰候樣ハ、拙老より清右衛門殿江之アテ處ニイタシ、一ツ書ヲ仕て、伊州マデ進候へ、伊州へ清右衛門殿御出之時ニ、此山之儀ハ、伊州ノ淵底御存知之事にて候間、一ツ書ヲ清右衛門殿江みせ被參て、樣體ハ伊州之被仰理て可被下候由慇ニ候間、さて此一ツ書ヲ仕て、伊州江渡進候、其上拙老も清右へ參て、此一ツ書ヲ直ニみせて理ヲ申處ニ、一々被成御合點候間、珍重存候、○中略

十二月十五日○慶長十六年　聖澄在判

圓光寺
拜呈　金地院各御床下

〔戴恩記〕上 太閤御所、○豐臣秀吉 九州陣に薩摩國の檢地をば、此幽法印○細川藤孝 に仰付らる、有社の神主いつはりて、內陣より色々の奇瑞有、鳴動ありなんと申おどろかしければ、よく其眞僞を糺し、かやうの人をまどはす者ハ、實の神職にあらず、見せしめのためとて御成敗有き、

〔多聞院日記〕天正十五年八月朔日、一去年撿知ニ無禮ヲ仕タル曲事トテ、國中庄屋衆卅七人籠者了、

〔太閤記〕八 肥後一揆蜂起佐々退治之事

佐々○成政 肥後國受領之時、五ケ條之制書有、

定 ○中略

一三年撿地有まじき事○中略

〔秀吉事記〕四國御發向幷北國御動座事
十日〇天正十三年八月至坂本被納御馬、割國定知行者也、〇中略渡以上十七ヶ國知行幷大綱入魚網、三ヶ日之内相究者也、蓋非天才者爭制之、玄哉妙哉、此先數十ヶ國遂檢地、昔之所務帳過一倍、當年亦踏分田地、土民百姓不接私、又如不及飢寒勸辨之、以五畿七道圖帳作一枚鏡、照覽之、忝人王十三代成務天皇六年、始分國堺、其後人王四十五代聖武朝、行基菩薩以三十餘年之勞、定田地之方境、爾來雖有增減無改之者、今也殿下〇豐臣秀吉所作碁盤如盛目、自他無入組、限繩打之、故國無堺目之相論、民無甲乙訴訟、〇下略

〔圓師日記〕東福寺内　三聖寺之開山塔ヲ圓通寺と申候、三聖寺ゟ四百年之間しんたい仕候寺にて御座候事、
一圓通寺ハ久たいてん仕候ニ付而、圓通寺之山ヲ今村と申者ニあづけ申候時ニ、ふろヲ二度たき候へと申付候、其故ニ廿七年以前酉ノ年〇天正十三年御檢地之時まで、今村ヨリふろをたき申候事、
一今村甚太郎申候ハ、此山ニ少シ田畠御座候、前ニハ米六斗、今村かたへ納とり候由申候、今村申候ハ、此山之田之六斗ハ、廿七年以前酉ノ年ノ御檢地之時ニ、泉涌寺領ニ罷成候ゆへに、廿七年之間ふろをたき不申候、ふろをばたかず候て、山をば當年まで廿七年之間、今村かたへちんたい仕候事、前代未聞之儀候、〇中略
一右ニ申候樣ニ、此山之田ノ六斗ハ、酉ノ年御檢地之時ニ、泉涌寺領ニ罷成之由申候、然バ今度之御檢地ニ、定而泉涌寺領のうちだし可有御座候間、其うちだしの内ヨリ六斗ノかゑの地ヲ、泉涌寺へ被遣て、此山幷田畠ハ、如前々三聖寺へ被返下て、三聖寺領之内江御かき入て被下候はば、一山之大衆可為大慶之事、〇中略

〔農政座右〔一〕〕檢地

○○天文縄　若狹守護代記曰、天文廿二年、將軍義輝公、國々ノ守護人ニ被仰付、國々ノ所領ヲ糺シ、日記ヲ以可言上由ヲ仰下サル、仍テ國々知行ノ地自領他領トナク、一國切ニ記ス、日本國中知行高寄、高木光貞、上野晴時、兩人命ヲ承テ、諸國ノ帳請取、若州三郡八萬五千三百十石餘、日本總石高千八百六十九萬七千二百四十二石、右ノ外島々多シ、年貢等ヲ不納ニ依テ不知、將軍家ヨリ國々ニ撿使シ改之玉フ、天文縄ト土民ノ云ハ此時ノ事ナリ、

〔筑前國續風土記〔一〕〕總論

一順和名抄に、筑前國田一萬八千五百餘町と有、○註略又延喜式及和名抄に、筑前國正税公廨○註略各二十萬束とあれバ、合四十萬束成べし、○中略近代田の秋稼を三分にし、其二を土貢として公へ奉り、其一は農夫の所得と定められしは、豐臣秀吉公より初れるよし聞ゆ、天文十二年、日本國中每國の知行高をしるし、其簿を將軍家に獻ず、是を民俗には天文の縄と云、筑前國三十三萬五千六百九十石としるせり、小早川中納言秀秋、此國を領せられし時ハ、田畠の町數二萬九千六百九十三町、領田畠高三十萬八千四百六十一石ありしとかや、是怡土郡公領を除ての數なり○下略

〔北畠物語〔四〕〕一國平均の事

信長卿武威天下にふるひて、諸國をなびけ、今又勢州一國を治めんためとて、○中略家人瀧川をもつて、長島の城にすへ、北方の諸侍これに與力す、一益はじめて撿地を入れ、諸士の領分をあらたむ、其後諸家これにならひ、諸方に撿地を沙汰す、其比信雄信包兩人、勢州南北のさかひをあらためらるゝとき、雲出川を以て定めんとせらるゝに、ある老人すゝみ出、古歌を引て云、

風早の池の流れのしたゝりは安濃と一志の堺なりけり

此歌をもつて、其さかひ決定す、

ヲ古撿ト云、今ニ比スレバ高ニ多少アレドモ寡キ方ナリ、秋元氏領主ノ時、寬文九己酉年、再ビ百姓ニ命ジテ撿地セシム、是時村里百拾壹、高貳萬九百拾壹石六斗六升八合五勺、古撿ニ比スレバ村落ノ増スコト三拾村ナレド、或ハ一村兩村ニ別レ、又五六村ニモ分レシ故ナリ、民戸ノ殖タルニハ非ズ、

鎌倉幕府檢地

〔吾妻鏡九〕文治五年十月廿四日庚戌、可遂出羽國地撿之由、被仰置留守所、御進發之後、地頭等愁申云、地撿之間可願間田之旨、留守張行之由云云、仍今日可停止件事趣、所被遣御書也、

當國撿注之間、可被倒所々地頭間田之事、尤驚聞食、於出羽陸奥者、依為夷之地、度々新制にも除訖、偏守古風、更無新儀、然者件間田等何被停廢哉、有公田之外間田者、如年來にて不可有相違之旨、依鎌倉殿仰、執達如件、

十月廿四日　　　　前因幡守

出羽留守所

足利幕府檢地

〔越後檢地帳〕長尾彈正左衛門尉方分　下條高波保　文明十五拾月四日　　　　被官玉虫新右衛門尉給分

一本田千六百苅　名木野

增分貳百貳拾苅

壹撿知増分七百九拾苅　文明十九卯月十日

合貳千六百拾束苅　○下略

〔大内家壁書〕堺目相論之時、餘地幷餘得之事、

諸人知行分、堺目相論自地内及御沙汰、以上使被撿地之時、各所給之地、過分限有分土、餘地幷餘得事者、此餘地餘得之事、以中途之儀、可為公用之由、御定法也、諸人為存知壁書如件、

延德三年九月十三日

て古撿ハ六尺三寸四方を壹歩とし、新撿ハ六尺四方を壹歩とするに由り、文祿年中までを古撿。と云ひ、慶長元和以後を新撿と云ふ、去りながら其頃までハ、諸事大樣にて、撿地餘歩畔引四壁等にも、碇と定法なきことゝ見え、古き撿地の分ハ悉く田畑の廣狹あり、撿地御條目等、天和貞享の頃より、追々相極り、元祿年中、飛驒の國御撿地の節、御條目碇と定りたるよし、其後享保年中、關東所々幷ニ大和の國御撿地の砌り、古法を正し改め、取捨ありて、新撿御條目定まり、今これを用て、引畝高の結び方等、以前とハ大に違ひたり、依て慶長元和頃の撿地ハ、新撿とも云ひがたく、別して文祿以前の撿地ハ、壹歩の寸尺も碇と分らず、餘歩等ハ猶以て悉く不同あり、撿地時代も知れず、水帳もなしといふ村方などには、壹反の田貳反餘もあり、又三畝の畑五畝も八畝もありて、甚地廣なる村方もあり、又百石の村にて、田畑百石分ハなく至て地詰の村も間にはありといへども、先ハ古撿ハ地廣の場處多く相見え、水帳ありても當時の水帳とちがひ、役人姓名印形等のなきもあり、又姓名等あれども、至て粗略の水帳にて、當時の反別に引合ざる名寄帳を用る村方も多くあり、越後國蒲原郡などハ、古撿のまゝにて、地廣の村方多く、其中にも新發田領ハ嚴有院樣御代承應年中、地改めせし處、至て地廣ゆゑ、新撿にいたさず、三百六拾歩を壹反とし大歩貳百四十歩、半歩百八十歩、小歩百廿歩と、往古の撿地に取合せ、反別を附直し、高も古來の勢高のごとく、取米辻を村高として拜領高に合せ、諸役等取米高にかゝり、本高ハ草高と云て、名計りの高に成たるよし、夫ゆゑ他國に稀なる至て地廣の場所なり

〔甲斐國志十八村里〕都留郡

文祿三年、淺野左衛門佐始テ撿地アリ、是時村里八拾壹、高壹萬八千四百拾八石貳升ナリ、是ヨリ前小山田氏ノ頃モ、撿地ノ事アリシナラン、然レドモ絕テ不傳、成澤、大嵐ノ二村、天正十九年ノ撿地帳アレド、是亦二村ニ限リテ他村ニ傳ルコトヲ不聞、然レバ總撿地ハ文祿ヲ以テ初トス、今是

村といふあり、此村割付一本にて、本田新田と名主二株に分たる村也、支配初年の撿見に、兩組見分有りしに、本村ハ立毛出來方劣り、新田は出來方增り、依之取箇を見合すれバ、本村ハ格別高く、出來方不相應也、新田ハ立毛宜しくして、取箇ハ低し、是以て考へ見れバ、本村ハ古田名目にて年々に上り、新田ハ前々の引付にて、無謂低しと了簡有て、新田取箇を一寸上げ、本田の取箇を一寸下げ給ひぬ、新田ハ一寸上ゲても免じ粮餘程取れ、本田ハ一寸下りても免じ粮ハなし、是此新田も百年前の古新田と也、是程の甲乙を其儘にして置バ、支配人の誤り也、古新田組も理に屈伏し、一寸の上ゲを請たり、是こそ地方の功者と云べし、世に稀なる人なり、

〔地方凡例錄 二〕撿地之事〇中略

御當代〇德川氏新撿以後、壹間に壹分ヅヽのゆるみを加る法に成て、六尺壹分の間竿を用ること、定法になりたり、上古ハ六尺竿なる處、中古より元祿の頃までの撿地には、六尺五寸、或ハ四寸の竿を用ゐたるよし、世俗に申傳ふ、今も上方筋遠國など、古撿の村々には、六尺五寸四方を壹歩と心得たる村多けれども、撿地帳ハ勿論、いづれの書物にも記したること曾てなし、畢竟古代の撿地ハ、至て地廣ゆゑ、斯く云傳へたると見えたり、古も土地を量るは、六尺壹間の積りなれども、量地の歩行爲め、間竿を壹丈三尺にして、その中間を携へ、步行ながら兩端を地に付て、印しを記すとき、地より竿を大概貳尺五寸位と見て、六尺五寸を弦とし、貳尺五寸を鉤とし、算法に依て股を出せば、地面六尺のもの二ツあるを以て、步の行く爲めに古來ハ壹丈三尺の竿を製したることとあり、後世に至り之を誤りて、六尺五寸四方壹步の處もありと心得違ひたるなるべし、勿論工匠家作の間竿ハ、六尺五寸、或ハ六尺三寸を用ゐ、これを京間と云ひ、六尺壹間を田舍間と唱へ、今も大廈高梁はすべて京間を用ることとなり、〇中略

御當代に成り、慶長元和の頃よりの撿地ハ、六尺壹分の竿を用ゐ、壹反三百步の積りなり、之に依

は其年より高に結び、秋撿地は其年一ヶ年を見取にして、其翌年より高入にいたす、撿地濟たる上、石盛等を取調べ、御勘定所へ差出して、御下知を請け、撿地帳は二冊仕立て差出、改めを請け、一冊は新田方に留め、一冊は村方へ渡すことゝなり、私領にて撿地を入るとも、此意を以て取計ふべし、

古撿新撿

〔地方落穗集四〕古新田取箇吟味心得之事

一國々所々にて、新田銘目にて、或ハ六七拾年又ハ八九拾年百年を越たる新田あり、是を古新田と唱へ、本村といふハ往古よりの村也、其村に付有る谷地沼地等を開發し、撿地を請て一村とし、又ハ一村の內を本田新田と割付、二本に分けたる有り、或ハ割付ハ一本にて、一耕地何新田と銘目を付たるもある也、此類初めは土地低く、水吐等も不宜、年々の樣に水損勝にて、取實も少く、石盛も低く、撿地もゆるやかに、取箇も下免なるもの也、然るに右場所年數を經るに隨ひ、土地も高くなり、惡水落の手段に寄り水吐も宜敷、却て本地より出來宜敷、百姓內德多き故、本村より內證勝手能き村、國々所々に有り、是等の村ハ、縱へ年貢を上る迚も、前々の引付にて、元來低き上に元取に應じて上るに寄、いつとても本村よりハ格別下免なるもの也、是ハ年數百年に及ぶといへ共、新田銘目にもたれ、勿論前々の取箇にひかされて、上りも少し、又本村ハ古田名目にて、元來取箇も强き上へ、いつとても古田の名目にもたれ、縱バ十の內三分、新田へ增し、古田ハ七分增樣に成り來る、されバ新田村ハ榮へ、本村ハ衰ふ樣になる也、如此の古新田は撿見の上、前々取箇にも新田名目にも無貪着當時の出來形に應じ、取箇を上ぐべし、有る物を不取とは是等の類也、是等の隱れたる御益を以て取出すが誠の御益也、百姓に今迄德取たる丈ケの德分也、是より德を取らぬといふ迄にて、損と云にハあらず、又有物を出すなれバ、痛む事なしに、公儀の御益とハなる也、既に先年後藤庄左衞門と云御代官の支配羽州置賜郡露藤

類更ニ無之、良もいたし候得者、撿地と申ニ落入候、是等も畢竟地改手ぬるく成候故にも可有之歟、尤諸國とも撿地年を經候得者、おのづから帳面類ハ勿論、質流地又ハ出水等ニ而畦畔も心覺之様相成、及紛亂候箇所多端ニ而、經界相亂候故ニも可有之候得共、一通り承候處ニ而ハ地改之差はまり薄様ニ相聞候事、

一論所一村撿地ハ相紛候經界を糺し、裁許可有之儀本意ニ而、必々本高之打出しを好べからず、併切添切開を可通ニハあらず、勘辨有べき事、

〔勸農固本錄下〕撿地仕様之事

春撿地
秋撿地

大通見分之節、其村之盛衰地味、幷水の遣引、日請の善惡、水所旱所、或村居より田畑江遠近、野山草芝の多少、總てこやしを取所の様子、其外末々可開荒場所、或切添可成所歟、諸事心を付べし、秋撿地、土を見事おろか成故、土を掘りて考べし、立毛も年により、下田も出來よく、上田も出來惡敷事もあり、春撿地ハ土を能々吟味して、苅かぶの様子を考べし、萬一百姓田へ石をまき、水をはめ候事も在、底石を掘て青まさ等を見べし、

〔撿地類集上〕撿地

一撿地時節は春撿地、秋撿地と唱へ、麥稻之苅跡たるべし、春撿地は其年ゟ高入、秋撿地ハ翌年ゟ高入之古法也、

但北國雪國は、時節撰びがたし、

一撿地之刻限ハ、朝五ツ時より夕七時迄之事、

但是ハ朝夕は濕り有之、水帳縮候故也、

〔地方凡例錄二〕撿地之事付り居撿地之事

撿地ハ國家萬民の歡憂に拘はることなれば、尤念を入るべきことなり、當時の御定法に、春撿地

押等容易に申付る筋にてハなし、又論所地改め等にて、地所相分らず、隱れたる田畑ある節ハ、一村にても、又ハ論所耕地限りにても、地押いたし、隱れたる反別地所等を改め出せば、其場所ハ其品により改め出しに致すといへども、高を増し、出目高等にはいたさず、然れども論所も其譯により、一村地押等に成り、格別地廣にて、論所の外にも、不埒の地所等あるときハ、其品に依て吟味を遂げ、過怠増高等を申付ることもあり、論所の地改めハ、本檢地には致さず、廻り檢地繪圖歩詰にて、奉行所へ差出す、何れも地押ハ廻り檢地にすべきことなり、

廻り檢地といふハ、檢地いたすべき田畑、一耕地限りにても、又論所ならバ、其論所計りにても、總廻りを繪圖に寫し、反別を改るを云ふ、先總廻りの曲りめまがりめに、間盤を建て、先の廻りめに、梵天竹（長竹の先に紙の采配を付て、目當とするものなり、）を建て、手前の廻りめより間盤にて方角を見込み、午の何分とか、未の何分とか、十二支の當る處を野帳に記し、其盤より先の梵天竹まで間數を打ちて、野帳に番付を致し、肝要の處へハ、杭を打て書付をなし、順々に見廻る、又其場處の內にある田畑屋敷空地小山等の形を記すには、最寄の番より、其田其畑、或は屋敷にても小山にても、其場處の方角へ、何の何分と見込て、間數を打ち、帳面に記し、其處に盤を移し、其田畑等の形を分間いたし、殘らず濟たる上、野帳を以て寫盤にて繪圖を引出せば、總廻りの形幷に田畑山原等夫々の形ハ、繪圖面に顯るゝなり、勿論間數の儀ハ、十間を四分とか六分とか、其場所の廣狹に應じ、繪圖の大さの大概を積り、分通りを極め、右の引出たる繪圖の縮寸にて畝歩を積り、何反何畝歩と記すことなり、右分間の仕方、歩詰の仕樣等色々ありといへども、爰には其大略を記すのみ、

（德川禁令考後聚九 法曹事務、論所取扱準則）

檢地主務沿革量器取舍論境繪圖經界札明場所口供等之部

一先年ハ論所檢地と申は稀成事ニ而、大體之一件ハ地押ニ而相濟候處、近年地押と申儀申立候

此畝廿四ト〔朱書〕拾八ト

高

是は棚田五枚も七枚も一筆にいたす時、壹枚限長横を打たせ、先銘々の手帳に志るし置、ケ所限に坪を仕出し、總坪數貳拾五ト有之、此分を右改候棚田之總長を爲打、たとへバ拾九間壹ならば其間を以廿五トを割、壹間三となる、長九横八のつもり、朱間をきる時如斯、

一一村石盛は、六段之位次第に反別尻張に成る樣、地位を附候方よろし、

但見付以下は見反別少くてよし、上見付、下見付、越後には見付ハチと申も有之、文字の尻を剣ルは上見付より位一段高し、紛しき事なり、

居檢地

〔地方凡例錄二〕檢地之事付り居檢地之事

居檢地と云こと稀にあり、是ハ古檢の場處、地味よく地廣ゆゑ、地押に致さば打出し有べき場處といへども、村方の願にて竿入をなさず、見計ひて増高を申付、反別ハ改めざるに付何ほど増と申こととも成りがたく、高年貢計り相増すゆゑ、無地増高と唱へ、村高の內書に記し、本高に組入るなり、是を居檢地と云ふ、

地押廻り檢地

〔地方凡例錄二〕地押之事付廻り檢地之事

地押といふは、田畑上中下の位付、高石盛も、前々より在來通りにて差置き、縄竿を入れ、反別を改るを地。押。とも地。詰。とも云ふ、其仕方ハ檢地に替ることとなし、尤一村の地押ハ格別、一耕地二耕地位少々の地押ハ、本檢地に及ばず、廻檢地にて濟むこととなり、廻檢地と云ハ、其地所を分間いたし、繪圖を引出し、歩詰にて反別を改ることとなり何れにても反別を改め出せば、在來の石盛にて高を付け出目高にいたす、尤隱田等ある由訴人あるか、何ぞ子細ありて村方より願出、或ハ地所紛はしき筋等にて、捨置がたき場所、又ハ據なき譯あらば、一村の地押をなすといへども、上より地

入步

高

外八步　地內石塚横ニ而拔步

此拔步は先田場內ニ有之大石など長横之間を打を、長四間横貳間有之時八ト、是を横縄にてぬく時は長間を以、右八トを割、五々九と成例の六とす、是六之法、三尺六寸也、横有間拾壹間四之內、右六を引ば拾間八と成なり、たとへば端尺に少々違目ありとも、素より三六之法に隨ひ、拾加いたし候事故、ゆるやか方に取計てよし、

（檢地獨行）入步

一田　長拾四間壹尺八寸
　　横拾間四尺八寸　　謹
　　此畝五畝三ト

高

　內八步　東方ゟ道を隔長ヱ入步

此入步は野道など隔、同人持同位之地味ニ相見候地所有之、一筆別に應立候も不都合成場所など有之ば、入步之積取計てよろし、是ハ先入步ニ可致田場之長横を改、坪を仕出し、長ヱ入步するは横間にて割、則右有坪八トを横拾間八にて割ば七四と成、四は捨、七計ハ四尺貳寸也、是を長有間拾三間六ヱ加入して十四間三となる、是も端尺の意味ハぬき步同前なり、朱間をきるは前の通なり、

捨步

（檢地獨行）捨步

一田（朱書）壹間
　　（朱書）拾七間六寸
　　長拾九間六寸
　　横壹間壹尺八寸　　謹

小雨等之日ハ汞めりて縮、朝ハ役人出懸故勢ひも能、繩の引方強く、殊に前夜ハ早朝改直せし繩其上朝露にて繩縮るに付、朝檢地ハ詰るもの也、夕方に成レハ繩ハたるみも付、竿取等も終日草臥、自然と引方も弱く、繩の縮りゆるむ故、夕繩ハ延る物也、且又檢地打始ハ、諸事細かに吟味して、反步詰ることあり、日數重るほど、物每次第にゆるみの付くものゆゑ、打始の時ハ繩詰り、數日相立、末になりてハ必繩緩むことあるに付、初中終晴雨朝夕の儀を勘辨いたし、緩み詰りの處を檢地役人隨分心付べきこと勿論なり、尤繩ハ皆繩を用ゐ、一日に三度宛間を改むる定法なれども兎角一統になきことに付、村に依り、又ハ一村の內にても、耕地により繩の延縮ありて、自然と反別の廣狹出來するに付、よく〳〵念を入れて心付べきことなり、

竿延

〔地方凡例錄〕二竿延之事

是ハ古檢の村、新檢になれば、間竿の寸尺差ふに付、打出しの出步あり、之を竿延とも云ふ、元和以來の新檢六尺竿になりたる村方にても、論地になるか、又ハ何ぞ子細ありて、檢地或ハ地押等にて、一村の反別を改るときハ、山添川附野方等切添にて、地廣になり、水帳の反別より餘計に打出すこともあり、又右にも云ふごとく、新檢に成とも元和寛永の頃まではハ、物ごと大容にて、田畑餘步等も餘計に附たるゆゑ、當時に至て檢地をすれば、何れ打出しあるに付、箇樣の類をも竿延と云ふ、或ハ切添の場處ありて、其場處計改め出し、高反別を相增す分ハ、新田同樣にて、竿延とハ云ざることなり、

拔步

〔檢地獨行〕拔步認樣

一田　長四間壹尺八寸（朱書）拾貳間四尺八寸、
　　横拾間四尺八寸（朱書）八間三尺六寸
　　此畝五畝三ト（朱書）三畝廿歩ト

誰

壹石貳斗、是上田の石盛十二なり、二ッ下りにして中田ハ十、下田ハ八ッ、畑ハ中田に准じ十と極め、高百石に成るなり、又二割減ずるは、干減粃等を除くにはあらず、干減粃ハ外にして、正實壹升の内より貳割減ずるハ、種代五分、關米五分、年々損毛一割と積りて、正籾の內を二割引きて、石盛を極ることとなり、勿論水旱損、百姓の貧富に依り、稻の出來方にも善惡あることなれば、坪刈を用ゐは、大數の目當にて、第一ハ土地の善惡寒濕淺深、用水の掛引、肥養收納の勝手等を諸事考へ合せ、石盛を極ることとなり、○中略尤右に述る所ハ檢地之古法にして、今の檢地ハ公儀御條目ありて、古法にのみ依りがたく、當時の振合を以、檢地いたすべき儀といへども、大旨前條の意を含み、萬民後代の安否に拘はる處を忘れず、農役に於て、尤念を入るべきことなり、新田畑ハ格別、古田畑再檢になるは、地廣、地陜、落地、二重打、位違、或ハ川闕、山崩、切添等多きか、出入あるか、隱田の訴人あるか、據なき譯にて、村方に於て願出さば、よく吟味をとげて、再檢地いたし、石盛等を改むべし、假令古檢地廣の村たりとも、領主地頭ハ勿論、公儀にても、譯もなく容易に再檢を入るゝ儀ハなきことなり、

〔地方凡例錄二〕檢地之事

一檢地餘步の儀、古檢ハ貳割、新檢ハ壹割餘步を差加へ、畔引壹尺、畔際壹尺宛除き、兩方にて三尺引き、屋敷ハ四方を壹間充四壁引に除くの定法なれども、僅の小屋敷などにて、四方を壹間充引てハ、屋敷畝步なきやうに成り、或ハ町立たる屋敷隣家垣根境等ハ、一間充引くことハ成りがたければ、是等ハ見計ひを以て除き、またハ藪林ある屋敷ハ、藪林をも除きて繩を入る、若大藪林等ある屋敷ハ見計ひて、藪錢林錢等を申付ることもあり、依て古檢一反步ハ一反二畝步、新檢ハ一反一畝十五步ある筈たりといへども、檢地奉行繩奉行等の心々にて、繩竿の緩詰、又ハ繩を請るときの晴雨、朝夕の違にて、延縮あるゆゑ、新檢の田地にも甚だ廣狹あることなり、○中略扨天氣曇

本として、其土地に依て考あるべし、右の割合左の圖のごとし、

田方百石の地割の圖解（二百間四方を四十間四方ヅヽ二拾五に割て、西北の角四方を居村とし、其内に上畑屋敷を取り、中央一分を明地とし、村付二分を上田とし、其次二分を中田とし、野末の折廻を下田とす、）

（高二十四石）上田二町歩　石盛十二　一反　壹石二斗

（高三十石）中田三町歩　石盛十　一反　壹石

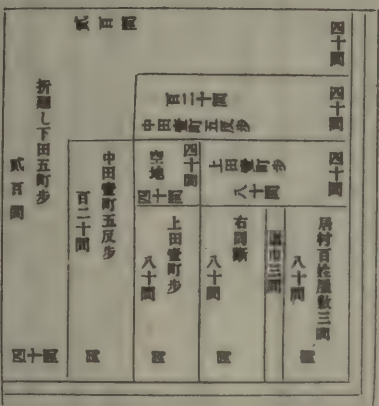
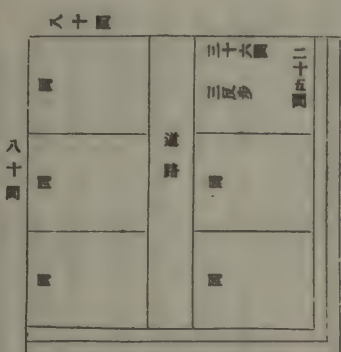
（高四十石）下田五町歩　石盛八　一反　八斗

（高六石）上畑六反歩　假石盛十　一反　一石

小以高百石

八十間
三十六間
三反歩
二十五間
道路
八十間
間
間
間
間
間

貳百間
四十間
四十間
四十間
百二十間
中田壹町五反歩
空地
四十間
上田壹町歩
八十間
折廻し下田五町歩
貳百間
中田壹町五反歩
百二十間
上田壹町歩
八十間
右同斷
八十間
道巾三間
居村百姓屋敷三軒
八十間
四十間
間
間
間
間

屋敷壹軒前三反歩内（一反歩家下廊構　一反歩籔敷　一反上畑）

一石盛ハ上田壹坪に付籾壹升、壹反にて三石なり、此内貳割を減じて、貳石四斗、又半減米にして

境通りの角々へ人を廻し、中央に明樒か踏臺の類を居へ、指圖の者其上へ登り、其形を見定め竿を入べし、筋を極め境の角に立たる人を採を以て、指圖して其筋へ爲立、扨長竿の末に切さき紙を付、四本拵、立之標ハ白く、横の標ハ赤く、貳本づゝ色分ヶをして、四方に標を立、右臺の上に十文字の曲尺口傳を置、竪筋横筋を見通し、四方見定め候上にて竿を入也、竿取竪横共に手前の標より向の標を目當に打也、然ル時ハ少も違なく手廻しよし、是ハ兼て支度致し、手傳のものへも次第を申含め召連る事也、ケ様の場所ハ足場不宜バ竿取の歩行に心得有べし、

一見通しに引付と言傳有、又草を結ぶといふ也、口傳

一撿地の野帳ハ折目を向にして綴るもの也、風に吹立ざる爲なり、片面四ッ共五ッ共割を極め書べし、系を引たるがよし、宿にて留守居汀明の者の所作たるべし、

一算盤ハ黃楊玉よし、水にひたりても能く走るもの也、玉重き故風吹きに不動也、銘々やたてを持也、

〔地方凡例錄二〕撿地之事

撿地ハ土地の經界を改め糺之總名にして、田畑に竿繩を入れ、反別を改め土地之位を糺し、石盛を付、高を定たるを云、○中略今用る所ハ、田高百石之地割ヲ以、天下ニ押及ぼし、撿地賦稅の本とす、假令バ高百石之村三ッ五分の物成を納る時、三拾五石の米を以て、武家百石の軍役を勤ること、古今の通法なり、其餘計にて百姓家數六軒、人員三拾人餘の渡世足る、此制法ハ地面よき處貳百間四方を一村として、其内に百姓屋敷を建て、畔井堀道を付け、竪横に地割をすれバ、田拾町畑六反あり、屋敷際貳町歩を上田とし、其次を中田三町、村端野末下田五町、屋敷附畑六反、藪敷六反、外に空地五反ほど諸用の爲に殘す、是を二三五の法といふ、尤村々右の割になるべきことにはあらず、山野に付たる村、或は他鄕入會の田畑などありて、一定せずといへども、大旨二三五の法を

一竿ハ横を打竿尤大切也、依之横の竿取ハ功者なるを用べし、横にて過不足も竪の長き場にてハ餘程の違に成なり、

一畔際ハ竪横共に壹尺宛除之事也、屋敷裏の田地ハ木蔭の分壹間通り除し也、畑右に准ず、

一右の通故、百姓方にてハ、小歩に請るを勝手とす、是ハ壹枚々々の境に畔を懸ケ、撿地受候以後、其畔を取捨、歩面を廣くするの方便也、依之餘り小歩なるは吟味致し、同人持ならば畔をぬかせるがよし、併拔能畔と難拔畔と有吟味の上、無益の時ハ拔せべし、縦小歩也といへ共、次第下りの土地抔ハ、小切ニ水持畔を懸ねバ、其田水懸り不同にて耕地成難し、是等ハ小歩の儘にて打べし、又餘り大歩なるも水持悪し、其場に至て見分の上勘辨有べし、

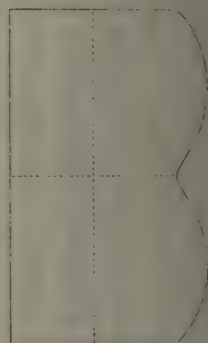
一畔ハ幅壹尺に限るべし、是又大畔に致置もの也、吟味の上、水持畔か、又ハ馬入場所作場へ通ひ畔抔ハ、稻苅上の節、通用の爲ニ間々には有之候よし、作場道是又多分願ひ候もの也、吟味の上可申付、是等ハ人馬共に通ふ道也、又往還道中無益ニ廣ク願ふもの也、是又吟味の上相應に申付る也、右の類都て竿除也、尤道の左右通り田畑脇書に記すなり、

一字地坪不紛樣に念入、帳面に記すべし、

山畑竿入心得之事

一山畑を打ニ上りに打てハ違ふもの也、下り打宜し、又山のうねり窪み抔ハ竿にて打てバ違ふもの也、水縄にてたるみ縄に打べし口傳

大場之撿地竿に大事ある事

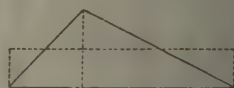
一林畑葭畑等の一繩に、五反七反も撿地する時ハ、別て竿に大事有り、ケ樣の大場ハ竿の法稽古なくてハ失多し、又指圖に、秘事有、如此場廣なる所ハ、其地形見定難きもの也されバ竿先少し曲りても、其勾配を以て打行時ハ、間數格別延び十文字にハ成難し、是等の撿地には先四方の

如レ此形圖の如く見通して、立十文字に打て無二相違一如レ此形をハツカケと云、

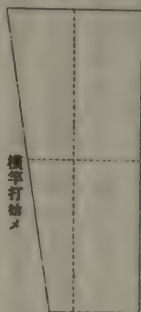
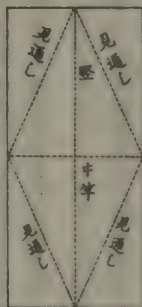
如レ此形を菱形と云、十文字に打也、横間の中減用ひ記す、

如レ此形を雙股弦と云、竿入方上に同じ、

歩詰の形如レ此

捨歩入歩の算、此圖にて知るべし、

如レ此形を扇子形と云、竪横二竿に打なり、

竿の入方、大旨右の圖にて考へ知るべし、除ハ准之、

打終の所を見通し指圖すべし、横竿是又打初めの場所を見極め竿を爲立べし、竿ハ堅より打始るもの也、堅竿打始めて横竿を打始める中にて、十文字に成候様打、何れも打終りの見當を差圖して竿取心得打べし、見積り鍛錬肝要也、左の圖にて心得有べし、

見通し　堅　見通し　中竿　見通し　見通し

知レ斯堅竿を立るを見て横竿を立る也、見通し菱形成ハ詰を付て、其場所を知る爲也、尤大歩にて目當計りに成難き所に用る、併如レ此なく共、間竿三本立て見てもよし、

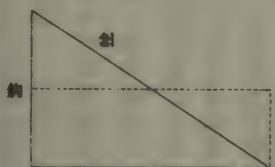
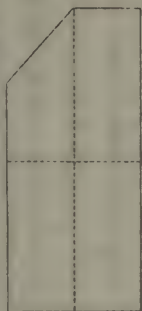
竿の立始メ打仕羅を見合す事肝要なり、口傳あり。

横竿打始メ

知レ斯の形を片挾と云　竪竿打始メ　出シ竿

弦　鈎　股

如レ此形を勾股弦と云、出シ竿貳間の竿を用、竪間を横間に用

如レ此形を隅闕ケト云

如レ此成ルハ十文字打反歩の内かり歩を引て、帳に反畝歩を記し、外何分出分と脇書に記す也、入歩ハ脇に記す通り也、内何程入分と記すなり、

一間竿ハ長壹丈貳尺貳分也、末三尺の内へ目をもり、外ハ壹間毎に切廻しを立て墨を入る也、但貳分ハ土入也、竪竿横竿兩人也、竿取壹人に百姓壹人宛付ケ、數の合よみをさせるなり、數の十と云所にてハ大聲に呼せる也、尤小數を指にてかぞへ、十ヲ片手にためる也、竿取に付て歩行する也、扨竿を打仕廻、何拾何間何尺何寸と竿取呼候上、呼次之者押返して、右の通呼也、是一ツにハ間數を無相違様にする爲也、又一ツには聞違無之爲なり、

一撿地ハ何様の形の田畑成共、竪横十文字に打もの也、尤横竿大切〔口傳〕念入べし、又入歩と云事有、是ハ田成共畑成共、三拾歩に不足繞の地近所ニ有之を其歩を量り、肩書に何程入歩として大歩に詰込也、如此繞成を帳面に一と廉記す事如何と云儀也、然れ共地主替りたるハ格別也、同じ地主を右の通する事也、壹畝とも面付たるを入歩にするは誤り也、況や其餘におゐてをや、總て撿地に竿の立様法有、委くハ末に出す、

一竿取の者、竿の鍛錬なくてハ危き事也、撿地ハ百姓永代の浮沈たるの間、別て念入べき事也、竿の持様、我立丈ケの帶の上端に當て、腰を居へ肘を脇腹に付、不動様にかため、腕先にて打也、歩行を定る事肝要也、去バ功者之ものハ歩行して間數を量るに不違也、三足壹間と云法有り、歩行様に口傳あり、

一右稽古仕様ハ長拾五間も貳拾間も、水繩或ハ繼竿にて間數を極め置、右の通りにして何べんも打返し〳〵て、腕腰體のかため、歩行のてうしを手練すべし、於場所も其手の上役、折々不意に打返させ、竿の合歟不合歟を吟味すべし、

〔地方落穗集七〕撿地竿入様之事

一田畑共に竿入候前に上役之者、其地面の形を熟と見定め出入を考へ、竿の入様を見積り、甲乙有所ハ出シ竿を致し、前後左右の出入をりうやうして、田畑共に打始めの眞中へ竪竿を爲立、

の所を入歩といふと記せざるゆゑに、初心の者合點ゆかず、是又元祿年中の御條目に、總て田畑廻りに堀田有之バ、遂詮議、本歩之内へ入歩いたし、水帳に可記事とあり、然れば堀田の所の歩數を、畝歩の内へ積り入て、其譯を地株の脇書に記し置く事なり、其外にも入歩に可成場所何程も可有、又込歩といふ事あり、是は地面惡敷所にて、改の歩數を減じて記す、是を捨歩ともいふなり、又木蔭引畝引あり、木蔭引ハ新田御條目に、東南に高岸を請候場所、幷往還道筋並木有之場所、田畑木蔭引可為見計とあり、畝引之御定法ハ、畔際一尺充可除、但類地もあせ際一尺ヅヽの積りたるべし、高あせ等ハ見計可引之とあり、能會得せざれバ、畝引三尺ヅヽの樣に心得違ふ事あり、畝引一尺五寸ヅヽの積りたるべし、よく考ふべし

一或覺書云、穢多屋敷、牢屋敷、藏屋敷は、前々より高外に候とも、高に入候筈の事に候間、高外にて反別不分明に候はゞ、此度相改高に可入候、右の品々、前々水帳に除置候とも、高に可入、三品之分、割付にて、年貢引ハ可申付候事、

又云、村々相改候へバ、名主給、堰守、渡守等の類、新田開發人、高除き致所持候者有之候へ共、前々水帳に記し有之、亦ハ年久敷除來候に迷ひ、其儘差置候類多く有之、當時ハかやうの除ハ、不殘御取上被成候、無用捨可相改之、

〔地方落穗集七〕檢地致方之事

一檢地致すには、先達て村方内割の地割案内帳為致、一筆切に番付肩書に為記、壹枚毎に札を建、右番付の順に隨ひ檢地致す事也、檢地役一手に、御代官手代壹人（或ハ兩人にても）下役壹人、竿取壹人、其外間數呼次之もの貳人（是ハ百姓の内より出させ竿取に申付る也）地引案内之もの一人（或ハ二人ニて代る〴〵勤る）合帳付るもの壹人（是ハ兩人出、壹人ハ目見致す事ある也）都合八人程にてよし、御代官御勘定總奉行として、諸手見廻り差圖有事なり、

按ずるに、取ハ五ッ定免といふ事、年貢を米にて取ると見るゆゑ、定五ッに當る、糅納と見る時ハ、直に年貢の高なり、美濃國慶長年中の撿地帳に、桑高楮高あり、いづれも十把を一束として、桑ハ一束を分米一升五合より、二升、三升、三升六合、楮ハ一束を三升、三升六合、五升まであり、一定ならず、其村の桑楮の善惡を以て付し事にや、楮高を紙木高と記せしもあり、一束といふも、一把といふも長何尺廻り何尺といふ事まれず、尤定五ッ取とも、定四ッ取ともなし、又信州筋慶安年中の頃の撿地帳に、野手米、山手米などの小物成に、高を附て本途高内へ結び置くを、都て色高と記せり、是ハ定五ッ取も定四ッ取もあり、

一或覺書に云、不依多少撿地とあれば、御代官所之内にても、自分計にて不致、御勘定所へ相伺候上、他の御代官立會の上にて、撿地する例なり、少々の儀ハ、手代計爲立會候、地詰の儀ハ、自分の手代計にてもいたし候事、又云、撿地の節、竪横ともに間數に半を記候事無之候、前々ゟ兩半と申、不記事に候、兩半と申事ハ、何の障りに候哉、未致了簡候、且又入歩と申事、水帳に記す時、心得違にて、内何歩入と記し候帳面有之、心得違に候、古來より入歩と申事に候間、入何歩と記し候古法にて候、若入何歩と申事合點無之候はゞ、無是非候間、外何歩入と記し可然候、

按ずるに、元祿年中飛驒國御撿地の節、御條目には、半間までにて、寸尺打に不可及、雖然田畑竪横の廣狹に隨ひ、或ハ平均間等にいたし候所ハ、尺迄ハ歩詰の勘定に入て、竪横の間數水帳に書付候には、半間迄記之とあり、享保年中新田撿地の御條目には、間數の端尺は、六寸、一尺二寸、一尺八寸、二尺四寸、三尺、三尺六寸四尺二寸、四尺八寸、五尺四寸、右の寸尺不足の分ハ捨之、算用の歩詰、一步ハ捨、二步ハ三步といたし、是より上の詰步段々致捨加、畝步合候樣可仕事、

附り繩竿數を入候分ハ改候寸尺を用ひ、平均之寸尺ハ、右之通の寸尺を可用とあり、何れも兩半不記事と申す儀者見えず、然れども古き云ならはしなるべし、扨入步といふ事、如何樣

りのものなれども品により二には限まじ、古檢之位に不ㇾ構、位番付、所により十四五迄も付立させ、百姓ゟ取ㇾ之、役人見分と引合考べし、屋敷園ハ、四方壹間通り程除ㇾ之、軒並之小屋敷ハ、所相應に可ㇾ除歟、

田畑當分地面狹とも、外ニ荒地或野山あり、次第ニ廣地に可ㇾ成所又ハ當分開置たる所も、末々山垂水損可ㇾ有所、又當分上地成共、末々藪林ニ押され、日影に可ㇾ成所、又中下之地、年を經て上地に成もあり、此類に功者入事也、總て道ハ少綏打べし、〇下略

〔田園類說〕檢地之事

一地方答問書に云、檢地入候を繩入候とも、竿入候とも申候、檢地と申は、田畑上中下等段々の位付致し、高石盛を附候儀にて候、又云、檢地帳ハ、田畑の竪橫間を記し、上中下の田畑銘々地主の名を書付、畝步も肩書に記し申候、檢地帳にハ第一畝步附を大切に仕る事にて候、田畑地續の筆順の違はぬやうに仕候て、帳に書付申候檢地帳の田畑屋敷都合書の末外書に、御朱印地に續候而、除地の無年貢地を記し候除地と申は、重き儀にて候、寺社境內幷免除田畑等證文有ㇾ之歟、又ハ前前より檢地帳の末外書に、除地と記し來り候バ、除地と記し申候、其外の無年貢地ハ、何程にても見捨地と記置申候法にて候、

按ずるに見捨地の事、堂宮、稻干場、土取場、墓所、死馬捨場等の類、竿外とも見捨とも云て、前方ハ間數も改めず、檢地帳に記さゞるも多し、今ハ間數を改めて、檢地帳に外書に外見捨地長何間橫何間何と、一贋限に記置くなり、〇中略

一或覺書に云、御領の檢地にも萱高、眞菰高、くゞ高などいふ事あり、是を野高と名附、取ハ五ッ定免なり、漆桑楮抔ハ長三尺、廻り三尺、壹束に付米一升と極め、取永一束に定免二文取に極候もあり、此品々引合見候ても、皆五ッ取の定法なり、國により、漆畑、桑畑、楮畑檢地いたし候處もあり、

に致類ハ、野帳に付わけ、年貢少々申付候歟、見取場ニ可仕歟、相談之上相應に申付べきか、

池沼原等、新開可成分見分之上、竿入高ニ結、地主を極置、取箇ハ、起手間を考、四五年も用捨有べし、

其外堂宮稻干場、土取場、或ハ墓所、古塚死牛馬捨所等、高ニ入がたき分ハ、反別水帳之外書ニ記置、

或道幷用水、井筋狹所歟、又ハ勝手惡敷候付、外之所江振替度旨願候ハヾ、吟味之上、敷地減分歟、たとへ少々敷地相增候とも、田地のために可成分ハ申付べきか、

田畑質地、年季還候分も、又年季明候而も濟方相滯候歟、不限年季儲次第、請返證文有之分も年季限、手形仕替させ、元の地主之名記、百姓之讓り請たる田地に、末々不離樣に致度事也、

田畑之形ハ品々有て、極る形ハ少し、方田、直田、圭田、梭田、梯田、斜田、角田、圓田、椀田、環田、錢田、笠田、飯櫃田等之步詰之仕樣ハ、算書にあり、其外自然之地ハ、平均間打所、其場にふれて功者有べし、大方縦横、十文字に打也、二竿にて知がたきハ、縦横之外に入組み步を別ニ打、たとへバ地面貳十壹步之所、竪五間、横四間と、野帳に記、內壹步ハ入步と記候、是ハ地面出入有之ニ付、平均間之外、見込入步を仕候、總て形ハ、色々有之ども、四方に取直見心也、野帳に位付字等迄委細に記べし、〇圖略

大山抔に細長き畑有バ、眞中より竿取貳人にて、上へハ登りに打、下へハ下りに打バ、竿の延縮平均に成て吉、

間數野帳に記候跡にて、間違、竿の延縮、管繩以相改べし、其上野帳に、役人押切印形加、百姓ニ借し渡、若竿違、書誤、又ハ位違有之バ、帳面ニ致付紙申出べし、僉儀之上、再撿有べし、若立がたき儀申出候ハヾ、越度ニ申付べき事歟、

田畑位付ハ、大方上中下三段なれども、別て能所ハ、上々田、又蘭田、麻田等ハ、石盛、上より壹斗高にも極、又惡地、下々田、砂田、谷田等ハ、下ニ壹斗、或貳斗、三斗も、土地之品により下べし、又屋敷ハ上畑並か、上々畑、麻畑、下々畑、山畑、燒畑、砂畑、其外所により見計、地面に應、了簡有べし、大方段間、貳つ下

竿打候節、深田へも踏込、地味を知、横竿に別て念入べし、少の延縮大に相違あり、勿論雨降風吹、毛の上、検地心得有べし、

板札に検地奉行之印形を押、何程も野江致持參、竿打仕廻候所ニ何間ニ何間と、右之札に書附、毎田建て通る、其村、検地仕廻候迄札を建置、札無之所を、不打證據と見て竿入べし、如此致し候へば、隠田落地無之もの也、勿論札紛失せざる様に、最初に申渡べし、

山畑の検地、登りに打ては、歩積多し、下りに打が吉、又見積りハ相違有べし、

鹽濱検地は下の堅き所を上とす、鹽多し、歩竿落しかけ、竿尻のおどる堅さにて、上中下を定べし、

鹽濱之内江眞水指入は悪し、

案内之者、其村名主年寄、亦ハ小百姓之中にても吟味して、四五人も申付、少之所も、地面落不申、并手下之者、召仕等迄、若非儀有之バ、早速密に可相達旨、萬事有體に可申上段、神文致させべし、落地位違竿違有之歟、御帳御貸之上ハ、人別持分に引合、相違御座候者、早速可申上旨、勿論難立御訴訟申上間敷旨、小百姓手形取可申候、且又隣郷之者出作仕、作人居村之高江入置候所も、地元之高に結、他村扱高無之様に仕べし、

検地前田之水落置、人馬通路難成、損候道橋修覆仕、其日縄請地主之外、無用之者不出向、諸事村中相談致し置、口論抔不仕様に申付べし、古水帳致持參、案内之者召れ、地所村境、大通り見分仕、縄初之了簡有べし、

田畑之中、大石大木、川闕山崩、其外作毛仕付成がたき分ハ、水帳之末外書に、其譯記べし、又寺社領、其外關守、渡守給田、或山林等、古來ゟ譯有之除來候分も、水帳之末外書に記べし、

畑廻りに漆桑楮茶の木あり、假高に入候分ハ畑歩除之、畑一面に有之バ、斷書致し、不殘高に入べし、本田畑之外、杉柳櫻桃萩蘆畑有之、土目悪敷故、本作之外ニ仕、或切替切畑荒畑抔、年替休め作り

檢地方法

寛　播磨守
駒木根肥後守

〔勸農固本錄下〕檢地仕樣之事

檢地之　ハ、廣地狹地落地二重打、位違、石盛違、負高有之歟、或川闕山崩年々の員數碇と難知所歟、或大河端居ごみ溜り、古反步より多ク成歟、或切開き又ハ不譯知古水帳より反高多キ所歟、總て百姓前に損德有之、取箇不相應成場所を檢地して、曲り木に中墨を打、勾配之直を求るごとく成べきを、田畑反高を打出、石盛位をのぼせ、出高のみを目に付、道理之外、御爲だてハ心得違にて、曾て有間敷事なるか、

檢地と云ハ古高に不構、縱横間數、反別位付石盛等、新規之竿之通、村高極知行に渡となり、又地押と云も、仕形ハ同前なれども、古高何程新高何程と記置となり委細功者に尋知べし、又居檢地と云ハ、古檢にて、地味能廣地故、地押致し候者、打出有べき場所にて、前々ゟ割增高請來所を、無地增高と云と也、

檢地打始ハ、諸事細に吟味して、反步詰るもの也、次第にゆるみ付申もの也、竿始の村ハ、百姓困窮に付、領主も難義たるべし、竿打候て大括りを見時、高大分減バ、肝を消し俄に位強く仕、又高出過在バ、俄に位を弱め、竿途の內外にて、大分むら出來、百姓痛悅之甲乙有之、後々取箇の節も不宜儀に候、然ば初より四分六分の心を離れ、竿途之大括り、高の增減に不驚、有體に公民の掌に握り、其貢中を志少も依怙贔屓なく、正路に執行事肝要なり、是を檢地とは云べし、

檢地前、村繪圖幷田畑之位付、百姓方より取之、境目等遂見分、向寄を考、竿打初、百姓位付之帳に引合、若相違あらば、改之通直之、勿論百姓に神文致させ、如斯の仕形ハ、不功之樣なれども、見分のため、又ハ百姓之心入、正邪も知、上下納得のため旁よし、〇中略

一新田畑屋敷總而開發願之趣ニ相應之儀有ㇾ之候ハヽ、吟味之上、願之通リ相極べし、品替リ其申分無ㇾ據儀ニ候ハヽ、吟味之上其通リ相極、其品書付を以、撿地仕廻候以後可㆓相達㆒事、

一間數反畝歩石盛付、總而撿地致方、村中總百姓申分無ㇾ之哉、并打繩引下々迄、非分成儀無ㇾ之哉、吟味之上申分無ㇾ之候ハヽ、其段總百姓之連印一札可ㇾ取事、

一竿取繩引之者ハ致㆓吟味㆒爲ㇾ勤、撿地之場江ハ無用之人足不㆓差出㆒樣可㆓申付㆒事、

一作毛不㆓踏荒㆒樣念入可ㇾ申候、且又御代官御勘定人并下役竿打等ニ至迄木錢を拂、其所有合之雜事物を以、野菜一汁一菜、酒肴一切不㆓差出㆒諸事費無ㇾ之樣吟味可㆓申付㆒事、

右撿地ハ百姓永代之家督ニ候間、撿地石盛地面相當致し候樣可㆓念入㆒者也、

午八月

追而條目寫候而、段々相廻可ㇾ申候、在府之面々ハ留守居之者致㆓披見㆒可㆓相廻㆒候、

此度關東所々、新田畑并見取場撿地之儀ニ付、條目相極候間寫遣候、各撿地之所々有ㇾ之候ハヽ、右之趣を以、撿地之積被㆓相心得㆒、尤撿地可ㇾ致場所於ㇾ有ㇾ之ハ、可㆓被相伺㆒候、以上、

午八月廿九日

井澤彌總兵衛
細田彌三郎
神谷武右衛門
辻六郎左衛門
杉岡彌太郎
萩原源左衛門
稻生下野守
久松大和守

一借家并小作有之候ハヽ、帳面ニ本地主を可記、借家主小作之名を記度由相願候ハヽ、本地主吟味之上、不相紛樣ニ、本地主之脇江願之通可記事、

一田畑位付、其村本田畑之位付を元ニ用ひ、上、上ノ下、中、中ノ下、下、下ノ下ニ見付、何れも壹斗劣ニ新田畑位を可極、勿論其村古田畑異土之處、新田畑野土ニ候ハヽ、隣郷致吟味、隣郷野土畑之位を用ひ見合、土地相應ニ可極、其村本田畑ハ野土新田畑ハ異土ニ候ハヽ、隣郷異土之所之位を以、右同斷見計可極、屋敷ハ其村上畑之位付可爲事、

一屋敷之内、家下庭構之分、上畑之位付たるべし、屋敷構之内外之畑ハ、見分之位を付、藪林下ハ藪錢林錢可申付候、若不相應之藪林仕立候ハヽ、可遂吟味候事、

一漆茶桑楮等植付有之候ハヽ、其植物に不構、土地相應之位付たるべき事、

一旱損水損之申立有之候共、一切聞上不申、其土地相應之石盛ニ可相極事、

一新田畑ニ竹木葭等生立、或ハ芝地有之候ハヽ、吟味之上、田畑ニ開發可成場ハ地主相極、検地致し開發願濟候趣を以、鍬下之吟味可有之候、田畑ニ不成場所ハ、是又右願相濟候節之趣相極、又ハ林畑或ハ山野錢見計可附事、

一兩毛作、片毛作地無其差別、土地相應之石盛可相極事、

一田畑位付、土地再見分之爲に候條、検地濟候上、別段ニ打廻り石盛位付可致事、

一案内之者、誓詞申付候上は、土地壹貳付之番付、所ニ寄、壹より十五六迄、段々付立させ置、之候上、御代官御勘定人下役人手板を以入札致し、案内之者之位付をも見合、一致不致候ハヽ、相談之上可相極事、

一検地帳相極候ハヽ、御代官御勘定人、并下役竿取案内之百姓共致連印、清帳貳冊可差出候、壹冊ハ其村名主江可相渡、壹冊ハ御勘定所江可相納事、

べき事、

一繩ハ壹間宛之くだ繩、長六拾間、或ハ三拾間繩を可用、繩延び縮み可有之間、早朝幷四ッ時八ッ時改之、勿論くだ違目無之樣能〆、壹間宛ニ間數之札を付可申事、

一間數之端尺六寸、壹尺貳寸、壹尺八寸、貳尺四寸、三尺、三尺六寸、四尺貳寸、四尺八寸、五尺四寸、右之寸尺ニ不足之分ハ捨之、算用之步詰壹分ハ捨、貳分ハ三分ニ足し、是ゟ上端ハ准之捨加を致し、畝之步ニ合候樣ニ可仕候事、

但繩竿數を入候分ハ改之、寸尺を用ひ、平均之寸尺ハ、右之通寸尺を可用事、

一田畑壹枚切間數合帳ニ付、讀合之上、合算ニ而反畝步を付、其場ニ而二帳共ニ間數反畝步江御勘定壹人印形可仕候、尤間數反畝步相違有之間數哉、案內之者ニも存寄申させ、違有之趣ニ候ハヽ、改直すべき事、

一野帳之內、一通り日々百姓共江貸渡し、反畝步相違有之間數哉相尋、少々ニ而も申分有之候はば、其品承屆可致改事、

一田畑共ニ字念を入可書付、幷道幅用水惡水堀幅改、其際之田畑脇書ニ可記事、

一新田所ニ御年貢米可詰置藏屋敷有之候ハヽ、敷地ハ檢地入高ニ詰び、物成引致し、勿論檢地帳奧書ニ委細可記事、

附、田畑之內ニ大石大木塚等有之バ、吟味之上除之、其品檢地帳脇書可記事、

一寺社領分境目吟味之上、不相紛樣帳面ニ可記置事、

一新田畑屋敷林畑等之內、寺社有之、願之上相建候分ハ、其場所之分可爲無檢地、願申出候分ハ、檢地之內へ可入、廟所ハ見捨地たるべき事、

但檢地致候分ハ、其田畑際幷總寄之所江明細ニ可書記事、

姓江能々可致詮議事、

一水帳相極候ハヽ、検地奉行下役竿取案内之者迄、奥書いたし、判形御代官江相達、村々名主方江

右水帳渡之畳、本書之通寫帳認、御代官江も可相渡候事、

右之條々得其意、存寄之儀於有之ハ、可得下知候、以上、

戌四月

（地方落穂集七）享保十一午年被仰出候新田検地御條目之事

新田検地條目

一關東所々新田畑屋敷検地之儀、先達而地所割致有之分ハ、帳口々番付之地引帳申付候上、田畑壹枚切、右之番附反畝歩江地主名書之札を建させ、検地濟次第、右之札ふせさせ可申事、

一村ニ而内割致し、反畝歩分ヶ置候所、反別地引帳ニ印し、札建候儀、右同斷、若反畝歩不知所ハ、検地可致順ニ番附を極め、右之趣ニ地引帳を拵へ、右同斷札を爲建可申事、

但野帳江ハ先達而割渡し、或ハ割賦之反畝歩を肩書ニ番付を不紛、落地無之様ニ可致事、

一村境并本田畑、古新田畑境は、検地不取掛前方、雙方名主組頭、或ハ庄屋年寄等案内之者立合、右之境目不相紛様ニ、境目ニ杭を爲立可申事、

但右之境目、雙方申分有之、境目不分明之場所有之候ハヽ、吟味之上、繪圖書付を以可相伺事、

一其村名主年寄組頭、并頭百姓之内、吟味之上、人數相應ニ申付、落地仕間敷旨、并道筋用水溝幅等無益之儀有無之段、有體ニ案内可仕旨、誓詞可申付事、

附、繩引竿打召仕ニ至迄、若非儀於有之ハ、御代官御勘定人之内江早々可申出旨、誓詞前書ニ可載事、

一間竿は六尺壹分壹間之積リニ而、長壹丈貳尺貳分もり込み、貳間竿を以打之、壹反三百歩たる

一田畑之中ニ有之大石大木、其外作毛仕付難成分ハ、能々吟味之上、其分撿地可除事、

一池沼野原等有之而、新開可成分ハ遂吟味、百姓相對之上爲致繩請、村高可入之、新開難成分ハ、水帳之末ニ外書ニ町歩書付置べき事、

附、堂宮幷散在野稻干場土取場、或ハ廟所古塚死馬捨場等、高ニ難入分ハ反歩改之、是又水帳之末外書ニ可仕置、堂宮敷地計除之、廻リ之地ハ高ニ入、可然分ハ見計高ニ可結、古撿地帳之內記置候、堤幷用水之井筋等ニ成候場所ハ致撿地、以前之通可書付置候、右之類古撿地帳ニ無之分ハ、新撿地帳ニ書載可置事、

一片山ニ有之田畑地面悪敷、以來段々可闕崩場所たりと云共、有反歩之通可致撿地事、

一總而田畑廻リニ堀田有之分ハ、遂詮議本歩之內江入歩いたし、水帳ニ可記事、

一田畑之內、道付替度旨、百姓願候所有之バ、見分吟味之上、障於無之ハ可申付事、

一家抱地水帳ニ名記候儀、地主江遂詮議、誰家抱と肩書ニ可記之、次ニ小作百姓之名、若水帳ニ名記候儀有之バ、是又地主詮議之上、手形取之分附之肩書ニ可致置候事、

一撿地之役人村移之儀總奉行得差圖、次之村江可參、勘定仕候節、役人之外、其場江出入一切可爲停止事、

一新撿地水帳之肩書ニ、古撿不及記候、別紙帳面ニ新古高反歩増減之譯幷引方起返リ新田畑改出等、總寄計記可差出事、

一田を畑ニ致し置、田年貢出し來、此度畑ニ繩請いたし度旨願候ハヾ、遂吟味手形取之、畑ニ申付べく、幷新堀新堤新道等いたし、可然場有之而、此度敷地除置度旨願候ハヾ、能々遂吟味、御代官江相談之上、右之通申付、可然候ハヾ可得下知事、

一撿地仕廻候以後、繩手之者下々等迄、對百姓非分成事致候ものも有之哉、總奉行之者、其村々百

書載事、

一御朱印地之外、寺社領又ハ前々ゟ除來リ候場所、或ハ堂宮、免田、畑、關守、渡守等之給田畑等之儀、古水帳之末外書ニ記し有之、又ハ慥成證文雖有之、委細覺書ニ記之、御勘定所之可請下知、百姓居屋敷、或ハ立山竹木林除來候分有之バ、是又右同斷たるべき事、

一御料、私領、寺社領、田畑入組之所ハ、雙方之百姓立會致檢地、可然所ハ其旨相通シ立會之上可致檢地、捴而入組之場所ハ、境目ニ爲立榜示杭、申分無之様可仕事、

附、隣村入組、境目不正之所有之バ、雙方之百姓遂詮議、地境紮之、申分無之旨手形可取之、若落着難仕所有之候ハヾ、檢地仕廻候以後繪圖覺書を以相伺、水帳可極事、

一永荒場川闕、山崩等有之所ハ、見分之上可立返場所ハ田畑ニ成候様ニ相應之位付いたし、高ニ結び、詮議之上、先地主又ハ外之者ニ成とも可申付、立返間敷分ハ、能々吟味之上、水帳之末外書ニ町歩可記置事、

附、捴而見取場之分、撿地高ニ可入、若高ニ難入場所有之バ、吟味之上、水帳之末ニ高外ニ町歩記之、見取場と書付可置事、

一御年貢米詰置候藏屋敷之儀、前々ゟ高ニ入候所ハ勿論、高外ニ致置候分も高ニ入、藏有之候内ハ御年貢可除之事、

一野手山手之場、幷山林有之所致撿地、水帳之末委細可記之、雖然或ハ大山喩嶋場廣山ニ而、境目不分明之所ハ不可及撿地、若地境一圓難知檢地入可然所ハ格別之事、

附、野手山手之場、町歩、此度打出有之歟、又ハ野山錢等増申付可然所ハ、地所相考、御代官江相談之上、増年貢可申付事、

一百姓林之儀、年貢申付可然儀ニ候間、雖爲少分之所、輕年貢可申付事、

應ニ可除、且又古檢之外、新屋敷或ハ地所惡敷候共、居屋敷ハ、其所之可為上畑並、若新規之屋敷願候者有之バ、吟味之上、右之心得を以、屋敷ニ可相渡候、勿論畑ニ不致置、早速屋敷ニ仕立候樣、手形可申付事、

一畑方撿地之儀、畑之廻リ漆桑楮茶之木有之候而、高ニ入來リ候所ハ、其分見計次第、畑方可除之、若古來ゟ、右之品高ニ入、畑歩不引所有之バ、委細書付可相伺、勿論漆桑楮茶之木新規ニ高ニ入、可然所ハ吟味之上可申付之、但畑疊面ニ右之植物有之バ、位付可為前條之通、若右之品高ニ不入場所ニ而、畑に打入候ハヾ、水帳ニ斷書いたし可置事、

一田畑石盛位付之儀、隣村地續、近鄕之樣子相考、甲乙無之樣可入念、山方野方之村は、可有差別間、其心得尤候、旱損、水損場、用水掛リ日請等迄相考、先石盛にも無構、地面之相應、幷五ヶ年之取箇、平均を以、取箇ニ不相應ニ無之樣ニ石盛位付之儀、能々入念、吟味之趣、委細書付、得下知可相極事、

一撿地之時、間數野帳ニ記候跡、於其場所間違竿之延縮有之哉、入念時々致置竿、又ハくだ繩を以可相改、勿論相定竿取之者之外、一切不可相交事、

附、每日致撿地候野帳之儀、役人押切印形加ヘ百姓ニ借渡シ、若竿違書誤リ又ハ位付ニも相違有之歟、百姓ニ相尋、訴訟之旨有之候ハヾ、致帳面ニ付紙申出候樣ニ仕リ、詮議之上、又ハ再見之上、百姓訴訟之旨尤ニ候ハヾ可直之、勿論難立儀申出間敷旨、堅申渡置べし、田畑字名付、是又無相違樣ニ明細ニ水帳ニ記置べき事、

一寺社領入組之村撿地之儀、地境分明之所ハ、寺社領江一切竿入べからず、若境目不分明ニ付、竿不入候ハ而は不叶所ハ、撿地ニ而致吟味、寺社領之分出步有之候共、其通リニ而可差置事、

附、御料之内ニ而小物成場有之旨、他領より入念候共、反步等不分明之所ハ致撿地、水帳ニ可

一撿地案內之者之儀、其村々名主年寄百姓、又ハ小百姓之內ニ而も、吟味之上、五七人も申付之、少所ニ而も、地面引落間敷旨、幷案內之者、誓詞前書ニ可爲書入事、

一間竿之儀、六尺壹間之積貳間竿たるべし、但壹間ニ付壹分ツヽ加來候條、長壹丈貳尺貳分竿を以可打、勿論壹反步ハ三百坪たるべき事、

一今度撿地之儀、半間迄に而尺寸打ニ及べからず、雖然田畑竪横之廣狹に隨ひ、或は平均等ニ致し候處ハ、尺迄ハ用、步詰之勘定ニ入之、竪横之間數水帳ニ書付候ニハ、半間迄記之、野帳ニハ見積之間積之儀致斷書、案內之者幷地主ニも、右之旨可申渡事、

　附、步詰之儀、四厘餘迄ハ捨之、五厘ゟ壹步ニ可入事、

一撿地可入村江繩手之者相越、古撿之町步耕地限リに寄立、帳面ニ記之、案內之者召連、地所村境大通遂見分、致繩張候心得に成候樣ニ可仕事、

一田畑位付之儀、大方上中下三段ニ候、此度吟味之上、地面取分ケ能所ハ、上々田、又ハ所により繭田麻田等一段立之石盛ハ、上ゟ壹斗高ニも相極、惡地有之所ハ、下々田、或ハ山田、砂田、谷田、段々ニ立之、相考、下ニ壹斗或ハ貳斗三斗も相考、石盛を下ゲ可相極、畑之儀、上々畑、麻畑、茶畑、下々畑、山畑、燒畑、砂畑其外ニも所により見計、段々立之、石盛地面ニ應じ可有了簡、屋敷ハ古來ゟ上畑並ニ候間、石盛上畑可爲同事、石盛大方段々間貳ツ下リニ候得共、土地により貳ツ下リにも限間敷候間、地面相應ニ可有詮議候、但位付之儀ハ、其村ニ案內申付、百姓ニ爲致誓詞候以後、田畑共ニ古撿之位ニ不構、一二附之、位所ニゟ壹より十五六迄も段々爲付立、帳面恥之、撿地役人之見分と引合、遂吟味、上中下位可相極事、

　但百姓居屋敷園之儀、四方ニ而壹間通リ可除之、其外ハ竹木有無に不構竿可入、但間口五六間迄之小屋敷、又ハ軒並之隣屋敷境垣一重之所等ハ、四方壹間通リ不及除、見計、其屋敷ニ相

可ㇾ致事、

一日々打候本帳出來候はゞ、頭付無ㇾ之以來ハ、毎日百姓に貸渡し、間違、名違、落地、二重付之有無吟味可ㇾ爲ㇾ致事、

一間竿ハ大工之曲尺ニ而、壹丈貳尺貳分ニ可ㇾ相極ㇾ事、

一往還之大道通リ田畑作場道、并落堀册堤等之端通ハ、三尺づゝ除キ可ㇾ申事、

一年季を定め、田畑質物ニ入候者有ㇾ之哉相尋、質入候者有ㇾ之バ、何年以前何年ゟ何年季に入置候得共、年季明請返之不ㇾ相成、田畑流ニ相成候と歟、又何年以前質入ニ致、今ニ年季明け不ㇾ申候と歟申候はゞ、其通證文取ㇾ之、其者之名を可ㇾ記候事、

右之通可ㇾ相心得ㇾ候、猶不分明之儀ハ、相伺可ㇾ申者也、

年號月日（〇中略）

右初めに記たるは、古代の條目にして、古田新田の無ㇾ差別、一體の撿地條目と見へたり、後に記たるハ近來（〇享保十一年）新田撿地の條目也、前々ハ古田たりといへ共、地詰にて百姓及ㇾ困窮ㇾ候歟、或ハ年久敷撿地にて、田畑伏場水帳引合一向不ㇾ知、持主も其田々之本歩を不ㇾ知類、御願申上れバ、御檢地被ㇾ仰付ㇾ事も有、ケ樣の類都て村方減少する也、御高增減共に、御高帳動く事なれバ、容易の事にあらず、其上御入用も還る事なり、依ㇾ之當時古田の撿地ハ能々無ㇾ據儀ハ不ㇾ知、先ハ不ㇾ被ㇾ仰付、然れ共地押等ハ、品ニ寄被ㇾ仰付ㇾ候儀有ㇾ之、是以容易ならざる事也、雖ㇾ然其時の品に寄、一概には演がたし、

〔牧民金鑑九〕元祿七戌年四月

撿地條目

一今度飛驒國村々撿地御用ニ付、撿地總奉行、并下役人竿取等迄、堅誓詞可ㇾ仕、田畑位付正路ニ繩目無ㇾ延縮ㇾ隨分念いれ、且又百姓之費無ㇾ之、作毛不ㇾ踏荒ㇾ樣可ㇾ申付ㇾ事、

一檢地ハ百姓身代の浮沈の極にて候間、別て念入、第一其郷の大目のがし肝要に候、田畑上中下之伏場ハ、反高出目可有之歟、不足可致歟之考迄、大目ニ而見定、諸事了簡致し、御繩無强無弱正道に打可申事、

一田畑上中下之位付專一ニ候、總而甲乙無之地方ハ、村付ゟ上順々に野末を下ニ致し、三ツ折等分之位付作法ニ候得バ、山方野方之村ニハ、相違之地方可有之、猶以用水惡水之掛引、干損水損收納之勝手等迄相考、位付可致了簡事、

附、田畑坪付致明白、地詰之節無相違樣可致事、

一上鄕下鄕之譯、地面之善惡ニ計不可限、農業之外ニ餘勢有之歟、田方過不足、又野山草飼場之勝手等迄大概含之、無甲乙樣可相考事、

一竿打者不可過四人ニ、田と畑、或ハ穗之上苅田荒畑等之打樣、彌致吟味、一日之內、幾度もためし打可爲致、殊ニ入替多込候事、大田畑不及目ニ所ハ、幾數ニも差切打候而、別筆歟入步ニ可致、御繩反數多く致し、安く候ても麁相ニ而ハ不宜事、

一壹組之內ニ而手分致し、打申間敷事、

一寺社屋敷之儀ハ、詮儀之上、屋敷分計除キ、帳面に反別を顯し可申候、然共不及了簡儀ハ、衆評之上相極メ、猶不相濟儀は伺之上相極メ可申事、

一道橋井堀溝を挾ミ、相詰申間敷事、

一案內致し候名主百姓ニ引落無之樣、誓詞可申付事、

一勘定場帳面認候場江、他之者入間敷事、

一親之田畑子共分ケ候共、銘々持主名を付可申事、

一一村之內名主大勢有之、組下之百姓分付致し候はゞ、誰組と書付、以來名田之分付紛無之樣に

歩トモ捨歩トモ云フ、

檢地ノ法ニハ居檢地アリ、廻檢地アリ、地押アリ、居檢地ハ村方ノ請願ニ依リ、竿入ヲ爲サズ、見計ヲ以テ增高ヲ課スルヲ謂フ、而シテ其高ト年貢トノミヲ增スヲ以テ、村高ノ內書ニハ、無地增高ト記シテ本高ニ組入ルヽナリ、廻檢地ハ本檢地ニ對スル語ニテ、其地域ヲ繪圖ニ作リ、之ヲ分間シテ反別ヲ正スヲ謂フ、地押ハ竿繩ヲ入レテ反別ヲ改ムルノミニテ、品位石盛ニハ及バザルヲ謂フ、而シテ春檢地ハ其年ヨリ高ニ結ビ、秋檢地ハ其年ハ見取ニシテ、翌年ヨリ高ニ入ルヽナリ、

名稱

〔書言字考節用集言辭九〕檢地

〔倭訓栞中編七〕けんち　撿地と書り

〔茅窻漫錄上〕撿地

撿地の二字、此邦古書に見えず、毛視地の義なるべし、稻穗を毛といふ、東鑑に、田圃作毛とあり、砂石集に、秋の毛の上を賜はりて下ると見えたり、撿地といふは、農監の人、稻田を巡り稻穗の毛を見て、其年の豐凶を定め、斂法をおこなふをいふ、漢土の撿踏に似たりともいふ、往古は此事無かりしに、世の降るにしたがひ、戰國打ち續き、上は下を疑ひ、下は上を僞るやうになりて、出て來たる事と見ゆ、信長公勢州一國を治むる時、瀧川一益といふ人、始めて撿地を入れ、諸家是に倣ひ、諸方に撿地を沙汰す、○中略其後天正年中に、太閤秀吉公、日本國中悉く撿地せらる、○中略其後文祿四年の撿地高と、末代に稱するは、其頃に改め出だす所をさしていふなりと、武德編年に載せたり、遂には撿地定免の兩法となりて、造化の生物を農監と民と相きしらひ、地上の新穀を上下する事にはなりぬ、

檢地條目

〔地方落穗集七〕古來撿地條目之事

古事類苑

政治部七十六

下編

檢地

檢地ハ、田畑ノ反別ヲ丈量シ、土地ノ經界ヲ釐正スルヲ謂フ、是ヲ竿入(サヲイレ)、又繩入(ナハイレ)トモ云ヘリ、抑、檢地ハ鎌倉幕府ノ初世、文治五年ニ出羽國ノ土地ヲ檢セシメシコトアリテ後、久シク見エザリシガ、足利幕府ノ末ニ、諸國ノ大名各、其知行高ヲ檢錄シテ獻ゼシ事アリ、時ニ天文十二年ナリ、之ヲ天文繩ト云フ、織田信長ノ時、諸大名各自ニ漸ク檢地ヲ行ヒシガ、天正文祿ノ際、豐臣秀吉徧ク之ヲ海內ニ行フ、而シテ此時用キシ所ノ間竿(ケンザヲ)ハ、曲尺ノ六尺三寸竿ニテ、此地ノ面及ビ積ヲ各、一步ト爲シ、其積三百步ヲ以テ一段ト爲セリ、世ニ之ヲ太閤檢地ト云フ、德川幕府ノ檢地ハ、既ニ慶長年間ヨリ之ヲ行ヒシガ、豐臣氏ノ六尺三寸ヲ以テ一步ト爲セル制ヲ改メテ六尺トシ、其間竿ハ六尺一分ト爲セリ、然レドモ其當時ニ在リテハ、未ダ精密ナル法アラザリシガ、天和貞享ヨリ以降、元祿七年ニ至リテ飛驒國ノ檢地ヲ行ヘル時ヨリ、其制大ニ具備セリト云フ、是ニ於テ豐臣氏以前、卽チ天正文祿以前ノ檢地ヲ古檢ト云ヒ、慶長元和以後ヲ新檢ト云ヒテ區別スレドモ、享保十一年ニ新檢條目ノ制定アリテ、又前制ト異ナル所アリ、而シテ古檢ノ地ヲ更ニ丈量スル時ニ、剩步ヲ生ズルヲ出步(デブ)ト云ヒ、又ロレヲ竿延(サヲノビ)トモ云フ、又其畔路ヲ除去スルヲ畔引(クロヒキ)ト云ヒ、不整ノ寸尺ヲ加除シテ步數ヲ定ムルヲ坪詰(ツボヅメ)ト云ヒ、田畑ノ傍ノ堀田ヲ本步內ニ算入スルヲ入步(イリブ)ト云ヒ、惡地ノ畝步ヲ減ズルヲ込(コミ)

運送

政治部九十九

下編

驛傳下

政治部一百

下編

政治部九十八

下編

驛傳上

政治部九十七

下編

灌漑

政治部九十五

下編

水利上

政治部九十六

下編

水利下

政治部九十三

下編

貯穀

政治部九十四

下編

勸農

政治部九十

下編

德政

政治部八十九

下編

質物　質屋 附入

政治部八十八

下編

貸借下（無盡併入）

〇

政治部八十六

下編

貸借上

政治部八十七

下編

貸借中

下編

雜稅中

政治部八十五

下編

雜稅下

政治部八十三

下編

雜税上

政治部八十四

政治部八十二

下編

地子

下編

田租三

政治部八十一

下編

田租四

政治部七十九

下編

田租二

政治部八十

政治部七十八

下編

田租一

政治部七十七

下編

高

古事類苑

政治部七十六

下編

檢地

古事類苑

政治部第四册目錄

神宮司廳藏版

古事類苑

政治部 四

古事類苑刊行會